明治二十五年二月十八日初版印刷
明治二十五年二月二十日初版發行
明治三十八年八月二十六日再版印刷
明治三十八年八月二十八日再版發行

百家說林正編下卷

著作權所有 合資會社吉川弘文館

編輯兼發行者 東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地 合資會社吉川弘文館
右代表者 吉川半七

印刷者 東京市京橋區新榮町五丁目三番地 本間季男

印刷所 東京市京橋區新榮町五丁目三番地 東京活版株式會社

發行所 東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地 合資會社吉川弘文館

百家說林正編下卷畢

にかくおもひ捨てがたく。一弛の道とやらんいふ事もあなれ。古のかしこき人にも。此人にはかゝる拙き有りけり。彼の人には。かうやうのあしき事も有りけり。其賢き人さへ有りけるものを。餘りに心つよく愼み守らば。病をやえ侍らん。さらばまたふかうのとしなり。多きこそあしけれ。只に一度の事。いかであしからむと。理つけて。我こゝろ欺き侍るも有りけり

心の雙紙 終

神はひとすじの誠にして。こはあめつち第一となり。其まことをもて。此人となれば。ひとつの誠感應して。神靈いちじるく照させたまふにぞ有りける。さるに神佛はいさめたまふ事も。いましめたまふ事もなければ。愚なる心より。何の恐れもなく。心のたけいひて。とき侍るなり。姿いと心有りげに。にぎてはらひ。かしこみ〳〵と口にはいへど。心のねぎごと。いとけしかる事なむ多かる。麥まくものは。雨を願ひ。稻刈る人のなげくを顧みず。いとも愚に成りもて行くは。こえも用ひず。稻草もとらず。遊び暮して。よく實のるを。神の惠みよとねがふたぐひぞ多かる。いとなげくべき事にぞ。神は思ひたまふらむ。神はおもひたまふなり

かゝる事は。なさじと思へど捨てがたく。繰り返しおもへば。猶捨てがたし。多くの人かゝる事なすは。我とても。只に一度のみし侍ること。あへて咎むべきにもあらじとおもへど。又何となう心苦し。いやいやかゝる事はし侍るまじ。かぞいろの庭の敎も。耳にとまり侍るものをと。おもひかへすもあり。と

入道相國佛御前を寵して。妓王につらくわたりしかば。妓王世をうらみつゝ。嵯峨のおく山に引きこもりて。尼となりければ。妹妓女はゝ刀自もろともに尼となりけり。佛は世の常なき事を観じて。彼舘をまかり出でゝ。尼となり。妓王が庵に來りて。其よし語りしかば。日比うちみつる心もはれて。ともに後世をねがひけるとぞ

茶たつる事は。いとたふとき道と心得て。客まねぎつゝ。主人いかにもしりがほに出でゝもてなし。此かけ物は。虚堂の墨跡。多くの黄金出だして買ひたり。この釜は。あしやにて。何千貫の折紙こそあなれ。この茶わむは。ほり出しなれぞ。世に有るべしとも覺えず。殊に我は禪味しれば。名たゝる宗匠もなぞて及ばむ。ひさく斯く持ち。水斯く汲みて。斯く釜にいるゝに。松風の吹きたえて。静かなるごときは。心の妙とやいふべきと。心におもふ客も。それ〳〵の心に有りけり

頼とも卿志すとや有りけむ。義經の勳功をうち捨て。めしとらへむとぞしたまひける。義經身の置き所なく。落ち行きたまふ所。あたかの關にて。關守あやしみ咎めけるを。辨慶。よし經に似たるのにくさよと。杖もてうちける。其忠貞に感じて。關守關をぞ通しける

醫師は人を救ふものにして。萬心直なるべし。よくあれば。心くらし。いかで病をしりえむ。さるに醫學にのみふけりし者は。人のしらざる藥などこのみ用ひ。彼書を試み。この書を試み侍らむと。せちに思ふもあり。名聞をのみ專らとし。其ほど〳〵心にあふやうにもてなし。治療はよそにして。世渡る事をせちにするもあり。生死は醫師のしらぬ事と。心得はべるもあり。又は脈もしらず。論説もしらず。病をもしらで。只しりがほにもてなし。名をうりて。我非しるもなければ。高言して人をそしり。我をよしとおもへば。いつも其拙を守り。上達せず。病の動くごとにおどろきあわてゝ。只倡中の幸をもとむるぞ。膽いとも小に。心いと大なる醫師にして。是も右輿に乗りて。高き門出入るとをのみ心とする。いかなる仁術とかいふべき

秦の趙高。二世皇帝の寵を得て。終にみかどの心をまどはしけり。世のみだれ行く事も耳にいらず。かしこき人もめにつかず。終にほろびてけるとぞ。

たゞ僧てふものは。何のわざもなく人に得て。ものくひ得て。家寶も四民のうちには立越えて。しかもみな人にえ侍るにぞ。いとゞ罪はおもかるべき。さるに今の世。道徳あるはさらなり。常ざまの僧は。よきをすゝめ。あしきをいましむる。天堂地獄の空ごとをだにもいはず。宿業などゝいふ事いひて。執着心をはらさむことにもあらず。只寶侍て。富みきはめ。よき衣着。錦身にまとひ。輿に乘り。先をはらはせ。塵けたてゝ。高ぶる事をのみこのみ侍る。堂塔の寄進はかるは。其中にてのかしこきなり。佛の名となへ。數珠つまぐりたる姿ならぬこゝろもちて。いさゝかも道徳戒律沙汰にもおよばず。衆生濟度の事は。露もこゝろに置き侍らざるも少なからじ。佛てふもの見侍らば。いかゞれもふらむ

其いたづら事は。いかゞいふべき

河に落ち入るものは少なけれど。溝などには。おやまり落ち入るものぞ多き。ちむ毒などみづから呑みて。毒にあたるものはあらねど。多食して食傷霍亂し。又脾胃損じて。死に至るものぞ多かめる。さらば心の安きところより。終に其害を得はべるものにこそ。もの丶道よく辯へもし。ざえもある者は。敵の計にも落ち入らざれど。女をみては。いとひききみならで。心ゆるし侍る。女も男たぶらかして。害せむとおもふ心はなけれど。只寵得侍む。寵奪れじとも。心として朝な夕ないふ事。なす事。この外ならず。終に心ゆるし侍るものに。心せず。おもふもの思ひ入れたれば。しらず〱して心奪れ侍る。よしや。こは我をたぶらかすとさとるものもあれど。もと寵奪はれじの心より。やさしくもかくなすに。などていたくとがめむと。心ゆるすぞ心うしなふ初めなる。鵲は其年の水をしるとて。洪水のありなしをよくさとり侍る鳥なれば。水出むとおもふとしには。ひき丶枝に巣くひ侍る。いかにとなれば。われはぞ水しるものはあらじ。ことしの水おほく出づとも。この枝は水にはいらじとおもふより。常よりもひきく。水なきとしには。其こ丶ろなければ。高き枝に巣くふと。かの國の文にもあなれ。さればいかに我をたぶらかしてんと思ふにぞ。いとゞちかづくとも。遠ざくる心はあらじ。彼玄宗のかしこきも。揚氏の女にいつか心とられて。中原の亂る丶をもしらず。（本ノマヽ）高くはいの露のかろきも。にごれる心にいとおもく思ひけるこそあさましけれ

心の雙紙

松平樂翁 著

月さやかなる夜。人々うちつどひて酒のみけるが。管弦は風流のうつはなりとて。其道の深さ淺さをもしらず。我こそと笛吹き出だすもあり。琴などひきて世わたるもの。たゞ人にこのまれむ。多く賜へてんとのこゝろをかきならすもあり。ものしれる人の前もはゞからず。かくは歌よみたり。詩つくりたりなどゝ。我はがほにいひのゝしりあへるもあり。又ひときは高き心にて。月は世のかたみなり。むかしの人のみし影と思へば。こひしうこそあなれど。もの靜にいひ出だしたり。昔人したうかぐはしさの名のみにして。なす事。みなこの世のつたなきに

何をもていにしへ人
　したふにや。したはるゝむかし人れもふらむ
はづかし

心の雙紙序

色うるはしく形みやびに。衣あざやかなれば。恥てふこゝろは誰かあらむ。かの一指の延びざるだに。遠つ國の藥師へたのみ侍るは。一指の人にことなるをなげくにぞ有りける。心もしあらはれ出でたらば。いかゞあらむ。かくるゝはあらはるゝよりもいちじるきものなれど。愚かなる心から。しらで過ぎ侍るにこそあなれ。樂翁。日比。我うへ。人の上にも。このこゝろあらはれ出でたらばとやあらむ。彼こゝろ顯れ出でたらばかくやあらむと。清閑の一樂におもひめぐらしけるが。ことし春の末つかた。時疫行はれ。翁も疫にそみけるにぞ。かたはらに居ける養溪に筆とらせて。清閑のたはふれに。こゝろのあらはるゝさまを畫がゝせて。みづからもかきして。心雙紙となむ名つけ侍りぬる

享和二年三月　　　樂　翁

其子に傳へずして。其臣に讓ることなるべきか。されば子路の此心は。夷齊堯舜の仁德にも至るべき路脈なり。此理を悟らば不二亦悅一乎。悅ぶものは何物ぞや。吾心の悅ぶなり。不二亦樂一乎。樂ものは何物ぞや。吾心の樂むなり。人不レ知而不レ慍。慍ると不レ慍とは何物ぞや。吾心の慍ると不レ慍となり。慍るを小人として。不レ慍を君子とす。言々語々。皆是心の事なり。故に孔子の學の心學たるを知るべし。論語の一書。心學の骨髓たるを悟るべし

梧窓漫筆拾遺 終

り。其本源は他に非ず。己が心なり。されども是れは別論に附す。論語の一書は。仁經と云ふべし。古人も此れを知れるにや。呂氏に諸子の學術を論ぜるに。老子言柔孔子言仁とあり。孔子の學。唯此一字にあることを知べし。此一字聖人の秘密藏なりと思ふべきことゝなり

○誠に我本心に省み問ふべし。親に事ふるの孝。君に事るの忠。兄に事るの悌。朋友に交るの信など云ふもの。各々心肝脾腎などに存在せること。吳服屋に段物を並べたる。是れは縮緬。是れは羽二重。是れは八丈島。是れは植田島など云ふ如く。各々別々に此ありや。我心內に飾り置くべき棚もなし。唯是空虛靈妙の一心のみなり。此一心父に事りては孝となり。兄に事りては悌となり。君に事りては忠となり。朋友に交りては信となる。此是仁の本體にて。一以貫レ之とは此物なり。此等の處よりして。論語の仁は悟るべきことゝなり

○仁者人也。仁者愛レ人。此れ仁の字の用前にて。聖の字の通知に同じければ。仁の字は親愛の義なりと云ふこと。確然として不レ可レ易。されど論語の仁の字は。此向上一段の義あることを知るべし。聖人至誠大而化レ之之謂レ聖。通知の義のみに非ざるに同じ

○他書の事は姑く置く。論語の一書は。心學の骨髓なり。世の古學者と云へるもの。論語のみを崇奉して。孔子の學は心學に非ずと云ふ。笑ふべきの甚しきことゝなり。先づ知り易き所より辨ずべし。子路の孔子の御前にて。言レ志時に。車馬衣裘與二朋友一共敝レ之と云ひたらんには。心には惜しく思ふとも。外面義理を飾りて。朋友の事故に。己の衣裘を假して敝るに至るとすべし。然るに其下文に無レ憾とあり。憾と憾みざるは心術にある事なり。是心學に非ずや。人に衣裘を假して垢づくことだにも。凡人の心には不滿なるものなり。まして敝りたらんには。口には義理を飾りて不レ苦など云ふべけれども。心內には憤恚の念少かるまじ。然るを少しも憾る心なしとは。聖賢の心術の豁然大公にて。己に私するの情欲なきことを知るべきなり。朋友に假して衣裘の敝を憾る心にて。伯夷叔齊の兄弟國を讓ることとなるべきか。堯舜の天下を

民となす。愛人安民は仁なり。されども仁を愛人安民と解するは。他書は略通ずべくとも。論語一書は全く通じがたし。仁は善行なり。衆善の統宗たることは。性理の學不㆑興以前に。邪仁が論語の疏里仁篇名の下に。仁者善行之大名なりと云へり。是程朱の專言の仁なり。さて是後儒の言には非ず。眼を開きて能々見るべし。孔仁國の爲㆑安由㆑己を解して。爲㆑善在㆑己と云へり。論語の仁は。唯是善なること。孔子十一世孫の傳へられたる處なり。以㆑文會㆑友。以㆑友輔㆑仁。朋友の敎導にて善行を輔益するなり。愛人を輔く。安民を輔くるにてすむべきか。博學。篤志。切問。近思仁在㆓其中㆒矣。學問の中より善行を生ずるを云ふ。愛人其中にあり。安民其中にある而已にてすむべきか。これは中庸にて。博學。審問。愼思。明辨の次に篤行と云ふ處を。論語にては仁とあり。仁は行なること明白了々なり。仁は衆善なり。衆行なり。衆善行の統宗なり。衆善の宗統を得たるを仁者とは云ふなり。孟子も道二つ仁與㆓不仁㆒而已矣と仰せられ。もし偏言の仁ならんには。此語通せず。義不義あり。智不智あり。禮無禮あり。何ぞ道二つのみならんや。道二つ善與㆓不善㆒而已矣と云ふこと丶心得たれば。言下に亮然たり。三子者不㆑同㆑道。雖㆑然其歸一也。一者何也。曰仁也とも仰せらるれば。言下に亮然たり。愛人安民など云はんには。履を隔て丶痒を抓くに同じ。仁は衆善の宗統。故に一以貫㆑之とは仁の一字を云ふなり。安仁とは善行を安行するなり。利仁とは善行を利行するなり。勉仁とは善行を勉强するなり。造次於㆑斯とは。かりそめの間にも。善心を失はざることなり。傾路の間にも。善心を失はざることなり。顚踣の時。愛人の心。安民の心を失はずと云ふべきか。仁は衆善の統宗。故二元者善之長也と文言にもの給へり。さて恭敬忠も。恭寛信敏惠も。克己復禮も。敬恕も。宗統の仁へ入るべき道なり。又仁の支流別派なりと云はんも可なり。「わけ上る麓の道は多けれど。同じ高峯（タカネ）の月を見るかな」と云へるは。論語の仁に符合せり。夷齊三仁などは。衆善の統宗を得給へる賢者にて。孔門諸子善行あれども。未だ其本源を得ず。故に仁を許し給ふものなきな

仁の害を明知する故。仁の利なるを知りて。不仁を棄てゝ仁をなす。今人路を行くに。路右は泥濘あり。路左は乾けり。それへ向へば。必ず泥を避けて。乾ける方を行く。如何となれば。泥を蹈めば。足袋を汚がし。草履を濕すの害あればなり。何も勉强することはなけれども。己と仁と未だ一致の場所に至らず。仁の利なるを知りて此れを行ふ。是賢人の境界なり。此下を勉め行かんとて。强ひて吾欲を抑へて。仁を勉め行ふものなり。中庸にも。安行利行勉行と。三段に說きたり。表記にも。安仁。利仁。勉仁と三段に說けり。然るを物茂卿の論語徵には。利仁を勉强と說きたり。義理に盲昧なる天性のみか。中庸表記をも不ㇾ知。不學無術笑にたへて傷ましき人なり。さて此の仁者安仁は。上章の里仁爲ㇾ美と云へる是なり。智者利仁は。上の章の擇びて處ㇾ仁と云へる是なり。仁とは唯仁なり。孝弟も忠恕も仁なりと思ひて行ふべし。其内に安ずると。利すると。勉むるとの三段あることなり

○伊川先生の四德之元猶二五常之仁一。偏言則一事。專言則兼二四者一と。易傳に云はれたるは妙なり。晦庵先生の仁を解せるに。心之德愛之理と云へり。心之德とは專言の仁にて。仁義禮智を兼ねたり。愛之理は義の宜しきの理。禮の別つの理。智の知るの理に對して。偏言の仁を云へり。是れも亦妙なり。さて孟子の仁義と說き給ふ仁は。親愛之德。偏言の仁にてもすむべし。孔子の說き給へる。夷齊の國を讓りて餓死せるを。仁を得たりと說き。微子の去り。箕子の奴となるをも。仁と稱し給ひ。顏淵には克ㇾ己復ㇾ仁。仲弓には敬恕。樊遲には恭敬恕。子張には恭寬信敏惠。司馬牛には仁言。仁の一字一向に無象の象なり。此則專言の仁にて。愛人安民などの義にて。少しも通ずべきの理なし。是れは衆善行の統宗を指して仁とは云ふものなり。論語の仁の字は善行と云ふことゝ心得れば。通せざる處なし。文言に仁以行ㇾ之とあり。中庸に力行近二乎仁一とありて。善を行ふは皆仁なること。古より然り。此義程朱などの見開かれたることには非ず。漢唐以來相傳の舊說なるを。世の學者朱儒を惡みて。專言を妄となし。仁を愛人となし。安

孟子又云。道二仁與ニ不仁一而已。又云。夫道一而已矣。一とは仁なり。善なり。仁は諸善の統名たることを知るべし。是專言の仁なり

○仁は衆仁の統宗諸德の根源なり。されども先づ輕く善と心得て。論語を解し見るべし。孝弟也者其爲レ仁之本歟。親に孝。兄に弟なるは。善を行ふの初なり。巧言令色鮮矣仁。巧言令色の人に。善行あるものは。世間には少きことなり。汎愛レ衆而親レ仁と。あまねく衆人を愛して。善人とは殊に親しく交るなり。人而不仁如ニ禮樂一何と。人たるもの善心なきときは。禮の節文。樂の和樂も。何の用をかなすべき。里仁爲レ美。擇不レ處レ仁焉得レ知。善に安んじ居るを美事とす。善惡の境を明辨して。惡を擇び棄てゝ。善に居ることを知らざるものは。智と云ひがたし。仁者安レ仁。知者利レ仁。仁者は善を安んじて行ふ人なり。智者は不善の害を知りて。善を利なりとして行ふ人なり。造次必於レ斯顚沛必於レ斯。急遽卒迫の時も。惡念を動かさず。善心を失はず。踣蹶顚倒の時も。惡心を生せず。善念を失はず。終食の頃も。惡念を動かさずして。善に違はざる樣に心掛ることなり。仁は論語第一の字也　されども聖孫孔安國に解に從ひて。先づ先づ善の字を以て解すれば。徃く處として明白たらざることなし。さて其上にて。善宗德源をば悟るべきことなり。善の字にて仁を解すれば。徃く處としてさしつかふることなし。秘事は睫毛と云ふは此事なり。されども善の字にて。一に通ずべきには非ず。仁は衆善の本。衆善皆仁なるを悟るべきのみ

○衆善は己の欲を抑へて。人をよくするにあるなり。衆惡は人を傷害して己の欲をなすにあるなり。仁者人也。仁者愛レ人。仁に偏言あり。專言ありと云へども。仁者人也。二人爲レ仁の義。所レ徃として然らざることなきなり

○安仁利仁の別。安行は舜由ニ仁義一行非レ行ニ仁義一の境界にて。我こゝろと仁と一致にして。仁を行ふ心なく。行ふところ自然と仁に叶へるを云ふ。不レ勉而中。不レ思而得。從容中レ道。聖人の境界なり。此理は。人々解知する處なり。利行の字は。解知するもの少し。此は利害の利にて。智者は不

○惡を袪き。善を行ふに。至近切要の學あり。惡を去るに。一葉一葉を摘み。一枝一枝を剪らんとには。勞して功少し。本根を斷てば。枝葉は皆枯るゝなり。佳木を養ふに。一葉一葉を作り。一枝一枝を舒んとせば。勞して功少し。本根に糞へば。枝葉は一時に繁茂するなり。唯是本心を明亮にして。善の本體明なるときは。事に觸れ。物に應じて發する處皆善く　孝弟忠恕是れなり。大陽天に中するときは。魑魅魍魎皆潛伏する如く。惡念自然に消滅するなり。本心の妙明なるは。午天の白日に全じ。佛家に大日如來と稱號せるも宜なり。されど此境界は。一旦には造りがたし。多年書を讀み。義理を講じて。良心の發を養ひ。邪欲の動を制せる積習の功にて。此に到るべし。此に到れば。聖人には非ざれども。八九分の地位に造れる人と云ふべきなり

○無欲主靜は。宋儒の言ひ出だせるには非ず。孔安國仁者靜を解して。無欲なるが故に靜なりと云へり。無欲主靜は。聖孫の舊說なり

○仁に專言ありと云ふこと。程伊川の言ひ出だせるには非ず。邢昺論語の疏。里仁篇名の下に。仁者善行之大名なりと云へり。是專言の仁なり。されども孔安國爲ㇾ仁自ㇾ己を解して。爲善在己とあれば。仁は衆善なりと見たるものなり。是亦專言の仁にて。專言の仁は。聖孫の舊說なり

孟子曰。道二仁與二不仁一而已矣と。專言の仁。實は孟子の舊說にて。論語の仁皆是れなり。漢宋學者の言には非ず。孔孟の言なりとしるべし

○一以貫ㇾ之。里仁篇內にありて。一とは仁を云ふ。劉敞が七經小傳に。一以貫ㇾ之者仁也。唯仁爲二能一一。惟一爲二能貫一とあり。胡寅論語詳說自序に。先聖先師救二學者於多岐一。欲ㇾ歸二之於至當一。故曰。吾道一以貫ㇾ之。一者仁也。聖門之途。皆學ㇾ爲ㇾ仁。夫子言行莫ㇾ非ㇾ仁也。其在二論語一者著矣。宋儒の說如ㇾ此。妙なりと云ふべし。程朱一理の說（一理は皇侃の疏說なり）にまさること萬々なり。なれども。此れも亦宋人の說には非ずして。孟子の說なり。孟子曰。三子者不ㇾ同ㇾ道。雖ㇾ然其歸一也。一者何也。曰。仁也と。一の仁たること。孟子の舊說如ㇾ此。是亦後儒の說には非ず。孔孟の言なりと知るべし

るは。暗夜に一燈を照せる如く。復々衆陰諸惡昏濁の內に。一陽一善心の明を生ずるの象なり。されど忽に生じて忽に滅すれば。雷光石火の善心なり。復の卦は本心に復して。段々と善の長ずる象是れを雷光石火の仁と云へるなり。顏子の得二一善一則拳々服膺。而不レ失レ之矣との給へる。是三月不レ違レ仁の工夫なり。されども不レ貳レ過とありて。一時に一度過あるは。是違レ仁の處にして。聖人の混然たる至善に及ばざる處なり。さて今の學者の工夫は。袁了凡の陰隲の學などより入りて。善心の發見を擴充して。務めて善事を行ふべし。さて其上には。惡念を動せざる樣にすべし。惡念動かざれば。惡事を行ふ理なし。此境界に至れば。孔顏も遠からず。十分の地位五分は至るべきことなり

○孔孟の言に。學者放蕩の助けとなるべきこと。一條もなし。唯一つの狂簡曾點の狂錯會すれば。放蕩の口實となるべし。純粹の狂者には。造ること最難し。今の世の狂者は。狂簡の似せものなり。然るに狂簡の似せものをなすときは。一鄕にては一鄕の子弟をして放蕩ならしめ。一國にては一國の子弟をして。放蕩ならしめ。一天下にありては。一天下の子弟をして放蕩ならしめ。世間の人を悞ること不レ聞。其罪最深重なり。眞の狂者も。中行君子の次なり。狂者の似せものたらんよりは。其一等上たる君子の似せものたる。鄕愿を行ふべし。此意は郝敬が時習新知に反復して辨じたり。善行を脩する人は。狂の一字は深く忌むべきことなり

○性は人の天に受けて生るゝを云ふ。生るゝ先と譯したる妙なり。性は一なり。されど三性を立つべし。一には道德の性と云ひ。仁義孝弟は人の天より禀けて生るゝものなり。孝經の父子之道天性也。中庸の德性。孟子の性善。皆是れなり。二には情欲の性と云ふ。人の情實。皆欲の異。又天より禀けて生れざるはなし。孟子食色性也と云ふ。又目之於レ色。四肢之於二安佚一性也と云ふ是なり。三には形色の性と云ふ。人身の短長面色の黑白の異。是れ又天より禀けて生れたるもの也。孟子形色天性也と云ふ是れなり。孟子性善を說きて。孟子に三性あり。辨別せずんばあるべからず

年に。安祿山叛逆して兩京覆沒に至れり。されど玄宗の蜀へ奔らるゝ途中。高力士の霧深きを凌ぎ給ふ爲に。酒を温めて勸めけるに。玄宗の醉後。誤りて死罪を斷ぜるを悔いて。數年禁酒し給へることを語り給ひしこと。柳氏舊聞に見えたり。末年聲色に沈溺し給へども。猶酒を禁じ給ふは。少壯英明の氣習の遺りたるにて。是屈する處あるなり。兩京覆沒すれども。天下を亡し給はざること。此一條にても見るべし

○惡念動かざれば。混然たる至善の本體明了なり。事に觸れ物に應じて。善心發見の妙に非ざることなし。是れは是仁の本體なり。造次顛沛。終食之頃とは。唯是一の惡念を動ぜざることを云ふのみ。惡念不レ動是仁なり

○近世清人考證の學。此方へうつりて。凡百の學者考證を悦ぶ。義理の精妙も。考證の功にて判然明白なることもありて。學問は考證を要とすることなり。されども今は考證の學。北野屋鞠塢。山東京傳に下り及べり。今にありて。考證考据を爭ふは。可レ耻の甚しきことなり。學者孔孟の聖學を學びて。心身を脩め。國家を治るの大道を得ることを修行し給ふべきなり

○聖人の學は心學なりとて。靜坐瞑目して。此心を觀ずるの類は。坐禪。入定。觀念。觀法の部類にて。孔子の學には非ず。節用愛人と云ふ。是即心學なり。節用とは奢侈の欲を抑へ制して。財用をなるべきたけに儉約にすることなり。愛人とは殘忍の心を務めて破り。慈悲恩惠の心の下に及ぶ樣にする。膏澤降二於民一と云へる是れなり。此皆己が邪欲を制して。下民を愛育するの仁心に出づ。是れを心學の妙用とす。聖賢の言々語々皆如レ此なるものなり

○孔子は依二於仁一。終食之頃無レ違レ仁。顏子は三月不レ違レ仁。三月に一度は仁に違ふの過ちあり。諸子は日月至焉而已矣とて。或は一月仁に至り。或は一日仁に至り。一日至るものは。翌日は仁に違ふことあるに。一月至るものは。翌月は仁に違ふことあるなり。明の鄒敬は。我人の仁は。雷光石火の仁なりと云へり。妙と云べし。邪欲擾亂し。利欲混淆する心の内に。事に觸れて。善心の發動す

守が妾となしゝ故。後義敏に與し。反覆顛倒手のうらをかへすが如くせし故。應仁の大亂釀し出だせり。賄賂の行はるゝ時は。如何なる仕損じ大間違の出來まじきものに非ず。畏るべきの甚しきことなり。東照神君への御奉公。何卒此一事の盛ならずして。政治の清明なる樣に。當途の君子は心得らるべきことなり

吳越王錢俶より十瓶の金銀を趙普へ贈りしを。太祖の見咎められて。趙普に命じて受けしめられたると。一諸侯より本多佐渡守正信に。一瓶の小粒金を贈りしを。神君の御前へ持ち出でたると。古今似たることとなり。此等は戰國時代のことにて。後世官爵を賣り。獄訟を鬻の賄賂と同日の論に非ず。周禮內史の職に似たるもの。權勢の有所にて賄賂叢集の地なり

○賄賂の盛に行はるゝは衰世の事にて。是より風俗人情みな亂れて。大害を生じ。大亂に及ぶべきことを知り給ふべし。人を用ひらるゝも。文學あるか。武術あるか。行狀も正しくて才能あるか。諸侯は國政を能く正すか。諸士は家政を能く治むるか。是れを聞き正して進め用ひられば。賄賂のことは自ら止むべし

○聖賢の千言萬語。他事あるには非ず。其要は己の欲を抑へ制するの工夫なり。上は一人より。下萬民に至るまで。其理を知らずんばあるべからず。其學を講せずんばあるべからず。是夫子告二顏淵一事レ己の二字にて。聖學の根元は此にあり。欲を制すると。欲を肆にすると。存亡治亂興廢の數。唯此にあり。是を知るを智者とし。是を知らざるを愚人とす。智愚。賢不肖の別も。唯此にあるのみ

○唐の玄宗の姚崇。宋璟を用ひられしより。張九齡までは賢相政を執りて。開元二十年太平天子と仰がれたるに。李林甫と云ふ大姦邪國にあたりてより。天子は御老年なり。萬事思召次第と云ふ邪議を建てゝ。玄宗の我まゝ次第を導きしより。諫官も御史も。一言の諫爭と云ふこともならざる樣に取り計らひ。內は楊貴妃の寵愛より。外は泰山の封禪。驪山宮の御事等。天下の財用匱急に至りても。奢侈華靡は日々に增長して。終には天寶十四

て。凶勢自然と滅息すべし。是にてよき出家も出來て。愚民を誑誘する害少く。善に導き。道に嚮ふ一助ともなるべし。是佛法を尊崇して。僧徒の妄を裁抑する至極の良策なり

○賄賂の一條。古今政治の通弊なり。堯舜三王の御世には。各別なり。其他は賢主明君の世とても。此一條は止みがたき理なり。嚴禁を加へられば。公には行はれずして。隱私に行はる。進むまじき不材の者の進むも。勝つべき訟獄の負けになるも。政治の濁亂。是よりして生ぜり。甚しきは官爵も。獄訟も賣り物となりて。世は傾くなり。畏るべきの甚しきなり。賄賂を多く取る人は。賄賂を多く使ふ人なり。是自然の勢にて。己の公用勤め向きに費用多き故。心ならずも。賄賂を取ることもあるべし。北條泰時の己が無欲を以て。奉行頭人の賄賂にふけるを止めたるは。聖人の所行にて。上頭第一の良策。孔子の苟子之不レ欲雖レ賞レ之不レ竊也と仰せられたるに符合せり。是れは難二企及一盛德なり。さて北宋の時。士太夫の祿を過分に與へられし故。人々廉耻の心を養ひ得て。名賢君子比レ肩て輩出せり。其理を推して。老中は一萬石。若老は五千石。御用の御側は三千石とか。別段の役料を賜はりて。一には主人勤向の費に供すべく。二には公用に預る家來に。家祿の外に。各別の給金を與へて。勤向の費に供すべし。諸家常式の贈物は各別のこと。その他不時の贈は。一切に受けざる樣に嚴禁せられば。此風も止むべき歟。されども營造方。會計方。評定方。收納方。坊街の小吏等まで。中々耳目の可レ及には非ざるなり。故に此一條は。聖人は各別なり。明君賢主にても。たしかに禁止せられんこと。難の難なり。唯々儉朴を以て政となし。人々華靡に流れざる樣にするときは。士君子廉愧の心ありて。此風も少しは止むべき歟。實は此一條は。治亂の根源なり。義政將軍の愚暗にて。伊勢伊勢守と云ふ大小人を內管領となして。大小の事彼に任せられ。伊勢守賄賂にふけり。女色に溺れ。畠山政長義就二人共に武勇ありて。一時の豪傑なるに。其家督爭に忽に政長に與し。又忽に義就に與し。又斯波義廉義敏の家督爭にも。初は義廉に與し。義敏己の妹を伊勢

○越前は不吉なる國なり。義貞北國に入りて遂に滅び給へり。元龜に朝倉信長公と雄を爭ひて滅びたり。天正に柴田秀吉公と雄を爭ひて滅びたり。不勝之國左傳と云ふべし

○文文山天祥が正氣歌は。一代の正氣此辭に在りて。誠に一唱三歎すべきものなり。されど初の一段より。終篇の意。石徂徠介が孔道輔平仲が爲に作れる。撃蛇笏銘を踏襲せり。獄中にて書籍の檢閲すべきなく。腹藁吻草にて。胸中に浮びたるまゝを詠ぜしもの故。古人の文辭たるをも忘却して。如レ此と見えたり。撃蛇笏銘は儒林公議に出でたり

○左傳に。臧哀伯の桓公を諫めたる。君子の明二令德一而示二子孫一と云ふ。全德の第一は儉にして。さて淸廟は茅屋とあり。桓二年祖先の廟貌は。くずや葺にて。國天下を創造する人も。保有する人も。皆儉德を最第一とすることを。子々孫々に示すものなり。伊勢の大神宮は。王家の太祖にてまします。くずやにて白木造りなり。左傳の言と符合す。難レ有御事なり。帝王百二十代の今日まで運綿たるも。此等盛德の功ならずと云ふべからず。されば後の人主。人君は。此等の事に深く心を用ふべきことなり

○今の世に盛なるものは歌妓なり。飲食は一箱二十五兩の菓子あり。煮しめ四重にて。常價二十五兩なり。三十七兩の重詰もありと聞けり。是等の事は。如何なる風俗にか。如何なる人情にか。江戸を去ること十二三里には過ぎずして。下總の猿島郡には。芋の葉を多くして。粟と稗とを雜へ煮て食ふ農民あり。まして三十里を隔てたる處は。推して知るべし。天下の本たる農民如レ此。太平の御恩澤に浴すればとて。奢侈華靡かくなり行と。にがにがしき事の極なり。賀琛如き人あらば。言上もすべけれども。今の世は其人なければ。世は益々華靡に流れて。人は益々困窮すべし。四海の困窮は吉事にや。凶事にや

○佛法を尊ぶとて。寺塔を建立にも及ばず。經像を刋造にも及ばず。唯積學積德の僧を。本寺本山の主僧として。賣主坊主。山師坊主を用ひられず。破戒不如法の僧は。佛法の怨敵なれば。嚴に禁戒を加へらるべし。如レ此なれば。僧徒は少くなり

わけなき惡事をなして。出奔して家は斷絶せり。天道の歴然たる。吾が目擊親見する所なり。幼少の時。父東岩府君の膝下にて。天道の歴々差はざることを。數多指し數へて敎へ給ひし故に。天道を知る事は。吾先入の主なれども。世の惡學者の中に漸漬して。獨立すべき强立の行義もなく。又其理を明辨するほどの才智もなかりし故。世の惡學にも化せられたれども。多年讀書の功。聖人の德なり。亡父の敎なり。終には略天道天命を窺ふにも至れり。なれども五十年來目擊親見して。聖經の差はざることを悟りしは。天より年を假し給ふ功少からず。少壯の人は。天道天命に疑ふ心ある故に。實に道を知ることは難きことなり。吾が知る所の百中の一を錄して。子孫の道を踏み違へざる樣にと思ふのみなり

○天下國家の亂敗は。欲の一字に生ずるなり。女寵も。佞幸も。土木も。甲兵も。皆々欲に生ず。奢華侈大。孰れか欲に非ざる。天理人欲の學。講明せずんばあるべからず

○知者の心は不善にして。利あるは甘き毒を食ふに均しと思へり。されども河豚を食ふには比喩すべからず。河豚の毒は千百人の中に。一人の毒に中るものあればなり

○予京師に在留の日。北山の鹿苑院の金閣寺へ兩度。東山慈照院の銀閣寺へ一度參詣せり。金閣の金は今にのこれり。銀閣の銀は少しものこらず。さて當時は光麗なることとなるべし。されども今より見れば。金閣の池などは餘程廣けれども。一體の分內狹少にして。今の諸侯の別莊などに比儀すべきに非ず。銀閣の庭は。殊に狹小にして。今の商賈の別莊位なり。義滿。義政。天下を領する勢にて。其侈如ㇾ此に過ぎず。是にて今の世の富貴繁華の盛を知りて。此世に生れて逢ふことは。悅ばしく樂しき難ㇾ有ことゝはおもへども。嬌が富貴榮華能幾時。山川滿ㇾ目淚沾ㇾ衣と云ふをおもひ出だせば。慄然として戒懼の心なきにも非ず。有道の君相は。風俗を敦朴に歸して。奢侈繁華を裁抑せられずんばあるべからざることとなり

金閣は三重なれども。各別に崇大ならず。思の外矮小なるものなり。銀閣は再重なり

こしきを北へ落したりとあり。是暗に御女子たる證左なり。源家の囚となり給ひては。此等の姦謀までも露顯すること故。二位殿抱きて沈み給へるか。是一つ。此二つの内は出づまじきことなり

二位殿の女子と。傘法橋の男子と取り替へ給ひたるは。平家の滅ぶべき種子を栽ゑられたるなり

○吾が知る所の一小諸侯の臣に。姦才あるものありて其君に用ひらる。さて其もの丶主人に説けるには。天地の間に。味方となるべきものはなし。唯金銀のみ味方なり。金銀を與ふる故に。婢妾も寵幸の愛を希ひ。金銀を與ふる故に。臣下も奉公の忠を勤む。臣妾篤吾味方となるも。金銀ある故なり。されば天地の間に。我味方となるものは。金銀のみなりと云ふことを教へ込みて。第一に吝嗇を事として金銀を貯へ。小々は商賣體の事をもす丶めて貨殖せしむ。其一代は先づ無事にてすみたり。然るに嫡子は早世して。女子に聟養子せられたるに。女子淫放にして。父の貯へたる金銀は多くは散亂す。養子の世に。家中騷動して。姦才の者の子。其時亦理財の職なりしが。入牢して危き命を免れたり。其子は父よりは優りて。文武の事にも略渉り。小々才量もあるものなれども。父の宿惡免れがたし。又外一小諸侯に骨董(フルドウグ)を業とせられたるものあり。是も其子の無道にて。移封の罰を蒙むられたり。儉素を宗として財用匱窮せざる樣にするは。聖人の大道なれども。强欲無慙にて。金銀のみ貯へんとするものは。商賈は各別の事。士君子にありては。天誅を得ること必定なり

○一諸侯兄弟二人のみにて。兄は大酒にて書をも讀み給はず。弟は温厚の質にて。學を好みたるあり。兄弟友愛深かりしに。其臣に坊主より出頭して。百石計りの祿を得たる士あり。一日君に侍せる時。御舍弟の篤實好學故に。家中の諸士皆心を傾けて。御舍弟を奉せんことを願ふと說けり。是より兄弟の間不和となりて。弟は一生沈落の體にて終られたり。主人の兄弟の間をも離間するほどのものなれば。家中の諸士。彼れが讒口に禍を得るもの少なからず。さて其もの中年にて。亂心して自害せり。其子は無事なるものなりしが。何か言

賢哲の仁君。大有爲の人の所業也。公主の倚配したる諸侯の。一旦に困窮して。家中の諸士へ面扶持を與へたることを承り傳ふ。以の外のあしごとなり。國々の武士の困窮は。天下大亂の源なり。應仁記の初にも。應仁兵亂の起ることは。八ヶ條の其故あれども。其根源と云ふは。義政將軍愚昧不肖にて。奢侈に長じ。七箇度の晴と云ふことをいたされて。天下の武士困窮しはてゝ。事がなあれかしと。亂を願ふ心より起れりと云へり

○庚辰の歲（文政三年）予京師に在りしに。攝津山中の民家に。久しく秘藏せる竹筒を。其正月元日に開き見しに。一卷の文書なり。京都へ持ち出でゝ。日野亞相（資愛卿）などへも御覽に入れけり。さて其文書は。安德天皇の壇浦の難を逃れ給ひて。攝津の深山中に潜居まし〳〵。御病身にて其翌々年十歲にてかくれさせ給へる事實を。御供せし人々の內歟。其子の記載せるものにて。明人の致身錄に似たるものなり。往々蠧蝕磨滅の處ありて。全備ならず。吾友北小路大學助の鑒定には。紙墨筆跡共に古く見ゆれども。足利時代のものにて。決して源平時代のものに非ずと云へり。如何にも眞僞を正せば。覺束なきものなり。さて安德天皇入水の事は。予初より兩說あり。源氏の囚となり給ふとも。淡路廢帝。崇德院の例にて。流し奉ることはあるべし。御命を失ふことはあるべからず。然るを二位殿の抱きて。海に沈み給へること疑ふべきことなり。一床不レ出二兩樣人一とて。俗に云ふ鬼の妻には鬼神なるの類にて。淸盛の妻にて。重盛を生むほどの人なれば。只人にあらず。抱レ帝而沈み給へるは。源家の者共を弑逆の大惡大罪に陷れて。後に有志の者あらんには。賴朝義經の罪を聲らして。兵を起して討せしめんと。後圖を貽せるかとも思ふ。是一つ。又安德帝は女子にておはしませども。平相國の勢にて。男子なりと唱へ。高倉院に位をすべらせ參らせて。此帝を立てゝ己外祖父の威を震はんとて。謀らひけるにや。北魏の胡太后以二女詐言一爲二皇子一。其後立爲二太子一の故智を襲ひしならん。盛衰記に。御男子御出生のことは。こしきを屋の棟より南へ落す。御女子の方は北へ落す。御產の重かりしに。人々倉皇錯愕ある故。誤りて

べし。天の祉を得て。大吉たるべきの理なり。歸妹の卦には。其君(小君なり)之袂不レ如ニ其娣之袂一。良月幾望などの。色を以て寵幸を願ふ徒には各別故に。衣服の飾も質素儉約して。媵妾の衣袂の美麗には及ばずと云ふこと。月の望は十五夜滿月也。幾の近とは。十三十四の夜のことなり。天子の女故。陰の盛なるべきを。萬事裁抑して。內はにひかへめにして。十三十四夜の月の如く。十分に充滿ならざる樣にする。是恭遜謙退の德なり。乃福を得るの道なり。故に吉と云ふ。次には詩の召南に。曷(ゾ)不(ンヤ)ニ肅雝(ナラ)一。王姬之車とあり。周平王の女の齊の僖公の子に嫁せしを。肅は敬肅なり。雝は和睦なり。天子の女なりとて。倨傲不遜なるべきに。夫に事ふる道に。愉惰怠慢の念なく。尊奉愼重の心を盡さゞる是肅なり。柔順溫良にて。親愛和樂する是雝なり。天子之女。諸侯へ下嫁するの道。詩易にて說き盡したり。秦漢以後は郡縣にて。魏晋より今日まで。天子の公主に尙するものは。駙馬都尉に拜せられて。夫れにて身を立て。家を興すことなり。故に美男子を選むことにて。間々公卿

の家柄の入へ嫁することもあれども。必竟。駙馬都尉と云ふもの。男めかけの類なり。劉宋の山陰公主の怨ゆゑに。廢帝夫れが爲に。面首三十人を置きたること。宋書南史共に記載せり。可レ笑の甚しきことなり。故に後世公主下嫁のことは論ずるに不レ足なり。さて當時は。封建の制にて。三代の古に同じ。然るに公主下嫁の禮制。詩易の言に同じからず。覇府の費用極めて夥しく。尙配の諸侯も亦費用極めて夥し。一體禮制に費用の多きは。鎌倉將軍の時。一萬金の費用。室町將軍の時。五千兩になすべし。室町將軍の時。五千金の費は。御當家にて二千兩になすべし。先御代二千金の費は。當御代千金にすべし。戴記にも。禮從レ宜とあれば。時に應じて宜しきを制すること。禮の本意なり。論語に。林放問ニ禮之本一に。孔子禮與ニ其奢一也。寧儉とあり。禮制の儉約に從ふ禮の本意なり。聖人の言は。天理の正當をのべ給ふなり。されば舊禮舊格の。其世にて夫れにてすみたりとも。今の世は今の宜しきを量りて。上下の費用少なく。士民の困窮に至らざる樣に。制度を定め給ふこと。是

國祚靈長の福ならん。如し予が此言を信用なき時は。天下の諸侯困窮して。此末いかなる禍あらんも測り知るべからざることなり

諸侯の相互に嫁娶するの制も。各別に減損して。費用少き樣に命せられたきことなり。諸侯の家にても。女子の多ければ困窮に至る。盗不レ過ニ五女之門一と。後漢書にあるは。尤至極の事なり

○周易泰之六五。歸妹之六五に。帝乙歸妹と云ふことあり。周易は比象にて。其儀自深し。是れは別論なり。されども高宗伐ニ鬼方一と同例にて。其事は實に有りたることなり。さて帝乙は周書に。自ニ成陽一至ニ帝乙一とあり。左傳にも。微子ハ帝乙之元子也とありて紂の父なり。周書は紂の無道滅ニ天下一に對して。自ニ成陽一至ニ帝乙一と云ふ語。賢王の樣に見ゆれど。實は賢王に非ず。太史公の殷本紀に。革嚢盛レ血射レ天などのことは。實否はいぶかし。惡王たる證据は。左傳に。鄭祖厲王。宋祖帝乙猶尚レ祖也。文二年とあるにて知るべし。周易の此事極めて盛事美事なる故。惡王の所爲にはあるまじと云ふ諸儒の疑より。成陽天乙のことなり。祖乙のことなりなど云ふは。周學不レ達ものゝ誤なり。さて帝乙は惡王にてありしかど。其歸妹の禮を能く得たり。妹とは詩には季女と云ふ例にて。をと女の愛子のことを云ふ。天子の愛子を諸侯へ下嫁せしめば。第一には倨傲不遜なるべく。第二には華奢侈大なるべく。姪娣媵妾までも。天子の威をかりて。諸侯を凌侮すべく。はては琴瑟不調に至るべきに。さはなくて。尊を降りて卑に事へり。謙下隆挹の恭を盡さしめられたり。帝乙の此擧美大盛事。故に其近き世には。帝乙歸妹と口實となしたるを。周易にとりて比象となしたるなり。京房易傳には。載ニ湯歸妹之辭一曰。无下以ニ天子之尊一而乘中諸侯上。无下以ニ天子之富一而驕中諸侯上。陰之從レ陽。女之順レ夫。天地之儀也。往事ニ爾夫一。必以ニ禮義一とあり。是れは後世好事者の。假托して爲レ之たるなり。されど其辭は善しと。吳澄の易纂言にも云へり。さて泰の卦にては。以祉元吉と云ひ。天子の女にて諸侯の妻となり。柔順恭遜の道を盡さんには。琴瑟和調。閨門肅清にて。其國家は繁昌す

○昔時政治の弛廢せる世に。近在へ出役せるもの。婦女を淫掠すること常事にて。多く村邑の名主の家に止宿して。少婦。少女などの容色あるを見付くれば。酒の相手に出だすべしと云ひ。否む時は大なる迷惑難義を仕掛けらるゝ故。不ㇾ得ㇾ已其意に應ぜり。故に出役の人の止宿する夜には。新婦。少女を土藏の内に隱したりと云ふ。又上總へ出役せるもの。豪富の農家にて。新坐敷を建てたるに。其家の饗應の薄きか。又は賄賂の少きを怒りしか。泥草鞋にて疊の上へ上り。磨き立てたる天井の板を打ち割りて。手に携へたる道具を挿みたり。農民ながらも其主人も。昔は關東武士の落魄せるものなれば。唯一打にと思ひ定めたれど。妻子の袖にすがりたるにて默止せり。此等は予が聞見のたしかなるを記すなり。一旦は政治嚴密にて。此等の事は止みたり。今は又如何にかあらん。小吏共の惡業にて。勿體なくも上の御不德を積むことゝなれば。兼ねて人君宰相たる人は。政治弛縱なるときは。下には如ㇾ此の惡事ありと云ふことを知り給ふべし。さて婦女を淫掠せる惡吏共ある家は。其後滅亡せり。上には知り給はねど。天は赦し給はず。されば天に代ふる人君なれば。政の縱弛なるは。仁に似て不仁也。威嚴なるは。不仁に似て仁也。此味は大切のことなり。能々心得給ふべきことなり。蕭子良が上疏は。返す々々も面白きことを説盡せり

○東照神君の御遺誡にも。諸侯一旦の怒にて。矛楯を企てたる兵亂は止むべし。困窮より生じたる兵亂は止まざるものなりと仰せられたり。是れは一旦の怒は。久くして消するものなり。又和睦を取り扱ふものもありて止むべし。國々の武士困窮すれば。徒死せんよりは。命をすてゝ事を起すべしと云ふ氣象になること故。止むべき期なし。近く應仁兵亂の起りも。百年前の事にて御存知被ㇾ遊たる故に。かくは被ㇾ仰たることなり。公女下嫁の禮。是までとは各別に。上下の費用を減ぜられて。國士の困窮に至らざる樣に。舊例舊格に拘るべきことに非ざるは。遠くは詩易聖人の敎なり。近くは東照神君の神慮なり。後の君相。予が此言を末世腐儒の言と思召し違はずして。能々信用あらば。

なすと。今の風俗人情なり。是失火の大事に及ぶ根源なり。連坐の法は。外事には用ふべからず。火の一事は。連坐の法を立て給ひて。失火の家は。向三軒兩隣。小家は。隣の隣までも過料をとらるる法を立てられば。相互に心を附けて。火を愼むべし。是救火の要術なり

○近來救火の役徒。火を引くと云ふことはやりて。喚火。接火をなして。火災を大きくなす事。一統の風俗なり。放火のものは極刑火罪に處せられて。この救火役徒の放火を赦さるゝこと。何とも知れざることなり。何故にかゝると云ふに。救火の役徒は。仕事師と云ふものにて。大火ありて。人々家宅の營造をなす時は。大工。左官同樣に。厚利を得ることなり。故に平常の所願は。火災あらんことを願ひ。又火災の大ならんことを願ふ。是をして火消となすは。盜賊をして金錢を守らしむと一樣の理なり。されども此等のきほひあふれものならでは。死地に入りて火を防ぐものもなし。今更是を取り替ふべきもなければ。唯各別の峻法嚴禁を立てられて。火を引く一事止むやうになしたきことなり

從來仕事師と云ふものは。大工の下に付。日傭下直のものなり。文化の大火より。日傭高價になりて今に同じ。大火よりして。萬事一變する。是亦其一なり

○貴人高位は學を好みて。經史を讀み給はゞ。天下最第一の美事なり。有識の者の講義をきゝ給ふこと。是亦同じ。深く學を好み給はずば。吾國の古戰軍記實錄ものにても讀み給ふべし。是又史學なり。其次は諸士の武藝を試み覽給ひて。此等のことを好み樂となし給ふときは。風俗も人情も。衰に就く事はあるまじ。遊藝を好み給ふは。以の外の惡きことなり。上に立つ人。遊藝を好み給ふ時は。下の人皆それに走りて。文學も武術も。精勤する人なく。華奢風流。愉惰淫逸のみ增長して。萬事衰弊す。亂亡をまねく種子を植うるなり。貴人の好む樂は大切の事なり

武術は心得を善くして。出精すれば身體も壯健なり。武骨風にて。華奢惰弱にながれず。珍重すべきことにて。惡き文學にははるかにまさる事なり

内神田土手より。和泉橋を飛び越えて。佐久間町へ飛び移れり。然るに其間にはさまりて。新し橋一帯の民家焼亡を免れたり。火消の役夫はなけれど。人々出精して防ける故に。災をまぬかれたり。是れも土手あり。堀あり。路ありて。明き地あるゆゑに。四面火災の中央にて難を免れたり。此のとき下谷御徒町の内には。或は一軒。或は両三軒。災を免れたり。皆あき地ある故なり。かゝる大災にても。明地あれば防ぐべく。災をまぬかるゝ事理を知るときは。赤羽橋の一帯。新橋の一帯。京橋の一帯。日本橋の一帯。今川橋の一帯等に。土手を高く築かれ。樹木を植ゑて空隙の地を存し。（内の方に土手を築くべし。でやの時は。一郭なるべし）いさて救火の役徒も。半分は火所に趣きて火を消すべく。半分は飛び火を消すべし。京橋の火災は。京橋切りにて。日本橋へは飛び移らせずと云ふことど。民心にしみこめば。人にも資財雑具を持ち運ぶことをやめて。屋に乗りて火の粉を防ぐべし。是にて新し橋の南の火は。新し橋切。京橋の南の火は京橋切と云ふことになるべし。いつも連焼するものゆゑ。飛び火を消すことは棄て置きて。唯雑具を運ぶのみ心をもちふる故に。火事は行くまゝに大災となることなり。隔番に火所の火消。飛火の火消と云ふことを定められ。御火消。町火消。大名火消。皆此二役を勤むべし。常に大甕大桶等に水を貯ふること。兼ねて町々にて支度さすべし。さて又文化の火災にも。本町の四丁目か傳馬町一丁目か。多分土藏作り故に。此一町は焼瓦焼土もなく。平常の時かと思ふ様に見えたり。是亦予が目撃したる處なり。されば商賈も家宅を土藏作りに棲居するものは。平常の町よりは一格を進められて。名主の末席となし給はば。御府内の土藏作り夥しくますべし。是亦火勢を殺するの一術なり。宋の子罕鄭の子產などの。一時の賢大夫。皆火災を救ひたる事左傳に詳なり。救火の議。治道の其一なり。治道に志あるものは。講究すべからずんばあるべからず

○火の起るは烟あるものなり。臭氣あるものなり。家中にても町家にても。相互に心を附くれば。事に及はずして打ち消すものなり。然るをその家にても隠し。近所にても先づは知らぬふりにもて

べし。是佛法には大害なり。さて僧徒の勢盛にして。破戒不如法のみ多きは。是れを裁抑せんとには。上の人。佛法に歸依崇尊し給ふべし

○吳梅村の綏史綏寇記略虞淵沈の篇。闕けて災祥のみ記せり。明末ほど災孽多きはなし。されど火災は。五千家燒亡したること第一と覺えたり。北土は火災少なしと見ゆ。火災は浙江を天下第一とす。南宋此に都せる故に。南宋は火災多し。少時宋史。南宋書。宋通鑑を讀みて是れを知れり。十四萬家燒亡したることもありと覺えたり。明。清に至りても。浙江は火災多しと見ゆ。趙恒夫の寄園寄所寄にも。杭城苦二火災一と云ふ一條あり。即浙江なり。臨安なり。錢塘なり。さて寄園寄所寄に記したる模樣。只今の江戶の樣子と同じ。恒夫が兄の玉峰士鱗が。父を救ひたる術。大抵吾藩加賀の火消の法と同じ。さて火災は天變にて。天意のあること。人力にて勝つべきには非ざれども。目黑行人坂より失火して。千手の驛までにいたり。芝の牛町より失火して。淺草に至るなど。太平の御世にて事すみたれども。此後いかなる惡心のものあるまじとも量り難し。第一には御不要害のことなり。第二には御物入の費も夥しきことなり。第三には延燒士民の困窮難義。可レ憐の甚しきことなり。第四には火災の後。風俗人情一變して。あしくなることなり。文化の火災より。予が慥に見知りたること。數多の條あり。なるべくは人事を盡して。火災のなき樣にすること。仁政の第一たるべし。さて火は明地に至りて止まるものなり。寬政四年壬子七月二十一日。午前に淺布の笄橋より失火して。二里ほど延燒し。夜の丑時に讃岐の兩屋敷。小石川御門燒失なり。其火勢熾にして。水戶の御殿へ火の粉を吹きかくること夥し。御座の御茶屋などは。二三ヶ所も燒け上れり。されども。此時吾藩加賀の火消のもの共。大に粉骨粹身して防禦せし故に。火は小石川御門にて燒け止れり。是予が目擊する處なり。加賀門人龜田章佐を召連れて。是れを見る是れは土手あり堀あり。水府の御門前道幅の廣にて燒け止りたるなり。文化三年丙寅三月四日午前に。芝の大木戶の外より失火して。淺草に至れり。下町は不レ殘燒亡して。東は馬喰町より。淺草萱町の裏へ飛び移り。西は

り。されど天主の途子と唱ふ。さて安土に大櫓を立てられて。天主と稱す。是天下天主の始なり。秀吉公の姫路の天主。大坂の天主。伏見の天主など。是れに次げり。後には大櫓を天主と稱することゝ覺えて。其所以を知らず。實は其第一の上層に。天主を奉祀する故に名付けたるにて。西洋人の眞似をしたるなり。軍學者などは。夫等の事も知らずして。最下層二十五間四面にして。千疊敷の間出來ざれば。天主とは稱せずなど云ふは。以の外の僻事なり。其始の安土の天主も。十八間かと覺えたり。大櫓なれば天主と言ひ習はせることとなり。信長公の天主を奉ぜられて。天主と名付けられたりと云ふこと。信長記。總見記等にも記載せず。今は天守など書き改めて。心付くべき樣もなかりしに。一諸侯の臣の。予が門人。予が少かりし時に。物語せるに。是れはあらはには申し上げがたきことなれど。不思議のこと故申すなり。我國城の天主の上層に。何か怪しき神を安置せり。切支丹の神なりと言ひ傳へたりと。予此言を聞きて。豁然として了悟したり。信長公の天主を安置せられて。天主とは付けられたるなり。諸國の天主も是れとおなじ。御制禁となりて。皆取り棄てたるに。其國などは邊土にて。今に其まゝあることとならん。たとひ字を無理に取りかへて。天守と稱したりとも。根元信長公の心得違より出でたることにて。天守は天主なりと云ふことは知るべき理なり。今かく御制禁に。官名までも其稱呼を用ふることは。然るべからざること歟と覺ゆ。天下一統に。天守と云ふ語を禁じて。大櫓と云ふべき事なり

○天主敎を破られて。宗門。宗旨と云ふことを定められてより。佛法磐石の固めをなせり。僧と云ふもの。檢屍の役人と成りたり。是れは南光坊天海僧正の建議して。かくはなりしと承り傳へたり。能々考ふれば。僧徒には大功ありて。眞の佛法には大害あり。是よりして。僧徒は無學にても。不德にても。事すむことになりたれば。是れ僧徒には大利ありて。破戒不如法の僧のみ多くして。佛理を辨じ。佛心を得るもの。掃地にして絶ゆ。今時の甚しきに至れば。佛法は滅却したりとも云ふ

と稱す。天主をディウスなど云ふの語にも近し。二十歳の時。通鑑を讀みたるより。是れは先王の唐制に效ひて。大秦寺を建て給へる舊跡ならんと心付きたり。山城名勝誌〔誌一作レ志〕などにて考ふれば。聖德太子。秦川勝事を附會す。廣隆寺と云へる寺は。太子川勝よりの事にもあるべし。何とて川勝の事なればとて。地を太秦と云ふべきや。又太秦を何とてウズマサと唱ふべきや。ウズマサと云ふは。胡語蠻語の傳はりたること明白なり。奈良の朝より。平安城の初まで。大小の事。唐の制を効はれたる世なれば。大宗。玄宗の大秦寺を建てたるに効ひて。京西に大秦寺を建てられたること必定と覺ゆ。庚辰〔文政三年なり〕の歲。京師に淹留せる內。此一條心中に蘊蓄せる故。廣隆寺へ兩三度も參詣して。異なる像設もあらんと。內陣を窺ひ見しに。何か佛像の夥しくある古寺なり。寺僧に慇意もなければ。近く入りて委く見るべき樣もなし。遺憾とのみ思ひて歸れり。されど一條は見得たることあり。本尊は藥師などにて。常の佛像なり。左右の脇立に細く長き竿を豪りて。棹の先に銀の月金の日を差し上げたる像なり。佛家のものとは。努々思はれず。波斯大秦などの。天教を奉ずる家の像設たること明白なり。此等の穿鑿は無用の事なれど。此事を知り。此事を言ふは。天下に我一人なり。後の人。我此言を信じて。廣隆寺の像設等を撿閱せば。面白く古きものも出づべき歟。されども是れは國禁の事にて。寺僧の忌むことなれば。彼徒には語るまじきことなり

祅字。顧野王玉篇。音阿憐切。註爲二祅神一。祅神の唐に始まるには非ず。六朝以來の事たること。玉篇にても知るべし。杜預左傳注の妖神を祅神に作るは覺束なきことなり。さて又妖字。西溪叢語には。予長兄伯聲甞攷火妖字。其畵從レ天。胡神也。音醯首切。敎法佛法所レ謂摩醯首羅也。胡三省通鑑注には。妖呼煙翻胡神也

○西洋人は。家宅を五重七重に作りて。其第一の高層の處に天主を祭る。信長公天主の邪敎を假りて。佛法を破却する志あり。其事は極めて謬れり。京師一條戻橋の東北に。地を賜ひて南蠻寺を建てられたり。今は攝家方の屋敷となりて。片側町な

山草茫々たる體なりしを。妙法院の宮の御願にて。御許ありて。人々大佛殿へ參詣することを得たり。さて大佛殿今は燒け失せて。石燈籠のみ遺れり。此石燈籠。實は皆豐國大明神へ。諸大名より奉納せるものなり。豐國社破壞の後か。皆是へ引きおろして。大佛殿の燈籠となしたり。寄進の大名の名は。皆々世を憚りて。石工に命じて。刋り去らしめたるものなり。然れども豐國奉納の物たるを知るは。南方の西のはづれの石燈籠に。奉獻豐國大明神と云ふ字。今に歷々存在せり。京師に故事を能く知りたる人のありて。予に語りし故。わざわざ行きて觀たるに。相違なきことなり

○明の萬曆年間に。利瑪竇中國に來りて。天主の邪敎を說けり。時の學士大夫是れを悅びて。古未曾有の奇と稱せり。其文盲不學笑ふべきことなり。明人學空疎にして考据の學なき故。西學の中國に來る。其久しきを知らざるなり。淸人紀昀が槐西雜誌に辨斥せる所。尤の事なり。唐の時。穆護の祆神。祆敎。祆祠。祆廟。祆寺。祆僧と云ふもの。此事にて。唐の時には。官品令に祆正と云ふ官まで置きたり。宋姚寬が西溪叢語に。黃山谷題。牧護歌後を辨じて。始末極めて詳なり。唐人の書には。段成式の酉陽雜俎にも載せたり。唐の武宗の會昌五年に。佛法破却の時。僧及尼並大秦。穆護。祆僧皆勅歸俗せしむと通鑑にも。舊唐書にも見えたり。艾儒略が西學凡には。唐碑一篇を附載して云。貞觀十二年。大秦國阿羅本遠將㆓經像㆒來獻。即於㆓義寧坊㆒。勅。建㆓大秦寺㆒。一所度僧二十一人云云。西溪叢語に云。貞觀五年。有㆓傳㆑法穆護何祿㆒。將㆓祆敎㆒詣㆑闕。奏聞勅㆓令長安崇化坊㆒。立㆓祆寺㆒。號㆓大秦寺㆒。又名㆓波斯寺㆒。至㆓天寶四年七月㆒。勅。波斯經敎出㆑自㆓大秦㆒。傳習而來久行㆓中國㆒。爰初建㆑寺。因以爲㆑名。將㆓以示㆒㆑人。必循㆓其本㆒。其兩京波斯寺宜㆔改爲㆓大秦寺㆒。天下諸州郡有者準㆑此とあり。宋次道敏求の東京記に。寧遠坊有㆓祆神廟㆒と云注に。或傳晉戎亂㆑華時立㆑此。又石勒時立㆑此とあり。五胡亂㆑華の時より。佛法と同じく。中國に傳はりて。唐に始まるには非ず。玄宗の詔に。久行㆓中國㆒と云ふにても知るべきなり。さて我が京師の西に。大秦と云へる邑名ありて。ウズマサ

し處と記臆せり。夫れは柵木ありて。得て登るべからず。柵木の前にて。伏し拜みて歸れり。さて石田三成。秀頼公兵を起し。御當家へ敵對して滅亡したり。其近き世には。太閤厚恩の諸侯も多く。民心も一致ならず。疑惑も生じ易く。背叛もなし易し。故に此等の事は棄て置かれたること。當時にありては。御尤千萬の事なり。今は二百年の太平。諸侯諸士は言ふまでなく。鳥獸艸木まで。御當家の大恩を蒙らざるものなく。御當家の威德に服せざるものなし。誰ありて背叛攜貳の念を抱くべきや。今日にて見ることは豐臣太閤も一代の神人なり。又御當家に大功なしとも云ふべからず。されば豐國の社御再興。七間四面の堂作にて。華美を盡さるゝにも及ぶまじ。三百金が。五百金にて建立ありて。其後の破壞には。西國大名の太閤厚恩の家に。互に被二仰付一ば。いづれも悦びて造營すべし。さて忌日には。所司代御名代に參詣せば。是一擧無レ涯御盛德の事かと思ふなり。大猷院殿御代に。日光山東照宮の御社を萬代不易になされたきと云ふ思召にて。諸役人に議せられたるとき後。に幽也と隱居名付けたる智慮ある人。豐國の社を能々崇め尊ばれたれば。日光も萬代不易と云ひたることを。新井白石の記したるを。少壯のとき見たることあり。其世にてはいかゞあらん。今日にてはかくありたき事歟と覺ゆ。其一には院參町と云ふ處に。三十石三人扶持とか云へる公家四十人ありと。是れは靈元院の御時か。東山院の御時に。公家の二男三男などの。御側に召し仕はれたるものゝ家なり。其世には。御側に召し仕はれて。御寵愛のものもありし故。諸大名より婚姻を結びて。諸大名の扶助を受けたるものなり。今は世隔りて。扶助のものもなく。微祿にて困窮せざるものなし。公家と云ふ名にて。同心足輕と同祿なること。是れも所置の至當を得たりとも思はれず。凡薄祿公家と云ものを。二百俵高に被二仰付一て可レ然ことなり。是亦盛德の御事なり。されども二條共に。御物入のある事なれば。此後幾世經たりとも。此れを言ひ出だす人もあるまじく。此事を行はるゝこともあるまじ。是吾二大憾たる所以なり。大佛殿も。大坂陣の後は。門を鎖して人を入れず。

居所。義滿將軍の花の亭と云ひたるも。東は烏丸。西は室町にて。東西は一町なり。一條武者小路邊より。上立賣までの間なれば。南北も三町には過ぎず。天下を領する人の居所。僅に如レ此事なり。信長公安土に大城を築き。秀吉公伏見。大坂に大城を築きしより。御當家江戸の城を築き給ひて。壯麗廣大。前古の企て及ぶべきことに非ず。鐵炮大筒など。武器渡來して後は。城郭今の樣に非ざれば叶はぬことなり

御當家の初に。武家諸法度を出だされて。第一に新築城の深溝高壘を禁ぜられたるは。當時數百年の兵亂を太平になし給へり。至極の良策なり。されども二百年の太平にて。聚斂の吏の害にて。百姓一揆など云ふこと諸國蜂起す。然るに大名の陣屋など云ふもの。淺間にして防禦すべき道なし。强盗の數十人ならんには。天下に横行すべし。城と云ふこと。大法禁にて叶はずとも。十間の堀。三間の土手。一重は許されて然るべきことなり。驛場。町場などにも。町のはづれには。土手堀ありたきことなり。太平には。羽織袴にて事足れども。甲冑は兼ねて貯ふべし。土手堀は人家の甲冑なり。此理を知れば。此一條は許し給ふべきことなり。唐土は些少の州治縣治にても。城壁溝塹あり。さて上古は不レ知。周の時より。諸侯の國城は云までもなし。大邑小都までも皆城池あり。左傳を見て知るべし。吾邦は遲く物事の開けたるにて。鐵炮渡來の後。足利の末世より堀をほり。土手を築くことを知りたる勢なり

○京都在留の中に。處々を遊觀したるに。二大憾を生じたり。其一は豐國大明神を拜禮せんとて。智積院と大佛の妙法院の宮の間を登りたるに。昔の豐國の遺跡にや。九尺四面の堂一あり。脇に三尺四方の堂二あり。右の方に堂守の坊あり。內へ入りて事由を詳にせんと思ひしに。僧徒居あはせず。四十有餘の女一人居れり。是れは豐國大明神の御堂にやと問ひければ。いや〳〵是れは新日吉の宮にて候と答ふ。脇の小堂にても豐國かと問ひければ。いや〳〵是れも左にては候はずと云ふ。さて堂の東の山は。阿彌陀が峰にて。太閤を葬り奉り

ふ。三河武士の兩度まで。天下を經營したること奇と云ふべし。妙と云ふべし

仁木。細川は。水島か宇山かの合戰に打死せる。矢田判官代義淸。足利藏人義康長子にて。足利の正統上總介義兼の兄なり。其子を義實と云ひ。三子あり。長は實國仁木の祖。次は義季細川の祖。三は義宗戸ヶ崎。荒川の祖なり。足利の家にては。仁木。細川を重せしことなり

義家の子式部大輔義國。其の子は新田大炊助義重。上西入道 次男は足利藏人義康なり。然るに義重の三男にて。足利の正統を承け嗣ぎたるも。上總介義兼と云ふ。新田足利同時同名なり

足利の義兼は。今川了俊が難太平記には。實は鎭西八郎爲朝の子なりと云ふ

○三河の國より。天下を領する人の起りしこと。如何なる故と云ふことを知らず。山川の英靈にや。鳳來山。本宮山。猿投山等。さまでの高山にも非ず。吉田川。矢矧川も。岐岨川。利根川などに比類すべきにも非ず。往古民情風俗の至りて善き處と云ふことを。新太郎少將の諸士へ勸戒し給へる書にて知りたり。さて予が所ㇾ見は。山は童山のみ多くて。草木を生せず。灌漑の水少なく。いかにも瘠薄の地にて。下々の國と云へり。是れ人の興るべき基源なり。魯語の公父文伯の母の言に。沃土之民不ㇾ才者淫也。瘠土之民莫ㇾ不ㇾ嚮ㇾ義思也と。瘠薄の土ゆゑに。人浮華に走らず。篤實儉朴にて。能く勤む。是興るべきの源本なり。されども。只今にては。昔の樣子とは事替りたるべし。新太郎少將の見給ふとも。最早ほめ給ふことはあるまじと思ふなり

矢矧の橋を渡りて。西は土地肥磽の異あるは知らず。先尾張と同國樣にて。四方を遠望すれば。東照神君の興り給へる國と云ふことも。自然に知るべき形象あり。是れは別論に附す

○昔の平安城の大内裏も。東西は八町。南北は十町かと覺えたり。少かりしとき。鎌倉へは三度遊びたり。頼朝の居所は。八幡の東北の谷にて。法華堂の前の畠にて。方一二町には過ぎまじ。北條氏の居所は。八幡前の東にて。若宮小路と云ふ所なり。是亦方一二町には過ぎまじ。足利氏の京師の

人君の心の一國は一國。一天下は一天下に充塞するに非ざれば。聖人の治をなす事は叶はざることなり。されば新太郎少將の美行も。其心なくして其跡のみ眞似る時は。虚文々具にのみなりて。又其實用はなき事と知るべし

左傳に鄭厲公の言に。夫司寇行レ戮。君爲レ之不レ擧と。杜云盛膳（莊二十一年）歸生の言と同じ。三代盛時の恒例と見えたり。精進と云ふことは。佛法六波羅蜜（翻譯六度）の其一にて。布施。忍辱。精進。持戒。智惠。禪定是れを六波羅蜜と云ふ。勇猛精進の義にて。斷じて菜食の事に非ず。されども齋素を精進と云ふことと舊きことなり。唐范攄の雲溪友議に。南陽鳴鳩和尙。興元蘭若上坐及賓誌太師喫繪の條に。たしかに菜食のことを精進と記したり。又南齊書周顒傳にも見えたり。菜食と云ふは。漢書霍光傳に見ゆ。淨膳と云ふは。梁書武帝紀に見え。皆今の精進の事なり

○三河の武士。兩度天下を取りたれども。此事世に知れるものもなく。まして記載せるものもなし。巳卯（文政二年）の秋。予先主人吉田の松平侯の扈從として。三河に一年在留せり。是れにて始めて此事を知りたり。さて新田の庶流は。世良田德川を始として。皆上州新田郡の在名なり。里見は義俊流なり。山名は義範（山名伊豆守）流なり。是は新田正統大炊助義兼の兄なり。故に遠く隔たりて。今の上州高崎の南に山名あり。北に里見（上中下三村か）あり。其他は義貞擧レ兵の時。天狗山伏の催促せる。三國峠を越えて。越後の羽川鳥山等なり。然るに下野足利郡に。足利と云ふ處はあれども。足利庶流の人は。村名一もなし。少き時（天明七丁未予二十三）に。毛の野に浪遊して。此事を不審に思ひたれども。誰ありて。此等の事を辨知せる人もなし。三河に在留して其輿圖を披見すれば。足利庶流第一たる仁木細川は。額田郡矢矧川の東に並びたる村名なり。吉良。一色。今川。荒川。戸ヶ崎まで幡頭郡の村名なり。されば鎌倉の初に。足利庶流の人々を。此國に封じたり。細川。一色の人々。又己の次男三男を分封せし地と見えて。三河の國中に。一色。細川と云へる在名夥しく見えたり。元弘。建武の亂にて。尊氏天下を領し給ひ。慶長の亂にて。御當家天下を領し給

にて召し上らるゝと云ふこと。人欲を抑制して。質素儉節の道に叶ふ。無量無邊の大德にて。實は難レ有御事なり。此一條にても能く守る人は。一身も壽考康寧なるべく。福祿をも保有すべく。子孫も長久繁榮なるべし。是釋迦牟尼世尊の。世道に大功ある所なり。精進日など云ふことも可レ笑こともあれども。類推して其美事たることを知るべきなり

三叟の詩にも。餐欠二數口一と（客中閑集）云ひたれば。晩（人夜分には。勞動せざる故に。晩）食の少なきこと。攝養の術なり。（食は少きを法とすることなり。）

精進日と云ふことありて。屠殺を禁じ。物命を害することと少き時は。天地生物の心より見るときは。此二字にも無量の功德ありて。儉素の爲のみにも非ざるなり

○備前新太郎少將（光政）は。江戸在府の時も。國にて刑罪人を誅する日には。終日麻上下を着して。齋素（精進料理）し給へりと承り傳へたり。是れは左傳の蔡の聲子歸生が云へる。古之治レ民者。勸レ賞而畏レ罰。恤レ民不レ倦。賞以二春夏一。刑以二秋冬一。是以將レ賞爲レ之加レ膳。加レ膳則飫賜。此以知二其勸一レ賞也。將レ刑爲レ之不レ擧。不レ擧則徹レ樂。此以知二其畏一レ刑也。杜元凱曰。不レ擧二盛膳一（襄二十六年）とある意味を能く得給へたり。難レ有御事なり。天下にても。國にても。君の喜び給ふときは。國天下の民。一統によろこび。君の憂ひ給ふ時は。國天下の民。一統に憂ふ。如レ此に非ざれば。治レ國平二天下一の功はなし難し。後の人君は。己の榮樂を爲さんとて。民の患苦をも憚らず。故に民も亦人君の患難を悅樂するに至る。亡國の君は勿論のことなり。中庸の君と云へども。大槪は如レ此。故に片々にては死罪を斷じて。片々にては猿樂の舞をすると云ふ樣に。哀樂の發。皆其道を失へり。是れ民の心服せざる樣に。自ら取る道なり。治道に志ある人君は。臣民を褒賞する日は。酒宴歌舞をもなすべし。臣民を誅戮する日は。齋素して悲哀すべし。如レ此なれば。人君の憂樂と。天下の憂樂と一致して。事ある日には。士民も上の爲に命をも致すべし。上下の哀樂悲歡別々のものとなりては。一旦事ある時に。士民は上の用となるまじ。可レ畏の甚しきことなり。

は。大に宜しからざる事なり
○周官膳夫の職に。王日一擧齋則（スルトキハ）三擧とあり。是は天子の平日は日に一度盛膳を供して。齋戒の時は三度共に盛膳を供すと云ふことにて。後世の齋素とは事替りたることなり。夫れは予が論語大疏に詳なり。さて今は天下しろし召す將軍家にても。又は大國の諸侯にても。正月元日より三日までは。嘉儀さへ朝晝は御料理を召し上られども。晩食は御長豆腐と唱へて。八杯豆腐のみを召し上がらるゝことなり。まして平日は猶更のことなり。貴人高位の禮法は。晩食は一統に粗薄なるものなり。士庶人の家にても。古禮法を失はざる家は。晩食茶付香物と云ふこと一統の常例なり。士太夫にても。庶人にても。無作法の家は。此等の事も知らざるものなり。さて又此禮法。唯今の世の事にてはあるまじ。足利將軍も。鎌倉將軍も。一同の禮なるべし。細川幽齋藤孝の東照神君へ。足利將軍の禮式を御相傳申されたる內の條目たるべし。されども是れは武家の事にはあるまじ。昔の公家の世。天子攝關なども同じ事たるべし。故實家などは其濫觴をも窮め知りたるや。予は此禮の起りを知りたり。是れは佛家の戒法に。非時の食を禁じて。晝の午時より後は。一粒をも食せざること。沙彌の十戒よりして然り。中古王室の盛なる時。天子も攝關も。皆佛法に歸依して佛戒を受け給へり。俗人は戒律僧の如きことは得て成がたき故。晩食を少き樣に。精進齋素の如くにしたるものなり。晩食を齋素にする。皆婬慾を禁じ。婬慾を薄くするの方法。晩食に膏粱滋味。或は醇酒厚味を飽滿せるときは。氣力盛にして婬慾勃動す。釋氏の法は。身體を尩羸ならしめ。婬慾の薄からんことを願欲す。晩食を禁じ。晩食を薄くする。皆其方法ならずや。されば今の禮法の八杯豆腐。香物茶づけ。實は可レ笑の甚き事にて。妻妾を具有するものは。夜食には肥肉醇酒を飲食して。氣力を張旺ならしむべきことと。攝養の術なり。僧徒の戒律に比擬すること。以の外なる僻事なり。然れども天下の萬事。片落なることは云ふべからず。能く事理を考窮すれば。佛法の餘習にて。天子。將軍にても。國主城主にても。正月元日より一日に一度。八杯豆腐

り。然るを湯武の放伐の事を引き。又は石勒が曹操。司馬懿を欺ニ孤兒寡婦ー奪ニ天下ーなど云ひたるを。近似の事の樣に思ひて。新井白石いやに思ふなどは。當時の事實を詳明せざる誤なり

呉の魯肅の帝王之興。先有ニ驅除ーと云ひたるは。今古の妙言なり。漢高の興るには。陳渉。項羽の驅除あり。光武の興るには。王郎。樊崇等の驅除あり。家の興り給ふには。織田。豐臣の驅除あり。足利家と御當家の間に。天正元年より天正十年までは織田家。天正十一年より慶長八年までは豐臣家。班固の所謂。餘分閏位の類ならずや

○淺井長政義理を正して滅びたり。其故にや。其二女。一人は淀殿にて。秀頼公を生みたり。一人は崇源院殿にて。家光公を生み給へり。偶然ならざるを覺ゆ。淺井は藤原氏にて。初代重政。京極持清の時なり。權中納言政氏の子なりと云ふ。又嘉吉年中の事にて。閑院家。三條大納言公綱の子なりとも云ふ。識者に尋ねて匡正すべし。義昭の六角に寄寓せるとき

落魄江湖此結ㇾ愁。孤舟一夜思悠々。天公亦憫ニ
吾生ー否。月白蘆花淺水秋

其不遇の感。言語の表にあらはる。今日の詩人よりも面白きことなり

○景勝の越後などにて。信長公の本能寺の生害をききて。此後の天下とりは家康なりと云ひたるに。思の外に秀吉公の明智を誅し。柴田を滅し。天下を領する勢になられたるには。肝を潰したりと云ふ。天正十一年より。慶長八年まで二十年。遲く天下を領し給ふ。一時に屈するは萬世に伸ぶ。是御當家天下を有たるゝことの永久なる基なり。さて秀吉公は。初の程。何も赫々たる大功なし。毛利征伐の先手となり。播磨へ出でられたるより後は。其功著明なり。是天正五年六年の事なり。天正十一二年には。最早天下取りなり。其功神速なる故に。其後永久なることを得ず。世に眞書太閤記。畫本太閤記など云ふ妄書ありて。信長公初年の武功ども。皆秀吉公の武略の樣に記せり。虚誕妄説。識者を欺くべきには非ざれども。女。童子まで。此書を玩弄して。眞實のことの樣に思ふ

押領せり。六角の此を惡みて。小谷城を圍まれたるに。朝倉の援を得て運をひらき。家を興せり。此舊德を忘れざる故に。妻の緣を棄て丶。朝倉と滅亡を共にせり。さて初度姉川の大合戰に。信長公十二段の備。長政の先鋒礒野丹波守が武勇に碎かれて。十一段は切り崩されたり。總敗軍となるべきを。東照神君の。朝倉の一萬餘の兵を追ひ崩されて。眞柄十郎左衛門など云へる驍兵をも打ち取り。其上にて勝ち誇りたる淺井勢を。微塵に打ち破り給へり。此時秀吉公は。木下藤吉郎と云ひたるが。神君の御床机をなほされたりと云ひ傳ふ。此時信長公の神君へ賜ひたる感狀あり。信長記總見記にもなし。御當家の記錄にも見當らず。武家功名記に見えたり。さて初度の大合戰に打ち負けて。淺井朝倉遂に滅亡に及びたり。信長の天下草創の功は　三河武士のなしたるなり。是二つ。信玄は善人には非ざれども。一代の英雄にて。軍略には長じたり。天正の初には。甲斐。信濃。駿河は全國。上野遠江半國までも領したり。此人の長壽ならば。信長公五畿內邊の弱敵を幷呑したりとも。又々東美濃より。信玄に後を擊たれば。毛利などを征伐することは思もよらざることなり。謙信の能登。加賀へ打ちて出でたるにも。大に手こずりあぐみたるにても見るべし。幸に信玄の死したる故に。其子を鐵炮ずくめにして。甲斐の勍敵を取りひしぎ。西方の取合に後を顧みざる樣になりたり。さて信玄を打ち殺し丶は。野田城主の菅沼の足輕なり。されば信長の天下草創の功は。三河武士のなしたる是三つなり。信長公は一體に。甲斐の勍敵を神君にさ丶へさせて。己れ中州を經營したるものなり。王莽無道にて。天下蜂起せり。されども王莽の滅びたるは。昆陽の戰に。王尋。王邑八十萬の大軍を。光武の敗散の卒數千にて打ち破られたる功によれり。劉聖公。更始劉盆子など。一旦は人主となりたれども。終には光武の天下となりたるは。天の其功に報じ給へるなり。大閤神人にて。明智を擊ち。一旦に天下を領し給へども。信長公の太刀蔭より出でたる人と。信長公の天下を經營せる草創の功を建てたると。同日の論に非ず。さるが故に。天下は御當家に歸してかく繁昌な

て如レ此。是も亦鳩巣の録せる所なり。唐太宗の好レ名給ひて。宮女を出だせるよりも。智仁兼ね至りて。遠くすぐれ給ふ様に覺ゆ

○豊臣太閤は。神智妙算。豁達大度。我邦にて古今無比の人物なり。されど其人は。信長公の大刀蔭より出でゝ。身を立てたる人なり。さて信長公は。織田家(尾張斯波家老)の庶流にて。父の彈正忠信季は(尾張勝福城主なり)清洲の三奉行を勤めたる人なり。弘治元年四月に。信長公本家の彦五郎(廣信とも廣友とも)を滅し。永祿二年正月に。大本家の右兵衛尉を滅して(岩倉城主領尾張上四郡彦五郎の家は。在清洲奉斯波領下四郡)尾張を全領す。婦翁の齊藤道三が。美濃を奪ひ取るにも。十二年を經たりと云ふ。(信玄。信濃を全領するには。二十四年を經たりと云ふ)天下に旗を立つべき勢あるに非ず。永祿十二年に。足利義昭越前にありて。朝倉義景が禮遇の不誠を怨み。信長公を憑まれたるに。信長公是を受け納れて。美濃。尾張分國の兵を起し。是を奉じて上洛せり。後には義昭とも不和になりて。天正元年には。逐ひ拂へども。一旦は古人の假二天子一令二諸侯一の故智を用ひたる故に。織田の勢。勃然として。龍の雲を得たるが如く。終には天下を經營するにも至れり。さて佐々木。六角承禎父子は。初より三好。松永と同意故に。義昭の南都を落ちて憑み來られたる時も。鷄肋を以て遇したり。義昭ハ上洛の路を支へ塞がんとて。和田山箕作に守兵を置く。若此戰に數日を經ば。五畿內に充滿したる。三好。松永の徒黨。六角に加勢して。卒爾に義昭の上洛は叶ふまじ。然るに箕作一時に落去して。和田山も明け退き。其夜の內に承禎父子は。觀音寺山の城を落ちて。近江路より京都まで。將軍の上洛に。一矢を射かけるものなし。さて箕作を攻め落しゝ第一の功名は何者ぞや。松平勘四郎信吉(後に伊豆守今の伊賀守の祖なり)なり。信長の天下草創の功は。三河武士のなしたるなり。是一つ。淺井備前守長政は信長公の妹聟なれども。朝倉義景に一味して。同時に滅亡したるは。時務に通せざる無謀の甚しきものなれども。義理の正を得て。感賞すべきことなり。夫れは長政の祖亮政は(助政とも粘政とも)京極の家臣なりしが。永正。大永の間に逆心して。京極老臣上坂治部大輔重景(泰貞齋)の子どもを追ひ拂ひて。主人の京極が北近江西近江を盡くに

どの。御戯れを仰せらる。夫等の事の上聞に達せしにや。終には此事御免なりて。勝手に高くすべしとなり。御免を蒙られたるより。急に造作して。夫迄よりは。數寸卑くなされたり。今に此間の垣は他所よりも卑しと。予が少かりし時。本藩針醫久保定能の物語なり

○儉素なるものは子孫連綿として。汰侈なるものは子孫不レ振なり。我覇府にても。東照神君の御血豚と。有德院殿の御血豚計り蔓衍して。夥敷御繁昌なり。大猷院殿常憲院殿。皆御英主にてましませども。此理を御存知なき故に。今は一線の御血胤もなし

○東照神君の。御小姓の茶字の袴を着たるを御怒り被レ遊たること。諸記錄に見えたり。さて有德院殿は。御大小の拵へ。皆赤銅鐵銅にて。御下げ物は黑塗。内は梨地。緒じめは无患子。根付は象牙なり。御馬乘袴は。小倉木綿。夏は半晒し縮。又は粗悪なる縮を召され。（葛袴の事は。畏天錄に載す）御召物のゆきたけ短くて。御腰物は格別に長し。御膚着は木綿なり。火災の節。菖蒲皮の御立付にて。御頭巾は帶に御狹被レ遊たり。御鷹野の時。木綿の御脚伴。柿色の麻の御羽織。裾を御からげ。草鞋を帶に御狹み被レ遊たり。さて阿部豊後守殿の蟬の羽の如きのし。縮の帷子にて御前へでゝ。伺事せしには。御返答なく。北條對馬守殿の綸子の單物にて。御前へ伺候せしは。御目を注せられて。御目通りに難レ居退去せり。是にて御制禁なくても。上下の美服。華奢一時に變革せり。政事は人君の身自。率ゐ先ずるより要なるはなし。漢書に。文帝以二敦朴一爲二天下先一と云ひたるは。此等の御事なり。此條は室新助が。麗澤兼山秘策に錄せるを抄出せり

○有德院殿の御時。御奥の女中の御前代より多かりしを。容色のよき女子を御選びにて。姓名等を記して申し上げさせられたり。女子の父母などは。進御の事なりと。大に悦びて。前祝をしたるもあり。凡五十餘人なり。御聞正しの上。皆御暇を賜はりて。容色の醜くき女中のみ召し使はれたり。容色よき女中は。何方へ緣組も自由なるべく。醜女は御暇賜りては難義なるべきを。御推量被レ遊

を置き給ふ暇なく。裸馬に打ち跨り。加賀の屋敷へ馳せ込み給へば。綱紀卿六具を固め。將机に腰かけ。采幣を把りて指揮し給ふ體を見て。馬より飛び下り。是れは加賀守殿には。物に狂ひ給ひし歟。如何なる事にてかくはし給ふぞと御尋なり。その時綱紀卿。登之助の不埒を。逐一に仰せられて。此趣に候間。只今人數を差し遣し。登之助を打ち取り可レ申と仰せらる。光圀卿の仰せに。夫れは以の外の僻事なり。登之助は小身の事なり。御自身手を下さるべきものに非ず。縱ひ打ち取られたりとも。大國の太守の。小身ものを打ち取ること。武勇にも候はず。拙者へ御所存を仰せ聞られ候はゞ。御本丸へ申し上げ。登之助事は縛り首にも。切腹にも。自由に可二相成一事に候へば。今日の御企は。强ひて思し召し止まり可レ然と仰せられたり。此理に屈服し給ひけん。綱紀卿頭を低れて。暫時默し給ひたり。やゝありて仰せられ候は。此れは加賀守が誤りにて御座候。登之助を打ち取ること。仰せに從ひ思ひ止まり申すべしとなり。光圀卿も大に御喜悦にて。さらば思し召すまゝを。不レ包に御語り候へ。御本丸へ申し上げ。如何樣とも取り計ふべしとなり。綱紀卿の仰せに。此上は何の所存も候はず。箇樣の事の出來するも。登之助の門と。拙者の門と。相向ひ合ひ候より事起れば。此以後は。彼が屋敷の門を。此方へ不レ向樣に。御取り計らひ可レ被レ下となり。光圀卿の。夫れは易き御願なりとて。仰せ上げられ。登之助の門は。此の大通りに明けずして。南の隱屈なる所に明けたり。今に登之助の表門は。傘谷の方に附けたるは。此時よりの事なりと。是も吉田坦藏の物語なり。虛實は不レ知。面白き物語にて。今の世の孱柔なる風習とは。事替りたること故。記錄して傳ふるのみ

○本藩の本鄉の屋敷と。水戶の追分の屋敷と間の垣は。右等の御趣意もあるにや。卑くして見越す故に。綱紀卿の 每度御願ありたれども 不レ叶。御老年までもかくの如し。御出入の御先手など參りたる時に。御手前方御存知の通り。水戶の間の垣の事を。每度願出で候へども。今に御許容なきは。加賀守の白髮頭へ。冑を被れと云ふ思召ならんな

多く書籍を御假し借りの簡牘なり。其內黃門卿へ書を借し給へる手牘に。此書は當時借り寫せる時。他見致すまじき約束にて借りたる書なれど。御懇望故。無ㇾ據入ニ御覽ㇾ候事なり。故に一日御借し可申。二日とは相成り不ㇾ申と云ふことありと。故の史館總裁翠軒老人立原萬（甚五郎）の物語なり

綱紀卿を生み給へる清泰院と申しゝは。大猷院殿の御養女にて。實は水戶の賴房中納言の御子なり。されば光圀卿と綱紀卿は。舅姪にておはしますに。共に學を好み給ふ故。殊に御親み深かりけるにや

○近藤登之助は一代の俠者にて。大小の神祇組と云へる其一人にや。其徒と河合又五郎をかくまひて。大なる騷動を起しゝ事。世人の知る所なり。綱紀卿の御若年の時にや。登之助家僕を放打にせんとて。打ち損じ。家僕は本藩邸の門內へ逃げ入りたり。兩度まで使者を以て。歸し給はるべき旨を申し入れたれども。綱紀卿の御答に。此方屋敷を憑もしく存じ候ひて。驅け込みたるものに候へば。指し出だし候事は致す間敷候。御宥免候ふべしとなり。三度目に登之助自身にて來り申すは。拙者小身者の家僕を。大國の太守の。左程までに御憐愍被ㇾ下候は。忝なき御事なり。さて此小者も。大國の太守の左までに御憐愍を蒙りしは。冥加の者に候へば。此以後は。士に仕り召し仕ふべし。御歸し可被下との事なり。綱紀卿も左樣の事に候はば。歸し遣すべしとて歸し給へり。さて登之助右の家僕を。己の家敷內にて縛り。本藩の火の見より。能々見おろす處へ引き居ゑて。首を打ち落せり。綱紀卿此事を聞き召されて。以の外に怒り給ひ。惡き登之助の振舞や。小身者に欺れては。一分立ちがたし。さらば登之助を打ち取るべしと下知し給ひ。在邸の諸士。諸卒に命じて。甲冑を被り。南の門の內に群集す。今一相圖にて。南門を開きて打ちて出でんとひしめきけり。此時光圀卿追分の御屋敷に居給ひしが。本藩邸中の騷動せるを聞き給ひて。何か加賀屋敷は騷動するぞ。見て參るべしと。昵近の人に仰せ付けらる。其人驅せ歸り。何かは不ㇾ存。加賀屋敷の內。馬。物具の音仕り候と申し上ぐる。光圀卿さればこそとて。鞍

九年。壽八十二歳にて薨じ給へりと。是吾先考東岩府君の御物語なり

○綱紀卿は。先公陽廣院光高君の早世し給ふ故。三歳にて家督を承け嗣ぎ給へり。實に正保二年にて。大猷院殿の御時なり。是より嚴有院殿の三十年を經て。又常憲院殿の三十年の御榮華をも見果て。文照院殿。有章院殿の御二代。天下の御正統の斷絶して。有徳院殿の紀州より入りて。大統を嗣ぎ給へるを見て。享保九年に薨じ給へり。仙家の七代の孫に逢ふなど云ふにも比すべきか。さて周公の無逸に。殷王中宗帝大戊の在位の長きを稱美して。七十五年とあり。夫れにも優り給へり。まして秦漢以後には。在位五十年を越えたるは。漢武一人なり。近代。清朝の康熙乾隆六十年の在位は。三代以後是なき偉事なり。夫れも十九年まし給へり。天の大徳に報ずるの偶然ならざるを知れり

昔漢書を讀みたるに。漢の宗室に在位の長き人ありたるを覺ゆ。夫れも吾松雲院公には及ばざるか

○綱紀卿は。文武の二道に達練の御方にて。一時の名士を召し抱へられたり。木下順庵。室鳩巣。稻生若水の類是なり。新井白石も召し抱へらるべきを。岡島忠四郎と云へるものに讓りたること。白石の折焚柴の記に詳なり。鳩巣は十四歳の時。只者ならざることを知り給ひて。召し抱へられたり。順庵は。常憲院殿御代に江戸へ辟され。鳩巣は文照院殿御代に江戸へ辟さる。當代の學問文章は。加賀を盛とすることと見るべし。さるが故に。四五十年前までの學者。此卿の御事を。加賀の綱紀。加賀の松雲院と云ひ。知らぬものなかりしに。近來の學者は。浮華にのみ走りて。此卿の御事も。知るもの多からず

○光圀中納言。學を好み給ひて。多く書を集め藏し給ふ。其後大日本史を撰修し給ふ故。殊に國書を多く集め給ひて。藏書の富贍なること。一時の冠冕なりと云ふ。されども華本の多きことは。綱紀宰相の集め藏し給へるには。遠く及ばざりしと。水戸の篁墩吉田坦藏漢官學生の物語なり

○水戸の史館彰考館には。綱紀卿の御直書の手簡多くあり。皆水戸の御家臣の名當にて。恭遜の御事なり。

去るが故に。愚昧に見ゆるも。身を全し。家を興す人は。何か各前の人に超過することありと知るべし。或は身を敗り。家を滅す人は。何か人に劣れる愚昧のことありと知るべし。姦才にても身を全し。家を興せば智者なり。去れども是は曹孟德司馬仲達天下を取りし類にて。子孫永久は覺束なし。仁義正直にて。家を興し。身を立つる人は。堯舜三代の聖人。漢。唐。宋。明創業の君と同じ。身家と天下とに理わるに非ず。家を興す人は。天下を興す人。家を滅す人は。天下を滅す人なり。故に放蕩無賴にて。身家を滅す人天子となれば。とりも直さず。桀。紂。幽。厲なり。齊の東昏。陳の後主。隨の煬帝なり。唐の玄宗。宋の徽宗。元の順帝なり。去るが故に。與レ治同レ道無レ不レ興。與レ亂同レ事無レ不レ亡と云へり。然るに。世の文人才子など云ふ者に。身家を廢亡して。我は天下を治むべしなど云ふ者あり。笑ふべきことなり。身家をも守り得ずして。如何に天下を治むべきか。此等の人の才藝は。玄宗の詩文。徽宗の書畫にても。都を出奔するか。五國城の囚俘となるべき人物なり

○常憲院殿の御時。西山中納言光圀卿御前にて。大學の三綱領を講じ給ふ事は。桃源遺事に見えたり。又吾藩の先公宰相綱紀卿は。御前にて中庸の性道敎の一節を講じ給ふ事は。木下順庵が錦里文集。加賀菅侯奉旨進講中庸記に詳なり。元錄五年壬申六月三日の事なり。常憲院殿の。常に御自身にて經書を講じ給ひて。周易傳義の御講釋に。兩山の僧徒（寛永寺増上寺）まで拜聽に出でたること。武野燭談に詳なり。御自身經書を講釋し給ひて。水戸。加賀大國の大守まで。御前にて各經書を講ず。誠に難有御事にて。當代文學の盛に行はれ。前古に超越することは。此將軍の御功德なり。蘐園の物茂卿の。昔者憲廟好レ學。海內靡然たりと云ひたるは。信然なる言なり

○綱紀卿の五十歲の正月に。醫者どもを召されて。養生の第一は何ぞと問ひ給ふ。醫者共衆一同に。房事を愼むを攝養の第一と存ずる旨を申したり。綱紀卿の仰せに。吾れも左樣に思ふなり。吾今年五十なり。此以後は房事を斷ずべしとて。五十以後は奥へ入り給はず。如レ此の修養ゆゑ。在位七十

の戒ともなるべし。婦女を惡みけるは。後梁の先主蕭登に似たり。一生不犯なるは。唐の陽城の兄弟に同じ。さて此の嘉膳。初めて其君備前の太守に謁する時。佛を拜するには。南無阿彌陀佛と唱ふることなるに。何ぞ唱へ言なくては不レ叶と思ひて。口の內にて馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿と唱へたりと。鵬齋は面白きことなりと思ひて。吾に語れり。是は以の外のことなり。嘉膳の井上金峨に物語せるを。鵬齋は金峨の門人故に。聞き傳へたるなり。己れが主人に。初めて拜謁するに。心內に愚昧の馬鹿なりと唱ふる。無道不敬。天地の戮民と云ふべし。是れは全く嘉膳の罪には非ず。物茂卿が聖人の道に不案內。唯客氣を以て門生へ敎へ。豪傑氣象。英雄氣象など云ふ風俗故。世人を足下に見くだすこと。學者の常態と覺えたり。故に嘉膳如き美質の人までも。不レ思如レ此の不敬無道をなすに至れり。まして其放蕩無賴なるものは。いかなることをか言ひ出だし。いかなることをか行はんも計りがたし。今其學風の邪惡を辨斥して。一掃蕩地せずんば。此後父を弑し。君を弑し。謀叛反逆の賊も。英雄豪傑氣象の學者より出づべきことなり

○大內義隆の滅亡は。相良武任。上杉憲政の滅亡は。菅谷大膳。上原兵庫。今川氏眞の滅亡は。三浦右衛門。武田勝賴の滅亡は。長坂釣閑。跡部大炊。此數人は日本の佞幸傳に入るべきものなり

○一萬兩の普請は。五千兩は入用にて。五千兩は盜臣と。夫れに加はる町人百姓の囊橐に入る。盜臣と農商と。共に潤澤を得るときは。廣大の仁恩仁政とも云ふべけれども。夫れ等の爲に。財用匱窮して。止むことを得ず聚斂の臣を用ひ。頭會箕斂に及ぶ。されば良民を浚剝して。姦民を饜かしめ。盜臣の費を聚斂の臣にて償ふ。後の世には。此等のこと多かるべし。經濟の臣。此等のことを知らば。經費過半を減じて。財用優足なるべし。殺レ身成レ仁。捨レ生取レ義。臨レ危致レ命。過涉凶義亡レ咎の類。格別のことなり。只今の太平無事の世界に生れては。家を興し。身を全する人は。賢智者と知るべし。家を滅し。身を敗る人は。愚不肖と知るべし。智愚。賢不肖の前は。廢興存亡にて分明なり。

り

○越前は斯波の領國にて。朝倉は斯波の家差なり。越前にて増澤甲斐守など云へるもの。共に爭亂を起せるを。朝倉此を誅せし故。文明三年か五年に。義政將軍より越前國を朝倉に賜はりしを。林道春の將軍家譜には。増澤を誤りて。甲斐某と云へるものとす。此時代の事を記せるもの。大抵は誤謬多し。是は考證の學を假らざることを得ざるなり

○東照宮の御言に。諸侯の爭より興りたる兵亂は。久しからずして止むものなり。世間の困窮より起りたる兵亂は止まざるものなりと仰せらる。其神妙即聖語と同じ。堯舜も。四海困窮して。天祿永終と仰せられたるに非ずや。さて應仁記に。應仁の大亂は。起るべきこと八ヶ條あれども。其八ヶ條よりは。其大本は義政の華靡なる事を好まれて。七度の晴と云ふ事を致されたるにて。天下の諸侯士民まで。困窮しはてゝ。人々亂を希ふ心より。此の大亂を生じたりと記せり。奢侈華靡より困窮を生じ。困窮より變亂するは。千古一轍の事なり。されば國天下を有つものは。華靡は國天下を亂す大寇讐なりと云ふことを。念々に忘れずして。上下の華靡に流るゝことを嚴制して。困窮の源を防ぐべし。

諸侯の忿爭は和解するものなり。久しければ。忿りの心も自然に和ぐものなりと。仰せられたり

○近頃の加賀宰相は。在國の日。坐臥共に江戸の方を後ろにし。足にし給はず。將軍の御方なりとて。畏れ敬ひ給へりと承り傳ふ。誠に難レ有御事なり。吾所レ知の醫生の。畿内に老母あるもの。日に目通りに出づるに。毎例其者に逢ひ給へるには。其名を呼びで。上方にある老母は無レ恙やと問ひ給へり。是も亦難レ有御事なり。如レ此の律義なる御方故に。種々の難にも逢ひ給へども。武運全くして。長壽にて參議までに上進し給へり。感賞すべきことなり

○龜田鵬齋の語りし。備前儒士井上嘉膳は。婦女を惡みて一生不犯なり。姉に逢ふにも。一間を隔てて尊敬せり。是れは非常の行なれども。世人好色

し給ふ。是にて御福分十分ならざるを悟るべし

○聖人はさすの神子なり。世に汰侈なる者。鄙吝ならざるはなし。驕且吝と仰せられたるは此事なり。節儉は吝嗇には非ざるなり。世人は此を傾城買は糠味噌汁と云ひ傳へたり。世に言ひ傳ふることは。多く妙理あり。此も其一なり。東照神君は。御幼少より御一生。讐をも恩にて報せんと御心掛被レ成たりと。晩年御近邊の人に。御物語ありしと承り傳ふ。是は論語とは違へど。禮記に。以レ德報レ怨。寛レ身之仁也と云ふに符合して。難レ有寛大の御心なり。又此頃は。戰爭の忙しき世なれば。武士も打ち死にして。其子幼少なれば。家祿をば嗣せずして。別に勇士を召し抱ゆること。一統の風俗なりしに。三河にては。打死の幼孤は。當歲子にても。家祿を其まゝ賜はりたりと傳へ聞きて。天下は最早家康に取らるべしと。高坂彈正の言ひたりと承り傳ふ。行ふ人は神君なり。褒むる者は高坂なり。神君の御仁惠。高坂の明智。孰れも感賞すべし。さて是は文王の仁政。仕者世祿と云ふに符合して。此御時代には。難レ有仁惠の御政なり。寛仁の御德にて。天下泰平。御子孫の繁榮を基し給ふ。難レ有御事共なり

○臣の君を奉じ。子の父を敬するは治なり。亂とは臣の君を弑し。子の父を害するなり。故に足利の世にては。下剋レ上の世と云へり。一體は治世の時。上榮耀に誇りて。下の艱難苦勞を憐まずして。聚斂刻剝の政を成したる。上剋レ下憤怨の心。天地の和氣を破り。終には飢饉兵亂となるものなり。上剋レ下の變じて下剋レ上となるは。大暑の歲の大寒となるに同じ。小雅に。高岸爲レ谷。深谷爲レ陵とは。亂世の樣を能々知りたる者なり。故に是迄の王侯貴人は滅びて。左傳に云へる。三后之姓於レ今爲レ庶と云へるに同じく。故もなき卑賤のもの。天下を領し。國を有つに至るなり。いかなる匹夫下臈の。天下を紛亂すまじきにも非ず。又天下を掌握すまじきにも非ず。漢土は常の事なり。我邦にては。先づ如レ是ことは少なかりしに。豊臣太閤にて。此後は計りがたきことを知るべし。故に治世にては兵を用ふることを深く忌み畏るべし。又兵亂のおこらざる樣に政を執ること。これ第一のことな

外夷に接屬せず。是れをさめよき第一義なり。治めよき國と云ふは。道の行れやすき國にて。漢土にまされるよき國と云ふべし。去れども如何なる治めよき國にても。上たる人德義を失ひて。政治あしきときは。保元。平治より慶長。元和まで。四百年の干戈爭亂にも至れば。人情風俗を憑みとなさずして。政治を能くすべきことなり

○學者は漢土のみよき國と覺えて。今の世の御政治までもさみする心あり。笑ふべきなり。文盲者はせん方なし。書を讀む人にて。如是は何事ぞや。堯舜三代の聖人は。申すも畏れあり。是れは格別のことなり。其餘。漢。唐。宋。明の世に。今の世の如く治まりたることは無きことなり。漢の宣帝は。一代の英主にて。魏相。丙吉又一代の賢宰相なり。此時代には。黃覇如きの循良の吏も出でたり。漢。唐。宋。明四代の間にて。此時などを盛世となせり。去れども。魏相の言に。當一年の內に。天下中にて子弟殺二父兄一。妻殺レ夫せる者。二百二十二人と云へり。是にて今の世の御政治に遠く及ばざることを知るべし。今の世にて主親を害するもの。間々此れありて。此れは御政治の行き屆かざる處にて。上の御恥辱とは申すべし。けれども。五年に三人。十年に三人の事なり。一年に二百人など云ふことは。褒賞を賜はりたるとも有るまじきことなり。此の一事にても。今の世の御政治の。遠く漢。唐。宋。明にまさることを悟るべし。漢。唐。宋。明四代創業の主。何れも我東照神君の御德には企て及びがたく。四代の政治。又我今日の政事に企て及びがたし。眼を開き史傳を讀みて。是等のことをも悟るべし。されども少しの心得違にて。治平も亂敗に及ぶ者なれば。政治を掌る人は。泰平の功に誇る心あるべからず。周易の危者保二其安一者也。亡者保二其存一者也。治安の時。亂亡を忘るべからざること。聖言の大戒なり

○信長。秀吉は論ずるに足らず。さて勿體なきことなれども。我が東照神君の大德大福。古の聖人にも劣り玉はざれども。御夫人と申せば。淫妬無道の築山殿にて。御嫡子は御生害なり。御晩年上總介忠輝君は。一生配流の身となり給ふ。大罪を犯

なる吉凶禍福の別を生ぜり。中庸の動二於四體一と云へる處にして。左傳。國語の禍福を識せることを。世人の疑を生ずるは。至當の理を知らざる愚昧の至なり。此二條を見ても。古人の言の僞ならざるを悟るべし。さて神君にもせよ。長政にせよ。忠興にもせよ。我殺さん。我滅さんと計る敵に對しても。怒りの發を抑へ。誇る心を抑へ給へること。天錫の德。聖言抑威の字を得給へるなり。難レ有御事なり。此一念天の與する所なり。人の服する所なり。知らずんばあるべからず。服膺せずんばあるべからず

○大津にて。神君の。三成を御覽の時。治部少輔不運なりと仰せらる。三成は此上の御恩には。疾々首を召されよと申したりと承る。信長。秀吉公二君などの企つべき御德量には非るなり

○神君の。黄金百兩を人に賜ひて。其上は包みの奉上の紙を。御近邊の人に。善き紙なり。用に立つべし。仕舞おけと仰せられたると。黑田長政の。御旗本へ白銀二百枚を借したるに。程を歷て。其人の返濟せんとて持參せしを。初め借し申したる時。兼ねて進上すべしと思ひたりとて。受け取らず。さて今朝吉鬣魚を貰ひたり。まゐらすべしとて。料理人を召して。吉鬣魚の身所は鹽にして貯ふべし。中打あらを潮煮にして。客に饗すべしと申されたり。百兩の金二百枚の白銀を以て。人を惠むことを吝惜せずして。一枚の紙。吉鬣魚の身所を無用には費し給はず。國天下を與す人は。天得の性に各別あり。聖人の儉も如レ是なるべし

○吾が知る所の人の云ひし。邊鄙の村里の里長邑正など。各別の才略も無けれども能く治まり。江戸などの大都會は。豪傑の方々治め給へども能く治め。よき人情風俗と云ふは。我邦の漢土にまされることなる可きなり

漢土は大國ゆゑ。大河の魚の大なるに同じく。我邦は小國故。小川の魚の小なるに同くして。漢土は善人も格別に。大善人ある故に。惡人も唐の則天のごとき。無類の大惡人を生ず。我邦には大善人もなき故に。大惡人も生せず。これも治めよき一つなり。さて又海外の孤島にて。

せることもあるにや

○幾度か思ひ定めて替るらん。頼みがたきは心なりけり」。深艸元政上人の歌なり

○天正十年三月。甲州滅亡の時。織田右大臣殿。東照神君と兩大將床机にかゝり給ふ所へ。武田四郎勝頼の驗首を持ち來り。實驗に備へけるとき。右大臣殿は。床机にかゝりながら。眼を怒らし。聲を暴げ。汝の親の信玄が。一生無道を働きし。其業報なりはてを見よとて。あしにて蹴られしと云ふ。神君は敵ながらも大將の首なり。武田は二十四代甲斐の國を領する名家。新羅源氏の嫡流なり。信玄無道なれども。一代の弓矢取なり。夫等のことを心に思召し給ひしにや。床机を降りて敬粛したまひ。さて右府へ仰せられたるは。四郎は若輩者ゆゑ。思慮薄く。無理なる弓矢を取り。かく成り果てたると。不愍の次第なりと。御挨拶有りしとかや。此事を見もし聞きもしたる甲陽の武田の士。德に傾きなびきしとかや。其歳の六月二日。右府は惟任日向守光秀が爲に。本能寺にて生害し給ひ。多年の功業徒にし。此歳天正十年に。駿河は勿論なり。甲信二國。皆御領國とはなりたり。さて慶長五年九月十五日。關ヶ原の逆徒退治の後。石田三成生捕となりて。大津の濱に引きすゑたり。御先陣の福島正則其所へ行かゝり。馬上より高聲に三成を罵りて。いらざる事を仕出だして其樣を見ろやと云へり。三成も汝等を如ㇾ是にせざることは。返す〳〵も遺恨なりと申したり。其次に黒田長政細川忠興行きかゝりけるが。此體を見るより早く。馬よりとび下り。さて〳〵傷ましき御事也。古より名將と稱せられし方々も。如ㇾ是こと少なからず。されば御耻辱には候はず。さぞ寒氣に堪へがたかるべしとて。着たる陣羽織を脱ぎて。三成に打ち着せて通られけりとなり。然るに正則は。關ヶ原の先手の功に誇り。伊奈圖書に腹切らせ。安藝備後二ヶ國を拜領してより。殘暴肆虐にして。台德院殿御代に。二ヶ國御改易。川中島に流罪せられて。一生蟄居の身となれり。長政。忠興は大國を領して。福祿を子孫に綿延す。されば吉凶禍福の來ること。人の各招く所にして。其機甚だ微なり。一念の動く所。此に少の言にて。其善惡の異

配せし時。管内の洗兒を止めたり。是れも善政多き人にて。關東御代官に遷りし時。管内の百姓途中まで出で。駕籠を攀援して進むことを不レ得。此等の事は。歴史の循吏傳に入るとも耻かしからず。されども記載もなき國故。多く世に知る人なし。早川の事は。予が其墓表を撰せし故。詳に知りたり。美作も備中も。學校を建立し。關東へ遷りし後。久喜に學校を建つ。感賞すべき人なり

○有德院殿の享保二年に。豊穰して米價卑く。士農迷惑せりと。昔がたりを聞きたるに。又御當代。寛政。享和にも。多分年々豊穰なりしに。文化元年甲子より。當十年癸酉までは。年々豊登せり。往古より世は饑饉兵亂とて。饑饉は亂亡の先徴なり。然るに。如レ此年々豊登なるは。白河の少將より以來。御政務の正しきことの。天地に感應せるにや。難レ有御事なり。されども人は厭き足ることを知らざるものにて。何か彼此申すものあれども。天意の與する處を見て。人事の善を見るに足れり。然し善は消し易く。惡は長じ易し。其任に當る人は。競々業々戒め愼まずんばあるべからず

○東照神君は。御妾も多けれども。阿茶の局（忠輝卿の母なり）の事。細微の御失德にもやと存ずる計にて。御一生上淫など云ふことはなし。如レ此の御德は。漢祖。唐宗などの企て及ぶ處に非ず。古の聖人を除きて。誰か御德に比並するものあらん

○東照宮御一生の御武功の中には。長湫にて秀吉の先手を打ち破り。池田父子森武藏を打ち取り給ひたること。義戰にて。御武德の第一なり

○室新助が鳩巣小說を讀みたるに。今に至るまで。天下泰平なる事は。祖宗の御德と。伊豆守殿の功によるものなれば。社稷の臣と云ふべき歟とあり。伊豆守とは。吾國の大祖松林院殿（信綱公）の事なり。如レ此良弼賢輔の出づることは。實に神君の御德なり。さて新助が此言。實に知言と云ふべし。大功の餘慶にや。子孫繁衍し給ふこと。世々先職を繼ぎ給ふ人の出づること。由なくして如レ此ならんや。當時肩を比べて。名臣と稱せられたる人も。今は家名存すれども。子孫血脈斷絶せるものあれば。吾國の大祖の功德は。別に天地の神祇に感通

すをも憚からず。親子。兄弟の間も相保つことを得ず。天下の人。大抵虎狼の如し。されども上の綱紀は森然として張り給ふ故。巨寇大賊兵亂の憂なし。然し此まゝならんには。永久の治覺束なし。神祖。德宗御兩代の古に復して。儉樸を以て下を率ゐ。務めて奢侈華麗を嚴禁せられば。人欲の横流少しくは水落ち石出でゝ。天下亦久安長治ならん

○山下廣内は。有德院殿へ上書せしに。當時不諱の朝寛弘の德あらせ給ふ故。爲二御褒美一白銀を頂戴し。諸大名にも一通を寫し置くべしと被レ仰と承る。鄉里にある日。此を讀みて。其說を知れり

○東照宮の承兌長老。崇傳長老。足利の三葉などを御用ひなされたるも。實は儒者の用に召し仕はれたるものなり。後の世の政を爲すものは。此僧に笑はれざる樣に。心得べきことなり

○本朝通鑑にて知りたるや。池田の祖教正と云へるは。實は楠正行の遺腹の子にて。正行打死の後其後室の懷姙せるを。正儀の里へかへせるが。池田へ再嫁して。生みし子なりと云ふ。正成の子孫と云ふものは振はず。唯此傳は繁榮するを見れば。正成。正行の子孫たること必定にや。正成の忠勇剛直。節義正大の氣の子孫なくして可ならんや。子孫榮昌ならずして可ならんや。新太郎少將と云へる大賢人を生せしを見れば。傳はるところの說。其實を得たる必定なるべし

○只今聞けるに。近頃は書畫詩人。世に所謂きほひものに擬して。會集の度に。打合罵詈を平常の事となす。學者此に至る。文運の厄にや

○大賢人九分の地位。惡賢とも云ふべきは。千百載の間。唯。東照神君御一人なり

○竹垣三右衛門と云へる御代官の手代。宇佐美律右衛門語れり。三右衛門の仕法を以て。十年に一萬二千兩を拜借して。其管内の下野常陸の廢田を闢き。又洗兒（コメマビクヿ）の止みしに。千人小兒を養育せり。さて十年過ぎたる故。又十箇年一萬二千兩を拜借せりと云ふ。此等の事は。外御代官にも多くあるべし。如此の御陰德。御仁政多き故。御世繁榮にて久安長治なる事。豈天命の偶然ならんや

○早川八郎左衛門と云へる御代官も。備中美作を支

非ずして。東照宮の神德の廣大よりして。かくもなり行きたるものなり、

武士は。城下にありてだに僻事多きに。土着して在々に是あらば。いかなる事をかなさん。果は兵を起して。打ち給ふ樣のごと。眼前に起るべし。畏るべきことなり

○桃源遺事を讀たるに。西山公の御一生。黄色なる絹の夜著。蒲團。一つのみにて。床の上げ下しも。御自身に被遊たる故に。御近邊に召し仕はるゝ人も。慥には認めざりしとあり。其御勤儉の德。可仰可慕御事なり。近頃。藤田與助の言を聞きしに。頼房の中納言。光國の中納言御二代の火事羽織。今に存在するにうんさいなり。今は水戸の御足輕ならでは。うんさいの火事裝束不レ用と云ふ。治亂の形眼前に現出す。畏るべきことなり

○有德院殿も。紀州に潛藩の御時。日光御社參御供に。上下一統御綿服なりと云ふこと。鳩巣小説に見えたり。大屋遠江守が噺なりとて承り傳へし。大宗御世を嗣がせたまひて。夏などは葛ひらの御袴を召し給へり。先々鳥井丹州の。年久しく衰老まで勤仕せりといふ御褒美に。上より賜はりし御刀は。有德院殿の御指料にて。鐵拵へなりと。其家老の高須源兵衛予に語れり。御儉德の高き難レ有御事なり

○新太郎少將の御行狀を讀みたるに。是にも蚊幬のつり糸には。御一生御自身捻り給へる觀世よりを御用ひなされたるに。御子の代には。眞紅の太綱となれるを御覽ぜられて。夫にて諸勘定の書付讀むに及ばずと被仰たること見えたり。尙書に。于二其子孫不一レ率。皇天降レ災とあり。可レ畏可レ畏。大雅に亡レ念二爾祖一。聿二修其德一。又云。上天載無レ聲無レ臭。儀二刑文王一萬邦作レ孚とは。文王は他に非ず。東照神君と有德院殿の御事なり

○天理は日々に晴くして。人欲横流す。今日人欲の横流は。堯の洪水よりも甚し。其本源を尋ぬれば。承平久しくして。民生愉惰に。奢侈風をなし。競ひて華靡に是走る。是れ故に財乏うして困窮なり。困窮するが故に。利欲熾盛なり。欲盛なるが故に。人を欺き謀りても利を得んことを欲し。人を竊み奪ひても。財を得んことを願ひ。人を害し。人を殺

を宥め。或は賑濟の法を行ひて。困窮を憐み。賢者を進用し。不肖者を退け。良民を賞し。惡民を戒め。此等の條々を行ひて。天意を挽回せば。如何なる厄歳も。其祟あるまじきことなり

○德川家天下をしろしめしたるに。天下久安長治なるに。三箇の大事と云ふことあり。「第一には。諸侯の妻子を人質として。江戸に指し置るゝ故。諸侯も妻子を棄て殺にして。叛逆を企る人はなき情理なり。且つ妻子江戸にある故に。何も參府を喜ばる。故に一不朝二不朝三不朝の患なし。「第二には祿ある人には權なし。權ある人には祿なし。足利時代等三管領と云へる執權の。斯波。細川。畠山皆數ヶ國を領したり。祿厚くして。權重し。故に權を爭ひて相下らず。山名の一族は。十一ヶ國を領せる故。六十六州の十分一なりとて。十分一殿と唱へたり。明德に氏清の叛逆にて。山名の一族。大半は亡びたれど。持豊入道宗全（宮内少輔時熙子。伊豫守時義孫。時氏には曾孫なり）赤松滿祐を誅してより。又其勢強大になり。細川勝元と舅甥の親みにて。權を爭ひて應仁の大亂は起れり。豊臣太閤の時も。五大老と稱して。天下の權を秉り給へるは。江戸内府は關左八州を領し給ふ。加賀大納言は加能越の三州を領し。毛利は中國の七八州を領し。浮田は備作の二州。上杉は會津仙道の諸郡。出羽酒田（二十萬石なり）百五十萬を領す。故に遂には關原爭亂も起れり。御當家天下をしろしめしてよりは。加賀薩摩大祿の諸侯は。天下の政を執らず。權ある人は。三万石にて勤めらるゝ故に祿なし。是を祿ある人權なく。權ある人祿なしと云ふ。内外相制して亂れぬべき覺なし。故に大猷院殿の書に。酒井空印公に。百万石を賜はらんとありければ。左樣にては天下は亂ると被二仰上一と聞き傳ふ。此一つには。世間の妬毒より亂を生ずべきと云ふ理と。二つには。此理を辨へられたるなるべし。「第三には武士の勢を殺ぎて鉢植武士となし給へり。是れは其初は知れざれども。諸國の武士。東鑑に出でたる云々。（此條は詳に漫筆前編に見えたり。故に略す）さて此三ヶ條にて。天下は太平なれども。其實は三ヶ條とも。新に建立まし〳〵しと云ふにも非ず。自然にかくなりしこと。却て天の自然を得て。久安長治なることは。法の然るに

の御血脈と。有德院殿の御血脈のみ御繁昌なり。此にて天道の與する處を悟るべし。老人雜話に。蒲生氏郷が東照神君を玄はしと云ふ言を載せたり。是は太閤の驕奢を見習ひたる故に。誤りて批判するものなり。氏鄕も一代の英雄なれども。書を讀み道を知りたる人に非る故に。眼前の神龍を見て誤れり

○武家の創業の人有德君子と云ふべきは。唯泰時と。東照神君に止まれり

○近く常憲院殿の御時代。上奢侈を好まれ給ひ。下は繁華なれども。大地震。又は富士山燒とて。天地の妖變多し。俊明院殿の御時代も。誰が奢侈を好みしか。世間一統奢侈繁華なりしが。淺間山燒け。大火洪水。大飢饉の變相繼ぎて起れり。是にて陽氣繁華の亂徵を悟るべし。有德院殿と。御當代初は儉素を宗となされたる故。世の中物靜にて。寂寥なる樣なれども。天地の氣和して。五穀年々に豐穰せり。是にて陰氣治興の象を悟るべし

○さて予も丙丁の災厄は。親しく目擊せり。天明五年丙午正月元日日食皆既に。正月廿日より江戶幷近在迄。火災日々にて數十百度に及べり。城中の人荷擔して立つと。柳宗元が云へる勢なり。二月中旬。雨ありて忽に止みたり。（前年十月八日より雨ふらず）六月土用中冷氣挾綿たり。七月中旬大雨連日。關八州大洪水。五稼皆腐れぬ。八月より御病氣にて。九月八日俊明院殿薨御なり。執政田沼主殿頭罪ありて相を免ぜらる。諸州不熟にて。米價騰貴し。丙午冬より。丁未の春夏の交に至りては。三斗五升俵金二百兩。百錢に二合五勺なり。是に於て五月廿一日の夜。飢民蜂起して。米商の家を打ち破る。此を打こはし騷動と云ふ。三都會同日に蜂起す。丙午の春より丁未の秋まで。民心恟々誠に畏るべき勢なり

○丙午丁未の厄歲を知るは。學問の效なれども。夫れを防ぐ術を知らざる時は。學文も又功なしと云ふべし。平常の歲と思ひて。漫然として省せざるときは。災厄免れがたし。されはとて。神社佛閣などに祈禳するのみにては愚なることなり。儉素を宗とし。身行を正し。大仁政を發し。刑罰を省き。稅斂を薄し。或は非常の大赦を行ひて。死罪

○紀州南龍院殿（賴宣卿）の明暦の火災の後。今の麴街五町目の御邸を御造營の時。世人の御賑にとて。土石材木を運ぶ者は。老幼男女の差別なく。一度運べば。一日の賃錢を賜ひ。一日に二度三度運ぶ者には。二度三度賃錢を賜ふ。汗を流して勞する程に。働くに及ばずと命じ給ふ。尤御造營の初より。諸色は商賈の望に任せ。價を賜ひしと云ふ。御造營出來の後。四方二十町餘の町人共。珠數を接み掌を合せて。此御邸を伏し拜むと云ふことを。安藤帶刀の申し上げたる時。看よ。この屋敷は燒失すまじと仰せられたるに。元文の今迄。百有餘年煙かかりたる事もなしと。事跡合考（元文年間の作なり）と云ふ書に記載せり。誠に難有御事なり。先年南龍院殿の御行狀を讀みしに。此事は記載せざる樣に覺えたり。如何なることにて漏らせるにか。仁惠の御德の天地神人に感應せるにや。元文までには非ず。文化十年癸酉の今日迄。祝融回祿の祟を免れ給ふこと。必然の理とは申しながら。又不可思議の御事なり。寛政二年七月麻布の笄橋より出火して。小石川迄延燒せり。麴町は不殘類燒すれども。此御邸には恙なし。（加藤淸正造營せられたるといふ。井伊の口違の邸も此時燒失せり）又其寅年正月麴町五町目の横町より出火して。芝の海邊迄延燒せり。されども此御邸は。風上にて恙なし。文化八年辛未二月。市ヶ谷四ッ谷赤阪一面に祝融の祟をなせども。此の御邸には恙なし。是れは予が眼前に見て知る所なり。仁德天地に感通すること。此御邸より著明なることはなし。予が少かゝりし時。亡友吉田坦藏（漢官學生）江戶侯邸に。此御邸より古きはなし。行きて看るべしと云へるによりて。行きて拜見せしことと有り。其後事跡合考を讀みて。此事を知れる後は。此御邸は。吾儕愚陋のものには明師範なりと思ふ故に。一年に一度は。御門前迄行きて拜し奉るなり

○南龍院殿の御行狀を讀むに。極めて東照神君に似給へり。其御孫は。天下をしろしめして。（有德院殿なり）東照神君の御子孫も。此一脈。最も御繁衍なり。天道の照明なること如レ此

東照神君も。儉素なる御性質にて。有德院殿も。亦御性質儉素也。聿ニ修其德ー儀ニ刑文王ーと云ふは。有德院殿の御事なり。さるが故に。東照宮

梧窓漫筆拾遺

太田錦城著
孫　修文翼武筆錄

○清和天皇の御子孫。三度天下を領し給へり。賴朝。尊氏。東照神君なり。其故知り難し。八幡殿の貞任。宗任。武衡。家衡二度の亂逆を戡定し給ふ。豐功の餘慶にもやと。少かりし時には思ひしが。後。光國卿の大日本史を三過まで讀みし故。其說を得たり。清和天皇は染殿后の御子にて。忠仁公良房の外孫なり。外戚の勢にて。兄の惟喬皇子を踰ゑて踐祚ましませり。後に此事を深く悔い給ひしにや。御一生の行狀。苦行の僧に似たり。天下を有つの身にして。苦行の僧に似給へること。是又制欲克己の大德なり。されど御子孫相續して帝位を踐み給はゞ。夫にて漸々に御福德も薄くべけれども。御子陽成院發狂し給ふ故。昭宣公基經廢レ之。小松院光孝天皇を立て給ひしより。文德。清和の御血脈は斷絕せり。看よ看よ。草木は窮陰冱寒の時。其氣根柢に潜伏して。春夏の華葉を煥發す。清和潜伏の御德。御子孫にて榮發せざること不レ能。故に其積累の陰功。武家の榮華を發せるは。天地自然の理なり。吾此事を常に。兒雄魯輩に告げ語る。近頃。水戶の藤田子定來り問ふに此事を以てす。答ふる處。予が見と毫黍をたがへず。子定且つ言ふ。此御時代より。攝政關白の職起りて。祿去二王室一時は。此亦御子孫の天下を領し給ふべき基本なりと云へり。此亦知言なり。關白は昭宣公に始まれり

○信玄の歌に。「立ちならぶ甲斐こそなけれ櫻花。松に千歲の色はならはで」是天正十年に。甲。信。駿の三ヶ國。松平家の御手に入るべき讖なり。然るに。信玄の口より甲斐なしと云ひ。立ちならぶ松の千歲と祝せり。神妙不可思議の事なり。是武田が。亡國の妖孽にて。德川家には無雙の奇瑞なり

○帝王御相傳の觀音經の二句と。東照神君の薨御まします時。大猷院殿へ天下の治は慈悲なりと被仰たるも。堯舜禹の相傳に。四海困窮せば天祿永終と。是あるも。唯是一同にて仁の事なり

すくえうとよむべし。「くわんさの御殿と書きたるをくわざとよみてはねぬなり。「御の字歌書にむかひておほんとよむ。御とよむはおほかた釋教の所なり。「御前はおまへとよむべし。「ひだりのつかさひだんつかさとよむ流もあり。「をりひつものとあるをおりうづものと訓むべし。この詞共きりつぼのまきにあり。「舍衛國をさゑこくとよむ。「娑婆世界をさばせかい。修行をすぎやう。「珠數をずゞなどゝよむが例なり。「沙羅爲樹をさらゐ樹。「跋提河をばつたか。「三藐三菩提をもはねずに。さみやくさぼたいのほとけたちとよむなり

消閑雜記畢

消閑雜記跋

むかし一時軒のさかんなりしは。今に倍せり。抑此居士。吉備の國より出でゝ。高麗橋邊に卜居し。向榮庵も遠からねば

　いかのぼりかみはあがらせ玉ひけり

とうたへしに

　うめの花とんで奢らぬほこらかな

贈答の風流をかゞやかして。俳蒙求。海士兒洲砂美など。人の心を動しけり。さて此一帖は。其あひだの筆すさびにして。いづれの道にまなび入らむ輩にもあれ。ひとわたりは見るべく。暗に記臆せんには。不巧の費はあるまじとおぼゆる雜記なるをや。木に上せ。公になす。秋玉堂のこゝろざしは。よきゝぬ着たらんにはあらじかし

晋臥鵬敍

よく傳受すべき事なり。無學者のはづる所なり。神書のうちに「彼方屋繁木加本乎焼鎌乃敏鎌於以天とあり。かなのごとくによむべし「吾皇御孫尊乃美頭乃御舍仁。「畔於放地溝乎埋樋於放地　かなのごとくにとなふべし。神書は神書。歌書は歌書。佛書は佛書。いづれもならはで我流によむこと。ゆめ〳〵あるべからず

○すべての歌書。巻頭の歌は。みだりに講ずべからず。萬葉の巻頭二首。古今の巻頭。百人一首の巻頭。詠歌の大概のはじめの歌。皆々その書に至りてのこころえある事なり。講譯のときにも。おほかたはのこしてよまぬがならひなり。志かあれば。いまの代かりそめの物をよむとても。巻頭の一首。巻頭の一句は。よくふかゝるべきみちなり。かならず人によらず。位によらず。男女の差別によらず。一部の巻頭。子細あるべき事なり。「あまの八重雲「丸寐「まぶしさす「古文など濁りてよむべし。「あまがつ尼兒と書くなり。ほうこの事なり。「さくら獵「朝獵「ゆふがり皆濁るべし。「妹許とすむなり。「明がたにくらくなるをわけぐれと濁るなり。「わけやみともいふなり。

一「秋去衣と濁なり。古今の序に。「御國忌とあるをこきと訓むべし。「はつ木にかけほす衣。また木やはつ木のさぎふねなどつなぐくひにとまりたるなり。泊木と書くなり。「はだら雪「はたれ雪「五十鈴川。あまのはしたてはかならずすむなり。「わすからはわかなつまんと志めし野はすみてよむ。志め置きたる野の心なり。「四極山志はつ山ともよむなり。「いほざき「妹がしま「緒たえのはし「有度濱とすむなり。くらふ山と常はすめども。ものにくらぶるやうによみかけし時。くらぶ山と濁るなり。「淺澤小野といふ時にごりて。たゞ淺澤といふ時はすむなり。「雲消の澤とにごるべし。かやうの例をよく辨ふべきなり

○おぼゝしてを何時もおほしてとばかりよむべし。「うへ人などもなどゝあるなどの詞。いつとてもなんどゝはねてよむべし。「五六日をいつかむゆかとよみ。十二日などゝあるは。十まり二日と。あまりの字入れてよむべし。「三位のくらゐとある所を。みつのくらゐとよむなり。「弘徽殿を弘徽殿と引くべからず。「しゆくえう宿曜のかしこきみちのひとゝあるを。

り。「宇治のはしびめ濁るべし。「とこばなれ兩説なり。「かはたれどき曉の事なり。「かは鳥。「れはどか。くもり日。くすりごふじ川。横川はすみて。其ほかみな濁るなり。「朝妻舟（アサツマフネ）あまのたぐなはとは。あまのたぐるなはといふ心なり。「きしづかさ。きしぎはなり。「ゆらく玉の緒。「おほあらきのもり。おあらきの森とよむべし。「わかむらさきのすりころもにごるべからず。「ひたやごもり。「ものこもり。「雨そぼふる。「あさがしは説々あれども。たゞかしはの事なり。「舌とき。「ひこはへ。「せみのもろ聲。「つるのもろこゑすみてよむなり。多くなくことなり。「などてかく何とてかくなり。いせものがたりのうち。「しほしりすみてよむ。「しもつふさの國。「くはこ。「後涼殿（コウロウデン）のはさま。後涼（リヤウ）とよむべからず。色このみ。あだくらべ。かたみにしけるとたの字をおとしてよむべし。「みまそかりて。「いさこの山。いさごの山兩説なり。「わらうだ。「めがれせぬ。「はゝなん青きこけをきざんでとよむべし。きざみてとはよむべからず。「おほみやす所と書きておほみやすん所とよむべし。「女をはまがでさせてを。まかんでとはぬべし。「なにのよきこととおもひてなんのとはぬべし。これらの格式よくよくこゝろにかけて見るべし

○朱雀院亭子（スサクヰンテイジ）院とよむがならひなり。正一位とあるを神社にて。正の字すみてとなへ。人倫の上にて濁るなり。「内親王（ナイシンワウ）をひめみこともよむべし。なにがしの男とあるをむすことよむなり。「女官（クハン）とあるをにようくわんと引くべし。女院とおなじ。「陰陽師と書てをんみやうしとよむなり。「曆の字をりやくととなふるなり。「晴の字。諱の時はれといふべし。はるとよむべからず。「信の字公家にてさねとよみ。武家にてのぶとよむ。歌仙の信明もさねあきらなり。「朝の字も。武家にて朝（トモ）。公家にて朝（アサ）とおほかたとなふるなり。「帥の字なんのそちととなふべし。「別當（ヘツタウ）をべたうとよむ。「文殿（フトン）修理（シユリ）のすけなどゝとなふべし。勘解由小路（コウジ）勸修寺（クハシユジ）などよむなり。仙洞といふ二字に。樣とつけて唱ふる事。あるまじきなり。公家衆の前にても憚なく。仙洞と許いふべきよし。資慶卿は仰せられぬ。「皇太后宮（クハウタイコウグウ）太夫を后宮と引くべからず。「納言の二字ばかりはなふごんととなふべし。これらは職原にての沙汰なり。すべてよみくせ。清濁のならひ。

びめとにごるなり。たかきやまはふもとのちりひおよりなりてを。ちりいちとよむべし。かゝるにいますべらぎのあめのしたといふを。すめらぎのとよむべし。すべらきとよむべからず。「衛府すむ。いせものがたりに衛ふのかみとあるは。ようのかみとよむなり。「むら戸あなたこなたにある戸なり。すみてよむなり。「沖なか川すみてよし。長川といふ心なれども。すみてとなへきたれり。「ゆふくれは雲のはたで。すむべし。「松しまやをしますむべし。松しまにつづけぬをじまはにごるがよし。「もゝしきとすむべし。「くちつきすむがよし。わたつうみわたつみと書くとも。五字によむべし。「病葉夏の季なり。わくらはといひて。罕なる心をいふはすむなり。「千舟百舟いづれもすむなり。「雨げ雨ばり心なけ朝夕の心なり。萬葉には。朝にげとみえたり。相撲の事をことりつかひといふ。つがひと濁るべし。こゝろ端心のはづれなり。御ざうし。公家衆はおほかたすみて用ひさせ給ふ。昌琢は上を濁りてよみ給ふとなり。弓槻が嵩にごるなり。目くはせ目ぐはせともよむ人あり。天磐橡樟舟舟の字濁るべし。ゆふつゞ宵にいづるほし

なり。大白星と書くなり。「ゆふつけ鳥げと濁るべからず。「新しまもりとすむべし。「むかしべと濁るなり。清みてよむ流もあり。「岩かき濁るべからず。「秋の季の色鳥濁るべし。「すゞろのすゝきおなじ。春やきたる野の灰すゝきのよのうちに入るくろきをいふなり。「盈ぐつむ。「すがもの。「すがゞさとよむべし。「みしま菅笠。ありますが笠おなじ。「すゞめいろ時と濁るべし。「いちじるきと是も濁るなり。「こまかへる草春なり。若色の二字をよむなり。連歌にて白髪をしらかみとよむべし。このとなへ梅翁師につたへぬ。「ゆたのたゆたゆするゆふかつら。かつらにゆふ付けたるなり。歌書にむかひよみてとあるは。いつとてもよんでとはねてよむべし。「深草本にてはふかくさとよむべし。「太政大臣とよむべし。「千首の和歌などといふをすみてよむべからず。「續後撰續拾遺などの續の字。何時もしよくと訓むべし。「きのふこそさなへとりしかいつの間に。かもじすみてもちふべし。「としたけてまたこゆべしとおもひきや。命なりけりさやの中山。夜といふ心をうけたる時。さよの中山とよむべし。さならぬうた。いづれもさやの中山な

之發レ情。源氏似三莊子與二天台一書
○百人一首は。百人一首と四字をあらはによむべからず。一の字の人の字の下にふくみてよう聞へぬやうによむが習ひなり。「天智とにごりてよむ。「持統天皇。持統の二字共にすみてよむなり。「山邊とよむべし。「法師多けれ共。喜撰ばかり法師とつめてよむなり。「丸の字いつも麿とよむべし。「陽成院。陽成院とよむ流もあり。「在原氏の時は何時もはらなり。所の名にてはわらなり。「文室すみてよむなり。文字も文屋は俗字なり。「貞信公「壬生忠峯氏の時すみて。名所の時濁るべし。此例通用の事なり。「坂上さかのへとよむ。坂の上とよむべからず。「深養父深やぶとよむべからず。深ようと訓べし。「文室朝康ともやすとはよむべからず。「赤染衛門にごるべし。「權中納言。權中と濁るべし。「行尊とにごるべし。「祐子内親王家紀伊とばかりよむべし。「崇德院しゆと訓むべからず。「あまのかぐ山。「ひとりかもねん。かもと上へつけてよむべし。「つくばね古今の序にてつくはやまとすむべし。「有明の月をまちいでつるかな。まちいづる哉とよむべからず。「月みればちゝにものこそとすむべし。「人にしられてくるよしもがな。濁るべし。「人しれずこそ思ひそめしか。のか文字すむべし。なるほど口のうちかろくよむがならひなり。「ちぎりきなかたみに袖をしぼりつゝとよむなり。「あひみての後の心にくらぶればむかしはものをとあれども。定家卿自筆の小倉色紙には。ものもとあり。しかるべきなり。「あふ事の絶えてしなくのしもじ。上へつけて乙音によむべし。「えやはいふきとよむべし。あきらかに伊吹とよむべからず。「さびしさにやどをたちいでゝながむればいづこもとかくべし。これも定家卿の自筆に。いづことあそばしけるなり。「瀧川とにごるべし

○百首のうち。五ヶの秘歌あり。人丸。喜撰。仲丸。忠岑。定家この五人のうたなり

○古今の序のうちに。先さしよりにいさゝかしるべきは。やまと歌はといふよみやう。やまあと歌はと。すこし引く心もちによむべし。開合はやまをさげて。とを上て。歌とさげてよむ調子のならひなり。たゞしまあと引きてもちひぬ傳もあり。しかるべき説なり。したてる姫はすみて。そとほり姫はそとほり

下の句のてとめもこゝろうべき事なり。してといふ心に通ずるては。何時もとまるなり「鬱の一字もまた。萬葉にいぶせくともよみたれば。鬱しふさがる心もあり。「吾戀矣老矣このらくの詞心なき助辭なり。矣文章の置字なり。「豫あらかしめの心なり。「欲得ねがひの證據なり。得むと欲すの二字にてしるべし。「石尙民副すらはさへの心なり。驚すら民すらの詞を。驚ら民らの心と思ふは誤なり。さへと同じ。今ひとつ物をそへたる心なり。源氏に多し。きりつぼの巻に。「さきの世にも御ちぎりや深かりけん。世になくきよらなるたまのをのこみこさへうまれ給ひぬ」。これ更衣源氏の御なかのいとふかきに。剩をのこみこさへうまれ給ひぬと。物をそへたる心なり。「及相日及戀までにといふ詞は。それまでにとおよぶ心なり。「領知伊勢物語のしるよしゝても。領知のこゝろなり。「戀云てふは。いふとよむなり。いふにてふ二句去にすること連歌の式なり。いつぞや或人の連歌に。「小松をも引きつれしてふ花の春といふ付句を。祖。白老に點取しに。このてふの詞。つゞきいかゞ侍らんと。批判の脇書ありしなり。誠に尤のとなり。いまの俳士など。多くはやすめ字のやうに心うるものあり。誤なり。「將鬩めやの詞。せきとめんとせんやといふ心なり。「將行哉同じてにはなり。「諸所因來これにてみれば。宮古のたつみしかぞすむも。よく應諾してすむ心なり。應諾はよく〳〵合點してうけがふ心なり。「否藻諸藻これもいやといひ。應といふ詞なり。「妃水逝はじめて水のゆく心なり。「東風越路の詞に。東風をあゆの風といふなり。「迅風急にふく風なり。「如是戀かゝるはかくのごとくなり。「家鷄の垂尾乃亂尾しだりをは。みだれたる尾なり。「降乍ふりつゝの心はふりながらの心なり。「眠不寢眠いもねられぬ心なり。「宿妃兼かねてねはじめけんの心なり。「朝魚夕菜朝夕の魚菜なり。「海士乃潜云かつくは海底をくゞりゆくこゝろなり。「汐滿來者潟無かたをなみは。干がたなき心なり。「將依よりなんは。よらむとすの心なり。かゝる文字のあつかひにて。詞の分ち明白なり。よく〳〵心を付けてみるべし。又やがて連俳のたよりになる歌を。萬葉より拔粹して。四巻開板せしめ。世の補ひとすべき心ざしなり

○萬葉集似二古詩一。古今集似二唐詩一。伊勢物語似二變風

宮木善右衛門孝庸といひし武士。因州の牧に仕へ給ふ。若年の時より隨ひて。委曲に傳授して承り終りぬ。かたのごとくの口訣どもあり。ある中に。孝庸。玄旨法印に。世間の便になる書は。なにをか第一と仕るべきと尋ねさせければ。源氏ものがたりと答へ給ひし。また歌學の博覽第一のものはと問給へば。おなじく源氏と答へさせ給ふとぞ。なにもかも。源氏にてすみぬるごとくうけ給はりぬ。源氏を百色つぶさにみたるものは。歌學の成就なりとの給ふよし。孝印はかたらせ給ふ

○源語秘訣といふ一巻に。源氏の大事を十五箇條あらはして傳授することなり。その目錄は。「桐壺源氏の服。あり無の事「ゆふがほ揚名のすけの事。同侍童着二指貫一事「花のえん翁もほと〳〵舞出でぬべきこと「あふひ大將かりの隨身のこと。同ねのこ三つがひとつの事。同さるもじいませ給へのこと「さか木とのゐの袋のこと「あかしまくなぎの事「うす雲わか君のたすき引きゆひ給へること「玉かつら水鳥のくがにまどへること「はつね高巾子のこと「こてふひのよそひのこと「藤のうらばついたちころの月のこと。このうち三箇の大事は「揚名の介「ねのこ三がひとつ「とのゐの袋なり。誠に源氏みざらむ歌よみはむげの事なりと。さすがの歌人もの給ひ置かせ給ふもの。和國にうまれてよまずしてはほいなし

○東鑑を閲するに。建保元年十一月。藤原定家祕本の萬葉集を實朝卿に贈らる。定家卿歌道の門弟三人の上手は。常盤井相國。衣笠内大臣。鎌倉右大臣實朝なり

○萬葉は集の鼻祖。尤しるべきものなり。文字をもつて。てにをはの分ちをこゝろ得ること第一なり。「吾船者枚乃湖爾榜將泊奥部莫避左夜深去來はてんなどの一字。はねははてんとすの心なり。「なゆきそは行くことなかれの心なり。「月疑零疑かもらしの詞。皆うたがひの心なり。「將黄變うつろひぬらんのことばは。黄に變せんとすの心なり。「峯の上「雪者雖零ふるといへどもなり。「令落莫ちらしむることなかれの心なり「垂乳根之母我養蠶乃眉隱馬聲蜂音石花蜘蛛荒蚊異母二不相而いぶせくもあるかの詞。此字にて見ればたへがたく。いやなる心なり。「あはずてといふもあはずしての心なり。この字の心にて。

字形のかはらざるをよしとおもふ。このかはらぬ筆格は。遊雲にあらず。驚龍にあらず。皆死筆なり。尊圓法親王も。文字の體相十八樣あそばしけるとなり。古今の能筆なり。余卅八の年。いまの青蓮院殿にまみえし時。この御沙汰をつゝしみて承りぬ

○王秋江といふ文人。詩に巧み。また筆道によろし。義之が筆を俗なりといへり。余この詩におどろく。文如二王勃一徒輕體。字若二義之一祇俗姿

○赤壁賦に

白露横レ江水光接レ天

と。蘇老泉が書きし露のよこたはるといふ詞。めづらしき作意なり。是をとりて。昌程が發句に

しら露の江によこたはる柳かな

とせられぬ。柳の一字にて。よくよこたはりたる事。東坡もうなづくべし

○唐音をしること。二首のうたにて心得べし

一は五に四は二に通ひ五は三に
二三の時は本坐がへしぞ

一は五といふは。アイウエオ。アンハオン　四は二に通ひは。カキクケコ。ケンハキン　五は三にとは。サシスセソ。ソンハスン　二三の本坐は。タチツテト。チンハチン　ツンハツン

引くははねははぬるはねる入聲の
あしをきりすて三字中略

東引 ツンはねる　珍はねるは チンはねる　格入聲の足 コきる　達同 ト　玉 ギク　三字中略同格

○呉音といふ事。呉音は日本に近き所なる故に。入唐の僧徒。先呉國に入り。其聲をつたへて。經文を呉音によみ來りて。漢音に分つ

○眞言の悉曇は。傳授すべきことなり。余もある智識に懇望して。いさゝかならひぬ。悉曇をならはねば。和語の心にうとし。たとへば歌を何とて歌とはいふぞとおもふに。うとたとのひゞきに。天地萬物のこらずこもる心あり。歌學者しらで叶はぬ事なり。是悉曇にて琢明事なり

○老子は生れながらにして白首なり。玄妙內篇に。李母懷孕八十一載。逍二遙李樹下一。迺割二左腋一不生。生而白首。故謂二之老子一。人皇廿三代淸寧天皇は。雄略の子なり。母は葛城の韓媛といふ。圓大臣が娘なり。この天皇生れながらにして御髮白ければ。白髮の天皇と名付けぬ。和漢の事同じく合せてしりぬ

○源氏は。和國の奇筆なり。細川玄旨法師の扈從に。

葉を煎じてあらへば。速に落つるとなり。時珍曰。梅雨或作ニ黴雨一。芒種後逢レ壬爲ニ入梅一。小暑後逢レ壬爲ニ出梅一。芒種とは五月の節なり。また小暑は。六月の節なり。究竟五月中の雨をつゆと云ふと知るべし

○古文眞寶漁父辭。六韻一叶の事。古來よりの難義にて。人しらず。林道春考へて粗明白なり。清醒纓庚耕淸一韻移醨爲支脂一韻波麻韻衣汶文欣一韻濁足一韻白埃史記屈原傳塵埃之二字作ニ蝹蠖一是にて六韻なり。衣の字青般。所謂一戎衣言ニ一戎レ殷也。見ニ禮記鄭玄注一。五山長老。古文十三卷抄このかた。もろ〳〵の抄頭書あれども。此說をみず。三百年來の一奇事なり。三韻一叶。六韻一叶の置所のたがひ。人皆しりたる事なり。考へてみるべし

○陶淵明が詩。採ニ菊東籬下一。悠然見ニ南山一。この兩句の高遠第一の達摩なりと。葛常が韻語陽秋にみえぬ。世間この二句にのみ高遠あることをればえて。歸去來の賦。一篇にある事をしらず。歸去來の字に。達摩も及ばぬ道德の骨髓あり。このかへんなんいさの味ひをしらば。浮世をわたる事。やすらかなるべし

○劉伯倫が酒德頌の發語。有大人先生の五字。林以正註して假託辭とす。これを劉伯倫が自假りまうけていふとばかり講ず。さにはあらず。心中の大德酒にあらず。粕にあらず。高明の大人先生なり。その大人先生の。起居動靜の樂しみをのべたるなり

○五柳先生傳に。先生不レ知ニ何許人一。亦不レ詳ニ其姓名一。これまた淵明がみづからの事をかくとて。しらずつまびらかにせずと書きし事。かろく見るべからず。かの一心高上の先生なり。この一心高上の先生は。來る所もなく。去る所もなく。たゞ渾々たるものなり。尤姓もなく。名もなき心なり。この地位をのみこまずして。古文を講ずるもの。たゞ文章の糟をくらふ輩なり。よく思ふべし

○蘭亭記。王羲之が筆。一生の出來ものなり。鼠の鬚の筆にて書きし。二十八行三百二十四字あり。れなじ文字は皆別體をかく。中にも之の字多し。二十許ざまぐ〳〵に變じて。其體不同。されば論者稱ニ其筆勢一若ニ遊雲一。矯若ニ驚龍一。この遊雲矯龍の詞。手跡の活法なり。世上筆法を沙汰するに。いくつ書きても。

子の解に。瓦釜無レ聲之物。雷鳴。謂。妖怪而作レ聲如ニ雷鳴ー也などあれば。凶事といふ事も。さも有るべきことなり。今吉備津の宮の釜の動ずること。愚盲の男女ひとへに信ずること。誠に笑ふべき一つなり

○在原業平は。幼少なりし時に。曼陀羅丸と號す。うまれつき天下の美男たりし。空海の弟子。眞雅僧都戀慕して。やまとうたをよみて贈れるとなん

　おもひいづるときはの山のいはつゝじ
　　いはねばこそあれこひしきものを

○人の名に。丸といふ字をつく事。まるは不淨を入るゝ器なり。不淨は鬼魔のたぐひも嫌ふものなり。されば鬼魔の類ちかづかざる心を祝して。名の下につく心なり。古今集の作者に。屎といひ。貫之が幼名をあこくそといふ類おほし。いまも穢多の子にして。その名を穢多とつけ。又いぬと名付くること皆同じ。是玄旨法師の古今にて沙汰し給ふとぞ

○寛平八年九月。二條后（清和の后陽成の母）東光寺の僧善祐と密通のこと顯れ。后は位をすべり。善祐は伊豆國へながさる。后この時五十五歳なり。としといひ。身の分限といひ。あるまじき事なれども。色にふけるものゝ身をあやまつ事。聖人より已下まぬかれず。つつしむべし

○避ニ嫌疑ー詩に

　女子年當ニ省事時ー。莫レ容ニ出レ外去遊嬉ー。僧房佛室尤當レ忌。親戚人家亦不レ宜。」また遠僧道詩に

　僧尼道士到ニ人家ー。女子休レ教ニ出侍ア茶。

いかさま十念をさづけ。决脈をつたふといひて。女子を密房眠藏に引き入るゝ事。はなはだこゝえぬ事なり。僧尼女子のまじはり。つゝしむべきことなり

○念佛に一念多念の二あり。一念義は成覺より起り。多念義は隆寛よりはじまる

○雷霆の理。人おほくうたがふ。余薛瑄の讀書錄のうちをみるに。めづらしき發明あり。小童に栗を燒かしむ。忽に殼破れ。聲はりさく。これ熱氣内にあり。いづることあたはずして。ふるひ起りたるなり。程子はいなびかりをば。陰陽相きしり。雷は陰陽相擊つとのたまふ。是古今の定論なり

○五月の雨をつゆといふこと。本草雨水の下にあり。五月上旬より下旬につらねて尤甚し。この後皆書物畫像等をさらすべし。この雨にかびたる垢は。梅の

誠に膽勇の武士の。かゝる風流のある事。かの魏の曹操が。槊を横たへて詩を賦すに。同日の論ならずや

○人王卅八代齊明女王登極の日。天智天皇爲ニ皇太子ー。此時新羅百濟の取りあひあり。故有りて。齊明。天智。攝州浪花に行幸。爰にて軍事をはかり。戰艦をつくりて浪花を發し。海陸の兵馬あらそひ來り。つひに龍駕を。土佐の國朝倉山に止め。橘廣庭の宮に居給ふ。このたびに。清御原天皇も隨ひ給ふ。これ天武天皇なり。時に朝倉山の木をきり。かりの皇居を作る。皆黒木の丸木を用ふ。故に木ノ丸殿といふ。新に關所をかるかやの地にまうく。關を行くもの。其姓名をとなへざる時は通さず。されば天智天皇の詠み給ふ御製に

朝くらや木の丸殿にわがをれば
名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ

是を和歌の家の談に。木ノ丸殿朝倉はつくしの事なりと。多くは談じ。又百人一首の抄共に書けり。あやまりなるべし。右藤原兼良の説なり。是日本紀。延喜式を證とす。土佐の國を正説とすべし。今考ふるに。土佐の國鵜來巣（ウキス）山は。苅萱（カルカヤ）の關なり。林氏向陽軒春齋鴻儒。是を證として。土佐朝倉宮再興の記にも書たり

○濃州稻葉山は。いまの岐阜なり。また因幡有レ山名ニ因幡山ー。有レ松。この因幡山は。今鳥取より南北にわたる所に。宮山といふ地あり。風景すぐれたる山にして。松もまたふりておかし。宗祇の説なり。余も爰に遊觀せしが。はやむかしになりぬ

○先年行幸のとし。禁裏和歌の御沙汰あり。題は松契ニ遐年ーと四字の題なり。烏丸光廣卿。因州の牧少將殿にかはりてよませ給ふ御歌に。

峯におふる松の千とせをとりそへて
君はちよませ宿のくれ竹

五もじ奇妙なり。たれやらんかたりぬ

○備中吉備津宮に。釜の動ずることあり。巫覡釜の下に火をたき。あらひ米を一つまみ入れ。水をくみこんでたき立つれば。雷の如く動ずるなり。神納受あれば。何時も釜動ずと云ひならはしぬ。されども。常に人家にある釜のうなること。かならず凶事なりとて。忌む事なり。楚辭卜居篇に瓦釜雷鳴。朱

蓮の上にのぼらぬはなし

又了譽上人の詞に。一向愚痴の人。決定往生す。小分智あるもの。往生すべからず。此愚痴の二字。たふとき事なり。この愚痴をしらば。もろ〳〵の智たるべきなり

○三縁山增上寺は。大蓮社西譽聖聰上人の開基なり。了譽上人の弟子なり。淨土經の文に。親緣近緣增上緣といふ事あり。それより名付けたる山號。寺號なり。是によりて思ふに。軒號表德號。古語を思ひてこそ付くべきに。いまの人の軒號。名に相應せず。たしなみて熟字を付くべし

○黑髮山は。下野國二荒山なり。補陀落とす。和訓ふたあら。ふだらく近し。今の日光山なり。釋道勝初めて開基す。新千載集に。公實公の歌

旅人の眞菅の笠やくちぬらん
　　黑かみ山の五月雨の比

黑髮山は備中なり。余は一たび此上にのぼりて遊歩せしが。ちいさきほこらあり。殊勝なり。行家の歌に

色かへぬ黑上山のやまかづら
　　かくてやひさにつかへまつらん

○白河の關は。芦野といふ所と。はたの宿といふ所に。二所あり。これ故。白河二所の關といふなり。能因がよみしは。はたの宿とて。むかしの海道なり。其上に關山とて。高山の九折なる一里ばかりも侍るべし。そこに滿願寺といふ密宗の寺あり。桓武帝の願刹とて。勅筆の額ありといふ。白河關高玉縄下。夢觀集に。薩天錫が作りて。もろこしまで聞えたる名所なり。なにやらんにて見し。さしものうた人。此關を通るとて。たび姿を改め。衣冠正しくかいつくろひて。うや〳〵しくして通り給ふ。いかなる故ぞと尋ねければ。かゝる殊勝の名所を。徒に行かん事。おそろしき事なりとの給ひしとぞ。有り難き志なりけんかし

○將軍家白河をこえ給ふ時。關の明神に奉幣あり。此間に景季をめして。當時初秋なり。能因法師が古風。おもひ出ださるのよし仰せらる。景季馬をひかへて。其儘一首を詠ず

秋風に草木の露をはらはせて
　　君がこゆれば關寺もなし

で。をとこもたらぬむすめの。七月七日の夜よめる

ものいまひせずばかさましたなばたに

我がひとりねの衣なりとも

此歌。所の主聞こしめして。頻にめあはせ給ふとぞ

○菩薩の無生忍を得るものすら。もと見たる人の前にては。神道をもあらはし難しと。なにやらんの書にて見あたりし。實にこゝろざしある人は。見ずしらずの國にて。その業をなすべきとなり。ことに醫術針治の人。その國にて。其まゝ業をなしては。おほくは人信せず。他國に入りて事を行ふべきことなり

○斑西域萬字佛胸前吉祥相也名義集 卍此字も。書滿（まん）の訓あり。七の字なり。延喜の帝を。七の帝と申すなり。七人の賢人を左右にして。政をなさしむる故なり。久しきことをいはんとて。七世といひ。德の數をあげて。七德といふ類なり

この殿はむべもとみけりさき草の

三葉四葉にとのつくりせり

此歌の三葉四葉も七なり。多き心なり

○むさしの國ほりかねの井。余廿二歳のとし。江府に下りて。もの學びせし時。儒學の師檜川氏。半融軒に隨ひて。安座府のほとりを逍歩せしに。おもひ出でゝ。あるものに問ひければ。安座府天德寺の未申のかた。なにがしの名はわすれぬ後園にありとをしへぬ。かたのごとくの名水なり。たちよりて一盃のいさぎよきをおもふ

○忍の岡といふ所は。東叡山寛永寺也。南光坊慈眼大師の開基なり。堯恵法印の紀行に。十二月のするつかた。武藏の忍の岡に優遊せり。そのところの鎭守を。五條の天神となん申し侍ると書きたり。五條の天神とは。少彦名命にて。大巳貴命と心を合せ。醫藥の事をつとめて。世にをしへ給ふ神なり。夫木抄俊成卿のうたに

たがための忍の岡の下わらび

けふりはたてずもえわたるらん

○江戸無量山壽福寺傳通院は。了譽上人の草創にして。順德年中の開基なり。本尊は惠心僧都の作。座像の阿彌陀なり。この了譽上人往生の儀を。蓮花化生の義なりとの給ふ。空也の歌に

一聲もなむあみだ佛をいふ人の

からぬ人の俳諧の詞つゞきに。一句のたよりもなく。むざと何の山。何の雲と結び。あらぬ詞のはやると無心所着の體なり。百韻のうち五句三句はさもあらん。毎句此いき様をこのむと。あるまじき事なり。此ごろの世上の句體を。梅翁もなげき給ひて。發句に

いま筑波かまくら宗鑑いぬ櫻

と記せられぬ。太平記第一に。時政九代の後胤相摸守平の高時入道宗鑑が世に至りて。天地命を改むべき危機。こゝに顯れたりと書きたり。此宗鑑。數千の犬を庭上にはなち。かみ合せし遊興。北條九代滅亡こゝに究まれり。いまの俳風も。江戸。京。大阪面々の流をたて。專に無心所着のみ好むこと。山崎宗鑑より。今此時に當りて。俳諧亂逆の摸樣なり。その故は。京。江戸。大阪の俳士。昨日の作。けふは古しとし。春もてあそぶ風儀。秋はもちひず。去年の格。ことしはかはりぬ。これらを板行して。國國へ下す。遠國波濤のすゑに。やゝ用ひてかくもあらんかと。もとしなれし風格を。五句三句あらため。少しもとづくうちに。また異風の體をとり行ふ故。天下の俳諧。一日も安堵の作意をめぐらさず。かの守武がもてあそびし千句の樂はやゝつき。梅翁の好みし句體のかろさ。やがてやみなん事。こゝろある人眉をひそめ。きく人唇をうごかす。是俳諧に主たるものをたてず。面々の家をたてんとするより。かゝる事になりぬ。俳門に學士なきがいたす所。なげくべし

○むかしの人のおもひ入り淺からぬ事なり。源覺僧正の夢に。素性が入りて。我が第一のうたと申しける歌

手向にはつゞりの袖もきるべきに
もみぢにあける神やかへさむ

此素性法師は。左近將監にして。清和の時の人。かくれなき能書なり。やまと物語に。遍昭がもとへ行きたれば。法師の子は法師こそよけれとて。法師になしたまふよしみえぬ

○歌仙のかきように三樣あり。世尊寺行能の流。尊圓親王の流。德大寺殿家のちうしやう。余つたへて習ふ。人しるべきことなり。やがて梓にちりばめて。世の寶と可爲覺悟なり

○いづこの國の事にてかありけん。三十にあまる[illegible]

へわたし給ふ。昌琢それにてこそよけれとのたまふ
　卯の花のちれどもなかぬほとゝぎす
さすがの昌琢なれば。二の句きかず。うの花のとい
ふ五もじにて。それにてこそとのたまふ。不思議の
ことなり
○梅翁師に。俳諧のさしあひの事とひければ。先生
のたまふは。さし合は連歌にさへ定めがたし。むか
し昌琢の新式。御講釋あそばしけるに。何に何は嫌
なり。他は准レ之とある所にて。爰が大事なり。この
准ずといふ字に。其准じ手の了簡よきとあしき。學
者不學者のかはりわりと仰せられし。まして俳諧の
さしあひ。猶これにてこそとかたられぬ。至極のこ
となり
○八月十五夜の月を賞すること。もろこしにては。
李唐より。專起りたることなり。婁宿に當りて。必。
清明なるべきに。必くもるなり。されば擊壤集に。
邵康節が中秋の吟に
　一年一度中秋夜。十度中秋九度陰。
と作せられぬ。九月十三夜の月。もろこしに沙汰な
し。日本にて。菅道眞
　昔被二榮華簪組縛一。今爲二貶謫草萊囚一。月光似レ鏡無
　レ明レ罪。風氣如レ刀不レ破レ愁。
此詩をつくりて見そめ給ひしより。あまねく常する
事になりぬ。又無題詩集。法性寺關白の詩に
　十三夜影勝二於古一。數百年光不レ若レ今。獨憑二前軒一
　回レ首見。清明此夕價千金。
これらの事を本として。此良夜をもて遊ぶ
○尙書の大傳に。桀自言。吾有二天下一。如二天之有一レ日。
日亡吾亡耳。この意を萬葉十二戀のうたに
　　久堅の天津みそらにてれる日の
　　　うせなん日こそ我戀やまめ
○戀ひしき人をゆめにみんとおもへば。雙陸盤を枕
にして。衣をかへして。夢の妙童菩薩を念ずれば。
必夢にみるとなり。ある歌に
　　いとせめて戀ひしきときはぬば玉の
　　　よるの衣をかへしてぞぬる
○萬葉十六。無心所著の歌とて
　吾妹子之額爾生流雙六乃。事負乃牛之倉之上之
　瘡。
まことに此歌のつゝき分けなき姿なり。此比世間よ

これまた春野のしづかなる體。胡蝶のつばさひらひらとみゆるほか。一點も風なきけしき。誠に奇妙なり

○本歌を翻案したる發句に。西山宗長

　きのふこそ岸にさびしき門のまつ

試筆の詞に。さびしきといふ詞をとり出だされて。しかも心の新しき述作。歳旦には奇妙の句なるべし

○備州の武士熊澤淡庵といふ人の句に

　いざよひは月のかつらの一葉かな

昌程祖白玄祥。いづれも長點に褒美の句なり。心詞たぐひなくこそ。同國盲人玄與といふ連歌師の句に

　小松さへそゞろかにたつ冬野かな

冬野のけしきさび〳〵したる一體。そゞろ寒き感情止みがたき句なり。又余が句に

　とりとめぬ風もみえけり朝ごほり

祖白の長點褒美の句なり。連歌は玄ならひやすく見えて。たちのぼるほど及ばれぬさかひあり。ことしの元日に

　立ちにけり世を思ふゆゑにけさの春

宗因。宗春兩師にうかゞひければ。長點なり。られしさに昌程老につかはしければ。また長點にてありき

○昌琢ある會にて

　おち行くかはのゆくへしられず

水邊三句きて人々あんじわづらひしに。昌琢の前もよかりしが。例のくせにて。よき句とおぼしめす句吟じ給ふには。扇を手のうちに二三度手ならし給ふが。この時も扇をならして執筆にむかひて

　竹の子はもとよりふしの題はれて

とあそばしぬるとぞ。奇妙のとりなしなり

○いつのとしにかありけん。昌程の付句に

　いづくのやまにかくれすむらん

卯の花のさけどもなかぬほとゝぎす

一座あと感じ。既に執筆懷紙にかゝんとせしが。父昌琢まちつと有るべき所なり。あんじて見よとのたまふ。ひと〳〵いかならん事にか。此ごろの秀逸にて候と申されけれども。昌琢かぶりふり給ふまゝ。昌程しばし案じられて。又卯の花のと。五もじ執筆

○いつのとしにかありけん。歌よみて飛鳥井雅章卿のもとにさゝげ。御添削をこひしに。五月雨の題に

ふりそめてながれもあへぬ柚木まで
うみに出でぬる五月雨の比

海に出でぬるといふ言葉を。うみに出でぬらんとあらためて點なり。まことにのびたる詞づかひ。たけたかくこそ。又秋夕の題にて

神代よりのあはれをおもひつゞくるも
物のかずならぬ秋の夕ぐれ

此五もじを四の時のと改めて。御褒美のことばあり。余烏丸資慶卿にまのあたり承りし御詞に。歌に相應といふものあり。たとへばたばこの事に。不二の煙を引きくるやうなるも。尤道理はたちながら。たばこはあまりかろく。不二にあまりおほいなれば。相應しがたし。とりあひのよろしきやうによむべしとの給ひぬること。此秋夕の歌の五もじにて。彌こゝろ得べきことぞとおもひ合せて。有りがたくこそ

○寛文丙午のとし。資慶卿に三十首の詠をさゝげて。御添削をこひしに。本歌のとりやうよろしく。一首の體然るべき趣なりとほめさせられし歌。寒草といふ題にて

露霜にあまりてなどか淺茅生の
小野のしのはらかれのこるらん

また水風晩涼といふ題をくだされて

夕日かげいりにしかたは池水の
みどり涼しき風の色かな

いりにしの詞連歌のやうなり。ゆふ日影かげろふかたはと有るべしとのたまひぬ。詞づかひ雲泥のかはりあり。歳暮に

身ひとつはさもあらばあれたらちねの
老にはつらき年のくれかな

孝心のすがた殊勝の由の給ひて點なり

○寂靜谷にて。閑なる意を心敬僧都

ちる花の音きくほどのみやまかな

言語同斷の句なり。此句を吟ずれば。繁花の地に居ても。さびしきけしき顯はるゝなり。又玄的の付句に

もえて園生のみどりそふいろ
とぶ蝶のつばさばかりに風みえて

神明の舍也。心淸淨にして。神明來格す。此心の外に高天原もなく。誠の外に神もあらず。されば儒門神主をまつるの心を。范氏が詞に。有レ誠則有レ神。無レ誠則無レ神

○歌道の傳來は。紀貫之。基俊。俊成と。古今集の相傳あるなり。二條家は爲世卿より。頓阿がつたへて。經賢。孝尋。堯惠。堯孝。東野州常縁。宗祇。趙遙院實隆。稱名院公條。三光院實澄。細川玄旨法印と傳來して。八條殿。中院殿。烏丸殿など皆玄旨よりつたへ給ふ。宗祇より牡丹花肖柏へつたへられし流を。堺傳受といひ。南都饅頭屋へそれをつたへしを。奈良傳受といふなり

○二條家冷泉家とは。もと定家卿の住所。二條通と冷泉通とへ。うらおもてなる故なり。それをふたつにして。おもての二條の方に。爲家はゐられしより二條家といひ。うらの冷泉のかたに。爲相卿は居られしまゝ。冷泉家といふなり。冷泉家は。上冷泉。下冷泉藤谷殿なり

○眉山早行の詩に。馬上續二殘夢一。不レ知二朝日昇一。又唐王駕句に。馬上續二殘夢一。馬嘶時復驚。上の五字同じ。東坡よだれをねぶる男にあらず。名譽のことなり。歌にも中宮權太夫

よはの海の氷の上の通路は
けさ吹く風に跡たえにけり

上の句相違なきの上。詠ずる意趣またおなじ。六百番歌合の判に。百首のうち。殊に秀逸にあらずば。さりがたく取る事ありとなり。王駕東坡が下の句の善惡いづれならん。このうたの下の句。またいづれかまさらん。連歌の事。前句だにかはれば。同じ一句のえたてを付くること。勿論難ずることなし

○宗祇の句とやらん。名月のくもりたるに

一とせの月をくもらすこよひかな

とせられ。あくるとし。明月のはれきりたるにまた

一とせの月をくもらすこよひかな

詞はおなじけれども。意の用ひやう別のものなり。等類にあらず。また梅翁師のある年のくれに

暮やすしこんな事なら百年も

その一夜あけて元日に

立安しこんな事なら百とせも

と作せられぬ。この氣轉また作なり

ち六年すぎて。しかのごとく符合せると。東鏡にみえたり

○夢は呂東萊が左傳の博議曰。形神接而夢者。世謂二之想一。東萊讀書記曰。一體盈虛消息通二於天地一。應二於物類一。故陰氣壯則夢レ涉二大水一恐懼。陽氣壯則夢レ涉二大火一燔焫。陰陽同壯則夢生殺。甚飽則夢レ施。甚飢則夢レ取。是以二浮虛一爲レ病者夢レ揚。以二沈實一爲レ病者夢レ溺。藉レ帶而寢則夢レ蛇。飛鳥啣レ髮則夢飛。この論。古今の定論なり。又高宗傳說といふ賢人をゆめみ。孔子。周公旦を夢み給ふこと。これまた大體の人信じがたき所なり。されども實理なり。千聖一心はじめより隔なし。心に靈賢をしたふこと。實に徹すれば。古人も自然に夢中に現ず。たとへば萬頃のすめる水に。遠山の影を見るがごとし。遠山不レ來。澄潭不レ去。二のもの覿面にあひあふ。是又うたがはれず

○揚雄曰。人心其神矣。人之有レ夢也。蓋亦誠之形。而心之神也。今夫入二無レ人之室一。而其心惴焉。則或聞二肅々之聲一。見二罔象之形一。何也。心之動也。黃山谷詩に。病人多夢レ醫。囚人多夢レ赦。又大惠語錄曰。聖人無レ夢。この無の一字は。有無の無にあらず。世皆はじめより終り。あしたよりゆふべひるのうち。夜の間なにごとか夢ならぬと。觀念したる上。別に夢といふべき夢なしと。悟りたる所なり。實朝の夢。なにの夢にかしらず。まなぶものしりてんかし

○歌道は神道の根本なれば。神道をしるべきことなり。神道に三部あり。宗源神道は。中臣。卜部。忌部の傳なり。兩部習合の神道は。弘法傳敎等の智識。佛法を以て神道に合し。胎金兩部を陰陽に配し。神佛の本地一體とす。一とせ備州の大守。邪神婬祠のほこらをこぼちて。其跡を田地とし。家とし。名正しからぬ社をひとつによせて。よせ宮と名づく。そのうち彌陀藥師を體としたるもあり。狐狸やうのものを體としたるもあり。延喜式。神名帳にのせたる。來由正しき神社のみあらため。神職を置き。其所をにぎはしめ給ふ。本迹緣起の神道は。某の神某の社。古來よりつたへ來たりし緣記に依りて。祭禮を執り行ふ。これにて三部の神道なり。此外理當心地の神道あり。しる人すくなし

○中臣祓に。高天原仁神留座須とみえぬ。此一語。この祓の至極也。高天原は本心なり。心は混沌の宮。

た俗につたふ。眞濟染殿の后にあひ。そのいろにまどひ。死にて天狗になる。是太郎坊なり

○東鑑に。建治二年比。南都天狗現恠。一夜中於二人家一千餘字書二三字一。未來不盡尤爲二奇怪一

○狐はあやしきけものなり。常に人にばけてたぶらかし。また人の皮肉の内に入りてなやまし。あらぬ妙をなす事多し。抱朴子曰。狐壽八百歲也。三百歲後變化爲二人形一。夜擊レ尾出レ火。戴二髑髏一拜二北斗一。不レ落則變二化人一。これほど修行なり功つみたるものなれども。一旦やき鼠の香ぐはしきを見て。たちまちにわなにかゝり。命をうしなふ。人もまたおなじ。智慮才覺拔群のうまれつきにて。かたのごとくの人も。色にまどひ。利にまどひて。生涯をうしなふ事。狐に同じきものなり。可下以レ人而不上レ如レ狐乎

○百丈野狐の話に。百丈に參する次。一老人有り。大衆に隨ひて法を聞く。衆人退けば。老人も退く。一日不レ退。師問。面前に立つものはたそ。老人曰。某は人にあらず狐なり。過去毘婆尸佛より。第六佛にあたる迦葉佛の時。この山に住す。學人問。大修行底の人。還落二因果一也。無。某答曰。不レ落二因果一。爰に依りて。五百生墮二野狐身一。今和尙下二一轉語一。脫二野狐身一。問。大修行底人。還落二因果一也。無。師曰。不レ昧二因果一。老人於二言下一大悟。某脫二野狐身一。敢告二和尙一。乞亡僧の式に。葬禮をなし下されよ。此後の山にせる狐なりと。師つひに山後岩下に至りて。以レ杖挑二出一死野狐一。乃火葬。この話則の不落因果の答は。大活現前の善知識に。何の因果かあらんと。因果を撥無したるなり。又不昧因果の答は。因に落ちず果におちず。しかも現前の因果了々たる所なり。よく〳〵工夫すべし

○佛祖錄曰。止動止更彌動。この語のこゝろは。心の動ずる事をやめんとす。やめん〳〵とおもふ念。また動ずるとなり。さればこの心を歌にもよめる

　　おもはじとれもふもものを思ふなり
　　　おもはじとだにおもはじや君

この動ずるもの何ならん

○鎌倉右大臣實朝は。宋朝育王山の長老なりしが。此國にうまれて。將軍となり給ふ。是陳和卿が申す所なり。建曆元年六月三日。實朝の夢中に。高僧一人告奉る事。この和卿が申にたがはず。この夢のゝ

頭大甫春といふものあり。顔色常體のごとく。うつくしさ人にこえたり。其たけ一尺二寸。足脛すぐれてほそく。四五歳にこえず。梅花心易を誦す。粗書をよみて義に通ず。またとし十ばかりなるをんなあり。足手わざなへる縄のごとし。足をとりて首にまとひ。手をまはすにいたらざる所なし。また大女房あり。江州のものなり。白髭大明神の變化なりといひつたふ。たけ七尺二寸。足のながさ一尺三寸。手のながさ一尺。全身すぐれて骨たかく。力人にこえて。達者究竟のをのこにもまされり。これらのもの聖なりや。聖ならずや。人一旦の見ものにして。つひに傳へてかたらず

○中納言藤原季仲太宰の帥になりて下向す。此人色あくまでくろきによりて。黒帥と號す。又西塔のむさし坊。色黒し。いかなるうまれ付にや。醫書に。色黒者腎之餘也。精のづよきことかならずと知るべし。また因州鹿野といふ所に。長七尺のをとこあり。崑崙國のものなり。高麗陳の時とらはれて來りし。色油煙のすみのごとし。常に崑崙坊といふ。幼きもの恐れおのゝきし。余が故國にてよくおぼえしなり

○人皇廿四代顯宗天皇の姉飯豊皇女。位につきて政を行ふ。此皇女一たび男にまじはりて。男女の交會既にしれりとて。そののち男に會することなし。飯豊の天皇といへども。在位十月あまりなれば。王代のかずにいらず。西塔のむさし坊辨慶も。ひとたび女と會して。すでに此交會こゝろみぬ。一度千會に同じとて。ふたゝび會合なかりしとぞ。まことに大男のしるし。ものにかまわぬ質なり。おほくの軍出を見るに。辨慶が女色にたはふれしことつひに見えず

○天狗の事。杜子美が天狗賦に。上揚㆓雲旓㆒兮下列猛獸。されども。これは魔道の天狗にてはなきかとぞ思ふ。その故は。此賦の中に。天狗嶙峋兮氣觸㆓神秀。色似㆓狻猊㆒小如㆓猿狖㆒とあり。たゞ畜類のうちにあるべし。史記。天官書の中に。天狗如㆓大奔星㆒。有㆑聲其下止㆑地。類㆑狗所㆑墜及㆓炎火㆒と有り

○愛宕山の太郎坊を。なにものぞとおもふに。洛陽正六位紀朝臣御國が子。高雄の眞濟なり。柿本の僧正と號す。天安の帝不豫の時。眞濟病に侍りて加持す。しるしなくて崩じ給ふより。常の不快あり。ま

詞はいくたびも古人の詞にて。そのうち一字二字の作に寓言あり。詩にも岑參が作に

孤燈然ニ客夢一。寒杵搗ニ郷愁一。

孤燈といふ二字もむかしよりのつゞき字なり。然の一字の作寓言なり。ひとつの燈にむかひ。ほち〳〵とねぶり。たび寐の夢をみたることを。夢をもやすと作りぬ。下句の寒杵も。郷愁も。古き字なり。搗の一字寓言なり。故郷をおもひつゞくる折ふし。きぬたの聲するは。我故郷の思ひをたゝくと作りしなり。これにてよく〳〵詩歌の寓言を知るべし

○人丸に四人あり。布袋に四人あり

唐末僧契。此形裁腲脮蹙頞皤腹常荷ニ布囊一。由レ是號ニ布袋和尙一。宋僧了明形傾肚大。道貌豐碩。世稱ニ布袋一。再來亦有ニ元布袋者一。亦元季棗陽張氏男。容貌異レ常。膨脝擁腫見レ人嬉笑。恰似ニ俗所レ畫布袋一。契此あり。宋の了明あり。元の布袋あり。棗阿張氏あり。いま世に圖するは。いづれの布袋にか。おぼつかなし

○白鹿和尙如何。是布袋師便放ニ下布袋一。又問。如何。是布袋下事。師負之而去。傳燈錄。白鹿和尙布袋の況界を問ふ。布袋そのまゝ袋をなげすつ。又とふ。その布袋下の事をとへば。師そのまゝ負ひてさりしなり。たゞ今日無事底のはたらきなり。すべて人の心はものに着せず。とゞこほりなきやうにもてなすべきことなり。これ無事の上の有事なり。よく工夫すべきことなり

我戀は障子のひつて嶺の松

火打袋に鶯のこゑ

此うたの意は。戀慕の一念あれども。目前の障子の鑁釣とうちみて。やがて嶺の松ときゝ過ぎ。火打袋のこち〳〵をいかにや〳〵とおもふうちに。そのまま鶯のこゑなりけりとうつりし念頭。一點もとゞこほらず。當下一念の今日底なり

○聖人に異相あり。劉子新論云。伏羲日角。黃帝龍顏。顓頊駢骭。堯眉八彩。舜目重瞳。禹耳三漏。湯臂二肘。文王四乳。武王駢齒。孔子返宇。顏回重瞳。皐陽鳥啄。愚思ふに。人は天地の靈。萬物の長なれば。たゞすなほにうつくしきうまれ付なるべきに。かゝる形相のあること。いぶかしき事なり。近比道頓堀に可坊といふをとこあり。かしらするどにとがり。眼まん丸にしてあかく。おとがひ猿に同じ。又

浦の朝霧ぎりに。船をしぞおもふ島がくれ行く「ほの〴〵と島かくれ行く朝霧に。舟をしぞ思ふ明石の浦の「朝ぎりにしまかくれ行くほの〴〵と。明石の浦の舟をしぞおもふ「朝霧にあかしのうらのほの〴〵と。しまかくれ行く舟をしぞおもふ「あさ霧に舟をしぞおもふほの〴〵と。あかしの浦の島かくれ行く「朝ぎりに船をしぞおもふほの〴〵と。しまかくれ行くあかしの浦の「あさ霧にあかしの浦のほの〴〵と。舟をしぞおもふしまかくれ行く。誠に一首のすがた。なびらかなるゆゑ。いかやうによめども。口のうちさはらず。ふしぎの事なり。さればこそ。四條大納言公任卿。此歌を三年までこゝろえず、やう〳〵のちにこゝろえて。九品の上品にこのうたを出だせり

○一首五體のうたは。「月やあらぬはるやむかし」の歌なり。是等の姿を思へば。口にとなへてなだらかならぬは。下品とおもふべし。連歌もたゞやすらかなるを本道とするなり。俳諧とても同じことなれども。世間なにとなく異體をこのみて。肩を襟にし。えりをかたにして。ほそみちのつた山のあし引きなどやうに。句作るを人皆興とす。余もこのましからねども。時につれて。五句のうち二句はつぶやくことなり。この體を未來記に。定家卿のよみ置かせ給ひぬ。達人考ふる所たがはず

打ちいづるなみだの氷ときは山
こゑに色ある黃鳥のたに

雪白し曉かけているそのに
千里の月のほの〴〵の山

おなじ體を。また雨中吟と名付けて

そよくれぬならの木のはに風吹きて
ほし出づる空のむら雲の影

など見えぬ。此風體をさかりによみこのまん時は。歌道こと〴〵く捨つべき世至れりと知るべし。ゆめゆめ好むべからずと。玄旨法印も書き給ひぬ。今の俳諧も同じ。やがて捨たるべきことなり。未來をくりかへし考へ。言語のおよぶ所にあらず。たてになり。横になり。俳諧をあんずるに。一句は寓言を本意とすべし。此比あやの卷とて。梅翁師わが上などを誹謗したる書あり。かつて寓言といふわかちをしらぬかきやうなり。時を待ちて正すべき覺悟なり。

給はりぬ。學窓信仰のため。影鄕ありけるならんと。前序を書きて

　お筆のさきほの〴〵と窓のほたるこい

○古今の序に。春のあした。よしの丶山のさくらは。人丸が心には。雲かとのみなんおぼえける。此歌みえず。ある說に。人丸の家集に。文武天皇よし野に御遊與の御ともにて

　白雲の色の千くさにみえつるは
　　このもかのもの櫻なりけり

此歌を出だす。これもいぶかしきよし。諸人一同說なり。後撰かくし名の歌に

　みよし野のよしの丶山の櫻花
　　しら雲とのみ見えまがひつ丶

是は此序の心をよめるとみえぬ。水無瀨殿にある人丸の贊に。一條禪閤書き給ふ歌に

　ことゝはむよし野の櫻くもとみし
　　やまと言葉はわりやなしやと

是も此歌のなき趣なり

舊記に。堀川院の御時。內裏に歌仙を集めて評論して。古今の序に。よしの丶さくらを人丸が目には雲とみるといふは。いづれの歌をさしていふか。此事いぶかしとて。八代集のおほくの本を集めて見給ふに。此歌みえず。人丸家集にぞ定めてあるらんとて。俊成卿に。彼家の集を御たづね有りければ。俊成もちて參らる。堀川院彼家の集を御覽あるに。おし紙したる歌あり。はなちて御らんぜんとするに。俊成卿はしりよりて。うばひとりてかしこまりぬ。その時に天氣よろしからず。俊成これは家傳の秘歌なり。たとひ首をめされ。頭をおとされぬとも。御師讀にめさずば。輕くさづけ奉らじと申す。みかど重ねて俊成卿をめして。事の子細を聞しめし。げにも家を執することと神妙なりとて。俊成を御師讀にあそばし。この歌を御相傳ありしとぞ。古歌最上の大事なし。

○一首十體の口訣

　ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に
　　しまがくれ行く舟をしぞ思ふ

「ほの〴〵としま隱れ行く朝霧に。あかしのうらの舟をしぞ思ふ「ほの〴〵と舟をしぞおもふ朝霧に。あかしの浦のしまかくれ行く「ほの〴〵とあかしの

とあらば。猶あぢはひをそふべきものならんかし
○古今の序に。人丸は赤人がかみにたゝんことかたく。赤人は人丸がしもにたゝんことかたくなんありけると書きたり。此勝劣は。赤人すこしれとれりと見ゆ。碁にとらば半目ばかりよわかるべしと。飛鳥井の榮雅は御講談あそばしけるとなり。人丸がかみにとかゝず。これにてしるべし。もろこしにもかゝること有り。東坡云。柳子厚詩。在二陶淵明下韋蘇州上。和漢の心似かよひておかし
○人丸の名。古今集にあらはさず。後撰拾遺集に名をあらはす。大切の習ひあることなり。此みちの先師。無上の歌仙なり。柿本人麿。住吉大明神。玉津島明神これを和歌の三神といふなり
○飛鳥井の雅章卿に。人丸の繪の賛遊ばしくださるるやうにとたのみ申し上げしに。御作意の賛は憚あり。ほの／＼との歌あそばしつかはさるべきよし仰ありて。一年あまりとめおかせ。やう／＼してあそばしくだされぬ。故いかんとうかゞひければ。此歌一首あそばすに。別日の御潔齋あれば。いまゝで御延引ありけるとなり。凡人として。みだりに人丸のかしらに贊書くこと。つゝしむべきことなり。天神の贊また同じ。おろそかに思ふべからず
○人丸入唐の事。拾遺集にあり。別の部の巻軸に

あまとぶやかりの使にいつしかも
　ならの都にことつてやらん

○古記に。文武の時。人丸四位に任ず。年十八。聖武の御時從三位。木工頭兼任太夫。神龜年中三月十八日八十八にして薨ず。この時のかたちを小野の春高宣旨を蒙りうつす。人丸の藥束ゑぼしに直衣を差給へり。普通の儀にあらす。故有る事なり。天子の御師德なる故なり。白青の直衣に。藤の丸なり。又おもだかずりともあり。人丸のあづまくだりの時。をばなが里にみとせすみて

みとせ經し尾花が里の人ならば
　おもだかずりをきつゝなれなん

余是にて松門亭のなにがしが。人丸堂に奉納せし發句

もつたいやおもだかずりの夏衣

又余。此比土佐の信實が書きし。人丸の御影を求めて。梅翁師のもとにつかはしければ。それにそへて

翅しをれて子を思ふこゝろ

同じく御病中の歌とて

霜にさくこの一花の梅が香に
たのまれぬ身も春にあひぬる

御辭世の御うた

さめにけり五十の夢にみしやなに
たつたの錦みよしの丶雲

誠に一生五十年を風花雪月になしたるこゝろ。言語のおよぶ所にあらず

○弘長三年十月廿二日。相摸守平時賴法名道崇行年卅七。於二最明寺北亭一卒。御臨終之儀。着二衣袈裟一。上二繩床一。令二座禪行一。業鏡高懸三十七年。一槌打碎大道坦然

○備州東南の山に。無抑和尙といへる道人あり。忘我法數といふものを編集して。世に行はる。その辭世に

傀儡抽牽。六十三年。喝。春風拂レ天。

傀儡とは。韻會に木偶戲とあり。木偶とは。日本の人形なり。是をあやどりて。種々の事をさするなり。人間一生のありさま。五體六根を動かして。うたひつまひつ年月を過し。終にもとの木のきれとなること。誠に出羽が操芝居(アヤツリ)のはてたるなり。第三の句に一喝して。結句に今日の現成をのべたる。色相たれかこれをしらん

○因州鳥取龍峯寺の和尙提宗。黃蘗隱元禪師に謁して。長老と稱せられたる悟道の人なり。その辭世の頌に

如來右脇吉祥。諸祖座脫立亡。元來臭骨董子。臨レ機一二任縱横一。

此結句生死岸頭にのぞんで。大自在底を得る人なり。如來は頭北面西右脇臥にして終り給ふ。諸祖は座してもぬけ。立ちながらむなしきもあり。元來臭れただれたる形なれば。只今日の機にむかひて。たてになりとも横になりとも。そのまゝにすべしとなり

○無レ善無レ惡心之體。有レ善有レ惡意之動。知レ善知レ惡是良知。爲レ善爲レ惡是格物。ある人のうたに

善もいや惡もいや／＼いやもいや
事々物々は氣のまゝにして

此歌。莊子自然の骨體也。余おもふに。氣のまゝにしての七文字をあらためて。事々物々は物々にして

部は引きかつぎてよみけるとや。はれの時はかほをふところにさし入れてよみけり。道綱の母は。くらき所にてよみならはれしにや。燈を背けて。目をとぢて案じけりとなん。

○賀茂の長明が海道の記。是また歌人のかたぎたりおもふは。いぶかしき事なり。夫木抄のうち。不二の白雲の詠かれ是數首。皆深光行が東行の詠とす。後の歌人考へ見るべし

○余廿八のとし。忝も烏丸資慶卿にまみえて。歌道の御もの語承り奉りし事數ヶ條あり

耳底記。重寶なるものなり。光廣卿御若年の時の御聞書。まがひなしとのたまひし

耒後の悦目抄といへるもの。とくとこゝろえぬ書なり。おほかたはよし。三五記といふもの。奥書の樣にはなく。れぼつかなきものなり。擬作なるべしとなり

逍遙院實隆の雪玉集。歌道當流の姿なり。いまの仙洞も。御もてあそび遊ばさるゝのよし。つゝしみて承りぬ

井蛙抄六卷。愚問堅注一卷。いづれも頓阿の作なり。常に見るべし。上々のものなりと

歌數多く覺えたれば。卅一字につらぬる事はなるものなり。一度に二首も。三首もよむなり。それもまたいたづら事なり

○歌の懷紙(クワイシ)に當季(タウキ)の詞をかくべし

春日詠三十首和歌

崇敬して書くほど日を書くなり。名謁も必書くものなり。名のりの下に。上といふ字をかくなり。即興の歌。そのまゝ前書にても。添削をこふくるしからず

一首の懷紙。三行三字なり。二首より七首まで二行七字なり。書きやう色々故實あれども。おほかたの分。たれも用ふる樣なり。一首の懷紙のとき。和歌の二字わきへよせて書く。一行にはしつくりつまりし時の事なり。是一首の懷紙に限るなり。寛文丙午の年八月廿三日。資慶卿口授のことあり。かたく耳にとゞまりぬ

○資慶卿病重くならせ給ひて。日野大納言弘資卿のもとへよみて遣はし給ひける歌

友づるもあはれとやきく和歌の浦に

夏雨の題。孟叔異。剛是道レ晴還未レ信。檐聲和レ月落ニ芭蕉ー。新古今集隆信朝臣

　雲はれてのちもしぐるゝ柴の戸や
　　やま風はらふ松の下かげ

天陰の題。趙仁甫。數日陰晴斷復連。不レ成ニ輕暑ー不レ成レ寒。行家集に

　ふく風もあたゝかならず寒からず
　　かすみくらせる春雨のそら

江霧の題。蕭則陽。無數過船看不レ見。人聲却有ニ櫓聲中ー。金葉集に行家朝臣

　河霧のたちこめつれば高瀨舟
　　わけ行くさをの音のみぞする

この心を里村昌隊の發句に

　舟よべばたゞ川ぎりの答かな

林子中。遶レ郭。芙蕖拍レ岸平。華深蕩レ槳不レ聞レ聲。後京極良經の歌に

　夏ふかき入江のはちす咲きにけり
　　浪にうたひて過ぐる船びと

○舟人の詞に。風のふかむとする時。海のおもて。沖のかた。くわつ〳〵とひかるをほでるといふ。新六帖に衣笠內大臣

　山のはにほでりせぬよはむろの浦に
　　あすはひよりと出づる舟人

余此ほでるといふことをおもふに。白氏文集十七。遊ニ嶺南ー長篇。天黃生ニ颶母ー。雨黑長ニ楓人ー。この註に。颶母如レ虹。欲ニ大風ー即見。これこそたしかなることゝ。はじめてみて。爰にしるす。後人いかゞ思はむ

○人ごとに癖といふものあり。慈鎭和尙の歌に

　人ごとにひとつのくせは有るものを
　　我にはゆるせしきしまの道

是によりておもふに。杜元凱。左傳癖。王武子。馬癖。和嶠。錢癖。王福時。譽レ兒癖。黃魯直。香癖。李涉。竹癖。余おもふに。盲目にすねたる癖あり。名人に異風の癖あり。俳諧師に吟聲の癖あり

○山谷が詩に

　閉レ門覓レ句陳無己。對レ客揮レ毫秦少游。

陳無已は人にあはず。門をとぢて句を案じ。秦少游は人に對して筆をふるふ。詩人の生れ付なり。歌よみも西行は緣行道してうそぶきて歌よみしなり。和泉式

いはれ似かよひたることとなり。後の達人考へおもふべし

○性靈集第一空海の詩に

冢林獨堂草堂曉。三寶之聲聞二一鳥一。一鳥有レ聲人有レ心。性心雲水倶了々。」三寶之聲は佛法僧なり

○此比。余莊子林希逸口義を講ずるうちに

道遙遊篇。何不下樹二之無何有之郷。廣莫之野一。彷徨乎無レ爲二其側一。逍遙乎寢中臥其下上。希逸が註に。造化自然至道之中。自可レ樂地也。萬葉の歌に

心をし無何有（ムカウ）の郷に置きてあらば
藐孤射（ハコヤ）の山もみまくちかけむ

此歌の心。造化自然の無何有の郷にだに置きてたのしまば。かの長壽仙室のはこやの山をば。目前に見るべしとの心なり。郭象註。無何有謂二寬曠無人之處一。不二問何物一。悉皆無レ有。故曰二無何有之郷一。廣莫謂二寂絶無用之理一。藐姑射。身中至靈之山也。仙洞をもよむことなり

又莊子齊物論の中に

因レ是巳巳而不レ知二其然一。謂二之道一。林逸が註。以二下句巳字一。粘二上句巳字一。此是筆端遊戲作文處。いかさまこの字法珍しきものなり。和文のうちにみえず。清少納言が家の集に似かよひたる事を見あたりしなり

忘るなよなよといひにしくれ竹の
ふしを隔つる數にぞありける

○秋風辭。秋風起兮白雲飛。草木黄落鴈南歸。此心を夫木抄に。常磐井相國太政大臣

草も木も色かはり行く秋風に
南にかへるはつかりのこゑ

秋聲賦。但聞二四壁蟲聲唧々一。如レ助二予之歎息一。玉葉集に。西行法師

秋のよをひとりやなきてあかすらん
友なふむしの聲なかりせば

魏武帝短歌行。月明星稀。烏鵲南飛。繞レ樹三匝。無二枝可一レ依。八雲御抄のうちに

月きよみ木ずゑをめぐるかさゝぎの
よるべもしらぬ我身なりけり

陸務觀が詩に。遶レ檐點滴如二琴筑一。支レ枕幽齋聽始奇。風雅集に

燈は雨夜の窓にかすかにて
軒のしづくを枕にぞきく

そのまゝ師の字の下に。達の一字を書きて。そのはねを引き上げて。摩の字のわたまにてんじておかれぬと聞き。かたのごとくのものなり。是活人底の働き言語の及ぶ所にあらず

○菅家の幼き比によませ給ふとて。家の集に

梅の花べにの色にも似たる哉
あこがかほにもつくべかりけり

此詠におもふに。宋武帝女壽陽公主。日臥ニ于含章詹下一。梅花落ニ公主額上一。成ニ五出之花一。拂レ之不レ去。自レ爾後有ニ梅花粧一。又東坡が詩に

慇懃小梅花。彷彿吳姬面

○躬恒が家の集に。しはすのつごもりの夜の鬼を

鬼すらも都のうちとみの笠を
ぬぎてやこよひ人にみゆらん

文選東京賦。卒歲大儺敺ニ除群癘一。此夜豆をうち。鬼は外。福は內とよばゝる事。いまだ所見なし。同東京賦。飛礫雨散。剛癉必斃。又漢舊儀正月十二月。命レ時儺以ニ桃弓葦矢一。且射レ之。赤丸五穀播ニ洒之一。以除ニ疾殃一と見えぬ。この赤丸は。小豆の事なり。もしこれらにもとづけるにや。又周禮に。方相氏黃金四目玄衣朱裳執レ戈。この方相氏。いまのとしをとこのたぐひなり。余さりし年。除夜に

鬼を追ふや綱金時に方相氏

いさゝか句がらのかなひたるにやあらん

○佛法僧といふ鳥。歌にもおほくは見えず

我國のみのりのみちのひろければ
鳥もとなふる佛法僧かな

うきことをきかぬみやまの鳥だにも
なくねはたつな三の御法に

松のをのみねしづかなるあけぼのに
あふぎて聞けば佛法僧なく

下野國二荒山有ニ佛法僧一。藤原の敦光の記にあり山城國宇治醍醐有ニ佛法僧一。此事寺の鐘の銘にあり松の尾によみしこと。さもあらんとおもひ合されね

神社考松尾側有ニ大石一。白髮老人坐ニ其上一。延朗問。何人來レ此。對曰。是松尾明神也。擁ニ護師法一。又聽ニ師誦ニ法華一。故數來。又我奉ニ師給仕者二人一。以レ是爲レ信。言已不レ見。延朗謂レ徒曰。二鳥來馴。子等莫レ怪。果如ニ神言一。其石尙在レ焉。爾來二鳥外。餘羽不レ入レ寺。此鳥かの佛法僧といふ鳥なるべし。法華經を聞きし

壽永三年二月二日

是を弱木の櫻に添へたりといひつたへ。人もさ思ひ。住持もしかなりとす。余がおもふに是櫻のためにあらず。梅のために書きたりとみえぬ。もと南宋陸凱寄二范曄一詩に

折レ梅逢二驛使一。乞二與隴頭人一。江南無レ所レ有。聊贈二一枝春一

此第三の句より。江南所無を梅の一名とす。一枝といへるも。この詩より思ひたる文章なり。またこのはなと書き出だしたるも。梅のひゞきあり。「なにはづにさくやこの花」とよめるも。梅にあらずや。ただ梅の制札を。櫻の名木あれば。取り合せて。須磨寺の什物としたるなるべし

○櫻を賞すること。我朝の事なり。いま連歌に花といふも櫻の事なり。もろこしにては。海棠を稱す

唐揚妃傳。明皇嘗召二太眞妃一。被レ酒新起。帝曰。此乃海棠花睡未レ足也。極めてうつくしき花なればなり。この國にも桐つぼの更衣をなづかしうらうたげなりしを。おぼしいづるに。はな鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなきと。紫式部は書きたり

宋景濂が詩に。賞レ櫻日本盛二於唐一。如レ被二牡丹兼二海棠一。恐是趙昌所レ難レ畫。春風纔起雪吹レ香。もとよりもろこしの詩に見えず。たま〳〵王荊公が詩にみえぬ。それも全芳備祖には。櫻桃の部にあり。其詩は山櫻抱レ石映二松枝一。比二並餘花一。開最遲。さて趙昌難畫といへる事は。清少納言が枕草紙のうち。繪に書きておとるもの。なでしこ。さくらと書きたり。さもあるべき事なり

○紫野一休宗純は。後小松の皇子なり。自稱二酒肆婬坊狂雲子一。又稱二天下老和尙一。應永元年甲戌に生る。文明三年辛丑八十八歲にて寂す。余がすみし備州の老臣土倉氏のもとに。一休の自畫自賛あり。芦花淺水の體なり。詩は忘れぬ。其奥に

天澤七世孫東海純一休書レ之。產二御阿古女郎一。

此おあこは。御中居といふ同じことなり。一休はあこが腹よりうまるといへる事あり。このおあこは。御小松の院の清所をする人なり。清所とは膳部をする所なり

○洛陽のなにがしとやらがもとに。一休の筆あり。初祖達摩大師とかくべきを。初祖摩大師とかゝれ。

消閑雜記

岡西惟中著

○學文にこゝろざしあるものは。詩一絶。歌一首にても。心をとめて記臆すべきことなり。宇治關白賴通公。平等院を建て給ひて。總門のたよりを思ひ煩はれける折ふし。大納言公任參られしに。東は河。西はうしろ。南は山。北よりほかに大門を建つべき所なし。北に。總門ある寺やあると尋ね給ひけるに。さしもの公任も覺悟なかりしにや。江の中納言末弱冠の時。車の後にのりて。同車せられけるに。さやふの寺やあると問ひ給ひければ。匡房卿。我朝には六波羅蜜寺空也上人の寺。漢土にては西明寺圓測國師の寺。天竺にては大那蘭陀寺と申されけるとぞ。誠に廣才記臆の一事なり

○此比は。人の心浮氣になりて。每度の句數をこのみ。沈思の味ひをなめず。殊勝邊の事をおもしろからず。心ある人はおもふべきことなり。抑喜撰が歌。たゞ二首なり。我いほはの外に

　木の間より見ゆるは谷の螢かも
　いざりのふねのおきにゆくかも

此歌續古今集に入るべきよし。撰者いへるを。爲家卿。貫之が筆むなしくなるとつぶやかれ。いれざりしを。爲兼卿玉葉集に入れ給ふとぞ。古人の撰集おぼろげならず。此ごろの俳諧集。ちりあくたのごとし。撰べりやえらまずや。人もしらず。我もしらず

○白河の院。宇治御覽に行幸あり。餘興盡きざるによりて。いま一日御逗留あるべきよしを。京極の大殿奏せられしを。明日還御あらば。花洛北にあたれり。日ふたがりの御憚など。陰陽の頭奏しければ。殿下御遺恨ふかき所に。行家朝臣。宇治は都の南にあらず。喜撰都のたつみとよみたればくるしからじと奏せられしに。其日の還御はのびにけり。時にとりての高名。歌人ならずばかゝる事あらじと。殿下御感あり。人もまた美談とす

○攝州須磨寺の開帳。ことし二月より。四月の中旬に及び。老若男女群をなせり。寺の寶物數々なり。其內辨慶が筆とて制札あり。其文章に

　此花江南所無也。一枝於二折盜之輩一者。任二天永紅葉之例一。伐二一枝一可レ剪二一指一

消閑雜記目錄終

消閑雜記目錄

消閑雜記序

難波江爾。於非當都蘆能。都可微之可奈留。筆乃壽斜比半。見處奈久思婦物可良。安之可爾能。南末利帝久良數。此年頃波。可々累事難良傳波。末疑留々事毛奈計禮盤。人乃思武遠毋。可弊里美須之天。汀乃古都美。加幾安都兇太流耳奈無安理計留。以天也。可々累書天布物波。於能可志々。心乃曳可太有天。歌人者。歌能事遠古知太幾末傳毛能之。儒者波。可羅布美能武都可之起春知遠。我波顏耳論之那登。美都栗廼。中乃保度爾天。是奈無餘幾斗思波留々者稀南兇理。余波。差江奈幾遠古乃者那禮婆。其。中乃保登能與幾程波。玉川爾斜良數太都久理。更爾毋以葉須。可能煩良波之起學飛乃道毛。沖都白浪。志良奴事奈禮盤。見武人乃。耳傾武久敝幾不之波。於婦計南久天。於毛非毛可希左禮東毛。年頃見聞太累事能。可以洲天々。要阿里加多幾事登毋々。南起爾之毛阿羅坐那留遠。俗古登毛天。布都々可爾。書那之多禮盤。以可爾見流兇奈久。可比奈可留良牟。散運登。同之心乃人能爲爾者。是波可理古蘇。不斜波之可良迷登。

秋乃薄能。保古離賀耳於毛婦毛。猶。例乃遠許心南利計理

一時軒惟中識

たはれぐさ跋

芳洲といへるは。對州の文學なるが。此書を著して。家にのこせり。正德信使の時。彼國の正使趙泰億といへる人。留別の詩あり。曰。絕海誰奇士。芳洲獨妙譽。能通諸國語。且誦百家書。落拓寧非數。才華儘有餘。明朝萬里別。回首意如何。芳洲の身。世はゝしるべし。故に錄す

鳩巢老人直淸跋

いかにかと。或みちしれる人にたづねしに。火事あるとき。ちからよわきものゝ。おもきにもつをおひかたげして出づるを見て。そのことわりをしりたまへとありしかば。それはわが身の力にてこそさふらへ。それもつねに過ぐるといふまでにて。かぎりあるべし。いしと。やとは。ほかのものにさふらへば。かたきいしの。やはらかになる。もろきやの。つよくなることわりやあるべき。ふしんにおもひ侍るといひしに。いかにも矢もつよくなり。石もやはらかになり侍るまゝ。よくおもひて見給へとて。そのゝちはいらへもなかりしとぞ

近江のかたゐなかにすめるひとありしに。その名やや世にきこえしまゝ。あるひとたづねゆきけり。むぐらおひたる野邊の。さう〳〵しきゑばのいほ。とぼそなかばひらき。としごろよそぢあまりなるひとの。文ひらきよめるを見て。それぞとおもひ。御名きゝつたへてまゐりたるといへるに。こなたへとて。茶など出だしもてなせるさま。つねならずおぼえ。やゝありて。儒者は世をことゝし。莊老は世をわすれ。釋氏は世をのがれさふらふ。いづれかわがしわざとこゝろえはべらんととひしに。まことにかたきこゝろましまさば。ものごと其ことわりにあたり給ふべし。世の中はいかゞしてをさまり。いかゞしてみだれさふらふかとたづねしに。いつとても上たるひとの御しんしよりおこり侍るなりとこたふ。おもしろくおぼえ。それよりいにしへいまの事など。あさゆふはつかあまりかたりてかへりけるとぞ

此ものがたりは。世のなかのなにとかいへるをはじめとして。あふみのかたゐなかといへるを終とす。第一段は序のごとし。第二段は凡例のごとし

芳洲雨森子しるす

たはれぐさ 終

のみち。何かちがひあらんといへるひとのありしに。さはさる事に侍れど。その善といひ惡といへるにこそ。ちがひあるべけれど。あるみちしれる人いへるとぞ

杭州道林禪師。人目爲鵲巢和尙。白居易問佛法大意。師曰。諸惡莫作。衆善奉行

ものよみする人。やゝもすれば。鬼神の事を。そこそこにれもへるものおほし。これは世の人のほとけにこび。淫祀をたふとぶを見。むせぶによりて食を廢するにや。天子は天地をまつるといへるよりはじめ。經傳にしるせるを見れば。さにあらず

ある人。神は聰明正直にして一なるといふ言葉をあげて。聰明とはいかゞいひたる言葉なるかとたづねしに。一念こゝにおこれば。そのまゝ知り給へばこそと。わが師なりし人こたへられしに。其座に侍りたる人ども。いづれもせなかに水をそゝぎたるやうにおぼえ。感悟したりき。今かきつけて見れば。さまでかはりたる事にもあらねど。まことに會得したる人のいへるは。言詞のほかに人を感ずる事あるにや。頭上三尺の天といへることはたふとしと。わが師はつねにかたりき

此國天主のをしへをいたく禁じ給ふ。とほきおもんはかりなりといふべし。ありがたくおぼゆ。寶永のすゑ。いたりやといへるもの。やくのしまに來り。長崎におくられしを。すでに誅せらるべきにきはまりしに。まづ其やうすを見給ひてこそとて。正德のはじめあづまにめされ。あがりやにおかれける。そのころ。ものしりて智惠ありといへる人。そのくにの事どもくはしくきかむとて。をり〳〵ゆきてあひけるが。其をしへをきくも。釋氏のいへると。物の名ちがひたるまでにて。かはりたる事なければ。とるにもたらずさふらへど。其ひとがらはつねならず覺え。心にわすれがたくおもひ侍るとかたりしまゝ。妖人の人をまどはす事。まことにおそろしき事なりと。ふかくあやぶみしに。それよりみとせあまりすぎて。ひそかにその法を。そばなるものにつたへしといふ事あらはれ。とがにおこなはれき

楚の熊渠が石を臥虎なりとおもひて。やじりをかくせるを。王充が論衡に誠なりといひし。其こゝろ

もあきらかならぬ事多し。そのあきらかならざるよりして。記臆する事もうとく。文かくたすけともなりがたきゆゑ。譯語といふ事こゝろづき。つけたけにれなじからんやとおそれなきにしもあらねど。やぶれはゝきのすてがたく。わかき人にはをしへ侍りき。おぼゆべきふみども。いかほどゝいふかぎりなければ。こと〴〵くかくすべきにはあらねど。まづ其ちかきをとりてさきとせば。益なきにはあるまじ。されどすぐれてかしこき人は。をかしとおもふなるべし

ほとけのをしへに。王法をとけるはまれなりときけり。是は其位にある人にゆづりたるなるべし。さればその位に在りて其道をしらざるは。ほとけのこゝろにもかなふまじ

ある人の佛道をそしるとて。つくれる文を見るに。おほかた僧徒の惡業をのみあばき出だして。ほとけのみちの是非にはおよばず。かくいはゞ儒生のよろしからぬしかた。いかほどもかきあらはし。ひじりのをしへをそしるべし。影を見てかたちをおもひ。ながれをさぐりてみなもとを知るは。まことにさる事なれど。末のつひえある事のみをいひて。其もとのいかゞとしらざるもうるさし

明の陳繼儒が佛氏を天下の大養濟院なりといへるは。季世の特見なるべし。韓退之も其位にゐてその事に任せば。おほかたは三代をもてのりとはせじ

五倫といへるは。天下を擧げていへる言葉なり。君といへば。君の親戚屬し。臣といへば。士大夫の朝にあるもののみにかぎらず。農工商。婢妾奴僕。みなそのうちにこもれり。禰よりかみつかた。孫よりしもつかた。祖といひ。孫といへるは。父子に屬し。再從三從黨をおなじうするは。兄弟に屬す。おつとゝいへば夫の親戚屬し。婦といへば婦の親戚屬す。朋友といへば。われと姓を異にする人。いやしくしては鰥寡孤獨。ほかにしては賓敎雜類。みな〳〵朋友に屬せり。されば天下の人。いづれか我五倫の中ならざる。一視同仁にして。これに處するに義をもてするを。ひじりのみちとはいへるなり

善をすゝめ惡をこらす事。ひじりのをしへ。ほとけ

かける文の言葉つゞきにあらず。此國の聲律にもとれる故。くちのうちこはくしぶりて。おぼえがたく。よみがし。ことのついでも。此國のふみにはちがひ。よみといへるもの。つねのことばならねば。文のこゝろもたやすくはしりがたし。此みつのかたき事あればこそ。われ人の若きよりものまなびして。かしらの霜となるにいたりても。もろこし人はいふにやおよぶべき。から人にもおよばざる。うらめしといふべし

たすけことばといへるは。かなぶみに用ふる。けりこそ。して。などいへるたぐひなり。ことばのついでちがひたる事。記事の文にはとりわけ多し。よみといへるもの。つねの言葉にあらずといへるは。まなびてより〳〵ならふといへるを。はじめ此國つねのことばには。まなぶといふ事を。けいこするなどゝいへど。まなぶとはいはず。ならふといへるは。はじめて人に物ならふ事をいひて。熟するなどいへるこゝろにはあらず。より〳〵といへるも。つねのことばにはちがへり。かくあるゆゑにこそ。わかきれろかなる人に。ものをしへをして見るに。いくへんとなくいひきかせても。くつをへだつるかゆさをまぬかれがたし。から人のその國のことばにて。もろこしぶみをなほせるを見るに。これも其國の聲律にもとりてよみがたけれど。よみはみなつねの言葉なれば。をうなわらべまで。文のこゝろしりやすくおぼえやすし。うらやましといふべし

それがしもろこしからのことばにて。長き事など物語りするを。わきより見たらんは。この國のことばにて。この國の人とものがたりするに。違ひはなからんとおもふなめれど。さにはあらず。そのうちには。いかほどもしらざる事はあれど。あとさきのつゞりわひにて。かゝる事をいへるなりとしりてうけこたへするなり。もろこしの文よむ事もまたしかなり。史記。漢書などいへるもの。朝夕手なれて。その事も大かた知りたる事なれば。これをよむに。なにのつかへもなく。みな〳〵がてんしたるやうにおぼゆれど。これもうへしたのつゞりわひにて。かゝる事なりとはしれど。くはしく見れば。近き言葉とおもふうちに。いかほど

り。正適方といひ。順當可といへるも。またこれにおなじ。かゝるもじくはくしくそのわかちありてこそ。ふるき文をもよみ。またみづから文をもつくるべきなれど。此國にては。とりちがふる事のみおほしといへり

おなじくおろかなりとよめど。戇の字は。ほかの文字に違ひ。戇類ㇾ勇而非ㇾ勇といへるときは。てんぱなるこゝろと見え。戇諫といへるときは。もぎだうなるこゝろと見ゆ。文字事みなしかなれば。此國の人。もろこしの文字しる事。まことにかたしといふべし

此國のまなにてかける文は。文字のくらゐさかさまなることわりといへるは。古學翁のいざなはれしより。人皆こゝろづけり。其外文つくるのりををしへ。譯文などいへる事はじまり。文の道ひらけたるやうにおぼゆ。垂加翁の經學をいざなはれしにならひ。そのいさをしすくなからずといふべし。されば詩經のなんぞ害あらざらんやといへるを。不ニ瑕有ㇾ害とかき。荀子のわれは文王の子たりといへるを。文王之爲ㇾ子とかき。禮記の。山者不使不使渚者といひ。春秋繁露の。不可一日一日不可といへるなど。文字のくらゐ常にちがひたるも多し。其ひとつのみしりてやむべきにしも非ず。かかる類は。もろこしことばよく學びたる人こそ。其訣を知るべきなれ

此國の人。もろこしぶみよむ事は。もとはなはだかたき事なり。其かたきわけをくはしくしりなば。自然と工夫も委くなり。もろこしの文に通ずべきにや。およそ言葉には。常の言葉といふものあり。又文ことばといふものあり。文言葉といへるは。其言葉すなほにして。言葉つゞきやはらぎ。自然のひゞきありて。聲律にかなひ。おぼえやすく。よみやすきを。文言葉とはいふなり。もろこしの文。此國の文。ふみのかたちはちがへど。其ことわりはおなじ。此國の名ある假字文をよみて見るに。言葉つゞき自然のひゞきありて。口のうちやはらかに。こゝろおもしろくおぼゆるは。此國の聲律にかなへばなり。もろこし文に點つけて。此國の文となしてよめるは。字を逐ひて譯し。助語もなく。又こゑにてよむ文字もありて。かなにて

るを。此國の人それをまなび。いつとなく字音かはりて。今はしかといへり。からもろこしにもかゝる事あり。此國のかけすゞりといへるをまなびて。から人は各其素利といひ。此國のつきをといへるをまなびて。もろこし人は讀急。または土器といへり。風氣のちがひ。聲音のおなじからぬゆゑ。かくは變ずるなり。ちか比ある古董客を見しに。むすこべやとて。この國にてもてはやせる。けものゝかはゝ。その國のことばに。うすんこをるべあんといへるを。此國にては。あやまりてむすこべやといへるなりとかたりき。あやまりたるにはあらず。はじめは。うすんこをるへあんといひしかど。いつとなく變じて。むすこべやとなりたるなり。ひとつを擧げて。よろづみなしかなりとしるべし。今人のならひおぼえたる唐音も。とし久しくなりなば。これも出羽の枳殼にて。漢音呉音にも違ひ。もろこしごゑにもあらぬ。また一樣の字音となり。今の漢音呉音の事をいへるごとく。この唐音といへるもの。いかゞしていできたるかとうたがふべし

助語の事たづねし人ありしに。これは此國の人のしりがたき事なり。やまとうたによむ。かな。けり。らむ。などいへるを。いかゞしてもろこし人にしらせ侍らんか。いかほどくはしくいひをしへたりとも。此國のことばしらでは。ふかきこゝろもちわきまへあるまじ。此國の人は。かゝるところは。かゝる助語ありと見おぼえたるばかりにてかけど。そのみちくはしき人のしたゝめたる文を見るに。これはちがひたるにやとおもふことはすくなし。こゝろを用ふる事ふかければ。おのづからかくあるにや。ふしぎなりと思ひ侍るとこたふ。唐話をまなびなば。そのわけあきらかになり侍らんやととひしゆゑ。唐話まなびても。此國の人はしりがたかるべし。柳子厚が杜溫夫にあたへし書を見てしり給へとこたふ

ある人の物語に。おなじく。すなはちとよめど。輙の字は。いつとてもといふこゝろ多し。乃の字は。かくしてこそ。かくありてこそといへるこゝろあるゆゑ。かたき言葉といふなり。悅歡懌喜いづれもよろこぶとよめど。こゝろはすこしづゝちがへ

なるべし。その國の字音にてをしへしを吳音といへるは。から國の人。もろこしといふ事を。今は江南といへど。むかしは吳ともいひたるゆゑ。これはもろこしごゑなりといへる事を。吳音といひたるにや。から國も此國におなじく。よみはその國のことばなれど。こゑはもろこしのこゑをまなびて。出羽の枳殼となりたるなり

聖武帝の御時。吉備公入唐し。其後歸朝ありて。孝謙帝の御時。十三經をさづかり給ひし。これ漢音のはじめなりと。見聞抄に見えたりといへり。されば今の漢音といへるものは。もろこし音の出羽の枳殼となりたるとしるべし。もろこしごゑといへる事を。今は唐音といへど。むかしは漢音といひたるなり

自注。中臣鎌子爲二內大臣一。在二三十七代孝德帝朝一。而吉備歸朝。在二四十六代孝謙帝朝一。案二國史一。十六代應神帝十五年。百濟國王遣二阿直岐一。貢二良馬一。阿直岐能誦二經典一。太子菟道稚郎子。延以爲レ師。阿直岐薦二同國人王仁一。以爲レ勝二於己一。乃遣レ使聘召。越翌年來朝。亦師二事之一。此時阿王二人所レ授者。當二是韓音一。蓋韓音即吳音也。則政事要略所レ云吳音。始二於三十七代孝德帝時一者。似二乎可一レ疑。豈時世悠邈字音訛誤。至レ是釐而正レ之歟

此國の唐音をまなべる人は。うへよりよみくだして。文のながみじかをよくしるゆゑにや。そのことばしりやすく。よみやすく侍る。いづれも唐音をまなび給へど。信使にしたがひきたりし申學士といへるもの。をしへしと唱和集にみえたり

孝謙天皇の十三經をさづかり給ふも。吉備公歸朝の後。もろこしごゑにて。かみよりよみくだす事をまなび給ふなるべし。されど甚かたきことなるゆゑ。其後ついてまなべる人なく。字音も其まことをうしなひたるなるべし

文字といへるもの。もともろこしよりはじまりたれば。よみはからも。此國も。おの〳〵その國のことばにてつくれど。こゑはもろこしをまなぶほかやあるべき。出羽の枳殼になりたりといふにこゝろづきなく。字音も此國にてさだまりたるやうにおぼゆるは。おろかなりといふべし

知客といへる事。もろこしの字音にはつうけといへ

ごとく。また無分別不了簡などいへる。無の字。不の字をさきにいふは。この國のことばにはあらねど。なるゝゆゑにより。思慮にもおよばず耳にも入り。口にもいふ。もろこしごゑまなぶも。亦しかなりとしり給へとこたへき

うへよりよみくだして文義の通ずる事。人々のよくすべきにしもあらねば。通國の法とはなしがたかるべし。うまれつきを見てをしふべきにや。からことばゝ甚やすし。それがしからにゆき。三年ちからをもちひて。おほかたつかへなきほどにまなべり。わが國に同じく反言なるがゆゑなり

此國にて文作るといへる名ある人。經義をときてかける書物を。から人に見せけるに。これを見さふらへば。經義をもさとり。又は文つくる法をもしり。まことにわれ人の及ぶべきにもあらず。たふとき書物なりといひて。あさゆふよろこびてよみけるが。をり／＼いへるは。此所には文字あまり。此所には文字たらずしてよみがたし。これは顚倒して句讀をなせるゆゑなるべし。玉に瑕とやいふべき。をしむべきことなりとかたりき。又正德信使の時。四六の啓札を。から人におくりし人ありしに。此人はいかゞものまなびして。かくまで妙なる文をばかきたるかと。よろこびあへりき。これらは。もろこしごゑまなびたるにはあらねど。その才高く。しかも學いたりて。こと國の人をも感ぜしむるなり

ある人呉音漢音といふ事をたづねしゆゑ。呉音は韓の字音。漢音はもろこしの字音にてさふらふ。されど年をへて。いつとなく。此國のこゑとなりたるなりとこたへき

鎌足の執政たりし時。百濟の尼法明といへるもの對馬にきたり。維摩經ををしへし。これをつしまよみといひて。呉音のはじめなりと。政事要略にしるせりといへり。此國の呉音といへるもの。今のから人の字音に似よりたれば。これも出羽の枳穀にて。はじめ法明がをしへたるは。から國の字音なりしかど。いつとなく今の呉音となれりとしるべし

呉音といへる名は。法明が維摩經ををしへし時。これは呉音なりといひし故に。此國の人はしりたる

などいへる人こそ。はぢがはすくなかるべけれそれがしもろこしことばすこしはまなびたれど。詩作り。文かく事はしらざるゆゑ。それがしのつたなきを見て。もろこしことばすてたまふなど。同志の人には。つねにかたりき

およそあらゆる文字。よみは此國のことばなれど。こゑはもろこしのこゑなり。されどもろこしのこゑに似たるは甚だすくなし。風氣の異なるゆゑにや。たちばなは淮をわたりて。化して枳となるといへるを。ふしぎなりといひしに。此國にても。みつかん。くねんぽなどいへるもの。其樹をうつして出羽に植うればみな枳殼となるといへり。ちかごろある和尚の物語に。さつまよりいづるべにみつかんといふもの。いろもうるはしく。あぢはひもすぐれたれば。そのたねをとりてうゑしに。ほどなくもえいでたれど。みな〳〵袖となれりとかたりき。唐音もひとづたへ。ふたづたへすぎば。いつとなく。此國のこゑとなるべし。唐音唐話をまなぶ人は。いつとてももろこし人にならふ習より外あるまじ。黄檗の課誦はみな〳〵唐音なれど。何事ぞやと。唐僧はうたがへりといへり。これも數世の後には。此國のこゑとなるべし

もろこしごゑにて。上よりよみくだし。文義の通ずるといへること。ふしんなりとおもへる人ありしまゝ。いかにもさおもひ給ふなるべし。されどものごとなるゝにこそさふらへ。それがし十四歳なりし時。もろこし人に下知し給ふ文。あづまよりくだりさふらへど。文字の道ちがへるゆゑにや。もろこし人よみかねさふらひて。譯者どもあつまり。あらためて見せさふらひしと。あきものすとて長崎にかよへる。稻某といへるものの語りしまゝ。げにもとおもひ。二十四歳なりし時より。もろこしごゑをまなべり。はじめは。よその事きけるがごとくおぼえしかど。としのかずはたちあまりかさねて。おほかた此くにのものよみするにちかくなり。まのあたりの事は。もろこし人とものがたりをさへしたり。うまれつき敏く。いとけなき時より學べる人は。それがしがごとくにはあるまじ。世のさかごとゝいへるもの。はじめはいひがたく。きゝがたけれど。のちにはつねとなるが

とにふしぎなりといふべし。おろかなる人は。なにのよりどころもなく。此國にてはじまりたるやうにおぼゆるもかなし。されど此五音相通といへる。あめつちの間。自然の理數よりいでたるものなれば。そのもと。人のこしらへたるにはあらず。西域より起りたりといへる事は。涅槃經の文字品を見てしるべし

此國にかなといふものなくば。ひと〴〵文字をしるべきにといへる人あり。これは。おもはざることばなるべし。もろこしの文字。西域の梵字。から國の諺文。此國のかな。其外。韃靼。紅夷のもじ。みな〳〵その國のことばに應じ。たれはじむともなく。をうなわらべ。下々までこれをもちふ。まことに自然のことわりに出でたり。かなといふものなくばといへるは。其國々のことばなくばといへるにひとしかるべし

此國の詩作り。文かける人。其才學を見れば。もろこしのたれ。それがしなどいへるに。さまでおとらじとおもふ人。いかほどもあれど。言葉のちがへるゆゑにこそ。それのみにてやめ。うらめしといふべし

から人と物語せしついでに。我國は三聲のみなるゆゑ。詩まではつくれど。歌曲はなりがたしとかたりき。韓人はものごと其ことわり明らかなる故。これはなり。これはならぬといへるおぼえあれど。此國の人の。そこ〳〵につくりて。詩なりとおぼゆるはうらめし

もろこしのことばしらずしては。詩作り。文かく事なるまじと。もろこしことばまなべる人は必いへるを。もろこしのことばしりたる人の詩文を見るに。さまでかはりたる事なければと。またある人のいへる。これはみなそのひとかた方のみをしれることばなるべし。詩文の言葉の精華なるものなれば。言葉をしらずして。いかでか精華をもとむべき。此國の言葉しらぬもろこし人歌よむといはゞ。をかしき事とおもふなるべし。されど詩文をよくせぬもろこし人いかほどもあれば。もろこしことばしりたりとて。詩文をよくすべきにもあらず。まことの詩文といへるは。もろこしの言葉しりて。しかも才學すぐれたる。安倍のなにがし。釋空海

や
詩に韻をふみ。平仄をあはするは。いかなるゆゑなりとしれる人。此國にはあるまじ。もろこし人にうたよませたらんに。此國のみぞおひともじにさだまりたる事。いかゞして其わけしり侍らんかと。ある人のいへるを。げにもとおもひ。もろこしことばよくすといへる人にたづねしに。もろこし人のいやしき言葉まで。自然に聲律にかなへるは。その國の風氣にてかくはさふらふ。此國の人の。そのことばまなびたる。それはそれまでのおぼえ。いかでかさふらふべきと語りき

もろこしの字音は。四聲そなはり。唇舌牙齒喉のわかちあざやかなれど。からの字音は。三聲のみありて。上聲去聲わかれず。されど唇舌牙齒喉のわかちはあるなり。此國の字音は。字ごとに平聲のごとくよみて。上聲。去聲もなく。又入聲もなし。ふつくちきのいきたる字は。入聲なりとおぼゆれど。これもくちにてとなふるときは。碎音となり。入聲にはあらず。唇舌牙齒喉。そのわかれなきにしもあらねど。くにのならはし。くちびるがちにものいへるゆゑにや。五音あざやかならず。釋徒の誦經に。いまも四聲わかちてよめるあり。これはもろこしにわたり。そのことばしれる祖師の。此國にも。五音をつたへんと。心をつくしをしへたるなれど。もと此國のなき事なるゆゑ。いまになりては。其のりにあたらざる字音のみ多し。詩は音調をこそおもしとすれ。この國の字音にて。もろこしの詩つくるは。調子にかなはぬ笙ひちりきをもて。樂をかなづるにひとし。此後いくちよへたりとも。もろこし人。これはといへる詩つくる人はありがたかるべし

此國にて。五音相通といへるは。もとから國より對馬にきたり。それよりこの國に行れしゆゑ。むかしはつしまいろはといへり。から國にも。そのもとは西域よりいでたるをまなび。諺文といへるも。梵字にならひてつくれりと。芝峯類説にかきたり。もろこし人の言葉にも。七音の作。西域よりおこり。ながれて諸夏に入るといへり。もろこしより見れば。西域といへるは。はるか西の邊土なるに。かゝることをはじめて。天が下にみたしむる。まこ

もつかた。いやしきもの丶事なり
無官の大夫などいへるは。位階のみありて。なにの職掌もなきゆゑなるべし。これも散官といへるものにて。無官にはあらず。もろこしからの人はうたがふなるべし

もろこしの詩。この國の歌。深奥なる事。かはりはあるまじ。詩はつくりよけれど。うたはよみがたしといへる人あり。是はさることあるべし。歌は此國の言葉なれば。かくよみては歌にはあらぬといふ事。よめるものも。又見るものも。其おぼえあれど。詩はもろこしのことばなれば。そこ〳〵に作りても。大方きこゆるほどなれば。その身もよしとおもひ。見る人も妙なりとほめはやすより。歌はよみがたし。詩はつくりやすしといふなり。もしもろこし人。此國の歌よむ事あらば。歌はよみやすけれど。詩は作りがたしといふべし。詩は作りやすしといへるは。詩をしらぬ人のことば。うたはよみやすしといふは。歌をしらぬ人の言葉なるべし。いづれかたやすき事ならん。文つくる事もまたこれにおなじ

唐詩鼓吹。唐詩選。いづれも唐詩なれど。撰者のこのめるをあつめて。書となせるなれば。唐詩のまつたきにはあらぬを。唐詩鼓吹をまなびて。音調體製。唐詩鼓吹に似よれば。これを唐詩とこゝろえ。唐詩選をまなひて。音調體製。唐詩選に似よれば。またこれを唐詩とこゝろう。さにはあるまじ。詩は唐よりさかんなるはなしといへるは。別に其わけあるにや。歌をよくよむ人はおもひやりて知るべし

詩を作るに。字法句法に。こゝろを用ふるはあれど。律詩を作りて。章法にこゝろを用ひ。古詩長篇を作りて。段落過句にこゝろを用ふるはすくなし。これは詩を作る疏節なれど。まづこれよりこそ入るべけれど。功者の人の語りき

それがし詩を作りて。友なりし人に見せしに。詩の俗語をいむといふ事。人々のしりたる事なれど。俗意をいむといふにこゝろづけるはすくなし。此詩など俗意といふべしとをしへしかば。げにもとおもひけれど。うまれつきのしからしむるはあらたまりがたし。詩に別材ありといふは。此故に

の上章に。聖といふ事をゆるしたまはざるは。非分の套語をいとへるなり。いみじといふべし

すこしきなるを牆といひ。おほいなるを城といふ。もろこしにてしろといへるは。おほいしがきをつきまはし。士大夫はいふにおよばず。工商雑類までそのうちにすましむ。長安城などいへるを見てしるべし。しろさだまりたるのち。たみおほくなれば。しろの外にすむもあれど。城を築く本意は。民ども皆城の内にすまはせ。あだありともそこなはすまじとの事なり。此國は。國の守のすめる所を城といひ。二の丸。三の丸などあれど。士大夫のみにて。工商雑類は皆々いしがきの外にすめば。いくさなどいふ事あらば。焼はらはれて。きずつき。かつゑるもの多かるべし。これはもろこしをまなびたきにや。されどこれもよしあしはあるとぞ

春がすみなどいへるには。靄の字よろし。いつの時よりかあやまりて霞の字を用ふれど。これはほてりする事にて。彩霞。またはにしきのごとしなどいへる。みなくれなゐなる事をいへり。水煙。山煙。煙景。煙柳などいへる。火をたくけぶりにはあらず。かすめる事なり

士といふは奉公人の事なり。子貢。子路のとへるも。いかゞしたるとき奉公人といふべきかといへる事なるべし。もろこしにては。學問する人を奉公人とし。此國にては弓矢とる人を奉公人とす。武をたつとび。文をたつとぶちがひあれど。農工商雑類の籍にあらずして。仕官のしわざするものは。いづれも士なり

此國に。今の役といへる事。からもろこしの言葉には。官といへり。からの人の來れる時。奉公人においては。必ずなにの官なりやとたづねしに。此國の人は朝官のみ官といへるとおぼえて。これは無官なりとこたふるもあり。又は役は官といふべきなるとしれるものもあれど。この國番一通りつとむる奉公人を役人とはいはざるゆゑ。無官なりとこたふるもありき。大官小官の差別はあるべけれど。祿をはみて奉公する人に。官のなきといへる事。ふしんなりといひてうたがへり。それ〲の職掌をあげて。番一通りつとむる人は。直衛官などいふべき事なり。役といへるは。もと士よりし

はあらず。としたけ給ひては。かしこにはよき兒あり。こゝにはたへなる油木梳ありなど丶。あさなゆふな。めしくひ茶のむにも。わすれ給ふまじ。その心のごとく。學問の事を思ひ給はゞ。世に名を得ん人とはなり給ふべし。それにすこしもちがひあらば。われはおろかにてすむならんとなげき給ふべし。これをみづからその心をためずと申し侍るなり。賢を賢として色にかふといへるも。此こゝろにて。をかしき事にはあらずといへり

孔門の高弟。大夫の家につかへざるは。陪臣となる事をきらひたるにはあるまじ。この時。君よわく臣つよく。晉の韓。魏の趙など。齊の田氏に等しく。其國をうばひとり。諸侯となるべききざし。一朝一夕の故にあらず。其いきほひすでにとゞむべからず。魯の三家もそれにかはりたる事なければ。あらかじめこれをさけずんば。其時にのぞみ身をはづかしむるならんと。かねて思ひはかりて。つかへざるなるべし。漢の孔光揚雄など。あながち。小人といへるにはあらねど。機を見る事の明らかならず。寵利わすれざるよりして。莽賊禪代のあひだにあたり。汚辱の名をかうふるにいたれり。されば曾閔のつかへ給はぬ。いとたふとし。この臆説は。圏外謝氏の説ともちがひ。小注の上等の人は。あへてなさずなどいへるには。大にちがへり。もしは一説にもそなふべきか

自注。孔子の公晳哀をほめ給へることばのうちに。天下れこなひなくして。れほくは家臣となるといへる事史記にみえたり。わけあるべしとおもふ

天下を稱して聖主といひ。臣下を稱して賢臣といへるは。上をことぶきするに萬歳といひ。諸侯をことぶきするに千歳といひ。常人をことぶきするに一百二十歳といへるにひとしく。いづれも套語とするべし。康熙帝の事をもろこし人にたづねしに。聖主とこたへしを。さては聖人なるかと。此國の人はおもへり。さにはあらず。羑里操に。天王は聖明なれど。臣がつみ誅にあたれりといへるを見て。聖の字にうたがひをなせる人ありしゆゑ。凱風の母氏は聖善なれど。われに良人なしといへる。聖の字をあげてこたへき。後漢の光武帝

いへるも。目づかひうろつかず。衣紋つきじだらくならぬといふことなるべし。程子を泥塑人のでとしといへる。一團和氣といへるにつき。思ひやりてしるべし

ものよみする人。身のまはりをそこ〳〵にし。かみなどかきみだしたる。容觀玉聲などいへるを見れば。さはすまじき事なり

おもの佩といへるもの。から人のおびたるを見。その聲をきゝて。步趨の節。かくあるべき事なりと。ひじりののりのくはしきわけをはじめてさとりき

むさしのなにがし。經書のうちにて。一字づゝあげ。そのこゝろをいはせ。漢語にてこたふれば。それはまことの會得にあらずといひて。恕の字を。おもひやりとこたへしを。第一とせられしとなん。おもしろきをしへにや

父母につかふるといへるを。父母につかはるゝとよみ。みちを行ふといへるを。みちをゆくとよみたしといへる人あり。おもしろき心にや。よみある文字あり。よみありてたしかならぬ文字あり。德の字。仁の字など。此國のことばになほし。いかゞいへるとき。本義にかなふべきにや

ある人白きを見てしろしとしり。黑きを見てくろしとしるは。明德の發見なりとかたりけるに。善念のおこるをこそとわきよりいへるを。白きをしろしとし。黑きをくろしとするは。善念ならずやとこたへしとぞ

自注。白ㇾ白黑ㇾ黑。是爲二明德一如何。曰。見二父母一以爲二父母一。見二子弟一以爲二子弟一明德也。父母則尊ㇾ之。子弟則護ㇾ之。而見ㇾ馬知二其爲ㇾ馬而羈ㇾ之。見ㇾ牛知二其爲ㇾ牛而鼻ㇾ之。草爲ㇾ草。木爲ㇾ木。鳥自鳥。獸自獸。莫ㇾ不三甄別而順二處之一。孰非二明德之發露者一耶。桀紂之暴。跖僑之盜。方二其靜居而無ㇾ事也。東方發ㇾ白而知二其爲ㇾ旦一。長庚西湮而知二其爲ㇾ夕。明德昭然無二時而休一。然不ㇾ謂二之德一者何耶。失二於大一也。人之提ㇾ椀而挈ㇾ筋。亦無ㇾ非ㇾ力。必也有二孟賁夏育一。而後謂二之力一。提ㇾ椀挈ㇾ筋者不ㇾ與焉何耶。亦失二於大一也

いかゞして學問は成就し侍るべきかととひしに。師なりし人。みなたちにも戀をし給ふやといへるに。その座の人。くつ〳〵とわらひしまゝ。いやさに

年のありがたき事をしるなるべし。世のれろかなる人の。目前の事のみおもひて。長久のおもんはかりなき。みなこれに同じ。かなしといふべし。ふるき人の物語をきくに。九十年まへ。かゝる凶年ありしときゝつたへたりといへり。それがし十二三のときも。凶年ありしかぞ。かくまでにはあらず。國をたもてる人は。つねに米穀をたくはへ。凶荒または變故のそなへとすべき事なるに。さある國は。十にひとつもなければ。民のうゑにおよび。しにはつるを見て。手をつかぬる外はあらじ。民の父母といへる事。ゆめにも思ひよらざるがごとし。いかなるこゝろにか

いつの時にかわりけん。とりわひありしをりふし。ふるき文に。よろしきはかりごともがなと。たづねありしに。あるものよみしたる人。すゝみ出ていへるは。むかし韓信といへるものゝ。その名をのこせる。囊沙といへる事こそ。今に用ふべきなれ。又木をきり。道をふさぐといへる事もさふらへば。山手はかくしてこそといひけるまゝ。さらば其用意せよとありしゆゑ。いかゞいたし侍らんかと。事とる人たづねしに。ふくろは布にても。もめんにてもよろしかるべし。木はいかにもして。人を大勢催し。ふとくおほいなる木をきらせ給へといひしとぞ。文のみよみて。まことのはたらきなければ。その言葉用ふるにたらず。書をもて御するものは。馬の情をつくさず。いにしへをもて。今を制するものは。事の變に達せずといへる言葉あり。ふみよむ人はこゝろあるべきにや

敬の字を。主一無適といひ。齊整嚴肅といひ。常惺々法といひ。畏といふ。いづれもその至極をとける言葉にて。ちかくとりていへば。こゝろさわがしからず。ものごとどく〳〵とするといへるよりほかはなきとぞ。此國の人はもろこしの字義にうときゆゑ。ふかくとりすぎ。かへりて受用のさまたげになる事おほし

てならひするに。半字不成といへるから人の俗語あり。これも敬の工夫なき事をいへるにや

のび〳〵としたるこゝろもなく。其かたち木偶人のごとくなるを敬すとればゆるもあれぞ。さにはあるまじ。瞻視をたふとくし。衣冠をたゞしくすと

またあしといへるもあり。伍子胥がちゝのあだをむくいしは。君臣の大義なるに。これもよしといへるもあり。またあしといへるもあり。赤穂のなにがし。四十八人いひ合せ。其主人のかたきとりたるといへるたよりありしをりふし。おとなゝりし人。學者をあつめ。これはいかゞ御裁許あるべきかととひしに。上座なる學者のいへるは。しうのかたきうちたれば。なにの御かまひもなくすむなるべしといひしに。そのつぎの學者のいへるは。いかさま處置あるべし。そのまゝにてはすむまじといひしに。又そのつぎの學者のいへるは。ほしいまゝに命官をころしたる人なれば。その志は感じ給ふとも。ひとかどの御さばきあるべしといひけるとぞ。其後きくに。むさしの何がし。これも世に名をいへる學者なりし。かの四十八人は。名をこのみて。かゝる事をなしたりと。文つくりてそしれりといへり。つねの人は。何のより所もなく。その身の心に思へるまゝにいへるゆゑ。そのあやまり正しやすきなれど。學者は經傳をひきて論ずるゆゑ。其是非たやすくは。わかれがたし。

漢の宣帝の。俗儒は時宜に達せず。このみていにしへを是として。今を非とし。人をして名實にまよひ。まもる所をしらざらしむるなりといへる。まことに格言なりとおもふ。さればおほくの學者あつまりたりとて。もの事明らかなるといふことわりやあるべき。子游。子夏をしへの法ちがへ給へるを見れば。もしも政をともにし給はゞ。そのおもむきまたちがふべし

みづのえねのとし。あをくちひさきむしの。つねにはともし火のうちにとびいるが。幾萬億ともなく。田畠につきければ。四國九州の苗みなかれうせ。やう〳〵たねをとりとゞむるもあり。またはたねともにうしなへるもあり。米のあたひたつとくなり。うゑ死ぬる人おびたゞし。その波(ナゴリ)。東山。東海。山陽。山陰までにおよび、おほかたはうゑにちかづき。士大夫まで家人みなかゆをすゝりて。としをすごせり。此幾年か豊年のみつゞきて。祿をはめる人は。米のあたひのいやしきをうらみ。あき人はうれものすくなきをうき事に思ひしに。かゝるうとましき時になり。はじめて豊

にまかせて。政をなさしむるこそよけれといふに
はあらず
むかしはかくなりしといへる事に。今におほい大な
るかはりはあるまじとおもふ事多し。莊老の。太
古は上下無爲也といへるうちに。共工氏不周の山
にふれたるとあれば。みな〳〵無爲なるにもあら
ず。唐虞の代は比屋封ずべしといへど。丹朱商均
または四凶あるを見れば。人々賢智なりともいひ
がたし。されど今もゐなか人は。りちぎなる風儀
多く。人のおほせいあつまり。繁昌なるといへる
所は。いつはりがちなるやうにおぼゆ。むかし今
のちがひ。すこしもあらじといへるも。またまど
ひなるべし。むかしはこの所にむらざともなく。
宮寺もなかりしにといへるは。れほくはちかきむ
かしなり。むかしはふねをつなぎしといへど。今
は海遠くなり侍るなどいへるは。いく千世ともし
らぬむかし物語をいひつたへたるなり。ある年よ
りたる人の。ものつよきを見て。むかしの人はき
たひちがひたりといひしに。昔も今におなじ。きた
ひのちがひたるにはあらず。そのうちのつよき物
こそ。今にのこり侍るなりとこたへしとぞ
漢の高祖の。われまさに天下をもて事とす。いまだ儒
人を見るにいとまあらずといへることば。宣帝の
漢家れのづから制度ありといへることば。又は龐
德公の。儒生俗士は時務をしらずといへることば
など。よき言葉とはいひがたし。されどあしき言葉
ともおもふべからず。人情事務をもしらざる人の。
書物のみよみて。これぞとおもへる事には。混沌
氏の九竅をうがてるに似たる事すくなからず。政
に用ひて害を生ずる事多かるべし。今の世の。か
くをさまりて。上下やすくすめるは。いかゞして
かくはなりたるかと。そのもとをかんがへ。むかし
の人のこゝろだて風儀をまなびなば。禍亂災害の
生ずる事はあるまじ
ものゝことわりはしりがたきにしもあらず。まして
あまたの學者をあつめて。議論をさせなば。その
わけいよ〳〵あきらかならんと。人々おもへる事
なれど。さにはあるまじ。綱鑑などいへる書物に。
名儒の議論をあつめたるを見てしるべし。封建は
國ををさむる大事なるに。よしといへるもあり。

もろこしに遠かるべしと。ある人のいへる。ゆゑあること葉としるべし

此國の筆法といへるは。壬辰の亂後。とりことなりて此國にすめるから人のをしへしを。賀茂の甲斐つたへたるなり。されど今から人のものかくを見るに。筆の意はなはだちがへり。から人の筆の意も。もろこしとは同じからず

まつりごとゝいへるも。をしへといへるも。みな善をすゝめ。惡をこらし。人の心を正しくし。風俗をうるはしくする事なれど。精粗のわかれありて。そのしかたちがへり。孀婦は嫁せずといへるをしへはあれど。孀婦は嫁すまじといへるまつりごとなきを見てしるべし。ある國しろしめしたる御人の。いみじき心ありて。道をたふとび給へるが。わたひをふたつにせざれど。市井に下知し給ふ。これはまつりごとをもしり給はず。をしへをもしり給はずといふべし。をしむべきにや。ある民のつかさせし人。たばこなどいへるたぐひのものに。しこみしてうれるを見て。しこみをのけ。それだけわたひをましてうるべし。もしも違背せるものあらば。其沙汰あるべしといひきかせけるとなん、かくありてこそ。まつりごとをもしり。をしへをもしりたる人とはいふべき

いかゞしたるもの。政をばよくすべきかととひしに。行實ありてあはれみふかく。家人みなはゞかりうやまふ人こそ。政はすべき。文學にはよるまじとこたふ

世に名をいへる學者。おほくあつめ。政をなさしめば。國をさまり。民やすからんといひし人ありしに。ある人のいへるは。稷禹皐陶ありても。上に堯舜ましまさずば。唐虞の治はいたしがたかるべし。およそ學者たるもの。私の心あるにはあらねど。おの〳〵その見る所をかたくまもり。しかもその見る所に。深淺强弱のちがひありて一様ならねば。それ〴〵に裁斷し給ふ明君上にましまさずば。議論のみおほくなりてすむなるべし。洛黨蜀黨などいへる。いづれも今の世までも。たふとびおもふ學者なれど。たがひにあらそひいみ。つひにおなじからざるは。自然の理勢なりとしるべし。とはいへど。古いまの事をもしらぬ。庸俗の人

ち。二十三十とかぎりたるにはあらず。四十にして仕へ。五十にして大夫となり。七十にてつかへをかへすなどいへるも。みな其ことわりおなじ。ある人舜水のもとにゆき。ものまなびせしをりふし。内則のことばにしたがひ。にはとりのなく時おきて。父母の安否をとはんとすれば。父母いまだおき給はず。父母おき給ふ時をまちては。内則の言にちがひ侍る。いかゞいたしさふらはんととひしに。この國の儒家といへる人のかける文どもを見て。これほどの書物よみたる人。いかなれば。義理をしる事かくはうときかとうたがひしが。ことばのちがひにて。意味の通ぜざるゆゑなりと。今こそしりたれとて。大にわらはれしとぞ。舜水の通詞せし高雄某といへるもの。かくはかたりき。きりめ正しからざればくらはずといへるに。陸績の母の事をひき給ふを見て。肉はいつとても四角にし。野菜は寸をきはめてきる事なりとおぼえば。書をよむ事のあきらかならぬといふなるべし。されど聖人の大防をやぶりて。心まかせにするといふにはあらず

世にもてはやせるからやうといへるもの。まことのからやうにてさふらふやととひし人ありしに。尊圓親王の手跡などこそ。まことのからやうにてさふらふ。今の人からやうといへるは懐素。又は米芾などの筆の妙ありて。ころびたふれてもその法をうしなひさふらはぬ。變法を學びたるものゆゑ。まことのからやうには遠くさふらふ。むかしより二王の筆を第一とせるは。その法の正しきゆゑにこそさふらへとこたへしとぞ

ある人筆法を論ぜることばに。此國のものかく事。尊圓氏の毒を流せるよりおとろへたりといへり。世の中にはしりてしらずといふ事あり。またしらずしてしりたりといふ事あり。此ことばは知りてしらざる言葉なるべし。筆墨紙。または風聲氣習のちがひにて。尊圓の筆など。からやうとは見えがたければ。しりがたきさもあるべし。されど壺の碑など見れば。むかしは今にちがへり
いかにもして。もろこし人の眞跡をもてまなびなば。からやうとなるべし。名人の筆なりとて。石ずりばかり學びては。かたちは似たりとも。筆の意は

てをもてやき。吐よりはじむ。くはしくおもふに。よのつねにはあらず。とはかみゑみためといへるに。世の人もてはやせる説ども多し。ある人の臆説に。とは水。ほは火。いにしへの言葉しかなり。かみは。東方の震雷。木なり。今もふるき國には。いかづちする事を。をうなわらべの言葉に。かみなり給ふといへり。ゑみは。西方の兌金(ダキン)。兌(ダ)は説(ヨロコブ)なりといふ。よろこぶはゑむなり。つねの言葉に。ゑみをふくむといへるにおなじ。ためは民なり。民は人なり。春鱗。夏羽。秋毛。冬介。おの〳〵屬する所あり。人は中央にくらゐして。六月の土に屬せるゆゑ。土をためといへるなり。龜卜の事。漢の時よりあきらかならざるにや。諸先生のいへるもうたがはしく。今のもろこしにて。龜卜といへるは。其名をかりたるのみにして。まことの法にあらず。此國にては。口授秘傳なりといひて。ふるき事つたはりがたし。をしむべしといふべし。又宋人の燕石に似たる事も多し

私云。依女の依は。えの假名。笑はゑみの假名なり。もしこの吐普加身依女の文字。上代よりかく書き來るならんには。笑の説。穩ならざるに似たり。凡古事記。萬葉集等は勿論。順の和名鈔撰せられし頃までの書を見るに。假名を用ふること甚たゞしくして。みだりに其義を誤ることなし。故に今清書するに。前にはえの假名を用ひ。後には笑の義と誤るを以て。ゑの假名を用ひたり。此書を清書するに。かゝること尙少からず。見る人此のこゝろをえて見給はんことをこそ

内則のことばに。雞はじめてなき。みな手あらひ。口そゝぎなどいへるは。としわかなるものゝ。あさねして髮をもゆはす。いねたるまゝにて。おやしうとめのまへに出づるは。不敬の甚しきなるゆゑ。なるたけはやくおき。身じまひし。おやしうとめのおくるをまちて。安否をとへとはをしへ給へるなり。女は二十にして嫁し。男は三十にしてめとるなどいへるは。愛におぼるゝあまり。その子の縁をいそぎ。親たるみちもしらざるわかき子どもをとりあはせ。家法のそん損ずることいかほどもあるゆゑ。此大防をしめし給ふなり。あなが

がちのよしあし。互にしりたるうちより。それ〴〵のかしらすべきものをえらびて用ふるなれば。もろこしの。科擧にて人をとるには。はるかまさるべし

むかし破古紙といへる藥種をしらずして。ふる反古を用ひたりと。人のわらへる事なるが。水飛のしやうをしらざるくすし。今もまゝあるなり。いつの時にかありけん。龜卜する事をしらず。いきがめをとりてやきけるに。あまりにはひのけがらはしく。いかに儀式なりとも。やめてこそとて。やみけるとなん。もろこしの事をまなぶとて。そのまことをうしなふ事。これにかぎるべからず。あるからやうをたくみにかけるといふ人。筆法のうちに。あぶみをふむがごとしといへるは。いかやうの事なるかとたづねし事ありしに。あぶみのしたさきを。くびす跟にてふむこゝろもちなりと。こたへしとぞ。此國のあぶみをしりて。もろこしのあぶみをしらぬ言葉なり。をかしといふべし

龜を鑽ともいひ。灼ともいひ。契ともいへり。鑽もうがつにして。灼は灼灸の灼に同じく。契は龜をうがつの鑿なり。此國に傳へし卜法を見。又卜の字を象形なりといひ。七十二鑽などいへる言葉を思ひ合するに。此國に傳へし龜卜は。古の遺法ならんと覺ゆ。吐うるはし普うるはし加身ひきのまゝ依身ひきのまゝ多女まつたしといへるは。兆のたゞしきにして。くしみ。つけ。さがり。あがり。りやうした。といへるは。兆の變なり。細にいへば。とゆるひた。とよりめ。とされた。とさく。とそれた。とつひた。としひた。といへるは。吐の變なり。ほさらひた。ほみた。ほされた。ほさく。ほそれた。ほつひた。ほかくめた。といへるは。普の變なり。かみいきしひ。かみをたしひ。かみされた。かみなかたへ。といへるは。加身の變なり。えみいきしひ。えみをたしひ。えみされた。えみなかたへ。といへるは。依身の變なり。ためうちとをれた。ためほかとれた。ためされた。ためぬきとほし。つきため。といへるは。多女の變なり。たほよそ。卜法は兆を見て。よしあしをしるなり。卜の字は。そのかたちにして。たていつゝ。よこみつにうがち。た

ぞならへるにひとしく。いよ／＼まなびて。いよいよたふとけれど。うまれつきいかゞとおもふ人の物しりたるは。たはれたる人。又はさけにゑひたるもの丶。ちからつよくして。しかもやはらとりてなどしりたるにひとし。いよ／＼まなびて。いよ／＼あしく。もろこしの士大夫といへるもの。いづれか科擧よりすゝみ。學問せざるものはある。されど。民をそこなひ。國をあやまりたるなどいひて。今の世までもにくみそしれる人すくなきにあらず。がくもんしりたりとて。必ずよろしかるべしといはんや。莊子の。儒者は詩書をもてつかをあばくといへる。誹謗にはあらじ

自注。此ことばは。不二善學一ものを見て。疑を善く學ぶものにいたすに似たり。其或有ㇾ所ㇾ懲而然歟

大事小事ともに。其國々に相應する事あり。又相應せざる事あり。三代禮をおなじくせずといへども。時により。風俗により。一樣にはなりがたきゆゑなるべし。もろこしごとこのめる人は。此國にも。科擧の法あらばよろしからんといへる人多し。これは思はざるとの甚しきにや。其法いかゞしてたゝんかと。くはしくおもはゞ。甚そのかたきことをしるべし。また世のえきとなるべしやいなやと。ふかくおもはゞ。さまでえきあるまじといふ事をしるべし

自注。此言下以ㇾ文應選本非二斯國人所一ㇾ能。强而爲ㇾ之。亦無ㇾ益二於治一也

もろこしの科擧といへるは。その國のいきほひなれば。やむことをえずかくはすれど。もとくはしき法といふにはあらず。およそ人をとるは。そのこころおこなひをこそ見るべきに。文つくらせて。そのふみのよしあしにより。人がらのたふとき。いやしきをきはめたらんには。ふみはたくみなれど。其身は用ふるにたらざる人。いかほどもあるべし。九品中正などいへるつかさをまうけて。人をえらびし時もあれど。是もその人のよしあしありて。たのみがたければ。その法もほどなくやみぬ。このくには國のさま。周の封建にちかく。國々の士大夫。みな其祿を世々し。いとけなきより。としたくるまで。あさゆふしたしみなれ。人

れどかゝる事は。しばらくさしおき。ひたすら日用の事に心をもちひ給ふべし。しからずば隱れたるをもとむとのあやまりのみおほかるべし。貞享某年流星ありて。あめのひがし南のすみ。ふかき谷のごとく。うちにくぼみたるやうにみえ。丹を流したるがごとく。あかく。すさまじかりき。寶永戊子年には。四國九州の地。白毛を生じ。長きは七八寸なるもありし。享保癸丑年には。畿内の地に。あづきの如く。豆のごとくなるものふりくだり。近江のうちは。四五寸つみたる所もありたるといへり。これみな。まのあたり見たる事なるが。かゝる事いかゞしてそのことわりをきはむべき。これは大變なるゆゑ。きはめがたしといはゞ。手もち。足ゆく事は。甚ちかきことなるが。いかゞしてかくはなるといへる事。そのもとをきはめば。われ人は云ふに及ばず。聖人といへどもしり給ふまじ。そのしるべからざる事は。しるべしとせざるこそ。大知とはいへ。格物といへる事。あしく心得なば。程朱の意にもたがひ。世に處するたすけとはなりがたかるべしと。ある人こたへしとぞ

太刀をよくつかひて。名人といへるひとのうちには。自然と心の體をしれり。また身のもちやうをしれるもあり。柳生の何がし。澤庵和尚の袈裟を屛風にかくるを見て。太刀の法を悟りしといへり。さもあるべし。此ほどある人のはなしに。みやこなる人。棋をよくせしが。其子にはをしへざるゆゑ。其よしをとへるに。それがしは。此棋には。家ををさめさふらへど。とてもそれほどにはなるまじとおもひ。をしへ申さぬとこたへしとなん。少藝小技にても。かゝるふしぎなる事あり。古人の言葉に。天下の理は一なりといへば。ふかく心をもちふるしるしなるべし

棋はおかしきものなれど。國ををさめ。いくさするにたとふべき事多し。ある棋をよくせるといへる人のことばに。棋をよくせんとならば。まづ心の工夫をしたまへといひしとぞ。これはつねの棋うちにはあるまじ

學問するほどよき事はなく。又學問するほどおそろしき事はあらじ。うまれつき正しき人のものまなびしたるは。ちからあるものゝ。やはらとりてな

その理をきはめんとせしといふ事。傳習錄にみえたり。これは格物致知の極功をときて。一草一木の微なるまでといへることばにかゝはり。本注の。物は事のごとしといへるを。くはしく見ざるゆゑにや。先王の大學をまうけて。人ををしへ給ふは。才德の人をえらび出だし。士大夫のくらゐにおき。おほいにしては。朝家の補佐。すこしきにしては。一郡一縣のつかさとして。天下國家の治平をいたしたまはんとの事なるに。第一に心を用ふべき。人倫の事をさしおき。たかんなといへる草木の理をきはめて。日をくらさば。上ののぞみにもそむき。その身のこゝろざしにもたがひ。大學のまうけは。無用の事となるべし。そのうへ王氏のたかんなの理をきはめんとせられしは。いかゞせられたるにか。ふしぎにおもへり。これは定めて。未定の說なるべし。また人のいへるに。忠孝の理をきはむといふは。親に孝行をし。君に忠義をするは。この理あるゆゑなりと。その理をきはむる事をいへりと。此言葉もちかくして遠し。親はわれをうみ給ふ故。孝行をし。君はわれをはごくみ給ふ故。忠をつくすといふ事。なにかはえりがたきことならん。いかほどきはめたりとも。此外はあるまじ。忠孝の理をきはむといふは。おなじくいさむるにも。君はかんばせををかして諫むるはず。親は漸くに諫るはず。君臣はものごと義を主とし。父子は物ごと恩を主とし。君臣の間は。道あはざればさる。父子の間は號泣してしたがふなどいへることをはじめ。凡君父につかふること。千緒萬端みなそれ〴〵のすぢみちをわかちてしることこそ。忠孝の理をきはむとはいへ

格物致知といへること。その說をつまびらかにせざる人は。必とりちがへることあるにや。から人のおぞけばなしに。ある人ゆゑなくして。あかはだかになり。水におぼるゝを見て。何事ぞやととひしに。入水の格物するとこたへしとかたりてわらひき。これも王氏の筍にひとしといふべし

うしほのみちひは。いかなるゆゑなるかととひし人ありしに。氣升り地沈めば。みづあふれて潮となり。氣降り地浮べば。みづしゞまりて汐となると。むかしの人のいひおきし。さもあるべし。さ

とし生けるものゝ。得がたきくらゐにゐ給ふ御身なれば。よろしき御まつりごとありて。その名記錄にもつたはり。千代よろづよの後までも。あがめたふとぶやうにこそありたきに。その御こゝろざしあるはすくなく。むなしくとしつきをおくり給ふぞ。いとをしき

宋儒の學を。明の人は迂腐なりとし。道學の氣。または頭巾の氣などいひて。あざけりたる事多し。堂にのぼれる子路も。夫子のことばをさかれるといへば。その見る所あさきより。をかしとおもへる。さもあるべし。されば明儒のことばを見るに。まことにさはやかにして。熱をとれるものゝ。きよらなる風に手あらふやうなれど。此風たけなば。かたきひいらんと。おそれ思ひ侍る

程朱の學を論ぜる人ありしに。愚誣の失あるを見て。詩書のをしへを廢するにひとしかるべしと。ある道しれる人こたへしとぞ

天下ををさむるもとは。國にあることをしりて。まづその國ををさめ。國ををさむるもとは。家にある事をしりて。まづその家をとゝのへ。家をとゝのふるもとは。身にあることをしりて。まづその身を脩め。身ををさむるもとは。心にある事をしりて。まづそのこゝろをたゞしくし。こゝろをただしくするもとは。こゝろばせをまことにするにあることをしりて。まづそのこゝろばせをまことにし。こゝろばせをまことにするもとは。しる事をいたすにある事をしりて。まづそのしることをいたし。しることをいたすもとは。ことにいたるにある事をしりて。まづことにいたる。しかれば。格物致知。といへるは。天下。國。家。身。心。意。うちにしてはおのれををさめ。ほかにしては。人ををさむる事の上につき。それ〳〵の理をきはめて。わがしる所のあさはかならぬやうにする事をいへり。おほよそ。理といへるは。かくあるはず。かくするはずといふ事ぞかし。たとへば。今のはじめて官府に臨める人。日帳記錄を考へて。故事先例をさとり。功者の人にもたづね。自分にもふかくおもひて。それ〳〵のわけをしり。事をとり行ふを見て。格物致知といふ事をしるべし。しかるに。王氏の說に。其身わかき時。筍を見て。

無二醫藥一而病人寡。都邑有二醫藥一而病人多。非二醫藥之能害一レ人也。酒色之人。而恃二乎醫藥一。所二以致一レ病也。此言也。可下以譬中諸心術不上レ正。而徒誦二詩書一。其得二罪於名敎一也。愈益弘矣。由レ是觀レ之。人之學與レ不レ學且非レ所レ論。唯顧下心術如何與中所二以爲一レ學之方如何上耳

ある人の物語に。いしずゑうるほはゞ雨ふるとゑるべし。うたひもの。らんぶなどはやるところは。武備おろそかなるとゑるべし。酒色を好み。達者なりとおぼゆる人は。わが死するとしるべし。ものごと華麗なりといへるくには。遠からずして衰微すべしとしるべし。身もちみだりなる人。しおきするといはゞ。事ある時はその國先亡ぶとしるべし。口かしきゝてこざかしきもの。もてはやさるといはゞ。其人たゞしからずとしるべし。家に妬婦ありといはゞ。その夫ふらちなりとしるべし

をしむべしとおもふ事。いかほどもあるなかに。脾胃つよく。骨節たしかにうまれつきたる人。よくやしなひなば。もゝとせも、かたきにはあるまじきに。酒色をほしいまゝにして。わか死するぞをしき。うまれつきおろかなれば。われ人のごとく。かしらの雪のきはむをかぎり。やすき心なく。晷ををしみても。なにのなす事もなく。その名ひとさとをも出でがたし。世のかしこき人は。ものごとはかゆき。かけ馬にむちうつやうなるに。いたづらごとにのみ心をはせ。つひには。くさ木と共に。同じく朽ちゆくぞをしき。世の中にいたましく。かなしとおもふ事。まづしといふよりはかやあるべき。ちからなきものは。いかほど思ひても。心にまかせがたし。てまへよろしき人は。いくへにもこれをめぐみ。人のためにのみおもひ。つとめて仁慈をおこなひなば。その風儀。子うまごまでもつたはり。めでたき家となるべきに。さはなくして。その身は人欲をもて。貨あつむる事のみしりて。其子孫は人欲をもて貨すつる事のみしりて。長者三代なしといへる言葉にひとしく。庫に積たくはへたる物。終にはをごりのたすけとなり。失せすたるこそをしけれ。土地人民をたもち。君といはれさせ給ふ御方は。あめつちのひらけし始より。其數いかほどゝかぞふるほどにて。いき

また人をとるに。詩賦をもてするにもあらず。すぐれて武功ありしうちより。人がらよろしといへるをえらび。そのくらゐにおかれしに。人のよしあし。世のいそがはしき時見たらんは。勇不勇をしるのみならず。才德ともにあざやかなるゆゑにや。そのこゝろたしかにして。大臣の風ありといはれし人すくなからず。此國も世の中さだまりしのちは。國々のしおきする人。おほかたは。武功のすぐれたる人。又は。その子そのうまごにて。身のたしなみありて。いやしき事もなく。上下おそれはゞかり。その名世にあらはれたる人多かりき。漢のはじめに似たりといふべし。世のをさまるにしたがひ。いつとなく魏晉より下つかたのやうにおぼえ。さある人はあしたのはしにひとしく。今は世のためしとなる人。なきにしもあらぬといへば。此のちはいかゞあらんと。うれへおもへる人おほしとぞ

芸窻筆記云。或曰。某公以二創業元勳一。儼處二鈞軸之任一。處分謀畫照二耀史冊一。唯其不學。可レ謂二梗楠之徽朽一矣。曰。漢初宰相操行氣節。可レ稱二大臣之職一者。多出二於不學無術之武人一。如二曾參周勃申屠嘉周亞夫霍光一是也。其他出二於文臣一者。大約碌々無二可レ齒者一。獨有二一公孫弘一。文章才術非二他人比一。然曲學阿レ世徒。足三以欺二愚俗一爾。及二其衰一也。所下以喔咿嚅唲保レ寵固レ位。欺二時君一。長二厲階一。結二姦黨一。以煽二兇焰一。遂成中賊莽移鼎之謀上。如二谷永杜欽張禹孔光之徒一者。豈非二當時所レ謂碩儒一耶。然則武人未二必可一レ嘗。而文臣未二必可一レ信。蓋心術正。則文采風雅。雖レ有レ不二衍足一。自可三以居二輔相之位一。否則徒足三以美二觀聽一而已矣。其於二天下國家一。復何益乎。後世學者心術之不レ修。而唯文學之是務。本根之不レ究。而唯繁文僞飾之是急。幾下乎孟子所レ謂放飯流歠而問中無二齒決一可レ慨也夫。難江戡定以後。上自二大藩一。下逮二侯國一。凡主二乎政治一者。皆從二斬レ將搴レ旗中一出。然大抵朴實。謹愼。不二敢放縱一。而操行氣節。卓然不レ群者。亦復不レ少。蓋其心術正也。及レ至二近世一。文教稍興。人誦二詩書一。然率皆非二養レ望自高一。則依阿取レ容。比二諸昔時一。未レ見二其髣髴一。蓋其文華勝而心術有レ所レ不レ足也。鄉里

ば。まことにたふとくおぼゆれど。その道を得ざれば。かへりてたみのくるしみとはなりけるにや。郭槖駝といへるもの丶。樹を植うる事をいひしことば。げにもとおぼえ侍る

自注。孔子有二無郵之謗一子產有二郭殺之誦一を見れば。民難二與慮一レ始こと。むかしよりゑかなり。よき人のする事は。先よき事ならんと思ひ。そのをはりを見ずして。得失を論ずべからず。此段の言葉是非あるべし

いかほどちゑかしこき人も。たわざ田作の事は。いくとせともなく。その事を手なれて。父母妻子をやしなふものには。及ばざる事もあり。またはいにしへいまのちがひもあり。かの國のつちにはかくしてよろしけれど。此國にてはさはなりがたしといふ事もあるゆゑにこそ。ひじりのことばにも。老農老圃にとへとは。いひ給ひけめ。ある國しろしめす御かたの。はじめて國たまはりし時。御國の民どもに。をしへ給ふ文。いかゞゑたゝめはべらんと。したべの人のとひたてまつりしに。ぶしやうをかまへ。農業にをこたるべからず。庄屋組頭のまうすこと違背すべからず。右は百姓中へ。百姓どもゆだんせざるやうに下知すべし。わたくしすべからず。右は庄屋中へとのみ。おほせいだされ。そのほかは。年々たなつもの丶豊凶を見て。年貢運上。あるひはかろめ。或はゆるし。こればかりにてやみ給へりとかたれる人あり。これもひとみちなるべし

漢の世。掌故文學といへる官をまうけられしは。その時大臣をはじめ。州縣のつかさまで。おほかたは武功の臣にて。不學の人おほかりしゆゑなりとおぼゆ。この國も。ものよみする人を。國々にめしおかる丶は。いつまでもかくありたき事なり

もろこし魏晋のころより。門地をたふとぶといふ事はじまり。唐の世になりては。もはら詩賦をもて人をとり。いつとなく浮華のならはしとなりしゆゑ。武功をもてすゝめる人をば。武夫悍卒といひていやしめけれど。文臣のねぢけかましきには。はるかまされる人おほかりき。李晟。張延賞が事など思ひあはせてしるべし。漢の世はいにしへをさる事とほからず。門地をたふとぶといふ事もなく。

そのこゝろにしたがひてこそ。やまひもなく。すこやかにおひたつべきに。富貴の家にうまれしをさな子に。かしづきもりなどいへるもの。おびただしくつきそひ。風ひきたまふべきか。御はらそこねさせ給はんや。または。御けがなどもやといひて。やはらかなるものを。いくへもきせ。くひものは。はかりにてかけなどして。はひまはる時をはじめ。いだきすくめて。御うちがちにのみすれば。あしのはたらきもおのづからおそく。うちやせ。ほかもろく。おもひよらざるやまひおこりて。そだちがたきのみ多し。くすしは云ふにおよぶべき。ちはゝ。もり。またはかしづきまで。かくはすまじき事とおもへるあれど。もしは御いたみありてはと。その身の事のみおもひて。いひもいださず。あるは。おろかにして。かみつかたの御子は。下ざまとはちがひたるとおもふもあり。人の血氣をもてうまれいづる。たつときいやしき。なに事かかはることあらん。ふるき言葉の。これをうつくしむは。まさにこれをそこなふゆゑんなりといへるを。おもひあはせて。かなしくぞおぼゆる

ある年たけて子をもちし人。めづらしさのあまりに。屛風ひきまはし。夜晝となく。いだかせおきけるに。をりしも夏の事にて。みな〳〵あつさにたへかね。かはる〴〵していだきける。みそかあまりして。黄疸のごとく病みて死にけり。おとなのたへがたきを見て。をさな子はさぞと思ふこゝろもなく。うつくしむとのそこなふことをしらぬこそくちをしけれ。かゝる事。またあるべきにもあらねど。これに似たることはれほしとぞ

ある村さとのつかさせる人。民をうつくしむこゝろふかく。いかにもしてとおもふあまりに。ふるき文をも考へ。よその國の。かくすればよろし。かくすればあしといへることゞもとりあつめ。これはかくせよ。あれはかくすなど。たび〳〵いひをしへけるに。たみどもこよなうくるしめりとぞ。下をしへたげ。をさまりものなどおほからんやうにするは。すゑの世のあさましきならひなるに。ひたすらに。たみの事のみおもふ人は。よろづのうちに。ひとりもあるか。なきかといふほどなれ

ちふべからざる事をしるべし。ことよの樂を今にもちひ。ことくにの樂を此國に用ひたらましかば。くすしの。一方をもて百病を治せんとするにひとしく。人の心を感じて風をうつし。俗をかふるたすけとはなるまじ

自注。此言ニ唐土之樂不レ可レ用也

伶人のつたへし樂は。もろこしからの樂のみおほく。此國にてつくれるはすくなし。そのうち廟樂もあれど。おほかたは俗樂にて。しかもこゑ音しかた舞容ばかりありて。唱歌はなし。ふるきとつくにの事。此國につたはりたると。から人までも。めでたくおもひ。ふしぎなる事にはあれど。をしへのそなへとはなりがたし。音樂ほどたふときものはなし。こなたのこゝろおのづからしん閑静になり侍ると。ことごのみする人はいへど。その國に相應したる。まことの樂をきゝては。こゝろおもしろく。いそ〳〵しくなるべきを。しんにおぼゆるは樂のまうけの本意にあらず。ことくにの音なればなり此國の樂といへるは。疎ソツなるべし。樂のたぐひといふべきものさま〴〵あれど。そのこゑことにたゞしからねば。もちふべきにしもあらず。態はおほやけのふるまひより。下々のなぐさみまで。幾世ともなくもてはやし。しかもそのこゑいやしからずともいふべし。こゑ音調ふし節奏はそのふるきにしたがひ。唱歌をことごとくあらため。此國の樂とさだめ。聖人世におこり。まことの樂をつくり給ふをまちなば。をしへのたすけとはなるとも。害とはなるまじ。されど其しやうかをつくる事。たやすきにあらず。もろこし。やまとのふるきふみどもおほくよみ。いみじき才德ありて。人情事理に達し。しかもやまとことばよくつくる人ならでは。つくるとも其益あるまじ。かたしといふべし

をさな子をそだつるみちは。はひまはる時よりむしろの上におきて。こゝろのまゝにははせ。あしすでにたちたる時は。心しだいにはしりまはらせ。をさな子は。したぎ襦。はかまをきぬにせずといへるをしへにしたがひ。きるものは。うすきかたにし。風にも日にもあたりて。そとがちにあそび。くひものはすぐるこそはあしけれど。おほかたは

秋傳のおもむきにて。當然なりといふ事。あきら
　かなるにや

れはやけのたからものあづかりてわたくしするは。
其つみぬすびとにをなじ。贓吏は棄市すといへる。
宋祖の法にかなへり

姦夫淫婦死刑におこなはるゝは。此國の法まされり
といふべし。およそ亂國には重典をもちひ。治國
には輕典を用ふといへる事もあれば。法をもちふ
る事は。時代と。國のいきほひとをかんがへ。斟
酌するをよしとす

此國に律の書おこなはれざるを闕典なりといへる人
おほし。されど鄧析が竹刑をつくり。子産が刑書
を鑄たるを。いなりといへるを見れは。律の書
なきもまされるにや。此こゝろは唐の刑法志にも
論せり

服忌令は。もろこしの喪制になぞらへ。五服の親を。
ことごとくかきあらはし。父母の喪は。舊令にし
たがひ。その外は日をもて月にかへよとあらば。
人々恩義の輕重をしり。をしへのたすけならんと
いへる人あり。げにとおもへり

世の中の。さけさかなとゝのへもてなすといふ事。
さまざまある中に。鬼神のためにするは。まつり
といひ。いきたる人のためにするを。おもきはふ
るまひ。かろきはよりあひといひ。又はいへひと
あつめ。はなつき花月にめでなどするは。なぐさ
みといふ。そのもてなしするに。音樂といふもの
なくば。いかでかよろこびをたすくべき。たれは
じむともなく。聖王おこりたまはぬむかしより。
いづれの國にも。その國々の音樂はあるなり。も
ろこし。から。てんぢく。其外をらんだ。るすん呂宋
などいへる國まで。みなそのくにぐの音樂
あるを見て。自然のことわりなる事をしるべし

　自注。此言二樂之所一由起一也

虞夏商周。いづれもひじりの御代なれど。その樂の
をなじからざるは。時代のちがひあればなり。も
し聖人をして。此國にうまれしめば。此國のとき
よをかんがへ。樂をつくり給ふべければ。また一
様にはあるまじ。虞の樂。夏に用ふべからず。夏
の樂。商にもちふべからず。商の樂。周に用ふべ
からざるを見て。もろこしからの樂は。此國にも

國をうばふ賊。堯舜湯武をもて證據とするたぐひの事をいへり

塞翁がうまのたとへは。得といへるうちに失ふ事あり。失といへるうちに得ることあれば。得るもよろこびとするにたらず。失ふもうれへとするにたらざる事をいへり。よしあしといへるも。それにひとしく。秦の長城を築けるは。惡政の第一なれど。萬世のふせぎとなるを見れば。あしきうちによき事あり。參耆ほどなる良藥はなけれど。補ふまじき病を補ひ。人のいのちをあやまるは。よきうちにあしき事あるなり。忠といひ。孝といへるほど。たふとき德はなけれど。鬻拳が兵をもていさめ。郭巨が子をうづまんとせしは。忠孝のうちにあしき事あるなり。ものごとかくとしりて。よくいましめつゝしむは。ひじりのをしへ。ものごとかくとしりて。なりしだいにするは。道家のをしへなるべし

世のみだれたる時は。勇猛なる人こそたからなれどおぼゆ。私のうらみをもて人をころし。そのところをたちのきなどするは。まことに大なるつみ人なれど。これはこゝろみの人なりとて。いづれの國にも。かくまひおかずといふ事なし。それがしいとけなき時までは。亂後の餘風のこりやらず。かゝる事たまさかにはありき

父母のあだには。ともに天下をともにせずといへるも。周の季世。世の中亂國となり。このくにの號令。かの國におよばず。凶をいれ。叛をまねく風儀。はやりたる時のことなるべし。今の時は。まことにやしまのほかまで。なびかぬ草木もなく。めでたき一統の御代なれば。人のおやをころせるものあらば。いかにもしてたづね出だし。其つみをたゞし給ふべきに。その子にまかせおかれ。生殺の權を下にかし給ふは。いかなるゆゑにか

ぬしをころせるやつこあれば。とがなきおやあにまで。つみにおこなはるゝは。いたましとしみたずして死たるは。ひとかど功ありし人のあともなくなり。其しもなるものゝ。父母妻子ひきつれ。なきかなしみ。流涙するありさま。いたましといふべし

喧嘩兩成敗といふ事。昏墨賊はころすといへる。春

たに得たるたからは。くれにうしなふに至れり。これもさからうて入れば。さからうていづるにてさぶらふと。或としばえなる人のいひし。げにもと思ひ侍る

世の中ほど。おもふやうならぬものはあらじ。たからは國のいのち命たるをしらざる人は。みだりにつかひすてゝ。代々のたからをもうしなひ。又たからは國の本たるをしれる人は。やぶさかにして。たからだにあらばとおもひて。世のありさまあしくなりゆくをしらずと。或人かなしみてかたりき

此國には記錄すくなし。おほよそ記錄といふは。治亂興亡のあと。萬世までの勸戒となるをこそたふとめ。いらざるいくさ物語のみかきちらしたる。まことに紙のつひえともいふべき。もろこしの事をひかんよりは。此國のなにがし。かゝるよきことばありき。又なにがし。かゝるよき行ひありき。なにがし何がしは。さなくて。家やぶれ。國ほろびたるなどいはゞ。人の心を感ずる事。もろこしの物語するには。はるかにまさるべきに。記錄のなきこそをしく侍れ。もろこしにても。記錄をつくるには。才學識の三長なければといへり。たやすき事にはあらず

いづこの國にも。日帳。日記などいひて。かきしるしおく事あり。年をつみて見れば。牛に汗し。棟に充るほどなれど。おほかたは。くもりはれたるなどいへるたぐひの事のみかきて。政務人事にあづかりたる議論號令まで。くはしくかきたるは希なり。うたがはしき事あれば。としばえなる人こそとて。問ひて決する事多し。それも五六十年にはすぎじ。記錄さへたしかならば。幾百年ともなき。ながいきしたる人を。左右におけるにおなじかるべし。されば此國の智惠。もろこしにおよばざるひとつは。記錄にともしきゆゑにや

世の中ほどあやしくをかしきものはあらじ。もろこし人の記錄をくはしくするは。まことにいみじき事なれど。記錄を考へて。けやけき惡事をなし。この國より見れば。ふしぎなるとおもふ。其君其臣いかほどもあれば。かゝる時は。記錄なきこそましならめとおもふなるべし

自注。漢儒の經學をもて史術をかざるをはじめ。

出だせる類を見て。上の御身より儉約を行ひ給ふこそ。まことの費をはぶくとはいふべき。されど御心づきあるはすくなく。下たるものは。はゞかりていはず。儉約の名のみありて。其實なければ。國をたもつ益とはなりがたし

もろこし人のものがたりに。或人ともだちかたらひて。山のふもとをとほりしに。此山に虎ありて。人をくらふ。此虎をころしたるものあらば。十萬貫をたまふべしと。榜文たちたるを見て。大によろこび。うでまくりなどし。そのまゝかけあがらんとするを。かたへの人ひきとゞめ。いのちはをしからずやといへば。たからだにもちたらば。いのちは何かをしからんとこたへしとかたりき。おろかなる人のこゝろざし。まことにをかしき事なれど。たからあつめするものゝ。人のうらみ。そしりをもかへり見ず。さかりて入れば。又さかりて出づる事のいかほどもいでき。つひにはその身もあやふくなり。家もほろぶるにいたれる。なにか此ものがたりにことならん。漢の帝の西園の禮錢をたくはへて。人のこゝろ日々にはなれ。火德のきゆるをおぼえ給はず。董卓が郿塢のこめをあつめて。ほぞのうへに火ともす事をしらざる。まことにいたましといふべし。かゝるゆえにこそ。たからあつまるときは民散ずとはのたまひけめ。たからさかうていれば。またさかうていづといふ事をとひしに。上たる人。下をしへたげなどし。故なきにたからをあつめ給へば。あめつちもたひらかならず。おほみづ。ひでりなどして。おもひよらざる事につひゐ多くなり。又はこゝかしこさわぎたち。これをしづめんとするに。かぎりなきいくさのつひえいでき。くらにつみたるもの。いつとなくうせゆくものなり。とるましきものをとるもさかふといひ。あるましきわざはひあるもさかふといへるなりと。あるみちしりたる人のこたへけるに。そのたぐひは。下ざまにも。まのあたりある事にこそさふらへ。いやしきあき人など。おほやけの。その事する人といひあはせ。ひとつの物をふたつといひ。おろそかなるものをくはしといひ。上をあざむき。多くのたからをまうけなどするものは。必ず酒このみ色このみして。あし

なる醫師にさうだんして。猛藥をのみ。元氣を撃つにおなじ。まつりごとの道。かくなりては。亂をさる事遠からざるものぞかし。されどれもき病ありて。下手なるくすしの藥のみても。朝にのみて。夕に死するはまれなるがごとく。亂のはじめと思ふよりして。世の中のみだるといふまでは。はるかとしつきをふるものなるゆゑ。ちゑある人の後をうれへて。とやかくいふをば。うとましき事に思ふもあり。又はかたはらいたくおもふもありて。さる事やあるべきと。月日をくらしゆくうちに。ほどなうふたゝび。とりかへされぬ世の中とはなるなり。身もちあしき人の。つひにおもひよらざる病つきて。わかじにするがごとし。いにしへの文ども見るに。いつの世にてもかくあるぞかなしき。おほやけのあまだくみともにし給ふかたじ〳〵は。かゝる事をこそよそにおもひ給ふまじきなれと。むかしの事を。今のやうにおぼえ。そぞろに涙ぐみてかたりしまゝ。後の世のいましめにもやと。しるし侍る

自注。あまだくみともにする。共二天工一なり。

國に輔佐たる人をいへり。書經に。天工人其代レ之

貨は國のもと。財は國のいのちなるゆゑ。平天下の章に。財をなす事をときたまへり。くにいへをたもつ人。此道しらでやあるべき。ものよみする人。仁義禮樂の事は。文にもあらはし。ことばにもいへど。財用の事いふはすくなし。是は人のすきこのみていへる事なれば。われいはずともと思ひ。義をさきとし。利をのちとして。人にゆづるもあるべけれど。たかきもいやしきも。たからなくして何事をかなすべき。許魯齋の學者は。生をさむるをもてさき先とすといへり。そしるべきにあらず。されど財をなすといへるは。そのつがひをほどよく節する事をこそいへ。しもをそんじて。かみをまし。人をやせしめて。おのれをこやすにはあらず

自注。たからは。漢書曰。貨者國之本也。唐書曰。財者國之命也。賈誼曰。積貯者天下之大命也。損レ下而益レ上。瘠レ人以肥レ己。竊之道也

千里の馬をしりぞけ。雉頭裘をやき。宮女三千人を

もあるべし。此國のかむつかたは。つたへしそのくに〳〵のひろさ。むかしにおなじく。租稅の納もかはりなきに。債をはたるもの。その門にむしろしき。又はみこしにすがるも。たまさかにはありといふ。ひとはおつるを見て。あめがしたのあきなる事をしるといへば。此後やすからずればゆと。或人のかたりき

狂歌といへるもの。いつのときよりかはじまりけん。あるたふとき人の。あまたあつまり給ひしとき。狂歌よくすといへるもの。伺候しけるまゝ。借債のうたよめとありしに。よめるとなん「もとよりもかりの世なればかるもよしゆめの世なればねるもまたよし。此歌を見るに。人のこゝろありといはんや

むかしは德政といふ事。しば〳〵ありしとかたれるを。世の中かくなりては。亂をさる事遠からずとしり給へと。ある道しれる人のいひしとぞ

あるものしりたる人の。あまたあつまりて。むかし物語するを聞きしに。げにもとおもひ侍る。上をごり下たなひたる國の民ども。年貢運上のおもきにたへかね。かしらだちたるものなど。そのつかさ所にまうで。しとやかにそのくるしみをうつたへ。上のあはれみをもとむるを。哀訴といひ。あるはひとむら二村。又は一郡。二郡。もろびといひあはせ。國のかみの事とる人の家におしいり。口々にうつたへ。せひにと。くるひのゝしるを。要訴といふ。されば民の哀訴するは。亂のはじめなれど。これは人のふとやまひづきたるがごとし。おどろきおそれて。いまゝでのしかたあしきをくやみ。またよき醫師もありて。そのやまひを療せば。あとは何事かあるべき。民のくるしみ甚しく。せんかたもなく。要訴するに至りては。下のうらみはます〳〵ふかくなれど。上たる人は。かへりてにくむこゝろのみ出で來。はじめは世の批判などおそれ。ことなかれかしとしづめなどし。なだむるもあれど。たびかさなるにおよびては。かしらだちたるもの。とがにおこなひ。きびしくいましめてこそと。ちゑなき人の。智惠がましくいひなすを。おろかなる人は。げにもとおもひ。刑罰をもてをさめんとす。これは補ふべき病を。下手

の封建の世まされるかといふもあり。又は末の世の郡縣こそまされりといへるもありて。その說さま〴〵なれど。此國に來り。はじめて封建の世の風儀といへるものを親く見て。まことに三代のひじり聖人の法こそ有りがたく覺ゆれと語られしとぞ。柳子厚が封建論に。封建は聖人の心にあらず。勢なりといへる。聖人の心にあらずといへるは。うたがはしけれど。勢なりといへるはさもあるべし。郡縣の世を封建にし。封建の世を郡縣にする事。聖智の君ありても。たやすくなるまじければ。勢にまかせらるべき外はあるまじ。此國も郡縣なりし時もありしに。いつとなくひじりの法にかなへる。封建の御代となり。上下其分をやすんじ。めでたくすめることぞ。まことにいみじけれ。さればば物ごとひじりの敎にしたがひ給ひ。人の心のそこねざる御政おこなはれば。周家の八百はかぞふるにたるべしやとおぼえ侍るなりと。こゝろある人のかたりき

芸窓筆記。論二封建一曰。封建郡縣。孰優孰劣。古今儒家議論紛紜。余雖二庸劣一。二百四十二年間春秋。一千三百六十二年間綱目。略窺二其顚末一。間嘗以爲。郡縣不レ如二封建一。既而屢遊二朝鮮一。觀二其郡縣之俗一。亦以爲郡縣不レ如二封建一。然則彼其以二郡縣一爲レ優者。乃古今儒家經遠之慮未レ審。而折圭擔爵。濟々蹌々上下安レ分。其躋二太平一。余以爲唯有二我國一。物有二固然一。事有二必至一。蓋郡縣之世者。天下人心。奔競是務。賄賂盛行。讒毀併興。雖レ有二善者一。難二以爲レ防而已矣。或問賄賂行焉。讒毀興焉。何獨郡縣曰鈞之利也。商者之遑々。酷二於工者之役々一。勢使レ然也

から國のおもきつかさする人。おほせいとがにあひしをりふし。朴射夫といへる翁。ひそかにかたりしは。わがくには。郡縣の世にて。下なるもの。上にすゝみやすきまゝに。自然とさかしらごと讒言もおほく。又はまひなひも。おこなはれて。あしたにはさかえ。ゆふべにはおとろへ。世の中しづかならずさふらふ。其御國の。みな人。その分定まりたること。うらやましとおぼゆれといへり。これはふるき事なり。よくおもふ人はしるべし周の赧王の。避責の臺をまうけ給ひしは。さ

りのいるへは。もろこしも。此國も。くすしの衣服をかざれる風儀。はからずして同じきこそ。ふしぎなれ。ほとけも莊嚴よろしからねば。庸俗の人は。たふとみおもふ事。うすきことわりとおなじ事なるべし。されどほかのかざりより。うちのかざりなるにや。それがし京にありし時。やどのあるじなるもの丶かたりしは。何のなにがしは。豐後の人にて。はじめて京に來りし時。ともなふ人もなく。やぶれがさ。かけ木履。いとさう〴〵しかりけるが。人柄おとなしきをたふとくおぼえ。諸人したひしまゝ。今は世に名をかぞふる人のうちとなれりと。かたりければ。言忠信行篤敬といへるこそ。ほかのかざりにはまさるべけれ。そなたの御子なりし人も。ひと〴〵よしとこそいへ。あしといふはなければ。のちには時を得たまふなるべしといへりとぞ。ありがたきことばにや

むかしより。秦の始皇の事を論じて。とほくおもんぱかるものを妖言とし。直言するものを。誹謗すといへり。かくありては。その國いかでかほろびざらむ。されどかゝることを。文字のうへにて見れば。めづらしき事のやうに。おぼえ侍れど。世のおろかなるものは。いまもしかなり。人の家には。生死病苦。又は水火のうれへなど。必あることなれば。あらかじめそのそなへなくては。かなはぬ事なりといへば。いはふかどには福來るとこそいへ。目にも見えぬ。いま〴〵しき事なのたまひそとて。をうなわらべの。はらたてのゝしるは。遠く慮るものを。妖言とするなり。又かゝる身もちにては。道にもあたらず。人のおもはくもいかゞといへば。わるくちいひて。人をはづかしめ給ふといひ。なきかなしむにいたれり。これは直言するものを。誹謗とするなり。いたましきことなり

おもへばのろふといへるは。いやしき諺なれど。おもしろき言葉にや。人主をして此こゝろをしらしめば。誹謗妖言なりとて。忠直の人をそこなひ給ふ事はあるまじ

舜水といへる人。明の末に。其國の亡ぶるをかなしみ。恢復の志ありて。此國に來れるを。水戸にまねき。師傅の位をもてまち給ふに。唐土にては。昔

世の中は。かしこきをもてかしこきをあざむくもあり。又おろかなるをもて。かしこきをあざむくもあれど。かしこきをもてかしこきをあざむくまではなれど。おろかなるふりして。かしこきをあざむくこそ。かぎりなうおそろしけれ

それがしわかき時。武藏にありしに。その比までは。人參を用ふるくすしはなはだまれなり。もしも人參を用ふるくすしあれば。下手なりといへり。世の人。人參の功ある事をしらずとて。杉某といへるくすし。つねにうれへとして語りき。その丶ちけふ此比に至りては。かろき病にも。人參を用ひざるくすしはすくなし。もしも人參を用ひざるくすしあれば。下手なりといへり。さるころ又むさしにゆき。杉某にあひしに。世の人。人參の害ある事をしらずとかたりて。其事のみうれふ。徐景山が通介なりとほめけり。定まりたる見識ありて。世のはやりにしたがはざるこそたふとけれ

李士材。繭萬與などいへるもの丶方書世に行はれ。乳のみ子の癇氣。をうな女の血のみちには。くすしの方書を考へてもれる藥よりは。世の人の家傳といひて。とりはやせる藥こそよけれといふ人あり。さる事にや

から人の物語に。毒蛇のかみたる所は。早速竹のつにてつよくおしつけ。毒氣のつ丶のうちにはれあがるを。利刀にてきりのぞけば。いたみもなく。かはばかりきれていゆといへり

からのくすしを見るに。人ごとに妙なるといふにはあらず。つたなきもおほし。されど脈をしり。くすりをもちふる事。此國のくすしにはちがひ。くはしきやうにおぼゆ。やまひにより藥ひといろにて。しるしを得る事あり。これを此國のくすしは。單方なりといひてわらへど。許胤宗が言葉を見れば。さにはあるまじ

自注。許胤宗曰。古之上醫。病與ㇾ藥適。唯用二一物一攻ㇾ之。今人以ㇾ情度ㇾ病。多二其物一以幸ㇾ有ㇾ功。譬獵不ㇾ知ㇾ兎。廣絡二原野一。冀二一人獲一。術亦疎矣

ある人その子を京にやり。くすしにさせしに。さるもの丶あしく。いかゞなりと。消息せしま丶。その事をいひてなげきしに。法印なりし天台のひじ

まじ。國々のいきほひを見て。ふかくおもひたる言葉ならん。知る人ぞしるべき。もろこしにもいにしへは諫官なしといへり

漢の薛廣徳が。ふねはあやふくさふらふに。はしよりしたまはずば。みくるまを血にてけがさんといさめしを。海にもあらぬこよらなる河かぜにふねのり給はゞ。御遊ともなりなんに。あまりけうとくおぼゆ。白麻をさかんといへるほどの人。七年まで何のいさめもなかりしこそたふときと。明儒の論せる。まことにおもしろくおぼゆ。されど宋儒は。薛廣徳をよしとし。陽城をつくさずと論せり。これも亦おもしろしといふべし

その子のあしきをかなしみ。朝夕切諫せし人ありしに。或人のいへるは。其御身のわかき時は。ものごと御おやのおほせのまゝにありしかととへるに。しばしありて。さはなくさぶらひきとこたふ。さればこそ。いやしきことわざにも。年こそくすりなりと申し侍れば。としたけ給ふのちには。きづかひおぼしめすほどにはあるまじといひて。その子なりしゝをかたへにまねき。このほどみちゆく人の。言葉あらそひして。としたけたるものを。うちたゝきなどしたるはなしきゝ給ふやといひしに。いかにもやすからずおぼえ侍るとこたふ。よそのれやなれど。年たけたるものゝ。うしとおもふさまは。やすからぬ御事なるに。したしき御おやの。あさゆふこゝろをくるしめ給ふ事。すこしの御心づきなきこそあやしげなれといひしに。はぢがほして。なにの言葉もなし。そのゝちは。おやこの中。むつまじくなりたると。かたれる人あり

或人やんごとなき御かたの。くすりあそばしゝをりふし。參りかゝれるに。これはもろこし人のつたへし。無價のたからといへる藥にて。まくはひ遘合のかずかさなりても。猶々めでたきなるとのたまひしまゝ。くすりは五臓をして。たひらかならざらしむときゝつたへ侍れば。御いたみ所もなきに。いかゞとまうしゝに。ほどなく御目ひらきたまひけり

くすしは。そのしりたるほどは。それはよし。これはあしと。人のおもてをやぶりてもいふべきなれど。さあるくすしはまれなることそうらめしけれ

すき事にはあらず

ある人の。やしきをひがしむきにたてられしに。年月のたつにしたがひ。南むきこそよからめといへる人。しだいにおほくなり。その後火災にあひてければ。今こそといひて。南むきになりけるに。もとのひがしむきこそよかりしといへる人。またしだいにおほくなる。これも火災にあひてければ。またひがしむきになりたり。この比きくに。もとの南向がなといへる人多しといふ。またとし月たちて火災あらば。もとの南向となるべし。またよき事もがなとおもふよりして。こゝにありてはかしこにゆかん事を思ひ。これをなしては。かれをせん事を思ひて。心騒がしくはなるなり。されど心にたると思へるよき事は。いつとても有るまじ。よしあしをわすれて。分をやんせんにはしかじ

山科のかたはらに。たわざ佃業するおやこありしに。道ゆく人金のいりたる袋をおとしおけるを。其子たかきをかにかけあがり。よびてかへさんとす。なに事ぞとゝふ。しかじかとこたふ。おとすもひろふも。世のならひなるに。いらざる事にかまひて。わがたわざをすつるぞといひけるとなん。この人は。荷蕢丈人のたぐひなるべし

堺に。仁徳帝の御陵をはじめ。諸帝のみゝさぎ。今ものこりて。これを望むに。おほやまのごとし

いにしへをこのみてちからある人は。周の法にしたがひ。族葬すべき事なり。方孝孺の文集に。そのわけくはしくいへり。もつともなりとおぼえ侍りき。此國にも。とほくおもひはかりたる人は。國をたつるはじめ。村里へだゝりたる。つかへなき間曠ところに寺をつくるもあり。人をはうふる所を。いちまちの中にかまへ。てら寺地のかぎりあれば。年經たる後は。ふるきはかをあばきて。あたらしきから骸をうづむ。まことにいたましといふべし

此國には諫官もなく。大目附なぞいへるは。御史の職にあたれど。彈劾の式。もろこしにはちがひたりといふ人ありしを。此國は今までのとほりこそと。あるみちしれる人いはれしとぞ。これはいさめなくてもよろしといふにもあらず。又もゝづかさのよしあしは。たゞすに及ばずといふにもある

らずや。肩よりさき。ひざぶしよりしもは。さまでさむからぬものゆゑ。かたよりさきにあたる所は。手とほるまでにほそくし。綿入るゝ事もなく。すそは脛かぎりにせば。手をはたらかし。道ゆくにも。たよりあらんとおもふ。脊すぢをぬひとほせるゆゑ。腰にあたりたる所は。やぶれやすく。道ゆくには足にまとふ。下部の者の。つまゝくりしたるありさま見よしとは云ふまじ。腰より下はぬひあはせずもがな。かゝる事など。そのみちしりたる人にくはしくたづねて。まづ常の衣服を。たよりよろしく。つひえなきやうにあらたむべきなり。むかしは上衣下裳といひて。かみしもふたつなりしかど。これもたよりあしき故にや。そののちは。ひとつゞきになり。此國の常の衣服も。さあれば素襖がなとおもふこゝろをもて。ひとつづきなるくびす踵までとゞくうはぎ袍をあらたにこしらへ。えりはまるえり團領にして。袖は手さきかくるゝまでにして。是を此國の禮服ときはめ。五月より八月までは。羅紗。さよみ布。九月より四月までは。どんす類。きぬつむぎもめん。いづれもひとへにして。其分限に應じて着し。今のはかまは。夏はひとへ。冬は綿入にし。こしをのけ。わきをぬひ合せ。二便のつかへなく。はだにつけきるやうにせば。常の服は脛かぎりなりとも。はかまには綿入。うはぎは。くびすにとゞけば。さむきをふせぐにあまりあるべし。かやうになど衣服あらたまりなば。したぎはさまでとりつくろふにも及ばず。つひえをはぶくべきにやと。ある人のかたりき。されどやすき事にはあらじ

自注。衣服之制。果能如レ此。毎二一件一省レ帛不レ下二數尺一。綿亦稱レ此。擧二域内一而算レ之。則爲レ不レ貲矣

衣服改制の仰せあらば。もろこし人のまねさせ給ふと批判する人多かるべし。されどおほやけの冠服も。そのはじめ。此國にはなかりき。服のこしらへ。ある人のいへるは。其大概なり。委くせんとならば。此國の道服をはじめ。異國の服まで。皆々あつめ。そのうちにて。たよりよろしき。禮服。便服。尊卑。上下をわかち。あらたにこしらへてこそ。永久不易の服とは成るべけれ。まことにたや

のものもと丶のへ來り。上をごり。下私し。罪人多くなり。其うれへ唐船の來れるにはまされる事あるべし。良法ありても。良人なければ。其わざはひすくひがたし。世の中には歎くべき事のみおほしといへりとぞ

およそ法といへるものは。かろきおもきをかんがへ。其かろきをすて。おもきをとりて。一定の法とす。もの丶ながみじかあるを。かたなをもて。ひとつにきりそろふるが如し。さればよろづにつかへなしといふ法やあるべき。おろかなる人の。かろきつかへあるをみて。よき法すつることをしき

むかしの公服は。素襖(スアヲ)ばかりなりしに。其後いまの上下と云ふもの出で來。ひとへ。うらつけ。もじかたぎぬなど。しなぐヽありて。事わづらはしくおぼゆ。うはぎしたぎなど。ほかに見ゆれば。ふるきあかつきたるは。もちひがたく。おのづからとりつくろふにいたれば。そのつひえもかぎりあるまじ。むかしの素襖にかへらんにはしかじといへる人ありしに。又或人のいへるは。さにはあるまじ。衣服は身に便あるをよしとす。素襖は身にたよりあらざるものなりしゆゑ。いつとなくその袖を截り。すそをちゞめて。今の上下とはなれるに。今又むかしの素襖にかへらば。つけだけにひとしかるべし。えりわきあきて。長きしたぎの見ゆる。さまでおほいなるちがひなければ。つひえをはぶくとも。何ほどの事かあらん。その上。雨などふり。とも人しかぐヽともなきものは。かさ傘のした下あまりて。ぬれしほたれ。とほみちゆくに。もゝだちとりたるも。さまたげ多かるべしといへり

此國。常の衣服。いつの時よりか。かくはさだまりけん。つひえなる事おほし。人のせなかは陽にして陰をにくむ故にや。はなはだ寒くおぼゆ。此國の常の衣服には。うへの二重四重なるとき。そのさむきかたは。ひとへ一重ふたへ二重なり。さればもろこしの衣服もさあれど。ことくにの人の。前のとほりをほたんにてしめ。うしろまへのかさね一樣にするもよろしとおぼゆ。うはぎ。なか。したぎ共に袖下に綿入る事。寒氣のふせぎとなるにもあらぬに。きぬ。わたのつひえ。無益なる事な

は。米多く。其わたひやすしといへるがごとし。米の地より生ずる事。一段にはいかほどゝいへるかず。よそに違ひて多にはあらず。船のたよりわしく。他國へ賣り出だすには勝手よろしからず。おほかた其國のみにてこれを用ひ。其用ふる人すくなき故。價も貴からず。よそよりは多きと見ゆ。某かくいへるは。唐土をまされりとし。此國を劣れりとせんといへる心にはあらず。世の人此國は金銀多しとのみこゝろえ。其實をしらざるゆゑに。おもきたからを。みだりにほり出だし。或はみだりにつひやし。或は他國におくりて。此國のゆくゆくわざはひとなる事を。かへり見ざる。かなしさのあまり。かくはいへるなりとこたへしとぞ

此國は絲すくなければ。もろこしよりきたりうれる人なくば。衣服ゆたかならじと。いひし人ありしに。ある人のいへるは。此國の絲もとよりすくなきなるべけれど。かひこも。くはも。みな此國の産する所なれば。むかしの王后をはしめ。親。蠶の禮を行ひ給ふごとく。下は士大夫の妻までも。そのやしき／＼に。くはの木をしたて。われさきにと。こがひする風俗となりなば。絲のすくなき事やはあるべき。今も絲こしらへいだせる村里なきにしもあらねど。もろこしよりきたれる絲多く。しかも其わたひいやしきゆゑ。ほねをりこしらへても。うるところの利すくなし。人々其益不益をかんがへ。かひこかふにはおよばざるなり。此後天下後世の事をふかくおもふ人。上にたち給はゞ。もろこしよりきたれる絲を禁じ。家々に桑をしたて。かひこをやしなふ事を。をしへ給ふなるべしといへりとぞ

唐船を禁じ給はゞ。藥材はいかゞすべきといひし人ありしに。ある人のいへるは。それこそいとやすき事にさふらへ。買藥の司をたて。しろがねの數をさだめ。もろこしにわたり。藥材のみとゝのへ來り。藥店にうりはらへと下知し給はゞ。なにのかたき事かあるべき。渡唐を禁じ給ふは。邪教のおそれあるゆゑときゝ侍るといひしに。それは猶々やすき事なれば。これをふせがんみちいかほどもあるべし。しかし藥材のみとゝのへ來れと。はじめは下知し給ふとも。後々には其法みだれ。ほか

ど。ほどなくやみてけり。小事にこゝろをもちふるもをかし。またはなしのみきゝて。いまだこゝろみざる事を。みだりにいひもちふるもうらめしあめつちひとしく生ひいでたる。こがね金。しろかね銀。あかゞね銅を。みだりにほり出だし。ありてもよし。なくてもすむといへる。異國の物にかへて。五行の氣を損じ。奢侈のみなもとを長ずるこそ。まことのをしむべきとはいふべき。くろがね鐵は。此國の產するところ。萬國にすぐれたれば。あだ讐に兵をかすにおなじとて。むかしよりこれを禁ぜり。是もよろづ世のため。農器のとぼしからん事をおそるゝなどいはゞさもあるべし。その國みちなければ。竹をきりたるはた。木をけづりたる戟にて。さしもいみじき百千のせきも。平地となれるといへば。兵器にはよるまじ。されどわたらぬぞめでたき。南蠻よりきたれるくろがねにて。刃をつくり。ひと〴〵のもてはやせるを見れば。此くにのくろがねのみ。すぐれたりともいひがたし。からのくろがねも。此國にはまされりといへり。かねすくなくして。吹煉のつひえにあたらざるを。山する人のことばにはわかしといへり。

自注。胡居仁曰。金人不下以二布帛一換中金銀上。是他有二見識一

もろこしには。金銀すくなく。此國には多しといへる人ありしに。ある人のいへるは。さにはあらず。この國は。金銀ををしむこゝろなく。みだりに山よりほりいだせばこそ。多くは見ゆれ。天地のものを生じ給ふ。れほかたはすぐる事もなく。またはたらざる事もなし。此國のみ金氣あまりありといへることわりやあるべき。もろこしは金銀のあたひたつとく。此國はさなきにて。金銀のすくなき事しれたるにあらずやといへるに。又或人のいへるは。さにはあらず。もろこしの金銀あらゆるかずをいはゞ。此國には幾萬倍といふほどなるべけれど。これを用ふる人多き故にこそ。其價たふとく。すくなく見ゆるなり。此國はあらゆるかず。其すくなき事。又もろこしにははるかにちがひたれど。これを用ふる人またすくなき故。價いやしく多しとみゆ。たとへば奥すぢ某といへるあたり

きより。やむことをえず。徒黨をむすび。亂をれこすにいたれり。それよりしては。さま〴〵の變故いできたり。大藩。小藩。思ひ〳〵の心になり。大きなるみだれとはなるなり。脾胃そこねたる人の。百病きそひおこりて。死するがごとく。たそるべきのはなはだしきなり。しかるに年貢運上のおもくなるもとをいへば。上たる人のをごるによれり。凡そをごりといへるは。華美榮耀を好むばかりをばいはず。その分限に應じ。いるをはかりていだす事をなすのまつりごとなきより。大家小家ともに。常に定まりたる。年貢運上のみにては。つくなふべきみちなく。民をゑへたぐるにいたれり。國をたつるのはじめ。多くはものごと質素にして。定まりたる年貢運上にて。經費にあまりありて。自然と仁惠のまつりごとおこなはれ。かみゆたかに。下やすく。めでたき世のありさまなれど。一葉すぎ。二葉すぎ。いそぢたち。もゝとせたちたるのちは。いつとなくものごと。おもくけつかうになり。おぼえず分限の外に出で。下をゑへたぐるにいたれり。ひとことをあげていはゞ。

器物もはじめは素器を用ひたるに。いつとなく漆器になり。またいつとなく彩畫を加へ。またいつとなく金銀にてよそほふにいたる。衣服とても。はじめは木綿を着。いつとなくつむぎになり。またいつとなくきぬとなり。それよりしてはどんす。ぐんちうなどいへる。もろこしのものをたつとび。又はらしや。しやう〴〵ひなどいへる蠻國の品を用ふるに至れり。かゝるたぐひ。ひとことならねば。いかでかいるもの丶かず。いづるもの丶かずつくのはんや。そのあひだには。をごりを禁ずるこそ。まつりごとのかなめなれとしれる明君賢相なきにしもあらねど。おほかたは。小事小物にのみこゝろを用ひ。大事大物の。いつとなく分限にこえたるといふに。こゝろづきなければ。禍亂をすくへる益とはなりがたし

いつの時にかありけん。材木のつひえをいとひ。のりもの丶槓ほそまりしとき。むかしは。さゝら竹に硫黄をつけ。これをつけたりといひしに。今の世ひの木を用ふるいかゞなりと。こざかしき人のいへるにより。さらばとて。つけ竹にあらたまりけれ

にゑかする人はまれなりときけば。善をこのむのこゝろ。しだいにうすくなる。これもよもぎのうちのあさならぬ。いやしきうまれつきよりおこりたるなれど。世の中の風俗こそ。うへなきものとおぼゆれ

さくらはいのちみじかし。いかなればかくあるやらんといひしに。花多きゆゑにこそ。松。ひの木にはおよばず。あめつちのことわり。まことにありがたくおぼゆ。國も家も繁華なりといへるは。ひさしからずとしるべき事にやとこたふ

文かくとき。闕字する事。此國のむかしは。もろこしのごとくにはせざりきと。ある公達のかたり給ひしとぞ。されどおほまつりごと大政し給ふ御身の。ある大德のありさまをかき。あかゞねの碑にちりばめられしを見れば。大元帥といへるに闕字し給ふ。やすからずおぼゆと。ある人のいひし

此國は災異を見ておそるゝ事すくなし。されど祥瑞をもて。へつらひのたすけとする事も。またすくなし。元日に日食あれば。もゝづかさ百官に命じて。しおき政治のよしあしをいはしむる事。あながち言をもとむるのまことあるにもあらねど。後の世にては。ひとつの儀式のやうになれり。告朔のひつじにおなじく。もろこしにては。すてたるぞよき。此國にてそのまねし。まねをまねするにはおよぶまじ

もろ人會議する時。この事いかゞおもひ給ふかととへば。上をはゞかり。かたへを見あはせ。とやかくするうちに。吾はかくこそおもひ侍るなれど。かしらだちたる人いひいだせば。おほかたは。おほせさる事なりとのみいひて。しりぞくるものなし。ちゑある人も。ふときゝては。さしておもひも侍らずといふべきほかやはある。これは會議に似たれど。その實は會議にあらず。もろこしをまなびて。めい〳〵そのおもひよりをかきつけて。たてまつるやうにありたきものなり

世の中のみだれんとする時は。必ず所々に盗賊おこる事あり。盗賊といへるは。つねのぬす人にはあらず。百姓の年貢運上。年々におもくなり。かみにうつたへんとすれば。とがをかうふり。其まゝにてありなんとすれば。妻子をはごくむべき様な

ず。須美羅彌古都（スミラミコト）としたまひなば。いかにもそのつかひをもいれ。書をもこたへさぶらふべけれど。つかひを接するの禮儀をはじめ。書中の文句。いづれほかの蕃王をまつの式に違ひあるまじ。曲江集などよみてしるべきなれば。遣唐の御使なきにしかじと。或人のいひき。わが國の人。高麗のつかひの下に就かざりし事を。威光のごとくおぼえて。漢の匈奴をまつの禮にもちがひ。規摸ならぬといへるに。こゝろづきなきもをかし

もろこしは世界のなかにて。仁義禮樂おこりたる。聖人の國なれば。中國といへるは。ことわりなりといへるもあり。また其國より見れば。いづれか中國にあらざるといへるもあり。韓人も其國をあがめて。えびすにあらずといへるこゝろにて。東華となへ。もしもえびすなりといへば。こゝろよからず覺ゆと見えたり。國々の言葉ものがたりせしをりふし。東西南北ともに。ことばのしだい。いづれも體をさきとし。用を後としさぶらふに。十五省の言葉ばかり。用を先とし。體をのちとすることそふしぎなれ。其國のことばも北虜。南蠻。西域に違ひなく侍るなりといひしに。韓時中といへるから人。さればこそ。わがからくにも。夷の字まぬかれがたくさぶらふとこたへき

世の中はあひもちなりと。いやしきことわざにいへる。まことに道にかなへることばなるべし。みやこありても。ゐなかなければ。其國たちがたきが如く。中國ありても。夷狄なければ。生育の道あまねからず。藥材器用をはじめ。大事小事ともに。たがひにたすくる事多し。國のたふときと。いやしきとは。君子小人の多きとすくなきと。風俗のよしあしとにこそよるべき。中國にうまれたりとて。ほこるべきにもあらず。又夷狄にうまれたりとて。はづべきにしもあらず。おろかなる人は。ゐなかうど田舎人の。ゐなかうどなりと。人のいへるをきゝて。はぢのゝしるがごとく。なにのゆゑもなく。その國を中國なりといはんとす。さる事にはあるまじ

あしきとおもひし事も。世の中にいかほどもかゝる事ありときけば。惡をにくむのこゝろ。しだいにうすくなり。よき事なりとおもひし事も。世の中

やゝもすればもろこしの事をひきて。古今のことなるありて。風俗の同じからぬといへるに。心づきなきはいとうらめし

自注三月の服は。夏后氏の禮にして。同姓不二相娶一は。周禮のみえかりといへり。ひとつをあげて。其他をしるべし

もろこし代々の風儀を見るに。漢の時までは。いにしへのちかき故にや。さはなかりしかぞ。しだいにものごとこゝろつけすごし。いづれにしたりともとおもふ事。とやかく議論して。無き事を有る事となし。小事を大事となし。おほやうならぬと覺ゆる事多し。ひとことをあげていはゞ。御製の詩を。其一代のうちに。羣下の詩とおなじくえらび出だし。一部の書として。世におこなふ事。このくに代々の撰集のごとくし。又はほうし法師。をうな女などいへるものゝなかにかきつらね。わがおきふしする所にかけおかば。なれけがすといひ。又は不敬といひて。もろこしにては。つみをかうふるなるべし。これはそのことわりさる事なれぞ。ほかの事におしうつり。ものごとかくありては。のりのあみ法網きびしく。わが豊葦原の。ことのわかちもなく。ひとすぢにかれをまなびて。これをいとふべきにしもあらず。めい〳〵その時。世のいきほひなれば。またこれをおして。かれをつみすべきにしもあらず。文のつひえ弊は。小人もて僿なりといへる言葉。おもしろしとおぼゆ

自注。文のつひえ。大史公曰。文之敝。小人以僿。注。文尊卑之差也。僿無二悃誠一也。細碎也。白虎通作レ薄

ひじりの風儀にも。せばしと見ゆるもあり。またうや〳〵しからぬと見ゆるもありとぞ。もろこし漢より後の風儀は。せばしなどいふべきにや

ある人もろこしの風儀をしたひ。わがはねを。徑山(キンサン)寺(ジ)のかたはらにはうふれと。遺言しけるとなり。せめて三代の時ならばこそ

今の世にも。遣唐使もがなといへる人ありしに。菅相公の見たまへるこそいみじきことわり斷なりとおもひ給ふべし。日出處天子。又は東天皇などゝし給ひては。もとより彼國とりあぐべきにもあら

もろこしともいへり。誤なり

八雲(ヤクモ)。八咫(ヤタ)。八幡(ヤハタ)などいへる。此國にては。木の成數にしたがひ。八の數をたふとぶとぞ。もろこしにては。六部。からにては六曹と。つかさをわかちしを。此國にては八省とさだめられしと。そのこころなりといへる人あり

おほいにたなうゑ(飢饉)せし時。もろこしにては人あひはむといへる事。紀傳にいかほども見えたり。此國にては。つひにきかず。けものゝしゝ(肉)さへ。いみてくはぬゆゑなめれと。或人のかたりき。かみ(神)のつかひ(使)なりといへる。とりけもの。そのうぢこ(氏子)はくはず。かみ(神)のしづめ(鎮)たまへる山は。こがね。しろがねありても。むさぼれる人。ひらきわけんとはせず。いつまでもかくありたき事なり

此國のごとく。おほきなる弓をもちふる所。外になければ。もろこし人の夷といへるは。もと此國をさしたるにや。大連。少連といへるも。此國の人なるべし。孔子の九夷にをらまくおもひ給ふも。此國。孝順の俗ある事など。きゝ傳へ給へる故にやと。或人のかたりき。もろこしの外なる國ども。狄といひ。羌といひ。蠻といへる。北南西ともに。けもの。むしのつきたる文字なれど。ひがしの國は。仁にしていのちながき(壽)ゆゑ。さはなきなりと。もろこし人のいへることばあり。もろこし代々の記錄をもけみし。又からの風儀をもゑたしく見るに。げにもとれもふ事おほし。されど仁といへるも。そのみちを得ざれは。まことの仁にあらず。いのちながきも。其人々の心にこそよるべけれ。ありがたき國に生れたる人は。その道をつくして。もろこし人の言葉。うそならぬやうにすべきにや

此國は人のこゝろすなほにして。夏商の風にちかし。聖賢をして。今の世にあらしめば。おほかたは忠質の間をもて。をしへとし。事々周家の文章にはしたがひ給ふまじ。むかし王政のさかんなりし時。おほやけの官職規禮をはじめ。もろこしをのり(法)とせられしかど。衰季のしかたもまじりたれば。此國の風俗にもあらず。三代の道にもちがひたる事すくなしとはいひがたし。世のふみこのめる人の。

みつのことわりをつたへ給へると。諸家の記錄にも見え。其ことばさま／＼なれど。うつくしみ(仁)。あきらか(明)に。たけし(武)といへるほかはあるまじ。此三つのことわりは。あめがしたしろしめす。うへなき御たからなれど。周の道も昭穆よりおとろへたるがごとく。いつとなくやう／＼おろそかになり。いともかしこきあまつひつぎの。隱岐の國にあそび給ふにいたりては。冠裳さかしまにおき。この御たからかくれさせ給ひて。かみしもやすき事なく。戰國の世とはなれりける。されど天のめぐりのたえまなく。雲霧のあとたえ。てる日とともに。みつの御たから。また世にあらはれたまふより。今の世とはなりたり。ひじりの御時はしらねど。とざゝぬ御代と。もろこし人のいひつたへしも。かくこそあらめと。ありがたくおぼゆ。されば此御たからのあらはれ給ふも。またかくれさせ給ふも。かみつがたの御せめなれば。其ことわりをつくさせたまへかしと。いはひいのりおもふと。或人のかたりき

此國を。呉の泰伯の後なりといへるは。唐の世。咸亨とゝしのなりし時。此國の人。もろこしにきたり。いひ出だせる事なりと。唐書に見えたり。いかなる人の。かくはいひし。史記に泰伯無レ子といへるを見れば。其說のみだりなる事あきらけし國史を考ふるに。天神瑞穗國を。瓊々杵尊にさづけ給ひしかど。其後はるかとしをへて。神武帝の御代にいたり。難波より東。はじめて職方に歸せしと見ゆ。二尊うみ給ふ八しま。おほかたは今の西海道にて。から(韓)にちかし。隱岐。佐渡。越のしま。いづれもからにむかへる國なり。そのちかきあたりには。風にはなされ(放)て來るから人。今も多し。一書に素戔嗚尊しらぎの國にくだりましてとあり。又からくに(韓地)にうゑ(植)つくさすとあるを見れば。みことその地を經略し。ねのくにとさだめ給ふにや。あめよりして。出雲の國。簸の川のほとりにくだりまし。大巳貴神をうみ給ひ。それより根國(ネノクニ)にいでましぬと。出雲も韓にむかへる國なり

自注。むかし三韓をからといひ。西土を諸越(モロコシ)といへるに。いつの時よりか混じてからともいひ。

たはれぐさ

雨森芳洲 著

たはれたるものゝ言葉も。かしこき人はえらぶといへるをたよりとし。見し。きゝし。おもひし事どもを。そゞろにかきつゞけて。世のそしりいかゞとおろそしけれど。わがのちなる人の。にはのをしへともおもへかしと。たく火にやきもやらず。のこし侍るなり

ふるき記録のふみを見るに。ちゑなき人のいへる事は。いつの世にてもおこなはれやすく。ちゑある人のいへる事は。用ふるものもすくなし。ちゑある人の言葉は。ちゑある人こそ。さる事ありとはいへ。ちゑある人。いつの世とてもすくなければ。ちゑある人の言葉おこなはれざるはうべなり。歎くべきのはなはだしきなり

虞翊がいさめをもちひず。税布をましゝより。羌人謀叛せると。漢史にしるせるをよみて。感じて此書をつくれり。それゆゑ。此ことばをもて。巻をひらくのはじめとするなり

世のみだるゝは。いつとても。男女のみちたゞしからざるよりおこれり。人々のいへることなれども。まことにしる人すくなし

詩始㆓關雎㆒。易基㆓乾坤㆒。まことにしる 眞知之爲貴也

此國の假名にて書ける文ども。言葉のうつくしくたへにして。人の心を感ぜしむる事。まことにわれひとのいふにや及ぶべき。されどしるせる事は。わかきおひたつ人などには。しらせん事いかゞと思ふ事多し。世の中にかゝる事もありやとおもひなば。人の心をそこなふのはしなるべし。世のみちのおとろへたるより。かゝる文もいでき。又かかる文をもてはやせるより。世の道いやましにおとろへたるならんと。かなしく覺え侍る。難波のえだち役より。あめがしたひとつにすべし後は。年はもゝとせにはるかあまり。幕のつかさ府。ななよ七葉やよ八葉になり給へど。をとこをうなの道。いな否といへる事。世がたりにもきかず。世の中めでたからんためしぞと。ありがたくおぼゆ

三種の御寶は。天地開けし始より。御寶によそへて。

此ふみは。豊田勝豊が書うつせるを。梅田三彦がひめ持たりけるに。此ごろ不意に。ふみ商人のもとより求め得つ。ふたりとも淺からぬ中の友なりしに。今はともになき人となりし歎かはしさに。せめてもの心やりにとて。かく表裝などものしつ。もと題號も定かならざりけらし。假に作者のうたの詞によりて。大海のはらとうは書にゐるしぬ。慶應元年の冬。やすむろ

（この原本は小中村博士の所藏にかゝれりこゝの數行の文字は博士の奥書をそのまゝわげたるなりやすむろは博士の家の號なり　編者識）

てさることあるにや
南殿の花のさかりには。とし〴〵花の宴せさせ給ふに。非藏人の奉仕する事しげし。いそがはしき事たぐひなし。その中に。あまりくはしくれぼえけるものにや有りけん。花になく非藏人とうちなげきけるを。ある上北面のきゝて。みづにすむ北面とつけたりけるぞおかしき。北面はゆかしうすれども。御階の花見る事なければなり

中園殿季豊内より退出せらるゝ折。わかき殿上人たち。かのたちをとりかくして。御庭の櫻の枝にかけられたりけるを。こゝかしこもとめありきて。これを見つけて。えだ高ければ取りわづらはれたるを。うたよませ給へ。とりてまゐらせんといはれければ

花ならば短尺をこそつきもせめ
昔も今もかたなゝきかと

上聞しめして。かしこくはめでさせ給ひけり。寛延の御ときとかや。」このごろある殿上人かたられける。今樣のうたよむべきもじとて。歌はたゞあかず。えならず。我にうきなにとかや。すべはわすれにけり。げに此頃はさるもじぞ。みゝかしかましきやうにきこゆる。いにしへの判者。つゝ（本ノマヽ）くしろうなどいふ詞を制せられけむは。そのところぞおほかるらん。いまは中々これあらましかばとおぼゆるものを。それをばなほ所せくまもりて。是をうちゆるべられたるは。やうある事にやあらん

あはれむかし。有りきてふなるくれ竹の。よつぎの翁ならませば。その言のはの末も猶。をかしきふしぞまじらまし。まだ山ほきのふぢの木に。はひまつはれるつたの身の。露と時雨も色にいてじと。おもひくちてはありけれど。さて山河の音にのみ。きゝすぐしなば住のえの。岸のくさはにうづもれん。事もさすがにをし鴨の。さわぐ入江の水ぐきに。大うみのはらの そこはかと。波間のもくづかすめて。あしのしのやのさみだれの。世にもりいてばよもやまの。人わらへにやならんとすらん

成　章

おほうみのはし終

内に御連歌有りける時。光廣の大納言(烏丸寛永十一薨)いまだわらはにて殿上に侍りけるに。執筆すべき由。御けしき有りけるを。家の子に候へば。和歌の事はかたのやうに沙汰し置候。連歌の執筆つかうまつるべききやうこそ。いまだならはずなれと申されければ。もいはれたりとて。ゆるされさせ給ひけり

武者小路の儀同三司の時。内にさぶらひてよませ給ひける

番所ほど寂しきものは(本ノマヽ)
いつも鑵子の音ばかりして

このうたをうへきこしめして。行くすゑ歌よみいでぬべきものなりとの給ひけり。近衛殿の御小ひつ十五年ひさしく南京興福寺の山門にありけるを。近きころかへし奉りけるとなん。其なかに有りがたき文どもれほかりとぞ。民部卿古今開見のゆるされたりける後。三條どのに參りて。其よろこびなどいひて立ちかへり。此よろこびは。大納言殿に申すにはあらず。故公福卿に申すなりとて出でられけり。御即位の日。火爐にたかれたる香の名。先帝の御時のをば治民。今上の御をもくれたけと申すとぞ。元和の御時。沈の御すごろくの盤を人の奉りけるが。其盤わりがたき香ありければ。きらせ給ひて。うへの人々に給はせけり。たか里とぞ名付させ給ひける。「とはましものを梅がゝに」といふ歌のこゝろばへなるべし

逍遙院のおとゞは。公事のいとまに萬のことこのませ給ひて。たきものなど興ぜさせ給ひければ。御方とて。殿にもおほく傳はりたるを。公福卿はいかばかりのいとま有りてか。かゝるいたづら事はせんとて。すべて御ひとりをだにとりよせざりけり

同殿に京極黄門の百人一首かゝせ給へる色紙を。多くつたへもたせ給ひける。代々いみじきたからとして有りけるを。賀敎の卿(正三位大納言元祿十四年薨)の給ひけるは。黄門の德はたふとぶべし。其文字はたふとぶにたらず。かくてあらば中々はかざまにもてちらすやうもぞあるとて。みなとりいでさせて。うらうへにしぶといふものをこくひかせられけり。さてのちは。色紙のくもりて。もじも見えぬやうになりたりとぞ

難波中納言宗達かりそめにたちはしらせ給ふに。人あへておよばずとなん。たぐひなき鞠足には。すべ

人々のは。みないできて。硯まかなひなどさるゝまで。猶うちながめておはしければ。中院内府。なとかくおはすなど問ひ給ふに。中納言かく／＼とよみて侍るを。このいつもじなん。いかに置くべきともおぼえ侍らずと申されければ。内府よろこびて。やがてかゝれにける

しら露のをかのやかたの若楓
ねてのあさけのかぜのすゞしさ

延寶の御時。のもじおほき歌よませ給ひて。人々にもめされけり

老の身のこしの延ねば杖つきの
のゝ字のさまのしたるものかな

これは御門のよませ給ひけるとぞ。又

丸ののゝのゝ字のなかによの中の
人の心のまろきものぞよき

かたかなののゝ字のなりに似たるもの
竹の葉の名の墨の一ふで

猶有りけれどわすれにけり。此ふたつは實陰の儀同三司爲綱の大納言などの申すめる

この比。狛則安が辻右京亮もたる菊麿といふ笙は。いみじき高名のものなり。千の屏上そこなはれて大かた鳴らず。竹もくちつきはなつべからずとなむ。この笙は近衛殿の御物なり。高名の笙。北斗玉島など聞ゆ。北斗はちかき比。鷹司どのに傳はりてあり。狛高房辻圖書權介四辻殿にて五常樂の急を吹けるに。音頭のはじめ。一句のうちに。六たび迄息をつきたりける。ことにいみじかりけり

一とせ。など／＼文字といふもの。内院にもてあそばせ給ひけり

たにのとら　たゝうがみ
むかふのきしくらくして船こゑしてよぶ
三みせん

これらは。ゐんのつくらせ給へるとなん。又たれかつくりけむ

人をうらみて月みゝ本ノマヽかし入る
内侍のうへのきぬ藏人の下がさね
ほすまでたばぬる三把の木　しさい ぼたん

又爲綱卿の作られし。など／＼ほくとて。人のかたりしは

さみだれの雲に入りぬる郭公　桃

石山殿。中ごろ。ことやうなるきせるをつくりいだされたりけるを。石山きせるとて。人々もて興じけり

伏見のみやつくりあらためられける時。寝殿のむねをあけたりけるに。大なるむかで。その棟を二まとひばかりして有りけり。工どもみあざみてのぞきける程に。かいけちてうせにけり。さてほどなく敦忠のみこ（上野太守宮）かくれさせ給ひければ。其さとしにやなど。よにさたがましく聞えけり。

「中院右大臣（通躬公元文四年薨）をさなくておはしましける時。つねにたかどの丶うへにおはしまして。古集など誦せさせ給ふ。父おとゞ通茂公は。したにおはしまして。すこし誦しをこたり給へば。いかに〱とおどろかし給ひけり

雅喬の伯（白川元祿元年薨）歌よみのきこえたか丶りけり。みかど古今集の秘事御傳受の時。おなじくゆるさるべきよし仰せごとありければ。神祇のことをば。分にしたがひてつかうまつり候ふべし。歌はおのづから家々の候へば。あながちに執し候はずとて。辭し申されけり

宗時の中將。家にて。持明院郢曲をうたひすまされたりけるを。あやしげなるさぶらひの。門にたちて聞きけるが。雨のふり出でけるに。ぬれながら猶ねんごろにきゝてたてりけり。さるもの候よし。人の申しければ。やさしきやつなりとて。よび入れさせ。すのこにすゑて。ことさらに一曲をうたひてきかせられけり

此家につたへらるゝ筆法は。歌詠のふしとおなじ心得なり。ふでをめぐらすべきやうは。聲に甲乙の次第あるがごとしとぞ敎へらるなり。又飛鳥井の家の流には。もじをすいさうの板にかゝせてならはせらるとなん。これは墨のながれ。筆のいきほひ。露ばかりもとゞこほる事あらじとなり

將軍家より。人々の源氏物語二卷づゝ書きて給はらんとて。御料紙を給はせたりけるに。資慶の大納言は（烏丸寛文九年薨）老ののち。ちさきもじかく事くるしく侍るとて。ことさらに大なる本をかきて奉られけるが。すぐれてめでたうぞ見えける。今にこの卿のかゝれたるふた卷のみ。中におほきにて有りとぞ。いづれの年にか有りけん。內の御會に。爲綱の中納言（冷泉享保七年薨）岡新樹といふ題をとりて。吟じわづらはれけるに。

沓のおとを聞きて。誰某といひあてられけり。內にさぶらひて。人々の參らるゝを物ごしにきゝて。一人もたがはずかしこくいひあてられける中に。若き殿上人のまゐられけるを。われはいかにと問ひけるに。これはいまだよくしたゝめならはぬ人のなれば。聞きしられずと申されけり

中つかさのみこ御數寄屋をいみじくこのみ給ひて。たてさせ給ふ。御ふすまの門松。萬歳など。年のはじめの景物をゑがゝせたまひて。引手をあはびの貝にし。御ふくろだなのひきてを。丸のゝもじにせさせたまひけるを。民部卿（冷泉大納言爲村）見給ひて

しめかざり松を引く手のしあはび
間毎にめでたう候はれける

と申されければ。みこかしこく興せさせ給ひける

元和の帝。位おりさせ給ひて。八十にならせおはしましける年。はるのはじめによませ給ひける

此春をせめて驚く身ともがな
恥ぢたほしてふ命ながさを

内に奉らせ給ひければ。御返し

このはるの八十を千代のはじめにて
命長さの限しられぬ

時の上達部殿上人など。とりどりに御返しをたてまつられける中に。中院內府

おどろきてひく千代か經ん洞のうちに
うきことしらぬ命ながさは

院御覽じて。位おりぬとて。天下萬民のうき事しらぬやうやはある。あしくいはれにけりなどの給はせて。まめやかに御氣色あしかりけり。これにつきて。すぢなき事どもをそうしきこえける人や有りけん。內府は其後かしこまりにこもりおはしけり。其のち閑庭薄といふことをよませ給ひける

いつはりの世にしほしまぬ友ならば
かきほの尾ばな秋風もふけ

此うたによりてゆるされ給ひけり

中の帝の御時。庭田殿（大納言重賢）四辻殿（中納言實長）童殿上にて。二ところながら御そばえことにて。常に御坐の左右さらずおはしましければ。世には雨狛犬とぞつけられける。延寶の帝。煙草をよませ給ひける

蜑のかる藻にはあらねどけぶり草
なみゐる人のしほとこそなれ

んとて。やがて給はりて。いでられけり

草根集は。正徹法師が松月庵集なり。いみじうよみあつめたるものなり。元和のみかど後水尾院めづらしき心をよみ給ふごとに。またくせ法師もやよみたきつらんとて。此集をくりもとめさせ給ひけるに。はやうよみ置きにけりとて。いたさせずなりぬる事たびたびなりとぞ聞えし

久我内大臣通誠公享保四薨三位中將と申しける時。本願寺の姫君にすみはじめさせ給ひけるに。艶書の歌とてつかはされける

そこひなき心の程はわきかへる
　岩井の清水いはずともしれ

姫君の御返し

世々をへてたえぬ後こそくみしらめ
　岩ゐの水のそこひなしとは

聟君にかはりて。久世大納言よませ給ひけり。御文はくれなゐのかみに書きて包ませ。おなじ色なる御かへしは。あをきうすやうにて。おなし紙につゝまれけり。歌は中院内府によませ給ひけり

野々宮殿皇后太夫に補せられける時。職中の人うるはしく昇進などはせで。なまじひに此宮にさふらふことゝ。うち〱に歎きけるを聞きて。御番所に。れはきやかなるしもとを常にかけおかれけり。何のれうにせさせ給はんずるぞと。人のとひければ。此比宮にさぶらふもの共の。しぶ〱なるやうに申すめるとぞ聞えつる。この司はいみじき清撰として。めで度めいぼくの事なるを。さるくせごと申すらんものをてふせんとてぞかしとこたへられたり

園大納言基衡おもひかけぬふるまひある人なり。殿上にふざらひて。攝政のめせば。參るとて。ことさらにもとゞりをはなちてまゐらる。殿下かしらつきはいかにと問はせ給へば。かいさぐりて。冠を忘れてや候らんなど申されけり

九條の左の大との尚實公御たけ高くおほきにおはしますが。内よりまかでさせ給ふほどに。大納言御後より。物うけたまはらせ給ふに。日野西殿資興をまたとく〱とうちまねかれければ。殿の仰ごとぞと心えて。手まどひをして。いそぎ出でられけるを。ちかく〱とまねきよせて。さあふぎていで。猶殿西殿もたけ高きひとなり。西洞院の大納言時成寶永六薨人々の

ついでに。わきないたく心してつかふまつりつるを。そこにも難なしとや見給ひけん。一つ二つなど申されよかしと仰せられければ。野々宮殿なにか更に難とり出づべくも侍らずと申されければ。おとゞいみじう悦ばせ給ひて。さばれいかにとゝはせ給ふに。殿をば大内辨とこそ申すべく候へ。あまりに口をしく候ほどに。難とりいづべくも侍らずと申されけり

延寶の帝おりゐさせ給ひし時。京極より西冷泉通に。法皇の御ものとしるしたる長びつをすて置きたり。その處のものさわぎひらきけるに。中におい（ママ）たる法師の。手に短籍をもちたるが入り居けり。この歌を院のみかどに御らんぜさせたてまつらまほしさに。かくて侍るなりと申しけり。其歌に

あし原のめでたき國をつかむとや
盲龜の甲にふたもとの竹

とかきたり。あやしきやつなりとて。しばらくをりに入れられけるが。させる罪なしとてゆるされけり。近江の國のものなりけり

明暦のみかど後西院 茶の湯の數寄せさせ給ひけるに。井戸といふ茶碗をえさせ給ひて。二なくひめさせ給ふ。ある時はうへの人びとに。御茶をたまはせけるに。勸修寺の入道大納言經廣法名詔光貞享五年薨參られける時。此井戸にて御茶給ひけるに。入道井戸の茶碗と申すものこそ。名には承りていまだ見ず候へ。給はりて巨々見侍らばやと奏せられければ。給はりけり。入道茶わんを持ちて。かうらんにのぞきつゝ見給ふほどに。とり落して。御前栽のよしある岩のかどにあたりてくだけにけり。帝いみじうをしませ給ふ御氣色なれば。うちかしこまりて。まことはあやまちてとり落し候ひつれど。よくこそつかふまつりて候へ。井戸の茶碗は古きものにて。其かみいくらの人の手にふれけむもしらねば。けがらはしき物にてぞ侍る。おほやけの御調度となさせ給ふべきものにも候はねば。くだけうせぬるこそ。まことにめでたく候へとて。まかり出でられけり。帝も然ることゝや思しめしけん。御氣色なほらせ給ひけり。同御時。よろづの風流を好ませ給ふあまりに。御脇差といふものをつくらせ給ひて。けうせさせ給ひけり。それもそれも。此入道殿に見せさせ給ひければ。これは御はかしの姿にも候はねば。恩賜のれうにや候ふら

ためてこそ。更におほせよとて。あみはてずしてあらためさせ給ひけり。後に火たきたるものあやまちて。煙草をたびて侍ると申しけり。此大納言のつねにかゝる事おはしければ。只人にはおはせずとぞ申しける

おなじ大納言年老いて。腰二重なりけるを。世には蝦大納言殿と申し候ひける。いみじうみづはさせる人も。こしのわたりにてこそあれ。此卿は御むねのほどより。ふとかゞまりたるやうにおはしければ。あまりひまなくて。文つくゑに凭りかゝりておはしける故にやと申しけり

中院内府も（通茂公寶永七年薨）御ひぢのわたり。つくゑにあたるほど。いたくたゞれてはしましけりとぞ

この内府は。雷のなりはためくを。ことに好みきかせ給ひけり。常に喘をやませ給ひけるが。いみじうおこりなやませ給ふときも。雷なり出でぬれば。即をこたらせ給ひけり。有る時には。夕だちいみじうするに。寢殿のむねにのぼらせ給ひて。大笠などめしてぞ聞かせ給ひける」萬里小路の南の門を。藤房門といふ。藤房の卿遁世の時。（建武元年）此門より出でられければ。不吉の門なりとて。今にひらく事なし

御とのゐ處に。人のわすれ置きたる印籠のあるを。みしれる人。八條殿の（中納言隆英）なりと申しければ。わかき人々わけてみむとせられけるに。又さなせそといふひともありければ。通枝の中納言

八條が置きて印籠あけて見ん
蘇香園慮は何かあるべき

葉室殿（大納言頼瀧）橋本殿（中納言實文）御はらからにて（井橋本中納言實松男母同）御かたちも。こと人とも見えぬまで似かよひたり。橋もと殿。内よりまかでられける道に。久世大納言行あひて。葉室殿にせちなる事のあるを。やがてかたり出で給ひける。橋本殿さらにこそ心得はべらね。もし葉室にやおほせらるべからんと申されければ。大納言大に恥ぢおもはれけり。おなじ日の暮つかたに。又ゆきあひて。久世殿そこにこそ申すべかりけれ。まことに似させ給ひけり。けさも橋本殿に申したがへて。はぢ見侍りつと申されければ。おのれこそ今朝の橋本にて候へとて。諸ともにわらひあはれけり」。一條攝政殿（兼輝公寛永薨）節會の内辨をつとめさせ給ひて。後日に野々宮殿に（中納言定基正徳元年薨）御物語せさせ給ふ

どのごふにも。自そひおはしまして。御はかしをさへちかくとりよせさせたまひて。かしこく清くせよ。露けがらはしきことあらばあしかりなんなどの給ひけり。このおんぞうは。すべてさる御くせのれはしけるにや。此おとゞ。後には目しひさせ給ひてけり

有隣軒輔信と申したてまつりしも。いみじういませ給ひけり。侍ふ人あやまちて。疊に手をさへつれば。すなはちわらはせ給ひけり。ひとの奉りたるものけがらはしとて。むつがらせ給ひけるに。小皷といふものをこのみて。うたせ給ひけんこそあやしけれ。

本源自性院入道關白殿に近衞信尋公 法名應山光悦が鯉を奉るとて

　をりあらば申させ給へふたつもじ
　うしの角文字たてまつるなり

御かへし

　いをのなのそれにはあらでふたつもじ
　牛の角もじひまあらばちと

同殿下に。三宅亡羊が茶ほしな生姜をたてまつりける御かへし

　たかのはらやまかりこしても見まほしな
　法の師匠がありと聞とり

風早中納言實種 寶永七年薨老ののち。あつき日。内にさぶらひて。みづをのませけるを。みかど御らんじて。老いたる人は水のむことといむなる物をとおほせられければ。取りあへず

　あなかしこわが後のよを人とはゞ
　ときより外の水なたむけそ

と勅答申されけり。今も此卿の御はかには。ときのみたてまつり。水たむくることなしとなん

元文の帝櫻町院院におはしましける時。いかゞしたりけん。京極通の犬の。御庭に入りてありきめぐりけるを御らんじて。めなれずおそろしとて。いみじうおどろかせ給ひける。ひたすらに御覽じゑらせ給はざりけるにこそ

延寶のみかど靈元院烏丸内府を光榮公 延享五年薨いみじき歌よみなり。一生に秀歌十首はよむべしとぞおほせられけり

久世大納言通夏 延享四年薨ものへまうづとて。湯あみ給ひけるに。此湯にはけがれたることあるべし。火をあら

なびけば走るまでの月かげ

御つかひに。いとゝくよみて奉らせたまひけり。この歌を人々めでおへりけるを聞かせ給ひて。後日に爲久（冷泉）の大納言におひて。誠にや。なびけばはしるを。ひとの興じ候なるは。そこのきかせ給はん事こそはづかしく候へと。の給ひけり」明日香井の中納言（雅量）入はたにまうでられける時。のられたる馬の。ものにおどろきて。はねさわぎ。をどりめぐりけるを。とかく乘りしづめられけり。おもゝちいささかかはらざりけり。さて後に。心しづかなれば落馬することなしとのたまひけり。まだいとわかゝりける時の事なり

此卿ある時。紅夷のぼりきたるを見むとて。いたくやつして。侍にまぎれておはしけるを。紅夷の見て。おどろきさわぎて。いみじき貴人なり。かくておはすべき人にあらずとて拜しけり

逍遥院のおとゞ（三條西内大臣實隆公天文六年薨）三十六の記は。火のことにおひて。なかばやけうせけるを。人々をしみきこえければ。何かをしきとて。一文字もたがへず。そらにかゝせ給ひけり。さるゆゑにや。一再昌となづけられける

おなじおとゞの時。唐さきの松枯れなんとしければ。高名のものゝ。今しもからすらむことゝ。をしませたまひて

花の咲くためしもあるを此まつの
ふたゝび青き緑ともがな

この御歌を。かの松にかけられければ。ほどなく靑くなりたり。末の世にもかゝる事なん有りける。さて後に。武者小路殿の庭の松かれなんとしける時。彼おとゞの件のうたをかゝせ給へるを。かりてかけられければ。又松生きなほりたりとなん

道晃法親王。白かはの宮めでたくつくらせ給ひけるに。ひろき椽のすみをたひらかにきりて。石などすゑて。すきのまちあひ所になさせたまひけるに。雨などふれる軒のさし出だしたるさまなど。たぐひなくおもしろかりけり。亦冬のさむき時は。水間のさうじをたてさせ給ひて。池のをし鳥を御覽じけり

心空華院の關白殿（鷹司兼熙公享保十年薨）殊の外にけがらはしきとをいませ給ひけり。常のとのゝうちをはらひみがゝせ給ふ事。一日に三たび程有りけり。柱いたじきな

おほうみのはし

富士谷成章著

中務の三子有栖川一品職仁親王きたのかた（辰子二條關白吉忠公女）へ。たかうなをまゐらせたまへけるに

たまづさははやく火にたけ殘りては
我憂中を人にしられん

なかのみかどの御時。姉小路中納言（公量享保八年薨）亞相に。任の小折かみをいたさらで。久しうなされざりけるころ。内の御常座に。河といふ題をとりてよみ給ひける

もがみがはいつかのぼらんいな舟の
いなと計にすぎゆくはうし

これを叡覽ありて。いみじうあはれがらせ給ひて。御かへしとて給はせたりける

最上がはやがてのぼらん稻ふねの
いなとばかりにすぎはゆかじを

かくて又の日。大納言になさせ給ひけり

内に御祝の事ありて。醍醐左大臣。冬熙公久我右大臣。通見公御とのゐどころにて盃酌ありけるに。久我殿いたくしひ申されければ。醍醐殿御かはらけに。たふたふとうけ給ひて。おほやけの御祝の事に候へば。すまひ申すべきにあらず。されど冬熙ははや過分にたびて候程に。すべなく侍る。この直衣のいまだたびず候にのませ候へと。御なほしのかたよりさと流しかけさせ給ひければ。久我どのいたくかしこまりてぞおはしける

この右大臣。行作いみじくおはしまして。御くつの音なども。人にすぐれたるも。延享のみかどは（櫻町院）此くつの音を本とせよと。常に人々に仰せられけり。

あるひと。公福卿の（三條西大納言延享三年薨）歌よみて。天地をうごかさんこと。いかにとゝひけるに。夫はその人の德なり。かま倉のおとゞの。すくれは民のなげきなりとよませ給ひ。能因が。なはしろ水にせきくだせとよみたるも。たゞ人がらぞかしとのたまひけり

内に當座の御會ありける時。武者小路の儀同三司（實陰公元文三年薨）いたはることありて。參り給はざりければ。竹亭月といふ題。たゞいまさとよみて奉るべきよし。里亭へおほせごとありければ

くもならでかせをやまたんくれ竹の

之舊一。其事去レ今廿餘年。後獲二北魏書晉書二證一。知二前說之不一レ誤。迷庵化爲二他物一。愚亦鬢髮變レ白。回二顧之一。總與二一塲夢一無レ異。頃有下擧二轉注一事一問者上。於レ是書三昔日所レ考。與二其後所一レ見。以答若レ是。天保乙未年二月三日。狩谷望之草

轉注說終

貝原益軒說。小學卷首六藝六書曰。性理紀聞焦氏筆乘論。轉注假借而辨古人之誤。可謂精詳也。可以爲據。

たゞ江永が本義外展轉引伸爲他義。或變音。或不變音。皆爲轉注。其無義而但借其音。或相似之音。則爲假借と云ひたる（戴震答。江永論小學書の中に引けり）暗に愚說に合へり。」然れども說文序羼入の事を云はぬ。いまだ江永が書の全文を見ざれば極め言ひがたけれども。若し羼入を删る說あらば。戴氏が答書。これが可否を辨せざる可からざるに。其事無きを見れば。江氏の說此に及ばざりしならん。說文の序の建類一首。同意相受。考老是也とあるを。許愼が言とすれば。江氏が說之に合はず。戴氏が其說に從はざりしは。この故なるべし。然らば江氏が說も偶中にて。覈說にはあらず

許宗彥は。指事。象形。形聲。會意。皆指造字之始。言之則假借轉注。亦出於造字之始可知也。或分事形聲意爲體。假借轉注爲用者非也と云ひたれども。六書と云ふ名は。文字も備り。それを使用して文章をなす事を敎ふるに至りて。設けしものなり。倉頡が時出來しにはあらず。周禮に保氏が國子に敎ふる目に出でたり

書勢に。黃帝始作書契。字有六義。玉篇表に。庖犧始成八卦。倉頡の時此目ありし如くなれども。後よりしてくらしと云へるものにして。其實は周禮に始めて見えたるなり

周の代。文字行はるゝ時に至りて。學ばんには。先文字の本義を知るべく。文字の本義を知らんには。其字の指事なるや。象形なるや。形聲なるや。會意なるやを辨へ。さて夫を使用する法を出（本ノマヽ）なはざれば。文章をなす事能はざるにより。轉注。假借の二をも學びしなり。其實は指事。象形。形聲。會意等をわかつ事はしらぬとも。文字の本義を知り。それを轉じて使ひ。又無き字は假借する事をしらば。用に於て足らざることなからん。保氏これを敎へずして。たゞ造字の本をのみ敎へんに。いかでそれを使用し得べき

往年與二友人市野迷庵一論二六書一。迷庵以二互訓一爲二轉注一。（戴震說暗合）愚以二展轉引伸一爲二轉注一。以二序建類一首同意相受考老是也等語一。爲三後人所レ加。非二許愼

の考へし轉注は。造字の本にもあらず。使用の法にもあらず。其說に從はずして。五書とせんも。文字を使用するに足らざること無ければ。必然らざることを明らけし

戴東原文集卷三。六書論序云。謂轉聲爲轉注者。起於最後。於古無稽。特蕭楚諸人之臆見也

案。轉聲是眞之轉注。戴氏說非

明楊愼轉注。古音略古音叢語等序。所言据周禮注。以爲展轉注灌之義。以說文序之考老是也爲謬。殆近望之說。唯以說文序文。爲後人竄入者。古來未有之也

我亨保年中界浦叡龍著。韻鑑古義標註補遺。曰轉注者。謂一字轉其聲而讀者是也。謂展轉其聲而注釋。爲他字之用者也。如惡字本善惡之惡以其有惡也。則可惡。故轉爲憎惡之惡。內外之內爲收內之內之類也。易疏云。賁有七音。義各不同。觸類而長之衰有四音齊。有五音從。有七音差。有八音敦。有七音。皆轉注之極也。說文曰。轉注考老是也。佩觿集斥云。考老字左同右轉者。是孟浪也。謂老字下从匕。考字下从丂。各成文非反考爲老。是則許氏不得周禮之一字。數義展轉。注釋而後可通語。意遂以反此。作彼爲轉注。自許愼以來。同意相受。考老爲轉注。鄭玄以之而解經。夾際以之而成略。遂失其本旨矣。嗚呼。愼旃哉

焦氏筆乘曰。轉注轉音而注義云々。又曰熊朋來曰。古初制字多象形。故象形爲六書之首。形不可象而指事。事不可指而會意。意不可會而諧聲。聲無可諧。五不足而假借。又曰原轉注之義。最爲雜明周禮注。曰一字數義展轉。注釋而後可通。後人不得某說。遂以反此作彼爲轉注。許愼云。轉注考老是也。毛晃云。老字下從匕。音化。考字下從丂。音巧。各自成文。非反考爲老也。王柏正始之音。亦以考老之訓爲非。蕭楚謂一字轉其聲而讀。是謂轉注。程端禮謂假借。借聲轉注轉聲皆合周禮轉展。轉注釋之。說可正考老之謬矣。又易疏云。賁有七音。義各不同。觸類而長之。衰有四音。齊有五音。從有七音。差有八音。敦有七音。辟有十一音。皆轉注之極也。又曰。自許愼以來。同意相受。考老爲轉注。鄭玄以之而解經。夾際以之成略。遂失其本旨。

をかり用ふるものあり。許は許聽の義なるを借りて。鄦國の字に用ふるが如し。又原其字なくて。同音の字を借り用ひ。後に其字出來たれども。猶本のまゝに借字をのみ用ふるものあり。辰は辰巳の字なるを借りて。辰會宿の義を用ひ。後に辰會の字出來たれども。其字は用ひずして。辰の字をのみ用ふるが如し。又皇國にて。西土の文字の音を借りて。皇國語を書くをかなと云ふ。全是と同じ。かは假なり。なは名にて。即字と云ふことなり。古かりなと云ひけんを。音便にかんなと云ひ。後に省きてかなと云ふなれば。かなとは。即假借文字と云ふことなり[illegible]

此轉注假借の二つは。文字を使用する法なり。文と字との本義のみにては。用を成すこと能はざるにより。轉注して本義を治用し。文字無きをば。同音の文字を假借してこれに充て。用を成すことを得。故に文字ありといへども。此二法無ければ。語言を成すこと能はず。此二法を以て。文字を使用すれば。事として辨ずべからざるは無し。故に文二つ。字二つに。此二つを併せて六書とは云ふなり」この六法備はらざれば。文字を使用し。意を達すること能はざれば。此理は誰も誰も知るべき事なれども。かく云ひては。轉注者。建類一首。同意相受。考老是也と云ふ義に乖くを以て。こゝに思ひ寄らざりしなり。」故に六書の義を定めんには。必先說文の序に。羼入せし謬說を删りて。許氏の舊に復するに非れば。其正義を得ること能はずとは云へるなり

明以上の諸家六書を說きし轉注の說。皆非なることは。今論ずるに及ばず

趙宧光が六書長箋。戴震が東京文集。曹仁虎が轉注古義考等に詳に論じたり

清に至りて。學問精密を極めたれども。此轉注に至りては。いまだ善說を得ず

戴震は。老考也。考老也と訓ずるによりて。互訓の說を立て。曹仁虎。許宗彥は。建類一首同意相受の語によりて說をなせり。皆後人羼入の文によりて興したる說なれば。云ふに足らず。」上に云ひし如く。指事。象形。形聲。會意の四つは。造字の本。轉注假借の二つは。使用の法なれば。一をも闕くべからざれば。六書と定めしなり。この人々

り。从レ儿从レ匕。儿者高遠意也。久則變匕。亡聲。亻者例亡也。會意にして。諧聲の字なり 又とあるが本義にて。遠長の字なるを。轉じて物の長短の字とし。又轉じて長上聲幼の字とし。又凡人に勝れたる人を。長者と云ひ。佛典に。財に富める人を長者と云ふも。其意全く同じ 又轉じて主領たる者を長と云ふ。此の如き類を轉注と云ふ 慧琳經音景審序。及倭名鈔並云。考聲切韻而慧琳所引。皆略曰考聲約之案説文序所云建類一種同意相受又云本無其字依聲托事二言皆是也只考老令長四字不是考老二字當作令長々々轉注之字也令長二字當作爲也々々假借之字也

轉は。車輪の運するが本義にて。凡物の移るをも轉と云ふ。譬へば左にあるものを右に移し。上なる物を下におろせば。物は即其物ながら用を異にするを云ふ。注して灌なりと釋し。滴の字を水注也とも解して。水の甲より乙に流れ注くが本義なり。山の水を注して谷水となし。谷水の注して川水となり。川水の注して海水となるが如く。物は其物ながら名を異にするを云ふ。轉注は。轉運灌注の義にて。文字の本義をめぐらし使ふを云ふなり」。又灌注の義。轉じて書の解しがたきを釋するを注と云ふ。難義を解して流注せしむる故の名なり。戴震は此義によりて。轉注を互訓とせり。段玉裁此説に從ひたれども。

許宗彥が鑑止水齋集い轉注説に是を破りて。東漢以前。釋ニ古人之書ー者曰レ解曰レ説曰レ傳曰レ故曰ニ章句ー曰ニ解故ー曰ニ説義ー無下曰レ注者上。自ニ鄭氏ー始有ニ箋注之名ー。以後及ニ多作レ注。而欲下以レ此當中六書之轉注上。恐非ニ篤論ーと云へり。是論覈實從ふべし。もし戴段の説の如く。轉互注釋の義とする時は。轉注は文字を注釋するの法にして。用字の法と云ふ可らず。又段王裁は。予所言の轉注を假借の中に包有して。引申假借とする名目を立てたり

五經文字曰。寤寐此に字並從レ爿。轉注案。是轉注亦考老是也

然れば衛恒が假借の例に出だしたる令長の二字は。轉注の例に出だし、考は。形聲字。老は會意字なること。倶に假借にあらで轉注なり」上に云へり 又聲を借り用ふるものは。其字無きによりて。其物の名と同音なる文字を。何の文字にもあれ。借り用ふるを云ふ。譬へば之は出也と訓し。草の地より出づるなり 焉は鳥名。也は女陰なるを音の同じければ。皆借りて語辭とするの類を假借と云ふ

假借はもと其字なくて。同音の字を借り用ふるはもとよりなり。然れども本其字あるも。同音の他用

らず。如此改正して。考老の說。建類一首。同意相受の語を刪らば。六書の義。始めて說くことを得べし

それ六書とは。古書を讀み解かんにも。今文を書き綴らんにも。此六法に通ぜざれば。手を措くこと能はず。故に保氏をして。是を敎へしむる也。」其六は事を指し示したる上下の類は指事なり。物の形を象りたる日月の類は象形なり。此二つを文と云ふ。又其物の文に从ひて。名に呼ぶ聲の文を添へたる江河の類は形聲なり。形聲の某聲と云ふものも。聲をとりたるばかりにてはなく。原は必義ありしものなるべし。今に至りては。其義の知りがたきもの多し。其推して知るべきも往々あり。たとへば某聲の字は。多くは薄片の意。堯聲の字は。多くは高明の意なるが如し。かく云へば。會意と混ずるが如くなれども。會意は聲にあづからず。形聲は必聲によるを異とす。又形聲と云へる名義は。江河の字なれば。水旁は形にて。江河は聲なり。形と聲と二つのものを合せて字となる。故に形聲と云ふ。或說に形聲と云ふは。象聲と云ふと同意にて。聲音を形容する義なりと云ふは非なり。約之案。假借之稍有義者。即轉注々々之。全無義者。即假借

又案。以易象巫占者。用轉注假借甚多。否則周易二經十翼無用之物也

約之案。亦字をも通じて文と云ふ。說文每部末に曰く。文幾重幾是なり。二文を合せて義をなしたる武信の類は會意なり。此二つを字と云ふ

對文なれば。其別かくの如し。散文には。文をも通じて字とも云ふ

說文は。此四つの本義を釋したる書なるにより。說文解字とへり。文と字とを說解せしと云ふ名なり

今說文と云ふは。省きて便に從ひしなり

此文と字とを使ひ用ふるに。其本義を用ふるものあり。義を轉じて用ふるものあり。聲を借り用ふるものあり。本義は說文に釋せし義是なり。義の轉ずるものは。譬へば令は發號なり。从亼卪。會意の字なりとあるが本義にて。法令の字なるを。法令を出だして。民を法令の如くならしむるより。轉じて使令するを。總て令平聲と云ひ。法令は吏長の民に命ずる故に。轉じて其命ずる吏を令と云ふ。縣令など是なり又長は久遠な

と云へり。然れども。一曰古文の下には。孔子壁中書也と云ひ。二曰奇字の下には。即古文而異者也と云ひ。三曰篆書の下には。即小篆と云ひ。四曰佐書の下には。即秦隷書と云ひ。五曰繆篆の下には。所㆓以摹㆑印也と云ひ。六曰鳥蟲書の下には。所㆓以書㆓幡信㆒也と云ひて。文勢も能調ひ。理も明に聞えたるに。獨篆書の下。又は佐書の下に。此十三字あるべきに非ず。篆書の下にあるべからざるは上に云へり。佐書の下にあらば。其說誤らざるに似たれども。若し程邈が隷書を作りしことを云はんとならば。前の秦書八體の八曰隷書とある所に云ふべきに。そこには云はずして。爰に至りて始めて云はんことも理無し

是を何によりて羼入したらんと思ひしに。上下是也。日月是也。江河是也。武信是也。考老是也。令長是也と云ふこと。漢興有㆓草書㆒と云ふこと。下杜人程邈。爲㆓衙獄㆒吏得㆓罪始皇㆒。幽㆓繫雲陽㆒十年。從㆓獄中㆒作㆓大篆㆒。少者增益。多者損減。方者使㆑員。員者使㆑方。秦之始皇善㆑之。出爲㆓御史㆒使㆑定㆑書と云ふこと。皆晉書衞恒が傳に載せし。四體書勢に出でたり。然らば此羼入は。後人四體書勢によりて書き加へしものなり」四體書勢下杜人の上に。或曰の二字を冒らず。もし許愼が語に。下杜人程邈が所㆑作と云ふことあらんには。或曰とは云ふべからず。又指事者。視而可㆑識。察而可㆑見云々の語は。顏師古も此の如く云ひて。漢書藝文志を注せり

漢書注には。察而見㆑意とあり。識と意と韻を押したるにて可見と云ひては韻合ざれば。說文の序は決して誤りしものなり

もし說文序に此文あらば。顏師古必これを引くべきに。出典を云はざれば。顏氏が見たりし說文には。此等の文無かりしと思はるれば。是も後人の羼入なる事知るべし

但此六書を說きたる語何に出でたるか。顏師古も此說を用ひ。賈公彥周禮疏及廣韻の卷末にも略載せたれば。唐宋の間。專行はれし說と見えたり

或說曰。廣韵卷末。只言左轉爲㆑考。右轉爲㆑老。無建類一首等語。盖係㆓先生之偶誤㆒。宜㆓删去㆒也

然らば。轉注ヲ考老是也と云ひしは。衞恒が謬說にて。視而可㆑識。察而可㆑見等の語も。許愼が言にあ

轉注說

狩谷望之著

六書の說。指事。象形。會意。形聲。假借の五は。古人の說く所。略。異說無し。轉注の一つ。人々同じからずして。聚り訟ふるが如し

說文序に。考老是也とあれども。老は从二人毛匕一。三體會意の字。考は从二老省一丂聲なれば。形聲字なること。各字の下に釋したれば。序に云ふ所と合はざるによりて。說々の生せしなり

今攷ふるに。其說皆據るべからず。愚謂らく。轉注の義を說かんには。先づ說文の序に。後人の羼入あるを沙汰し删り去りて。許愼の舊に復するに非れば。其正義を得ると能はず」其羼入せし文は。一曰。指事の下なる指事者。視而可レ識。察而可レ見。上下是也と云ふ十五字。また二曰。象形の下。三曰。形聲の下。四曰。會意の下。五曰。轉注の下。六曰。假借の下なる十五字。皆々後人の羼入なり。是を羼入と知る故は。後魏書江式が傳に。其著せる論書表を載せて。歷代の書の沿革を論せしに。庖犧氏の八卦を畫し。神農氏の繩を結び。倉頡が初めて書契を作りしより。漢の代に至るまでのことは。皆說文の序と全く同じくして。一も增減すること無く。次序も改むること無ければ。說文の序に依りしこと知るべし。然るに論書表には。周禮。八歲入二小學一。保氏教二國子一。先以二六書一。一曰指事。二曰象形。三曰諧聲。四曰會意。五曰轉注。六曰假借云々とありて。所謂十五字は。皆有ること無し。是江式が見たりし說文の序には。いまだ後人の羼入無かりしを證すべし」又序の後の文に。漢興有二草書尉律一とある草書の二字。又王莽が時の六體の書を云ひし。三曰篆書。即小篆の下なる。秦始皇帝。使二下杜人程邈一所レ作也と云ふ十三字も。論書表には無し。草書のこと。序中前後に云はざるを。こゝに突然と云ふべきに非す。小篆は序の前文に。李斯が作りたることを云ひたれば。此に至りて程邈所レ作也と云ふべきに非す。然れば是等も江式が見たりし本には無くて正しかりしを。後人の羼入したるなり

段玉裁は。秦始皇帝云々の十三字を。後の四曰佐書。即秦隸書と云ふ下にありしが。錯亂したるなり

ち給ふといふこともなく。多くは准后の宣旨を行はるゝ例になりたり。思ふに。是は其初より女御にはましまさず。女御代にておはしますが故に。又中宮に准せられて。准后の宣旨ありて。後々には院號を參らせらるゝ事にぞあるべき。凡かゝる代々に隨ひて。或は高く。或はひきくなりゆくも。我朝も異朝も。段々此の如し。只當時目に見。耳にふるゝ事を準據として。古を注せんも。不通の論といふべし。されば古今に通ずるを以て博文とは申すなるべし

准后准三后考 終

是は文武の朝に。藤原不比等勅を奉けて。撰定せられし所なり

文武は。四十二代にあたらせたまふなり

見えし所は。妃二員四品以上。夫人三員。嬪四員五位以上と見えて。其餘。內侍の司より下は。皆盡く宮人にてあるなり

妃夫人嬪などいふは。正后の外の御妻なり

其代には。女御更衣などいふ稱は聞えず。女御といふ名の見えし事は。五十五代文德天皇崩じ給ひし天安二年。淸和天皇の位を繼がせ給ひし初に。文德天皇の女御。從三位藤原朝臣古子に。從一位を加へ給ひし由。三代實錄にみえたり。さらば其比ほひには。女御などいふ稱は既にありしなり。源氏物語に。女御。更衣又は御息所などいふ事見えたり。此物語は。六十六代一條院の御代に出で來れりと見えたれば。其比ほひは。古の妃。夫人。嬪などいふ職名。盡く改まりて。女御。更衣などいふ稱とはなりしなり。それを後世の女御の事共は。八十五代順德院の御製の禁祕抄にみえし所を以て。世には其據とせし事と見えたり。かく女官の如き。其稱のむかしにかはれることも。朝家の權。ことごとくに攝關の人々に奪はれ給ひ。朝儀百廢して。日々に出で來りし事なれば。衰世のことにぞあるべき。されど尙其初には。女御。更衣などいふも。古の妃。夫人。嬪などの如くに。宮中の女官にて。正后の如く尊びし事とは見えず。しかあれども。女御には。大臣の女をなさる。納言の女は希有の例なり。更衣は多くは納言の女なる由見えたれば。女御には。多くは當時權勢ある大臣の息女を參らせられし事なる故に。いつとなく。かく正后の如くにはなれるなるべし。凡。物の盛なるは。必衰ふることわりなり。されば攝關權勢あまりに盛なりし後。時の勢一變して。院中にて政務をとらせ給ひて。藤原の權勢やゝおとろへ。其後また一變して。武家天下の事を知り給ひしより。攝家の權つひに衰へしより。女御を參らせられし事も。古の例の如くに行はるゝ事もかなはず。是よりして女御代といふことは出で來しにや有るべき。すべて何代と申すとは。後代出で來りし稱にて侍る

親王代。判官代などいふ事の類

然るに。又近き代には。女御よりすぐに。中宮に立

准后の始なるべし。又按ずるに。將軍の男准三宮の宣旨ありし始は。鹿苑院殿の息。梵光院准后法尊六覺寺。准后義照二人を始とや申すべき

清華准三宮の始
未詳

逍遙院殿の御説に。清華其例希なり。たしかに所存を得ず。北畠親房卿。南朝に於て宣下なり。當朝には用ふべからずと注せられたり。其初さだかならずと云ふべし

右數條某が不才なる。見もし。聞きも及びし所を以て。其事の始めと思ふ所を先注して。進呈す
謹みて按ずるに。日本紀に。神武天皇庚申の秋。事代主神の女。蹈韛五十鈴媛命を納れて。正妃となさる。此とき。未。帝位に即かせ給はぬ時なり其明年辛酉の春正月。帝位に即かせ給ひしかば。正妃を尊みて皇后となされしよしみえたり。是本朝皇后を立てられし事の始めなり。其後代々帝即位の初め。皇后を立てられし事。皆是初め皇太子たりし時の正妃を尊みて皇后となされし事。猶神武の例の如し。其後五十代の帝桓武天皇。御父光仁の讓りをうけ。帝位に即き給ひし初に。始めて中宮職をおかる。是本朝中宮を立てられし事の初なり。其後延暦二年四月中宮を立てられし年より。二年にあたる又皇后を立てらる。北畠准后の職原抄に。中宮に即皇后なり。本朝二宮を幷べ置くは。甚其謂なし。是より此かた代々並べ置く。因りて四宮と號すとも見えたり
太皇太后宮。皇太后宮。皇后宮。中宮。合せて四宮なり。さらば桓武より後は。代々皇后宮。中宮二宮を並べ置かれしなり

此事は。むつかしき事にて。其說長ければ。先大略をしるすなり

五十六代淸和天皇より上つかたは。幼主即位の例。本朝にはなき事にて有りしかば。天子御即位の日。皆東宮の時の正妃を尊みて皇后となされしなり

桓武より二宮を並べ置かれしこと。此例にあらず即位ののち。多くの年を經て。立后の事あることは。是皆幼主位を繼がせ給ひ。御元服の後に行はれし例と見えたれば。夫人。女御など申す中に。或は皇子を設けられ。或は天寵を蒙られしなど。立后の宣旨ありしと見えたり

又謹みて按ずるに。後宮職員令に

ひしにや。若くは又武家の代となりて。准三宮の始。鹿苑院殿に起れりとのことにや

又按ずるに。大臣の妻。准三后の宣を蒙りし始も。淨海の宣を始とぞいふべき。夫より前のこと。未だ詳ならず。此後は。西園寺大相國實氏の室。從一位貞子を。北山准后と申しき。此ひとは八十八代後深草。八十九代龜山院兩代の御母。大宮の女院の御母なれば。此宣を賜はらせ給ひしなり。何れも皆御門の御外祖母なるが故なるべし

將軍家准三宮の始

鹿苑院太政大臣從一位源義滿

百一代後小松院明德三年六月。准三宮の宣旨あり。其時左大臣從一位にておはしき。其後百四代後土御門院寛正五年十一月。慈照院大相國義政公。准三宮の宣を蒙り給ふ。東山殿と申す御事なり。其時は左大臣從一位にておはしましき。此二代は將軍の職にておはしまして。此宣ありき。義政の御弟大智院贈大相國義視は。終に將軍には成り給はざりしかど。准三宮たりしよし。諸家の系圖には見えたり。此人は。初。御兄義政天下を讓り給ふべしとて。父子の如くにおはしけり。義政に男子出來給ひし後。不和の事起りて。終に應仁の亂は出來りき。多くの年を經て。義政の實子義尚將軍もうせ給ひしかば。義政。義視と中なほりし給ひ。義視の息男。義植を子とし給ひて。世を讓り給ひき。されば義視に准三宮の宣旨をなされしにや。義視世にまし〳〵ヽ内は。今出川權大納言入道殿と申しき。其男義植將軍になり給ひしかば。沒後には贈官の事もありしなり。是將軍にも任ぜず。大臣にも任ぜずして。將軍の御父なるが故に。准三宮の宣旨ありし例とやいふべき。但義視准三宮たりしことは。公卿補任には見え侍らず。さらば此人の此宣旨ありしことは。初淨土寺の門跡にておはせしときのことにや。未だ詳ならず

法中准三宮の始

靑蓮院准后道玄

是は八十八代後深草。八十九代龜山院兩代の關白。二條の普光圓院良實の息なり。良實は二條殿の始にてまします。道玄弟三井寺長史大僧正道瑜も准后たりしよし。大系圖にみえたり。是攝家門跡。

これは東宮の御伯母なり

東宮位に即かせ給ひし後は。中宮に立たせ給ふべしとの御定なり。されど東宮御即位の後。即。二條院なり 近衛院の后藤原多子を。中宮になされしかば。所謂二代后なり 高松院をば中宮准宮など世には申し傳へけり。八條院も高松院も。美福門院の御腹にて。近衛の御妹にまします。鳥羽法皇あまりに美福門院を寵せさせ給ひしかば。かくはからせ給ひき。これ即。保元平治の亂。よりて起りし所にして。本朝の王家おとろへさせ給ひし事の起りの。其一にて侍るなり。此二人の皇女。同じく准后と稱し申しゝかど。一人は帝の御養母。一人は初めより東宮の御息所にすゑ參らせしかば。尋常の內親王の准后の宣下を蒙り給ひしとは。少しく例かはれるやうにも侍る歟

女院准后の始

高松院

即位高松御息所と申しゝ御事なり。前に注しぬ。後代に及びて。正しく女御と申すはおはしまさず。多くは女御代と申し參らする御事なり。其御腹の御子。東宮にたゝせ給ふて後。三宮に准ぜられて。母后とならせ給ひし時に。院號を蒙り給ふなり。近き比ほひ。後水尾法皇の御母は。後陽成院の女御代にておはしましゝが。准后の宣を蒙らせ給ひて。後には中和門院と申し奉りき

法親王准三后の始

二品道深法親王

是後高倉院の第一の御子。八十五代後堀河院の御弟なり。また後高倉院と申すは。帝位にはつかせ給はず。後堀河院御即位ありしかば。尊號を參らせられしなり

武臣准后の始

太政大臣從一位平清盛入道淨海

此人は。八十一代安德天皇の御外祖なりければ。安德御即位有りし治承四年二月。淨海夫婦共に准三宮を宣旨せらる。是武臣准三宮の始めなるべし。されど逍遙院殿の御記には。鹿苑院每事の樣。攝家昇進の如くなる故に。始めて此宣を蒙らしめ給ひし由を注せられたり。心得られず。但。淨海のことは。其例の始のよからぬ事なれば。斯くの給

もと是從一位の唐名なり。されば中古以來二品に敍せられしのち。准ニ大臣ニ可レ預ニ朝參ニのよし宣下せられしを。後に儀同三司と號するなり。人數も定まらず。又官にあらざれば。辭退などいふ事もなし。前官當官の沙汰もなしと見えたり

親王一品二品三品の事

職原抄にみえし所は。皇子の親王に立ち給ふ事。尋常の例なり。襁褓童體にましますといへども。宣旨を蒙り給ふなり。元服のとき叙品は。當代の后腹の親王は三品。自餘は四品といふことしるされたり。又逍遙院殿の御說には。先親王宣下あるとき。初位の心にて無品に敍す。其後。或は三品。或は二品に敍するなり。一品は殊に執せらるゝ事なり。又無品と申す事は。五品にや當り給ふべきと問ひ申しゝに。五品にや當り侍らんは。四品までの位なれば。無品は四品の次とぞ覺え候ひつると答へらる。また親王の位は勿論なり。世話に。二位。三位をも。二品。三品。四品などいふは。唐名のやうに。かくは申しならはしけるよしをのたまひき

攝家准三宮の始

太政大臣從一位藤原良房

委しく別に注したる故。こゝに略す

內親王准三宮の始

一品資子內親王

是は六十二代の帝。村上天皇の皇女にて。冷泉院御同腹の御妹にてましますなり。此後內親王にこの宣下あること連綿たえず。謹みて按ずるに。七十六代近衞院十七歲の御時。かくれ給ひし後に。御父鳥羽法皇。近衞の御母美福門院とはかり給ひて。其御腹に生れ給ひし皇女暲子內親王を帝位につけ參らせらるべしとありしかど。稱德天皇ののちは。其例久しく絕えたれば。近衞異腹の御兄雅仁親王の二十九歲にならせ給ふを。おして經體の君に定めらる。後白河院と申しゝは是なり。即ち後白河第一宮守仁親王を東宮と定められ。法皇の姬宮暲子內親王を東宮の御養母となさる。是は后に立たせ給ひし御事もなかりけれど。八條院と申し參らせ。また是を准后とも申しき
又暲子の御妹高松院を。東宮の御息所となされ

准后准三后考

新井白石著

職原抄中務省の下

太皇太后宮　帝王祖母也

皇太后宮　帝王母也

皇后宮　帝王妻也

以上謂之三宮　和漢同

謹みて按ずるに。三宮の事。職原抄に見えし所。右の如し。准三后の事は見えず。三代實錄幷に公卿補任等を按ずるに。五十六代の帝。淸和天皇貞觀十三年四月十日。帝の御外祖。太政大臣從一位藤原良房に（即。忠仁公の事）詔して。賜封三千戸。或本に四月朔日に。隨身兵仗を賜はり。年官幷に准三宮よしみえたり。年給とて。太上皇より初めて。年ごとに定まれる御給あること諸臣にいたる。忠仁公へ賜ふ所の御給。三宮に准ぜられし事の御事なるべし。後代に及びては。御給などいふ事もなければ。只其名のみありて。其實なしとみえたり。年給には年官。年爵。封戸などいひて。年ごとに賜はる所の事長し。さればこゝには略す

是准三宮の號のよりて起る所なり。夫より後は。攝家の人々はいふに及ばず。皇子（內親王法親王）宮人諸臣幷に法中の輩までも。此宣旨をたまふこと絕えず。委しくしるさんには。事煩しければ。唯其始にやあるべきと思ふを。別に注して進呈す

儀同三司准大臣の事

職原抄に見えし處は。准大臣などいふことは。文武天皇大寶三年正月に。三品刑部親王を知太政官事となされ。又聖武の朝に。參議從三位大藏卿鈴鹿王を。知太政官事となさる。是其濫觴なり。帥內大臣藤原伊周は。房前九代の孫。關白道隆の男なり。歸京の後。寬弘三年（一條院の年號）朝參のとき。大臣の下。大納言の上列なる。同十五年准大臣。賜戸一千戸ければ。自から儀同三司と稱するよし見えたり。されば其事の起りは。文武。聖武の朝より始まりて。正しく准大臣と云ふ。又儀同三司と稱することは。伊周を以て其初とすべし。此後は代代に少からず

逍遙院殿の御說を按ずるに。儀同三司といふは。

學。昔よりかつて上には先聖述而不レ作の教を奉じ。下には先師述而不レ可レ作の戒をうけて。よのつねの人に對し。假初の詞にも。いまだ無證の言を發せず。ましてや書に筆して。公に進呈せんものに。わづかも疑ひあらんことを以てせん事は。某が愚誠尤畏る所にして。且素懷にあらず。これ敢て自からの異見を立てゝ。上命を違拒するにはあらず

人名考 終

の意見を加へず。然れどもかの古人の抄錄せし所も。猶疑ふべき所尤多きが故に。私考を作りて家に藏む。今その草案を以て呈す。某が意を用ふる所。すでに此のごとし。然るに今又仰を承りて。一つの別本を下し賜はりて。此書を以て。某か進呈せし冊子に收め入れざる所の文字を增し補ふべき由を承りぬ。謹みてかの別本を以て。拾芥。節用等の書にたくらぶるに。彼書に收むる所の文字ことに多く。文字の訓もまた拾芥。節用等に見えざる所多し。尤も珍書と云ひつべし。細かに是を考ふるに。彼書古に聞えし名字抄にもあらず

洞院殿の御記に。成の字を房と訓ずる事。名字抄にありと見えたり。今彼書の成の字の訓に。房といふ訓見えざるを以て。古の名字抄にあらざることをしるなり

又少し疑ふべき所は。文字の音。近きころほひ異朝より來れる字彙の音を誤用したりと見えて。古より本朝に用ひ來れる音にあらざる所。六七字に及べり。是古書にはあらざる證の一つなり。又古人の名に。いまだ用ひざる所の奇字。多く此書に收め入れたり。これ古書にあらざる證の二つなり。同字重り書けるもの十字ばかり。是又うたがふべき事の三つなり。文字の音。心得がたき所殊に多し。是疑ふべき事の四つなり。文字の訓にいかにぞと思ふ所少からず。是疑ふべき事の五つなり

たとへば朝といふ字。上にあればあさとよび。下にあればともとよむといふが如きなり。朝といふ字をあさとよみ。ともとよむには口授あるよしをも申す如くなり。上下によりて讀みかはるといふことにはあらず。義朝の子の朝長をあさながとは承り及ばず。頼朝の烏帽子子結城七郎朝光を。あさみつとは承り及ばざるなり

然りとは申せども。世に既に此書あり。世の人此書によりて。名字をえらむ人多かるべし。然らば其字を讀み得んには。この書なくんばあるべからず。只此書をありし儘に寫し置かれて。某が冊子と相ならべて。藏め置かれんには。彼是二つながら相通じて。異聞を廣めさせ給ふ所の益あるべきに似たり。某が冊子に此書の文字をまし收め。この書の訓を增し補はんことは。某敢て命を奉けがたき所あるは。某不

後の代までも。しるし傳ふべければ。いかにも經書の文字を用ふべし。たゞに經書の字を取り用ひんのみにもあらず。唱へまゐらする所も。心得あるべきよしを申しき

今按ずるに。室町殿の代々の御諱に。讀み得がたき事ありとぞ覺ゆる。寶篋院殿の御諱を義詮と申しき。詮の字を教と唱ふる人あれど。普廣院を義教と申しまゐらせしかば。いかで其祖考の御諱に。同じき唱の名をば付けさせ給ふべき。又詮の字を昭と唱ふる人あれど。靈陽院殿を義昭と申しまゐらせしかば。是も先祖の御諱におなじきとなへの名は。付けさせ給ふべからず。拾芥。節用等を見るに。詮の字の訓に教と昭との外に。別の訓も見えぬは。寶篋院殿の御諱は。必らず別なる訓のありしを。世の人其傳を失ひしなるべし。（追ひて拾芥抄を考ふるに。詮の字さしと訓ず。蓋。寶篋院殿の御諱。よしさしと申しゝにや。猶たづぬべし）

大塔宮の御諱を。護良としるして。もりよしと世には云ひ傳へたれど。實はもりながと申しまゐらせき。是等また同時の事なれば。義詮のとなへ。必らず。世に云ひ傳ふるが如きにあらじ

是等の事を思ふに。先師の傳へし所。誠に誣へずとすべし

右は名の字に定まれる字なきにもあらず。唱ふる所も定まれるとなへなき證の三つなり

謹みて按ずるに。凡そ人の名の字。もとより定まれる字あるべきいはれもなし。又古には定まれる文字とてもなく。定まれるとなへもなかりし證。右にあぐるが如し。然らば其書なくしても可なり。また古人の名の字を抄出し置きて。讀書の人に便せんも亦可なり。然るに前年人の名の字。抄書して呈すべき仰を承り。敢て辭する所なく。拾芥抄。節用集。新編纂圖。幷鍛冶銘字抄等の如き。世にひろく行はるる所の書を取り用ひ。敢て自からの意を加へて。一字を增減せず。一冊子を作りて進呈しき。其故は先師常に某を戒しめて。證なく據なく疑はしき事は。かりそめにも口より出だすべからず。孔子の大聖すら。猶述而不作と宣ひき。只古人の言を述べ。自の意見をもて。言を作るべからず。是先王の時に刑し給ふ所なりと申しき。されば某かの冊子を撰みしこと。只古人の抄錄せし所を述べしのみなり。敢て私

字はなかりき。末の世に至りては。儒家の人々の家
に抄し置かれし所の文字もありしにや。文和の初。
後光嚴帝の御名字を撰ませられし時に。菅三位在成卿
と訓ずる事。名字抄にみえたるよし。成の字を房
の申しゝ事をしるしゝものあり
洞院大相國の御記に見ゆ。○後光嚴帝は。九十九代に
あたらせ給ふ。此比は。太平記の代にてありしなり
されば今は名字抄などいふものも。世には傳はらず

節用集

これは。舟橋宣賢卿の作られしよし。世には申す
なり

拾芥抄

これは。天正五年に撰まれし所。作者詳ならぬよ
し。水戸西山公は仰せ置かれしなり
などいふものに。人の名字を集め置きし。世に廣く
行はるゝほどに。世の人皆これらの書を據となし
て取り用ふる事に成りたり。油小路故大納言隆眞卿
ののたまひしは。近代の人の名。殊に淺ましきもの
に成りたり。拾芥等の書に抄出せし所は。いかなる
事を據となして。僻める字多く集め置きけん。心得

られず。周公の撰ませ給ひしといふ。爾雅の字を取
り用ひたらんには。然るべき文字いくらもありなん
とぞ
隆眞卿の説は。某に神書を授けし人。まのあたり
承りしよしを申しき。此卿は近代の有職の人にて
れはしき
いはれある事とこそ覺ゆれ
右は近世の人の名の字よからず。又人の名に定ま
れる文字あるまじき證の二つなり
又師にて候ひし者の。某に竊に傳へ候ひしは。天子
の御名は。凡人の名にとなふる所と同じかるべから
ざる由。ある有職の人の仰せれかれき
何人の仰にかと重ねて問ひ返し難かりし故に。其
人の名をばつひに承らざりき。口惜き事なり。此
言を思ふに。たとへば後水尾院の御諱政仁を。ま
さひとゝは申さで。ことひとゝ申し。今の仙洞の
御名を。識仁としるして。のりひとゝは申さで。
さとひとゝ申す類なるべし
さらば將軍家の御名など撰み申さんには。心得ある
べき事なり。我國に傳はるのみにもあらず。異朝の

人名考

新井白石 著

本朝の人の名。漢字を用ひられしより此かた。或は文字の音を以てしるし

鬱色雄命など云ふ類なり。後代にて不比等。武智麿などの類また同じ

或は文字の訓を以てしるし

大彦命などいふ類なり。後代にも入鹿鎌足などの類またおなじ

或は文字の音と訓とを以て併せしるし

吉備津彦の類は。上二字は音なり。下二字は訓なり。後の代にも。藤原の長良など。上は訓なり。下は音なり

其人々の意の欲する儘にしるしければ。文字の數も定まらず

不比等を不史登としるし。鳥養を又宇合としるし。長谷雄をまた發昭としるしゝ類は。一人の名を。或は音にてもしるし。或は訓にてもしるしゝなり。

○古より本朝の人々の名をつきしにも。異朝の如く五つの謂ありと見えたり。是等のこと。悉く考へて呈せんと思ひ。草按をば立て置きしものあり。事長ければこゝにしるさず

五十四代の帝。仁明天皇の御時より。始めて今の代の人の如く。多くは文字の訓をとりて。二字を用ふる事にはなりたり

此事は神皇正統記にみゆ

されば昔の人の用ひし所は。定まれる文字もあらず。多くは聖經賢傳の文字を取り用ひて。意義ある事共にてありき。世の末ざまなるに隨ひ。文字やゝ廢れしより。世の人多くは。古人の名に用ひし文字のみを取り用ひ。己が名とするほどに。その名とする所。意義もなく。自から文字も定まれる樣にはなりたり。ましてや近き代には。西域二合の法に倣ひて。二字を合せて一字となし。其一字の義訓の吉凶を論ずる事にのみ成りしかば。（俗に名乘字を歸すといふなり）人の名。倘々むかしにも似ず。あさましき事には成りたるなり

右は。名の字に定まれる字と云ふことはあらざる證の一つなり

前に申しゝごとく。古には人の名の字。定まれる文

色の菊どもを見せられけるに。かつて感心の氣なし。故准后内前公。菊はすかれずやと尋ね仰せられしに。たれか菊を愛せぬものはべらん。いまの菊のかたわものなれは。めづるにたらずと申しヽとぞ。内前公ものがたり給ひし

閑窓自語 終

かく（本ノマヽ）こも。おろそかなりければ。内々さたありて。源大納言重熈卿衣冠にて参り。みつ〳〵かいぞへとして。しゞうふちしぬ。ときの人ふたりの内辨とてわらひしなり。たゞし菅家にて。讀内辨のこと。北野の御後とぞ人いひける。その後かんがへ侍りしに。弘治二年白馬に。菅中納言長雅卿。白馬渡のち。内辨をつく。この外は所見なし。さてかの綱忠卿は。心おろかなる人にて。嗚呼のふるまひつねに多かりしが。めづらかなる例をのこしけるなり

本朝愛牡丹事

わが國にぼたんを愛せしこと。保元以前よりはじまれるなり。崇德院位におはしましたりける時。このはなの御歌をよませたまへりけるに。法性寺關白忠通公の

咲きしより散りはつるまでみしほどに
花のもとにて二十日へにけり

とよまれしよし。詞花集に見えたり。その後は靈元院法皇ことにめでおはしましけるよし。たしかにしるせり。この外にはかにおぼえず

先人令愛同花給事

先人は草花をこのませ給ひて。菊。かきつばた。しやく〳〵などうゑさせて御覽ず。ことに牡丹をめでたまひて。多くうゑらる。薨ぜられしつぎのとし。寶曆十一年このふかみぐさことじ〳〵かれぬ。いとふしぎなる事なり。ひごろめでさせ給ひしはなゝれば。もとよりおろそかにはなさずといへども。草木こゝろなきにあらず。おのづから薨ぜられしをいたみてなるべし

大小菊語

正德のはじめ。大きくといへるものをつくりいでゝ。家ごとにうゑもてあそぶ。はなのおほきさ一尺にも及ぶとぞ。これはかぶろきくといへる菊ありて。そのたねよりまきいでしとなむ。又小きくといひて。同じころいたりてちいさきはなあるをも。とり合せて賞翫せしなり。その後。明和中に。中菊といへるものいで。さてめづらかなるはないろ〳〵ありて。今に世にもてはやすにより。大菊。小菊などはすたれり

難波故前大納言宗建卿菊花語

難波故前大納言宗建卿は。識者の名あり。近衞にて色

さのみたしかならず。ふるき書に劒を相すとあるは。劒の利鈍を見ることなり。いまよく劒のめきゝすといふにあたれり。家相のことは。異國にて三才圖繪。本朝にては吉日考秘傳などに。敷地のかたちにつき吉凶あり。あるは山にむかひ。水により。街にのぞむのたぐひいはれあり。いまいふ家相には。ことかはれり。いかゞはしけん。又馬牛を相する事は。ふかく沙汰ある事なり

兵部卿邦頼親王相劒事（付廣橋前大納言伊光卿同じく）

兵部卿邦頼親王は。ことに劒をこのまれ。よく利鈍およひ。銘の眞僞をわかち。無名の劒のうちてを察せらる。又いまの世にはやる劒相をもならひえてのべらるとぞ。廣橋前大納言伊光卿も。ちか比兩方ともこのみて見らるゝよし。吉凶などもあたるよしきき侍りし

式部卿貞朝親王善打劒語

ふしみ式部卿貞朝親王は落胤にて。みそぢばかりまで。鍛冶に入りて侍りしを。邦道親王薨ぜられてのち。繼嗣なきにより。とり入りて親王とす。さるにより。よく劒をきたはるとなむ。この親王心を入れてきたはれしつるぎ。いまふしみ殿にあり。先年あづまより本阿彌の至りて大に感じ。正宗のつくりし所といふ。古今大に相違せし事なれば。近きものといはれしに。近きものにてもあれ。このやきば正宗より外にきたふべきものなし。又見及ばずといひしなり。かの親王鍛冶に入りて侍りしゆゑのみにあらず。まことに古來めづらしき上手といひつたふるなり

人相者事

安永中に。むさしの國より長元齋といふ人相者。京都にきたりぬ。伏見殿その外諸家こゝかしこよび入れて見せしむるに。まことにたなごゝろをさすがごとしとぞ。歸國の後きゝ侍りし。のこり多き事なり。予わかゝりしとき。いさゝかならひて侍りしに。明にていできし相法全書といふ（ひろくつたはらぬ書なり）文辭。或ときえがたき事どもあり。仲治梅莊といふ南人の師もつたへをうけ侍りしに。およそ流手を見るにも。八とほりあり。長元齋の傳は。この外となむ

東坊城前大納言綱忠卿讀內辨事

寶曆九年元日節會。內辨右大臣尙實公早出にて。にはかに謝座より菅大納言綱忠卿これをつゝもとより

た公家よりも仰せられずとなむ

春日五箇屋災事 付安居屋及興福寺塔等災事

同じき年十月。春日のやしろ五箇の屋本談議屋。瓦の屋。上の屋。黒陰の屋。西の屋ゆゑなくてやけぬ。このうち西の屋は。わづかにのこれりとなむ。享保二年。興福寺火あるとき。寳物などをこのはたに本談議義屋のくらも取り入れて。いまに社司のあづかりにてあなるを。このよひくら共にやけおちぬ。又三年寛政四年三月廿九日。春日の安居屋とて。後の白川院勅願にて。興福寺のあづかりの所として。人もすまぬ所おのづからやけぬ。又ことし三月一日の夜。皆ども聞きしかされて尋ぬべし興福寺のうち。享保二年やけのこりし伽藍のうち。東西十二間の堂。南北八間これもゆゑなくしてやけぬ。食堂歟。くはしくたづぬべし。俗にへついどのといふぞその火の色ことにあかく。いかなる故と人いひしに。或ものゝいふ。これは古代の繪ゆゑなるべしとぞ。これも皆延寳朝臣のものがたりなり。此三ヶ年以來つゞき。南都に變異あり。しかれども。御祈の沙汰にも及ばず。これは當社のみのことにあらず。近比にて神社佛閣の崇敬大にうすくなれり

興福寺享保火事

享保二年正月四日の夜戌刻ばかり。興福寺講堂より火いでき。金堂。四金堂。南圓堂。南大門。中門。四廊。西室。北室。中堂。鐘樓。鼓樓。築地にいたるまで燒けぬ。南圓堂の本尊不空羂索観音はことゆゑなくとりのけたてまつる。その外。本尊ともにほろび侍らじとなむ東金堂。五重塔。北圓堂。食堂ゝ勸學院。細殿。竈殿。三重塔。三倉觀禪院。大塔はのこりぬ。その時は天火のやうにいひけれども。盜賊古金襴のとてうをとらむとて火をつけしとぞ。これも數年へて事あらはれ。刑に行はれしとなむ。先年正預故三位延樹卿のかたりしは。その前年享保元年冬の末つかた。興福寺よりくちなはかへるのたぐひの虫。およびねずみ。いたちのたぐひのけもの。おびたゞしくいでゝ外へうつりぬ。嚴寒の折ふし。心ゆかずおもふものも多かりしが。かゝる火のゆゑなりけりと。後におもひあはしゝと聞きれき侍りしとぞ

劒相家相事

ちか比。劒相といふ事世にはやり。ひとのもたるかたなを見て。貴賤貧福吉凶などのことをいふ。またそのゝち。家相とて家のつくりかたを見て。同じく吉凶をのぶ。大かたにいひめづる事もあれども。

寛政五年六月二日。（土用中）北風ふきて。ひやゝかなる事八九月のごとし。近來たえてきゝも及ばぬ事なり。三日ばかりにて風も吹きかはり。氣候もなほりぬ。のちにきく。北國には雪ふりて。うすくもつもれり。越後には三寸ばかりありけりとなん

夏雪事

太平記下。後光嚴院康安元年六月廿二日。雪ふりて寒氣冬のごとしといへり。これはあまたもなき事なり。又後小松院嘉慶二年五月雪ふるとあり。年代記にのせたり。これも同じく所見なき事なり。この兩度。北國などにはあるまじき事にもあらず。このごろ（寛政五年）すでにそのためしもあなる。孟子もこと／＼く書を信ぜば書なきにしかずといへり。むべなるかな。さて保元平治物語。盛衰記。太平記などの書は。ことに文華をもはらにかけるゆゑに。皆まことゝし侍れば。大にことたがひぬ。又たゞしき文書をもて。引きくらべて用ふれば。見所ありてすてられず。書は見る人の才學によるなり

左大臣輝良公大風日拜賀事（付春日社頭大風事）

左大臣輝良公の關白拜賀は。寛政三年八月二十日にてありしが。此日羊時ばかりより。大風おどろ／＼しく吹きいでゝ。賤が屋も大くたふれ。大木なかばよりをれぬ。夜に入りてもやまざりければ。延引ある事と。人々おもひけるに。からうじてよふけとげられぬ。粟田關白有衡どの（關白の時にはあらざるべし）いかなる大風雨にもをこたらず。みのかさにて參られけんためしにはことたがひぬべし。孔子も。ときいかづち風はげしき時は。かならず變ずとかれぬれば。押してこの時出でられしことい かゞとぞ人いひけり。風近國へたて（なかわきて）大和などのあたりつよく。春日の神木大なる杉もたふれ。その外なみ／＼のにはかずをしらず。又故の鳥居のた（本ノまヽ）の桂笠木等たつるこの事ばかりは。社家より申しあげけるとぞ。（ちかごろ怪異を申しあるく）こゝ。（時義にかなはず）此外卅八所のやしろたふる。神體はつゝがなく。かりやにうつしたてまつるとぞ。又石の燈籠千三百餘たふる。のちに三百餘は願主より修覆して。もとの如くになれり。のこる千ばかりは。たふれしままにおくよし。社司丹波守延賢朝臣かたられしなり。長者の拜賀の日にあたりて。かゝる怪異ある事。祈禱答文の沙汰にも及ぶべきに。何の沙汰もなく。ま

有徳院の贈太大臣吉宗公。天文志をみられて。日中に黒子みゆる事あり。本朝にこの事なし。日は光輝はなはだしければ。たしかに視がたし。もし異國には見るものありやと。紅毛國の商客にとはしめられ侍りしに。萬里鏡といふ物ありて。これにて日を見るには。ぞんからすといへるたまを目にくはへてみざれは。天火目に入りて眼をそこなふといへり。よく〳〵心をつくべきよし申して。その後。萬里鏡を貢せしとぞ。いまに關東にあり。土御門故二位泰邦卿は申し請ひて。日月星晨をかのめがねにてうかがはれしなり。泰邦卿かたられしは。ほしは三角六角などありて。そらにさがりて見ゆるあまの川は。小星のあつまれるなり。日はもえておそろしく。月は波見ゆとぞ。かの萬里鏡は大きなる遠目がねにて。七八間もありと聞き侍りしなり

月鐘摩貢琉球驢馬於關東事（付先年貢大寛馬事）

寛政五年四月十九日。さつまの國より琉球のうさぎ馬を二疋關東に引かしむ。その時伏見をとほりけるを見し人のかたりしは。耳ながくしてかたちちいさく。やせたるものなりとぞ。推古天皇七年百濟より駱駝一疋。驢一疋を貢すとみえたり。又萬葉集に。人まろの歌に

いこま山こだちもみえず散りみだれ
雪のうさぎまあた樂しかも

とありたれば。つねの馬をうさぎ馬とよめるにや。おぼつかなし。安永十年大國の汗血馬二疋を。關東へ異國より引かしめ。これもふしみをとほりしを聞きしに。たけ五尺あまり。すぐれたる馬にて。まことに目をおどろかす。見物せし人のたてるうへに。馬の脊ありとなん。杜子美が詩に。胡馬大寛名ありといへるこれなり

宇治橋再造事

寛政五年五月。宇治ばし武家の沙汰として。もとの所につくりわたしぬ。供養の沙汰に及ばず。後宇多院の御宇弘安九年。西大寺の恩圓上人（興正菩薩）再興のはし。去寶暦六年九月洪水に落ちける。その時うき島の十三重の塔もたふれ。橋姫のやしろもながれぬ。その後は。平等院のあたりに。かり橋をかけて往反せし

六月寒事

高松前宰相重季卿語

高松前宰相重季卿は近ごろのうたよみなり。新古今集の風體心にかなへりとて。小草紙帖をかしらにいたゞき。烏帽に引き入れて院參す。見るべき事あれば。烏帽のうちよりとりいでゝ見る。これ此集をふかくあふぎたふとぶこゝろなるべしと。人いへり

烏丸入道前大納言光胤卿和歌語

烏丸入道大納言光胤卿。久しく勅勘をかうふり。籠居のうち。月をみて

さらしなやおばすて山もよそならず
都の月になぐさまぬ身は

この後ほどへて。勅免ありて。院より仰事ありて。ふたゝび和歌の指南などせしには。弟の日野一位資枝卿も。和歌の傳うけし人ながら。歌がらも大きにおとり。ことに兄のことなりければ。稽古のうたをかの入道にみせ傳へけるに。をこたりがちなりければ。入道のもとより

のぼるべき高根は遠し玄ばしとて
やすらふほどに日はくれぬべし

といひやりければ。道の勝劣やごとなしとはいへども。うちはらだちけるとぞ

日野一位資枝卿求和歌傳語

日野一位資枝卿の中納言のころ。有栖川故中務卿職仁親王の姫宮にしのびまゐりて。わりなくかたらひ申し。この姫宮のつてにて。歌道のつたへを職仁親王に申しうけぬと世人いひあへり。その事にや。院の流しきもあしかりぬ

堤前宰相榮長卿妾醜女語

堤故前宰相榮長卿わかゝりしとき。或ものゝむすめを戀ひわたりたるに。たやなりけるもの。かたくいらへてゆるさゞりしを。年月をへてやう〳〵にこしらへ。とり入るべくなりしほどに。かの女疱瘡わづらひて。かたち大きにみにくゝなり。ことさら一眼しひ。かた〳〵はじめのうるはしさに引きかへ。さながら鬼のごとくなり。おやなりけるものうとましくおもひけるに。榮長卿すこしもくやめる氣なく。こゝろよくとり入れて。妾にしやしなひ。一生をおくらしめぬ。見にくしとても。丈夫の一言變ずべきにあらずといはれしとぞ。たのもしとやいふべき

贈太政大臣吉宗公求萬里鏡於異國語

おぼえて。たちまちかのみのわづらひつき。家にかへるとそのまゝにうせぬ。又辨もそれより心地たゞならずなやみて。その次のとし三月ばかりに身まかりぬ。それよりして行事辨登山するに。此坊に宿することを用ひずとなん

日野一位資枝卿家怪異語（土御門里内唐門西方第）

日野一位資枝卿わかゝりしころ。家の子うちよせて。夜ふくるまで酒のみ物がたりしけるに。屏風のうしろにはかにあかるく。しそくして人のあゆみくるけはひなりければ。屏風のそばより見やりたるに。火焰のうちに。わかき法師のたちていたりける。人のあるやといひけるうちに。跡かたなくうせにけり。ある坊主とてかの家に吉事ある時は。いづるこれならんと。一位のかたられ侍りしなり。吉事のことは心ゆかず

猿來洛中事

元文二年の春なりしが。いづくよりきたりけん。いと大きなるさるいできて。仙洞。二條殿。近衛殿はめぐ所々はいくわいしけり。此とし中御門院。登霞ましく〳〵。前關白吉忠公。准后前關白家久公など薨ぜられぬ。當家（中筋第）南のとなり櫛笥家へきたり。木のうへにゐけるを。故殿（光つなの卿）も御覽ぜしよし仰せられき。あるじなりける一位隆成卿も。そのとしうせられぬ。およそ此さるきたれる家は。主人多く事あり。ふしぎなりける事とぞ

中山故大納言榮親卿石藥師第怪異事

延享二年。中山故大納言榮親卿いしやくしの家にて。人の恠異とて。朝よりゆふべまで調度の類うごき。また陶器などは。おのづから飛びてわれぬ。夜にいれば。あやしき事さらになし。かの祈禱などせさせけれども。さらにしるしなし。その秋。榮親卿の室俄にうせられぬ。そのさとしにやと。人いひあへり。およそ一月あまりまで。このあやしみありて。その後はかの怪異。烏丸中立賣の毘沙門堂の里坊にうつりしとぞ。そのあくるとし。中御門院皇女籌宮。かの里坊にしばらくおはしませしに。彌生ばかりなりけるに。雛のあそびの人形とりならべてありけるに。そのひなども人のごとくわらひけるにおどろかせ給ひて。院御所へ内々わたらせ給ひしと。或人のかたりし

見ず。たゞこゑをきくとなん。もしあやまちて香花をそなへしむれば。かはたらうかの香花をとりかへり食すれば。その身らんゑせずといへり。棺に入れ葬れば。これも甦るゝにおよばずとぞ。およそ。かはたらう身をかくす術をえて。死せざれば見る事あたはず。多力にして姦惡の水獸なりといへり

和泉海獸語

和泉にすみし人のかたりけるは。かいづかの邊りの海邊には。ときゞ海坊主とかやいへるもの。いそちかくよる事ありて。家ごとに子どもをいださず。もしあやまちていづれば。とり口口いひておそる事とぞ。兩三日ばかりして沖のかたにかへる。そのかたち人に似て大きに。總身くろくうるしのごとし。半身海上にあらはれたちてゆく。かたりしものうしろより見けるゆゑ。かほをばしらずとぞ

東園前中納言基辰卿家魍魎語

東園前中納言基辰のからす丸の家に。いと大きなるいてうあり。四五十年ばかり以前に。かの家の老女に。記して舘守(タテモリ)の神とあがめ。かの木にしめ引きゆひ。供物などそなへて。かりそめにも枝をきらざれば。かげふかくしげりあひて。まことにものりやうのすみしあとゝもいふべし。葉室大納言賴照卿殿上人のころ。その南のとなりなる家をかりてすみけるに。ある夜下仕の女の見えざりければ。そこゝとたづねけるに。かの木のかげのこなたなる庭のうちに。息たえてふせり。水あたへくすりなどふくましむるに。からうじて息いでゝいふやう。たそがれのころ庭にいでけるに。となりなるいてふの木のうへより。大なる男の。かしらはくろゞあかみたる恐しきがとびきて。かひつかむとおぼえしその後はしらずとぞいひける。二十日あまり熱つよくわづらひけれども。なにごともなく本復しけり。橫川の僧都の。うき舟を見いでけむためしもおもひやらるゝ事にこそ

延曆寺竹林院有兒靈語

山門に竹林院といふ坊あり。その內に兒がやといひて。ひらかざる間あり。寶曆七年法華會の行事に。權右中辨敬明まかりて。かの坊にやどりけるに。家人をしてひそかにかの間をひらきこゝろみしむ。うちはくらくて。なにもなかりける。冷氣身をおそふと

若によらず。めでまどひけり。参内の日などをはかりて。ちまたにいでゝまち見る人もありしとぞ。元文三年に。はたちにて四位にものぼらずうせぬ。これは懸ひしたる人々の執念つけるにやと。人いへりけるとなん。この人十五歳までは。中御門院于時在位のちでにてめしつかはれけるに。いとめづらかなるわらはすがたにて。女房などに多く心をうごかし。なにとなく内もそう〳〵しくて。時義にもかゝりけるとぞ。衛の彌子瑕濆の董賢にも劣るまじきよそほひにやありけん

毒虫蟄時薬物事

蝮蛇のさせしには。しぶかきをすりて。そのふちにうちぬれば。その外にはれわたらず。次第にせまくぬるに。毒刺おのづからぬけいづとぞ。柿なきときは。しぶをぬりてこれに用ふとなむ。又こせうの粉を帯ぶれば。はみちによらずといへり。むかでのさすにはにはとりの糞をつく。蜂のさすにはいもの葉の茎をつく。皆妙なりとなん。心得べき事

近江水虎語

近江なりけるものゝかたりしは。湖水にかはら水虎俗にかはたらう。あるひはかつはなどいふなりおほくあり。人をとり。あるはかどはかし。又はよふけて。人の門戸にきたりて。人をよびなどするなり。これをさぐるには。痲からをれけばきたらず。又さゝけ大角豆をいむ。これを帯ぶる人にちかよらず。又舟に鎌をかくるも。これをさくるまじなひといへり

肥前水虎語

肥前のしまばらの社司某かたりていふ。かの國にもかはたらう多くあり。年に一兩度ばかりは。かならず人を海中に引き入れて。精血をすひてのち。かたちをかならずかへすなり。いかなるものゝさとりしめけるやらん。かの亡屍を棺に入れず。葬らず。たゞ板のうへにのせ。草庵をむすびて取り入れ。かならずしも香花をそなへずおけば。この屍のくつるあいだに。かの人をとりしかはたらうの身體らん壞して。おのづから斃る。しらざればかはたらう人間の手にとらふべきものにあらず。いはんや。いづれのとりしといふ事をもしりがたし。いと奇術なりとぞ。かはたらう身のらんゑするあいだ。かの死がいをおくやのほとりを。かなしみなきめぐる。人そのかたちを

天明いつゝのとし彌生ばかり。かれこれとなびくわらびを折りに。如意がたけにのぼり。いざやこの山のあなたなる湖をながめんとて。峯いつゝむつばかりもよぢけるとおもふに。比巴のうみひろくみゆ。人と興じて。志ばしやすらはんとするに。あはひ六十間ばかりへだてゝ。山のかたはらに。むろの木ひきゝ志げりひろごりたるうへに。いと大きなる黒きとりすまゐぬ。からすによくにて。よついつゝばかりもあはせたらんほど大きにみゆ。ともなるものゝうちに。見わけてこんとて。三十間ばかりちかよるうちに。とびさりぬ。つばさひろげしさまなど。いかなる鳥ともわきまへがたし。吉野拾遺物語中。くろき怪鳥いでしこと志るせり。いかさまよのつねの鳥にはあらじといふに。皆人おそれていそぎかへりぬ

見せばやといふ草名語

故民部卿入道爲村卿かたられしは。今世に見せばやといへるくさ(鎮火の種)をうゑもてあそぶ。これはかの卿の父大納言爲久卿の和歌の門弟に。吉野山の法師にてあなるが。奥山にて見侍りしくさとて。和歌をそへて贈りし。そのうたの句に。君にみせばやとの詞あり。これによりて。見せばやとなつけおくよし。爲村卿の返事ありしを。たしかにみられけるとなむ

瑠璃をだまき草事

松前よりちかき海中に。小島といふ所あり。その所に。をだまき草(樓斗菜)といふくさの。るりの色にさけるあり。そのたねを安永中に。たかの入道中將隆口朝臣のもとへ。松前守護のものゝふよりおくりしをうゑて。近ごろ世に多くなれり。故主殿權助佐伯職朝臣の第に。蘭山といひて。博識のものあり。このくさ世にしれぬうちに。見せける人のありしが。いづかたよりきたれるやらん。めづらしき草なりといふ。たづぬる人しらずといへりければ。つら〱なは見て。この色は海邊に生ずるなるべし。花の色を見るに。東國のものならんといへり。その道をえし人の見るところ。いさゝかたがはざりけりと。見せし人大に感せしなり

右少將公鳳(裏辻)美丈夫事

裏築地少將公鳳は。やごとなくうるはしく。男女老

弄蜘蛛語

土御門故二位泰邦卿かたられけるは。享保のはじめ。世に蠅とりくもとかやいふ虫をもてあそぶ事あり。風流なるちいさき筒に入れて。蠅のいる所へとばせてとらしむ。一尺二尺など遠くとぶをもて。最上とす。よくとぶ蜘は。あまたのこがねにかへて。あらそひもとめ。蜘合をして。博奕に及ぶのあいだ。武家より制してやめしむとぞ。世にめづらしきもてあそびもありけるなり

捷猪老士語

前左將監藤原武盛入道（家人村田 隨身なり）かたりしは。寶永のはじめつかた。相國寺のあたりに。としよるまで劒術をゝしへて。世を渡る士あり。たけもひきくやせからびたりければ。いかにもさせるわざもあらざるよし。人いひあへり。しかるに。かの士あさとくおきて。かどにたゝずみけるに。はからずも。手負けるあら猪のかけきたり。にぐべきやうもあらざりければ。もたる枝にて一打にうちけるに。枝はほそかりければ。ふたつに折れけり。ゐのしゝはかしらの骨をうちくだかれ。つひにたふれぬ。これを見て。日ごろ心ゆかずおもひけるものも。今かく年老いても。年來の習練むなしからざる事を感ぜしとなり

通鳥語女語

前對馬守藤原祐良（家人 圖書寮）かたりけるは。萬里小路前大納言侚房卿としひさしくつかはれける女の。鳥のこゑをよくきゝしるよし。かねて聞きれき侍りしに。ある日。かの家にまゐりて待ちゐけるあいだに。からすのいとうなきければ。かの老女おくの方よりいできて。あしきからすなきかな。人にけがあやまちあるにこそといひしほどに。しばしありて。臺所に。下仕の女の庖丁にて。手のゆびをきりしとて。なきさわぐ。さてこそかの鳥の音をしるときゝしに。つゆたがはざりけりと感ぜしにこそ。公治長のためしもおもひいでゝ。ふしぎなる事なり

公治長并百鳥語書事

少納言藤原通憲入道信西の所持の書目錄あり。めづらしき書ども多し。そのうちに。公治長并百鳥語一巻とみゆるせり。むかしはかゝる書も。わが國にわたりけむ。今は人の圖にものこりしや。きかまほし

見異鳥於山中事

こと人をもさがしもとめにつかはし。しかるに日あらずして。數多のほとけをしき地にえたり。見るに同じほどのかなぶつなり。又ふるきかとの厨子ひとつありて。そのうちに同じさまなる佛のこりてあり。その厨子のとびらのうちに。此五體のほとけの名あり。さてはその數あるべしと。いよ〳〵もとめしむるに。此三體はつゝがなくのこり。二體は絶して全からずといへども。つひに皆いでぬ。佛師をめして見せしむるに。弘法大師の作られしほとけといへり。いとふしぎなる事なれば。あしたに厨子をつくらしめ。當家にあんちせしむるなり。さればかの大火の日は。ことの外の烈風にてありしかば。いづかたその佛堂の火のうちに。紙の厨子に小佛をいれながら空にあげ。風にさそひて。當家に落ちちりしなるべしと。皆人申し侍りしなり

當家古人形事

當家にふるくよりもちつたはれる人形あり。兒の座せるかたちにて。一尺ばかりなり。編丸となづく。靈ありといひつたふるなり。明和七年の比ひてりのとき。紫竹村の領所の百姓。雨ごひのために。かの人形をかりたきよし申すによりて。かしつかはしぬ。これは先代に。ひでりのときかりて雨乞して。雨ふりし例あるゆゑなりとぞ。このこと高祖（資ゆき の卿）曾祖（すけかつ の卿）などの御時にや。くはしくしれがたし。明和にはかしけれども雨ふらず。さて此人形いもうさ故光子（日野大納言資矩室）かりたきよし申さるゝによりて。かしわたしぬ。しかるに程なくうせられ侍りて。その後もとめつかはすに。いづちにや入りまぎれけん。みえずとなん。もとよりしひて益なきものながら。ふるくつたはれるものゝうせけるは。ねんなくぞおぼゆる

造念誦堂於當家事

寛政七年やよひばかりに。當家中筋の第。東のかたに築地そへて。念誦堂をつくらしむ。（たゝみ六帖ばかりしく程なり）本尊大日如來昭土。地藏觀音を安置し。又先祖代々の靈位をかげどのに。予みづから書きてまつるなり。さて本尊大日は。先年ある僧の本よりもとめえぬ。もとは清和院にありし像なり。二百年ばかりのものといふ。木にて作れる座像なり。地藏觀音は。內山の上乘院亮觀僧印よりもらひし。いはれある靈像なり。おの〳〵五百年よりこのかたのことにあらず

御信ありて。さまぐ〜の御願書なども。いまにをさまれるなり。予十六歳のときなり。信じたてまつるに。はからずも弘法大師のうつされし御影（大黒毘沙門十五童子あり）を。或人のもちつたふるをれくりぬ。のちに其來院前大僧正宥證（のちに菩提樹院といふ）に見せしに。偈仰すくなからず。凡。居毘沙立辨といひて。辨財天の立像はまれにして。靈像なり。此像たち給ふに。又わきにおはす毘沙門居像なり。よのつねのものにあらず。秘藏し信仰すべきよしかたられき。又その後ほどへて。東寺或院にもちつたはれる。三面地形の辨天の靈圖（まんだうのごときものなり。これも弘法大師の圖せらるゝところといひつたふるなり）子細ありて。またゆづりをうく。この御影は。秘密の事にて。大かたの僧徒などしるものなしとぞ。當家に年中三度（正月五月九月）眞言の行者を請じて。一印法を修せしむ。子孫にいたりても。ゆめ〲そりやくあるべからざるよし申しおくなり

廣橋家辨財天事

廣橋家の辨財天は秘佛とて。厨子に封じて。くらに納めてあるなり。故儀同三司兼胤公。ことの外の信仰はせられけれども。つひに拜見せずとなん。たゞし予ひそかにきゝつたへたることあり。たけ四寸ばかり。毘沙門。大黒。十五童子おの〲たけ二寸ばかりにて。岩のほらのうちにおはすとぞ。佛師のつくりしにはあらず。驗者の作ならんといへり

當家中筋敷地事

當家中筋のしきちは瑞光院。贈儀同殿の養女かめの方の（八幡の祠官清水加賀守宗清のむすめなり。或は田中坊のむすめともいふ）すまれしところなり。當家一條室町の敷地荒廢の後。この所を贈太政大臣（家康東照權現）所望ありて。すみつたへきたれるとぞ。それゆゑ此地は公家より賜ふ地にあらず。又もとめえし所にもあらず。されば享保のはじめにも。寛政元年にも。この事たづねられしとき。注しいだしゝなり。龜のかたは太政大臣（家康）室にて。尾張大納言賴宣卿の母ときくところなり

天明火後小佛數兩現中筋第燒跡事

天明八年の火後。當家中筋の第の灰のうちより。五分ばかりのかなぶつを。ひとつふたつひろひしものありて。岡崎の別莊にもてきたり。所持のほとけにやと申しゝに。かつて見しらぬ佛なれば。いとふしんなる事なり。よく〲たづねよといひつかはし。又

も。柳をうゑおかしめぬ

當家紅梅古樹事

寳暦の末までは。當家西の庭に。紅梅の古樹あり。花もうるはしく。たかさ一丈あまりにて。南北にさしひろごりたる枝九間にあまれり。木のもとはふたかゝへばかりなり。この木萬治四年火のとき。若木にてやけのこり。又寳永の火に。枝はやけぬといへども。かれずして。ふたゝびしげりけるゆゑ。火よけのむめと人いひならはせり。しかるにとしをへて次第にかれはて。わづかにもとつ枝のはなのみぞ。むかしの春をのこすらんと。いとほしみもふかゝりけるに。時きたりけるにや。天明の火に。のこるところなくやけうせぬ。およそ百三十年ばかりの木なりけんかし

當家猫靈神事（付不入盲女於當家中）

いつの比にや。猫の怪異とて。よろしからぬ事のみうちつゞきける。當家の靑侍ふるきねこをころすといふによりて。曩祖あんずるに。（後の安勢どの業光の卿か）驗者に仰せ合され。かの靈を當家守護神のやしろ地より。第二のうちに勸請せられ。猫靈と號す。これによりて當家には猫をころす事を制すべしといひつたふるなり。また故殿（光つなの卿）仰せられしには。當家に盲女を召し入るゝことをせず。（ここの子細つまびらかならず）ある時門をあやまちて入る事のありしに。不便の事ありとぞ

當家書府事

萬治四年の火に。當家文書のくら（板くらなり。古代のものぞ）北の敷地にありけるがやけぬ。書ども少々とりのくといへども。火急にしてのこるところ十の一にも及ばず。曩祖兵部卿殿（後言の卿）一流の文書を梅寮どの（すけあきらの卿）につたへしめ給ふ所にて。たび〳〵の兵亂にあひしかども。およそつゝがなくもちつたへたるを。大かたにうしなひぬ。なげくにも猶あまりあり。この外。身の具ふるき調度などいふもさらなり。その後。寳永の火にも。くら一宇やけぬ。又文書をうしなひぬ。天明の火にこそ。五箇所のくら一宇もやけず。文書一卷もやきうしなはず。ひとへに祖神の加護とおぼえ侍るなり

當家辨財天事

辨財天は。當家鎭守の地より第三のやしろにおはしまして。代々信じきたるなり。殊に高祖一位殿（資親の卿）

類聚といへる書をつくりけるに。類本もあらざりければ。天明の火にやけうせて。名のみつたふるなり。このもの清涼殿。紫宸殿のくはしき圖を。ふるき文書によりて。かんがへつくれり。裏松入道右少辨光世は。（法名固禪）門弟として。かの兩圖にもとつけて。近比の內裏は口入してつくらしむ。閑院里內をうつされしとや（入道固禪は大內裏圖考證の作者なり）

伊呂波奥加京字事

よの人いろはの手本をかくに。京の字をれくにそふ。ちかごろの俗事と。皆人わらふめり。此事康長が撰びし通用古紙といふ書に見ゆ。（康長は明應。應永ごろの人と見ゆ。氏系かんがふべし）順の和名抄につぎたる才學ある秘書なり。世俗の事も。みだりになんずべからずと。先人（故一位殿）つねぐ〵仰せられしなり。又頓阿法師の高野日記にも。京の字をいろはのれくにくはへて。四十八字のうたを詠せしなり

當家念誦堂事

寶永の火に。當家中筋の第もやけぬ。敷地の北ざまに念誦堂ありて。本尊あみだ佛。ふるくよりつたはれる木像となむ。これもとりのけえずやけぬ。曾祖一位殿ことにをしみ給ひしとぞ。その後は念誦堂もなきなり。曆應のころ。梅寮どの（すけあきらの卿）柳原の第をつくりみがゝれし時。立てられしあとゝて。萬治の火のまへより。中筋の第の念誦堂はありけり。玉葉承安三年十二月に。月輪攝政兼實公。民部卿入道殿（すけなりのけふ）日野下莊の持佛堂を見られし事をしるされしなり

當家植柳事

寶永の火までは。當家中筋の敷地。東面五十間ばかりもありしに。東のかたの築地のほとりに。いと大きなる柳ありて。梨木町におほひ。葉のしげる比は。日をももらさで。おのづからひるもをぐらく。よるは螂の火のあがりおりするとて。子どもなどおそれけるとぞ。同じ七月二日の大風に。東のかたにたをれぬ。十丈にもあまれる木なりければ。枝はやがて京極通におよぶとなむ。さて當家には。室町のかみ柳原に。梅寮どの（すけあきらの卿）里第をたてられしゆかりとて。居所をかふるにも。かならず柳をうゝるよし。曾祖一位殿仰せられきとなん。今の第（なかすじ）にも。やなぎ數株あり。去年（寛政四年）岡崎に新第をつくらしめしに

東福門院御簪事

東福門院の御かんざしとて。當家にもちつたふるあり。こがねにてつくり。うへに三色のたまをつゝみつけたり。安永年中そのかたによて。しろがねにてつくらしめ。三色のたまをいれて。家内のものにさしむ。内院の女房。あるは友なふ人々など聞きおよび。所望ありてつかはしぬ。されば玉えがたきによりて。つくらしむる事かたし。そのうへ。これはいやしきものゝさすかんざしにはあらざるべし。のち〳〵心をうつし。世間の人は。享保のはじめまでのごとく。花すゝきなどのみゝかきなきかんざしをさすべし。この玉のかんざし。あるものしりがほなる人ひとにかたりていふ。かんざしに玉いるゝこと。いにしへはなき事なるべし。所見なしと。此事ちかき書にあり。古今和歌集第七のまきの詞書に。五節のあした。かんざしの玉のおちたりけるを。たがならんとたふとびて。河原の左大臣のよめる。「ぬしやたれとへどしら玉いはなくに。さらばなべてやあはれとおもはん。

世俗簪造始事

或人かたられし。今の世。をうなのさすかんざしは。享保のはじめまではなかりけりとぞ。それよりかんがふるに。繪草紙などを見るにも。その頃までは。かんざし髮搔のたぐひをすべてさゝず。しかればちかき比の物なるべし。又ふるき人のものがたりをきくに。享保の比までは。女のこどもなどは。花すゝきなどのかたしたる白銀のかんざしをさしけり。しかるに御厨子影故若狹守宗直。わかゝりしより好事のものにて。みゝかきをそのはなのうへにつけてつくらしめ。かんざしみゝかき。通用たよりありと思ひて。人におくりしに。たよりあるものなればよろこびて。しだいにつくりそへ。色々このみをくはへ。今は貴賤となく。しろがねにてつくりて。さしもてあそぶ事にはなれり。それかんざしは。髮のかざり。みゝかきは理髮の具のうちなり。そのへだてをわきまへず。たかき人の用ひらるゝはくちをしき事なり。宗直は時の興にてやつくられしならん。しからざれば遠きおもんはかりなしとやいふべき

若狹守紀宗直朝臣事

かの若狹守紀宗直朝臣は。才學あるものなり。實名

讃すとて詩をのせり。貞和二年秋とあり。これによてふしんをはらしぬ。あんずるに。異國よりわたししといへるも。およそ其比の事ならんかし

同天神事才學

入道長親卿花山院流。但南朝後出家號料世兩聖記には。むかし無準和尚號仙禪師鑽異國の經山にすみけるに。日本の菅丞相となのりて。受衣ありける。其かたちをうつしけりとぞ。また明德の比。釋の月溪伏見殿にて。夢に菅丞相を見侍りけるに。からの服をつけ給ひける。その御かたち。無準の異願にて。うつしおく御影にすこしもたかはずとなん。又後十輪院前內大臣通村公の宇治興聖禪寺記に。先年新院明正院歟勅筆の渡唐天神の讃を納めらるゝといへり

呪厭凶夢丑未札事

いま春日の御やしろ。廻廊みづがきのあたりに。丑ひつじと紙にかきて。多くおせり。これは奈良の人。夢見の心にさはるときかきておせば。わざはひをまぬかるゝまじなひと。いひつたへてする事なり。御驗記などにも。このまじなひのふだを繪にうつしてはべれば。ふるき事なるべし。この事春日社にはかぎるべからず。御門かたにても。凶夢とおもはん時。このふだを。ちかきあたりの社にも押すべきなりと。人にもをしへ侍りしなり

春日御驗記事

春日御驗記二十卷は。繪所のあづかり右近の大夫將監高階の隆兼がかけるに。封書は圓光院前關白基忠公。後照念院攝政冬平公。權大納言冬基卿。一乘院良位僧正あはせて父子四人。他人をまじへずかきて。延慶二年奉納せられしなり。近頃聖護院のかり皇居がり士御門新內裏に遷幸のとき。馬くら弓やなぐゐ。くさ〴〵の調度などことにさたありしに。此繪によりて多く再興せられ。時の關白輔平公といひ。又この繪ちかごろ勸修寺大納言經逸卿のもとにあり。遷幸の傳奏そんし。かた〴〵時にあひしといふべし

近代社寺文書等分散事

近頃は。神社。佛寺にふかくよりつたはれる緣起文書なども。うつすとてとりいで。はてはこがねのかはりに。ながく人の家のたからとなる。なげくべき事なり

四年閏四月六歳にて薨ぜられけるよし。中御門右大臣宗忠公の記に見えたり

仁和寺入道一品深仁親王自切叡敏事付菩提院榮遍僧正事

菩提院前大僧正榮遍は。長者もへし人ながら。才學うとく。年よるまでけんやくをもとゝして。召しつかふ人も。ひとりふたりにすぎず。財をつみて。寺の修覆などねんごろにいとなみ。又手ずから草などをひきて日をおくり。嚴寒といへども。ひとり一つの外は寺におかずとなん。仁和寺深仁親王をさなくて得度あり。この僧正戒師成りければ。宮ならびの岡の坊にはじめてわたり給ひけるに。庭を見給ひて。青苔ひらにあつふしてと口ずさみ給ひけるとぞ。權僧正覺遍後にかたりける

仁和寺入道一品深仁親王再號伽藍事付自雙岡移比事

後南御室覺深親王。今の伽藍をはじめ。再興せられんとて。大猷院贈太政大臣家光公に所望ありけるに。寛永十一年たちまち許容あり。それより經營としをかさね。正保三年に雙岡の邊より北へわたましありて。今に火災もなく。いとをごそかなり。この後。ならびの岡のほとりをふせ御所といふなり

渡唐天神畫感將事

渡唐天神の御影とて世にあり。いかなるいはれにや。いぶかしくおもひ侍る。しかるに寶慈院故周琮禪尼いもうとなり樹の下の寺にもちつたふるは。逍遙院入道前內大臣實隆公の畫なり。紅梅の枝をもちて。書きおくられしよし。くはしくゑるしゝ紀そへり。周琮禪尼にかりて。うつしおかましとおもひけるうちに。世をはやくせられぬ。その後住侍の尼もかはりて。折をえて天明八年の火に。寺もやけぬときゝて。とぶらひしに。かの御影の事は。くらに火入りて。文書の類みなやけぬ。そのうちにや侍りけむしらず。それよりちかき先師周琮禪尼の書きおかれし經類など。ひとつもとりいでずやけぬるよしかたりぬ。あまり便なくおぼえて。周琮禪尼の書かれしものなど見いでゝ。佛具などそなへてつかはしぬ。さてことし寛政五年はからず。高雄山の寛耀法師のうたせし寫像に。頓阿法師の讃かけるを感得しぬ。先年逍遙院の畫見及びしに。すこしもたがはず讃にいはく。異國の人。天神の御影を夢中に感せしましゝに。うつして渡せしを。寛耀法師うつしゝに

ば。さもあるべし。その比名をえし庭つくりをよせて。このまれし事とぞおぼゆる

近衛准后内前公被召飼鵜於庭池事 付彼第庭事

近衛殿今出川の第の庭は。延寶の火のゝち。應田満院前關白基熈公のこのみつくられしとぞ。故准后内前公かたり給ひしなり。この庭の池水にて。天明三年の事なりしに。鵜飼舟をまうけられて。見物すべきよし。かねて内前公仰せ合されしに。まゐるとて見侍りぬ。河にて見れば。今一入の興ならんと覺えぬ。むかしは大井川など。ちかき所にも有りけん。今は美濃尾張などのみにてのこれりとなん。このうかひ人も。尾張よりきたれりとぞ

九條准后尙實公天造明月樓事

九條故准后尙實公は。明和元年に 于時左府 大きなる樓を。さかひ町の第につくられ。淸二位宣條卿に記をかかせて。明月樓となづく。天明の火にのこるところなく燒けうせぬ。この公は漢才ありて。から樣なる事をこのみし大臣なり

詠茸狩於和歌事

寬延二年九月々次和歌御會に。故殿狀山といふ事をよみ給ひける

「わかず猶茸狩りくらしかへるさに。このみをひろふ秋の山ぶみ」。櫻町院 于時上皇 仰せられけるは。内々の和歌には。この後よみ入れてもくるしかるまじくとぞ。それよりこのかた。たけがりのことをおほやけわたくしのうたにも。人々よみ侍るなり。又この事をあんずるに。ふるき事にて。古今集にも。北山に僧正遍昭とたけがりに。素性法師のまかられける事見えたり。後西院天和三年八月秋の山といへる事をよませ給ひける「またもこんけふはもみぢを松かれにたけかりくらす秋の山ふみ」

桃園院二宮貞行親王 伏見殿 七歳和歌事 付令失明給事

桃園院の二の宮。さだゆきのみこは。いといとけなくおはしませる時より。兩眼ともにうしなはせ給ひぬ。そのさとく何事につけてもかしこくましませし事。いふばかりなし。なゝつの時。雁のこゑをきかせ給ひて

いく里をこえてまつらん秋のよの
さやけき月にわたるかりがね

二の宮。明和九年十四歳にて薨ぜられぬ。崇德院の二の宮。むまれ給ふとしより兩眼見え給はで。大治

まずと。かねてきこしめしけるに。安永七年の春。御庭にめづらしく御覽ず。又去年の夏。女御御方の内へ渡御ありしに。子規の木にゐしを。間近く御覽ぜらるとぞ。この鳥。宮中に集まる事このましからず。ともにめづらしき事なり。このみかど。御德もいみじくましませしに御代久し××××××

彈正尹直仁親王蹴鞠堪能事

閑院故彈正尹直仁親王(東山院皇子)は。まりの上手にて。さきへこけ行くまりをも。すくひかへしあげられけると。故殿仰せられき

同親王說鞠事

同じころ。源三位廣仲卿も。よきまり足なりけり。難波前大納言宗建卿とたち合ひてけるに。廣仲卿ふたつばかりあぐるうちに。大かた宗建卿にとられぬ。やすからずおもひて。直仁親王家にまゐりて。宗建卿を上手のやうにいへども。人のまりをとるいかでか法にはべらんと申しければ。親王こたへられけるは。人にまりをあたへぬうちに。人にとらるゝは。大かたまりの身に遠きゆゑなり。とらるまじとおもはゞ。身にちかくけるべきよし申されければ。答ふるに詞なかりきとぞ。櫛笥前大納言隆重卿のかたられしなり

土御門里内小御所庭作事

土御門里内小御所御庭は。寶永火事後。醫師素仙といふものなどつくれりときけり。たしかならざれば。かさねてたづぬべし。ことし(寬政九年)又池をひろめ。はしをそへられぬとぞ。これは植木をあきなふものゝ。立ちよりてつくりぬるなり。日野大納言資矩卿。内々申沙汰にて口入せりとなむ

櫻町仙洞及庭作事

櫻町仙洞(當時院御所) この地は。天正十四年正親町院御讓位ののち。仙洞にもちひられし地にて。代々の洞裏たり。櫻町のみかど御脫屣あらんとて。この地に仙居をつくられ。延享四年二月廿八日。この後櫻町殿と稱すべきよし仰せらる。(元はたゞ下の御所といひて。地名のさたなしとぞ) さて此御庭はきはめてよしあるつくりざまにて。心をつくせる事。なべての庭のおよぶ所にあらず。近衛准后内前公仰せられしは。太政大臣秀吉公のつくれる庭なりとぞ。のちにその頃の日記をかんがふるに。秀吉公繩ばりなどみづからいとなまれし事など見ゆれ

皇の「秋の田のかりほの庵の」とよませ給ひしに。髣髴として。萬乘の天子にあらずしてたれか詠せん。拜吟するごとに。ひじりのみかどゝぞおもひ侍る

桃園院御鞠事

桃園院の御まりは。ことにすぐれてれはしましける。時のまりあし皆及ばず。後鳥羽院このかたと人いへり。のちにかんがふるに。後伏見院も御上手にてあり。其後は御堪能の沙汰をきかず。十五六七歳のあひだ。御うちまりには。御あひ手に參りて。御ふるまひを見たてまつりしに。くはしき事はしらざれども。難波宗建卿宗城卿飛鳥井雅香卿雅重卿などのごとき。さわがしきものにはあらず。御まりの拍子ゆるやかに。御あしなどのひきゝて。その後もたえて見る事なし

雁再活事

同じみかどの御時。一條前關白道香公雁をたてまつらる。すなはち龍池にはなちおかる。この雁外より前關白もらひて。庖丁せんとて。まづ膳棚(もの)にたくにぞ。せいしてとびあるきけるゆゑに。めづらしきとなれば。たてまつるよし奏せられぬ。寶曆九十年のあひだのことなり

怪鳥啼宮中事

安永三年卯月なかばばかり。まだ宵のことなりしに。夜の御殿のうへに。手車をひく音していとおどろおどろしく。後桃園のみかどきこしめし。あやしみおどろかせ給ふ。女房殿上人なども。おともわきまへず。いかなる故ならんと恐れあひぬ。御めのとのこゝろきゝたるが。御庭にいでゝ。御殿のうへを見やりたるに。鳩ほどの鳥。夜のれとゞの棟かはらのうへにゐたり。月のころなればよく見ゆ毛の色はわかずさぞしばし見ゐたるに。南をさしてとびければ。あやしきひゞきたちまちにやみけるにぞ。かの鳥の聲とはしられけるとなむ。後日御前にまゐりけるに。くはしく勅語あり。程へて或人かたりしは。東山若王寺の深林に。うめきとりとなづけて。たまく〲なく事ありとぞ。いづれあやしき事なれば。内々上﨟局忠子朝臣姉きみをもて。内々御祈あるべきよし申し入れしも。うちれかれず。御沙汰ありしなり

禁中無蚚蝪事 付子規事

後桃園院仰せられけるは。禁中にとかげといふ虫す

賢なるも。鄧通を寵して。蜀の銅山をあたへしたぐひなるべし。およそ民とともにするときは。色をこのみ。たからを愛するも王者なりと。孟子にもとけるならずや

中御門院重清二位宣通事

伏原故二位宣通卿は。させる學才もあらざりけれども。中御門院御讀の師にて。ことの外重んぜられ。直衣などもゆり。又林和靖の繪の間に供すべきよしなど仰せらる。此間はちかき頃。議奏たる人の候ずる所なり これは内々の事ながら。例なき事のよしきこゆ。往古侍讀の人。清涼殿よりまがへるの時。殿上人××とるの例などにもかなひはべらん。いみじき事なり

桃園院恩顧事

甘露寺前大納言規長卿。童のおひだ桃園院めしつかはさせ給ふ。近代兒二人内々うちにめしつかはるゝ例なり。院にもあり かのちごいとあてにらうたげなりたれば。人しれず心をかけ。口をいかゞきこしめしけん。とのゐしける夜。人しづめて。時義かの兒きたりて。まめやかにかたらふほどに。時義をはかりしに。内へ叡慮にてまたれりとなむ。あるは御前にて。ものなどたぶるにも。かの兒にはわが前をやくわよなど。御氣色ありしとかや。予微弱のおひだといへども。恩顧身にあまれり。和歌もいまだ師をさだめざるうちに。内々御當座のときめさる。蹴鞠も同じく御あひてにまゐりぬ。高倉流の紅葉を折りし口口のに風流ありと仰せられけんためしもおもひ出でゝ。かしこまりぬ

本ノマヽ

桃園院御學問事

清二位宣條卿つねにかたられしは。桃園院の御學問は。後光明院このかたの事にておはしますなり。されど易の口傳まで申しいれしとぞ。後光明院の後。この事なしとの給ひき

櫻町院和歌御堪能事

太神宮御奉納の御うたに。春曙といへる事を。櫻町院のよませ給ひける

宮川や千木たつかやが軒見えて
杉村かすむ春の曙

いせに參りしもの。この御製にすこしもかはる所なし。見そなはしめ給ふこともなく。自然に叡心の通ずる所を感じけるとなり。つらく〵あんずるに。此御うたは御堪能ばかりの事ともおもはれず。天智天

すてさせたまひければ。心もとなくは思ひけれど。あしたに詞をつくりて。啼涙屢滈宸襟利哀戀轉倍叡慮須殊皇女多等降誕無止利志深久悼美惜給布奈利と草せしに。御こゝろにかなひけん。清書すべきよしを仰せられきとぞ

中御門院感押小路前中納言實岑和歌

元文二年きさらぎ十三日。院中御門院にて和歌當座御會ありしに。押小路前宰相實岑卿不逢戀といへるを

もがみ川逢瀨は猶もいな舟の。いなとばかりに過ぎ行くはうし。

院この日御製を實岑卿にたまふ

もがみ川いまぞのぼらんいな舟の
いなとばかりにすてもおかまし

すなはち禁裏に于時主上櫻町院仰をせられて。同じき廿一日。權中納言に任ぜらる。そのころの美談にて。中御門院の和歌一首をも。あだに見そなはしめおはしまさぬ事と。世の人あふぎしとぞ。さて實岑卿は。いささかかゝる心ありて詠ぜしにあらずと。かたく辭し申しけるとなむ。今の人ならば。よし心なく詠ずとも。かゝる叡感をかうぶり。つかさなどたまはらむとならば。心ありて詠ぜしとやいはむ。古語にも君仁なる時は臣直しとは。このことにや

櫻町院聞食笛聲令賜和歌於故殿事

櫻町院のすべらぎ元文五年八月十四日。御小座しきにて月を御覽じけるに。東にあたりて笛のねきこえければ。故殿にてやおはすらん。歌よみてつかはすべきよし。冷泉三位爲村の御前にさむらひしに仰あり。とりあへず。歌をおくらる

秋のよの月にきこえて雲井まで
すみのぼる笛の聲もさやけし

この笛。故殿にてはおはしまさゞりければ。後日そのよしをば奏し給ひけるとぞ。たゞし御返歌もありしやらん。御記にももれ。又爲村卿の集にものせざるよしきゝ侍るなり

同帝右中將重熈彈正少弼氏榮等事

同じみかど右中將重熈のうるはしきと。彈正少弼氏榮のきよらかなるとを花紅葉と仰ありて。めでおはしましけるごとに。重熈朝臣は寵遇ことにあつかりければ。のちには權勢もありしなり。周大王の君子なるも。色をこのみて。その妃を愛し。漢の文帝の

いなと申されける。これはもとより院の御氣色にはあらず。隆英朝臣の才學なりけれども。院よりさまざま仰せなだめられて。つひに清書はせられけるに。隆英朝臣は院より×××××るとぞ。故准后内前公かたり給ひしなり

櫻町院被尋水火事於神祇道事

櫻町院伯二位雅富卿。權大副二位兼雄卿とをめして。水火のきよきは同じ事なりやととはせおはしましける。雅富卿はともにきよきよしを奏す。兼雄卿は水はきよく。火はきよからずとまうす。かさねてそのいはれを奏すべきよし仰せられけるに。火に清穢あり。水に清穢なし。これ火に水のまさりてきよきゆゑと申したりとぞ

同帝被爲造竹臺事

同じみかど元文五年五月に。竹臺のかたを常の御所の西庭先につくりたてられて。和歌御會などありき。寛政の内裏には。中殿のまへにかは竹。くれたけかげをならべてたてられしにわたりぬ。珉山のながれは。みなもとはさかづきをうかべてあそぶべく。江津にいたりては。舟をならべ風をさけざれば。わたるべからずのたぐひなるべし

同帝御時被修記錄所事

これも同じみかど寛保のはじめ。記錄所とて。小御所の面にかたのごとくの所有りけるを。さらにしつらはれ。御座なども設けらる。障子の繪は畵所の預光芳に仰せられて。時のうたよみに。名所のうたどもたてまつらしめ。その心をもて。かしさまふ（本ノマヽ）色紙形。是一乘院入道尊昭親王清書す。題は梅有喜色とかや。又東の庭に梅をうゑられ。和歌を講ぜらる。寛保二年きさらぎの事なり。天明の火にやけうせ侍りぬ

同帝愛典侍資子事

昔のすけ資子は。故一位資時卿のむすめなり。かたちことにうるはしく。心ばへも人にすぐれ。同じひじりのみかどのおほんいとほしみふかく。またなきものにおぼしおきてたりしに。延享二年葉月の末つかた。こゝちわづらひ十八歲にてうせぬ。その長月に從三位を贈らる。風記にて（消息宣下を本の記といふ）宣下あり。上卿は故殿（光綱）にていまそかりぬ。宣命を大内記爲範朝臣例によりて草せしに。いくたびとなく。御覽じ

臺盤所のまへに引くとき。象まへあしを折りける。ちく類といへども。帝位のいとたつときをしりけむ。やむごとなき事なり。御製和歌に「時しあれば人の國なるけだものも。けふ九重にみるがかなしさ。」のちにこの御詠草。故殿光臣の卿にたまはりて。もちつたふるなり。又この日靈元院法皇の御所にひかせて。御覽ありけるに。このたびは象かしらをたれて。恐れけるかたち見えけるとなん。御製やまとうた二首

めづらしくみやこにきぎのからやまと
過ぎしの山はいくちさとなる

なさけあるきざのすがたにから人に
あらぬやつこの手にもなれきて

後水尾院被任徃年分官事

後水尾院は。官途の家作におくるゝをあはれみおはしましけるにや。往年分の官をにんぜらる。位階には常の事なれども。官はおいては。こと樣なる事にて。その比の日記を見ん人。もはら心得あるべき事なり。たとへば日次には元和二年某宰相とあるに。しゝ補任には。大納言にかけり。あるは侍從それがしとあるも。諸家侍には。中將とのす。ゐとはまぎらはしく宰相にて宣命文などあるに。大納言にて宣命使つとむるが。うたがひ多く。世にのこれり。その後。次第に此事やみけるぞよき事には侍る

櫻町院爲聖主事

むかしより。延喜。天曆のみかどを。ひじりの御門といひつたふ。その外の御門は。ときにとりてはいふめれども。昇霞の後はいはぬにや。櫻町院はいみじきおほんとくいまそかりけるをあふぎて。いまに聖主と申すなり。このみかどは。中御門院第一のみこにて。新中和門院の御はらなり。享保五年正月一日の曉に降誕あり。およそ××××おほんむまれは。神武天皇。垂仁天皇の外みおよばず

入道前攝政家熈公欲辭書院日給簡銘事

享保二十年。中御門院御讓位の頃。院の殿上日給の簡の銘を。入道准后前攝政家熈公淸書あるべしとて。院司左中將隆英朝臣奉行して。簡をつくらしむるに。寸法よりはあつくどゝのへ。書きあやまりあらんとき。けづられん料にあつるよし申し持參せしに。入道前攝政大きにけしきをそんぜられ。書きそんじすべきものゝ。淸書をうけ給はる事やあると。かたく

櫻町院延享元年十月に再興ありて。勅使左中將雅重朝臣をたてらる。その後はまたたえにけり

靈元院疫癘和歌事

享保八年病はやりて。人民多くうせぬ。靈元院の御うたあり

風ふかば本來空のそらにふけ
人にあたりてなんの疫癘

此御製を都鄙きゝつたへて。かきしるし。まもりとせしに。やめるものははやく治し。やまざるものは大かたにのがれけりとぞ

靈元院知食大變事

故大夫典侍のあまぎみ（曾祖一位殿御女）かたられしは。寳永五年三月八日のあした。東山院（于時今上）御前にさふらはれしに。靈元院より御書を進ぜられて。今日は御つゝしみあるべし。おぼしめしあはす所ありと仰せられぬ。そのひる頃より。火おこり。禁裏。仙洞はじめ。諸家人家社寺にいたるまで。おびたゞしくやけぬ。火事とはなけれども。大變をかねてしろしめしけん事。いみじく覺えしとなむ

中御門院笛御堪能事

中御門院は。笛の御上手にて。御音ことにすぐれておはしましけりとぞ。よさりなど。御心をすまして吹きいらせおはしますとき。きつねの。すのこにまゐりて。きゝいたりけるを。ときぐ見しよし問しすけのたきみ（光子東山院中御門院兩朝女房）かたられしなり

廣南國貢象事

享保十四年廣南國より象（本草綱目時珍曰。象出交廣雲南及西域諸國。有灰白二色。形體擁腫。面目醜陋。大者身長丈餘高稱之。）をわたし、術をきゝしに。このけものきはめて鼠をいむゆゑに。舟のうちにほどをはかり。はこのごときものをこしらへ。ねずみを入れ。うへにあみをはりおくに。象これを見て。ねずみを外へいださじと。四のあしにて。かのはこのうへをふたぐ。これに心をいるゝゆゑに。數日船中にたつとぞ。しからざればこのけもの。水をもえたるゆゑに。たちまちうみをわたりてかへるとなむ。さて象本朝にきたる事。應永十五年南蠻よりくろき象をわたす。この外例見えず。黑象別種なり。（楚越之象皆青黑也。北戸錄曰。廣之屬城循州雷州皆産。黑象牙小而紅）このたびの象は灰色なり。白象にはあらず

召覽象於內院事

同年四月象を宮中にめし入れて。中御門院御覽あり。

とも。おはんみづから遊ばしけるとかや。曾祖一位殿資廉卿權大納言にて。傳奏せしめ給ひける。その後。又櫻町院元文五年三月。代始の公卿。勅使新宰相中將重熙朝臣をたてられて。これは代々の式にとおぼしおきてたりしに。絶えにけるぞほいなく覺ゆる

嘗祭事

周公旦のつらくられし。爾雅に。秋の祭を嘗といふよし見えたれども。わが國には。冬は嘗といへり。これは秋のみのりを冬そなへらるゝゆゑに。嘗といふなるべし

和歌三神事

和歌三神は。いま人のしるところ。すみよし。玉津島。かきのもとなり。しかるに。後奈良院宸記に。和歌三神の號を。宸筆にあそばすに。住吉。玉津島。北野等なり。（北野は中にあり。御書體くはしくのせらる）いかさま柿本のひとまろは。後世石見に社を勸請せしかども。神號はあらざりしに。中御門院御時享保八年に。この比千年忌におよぶといふ沙汰有り（冀年たしかならざる事なり）て。二月一日に。靈元院法皇の御沙汰として。大明神の神號をさづけられ。同じき日に。正一位神階陣において宣命あり。上卿は中院大納言通□卿。奉行は頭辨賴胤朝臣なり。柿本大明神の號は。近代の事といふ事。人大方しらず。又三神のうちに。北野のあるといふ事も。しらぬなるべし

當家所藏宸翰事

龜山院。後伏見院已下宸翰（御記も少々あり）多く品持す。又後醍醐院御製和歌。（しろき小色紙）中納言資朝卿（梅寮このすけ明卿の御あに）にたまふ所とてもちつたふるなり。御うた

たちかへり身をぞからむるかはり行く
　人のつらさのあまりなりけり

この外明正院晴雨亭の勅額あり。これは仙洞に通圓の御茶屋とてありけるに。かけらるゝところとぞ。由緒ありけるゆゑに。たまふなるべし

明正院河原御所事 付梶井室事

いまの梶井室は。明正院の時に。御幸のためとてつくられし河原の御所のあとなり。崩御後かの室にたまはりけるとぞ。梶井の室はもとたかくみねの邊にやありけむ

宇佐使再興事

宇佐使は。應仁のみだれより已前たえてなかりしを。

閑窓自語

柳原紀光著

禁秘御抄事

禁秘記御抄は。後三條院勅撰なり。兼宣公記およびふるき書目六(俗に仁和寺の書目六といふ)などにも。たしかに見ゆ。應永の比までは。御府にありしよし。兼宣公記せり。今はつたはらざるにや。たえて聞きも及ばず。順德院の御製の禁秘御抄のみ。あまねく世にひろまれり。これは後三條院御抄につがれて。えらび給ひし事と見えたり

假寘内侍所於念誦堂事

應安四年。後光嚴院當家柳原の第に遷幸ありしとき。内侍所を念誦堂におかるゝよししるせり。いまの世にはかりそめにもあるまじき事とおぼゆ。しかるに。禁秘御抄に。院の御時(土御門院歟)行幸の時のごとき。念誦堂となづけて。護摩のけぶりにくすぶる所をもて。かしこきところの御在所とすとあれば。例なき事にはあらざるべし

大嘗會等再興事

大嘗會は。後土御門院文正元年の後。絶えたるを。東山院貞享四年に。かたのごとく再興はありけれども。辰日に己午の節會を。たゞ一日の宴會あり。例にかなはざる事多かりしを。櫻町院元文三年に。かさねておよそのこる所なく。再興ありて。いまにつたへ行はるなり。新嘗祭も同じみよと。元文五年再興あり。(寛永比よりたえし跡なり)それより年々の事とはなれり。東山院元祿元年より。新嘗御祈とて。吉田の神祇官代にて。下郎のともがら年々奉仕とありけれども。准的にはあらず

公卿勅使例幣等再興事

公卿勅使は後光明院正保四年九月に。例幣のたえたるを再興あるべしとて。まづ廣橋宰相綏光卿を伊勢にたてらる。宸筆の宣命。公筆も御製なり。かねて菅氏のともがらに。筆を仰せられしに。この筆の口傳つたはらざるよし。辭し申せるゆゑとぞ。例幣の宣命ばかり草進す。奉行は倚祖父一位殿(資行卿)頭辨にて。御存知あり。此後靈元院天和二年五月に。去年の冬。内宮火事により。公卿勅使左大辨宰相宗顯朝臣をたてらる。この時も正保のあとゝて。宣命御草

る事。そも〳〵いかなるねぢけ心ぞや。あまつさへ弘賢をなんぜむとて。空海が名をかたり。われを無智盲昧になして。無實の難におとしいれんとせし事。罰當をもかへりみざるしわざなれども。われもとより汝等が如き。不學の小人どもを罪せん心なし。ただきたれるついでに。其ひがごとゞもをさとすなりとの給へば。小說屋は顏色土のごとくになりてふるひゐつゝ。さらにいふべき詞もなく。たゞ何事もゆるさせ給へ〳〵と。手をすり淚をながして。をがみゐるにぞ。二人の門人も。大師の精論に感服して。これこそ眞の妙々奇談なれと。はじめて小說屋が始終のひがごとをさとり。大師のまへにぬかづきて。ともに不埒をわびきこえしかば。大師かさねての給ふやう。向後汝等心をあらためて。かゝるひがわざをなしそ。また〳〵いふべき事はおほかれど。さのみはうるさければいはぬなり。されどかの譏られたる人々。はた名をかたられぬしたちよりは。おひ〳〵糺明せらるゝであらう。あなかたはらいたしやとの給ひつゝ。たゝるゝと見えしが。たちまち姿はきえうせて。そばなるさうしの表紙に。一首の歌をぞのこされたる。三人は忙然としながら。はひより見れば。さうしの名のしりうごとゝいふ五文字の折句なり

しれ人の理非をわかたぬ虛說(うそごと)を
弘法いかでとがめはつべき

金剛談 終

らず。神に本地をさづけ。いろはの無常を初學に學ばすとは矛盾せり。又富久者有智。遠仁者疎德の十字をくばられしなどは。世人囂々として譏る處にて。義において熟せざる句なり云々とある。これもたがへり。これは字義を用ひたるにはあらず。假名なり。ことに弘賢が造語にてはなし。もとは何人の作にか。先年沼田何某よりたのまれて書かれしなり。その草案には。不苦者有智とありしを。不苦の二字を取りかへてかゝれしまでの事なるよし。假名の法もしらずして字義を論ずるなど。いと／＼つたなきなり。又かの摺物をふくさ唐紙にすられしは。平生唐紙にものをかゝぬときめられたる見識には相違して云々とあれど。此摺物斐紙奉書紙にすられし事。皆人のしれる處なり。たま／＼その紙のきれめに。俄にのぞまるゝ人ありて。やむ事をえず。いさゝか唐紙へすられしなり。はた自運と板行との差別もしらぬ論なり。又初學の者に。眞跡本をならはせらるゝ事は止められよ云々とある。この論もいかゞなり。弘賢は浪人書家にはあらず。官人なり。公務に追はらざれども。したひゆくものには。やむ事をえず指南せらるゝ事なり。先年繁務にて。法書をつくる閒なしとて。新入門をひたとことわられしかば。執心の人を導かざるもきのどくなり。せめて墨本なりとも學ばせられよと。檜山何がしのすゝめによりて。はじめられしなり。されど此墨本を一帖も勉强して學びをはれるものには。其篤志をみて。自運の書。又は古書の臨寫をもさづけらるゝなり。又無用の年玉くばりや。黃金を貪る事などは。心をつけて改めらるべし。しひて止事なくば。予たちまち靈をほどこして云々とあるは。いかなる事ぞ。弘賢が年始新刻には。無用の物はあらじとおもふなり。ことに黃金を貪るなどゝは。心えがたき詞なり。弘賢は一時の書家にて。數百人の門人あれども。其入門の束脩に規定なく。其人々の心にまかする事。皆人のしる處にて。われもいとよき事に思へるなり。はた藏板物も。いつも費用たらずして。利を得る事はさらになし。たゞ世の益になる事をこのまるゝ故のすさびなり。さて上にいへるごとく。汝等は空海が書訣をよくもよまず。其をしへを奉ずる弘賢が說をもよくきかずして。支證もなき妄說を世に布かんとす

る丶に。唐の馮承祖。褚遂良の露鋒書にて修行し。虞世南の藏鋒書にて成就すべきなりといへり。又行書。草書は凡庸なりといふも。小學の守用なる處をしらぬ說なり。持明院家の筆意をうつしてといへるも。其家何某卿の書を學べるにか。すべて證もなき妄語なれば。委しく辯ずるに及ばず

又弘賢も一時の名家なるに。なんぞ古人に縛せられ。柔筆に坐せられて云々

是も空海が說には。柔とはやはらかなる事にて。奴筆をいふ。よわきといふには輭字を用ひしなり。然るに輭筆柔筆の差別もしらで。かくいふは。いと〱麁漏なり。すべてはじめよりこゝにいたるまで。一つとして的當の論なし。これ其方らが不學故なれば。あらかじめいひ聞すなり。さてついでなれば書論にあづからざることながら。つぎの事どもをもしめすべし。弘賢に好事癖をやめられよ。但し文政九年に。松岡辰方が方へやられし手簡に。近來風流好事流行にて。武備をわすれ候人も可有之やと　不安心に存候などゝ。自は好事家ならぬやうにいはれしは。虛談ならん。その證は。先年孔明が陣太鼓の歌よまれしとき。太田南畝が「あな小づらにく明神下の弘賢が。眞名のなまにへ詠み出でつるかもと。ざれ返歌せしをもても忘らるゝなり云々とあるはいかゞ。弘賢は風流好事にあらず。好古の癖ありて。萬の故實を尊び。制度を守りて。經滿有用の學を心がけらるゝ事。世人のよくしる處なり。かの落首は南畝が一時の惡言にて。風流好事に詠まれし證にはならず。かの銅皷をみしも。弘賢が好古の一端なり。此落首にも誤寫あるやうなれど。それはとまれかくまれ。又年玉配の小摺物も。帝昊金や。封牛考や。日野唯心殿眞跡などの雅なるはやめられよ云々とある。これも年始に略曆をくばる事。人毎のやうにて。後には不用なるもの故。弘賢が寛政年中に王蹟南二詩をすられしは。世人古書畫をくばる濫觴にて。實に略曆にまされり。帝昊金も人のあまねくはしらざるものなり。封牛考は誰やらの駱駝考を辨駁せられし功あり。日野唯心殿は。高名なる人なれども。其傳をしる人なかりし故に。ひろめられしなり。又阿育王室塔の圖をくばられし時などは。新春早々故。みな人心よからず思ひし事なれば云々とある。此論空海が意にあ

の事なるを知らざるべき。さてこゝにもとより書の云々とある書といふ名目かなはず。こゝは文字といふべきなり

又獻筆表と啓とに見えたるごとく。空海が用筆は狸毛にて。今も水筆におほくあるなり。然るに弘賢は鹿毛を用ふといひながら。馬毛筆を用ふるはいかなる事ぞ。空海によるとならば。その用筆を用ふべき事なるを。强翰を用ふる事あたはざるが故に。結體に力なく。勢うすく。挑灯屋を用ひて。字形を補はるゝ事などは。はなはだ卑劣千萬なり云々

此論も心得ず。空海が用筆狸毛に限るにあらず。書訣をみてしるべし。然るに表と啓との言によりて。狸毛のみと思へるはいかゞ。又强翰といふは。空海が說はあしき筆のことなり。それをもしらずみだりにいふから。かゝる誤用はいでくるなり。また結體に力なく勢うすくと有る。此一句空海の語勢にあらず。書論を讀まざるものゝ性體をあらはせり。又筆をそへて字形をれぎなふ事は。大古の法なり。一筆書こそ。かへりて後世の事なれ

又弘賢が古讀に似するを功とせざる見識を用ひず。やゝもすれば空海が古讀を襲ひてよしとせらるゝは云々

これも弘賢が書道にいたりふかきをしらざる論なり。弘賢は唐人の書一家を學べば。これを奴書とす。衆美を聚めておのれに歸すといふ事を。先師よりさづかりし次でに。迎春帖の跋に。若夫使筆。則務使沈着通快婉轉遒媚。要會萃衆美。以歸於己。是之爲至矣とみえたるごとく。誰の書蹟にもよらず。おのづから一家の體をなして。摸擬の書を甚きらはるゝは。則空海が說を專ら用ひらるゝなり。こはおのれがよくしる處なり

又弘賢が楷書は。顏眞卿を學びて。やゝ一家をなすに似たれども。行書。草書にいたりては。凡庸を免かるゝ事あたはず。わづかに持明院家の筆意を寫して。いはゆる旖旎婀娜たる處をかき。虛名を走らせらるゝが心憎くて云々

これ又空海が意にあらず。旖旎婀娜たる處をかくは。則わが敎をまもらるゝなり。ことに弘賢が眞事は。顏眞卿にあらず。常に書を學ぶ次第を門人に敎へら

單鈎を第一としたるは。皇國人の指力。唐土人にまされるをもつてなり

　又時好にしたがひ。二王らが方勁硬賢の勢有るをとらず。別に屈曲迂回の運筆をひろめ。一機軸を出だせるのみ云々

と有る。これ下文に今もたま〱世にのこりたる經功の眞跡など。正體に妙處ありといへる意と矛盾せり。ことに空海は書藝をば物の數とはせざりしを。自ら妙處有るなど丶いふべきかは。不案内なる依託なり。それのみならず。空海が師といひし韓方明は。五種の把筆をさへ兼ね用ひられしをしらずや。佩文書畫譜に。校筆要覽一編あり。ついて見るべし

　又科斗鳥形などの書を除きて。八の字を鳩の形に象るごとき書體。漢土にありとせんか云々

唐の薛稷が慧普寺の額に此類あり。くはしくは弘賢が額字說に見えたればいはず。これらの事をも知らずして論せるは。抱腹にたへざる事なり

　又弘賢は。空海が論によりて。二王らが筆論によらざるはいやし云々

といへるもたがへり。弘賢は常に晉唐の筆論を談じ。二王の書を臨して。弟子にもさづけらる丶を。汝等はしらずや

　又實は指力強き人。なほ雙鈎を用ひなば。指力ます〱強くして。もとより優美婉曲なる上に。また確乎として不可抜の勢を書き出だすべきものなりとて。弘賢が大字をかく時に。雙鈎する事を難じたれば。雙鈎の力つよく。運筆自在なるが故に。中字細字に單鈎を用ふると。單鈎を是なりと論ずると矛盾すといふべし云々

といへるも眼なきが如き論なり。弘賢は空海が單鈎雙鈎兼ね用ひし事も。執筆法に書きたるを信用せらる丶が故なり

　又平田篤胤が云々。單鈎第一と定めたるならんと。古史の開題論に論じたるを。弘賢も尤と思はれたるやうすなれども云々

これは。弘賢が釋文にかゝれたる。空海が書訣を。篤胤が見てかゝれしなり。主客たがへり

　又もとより書の此國のものとならざるを思はずして。佞媚せられたる。おまけ口上なり云々

弘賢なんぞ筆法を論ずる事は。漢字わたりてより後

ん。それをあなぐりもとめていはんとするは。いといと心ぎたなし。屋代弘賢も。かゝる妄説にまよはさるゝ者にあらざれば。うちすておくべけれど。かくきたれるついで。かつ汝等が後學のために。此一論の作を。あらかじめ空海がとき聞すべし。つゝしんで拜聽せよ。先其方が論に

ずでにふでをなすに。單鈎をもて第一とすることは。空海が論に。俗にこれを包筆と云ふ云々。ひとへに第四五の指を壓すなり。これを掣りて脱せざらしめん事を欲す。そのこれを執る事至牢なることをあかせり。但し小指力微にして。久任に堪へず。凡。此勢をなせば。掌おのづから空し。たまゝ其虚にあたれば。粗又輕快なり。すでに其理をしりて。其微にいたるべし。もとより單指の力ひとしくもつて。長久に困まざるべきにしかず云々

此又單鈎を第一とする事をいはんために。雙鈎の論の末に。もとより單指の力ひとしく。もつて長久に困まざるべきにしかずとあるを引きて。單鈎の全論をあげしなるべけれど。はじめなる俗にこれを包筆といふとある上に。單鈎を論じたる條にといふ辭なくては。單鈎雙鈎の論。混じて聞ゆるなり。また掣の字とつてとよみしも誤なり。弘賢がひきてとよまれしぞ空海が意にはかなへる

又次の論に。凡爲二此勢一とある勢字。弘賢が釋文に。執を執と書きて。勢の省文と注されたるは。あやまりにて。なほ明二其執之至牢一と有る執の字也との論

いかにも空海が書釋には。執とかきたれども。これは弘賢が勢の省文と注されたるもわろからず。弘賢が先年。此書校正の時。紫野栗山に相談せられしに。こゝは勢といふ方まされりと答へられしこともあれば。しばらくそれにしたがはれたるにて。ひが事にはあらず。よき眼の付處なり

又單鈎をよしと。空海が定めたるは云々。韓方明より直傳せし雙鈎を。單鈎にあらためて。その時好にしたがひ云々

こはいかなる飩忽ぞや。空海雙鈎を單鈎にあらためたるにあらず。やはり雙鈎は雙鈎にて用ひ。別に單鈎を首に置けるにて。二つともに兼ね用ふるうちに。

金剛談

小林元儁著

ならずば識れといふ諺にもとづき。或人小説屋と假名して。しりうごといふさうしをつゞり。摺卷となして。ある日口授せし門人三國眞並穴。粟田恒の二人をよび。文机にかゝりて。いと〳〵したり顔にのゝしりあへる處へ。一人の老僧來りていへらく。貧道は紀州高野山にすめる空海なり。汝等此頃江戸に於て。現在名高き國學者どもをしりうごちて。一冊子をかきぬとか。それにつきて。小ざかしき佞辯の法師をかたらひ。空海が名をかたりて。屋代弘賢が許へ遣し。傍若無人に。あらぬひがごとをはきちらししよし聞つるまゝに。其實否を糺さんため。かくわざ〳〵來りしなり。弘賢は書道に於ては。空海が教を守りて。よくわが心をうかゞひしりたる者なるを。汝等いかなる恨ありてか。かゝることには及びしぞと。にが〳〵しきおもゝちにて。文机の向うにたゝせ給ふ。三人はおもひかけぬ事なれば。さながら夢のやうにて。こは此ほどより此草紙をつくるにつけて。大師のうへをも。とやありけん。かくやあるらんと。さま〴〵心氣を費したる故。かゝる迷のおこりきぬるならんと。おの〳〵心をしづめて見るうち。いよ〳〵傍ちかくより給ひつゝ。御聲するどにせめとひ給へば。三人はにはかに物おそろしく成りけるまゝ。低頭平身して詞なし。しばらくありて。小説屋頭をさげていへらく。おのれらまつたく弘賢翁に恨は侍らざれど。かの人の書道におきて。大師の御教にそむける事の有るをさとし申さんとて。かしこくも御名をかりまゐらせて。かゝるしぎには及びしなり。則その書これにとて。おそる〳〵さしいだすを。大師やがてとり上げておし開き。全篇を一讀して冷笑し給ひつゝ。の給ふやう。さて〳〵汝等は腹黒なる者どもかな。こは此人々のいづれも學才ありて。世にめでたふとまるゝを。妬ましく思ふこゝろより。こぢつけにまうけ出でたる虚論なれば。心ある者。誰かは信用すべき。また論中たま〳〵あたれりとみゆるふしは。其人にとりては。枝葉とある小疵にて。全體の難とすべきにあらず。古語にいへるごとく。智者も千慮のうちには。いかでか一失なきことをえ

魔の本體をも見あらはし。根の國底の國べのもとつ國に。いぶき放ちなんものぞといへば。川勝は恐るおそる。仰せことどく承り候ひぬ。そのよしをればく分身し給へる太子たちに告げ參らせて。このゝち古の道の眞言を傳ふる人に。射向ふ事あるまじく侍れば。ゆるさせ給へとくり言しつゝ。雲をよぢて翔りさりぬとぞ

鳥おどし終

鳥おどし後書

千早振神の恩頼のなかりせば。囀や戎國學の腐人にあなづられましを。源重恭うしが足日木の山田にあみ立つる。曾保騰の神には。久方の空翔る糞鳶も翼を垂れて。杉の木末を下り。荒金のつちを走る古狐も。鹿自物膝をり伏せて。稻むらの影にかしこみぬるは。誰が功ならん。君が平阿曾美の翁を。尊みぬるこゝろの深きは。山の井の淺くはものをおもはまし。此ふみの巧は。千年經とも。いよ〳〵立山の峰よりも高からん。萬代經とも。ます〳〵千尋の海の底より深からん

天保九年といふ年の霜月十日まり八日

源　壽　麿

藏志などいふ書に。篤胤くはしく記し置きたれど。そのかたはしは。玉だすきといふ物にも記せるを見てしるべきなり。げにも〳〵篤胤は世のいはゆる小山仕にあらで。若きより手筆をとゞめず。目に書を放たず。わが神國の古傳にもとづき。萬國の古説をもらさずたゞし明らめ。顯にゐて幽をさぐり。あらゆるよこさまの道々を。盡く論じうしなひ。つひに妖魅を降伏しをへて。皇神のみちの眞語を。世にあまねく知らしめんと神にちかひて。机上に數百卷のふみを撰びをる。眞の大山仕なるを。よのつねの小山仕のごといはるゝは。いとをこなる事なり。さるゆゑに。てにをはの格中にまどへる世の歌人らとおなじからで。あやまつ事のありげに見ゆるは。數千萬言の著述。一句ごとにてにをはの過ちなど。正しをるべき暇なきゆゑなり。こゝをもて。一首の歌。あるははし書。また偶にものする宮比ぶみなどに。さるあやまちはをさ〳〵なきを。知る人ぞ知りてありなん。また太子とおなじ心なる空海法師が。入らざるかしこだてに。篤胤が惡筆なるよしを。詈れることゝ聞ゆるは。ことに愚なり。さるは此法師こそ。物かくわざをいとやごとなき事におもふめれ。かの漢人も大志あるは。書は姓名を記すに足るといはずや。篤胤その師の志をおしひろめて。世に道のまことを說き知らしめんといたづくからに。物書き習ふいとまなき事は。其門戸に依れる者は。誰もたれもしれる事なり。そはかの拙筆なりしから人の。腕中有レ鬼。眼中有レ書と云へる。まけをしみの類ひならで。腕に鬼はすまぬものから。心ありて若きより手習ひせず。されど眼中に書あるが故に。をり〳〵に書論をもなすなり。すべて此法師が輪池翁の手迹をあげつらへる事ども。いと愚にをさなき說の多けれど。こは別にいふ人有るべければ。我はいはず。抑これらは太子の論じ給へる事にはあらねど。同じ道を行ひ給ふ太子なれば。決めてこの法師が論に。あひ口あひておはすらんと思ふ故に。ことの叙にかくは云ふなり。よく心に記してな忘れそよ。されど猶こりずまにかにかくゑりうごち給はゞ。太子ともいはゞいへ。道の大義に替へがたければ。おのれ天津皇祖神たちにうたへ奉りて。妖魅のなかに交らひ給ふ。その窟巢をあなぐり尋ねて。太子をかく惑はし奉れる。釋

て佛頭に糞を着くといふことわざは。太子の降りませるを。天神下降とこゝろえたらむには。糞頭に佛を着くともいふべき事にて。冠履所を異にせるものなり。また太子の上り給へる後。篤胤目の上の瘤をとられたる心もちになりしといふもいとをかし。目の上の瘤を取られつるとは。思ひ屈したる事のありしが。ほがらかになりしをいふ事なる故に。こゝには當らず。かゝる諺を用ふべき格だにしらせ給はずば。かくざまにうまつからしの寄り道せさせ給ふべくもあらず。あなをこの太子や。かたはらいたのしりう言やといふほどに。川勝は吾にもあらで。弓をふせ箭を捨てつゝ。れん身は山田もるそほどゝ思ひしに。いかにしてかく太子のあやまち給へるすぢをしり得給へる。已いそぎ參上りて。このよし申しあらはし。あやまちわびさせ奉らむ。此事ゆめ人に語り給ひそといへば。案山子から〳〵と打ち笑ひて。知らずや吾はこれ足はありかねども。天の下の事をこと〴〵にしれる神なり。少毘古奈神をだにあらはし奉れるものを。この太子にかく論じさせ奉れる釋魔をも。いかでか知らざらむ。されど思ふ旨あれば。

今はその名をあらはさゞるなり。太子はあまさ天竺の他神をむねと齋き給へるが故に。そのみすぢ絶にたれど。おことは心ざしいと雄々しくて。大生部の多がまつりて。世をまどはせる妖(まが)むしの。常世の神ときこえしを。打ちきためたるいさをによりて。蕃種ながらもその末廣ごり。榮え傳はれるによりて。人おほき中に。おとをよびてかくいひ聞かするなれば。帰りて太子に申さんには。このゝち降り給ふことありとも。太平記の文の妄説にならへる。御出立はあるまじき事なり。黄金の大鎧などめし給はむは。治まれる世の御さとしに似あはしからず。かつ篤胤に返答せよとのたまひつゝ。赤檮とおことに箭鏃をむけしめて。口あかせ給はぬも。いと卑劣なる御ふるまひなりといへ。なほいふべきは。篤胤が漢土印度は更なり。その餘の國どもをもみな吾か大御國の出店なりといふは。深きゆゑあることにて。世の青々しき學者どものしる所にあらず。實には皇産靈神を。漢土にて元始天尊と申し。印度には大梵王と稱へ奉り。伊邪那岐大神を天常と申せるなど。その餘くさ〳〵のあかしある事なり。こは西蕃太古傳。印度

いへり。但し同書に。この下に十二因緣經などを引きて。しひて慧思が後身なりと云ふ說をたてんとしたれど。そは例の附會の論なれば。今は年曆をもて證とするなり。慧思いまだ身まからざるに。太子此國に誕れ給ひ。のち五年をへて。かの僧の死りたらんをば。いかでかその後身なりといふ的證にはなすべき。此事の辯は。書紀の通證をはじめ。あまたの書に見えたるを。太子みづからの前生の事をだに知り給はで。篤胤が事をかにかくに論ひ給ふべきことかは。然ればやまとの漢の代々の撰史の例をもしらで。古史の撰びざまを論ひ。そがうへに

自家の作書を公然として講釋するなどは云々

などいはれたるは。篤胤が講席のさまを。人づてに聞きて論じたることならん。篤胤つねに古史の徵をば講せず。その成文は古說を集めしものにて。うひ學びの人には。注なくてはよみ解くべきにあらねば。をしへ子どもの請ふまゝに。その注書どもをよみ聞かするわざなり。またよし元より實にみづから作る書にても。人に講說しつることは。漢土には宋の眞德秀が。その著せる大學衍義を講じ。皇國にも淺見安正が。みづから撰べる靖獻遺言をときて。其講義をもしるせるなどの。ためしもあるを知らざるものなり。さて涅槃經の事。また今昔物語なる松室の仲算が事。ある人法華經を校正したる事の論などは。竹尾覺齋が說なるを。太子ひそかにかいまみもし。或はその說を聞きつたへて。こゝへはとり出でられし物なり。この說どもは。覺齋がために備書せるものの見おぼえて。吾に語れる事ありき。そはとまれかくまれ。篤胤にあづからざる事なれば。今はさしおくなり。然してまた

仲景考といふ物などは。元より牽強附會のことにて。論ずるに足らず

と云はれしは。謂ゆる負をしみのこと葉なり。さるは孟軻が語に似たれど。譬へば方寸の小石をあぐる力なる者の。方丈の大石を見て。こはもたぐるに足らずと云はむに。誰かその言をうべなはむ。かならず其はあぐるに足らざるにあらず。あぐること能はざるなりと。哂はむがごとく。かの書を論ずるにたらずと有るも。まことは論ずると能はざること。己よく知れる故に。負をしみのこと葉なりとは云ふなり。さ

かその婉嫚なるを嫌ふべき。天津そらをも翔り給ふ太子の。西浄なる人どもの。漢人は世のかぎり。其國もじの義をしり盡すこと能はずと。かの國もじの煩はしきを笑ふ事をば知り給はざるにや。己は立ちたるまゝにこゝに在れども。能くきゝ知れるものをや。然るに

汝もすでに漢字を用ひて。文章をなすにあらずや

と云はれしは。殊にをかし。そは漢字すでに久しく世に用ひなれてある故に。書は通用をもて專とすれば。篤胤も世のなみに。漢もじを用ふるより外なきにあらずや。また

寅吉といふ小僧を。何國からか呼びよせて云々

と云はれたるも心得がたし。こはもとより江戸の生れにて。さる奇童なることは。岸本のゆづるが見つけいだし。夫より山崎美成がいへにおきて。かの男が平兒代答といふものにかきあらはせるを。胤篤もとより古今妖魅考をあらはして。其界の事どもを論はんとするほどなりしかば。世の人の天狗小僧とて。あるは恐れ。あるは山事と譏るを。事とも思はれず。奴僕の如くめし使ひて。さるかくれ里のことゞも聞き得られたる事も有るなり。是また篤胤が道をおもふ眞心。大きに人の意表に出でたる處なりかし。さてまた再生の事を

かの眞柱に。人の魂は云々。再生轉生するものは無きやうに。說を立てたる處に云々

といはれしは。いみじき不學の太子なりけり。靈の眞柱の書の中に。さる說をしるせること。何處にかある。はた再生の事をば。かの眞柱に作れるよりはるか先の。篤胤いまだ三十未滿なりし時に書ける。鬼神新論に。既に再生もある事のよしを論じおきて。再生說聞にいへるにおなじ。然ればかの太子は。鬼神新論はさらなり。靈の眞柱をも。よくは見給はざるなるべきを

尻口で物をいふといふ物なり

などいひて。御身が慧思の後身なるよしを。再生記聞に書かざることを恨み論ぜられしは。實に笑ふに堪へたる愚論なり。そは元亨釋書太子の傳の論に。思大陳大建九年滅。太子敏達二年癸巳誕。以レ暦考レ之。太子五歳時思公化。豈有三未レ死而受二生於佗方一哉と

元に年しるしたる。役行者本記といふものを見たるに。小角者幼名也。敢無ニ成長之諱一。其父名ニ大角一。其家世々長ニ於聲韻之曲一。故字。大角此云ニ腹笛一。小角此云ニ管笛一とあるは。れのれ石笛を得て。大角と名稱れるに暗合せり。世人もしこの書を見ては。此名をれそひ取りつと。譏りごちなむなど云ひ居れば。この文をひき。また天文の書類に見ゆる大角星のこと。また角音に大小あること。また古へ大隅を大角とかきし事などをも。穴ぐりたづねて。譏りぐさとせらるべきに。太子の好み給ふ佛法ざまの古書をだに見給はず。大角星の名をさへに知らで。いかでか篤胤を論じ得らるべき。さて篤胤が開題記に。太子馬子などの事を論へるは。林羅山翁の説に。太子馬子は同志の人なりといへる語に本づける説にて。實に金玉の確論。千古の卓見なるが。また其功をもあげて。釋日本紀なる。上宮太子全依ニ經史之例一云々の文をひきて。其語の出處をいはざりしかば。太子それを取られたりとみえて。其文のまゝにあげて。中古の者もはめたるなりとほこり。文の出處を云はれざるは。孫引の證といふべし。しかしてこの君しきりに御自の尊重にほこり給ひて

その國に居ては。その大夫をだも譏らずといふ義に戻れり

など。失敬を咎め給へるは。八耳ともあらぬ愚痴の御こと葉とこそ聞ゆれ。そは宣ふごとく心得たらんには。書をよみ古を考へんに。その人々のつかさ位をよく記し明めて。かの人はつかさ高ければ。このひが事あれども。云はでありなん。この主はやごとなくましませば。道に害ある事なれども。論ふべからずとやうに。口を閉ぢてあらむか。さらば尙古考究の道長くたえて。學問の道いと狹くなりなんかし。さる愚痴におはする故に。此上にも。

神代字用ふべくば。今こゝろみに用ひてみよ

などやうの。頤を解くばかりの語をばいはれつるなり。げにも太子のいそしみ給へる故に。今の世漢字を日用にあて。簡便なるに似たれども。はじめより漢字を用ひずして。神代字のみ用ひ馴れたらんには。固より四十七音の假名なれば。たより宜くて。かの天竺はさらなり。其より西なる國々の。今もなほその國字のみ用ひて。煩はしともおもひたらぬ如く。いかで

さてその時齋藤彥麿が篤胤に代りて。「おどろかぬ人ぞ中々おろかなる。天地にひゞく篤胤が島」と返歌したりけるによりて。雅聖はふたゝび口を開くこと能はざりき。人の事を論じ給ふとならば。さる歌の贈答の事をも知りていはるべき事なり。さるひが耳なる故に。かの眞柱の書をも。なま〳〵に聞きしり給へるものとおぼしくて

たとへば舟にのりて海路をゆくに云々といふ新說を立てたるにより云々と。漢土の上古にはやくさやうの說ありし事なり

などいはれたり。篤胤もとよりさる舊說の漢土にある事をとくしれりし故に。かの眞柱に。こは事舊りたる譬なれど。せめていふなりと書き。またそのまた〳〵に。外國人の說に似たるは。彼が强に考へたる說の。古傳に合へるにこそあれといひしを。皇子は見給はざりけるにや。かたはらいたき事なり。されば

汝が師の本居宣長が說と矛盾して。一家を成さんと謀りしこと。掌上に見るがごとし

などいふ論は。笑ふに堪へたることにて。本居宣長が語に。わがをしへ子とあらんもの。我が後によき考の出でんには。吾說になづみそといひて。をしへ子どもの中より。師說のいかにぞやおもはるゝ所を。論ひ得る事あるをば。いはゆる後說として。よろこび居る宣長が本意なるをも悟らず。またかの眞柱は。服部中庸が三大考を主張したるものにて。その三大考は。宣長の世にありし時の撰みなる故に。そのおく書に。かくてこそ。高天原も夜のをす國も。明らびぬれとほめたゝへたる書なることをもしらで。篤胤が新說のごといひ破り。いひ消んとし給へるはひがごとなり。こゝをもて篤胤が俗稱の大角といふをも

其實は。かの役公小角が。鬼神を驅役したる神變を慕ひ。小角より上に立たんとの下心にて。大角と名乘したり

と云はれたるものなり。實に天の石笛を得たるによりて。大角と改めしこと。石笛記を見てもしるべけれど。篤胤もとより鬼神の情態をうかゞひ。天地の化育を賛參する道の大義に目をつくる大俊傑なるものを。いかでか小角が小神變を慕ふべき。たゞし篤胤近ごろ。かの小角が弟子の義元といひしが。神變

鳥おどし

川崎重恭　著

○豊聰耳の皇太子。平田篤胤をのゝしり給ひてのち。意氣揚々として。これより淺草なる。ある寺の太子堂に赴かせ給はむとて。かの甲斐の驪駒に鞭を加へ。天津空を翔りて。いそがせ給ふほどに。御前に侍りける。秦の川勝みだれ緒のわらぐつの紐とけたるを結ばんとて。一足二あし立ちおくれたりけるに。中田甫とかいふめる所の田の畔より。川勝々々と呼ぶものあり。こはいかに。今末の世になりて。わなみ川勝らがことを。かうざまになめしく呼ばんものあるべしともおぼえず。何ものにかあらんと。頭をめぐらして。雲際よりよく見るに。吉原の廓へ通ふあやしのあをだかきつるゝ人聲のみして。此あたりには人げもなければ。いとあやしみて。吾がひが耳にやありけん。御供におくれんはあるまじき事と思ひなりて。行かむとするに。また川勝々々と呼ぶ。心迷ひにやとおもへど。イみて猶よく見れば。この畔のほとりに。破れたる簑うち著て。竹の笠うちかづき。手に一張の竹弓をもちたる。一箇の案山子の立ちたりけるが。それが聲ふり立てゝ呼ぶなりけり。あやし。上れる代に。岩根木草のことゝひしけんは。吾も聞き傳へたるのみなるに。こやつ何物のかゝりて。まどはかすにかあらん。聞かで過ぎんはおくれたるに似るめれば。樣こそあれと。雲間より下り立ちて。そのかたはらに近づきつゝ。吾名をしば／＼呼べるは汝なるか。何事のありて。人まどはかしに。御供をばおくらかさんとはするぞといへば。案山子聞きて。まことに吾が呼べるなり。さるは聖德皇子はる／＼に天王寺よりものして。篤胤をのゝしり給へるを聞きたりしに。いとかたはらいたき事の多かるを。おことにそのよし說き聞かせてんとて。こゝへは呼びつるなり。まづはじめに。篤胤が靈の眞柱の事を

　靈のみはしらといふ書は。ある人に歌にだまされて云々と擧げられつるは。石川雅聖がたはぶれによみつるにて。實は打つ音におぞろく人の云々といふ歌なりけるを。とほく天王寺にて聞き給へる故に。ひが耳してだまされてこそは聞きたまひしならむ。

をそへて。おもふまゝにあげつらはせたらましかばとおもふも。吾が天の下の事ども。ことごとに知り得つる眞心にこそ。いとをかしやとて。重恭にあたへたまふをみれば

鳥おどし序終

鳥於度志序

石の上古こと學び。今はもよ眞盛りになりきて。鷄がなく吾妻の極め。不知火の筑紫の限り。押しなべて。至りいたらぬ里は無りけり。しかれば大御國の學は。春山の花のふくめるが朝日に匂へるごとくにさかり。戎國の學は。秋川の螢の夕月に光りかくるるがごとく衰ふるを。囀や漢腐人(カラクタ)の心もて。後言といふ書をあらはして。世に名高き大人を誹れることありけり。そが始に平篤胤大人を。打舂(ウツセ)貝實なしでともて論らへるを。源重恭面ほてりて。うしの答ふみをあらはせり。後に得て我見るに。學の道に志高く。さとり廣きをめで歡びつゝ。知れる人に尋ねけるに。往し年。若くして早く顯世(ウツシ)を去りけりと聞きければ。彼の功のいたづらにならんことを思ひて。かくぞしるしける

天保九歳といふ歳の神無月十一日

越智宿禰通澄

古しへまなびする人ども。此ごろかにかくにさたする。しりうごとてふ書をとりて見れば。中に聖德の皇子の御名をかりて。わが伊吹廼屋の大人のまなびのすぢどもを。負氣なくもえりうごちたる。をそ物がたりひとくだりあり。あやしくかしこくも。かの皇子を物しらぬ人にしつる事哉とおもふまゝに。とく師に見せまつれば。あなはかなとて打ちやり給ふを。いかで答へぶみかきてましと乞ひまをせども。えうなきわざなり。さてやみねとて。ゆるしたまはず。かくてももだしえあらねば。いかにかせむと思ふ〳〵。寐たりける夢に。日ごろ師のいつき給ひて。まなび子どもにも。此神かしづき奉れと。をしへさとし給へる。山田の曹保騰久延彦の神あらはれて。川崎々々と呼びおどろかし給ひ。かのふみのいとつたなきがをかしければ。世のしれ人どもは。うべなひおもふもあめれば。これよみて見よ。笑はざれば道となすに足らずといへるもむなしからで。かくさまにひとをそしりごつなむ。いよ〳〵ますます。その人のひかりをますわざなるを。同じくは。このそしりごちつるたふれものに。今一きはの學び

落ちたれば。こは花よと思ふものもなく。いさご吹きたてたれば。たゞおどろきてゐるがうちに。雨のふり出でたり。初めはこゝちよき雨などゝもいひたらんが。のちには人の聲に雨の音もせず。馬をはせてかへるもあれば。おどろきあわてゝ。堤よりまろびておつるもあり。女などはいといたうみぐるしきまであわてふためきて。はじめよそひしをもみづから夢とや思ふらんさまなる。まして酒に醉ひて。ぬるゝもしらずがほにわらひなどするもあれば。思ひよらぬおろかなる雨かなといかりのゝしるもありぬべし。かの舟は早くこぎ行きぬれど。わがすむ浦は遠ければ。とある橋の下に船とめてゐしが。橋の上など人のはしりさわぐは。なるかみのやうに聞えぬ。はや雨もかぞふる計に川のおもにみゆるころ。夕月のことさらに新らしくみがき出でたれば。はや雨のなごりもなし。堤の花いかゞあらんと。こぎかへしてみれば。その比ははや人もなし。櫻のこのまにほのぼのと月のみゐたるは。わが爲につくりなしけんと思ふ計なり。ぬれにし人はいかゞしたりけん。この月などは思ひもよらでわらむなどひとり思ふも。何となく心をごり行きぬ。かぞいろも。われひとり人にこえてこゝちよしと思ふときは。といましめ給ひたれば。またあやまちやしぬべくとおそろしくおぼえければ。のみ殘したる酒携へて。つひにこぎかへりぬとか

花月草紙 終

とげてのち。船にのりてさりしを。かたきことのやうにいへど。代々のいさをとげし人のをはりよからぬよりみれば。よしとはいはん。されど船うかべてさることだにならば。かたきことはあらじといふを。よきをばよきになしてみ給へ。よきをもそのうへのことゝいひてせむるは。いとあしき心ぞや。聖ならではゆるすひとはあらじと

けふはいとのどかなり。いでやすみだがはらの花みんと。小船にのりて行きたるが。花みんとたち出づるもろ人のさま。げにみやこのみやびを盡せり。さま〴〵の心々に打ちむきて行くに。女房なども何か口たゝきつゝ。心そらにありくもあり。馬はせて花をもめにかけず。いとばうぞくに行くもあり。やごとなき人にや。人々打ちかこみて。つゝましげに行く女もあり。あるは木かげにて。はやひさごかたぶけ。何やらんやたて出だしかいつけ。かうよりして花の枝につけて。われはがほなるふぜいなるもあり。けふはげに晴にはれて。一天に雲なく。ふじもつくばも手にとる計にみえたれど。またそれを打ちながむる人もなし。ましてかく晴れたる日は。とみに雨風のあるなどいふことは。露思ふものもあらじかし。このゝどかなる御代の春の御惠にぞ。かく心ゆたかにたのしび遊びて。かへさわするゝ計しても。何のわづらひうれひもなきに。此のはなもむかしよりつきぬ御惠。深き露に生ひそひしとやらんもきけば。さ思ふ人もありやなしやとみれど。王世の民の心とや。かゝるてる日の惠をば思ひもよらず。いつもかく空はるゝものと計も思はぬ輩おほからんなど思ひかへして。よもをふと打ちみれば。つくばねのあたり。いとほそくひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ。世にいふはやてなどいふものなりけり。餘りに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて。かねてみのもかさもはなたでゐしが。はやろをしたてこぎかへるを。いかに。この花をみすてゝかへるは。かりがねにつらさやならへる。ろの音計まなべよかしなど。口々にわらふを。耳にもいれで漕ぎさりぬ。いつかその雲のいとひろごりてけるが。かのともがらは露もしらず。日のかげろふもしらず。けふはあつき計なりとて。はだぬぐもあり。又は衣などぬぎて。はせありくもありぬべし。雨に先だつ風の。ひと通り吹き

が。そのもの幸にやまひなく。よはひもいと長かりければ。いとゞわがおもふより外にくすしの道なしとて。その子孫らへもいひおきて。家の掟とぞしたりける

雨かぜのときたがへぬといふも。甘露くだるといふも。かならずしひごとゝのみはいはじ。政ゆるきに過ぎぬれば。あつさもさむさもゆるく。政ながるれば。季候のうつるも正しからずなどいふ。天人一理なればさもあらんかし。また政にあやまちあれば。大空のとがめありといふも。あやまちしるものはせめをみる。あやまちしらざるものは。せめをもしらず。いつもゆたかにてわざはひなしとす。たま／＼わざはひしりても。むかしのためしなどいひて。こゝろにかけぬともがらは。つひに身にかゝるわざはひとなりぬるとかやかたりし。かんずなんどの大空のことなどいひて。人をせめしためしあれば。なしとはいかゞいはん。されどもまた大空のかへりみをうくるものは。よくそのせめをうるとかやいひて。かぞいろのわが子をよくそだゝなさんと思へば。さまざまをしへみちびくまゝに。あるはいきめきてのゝしりなどすれど。わが子ながらもおもひすつる時は。むつがる聲をもなさず。さればかぞいろのせめなしと思へば。つひに大なるわざはひをうるなり。禹水湯旱とかいふ如く。聖はなほそのせめありて。改め給ふとも速なるべし。ことにかくても。民草のうれひ少なきをもてたふとしともいふと。またいひし

いせものがたりは梅のごとく。源氏ものがたりは櫻のごとく。さごろもは山吹のごとし。つれ／＼ぐさはくす玉につくれるはなのごとしと。ひとはいひけり

わがあしきをば桀紂をひきてなだめ。人のよきをば堯舜をひきいでゝとがむ。かれはかゝるあしき事なしぬといへば。げにさあらんといふ。このものかくよきことし侍りぬといへば。いかゞあらんいぶかしといふ。げにも人はあしき心あるものかなといへば。よき名得まほしと思ふが故に。人のあしきにてわがこゝろをなだめ。人のよきをばねたむよりいでくるなりといひし

もろこしの君と臣とのみちは。わが國のとはたがへれば。いひわくべき事にはあらねど。范蠡がいさを

ひうることヽまれなり。わかきをりよりくすりのみしとなし。やまひはいさヽかもしらずといふものは。とみに大なるやまひをうるといへば。やむごとなきひときヽたまひて。げにもとてうなづきたまひしとか

夫婦の別といふみちは。新枕のあけの日。起き出でたらんときのこヽろをわすれぬをいふとか。人のいひし

鷹の羽にすむ虫ありけり。空たかくとびかけるときは。はるかに人の住家などをも見くだしつ。げにわれは事たれる身かな。つばさもうごかさで。千里の遠きに行きかよひ。雲ゐのよそまでもあがるめり。ことにさまざまの鳥はみなおそれてにげはしる。げにもわれにかつものは大かたあらじなどおもひつヽ。かのたかの毛のうちに居つヽ。しきりにしヽむらをさし。血をすひてゐしが。そのやからいとおほくなりもてゆきしにや。つひにそのたかもたふれにけり。それよりみづからいでヽとびかけらんとおもへども。とび得ず。はしらんと思へども。すみやかならず。血もつき肉むらもかれぬれば。いまはいのちつなぐやうもなし。からうじてまづその毛のうちをくヾり出でヽはひゆけば。すヾめの子のゐたりけり。われをおそれなんとみれば。すヾめの子はしらぬさまなり。いかにしてみつけざるかとかたはらへはひよれば。うれしげにみて。くちばしさしいだして。ついばまんとす。例なきことなれば。おそろしくてにげ隠れぬと。かの友どちにかたりにけり

くすしの道しり得たりとみづからいふ人有りけり。附子人參は人をして氣の上る病を生ぜしむ。大黄の類はもとよりおそろしきものにて。味もまたいとにがし。苓蓮はうちをひやすの毒あり。ましてはづなんどはさらなり。石膏のたぐひの石藥もと人を害するものなり。麻黄はひとをして汗をもらさしむ。ただかの君子の名よびたる。茯苓白求ちんぴのたぐひのみこそ藥なりけれといひぬ。やまひありてもからやうの藥のみ用ひけるが。もとよりかろかりしにや。つひにいえにけり。彌かヽるものヽみ用ひて。ひと道によければ。これにあしく。毒あれば毒をもてうつことなんどもしらず。いかなる病かの出できたらんときは。かならずくい思ふべしと。人もいひける

みえず。人にとはざれば。よの人みなかくみゆとおもふなり。陽氣おほき人は。水飲水浴して。ます〳〵よきをおぼゆ。それをもて世の人か丶れと思ふたぐひにて。かれよろこばんと思ひて云ふことをふづくむあり。うらまんと思ふ事をよろこぶあり。わが私智獨見にて。人をいかではからん。歒情を察し。軍にかつものもあるを

今いふ費はかくせずともあるべきをなすなり。よに云ふ吝はいといふは。かくすべき事をせぬなり。いはゞ水をた丶みのうへにこぼしたりとて。いさ丶かの水をふところの紙。手にあたるまに〳〵つかみ出だして。おしぬぐひすつるもあり。またおほくこぼれぬる水に。少しとり出で丶ぬぐへど。水はた丶みにながれ行くを。またすこしとり出で丶ぬぐふ。つひにた丶みに水は半入りてければ。さておきぬるもあるべし。水のほどにしたがひて。紙もておしぬぐふべきを。おほきも少なきも。そのほどをしらざるは。みな聖のをしへにたがふといへば。きく人わらひて。かみなんどに聖の道などゝはいかゞなれ。こはいかにしてもありなんといふを。かみとて空よりふりきしものにはあらず。大君の賜よりして。日用の事を辨ずるなり。わが家國の用度もいくさ出だすも。あしき年をすくふそなへも。のみくふものも。みなそのたまもの丶うちよりして。わかち出だす事にて。これはわがものならぬ事なり。扨しはくして。わが物と思ふも。費やしてかへりみぬも。みなたまものなるをしらざるよりおこるとぞ。げに國郡おほくたまひしも。すくなきもあるを。そのほどしらで身ををふるは。力あるもの丶まねびして。重き物あげんとしても。われ力なければあぐることを得ざるは。たれもしれるを。わがみのほどをしりたる人の少きこそをかしけれとわらひき

さむさをきらふものは。寒さにさはらず。あつさいむものは。暑にあたらず。われこそすこやかにして遠さど行くとも。つかる丶ことなしといふものは。おほくあしに病を生ず。われは目のあきらかなるにや。はるかなるもの。かすかなるものといへども。のがすことなしといふものは。かならず目にやまひを生ず。けふはかしらいたみ。きのふはむねのあたりふたがりぬと。日ごとにいふものは。大なるやま

んとすれば。右は右へゆかんとして。一つもひとの事たることはあらじかし。さるにいにしへより國のつかさたるもいら。あるはそねみにくみ。又はかたみにしのぎなとして。たゞにわが威をふらんとするは何の心にかあらん。國家のことをよそにして。只わがみあることをのみ心とするにや。かくては亂れざる國はあらじを。わがみにのみかゝづらひて。そのことをおもはぬは。たとひ何のざえあり。何の力あるものとても。何にかはせん

政をなすも時と勢と位とをしるを要とすといふを。ある人のいかのぼりにたとへし。江都にていはゞ。春を待ち得しは時を得しなり。風を得しは勢を得しなり。わがみは高きところに居て。よもの梢を下視して。糸をはなつは位を得しなり。そのいかのぼりをもち。いとなどもつものあるは。人を得しなり。風のほどをみて尾などいふもの。又はいとなどのほどをはかり。ひきつゆるめつして。風まつは術なり。術といふもいかのぼりをあぐるの外ならず。べちにたくみにすべきにもあらずかし。昏愚の下民をすくはんとても。人ごとにとき。戸ごとにさとさるべきもの耳あらざれば。かりに術を設けて。その道によらしむることもあるべしといひしもきこえぬ。とにかくよき事にても。その功なきは。このみつをまちつくる心のうすきなりとなんいひし

人の上たるものゝ心得べき古歌をと望みしものに。いか計かありなん。いまむねにうかびしとて。「心ひくかた計にてなべてよの。人に情のあるひとぞなきといふをかいてものしたりとなり。ことばそふるまでもあらず。いとをかし

膽をねるといふは。いかにして得てんとたづねしに。天命をしるにあり。此しるはまことにとしるをいふなり。只こがねなどの欲はさりやすし。好名の欲ぞいとかなしき。古にも父君の命に背きてみを潔くし。朝廷の事をそしりて直をうる。これをしのぶならば。何かしのび得ざらんとまで。古よりいひしをや。只その天命をまことにしりて疑ふことなければ。つゆも心の煩なく。ちり計もけがれなし。獨寢ふすまにぢずとかいふ。かの浩々たる氣ともいふらん

物の大きくみゆる人は。瞳子の中高なるにて。中くぼなるは。物をさゝやかにみする故に。遠くのものは

道も衰へければ。終に忽ほろびにけり。いといたうやんごとなき御訓といふにも。大内今川室町の事をば。鑑戒とすべき御ひゞきもあるなり。今も猶愚かなる例にはいふなりけり。かの詩歌管絃など悪事にもあらざれば。自からゆるして節度の流るゝをもしらず。終に武道を忘れて。物わらひとはなりにけり。さすがにあらき事をばたれもつゝしめど

やごとなきつかさの人にいひし。君はもろ〳〵のつかさのうちにて。いはゞまづ手とやいはん。あしあればこそ手の尊きをもしるといふなれ。山のたかきも。ふもとの土よりこそいでくるなれ。あしなくば手もてはひありきなん。手もし足のかはりをなさば。あしかならず手とやなりなんかしといひぬ

民草の雨風をいとふ餘りに。きのふの風にはや葉末しをれぬ。この比の雨にたけものび過ぎぬれば。みのりも少なかるべしなどいふは。力ある民くさなり。此の雨にはいかゞあらんとゝへど。さしてさはりもあらじ。あすさへ晴れなば。かへりておひ立ち早かるべしといふは。心のうちは秋のたのみ心にかゝれど。いふもさすがに心ちあしければ。口にはよきさまにいふは。民草の力のおとろへしなりけり。おもきやまひにつきゐたるゆかりのものら。けふもきのふもおなじさまにて。あしき事はなしといふは。やまひおもるなりと人のいひし

むかし兩頭のくちなはありしときけばとて。くちなはのおなじほどなるをとらへて。二つの尾をしかとゆひて。はなれざるやうにして。庭へはなしたり。一つは南のかたの草むらさしてゆかんとすれば。一つは北かたの林へいらんとし。とみにゆかんとのみして。一つところにのみ居けり。たはふれにおり立ちておどろかすれば。いよ〳〵いどみあひて。一つ所にをどりゐけり。いかゞすらんとをり〳〵みたるが。三日計へて。二つのくちなはやはらぎてこゝろをともにあはせ。尾のかたをなはのごとくにして。頭を二つならべて行くにぞ。つねのよりははるかにすみやかにはひ行きけり。げに人もこゝろのひとつなれば。目も耳もこゝろにしたがひて見きゝし。手あしも一つ心ならばこそかゝりけれ。もし一つ〳〵の心ならば。右の手に左を凌ぎ。左は右をそねみ。手してとらんすれば。足はよそへ行き。左は左にゆか

咲きたるも

深川の八幡のやしろのまつりある日。おほくの人みにいきけり。二つ三つばかんの子をいだきて。母の行きたるが。大なるはしあり。わたらんとすれば。その子のひたなきになきてやまず。橋をわたらじとかへればなきやみつ。いかにしつることよとて。さま〴〵にすれど。はじめにかはらず。まづさらばこゝらにいこふべしとて。はしのかたはらにゐたるが。しばしゝて。はしのうへのひとさわぎたちて。聲のかぎりによびつゝ。あわてふためきにげまどふ。いかなることもわかず。よくきけば。そのはしの半よりおちて。わたりかゝりし人。千人計もおちしとなり。それをきくよりかの母もおぼえずなみだおちてけり。いかにしてこの子のしりつらん。神佛のたすけ給ひしなりとて。ふしをがみつゝ。いそぎかへりにけり。その子のみかは。その母もしりたれども。ただ私の心におほはれて。てらし得ぬなりけり。もとよりそのわざはひにあふものは。おもてにもあふれて。そのあしき色をあらはすべければ。心のかみははやてらしけんをしらざりしなり。こは虫けらも其いくる道をもとめ。死すべきをいとひて。ころすにこゝろなきものには。なれちかづくたぐひは。これおのづから生々の德そなへし。大そらの御心にて。それをうけ得し萬のもの。みなかくあるべきことなり。さればうらにあらはるゝも。龜やきてみるも。みなあめつちのうちにあるとあるもの。しらざるはなく。感ぜざるはなければ。ひぢりも一つの敎ともなし給ふとや

人をしるは偏なき處よりあきらかなり。かの辟すれば正しきを失ふ。いかでわが心くもりて。ひとの心をてらさん。わが才智きてんにててらさんとすれど。時にとりくらき時あり。いかで照さん

家國のすがたは。わか〱とあらまほし。もし年老いたるすがたになりもてゆけば。ものごとしづみはてゝ。人にみしられじと。物のいろめも花やかならざれと思ふまでになり行くぞかし。その心よりして。人に秀でんの心もとよりなければ。物の勘能上手もたえはてぬるものとなん

大内家の强大なるより。驕り出でゝ。管絃亂舞。詩歌風流に流れて。雲上のまねびし。もとゝすべき武の

は。柏木のいきすだまなどかくべきを。こは人もしらねばさはかゝで。かのみやすどころは人々の心の殘るより。はたかゝりけりともかへて。思ふ心をしめしたるはいとをかし。その比。藤氏のさかりになりて。君をなみしゝいきほひを憚からずかいて。源氏の君を大臣の列にくはへ給ひて。藤氏をおししづめしことも。夕霧を大學寮にいれ給ひしも。皆かゝらんかしと思ふことをよそごとにしてかけるぞたふとき。げにまたなきものがたりなりけり。さればみるごとに奧意の深きをおぼゆ。たゞ佛の道にのみいりて。誠の道にくらければ。冷泉のみかど。光君の御子なりしことを。はじめてしろしめしたるところのかいざま。道しらぬよりしてあやまれりけり。こゝのみぞ女わらべなんどのみても。道ふみたがうべくやと。危ふくぞ覺ゆる。薄雲朧月夜なんどの。人の道に背けるは。わらはべもしりぬべければ。まよふべしとはおもはずなん。佛のことをばやんごとなくたふときかぎりかけれど。よゐの僧のようなき事さし出ていふさま。みところにまでかいたるは。またをかし。此のものかたりを。たゞにあはれをつくしたるものにて。させることとわりあらはしたるものにはあらずと。もとをりのいひたるはをかし。されどもはし〳〵心はこめてかいたるにはうたがひなし

藤の花はちかうみればうつくしけれど。餘りにちかづくればかほりはまたよからず。はなやかにさくかとみれば。末まではひらき得ず。ことにおのれひとりさかりをみすることかたく。かならずこと木によりてたけ高き勢ひみするが。そのよりそふ木の枝もはもみえぬ計におほひぬれば。その木もつひにかれぬるにぞ。われひとりの心ばへみえて。木高く咲きみちぬとおもへば。嵐などにあふとき。もとよりかれし木なればうちたふれてけり。高うみえしはなも。つひにくさむらにうづもれて。またみる人もなし。代々の小人の情態にもたとへつべしと。ひとのいひけり

しうねきふかきは。山吹ととこなつなり。春も過ぎて桃もさくらもひとつ柳とみゆるにこきまぜしはるのにしきも忘れぬるころ。山吹のいさゝか咲き出でたるも。いはぬうらみぞふかげなる。また花さへちりはてゝ。わぢさゐもおもかげ殘すころ。はかなげに

かゝりければ。人々何くれとあざむきなどしけり。たそがれの比つかひに出でぬ。かへらん比はまだくれじ。かれをおどろかしてんと。門のうちなる柳の。いとしげりたるあたりへ。しろきゝぬ引きまとひ。女の髮亂せるやうにつくりて置きけり。ものゝけぢめもさだかならぬころ。かへりにけり。柳の前を通りたらば。聲あげてにげまどふべしと。いきころしてかいまみゐしが。何ともいはで過ぎにけり。柳のあたりには。この比へんげのものゝ出づるときゝしが。もしみしやとゝへば。げにも柳のあたりに白き衣きし女のたちてゐしやうにみしとて。おどろくけしきもなし。いかにしておそろしくはおもはずやとゝへば。都へ出づる頃。たらちねのこのくわんのんの御守と。北のゝとは。はだはなさでよとて。袋にいれて給ひぬ。へんげのものあらば。かんぜおんも北のゝ御神もましまさん。かれわれをころさんとせば。守り給ふべし。神も佛もなきよならば。へんげのものもあるまじと思ひしなりといひしとぞ

源氏ものがたりに。薄雲の后に心をかけそめ給ひしは。たらちねにようにかよひ給ふときゝて。何となうをさなき御時より。したはしく思ふをはじめとせしさまにかけるはをかし。花の宴のとき。酒のゑひにまぎれしあやまち。つひに身をおふるわざはひとなりしも。はじめのほど天が下にとゞろきたる御いきほひ。つひに榊の巻にいたりておとろへにたるころ。御みづからの行ひも。いと亂れもて行きて。わざはひうながしけるさまも。かならずかゝるものなるをかいのせ。すまのさすらひに至りても。御みづから咎なきやうにいひ給ひて。何となくぬれぎぬき給ひしふりにかけれど。そのうらのなみかぜのとがめにて。大ぞらのゆるし給はざることをあらはし。つかひのものらが都のなが雨のことなどいひて。まぎらしゝのち。大炊どのゝかみのおちけるも。すまのうらに限りたるとを示したるいとたくみなり。また源氏の君。ふたゝびかへり給ひて。繪合に至りて。大臣の心いどみあふけしき。つねにみづからが威をふり給ふさまをしるし。後にいや高くなりきはまり給ひては。何のわざはひかあるべきと思ふに。女三宮のうしろみのこといできて。をはりまたくし給はざりしにとゞまれるぞ殊におぼえぬ。女三宮のものゝけ

みぬればいと淺き瀨なり。かへらん道もしらねば。ふかきところ〳〵たどりゆくを。ゆく人などのみつけてとるぞかし。かうやうのにはかなる勢ひにものらずして。かく百とせをもいくたびかへにけんとかたりき

ねざめの里にゆきてみれば。あないのもの出できて。この岩は獅子といふ虎といふなど敎ふるもうるさく。いかでこはし丶なるべき。これもはたとらのかたちとはみえぬをなんど丶。一つ〳〵いひけたして行きぬ。そのかへさの道に。名もなき岩のありしを。ふとみれば。よくもましらのこしかけしをすがたに似たりといへば。げにと人もいひけり。あとよりきたる人をまねきて。ましらににたる石ありとはこらしげにいひて。これみ給へといへば。にたるところなしといひけり。あけのとし。かのねざめの里へ行きてみしが。あないのもの丶いひしことは。はやわすれてければ。これはとらのすがたなり。これはし丶の勢ひなりとみなしぬ。はじめはとらよし丶よとききてみれば。にたるやうにはおもはざりしが

こ丶に行幸あり。はや鳳輦のすでにか丶やきみゆるほどなるに。市巷の雜人むらがり居て。何となう人の聲のひゞきわたるを。前驅なんどはしりめぐりて制止するが中に。ひとり大なるこゑ出だして。はやこ丶に行幸あるに。何とて聲高うはするぞと制止たれば。むらがる中に。たれとはなけど。その制止するこゑ。われらが聲よりいと高しといふも。人れはければ高くきこゆ。彌いきめきて聲高に雜言まじへて制止すれば。猶いと聲高く。制止する聲いとたかしとどつと笑ふ

仙びとをめづらしとひとはいへど。よのさかしき風にのり得てありくひともあり。えうなきものをかひやしなひてたのしむ人もあり。つるをめでかめになれて。齡むさぼる人もあり。ひさごの酒によて。心の駒のつなぎがたきに至るものもあり。千とせを一時として。このよにながらふるうちに。はや名はほろぼすもあり。碁なんどこのみて。一日を時のまについやすもあるべし。たゞやまびとは。よしえうなくても。その名はいまに殘れど。いまの仙人のまねするものは。このところたがふにやとわらふ

ゐなかより出でたる今參りのをうな。年もいとわか

ぬ。その里能くわかきものらは。ことうらの人々にまじはれば。むかしよりもてきしふりもたがひつゝ。いをなくてはものくひしやうにおぼえず。みづから織りてしきぬきんは。面ぶせなりとて。とものこのみぬるふりとなりてければ。とみ榮えたる里なりしが。衰へ行きて。ことさとの人々あまたいりくれば。あらそひごともたえざりしとかや

年ふる鯉のありけり。いかにして様々のことにもかゝり給はで。かくまし〳〵給ふやとゝへば。さらばかたりものせん。かぐはしき餌のあれば。とめ求きてもくはまほしきことながら。これぞ大事のことゝ心にしめてみれば。あやしきことあるものなり。さおもひつくれば。ひれふりて遠くのがれて。いさゝかもかへりみず。よそのいをもあやしきことよとは思へど。遠くさることをせず。わらはべなんどは。かのつりばりてふ物にかゝりて。いかはどもとらるゝをみながらも。とにかくそのかぐはしさに心つながれて。あたりはなれずありきて。心のうちには。愚かなるいを共は。みなかの餌にとらるれど。いかでわれはかれにものせられんとおもへど。ひねもすこのあたりにたゞよひぬれば。かのあやしき外に餌のなきにせんかたなく。立ちよりて少しくひてんなどどするうちに。つひにはかゝるもあるぞかし。またあみといふものあり。ざと音しぬれば。四方みなあみの目なり。こはいかにせんに思ふに。あるはあわてさわぐもあり。又は何計の事かあらんなど。かしこき人をもあなどりて。をどりあがりてこえんとし。またはやぶらんとするを。人はもとよりひとなれば。様々にあつかひて。つひにとるぞかし。われはかのざとおとするをきけば。心しづめて水そこにつきてはなれず。あびきはうへのかたを行きぬ。ゆゑにとらるゝことなし。かはうそあじかなんどいふものもあれど。深くひそまりかくるれば。そのうれひもまぬかれぬ。また俄に雨ふりいでゝ。思ひもよらぬあたり。またはつねいさゝか水の落つる岩かねなどより。瀧のしらいとくりためて。おちそふ勢ひのはげしさに。こゝろもうきたちて。かの龍門の瀧ならぬことはしりながらも。あまりに心ちのよさにほださたれて。その瀧をのぼるにぞ。あるは岩かどにあたりてきづゝくもあり。からうじてのぼりぬるも。雨や

君ある妾になしつゝ。後の爲にもあしからぬほどをなさんの道は。時にもよるべけれど。いとかたきことにて。猶後の害はありぬべし。たゞつかへかへしぬる身は。よし身後の心ちとても。いけらんうちこそいといたう大事なれ。いかにとなれば。こは人のとぢめなればなり。わかきがうちは。よしあやまちし事ありとも。またあらためて後も年をつむものなるに。人のとぢめとなりては。改めての後とても。いくほどかあらん。さらばつかへかへし丶人は。つかふるうちよりも。物ごとつゝしみてこそありぬべけれわざはひ福はくみあふなはのごとなる事は。もとよりしれることとなり。もろこしのふるふみの世々の亂るゝあとをみ給へ。いといたうめでたしといふ所より。亂るゝはしをなすものぞといひしは。一ことながら心とゞむべき事とや

ある山里ありけり。人もいとおほくすみ居て。なにともしき事なく。家々みなとみたりぬ。糸とりはた織りて衣とし。みづからつくりしいねむぎかり收めて。一とせの食とす。外にもとむることなければ。その里としを逐うて繁昌す。海も遠からねど。よもにやまをへだつれば。關を置きて。こと里より物あきなふことを禁ず。いをは月にいくたびと定めて。ほしたるのをかい來りて。むらのうちうりひさぎてくふなり。こと村へいづるものもなければ。うらやむ心もなし。こと村よりいと富めれば。こゝへいをなどもちこしたらば。めづらしさの餘り。打ちこぞりてかひなんと思へども。そのむらの掟たゞしくしてやぶりがたし。ある浦の長。としごろ心にかけて居けるが。かの山里のうちにも心あはするものありければ。それと調じあはせて。いをなどうりくることをゆるされぬ。いでやとてもちこしたるが。めづらしきうちは鯛よ。すゞきよとかひにけり。またこうらのものうちきゝて。むかしよりかの山里へうらまほしくおもへど。掟あればもだしゐしなり。かのうらより魚ひさぐときゝぬ。うらにへだてのあるべしやとて。またもちこしたり。もはやかの里人とゞめんやうもなし。こゝかしこのうらよりもちこして。名もしらぬいをみるは珍しといひしが。それもつねになりにければ。かふものもなく。山こえきしいをおほくされめとて。うら／＼よりはうらみなどいひ

には名あるものとなるなりと。まめだちてことさらにいひしは。くすしのことのみにはあらずかし

やんごとなきひと。にはかにいたづきにかゝれりけり。たやすからぬさまなりければ。いまこのくすしひとりにまかせんもいかゞなり。かれもくすしの道にはよのつねならねば。これと心を合せて。藥調ぜよといへば。はじめのくすしかうべふりて。さらばそのよのつねならぬものにまかせ給へ。かゝるとみのいたづきを療治せんに。ひとをかたらひてはいかでいでくべきといひければ。げにもとて初のにまかせてければ。そのいたづきもすみやかに怠りぬ

時ありとてや。梢より心かろくちるもみぢばの。庭にうちつもれば。こがらしの風は梢に聲たえて。庭のおちばのいまさら時めきがほに。まひつさわぎつ音たつるもいとさわがし。かの世捨人の今さらまた人まじはりなすにたとへつべしといふをきゝて。げにかのつかへかへして風月の全身にほこるなどいはんには。よの事をばちりひぢの如くおもひすつべけれど。わが家をばわが子にゆづりてしうへは。わが今の職は風月なりけりとて。後のことも家のことも。よそごとゝ思ふべくやとゝへば。いかでさあらん。大君のみおやにたまひそめし。この家のゆづりを得て。また御ゆるし蒙りて。その子にゆづりしなるを。いかなりともよそにみんは。かの獨善の人ならんかし。されど其子の爲家の爲とて。また落葉のたちまふやうにし侍れば。其子のすべき事をもかすめ。其威德をもけつべきなり。さればとて物によそへなどして。少し力たすくるやうなる事は。なまじひなることにて。德なくして害とはなりぬべし。もとよりその子のざえにしたがひては。猶かねてより。猶そのたすくるものらよりして。心そなへもあるべきことならんかし。いづこの家にもあるならひにて。よしこともつれしたること出で來ぬとも。その子をもしのぎて。よし淸らに打ちそゝぎたりとて。後の爲よしとはいはじかし。後の害をもいとはでなすは。ことにことなるにあらざれは。いかであらん。されどもこはやすき事なるべし。後のかいのおもきと。今のおもきとをよく思ひくらべて。やむことを得ずばなすとも。中國よりしばしえびすの力かりしやうなる。くいごとをもおもひはかるべし。たゞふたりの

ふくすしをみてもしるべし。すべてまたものにかたよりて。傷寒論中の藥のみ强ひて用ひんとするも。東垣などの流によるも。また用には立ちがたし。古今の方より俗間の方までをもこゝろみ。それを心してつかふものはたのむべし。さて師としても。其師の僻をよくみて。わが心にいましむべし。いまは師の僻を似するをこゝろとし。はては老いたる師なれば。こし打ちかゞめ。老聲まねびいださんぞはらかかへぬべき事なる。さてものをもよく習ひおぼえてのち。病家に始めてゆけば。こゝぞ大事とこゝろ得て。診察はさらなり。匕とりてもたやすくはもらず。この心をのち〳〵もわするべからず。其うちむづかしきやまひあれば。たゞ心にかゝりて。よはもあんじものし。あくるまちて行きてみんと思ふ。この心をもわするべからず。藥あたへたるが。つひに救ひがたきに至れば。一日二日はものくふこともえせず心を傷むるなり。この心猶わするべからず。さてその心にも。人々おのづから感じて。いと年若けれども。せちに心用ひぬ。かの風もおこたりぬ。こゝのつかへもつひにいえぬと。をさなきものゝ筆とりてかくに。よきことなけれど。みるものその幼きにしては能書なりとほむれば。みづからはまことの能書と心得て下達する如く。風のこゝちおこたりしとて。ほむるにも及ばざれども。年わかくしてと思ふ心から。人もめづらしきをよろこぶ心よりしてもてはやすを。わが心にも慢ずるきざし出できて。せちに思ふ心もうすくなりぬ。もとよりつたなきにつとむる心もゆるびたれば。病多く愈えず。またまねく人もなし。この時ぞ。くすし終身の覺悟の定まるときなり。このときよく心得しが。名あるくすしとはなるとなり。ひとまねかねば。黃橘のくるしみにせまりて。わが方より規矩をすてゝ。病家にへつらひ。またはわが道をば次にし。酒などたうべさるがう猿樂やらのことなどして。それもて人に用ひられんことをはりするのたぐひ。其餘さま〴〵利にはしりて。つひにわが業に怠るものもあるぞかし。さるに人まねかぬをりも。わが規矩亂さず潛まりゐて。ふみ〳〵よくみて。心に會得し。みとせにてもあれ。いつまでも心をかへず。日をあはせて。ものくひなどして時をまつ。かくのごときもの。時にあへばかならずつひ

ぬものとやいはんかし

孔子喪あるをり。つねをかへて拱手し給ひしを。門弟子それをまねびしかば。二三子學をたしむの甚しきとの給ひしをもてもしるべし。いにしへかたちの敎ありて。かたちよりうちに及ぼしてこそなるべきを。いまは心もて心ををさめんとして。勞しても功うすきにはあらずや。まして勞するほどに至るもすくなきをや

事に處するに利害得失に心をつくるもうべなれども。まづそのことの筋をよくみて。さて利害得失をもてらしみるべし。よにいふ才あるものは。まづわが利害得失はやくみゆれば。利につき。害に遠ざからんとのみして。その筋をうしなふなり。たゞ害ありともかくすべきといふは。いといたうおもきすぢの事なり。さればその筋のおもきとかろきと。利害のおもきとかろきとをかけ合せても。その筋のかたおもきは。害にあふとも。その筋にしたがふべし。また才なくして。筋にもくらく。たゞ一筋に心うるものは。すぢのかろきにもれもき害を得て。辭せじとするもありぬべし。才ありても道まねびて明らかなるにあらざれば。かろきをおもしとして。つひに道うしなふものこそおほかめれ

生れてものおぼゆるころより老い行くまで。いさゝかもおこたらずする事あらば。かならずいかなるわざにも秀でぬべしといへば。たゞに心もちふるにあらざれば。いくたびなすとてもうべしとは思はず。このめしくひ。しるすふはものおぼへてより。日にみたびはかくることなけれども。かくせんと思ふこころなければ。めしくふに上手もなく。かへりてくひこぼし。またはいをのほねたてしよなどいふもあるべし。さればかくせんと思ふこゝろざしのひとつなりといひし

くすしの心得べきことをかたり給へといふものに。まづ師をえらぶべし。よにいふ才あるものは。まねぶところあさく。味ふところうすし。年老いたるいしの。しかも文などもよく味ひ。治療せになせども。晝夜殊に奔走するほどにもあらぬものにならふべし。わが規矩を守りゐるものは。世中の変を心にせざれば。ひだりもみぎりも。南も北も。とりもちふるやうにはあらぬものなり。いまいふはやるとかい

みを和解したるをば。ありあふくすしのたすけにせんといふは。いとうべなり。いかにも民間の妙藥とても。功いちじるきもおほければ。またかの國のことよとて。よき事をもにくむは。屋の上のからすをにくむたぐひにして。そのよきをしるの教にもたがへりなん。されどからやまとの傳ふるとをもよそにじて。えみじぶりのくすしのみち。ひたすらにあたらしうものせんとする人もいでくべきかとて。この事のおほくえうなきことをまづいふといへりけり。げにこのことは。人にもかゝりぬるとなれば。よそごとにはせじとおもひて。かたりけんかし。さらでもえみじぶりのことは。なにとなうはやり行くなる人情の。いといたうこのましからぬといふこともききたれば。かくはくりごといひにけんかし

ひとなみよりは聲たかく。心つよく愚なるものが。わが思ふまゝのことなどいふを。いとことわりなき事としりても。こなたもおなじく聲あげて。あらそはんもえうなき事なれば。そのまゝになしおくなり。さればいよ〳〵。われ計ことわりあるものゝやうにおぼして。かの車をよせに押し。舟をくがにといはん計になり行くめり。うしろにてはわらひそしれど。あらそふにもおよばざれば。しらぬさますれば。いよいよ高ぶりて。ばうぞくのふるまひなすものぞかし。ましてあしきゐ人にすぐれたるが。心つよくことわりなきことを押し立てゝ。世をおほひ人をかすめて。しばらくかちをとるもの。古のふみにもおほきをみるべし。それによても思ふべし。かの至大至剛の浩然の氣。あめつちの間にみつるてふこと。げにさもあらんかし。あしきも一筋に行ひてうたがはざれば。ひとたびはよをおほひぬるものを

閉藏の氣ひとたび變じてひらけ出づるころは。かならず風吹き雨もはげし。またのびたる陽氣の。ひとたび變じてひそまらんとするをりも。かくあるなり。いかでか雨かぜのはなをねたみ紅葉のあだをなさん。おなじくふる雨なれど。ひとへのはなにははやちりなんとうらみ。八重のかたには咲き初めんと待ちものし。この雨いつかはれなんと。麥つくものはいひ。雨こそうれしと苗うゝるものはいふらん。むぎつくかたの雲をはらし。苗うゝる空はふらせんとは。いかであらん。かの小民うらみなげくは。たえ

の心の靈妙。いかでそれをかんじしらざらんと思へば。はやそのことをかいおけり。人ずくなゝるけはひなり。おくのくるゝどもあきてひと音もせず。かやうにてよの中のあやまちはするぞかしと思ひて。やをらのぼりてのぞき給ふとかいたる。いとをかしといひぬ

蠻國のもじよむ事は。ふるきことにはあらざりけり。ちかきころは。いともてあそぶとゝなりしにや。ある人のいひしは。蠻書の和解などみたるが。こゝにてえうなきと思ふことはつまびらかにして。こゝぞと思ふ事いとあらし。おしなべていへば。えうなきことぞおほかめる。いまの世。もはらくすしのふみをよみて。もろ〳〵のやまひをいやさんとするものもありぬべし。人もめづらしきにはかたぶくならひなれば。たのむものも出できにけらし。もしひたすらになりもてゆかば。あやふきことにこそとひともいふなり。いかにとなれば。えみじのもじよむとても。その心をよしうるとても。唐國のふみゝるごとくに。精微にはいたらじかし。いはゞ不學なるもの。字書をかたはらにおきて。ひとつゞみつゝよむたぐひならまし。かくしてありあふ醫書。師もなく口授もなく。代々の末書註釋もなく。字書のまに〳〵よみくだすとも。いかでつまびらかには得てん。えみじの文はそのたぐひとやいふべからん。其もじとてもくはしくわがものにはなりがたきが故なり。いまいふごとく。醫書の二部三部。師もなく。末書註釋もなく。たゞひと通りよみ得しものゝ。にはかに濟生の術なさんとしても。信じがたくやあらん。まして風土もたがへれば。草も木もわが國とはおなじからず。うまれ得し人もまたたがひぬべし。さるにおぼろげによみ得て。似よりたる草木とりて。風土たがひして。ひとにあたへんとするはいかにかあらん。たゞ珍らしきことをこのむ心より。信ずるやうにもなるべからん。蠻學十年の功つみて。治療すといはゞ信じなん。からやまとのくすしのふみのかず〳〵よみ得て。治療せにして。老にいたるくすしも少なからじを。まして蠻國のくすしのまき〳〵。こなたへわたるもおほからねば。そのおほからぬ書をかたことよみにして。いでそのふりをなさんといふたぐひならまし。ちかきころ。蠻國の草木のことかいたるふ

りしとき丶ぬといふ。聲たかきをのこえらびしにやととへば。さにはあらず。人のかほをうちみて。かれはとくのぼりて防ぐべし。かれはのぼり侍るまじといふ。いかにこのとみのとなるに。人ぎらひし給ふといへば。かれはいとうすき相なり。かゝるとなさせそといひしとかたりき

晴雨をよくあらかじめいふものありけり。あすは雪ふらんといふ。その日になれどふらず。風はげしからんといふ。その日になれどふかず。いかにしつるぞよといへば。こゝはふらねども。いづこかふりしなり。こゝはふかねども。いづこかふきしなりといふ。きく人わらふ。のちにきけば。その日はこ根の山は雪ふり。むさしのゝあたりは風いとはげしかりきとぞ。こゝの里　晴雨にたがへば。人のわらひはまぬかれじ。さらばいはぬにはしかじかし

今の世畫をこのむも。おほかた畫をしらず。されば尊ぶべきをばいはで。たふとからぬをあげつらねてたふとぶなり。畫のとなにゝかもかきけんごとく。ことばと文筆の及ばざるをたすくるものなり。いでやくろきしろきとは。いひもしかきもすれど。かゝるをくろきといひ。とあるをしろきとは。何をもてわらはさん。さるにこの畫ありてこそ。ことばにもいひがたきをも。そのまゝにしるなれ。まして古のさまより。代々の服章風俗なんども。文筆もて傳ふとても。この畫なくては。みざるものゝみるやうにはいかであらん。書と畫とを左右の離るべからざるがごといへるは。畫のたふときをよくしりたるなり。しかるにかれはよくゑがくものなり。筆をくだせば何となうくもの勢ひをなしつ。あるは遠山のほの〴〵みゆるも。うなばらのうちかすみたるも。心に造化をこめて。筆にあらはすに妙なることなりといふは。たゞに一技にしたるなり。いはゞこまよくまはす。まりよくけるといふにひとし。たゞにそのたふときことしらざる故に。たふとからぬことをあげていふは。かへりて其道をけがすなりといひき

源氏物がたりの心ふかくつくれるがうちにも。ことにいといたう感じぬる事こそありけれ。その中にもすまのさすらひは。生涯のいとおほきなることなるに。そのはじめは花の宴の巻よりおこりたるを。人

げにしるはおなじくしるなれど。眞にしるにあらざればしるとはいがたし。古のつりたれし人も。眞に時をばしれりしなりと。また人にかたりしとぞ

櫻のはなを鹽にし。壺にたくはへ。ふん封つけておきたり。まれ人客のおはするころなど丶思ひ置きたり。夏のころまれびとおはしけれど。酒もくみ給はねば。か丶るをり出ださんも。玉のさかづきのなにとかいはんこ丶ちすればとていださず。またこと君きゝ給ひしには。酒このみ給へど。みやび好み給はぬものに。いかでとてふんきらず。秋の末つかたになりにければ。このごろかへり咲きとて。こ丶かしこの枝に。はかなけれどもさくこともあれば。これをもそれと思はんは。いとうらみあればとて出ださず。しはすのころ。例の草木うるかたには。櫻はさらなり。藤なんどもさかせて。うりひさぐといふをきけば。いかゞはせん。それとひとしからむもいと口をし。こん春もはやちかし。さればとてたくはへおきしはなを。むげになすべくもあらずとおもへど。まれ人もおはせねば。せんかたなく。只酒のむ人の來りぬるとき。ふんきりて花をとり出だしたれば。まらうど打ちみし計にて。やがてくひさしながら。これはしほけあるはななり。このごろさるかたにて酒のみしとき。盃にうゑたる櫻を出だしたまひしかば。盃にうけてのみぬ。花はしほけなきこそよかりけれといひしをき丶て。涙おとしてくいけりとかや

秋の末つかた。雨かぜことにはげしく。たかどの丶たぐひ。吹きあらすもおほかりけり。その冬にかありけん。眺望よきところにいたりてみれば。あないのをのこが出で丶。ことし秋の嵐に。こ丶のたかどのかしこのうてなも吹きたをれにけり。されど此ひとつばかりは。あらしにもさはらざりきといふをみれば。いといたうふるきたかどのなり。いかにしてかととへば。人のおほくのぼりて。風の吹きくるごとに聲あげて居たりしが。ひとの勢ひはいかにもおそろしきものにて。かくはありけん。川の堤または橋なんども。皆かくしてふせげは。みなぎる浪もよきて行くとかき丶ぬるといふ。げにわれもき丶しとなり。されどこの高殿はいとふるくて。人ふせぐともたふべしとは思はぬを。ふせぎしてだてもありけんと。猶たづぬれば。かのあるじ。人をえらびてふせがせた

しくて。猶心こらしければ。二日三日のうちにみなおちてけり。かのひたひに出で來しものもみならひければ。これは十日計にあかもがさのかせたるやうに。霜のごとなりて。みなきえぬ。かほどの靈妙なる人が。たゞ心のせちならねばこそ。さま〴〵心のなやみなどはありとなん。人のいひし

ある人あしの疾ありて。あゆむともえせず。いとゐたうなやみてけり。みとせになりにたれど。いさゝかおこたらざりしを。あるくすしみて。この藥まゐらすべし。みとせもへなば。つねにふくすべしといふを。さらばその藥のみてんといふ。かたはらのもの打ちきゝて。このうへみとせとては。六とせの間のくるしみなるをといへば。さにはあらじ。その藥によて。みとせたちてもとに復するならば。まづひととせたちなば。いまよりはいさゝかよかるべし。二とせたちなば。猶よかるべし。かくてみとせにてもとにふくしなん。いかでみとせがうち今の如くにして。みとせたちしとて。にはかに本にふくすべきか。今より聊にても。年を追ふてよからば。みとせはさらなり。九とせにてもあれ。藥のみなんといひき

あるひと庭このみて。こゝに山きづきて。この木をうゑ。こゝに池つくりて。岸べに何うゑんなどいひけり。いつつくるかとゝへば。まづこの木をこなたへうつしぬべし。この木はこん春うつし。これは秋うつしなん。うつしをはりて池をほりて。其土もて山築かんといふを。例ものいそぎし給ふに。これ計はいと心長きとの給ふ。二とせみとせにては。いまだまたき山水のけしきはなさじといへば。此木いまうゝれば。かるゝことを眞に知れゝば。今うゑんの心はつゆもなし。これは立冬のころかれば。立夏のころうゝべし。此草は清明のころうゝべし。いまみてをかしと思ふ計の大なる木山なんどにうゑたらば。枝もかれなどして。風景をそんずるなれば。五六尺のわか木うゑて。この山にておのづから長ずれば。心の外のけしきをなすものなり。いかで二とせみとせにまたくそなはるべき。十とせもたちてこそ。をかしうもみるべし。いまにはかにすべきものならぬことを。眞にしりぬれば。初めより物いそぎするこゝろは露もなし。いちはやく功なさんと思ひ給ふは。木草うゝる時を。眞にしり給はざる故なりといひき。

とに友とし。武技このむには。それに友とし。歌よむものには。その道に友とするぞよき。さるに歌とてもこのふりはあしかり。かれにまねび給ふはひがことなりなど、いふにも及ばじ。たゞ交りてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交といへども。このふたりおなじ徳。おなじ心なりしにもあらじかし。よの中に同じこゝろの人といふものは。いとまれなる事なるべし。たゞわが好めるかたに引きいれんとするもうるさし。このひとこのところは長じぬれど。こゝはいとみじかし。そのみじかきところを引きのべんとするはいとくるし。さ思ふわれも。またそのみじかきところあるものを。ことに思ふことゝみないさめものせんとするを。かの信と思ふはたがへりけり。交るがうちにも。知己のひとはいとまれなるものなり。それらよくことばを求めなば。もとよりいふべし。されどさればしすべきにはあらずかし。淺き契りの友なりとても。友といふうちならば。そのひとのうへの存亡にかゝはる計のことならばいふべし。すべてしひてかくせん。かくすくひてんとまげてもと思ふは。みな中道には背けりといはん。たゞその所長を友とすれば。まじはりがたき人もなく。われに益なき友もあらじ。かの友によてわがかたのみだれんとするは。皆その短を友とする故なりとこたへしものありきとや

花のちるは。うてなのうちの實のおほきやかになりて。はなびらの居どころなき故にちるなり。この雨に花はちりぬといふは。雨のうるほひにて。かの實の大きくなればなり。秋冬に至りて葉の落つるは。わかめのくきのうらよりめぐみて。そのわかめの大きくなれば。ふるき葉の居どころなければ。ちるなりけり

ある女いぼといふものえりのあたりより出で來て。一夜のうちにかずましてけり。いまひとりのはひたひにおほく出で來て。さめといふ魚のかはなんどのごとく。星あるかぶとよりはえげくみえき。女のとなればいとなげきて。めぐろと云ふ所に。たこ藥師と名づくる佛のあるを。人の敎にまかせて信じて。たこくはじと誓ひて。夜ひとよ心をこらしてねぎごとしたり。夜あけて。手あらひかほなどあらふに隨ひて。二つ三つづゝいぼのおちにければ。いとうれ

ひて。かたはらへなげやりつ。このいらへかくも文なり。けふの事なすこそ學ぶ道なれ。かの量料平かなり。畜藩足らずとはいはずや。かゝる目のまへにある事をも。よそごとゝ思ふぞはかなき。されどわがざえをもたれりとし。いさゝかからくにの書籍手まさぐりし計にて。わが邦のいくさもの語などみて。時の勢ひもしらず。人情をもわきまへず。例のことわりいひつのりて。わらはべなど敎へひきいれんとするは。いと害とこそはなりぬれ。みやびにながるるものは。道しる人に笑はるゝのみにてやあらん

鳶のこのすだちするころ。わに鳥の巣よりとび出でしに。弟のは。羽もいまだとゝのはざるをしらで。つひにとびたれば。梢より落ちてけり。親どりいかに思へども。かたちははや親にまさる計に。羽のふくらかにれひたちたればせんかたなく。巣に入りてよべども。もとよりとび得ざれば。たちかへるべきやうなし。二三日たちてみるに。おなじところにうづくまりゐたり。とらへてみれば。うごきもやらず。いとうゑにうゑたるさまなれば。一夜さま〴〵餌をあたへてけり。あけの日は。餌をやらんとすれば。おそろしき姿しておどす。きのふはうゑてければ。その心も出で來ざりきとみえき。人をおどすはにくけれども。このまゝにしてころさんもしのびずとて。はぐゝみやりけり。廿日ばかりたちてければ。羽もよくとゝのひぬ。さらばとてもとの木かげにつれ行きて。かごよりやをら出だしたれば。おのれからうじてにげ出でしさましてとび行きぬ。親鳥も人のかくはなちしはしらず。かしこくかごをのがれ出でしと心得しさまして。つれてゐにけり

老いて齒のぬけしはゝや。脾胃のめぐりもあしく。わかきをりのごとくならねば。和らかなるものくへとなり。さるをかたきものなど。しひてのみくだせば。つひに害となる。耳遠きはゝやみそか密にものごときかぬ爲なれば。ものごとに遠ざかりて。ものにかかづらはぬがことわりなり。さるを人中にたちまじはり。そしられわらはるゝとえらぬも有るべし。これら聊ながら。おのづからの道にさかふ故となんいひき

友に交る道は。いかなる事か心得べきといふに。友はその所長と友とすべし。ふるきと好むには。その

いまはおしなべて。いづこの山べ海づらのさとゝても。みなそのふりになりて。口にはかしこき事などいひて。老いたるものをあざむき。村の長をもはゞからず。はてはおほやけの事をも。おそれみうすきやうになりなんと思ふ事のみおほかればとて。つひにはおなじ心になみだこぼしてけり

草木やしなふもの丶いひし。西よりふくかぜは。草木をからしきはむ。さるは西より北に及ぶべき故なり。北よりふくかぜは。極まればはや陽をふくむが故に。からしきはめずとかやいひし。げにさもありなんかし

大凡躬行にてもあれ。人事にあづかる事にてもあれ。政にてもあれ。新なりといふもじをわするべからず。日にあらたなりといふは物かは。事々にあらたに。もの〱にあらたなるべし。きのふの事になれて。思ひあやまるも。かねてしれる事と思ひて。やぶれとるもおほし。かのかしこき人も。女などにまよひ。愚かなるひとに欺かる丶も。ひとつ〱に新ならねばこそありけれ。きのふにくしと思ふ事。心にそみ。こぞのうれしと思ふこと。心につきてはなれねば。それより根ざして。まよふとかきけり。げに日新の教こそ。萬にかよはして。身を終ふるまでもわするなとかたりし老人もありけり

ある吝嗇なるもの。ことしはことにものつひやしぬとて。およびを折りてかぞへたてぬ。まづ春より秋まで。かのいたづきによてのめる薬もかばかりなり。それにかゝる事もありしなどかぞへつ丶いふを。つく〱とき丶ゐし人が。いとさりがたきがうへに。君が身につきたるものひとつあり。是をいかで費といはんといへば。なになるかと丶ふ。薬のみ給はずば。かくけふなげき事もえいひ給はじ。かくいひ給ふは。薬のめぐみなれば。それにむくい給ふを費と心得給ふかといひき。かのひとはこれを費とせちに思ひけんかし

ふみつくり。詩つくらんと。硯ひきよせて。朝より夕つかたまでも思ひこらしゐたるに。こは姨君よりの御せうそこ消息なりともてくれば。ふんおしきりて。これよりいらへつかふまつらんといへといふ。こはむこ君よりのなり。せうと兄の君よりのとてせうそこいだせば。みもやらず。俗事紛々たりなどい

よくふる雨かな、かくてはいつかしほはやきなんとのみいふ。もとよりしほくむわざには。雨ほどつらき物はなけれど。はや晴れぬ。いそぎてくむかとみれば。このはれしも時のまなるべし。よしゑほくみても。夜のまにふり出でなば。おしながしてえうなき事になりなんとて。夕日のかゞやくにも、たゞうらわを徒に打ちめぐりてゐるを。いかにとおどろかせば。あのむかひの島のちかうみゆれば。また夜半にはふり出でなんなど。いつしかくちがしこき事をばおぼえてけり。又あけの日もはれぬれば。はやく出づるかとみれば。朝いして。ひるつかたやう／＼出でゝしほくむが。それもいさゝかしてはやかへりぬ。その意をとがむれば。出でゝ行くけしきなり。いづこの神の祭などいへば。しほやきすてゝ出でく來めり。つひには林の木々も。人にきらせぬれば。いとゞいをはよりこぬまゝに。あみもよそのものとなしぬ。おいいをのよりくるときゝても。人のとるをみありくのみなり。いまは髮ゆひ候といふ所さへ出できぬ。むかしはわらもてつかね。なへたるゑぼしひきいれてゐしが。今は都ぶりとやらん。みもせぬふりにし。ざうりかさねたるを。音たてゝきそひありくなり。わが若きころは酒のむ事もなかりしが。この村里にもはやさけつくるところ多く出で來てけり。それらが爲に。ときつひやし。ざえつひやしてみつぎ物のさまたげとはなるなり。このやにも久しくすみ得んことはかたかるべしなど。さまぐ\いふうちに。ききゐしと思ひしが。ふとみれば。いつかねにけり。翁もあまりの事にあきれて。がまのさうもやめてけり

ある翁がまたこのうらわうちめぐりて。おなじむかしの物がたりに立ちよりたれば。かの翁もゐざり出でゝ。ひたすらに昔の事のみいひ出でければ。うしとみしよも。過ぎにし事はなつかしきものぞかし。むかしとてもえうなきものもありき。我が若き時など。庭のをしへのみかは。その比のはやり行きしかたちをとがめられしとき。おやのいにしへぶりといひ給ふも。そのころのはやりもて行きし事なるをと。心のそこに思ひし事もありけり。されどげにいと今のわからうどは。ふりあしくおこたりすさむ事となりてけり。むかしはたま／＼からやうのひとありしが。

とし。方は古今などロにはいへど。わが心にやまひを牽きつけんとするもありぬべし

かへでのめの紅なるに。かしのめの白きをみて。かならず草木の葉はみどりなるものとのみはいはじとはいはじ。温泉をみて水のひやゝなるのみにはあらじとはいはじ。さるに何くれと。人の五のみちをそなへて生るゝとはさらなり。人はよくもあしくも。かうまれたるなどゝ。さま〴〵うたがへるとなど。かしこしといふ人さへもいふとか。いといぶかし

千里の駒をたくりしものあり。うけざりしかども。わすれがたかりしとかいひしを。よきとのやうにはいへど。さはいかで思ふかとうたがはしきやうなるを。いかでかくはいふらん。かのくにのよしといふ人にも。うけがひがたき事もありとや。王導といへるものが。この良友に背きしといひしは。もはら私なり。よきさぶらひをもてつかひ給へば。その道をもてあたむくいしといふも。かの深谷のうぐひす。みやまの梅がゝにはあれとりぬべしとか

雨いさゝかふりつゞくと思へば。はやみかさ水量そふところあり。されば常に船をうかべて。水かさそひゆけば。打ちのりてさくるとのみこゝろとす。あるとし絶えて雨のふらざりければ。かねて水をおそるゝより。たかきところに田つくりたるが。みなかれなんとす。水くみてそゝがんもちから及ばず。とやせんかくやせんとさわぐうちに。かのつなぎおける船のすりくはふるとも打ちわすれぬ。世はいとかはりにけり。こしのくにもいまは雪いとうすく。しなのゝ國の寒さもよそにかはらずとかや。この國のかばかり雨すくなきとは。八十の翁もしらずとかや。ふねもゑうなきものなりなどいひてけり。つひにあけのとしは。田をこと〴〵く川づらちかきかたへうつしてければ。あくたなどのよりきし所なりければ。山田よりはいと生ひたつさまもとなりとて。よろこびあへりしとぞ。つねにおろかなりとて。わらはるるをのこ計。はる〴〵くはかたげて山田をつくるを。ゆびさしてわらひけり。そのとしも川づらの田はよくみのりけり

ある日あまの子などよびあつめて。むかしわがわかき時と。めかりしほやくともなれら汝等がやうにはなかりしぞかし。いまはたゞそらのみあふぎつゝ。

かにして。いそべの松にも音せぬ風のそでにそよと吹きかふに。ひるのおつさもわすれぬべし。秋はなほむしのねもきそひ行くに。ちぐさの花の色もみえで。沖こぐ船にまがふ雁がねのわたるも。いづこなるらんと哀なるに。浦のあしべに聲あはせたるもをかし。まいてあかつき比に月のいづれば。よひの入日の殘れるたぐひにはあらず。海のおもてこがねの波のみちくるにぞ。ことばにものぶべしとは思はず。むかしいぎたなくて。在明の月にうとかりしころもありけりとおもへば。口をしきものから。またうらやましくもおもへり。それより思のうつり行きて。實にいにしへはあしき波にも舟うけて。かつをつりしこともありき。またはいと寒きころ。海にいりてあわびとりし事もありしが。いまのわかうどは。まだきに老いぬるさまするものぞおほき。そのころのむかしものがたりにきけば。うらわのたゝかひのおそろしさに。つま子うちつれて。みやまへいりし世もありしときゝつるに。月なき空にも心のたのしびをきはめぬるはいかにぞや。かゝることもかのわかうどの老いたるさまするをも。あはせていはまほしけれど。また例の老いぼれて。くりごといふとやむつかりなん

人をせむるは。あらはなるをせむべしとかきゝし。まづ面あらためたらばよしとこそいはめ。かれはとらのかはきぬる羊なりとはいはじ。羊にもせよ。虎のかはきたらば。とらにしてこそやしなはめ。さらば千里をばはしらずとも。羊の力のおよぶたけははしりもしなん。外をせめて　うちをせめざれと。むかしよりきゝしを

藝能ありしものも。むかしはおほく聞えたれど。今はさいふ計のものもまれなるにやあらん。すべてむかし人はたがへりしや。今殘れるよろひなどいふものをみても。鏃などみてもしりぬべし。天王寺にある鷄婁は。いとおもくて。今のよのひとはかけがたしとかいふ。そのほかむかしものがたりをいまにしてみても。今のよのよろづおとりたる事はしりぬべし。さるに漢の張氏の治法とても。斟酌すべきとをも思はず。ことに張氏は。汗下の劑なんどは。いと心をこめて。其非までも厚く示し置きしをも疎そかにし。一つ病の治法をもて。萬づのやまひをいやさん

とやらんの道はやめ給へといひしとかや

世のひとのせばきこゝろから。しほのみちひの如く。時たがはぬ事はさ思へど。かの餘慶餘殃のそらより下だし給ふとなんどは。うきたるとに思ふぞかし。かの年のみのりの豊けさうちつゞきぬれば。それにくるしみて。何くれといへど。はてはかならずたのみ少なくなりゆくもとゐなゐをしるべきなり。されど時たがはず。めぐりくるものならねば。さはおもはぬなり。ゆたかなるとしに。あしき年の心もたずしては。虫けらにも劣りつべし。冬ひそまるものは。そのたくはへをこそなせ。たゞあさはかに今年豊なれば。はやあしき年はあらじと思ふこそはかなけれ。世の人みなよきはあしきのもとなるにうたがひなくば。かならずゆたかなる年とても。米のあふるゝとはあらじといへば。いかで人々をして。かくはなすべきといふ。さはまだそのこゝろにあらぬ故なりと。田つくる翁のいひしをきゝて。わがともがらかすかにその日をおくるを。いかでまたあしき年のそなへなすべからんといへば。さにあらず。たふとき米とおもへば。ひごとにくるゝも。鳥けだものにあたふるも。またはかしぐにも。そのこゝろはありけり。やすしとおもへば。このうらとなりて。打ちこぼれぬるも。はゝきもてはきもすつべし。この心あめがしたみなおなじければ。一日のつひやすところいかばかりとおもひ給ふか。さるをこのゆたかなるは。あしきみのりのくるさきつさが先兆とおもへば。この一むらにても。其心にて。一年に米つむほどにもなりぬべし。米たからなれば。ひとゞゞつみれかまほしくおもふにぞ。米のいやしき年よりは。つめる米おほけれども。猶たらずとおもふなり。この心あめがしたみなさるやうになれば。いとゞ米はうごかず。このむらざとなんどはさらなり。米なき山ざとまでも。何にかへつとも。米つまゝしと思ふぞ。値たかうなることわりなり。この心を村里にてよく教へみちびきなば。聊はそのしるしもあるべけれど。まめだちていひけれど。牛のかたなにてといへるたぐひにやときゝつれど。老いたるひとのど。もどく蜡べきにあらずときゝゐたりしとぞ

月なきよはゝいとこゝろのそこすみまさるものなりけり。海のおもてくらうして。よせくる波の音ゆた

て。この身を捨てしとの給ふか。ことに色と酒とにふけり給ふときゝぬ。それだにかち給はで。わが身にかち給はんとや。よしかち得しとても。わするてふことは。いとかたきとなめりかし。得しと思ふものいかで得ん。君はものゝふなれば。弓射る事もていはん。よくひきてよくはなつが外に。弓のみちはなし。かくすれば。よくあたるをしりても。さはいできぬはいかにぞや。かちまけあらそふとき。人おほくあてぬるをりなんどは。たゞそれにかたまほしく思ふぞかし。またはやくはなつ弓のやまひもあり。はなし得がたき病もあり。いづれも心の外なるものぞかし。またゆづるのゆるみて。わが耳をうてば。いとゞこりにこりて。またや耳うたんとおもふぞかし。耳をすつることも得せず。おそくはなち。はやくはなつことだに心にまかせず。人にまくるの口をしさをもいまだすて得ずして。いかでこの身をわすれ給はん。とにかくいまは身に行ふとはつもらで。口のみたかくなり行きぬ。あるやんごとなき人ありけり。つるぎの道を得てしとて。みづからよにならびなしとのみ。つねにいひ給ひてけり。ある日書屋に居給ふとき。末の間のしやうじをひらき。跳り出でたるをみれば。大なる男のあかはだかになりて。君をめかけてとびかゝるを。いで心得たりとて。刀ぬきてきらんとすれば。跳り超え。あるはふし。左へさけ。右へはしりなどして。いかにもうち得ず。とやかくするうち。すら／＼とはしりよりて。その刀をとりてければ。口をしさかぎりなく。いかにせんとあせり給へば。かのをのこたゝみにひれふしてけり。よくみ給へば。外衛の臣下なり。そのものゝいふ。君はつるぎの道よくは心得給へども。いまだもぬけし位にもわたり給はず。さるゆゑにみづからおふて得てしとのみ思ひ給ふ。まことに得しものは。たれかよきと思ふべき。さる御心にてましまさば。いかなるあやまちかし給はん。臣はつるぎの道。さしてならひしにはあらねど。死をきはめてすれば。臣をだに打ち給ふこともなりがたかりしぞかし。これをよく／＼思ひ給はゞ。御身のあやまちもあらじと。なみだこぼいていひしかば。君もことに感じ給ひて。わが無下につたなかりしことをさとり給ひしとぞ。よくこれらのよをきゝ給ひて。さとり

家くにをさむべきものゝやうにいへど。定家卿が「苔の下にうづもれぬ名をのこすとも。はかなの道やしき島の歌とよみ給へれば。いくたの和歌嗜むもののうちにも。定家卿のにくみ給はんもありぬべし。さか釋迦の道。くじ孔子の道まねぶものもいかゞあらんと。人のいひし

和歌は。只すなほなれとても。餘りに力もなく。味もなく。止水のごとくなれば。思ひをのぶることもえず。まいて玄らべはさたにも及ばずなん。かの三國の比は。餘りに力いれていひ給へば。しらべの少しいやしきを。たゞ歌は古今集によるべしといへども。目も及びがたければ。草庵などの集によりて。よみ習ふ事となりて。たゞすなほに正しかれと思ふより。百首一體にいたり。力もなく味もなく。わがものにもあらぬふりとはなるべきなり。歌はわがものとなりてのちに。しらべのさたにも及ぶべし。まづ今の勢ひにていはゞ。玉葉。風雅なんどによりて。力をきはむべし。わがものとなりしうへに。しらべの高く直なるふりをまなばゞ。つひに千首に一首は。よき歌も出できなんと思ふなりとかたりしは。もとり過ぎたるにやあらん。されども古今集はいとたくみなる歌もれほかれど。一つまことより出でたれば。たくみとはみえずなん。はじめよりかうやうにせんとしては。しなこえてまねび得ざるものとかや。何にまれ。はなさへ實さへかをりさへ。はじめより得んとてはいかで得へき

禪意を得たりといふものあり。いかにして得給ひしととへば。わがこの身は。あめつちのものにて。われといふものはなし。われなければかたきもなし。これをかの浩然の氣ともいひ置き給ひしなりと。高く心得ていひてけり。いかにしてその所を得給ひしかといへば。思ひ〳〵てつひに得しなりといふ。きゝたる人いとわらひて。さま〴〵ひぢりもときおかれけれど。かゝるところ得てしひとは。いまの世にあるべしともおもほえぬ計まれなるを。いまだ其事々もしり給はで。いかで得給ふべきといへば。はらだちて。しらざらん人はいかにいふとも。われこそ得しものを。などて君はしかいふ。わが得ざる事をしり給はゞ。いひのべたまへと。聲ふるはしていふにぞ。それみ給へ。いかりをもいまだ捨て得ずし

狐のよな〳〵くるを。かならず飼與ふる者ありけり。つかれはけもの丶うちにて。ざえあるものなれば。かくしなば。かれも恵をしりてむくゆるともありなんとて。日ごとに怠らずあたふれば。かれもなれになれてけり。ある日うま子生れてければ。いとをしげさに。二日ばかり飼あたふるとをわすれければ。狐うらみいかりてや。そのうま子をくひてけりとぞ

やんごとなき人ありけり。茶たつる事をこのみて。かの宗易が流をくみて。かれがもたるうつはなどおほくとりあつめ。宗佐よりいまの代々のつくらせたる什器やうのものまでも。かくるとなくそなへしなど丶。みづからあひ給ひてけり。ある時。宗易が像をかべにかけて。かくたふとびぬるは。われにまさるものやあらんなど。かたはらのものにもあさ〳〵しくいひて。茶ひきて居給ひしが。かの像より煙のでと。きりのたつやうにみえしが。宗易來りて。われはもとよりいやしきものなるが。物にか丶はらず。心たかき氣象ありければ。大閤のとり用ひ給ひてけり。茶たつる事は。一時の心やりにて。なしてもありなん。なさでもあるべきものなれぞ。そのころいともてあそび艸となりて。さま〳〵心にまかせ。つひには法もなく。禮もなく。みだれもてゆくべしと思へば。さ丶やかなる道ながら。式をたて法を定めて。人にもをしへものしたるを。いまはいとおもき事のやうに心得て。その道しらぬもの。其室にいれば。かほあかめて一言も出だし得ざるやうに。人の心にそみわたりしも。いと愚なるとと悲しび思ふ。さるに君は人にもかずまへられ給ふ身にて。わがでときものをたふとび。このみちのはかなきをもしらで。いとおもきとと心得給ふ心のひきくつたなきは。われもいといやしみ思へど。さすが流れくみ給ふえにし緣もあれば。かたりぬ。君いま心たかうて。其身のほどにしたがひ。なすべきとをつとめ給はゞ。きみが手ならしつるうつはものよとて。千とせの後もつたへものすべし。これをわれより古をなすといふなり。いやしきわれらのもたるうつはものなどに。おほくの財を盡くして買ひもとむるのはかなさにては。このさ丶やかなる道とても。心にはいかで得給ふべきと。はたとにらむと思へば。ねぶりもさめにけりとぞ。げにかのしき島の道とても。それをもて

かりをさむるころ。少し計穂のみえたるが。はや霜のおきてければ。みなかれぬ。ことしはいと早う霜のおきしなりとて。年をのみつみしていまださとらざりしとなり

君も門の外へ出でゝみ給へ。あまりにこのひざいるるにてたりぬとて。よそもしらで。その日〳〵をたのしび給ふが。またいかばかりおどろき給ふともありぬべし。このごろきゝしにも。君がやにしのびいらんとにや。つるぎもたるをのこ。やゝ門ちかくよりきたれど。例のうちにはしらで。やすらかにたのしび給ひたり。もとよりその夜はいかゞしたりけん。うかゞひしのみにてかへりしとや。月なき夜半なんどには。かならず來るべしといふものもありといへば。いかでさやうなるとのあらん。君はたゞ遠きことをいふが。なかにも人のおもひよらぬとをいひいだいて。人おどろかす事をこのみ給ふ。ひとはおどろくとも。いかでおどろかされんなどいひて。あざわらひぬ。かれはかならずわざはひにあひなん。おもへよるべきことをも思はぬ人なりといひき

むすめの十あまり六つ七つになりたるを。月花にもかへじと思ひたるに。としごろかふ猫の。むすめがかはやへゆけば。かならずあとよりつきて行く。いかにせいすれどもきかず。つなぎおくに。かはやへ行くときはかならず怒りて。たけうなりて。なはくひきりてはせてゆく。いかにとたづぬれば。かはやのうちにつとつきそひて居侍るといふ。いかにも心のそこしり難しとて。おやなりけるもの。つるぎもちひて。かのねこのかはやへはせ行くときに。かうべをきりたれば。そのかうべかはやのうちにいりぬ。彌あやしみおどろきてみれば。そのかうべ。かはやのうちなるくちなはにくひつきて。くちなはゝ死してけり。さらばそのむすめにくちなはの思ひいりたるをしりて。かくはありけりと。なみだおとさぬはなかりしとなり。宛牛とかいふ事。かの國のふみにもありとなり。猫のうらみはいかにといへば。もとよりものいふ事ならぬみなれば。それにうらみもなし。かのくちなはをころして。君の難をすくひぬれば。たゞにほいとげしなり。もとより功名に心なければ。おもひおくともあらじかし。たゞかひおけるあるじの心はいかゞありけん

もわらじを。しひてちからをいれ給ふは。せんなきことよといひてけり

とりもちをもて。はへといふ虫をおほくとりたるを。ふとけみきやう顕微鏡とて。目もたよばぬものをみるめがねのあれば。それもてみしに。そのもちにつきたるはへが。にげんとして羽を動かすが。はてはその羽ももちにつきて動きえず。かうべうごがして苦しむもあり。又久しくつきしは。飢にのぞみて。よわり死するけしきもあり。たゞに羽をならす音のみきゝしが。よくみれば。いとかなしきさまなりしとかたるを。さあらんよなど人のこたへしを。みしときゝしとはいと違ふものぞかし。みしごときゝ給はゞ。さあらんなどゝ計はいひ給はじ。まいて目の及ばぬあたりのことは。猶心にてみ給へかしといひしものありけり

あるくすしありけり。やむものあれば。かみしもえらまず。いとせちに心をつくしけり。いといたういやしきものやめる有りけり。薬ばこいだいて薬調ずるに。その母なりける老婆の。つく〴〵とみてゐしが。ゐざり出でゝ。はゞかりなるとながら。ねぎ思ふとこそ侍れとて。いといひかねたるを。何のとにてもあれ。思ふことは打ちあらはしていひねといへば。つゝましげに聲ふるはして。下にくみ置き給ふはこの御くすりも給はれかしといひけるにぞ。おもはずほゝゑみて。さらばあたへんとて。下にありしがうちの。さはりなき薬ふたつみつとりいでゝ調ぜしが。かならずその薬はしるしあるべしとかたりぬ。かくおろかなるものに。このやまひには何といふ方劑調ずることなり。それは何々のくすりを用ふ。このはこの上のかたに。おのづからいれ置きたれば。とり出だして調ぜしなり。下にくみたる箱のとて。たときいやしきのへだてはなしと。まめだちていふとも。いかできゝわくべき。さはりなくば。其心にまかするにてこそ。をかしかりけれ

ものを引きのばいて。時うしなふものありけり。人のさなへこふるころ。たねほどこしてけり。葉月のころわせの穂の出でたるに。嵐ふきてければ。花ちりぬとなげくを。あまりにものいそぎし給へばこそあれ。わがいねはこの比うゑにしかば。あちしのわざはひにもあひ侍らずと人にたかぶりけり。人の

やまりにけりともいふ。むしうるかたへ行きて。松のを得んとおもはゞ。鈴のかたをといふなり。ひとりひとりにてはあやまりなり。くろきかたは松むしなりと敎ふとも。皆それとたがへば。うるものもせん方なかるべし。行燈をちやうちんといはまほしくても。いかゞはせん。是もあやまりにならひてこそ。世に行はるれ

ものしりがほなるものみたりよたり圓ゐせしが。かつみはこもをいふ。花がつみとはこものはなをいふと。能因法師のさいひ給へればといふを。能因さいひしとて。あのさゝやかなる花を。花の字かうむらすべきよりどころあることをいはねば。能因がとてうけがふべきにや。古よりさまゞゝ説々あるは。河やしろにてもあれ。もずのくさぐき。いはとがしは。ゆめのゝ鹿。とぶひのかゝみなど。みな信ずべしとはいはじ。あさかの沼に。よひらの花のあやめあり。それを花がつみとはいふべし。さればつはものゝよろひてふものゝ。かは用ふるところには。かつてふことにかよはしてつくるを。今はしやうぶかはといへど。中のあたりたけたかくして。花のかたちつけたり。さればうたがふべくもあらぬをといふを。またかたはらより。もとすくさをかたばみといひ。よひらある田字草を花かたばみといひしとみゆ。こは。くがと水とのわかちあれど。古はいまのやうにこまやかにはいはず。しのぶは軒に生ふるこけにて。そのうちにはかの金星草もありぬべし。中比よりいふしのぶもあるべし。ひとつにして。是をしのぶと打ちまかせていひしごとく。つひに田字草をかたばみと計もいひしなり。されば枕草紙にうへのきぬはかたばみあやの。もんにもかたばみとあり。かたばみとはかつみなりけり。雜要抄の書に。四ひらある花のかたちせし手箱のうへのかたに。花かたばみとしるせれば。つひに轉略してはなかつみとはいひしなりといふ。はじめなり何ともいはざりし人が。むかし人の「かつよみながらしらぬなりけりとよみたる事もあれば。いまいづれともわけがたかるべし。いまのことゞゝきゝては。よひらあるのをはなかたばみといふは。をかしきやうにわれはおもへれど。ひとをもそれにせんとするは。いとくるしきわざなめり。よしこの一くさあやまりしとても。させると

幸まことにいふべからずといひてけり。ひとりの相者は。君かならず近きうちに。とみのやまひにかゝりて死に給はんといひければ。そのひとはらだち。そで拂ひてかへりしが。ほどもなくやまひ得てとみに死にてけり。いひあてしものに。いかゞしてかくはいひ給ひしとゝひければ。かの人滿面紅潤かゝることあるべきものならず。いはゞさいはひあれば。かならず散財あるがごとく。左のかたよければ。右りのかたあしきは。天地のつねなり。さるにかくあしきところなきは。かならずそのうらに變ずるものなり。一天雲なければ三日のうちに雨ふるといへば。相書にあることにはあらねど。かゝる吉のうらは凶にかはるべしとなんおもひしなりとはかたりしとぞ

つくしに敵國降伏の額は。延喜のみかどの勅願にて。したしく御筆をそめられしといふ。敵國は外國をさしての事とかや。むくりのおそひ來りしことだにありしためしをだにしらざる輩もありぬべし。たゞに外國のありとだに。心に留ざる計にみゆるやうにもなりゆくべくや。豊臣氏の。こなたのたゝかひになれたるつはものをえらびて。朝せんのひさしくたゝかひの事もしらず。おこたりすさびたるくらきよの君と臣とをうちやぶりしより。外國はすべて智もなく。力もなきものよとおもふたぐひぞいとうたてき。武の平氏の末のうたよみなどし。もはらみやびにながれたる一族なりとて。よわきものゝやうに人はいへども。さすがによくかれがごとくはありしとおぼゆ。朝せんのたゝかひのをり。かの國のたちまちやぶれしは。よわきと計はいひがたし。いかで智もなく。力もなきとはいはん。つひにせめかねてあきたるは。智もなく力もなしと。かへしてやいふべきといひしも。もとり過ぎたるとにやあらん。いづれ外國のありとだにしらざるばかりになり行きて。よその國のえうなきもてあそびのものゝみこのみあつめて。いつかこのわざはひのふかゝらん事をしらざる輩もあるならんと。かへすがへすもおそれ思ふとか。かたりしとや

今こゝにては。くろきをすゞむしといひ。かきのさねのごとなるを松むしといへど。もとはりんりんとなくはまつにて。ちんちろりとなくは鈴なるを。あ

梁のうへをあゆまばおちぬべし。こはかの陳氏のいひたる餘地なきなり。あまりにことに甚しく。物にせちなれば。おこなはれぬのみか。うとまれぬべし。こは事物にたいして。餘地なきなりとき丶ぬ

めしひしもの丶。人のいひがたき事をもいふは。いろもみえず。けしきにもしらねばいふなりけり。くらき人はわがあしきもみえねば。よきと心得て人にはぢざるは。めしひしひとのたぐひなり。されば古より。おもてにかきするなど丶もいふめり

あるやんごとなき人。旅の道は早くいねて。つかれをだにやすめなば。下がしもまでもうきとはあらじ。さらばはやくやどりを立ち出で丶。はやくやどりにつくにしかず。これぞ下をめぐむの道なれば。よろこびぬべしといひける。まづその君。早くやどりにつきて。かうしおろし。ともし出だしてひるの半ごろよりいぬれど。下のものはわが心のま丶ならず。人のいぬる比ならではいねがたし。殊にひるのうちはさわがしく。道行く人もたえぬを。世のひとに背きて。よるなりけりともいひがたく。いねんとするころ。その君ははや起き出で丶。夜半にともそろへてたつめり。下をあはれむ心はあれど。上の心もて下をみるより。かくはたがふなり。めぐむ心ありて。下の事しらねば。かくぞ有りける

ふたりつれだちて相みる人にあひて。君の仰によて。こたびたびだつ事あり。いかに侍らんみ給へといひしに。相ざ者見終りて。ふたりともかならず旅にて難あらん。つ丶しみ給へといひぬ。ひとりはいそぎの御事なれど。たびの道にて難あらば。おのづから君の仰も滞るべし。おそくとも難なきにしかじとて。ともしびけつ消比やどを出で。日のくる丶ころにはやどりをとる。ひとりはとの丶御つかひなり。つ丶しむとは君命をつ丶しむにしかじ。この身はたとひ難にあふともいかゞはせんとて。星をいたゞきてやどりをいで。ともしとりてやどをとる。さればことにはやく思ふかたにつきてければ。君よりも賞を得たり。ひとりのかたは。おそしとて罪にあひにけり。されば相はともあれ。わがすべきところをつとむれば。難なきものよとはいひてけり

満面紅潤の人あり。ひとりの相ざ見て。君はかならず祿を得。名を得。壽を得たまはむ。あ丶そのさち

いるなり。その出でいる氣の。いさゝか滯ることなければ。やまひてふものはなきことなり。さるにその氣滯れば。ねちをもつ。ねちあればものをかはかす也。其氣のもるゝをふたぎ。ふたがるをひらき。滯るをながし。かはかすをうるほすも。みな打ちまかせていへば。氣の滯らぬやうになすより外はなし。その滯ることおほければ。其害もおほく。滯をこと久しければ。その害も深し。其急なるはまづ其處を打ち。末をそゝぎて源に及ぶもあり。車の輪のめぐらざるもさまぐ〵にて。かはけば油さし。油過ぐればかはかして。たゞにそのめぐれとのみの心もて輪をすりするなり。おぎなふくすりとて。いかでべちにものをもてきてすりすべけん。たゞに氣血をもとのごとせんとなりけり。

聖賢の道まねびて。もろこしのふみなどこのむものが。ふと禪家の法語などみて。つひにそれにふけるものありけり。あるひとのいまめづらしく信じたまふは。道體性理のことにつくしたるには心もとめず。日のあかきをつねとして。ともしびの力をたふとむたぐひなり。それもまことはかの良智にて。ひぢりのふみ見れば。心にかゝりてはづかしさのおきどころなければ。かの法語などみて心をそのれとなだむるなりといひしはをかし

相州の日金の峯といふは。いと高き山にて。十州をみるといふ。あるひとののぼらんとするよべ。かみなりはめきて。雨は水こぼすごとくなりしが。夜明くるころは。わする計はれて。霧もなく。霞もなし。かのみねにのぼりたれば。七つの島々も手にとる計みえて。八丈の島のあなたも。かゞみもてゝらしなば。かの人なき島とかいふをもみつべくおぼえしを。そのものこの峯に立ちゐて。こゝに家たてたらば。かのえみじの船々。いまは八丈に來りけりと。こともなくみゆめり。さるをこゝの岸に早船ならべて。こやかしこにしらせんとはいかにぞやといふ。かかる晴れし日は一とせにまれなるを。その日にかならずえみじの船きたるべしやといはまほしけれど。しれたる事いひてあらそはんはと。ねんじてゐしとかたりき

道路は足底のひろさだにあらばあゆむべしといふは。例のことわりのみなり。いかであゆむべからん。

は。いかにも秀でしなどいふことは。一ふしもなしとこたへ給ふ。初のものにすぐれしものとても。一二百石の地だにあたへかねたるが。わが輩のあるは十萬石。廿萬石の地を給ふは。いかなることゝ思ひ給ふか。たゞにみおやのいさをと。大君のゆたけく大なる御惠なり。しかるに生れしより。かくたふときものとのみ思ひて。なほいやましに位つかさも人にこえんとし。大路ありく行裝も。わが格よりも高く。わが家の定よりもみやびかにと。市のわらべのほめなんことをほりするのみにて。うちにかへりみる心のなきは。いとうたてしといひ給ひしとかや

雲の上のやんごとなき君おはしましけり。その御子の御かたはらにまし〳〵けるが。そともより風の吹きゝて。ともしびの光定まらざりければ。人召して風の吹きくるぞ。ともしびもきえなん。障子(さうじ)たてよといひ給ひければ。父君ことにいかり給ひて。さやうなることばづかひしては。うたはいかでかよむべきとてむづかり給へば。御子はいとおそれてしぞき給へり。御次に居たるもの。いかゞしたる御敎ぞと思ひて。御色うかゞひてとひ奉りければ。ものをつくしていふべきものにはあらずとのたまひしとぞ

武氏のをり。狄仁潔などのつかへざまは。かくあらざれば唐室保ちがたきをしりてこそありけれ。されど。もし其中興せざらば。おもねりへつらひし人とのみいはれなんといふものに。呂尙がつりたれて。かの奇遇なくば。釣たれし翁とよばれん。たゞその時にあひて。かくなすなり。かゝらばのちに何といひて。わがざえをもしられんと。その人たちいかで思ふべき。これらは凡智もて不凡の人の心を論ずるなりといひき

酒過ぐれば。彌のまゝほしく。行ひゆるめば。彌みだる。わざはひのぞめば。みづからうながすものとかや聞きし

補藥とても。草根。木皮もて。天受のかけたるはさらなり。うちのやぶれしをも。いかで補ふべき。補ふといへば。造作のすりする樣に思ふぞわろき。先この人は。このあめつちの氣をもていくるなり。さればいづるいきにふるき氣をはけば。毛穴よりもその氣を出だずなり。又氣を吸ふときは。そのごとく

そなはりし御きせながなり。をしきことには。このめんぼうの目のあなもふたぎ給へ。矢なんどのこゝへきたらんが。あやふくさふらふといひき

よつの時のうつり行くけしきこそ。またなくをかしきを。さかざるをりの花をさかせんとし。ちるころにちらさじとおもふはいとくるし。ちれば又こん年はさきぬべし。いかに心をくるしむとも。露しろく氷かたきをりに。はちすの咲くべきことわりなし。ちるをよされど咲をまち。ちるををしむは道なり。ちるをよそにして心とせぬは。みちしらぬ心なるべし

観相の人のいふ。ふかきやまひまたはわざはひは。いと氣のしづみてみえざるものなり。かの感冒なんどいひて。疾厄宮に暗氣のあらはるゝはいとあさき事なり。あしきとてもいちじるくみゆるはあさはかなり。これをもてみれば。みえざるをつゝしむが外に道はあらじと

いやしきものなりけるが。つねくふべきよねをもくはず。ひさぎてこがねにかへて。命にもかへじと袋にいれてもちゐたるに。秋の末つかた。にはかに水出でにければ。かの袋をくびにかけて。高きところへゆかんとするに。はや水かさ高くて。行くべきやうなければ。せんかたなく。木によぢのぼりてけるが。ことの外にうへにのぞみけり。さるによねいさゝかつとにしおふて。水およぐものをみて。かのふくろのこがねをみせて。これをみなまゐらせん。そのおふところのよねを。いさゝかわけて給はれといへば。いといかりて。にくきをのこのいひざまかな。かゝるときこがねもちて何にかはせんといひすてて。およぎ行きしとなり

大名といふ人たちつどひ。ものがたりし給ひける時。ひとりの君のいひ給ふ。手よくかく人あらば。一二百石の地あたへ給ふか。弓馬のみちまれなる計得てし人あらば。千石計の地あたへ給ふか。ざえも秀で。文の道よりものゝふの道。皆至れるといはゞ。一萬石の地をあたへ給はんかといへば。むかしはさなんいふこともありけらし。今はいづこにてもさすべしとはおぼえずとこたへ給ふ。さらばこのまとゐのうちの君たち。文の道人にすぐれ給ふもありや。もののふの道もありやと思へど。人なみにはたしみ給へど。秀でしことはきゝ侍らず。いかゞあらんといへ

かば。にはかに耳いとさとくなりしは。うれしきものから。餘りによそのよそ事までも。もるゝことなくきこえけり。よねかしぐをのこが。このめしに虫のはひ入りたるが。いはゞむつかり給はんのおそろしさに。ひそかにとり捨てけりと。いとひそかにいふも。はやきこゆ。しらぬさますれど。潔疾あれば。きけばいといとふ心ありてはしもとらねば。またかのをのこらがさゝやきして。よべ酒の過ぎ給ひつらんとおもひしが。はたしてみいれもし給はぬなり。いざかたみにけふはおほくたうべ侍らん。うれしやなどいふもきこえぬ。にくさかぎりなきものから。きゝしともはたいひがたし。まいてとなりのものがたりには。さゝぐるしきこともおほく。こゝやかしこのことばより。鳥の聲。むしね。遠近もらさずきこゆれば。かしかましさいふ計なくて。耳ほどうるさきものはあらじと。疎かりしよをこひしとものせしとかや

ある翁に。かの人はいかなる人にかとゝへば。いとよき人なりと答ふ。かれはといへば。よき人といふ。かならずかれをばあしきといはんを。撰びてたづねみるに。よき人とこたふ。いかなる事ぞとたづねしに。人をみるには。まづ十にして五つばかりもよき事あるは。いとよき人とみるべし。十にして一つ二つもよき事あるはよき人なり。十にして皆あしきをば。あしきと心得給へといひしとぞ。こは人をかくみるなり。われをみるの道ならず。よきもあしきも。かろきと重きとのわかちもあらんかし

遠慮。遠謀せざるひとは。とみのわざはひにあふことは。人のしれることなり。その遠慮遠謀に似たるやうにても。殊更に物れだし。例のことわりにくしたる心よりいでくれば。なほ人のものわらひとこそはなりぬれ。かのものれだして。何くれと心くだくものに。君がかたはらそふもの。もし心風やまば。いかゞし給はん。男をうなをもしぞけて。くろがねのひつに入りても居給はんが。君もし心風やみ給はば。いかにし給ふらんといひてけり。またあるものが。打ちがたなかたはらをさらず。たちゐもものくしくして。いでかたき來たらばといはん計にかまへたる人に。君いね給ふとき。よろひきてやふし給ふらんといひき。またそのたぐひの人が。よろひをかねあつくしてつくらせたるをみて。いかにもまたく

ざるなりとことわられしは。いまだいたりふかゝらざりしにやといふが如くにこそ。いで神はわれなりとおもひ給ふならば。またよくおもひてみ給へ。わがごとく色にそみたる神ありや。酒このみてほどしらぬ神ありや。みるものに奪はれ。きくごとに心とられ。人に欺かれてもしらざる神ありや。たゞ神はひとなり。われは神なりといふは。いとやすかめれど。正しく直き神徳のくもることなく。てらさゞることなきを得て。のちにこそ

攝津のくにゝ川あり。その川の末に。かの酒つくる所ありて。その川水をくみてつくるが。あめが下にすぐれし酒とはいふなりけり。川の上には。ゑたといひて。けもの〻皮などつくるものがすみゐて。川のうちへ杭たてゝ。なまがはをさらすことつねのことなり。あるとし。そのことをいひ出でゝ。この酒は神にもそなへ。佛にも奉るものなるを。皮ひたす川水にてつくらんはいかにぞや。ゑたなるものをば。川の末へうつして給はれとうたへしかば。つひにそのごとくなりにけり。そのとしよりいかに酒つくれども。例のごとあらねば。いまはひそかにまたその皮ひたす水の末くみてやつくらんとすらむ

とし〳〵えみじの國へ吹きながさるゝ船子ども。命またうしてかへりくるものもあることなり。かならず二三十人のりて出づるが。おほく死して。かへるはふたりみたりに過ぎず。まづ高浪みてはきもをけし。食乏きを見ては心をいためなんどするやからは。おほくしにたゆるときこゑぬ。よし人なき島へつきても。さもしらぬ木のみとりくひ。しらぬ鳥とらへて。そのかはをはぎて身にまとひ。肉をほして食にたくはふなんど。事にふれてもこゝろの極りなく。常度うしなはぬものは。かならずことくにの人にあひても夜かれず。つひに命またうしてかへるとかや。さればー船のうちの英雄。かならず生きのこりてかくあるなりけり

仙びとの傳へし藥とて。いと耳のさとくなるを持ちつたへたるありけり。耳うときものが。いまいひ給ふことはなにぞと。二度みたびとひかへせば。ひともわらひていひもせぬさまなり。きこえぬまゝに打ちもだしゐれば。またわらふさまは。さすがにみゆめり。餘のはづかしさに。かの藥をこひうけてのみし

も。よになきやうに思ひ給ふかといひき
むかしいくさするとて。たがひに陣をかまへてゐしが。かたきのかたにて。大なるおとのみつよつしてけり。さればしらせのあるよと。そなへをたてゝまてども。何のけしきなし。人を出だしてうかゞはせければ。ほどなくかたきのつかひのものをとらへて來りぬ。たづぬれどこたへず。かぶとをとれば。はちのうちにせうそこあり。ふん封おしきりてみれば。かねて定め置きたるごとく。庭月の相圖せしが。いかゞしたりけん。火うつらでおちぬ。三光の相圖したるが。一つのほしは火うつらざりしかば。二星とや思ひたがふらん。二星ならば陣はらひてかへれとの定なれど。三光にてあるなれば。必らず陣はらひてかへるまじ。煙柳をもうたせてけるが。をりふしひとむらの雨くもに入りてけり。されば音のみして姿はみえざれど。煙柳と心得て。山の左の谷あひより。うち出づべしとかいたりければ。大將もほゝゑみて。まはしをきたるつはものをさがし得てかちにけり
戸ごとにとみ。家ごとにたるなどゝいふは。いかなる事にかあらんといふに。風俗質朴にして。上下の制あるをいふ。おの〳〵その分をまもらず。をごりにながれもてゆかば。みつぎものみな民にわたふとも。とみたることはあらじかし
みとせよとせ。門より出づることもなく。夜もねでふみのみ見ゐたりしが。つひに病出來にけり。ふみみるは。やまひのもとなれば。われはせずといへば。君は酒のみ過ぎて病出來し人をみて。酒やめ給ふかといひし
何にかへじと思ふみどり子のはひまはるをみて。げにこの子は行末ざえも秀でぬべし。ちぶさみすれば。ひたすらにはひゆくめり。心にさからふことあれば。ありあふものもて人をうつ。わがこのかしらの疵をみ給へ。この子のきせるもてうちしあとなり。おやとても心にたがへばかくするぞ。心のすなほにはある。年のほどより力もありて。この疵をいでかしにけりと。あとおしなでゝほめぬるを。愚なるものもわらひにけり。わらふ人よりはかしこき人なるが
神はわれなり。外にもとむべからずといひたるひとに。そはかの剝の卦に。陰もまたしかり。聖人いは

一とせもたゝざるに。かの打ちあてし隣の歯。ことにはれいたみてぬけたれば。ひだりみぎりの隣の歯。又ぬけて。つひに半はおちてけり。のこるとみるも。うごきゆるぎて。なきに劣るさましてけり。かの生れてよりやはらかなる歯のをのこは。今にかはらず。歯一つもおちずとて。また今にてはみづからおふを。はなきをのこ。はぎりしていからんもなきをとて。人もわらひにけり

かたはらよりいふことは。いとよくあたるものなり。かの人はおどろへ給ひしといへど。かゞみ見てもさは思はず。かれは今かくすれど。のちには悔いおもふべしなどいへど。しらざるものぞかし。私の心だになくば。かたはらにてみるとおなじかるべし

詠歌大概に。情は新を先にすといふことを。何くれといへど。こはかの日々にあらたなるといふ心ばへにて。ながるゝ水のごとし。さればよきをあしく。あしきをよくなどひきたがへいふは。めづらしきにて。新しきとはいはじ。はなを雲と見。雪を花とみる。いくたびいふとも。わがまことよりいへばいつも新らし。心してわざといふは。新らしきといふものならず

おのれ愚なれど。親に孝し。君に忠する事はしれり。されば べちにふみゝる事もあらず。たれかこのふたつの道をえらざらんといふは。いとしらぬなり。かの曾子とやらんのかしこき人も。うたるゝ杖によて。おもきふけう不孝となりし事をしらざるたぐひもありけり。まして君をたすけ。國を治むるは。忠のいとおもきものなり。たゞにまたあしき事いさめ。よき事をすゝむるとて。そのいさむるにも。さまざまのほども道もあるべし。そのよきのあしきのといふも。かうやうのあさあさしき人。よきといふもかならずよきものかは。あしきといふも

はなのさく比。雨のふり出でたるに。風さへそひぬれば。かならずはなのとき。雨風のうさ添ふならひにて。人のよのわかれはなるゝことわり見する事にこそ。さりとてはつらき雨かな。うき風かなといふをきゝて。雨ふるとても五月雨のやうにはあらず。はげしきとて夕立のやうにはあらず。かせそうとても秋の末つかたの野分。またはこがらしのやうにはあらぬものを。はなをしめば。ことさらに雨もかせ

げつ。また袋いうちより。うつはものなど出だしつつ。つね〴〵人にわらはれずば。いかでかゝることさほまれしつべきといひしを。げにもといひし人ありしとぞ

小松の内府が平氏のおとろへ行くをみんよりはとて。はやくこの世をさりてんとねがひしとかいたれど。もとよりさせる事はあらじかし。もしありしとみては。うすき心とやいふべからん。猶ながらへて平氏のならんはてをも見。力の及ぶたけは。あやまちをすくひて。いさめ止めつべきを。はやく此世をさらんと思ひしは。げに薄き心なるべし。例の浮屠氏の。あとよりいひたることなるべしと。人のいひし

肉腐らする膏薬をはり。血をとる針をさすに。薬のつきたるあたりを見れば。血色かはりて。けふは一寸ばかりもくされぬといふがうちに。肉つきて臓腑にくされいりぬ。また絡へさし入れたる針をぬけば。いとすぢのやうに。血のはしり出でゝとまらず。つひに爪の色もうせて。かほも青ざめにけり。かくても心をいためず。たのしむものならんや。またたれかかうやうのことをせん。人の身にとりても。腐腸伐性などいふこともありしとぞ

薬のやまひに應じて。その人の運よきをりは。一のみくだすよりこゝちよくおぼゆるものなり。運あしき時は。其薬のめば。あるはたんにさはり。又はけのぼりなどして。病因の外なることにさはり出でくるなり。押して用ふれば。功をなすくすりやまひに應ぜず。そのひと運よければ。たちまちそのさはりみゆ。運あしければ其さはりみえず。かならずしばしよきやうにみゆるは。病の沈みてにはかにわざはひをなさず。たゞその枝葉のうれひいゆるやうにみゆるなり。すくひがたきに至りて。人々かの薬應ぜざるよといふ。是もまたくすりのみかは

歯のかたきものありけり。石などかみくだくをほまれのごと思ひにたり。ひとりのをのこは。生れてより歯やはらかにて。かたきものかむことをえせず。さるにかの石くだくをのこ。歯のひとつうごきてはれいたみければ。この一つの歯の爲に。ものくふこともこゝろよからずとて。ものを打ちあてゝその歯をぬきにけり。夫よりまたむかしへかへりぬとて。石などかみくだきければ。人もみなほめのゝしりたるが。

まねび得たるなれば。わが國の人の及ぶべきにあらざることはしりぬべし。まいて宋。元。明。清の大儒たち。みなその説を尊信したるを。この比書物よみて。いさゝかこのあたりの人にしられたるのみのきみが。その宋。元。明。清の大儒の上にたちて。それらの説をひらきて。たゞちに聖のむねを得んとは。いかにぞや。その秀でたる大儒のいひ給ひしことをさへ。あとよりみれば。うたがふべきこともあるならひなるを。君がほどなる書生は。升にはかり車につむ計なるを。たがひにこれぞ聖のむねなるといふとも。たれか一定すべき。さあらば甲の説を乙はそしり。東の論をば西にてやぶりて。かの升にはかり車につむべきやから。さまぐ\の説をいひのゝしり。湯の沸くがごとく。絲の亂れたるがごとくになりたらば。たれかこの學を維持すべき。それが故にみだれたる世の。いまださまらざるうちにはや御神のかゝる事をはからせ給ひければ。道春といふ人をあげ給ひて。代々の學のめあてしるしをたてゝ置き給ひにければ。藤樹。蕃山。伊物の徒出でたれども。おほやけの學の道はかはる事なし。もしひとの心のまにく\。おのがさまぐ\の論説を經文に加へなば。代々の大君の御説々よりして。諸侯大夫をはじめ。おもひよることといひたらば。何をもて後のよを救ひなん。かゝることだにいまださとり給はぬ人が。おのがちからをもはからで何くれといふは。いかなる心にかあらんといひさして。ためいきしてゐたりしとぞ

いづかたに火ありときゝても。ありあふ調度なんど。繩にゆひつけて井のうちへいれつ。水にいれがたきものは袋やうのものへうちいれて。かたはらさらずおきぬ。火のかく遠きをいかでさはし給ふといへば。やけゆかば遠きも近くなりぬべしといふ。風よければ。こなたへはきたらじといへば。風かはりなばさはあらじといふ。人みなわらひぬ。ある日いと遠かたのなりしが。風とみに吹きいでゝ。またゝくうちにやけひろごり。かのをのこのあたりもやけうせぬ。火しづまりて。近きあたりのものら。ものくはんとしても。うつはものなしとなげゝば。かのをのこしたりがほにて。かしてまゐらせんとて。かのなはを引きたぐれば。はさみよ。くしよなどいふもの引きあ

ごいのくさとおもへば。身におはぬひたゝれまで。こひ得てしと思ふ心のみなれば。よろひも今のごとくことそげたることはせざりしなり。そのふりもやゝ衰へてより。馬を射て敵をうちとめんともし。わざむきたぶらかしてもかちてんとするより。おほくの人とりこめてうちしことも。うしろよりひそかに來りてうちとめしこともありしなり。ゆゑにむかしは。よろひの弓手のかたと。前のかた計心こめてつくりしが。源平のころよりは。はや前もうしろもひまなけれど。つくりたてかぶとのはちも。まへうしろおなじくつくりなせるをもて。その時よをみることゝまでもなりにけり。それよりして南北朝の比よりは。いよ／＼みだれたるふりになりてけり。室町の比にいたりては。花奢よりして高上のことわりをもくはへ。かの相生相對などいふより。七星五行のかずなどに引きかけて。事むづかしくいひもしたり。ゐなかのぶしどもみなまづしきに。つくりなすものもなく。ものゝくかゞやかすちからもなくて。京風の花奢高上なるをおしざまにいひて。いくさとても。たゞ命すつるのみにて。かたいこともなきものを。さまざまのおどしげのよろひなど。いとめゝしき事よとて。吹きかへしもひゐりかへしとかいふになし。なかにはよろひもきず。しぶ染のはおりてふものなどかたにかけていづるを。いとたかくいさぎよきことのやうに覺えて。まことのさむらひはかくよといふさまになりにけり。それよりそのころの大將のよろひのいといやしきを。のちにみて大將とみうけられざるやうに。雜人にひとしきをき給ふものなりと。あまりなる事にまで。いふことにはなりにけり。すべて世中のならはしのくだりもて行きしことをば。これをみてもかれをみても。しるべしとこたへしとぞ

あるひとのとふ。朱學とやらんといひて。程朱のとける事をのみたふとびて用ひ給へど。程朱の説においても。うたがふべきこと少なからず。たゞ學は聖のみちなり。今古に通じて。聖の旨をもて折衷するにはしかじなど。牛のしりへになり給ふや。翁の答へしに。とひ給ふむねは聞にたれど。程朱の大才絶倫だに。まだこのところはいかゞなど。疑ひ給ふ事あるにてしり給ふべし。かの國の大なるに。人もおほく。そのうちに秀でし人の。かの國の人。かの國のもじをもて

なき。弓ゐる道を得て。かの妙なるおく意得しものは。弓にはまことのはしをもうべし。弓に得しとて。それをもて馬にのるべしと思ふべけんや。みなみちしらぬより。たやすからぬことをたやすきやうにいふかといひき

ひぢりのたのしむてふことは。あめつちの心なり。あめつちの心は。つねに春なれば。いつものどけからぬ事なし。くるしきをたのしむにはあらず。くるしきはくるしく。うれしきはうれしきに外なけれど。たゞ哀樂喜怒のよつも。みな樂の哀樂の怒にて。いはば。秋は春の蕭殺。冬は春の閉藏なりといふにおなじことゝなん思ふとなり

むかしのよろひといまのとは。いかでかくまではたがひしにかとゝふ人のありけり。このわかちは代々のむかしのふりをよくこゝろ得ぬれば。明らかなるを。さはせでいくさといへば。元龜。天正のころの近きことのみきゝ覺え。むかしのことかいたるをば。かゝる事ありしやなど。夢ものがたりのやうに心得て。かのかひの國の何とかいふひとのしるせるものこ僞りいひしを。まことゝして。いまのよろひのよきなど思ふたぐひぞおはかる。まづ古のいくさは。ひとり〳〵に道をみがき。名ををしみ。ほまれを後につたへんことのみおもへば。みおやのことよりいひいでゝ。みづからの名をよばゝりて出づれば。かたきのかたよりもおとらじと。おなじくなのりて出であふなり。さればかたみにものおともせず。めのでひてこれをみる。そのうちあふなかにも。いでくまんと聲かけて。うちものすてゝよりくれば。力かひなくして。かならずうちがたからんと思ひても。さいふときにくまでは名をけがすにぞ。いのちすつる道に二つはなしと思ひきはめて。おのれも打ちものすてゝくみあふなり。くみしかれてくびとらるゝまでも。しづまりかへりてみることとなり。かたきよりくまんとてうちものすてたるところをきらば。たやすくきり得べけれど。名けがれては武夫のうちにたちがたく。ことに曲らずつみせらるべし。されば遠矢に大將など射るも。いや禮なきことなれば。それが爲に聲かけてのちに射ることなり。かゝればこそ。代々ゆづり傳へてしよろひをもき。いさゝかも後に名を殘さんと。心ことにひきつくろひ。これぞさい

のいふことなすと。打ちきゝてはおどろき感ずれど。みな人なみの事にて。年たけしものはもとよりはるかにまされど。さあるべき事と思へば。感ずべきことをも感ぜずなん。ざえある人の佛の道など信ずるは。佛の道は聖の道より高さにもあらず。明らかなるにもあらねど。佛たちのよくはかゝることしりけりと思ふより。おどろき感ずるもあるべし。かの不動智とやらんを。よになき高きことゝいへど。いつか寂然不動天下の故に通ずるてふこと。ひぢりのふみにもあるを味はずや。すべてあなどる心よりわざはひをうくるとしるべし。古の英明のみかどをはじめ。すぐれたる人ら。女わらべにたぶらかされて。のちには制する事も力及ばで。みだるゝはしをしりつゝ。打ちもたし居し人もありけり。これもかの。いかでしらんとあなどるが故に。いつかかくはなるとや

諫は明らかなるところよりいる。讒はくらき所よりいる。たゞ代々のみかどのほりするところの心のまゝならぬものは。わがみとわが名の二つなり。その二つをそこねんときけば。いとおそろしく思ふべらなり。かのそのくらきところよりいれば。つひに賢もうたがはれなどするとかや

天が下の御事などを。さま〴〵こゝろにかけ。心くだくさまにかたるものありけり。君はつまに子にもち給ふが。をり〳〵つまは君と争ひ。その子もかたみにかきにせめぐに。君もあまねき心にはあらずや。子をみ給ふにも深き淺きのかはりあるは。よそよりみてだに何くれといふとぞ。さゝやかなる家のうちもをさまらず。けふの煙も立てえぬとなんきゝぬ。みづからを思ひ給ふの淺きにや。打ちまかせていはば。いづこをみる心もみな深かゝらずや。よくことにはいだし給ふ。かの憂國の心あるべし。憂國の語あるべからずともきけり。ことにいだすは心の深きにはあらじとか

わがまことよりつらぬきいづれば。みざる事もみえ。きかざる事もきこゆめりといふは。いと至りしことにて。それをばかのくじ孔子の君も。むそぢにて耳順ふとものたまへりしぞかし。さるにわが輩の色にそみ。香にめづる心はさらなり。いさゝかもほりする心あれば誠をおほふにぞ。そのさかひに至ること

ふの劍なんの相あるは。いとたのもしきことなり。たゞ忠孝仁義の道にたがはざるのみ。楠正成も劍難なり。熊坂長範も同じ相なるべし。正成みかどのめしに應ぜず。にげかくれなば。劍難にも遁れなん。されどたれか賢人忠臣の名をもて賞すべき。觀相はつたなきわざなり。聖人の中道いづこにかさはるべき。いづこの道かまさりなん

兵は今日にありとて。正心より治國のことなど。經書をかきぬきして。わが物がほにとくぞをかしき。鈴錄はさながら今世にある流のたぐひならず。火術も自得流はひらけざることおほけれども。その比。人に先だちてかく思ひそめしは殊勝なり。かゝるさへあるをとはげまば。又藍より色よき例もあり。とにかく志をはげますべきことなりかし

あるひとの。かしこきをあげて政を任ずるはかに。國をゝさむる道はなしと。こともなげにいふをきゝて。いかにさはいひ給ふぞ。わが國のみかどおほきが中にも。延喜のみかどをこそ。聖の代といまにもいへど。すがはらのおほちぎの事なんどもきこゆるぞかし。はたち餘りの代をつみしがうちの。からくにのみかどのおほきが中にも。かゝる人をいかで用ひたまはざりけん。この人を用ひ給ひし故に。つひにかゝる事出來にけりなどいふこともたえぬぞかし。堯舜三代の初には。もとより聞えねども。それも後のよの如く。くはしく志るしつたふふみあらば。またのち〳〵のさたもありぬべし。はやそれにも鯀とかいふ人を用ひて。その職にかなはざりしことも。管蔡の君のわざはひせられて。ひだりのしばしぬれぎぬき給ひしこともありしぞかし。さるに君はたゞかしこき人を用ひて任せよと。こともなげにいひ給ふは。聖にもまさりぬると思ひ給ふか。事のあとよりみるごとくならば。人をしるのかたきなどゝはいひ置き給はじ

ことわりなきがことわりのまことなり。ことわりのごとおこなはるゝ物ならば。何のかたきこともあらじを。さもしらで。人とあらそひ。政をそしりなどしてたかぶるものは。ことわりのまことをしらぬとやいふらん

大なる松杉は。さゝかなる岡にはおひ出です。わらはべ何をしらんなど思ふこゝろより。をさなきもの

もろ〳〵のしひてほりすることあるがうちは。このまよひじち實にとげしとはいひがたかるべければ。まづ餘りに高きことなどいふは。心にとふまでもあらず。わがほどをもしりてつゝしむべしとかいひしとぞ

なすの與市は弓の上手にてもあるべけれど。馬を海にのりいれて。風にうごきてさだまらぬ扇を射んといふは。いとかたきことなり。射そんじなば死ぬべしといふも。さもあるべき心なるべし。たゞ扇にのみ心ありてはなしたりとて。かならずあたるべしともいひがたかるべし。さるに心にたちかへりて。神に祈念したるにて。心はうちにとゞまりて。外へはせず。つひに思ふ矢つぼたがはざりしは。わが心のまことへかへりて。神明良能の妙のいでしなりといひしが。さあらんこともありぬべし

あるひとの庭みしが。松の枝をため。はをすかし。一草一木みなつくりたてゝけり。まして石などはさま〴〵の色あるをもならべわけ。大なるも小なるも。たゞずまひをかしくしなしたるを。翁ことにほめにけり。かへりて後に。翁のつねこのみ給ふは。草は階前よりたちのび。松もひばらも。おのがまゝになしおき給ふかとおもへば。けふの庭をばことにほめ給ふはいかにとゝふ。何もさせることわりなし。世の人わがこのむところにあふものをば。ほめのゝしり。心にあはぬものをば譏りなどすれど。ことわり盡くして思ふにはあらず。茶たつることこのむものは。碁などかこむものをみて。をしき月日をむなしくし給ふ。木野狐の名をわすれ給へりやなどいへど。茶たつるも一時の心やりにて。よきあしきいふべき品もなし。いでこの庭といへば。室町の比の庭の殘れるをみてもしるべし。野山のけしきなすも。またかりにつくりなせしなり。じちにさま〴〵の石などおもしろかれとなしたるは。おもしろからぬやうもなし。翁が庭はといへば。おのがまゝになすにて。古の庭などのことゝもたがへば。心高きわけもなし。紅紫のいろよきとて賞しぬれど。衣にして翁などきまほしとは思はざるなり。わが心にたがへばそしるは。みなことわりしらぬものゝすることにや

ある人のいふ。われは劍難の相ありといふものあり。いかにして劍難をのがれ侍らん。翁のいふ。ものゝ

うきたる事になりぬべし。くすりはわがいとふものなり。やみてしぬとも藥はのまじなどいひ。または酒にゑひて。わがおそるゝものなしなどいふたぐひにて。皆醉ことなり。それらやまひにかゝれば。ことにあはれげにうなり出だして。藥あたふれば押しいたゞきてのむめり。この苦さを去ぞ退くまじなひよといふとも。まめだちてうけぬべし。またかの酒の醉さむれば。もとより拙き心はかはらず。何とかいひけんわすれにけり。そのをり。人はいかりはし給はざりしかど。心にかけてものもくはでゐるたぐひは。みな何しらぬものゝ血氣にて。神佛そしるたぐひなり。我慢づよきものは。たとひやむとき。藥のまずとも過ごしぬべけれども。こゝろにたづねたらんには。人だにみずば。のまゝほしくやあらんかし。沖こぎ行く船のうちにて。波かぜのわざはひにあへば。もとゞりきるもありぬべし。いまこのたゝみのうへにては。いかでさありとも。われはなぞてなぞいひ給はんが。さもなきものぞかし。そのうへいきしにはさらなり。色にまよひ。香にうつる心ありて。いかで迷ばじとはいひなん。昔は人の心すなはなりければ。かぶときるにも。もとゞりのうちに。信ずる佛などいれて。いくさにもいでゝけり。あるは奉納寄附などし。敵にかち。はいとげんことを願ふ輩も多かりき。もとよりよき事にあらぬは。いふにも及ばず。士卒の心をとるには。またあるべきことなり。いまは女にても。大かたに神佛のことをそしり。なにくれと高きことといふ輩ぞありける。かれらいきしにのみちはさらなり。色かに迷ふのみかは。聊のものにも心とられぬるものが。高きことといふは。皆心にとはゞはぢぬべし。されば佛の道にまよはずといふは。よき事なれど。素直なる心うせたるなれば。むかし人のをかしきまでに。佛にこび僧にへつらふよりは。をとれりともいふべからんかし。かうやうの事は。よくわが心にとひてのちにいふべし。神佛に祈りて。やまひをさらんとし。得がたき位を得。職を得んとし。いさゝかもほりすることをとげんとする心は。迷ひなり。されどもその迷ひに淺きと深きとありて。又おのづからまことの道をうべきはしともなるべきことにもあるべければ。しひてまたふかくとがむべきにもあらじ。生をもとめ。死をにくむよりして。

おほくは治しがたしといふも。心用ひざるにやわらむかし。亞科は何のやまひみても。胎毒とし。つよき藥投じて。事されば藥力及ばざりしといふたぐひぞおほき。いとおほくていと少なきものはくすしとか

學問は人の道まなぶことなり。からうたつくり文つくるはせんなしと。よく人のいふことなれど。みやびは花のかをりのごとく。ものゝうるほひのごとし。まいてかの國のもじをおぼえて。ふみよむとも。文字のつかひざまにて。ふかさあさゝのたがひめあるものにて。かのくにの人のごとは。しり得がたかんめれど。さすがにからうたつくり。ふみつくれば。おのづから。ことばの外なる心をもうるものとかやききぬ。さればなすにはえかじかし。などてこれを禁ずべき

夏は麻の衣をきるべし。冬はわたいれし衣かさぬべしといふはことわりなり。されど。伏陰あるをりは。夏もわた入れし衣きるともあるべし。冬熱陽あるをりは。ひとへあはせの衣をもきるべし。さるをことわりのごとくせば。またやまひをもうべし。今の世ただに理のみいひて。國ををさめ。人を治めんとするものは。かゝることやあらん

神佛を信ずるものをみて。いと愚なるとなりかしと。わかきをのこ打ちよりていふを。君たちは年わかくても。佛なんどの道にまよひ給ふ事なしとみえたり。いかにしてかくも心の掟正しくずし給ひしか。いとたふとき事にこそ。翁はもとより愚なればにや。ちかきころやゝまよはじとは思ひぬれど。そをだに心のすぎやう修行怠りなば。いかゞあらんなど思ふぞかしといへば。いかにさはの給ふ。地ごく。極樂のなきことは。今の世たれかしらざらむといふ。神佛にまよはじとは。その地ごく極樂の事にはあらず。佛道心法はからくにの博學の人たちこのむもあるぞかし。またその修ほうにおいて。ねぎごとなどするを。いと無下なることゝいふべけれど。から國にては。名山大川などにいのるといふも。こゝらには古より。勅願所の祈願所のといふも少なからず。さるをもぬけぬる事は。まづ易の道をよく心にいれ。いきえにのみちに疑なきにあらざれば。この迷ひはとけがたしとかきけり。たゞに血氣にていまいふは。いと

らちかく鳴きよるも哀なり。この雨に木々もそめなんとおもへば。たけ茸などもおひいでなん。くりもはやおつべしなど丶。わらはべのものさびしげに。ともし火にむかひつ　いひ出づるも。げにさま〲なり。夜ふかきかねの音の打ちしめるものから。さすがに秋は聲さえてきこゆるにぞ。まつ夜。わかれのおもひまでも思ひいで。かねつく人の心をもあはれとおもふばかり。感情はいとふか丶りけり。紅ぢの染めそふも。しらぎくのうつりゆきてひとさかりみするも。尾ばなの露おもげにうちしほれたるに。りうたん龍膽のうらみふかくさきたるあたりも。つき〲し。あさがほの。みな枯れたる中に。さ丶やかにわかう咲き出でたるが。ひる過ぐるまでもしぼみかくれたる。又あはれなり。のわきの風は。おどろ〲しきものから。雨は夕だちにおとらざれど。さすがに哀をそふるは。秋のならひなるべし。しぐれのさとおとして。夕日にしろくふりくるも。また音かへて枕とふもをかし。月よりもやみの夜よりも。哀ふかき物には侍らずやといへば。かうやうにいひならべては。げにもといふべからんが。一とせもふるこ丶ちしてよみ見れば。この夜はをとつ日よりふりいでしをと。おもふ心はかはらじと。心のうちに思ひて。きゝゐしもまたをかしかりけり

遠からぬころより。夏のうち疫とてやめるがいとおほし。はじめは泄瀉し。又はねち熱甚しく。汗流るるごといで。舌は變ぜざるもあり。たちまちせん語妄語し。大渇となり。あるは發狂す。大陽の症なりとて。發表し。或は下劑投ずれば。二三日にして虚症と變じて死す。か丶る傳經の早きはなかりけりとて。或は初めに附子用ふれば。彌乾燥甚しくなるなり。みな匕をすて丶けり。さるにはや傷寒論には。喝病のことをしるして。汗下も温もすべからざるよしかいたるが。其後代々それをしるものなくやありけん。回春に至り。その事を委しく記すを。いまはかの古きかたをせになすものから。回春などはおくれたるもの丶やうにおぼえて。こ丶ろみず。ひとりそれをもて治療すれば。たちどころにいゆ。いゆればさしてのやまひにはなかりしといふ計なり。またちかきころより。腹いといたくいたみて。水を吐くやまひれほし。疝とし。又は飜胃などにあつれども。

どりやゝそひ行くも。柳のいとの動きもやらで露そゝふも。ともにいとのどかなれ。ともし火かゝげても。何となくひかりしめりたるに。かねのおとのほのかにひゞきくるも。心すみわたりぬるものぞかし。其外梅がゝのしめり。夜ふかくにほひわたるも。花にうしとかこちぬるも。哀はありけり。春も老い行くころ。蛙の時得がほにすだくもをかし。ほとゝぎすのはつねいかにと思ふころ。村雨のはら／＼とふり出でたるも。五月雨のいく日もふりくらして。ふみの巻々くりかへしつゝ居たれば。何となく世中の事にも遠ざかりぬる心ちぞする。また暑さにたへかぬるころ。雲のみなぎり出づる勢ありて。風ひとしきり吹きおちたるに。柳蓮葉なんどの葉うらしろくみせたるもすゞし。やがておほきやかなる雨の間遠におちたるが。のちにはしきりにふりきて。ものおともきこえず。上のにほひきたるもいと心ちよし。軒ばは玉のすだれかけたらんやうに。たまみづのたえまなくおちたるに。庭はひとつみづうみとなりてあるは。瀧おとしまたは水はしらせたるに。人々しばし物いはでうちまもりゐたるもをかし。やゝ雲うすくなれば。池の面にはかぞふる計雨みえて。小鳥など庭へをどり出でゝ餌ひろふさまなり。はじめ雲のたち出でしかたは。はや空の一しほみどりにみえて。虹なんどみゆるに。木々のみどりの庭潦にかげみゆるもいとすゞし。老いたる女など。かみ雷のおとにおどろきてはひ出でたるが。けふのはわかゝりしときのごと。よくはれにけり。いま時のはかくはるゝとまれなりなんど。はやくり事いふもあり。かれはかくあわてしなどいひて。かたみにわらひどよみつゝ。けふは蚊もすくなかるべし。かみの音もいとかすかなり。このごろのあつさもわすれぬとて。はしちかういづれば。夕月のひかりさしわたりて。草木の露も玉なすに。こえふくれたるかはづの。ものまちがほに空打ちにらみて。ふつゝなる音になくもをかし。秋くるころの雨は。きのふにかはりて。何となうさびし。萩のうはかぜ。外山の鹿のねなんど。月よりもみにしむ心ちぞする。つねにきゝなれしかけひの水の音までも。あはれふかくこそ。月の前のむら雨もまたをかし。まいてやゝ夜寒のころ。鳴きからしたる虫のねの。雨のをやみに。かすかなる聲して。まく

みえわかず。はやかたきは近よりぬ。今やかたきのかたより弓とりまじへて。うち出だすべしとれもふに。鳴神のごとして。まりのやうなるもの丶。二つみつおちたるにぞ。かねて思ひしとたがひたれば。いかゞはせんと思へど。せんすべなく。やりたづさへてす丶むべし。かの一番。二番のいさをしはさらなり。塲中やりわきなど。さま〴〵のことあるをといさむれど。かたきのかたには。長柄もみえず。たゞ馬にのりたるもの。弓などもちてかけ出づるにぞ。かくはいくさせぬものなり。道しらぬ人のする事よといへど。かたらふひともなし。さいはいとりて。かの定めのごとくふりたれど。つはものどもはかたきのかたばかりみゐたれば。さいはいのふりざまみるものもなし。つゞみなど數の掟もあれば。そのごとうちたれど耳にもいらず。ねざめのかねの音さへ。折々はよみたがふこともあんなるに。まして心も身にそはぬ折なれば。よみ丶る人もあらじかし。せんかたなくて。ふとみれば。かたはらにもろこしの七つのふみを明らめて。つねにはさま〴〵いくさのことなどいひあらそふをのこあれば。か丶るをりはさすがたのもしく。それにかたらひみれど。たゞにことわりのみいひて。とみ頓の用にたつべからず。はやかたきはいとちかよりぬ。いかに〳〵といひつつ。ふすまふみさきて。ひたあせになりて。めさめしとぞ。かのこしのくにのをのこ。よその國の水にあひしにもたとへつべしとかや

月の夜半こそ思ふくまもなく。こ丶ろのそこもすみわたりぬるものなれ。されどやみの夜の空はれて。星のひかりさやかなるに。風たかく吹きかふは。またまさりぬるやうにおぼゆるといへば。雨ぞいとまさりぬるをといふ。いかにとゝへば。いでや旱天の雨はさらなり。草木の花咲きみのるも。みなこの恵にこそあんなれ。またその感情のふかさをいはゞ。けふは元日なりけりといふに。雨そぼふりてかすみわたりたるは。げに春哉とぞ思ふめる。師走のみそか。のどやかにふりたるも。春まちがほにていとをかし。すべて春は雨こそのどかなれ。軒ばより霞わたりて。いとこまやかにふれるが。衣うるほせどもふるとはみえず。軒の玉水も間遠に音して。すみ捨てし蜘のゐに。玉ぬくけしき。庭のおものかれふの底に。み

邦道あるといひ。なしといふを。堯舜の御代を邦道あるといひ。桀紂の代をなしと心うるはあやまりなり。三代の初のよとても。かしこき人のみあるものかは。いま名の聞ゆるを見てもしるべし。そのかしこき人とても。それ〳〵氣質とやらんあるべし。またをりにふれては。心あまりもあるべし。よそごとの聞きたがへもありなん。またたゞしくすぐなる心より。まがごとをもえばしまことゝ心うるをりもあるべければ。わが其ときにあひては。いまは道ありとれもひ。道なしと思ひつべしといふ。そのをりもしり得ぬものは。いつもおこなひをつゝしむにしかじとぞ

こゝろざし五つありて。智の七つより已上のものは。かならずいさをしをなす。志五つありて。智の五つむつあるものは。いさをしなすことあれど。おほくやぶれをとるとぞ。志五つにして。智の五つより已下なるものは。おほくやぶれをとるとかや。かならず智おとりて志厚きものは。時をもしらず。ほどをもわきまへず。人をもしらで。われはばかりゆるして。わが智のたらざるをもしらざるより。かゝるものよとい

ひしとや

いくさの道とて。さま〳〵のながれわかち。かどたてゝきそひてらふともがら。をさまれる代におほく出來ぬるもをかし。かつてむかしのいくさのこともしらず。今はたかくかはりぬべしと心つくすこともせず。いつもわがながれくむ人を敵として。いくさする心なりやと。さかしらするをも。きかぬさましてゐし翁ありけり。ある夜夢にいくさするところをみけり。かのつねの心から。人より先に何くれとすれど。かねていひしごとくはあらず。まづかたきよせ來るときこえしかば。いで物見といふ事つかうまつれといへど。たれも出でこず。せんかたなくみづからのり出でゝみしが。いづこにかくしおけるつはものゝあるべきか。いかなる森林より遠矢は射るかと思ふのみにて。かたきのけしきみるひまもなく。こせりあひなどはじまりたらば。みかたにはこれぞと思ふものもなければと思ひつきて。まづむちをうちてかへりぬ。いでみの手にあしがるくばれよといへど。こゝろみなれし事にもあらぬに。夏草はいと高し。土地も平らかならねば。しひてくばり置きにし人も

れば。一やうに實だにあらば。花はなくてもありなんとはいはじ

年のくれに。淺くさ寺のあたりに市といふ事ありて。ことに人おほくいづるなり。ある人さつまのくによりおはびの貝おほくかひもとめてけり。その貝のあなをふたぎ。木もてふたをつくりて。その市にてうらんとはかりけるが。折ふしさはる事あれば。人にたのみてひるつかたには來るべし。それまでにうりてたべといふにぞ。もて出でゝうるに。かへりみる人もなし。さればよ。かうやうのもの此市にてうりしためしなきを。えうなき事に時つひやすものかなとおもひつゝ。いかにうれども。かふものなければ。ゆきゝの人の袖ひかへて。これめさせ給へなどゝいふに。ひきはなちてゆくめり。ひる過ぐるころ。かの人きたりて。いかにとゝへば。かくといふ。何といひてうりしといへば。べちになにとかいはん。かいやきの貝めさせたまへとてうりしとこたふ。かれはゝゑみて。わがうるをみ給へやとて。いと聲だかに。はやなべ〳〵といへば。過ぎ行くものは立ちかへりて。かひ求め。そこら行く人も聲をとめてかひぬ。みるがうちに。おほくの貝を皆うりてけり。此市は人おほく出づれば。ことにかまびすしくて。しづかに心とむるものもなければ。手桶うるものはさわら〳〵といふ。さわらの木もてつくりし手桶よといふいとまもなく。きくひまもなしとかや。物の勢といふものも。またことわりの外なるものなりけり

こしぢの深山は。いと奥ふかくして。雨に水そふとても。山あひの谷河なれば。流とづればやまなぞくづれてわざはひなせぞ。水はいと早くおつるとぞ。その深山にすめるをのこが。一とせみのゝ國へ行きたりしに。雨いとふりつゞきてければ。人々堤に出でゝ水防ぐに。かのをのこは水ふさぐ事もしらざれば。よねをいさゝか袋にいれて。こしにつけゐたり。はやその堤もくづれぬと。人々よばゝれば。高なみみなぎりて。ながれ行く水の勢に。目くるめきてにげまぞふひまもなきほぞなり。かのをのこ故鄕にては。左も右も山なれば。たゞちに打ち登りて。かの聊のよねくひつくさゞるに。はや水おつる心ならひに。人よりしつめて打ちみるに。あるかぎり岡もなく。山もなし。つひにおしながされけるとぞ

かにまきのみえたるが。姿はいかにありしかなどたづぬれば。わが庭にもまきのありしや。つね見はべればわすれたりといひき

蝦夷の人に飯をあたへしかば。いとよろこびながらそこらくひこぼしてけり。やよ米はまたの緒つなぐものなるを。などかくおろそかになすかといへば。われらは米くひていのちをまたう全するにはあらず。さけ鮭といふいを魚くひていくるをといふ。さらばさけのいをにて。いのちをばのぶるならば。それをばたふとぶべからん。いまその足にはきたるものは。さけのかはならずやといへば。しばしかしらかたぶけて。君のあしにつけ給ふわらうづとやらんは。かの米のいでくる草にはあらずやといひしにぞ。あなどるまじき事よとひとのいひしとぞ。わが國の人はよその事をしらねば。えぞ人のなりかたち。わが國の人とたがへば。いと愚にて。何しらぬものよと思ふたぐひぞおほき。それよりからくにゝてもあれ。えみしの人にてもあれ。たゞすがたのみなれぬをみてははらかゝへて。ことばのわきがたきをきゝては又わらふ。心せばくよそみぬ故なるべしといひぬ

遠州政一あその色紙釜てふものあり。山のふともにかけひのけしきかいたるに。西行法師の「とく〳〵とおつる岩まのこけしみづ。くみほすまでもなきすまひかな」といふをつけたるが。あるやんごとなきひと。かの茶の道とて。しひてかゝることまねぶこそ心得ね。そのほどをこそ思ふべかめれとて。上句はそのまゝ置きて。「くみてよわたる人もこそあれ」と。つくりなほしたりとか

やまと歌は。人の心よりあめつち鬼神をも感ぜしむるなどゝいふは。和歌の道にかぎることにはあらず。たゞ一つの誠もてこそ。大ぞらをもうごかしつべし。漢の高祖の太子うごかすべきわたくしの御心を。さま〴〵ことわり盡して。人々諫むれどもうけがひ給はず。さるに周勃といふ人が。口にはいひ得ねども。よからぬ事をしれゝば。そのみことのりをばうけじといひしひとことにて。さばかりの御心まどひもはれ給ひしとか。さればよしことばのはなをさかせたりとも。誠のつらぬくにあらざればえうなき事なり。まこともつらぬきて。ことばの色もそなはりなば。いとゞひとの心をもうごかし。やはらぎつべけ

ちをもよそにして。ひとに高ぶるみやびもありなん。なかには謝氏とやらんの妓女携ふることは。かのうつはといひざえといひ。世をもひとをもをさめものして。ちとせののちも名をあらはすいさをあれば。よしよからぬことのありとも。よきにくらぶればものゝかずならず。さるに何のかぐはしさもあらで。たゞ色にふけり。酒にのまれて。かゝずりありき。わがすべき事をもせず。晋の世のみやびなりと思ふたぐひはいふにもたらじ。たゞやんごとなき人は。花をみ月をみるとても。いかで心のまゝにすべき。われひとりおもしろしとて。夜ふくるまで月はなの宴にふけらば。大炊どのゝあたりはさらなり。ずさなんどをはじめとして。睡ることもえせじ。君はおそくいねばおそくも起き出でなん。末つかたのものは。猶はやく起きいでぬべしとおもひやりて。名殘をしとも打ちすてゝ。ねやに入るをこそ。其ほど得しみやびとはいふべけれ。ことに月花の宴とても。それをばよそになして。たはれたる事にのみ夜をあかすなんどは。いふにも及ばずなん。いでや武夫ならば。かの槊横たへてからうたよみ。弓に矢はげて歌よみしなんどは。まことのみやびなるべし。みなわがすべき事をもせず。わがほどをしらで。いやしきものは高きまねびし。たかきものははかなき住ひなんどのまねびし。からうたつくるものは。唐くにの物商ふ賤にてもあれ。うるまくだらの人も。から國にちかしとてや。そのかいたるものなど。殊にたふとぶたぐひもあり。歌よむものは。雲のうへ人ならば。いつも名たゝる人のやうにおぼえて。つたなき歌をもうつしものして。もてあそぶもあるべし。又はふるきもの集むとて。今の用あるものにかへても。ようなきものをもとむるもありぬべし。みやびは花のかをりなり。花と實とありてたりなん。されどこのかをりありてこそ。梅は桃にまさりぬれ

よく物を心にとめてわすれぬものが。むかしいづこの山にのぼりしが。かゝる峯に松のいくもとありて。そのうちにかく枝たれたるに。いま一木は高くそびえてたてり。そのかたはらにまきの大きやかなるが。横ざまに生ひいでゝ。青つゞらのかゝりしさまなどとかたるに。いとこまやかにおぼえ給ふ物かな。君が庭も。その山によりてつくり給ひしや。松のあるな

れ。または耳にいらで。まめだちていふを。わらふをまだしらず。このことはやいく度きゝしをなど。およびをりてわらふをも。猶よそごとゝ思ひてや。ひろらかにあきてわらふを。またわらふ

わが欲を欲もてふせがんとするはいとかたし。けふ盃にひとつ酒のまんよりは。あすはこゝろにまかせてのますべしといふがごとし。この世はかりのよなり。かの國にはよきねの鳥。よき色かの花よりしてなど教ふるは。その國のおろかなる民ぐさの。はかなきほどもしられぬ。かりのよと此よをいはゞ。君と親のめぐみは。なにとひとにこたへんとか。よみしもありとかや

この筆はいとわろし。みたびよたびものすれば。みなかぶろのやうになりぬとて。とみに物かくをりは。墨もすらで硯の海をかいまはし。かきはつればなげおくにぞ。すゞりや秘閣のはざまなどに横たはりて。いつか先もつりばりのやうになりて。かわきにかわきたるを。またおしげなく。たてざまに。ひかたのあたりにて。音出づる計にかいまはし。あるは齒もてかみくだき。又は墨もて筆の先をおしひしぎてかきつ。かくてはいかでいのちの長かるべき。よき筆をば。まづかさとるもしづめてし。物かいたるあとにてもあらひものし。紙に押しあて。又はすかしみて。一筋も亂さじとしておくめり。いとゞいのちの長かるべきことわりなり。はやくそじなんと思ふをば。いとあらく〳〵しくしなして。これみ給へ。みたびよたびに。はやかくなりしといふもをかし

風流（みやび）このむもの。今の世いとおほかれど。いづれをまことのみやびとはいひも定めん。只月をみ花をみるとても。いかでいはん。歌よみからうたつくるとて。いかでいはん。いまのみやびといふは。まづわが名をてらひてんとおもふより。をかしとおもはでも。いにしへ人のこのみしものは物まねびして。それもて名得んとするもあるべし。うたよむとても。よそのこゝろよりよみいで。よその口まねびして。人にてらひてほまれ得んことをのみ思へば。心にもあらぬことをよみなし。あるはならのみやこのふることをあつめてつくりなせど。よみなす心のうちは。今のよの末が末なるふりを改めず。かくて古にかへせりとおもふことあるべし。または世につかふるみ

り侍らん。かの今の茶たつる道なんどは。いかゞあらんといへば。こはもとよりすたれぬべし。茶いるるつぼ。あるは茶のむ器などに。ちゞのこがねつひやすものたれかあるべき。むかし人いかでこれらに財費しきといはんかし。たゞえみしのならはしなどのやうなること。おほくたちまじり。みるところわかやかならずして。利ある事など。せとやなりなんといひしとぞ

老いぼれたるものこそ。いといたうあさましけれ。かほの色もろくみもて行くに。雨くものむら／＼みゆるやうなる物さへみえて。さゞ波のしわよりくるに。こしもうちかゞめて。ひざなむるさまし。しはぶきがちに涙おしのごひつゝ。老舌いたひてこゑもわななきつゝ。耳はかの時しらぬ蟬の聲に。ものゝねもうと／＼しく。おのが耳にいらねば。人もきかじとや。いと聲高にのゝしり。ものくふにも目うちしづめて。かほは大なるふる地震やうに打ちうごかし。はてははなをさへうちかみつゝ。ゐるぞ淺ましき。かくては人にもさけてこそ有るべきに。若うどにうちまじりて。ひとより先にいざり出でつゝ。老いたるものよとみづからゆるして。人の厭ふをもいとはず。盃人にさして。わが齡ゆづりてんなど。ばうぞく凡俗にいふもかたはらいたし。ことに富みたるものなんどは。たをやめなど。ふたりみたりそばさらずおきて。たのしむもありとや。それらはいやしき身なれば。かぞいろ父母などやしなはん爲にや。鬼が岩やに立ち入りて。くるしきを忍びて。宮づかへをするをば。あはれにもいとほしくも思ふべかめるを。猶老いぼれもてゆきては。わがかく翁びたるをもしらず。昔の心ならひに。かゝる人わろき心もありやせん。されどひとはかならず衰ふることわりにして。老いず。しなずのくすりもなければ。せんすべなし。されどかの狼籍のことなんどは。いふも更なり。よにも人にも遠ざかり。くりごとなんどのおろかさをもいましめたらば。そしりをもまぬかるべし。老いぬるとて。きのふよりけふにかはるものならねば。かゞみのかげもおもなれて。みづからはおどろかざんめれど。わかき時に老いたる人みし心ばへ。わすれずしてこそあるべけれ。ことにわがかしこげにいふことは。いつか人のいひしことなりしをも。あるはわす

されどさいひ給はゞ。のみてまゐらすべしとて。ひとごとのやうにのみ居たるが。つひにそのやまひもおこらず。つねにかはりし事なかりしかば。さればこそ。かくあるべしと思ひしを。あの藥のまでもあるべき物をといひしとや

くすしもいと心高くなりにけり。むかしは巫醫などといひて。むかしのくすしのふみには。さまぐのまじなひごとなどをもかいれけるを。藥ももとおほくまじなひより出でしのもあるをしらで。このくすしいかでまじなひすべきと。心高く思ふ輩ぞおほかめる

あるひと。人まろがあかしのうらのといへる歌を。めづらしげに打ちかへしうちずして。いかにも名歌なりけりといふもをかし。ひとりがいふ。このうたこそ。そのころの體にもあらずなん。撰集にもまさしくそれともかゝず。何のおほんかみの歌。何のぼさちのよみ給ひし歌などゝいふをも。のせられたるたぐひもあれば。打ちまかせてはといふを。あなかま。かくなのたまひそ。わらはべもこの歌を。人まろがなりといふものをと爭ふもをかし。ことにこの歌は。篁がなりとぞいふなるよし。それとてもかゝることは。かゝる人などにはいはであるべきを

いにしへのとだにいへば。いとおほどかに。事少なきものと思ふが。いかでさは有りなん。それはかの太古の世をいふにや。むかしべは今の世よりもひらけぬれば。今の樂もていふとも。横笛の手のしげきも。箏のことに左手用ひしも。かの蘇香のつくりざまのたくみなるなど。いかでおほどかなるふりとはいはん。さるを。樂のまひなんども。手を少くしておもしろからぬさまにしなし。樂もこゝらのは。いと長く引きのばして。人の睡生ずる樣にするを。高き事と心うるぞ淺ましき。雅樂とても。人の心をたのしましむるものなるを。睡生ずるを本意とせんや。ことにいまの樂は。房中又は妓樂なるを。おもしろからぬさまになすぞ。本意うしなへりともいふべき。樂のことは殊にあやまりのいとおほきをも。しるひとなきぞうたてきと。人の口まねびにや。人のいひし

人の心のひらけぬるにしたがひて。ならはしはおのづからかはりぬべし。百とせもへなば。いかにかは

いとうとく侍りといへば。さるこそまことの道まねぶ人なりけれど。ほめものするものもありとや。もとより道まねぶものは。五のつね。五のみちよりして。人ををさめ。己ををさむる道まねぶより外のことはなし。されば世のことにさとく。今のあたりのみかは。千とせの前つ世のこと。みぬもろこしのむかしいまのさまより。さかりおとろふるきざし。人の心のうへより。仕ふる道のくさ〲に至るまでも。明らかなるをこそ。みちまねぶ人とはいふべけれ。この世の事におろそかにては。いかで道まねぶ人とはいふべからんと

ひでりつゞくころは。こちかぜふきて。雲の出でたるにぞ。さらばけふこそふりいづらめとみるに。そのかせもいつしかやみて。雲もむら〲とたえまがちになれば。はや日のかげのきらめき出でぬ。また雨のふりつゞく比は。松ふくかせのおと。いといさぎよくて。はやはれなんと見れば。雲まもはやむら〲青く。入り日のかたは。こちたきまで紅ふかくみゆるにぞ。このよの月よ明らけくこそと思ふに。月出づるころは。雲出でゝまた玉水の音するものぞかし。代々の亂れをさまるきはも。わが心のうへも。この如きものとかや

あるくすしが。君はかならずこん秋の項。何ぞのいたづき病にかゝり給はんといふを。むづかり立腹て。いかでさることあらんと。秋まではいひぬ。つひにいたづきにかゝりてければ。いひあてしくすしにあはんも。おもてぶせなりとて。よそのくすしまねぎてけり。さま〲藥あたへたるがしるしもみえず。初のほどはうちのそこねしなるべしとて。うちとゝのふる藥なりければ。むねのあたりいよ〲くるしく。ものもみいれねば。くすしも心得て。そのくすりはやめつ。こたびは汗にとらんとしても。しるしなく。くださんとすれば。はらのみいたみて。いよ〲くるし。せんかたなくて。こゝろみにふとてうぜし藥。そのやまひにあたりやしけん。のみくだすより。むねのうちこゝちよく。終に其やまひ愈えにけり。いのちたすけしひとなりとて。家傾けてもむくいまほしく思ひしとなり。さるにこん秋は。かならずこのやまひ出づべし。このくすり今よりのみ給へといふを。いまひとりのをのこ。いかでさあらん。

そらにまかすとはいはじ。ものくふものにてもあれ。すべてみをやしなふ道をつくし。そのほどを愼みて後。いきしにをそらにまかすべきを。やしなひのことはこゝろとせず。たゞおのがはりすることにのみ隨ひて。いきしにをそらにまかすといふもありぬべし

雪のふりたるに。こずたるゝもくちをしければ。かのたかねの雪はといひたれば。何となう打ちゑみて。また立ちもやらず。さすがに捨てもおかで。わらべなんどに。あれかゝげ給へよなど。ほのかにいひしこそよけれ。いとも女はかゝるべしとぞ

竹をこのみめづる。菊もはちすも。ことわりあることにはあらぬを。さま〴〵のことわりいひて。ざえおふぞうるさき。つくもむしきらふも。げぢ〳〵きらふも。何のことわりあるものにはあらずなん

親にけう孝するは。このみを人となし給へる御惠。山よりも高く海よりもふかし。またそのおやもわれも子等も。かくながらふは。君の御惠なりといふは。あさかりけり。そのむくいにて。孝し忠するものにはあらず。人しらぬ深山の梅の花とてもかほらざるはなく。みたにの鶯とてなかざるはなし。子となりてはかならずかく。臣となりてはかくあるべき道は。もとより人にそなはりたることにて。鳥獸も親をしたひ。子をはぐゝみ。宛牛のことさへ語りつぐものを

霜夜をわびて。水鳥のなくを。物しりがほなる人が。水鳥のさへづるよといひしを。おなじやうなる人うちきゝて。鶯の囀るなどゝはきけど。水鳥のといふは。いと物ごとにあらたまり。めづらしきことをききしかなといふ。初の人うそぶきながら。はし姫の卷に。水鳥のはねうちかはして。おのがじゝさへづる聲とあるものをと。心得がほにいひたるもわろし。もとめてめづらしきことといふべきものかは。そばきりをこのみ給ふやといふべきを。かろうはいかにといへば。からきものこそ好み侍れといひしを。とひし人わらひき。しるべき人にはいひもしなん。人をもじらで。かやうの事いふは。くらき心より出づるなりと。人のいひし

かの人は雪ほたるあつめし窓に年をつみて。ふみゝる道に心をつくし侍るなり。されば世の中の事には。

出で來たるが。ちかよるほどおやにくに。月のかたより雲のうちへかき入るやうにみゆ。こはいかにせんとゑばし打ちまもるに。雲のはしつかた。おかうみゆるにぞ。出ではなれたらば。はやかゝらんくまはあらじと思ふに。いつのまにか。また白雲の月まちかほにたなびきてみゆれば。むね打ちつぶれてうちみるに。初のくもより出たる光いとあたらしうみえて。ことにさやけし。かのまちゐたる雲にむかへば。又はせ入るもいとつらし。月のいりてみれば。雲もさすがにこちたからず。こゝかしこに。それとおもかげみゆるにぞ。ひたすらにうらみはてゞみゐたるうちに。衣手もしめり行きて。露もむしのねもさかりなりけり。つく／＼とむかひ居たれば。心のはてなきやうにこそおぼえしか

たゞうどはいさり船といへば。おなじやうにつくるものと思ふべけれど。こはさつくりても。おのづからよくとゝのひて出で來るもあり。こゝはよくかしこはあしきもあり。打ちみてはいかにもよきが。のりてみればたがふもありて。一つもおなじからぬものぞかし。波かぜしのぐと思へば。行くことにぶきもあり。行くことときものはよわきもあり。いづれいさゝかもふしなきはなきものなり。のりこゝろみて。それを明らかにしり得てこそ。遠くへもはせつべけれ。むかしある人がひとをみて。いかにもよきひとなり。いさゝかもあしきところなしと思はゞ。まづおもひかへして。聖はしらず。かしこき人とても。いづこもくまなくよき人はなきものなるを。さみゆるは。わが心のくらめるなり。まづその人のあしきところ／＼。よくしりてのゝちに。あげ用ひ給へと。何がしがいひしと聞きしが。翁が船にのるも。いまいふごとして。あしき處々をしれゝば。あしきかたへは波かぜうけず。よわきには波風ある日。沖をのらであらしかば。つひに危きをもまぬかれき

久かたのそらにまかせて。わがさゝやかなる才を用ひざれとはいへど。そらにまかするに深き心あるべし。星の光みても。はや沖はあらき風吹きいでつ。このあたりへは。あすのひるつかたふきくべしといふ事もしれゝば。心してのるを。空にまかすとこそはいはめ。沖の風ふくもふかぬもとはずして。いまこゝの波平らかなれば。はやこぎ出でゝ行くを。

花月草紙

松平樂翁 著

ひさしう浦わの里にすめる翁ありけり。めかりしほやくいとまには。えうなきもくづかいあつめて。しほやの窓のとにかいはさみ置きたるを。世のえせものゝとりてかへりにけり。またのとし。行きてみれば。こりずまにかいはさみ置きたり。かく白なみのよる〳〵ごとにかずもつみしかば。つひに。この巻巻となりぬとぞ。このもくずのはしつかたに。月と花とのことなが〳〵しくかいたれば。それをもて名たてしは。かのえせものゝせしことなりとぞ。あまのさへづりとこそいはまほしけれど。里の子はいひき

なしときけばありといはまほしく。あしきといふをばよきと事かへていはんこそ。いとねぢけたるとなれ。さくらてふ花は。わが國のものなるを。からくににもありとて。さま〴〵ためしなどひきつくれど。櫻かいたるもろこしの畫もなく。かなへりとおもふからうたもなければ。なしとこそいふべけれ。いでや櫻といはでしも。花とだにいへば。こと木にはまぎれぬものを。ほの〴〵とあけ行く山ぎは。雲かゆきかとばかりさきみちたるも。かすみこめたるゆふまぐれ。花のけはひもおぼろにみえて。こゝにのみくれのこすけしきなどいふは淺かりけり。さいてうてなのゝびやかなれば。近劣りするなどいふは。かのことかへてざえおふ心にいふことなりかし。風にちりかふも。雨にぬるゝも。遠山にみるも。軒ばにむかふも。明ぼのも夕ぐれも。露のひるまもめかるるときしなきを。ことにわが國ぶりの姿にて。枝もすなほに花のかたちもゆたけく。匂ひさへもこちたからぬも。おやしきまでにこそおぼゆるものなれ。さるをいづこにもありといふはさらなり。曙夕ぐれなどゝおもしろからんやうにことばそふるは。いまだ深くそめし心にはあらざりけり。すべてことばもていひ盡くさんと思ふは。いとあさき心かな

月のさしのぼるころ。明ぼのゝ空おぼえて。横雲のたなびきたるに。やゝ匂ひそめたれど。遠山の梢にいざよふて姿もみえず。からうじてさしのぼりけり。梢のうさも晴れにけりと思へば。いつしか雲の一つ

花月草紙目錄終

花月草紙目錄

し。いづれいといたうふかき心こめたるものなれば。これなじたかねのけふりをも。あるはくもともみ。かすみともみるは。その人がらにもかはり行。無盡の草紙とやいふべきと。友垣のへだてなきまゝに志るしぬるなり

またあるひとのかき給ひしなり

花月草紙序終

花月草紙序

ひと日。一葉の船にのりて。とある浦わをこぎめぐりしに。渚近きしほやの烟の。ほそう立ちのぼりたれば。舟よりあがりてさしのぞきたるに。松のはしら。竹のあみ戸のおろそかなる窓に。さしはさめるものあり。とりてみれば。いたうたきしめたるみちのおくがみに。やごとなき人の手して。筆のまに〳〵はしりがい給ふさま。よの常ならず。花によそへ。月になぞらへて。世のため人のため。ねもごろに教へしめされしおぢ〳〵。ことわりをつくし。心に味ふるほど。いたりふかきことと共のおほかれば。我も白波の名にや立つらんと。うしろめたけれど。そとふところにしてかへらんとせしに。うちよりあてなる翁立ち出で給ひ。手を引きて座にいざなひ。霞をすひ。露をしたむて。くみかはしつゝ。外面のかたを眺めやるに。園には。名もしらぬ草木ども咲きみだれ。池には色々の水鳥のあそべるふぜい。うき世の外のこゝちすれば。こは仙境にや入りけんと。おぼめくあまり。いかなる所にかととふに。翁わらひて。こゝは名におふ蓬瀛の洲にして。ちりにまじはる人の。長くとゞまる所にあらず。はやかへりね〳〵といひすてゝ。袖をはらひて入り給ひぬ。さては夢にやあるらん。現にやあらんと。しばしためらひたるに。ぬるともなく。さむるともなく。ひとりふすまをかづきて。わが家にあり。いぶかしさのまゝ。こゝかし見わたしたれば。枕がみにふみの巻々あり。やごとなき手して花月草紙と題せり。よくみれば。さきにもてかへらんとせしに露たがふことなし。うれしさかぎりなく。何かしが老いず。しなずの藥えたりけんもかくやと。とみにくりかへしぬるほど。かたはらより。はや明けはて侍りぬとの大聲なるに。おどろきていそぎ起き出でつゝ。つねのごとさうぞきたてゝ。日かげのちりにまじらひぬるありさま。

仙びとの目にはいかにみるらん　この月の桂男のかき給ひきとや

このふみを。あまのさへづりとは。作者のひげのことばなるべし。本の雫。ふじのけぶりなどよびたる人もありとなん。げにふじの烟は。盡くることなき心をふくめるにや。はたこの巻々の末の章は。ことに心こめたるものとみれば。もとの雫ともよびけら

左にもあらず。向ひたる岡のこなたに一むらの籔ありて。他には人家なし。狸どもそこにあつまりゐて打つなり。住持云。われこの寺に居ること。およそ九年になりぬ。三とせ過ぎぬる秋よりして。人々この音を聞きつけぬ。予もいぶかりて。そのところを尋ね見しに。只狸が栖める穴のみありといへり。あくる日行きて見侍るに。はたして人家は絶えてなき地なりき。太平の民は鼓腹すなど古語にもいへば。腹つゞみはめでたきためしにや

雲萍雜志終

とよみてつかはしけるとぞ。

弓もて立てる案山子なりけり

神佛の靈驗を得んとおもふには。己が心を正しうして。その正しき心より念ぜざれば感應ある事なし。おのれが信を神佛に通ずるには。命をもすつるほどの心なければ感じ應ぜざるなり。人とまじはりて。人を賴むも。これと同じかるべし。小町能因が雨乞も。歌を詠ぜしのみにては。天地も感じ應ずべからず。天地もうごかし。鬼神をもあはれとおもはする歌にても。その讃歎してよむ者の。誠心なければ么るしあるべからず

○一言寺の庫裏を働ける老婆あり。年七十になんなんとして。多辨いはんかたなく。あけくれ人の噂をいひ。無益のせひをのゝしること。いとかしましくうるさければ。ある人。諷諫のこゝろにて云ひけるは。多辨長舌なるものは。その意氣をむなしく勞して。嗒焉呼吸を養はざれば。必ともに短命なりと物がたりければ。それより後は。かの老婆なほ長生やゑたかりけん。物いはんとしては止みぬるさま。いとをかしかりしとぞ。さばかり生きのびたる老婆の。猶いつまでか世にあらんとての心づかひ。欲にかぎりのあらざるよと。物がたりせし人ありし

○暴風家を倒し。洪水人を溺らし。地震て崩れ。雷れちてうたれ死するなど。世にこれらのたぐひを。なべて天災といへども。昊天なんぞ人に災するの事わりあらんや。此わざはひは人みなわれより招くとしるべし。暴風の氣。洪水のまゝ出づる。地震で山くづれ。雷に擊たるゝ。大かたは天地不正の氣。滯るところある時は。そのふさぎたるを催促の順環にして。不思議なることにあらず。人たま〳〵これが爲に橫死を得るものは。多くは凶惡無賴の徒にあり。そは天地不正の氣。人の惡心怒氣に應ずるなり。所謂同氣あひもとめ。同聲相應ずるのことわりと么るべし

○狐は奸智ありて。疑ひ多き故に。かれがよこしまにひがめる性を忌みて。人愛せず。狸は癡鈍にして。暗愚なれば。人も憎まず。予筑紫にまかりし頃。ある寺にやどりける夜。あるじの僧のあれ聞きたまへ。今宵は月のさやけきに。狸どものあつまりて。はらつゞみをうつなりといふに。耳をすませば。その音はるかに響けり。砧のおとにやあらんとうたがへば。

に。左あらば今より我徒弟となりて。世をのどかにくらし。生涯無事に過ぐる志はなきか。もし二人ともその志あらば。今より直に伴ひて。法をつたへて。一庵の留守居ともなして得さすべし。よく〳〵思案してこたがふべしとて。持ちたる路資を取り出だし。二人に分ち與ふれば。賊また顔と顔とを見合せ。土に掌をつきて。左もなし給はらば。けふよりして頓に志を改め。御弟子となりて。これまでの罪障を亡し侍りたしとて。こがねをば手にだに觸れずして。頭をさげてゐたりしが。入道は大によろこび。懐よりかみそり取り出でゝ。二人の盗賊が髻をなぎ捨て。法師となして。武藏野なる草庵にともなひつれ。一人を善心坊とよび。一人を法心坊と名づけ。武野念佛の弘通をなして。めでたき往生を遂げたりとぞ。入道徒弟十餘人のうち。この二人その始めなりしとかや。黒谷夜話に見えたり

○犬猫をふかく愛するものは。大かた人には情愛のうすきものなり。貴人はわきまへあれば。さやうのことはあらざれども。下司には多かり。飼ふものに不便を加ふるほどならば。人にも情はふかゝるべき理なるを。かへりて左もなきは。心底世にもいとうたてし。東海道を通りける頃。予が宿りつる驛亭の妻は。狆を愛すること類ひなく。飲食ともに狆に口うつしゝてあたへ。他より食物などもらひたる時も。主人に聞えもせずして。まづ狆にあたへて。後に人にも食はせけり。主人も愚昧にて。かゝることを妻にも許せば。狆に對してものいふこと。あだかも人に對するにおなじ。これによりて。あたりの者。此妻に他名して。狆のかゝとぞよびける。その妻おのれが子なければ。甥を養子としつれども。狆となからひよろしからずとて。讒言をかまへて。甥を退けしとぞ。此甥おもふに。われを狆に見かへしとて。詫もせで。再び家にかへらず。人みなつたへ聞きて。さらに子となるべきものかつてなく。その家つひに絶えにけり。此妻養子を愛すること。狆のごとくせば。その家ながくさかえたらんを。愚夫愚婦の所爲邪路におもむく。かゝる類世にいと多かり

○鴨の長明に。守りを給はれと。ある人の乞ひける時

守りとはおのれもしらず小山田に

○予が書を教へたる曉山といふ者。遊歴せる折から。信濃に妻をもとめ。善光寺の邊に世帶し。煙草を商ふことを家業とせしが。得意の家にて。蕎麥の粉を掻きて馳走せらるゝに。好物なりとてしたゝかに食ひければ。給仕するもの。その大食に興じて。しひては出だすを。腹のふくるゝもいとはで食し。さて飽きぬることを詫びけれども。いさゝか耳にも入れずして。間をうかゞひては盛り出だしたるに。胸まで滿ちて腹には入らず。このうへは湯にても給はるべし。それにて送り食ふべきぞとて。給仕のものを退けたるあとにて。左りの袂へ。食ひたるさまして入れたりければ。給仕の者は。湯を汲み來るを取りぬるひまに。椀を持ち行き。こたびは山の如く盛りあげ。是限ぞとすゝむるに。止む事を得ずまた湯をもとむ。身はわらじにて腰かけ居たれば。給仕の來らざるまに。椽の下へ奥ふかく投げ入れ。食ひたる體にもてなさんとせしを。蕎麥掻の椀のそこにひたとつきゐたれば。おもはず椀をも椽の下へ投げ入れたれば。なか〳〵容易くいだすべき樣もなく。ありあふ杖などにて。かき搜し尋ねれども。さらに得ることなければ。事のよしあからさまにわびて歸りぬとぞ。物食ふにもほどのあるべく。しふるにも限りあるべし

○熊谷次郎入道して。關東へ下向せる折から。たゞ一人。近江路より美濃へ越ゆる山中にて。盜賊二人前後を支へて。路銀衣服をわたすべしとて。兩人刀をぬきつれ迫りにければ。入道笑ひながら。いと安き事なり。その方等も命をかけて。賊をわざとするは。身過の爲とおもはれたり。路銀衣服ともに遣すべし。さあれど。こゝに尋ぬることあり。聞きたるうへにてともかくもすべしといふに。賊もその詞のはげしきに猶豫して。いかなる事をか尋ぬるぞ。とくいへ聞かんといふまゝに。入道の申さるゝは。汝はたゞ欲のみに賊をなすか。又身を立つるところなくして。過ぎはひの成りがたくて。賊とはなりしか。このふたつの返答を聞かまほし。そのうへにて。とらするともとらせぬこも。わが心に任せんとあれば。賊等は互に顔見あはせつゝ。飲食だに自由ならば。いかでか人を害し。人の物を奪ふべき。まかせぬよりして。命に易へて。かゝる業をもするなりと云ふ

は家にもてなし。遊び日は他所へ行するなり。遊びは遊山戯塲はもとより。遊里といへども差別なく。主人が慰むほどのことは。奉公人にも慰ませ。私する者は怨いとまをつかはすが例なり。家法ははやく人を取り立て。分家せしめて。つとめて怠らざれば。家に身を損ずるのともがらなく。本家ます〳〵繁榮して。今なほ家業さかんなり。休翁いまだ隱居せざりし頃ほひ。用ありて京に出でゝ。何某の大納言にはじめてま見えまゐらせし時。用のことすみたる後に。くさ〴〵物がたりの序。大納言の仰せられけるは。その許和歌をよまるゝにやとありければ。左樣のこといまだ心がけ侍らずといへば。又仰せらるゝには。凡大家を守るもの。文の道に志し厚く。風流のおもひふかゝらざれば。よろづかたくなにして和らぎなし。修身。齊家の道は。和らぐうちに堅固を備へざれば。人なづきがたし。その人となりて。風雅の心絶えてなく。この國に生れて。歌の一首もよむ事を知らぬは。聲なき鳥を。蒔繪などしたる籠に飼ひたるにひとしうして。美々しく搆へたる家のあるじのかひもなしとあるに。休翁耻づる心を生じて。やがて大納言を師範とし。詠じたる和歌多かる中に。東武のかたへ下りしころ

秋といへば月も淋しきならはしを

たれかあかずの沼に見るらん

此歌。人の辛苦をたへ忍ぶの意を述べたり。ある時。古今和歌集の序に。貫之が康秀の歌を評して。商人のよき衣着たるにたとへしを見て。愕然とおどろき。わが身のうへをさとり。これよりして生涯。身には肌着といへども綿服をきて。絹を纏はず。それつゝしみしとぞ。家内の妻子はさらなり。奉公びとのすゑ〴〵までも。衣服の制を嚴にして。をごりなからしめたり。蒲團といへる古を思ひて。綾羅錦繡の類はいふまでもなく。よるの物など。すべて木綿のみにして。一家絹布を見ることとなし。この家に制禁の箇條あり

掟

一商人たる身分重ね着にても。絹の類を着すべからず。たとひ分家の者たりとも。掟に背くものは。身帯暖簾取りあげの上。同家業相成申間敷事

本家相續人誰

事あたはざるを。深く歎きければ。老爺わらひながらに。こゝに今二とせ辛抱したまへかし。われら働きてその借財をつくのひすまして。移轉させ申すべしと云ふ。院主心のうちに。何をかはいふとさみしおもへど。老人の詞なれば。たのむといひしばかりにて。きのふと過ぎ。けふとくらして。年月を送りけるが。此老爺それよりして。不毛の地には物を栽ゑ。また山林の下草を刈りては市に賣り。夜は繩なひ。筵を織り。あるは人の爲に雇はれて。晝夜寢食を忘るゝばかり働きければ。三とせがうちに。三百貫目の借財をすませ。院主を太秦に移轉させけり。院主移轉の時。かの老爺が働きの莫大なるを謝せんが爲に。伴ひゐて安居さすべしとすゝむれども。われらは。此山に八十年も住なれたれば。他へ行くの志なしとて。終にゆかずなりぬ。その後。院主多くの謝物を贈りたれども。少しも受けずして云ひけるは。院主は人を濟度するの役なり。物なければ教化しがたし。我等財を持ちたりとも。人の教化も出來ざる身に。不用の財はありて益なし。財の用は人にありて。不用の者に入らざる物なり。身を終るまで食料だにあらば。何をかその餘を求むべきとて。かくて又後住にも。いとねもごろにつかへしとぞ

○泉州堺の休翁は。茶道にくらからぬ人にて。古人の糟粕をなめざるものなり。予とともに洛にありけるころ。茶具等は皆自が好むところをあつらへて。諸家の法則にかゝはらず。もと豪富の家をおこしゝはじめを聞くに。休翁手して料理することを好み。みづから爼板に直り。料理して。酒肴をとゝのひ。見せにて商ひをはたらく奉公人を客として。くさぐさの物をもてなし。扱いひわたしけるやうは。吾今そのもと達の働をもて。家業日にまし繁昌せり。我等一人の所爲にあらず。衆人ほねをりて。我に忠を盡し給はるがゆゑなり。けふの酒食は。謝禮の寸志にして。格別の珍味にはあらねど。こゝろよく過さるべし。かゝれば今日一日は。予が客にして。奉公人にあらねば。大かたの座興はゆるすべし。たゞ我まゝに醉を盡して。唄ふべくはた舞ふべしとて。家内はその日他所行きして。奉公人の遠慮をさけぬ。この休翁が取りたてたる分家。諸國に多し。今猶朔日。十五日。廿八日の三日を饗應の日とす。その日

牛を引きたる童の。唄などうたひ通りければ。長年はあと追ひ行きて。わらはを呼びかけ。云ひけるは。我をその牛にのせて。川端まで行けかしといふに。童うけがひ答ふるやうは。御身を乗せて行くべきが。賃には何をかたまはるぞといへば。長年はわが家をかへり見て。門に生ひたる松を指さして。何れの樹なりとも。その方が望に任すべし。とく〳〵やれといふに。童よろこびて。長年を川ばたまで乗せ行きたり。その後三とせがほどをへて。ひとりの男童を伴ひ。長年が家に來りて。長年が父にむかひ。三とせ以前のやくそくを物がたりければ。長年幼心の戯なれども。かの童はこれを誠と心得。牛にのせたる賃をはたるに。いかにいひ解きても肯せず。いかゞせんといへば。長年が父これを聞くより。さもありぬべし。約束をせしにたがひなくば。切らせて遣はすべしとて。童に望ませ。門前なる大樹の松を。杣に命じて切らせ。牛飼にとらせけり。里人はこれをいひつたへ。名和が約束の松と呼びて。今にはなし傳へたり

○菅野藤四郎といへる人。料理の道にもくはしく。もと淡路の產なり。ある國司につかへて。後流浪せしころ。予が許に來りて。二とせばかりを送れるに。ある時。町家に住居するとて。さま〴〵の物もとむる折から。先持佛を得んとて。日蓮の木像ありけるを見て價をきゝ。また法然の畫像のあるを見て價を聞けるを。伴ひたる人いぶかりて。その許は何宗にておはするぞと問へば。菅野笑ひて。我等何宗と定まりたる事もなし。依りてこの二祖の中にて。價の下直なるを買ひて。その方の宗旨とならんとおもへりといへり。物にかゝはらざるおもしろき志なり

○比叡の山なる飯室谷の松禪院に。ひとりの老爺あり。坂本の產にて。農夫の子なりけるが。父母にれくれて。十四歲の時よりこの寺に住居し。今年九十六歲なりとて。予其者にあへり。せい高く。耳目健にして。齒牙かけたる所なく。白髮にして頰骨あれ。いとたくましくして力あり。他へいでゝ他の物を食はず。京へいづるには。飯を握りて腰につけ。尋常の人の爲る二日の用を。ひと日に足してもどりければ。寺にはなくてかなはざる人と。いたはりて仕ひけるに。院主三百貫目の借財ありて。移轉する

もひしゆゑなり。已に八拾両といふ黄金を持ち行きなば。さし當りて困りぬることもあるまじければ。とかくする中いづこへか身を寄すべし。此事只ひそかにして。尋ぬることあるべからずとて。後は詞にもいださずなりぬ

○むかしある國の守は。短慮いはんかたなく。獵に出でたる折からに。暴風砂を吹きて口に入れども。うがひだにせずして。食物に砂ありとて給仕の輩をしりぞけなどし。只諂ひ媚ぬる族を容れて。忠ある臣下を損ずること數多なりしが。ある時いかにして心やつかざりけん。鯉のあつ物の中に。釣ばりありけるを。取り出だして膳の上に載せおき申されけるは。かゝる麁略の調理いたす者は。みないとまを遣すべし。庖丁の者には。切腹申しつくべきなりとありければ。料理せしものは切られにけりとぞ。飲食のために人を失ふこと。心あるべきことなるべし。梁の昭明太子は。飯の中に蠅の死したるがありしを。箸もて取り出で。給仕の輩に見せじと。膳部のかげに隱されしとぞ。いとありがたきことゞもなり

○予が閑窓のもとに。こつ〳〵と聞ゆる音終日やまず。いかなるものゝひゞきにかと。まどを推してこれを伺ふに。老いさらぼひし翁の。眼がねをかけて。筵の上に石臼の目を切りて居たり。予翁に問ふ。石臼の目を切ること。その數日々に幾ばくぞ。翁こたへて云ふ。切る日もあり。切らざる日もありといふ。又問ふ。老翁齢いくばくぞや。こたへて。今年七十一なり。また問ふ。子孫ありや。答へて云ふ。娘あり。はやく婿をむかへて。孫三人あり。予云く。已に娘あり婿あらば。老翁かゝる業はせずともありなん。翁の云。家に六人の過ぎはひするに。婿一人の働にして。他に資くるの輩なし。われ臼の目を切りたりとも。活計を補ふべきの資力に足らずといへども。欠伸のみに徒に光陰を送らんよりは。せめては鼻紙の料をもたすけばやと。かゝるあぶなき業をもしつると笑ひぬ。人の親の子をおもふめぐみ。高きも賤しきも。異なることなき。いとありがたきものとは思ひぬ

○名和又太郎長年は。その父嚴にして。教訓の届きたる人なり。おさな遊びのまじはりも。兒らに契約せしことは。正しく守りて忘るゝことなく。ある時。

んなし。今より師弟の約を辭ししりぞき申すべしと。詞をそろへて述べければ。師も業にさゝはりあれば。是非にれよばず。さらば的人を打つべしとて。そのことを廳に訴へ出でゝ。見使を請ひて。門人あまた引きつれ。野外に至りて。的人を打たんといふに。的人をぞり出でゝ。こゝをこそ打ち給へと敲くに。師は鐵砲に玉をこめ。火ぶたを切りて衣類を打てば。的人煙りの中に斃れたり。門弟驚き屈伏して。師が砲術の妙を得たるを貴び。いかなる法にて打ちとめられしにか。奥義を許し給はれかしと。みな〳〵しひて乞ひぬる時。この術なんぞ奥義あるべき。かの的人は狐を役するなり。野干食の爲にかれに隨ひ。身をその衣服の中に遁れて。形容を迷惑の人に現はす。的人を打つものは虚空を打つなり。予はその遁れし衣服を打てば。野干の死骸もあるべきなりといはれたりしが。その翌日はたして人の噂に。老狐の丸に當りて死したるが。難波の里にありけるとぞ。師は能道をおこなはれて。邪魔のありかを知れる達人といふべし

○遠江國相良に。平田寺といふ精舍あり。いつのころの住持にか。いと慈悲ふかき人にして。多くの徒弟を教育する中に。黒法師と異名を取りし惡僧あり。その性人に諂ふことなく。よろづわがまゝにふるまひけれども。住持は嚴しく戒むる事もせず。年だに經なば。己より耻ぢて。その行狀は直るべしとて。すなほなる者を抑りてきびしくして。惡僧をばさほどにもせざりければ。人々の云ひけるは。愛する弟子なるが故に。かばかりの人にも依怙の心あるべしなどいひしらふうち。ある時惡僧の寺を出奔したり。住持はおどろきつゝ。人をしてこゝかしこ求めしむれども。行くへの知れざりければ。人々あつまり。失せにしものもやあると穿鑿するに。をりから四五日前かた。賴母子講會に取りたる黃金八十兩を。住持が手ばこに入れおけるが。見えざりければ。みな〳〵打ちおどろき。扨こそ黒法師がしわざなりとて。大勢手わけして行方を尋ねんとするに。住持とゞめて云ひけるは。彼もし金を持ちて行きたらんには。最はや尋ぬるに及ばず。われさきに人をして求めしむるは。欠け落して旅へ出でなば さこそ不自由なるらめと。路資をもあたへつかはしたくとお

ありて。飼はるゝ家にあやしきを吠へ。羊に遜讓の心ありて。兄弟乳房の順に違はず。鴉は母鳥に反哺し。鳩に三枝の禮あり。鶯の時鳥をやしなひ。螟蛉の裸羸を子とするの類。人常に知るところなり。およそ一家の繁榮は。かしこき主人ありといふとも。忠ある人を得ざれば難く。忠を有てる奉公人も。賢き主を得ざればかたし。主從互に心をうかゞひ。白眼競してゐたるもの。繁昌したる例なし。そも〳〵天の命をうけて。世を治め給へる方は。晝夜月日の如く。萬民の爲に心勞しばしもいとまなし。その他の諸民はあけくれ名利に耽り走りて。國を治むるつとめもなく。己が眷屬をやしなふに。身の勝手のみをあがきて。事とするは飲食と淫欲のみなり。その心犬猫などゝ同じかるべし。人を萬物の靈とするは。主從に仁忠備はり。親子に慈孝をたもち。兄弟愛敬を深うして。しかして後に。人の人たる尊稱なり。かくてぞ一切有情の物の司となりて。畜類と異なる天下の靈なるべし。つら〳〵おもふに。その萬物の靈たる人。古より世に念を殘すに。惡事は種々の怨靈多く。善事に至德の念をのこせる例いとまれなり。口をしくはづかしく。又淺ましきことにあらずや

○難波の野外に。的人といふ野業仕あり。裸にて腹をさし出だし。この處をねらひ打てと。自わが腹に指さし言り。丸を込みたる鐵砲をうたせて。黃金をもてかけろくとしつるに。衆人なぐさみにこれを打てども。飛鳥の如く身をかはし丸を避くるに。あたるもの絕えてなかりしかば。そのころ世上に噂いと高かり。さて砲術の師範する翁。何某といふあり。その術のすぐれたるをもて。門弟百有餘人あり。ある日門人來り集りて。何くれと物がたりのちなみに。的人が術を感じ。かゝるあやしきものを打ち得ざるは。我らが藝のかきんなりとて。師に請ひて。かれをうちて給はれといふに。師は此事を聞くよりも。頭をふりて云ひけるは。正統の火術を傳へ敎ふるものゝ。さやうの野業仕を打ちころすなどゝ云ふことは。予が敎導の法にそむけり。無益の殺生なれば捨ておくべしとて。門人を諭せども。おの〳〵聊もうけ引かず。いかに師の仰せらるゝことゝても。世にもしさる業を爲す輩多くあらば。火術は學びてせ

を絶つべしといきどほれば。この後。妻もいはずなりぬといへるはなしを。ある人來りて予に告げゝれば。予はその無を無として。返さるゝことの能はざるを悔れば。告げたる人また彼處にいたりて。予がいふことをその人にかたるに。その人こたへて云ひけるは。人は不實をなしたりとて。その交りを絶するは。知己親友といふにはあらず。欺くも不實も。その折からの是非なきにして。世に始めより詐僞をかまへて。人に交はる輩はなし。そのいつはるとあざむくとを許さゞれば。知己親友とは云ふべからずとて。予が詞にこたへけるよし。そのことをきゝてよりも。借りたる黄金の緘も解かねば。封じたるままをその人に返して。予はその許を試しぞとて。ますます厚く交はりぬ

○憐愍ある主人に忠を盡し。慈悲ある親に孝をいたすは。誰も爲すべき事といへども。めでしるすべき事にこそ。愍みなき主人。慈悲なき父母といへるもの。世にありとしも覺えねど。さはあれ主人もし。下々の心をおもひやるほどのなさけもなく。養父。繼母となる人に。産の子をそだつる慈悲なきひとびとも。たえてなきにしもあらざるべし。かゝるひとの心には。奉公人は。威をもて自在に召しつかふべきものと心得るは。わが身をつめりしことなければ。人の痛さを辨へざる。世事に目のなき獨合點。手前ぎはめの不人情にして。研にかけざる鈍刀の如く。磨かでおける鏡にひとしく。慳貪はにぶきよりいで。邪見はくもるよりおこる。これらの人五常は名のみ聞き知れども。主從と約するはいかなる義。親子と契るはいかなる理。夫婦と緣むはいかなる誼。朋友と交はるはいかなる道といふことを身にとり。つとめておこなはざれば。心にも感じ得べきにあらず。假令不仁の主といふとも。その因あさからずして。君と憑み。慈悲なき養父。邪見の繼母たりとも。契り深うして子となれば。不仁の君は臣が忠を盡すのよき的にして。無慈悲の親は子が孝行の目當なり。かくて主の爲としあらば。こらへがたきもあくまでこらへ。親の爲としある事は。しのびがたきもいよいよ忍ばゞ。その他の堪忍辛抱は。ものゝ數にもあらざるべきを。この行ひなき輩は。人の形は受けながら。犬羊鳥虫にはおとるべし。犬は夜を守るの性

つるれやのこゝろも。かくやとばかりれもひしらる。二葉よりいや葉生ひいで。いと細やかなる蔓の垣はに取りつくさまは。いはけなき児の。ものをたのみてたちそむるに似たり。蔓やゝこえ。葉いよゝしげりて。この蔓かのつるにそひ。彼つるこの蔓を巻きて。あらそふがごとく。競ふが如きは。路にまどへるものを案内するさまあり。あるは登らんとするものゝ手をとりて引きあぐるさまなど。繪にも巧めるものをや。はなはその日〳〵に色かへて。おのがじゝに染めなして。夙に起くるの勤をすゝむるに異ならず。そよしのゝめのそら明け行くほど。露を含みたるが。そよ吹く風にもまれて。れもげにおきあへず。ふりこぼせば。こなたの花の。その露をうけゝ。雫も漏らさゞる。すべて君臣相いつくしみ。父子相あはれみ。夫婦相むつび。兄弟相たすけ。朋友相したしむるにひとし。人の世にあるもこの花の如く。その日〳〵をいとなみなば。さかりもいとながくひさしからんと。まだきに起きいで。しのゝめの曙をなぐさみ侍りぬ

○酒数献にいたるときは味なく。肴数種におよぶときは美みなく。煙草数ふくに及ぶときは。にがみを生じ。茶数碗におよぶときは。香ばしからず

乏しかりし時を忘れて食好み
　このみの多き秋のやま猿

○予が江戸にくだるころ。親しく交はる友ありて。雞黍の約を結ばんことをもとむれば諾して。後にその志しを見ばやと。ある時食客五人を養ふに。賄の事薄ければ。一人に黄金五両をあてゝ。二十五両貸し給はれと。その人に乞ひければ。いと安きことなりとて。みづから持ちきて貸しけるに。此歳の末の債逼れば。又二十五両貸せよといふに。先に貸したることをもいはで。これびやもて來り貸しにけり。そのまゝ三とせを過ぎつれども。こがねのことは少しもいはで。前にかはれる心もなく。いよ〳〵親しみ交はりけるに。その人はからず禍ありて。多くのこがね入ることあれども。少しも色に出ださゞりけるが。その妻夫に云ひけるは。五十両のこがねをかりて。七とせ過ぐるに返さゞるは。欺き奪ふ心ぞといふに。否とよ。彼人予をあざむく心なし。乏しきがゆゑ返さゞるなり。刎頸の交情は。婦女子の知れるところにあらず。ふたゝび此事をいはゞ。夫婦の縁

しの畫をのこしまゐらすべしとて。心がまへのみにて。又四五日ほどふるに。住持は何をゑがくと見たくて待てども。絶えて筆をとらず。ある夜小坊主の。住持が居間に夜ふけてきたり。ひそかに申すやう。かしこに行き給ひて。そと覗きて畫師のありさまを見給へとさゝやきけるに。やがて小坊主にいざなはれて。畫師が居間をうかゞふに。明り障子の腰板に身をよせて。さま〴〵の姿をかへつゝ。寢起するありさまを見るより。小坊主を引きよせ。こよかしのぞくべがらず。はやく臥せよとて。その身も寢間に入りたり。あくれば早く畫師まだきに起きいで。一間なる障子にゑがくを見れば。みな臥たる鶴なり。畫勢不凡にして。丹青の妙いふべからず。さあるに又の夜はいかにとうかゞふに。前のごとく夜もすがら寢ずして。あけなばかくや畫かん。とやせんかくやあらましなど。獨りつぶやきつゝして臥しぬれば。住持も去らぬ顏にて過しゝが。十日あまりにして。その鶴れよそ廿四五羽をゑがけり。またも夜ふけて覗き見るに。これびは肘をはり足をのべ。手を口にあてつゝ。鶴のふしたるさまを見て。臥しけるに。夜あけてかの畫師がもとに住持來りて。けふゑがき給へる鶴の姿は。かやうにやそめぬらんと。よべ覗き見たる姿のさましてみせければ。打ちおどろき。禪師にはわがゑがゝんとおもひかまへし心を。はやくも悟り給ふはいかに。知り給へるにかと問ふに。いやとよ昨夜そのもとのやうすを。そとうかゞひて知りたりといへば。畫師それよりして。二枚はゑがゝずして。杉戶の畫に。檜木一樹をゑがきて立ちぬるとぞ。この檜木をゑがきし後。東國へ下向の折から。東海道箱根の山中にて。檜の木の枝の心にかなひたるがありければ。東國へは下らずして。ふたゝび泉州一國寺へ立ち越えしかば。住持見て大におどろき。東國へ行き給ふと聞きしに。又もや來られしはいかなることにかといふに。さきに畫がきし檜の木の枝。ひと枝足らぬところあり。箱根にてその意を得たれば。わざ〳〵立ちもどりたりとて。一枝をかきそへ。いとまごひしていで去りぬとぞ。畫に魂を入るゝといへるは。かゝるたぐひとおもひぬといへば。ある人も感じてかへりぬ

○朝がほを栽ゑたる日より芽ざすを待つは。子を育

涯人の果報の身にそなはる。雲泥の相違はあれども。米を作る農夫米を食せず。絹を織る蠶婦絹を着ず。耕牛宿食なく。倉鼠餘粮あり。萬事分は己に定るといへども。各衣食のためにおのづからいぞがはし

○風情はこなたよりむかへる物か。將むかふより見するか。さらばむかふにありて。我方になしとおもへば。われにありてまたむかふになし

　ながめやる雪の山路の朝ぼらけ
　　何とゐをぬる一家のぬし

○月見にいづれば。われに隨うて來るかけ法師あり。汝はわが影なるか。人のかげなるかと問へば。返したる歌とて

　我かげをわれぞと思ふ世の人に
　　ものいふ口はもたぬ影法師

○ある人予がもとに來りて。繪に魂をいるゝと申すことは。いかやうなることをして書き侍れば。魂は入り候ことぞと問ふ。予こたへて云。すべて繪にはかぎらず。何ごとにても實心をこめてだに致さば。たましひの入らずといふ物あるべからず。他のことはいざしらず。繪に魂の入りたるとおもふは。諸國にて種々名書も多かる中に。我見し泉州左海に一國寺と云ふ精舍あり。この寺は千の利休もしばらく居られし時。物好きを盡して。庭園座しき五間ほどもあり。一間には檜の樹一本をゑがけり。一間には臥したる鶴二十五羽ばかりをゑがきてあり。いづれも彩色ありて。古法眼元信の筆といひ傳へたり。そのかみこの繪をかけたる畵師。この寺に寓居すること三年ばかりの中に。何ひとつ書きたることなく。碁をこのみて。只それのみ日毎の樂みとして。あ に
こゝかしこ遊びあるくに。はやく三とせを經たり。一たびだに筆をとりしこともなきは。いかにも心得ざる者かなとおもひて。あるとき住持の申されけるは。その許。畫をもて一家をなせりといひながら。筆を取りたることもなく。圍碁にのみ年月を過ぐさるゝはいかに。我衣食の費をいとふにはあらねど。何處へなりともあそび給へ。愚老も所用ありて。京へのぼり。ことによりては一年も在京せんもはかりがたしといふに。彼畫師きゝて。それこそいと名殘をしきことに候へ。さあらば年來の恩謝に。何か少

○遊女町をくつわといふは。文字に亡八と書けり。所謂。孝。悌。忠。信。禮。義。廉恥の道を亡ふよりの名なりと云ふ説あり。されども遊女町たりとて。中には孝悌のためにうられて。年たけては主人によくつかへ。忠を盡してその家を起させ。信を以てなさけある客とかたらひてふたつの心を抱かず。慈悲を推して行儀をみださゞる時もなきにあらざれば。何ぞ亡八といはんや。實は嘘の奥にあり。うかれ女といへども。人情はかはるべきものかは。こや小夜衣の重ねぎをいましめつるための設なれば。あながち孝悌忠信なしとはいふべからず

○髮かたちの風俗はさらにもいはず。衣服調度に至るまで。時々の流行もしばしのうちにして。いさゝかのたがひはあれど。又もとのさまにかへれり。されば先へも出でやすく。あとへも戻りやすき中ほどに居るべし。煙草といふもの。むかし南蠻より種を傳へて。我朝に流行すること。後一たび絶えてなかりしを。ふたゝび流行して都鄙ともに翫ぶことなり。火の過ちあるをもて。停止となりたれども。人情の好みやめがたくてや。今は貴人も召さるゝことはなりぬ。その頃のことにやありけん。洛に落書あり

止めたきは公家のあし輕長刀
法師のたばこ元伯の醫者

○予がいとけなき時までは。忍び提灯といふものありて。貴人の私用に。しのびて夜行などせらるゝ折などは。提灯に替りたる紋をしるしてともせしが。そのこと流布して。誰も／＼かはり紋をつけざる者なし。これはもと人にその人としらるまじき爲の用意なりとぞ。されば公卿武家に限るべし。旗に紋を染め。幕に紋をつくるは。誰某と知らすためなり。農人。町家までも今は紋ありて。定紋のあらそひあれども。もとより農夫。商賈などには紋はなきはづなり。羽織といふものは道服にて。禮服にあらず。これに紋をつくること。いよ／＼いはれなしと思ひぬ。世の中の移り行くありさま。多くはみなかくの如し

○都會に住める者は。美服を着し。美味を食して。瓦葺の家に起臥し。片田舍に產るゝともがらは。麁服。麁食を常とし。むさくろしき所に住むも。生

の櫃にあるべし。他の器に入れたるは。食するに心よからず。屎は厠にありてはさもなくおぼゆれど。他のところにあれば。いと／＼むさゝきたなし。人の身の上もこれと同じといへり。この詞は。君子はそのこゝろを失はざるにありといふ語に符合せり

○ある國の守の長臣。儉約を專として。國政を司る折しも。不用の役の多きを省ける時。足輕の組百二十人ありけるを。六十家として事足るべしと評議一決しける時。主君の仰せ給ふやうは。六十人の者には暇をつかはすやと尋ねらるゝに。仰のごとくなりとこたふ。そのものどもは獨身なるか。また兩親妻子等あるものもあるにやと仰せられしに。こたへて申すやう。何れも親も妻子もあるものにて候と申しければ。さあらば暇をつかはしなば。大勢のものどもみな。路頭に迷ふべし。少きはおほきに替ふべし。衆はすくなきにかへがたし。今大身の內には。萬石ちかく取るものもあるべし。それを二三人暇を遣はしなば。そのあたり三萬石ばかりの有餘あるべしと命せ出でられしによりて。その議はやみたりとぞ。良君は仁心もまたうすからざる事と。人々申しあへぬ

○河內の巢先といふところに。一年ほど居ける時。常に麥飯のみ食ひてければ。食にうみてかへらんとする時。おもひけるは。日蓮は稗飯を食として。法を邊鄕僻地にすゝめ。親鸞は越の國分にありて。師敎の恩を思ふ。弘通の僧は身を樹下石上におきて。麁食をもいとはず。予はしばしの敎だもせず。麁食に堪へずして。歸らん事をおもふのこゝろざしいと拙なく。心術の至らざる事とみづから悔いたり

○肥後の國に名產三品あり。八代燒。八代蜜柑。合瓢なり。この中合瓢の損じはなるゝ時は。何糊にて附けてもつかず。飯へ薯蕷を加へて。よくねりて附くる時は。はなるゝことなしといへり

○蘇鐵の葉の枯れたるを黑燒にして。胡麻の油に和したくはへ置くべし。金瘡切り疵にはいかほどのことにても。酒にて洗はずに。愈ゆること妙なり。楠正成が家の法なりとて。左海大松屋のあるじ予に傳へたり。予が友中根彌次郎といふもの。遺恨によりて切られし時。ふかさ四寸ばかりの疵口へ。この藥をつけて。忽に全快せり

は。風邪にもをかされぬものなり。寒さのゆるみたる時に。邪氣に感冒するにて知るべし。これはさゝいなることゝゆるす時に。はや大惡のきざすもとゝ思ふべし。邪も氣のゆるむとき入るなり。されば小事を守らざるが。大事の始とこそ思ふべきなれ。古歌に

かばかりのことはうき世のならひぞと
　ゆるす心のはてぞかなしき

○ある人古田織部より傳へたるはねつるべといへる香合とも知らで。さもなき器物の中にまじへつゝ。道具商人を呼びて。この類長持に五棹ほどあり。見わけて買ひ取るべしとて見せけるに。多くの商人打ち見つゝ。これかれ目利するうち。大坂屋勘吉とて。目のきゝたるもの。此香合を見て申しけるは。この品よろしきものと知り給ひて。かくは麁末にし給ふや。また知り給はざるにや。これこそ織部のはねつるべといふ香合なり。我等はこれのみ買ひ取り申したく。その他の品々は。よの人々ともかくもし給へとて。他の品にはさらに心をかけず。さてこれをこそ。いよ〳〵賣り給はゞ買はめ。今一應のおんこたへを承りたしといふに。いよ〳〵うり拂ふなりといへば。さあらば百金に申しうくべしとて。買ひとりて。左海へ持ち行き千兩に賣りけるとぞ。比興なきあき人。いと殊勝におもはる

○人世の浮沈は常にして。盛なるかとおもへばおとろへ。衰へたるは又さかゆること。常のことわりなれども。おとろへたる身は落しれふせざるものなり。身をすてゝこそ浮む瀬もあれと。空也上人よみ給へるはうべなるべし。大江何某といふ人。九萬兩にあまれる身上零落して後。身を惜まず。即みづから魚をあきなひ。荷ひありきつゝ。知る人の方をめぐりて。今よりわれ魚あき人となり候まゝ。日ごとにまゐり候へば。ひとへに引き立てのほどを給はれかしとて。これまで美服にて交りたる輩の家へ。つゞれの容にてたのみ行きければ。人々その志しをあはれみ感じて。魚渡世日ましにさかんにて。天滿なる何某とて。今現にその家相續したり。常にかの大江某のいひける事に。金錢はきたなくまうけて。きれいにつかふべしと世にいへども。我はさにあらず。きれいにまうけて。又きれいにつかふなり。飯はか

有馬の湯あみして歸路。極月の廿日あまり。かの五半を訪はんとせしに。折から廿九日の事にて。家計に混雜の時なれども。五半予を見るより。いかなる幸にか。思ひがけなき枉駕なりとて。座しきに請じ侍り。さま〳〵の物がたりし。予も過ぎし事どもいひ出でゝ。その夜はやく丑に過ぎたり。よひのほどより酒食のもてなしありて。今宵はわが方にとまり給ひて。めでたく、わが家にて年をむかひ給へかしとて。夜の明けぬるまでものがたり侍りぬ。さぞ草臥給ふべし。ひとやすみし給へとて臥しぬるころまで。家内より家事の用をあるじがもとへ云ひ來ること。ひとつもなかりき。予これを感じて。五半が風流のこころざしをしたひぬ

○伊勢より伊賀へ越ゆる道にて。予がゆくあとより一人の男。いそぎ來りていふやう。われら大坂の者なり。過ぎこし道にて。餓鬼に附かれしにや。飢ゑて一足も進み申さず。大いに難澁におよべり。何なりとも。食類の御持合せあらば。少しにても給はり候へかしといへり。予心得ぬ事を申すもの哉とはおもへど。旅中別に食類のたくはへもなければ。刻み昆布のありしを。これにてもよろしきにやととらせけるに。大いによろこびて。直に食したりき。予問ふ。餓鬼のつくとはいかなるものにてあるぞといへば。こたへて云。目には見えねど此あたりに限らず。ところ〳〵にて乞食など餓死したる怨念。そのところに殘り侍るにや。その念餓鬼となりて。通行の者にとり附き侍るなり。これにつかるゝ時は。腹中しきりに飢ゑて。身に氣力なく。步行も出來がたき事。われら度々なりといへり。此もの藥種を商ひ。諸國に注文を取りに。つね〳〵旅行のみせしとぞ。世にはさやうの事もあるものにや。他日播州國分寺の僧に尋ねけるに。この僧申しけるは。われ若輩のころ。伊豫にて餓鬼につかれたる事あり。よりて諸國行脚せしをりは。食事の時に。飯を少しづゝ取りおき。それを紙などへつゝみて。袂に入れ置き。餓鬼につかれたる時。遣すためなりといへり。心得がたき事にぞありける

○守邪とは醫書の樞要にして。人の行ひにていはゞ。油斷せざるなり。よろづの事もみづからゆるす所よりして。よからぬ事は出で來るなり。甚しく寒き時

やうきを避くればおもしろき事なし。長生は勞と食とにあり。勞せずして食に過不及なければ。命天然を終る事を得べし。調度と人身とおなじ。多くつかへば損じ。つかはざるもまた損ぜり。されば養生は過不及なきを守るべし。病は不養生にありて。世に氣を屈託するもの。常に病なきにあらず

○酒はいかほどの大酒にて痛飲したりとも。一睡して精神をだに靜むる時は。和して身を損ずるにいたらず。醉ひて是が爲に犯され。心を騷かす歟。または女色におぼるゝが故に。精神虛耗して。心膀を破り。瘀濁胃中に痼疾となりて。血道を腐敗す。曳いて腎をやぶるに及ぶ

○餅は食滯するものなり。多く食すべからず。餅に食傷したるは。救ふべき術なし。口は病を入れて。禍を出だすの扉なり。かゝれば一言以て智とし。一言以て不智とす。人心の表なり。心におもはざる事はいはずといへども。みだりに思はざる事をいふは心と表裏す

○何によらず。物の少きは長久のもとなり。多く物をたくはへ持つは。禍を招き身を勞するの媒なり。されば財寶多くもちて。生涯乏しくくらすは。只財寶の多からん事を好む者なり。衣食に薄くして。財を持つ者。只多くつめるを生涯のたのしみとして。終に財寶のために身命を亡すなり。欲少き人の目より見る時は。夏の虫の火を取りにおもむくにことならず

○浪華の長柄に遊びしころ。農家にて稻麥等の穗を打ち落すものに。床几の如くして割りたる竹を横にならべ立てゝ。さなといふ具あり。むかしよりありける物にや。ある古歌に

　苅りてほすわさ田の稻の八束穗に
　　さなもうもるゝ秋に來にけり

とある。さなといふ詞の解し得ざりけるが。長柄に行きて知りぬ

○宇治。木幡。淀。竹田あたりは。昔遊女多くありたるところなり。古き洛陽の地圖に。小掠。姬町といふところありて。遊女町なり。そのかみは。多く水邊に居たること。古書に見えたり。あさ妻舟の圖などもおもひあはすべし

○池田五牛は。酒造家の豪富たり。予所勞ありて。

鳥渡見れば忍ぶに類し。倏忽に見れば恩にひとし。はるかに見れば思ふに似たり

天龍寺の歡道といふ僧。これを見て。棄恩入無爲眞實報恩謝といふ文意に。何となくかよひてをかしといへり

○伏見より年七十歳ばかりなる老翁。土偶人瓦器のたぐひを荷ひて。洛中を售りありくあり。常にあきなふ家に來りて。食事をする折から。その家の奉公人大勢あつまり。かの翁に云ひけるは。御身の荷ひたるものは。その價いかほどばかりの品にかと問へば。翁こたへて。銀十五六匁ほどの荷なるべしといふ。又問。京の町は人の行きかひ繁きところにて。もしあやまちて。みな碎くまじきものにもあらず。さやうの時には。いかゞするかといへば。それこそ過ちなれば。さることなしとはいふべからず。さある時は。その事をありのまゝに述べて。我等も年久しく商ふなれば。壹荷ぐらゐは情にて借り受けて。商ひ申すなりといふ。又問ふ。そのうへにも又碎くまじきものにあらず。その時はまたいかゞするかとなじりいへば。いかに問屋なりとて。數度の無心もいひがたければ。その折こそ其許達のごとく。奉公なりとも致すより外にせんかたなしといへり

○龍神は水をつかふに妙なる術を得て。一滴の雫をもて暴雨を降し。波濤をも起すといへり。また人は火をつかふに妙なる術を得て。一炬の薪を加へて。以て萬物を烹燒す。天地の際にあるものは。木火土金水の五つより外なし。これより萬物を造化して。萬類形容をことにするに。龍神の水術五行の中。水のみつかふに妙ありて。他の物に術なし。つかはざればまた過つ事なし。人は五行を取りてことごとくみなつかへり。是を以て。過不及多し。世人火のみをつかふに妙術ありて。金をつかふに妙ある輩を見ず。多くはこの金のために己を勞し。身を亡す者少からず。さあれば。火木土水この四つの物にのみ妙を得て。金をつかふに拙しとおぼゆ。人もし金をつかふこと火をつかふがごとく。自在を得るものあらば。生涯過つことあるべからず

○遊樂は費なる事にあり。費をはぶけばたのしみなし。慰みは無益なるものにあり。無益をいとふ時はなぐさみなし。おもしろきは危きところにあり。あ

へ。九萬石を以て家法をたつることあらば。一年に一萬石。十年に十萬石を餘さん。左あらば。日々をつめずとも。大名の家計何ぞ町人の財を借ることを用ひんやといへば。某唯々として歸りぬ

○予がもとに高金につのり購へる香合あり。ある方へ賣る時。人のいへるは。左ばかりの名器人も知るところなれば。持ちつたへ給へとて。いたく止めけれども賣りたり。やむことを得ざればなり。思ふに武家にて武具をうらば恥辱なれども。衣服をはじめ。茶器などは賣り拂ひたりとも。いさゝか家瑾といふべからず。井戸。熊川の名物。金岡。元信が名畫たりとも。國民の飢渇を救ふの德なし。ある諸侯。領國飢饉のとき。重寶の名器をうりて窮民をすくひしことあり。いとありがたき仁政といへり

○牡丹花肖柏西山に居られし時。百金を賊に奪はれ。ノ貫は山科の草庵にて。茶器をうりたる錢七十貫を。盜人に取り去られたり。盜賊は金銀と衣服を。ことさらに奪ふものなれば。在俗の人に格別にして。世を捨てたるわび人は。華美の衣類と金錢をば儲ふべからず。家の調度も。なるべきほどは。土器と紙ばかりのたぐひにて濟ますべき事なり。これ賊を防がん第一の用意なるべし

○彌陀如來。觀世音菩薩。勢至菩薩の三尊は。おなじ格に信ずべきを。彌陀はいふまでもなく。觀音とても何國にもあつく信心され侍れど。勢至ばかりはさほどに尊敬するともがらもなく。又勢至を安置する大伽藍もなし。勢至は功德もうすき菩薩にや。經を見たりといふ人も希なりとおもはれたり。これを人にたとへたらんには。美婦人の愛想なきとひとしかるべし。又衆生緣のうすきが同座し給ふ佛にさへ。かゝる仕合せ不仕合せあり。いはんや今日の凡夫に於てをや

○一休禪師紫野におはせしころ。人の書をもとむるものあれば。御用心と書きてあたへぬ。しひて他のことをもとむる者あれば。御用心〳〵といくつも書き給ひ。又上に只といふ一字をそへて。只御用心とかゝせ給ふ事もありとかや。いとおもしろく。その語すべての事にかよひて敎訓とはなりにけり。予も又それにならひて。用心の二字を合せて。一字に作り書けり。その文にいふ

といふものにはあらず。音便の序にして。國地の自然に生じたる詞なり。五音たてよこに通ふ。通音の詞は。いづれも國の根本といふをしらず。通音も訛にはあらず。訛は四聲の内にて。淸音。濁音といへども。自然より出づるなり。上すみて下濁るは。自然の通稱なれども。洗濯は五畿に下をにごりて唱ふれども。關東にては下すみていへり。これ國土は自然なれば。下濁用の字にごるとも定めがたし。戯れに

大根とはねつる文字ははねやらで
はねずともよき牛房ごんばう

○花咲翁の滑稽。みな人の知るところなり。一日予がもとに來り訪ふ。折ふし世人多く草庵に來りて。月花の物がたり絶えざる中にも。崇德院は天狗にならせ給ひて。讃岐に崩御まし〳〵。菅公は雷となりて。筑紫に薨ぜられしといふ事までをものがたりする人は多かれども。實説を詳にかたれるもの一人もなしとて。歎息せり

○ある侯十萬石を領しながら。困窮せられしころ。大坂にて豪富の町人。その侯のまかなひするに。すべて儉約を以て專とするとて。家來の祿をへらし。諸事の入用を減じて。上向よりはじめ麁食して。下みなこれにならひ。なほ諸家のつき合ひをも省きたり。かゝれば家中いよ〳〵ひがみ。下ます〳〵いやしくなりゆき。收斂盜臣いよ〳〵増長して。窮迫はじめにいやまし。何某その仕法を憂ひて。予にこのことを歎きけるに。予こたへて云。物本末あり。事終始あり。終にすべきことを始にして。後にいたすべきを先にする時は。ます〳〵あしきはさかんにして。善事かくれ。國家の經濟における。私欲のうすくして誠忠なる者をわけてえらみ。衆人心をあはせて。徹の法を行はゞ。いかほど困窮し給ふとも。年を追うて富まさんこと。改めいふべきにあらず。賄はせて利を得んとするは。民と利をあらそふなり。國家を治むると。いにしへよりして云ひ傳ふるがごとく。奇字の謎の意ばへあらまほし。この文字をわくるときは。上に立んとすれば下可ならず。下可ならんとすれば。上立たず。家を治むる法まづ損じたるところを修覆して後。おひ〳〵かたむけるを起すべし。十萬石の領中。一萬石をなきものとしてたくは

思ひ給はじものをといひしとぞ。この詞。人のうへにも通ひていとおもしろし

○島原の難波や與左衛門といふ遊女屋に。濱荻といふ太夫あり。もとは播州高砂の商家惣七といふものの娘にて。人の家に嫁しけるが。その家衰微に及びて。夫に捨てられ。親のもとにかへりけれども。親の家もまたおとろへて。父母を養はんが爲に。與左衛門が方に身をうりて。遊女とはなりしなり。その頃。與左衛門は。江戸の廓へ移りける時にあたりて。よき遊女をつれ行かんと。十一人の遊女をえらみける中に。ことに濱荻はその志し尋常ならず。風雅の道にもうとからざれば。わけてあはれみをかけ。江戸に下るにのぞみて。濱荻は與左衛門に。わが父母もろともに江戸へくだりたきよしの願を申しけるに。許されざりければ。客にかたらひ。事のよしを歎きけるに。其客豪富のあき人にて。彼が孝心を感じ。いとやすき望みかなとて。路資をあたへて。あるじ與左衛門に頼みけるに。費をいとへばこそ。かれが願ひも聞ざりしなりとて。こともなげに承け引きたれば。濱荻はふたおやをも伴ひつゝ下りけり。濱荻勤めの中をこたりなければ。他の遊女もこれにならひて。その家繁榮し。主人も亦幾多の益を得たれば。高砂といへる茶店をしつらひ。濱荻が親達につかはしたり。かの濱荻はたしなみよくて。身をつつしみ。明けくれに父母をかへり見て。勤めながらも。日々に親のもとへ行きかよひけり。かゝれば廓の中にても。誰れかは賞譽せざるものなからん。その頃。濱荻が發句に

うき人に手のはづかしき火鉢かな

後に。ある貴人に根曳きせられて。出雲の國にいたり。親子三人にてめでたき暮しとなれるも。孝の惠なるべし。その行儀難波とて。その名を傳へたり

○開語。語路。清濁。連聲とて。國々。山川。海谷の深淺高卑によりて。その詞のなまり。里言。方言こと〴〵く變ずる事ありとも。連音の移聲を。すべて正す時は。同じ火を關東にてはひとのみいひきれども。五畿内にてはひィと連ぬるなり。枸杞を關東にてはくこといへども。五畿にてはくこゥといへり。すべて紅粉をにとばかりいふべきを。べといふことを蒙むらしめて稱ふると同じ例なり。これは詞の訛

○洛の燈籠菴は。そのむかし。小松内府の燈籠を造られし所なれば。その名殘なりとぞ。六波羅より東南にあたりて。小高きところなり。ある時。家をつくるとて。そのあたりを掘りけるに。笄の如きもの多くいでたり。赤がねにして。その形丸く。左右に圓く合せたる玉の如きもの附きたり。長さ一尺あまりあり。予が友文鎭にしたるを見たり。古雅いはんかたなく。至りておもし。往昔の質素たることおもひやるべし。今や赤銅眞鍮の笄。あるひは竹などにて造れるものは。丹波。但馬の在所にてもさゝず。予が祖父の物がたりに。むかし大原にて男も笄をさしたり。近きころはさす者なしといへり。竹にて短くつくり。結びたる髮へ横にさしけるとぞ。また塔をも掘りいでたり。表に家根の如く筋ありて。重ねたるものと見え。内はこと〴〵く穿りくぼめたり。好事の者求めて手水鉢とせしが。その買ひもとめたる人。多くは瘧を病みたる故に。後には所々に捨てありしなり。後また心あるもの拾ひあつめて。再びもとの塔に重ねて。寺院に建てしが。いと古代のものなり。貴人の塚しるしにやと思はる

○京師五條坂の左りに。ひくき平地あり。叢澤となりて路なし。鳥邊山より下りに入れば。數歩にして。親鸞を火葬したりといふ所あり。鳥邊野といふよし。古老の物がたりなり。一基の古碑を存せり。弘長二年十一月廿八日とゑりてあるのみ。あたりに荊棘生ひしげれり。人跡たえたり。むかしは一向宗の門徒。遺骨をこのところに持ち來りて埋みたりとかや

○誰人の塚といふことしらぬ古墓。歌の中山の入口にあり。鼻血の出づるとき。この塚をいのるにかならず驗あり。何の花にてもさゝげて。鼻より血の。右よりいづれば。左の陰嚢を握り。左より出づれば。右をにぎりて拜すれば。忽に愈ゆといへり

○紹智かつて士明といふ香爐を得て。火いけとなして。朗千法師の訪ひ來られしをりに出だせり。朗千師撫でつさすりつ香爐をほめられたり。ある時。又來りて。その香爐をつく〴〵と見て申されけるは。かばかりの名器を。何とて火いけにはしたまへるかといへば。紹智笑ひて申されけるは。此器火いけとして遣ひ侍ればこそ。貴僧が目にもつきてをしまれ侍るなり。香爐にして床におきたらば。左ほどには

の舊地を拜せんと。雨降山かけて人のまうづるにともなはれ。青梅村より御嶽山に登れり。このあたり承平のころ。平の將門が舊壘多く。すべて古戰場とぞ。道しるべするもの。江戸の人にして。もとこのあたりの產なりといへり

○武野古戰場記に云。武を崇め。嶽の高きに藏して。神威を承平の和にしめし。文を黎民の際にやはらげ。德を國家の仁政にしきぬる。むさしの國御嶽の山は。叔倉子義を違へぬ標有梅の。青梅の里まで。江戸を去ること十有三里にして。行程に山河橋陵なし。青梅村中金剛精舍。古樹の梅あり。四時實を結び熟すれども。綠のいろをかへざるが故に。青梅の名あり。連山西北をめぐりて。さながら絕壁に似たり。閭巷を過ぐること十町ばかり。貉澤を下れば。溪路斜にして棧あり。村落に流を入れたり。ひなたの和田といふ朝日にむかふ名なるべし。一顧すれば多摩川の流れをへだてゝ。山々水にそばたち。石にむせぶ流の音。谷にひゞきて人のあらそひわたるが如し。山河すべて縈糾して。數里の間に屈曲し。岑にかくれ谷にあらはれ。「さらす調布さら〳〵に」と詠じたる昔の歌の姿なり。山聳えては頂に露臺のあとをとゞめ。岸崩れては石に楯澤の名を殘し。往古に戰場の樞要たるも。陰欝たる叢澤となりて。僅に山がつの樵路をわかち。露深くして草舊壘の礎を埋め。月さびしうして尾花白刄のひかりをまじへ。旌旗風にひるがへりて。松に白鷺を宿し。翠桃枝をたれて。丘に弓絃の糸をたち。利鎌いたづらに田園にくじけ。寶刀むなしく壤の中にうづめり。花鳥に時を感ずれば。歌舞の榮華もまのあたりにして。月にむかしをしのべるときは。錦繡にほころれる盛衰も。紅葉の色のうつろふに見えたり。殺氣長く昇平の日影に消えて。戰塵に似し雲もなく。人家軒をならべて。路に竈のにぎはひを列ね。ゆくかた〳〵に蹈み分けし數多の道も街となり。ありといふなる逃水も。俊成卿の比興とはなりぬ

○藜の羹を食ひて。太牢の滋味をしらず。破れたる溫袍を著て。嚴冬のはげしきをわたり。財寶を多くたくはへて。他の人に讓る者を。金の番人。または有財餓鬼などゝそしるものあれども。人欲の私なく。行ひ公道の人と謂んも。亦可ならずや

また云。左あらば書狀。手紙。證文。送狀。あるひは關所手形。船手形等までもなく。又奉公人も請狀なくて通用し給ふやといへば。主人わらひて。それは昔よりあり來りし法なれば。何ひとつとして用ひざることなしといふ。ありし法は。もと何人の始めおきたるぞといへば。左やうのむづかしきわけは存じ申さず。それは誰人にても知り傳へたる事故。それにて事は濟むべきなりといふ。予又云。かゝる文の傳はることとは。もと歌の道より出來て。今書をつたへてその法はたてり。左すれば。御身家をとゝのへ。身を修むるも。この事ありて成就す。和歌の道。書の道。何ぞ修身齊家の害なりといはんや。行ふ者の心にあるべきなりといへば。主人口を閉ぢて謝したり

○學問して博聞多識となるは。人情を察して。世路に行きとゞかんが爲なり。聖人賢者の世話やき給ふも。高ぶりて物しり顔せよとの敎にはあらず。されば理にあきらかなりとて。人を俗物と見下すべからず。その俗物の目より見れば。また高慢なる者は。角立ちて至りて無益に見ゆるなり。君子は時としておしうつりて。よく俗とまじはる。かゝるがゆゑに。俗物に入れられざれば。やはり俗物なり。學びの道は粹とならざれば質なり。かゝれば書籍は粹となるの助けなれば。知りて表へあらはさず。隱して入る時につかひ。不斷ほこりがほなるは。人さらに用ひざるなり

○人に饗應せられたる物をうましとおもひ。家にてこしらへ食する時は。外にて食したる時よりは味うまからず。いかにとなれば。おもひまうけて食ふがゆゑなり。食ははからずして。食するものにうまみはあり。されば飽食たりとも。うまきは思ひよらざる所にあり。すべて食はうまし。まづしといふことなし。その時と處と。わが腹中に應じて。口にかなひたるよりうまき物はあるべからず。空腹には生鹽を添へたる湯漬も。山海の珍味よりもうまし。繪の道もしかなり。別に書きたるごとくと望む人あれども。寫し出でなば。格別筆勢墨色。すべて前によることなく。おのづから發せし勢。ふたゝびならひすることとありがたし

○予江戸にありしころ。武甲山にまうで。日本武尊

だならずおもしろく覺えければ。夕ぐれをもいそがで。暮なば月にたどりなんと。猶おくふかく行きて見るに。草にて結ぶ菴あり。こはよしある人のかくれ住にやと。入りて床几を乞ふに。そのさまいやしからぬ尼の。たばこの火など持ち出でゝ。内へ入りて休らひ給へ。京にておはすやなど。ねもごろにいへるものごしの聲音。いよ／＼たゞならずおもへば。かく世をのどやかに過し給ふこそ。尋常のかたともおぼえね。和歌など詠じ給へるにやと。庭のもみぢのかつ散るを惜めば。いなとよ。さやうに世をれもしろく過ぐる身にはあらず。わらはゝ。つれそふ夫のこゝろざしあしくて。こと妻に溺れて捨てられたる身なり。女のみさを。二人の夫を持たざるを貞とすとあれば。たゞよをあぢきなく思ひすてゝ。今の身とはなりぬ。をしほにわび住ひするは。このちの閑寂を愛してゐるにはあらず。甥の坊主の里の寺に緣あるをもて。こゝにはをるなり。折ふし來たまはば。よりて憩ひ給へかしといふに。何となくゆかしきところあれば。墨筆をかりぬるに。もし歌よみ給はゞ。庵相の短冊あり。これに書きて給へかしとて出だしければ。うちくもりたるに。鳥の飛びたる繪あり。たゞ人のあつかふべきものとも見えざりけれども。あしき墨もて書きてつかはし歸りぬ

そめて濃き色もをしほの山風に
　　もとのみどりへかへすもみぢ葉

○借用とだにいへば。千金の重さも奪ふべしとは。藤房卿の詞にして。借錢の多きを苦にやむものあれども。借錢より先この躬を大借なり。世人錢の利をれそれて。天の理をれそれず。借錢何ぞ身を亡すの禍あらんや。理に滯る時はその身忽にほろぶ

○池田何某とて酒造家ありけるが。隱居して瀧澤といふところに住みけるころ。尋ね行きけるに。こしかた行く末のものがたりする序に。和歌は詠れけるにやといへば。われらは和歌などきらひなりといへり。何とて有りがたきことを嫌ひ給ふぞといへば。世にすべて和歌などよみ。物よく書く人などは。みな身帶を持つものなくて。身不埒にして家産を傾くるもの多かり。故にさやうなることはすこしもいたさず。只家業大切につとめて。金錢多くたくはふるより外のことはいたし申さぬ心得なりといふ。予

ばらくも止めず。そのとゞまるもの凶年となる。洪水。地震。大風。大雨。火災。人に在りては。塞痞。停滯よりして百病を生ず。易に云。財寶を倉に納めて守らざるもの。是は盜人に奪ふことを敎ふるなり。化粧して美服を着しぬる女は。我を犯せといふにひとしとあり。愼しまずんばあるべからず

○信貴の毘沙門堂に。四季運歌の句合あり。その中に。五月雨に年中の雨ふり盡しといふ句あり。何某の大納言聞しめされて。何ものゝ申したるにか。この句のぬしを尋ぬべしとありける時。高橋某そのゆかりあるものに問ひければ。彼あたりなる村長の申したる句なりとて。わざ〳〵御使の消息を給ひて。もし京へも出づることのあらんには。かならず參るべしとのことゆゑ。いとありがたくて。かの村長わざ〳〵京へ出でゝ尋ねまゐらするに。左あらば逢ひて物がたりせんとて。一間へ通し給はれば。村長云。風流の面目雲のうへまでも聞えけんことこそ。いとありがたけれと存じまゐらするなりと云ふに。大納言も四方のはなしありて。さて尋ね給ふは。年中の雨といへる趣向の。おもしろくおぼゆるからに。その句意を聞きたく侍れば。逢ひ申したり。いかなる故事ありて。かく申しゝぞとありければ。村長こたへて云ふやう。別に故事と申すものも候はず。只五月雨のきのふもふり。けふもふりつゞけて。あすも又かく降りくらしなば。一年の雨もこの頃のさみだれにふり盡しぬべきと思はれ候心より。申したる外些所存なく候なりと申しければ。おもしろくおぼゆるなりとて。入り給ひぬ。村長がかへりし後。高橋いでゝ。いかなる御事ぞと尋ねまゐらせければ。大納言の仰には。さりとては麿がおもひしとは違へり。五月雨には四時のごとく。雨のさまいろ〳〵にふりけるゆゑ。春雨のさびしきにくらべ。夏の夕だちにたぐへ。秋の雨のものすごきにかこち。冬の雨の寒きにもたとへたり。このことふるき物がたりにあれば。それをしりたる句にやとゆかしく尋ね侍れども。左はなくて。雨の只ふり盡すとのみ作りしこと故比興とはおもひ侍りぬと仰せられき

○をしほの山のこなたに。由留木といふ里あり。紅葉するころ。こゝかしこ逍遙しつるに。柴垣そまつにゆひめぐらして。草の花さかりに。虫の音などた

にあるべし。刀を打つもの。なまりがねの焼刃に。刃がねをかけて打ちあげたるは。とぎ込みて。その切れあぢ。はがねのみよりもよろし。よくきたへ打ちあげたるなかにも。鍛冶の心にかなへるは。十本のうちに一本あるかなきかなりといへり

○木曾義仲の臣畑六郎左衛門。わかきころ人のむすめにちなみて。娶らんことを乞ふ。その女は。飛騨の山住にして。椀具の木地を挽けるもの丶子なり。女の母こたへて云。いやしき者の子にて侍れば。なか〳〵に武士の妻となるべきものにてはなく。育がら。人まじはりもおぼつかなく思はれ侍れば。ひたふるに辭退まゐらすなりといふに。媒の人。畑にこのよしをいへば。畑不興にて。我小身ゆゑに不足におもひ。女をくれざるにやと云ひやりければ。その母またこたへて。我等年老いぬれども。欲に耽りぬる心はなし。武士のならひ。もしも畑殿の討死などしたまひたる時。おめ〳〵親里へかへり侍るやうなる志にては。武家へ嫁したりとて。恥かしきま丶ことわり侍るなりとあれば。六郎左衛門その詞を感じ。とてもかくても妻とせんとて。終にめとり。偕老の契りあさからざりしが。元暦の亂に。六郎左衛門亡せたりと聞きて。この妻。深谷に飛び入りて果てたりとぞ

○ある商家の奉公人。武家の下部といさかひして。下部を打擲して。いさかひに勝ちたりとて。見せにて自負するを聞きて。主人大いにいきどほり。兼々云ひつけ置きしに。人といさかひするのみならず。下部たりとも。武家奉公の人は。世を治め給ふかた〴〵の召仕はる丶。天下の役びとなり。おのれは商人の手代。私渡世の奉公する身分をもて。武家の召仕はる丶人といさかふこと不届なり。わが家風にかなはざる者なれば。只今いとまをつかはすなりとて。わびたれども聞き入れずして。その宿へ引きわたしぬ

○天の道は滿つるをかきて。足らざるところを補ひ。地の道は盛なるところを減じて。衰ふる所をたすく。萬類みな飾物を生じぬれども。人取りて飾るがゆゑに美麗となる。されば貧は常なり。富めるはあつむるが故なり。あつむるは物を滯らすなり。天地はとゞこほることを嫌ふがゆゑに。萬類をみな促して。し

すべて感涙にたへ難きこと多かり。鴨の長明が方丈記。吉田の兼好がつれ〲草。みなひとたびは零落して。世のありさまを悟りて。身を顧りみたる人々なれば。綴りたるものどももあり難くめでたし。書よみたるばかりにては。よろづふかきに通せず

○幼き子のもて遊びに。風猿といふものあり。その和歌何人のよみたるにかありけん。「登れ〲のぼる時はくだる。くだれ〲下だる時はのぼると。端書して

すがりゐる竿に手足も括られて
おのれ動くとれもふ猿かな

とあり。この歌の意を思ふに。人間一生の勤行身を。よく詠じたり。竿は業にして。旗は天地の間にありて。風は身を扶くるの氣なり

○世にありし人。零落したる人のもとに行きて。ともにつれ立ちて。市にゆきて鹽魚を買ふ時。世にある人は。鹽鰹を買はんといふ。零落の人は。鹽鱒を買はんと。たがひにいひ爭ひしが。終に零落の人に云ひ勝れて。鹽鱒を買ひて歸りぬ。さて道すがらのほど。はなしに。世にある人の云ひけるは。そのもと何とて。鰹のうまきをすてゝ。鱒のうまからぬを買へるかといへば。零落の人わらひて。今日はそのもとより。我等への饗應にせらるゝなれば。鱒にしかず。鰹は御もとのごとく。常に美味を食し給へる人の。たま〲食ひたまふものなり。我は常にうまきを食はざれば。鱒の味にしかずといへり

○人の信は。おのれが信を引き出だし。人の僞もおのれがいつはりより引き出だすものなり。僞も遂ぐるときは信となり。信も遂げざる時は。いつはりとなれり。されば噓も誠も。まじはるものゝ心にありて。己まことありて人に噓あることなく。己噓ありて人に誠はあるべからず。唯人としてむづかしきは。心の疑ひとつなり。兼好法師は。迷のひとつおそろしと書きたれども。まよひは表にいづるとあれば。おそろしといへども。おそるゝに足らずして捨てやすし。疑は心にありて。あらはす所なきが故に捨てがたし。かゝればおもふこと内にあれば。色外にあらはるゝといへり。しかはあれど。差別そのまじはりのうちにありて。よろづあらはなるこそよけれ。これはうそといふ中にも。虚實の根ざしともにその中

○拂子の賛に云。遊ばんことをほつす。遊びて足らず。樂まんことをほつす。樂しみて足らず。僞らんことをほつす。僞りてたらず。貪らんことをほつす。むさぼりて足らず。終に盗まんことをほつす。

○所帶の箴に云。天下は一人の天下にあらず。萬民持合の天下なり。身帶は一人の身帶にあらず。家内持合の身帶なり。了俊は獨味を制し。正成は二菜を戒む

○男女打ちまじりて。酒たうべ。花を見るに。傘さしたる繪に。おもしろの世の中や。恩をわすれぬほどあそべ」おもしろの春雨や。花のちらぬほどふれ」おもしろの酒もりや。こゝろみだれぬほど斟め

○紅葉の詞に。人と契らば。うすくちぎりて末とげよ。もみぢ葉を見よ。薄きはおそく。濃きはとくちるものにて候

○修行の詞に。花は雨の過ぐるにまかせて。紅ます〳〵色をそへ。柳は風にもまるゝに隨ひて。緑いよ〳〵ふかし

○無用の重器は。貴きあたひをも費してもとむれども。秘めおきて日々の用には立たず。無益の妾は。多く財をもいとはずして愛すれども。家をとゝのふ足しにならず。美味は高直にして少きものにあり。樂しみは費にして。不用のものにありとしるべし

○夏日の七快
湯あみして髪を梳る。掃除して打水したる。枕の紙を新にしたる。雨はれて月のいでたる。水をへだてゝ燈のうつる。淺きながれに魚のうかみたる。月のさし入りたる

○飲酒の十德
禮を正し。勞をいとひ。憂をわすれ。欝をひらき。氣をめぐらし。病をさけ。毒を解し。人と親しみ。縁をむすび。人壽を延ぶ

○古人罰酒の法あり。三合を飲酌の限りとす。もしこの法を失ふ時は。家を亂し。身を亡す。箕子一たび嘗めて延齡の良藥と賞し。二度なめて心を擾すの媒とおどろき。三度なめて國家を失ふの基と悟れり。勞なく憂なき時。飲むべからず

○世に文事もなく。藝術をもさせで習ひ得ざる者の書きたることは。感にたへてなみだを催すほどのことはなきものぞかし。薄命の人の書きたるものには。

わづかに四五軒ありて。農の業はすれども。常の食に米は聊も食はで。稗にあづきをまじへて粮とす。この男が行きたる家は。その中にも長と思はるゝ者にて。麻の織りたるに尾花を入れたる。新しき夜の物を出だして。着せたるのみにて。敷けるものは家のあるじもなし。枕は木の角なるをもて臥しめたり。所の人のかたりけるは。この山を登りて。凹かなるところより見れば。珍らしき花ありとて。案内しければ。男行きて見るに。はるかなる岨のもとながれあり。水勢の屈曲して激する聲のいさぎよきけはひ。いふべくもあらず。溪間を遠くへだてゝ。その大さふたかゝへもあらんとおもふばかりの樹に。色紅にして。黄をおびたる花。今をさかりと咲きたり。夏の事なればあまりの暑さに。案内の人は木の葉をいたゞきたり。さていふやう。此花の大さ。こゝより見ればさほどにもあらず。この川の末尻といふところに。この花のちりて流れ行けるを拾ひしものあり。花びらのわたり。一尺餘もあるべしと語れり。いかなる木の花にか。たえて知る人なし。遠江の國人は。これを京丸の牡丹とて。今猶ありといふ。この頃は人もゆきかふことありて。この地へもいたれど。この花のある溪へ。尋ねゆきて見たる人なしとぞ。舟筏も通はざる地にして。人の用なきところなりといへり。四五軒の家ある中に。長とも見ゆるものゝ家は。寺院めきて佛書を懸けたり。その書幅は一向宗の眞向光明の彌陀にひとしき。大いなるものなり。食物のみを供へ。松をともして燈明とす。花を手向くる事なし。夜は燈火なく。炬をもて業をなせり。土人はみな總髪にして。男女ともにおなじ。髭は鎌にてきるといへり。子供も皆總髪にて。衣類には麻のあらきを織りて。尾花。蒲の穂など入りたるを着たり。夏も寒しといふ。かの男濱松へかへるにのぞみて。泊りたる家あるじに。錢もて謝しけれども。他國はかゝるものにて用を足せども。この地に用なきものとて取らず。家にかへり給ひて後。便りあらば米を少しにても贈り給はるべしとて。度々いへるよし。大事に行くべしといふ意にやと。宿のあるじものがたりき。おもふに深山幽谷にわたりては。かゝる地もあるにやとおもへば。行きて見たきこゝちなんせらるゝ

りぬ。扨こそその日の興とはなりたれ。茶はひたすらに。へつらふとにもあらねど。賓主ともに應せざれば。茶の道にあらずといはれき

○杉野意仙といふ醫師。豐後の國より京に出でゝ。一休禪師の心にかなひ。しばらく大德寺に居しころ。料理の方。菓子の方など。こゝろ得ありければ。時として禪師にまゐらせける。この者。性質放逸にして。萬の事にかゝはらざるが。禪師常に他より物をもらひたる時は。膳部のものを一つ器に打ちまじへて。食し給ふことを見て。何とて料理の調ひたるものを。さやうに無下にはし給ふぞといへは。禪師わらひて。邪正は一如なり。飲食にも善と惡となしとのたまへるに。意仙はうけがはずしていふやう。禪師にはさもあるべし。われらは眞僞別如心なり。やはり調味のまゝがよろしきぞと申しければ。その後は左もしたまはざりしとぞ

○東野州佐川田喜六がもとへ。今日の御書翰に雪のことなきは。近ごろ遺恨に候とある返事に

　眺常ならず候へでも。昌俊事は。月花をのみ格別にめで侍れど。雪はさほどにうかれ不申候。人も乏しきものは寒がり。雪ふかき國にては吹雪にしまかれなどして。こゞえ死ぬるものおほしとあれば。悅びおぼるほどにはなられず候。東路の旅に由井といへるすくに宿りし夜。はじめて雪の降りければよめる

　ながめにはあかぬ箱根のふたご山
　　誰がこす嶺のみ雪なるらん

○東海道濱松といふに宿りし時。家のあるじの申すは。このところより天龍川に添へて。十五里ほど山に入れば。遠江と信濃の國のさかひなる川そひの地に。京丸と呼ぶところあり。その地は。他より人の行きかふべきところにもあらず。國の境に。藤の蔓もて長さ五六十間もあらんとおもふほどの棧をかけたり。所の者は京丸の棧といへり。巾せまくして。行くにだに目くらみ。魂きゆるばかりなれば。かの地へ行くものとてもいと稀なり。誰が親の世には京丸へ行きたることのありなど。只噂にのみそのところのとかたりつぎて。見たる人もなきに。この宿の下男。好事のものにて。京丸見て來たらんと。しばしの暇を乞ひて。かしこに行きたりけり。その地は家

行くとて此ところへはきしぞといふに。この御堂の本尊へ願ふことの侍りて。しかも今宵は滿願なれば。まうでつるなりとてすゝみ入りて。しばし拜禮してあるを。かの賊は打ち見つゝ。ふもとの村よりもはるけき道を。いかなる祈願のありてまうづるぞと問ふに。女子はしばしものもえいはで。つい居たりしが。しひて尋ねとふに。なく〳〵こたふ。わらはゝ一人の母を姉と二人してやしなひまゐらすれども。歳たけ侍らねば心とゞかず。父は過ぎし年身まかり給ひて。そのころ田はたを賣りて。今はなく。その日を過さんよすがのなさに。姉の京へ身をうりて。母を養はんといへど。わらはひとりに母をやしなふことの難ければ。母をも養ひ。姉をも身をうらすまじと思ひあまれど。賴まん人しあらざれば。神佛より外にたよりもなく。この御堂の本尊に。七日參りの願をかけ。この事かなひ侍らずば。命をめされ候へと祈り申すなりとて。さめ〴〵と泣きければ。賊はたがひに顏見合せ。二人なみだをはらひつゝ。貰ひなきして。扨は孝心の娘かな。よくこそ母を大切におもひ。姉をも大事にしつるぞとて。かの二人は何事をかさゝやきて。憐をもよほし。盗み取りたる金銀に衣服をそへ。風呂敷につゝみ。小女にあたへていひけるは。今より母になほ孝養を盡すべし。われら旅のあき人なり。不便に思ふまゝ。褒美にこれを取らするなりとて。蓑笠きせてかへしけるは。至孝の心に感じてや。毘沙門天の利益にて得さしめ給ふにもことならずと。その頃人のかたり傳へし

○ある人茶は諂ひありといふことを。利休に問ひし時こたへけるは。わが友に丿貫（べちくわん）といふものあり。われを茶に招きしとき。時刻を違へたる文おこせたり。刻限をたがへずして行きけるに。内なる潜り戸の前に穴を穿り。上に簀のこを敷きて。あらたに土を置きたり。われは心なくそのうへにのりて。入らんとする折から。地の土くえて穴に落ちたり。穴の底に土のねりたるが。中へふみ込みたれば。とりあへず湯あみして。再び入りけるを人々の興としたり。此事かねて期明といふ者。山科へおはせばかくと。はやく我にものがたれど。主のこゝろづかひを。われかねて知りたりとて。穴に落ちざらんは。志をむなしくすることのほひなさに。穴としりつゝ落ち入

て。母のやしなひ怠らずといへども。幼き輩のはたらき。二人の過ぎはひとゞきおよぶべきかたもなく。一人は果物を商ひ。日々に市町に出で。姉は山野に行きて薪をこり。あるは人に雇はれて。わづかの代にかへて母をはぐゝみ。時として食に乏しきをりは。くだ物をも賣らで母にあたへ。姉は人によりて。粮ともなるべきものを乞ひ。二人ともにとかくして日をおくりけるが。ある時。二人つれ立ち人なき所にて。ひそかに物がたりけるやう。わらは母をやしなはんとすれども。御身とゝもに働きたればとて。なか〳〵に衣食のふたつ。母に届くところなし。れもふに都には人あき人のありと聞けり。それを尋ねてこの身を賣り。その身のしろをもて。母を養ひたくおもへり。御身の歳まだいとけなきといへども。母を大切にやしなひまゐらすべしと。涙せきあへずいひ聞かせければ。妹はあねにわかれんことのかなしくて。ともに泣きつゝいらへだにせざれば。このこと母には申すまじとて。なだめすかして家にかへりぬ。その日より暮れぬれば。夜ごとにかの妹の見えざれば。姉は妹が行き方を。ひそかに母に尋ねける

に。山の毘沙門堂へ心願ありとて。詣づるなりといへり。殊勝さいとしくおもひゐたるに。折りふし雨のいたく降りけるが。姉の妹にいふやう。今宵はあめふりて道も暗く。小坂のけはしきを行きて。けがありては。かへりて母の歎きもあらん。あけて晴れなばまうづべし。たゞやめ給へととゞむれども。けふ七日の滿願なれば。母の事。姉のこと。天王にねがひまゐらせて。いかでかは僞り申すべき。ひたすらにゆるし給へ。ゆめこの事母につげ給ふなとて。大雨もいとはで。夜半のほどに。一里あまりもへだゝりたる峠の堂へ出で行きけるが。からうじてそこにたどり行きて見るに。堂の內赫々として火かげのかゞやきければ。いといぶかしくおもひて。內をうかゞひ見るに。二人の賊ども雨にぬれたる衣類を焚火にほしてゐたり。いかで賊とはしるべき。旅人の雨やどりせりとおもひて。そと內に入れば。賊は物音に打ちおどろきつゝ。目をとめて外の方を見やれば。十歳ばかりの女子。ひとり蓑笠かつぎて來り。雨夜のくらきにたゞひとりこゝに來るは。連におくれしにやといへば。連はなしと答ふ。またいづれへ

ある時は。その許の茶道ははやすたれりとおもひ給ふべし。試にまづ買ひ取りて心にかなはゞ。つかひたのしみ給ふべしといへば。主人その詞に感じてや。いかにもおもしろし。風流の道さるべきことなりとて。いふまゝの價に買ひとりぬ

○器物にかぎらず。何にても高き價のものは高く。低き價のものはひきく購ふこそよけれ。高きものをやすく買はんとおもふ志。高き人の悦とする所にあらず。むかし洛の粟田は清水寺の境内なるや。また地主權現の社内なるや。主馬判官の建てたる燈籠を堀り出でたり。石商人の手に入りたるを。人のもとめんとて價を問ふに。金十五兩なりといふ。そのものすでに求むるにおよびて。清水寺の役僧聞きて。二十兩つかはすべし。うるべき方をとゞめて持ち來るべしとて。買ひ取りぬ。今清水寺の地に在りとぞ

○予はいとけなき頃より。詩歌の道を好み。たま〳〵作文などなせしをりから。稿成りて父に見するに。一としてほめられたることなく。只無益のことなりとて。座右に投げ捨ておかれ。他の者のは見てほめたまへば。去りとてはいかゞとのみおもひすごししが。後に妻にむかへたる女の。物縫ふことの人にすぐれて。小袖など一日に一重ねづゝ縫ひて。餘事までもことかゝねば。物縫ふ職人の見ては驚くばかりに上手なりけり。予ある時もの縫ふをひたぶるに愛で賞しけるをり。妻の云。三歳にして母に後れ。繼母に育てられ。いと嚴しき生質にて。五六歳より水仕のわざをつとめ。七歳より手習ひ。物よみ。裁ちぬひを敎へられ。實の子ならねば敎訓足らじと。すゑに至りてそしられんはくちをしとて。羽根つくあそびだにえせで。只物ぬふことなどのみにいとまなかりつれば。折りからは。はげしき母よとおもひしかども。今となりては。物縫ふわざを人にほめられ侍るは。偏に繼母のなさけ薄からざる慈愛なりといへるを聞きて。予がいとけなきころの作文をほめられざるの。いとありがたきをおもひあはせぬ

○丹波の國と。丹後の國なる堺に。毘沙門山と號するところあり。その麓の村に。いと貧しき農夫あり。二人の娘ありけるが。一人は先妻の子にして十七歳。妹は十歳なりけるに。父は姉が十歳の時身まかりて。二人の娘母につかふること。孝行いよ〳〵深切にし

習ひたる義のみ心得。これこそはわが流になくて叶はぬ品なりなど〻。無益の器を高料にもとめ。飾おきたるはふる道具店にもひとしく。見るだになかなかにうるさかるべし。又利休居士が詞にも。貴き價の器物を愛するは。心利欲に走るがゆゑなり。缺けたる擂鉢にても時の間に合ふを。茶道の本意とすといへり。數奇屋咄といふものにも。主人家居と道具に自負し。客にたのみて云ひけるは。わが好けるすきやのうちに。何によりたることゝはなしに。よろしからざるものあらば。詞にしたがひはぶくべし。少しも遠慮し給はず。いひ給はれとありければ。客は諂なき人にて。家といひ。器といひ。行屆かざる所もなけれど。只このうちにそのもと壹人なからましかば。風流雅境これに過ぎたることはあらじといへり。こはいとおもしろき諷諌なり

○高貴の人などは。卑き者と利を爭ふべからず。人君たる人も。民と利を爭ふ時は。下賤のものゝごとく。志しなりくだりて。上をあざむくことのみを考へいだすなり。殷の亡ぶるはじめは。羣臣民と利を爭ひしよりおこれり。ある人隱遁して。茶道に名高かりしかば。茶器を業とする商人多く來る中に。古唐津の水指を持ち來りて。金一枚に購ひ給はるべしと云ふ。予もその席にあそびてありけるが。主人予にむかひていふやう。ほしき器なれども。金一枚にては高直なり。價ひきくせば買ひ取るべしといへるを。商人聞きて予に云ひけるは。知らせ給ふほどの重器を。他の商人の手にわたらば。なか〱かゝるあたひにはうるまじきを。われらなればこそかく廉價にはまゐらするなれ。只申すまゝに買ひ取り給へかし。利潤うすければ。是よりひきくは納めがたしといふに。主人また予にいふやう。いかに思ひ給ふぞ。價高きに過ぎたりと思ひぬと云ふに。予こたへて。その品其許の心に叶ひ侍るにや。いかにといへば。心にかなひてほしけれども。價の高ければもとめがたしといふ。予又答へて。その價に買ひとり給へ。いかにとなれば。商人はよき道具なればこそ。その許をさして持ち來れり。さあらばこの器金一枚に買ひ取りたまはゞ。器のあたひはもはやそのもとが定規なり。この器いかなるゆゑありて。他へ行くとも價はこゝ許にてきはまれり。その價また他にて高卑

すこと遠きにあらず。よき慰の戯なれば。師弟の約をかたく契りて。この戯を習ふべきやと詞を正して云ひければ。親屬どもの資もありて。身をも立て家をもれこさば。否めることかはとて。やがて師弟の約をなしけり。さて衣裳手もとにあらざれば。明けて來るを待ちたれば。約を違へずきたりけるに。さあらば指南すべきなりとて。彼の温袍を取りいでて。着たる小袖を脱ぎかへさせ。布衣の姿に取りつくろひ。着束のその身に馴れぬる迄は。その姿にて居るべきなり。衣體整ふをりからには。授くべきものあるなりとて。今まで着せし小袖をとりあげおき。月をわたり日をつみて。衣類のいまだ身に馴れずとて。授くる物もあたへざりしが。漸ひとゝせも過ぐるうち。弟兄の麁服をよろこび。かくてぞ家をも保つべきと。倹を守れるやうすを賞美し。予が草庵に來て告ぐれば。予もまた兄の心をかたりて。兄にも弟がよろこびをつげ。身を麁客の間におきて。しばらく驕飾を癈する時は。求めすしても財は至れり。つとめよやといへるに。いくほどなく弟兄をあはれむからに。感じて多くの財を贈れば。ますますかたく倹を守りて。身も立て。家をも起し。その富めること弟にも劣らざりけり

○ある人堪忍の二字を座右にしるしおきて。常にこれを見る時は。おのづから心に止りて。日用の心がけよろしといへるものあれど。堪忍は執行せざれば身に感ぜざるゆゑに。堪へざることにもよく忍ぶことなり難し。予も堪忍を守れることをおもふに。乘合の舟ほど事になるゝに便よきことはなしと思へば。僕一人をつれて。京より夜舟にて浪華へあそび。また浪華よりも又舟にて京へのぼりつゝ。ひたぶるに舟に泊れるを樂しみとして。堪忍の稽古せり。人の世にあること舟に乘り合ひて泊りしをりをおもひいづれば。いかほどの不自由たりとも。忍ぶに堪へざることなかるべし。たとひ疊一枚の家に住むとも。乘合舟には優るべし。夜泊のせつなき膝を折りて足を縮め。人の足を枕として押し合ひ。睡らんとすればゆすり起され。少しまどろむとおもへば。鼾に目さめて。起ふしともに心に任せざるは。たとひ一夜といへども。生涯もなほひとしかるべし

○茶道を好むもの丶。他の手前をも辨へなく。わが

文に記す話說の如し。中吉主家再興のため。浪華に赴く時。夜に入りて故鄕を訪ひ。ひそかに一首の和歌を述べて。予育觀音の堂にちかひ。導引の業を路の資として。主家のたふるゝを再び起せり。その折からの歌なりとて。彼地の堂にしるしあれども。誰がせし業なることをしるものもなかりしに。予が江戸におもむくころほひ。此事聞きつたへて。菴主を訪ひ尋ぬるに。慈照といへる留守居の僧。この歌を諳記して聞せたるに。感涙をさめがたくて。書きとどめつ

世にでずば又とは越さじ我ための
命なりけり佐夜の中山

かの唐土の司馬相如か昇仙橋の柱に題して。駟馬のくるまに乘らずんは。ふたゝび此橋を過ぎらじと書きしは。おのれが出世の志にて。いはゞ自領の私なり。中吉がこの歌に於ける。忠節のために故鄕に誓へる辭藻の意。西行の古歌にすがり。調幽玄ならずといへども。誠を盡すのおこなひにおいては。相如が及ぶところにあらず。諸崎ひとりの女子ありけるを。中吉にめあはせて。家號を讓り。庄兵衛と稱せり

○予が交はりし人の子に。兄弟常に爭ふものあり。兄は砂糖を渡世とし。衣食にをごりて懈りつれば。家貧しくしてまうけなく。弟は鹽をあきなひて。飽食飽服し怠らざれば。家富みさかえて不足なし。その兄常に弟が富めるをたのみて。財を借りて。その世業を送るといへども。儉を守るの勤なければ。いよ〳〵貧しくなりゆきて。多くの財を弟に乞へども。肯んぜざりければ。あるをりからに。その兄の予が草菴に入り來り。歎息して云ひけるやうは。親類多く富めりといへども。兄の貧しきを資けざるは。あかの他人に劣れるなるべし。かゝれば今より商人をやめて。武士ともならんことをおもふといふに。予は聞くよりもあはれにおもひ。武道のたしなみあるかはしらねど。さやらのいやしき心を持ちて武士ともならば。危きこと深淵にのぞむがごとく。又薄氷をふむに似たれば。心に一ヶの工夫をめぐらし。弟の費を得んとれもはゞ。予に傳はる秘し藝あり。いはゆる能の狂言とひとし。敎に隨ふ心あらば。身を立て家を起すべし。若又稽古に違へる時は。身を亡

な貪り掠むることを争ひ。内にはいへを保つの助けをうしなひ。外には産を傾くの借財多かりければ。大厦のたふるゝは一木のよくさゝふる所にあらざれば。名におふ豪富の家なれども。つひに財寶を分散して。あるじは逆井といへる片田舎に潜み隱れ。持ちつたへたる調度のたくひをけふりの代となしつゝも。三とせばかりを送れるうち。身は生を養はざるに勞れ。住家は明暮の乏しきに壞れて。疫にをかされ。病重りて。死を待つばかりといへども。訪ふ人だにもあらざりしが。彼中吉は心正しく導引の業を過ぎはひとして。主家のやうを伺ふに。主人の病あつしと聞くより。とみに逆井の里に赴き。しひて看病のつとめをねがふに。不興をゆるされ介抱すれども。その日をおくる過ぎはひだになければ。晝は野菜を商ひて飲食の資となし。夜は導引をことゝして主人が藥の料に替へ。夏は枕床を涼しめて炎熱をしりぞけ。冬は肌にあるじをあたゝめ。身は藜麥の麁糧を甞めて。より〳〵鯉魚の羮などすゝめ。誠忠至らずといふことなければ。諸崎おひ〳〵快方におよび。起居もつねに違はねば。ある時。中吉主人にむかひ。黄金五兩を取りいでゝ。吾もひとつの思いれ侍れば。しばしのいとま給はるべし。これより浪華に赴きて。主人の家を再興すべし。大利は時を得てうべく。是を元としこのあたりに小商して待ち給へ。黄金はおのれ理を説きて。主家の支配を勤めたる二人をすかし借りつれば。とかくにいとま給ふべしとて。涙ながらに願ふにぞ。主人も感涙をとどめかね。路資を分つに受けずして。旅行に財は妨なり。身を退きし頃に。習ひおぼえし導引の業こそ。まことに旅路の資なれとて。いと安々と浪華におもむき。おなじきわざにたよりを得て。堂島邊に徘徊するうち。算筆の道くらからざれば。富家のあるじにをしまれて。ことのよし詳に物がたりければ。主家を起すの忠節なればとて。力を合せて得させんといへるにより。諸崎を浪華へむかへ。主從もとよりかの中吉が忠功をあらはさんとて口の内に中としるして。これを家の印とし。今も浪華にとみさかゆとぞ

○江戸靈巖島諸崎庄右衛門がめしつかひ中吉は。遠州佐夜の中山なる農夫勘助が子にして。その忠節前

や。童心百年取捨おなじく。善となく悪となく。幼き時にればえしことは。身を終るまで忘れざることゝ。七情の身に支ふることなく。無我の心一なればなり。左あれば先入をつゝしみて。はじめに善を敎ふべし。これに似たる一話あり。江戸に諸崎某といふ人あり。予が母かたの緣にして。豪富の米問屋なりしが。ある年。伊勢參宮のかへるさに。遠州佐夜の中山に休らひ。ところの名物飴の餠を食ひける時。多くの兒らあつまりて。羨ましげに見ゐたるに。殘りの餠を兒らに分ちあたへたれば。十歲ばかりの童ひとりは交はる兒らをすりぬけて。床几によりてつぶやくやう。人のあましゝ食物など。やはかもらひて食ふべきといへるが。物でしの耳にとゞまり。童のやうすをうかゞふに。負ひたる子を脊なよりおろし。介抱しつる仕こなしのねもごろなること。尋常ならねば。諸崎はあるじにむかひ。幼き兒を負ひたる童は。いづこの家のものぞと問へば。この山かげなる農夫の子にて。このほどこゝら不作にして。過ぎはひしがたきものおほく。われらが家に養へり。童は親の質を繼ぎてや。性直にしてゆがめるをきらひ。調度たりとも曲りてあれば。人しらぬ間に正しく置きて。おのれが食に當らざれば食はず。人のあましゝ物を食せず。訥辯にして用をとゝのひ。善をかたりて惡をいはねば。あはれみ養ひ侍りぬといふに。諸崎しきりにほしくといへば。それこそ彼が幸ひならめと。母と兄とに告げやれば。よろこび來りて。主とゝもに奉公の事ねぎつれば。こゝに主從契約して。中山にて得し者なればとて。名を中吉と改め。召し仕ふに。十年の勤め私なく。すべて主人の非をあげ。諫むることしば〳〵なれば。つひにはうるさく思はれ。忠言耳にさかふのならひ。はては不興をうけ。二十の年に身を退き。ねもごろにせし方を賴みて。しばしがほどは忍びけり。斯れば諸崎のみにかぎらず。財集まれば奢れるならひ。己れに儉を守るとすれども。おのづからゆるす心のいできて。家さへ人にうち任せ。妾宅を營み。庭園の作り商人に超過し。樹木泉石に萬謚の黃金を費し。茶道蹴鞠の遊興にふけりて。遂に家人に禮を薄うし。漫りに淫奔のみをことゝすれば。妻は關雎の戒を失ひ。密夫とゝもに何こへか奔り。從者はこと〳〵く是よりみだれ。下み

務は家を退けられ。轉に家督は定まりけり。後妻つらく〳〵おもふには。佞人こぞりて悪事を企て。事成らず退くといふとも。怨は生涯にわするゝことかたし。子をして仇を得さしむるは。親たるものゝ心にあらざるべし。人の世にある暫しにして。身をば安きに置くにはしかじと。轉を招きてかたらふに。轉云ふ。このごろ詩の羔羊の章をよみさしつゝ。この事母にかたらひて。身を退けんとこをおもへど。母の心をくみかねて。折りこそあれと待ちつるに。はやくも心づけ給へば。仰にしたがひまゐらすべし。われ羔羊の章意をおもふに。羊に數の子をうめるも。先に産まれし羊をこえて。後に産まれし羊の子の。その乳汁を飲めることなく。先後順を違へざること。獸類だにもおのづから道あり。父の遺言を背くに似たれど。兄なる人を退けて。家督の社職を嗣ぎたりとも。悌たる道にかなはねば。獸類にだもおよぶことなし。我禽獸にもしかざる身として。神に事ふといへども。神慮いかでか納受し給ふことを得べけんや。いざ遁世してしりぞくべしとて。兄の務に家督をゆづり。母のふる郷へ閑居して。孝養ます〳〵至れりとなん

○予洛陽にあそべるころ。比叡の山ごえに辛崎の松見んと。高野村なる茶店に憩ふに。この里の名産とて。饅頭をつくりて家ごとに鬻げり。口取にとて出だせるをりから。十歳ばかりなるやつれたる兒の。面ざしのみはいと氣高く見ゆるが。かたはらに來て見居たれば。是を分ちてあたへけるに。取りてそのまゝ食ひしを。家あるじの聲あらゝげ。など戴きて食はざるぞ。いたゞけ〳〵といへども。終にそのまゝ持ち去りぬ。わやくのさかり都の育。左もありぬべきことにやとおもへど。その面ざしのあまりに氣高く見えたれば。兒の御身たちの産の子にや。よき子を持たれしことなりといふに。いなとよ子にして侍れども。彼はさるおん方より預りおけるものなりといふにぞ。げにや氏より育にして。かゝる貴人の子たりとも。その傅のいやしければ。おのづからそのいやしきにうつるべし。人はその地の質を受け。性に有てる土地がらの氣質を。天地は左あらしむるとも。非情の草木だに移しみれば。類を變ふる自然にして。いはんや善なる性を備へし人の際に於てを

んは。客に愛戀の情をうとからしむる恥らひは。只にわらはがうへのみにあらず。親をして人にあなどらしむるの憂に堪へねば。明けて衣服をあらたにして。又のあふせをねぎつべし。それだに母の命を待つのみと。袂に涙をつゝみてければ。商家のあるじも感にたへかね。その過ぎはひに似げなきを賞して。その夜は客をすげなくかへし。明けての契を約すれども。客はかげより伺ひつれば。さきにふたりがかたらひ居れるを。心を合せて材を貪るたばかりとのみおもひとりければ。あくる日の夕樓へは約をたがへて。從者に下知して辻に忍ばせ。玉野を殺せしついでには。商家のあるじも害せんとはかるに。玉野はそこにをらざりければ。商家のあるじと鳥婆の物語して居けるを。二人の者を殺害して。何處ともなく失せたり。玉野は悲歎に肯へがたく。敵の浪華にのがれしと聞き。京都を去りてかしこに潛み。さしも美麗の面を焦し。醜き尼に容をかへ。しのび／＼にからうじて。二年經ざる秋の半に至り。をばせの葬を送れるかへりを待ち。母のうらみを浪華に報い。敵の首を廳に乞ひうけ。都にかへりて母の塚墓に手向け。供養しけるとかや。今は鳥が墓と土人は呼べど。實は妓女玉野を葬りし跡といへり

○ある國の一ノ宮の社司に化名して。羊の大夫といへるあり。妾腹の子を務といひ。後妻の子を轉といへり。羊の大夫老いさらぼへ。年七十を超えたれども。いかなる思慮かありけん。務は三十の歲を經へぬれど。妻をも迎へず家督も讓らでありけるが。大夫が性質懦弱にして。仕ふる神のものいはねば。進退己がまゝにして。心むかざるをりからは。社頭に詣づる勤もせざれば。親を見ならふ子の常にて。務も家に書見る窓はあれども。圍碁すなどりのなぐさみに耽り。終には遊女が色におぼれて。財寶數多費しつれば。父の不興を蒙りて。妾がゆかりに身を隱して。父は病の床にうち臥し。死を待つばかりと人づてにきゝても。わびてかへらんと思ふ志しなければ。家督を弟の轉に讓りて。幾ほどなく身まかりぬ。務は妾の伯父とかたらひ。家督をゆづる證書を僞作し。廳に訴へ出でければ。官令二人の兄弟を召して。社職の道勤を問ふに。轉がこたへ深切にして。務が答。明かならねば。國家を守護する職に疎しと。

人外の魔心を奪はれ。飢ゑさせ殺すべきの惡念を忘却して。おもはずねもごろに食汁をすゝめ。むづかる時は夜もすがらすかして。己が肌にあたゝめ。たのみて乳汁の養ひに。寐る目もねずしてはぐゝみつれば。いとうるはしく長なりて。鳥が鷹を育てしと。人もうらやむ女兒とはなれり。すべて兒女子のおとなびつること。痴情ひとたび去りて。愛態次いでしりぞき。艶情頓に容姿をつくろふ。いかなるえにしか深かりけん。老婆は兒の愛慕に浮かれ。はひまつはるゝにれもしろく。すがりて立つに慰みぬれば。花とながむる折りしもありて。邪のおもひをしばし忘れて。蝶とし見つる時しもあれば。横着のこゝろを刹那に亡し。十年あまりを經るほどに。容色嬋娟として。顏ばせ玉のごとく。その艶麗たる世に絶倫の美女となりしかば。誰かは戀情を憎しみ。かの石女が姤を醸し。怨愛想をやぶりて。養育したる丹誠に慢じ。得しらぬものゝ妻とせんより。妓女ともなしてわが身の樂しみ種になさばやと。舞曲の伎藝を專にならはせ。名を玉野とよびて。遊里にいでゝ。諸客の坐輿をそへるに。みな人こぞりて寵するにひまなく。老婆はおもひひがみて。子といふものをもたぬむかしにまして。玉野が行住坐臥にのゝしり。衣服の飾りも表ばかりを華美につくろひ。裏には木曾の麻衣をつゞれは。はれの舞曲も場うてして。心のまゝに重ねおくも脱がす。かゝれば他ひとの科めを防ぐに。絶えて養母がやぶさかなるもいはで。養育せられし精恩をうやまひ。身は捨てられし親をも怨まで。獨れのれが不德を悔み。疑惑に伐るゝしもとにも。老の力の手弱をなげき。不義に隨ふ貪着には。衣の蜂もしりつゝ拂ひ。出でゝは母の徒然を思惟し。入りては薪水の勞にかはり。洒掃のつとめ。寢食の度。造次顚沛背くことなく。孝情の至れるげに感ずるにあまりあり。ある豪富の商人玉野が美麗なるをもて。わが常に立ち入る貴人へ諂のため。玉野に數金を擲ちて雇ひ。樓上へ誘ひ行きて。媒せんとするに。玉野はその夜はかたくいなみて。逢ひあふことをゆるさねば。いかなる故ぞと一間をへだて。心のほどをあながちに尋ねとふに。玉野は襟をくつろげ。あるひは裳をもたげ。肌着をさぐらせつゝ。斯る胴あつのつゞれをまとへば。帯紐ときて副臥せ

罪人とならんも計り難し。さすればわが徳もすたれて。一人の弟子を失ふなり。ゆゑに今暫しはかたはらにおきて。彼が命をも延ばし。かつは厳しく教誡をもせば。善心に立ちかへることもあるべし。それをたのしみに。わが傍をはなつことをせざるなりといへば。此よしを聞きて。悪僧も師の高恩に感じ。やがて善心にひるがへりしとぞ

○ひとりの躄を車に載せて。十三四歳の子とおぼしきが。綱を肩にかけて曳き。躄が妻と思ふ女の。幼子を脊負ひ。六七歳なる子の手を引きて。道路に食を乞ひぬるを見て。ある人予にいひけるは。かく乞食の際分として。多くの子をまうけ。引きつれてよわたりすること。せん方なきものなるべしと笑ふに。予おもへらく。世はさま〴〵の草の露。うつせばうつるいろ〳〵なれど。よにある人の。親子。兄弟。夫婦の中にへだてありて。國所を別にして。住居する輩にくらべては。たとひ乞食してなりとも。互にむつまじく。此乞食が如くありたきものなり。おもふに。車をひける子は孝子なり。子を負ひし妻は。貞婦ともいふべしといへば。その人笑をとゞめぬ

○京都團栗の辻に。烏の婆こと異名をよべるものあり。はじめやごとなき方の局に。みやづかへしてありけるが。吝嗇かぎりもなくて。勤めのうちにそこばくの黄金をたくはへ。局身まかりて後。兄の魚商にてありける方に下り居て。兄をすゝめていひけるは。斯ばかりの小利をもとめて。魚など荷ひありかんよりは。我たくはへたる黄金を貸して。日々大利を得なんことをはかるべしとて。みづからもあまたの金をふところにして。ひねもす霜雪の寒さもいとはず。夜は三昧のあたりまでもはしりありき。夕に貸したるをば朝まだきに行きてはせがみ。貪欲非道の行ひすれば。人々是にあだ名して。烏婆と呼びにけり。あるは捨てられたる子を貰ひとり。飢に及ばせて。養育にそへたるこがねを貪ることのみをわざにしつれば。いつとはなしに人しりて。子貰ひ婆ともあだ名せしが。ある時。女子の捨子をもらひ。懐にして家にかへるに。その子の美貌いはんかたなく。明けくれ老婆を笑ひ慕へるあどけなき情愛にひかされ。さばかり邪見の悪老婆も。嬰兒が微妙の艶態に。

上げなどして。谷間の岩茸を取りぬるとぞ。下は幾丈とも限り知れざるところなるよし。見し人ものがたれり。もしあやまちて綱のきれて落ちたらんには。命なかるべし。又伊勢の浦にて。海士の蚫取るには。乳のみ子なんど引きつれて。夫はかいをつかひゐて。舟もやひするに。妻は海底に飛び入り。こゝかしこ貝をもとむるうちに。子の乳を尋ねて。よゝと泣く聲の水底に聞ゆるにぞ。今一つ得まくおもへど。子の泣こゑの聞ゆるにひかされ。浮びいで。舟ばりに取りつき。息もつきあへず。子に乳をそふる其の有樣。哀れにして。實に惻隱の心も發動すべし。世わたる業さま〴〵なる中に。かゝる過ぎはひする輩もあるものを。家にありてその日を樂に過しつる身は。いとありがたきことにあらずや

○江戸下谷高岸寺といふに。いつの頃にか。弟子の僧二人ありけるが。一人は身持律義にして。常々寺の爲ともなるべきことのみに心をつくせど。一人の僧は。戒行をもたもたで。大酒を好み。いさかひなどして。よろづ私多かりしが。ある時什物を取り出だして賣るを。一人僧見て。諫を加へけれども。聞き入れざりければ。此よしを住持につげ。かの僧追ひ出だし給はずば。寺の爲にもなるべからずといふに。住持はひと先諭し見るべしとて。きびしく戒めたるまゝにて捨て置きぬ。またある時。佛具を取り出だして賣りたるを聞きて。一人の僧又住持が許に行きて。惡僧この度は佛具を盜み出だし賣りたり。われら諫めたりとて。更に用ふる所もなく。住持もすて置き給へば。ぜひに及ばず。われはゆく〳〵禍の寺におよびて。身にもかゝらんことをおそれおもへり。もし彼れを追ひ出だし給はずば。われにいとまを給はるべしといふに。住持は涙をうかべ。さあらば願ひのまゝにその方にいとまをつかはすべし。惡僧は今しばしわがかたはらに置きて。おひ〳〵諭すべきといふに。この僧大に住持をうらみ。我等いとまを乞はゞ。惡僧を追ひ出だしたまはんとおもへるものを。それをかへりて。罪なき我等にいとま給はること。近ごろ依怙の心にあらずやといへは。住持こたへて。さにあらず。御身は今わが寺を出でたりとも。いづこへ行きても。はや僧一人の勤はなるものなり。惡僧は今わが傍をはなれなば。忽捕はれて。

凡二百五十八あまりもいづるに。その日の朝。田植はじまるころ。近き山中にて。大いなる鷲の犬とあらそひけるが。終に犬をつかみて。虚空へとびあがりたるを。他より一人かけ來りて。田植の長にいひけるは。あれを見られよ。鷲の犬をとりて。空に舞ひ侍るといへば。其長詞をとゞめて。さることいふべからず。今苗の植ゑはじめなり。衆人この事を知らば。みな大ぞら仰ぎ見るべし。さある時は。この苗二百五十束ほどのおこたりなりとて。人には語らざりしとなん。何ごとにても物の長たる人々。かかる心がけはありたきことにこそ

○洛の七條に淨味七郎兵衛といふ釜師あり。家富みさかへて。多くの人を仕ひけるころ。伏見に人相をよくするものありて。ある時淨味を見ていひけるは。御身今は何ひとつ不足なけれども。五十歳を超えて後には。かならず乞食ともなるべきほどのあしき相あり。つゝしみ給へといふによりて。淨味予に問ひけるは。人相はしかとしたる書にも出で侍ることにやといへるに。予答へていふ。人相の書くさ／″＼ありて。その理かならずあることなり。むかし三井寺の永徳僧正の。安倍の泰親に問はるゝやう。われに劒難の相ありやといはれしに。泰親見て。ありと云ふ。僧正いかにしてあることを知られたるかといはれし時。泰親こたへて。かりそめにも劒難などゝ申す事のあるまじき御身をもて。あるにかと御尋あること。則その相のある徴なりといひしが。果して木曾義仲都へ亂入の時。法住寺にて楯の六郎が流矢に當りてうせ給へり。されば御もとも。人相を見せられしところ。則乞食の相をまうけ出だしたるなれば。果したまへといふに。淨味は頭をふりて。身の持ちやうによるべし。相を果たすなどゝは。その意を得ざることなりとて歸りぬ。それより淨味は四十五六のとしよりして。おひ／＼よからぬことゞもありて。その身つひに零落におよび。八年がほど過ぎて。清水坂に乞食となりゐたるを見し人ありとかたりぬ。淨味七郎兵衛は阿彌陀堂といふ釜をはじめて摹せし。釜師の上手なりき

○木曾の山中など深山幽谷にて。岩茸を取るには。蘿(フゴ)といふものを造りて。綱をつけて。夫はそれに入りて。その大樹々の枝より下げて。づりおろし引き

たる唾の。あやまちて平澤が着せし上下へしたゝかにかゝりたれば。供人大にいきどほり。その家に入り。唾を吐きたる者を引き出ださんとす。平澤とゞめて。しばしこの家をかるべしとて。その家に入りて。挾箱より着がへの上下を取り出だして着がへけるに。その家のものども。大勢いでゝ侘びけるにぞ。平澤申しけるは。あやまちなるべし。重ねて心をつくべしとて出行きぬ。供人いひけるは。いかでそのまゝにゆるし置き給へるぞといへば。けふは大切なる主用なり。かゝるさゝいのことに隙取るべきことにあらず。わが常に守れる堪忍は。この事なりといへり。その後また私用ありて。その供人を引き連れ出でけるに。折しも夏のころ。溝のけがれ水を打ちけるが。平澤が袴のすそより下をけがせり。またく供人大にいきどほり。已に打擲にも及ばんとせしを。れしとゞめて行きければ。供人申しけるは。いふがひなきことにて候といふに。左にはあらず。けふは私用にて出でたり。私に人を詈ること士たる者の本意に違へり。たゞ堪忍だにせば。世に恥辱といふことあるべからずと云はれしとぞ

○伊豆駿河の海邊にて。魚の海上にあつまり寄る時は。海のおもて一等高くなりて浪を打ちよするを。ナブラとも。ナグラを打つともいへり。漁夫の詞なり。熊野にても。ショナブラといへり。文字にかゝば。潮魚群の義なり。ナブラは魚群なり。ナブラといふ詞と同じ

○つむじといふ風は。春のころは風地を吹くをもて。土埃を吹き卷きぬ。長閑なる日などに。ふと風いでゝ渦を卷きあぐるなり。辻風なるべし。また西國方に風鎌といふものありて。人の肌をそがるゝなり。そぐ時に傷むことなし。しばらくして破血して。その傷堪へがたし。このことをふせぐには。古き暦をふところにして居るときは。そのうれひなしと。ところの者は申し侍りぬ

○六憎とて憎むべきもの六つあり。その詞に。金持ちて高ぶるほど憎きはなく。書を見ずして物識り顔するほど憎きはなく。人に物をやりて恩にきせるほど憎きはなく。吝きほど憎きはなく。欲ふかきほど憎きはなく。人をそねむほど憎きはなし

○紀州に豪富なる農家あり。田植の日。さをと女。

れども。娘が身受も。彼ら如きいやしき志しの輩にはゆるしがたしとて。聞き入れず。返しつる五拾金を手にも觸れず。坐涯郡村に老を養ひて終れりとかや

○子を見ること親にしかずといへり。奥州の秀衡は男子五人あり。兄錦戸太郎は。常によき馬を好みて。山野を乘ることを勤め。元良の冠者は女を友として遊ぶことをもはらこのみ。伊達の次郎は山川の漁獵を好みて。他のことをせず。泉の三郎は武具を好みて。よき物ある時は。もとめ來りてみづから試み。刃劒なども作物は人にも讓りあたへて。よろしからざるはくじき折りては捨てたりとぞ。何れも文學の道をならはするに。みな嫌ひて。只他の業のみを事とし。泉ばかりは夜を日につぎて。文學の道にこりてつとめけるが。ある時秀衡は子どものこゝろざしをためし見んとて。秋の末つかた金花山へみな〱を伴ひ。山上に席をまうけて。山河の風景を眺望するをりから。子どもをあつめて申しけるは。何れも遙なるあなたの山の尾上に、ひと木の櫻あり。今をさかりと見えて。花の爛熳として開けること。雲かあらぬか。みな〱の目にもさぞかし見ゆらんやと申しけるに。おの〱延びあがり立あがりつゝ見て。いかにも父が仰の如く。さくら花今をさかりと見えて。しかもうるはしく見え侍るなりといふに。泉ばかりは暫ながめつれども。櫻花の見えざりければ。父のかたはらにいたりて。仰に隨ひ見參らせ侍れど。わが眼には花らしきもの少も見え侍らずとて。うち連れてかへりぬ。秀衡心におもふには。花なきをありといひしは。彼らが志を見んとてのてだてなるに。四人はみな實はなき花を。我にへつらひてありといへども。泉ばかりは無き故にこそなしといへり。勇は錦戸すぐれたれども。諂ふこゝろあり。元良は柔弱なり。伊達は義あるに似て勇なく。泉は勇少しといへども義ありといへり。その後。九郎義經奥州に來りて。秀衡をたのみ居けるころ。鎌倉より討手下向の時。秀衡泉ばかりに遺言して。義經を蝦夷へおとし。義名を後世にとゞめたりとかたり傳へたり

○予が友としける平澤何某といふ士は。堪忍づよき人にして。ある時主用ありて。人多く具して行きける道のほどにて。二階より齒みがきをつかひて吐き

とのよしを聞きたりといへば。問屋のいへるは。何處にて聞き給ふぞと云ふに。われ京にて宿の者に誘はれ島原にいたりしに。江口といへる大夫を呼びたり。二年をへだてゝ。上れるごとに行きけるが。この江口はかの師が娘にして。その時。家富へ返すべき金のために。身を賣りたりといへり。左あらば人の難は。いかなる時にあるべきか。定めなき浮世にて。いともはかなきことなりと語りけるに。此事豪富の家の支配する者。かの問屋が方より聞きぬれば。主人にことのよしを告ぐるに。主人は聞くより大に悦びて。支配の者を招ぎて申すやう。その方いかにもして京にのぼり。島原に至りて。江口といへる太夫が身受をもすべし。しかしまづ猪飼が行くへを尋ねゆき。師に逢ひて。わが行届かざるをもよく〳〵わびて歸るべしとて。多くの金を持たせて江口がもとへ尋ね行きけるに。父は郡村といへるところに。少しのゆかりを求めて。今は人の小作して活計とせりとて。泣々文したゝめてわたすに。支配の者よろこび。郡村に至り尋ぬるに。いとわびしき家あり。人の居らざりければ。あたりの者にとへば。野に出でゝをるべし。逢ひたく思ひ給はゞ行き給へとてさし教へぬ。野に鋤を持ちて立居るものあるを。近よりてつく〴〵と見るに師なり。その有りさま在りし姿にかはりて。それとも思はれざりしが。よく見るにたがひもなければ。しか〴〵の事をかたりて。主人がいへる詞を述べて。その時かすめ給はずば。などありのまゝに仰せ給はざるやと云ふに。猪飼申すには。人の疑心は詞をもて解くべきことにあらず。我かく疑を受けぬるうへは。いかほどのことを申したりとも。許容あるべきことなきは人情なり。その時の疑心。後には知るべきこと明かなれども。當意をいかにともせんすべなければ。ひとりの娘をうりて調達じたり。士は不義の物をうけず。況や金錢に於てをや。その方われに逢ひたりとすべからず。はやく去るべしとて。再かへり見もせずして畑を鋤けり。かゝれば手代さま〴〵にわびて。金を戻さんとすれども受けず。しひてそのことをいはゞ。その方の身のさゝはりとなるべし。とくゆけ〳〵と追はれければ。是非なくひと先京に歸り。奈良屋何某といふを頼みて。さま〴〵にわびなしけ

て。掠めまじと極めてもいひがたしといへば。支配のものも云ひけるは。それはきはめて何某なるべし。このほど乏しきまゝに。人しらず掠めたるなるべし。それとはなしに試み見侍るべしとて。ついでがましく師のもとに行きて。これかれ物がたるついでに。云ひ出でけるやうは。このほど其許主人と碁を打ち給へる時。われらそくばくの金を主のかたはらに置きたるが見えず。御もとを疑ひまゐらするにはあらねど。そのをり其席へ行きたる者もなく。歸らせ給ふあとにて。なくなり候まゝ。もしや何ぞと取りちがへありて。持ちかへられもやするかと。心やすさに任せて。尋ね侍るなりといへば。何某しばし打ちかたぶきて云ふやう。さればこそあれ。流浪の身のはかなき。その日のけぶりだにたてがたく。多くの金に目くれ侍りて、人しらず持ちかへりぬ。あはれこの事沙汰し給ふまじ。夜あけなば。その金とゝのへてかへし申すべし。今暫し待ち給はれかしといふに。支配の者家にかへりて。主人へかくと告げたりければ。扨こそとて舌を卷きぬ。それより十日あまりを經て。金五拾兩を持ち來り。詫びて主人にわたし我家に歸り。ひとりの女子をつれて。いづこともなく失せにけり。富家には打ちよりつゝ。人は見るによらざるものなりと。爪はじきして謗れり。さあるに。その年も暮行くころ。煤拂する折しも。座しきのなげしより反古につゝみたる金五拾兩をうち落せり。みな〳〵こはいかにと打ちよりて。改め見るに。過ぎしころ人に貸したる利の金にして。手習の師をうたがひたる時の金なりければ。互に顏と顏とを見合せて。心得ぬことゝ。あつまり談合すれども。その師の行くへかつて知れざれば。是非なくそのまゝにて過ぎ行きたり。かくて五とせをへて。東國より小刀庖丁の類を仕込に來たる尾張の國の商人あり。堺の問屋が見せにて物がたりけるは。この地に手ならひの師を業として。猪飼何某といふ人ありやと問へば。家あるじの聞きて。それは五とせほどあとのことにして。流浪の後乏しく。富家何某がもとにて金五十兩を盜みて。何處ともなく失せたる人なりといふ。尾州のあき人聞くよりはやく。否とよその金は。師が盜めるにはあらず。他の人の盜みたるなり。われらその師の娘にあひて。くはしくこ

の客京へ來りし時。予がもとにて此事を物がたりぬ。田舍には香泉さへ飲すべしらざる人もありけるなりといへり。これは麥のはつたいと違へたる。心得たがひにやありけんと笑ひき

○長樂寺の環了といふ僧。宣德の火鉢を得たり。日に寵愛して。絹にふき袖に撫てゝ。晝夜かたはらをはなたず。ある時。八幡より茶をたつる客來りて。濃茶の馳走ありけるとき。さまぐ\物がたりする折から。傍にたばこ盆はありながら。心なく客の唾を宣德の火鉢へ。火箸もて灰をほりつゝ吐かんとする額を。環了指もておしさゝへ。しばし待ち給へ。こゝに灰吹あり。願はくは是へ吐き給へといへば。客は面目なく。唾を飮みこみて。これはくゆるし給はるべし。常には家にてかゝるふるまひにて候まゝ。それになれて。おもはず不禮せしなりとわびけりといへり。茶の湯は他のことをならふにあらず。かゝることを常にせざるやうにこそ道はたてたるなりと。環了は物がたれり。予これをきゝて額をおさへたるがよきや。おさへざるがよきやとわらひぬ

○むかし泉州に豪富の商人あり。圍碁を好みしかば。この道をもて。世をわたれるもの多く。所々より入り來りける中に。江州にて諸侯につかへたる何某。人の讒によりて身退き。國を去りて。堺に手習の師となり。多くの弟子をあつめて世渡りとせしが。折をりかの家に來りて。圍碁の相手どなりけるに。ある時。主人と碁をかこみ居けるに。その家の支配する者。金五拾兩紙に包みて。得意より來りし貸金の利金なりとて主へ渡しぬ。あるじは圍碁に心を盡し居たりしが。それへ置くべし。あとにて改むべしとて。碁打ちはてて。相手はかへりける後。その金のことを再び支配人の申し出でけるに。主は受取りたる覺なしと云ふに。支配する者はわたしたりとあらそへども。その金の行方なければ。つらく考ふるに。持ち來りしまでは。少しの心おぼえありつれども。手に取らざればいぶかしく思ひて。その爭ひいよいよ止まず。主の考ふるに。その時外に來るものかつてなし。居あはしたるは手習の師たる。猪飼何某のみなり。彼人中々に金などに目の盲べき人にはあらざれども。人はその時の貧困によりては。其志またた變ずまじきともいひがたし。もし乏しきにせまり

れを慢せざるの人なければ。かならずその理に伏すべし

○奈良の二月堂にて。むかしは青竹にて麁末なる茶筅を賣り。老若男女これをとゝのへて。詣でたるしるしとしてかへりぬ。家にありては。是をもて茶をたて。客をもてなすことと南都の風なり。今はこの茶筅たえてなし。むかしを思ふに。青竹の茶筅麁なるに。茶を立てゝ老をやしなふことならはしとせしを。今時はあたひたふとき器にて。茶をして心を勞し。壽を縮むる人少なからず。むかしの人。今の人と懸隔あることかくの如し

○人の身帶を能くすることの傳法は。高きも賤しきも萬事心得あることなり。千石領する人ならば。九百石にてまかなひ。百石づゝ年ごとにあまし置くべし。一家百兩づゝの入用たらば。九十兩にてまかなひ。十兩をあましおくべし。その他はよろづ儉約にありて。吝嗇にすべからず。儉はなすべきを致して。かゝざるが儉約なり。吝はすべきをせずして。惜むが吝嗇なり。儉約は家をおこし。吝嗇は家を倒す

○本三位重衡。平氏さかりの頃。参内の折から。帝より扇の地を給はりける時。ほとゝぎすを一羽畫きたるを折らせられしに。あやまちて鳥を切りはなち。尾のみ殘りたるへ。歌よめと仰せありける時

五月やみくらはし山のほとゝぎす
　　姿を人に見するものかは

とよみたり。又後藤兵衛尉盛次に。平氏沒落の時。重衡逢ひ給ひて。われ馬を射られたり。汝が馬を借せよとありけるを。盛次いなみて。今われ敵と戰ふの時なり。逃げのび給ふには歩にてもありなん。是は雨夜の傘なり。借し参らせじとて。走り行きて戰へりとぞ。ある人かたり傳へたり

○石州なる僧のもとへ。京の土産にとて。香泉を贈る人あり。めづらしとて湯をたぎらせゐるうち。客の來りければ。よき折からなり。京みやげにもらひたる香泉まゐらすべしとて。茶碗の中へしたゝかに入れて。鹽を加へ湯をつぎて。箸もてかき交へ出だしければ。客は心得ねども。まづ一口喫しぬるに。苦みありて飲めざれば。やうやうにして湯もてゆるめて飲みはてたり。僧は頻にしひて。よくば今一椀まゐらすべしといふに。客辭退してかへれり。こ

ら。座敷へ蜘のいでたるを。婢女の扇もて取らんとすれども。とり得ざれば。やがて打たんとしつるを。姉君とゞめ給ひて申されけるは。そと紙もてとらへ包みて。庭へはなちやるべし。かまへて殺すべからずと申されけるに。婢女申しけるは。蜘はそのまゝはなちおけば。數多の子をふやし侍れば。ころし候べしといへるに。いなとよさゝ蟹とて。わらはなど和歌にもよめる蟲なり。猶出でたりとも。かならずころすべからずと申されしとぞ

○夢窓國師の書れたるものに。人は長生せんとおもはゞ。嘘をいふべからず。嘘は心をつかひて。少しのことにも心氣を勞せり。人は心氣だに勞せざれば。命長きことうたがふべからずとあり。鐵枴仙人の賛に

仙人は不養生せず腹立てず
物ほしからずそれでなが生

とあり

○相州玉縄といふところは。荏柄平太が所領にて。平太あやまちありしとき。北條時政のはからひにて。平太に縄をかけて。諸大名の中へ引き出だしたるに。和田義盛が一門なるをもて。九十三騎一黨。頼朝にそむきて鎌倉をやきたり。此とき玉縄の領所を沒入して北條に給ふとあり。亂後和田の輩を尋ねられしに朝日奈義秀一人のみは。その行方をしらずといふ。義秀は鎌倉のみだれより。信濃の國へのがれて。殖科の八代寺に隱れ住み。木曾山に入り。樵夫を業として壽を終れりとぞ。權之頭兼遠が祖なりといへり

○淀川にて鯉を取るに。漁夫水中に入りて。鯉とならび居て。脇へかゝへこみて浮み出づるを抱鯉と云ふ。近きころよりのことなりとぞ。人を諫むるの道も是に同じ。はじめは壹人のあしきことゝ。共にならびゐて。折りよきところにて。善におもむかすること肝要たるべし。人を異見するにも。大かたの人は。その者の非なることを擧げて異見す。いよいよ容れざるなり。まづその人の功を擧げて是を賞美し。かゝる功をなしながら。いかでかさるよろしからざることにおもむくや。よろづ任すべき人がらなるを。たゞよろしからざるの志よりして。今までの大功を失へり。その善に歸すべしとあらば。おの

木なければ。人を雇ひて探りもとむるに。嵯峨に老木の大いなるありと聞きて。多く價を費して。庭園に栽ゑたりけるに。梅をうゑたる日よりして。かの鶯いづくへか行きけん。終に來らずなりぬ

○六徳牒記云。綾羅錦繡もて夜の物を造り。薄ものすずしに蚊のわづらはしきを避くるは。定紋に片意地はりて。紙子に淺瀨を渡ることをしらざるべし。土燒の火鉢ひとつは道具買も遺念なく。紙もてつくれる蚊牒一張。紙屑かふ者の眸をうながすはともあれ。盜人をして心を動さしむることなかるべし。薄紙一重に世塵をさけ。濕をのぞきて寢冷せず。風を入るる時は。水濱にあるよりも涼しく。書を見る時は。螢雪の窓よりも明し。ゐぎたなき姿を人に見せぬばかり夏侯が妓衣の巧にもまされり。晝はまろめて屏風のうしろへ投込み。折目を正すせわもなし。秋去り冬來れば。被りて霜雪のはげしきをも凌げば。一物にして六用あり。彼太宗が歌舞のからうたにはよらねぞ。われ是に名を與へて。六徳の牒とよび。みちこそなけれど。驚きたる山の奥にもおもひ入らす。只このうちに延臥して。やがて出でじとはおもひそみけり

○揭摩乘親は。きはめて面打の上手なりけれども。ひとゝせに一つは打たず。性酒をこのみて醉ひて舞ふことを樂しむ。ある折から老母のいへりけるは。はや米の櫃には蜘の巢をかけたり。勤めて打つべきにやとせめければ。乘親おどろきて。さあらば今日よりして。懈らず打つべきなりとてこもりけるが。四五日を經て。面を打ちてあつらへたるかたへ持ち行き。料を持ちかへりて。母にわたしければ。母よろこびていへるは。多くの金を得しは。面いくつ打ちたるやととふに。八おもて打ちたり。されども心にかなはざるが。その中に七面あれば。みな家にのこせりとて。取り出だし見せたり。鬼女の假面なりければ。見るさへおそろしとて傍におきけり。その夜盜人入りて。親子臥したるを伺ふを見て。母かの鬼面を顏におほひて。眼の穴より見ながら。やよ盜人の入りたるぞ。乘親おきよといひけるを。盜人見て。あとさけびおどろき。いづくともなく逃け失せぬとぞ

○何がし大納言の姉君。重陽の酒宴せられける折か

ざるをなげくべし。朋友たがひに人の不信をなげかずして。おのれが誠の及ばざるを歎くべし。君として臣の過をかくすは仁なり。臣として君の非を隱すは忠なり。親子。兄弟。夫婦。朋友互にその過をかくす時は。慈。孝。哀。敬。貞。順。信。誠おのづからその隱せる中にあるべし。僞も表を包むまでのつくろひにしてやむべし。飾るとも僞のために誠の本を失ふべからず

○年わかくして色なければ。無骨にしてしとやかならず。老いて色なければ慳貪にして邪見なり。世に色氣といふは。專愛敬のつやをかねいひて。あながちに婬欲のみにあらず。士として色なければ。人なづかず。農として色なければ物育たず。工として色なければ巧みなく。商として色なければ人問はず。天地の間。何ものか色なくしては。一日も世に立ちがたかるべし。孟子にいはゆる大王色を好むの辨おもふべし

○人倫の交り。慈の心より出でざるときは。仁。忠。慈。孝。柔和。愛敬その信ことごとく人情なし。親の子をおもふ心。死なんと覺悟したる心。この他は誠なし。此誠心戀慕よりいでゝ。戀情なき時は。不仁の君に忠を致すものなく。不慈の親に孝を盡くす者なし。遠くは顏淵が吾猶能せんの詞。近くは右近が忘らるゝの歌。たれもひやるべし。古歌に

戀せずは人は心のなからまし
物のあはれもこれよりぞしる

○鬢鏡附言に。奏公に主君の眼鏡あり。召仕ふものをして人と成さしめ。慈悲に親の目鏡ある。子をして善となさしむ。予に鬢鏡あり。人の一寸と遠方を見ずして。吾身の一尺と足もとのことを見せしむ。若その袖のくもりを日々に拭ひて。おのれが魂を見ぬけば。假令照摩天眼の名鑑ありとも。求むるに足らず。世人鬢鑑を懷にして。他の是非と世の善惡を。見出だすことあるべからずといふ

○穗積氏の老母。昌貞尼は。洛の高臺寺に隱居す。風流世にすぐれたり。騷客門に充てり。庭前十畝ばかりを。柴として苅ることなし。世人これを取り殘しの柴とよべり。蝶の來るを待つなり。また庭園に鶯日ごとに來り鳴くをよろこぶ。梅なくてあるべからずとて。洛東にもとむれども。心にかなひたる古

驕はわづか茶飯に酒の半椀を加へ。儉はあまねく大根葉割麥の粮を守れり。日々に琢磨の功成りて。ひかり家內の繁榮をてらす

○大原女の贊に。力は蘇子が薪水の勞をたすけては。辨は口が北廓の才をも諫む

　さくら花大原の山に折る音の
　　をうなが業と誰かおもはん

○神佛を信ずる の法は。神佛同體の印をむすびて念ぜざれば感應なしとぞ。されば天の惠を受けんと祈る者も。天のなすごとく私なくする時は。惠なしといへることあるべからず。人とまじはるは。人と同意たるべし。神の心は鏡の如し。佛の心は光りの如し。天の心は依怙なく。人の心は人と同じ

○人善に動かざるものは。惡にも動かず。この念こゝに生ぜざれば。彼念かしこに生じ。轉變してしばらくの間も止む事なきものは心なり。此出づるところをよく知らざれば。惡を退けて善を行ふことありがたかるべし。善は人の本心にして。常の持つところのものなり。惡は念より起して。他より入り來るものなり。耳目鼻口の取り次ぎ。心の善なるあるじに告げて。萬の事をなすは。召仕ふ人と同じ。その召しつかふものに善をこのむあり。惡をすくあり。此二つを差別すれば。五常みなその中に立つべし。おのれが心の好むことのみを致して。嫌へることをさけぬるは。則私のいづるところなり。人としてこの私を勝手として。よろづ行ふ時は。獨して圍碁の上にあるがごとし。おのれにまされる人と圍むとき。心轉じて勝手を得ず。私欲をすてゝ決斷する時は。大節にのぞみて智力を遺すところなし。行ひたゞその見ざる所をつゝしみて。聞かざるところを恐るゝ外なし

○主人はおのれが仁のおよばざるを歎きて。臣の不忠なるを尤むべからず。臣はおのれが忠の及ばざるをなげきて。主の不仁なるを怨むべからず。親はおのれが慈悲のおよばざるを歎きて。子の不孝なるを諭すべし。夫は妻の不貞を歎かずして。おのれが和の及ばざるを歎くべし。妻は夫の不和をなげかずして。れのれが不貞なるを歎くべし。兄は弟の不敬なるを歎かずして。れのれが不哀のおよばざるを歎くべし。弟は兄の不哀をなげかずして。おのれが敬のおよば

の如し

早く損ずれども。木でするものを土で造り。土でするものを金にて拵へず。木でする物は木にてつくり。土でする物は土で造るべし。金でなるものは。金にてつくるべし。調度は損ずるをいとひて。木土にて濟むものを。金にてするはよろしからず。秋篠與平とあり

○常陸の國風に。疫癘。痲疹。痘瘡など流行の病あるときは。鹿島太神へ祈念して。里民歌を唄ひて踊ることあり。その歌に

誠やら伊勢と春日の御社。彌勒茶船がつゞいた。舳艫には伊勢と春日の御社。やしろでは何がおもしろい。護摩んどでは護摩をたく。御手洗(みたらし)ではちごが垢離(こり)とる。その護摩をなんとたきそろ。氏子繁昌とたきそろ

○猫を飼ふもの。多くは猫をやしなふことをしらず。飯をあたふるに鰹ぶしを入れ。肉味を加ふ。猫は常に厚味を食とする時は鼠をとらず。猫は麥をたきて。味噌汁をかけ與ふべし。その他の食をあたふべからず。常に肉食にならはすれば。肉なき時は。必他の家にいたりて魚肉をぬすめり。人を養ふも亦復しかり

○影法師問答の文。汝吾うまれし時より。吾かたはらに在りて。しばしの間も離るゝことなしといへども。わが親にもあらず。子にもあらず。主にも召しつかひにもあらず。妻にもあらず。めのとにもあらず。只あけくれ。吾なすことのみなして。更に他の業をなさず。よろこぶことなく。怒ることなく。あはれむことなく。樂しむことなし。おもふに目しひたる者を友とすれば。是を見せんとするにわづらひ。耳しひたる者を友とすれば。これを聞かせんとするに煩ひ。啞を友とすれば。是をさとらせんとするにわづらふ。汝。今吾有なるによりて。汝が無を守るとも。吾又汝が無によりて。吾有を守るところをしらず。そも〳〵なんぢは吾影なるか。はた又人の影なるか

○飯釜の賛に。萬鎰に募るの勤めにおけるや。明けくれ。いとま明なければ。飲食に乏しからず。人の世にある是とひとし。此ものゝ徳たる。孝に鐺底の焦を削りて。冥理に湯の粉の洗ひながしを捨てず。

して。二十一年ほどは。京にくらしつれども。不仕合なること打ちつゞきて。歳はより。目はわろし。少しのしるべにて。今はこの地に老い朽ちぬるなり。茶の湯といへることも。はじめはかゝるすさびより起りけるにやなどいひつゝ。菓子を椀に盛りていだしつれば。予とりて見るに。たゝらの木の芽に味噌をくるみて炮りたるなり。珍らしき口取かなとて。いとうまく食ひて。茶數椀を過ごしけるうち。主の申すは。我等京に在りし頃。數々の茶人宗匠など馴染まゐらせて。茶席にも迎へられ。薄茶たつることも習ひおぼえ侍れど。大かたの人は。茶の湯を別のことのやうに心得給ひて。あつらへ物等もいとむづかしく候。東山にて何菴とか申す宗匠の建てたる席を羨ましく思ひて。その好みのかたに建てたしとて。注文取りしに。床板を松にして。節七つあるを好めり。我等思ふには。いかなるわけにて。節數七つある板をもとむるにやといぶかしさに問ひければ。師の建てたる席に。床板の節七つありければ。それを擬するなりといへり。笑ふべきの甚しきにあらずや。師の造られしときは。定めて節なき板のなきまゝに。ふしある板にてせられしなるべし。さあればいかに師のあとを慕へばとて。わざ〳〵疵あるものを求むるは。道を嗣ぐにはあらで。顰にならひて。師の疵をあらはすと同じかるべしとおもへり。この道は只きよらにせよといふにはあらず。きたなからずあり度。道具とても足らぬ所を。何かにてその時の間に合するを馳走とはするなるべし。すべておもしろきことは。足らぬところにありて。足り過ぎたるに雅なることなし。人にはみなくせありて。さま〴〵に好みを致せども。くせを捨てざれば。風流の道人にはあらず。理に入りて理を遁れたる人ならねば。茶好といふのみにて。茶道の人とは思はれ侍らずとて。その立居ふるまひなどおくゆかしく。この者を連れ行きて。家にて養ひおきたく思へり。何か書かせ。みやげにもしたくと乞ひけれども。無筆なりとて遂にかゝずなりぬ。予はあまりのおもしろさに。記念にあるじが造れる卒都婆を一本求むべしといへば。めでたからぬものなり。やめ給へ。さあらばかねて書けるものあり。是を參らすべしとて。反古の中より一ひら探り出しゝを貰ひて歸りぬ。その文左

へば。猶ほしとおもふこと。いまた飽くことをしらずといふに。亦右衛門また申しけるは。さあらば此こがねを倍することをば。是を限りとして給はれかし。我等は命こそ寶なれ。命ありてのうへの財なり。命なくては財ありても益なしと申すに。主人云。我はまたその方とは心得かたははるかに違へり。財を持ちてこそ。世にあるかひもあれ。命ありとて財なくば。生きてのかひなしとおもふといへば。亦右衛門は十萬兩を主人にそのまゝ奉り。けふまでのことは。奉公の身なれば仰にそむきがたし。今より我身には願の侍れば。暇給はりて。このうへのことはゆるし給へかしとて。いとまを乞ひてわが家にかへり。若干のこがねを緣ある輩に配り分ち。身帶をしまひ。頭をそり。圓智坊と改名して。大融寺の徒弟となり。京へいでゝ庵室をかまへ。日々に托鉢して洛に終れり。そのゆかりの者。大融寺に塚を建てたり。石に刻める辭世の歌に

落ちて行くならくの底を覗きみん
いかほど欲のふかき穴ぞと

○洛に須藤健十郞といふ人あり。温厚篤實の儒者なり。予が東山に居寓せしころ。醒が井に住みけるが。四條を通行することはなくて。用あるときは五條。三條をまはれり。遊里。芝居などの道はさけて通らざりけり。常に儉約を守ることを。專。人に敎訓して。みづからは木にて鯛の形を彫ませ。常に膳部のかたはらに置きて。一肉の美味須臾の舌頭にあり。大丈夫何ぞ飮食に心をもちふることをせんやといへり

○生駒山を越えける日。秋篠といふ村はづれに。如意輪觀音を安置する堂あり。さすが名におふ山色風景。郊野の眺めもおもしろければ。此堂に立寄りて。たばこくゆらしけるに。堂守とおぼしく片目しひたる男の。卒都婆を造りゐたるを見て。主は細工せらるゝにやといへば。削りさしたる卒都婆をかたへに置きて。圍爐の灰かきならし。かんな屑焚きて。ふるびたる鑵子に湯をたぎらせ。茶澁のつきたる茶椀を丁寧にあらひそゝぎて。大坂よりもらひし茶なりとて。懇に煎じあたへぬ。予も心よく二三椀を喫して。しばし憩へるうち。主のいへるは。我はもと此地の產にてもなかりしが。もと調度のさし物を職と

明けくれ心を盡くし。費をいとひ。家業を大切にするの志滿足せり。今その褒美として。金百兩のもとでを遣すれば。これをもて何處へなりとも。その方が心に任せ。家を持ち出精して。千兩の利倍を得ずんば。再びわが家へいで入るべからずといへるに。亦右衛門は忝くおもひ。かの百兩を受けとりて。禮を謝し。いとまをつげて京都に登り。つら〳〵おもふに。商の道多かる中に。大商して大利を貪らんとする時は。かへりて必損失あるべきこと常なり。かかれば日々に費となるものを賣りて渡世とせば。小利といへども益あるべし。その中。紙は利のうすきものといへど。日用多きものなれば。唯庵紙の捨たるべきをあきなふべしとて。西の洞院に所帶して庵紙を業とし。紙屑を買ひて。漉かせては賣りけるに。百兩をもと手として。三とせばかりがほどに。三百兩の利を得たり。又その金にて廣く家業をなしけるに。また五年に千兩にもなりければ。やがて浪華にいたり。主人にまみえて。かねて給はりし百兩を八とせかせぎつるほどに。千兩にはなし侍りぬとて。主人へこのよし申しのべたりしに。主人大に賞美し。その方わが家に勤めしころより。尋常ならぬ志と思へるゆゑに。かくはいひつけたることなり。こたびはこの千兩を持ち行き。一萬兩にすべしとありければ。畏り。又五とせをもへざるうちに。一萬兩に倍して。主人の前へいでゝ風聽しければ。主人また大に賞美して。この一萬兩をこの度は十萬兩にして見すべしといへるを。亦右衛門かしこまり申しけるは。はじめ給はりし百兩を千兩にいたし。その千兩を一萬兩にいたすまでは。ほねをれ侍れども。此一萬兩を十萬兩になさんこと。何の子細かさむらふべきとて。三とせも經ぬ間に。十萬兩に倍して來れば。主人その働きを感じて。その辛抱この上は差圖すべきにもあらねど。この度は百萬兩にも倍すべくとあれば。亦右衛門こたへけるは。十萬兩のこがねを以て百萬兩にすることは。辛勞するに足らざるなり。さて承り侍り度ことあり。當時主家の御身帶いかほどの御儲にて侍るにかと問へば。主人こたへて。わが身帶にはいかほどゝいふかぎりもあらざるなりといへば。さほどのたくはへおはしても。その上にも猶こがねをほしと思し召しさむらふにやとい

念が書きたる一枚起請と。辭世あり

隱居一枚起請

もろこし我朝のもろ〳〵の智者達の致し申さるゝ隱遁の隱にもあらず。又學問して。道の心を悟りていたす隱遁にもあらず。只不用の者の爲には。世の妨となるまじとさへ心得れば。疑ひなく氣樂なるぞと思ひとりて。隱居するより外。別の子細はさむらはず。但し肝心の世わたりと申すことの候へども。みな衣食住のうちにこもり候なり。この外に慾深きことを存せば。諸人のあはれみにもはづれ候べし。假令。薦をかぶり。糟糠をなめ。人の軒端に臥せるとも。食ひては寢。食ひては遊ぶ君が代のありがたきを忘れば。身は安樂になりたりとも。生きたるかひもあるまじく候あなかしこ

辭　世

來て見ても來て見ても皆同じこと

こゝらでちよつと死んで見やうか

此法師尋常の者ともおもはれざれども。京にては。只念佛坊主とばかりよびて。その行狀を知る人まれなり

○有馬に湯あみせし時。日暮れて。湯桁の中に耳目鼻のなき瘦法師の。ひとりほと〳〵と入りたるを見て。予は大に驚き。物かげより窺ふうち。さう〳〵湯あみして。出で行く姿。骸骨の繪にたがふところなし。狐狸どものわれをたぶらかすにやと。その夜は湯にも入らで臥しぬ。夜あけて。此事を家あるじにかたりければ。それこそ折ふしは來り給ふ人なれ。彼女尼は大坂の唐物あき人。伏見屋てふ家の娘にて。しかも美人の聞えありけれども。姑の病みておはせしとき。隣より失火ありて。火のはやく病牀にせまりしかど。たすけ出ださん人もなければ。かの尼とび入りて抱へいだしまゐらせし人なり。その時燒けたゞれたる疵にて。目は豆つぶばかりに明きて。物見え。口は五分ほどあれど食ふに事たり。今年はや七十歳ばかりと聞けりといへるに。いとあり難き人とおもひて。後も折ふしは人にもかたりいでぬ

○浪華に紀伊國屋亦右兵門といへるは。大家の商人なりけるが。そのかみ。年まだ若かりしころ。本家何某につかへて。正直なるが故に。主人是をあはれみ。その方わが家につとむること。凡十餘年なれども。

惡のみをあぐれば。善人もあしくつたへ。善のみあぐれば。惡人もよき人のごとし。難波次郎は無道の君につかへたれば。至孝誠忠ふたつながらうづもれたるは。いと口をしきことならずや。もしその仕ふるところの君。君たる人を得ば。實に臣々たるの士とやいふべき

○一休禪師紫野におはせし時。宅間何某御こゝろやすく參りて。物がたりのついでごとに御異見申すやうは。君には尊き御僧にておはしませども。餘りに打ちつけに人を教化したまへば。在俗の輩は物いまひなどいたせるものどもばかりにて。かへりて弘通に便よからで。志あるものもはては遠ざかり侍るなり。不凡のやからは格別。凡夫にはとかくめでたき事を申させ給はりたし。さあらば悦びて歸依し參らする者多かるべし。なべて人はよろしきことは。己がことゝばかりおもひて。あしきことはみな他人のうへとのみ心得るならひにて侍るぞと申したるに。禪師こたへて。よし〳〵心得たりとて。筆をとり給ひて

佛家に住在すれば。いましめを以て本とし。三寶の海に入れば。まことを以て本とす。身死して巖根にありては。骨また淨し

と書して。これより外にめで度ことはしらずとの給とへりとかや

○都近く岩はなといふところあり。そこの念佛堂の庵主を正念坊といへり。もとは黑谷に居て。念佛の上手と呼ばれ。日々京へいでゝ托鉢する人々。その聲のよきにめでゝ。米錢多く施しけるが。此僧寺にありて。飯を焚きたる時は。櫃にうつして肩にのせ。持佛の前の位牌あるところを。一遍づゝまはりながら。それ饌（かげ）。それ饌とて持ち來り。その後。人にも食はせ。自も食ひて。別に佛器などへは盛りても供せず。茶湯もこれと同斷なり。さればとて何にても佛前へ持ち行きたる上にあらざれば。食するとなし。漬物の壓にも石なき折は。境內に建てたる石地藏を持ち來りて。鹽梅よくつけて下されかしとて。のせ置きけり。統べてかくの如くのふるまひして。更に物にかゝはらず。肉食すれども。決して寺にて食することなし。女犯もあるまじとはおもはれねど。寺には老婆をも嫌ひて。丁稚下男のみを仕へり。此正

○ある人予に畫を學ばんことを乞ひて。さて云ふやう。僕畫を學ばんとおもひおこしゝよしは。他の物を畫くことをもとめず。たゞ富士と達摩とのみを畫きたしといへり。それも上手とならんことを求めず。富士はいかにも富士と見え。達摩はいかにも達摩と見ゆるやうにかきたしといへり。この詞。尋常にきこゆれども いとおもしろし。すべての藝。何によらず。このところをよくわきまへぬる時は。過不及あるべからず

○ある諸侯隱居せられて。副邸に宗廟をうや〳〵しくしつらひ。朝暮廟參の折は。天地大恩の報謝。太平主恩の報謝。先祖代々高恩の報謝とのみ唱へられて。他の勤行なし。何某の僧正といへるが。この侯にまみえしとき。など後世のことは御願ひなきかと申されければ。後世の事は。予がねがはんよりは。人の念じれけるが多かれば。それをもとめんとれもふなり。予はそのよくねがうことの熟したるものに布施して。後世の事は買ひ得んと申されたり。此侯よく後世の道をばわきまへられ給ひしにこそ

○平氏の士の傳を書きたる中に。難波次郎が篤孝至純のことを載せたり。次郎が母は小松殿の乳人に仕へて。嚴直大慈ふたつながら全く。歲六十にして故鄕に歸り。攝州難波に住す。居るところ蓬蒿人を沒し。家きはめて貧しかりしが。次郎常に母に仕ふること。いよ〳〵恭謹にして。農業のいとま。薪を負ひて市に鬻き。身に被袴なしといへども。母には滋味を盡くせり。後平家に仕へて。邸を洛中に給はり。母を迎ふるに。母行かずして云ふ。老嫗歲すでに六十に餘れり。世に在る日少し。汝今官に仕へ。身を立て家を起すの時至れり。さあるにひとりの老嫗の爲に心ひかれて。奉公に懈らば。忠を盡くし名をなすの妨なるべし。われ飮食だに足らば。都へ出でゝ。榮耀にほこるの志なしとて。迎の輩を洛へ歸して。自害して果てたり。次郎悲歎に堪へずして。しばしのいとまを乞ひ。故鄕に歸りて。老母のなきあとをとぶらひ。洛に立ちかへりて。淸水寺に供養の地藏燈をいとなみ。いよ〳〵忠勤をはげみ。相國につかへたりといへり。この事平家ものがたり。盛衰記などに見えず。かゝる忠孝をあげずして。させる功もなき人のやうにしるし傳へたるこそ恨なれ。人は

吉右衛門が足を洗ひつかはすべしといふに。背かずして洗ひ給はるに任せたり。この一事を以てよろづの行ひ違へるところなきを知れり。篤實の性。人のそねむを愍み。他の人をたのみて異見をなし。己に敵するものをよくするを以て。終にはあしき輩も隨へり。陽報を待つ心少しもなくして。人しらず隱德を施し。家業のいとまある時は。往還に出で丶路を造り。溝あるところへ橋をかけ。只後事のためのみに志を盡くすこと。あげてかぞふるにいとまあらず

○むかし江戸なる山の宿に。大捌助八といふ糯の問屋あり。助八の人となり。性直にして義をこのみ。義に違はざる行あるものをば賓け。義に違ふものは豪强の士たりとも是を許さず。常に德行ありて。俠者の聞えも知らざる人あらざりき。ある時。過ちて人を殺し丶者の。捕れて町の番屋に預けられしが。其者のいひけるは。大捌ぬしに逢ひまゐらせ度ことの侍れば。今宵かのところへ連れ行き給はれかしといふにぞ。此よし助八につたへければ。いかなる者にかとて。助八行きて伺ふに。かつて見しらざるものなれば。その方は予がいまだ知らざるものなり。何の用ありて逢ひたきよし申すにかといへば。その者答へていへるには。我等口論のうへにて。あやまちて人を殺し侍れば。死はいさ丶かも悔いざれども。一人の老母あり。我等死し侍るときは。母必飢に及びなん。たゞそれのみ心にかゝり侍れば。一旦命助かりて。母を養ひ送りて後。死につきたく思ひ侍れば。いかにもして命を助け給へかしと。涙ながらにひたすら賴みければ。助八聞くよりあはれに思ひ。孝心の者にはあるまじき。わづかの口論より事起り。過ちて人を殺すこと。言語に絶えたる愚者といへども。孝養の志にめで丶たすけつかはすべし。母を大切にせよとていましめを解きてれひはなちて。みづから此よしを廳に訴へ出でければ。罪人を私に逃しし罪輕からずとて。助八をとらへ。罪人を尋ね出だすまで。禁獄せしむべしとて。三年が間。獄屋にありしうち。助八は病みて死せり。尸は身よりの者。同じ町なる易行院に葬むる。その妻次ぎて助八が墓所にて自殺して。同穴の契りむなしからず。今にその寺にあり

りたくはふるにもれよぶまじきとにこそ

○飛喜百翁が利休を招きし時。西瓜に砂糖をかけて出だしければ。利休砂糖のなき所を食ひて歸り。門人にむかひ。百翁は人に饗應することをわきまへず。我等に西瓜を出だし丶が。砂糖をかけて出だせり。西瓜は西瓜のうまみを持てるものを。にげなきふるまひなりとて笑ひ侍りき

○蕃椒はすぐれたる功能あるものなり。統べての藥種にさま〴〵の能毒をしるせども。さほどにはあらず。五穀をはじめ。酒。酢。醬油。衣服。調度のたぐひに。多く入れ置く時は。かび生ぜず。虫の喰ふことなし。山野幽谷の靄霧。家内濕露の氣を避くるには。この物に過ぎたる藥なし

○唐の太宗の時。州郡に寺院多きがゆゑに。國郡これが爲に迫められて。民耕田に餘なしと議して。國々の寺院を沒入すべきよし決定しければ。太宗の給ふやう。畫圖に寺塔あるもまた風韻尋常ならざるものなりと仰せありしより。寺を沒入することをやめたりとぞ

○ある人の妻。夫の爪を取りぬるをとゞめて。けふは辰の日なり。爪を取り給ふべからずといふ。傍の人これを聞きて。いかなることにかと問へば。辰は龍なり。龍は爪なくてかなふべからず。大切の日なりといふ。かたはらの人笑ひて。さあらばそのもとは。酉の日ばかりに時をつくりて。雄鳥をすゝめらるるにやといへば。その妻大いにいきどほりぬ

○女はみめの美しきが寵せられて。心の正しきを愛する人はまれに。物は形のめでたきを好みて。意のおもしろきを取る人は少なし。ある家の妻は美人の聞えあれども。妬心ふかくして。夫の放埒なるをいきどほりつゝ。常に爭論絶えざりしが。ある時妬みの餘り。夫の留守に縊れ死にたり。夫も大酒のために吐血して身まかりぬ。妻の名を壽といひ。夫の名を福太郎とよべり。人は名よりも行にあり。松竹に千とせをいはひ。龜鶴によろづ代を比したりとも。家を治むるは和合にあり。長生は養生にありとしるべし

○勢州關の商家に。吉右衞門といふものあり。實母に孝養至り。四十餘歳のころ。家業に出でゝ歸りける時は。その母いとけなきをりからの心を抱きて。

又も茶の饗應あらば。いかばかり迷惑すべし。はやくいとま乞ひして。歸國するにはしかじとて。あくるを待ちて發足せり。後に權兵衞予がもとに來りて。願ひたきことの候へといふに。いかなることぞと問ひければ。過ぎし春。伊勢にて耻を得しこと侍れば。茶の手續を敎へ給はるべしとて。しか〴〵の事を物がたり。今にわすれがたくはづかしく。又口をしくおぼえしといふに。予大にわらひて。そのもとは日ごろに似げなき不見識の人なり。農夫は農家に人となりて。農業のことにだにくはしければ。耻かしきことなかるべし。茶はもと隱遁の手すさびにして。その道日用に足れりといへども。農夫町人などのいたすべきことにあらず。世をのがれし隱居の後などはともあれ。其許もし茶を學ばゝ。一村みなこれにならひて農時にをこたりなば。田畠はこと〴〵く不作なるべし。村長茶道を知らざるが故に。耕耘収藏時にたがはず。國中百人耕して五十の遊民あらば。その國かならず飢ゑぬべし。百人耕して十人あそばば。その國果して豐なりといへば。權兵衞感じて。茶の湯を習ふ心をおもひとゞまりぬ

○五堪忍といふことあり。聖賢の旨趣よりいでゝ。世業をなすの基。人間安穩の大悟にして。脩身齊家の樞機なり。是を守る時は。勞する事なくして家富み榮ゆ。是を守らざる時は亡ぶ。衣服は何の爲にか着る。寒さを凌ぎ。暑さをいとはんが爲なり。さあらば寒からず着。暑からず着ば。麁服にても厭ふことあるべからず。美服に奢るは。いまだ寒暑の身にゑまざるが故なり。寒暑のにしみなは。筵。裸にてもいとふものあるべからず。食事は何の爲にかする。空服をやめん爲なり。さらば添物はなくてありなん。添物なくて食の進まざるは。いまだ飢の至らざるなり。飢至る時は糟糠をだもきらはず。家は何の爲にか造れる。雨露をいとはんが爲なり。さあらば無益の造作などなくてありなん。水火の災に家を失はゞ。人の軒端にてもいとふ者あるべからず。妻は何の爲にか持てる。子孫を嗣がん爲なり。さあらば子孫あるものは。妾などもたであるべし。妻子あるが上に。妾を持つは色におぼるゝが故なり。財は何の爲にか求むる。世計の第一。衣食を足らしめんが爲なり。さあらば義をかき。恥をもわすれて。貪

と問ひければ。わらはゝ奈良の角振といへるところの者なるが。母の身持よろしからで。人にかたらひ家出し給へば。今は父もなくなり。家のあとつぐべき者も。あしきことありて何國へか行き侍れば。せんすべなくて。母の大津にましますと聞きて尋ね來つれども。今に逢はず。乞食となりしは。京にてあしき者にたばかられて。袖乞せりといふより。磯貝夫婦はよく〳〵見るに。妻が子なりけれども。いひもいでず。郡といへる所に乳母のちなみあるを。人に文そへて送らせ。そこに暫し住ましめおき。後に他へ嫁せしめきとぞ。人の因果は過去の業といへども。善惡の應報三世はまたず。はやく現世に報ゆることかくの如し

○江戸葛飾のほとりに權兵衛といふ村長あり。ある年の春。伊勢大神宮へ太々神樂を奏せんとて。村民十三人とゝもに。御師何某が家に宿るに。山海の珍味を盡くし。馳走ありて後。おの〳〵に薄茶まゐらせんとて。案内して茶室へ招き請じければ。かの村長を始として。十三人席につけば。御師は丁寧にあいさつして。心を配り。茶を建てゝ。權兵衛が前に出だしおきけれども。農夫の身なれば。茶道の心得はいさゝかもなければ。大に心をくるしめ。塲うてして思ひけるは。いかにして飮むべきか。人の咄にも茶は飮みたる上にて。順にまはすなどゝ聞きしが。十三人へ一杯ばかりの茶を。飮みかけまはしたりとも足るべからず。又ひとりして飮み。他のものへ鼻あかせんこといかゞなれども。われ村長の身として。今更聞きて飮まんも口をしきことなりと。さまざま心のうちに思ひめぐらすうちに。御師は先に出だしゝ口取菓子を。村長が前へさし出だし。いざ召させ給へと云ひければ。はつと茶をとりあげて。殘らず飮み。前におきければ。御師は取りて茶椀をそそぎ。又建てゝ村長がまへに出だしつゝ。いざ菓子を取り給へといふに。この度は菓子を取りて食ひ。また茶をのこらず飮みて前におきければ。御師又取りて。もとの如くたてゝ。又村長が前へ出だす。村長いひけるは。我等はもはや澤山くだされたりと云ふに。さあらば次の方へ御おくりあるべしとて。この順にして各一椀づゝ飮み。辭退して座しきへ入りて。おの〳〵ひそかにその心勞をもの語りつゝ臥し。

まひありて。天下の酒客ともいふべし。たゞ酒好にて。大酒するやからは。生酔の糟喰ひなり。人も器物もつかひ過ぐれば損じ。つかはずに置くときも損ず。息災はみな中庸にあり。過不及なきはよろづ長くたもてり

○小人閑居して不善をなすとあれども。小人ならずとも閑居して不善をなすもの少からず。されば獨居の閑をたのしむことはいとかたし。おほかたは據なく隱居する輩世間に多し。自得して世塵をさけ。思ひすてゝ身を遁るゝものは格別にして。隱居しながら物を貪り。世路に執着するは。隱居に似て隱居にあらず。近世は隱宅に標札多かるにても知られたり

○愚者は不用の財を貪るに勞し。賢者は用の財をつくるに樂しむ。不用の財は限りなし。用の財は限りあり。限りある身を以て。限りなき財を求めば。死に至るまで貪欲盡くることなし。されば身を勞して財を集る時は。その身終れり。用の財は用の足ることを樂しむゆゑに壽を養ふ。財に不用といふことあるべからずとおもふものあれども。日用の外を散ずる財は。みな不用の財なり

○昔奈良に磯貝といふ墨師あり。予が父世に在すころは。その家盛にして。他國へ墨を商ふ人多く。職人も數多なりけるが。人の妻と密通のこと隱れなくして。その地に身をも置きがたく。その妻と共に奔りて。近江の大津驛に。手跡の師となりて世をわたりぬ。五年ほどを過ぎて後。その妻の奈良に捨て置きたる女子。父におくれて便なく。人を頼みて母の大津に在すと聞き。したひいでたれども。伴はれたる者こゝろよからぬ輩にて。京にある內。この女をそそのかし。こゝかしこさまよひありくうちに。もたらしつる衣類。そこばくのこがねをも奪はれ。終には乞食となりて大津に至るに。いと雪の多く降りたるころ。磯貝が住みける家の軒端に。女子の乞食薦をまとひて打ち臥し。なやめる聲の聞えければ。夜半に磯貝は扉をひらき。伺ひ見るにひとりの女子なり。不便におもひ。妻にこのよしをもの語るに。妻も故郷に女子あることを思ひつゝ。やがて介抱して內へ入れ。土間に筵を敷きつかはして臥さしめ。明日を待ちて出だしやる時。何處のものゝ身の果にや

ゑて。書籍をひらき置きて見居けり。其行篤實にして。常に机上には書をひらけども。決して疊の上におかず。一冊たりとも本箱の出し入れをつゝしみて。是を戴きて取りあつかふこと。丁寧誠に至れりといふべし。ある書林の店に書籍をならべおきて。その上をまたぎ。或は蹈こえなどするを見て。かの書林は出世なり難しといへり。又他の書商の。客來りて求むる時は。その書をいたゞきては出し。いたゞきては取り入るゝを見て。やがて上なき書肆となるべしとて悦びけり。朱文公が大學章句の序文に。身を修め。人を教ふるの道においては。いまだ必しもすこしく補なくんばあらずと云ふ詞を見ては。涙をながして。人と生れては。その志すところ儒者たらずといへども。かくありたきものなりとて。只いく度もそのことのみをくりかへしてはいひたり。此人の詞に。大學に能得とあるは悟ることなり。悟るといへば。僧法師などの道ばかりのやうに心得たるものあれども。常の人にても五常をよく悟り得ざれば。身にも行ひ。人にも教訓さるゝものにあらず。世に悟る者は稀にして。只知りたる人のみ多しといへり。實に確言といふべし

○世に言行に飾りあるものを。見え坊とて譏れども。見えはまづ禮の端なり。見えなきは大かたは不禮なるもの多し。人は自負するをもて。吾人ともに勤むるは。自負も亦道具なるべし。自負にも。見えにも差別あるべし。ある人大酒を好み。放逸にして物にかゝはらず。唐土の劉伯倫。李太伯にならひて。人間一生。醉ひて此世を過ぐさんと思へり。東坡は。竹なければ人をして俗ならしむるといへども。予は一日も酒なければ俗ならしむべし。ともかくにも酒なるべしとて。飲ませだにすれば。日々に五升にも及べり。此人に何の功ありといへば。只酒飲むことを一藝と自慢して。外には格別の能もなし。能なし猿が大酒したりとも。何もおもしろき人とはすべからず。劉伶。李伯はもろこしの學士にして。天下をも治むべきほどの器量ある人なれども。佞人上にありて。賢者を退くる世なりせば。用ひられざるをしりて。自さけてその國を去り。時を憂ふる心よりして。屆かぬことを歎息して。そを忘れんとて飲む酒なれば。大酒したりともげにおもしろきふる

べし。凡。人は唯身を修めんことを專として。故鄕をはなるゝことあるべからざるなり

○貴人にさゞまの御遊と云ふは。人々つどひ給ひて。談話の中に。ひと度は無言にて。戯れ給ふをいふなり。さゞまにさづまる間といふ事を略し。音便の詞にして。閑を守るなり。壺矢五寸乃至一尺を度として。ものいふ時は錘を打ちならすと。何某の物語せられしことあり。今やこのわざ絶えてなしとぞ

○よきことをせんとするはいと難し。只あしきに移るまじとだにこゝろを附けぬるこそ執行なれ。執行はいつまでといふ限なし。身を終るまでするを執行とす。わけて婦女子等は。おのれが一箇の料簡をもて。身を立てんことをはかりて。その親々の敎ふる。手かき物縫ふことなぞをば後にして。音曲遊藝を習ひつるを。捨て置くは。親兄弟の過なり。是は人を便りとせざる育やうにて。縫つむぎの道をさらざれば。女の性をうしなふ。その智男より少きものゆゑ。おのれをはぢて。よろづ嗜む事を專とせざれば。人倫にはづれたるふるまひ出で來たる。去れば。おのれ發明たりとも。つゝみかくして。人の發明を常の鑑として。身を守るべきものなり

○ある人文盲なるものを異見して。世の交は。他の事はいらず。唯堪忍の二字をよく守るべしといへば。文盲の人は。頭をかたむけ。かんにんとは四字にて侍らずやと。指をもてかぞへ。御許にはおぼし違ひなるべし。かんにんと四字にて侍るといへば。異見せし人云ふ。愚昧の人かな。堪忍とはたへしのぶとよみて。二字なりといへば。又かうべをかたむけ。たへしのぶならば。又一字ふえたり。五字となり侍るべし。何と仰せありとも。我等は四字とおもひ侍れば。四字にてかんにんはいたし侍るなりといへるに。その人又云ふ。汝が如き愚昧の文盲は。實に諭しがたし。人に似て虫同樣なり。おのれがまゝにすべしと大にいきどほりければ。文盲の人笑ひて。何とも仰あるべし。我等はかんにんの四字を知り侍れば。惡口せられても。少しも腹立侍らざるなりとて。笑ひ居しとぞ。その智には及ぶべく。其愚にはおよぶべからず

○江戸にて。予がしたしく交りし友に。佐伯何某といふ人あり。書をこのみて。食事の傍にも見臺をす

をしくおもふといへりとぞ。ノ貫世を終ふる年。みづからが書きたる短册を買ひ得て灰となし。風雅は身とともに終るとて沒しぬ。無量居士と號す

○夫婦の中のしたしみも。禮あるうちは珍らしかにして。その情至りて深く又厚し。禮を失ふ時は。その情自然と薄くして。離別もまた遠きにあらず。仁義遜讓は禮を厚うするの中たちにして。この禮。媚諂と眘を合はす。智は痴とさしむかへ。誠は嘘と隣れる。さあれば心安だてと。愛想づかしは。いつも同居と知るべきなり

○長田の庄司が義朝を討ちしことを。不忠と書きたれども。長田の庄司は。尾張の野間の內海に。平相國より領地を賜はりて居りける故。內海の庄司なり。義朝妻縁によりて。庄司を便りとして。忍び居しこと不覺といふべし。庄司は高望王の裔にして。その祖勅勘のことによりて尾張に配せらる。子孫內海にのこりてありけるなり。義朝の臣鎌田兵衞。その後遁世して。西佛法師といふ。遠江の國にありて。武藏相摸の間に終るといふ。遠江に鎌田兵衞が建てたる藥師堂遺れり

○洛の清水寺なる音羽の瀧は。應永年間に新に水口をつけて。此ところへ水を引きたり。そのむかしは音羽山のうち。所々へ落ちたりといへり。此瀧を汲みて湯あみするときは。瘡を愈すこと功あるをもて。諸人下流を汲めり。水上は東山の雫より。こゝに音羽の名をとゞろかす。田村の社は。清水寺のいまだ草創なき前よりあれば。地主權現と云ふ。觀世音は此社地を借りたるゆゑの名なり。庇を貸して表屋を取らるゝ世間のならひ。大坂にも此例多し。人も是とひとし。己れが產れたる地に在りて。身を堅固に修め。家を大切に齊ふるとなりがたきにや。人みな他國に出世するもの多し。故鄕に居る時は。己れが我儘をふるまひ。よろづ油斷して。身を過ちいへをも失ふ。他に出でぬるときは。堪忍もいたすとはなしに堪へ忍びて。油斷なければ。おのづから身を治めいへをとゝのふ。かゝれば故鄕にありて。他國へ出でたる心を盡くさば。身を損する過少かるべし。田村明神は在世のみぎりも。人欲の私するを嫌ひ給ひて。只世を救ふの御心淺からざりければ。庇をかして。表屋をとられ給ふとなどいとひ給はざる

歳なりけるが。二人とも其席に出で丶。ともに客をもてなすにぞ。主人酩酊のうへにて。坐輿に乘じて云ひけるは。我等五十五歳にして廿五歳の妻を持つこと。まことにおとなげなしといへども。縁のいたすところにして。よりどころあらざればなるべし。しかれば悴に對し。面目をも失ふことなり。かくならびたるやうすを見るに。悴が妻にして相應の年ごろなりといひけるが。いつしか後妻とその子と。終にひそかに通じて。家に居ること叶はで。他國へ奔りて夫婦となれりとかや。その親かゝる一言より。若輩の心みだるゝ基とはなれるなり。人は多言を愼むべし。多言はやぶれあり。譏をもとめ。身を亡すは口なり。農夫町人たりとも。一言以て知とし。一言以て不知とするは。古人の誡なり。つゝしむべし

○ある人時刻を知らん爲にとて。自鳴鐘を求めんとするを。その妻是をとゞめていひけるは。明くれにかくる世話のみにあらず。くるひたる折からには。その隙を費し。自鳴鏡のために。かへりて時を失ふこと多からん。やめ給へといへば。さあらば庭鳥を飼べしといふに。その妻。又とゞめて云ひけるは。時刻は人のうへにあり。汐の滿干もこれとおなじかるべし。自鳴鏡鷄を便りとするは。勤めに怠るもののいたすことなりと。夫を諫め。つひに雞をも飼はずなりにき

○山科の隱士ノ貫は利休と茶道を爭ひ。利休が媚ありて。世人に諂多きことを常にいきどほり。又貴人に寵せらるゝことをいたく歎きて。常に人にかたりけるは。利休は幼ときの心は。いと厚き人なりしに。今は志薄くなりて。むかしと人物かはれり。人も二十年づゝにして。志の變ずるものにや。我も四十歳よりして。自ら棄つる志氣とはなれり。利休は人の盛なることまでを知りて。惜いかな。その衰ふる所を知らざる者なり。世のうつりかはれるを。飛鳥川の淵瀨にたとへぬれども。人は替はれるとそれよりも疾し。かゝれば心あるものは。身を實士の堅に置かず。世界を無物と觀じて輕くわたれり。皆さやうにせよとにはあらねど。情欲限りあり。知れば身を全ふし。知らざれば禍を招く。蓮胤は蝸牛にひとしく。家を洛中に曳く。我は蟹に似て他のほれる穴に宿れり。暫しの生涯を名利のために苦むべきやと。いと

雲萍雜誌

柳澤淇園著

○京にて大佛の餠饅頭流行し。こゝかしこにて商ふうちに。四條畷にこの饅頭を鬻げる。近江上味といふものあり。或時店先へ乞食來りて。饅頭を十ばかり賣りて給はれといふに。主人いで來て。非人には商ひせずと云ふ。乞食のいへるは。我等とても同じ人なり。錢をもて買ふに。商ひものをいかで賣らざるか。この理を聞くべしと罵りけれども。主人は聊挨拶もなくて居たりけるが。罵ることのあまりにはげしければ。主人みせ先へいでゝ。さらばその譯申し聞すべし。下に居れとて。乞食にむかひ。汝等でとき乞食に賣らぬといへるその子細は。乞食となりてかやうの菓子を食はんとおもふ不所存いはんかたなし。無益なれども耳あれば聞きおくべしと。乞食がかぶりたる手拭取り捨て。我あきなへる饅頭は尋常の製にはあらず。殊に上品に造りて。高貴の方へも奉る菓子なり。左あらば乞食などの分際にて。食ふべき品にはあらざるなり。汝もしわが家の菓子を食ひたく思はゞ。人なみ〳〵のものとなりて。後に求めに來るべし。汝諸人のあはれみを蒙り。わづかに露命をつなぐ身を以て。錢あればとて上菓子を食ふことのあるべきや。世をおそれざる不屆の族なり。とく〳〵行くべきなり。須臾も店先を塞ぐべからずと。いたく叱りて追ひ立てければ。かの乞食は頭をかゝへて。何處ともなく逃げ失せぬ

○世を治め給ふ聖君賢主は。一言以て天下の規則となれば。綸言汗の如し。出でゝふたゝびかへらざるの語あり。武家にも二言なく。一たびいひ出でたることを違へざるは。侍たる人の常なり。さあるに。農夫町人など大かたの人は。武士に二言なしといふことは知りつゝ。我等ふぜいはと己より不料簡をそへて。きのふ約束したる詞もけふ違ひ。いまいひたるをも後にたがへて。義理をかく輩少からず。たとひ農夫町人たりとも。義を守ることなければ。おのれ〳〵が家もとゝのはざるなり。ある家のあるじ。五十五歲のころ。妻の身まかりければ。後妻をむかふるに。年いとわかし。客の悦びに來りて。酒宴を催す折から。その子廿六歲にして。後妻は廿五

雲萍雜志序

柳淇園之爲レ人。天資風流温雅。而猶且胸中之洒落。世以所レ知也。常以二書畫一所二交遊一一時有名之士。無下不二往來一者上。都鄙藝苑之客。無下不レ識二淇園一者上。其平生隨聞所レ錄。積年重日二十餘卷。多是勸懲之話說也。手澤之本。遂爲二予藏一。頃中井某者撮二其旨趣一。補二其缺略一。題曰二雲萍雜志一。予曾每二閑暇一。寓目則如レ對二其人一焉。聊辯二數言於卷端一云

丙辰之秋日

浪華兼葭堂主人恭識

予が性遊歷を好み。名勝を探る癖あり。西遊の折から。浪華の蒹葭堂を訪ふ。雅談晷を移すに至る。時に主人一書を出だし。こは柳淇園手澤の隨筆にて。いとおもしろきものといへり。予受けてこれを讀むに。世のいましめ。人のをしへともなるべきこと少からず。手卷をはなつことあたはず。やがて一本をうつしかへり。ひめをさめしを。此ごろ書肆のもとめによりて。再びよみかうがへあたへぬ。桃花園のあるじ識

雲萍雜志序 終

共十有三字

統計一千八百八十六字

解云。墓表則稱其私諡。予記文則稱其號。此以有所忌故也。乙酉冬十一月廿三日。予携興繼到臨江寺。謁亡友蒲生子之墓。即便薦行潦祭之。祭訖以蠟墨搨拓碑文。未兩三頁。短景旦暮。倉卒之際。磨滅之多。還家視之。不易讀者過半矣。因推文以意謄寫焉。恐有誤字。俟異日再搨當校訂者也

乙酉のしはすついたち。兎園小説集の滿筵にあるじして。竟宴のこゝろをよめる

書きつめしふみをばなにゝおはすべき
きさはおそばぬ莵道の友垣　解

おなじ折興繼に代りておなじこゝろを

宇治のきみのすさみに似たることの葉も
ながめにうときゝ冬の花園

兎園小説第十二集大尾

鐵。而堅剛銳利。武威所加。其功以成。限以天地。莫有外寇之患。開闢以來。天祖之胤。世々傳統。君臣上下之分。嚴乎無紊。宇宙之間。孰能及我神州者。故日出處天子。日沒處天子。雖交大國。不敢苟讓者。惜夫名也。今俗儒不知名分。動蔑國體。苟眩乎小大之勢。而不顧其名。則愛新覺羅氏之正朔。亦可稟而奉之。鄂夢斯國之察罕汗。亦稱爲女帝也。可乎哉。丁卯歲。北虜擾邊。君臧時在江戶。聞之憂憤。廼著不恤緯五篇。諸國老門下上書獻之。不報。先是。君臧嘗聞克先帝王之山陵。或有荒廢者。欲告之當路。以圖修復。躬自歷視其地。參考古圖舊記。作山陵志。平生精力。半在此書。書成。獻之京師及關東諸公用事者。有司嫌其論違非處士所宜。召詰之。君臧乃引律文。誦故事以對。於是君臧慷慨自奮。欲爲天下言世人之所難言者。雖由是獲禍。而不顧。故時人目君臧以狂妄。殆將罹不測之罪。盍或有知君臧之爲人者。憫而救之。同獲免。君臧素剛腸。不能俯仰當世。以取容廼澆以酒。時或劇飲大醉。頹然自放。而憂國之念。未嘗頃刻忘也。間居講學。以懲忿塞欲。不敢與世抗爲務。廼號其所居之菴。曰修靜。以自警謂。修身在此。而成名亦在此。教授之暇。專力著述。始君臧著革弊賦役等諸論。號曰今書。以規當世得失。至是更撰職官志。欲以次編神祇姓族等志併與山陵爲九志。未及悉成。以疾歿于江戶僑居。時文化十年癸酉七月五日也。享年四十有六。君歿壯而丁家艱。服除遊歷四方。故晚而娶。其配多氏。紅葉山伶官某之女。無子。君臧之歿也。其交遊尤親且舊者。相聚而哭之曰。斯人也。作山陵志者。其於喪祭之禮。最致意焉。不幸無嗣。襄事之賚在朋友。其可不盡心乎。廼葬之江戶北郊谷中龍興山臨江寺域內。既而以余與君臧久相識也。託以表墓之文。廼書以遺之。使之鑱諸石曰嗚呼君臧每以關東布衣。自稱難不免阨窮。猶爲天下奇男子。豈可與彼閭里儒。梟號稱先生者。同年而語哉。吾聞其臨終。倘稱天地之正氣。且有三寶之說云。留精靈於天地之間。將俟其人而授之。古之所謂死而不亡者。其君臧之謂耶。噫。微斯人。吾誰與歸

文政元年歲在戊寅秋八月

墓石　縱曲尺三尺四寸餘　橫曲尺壹尺二寸五分

碑文　一千八百六十一言　篆額題目撰者姓名

寸之功不克施諸當世。然其浩然之氣。託諸文章。卓
々其不朽者。可以與古人爲徒矣。其墓之有表豈得已
哉。君諱秀實。一名夷吾。字君平下野人也。本福
田氏之子。自改氏蒲生。淡海望族也。系出藤原朝臣
秀鄉。至會津參議氏鄉。而大顯。先世屢遷徙野奥之
間。其宗爲有土之君者。亡嗣絕祀。百數十年矣。君
臧迺其庶孽苗裔云。東野之俗素彊悍。君臧少以氣自
豪。讀書不治章句。慨然有經濟之志。及壯好遊。足
跡殆遍天下之半。然未嘗登仕路。故雖身在都會乎。
常有山林樸茂之氣。其平生所持論。未嘗少自貶以求
售。故圜枘方鑿。俗儒咲以爲極迂極濶。而君臧自信
愈篤。恒謂其友曰。吾以編戶餘夫。不能治生商賈。
又不敢仕官爲吏以弁斗之祿。讀書作爲文章。亦不能
與曲學阿世之徒爲伍。朝虀暮鹽。坐取困窮。子亦知
其所以然乎。吾少時嘗在家讀書。先祖母自旁語我曰。
昔蒲生氏之自會津徙封宇都宮也。其庶孽帶刀某者。
食祿三千石。納邑豪福田氏女爲妾。有身。適會蒲生
氏再遷會津。帶刀亦隨而徙焉。時留其妾父家。既而
生男。妾父母愛之。不忍其遠別。佯告以女子。因鞠
于其家。後冒母姓。遂爲編戶之民。是於汝高祖之父
也。汝讀書者。善記之。吾於發憤立志。而究古學。
欲修曠世之墜典。以報國恩之萬一。庶幾乎其不忝先
祖矣。吾生也晚。不逢大化大寶之世。大織淡海二公
之相業。非所企及。雖然在其位者行其道。不在其位
者行其言。稽古徵今。通達國體王政之要。在納民於
軌物。俾在上之人明祀典。以敎孝敬。四海之內。
各以其職助祭。則天祖之所以照臨六合者。萬世無墜
矣。富諸侯以奮武衛。安百姓以固邦本。是吾願也。
昇平二百年。不値天慶天正之亂。秀鄉氏鄉兩朝臣之
將略。無復所施。雖然安不忘危。古之善敎天下。雖
安所可虞者。夷狄盜賊。正名分以定民志。禁左道以
塞亂源。使吾說護行。則遠宴安之鴆毒。驅戎狄之豺
狼。不啻致一時擢陷廓淸之切。俾斯民永無被髮左袵
之患矣。斯吾志也。志願如此。悠々之徒。易足共談
哉。君臧又曰。仲尼稱。吾志在春秋。春秋經世之志
道名分。周公遺法存焉。故爲政正名。夫子所先戎狄。
是膺周公之訓。今世俗儒。以文亂名。俗吏同權亂法。
亂法者罪止其身。亂名者其言載簡冊。而流毒於後世。
夫神州則天地之正氣也。陰陽不和。寔爲中國。中和
平穀。而甘美豐饒。文敎所及。其養以給。精英發乎

ぬる年。ある日。靈山のほとりに逍遙して。長嘯子の墓所を過ぎしとき。さすがに宿恨なきにあらねば。ゆきも得やらずにらまへて。長嘯子不滅の罪あり。わぬしみづからこれをしるや。和ぬしは豊太閤の外族として。位高く且采地も廣かるに。心ざま武士に似ず。伏見の籠城に。敵の旗色を見て鬼胎を抱き。鳥居元忠等を棄殺しにせしは不義なり。事たひらぎて罪を蒙り。はつかに命を助けられしを幸ひにして。耻を知らず。心にもあらぬ世捨人貌して。えせ歌多く詠じたる。一盲衆盲を引しより。歌のしらべのわろくなりて。今に至るまでなほらぬは。これ不滅の罪にあらずや。冥罰かくのごとくならんと。罵りながら杖をあげて。墓を毆(ウチ)たる事ありけり。こはよく似たるにあらずやと語りもあへず。聞きもをはらず。ひとしく腹を抱へしとぞ。むかし呉國にさるものあり。さばれ楚平王は讐といふとも。その親の爲に君なり。さるをその墓を發き。その屍を鞭うちしは。過たるに似て餘情なし。もし伍子胥をして投化せしめ。この時にしもあらしめば。かならず階を降るべし

蒲生君藏墓表

常陸　藤田一正撰　源千之　幷篆額

昔者中郎氏。學周孔之道。養素丘園高尙。其事一出。而翊

中宗中興之運。再造邦家經綸鴻業。大織冠之勳塞天地。是以藤姓之胤。世秉國鈞。實與社稷同休戚。而枝葉蔓延、殆遍乎海內。其薨也。學士紹明。欲傳令名於不朽。製碑文以示後世云。距今千有餘歲。其文雖不可得而見。然大人君子。墓碑有文。盖此爲始。淡海文忠公在。大寶養老之際。奉詔刊修律令。其喪葬令曰。凡三位已上。及別祖氏宗。並得營墓。凡墓皆建碑。記某官姓名之墓。當此之時。朝野尙文。亡論其名公鉅卿。廼至遐陬僻壤國造郡領之墓。亦有立石銘文者矣。其後浮屠盛行。而葬祭之禮先廢。文章與時運汙隆。而紀述德業。莫或之省。慶元已來。偃武修文。掺觚之士稍衆。碑碣之撰不尠。亡論其閥閱之家。廼至文人儒士山林隱逸之流。苟有稍足稱述者。亦皆有以立石銘文者矣。嗚呼。君藏關東布衣。發憤著書。欲明我神聖之道於中國。徵之以西土周孔之敎。終身轗軻。齎志以歿。曾無一資半給之閭其身。而尺

陵をたづね巡るに。ともすれば日くれてかへるを。あるじはみづから風爐を焚きて。浴みさせぬる老人の心づかひを。むねぐるしとていなめども從はず。これらのことはひたすらに。客を愛する故のみならず。われも亦かゝる奇人に宿することの歡ばしさに。足下の疲勞を慰めて。恙なかれと思ふよし。國の爲にちからを盡す人の。助けにならんとてなり。必いなみ給ふなとて。後々までもしかしてけり。かゝりし程に。脩靜はある夜更闌けて。子たつのころ歸りしかども。蘆庵はいねず待ちてをり。例の如く浴みさせ。飯をすゝめて。さていふやう。われ足下に宿せる日より。蔬菜の外に物もなく。させるもてなしをせざれども。老僕を休らはせんとて。手づからに風爐さへ焚くを思ひくみ給はずや。古陵をたづね巡ればとて。今まではえうなからんに。道ぐさくうてか。老人に物をおもはせ給ふこと。こゝろ得がたしと呟きけり。脩靜聞きて貌を改め。翁のうらみ理りなり。わが非を飾るにあらねども。更たけたるは聊ゆゑあり。懺悔の爲に笑ひに備ん。けふは某の天皇の陵をたづねたりしに。日のくるゝまでたづねもあはで。思はずも等持院（按に。等持院は金閣寺の北郊石不動の北に在り。尊氏の法號を等持院と云ふ。この寺に。足利氏十三世の木像あり）なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて。とし來のうらみ心頭に起りてたえられず。墓にむかひて罵るやう。梟臣尊氏なほ靈あらば。今いふことをたしかに聞け。汝は一旦治まりたる建武重祚の世を亂して。逆に取り逆に守りし毒を後世に流しゝより。二百十數年。干戈をさまらず。國の舊典もこれが爲に燒亡し。王室も亦これによりて卑（イヤシ）く。古帝世々の山陵すら迹なくなりて。われらにさへ飽まで物をおもはする。皆悉く汝が罪なり。天罰當に知るべしとて。杖をもて石塔を思ふまゝにうちたゝき。ゑかして寺門を出づる程に。物ほしうなりしかば。道のほとりの酒屋に立ちより。怒りにまかせて飲む程に。六七合を盡したり。さて酒屋をば出でしかど。醉にて足も定まらず。此まゝにてかへりゆかば。必翁に叱られん。なかば醒してゆかんと思ふて。株に尻をかけしより。うまいやしけん時も移りて。おどろき覺むれば。更たけたりと語るに。蘆庵は噴き出だして。思はず呵々とうち笑ひ。さても世の中には。似たる馬鹿ものもあればあるものかな。われも亦い

伴りて。某は下野なる宇都宮のほとりにて。蒲生伊三郎と呼ばるゝものなり。琴を好み候へ共。田舍にはよき師なし。あるじの翁は琴の妙手にておはするよし。東野の果までかくれなし。これにより。れん弟子にならまくほりして。はる〴〵と來つるにて候といふ。その僕こゝろを得て。奥に赴き云々と告げにけん。蘆庵は聲を高くして。あなむやくにもとはるゝことかな。汝出て然か答へよ。あるじは久しう客を辭し。交りを絶ちたれば。都のうちだにも親しう物せるは稀なり。琴はわかゝりしとき。かきならしたりけるを。あちこちの人に知られて。彼にきかせよ。此に敎へよといはるゝがうるさければ。ちかごろうち摧きて。薪にかへたり。かゝれば所望にしたがふべくもあらず。他にゆきて求め給へといふ聲の蒸襖一重を隔て。定かにぞ聞えける。脩静は僕が報るに及びて。そがしか〳〵といふをしもまたず。さらに又推しかへして云。翁の御答はこゝにもつばらにもれきゝたり。某なほ一言あり。願ふは枉げて聞き給へ。われは下野なる儒者なり。しか〳〵の志願あれば。しば〳〵江戸に遊學し。こたみ都にのぼりかども。相識れるもの絶えてなし。翁の古學を好み給ふと。その氣質の俗ならぬは。かねて傳へ聞く物から。いひよるよしのなきまゝに。琴を學ばん爲にとて來りつるといひしなり。こは長者を欺くに似たれども。そのそら言は已むことを得ざりし實情より出でたれば。ゆるされてたいめせられば、肝膽を吐き。志願を告げて。翁の資けを借らんとほりす。かくてもこゝろに稱はずば。退けられんこと勿論たるべし。今一たび和殿を勞せん。このよしとりつぎ給へといふ。蘆庵もこれを洩れ聞きて。さりとは思ひかけざりき。くしきまれ人なり。たいめせずばくやしきことあらんとて。こなたへと申せとて。やがておもてをあはせけり。脩静ふかく歡びて。いとはやくより思ひ起しゝ志願のよしをとき示し。山陵志著述の爲に。ふるきみさゝぎをたづねんとて。たびねをしつる事の趣。しか〳〵とかたりいづるに。蘆庵ひたすら感嘆して。足下は得がたき學士なり。さる志あらんには。わが庵に杖をとゞめて。こゝらわたりのみさゝぎを。しづかに訪求し給へとて。亦他事もなくもてなしけり。これにより脩静は日毎に古

もて。市のかみにや聞えにけん。召し問はんとせられしに。林家の門人たるよしを聞かれて。まづ祭酒に告げられしかば。祭酒すなはち脩静を招きよせて。件の記文をまゐらせよとありけるに。脩静答まうすやう。件の拙文は一時漫戯の稿本なりしを。何がしに貸したりしが。いく程もなく失ひて。今は一ひらも候はず。仰の趣かしこまり候へども。なきものなればせんすべもなし。この儀ひたすらに賢察を願ひ奉ると陳じゝかば。祭酒すなはち脩静を退かせて。又家臣をもて問はしめ給ふに。脩静陳ずること初の如し。家臣はこれをまことゝせず。なほさま／＼に詰りしかば。祭酒これを推し禁めて。威をもて逼るは要なきわざなり。利害を說きて諭さば足りなん。問ふこと再三再四にして。まうすことの違はぬは。實に失ひたるならん。れきね／＼とぞゝめさせて。宿所にかへし給ひしとぞ。程經て後に聞えける。この事世間に聞えしかば。しるも知らぬもおしなべて。駭嘆せずといふものなく。疎きは愚としてこれを嘲り。親しきは憫め共。救ふるよしもなきまゝに。あなや脩静は。不測の罪に身を喪ふ歟と阽みしに。祭酒愛顧のとりなしにやよりけん。又その母に孝なるよしさへ正に知られたるにやありん。やうやくに免れて。させる御咎もなるりけり。脩静江戸に僑居してより。文化の始めまで駒込吉祥寺門前にをり。七年庚午の春二月更に卜居して。石町なる鐘撞堂新道へ移りにけり。駒込にをりし日より。教授に口を餬ふものから。山陵志に相つゞきて。又職官志を彫らんとすなれば。財用足らで窮すれども。志氣早く傑して。持論聽くべく。文章觀るべし。又ある時は。交遊宴會の席につらなりて。脩静特に强飮酩酊。劇談放言して讓らず。その體たらく傍若無人に似たりといへども。方正鯁直の情。言外にあらはれて。國を憂ふるの心。一日半晌も撓むことなし。はじめ。脩静が山陵訪求の爲に京に赴きしとき。彼地に絶えてしる人なし。當時小澤蘆菴は。古學を好みて。萬葉風の詠歌に名たかく。世にすねたる陰逸なりと。かねて傳へ聞きしかば。渠がたすけを借らばやとて。その京に入りし日に。やがて蘆菴が宿所をたづねて云々とおとなふ程に。小澤が僕出で迎へて。いづこよりと問ふ。いひよるよしもなきまゝに。脩静まづ

く。むかしは儒官あきらかに。天朝の故實に通じて。六經をもてこれが資にしたり。こゝをもて名正しく。事行れざることなし。今の俗儒は。天朝の故實をしらず。夏夷順逆の理に暗くして。名を亂り。言を紊るゝもの。百五六十年來。比々として皆これなり。その位に在るものはその道を行ひ。その位に在らざるものはその言を行ふこと。古今一致艱易迭にありといへども。吾憤をもて志を立て。古學を興して。逸史を修め。力を經世に竭して。もて國恩に報じ奉らんとほりすること他なし。かの世に阿りて利を謀り。皐皮に坐する草鞋大王。みづから名敎の罪人たるを知らざるものと鄰をなさじと思ふのみ。この事同士の爲に語るべし。悠々の徒と語るべからずとぞいきまきける。此ころよりして修靜九志を編述の志あり。いにしへの山陵多く荒廢して。その迹定かならざるものありと聞く事久しきをもて。まづ山陵志より刱めんとて。獨行して京に赴き。南海を越え。淡路に渡るに。素より路費の乏しきを憂とせず。險を履み。風雪を犯して。六十六國そのなかばを經歷し。あるは里老に問ひ。或は舊國を考へ。諸陵存亡の趣を目擊したりける。苦辛をその著述の爲に辭せず。日月はたびねに移れども。その志移らずして。いよ〳〵精力を盡しけり。かゝりし程に。丁卯の年。北虜邊寨を擾るゝの風聞あり。修靜江戸に在り。かのことを傳へ聞きて。憂ひ且憤りに得堪へず。すなはち不恤緯五編を著し。上書して。これを國老の執事にたてまつりしに。おん取あげはなかりけり。とかくする程に。山陵志一卷やうやく稿を脫して。刻本にせまくほりするに。修靜素より擔石の儲なければ。同志に告げて。未刻已前に入銀を促し。且その友鍵屋靜齋等が資けを借りて。製本全く成りしかば。これを京師に獻り。及關東の縉紳弁に有職の人々にまゐらせけり。しかるにその論處士浮浪人の。あげつらふべきことにしもあらず。贅言分に過ぎて忌み憚らざるに似たりとて。修靜を市のかみの廳に召して。その條々を詰られしに。修靜すなはち律令を引き。古實を證して。答へまうすことの理りに稱ひしかば。かさねて咎めはなかりけり。これにより修靜慷慨嗟嘆して。身の禍を見かへらず。日ごろの剛腸十倍して。記文一篇を綴りてけり。その事禁忌に觸るゝを

兄弟叔姪の。故なく田園をわかつものは。親族怨みを結ぶの基本なり。吾儕は一歩の田を得ずとても。ともかくもして一期を送らん。姪はわが母の嫡孫なり。渠が身ゆたかなるときは。わが母も亦優にれはさん。いつくしみをいろひまつるは。ひとり姪の爲のみならず。すなはち母の爲なればと。なく〳〵ことわりを盡しゝかば。母はこれを賢として。遂にその程に任せしとぞ。是より後もとにもかくに家の艱みにかゝづらひて。志はたてながら身をわがまゝにもせざりけり。是よりさき寛政二年の冬。琉球の使人入朝しつと聞えしに。故ありてかのともがらと應接をしつるもの。宇都宮にかへり來にけり。脩靜一日これを訪うて。足下はこたび球人と應對したりと傳へ聞きぬ。何等の說話なりしと問ふに。その人答へて。いなさせる說話もなし。只四表八表の語次に。球人われに問ひていはく。皇國は誠に文あり。武あり。大かたならぬよき國なれ共。竊にこゝろ得がたきは樣といふ字に。三體ありて。尊卑のしなをわけらるゝに。或は永さま。或は美さま。つくばひ樣といふよしは。いかなる義理のあるやらんといはれしには。困りたりとうちほゝゑみて告げにけり。脩靜これを聞きしより。憤り胸にみちて。嘆息の外こと葉もなく。そがまゝ宿所に走りかへりて。ひとりつら〳〵思ふやう。むかし南北朝の內亂より。應仁の兵火に至りて。天朝の舊典皆こと〳〵く亡失し。文華はながく地を拂ひて。世は戰國となりし事。既して二百餘年。その惡俗の餘毒。流れて昇平の今の世まであらひ淸むるものゝ足らねばこそ。附庸褊小の球人にすら。侮らることのやすからね。いかでわれ古學を興して。國體を張り。天下の爲に死力を竭して。國恩に報すべしと。いよ〳〵思ひ定めつゝ。指を噬み。血を染めて。孝子之情有二終身喪一。忠臣之心無二革命時一と。大書しつ。志願の臍をぞかためける。かゝりし程に。歲月を歷て。修靜江戶に往來しつゝ。當時高名の儒者。國學者。文人。墨客とまじはりて。林家の門人になりしかば。帶刀して儒學を倡へ。遊學すること亦年あり。しかれどもその持論事情に愜はず。或はこれを迂濶とし。或はこれを狂妄として。嘲り噱ぬは稀なりしを。修靜ものゝ屑ともせで。いよ〳〵守りてみづから貶さず。その友に語りて云

る。よきもわろきも。おしなべてなき後にこそ定かなれ。さばれそのよき人といふとも。祿もなく。位もあらで。名を後の世に遺せるものは。只その人の德にあり。學びのちからによらぬはなし。こゝに亦その一人あり。吾友脩靜菴のあるじ則是なり。そも〳〵脩靜菴は。本福田氏。後にその先祖の氏郷朝臣の族より出でたりと聞くに及びて。氏を蒲生に改めけり。これらのよしは。墓表に具はれば。こゝに贅せず名は秀實。一名は夷吾字は君平脩靜はその号。下野州宇都宮の人なりけり。明和四年丁亥某月日に生れぬる故をもて。その父これに名を命じて。伊三郎といふといふ。亥の和訓は即爲なり。爲伊の假名たがふといへども。伊は猶亥のゐのこゝろなるべし。その家半農半商にて。ともしあぶらを鬻ぎたり。父沒して兄家を嗣ぎぬ。只脩靜のみをさ〳〵讀書を嗜みしかば。耕し耘ることを欲せず。又商人のわざを樂はず。おなじ鄕に石橋といふ先生ありて。經學を脩めて。且施を好み。其家ゆたかなりければ。天明三年淺間山燒けて。關東いたく饑ゑたるとき。倉廩をうちひらき。四百たわらの米を散じて。鄕黨鄰里を賑しけり。只この施行のみならず。或は路を造り。橋をしつらひ。隱德慈善を宗としたれば。人みな德とせぬものなく。名をちこちに知られてけり。脩靜はいとはやくより石橋翁の門に入りて。勤學研究こゝに年あり。かゝりし程に。大母の物がたりによりて。祖先の賤しからぬを知曉し。みづから氏を改めて。志いよ〳〵堅く。凡下野人の風俗は朴訥にして強く悍し。脩靜はこれにかふるに。志氣逞しく貧しきを辭はず。よしや忠義の狗となるとも。亂離の人とならじとて。しきりに奬み學びけり。しかれども章句ををさめず。國史舊記を涉獵して。いかで古學を起さんとほりする心いとせちなり。剛腸かくの如しといへども。母につかへて孝なりければ。母もまた愛ぬることのあだし子よりも深かるべし。脩靜が壯りになりしころ。其兄は身まかりけり。これにより母田園をなかばわかちて。脩靜にとらせんとしてけるに。脩靜いたくこれを推辭て。且母を諫めていはく。わが兄不幸にしてなかそらに身まかり給ひ。且その子は倘をさなし。さるを今多くもあらぬ田園を。吾儕の爲にわかたせ給はゞ。をさなきものは何によりて荒年の飢寒を凌かん。およそ

次郎。何右衛門など、改名致し。當時宗門町に。右六人の者。右様之名を附居申候

同郡奥河並村百姓

太　　夫

右村方にては。婦相果候夫は。何れも太夫と。年々宗門帳ニ相附居申候。如何成故と相尋候へば。夫相果候婦を。後家と申すも同じ事と申し居候

右彦根家富田甚右衛門殿の話なり

○蒲の花かゝ美の上

久かたの日影うとき谷を出でゝ。木傳ひわさりなく鳥も。友を求むといふなるに。物のりやうなる人として。いづれか友を思はざる。そをおもふにも忘れめるべし。利慾にかたらひ。謠樂につどひ。酒食によりて親しかりしは。思ふに似たるも。忘るゝにはやかり。まなびのみちのひとしくて。こゝろざしの異ならぬのみ。忘れんとすれどわすれがたく。おもふにもなほあまりあり。そを誰ぞと人に問はれんに。脩靜庵にますものなかりき。この人や。學びのみちにわれにひとしく。心ざまさへ似たりけり。生れし鄕は異なれども。おなじ甲にと聞えしも。大かたならぬすくせなりけん。よにふた鞘の論なく。むつみかたらひぬる折々に。いはれしことの耳にとゞまり。なつかしくもかなしくも。ねざめぬ老が曉には。すぎこしかたの胸にみちて。像にたつこともありけり。おほよそこの人の行狀は。藤田ぬしの書きつめたる。墓表によりてしらるべけれど。猶もらしつと思ふこと。なきにしもあらざりけり。いとめづらしくもくすしくも。さはに侍りがたきはかせなりし。そのことの趣を兎園のはしにしるしつけて。くにしたちにしめさずは。たれか亦ふしをうちて。こと葉のしらべをたすくべきと。思ふもをこのわざながら。深谷(ミタニ)がくれに友よぶ鳥の。聲にしも似てやみがたさに。水ぐきのあと。淺さはさらなり。山の井の影うつしくも。人のわらはんことさへに。いとはぬは。げにれろかなるべし

文政八年乙酉冬十二月朔。このふみを綴りて。みづからはしがきするもの

神田の隱士　瀧　澤　解

人の心はかくれ沼の定かには目に見えぬものから。そのよきも終にあらはれ。そのわろきも終にあらは

にもおよべり。賀茂のやつら一人もかへさじとて礫石雨の如く投げ出だして。をめきさけぶほど。五六十人の賀茂人すべき樣なく。旅脇差ぬきいだして。こゝはしひなどするほどに。刄底に損れしもの。礫にていためられたる人もおほく。相引に引きたり。後の日鞍馬口の小屋の頭ども。不潔なるもの共。所を追放つべきよしにて。詫たれど。賀茂かたも狂水にをかされて。まさなき事やありけん。めで度神詣の歸るさなれば。たゞおだやかなれとて。事はすみたりと。三谷吾雲が物語りけると。荷田の信美大人の口づからをしるし侍るなりけり

○希有の物好み

元錄の頃。京室町通三條の南に。櫻木勘十郞といふ人ありけり。古器物書畫の鑒定をもよくせり。希有の物好にて。衣服より足袋帶に至るまで。色々の縞を着用し。扇子。脇指柄糸。鍔。印籠。草履まで縞ならずといふ事なし。朝夕の食物膾はもとより。刻みものなり。煮物などにも大根。牛房の類のすぢある品をもちひ。椀折敷までも縞のもやふをぞものしける。されどもまげて異を好むにあらず。只天性かくありしとぞ。家居も世にめづらしく。表二楷の格子もさまぐ〵の唐木にて。縞にくみたて。店先も塀格子といふものを立て。此所に大きなる竪貫木ありて。青貝にて唐草の摸樣あり。ひさしの大垂木などは。細き柴竹の寒竹にて。さまぐ〵の縞にくませ。扨中庭に泉水ありて。金魚あまたはなち置く。そこより居間の二楷へ階梯を渡したり。其階梯も唐物作りの礙賓株高欄付けてけり。又中庭の北面なり隣りの壁まで。縞にぬらせけり。かゝれば世に縞の勘十郞と云ひけるとぞ

○古代の呼名

江州伊香郡金居原村百姓

梨之木
藤之棚
萬代
上之山
堂之坂
川端

右之村方に。山中にて炭燒を業に致し居候。往古は一村不殘。右樣の名を付居候由に候へ得共。追々何

このすさみながら。こゝに孝義の三編を綴れるよしは。是をもて自警め。且人の子のいましめにもなれ、かしとてのわざなりける

時文化八年乙酉冬十二月朔。呵研擢墨沐書於神田鳳簫菴　琴嶺興繼

甲申十二月八日耽奇漫錄追加

予が家に藏弆せる達磨の木像は。雲慶作とあり。曩に家嚴此木像を耽奇會に出だしゝ折。雲慶。運慶別人なる事。且雲慶は何れの世の佛工なるや。未詳のよしを書れたり。しかるに。きのふたまへ鎌倉志を繙閱せしに。巻の二光觸寺の本尊類燒阿彌陀の緣起の條に。建保三年京都に大佛師あり。雲慶法師と號す云々とあり。(この下にも。雲慶云々と書けることゝ。三ヶ所見えたり)本文によりて考ふるに。運慶。雲慶同人なるべし。もし運慶はじめは雲を書き。後に運の字に改めたるか。さらずば緣起の誤りか。志にその辨なければ。いかにと定めがたけれども。こも亦一勘に備ふべし。(この一條は耽奇錄中にしるしおかれんことを希ふのみ)

琴嶺再識

乙酉抄月兎園納會

○賀茂村の坂迎ひ　京　角鹿比豆流

伊勢太神宮の廣前に。太々神樂捧け奉るとて。かの御社に春毎參詣する事。六十六國に殘る處もなし。都の町々近き村里。老たるも若きも。かたらひつゝ。二十三十あるは百にも滿てる人の。願はて家に歸る日。家族うからしたしきかぎり。逢坂山の水うまやに集ひ。待酒扱かはし。宴をなす。是を坂迎といふ。こゝより家までのかへるさ。迎の人と共に謠ひつれて。都の町くだりさわぎ行く事引きもきらず。こをみる人大路に立ちつゞけり。三月廿一日上賀茂の一郡松林の加茂塘をすぐるに。鞍馬口の乞食の兒等いでて。錢を乞ふ事頻りなり。加茂村の百姓さか迎の日。唐坂といふ菓子二ッづゝあたへ。また人數こゝらなれば。菓子の代にあし一筯あたふるが。古き例なりとかや。酒に醉ひしれたる若人。戯れて何れのわいだめもなく叱りさいなみ。子等があたまをも叩けり。かれらが事なれば。やがてわと泣きて。賀茂ものしがたゝきたりと告げしかば。折から御影供とて乞兒も酒のみゐたるが。やがてはやりかに走りいでゝ。六七人追ひ來りてのゝじる。雙方酒力を借りていとゞかしましな。かたゐ追々はせ集り。八十人

者も多かりけるにや。夜毎に人のつどひ來て。聽くものおびたゞしかりけるを。市のかみより隱密に人を遣して。聽聚にうちまじらしつゝ。夜毎に聞かしめられしを。知るもの絶えてなかりしとぞ。かくてはやその講談もこの席を限りにて。講じ訖ると聞えし宵の程。瑞龍はその席にて忽に搦め捕はれて。やがて獄舍（ヒトヤ）に繫れけり。扨事の顚末をおごそかに問はれしに。件の書はちかき比。反故中より獲たりしかば。世わたりの爲にせんと思ひし外は候はず。禁斷せられしものならんとは。かけても知らず候ひきと。おそる〱陳せしかども。その書を禁止せられしが數十年前のことならばこそ。遠くもあらぬ事なるを。しらずとまうすことやはある。知りつゝ講談したりしは。不屆なりと讞斷せられて。遠島にや流さるべき。市にや棄られんなどゝて。世評も亦まち〱なり。しかるに瑞龍にひとりのむすめあり。この年甫めて十二三なるべし。その姓（サガ）孝順なりければ。父の禁獄せられしより。號哭して寢食をおもはず。町役人等もろ共におん慈悲願ひとかいふよしをもて。ねきぶみを捧けつゝ。市のかみの廳にまゐる毎に。みづから親の罪にかはらんと乞ひまうして。哀傷悲泣人の視聽を驚し。追ひ立てらるれども得退かず。死をだも辭せぬ有さまなれは。人みな不便におもはぬはなし。このと度かさなりけるまゝに。おほやけにもその孝信をあはれませ給ひけん。瑞龍は思ひしより。その罪かろく定められて。遂に追放せられけり。こはまたくむすめの孝行ゆゑなりとて。親も歎び人も嘆賞する程に。件のむすめは。ある豪家の子の婦に懇求せられて。ゆくりなくよすがいで來しかば。瑞龍もその家より扶助せられて。おんかまひの場所ならぬ近鄕に。半生を送ることを得たりとぞ聞えし。夫孝は百行の本なり。至尊はこれをもて民に敎へ。士庶も亦これによりて身を修む。その國を治め。家をとゝのふるの要道。何ごとか亦これにかへん。感ずるに猶あまりあるものは。かの孝男女のうへにあらずや。そも〱この兎園小説は。去歲の冬はす下つかたに。家嚴のかりそめに思ひ起しゝを。まづ北峯ぬしにかたらひつゝ。この春諸君の同意を得てしより。月毎の集會間斷なく。今ははや十有二集に滿つるになん。この滿會には何をか書かんと思ふも。を

り。うらやむべしく。右龜松儀父惣右衞門狠に出合候節。相働狠を仕留。父を助け候段。幼年にて奇特成仕方に付。爲御褒美銀貳拾枚被下之。右は先頃御代官大貫治右衞門樣撫見として。御出之節。野先にて御聞被遊。則當人御呼出し。始末御尋之上。御書上げになり。右之通。此度御褒美被下候事。誠に前代未聞。世上親孝行の敎にも可相成と。板本に仕り。蒙御免賣弘申候以上

天明八年十二月

明神前通湯島壹丁目板元板木師

平　五　郞

與繼云。本文のいと拙く見ゆるを。そがまゝに寫しゝは　實を傳へん爲なり。この印本を今も藏弆せし人もありてん。しかれども紙の數はつかに三丁ばかりのものなれば。永く世に傳はらんことのかたかるべきをいとをしむのあまり。けふのまとゐの料にしてけり。原本の體たらくは。世にサゲなど唱ふるもの丶。ちまたを賣りあるくとは異にして。地名人名もいと正しく。且御免の二字を冠せしもめづらかなり。孝子の事を板して賣りあるくこと。これらや始なるべきかと。家嚴いへり。ふたゝびおもふに。この龜松が事。孝義錄に載せられたる歟。家嚴もおぼえずといへり。猶考ふべし

〇瑞龍が如兒

寬政文化の間。軍書を講談して。生活にしたる瑞龍軒は。前の瑞龍が子にて馬谷百輅等が姪なり 第一前の端龍。第二馬谷。第三百輅。この三人は兄弟なり。百輅は吾山が社中にて。俳諧の判考なり。この中馬谷尤世に知られたり 當時中山物語といふ俗書の世に行はるゝことありけり。こは京師の人の手に成りたるにや。あらぬ事をのみ書きつめて。虛實をも得考へぬ。禁忌に觸ることのさはなるを。奇を好むものをもて。貸本屋などいふ者は。二本も三本も寫し取りて。こゝかしこへ貸したりければ。おはやけにも聞し召されて。嚴禁を加へられ。寫しとりたる本屋どもは。おん咎を蒙りて。寫本はすべて燒き捨てられ。それをとり扱ひたるもの共には。おのもく過料をたてまつらしめ給へり。こは享和中のことにぞ有りける。かくて文化中に至りて。件の瑞龍軒難波町わたりなる居宅にて。かの中山物語を講談してけり。其書は曩に禁斷せられて。見まくほしとおもふ

にあらねども。只勸懲を旨として。蒼隷農夫もこゝろえ易き假名ぶみにしつるのみ。さばれその事のはじめ終りを審に傳へざりしは。記者の漢文に倣ふたる筆のまはらはぬ故なるべし（銀を騙略せられし時の形勢。後に銀を返しくれし時。國主に訴へたるか否の事原文にもれたり）

○破風山の龜松が孝勇

天明八年冬十二月。湯島一丁目板木師平五郎が板せし。御免龜松手柄孝行記に云。一此度信州佐久間郡内山村百姓惣右衛門事狼に喫はれ候處。若年の悴龜松即座に狼を抱き留め。鎌にて殺し候次第

元遠藤兵右衛門樣御支配所
當時佐藤友五郎樣
信州佐久郡内山村
百姓惣右衛門悴
龜　松
申十一歳

右村之義。信州。上州國境破風山のふもとにて。惣右衛門儀。高壹斗餘所持。家内五人ぐらしにて。居宅より三町程隔り。字を逢月（アヒツキ）と申す所に。猪鹿ふせぎの番小屋へ。當（天明八年）九月廿五日夕方悴龜松をつれまゐり。龜松は草をかり。惣右衛門は小屋にて火をたき居候處。右惣右衛門うしろのかたより狼來り。足へ喰ひつき候を。ふりかへり候へば。唇より腮へかけ喰ひつき候間。狼の耳をつかみ聲を立候に付。龜松聞きつけかけ參り。所持の鎌を狼の口へ入候得共。かつら際よりかみをられ。用立がたく。惣右衛門所持の鎌を龜松取揚ヶ。尙又狼の口へ柄の方を捻ぢ込み。うしろ引きたふし。兩人にておさへ候得共。惣右衛門は數ヶ所喰はれ候事故。働き成り兼打倒れ候に付。狼起上り候を。龜松石を以て狼の口へ差し込み。鎌の柄を打込み。牙をかき候得共。狼掻付き相働候に付。龜松大ゆびにて。狼の兩眼を操り拔き。打たゝき漸仕留申候。惣右衛門事は處々くはれ候得共。灸所に無之故。龜松介抱いたし。宿へ連れ歸り。翌日より療治藥用等仕候處。追日快方之由に候。龜松儀年齡より小柄にて。虛弱に相見え。中々右體の働き可致者には相見え不申候間。驚き逃退も可致處親大事と存。若輩に不似合。働致候段。誠に古今の大手柄に候。斯幼年の身にてさへ。ケ樣の働致し候。況大人においてをや。誰も心懸けはかく有たき事な

風呂敷包をなげ入れて。こちねんとしてうせしものあり。たそかれ時の事なれば。その人とも見とめずして。追人とも甲斐はなかりけり。さてあるべきにあらざれば。太左衛門はいぶかりながら。件の包を釋きて見るに。うちにはえろがね百匁ばかりと。錢十六文ありて。一通の手簡を添へたり。封皮を析きて。その書を見るに。十とせあまりさきつころ。やつがれ困窮至極して。せんすべのなきまゝに。膽太くも惡心起りて。觀音院の使と僞り。當御店にて銀百匁を騙りとり候ひき。こゝをもて火急なる艱苦をみづから救ふものから。かへり見れば。罪いとおもくて身を容るゝ處なし。よりてとし來力を竭して。やゝ本銀をとゝのへたれば。その封債を相添へて。けふなん返し奉る（國法にて。役人百匁毎に銀を包みて。一封さし。印を押して行はしむるに。封賃十六文を取ることゝぞ。是則紙の費に充るといふ。よりてその十六文を添へたるなり）ふりにし罪をゆるされなば。かの洪恩を忘るゝときなく。死にかへるまで幸ひならん。利銀はなほのちくに償ひまゐらすべきになん。あなかしことばかりに。さすがに氏名をえるさねども。あるじはさらなり小もの等まで。この文に就きその意を得て。感嘆せぬはなかりけり。同郷の人。中澤氏（名は儉）今茲（文政乙酉）正月十一日即願寺といふ梵刹にて。太左衛門にあひし折。彼の顚末をうち聞きて。件の手簡を見てけるに。手迹もその書ざまもいといたう拙なければ。さゝやかなる民などのわざなるべしと思ふといへり。折から尾張の人の篆刻をもて遊歷したるが。故郷へ歸ると聞えしかば。そがうまのはなむけにとて。件の事の趣を綴りたる漢文あり。この夏聖堂の諸生石田氏（名は煥）江戸よりかへりて。舊故を訪ひし日。松任の驛なる友人木郁子鵠の宿所にて。中澤氏の紀事を聞して。感嘆大かたならざれども。惜むらくは。その文佅僪なり。よりて綴りかへにきといふ。漢文亦一編あり

且編末の評に云。「嗚呼是一人之身。爲㆓非義㆒則愚夫猶惡㆑之。及㆓其悔㆑非改㆑過。則君子亦稱㆑之。書所㆑謂惟聖不㆑念作㆑狂。狂克念作㆑聖。一念之發其可㆑不㆑愼哉。孔子曰。過勿㆑憚㆑改。孟子曰。人能知㆑耻則無㆑耻。信哉。夫人不㆑知㆑耻。則非義暴戾無㆑所㆑不㆑爲。苟能知㆑耻則立㆑身行㆑道。豈難㆑爲哉。於㆑是知。國家仁政之效。有㆘以使㆓民遷㆑善而不㆓自知㆒者㆖。孔子所㆑謂。有㆑耻且格者。可㆑徵哉」予はその文の巧拙に拘れる

ゝゝゝゝ またゝぐひあらしもふかず神無月
御幸にめづる木々の紅葉　親實

ゝゝゝゝ にぎはしきけふの御幸に冬來ても
猶立ちそふる山のもみぢ葉　重德

ゝゝゝゝ 軒ちかくそめものこさず冬きての
けふも待ちえし紅葉とぞ見る　忠良

ゝゝゝゝ 此冬のけふを御幸とそめ〱て
色あさからず殘るもみぢ葉　爲知

ゝゝゝゝ るり光のます山かけて秋の色を
此面かのもに殘す木々かな　公祐

ゝゝゝゝ もとよりも御幸を待ちし紅葉かは
しられてふゆぞ殘る山陰　祐貞

ゝゝゝゝ 御幸をばことしも待ちて嵐吹く
冬も紅葉のちらずやあるらむ　通修

ゝゝゝゝ 千重百重なほ山姫は冬かけて
霜はもみぢの錦おるらん　爲訓

ゝゝゝゝ おのづから錦とぞ見ゆる神無月
しぐるゝ岡の山のもみぢ葉　大江俊雅

ゝゝゝゝ もゝしほは冬までこえて山陰の
御幸も秋とむかふもみぢ葉　爲則

ゝゝゝゝ てる色を君みそなはせ冬來ても
錦はえある山のもみぢ葉　基逸

ゝゝゝゝ あきの後もこゝろをそめて神無月
名にたつ春にむかふ紅葉　雅光

ゝゝゝゝ 空晴れしけふの御幸のあまつ日に
冬とも見えずてらす紅葉　隆光

ゝゝゝゝ ふゆ來ても此山かげにいく千々の
秋を殘してそむるもみぢ葉　胤定

題者奉行等　爲則

右二編は十二月朔。輪池堂携來。於席上所披講者。併錄于篇左

○騙兒悔レ非自新

加賀の金澤の枯木橋の西なる。出村屋太左衛門といふ商人の兩替舖は。淺野川の東の橋詰にあり。文化九年癸酉の大つごもりに。卯辰山觀音院の下部使なりと僞りて。出村屋が舖に來て。百匁包のしろがねを騙りとりたる癖者ありしを。當時隈なくあさりしかども便宜を得ざりしとぞ。かくて十あまり三とせを經て。文政七甲申の年の大つごもりに。出村屋が兩替舖に。人の出入の繁き折。花田色のいとふりたる

ヽヽ豊なる御代ぞとしるやかる跡の
いなゝきしげき霜の荒小田　樂山
ヽヽ稻雲冬獲晩登田。鳥雀驚人收穗邊
一段荒寒終事後。霜花結成白花檀　公説
ヽヽ冬しるきひえのあらしにふもとなる
刈田の苫やこのは散りしく　通修
題者奉行等　爲則
〇文政八年十月廿三日於修學院御當座後座
十月見紅葉　かく計秋の錦をそのまゝに
千しほおりなす冬の紅葉　正通
ヽヽヽヽみゆきする山路はしばし冬來ても
殘るもみぢに秋を見せけり　家厚
ヽヽヽヽ名もしるき雲の隣の軒近み
ひときに秋を殘すもみぢ葉　有言
ヽヽヽヽ露しぐれそめにし雲に此ごろも
殘るもみぢは御幸まちけん　永雅
ヽヽヽヽ君も臣も見し長月にかはらずて
そむるちしほは冬の山かげ　重成
ヽヽヽヽのちとほくましゝ御幸にかみな月
ちらぬかひある山の紅葉　資愛

ヽヽヽヽちしほ迄けふの御幸のをりにあへ
秋のこしたる木々の紅葉　隆起
ヽヽヽヽのべ山邊秋のこす色もいく千入
けふの御幸をまちし紅葉　樂山
ヽヽヽヽみねつゞき比えのねかけて冬枯は
しらぬ山とも見ゆるもみぢ葉
ヽヽヽヽ神無月きみの御幸につかへ來て
深き惠みをもみぢにぞ見る　公久
ヽヽヽヽ飛霜著樹作多工。十月山顏水面紅
別有光輝迎玉輦。宛如飾障似屛風　公説
ヽヽヽヽ枝かはす松にならびてもみぢ葉も
さかりの色を冬に見るらし　泰行
ヽヽヽヽちりはてぬ木々の梢の冬になほ
色うるはしく殘るもみぢ葉　永胤
ヽヽヽヽかくもけふみはやす春をまつの島の
冬にもちらぬ峯のもみぢ葉　有長
ヽヽヽヽきみがけふ御幸まちえて冬までも
ちしほと殘す山のもみぢ葉　實久
ヽヽヽヽ山陰に嵐もしらず冬かけて
見する紅葉や御幸まちけん　詔仁

〻〻　冬がれの野べのけしきをめづらしと
　　けふしも君はみそなはすらし　公祐

〻〻　秋草は露をかけふる花もなき
　　霜にかれ葉の野べの見渡し　降起

〻〻　冬がれし野べのみゆきのあとゝめて
　　つゝる袖にもちよ積るらし　大任俊矩

冬路　としく〵の御幸のひかり見る野べの
　　草葉の霜の花もそひけり　泰行

〻〻　冬がれの霜のみちしばふみならし
　　御幸につかふ駒ぞいさめる　重成

〻〻　いく度かさそふあらしにちりぬらん
　　落葉をわたる冬の山みち　基逸

〻〻　君が爲しげる眞砂の白たへに
　　おくとも見えぬ道の朝霜　隆光

〻〻　置く霜を袂にしらし此わさげ
　　わけゆく道は駒もいさみて　永胤

冬瀧　岩がねの落葉色とるたき波に
　　時雨の糸のけふはかゝらず　爲則

〻〻　やま風に峯のもみぢをふきたてゝ
　　錦ながらの冬の瀧つせ　公久

〻〻　山かぜのさそふこの葉もれのづから
　　よりあはせたる瀧の白糸　親實

〻〻　冬かけて殘るもみぢ葉枝ながら
　　こほりにとぢよ瀧の白いと　有長

〻〻　時雨ふる音かとぞ思ふ山の瀧
　　雲のとなりの軒に聞えて　重德

冬池　まつが根にいづるいづみの池なれば
　　冬も綠にいく世澄むらむ　忠良

〻〻　冬ながら氷もそめぬさゞ波の
　　花の春かとむかふ池水　爲訓

〻〻　春の名の日影ゆたけき此いけの
　　波さむからずうかぶ松しま　爲則

〻〻　みそなはす此山かげの池水も
　　冬のひかりにさぞ凍るらん　有言

〻〻　見渡すにきしねの嵐さえ〵て
　　波うちよする冬の池水　爲和

冬田　かり衣思ひたゝずは朝まだき
　　冬田の面の霜は見ましや

〻〻　せきわけしゐせの流れの水かれて
　　かり田の面に霜きゆるなり　政通

○文政乙酉御幸記

廿三日御幸之御歌。いまだ手に入り不申。御當日廿五首但御題頂戴にて。其外は御歌多し。廿五日之御詠出と申す事にて。最早内々は揃居候へ共。いまだ表向奉行も。夫故秘し出だし呉不申之由。手に入候はゞ早々遣し候樣申候。尤此度は御兼題なし

仙洞樣。修學院御茶屋より御内々上卿殿上人御供にて。叡山へ御上り被遊。絶頂にて御樂一曲有之。尤三管。夫より東ひらへよほど御下り御歸り被遊候由。御丈夫之事と皆々恐入候由。窮邃軒にて。御樂三曲。下之御茶屋にて御樂三曲ほど御座候よし。承り申候

一供奉公卿方御裝束書には。珍敷御色目も御座候よし。近々手に入たく入御覽可申候

一當日關白樣御先に被爲入。准后樣にも御さそひにて被爲入候由

一周防守樣には。晝頃爲御機嫌伺御出。御還り之節は。御路外御歸り。直に御參院。御末廣貳本。御絹三疋。御拜領之由。御同人樣當日御獻上物。表向鮮鯛一折。御内々御獻上遠鏡二つ。御組重。御猪口。御小皿五十枚づゝ。中は御煎茶色々。下は御煮漬物御菓子と申す事に候。別に下々迄被下候。青籠まんぢう。燒鯛。是は御供之面々此分に而行渡り申候由

○文政八年十月二十三日於修學院御當座

冬山　散紅葉落つるこのみをかつひろひ
　かつ分けのぼる冬の山道

ゝゝ　みゆきして君がながむる山々の
　冬のすがたも珍しきかな　忠良

ゝゝ　冬がれの山のはたかくときは木は
　緑りあらはに生ひ茂りぬる　家厚

ゝゝ　やまぢ行く袖のあらしもさむからで
　冬をよそめの木ゝぞ映（はゆ）る　永雅

ゝゝ　見ねふもとれく朝霜も冬の色
　ひかりおくある山松のかげ　實久

冬野　霜ふかくれけど言葉のいろそへて
　冬枯しらぬ野べの松がえ　胤定

ゝゝ　冬も猶はる風なびくけふにあひで
　御幸をあふぐ野べの民ぐさ　資愛

たゞしこれは短歌のみなり。長歌。旋頭歌。混本歌。字あまりの歌はこの外なり

乙酉歳暮兎園之三　　輪池

○丑時參詩歌

　　橘庭麻呂

下毛野國足利のかたほとりに。よに丑の時まゐりといふわざをせしを。まさめに見つと。そこなる人のかたれるさまをよめる

あやしきは。火にぞ有りける。うちしめる。時こそ有りけれ。もえたてば。けつすべもなし。世中の。人の思ひも。おのづから。しかこそ有るらめ。よの常は。外へも出でえぬ。たをやめの。たつや心を。黒髪の。思ひ亂れて。いなたき頂に。ともし火さゝげ。むなさかに。ます鏡かけ。ひだりてに。かなくぎもたし。みぎり手に。かなつちもたし。ぬばたまの。やみのよふけの。丑すぎて。うしとも言はず。神のます。もりのしめなは。いきのをに。かけつゝすゑて。おひしける。なみ樹の松に。左手の。釘とりおさへ。みぎり手の。つち振り上げて。ねたましや。あなねたましと。かきみだり。逆立髪に。さかたてる。角をさゝげし。ほのほはも。鏡にうつり。かゞみはも。胸にたく火の。おそろしき。姿てらして。とこひ打ち。音もとゞろに。山彦の。どよむひゞきぞ。よそにきく。身にもこたへて。身の毛さへ。いよたちにける。たをやめの。いかにもえたつ。こゝろなるらむ

　たをやめのとこひのろひとうつくぎや
　　いづくのたれか身にひゞくらん

下野州足利里。有世所謂丑時進香者。世之人無有視之。面里人獨視之。告之橘庭麻呂。庭麻呂以國歌記之。余亦作七言古體。以廣異聞

夜入四更人語歇。落月光滅冷透骨。情面閻羅懷肉刃。足躡木屐度幽岐。自謂。無天地人間知。松杉深處有所思。胸懸明鏡頂戴火。火能照鏡鏡照姿。數幅白衣白於雪。朱唇黑髮烏雲垂。右手金鎚左手釘。釘則五寸鎚倍之。三釘四釘七七釘。四十九釘數盡時。受釘老杉宛百丈。更無一葉留在枝。奈何使無心根抵。枯稿不終千萬歲。此時山魑林魅絕。天根地紐似可裂。吾聞。荊楚俗能呪詛人。宜堀兩穴。奈何獨將窃窕身。妬刃毒手好刺人

乙酉子月　　快雪堂主人岡雄

臘月吉日　　　麻布村學究

こは輪地堂の携へられたれば。その編の間に寫しとゞめつ

先會に今日の主の出だされし無名鳥。假に蝦夷鶸と名付けられしを。當直の日携へ出でゝ。或侯に見せ參らせしかば。是はゑまいすかといふ鳥なり。熊本侯の寫眞の中に見えたり。依りて今は蝦夷いすかとよぶなり。併ながら此圖は尾のきれたる鳥を見てうつしたり。長さ尾のさきのさけたるありとのたまふ。さらば全圖をかし給はらむ事を乞ひ申しゝに。今は人に貸したれば。返されし時かしてん。其とり某侯に雌雄かはせ給へば。參りて見るべしとのたまふ。則某侯に乞ひ申しゝかば。いつにてもと許させ給ふによりて。二三日過ぎて參りしかば。さもと人して鳥籠二つ持ち出でさせ給ひ。初めて見る事を得たり。兼ねて携へし主の圖を展てくらべ見れば。此圖は雌の方なり。雄のさまはやせたり。雌の尾は或侯ののの給ひしごとくなり。雄の方は尾の先分れずして尖れり。是は摺されたるにもやあらん。然はあれど見し儘を寫し歸り。人に仰せて書かゝせたり。(圖は別にあり) 按ずるに。熊本侯の寫眞は。觜くひちかひたれば。いすかの名たがはず。このたびわたりしは。大姿は似たれども。觜くひちがはざれば。いすかの名如何あらん。鳴聲ヲルコルの笛にゝて。至りて微音なり。色も聲も鶸にちかきにや

乙酉歲暮兎園之二　　　　輪　地

卅一字の歌を濱の眞砂のごとく盡くる期なしといひ傳へたれど。四十七言をもて。三十一言を取り用ふれば。盡くる期なきことはあらじと思はるゝなり。我わかゝりし時。隅東先生のいはれしは。或人四十七言の内にて。三十一言を除き。これを一字づゝ取り替〳〵上下顚倒して。乘除し。幾億萬に至りて盡くと考へしものありしといはれき。今その人の名を忘れたり。又其書しかせし物も傳はらず。つとめて考へしことの傳はらざるも本意なしとおもひ。世を早うせし我養子清通の兄前原辨藏は。もとの古川山城守に學びて。算術に達したれば。或時此事を語らひて。別に術を施したり。其數左のごとし

貳佰肆拾七京貳仟佰伍拾億捌仟肆佰零壹萬貳仟參佰零參

衍言觧云。一氣之運行出入於身中。一時凡一千一百四十五息。一晝夜計一萬三千七百四十息。釋氏六帖引二嘗息經一云。一日有二三萬六千五百息一也。何夢瑤醫碥云。內經曰。脈一日一夜五十營。營運也。經謂人周身上下左右前後凡二十八脈。共長一十六丈二尺五十運。計長八百一十丈。呼吸定息脈行六寸。一日夜行八百一十丈計一萬三千五百息。按此僞說也。人一日夜豈止一萬三千五百息哉。據何之言。佛說西說並多於一萬三千五百。未知以何爲實數也

乙酉歲暮兎園之一　輪池

○麻布の異石

春秋傳に。石の物いひし事を載せて。神靈の憑りたるよしを論せり。古來其例多ければ。今贅するに及ばず。抑余が住める麻布の地に。見聞せし異石五種あり。其一は。秋月家の園中に。三尺許なる寒山拾得の石像。いつの比にや。行夜の卒の蹤より慕ひ來けるを。斬り拂ひけりとて。其瘢痕を存す。其二は。長谷寺の內に。五六尺許なる夜久神の石像。緇素の諸願をかくるに。其驗多し。是も件の園中に在りしに。長谷の住持。靈夢によりて爰に移すといふ。其三は山崎家の邸內の陰陽石。これを結の神に比して。その願をかくとぞ。其四は。五島家の門前大路の中央に。經尺餘の頑石凸起してあり。道普請の礙りなりとて堀りけるに。其根金輪際までも入りたりとて。元の如く捨て置きぬ。往來の人鹽を手向て。足の願をかくる事。半藏御門內の石に同じ。其五は。森川家の別墅に。二尺餘なる烏帽子形の石に。日月の像顯れ出てたる有り。件の園丁茂左衛門といふ者。靈夢によりて。その鄕里越後國頸城郡吉城村の畠より得たりといふ。目出たき石と申すべきか。以上の五石は。麻布の地に現存して。人皆これを禮拜すること。米家の昔に異ならず。余天下を巡遊して。異石を歷覩せしこと多し。遠き諸州の灼然を略して。近き麻布の隱徵を表するのみ。江都の廣き。本所の駒留石。牛天神の牛石。其餘地觀音に至りては。僕を更ふとも其說盡しがたかるべし

予が家の傍に。字を鷹石といふ町あり。昔鷹の形ある石を堀出して。靈異あり。今はなし。この處に唐豆腐を製して。岩石と名つく。今石のちなみに兩三睦を獻じて。兎園の一笑を乞ふのみ

我が縕袍を攫取し。虎口を遁れて。兼ねて知れる村家に投宿し。右の狀を話す。翌朝村人堤上に來て見るに。盜遂に一烟管の爲に。急所を突れて死せりと云ふ。七尺の大男子。一瞽婦に斃さる。又天ならずや武州忍の在なる。吉次郎といふ者の話なり

遯庵主人記

○本草綱目云

鹿角菜食性トサカノリ　主治　下熱風氣療小兒骨蒸熱勞服丹石人食之。能下石力解麵熱

○倭名類聚抄云

鹿角菜（ツノマタ）崔禹錫食經云。鹿茸狀似水松。和名豆乃萬太　文選江賦注云。鹿角菜漢語抄云和名同上

○救急選方云

食章魚中毒本朝經驗鹿角菜（フノリ）湯浸化飮之。亦解諸魚毒

右本章にはトサカノリとありて魚毒を解する事は見えざれども。倭名抄にはツノマタとあり。救急選方による時は。フノリとありて。諸の魚毒を解くとあり。さればツノマタもフノリも同物にて。こまかき所を布苔に製し。あらき肩を角岐となすものにて。一種一名にして。鹿角菜はフノリツノマタなる事あきらけし。さるゆゑに河豚の魚毒を解くるものなるべし

乙酉臘六　　文寶堂再識

兎園犬猫の禍福條にあはせて御らん可被下候

○いきの數　えそ蠲圖考　三十一字

人の息の數。西土諸家の跡おなじからず。一晝夜に一萬三千五百息。一呼吸を一息とすといへるは。古來の說なり。或は二萬五千二百息といひ。天經或問 或は三萬六千五百息といふ。醫意經 かくの如く大異同あるによりて。人に疑ふ所なり。弘賢これを試みしに。人の長短によりておなじからず。五人試みしに。第一長大の人は一萬八千六百息。其次は二萬二千五百六息。至りて短少の人は三萬四千七百四息にいたれり。其次は二萬二千八息。然れば古來一萬三千五百息といひ。多きに至りて三萬六千五百息といへるも。共に僞にあらざるべし

醫賸多紀安長著 曰。人一日一夜。凡一萬三千五百息。方以智云窮之。蓋洛書之數也。而攷諸書其數不一。張景醫說一萬三千五百二十息。小學紺珠引胡氏易說一萬三千六百餘息。朝鮮金悅卿梅月堂集云。人一日有一萬三千六百呼吸。一呼吸爲一息。一息之間。潛奪天運一萬三千五百年之數一年三百六十日。四百八十六萬息 天經或問二萬五千二百息。呂藍

を實のむすめに不義をしかけ。且藥をのませて墮胎させ。さらに怒にまかせて殺害する事は。よにあるまじき事なりといへり

○犬猫の幸不幸

いぬる十一月廿三日。內藤新宿なる旅籠屋橋本惣八が家にて。河豚を料理ける時。その骨腸を家のうらなる子犬と。家に飼うたる猫と食ひけるに。忽口より白き淡をふき。くる〳〵とめぐり。七轉八倒していとくるしげに見えし程に。犬はそのまゝ死しぬ。猫は座敷へよろめき上りつゝ。折ふし座敷の腰張をせんとて。つのまたといふものを煮て。盆に入れて置きたるを。此猫そのつのまたを喰ひけるに。見るが內にくるしみの氣色うせて。平日のごとくになりけり。これつのまたは。魚毒を解すものなるか。それをしりて。猫の食ひけるか。又はくるしさのまゝに。何となくくらひしか。自然とつのまたの功によりて。魚毒を解したるにや。とまれかくまれ。犬は不幸にして死し。猫は幸にして免れたり。畜類すら瞬束の間に。幸不幸かくのごとく。其數あるものなり

(編者曰。此間に數行を脫したるものなるべし)

文寶一首の秀歌をよみにき。そのうた

すこやかなみのを養ふ老らくに
あやかりたきの音に聞きつる

この一條は尾州名古屋人田鶴丸ぬしの物がたりなれば。鶴のはなしを龜屋が聞きとり。千秋萬歲萬々歲と。目出度筆をとゞむるになん

文政乙酉臘月朔　文寶堂散木しるす

○瞽婦殺賊

近比の事なり。武州忍領の邊へ。冬時に至れば。越後より來る瞽婦の三絃を彈じて。村々を巡りつゝ。米錢を乞ふありけり。或冬忍領の長堤を。薄暮に通過せるに。忽後より呼び掛くるものあり。瞽婦

(編者曰。此處もまた脫字あるべし)

即自ら吹くところの管頭(ガンクビ)を指し向くるに乘じ。瞽婦摸索し。我が烟草に火の通せざるまねして。大人口づから吹きたまへといふ。盜何の思慮もなく。力を入れて吹くに及びて。其機を測り。忽ち盜の烟管を握り。躍り掛りて。力に任せて咽喉を突く。盜不意を討れて。大に狼狽して。仰けに倒れぬ。瞽婦直に

めぐらしつゝ。その身急病にて。いと危きよし人をもて告げしらせけり。娘は此事まことゝも思はね共。はる〲父をたづねきつるものゝ事なれば。もしさる事のあらんには。後に悔ゆるも甲斐あらじとて。やがて父の宿所に走り來て見れば。案の如くそら言にて。自得齋は娘を見るより。おどりかゝり引きよせて。いたく打擲し。其上娘は懷胎にて。五月になるよしなるを。おろし藥をのませて。流產させければ。遂に血のぼりて狂氣しけり。吉五郎は。大坂にありしが。江戶よりの狀に驚き。取るものもとりあへず。夜を日に繼ぎて下りつゝ。まづ京橋なるみす屋にて樣子を聞きて。自得齋が宿所にゆきて見るに。妻のれるすは亂心しつゝも。夫のかへり來つるを見て。いさゝか正氣になりたるやうなり。されどもこゝにあらんは事むづかしかるべしとて。湯島金助町へ借屋もとめて引きうつりけり。抑金助町に太兵衛とて。伯樂を渡世にするものあり。しば〱奧州へ往來せしものなれば。吉五郎とは相識るどちなり。故に彼をたよりて。そが同じ長屋を借りて。夫婦うつり住みたるなり。かくて二三日も過ぎける程に。おるすの亂心も治しければ。大に歡び。吉五郎は禮ながら京橋みすや方へ行きける留守へ。亦復自得齋來て。いよ〱勤奉公に出ださんとて。引きたてゆかんとせしを。かたはらにありしはした錢を取りて。投げつけゝるに。父の顏にあたりければ。大に怒り。腰なる短刀を引きぬきて。一突に娘をころしけり。長屋のものども驚きさわぎけれど。自得齋は悠々として。さのみ騷ぎたつに及ばず。親に慮外せし娘なれば殺したりとて。聊も騷ぐ氣色なし。されども其まゝにうちおきがたく。大勢あつまり自得齋をからめて。上へ訴へ出でしとなり。これは文化十四年二月朔日の事にぞありける

評に曰。自得齋はおるすの實父にてはあるべがらず。おるすに占ひを賴まれし時。これぞといへる親子の證據もなく。殊に邊鄙のものと見くだして。いかにもよくたばかりて。此娘を賣らんと思ひ。賣卜をするほどのものなれば。よきやうに詞を合せ。まことしやかにもてなして。實父なりと僞りしものなるべし。いかに國のはてに住むものなればとて。親子の恩愛をしらぬものやはある。さる

父に逢ひたく思ひ。手すぢもとめて。便をきけば。今は江戸にて醫業をして居るよし。夫吉五郎に其事を告げて。何とぞ一度は江戸へ出で丶。父の行方を尋ねたきよしを。せちに頼みければ。吉五郎も尤なる事に思ひ。幸ひ此春も針の仕入に。江戸へ出づるなれば。つれゆかんとて。夫より旅の支度をしつ丶。一の戸を立ち出で丶。江戸京橋みすやといへる針問屋方に着きぬ。こ丶は毎年仕入に來ぬる時。吉五郎が定宿なれば。夫婦ともに。此みす屋に逗留して。毎日父のありかを尋ねけれども。元より江戸にての名もしらず。所も定かならねば。手がゝりにせんよしも思ひわかで。ある日淺草のかたに出でたる時。花川戸に自得齋といふ賣卜あり。此所にて父のゆくへを占ひもらはんとて。其所に立ちより。さまざまとありし事ども語り聞せけるに。此自得齋は。則此娘の實父なりければ。れるすの歡び大かたならず。夫より父の宅馬道壽命院といふ寺の地内にあれば。娘を伴ひ。我宅に兩人とも止宿させければ。吉五郎も安堵して。その身は上方に賣用あれば。ゐるすをば父に預け置きて。上方へ登りける。此れるすはこ

とし十八歳にて。しかも容儀よろしければ。父の自得齋道ならぬ戀慕の情おこりて。ある夜娘を犯さんとしければ。娘は大きに驚きつ丶。きびしく父をいさめければ。其坐はそのま丶に思ひやみぬ。されども是より娘を大ににくみて。吉五郎のかへらざる内。勤奉公に出だして。金にせんとはかりけるを。娘に告ぐるものあれば。娘は猶更かなしく思ひ。京橋なるみすや方へにげゆき。父の恥を申すに似たれども。淺草には居がだし。何とぞ夫吉五郎の歸るまで。かくまひ置き給はれとて。しかじかのよしを語りければ。みす屋はなさけあるものにて。さらば吉五郎の下らる丶迄。こなたに居給へとて。かくまい置き。猶又吉五郎方へも。早飛脚にて。大事出來たれば。とく下り給へといひつかはしけり。扨自得齋は。娘を尋ねけるに。定めてみすやへ行きたらんとて。みすや方へ來て。娘を出だしくれよといひけれ共。さまざまにこしらへて。あはせざりければ大にいかり。彼是むつかしくいひかけ爭ひしが。理にかつよしのなかりければ。みす屋より娘をあづかりしといふ一通をとりて歸りぬ。かくて自得齋は。又奸計を

又醒齋語らるゝ。今は大城の御能に。としわるとき蓬莱風流とか。鶴龜風流などやうに稱へて。鷺大藏などいふ家の子のものすなる。これはいにしへの神祭にせし風流の。纔に殘れるなりけりとかたりき

解云。この風流祭は。いにしへの田舞のなごりなるべし。田舞のこと。拙考あるを。いと長やかなれば。いとまあるをりに。別にしるすべう思うのみ

風流祭に謠ひ來し歌

高き屋にのぼりてみれば煙たつ
　民のかまどはにぎはひにけり 二遍

君が代の久しかるべきためしには
　かねてぞ植ゑし住よしの松 二遍

長からうさゝけの花はながからで
　いらぬ栗の花のなかさや 二遍

さゝぐりの引さゝにはならで柴にこそなれ ヤリ
オリハリ いせ人はひがごとしけりといふ句うたはず

家持歌

かさゝぎの云々

庭燎歌

み山にはは云々

こは風流祭のさまを書にかきてよと。公和の乞はるゝまゝに。そのあらましのかたちをかきたるに。又その言書をもと。そゝのかされて。端にはしるしつるなり。いとにはかにものしつれは。いはまほしきこともおほかたはもらしつ　西原晁樹

この記事は。このごろつくしの梭江より贈りこしゝなりけり。兎園のまとゐにも。此會既に終りなれば。なにをがなしるしつけなんと。かねてはおもひ起しゝかども。いぬる月のなかばごろより。いと〳〵事の蝟集して。これかれ捜し索め得ず。はやけふにもなりぬれば。せんかたなさの一二條をとう出て。社友の席末に披講すと云ふ

文政乙酉嘉平朔　海棠庵再識

○邪慳の親

南部一の戸にすめる名は忘れたりもの。いかなる子細か有りけん。妻の病中といひ。殊に六つになる一人の娘名はしらずを捨て。江戸へ出でたり。妻は間もなく身まかりて。娘は伯父なるもの方に引きとられ。成長しけるに。針商人吉五郎といへるものに嫁しけり。娘はとし頃

は。諸あげともいひつべし。謡ひ終るを持ちとりて。打手ども
うつなるが。女撥男撥などいふ名ありて。打手どもいさゝか
飛びちがひ。入りかはりつゝうつに。拍子いさゝか
もたがはず。笛に。鼓。聲を揃てやおはとはやしごとして打つ
に。笛に。鼓。鞨鼓やうのもの合するも有り。鉦を
も交へうつも有り神々しさいはんかたなし。里か
ぐらともいひつべく。いにしへめきたり。かくて。
みこしかき出だすより。御跡に立ちてうつを。道ゆ
きといふ。拍子又ことなり。橋を渡るときは又拍子
をかへて。橋かゝりにて二かへり三かへりあそびて
ゆくなり。又別神の社の前をわたるにも。かたのご
とく。手向つゝゆくに。村長が門のへには。かねて
大春をなん持ち出て置くなるは。太鼓をすうるまう
け成りけり。こゝにてもかしこにても。二歌三歌ぞ
まひあそぶなる。かくしつゝ日暮れて。歸りては。
曉かけて遊ぶなれば。こゝかしこのつゞみの音。よ
るひるたえまもなくぞ聞ゆる

豊秋を神にまをすとさとかぐら
月のよかけて鼓うつなり　晃樹

又おなじこゝろをよめる

豊秋の稲かり月と露にぬれ
時雨にぬれて立てる民はも

夕月の影も利鎌にかよふまで
秋の山田を苅りくらしつゝ

いにし年。江戸に在りけるをり。山東醒齋に問ひと
はれ。なにくれの物語せし序に。風流祭のことを語
り出でたるに。いとよろこぼひて。ほご反故の中よ
りとり出でゝ見せらるは。右の記を引きて風流渡大
路云々。傘鉾如常云々とかいふ事ありしとおぼゆ。

風流祭の圖

一　四十三盃　　下谷　藩中之人　五十三

一　八寸重箱にて九盃　豆腐汁三盃　　小松川　吉左衛門　七十七

右にしるす數人は。濱町小笠原家の臣。某その會にゆきて。見つるに違なしといへり。人の飲食の量。大概限りあるものにて。いと疑しきまでなり。されど予いぬる日。お玉が池なる緣家にゆきしとき。新川の酒問屋（家名は忘れたり）喜兵衛といふもの來て。このもの水を飲むこと。天下第一なるべしと自負するよしなれば。いざとて一升餘も入るべき器に。水を十分入れて出だしゝに。忽貳碗をのみほして。さていふ。おのれ既に飯を喫して。いくほどもなければ。多くのみがたし。食前ならんには。今一貳碗は容易しといへり。予が目擊せしもの。この喜兵衛が水と。九鬼侯の醫師西川玄章が。枝柿を百食ひしとなり。かゝれば大食大飲の人は。腸胃おのづから異なるところありやしらず

○風流祭　　海棠庵記

つくしの道のしりの國に。ふりう（風流）といふ神わざ有りけり。そは八月よりなが月かけて。新しね稻を（本ノマヽ）苅り得て。はつ穗のかけちから（懸税）をたむけにひらほりのしろ酒をかみて。處々の產神の御社にぞものすなる。年ごとの定まれる日次もあり。はた稻どもみな納めたる後に祭るもあり。あるはその月の初に。神鬮といふ事して。日をうら占問ふもあり。されば二度の月見るころは。けふはくれの邑。あすは彼のさとのなどいひのゝしりて。民のかまどは。けぶりにぎはしく立ちけぶる成りけり。殊にことしは豊けきたのみを得たればと。かねてより悦びあへれば。いとゞしく競ひつゝなんものする。こゝかしこのさまども見あつむるに。いさゝかづゝのたがひめはあなれど。大かたはおなじさまにぞ有りける。みこし（神輿）なぞかきいだす前に。傘鉾といふものを立てゝ。御社の前に居て。大なる鼓に向ひ。額に當て。れなじさまにそうぞきて。面持足ぶみ。いとしづけくて。歌をなんうたふ。さてかたへのものども付きてうたふ

一梅干　壹壺　安達屋新八
茶　十七盃　四十五

麻布
一酢茶わんにて　五十盃　龜屋左吉

一茶漬　三盃　四十七
飯　連（常の茶漬茶碗にて。萬年味噌にて。茶つけ香の物ばかり）

淺草
一飯五十四盃　和泉屋吉藏
たうがらし五十八　七十三

小日向
一同四十七盃　上總屋茂左衛門
四十九

三河島
一同六十八盃　三右衛門
醤油二合　四十一
鱣　連（いづれも喜撰の茶づけ）

本郷春木町
うなぎすぢ
一金壹兩貳分　吉野屋幾左衛門
七十五

深川仲町
中すぢ

一金壹兩壹分貳朱　萬屋吉兵衛
五十一

同　淺草
一金壹兩貳分　富田屋千藏
飯七盃

兩國米澤町
一金壹兩貳朱　米屋善助
飯五盃　四十八
蕎麥組（各二八中平盛　尤上そば）

新吉原
一五十七盃　桐屋惣左衛門
四十二

淺草駒形
一四十九盃　鍵屋長介
四十五

池の端仲町
一六十三盃　山口屋吉兵衛
三十八

神田明神下
一三十六盃　肴屋新八
二十八

一 五升入丼鉢にて壹盃半　　天堀屋七右衛門　七十三
直に歸り。聖堂の土手に倒れ。明七時迄打臥す

一 五合入の盃にて拾壹盃　　本所石原町　美濃屋　儀兵衛　五十一
跡にて五大力をうたひ。茶を十四盃飲む

一 三合入にて貳拾七盃　　金杉　伊勢屋　傳兵衛　四十七
跡にて飯三盃茶九盃じんくを躍る

一 壹升入にて四盃　　山の手　藩中之人　六十三
跡にて東西の謠をうたひ。一禮して直にかへる

一 三升入にて三盃半　　明屋敷の者
跡にて少の間倒れ。目を覺し。砂糖湯を茶碗にて。七盃飲む

右之外酒連三四十人計り有之候へども。二三升位のもの故不記之

菓子組

一 饅頭　五十
一 羊肝　七棹
一 薄皮餅　三十
一 茶　十九はい　　神田　丸屋　勘右衛門　五十六

一 まんぢう　三十
一 鶯餅　八十
一 松風せんべい　三十枚
一 澤庵の香の物丸のまゝ　五本　　八町堀　伊豫屋　淸兵衛　六十五

一 米まんぢう　五十
一 鹿の子餅　百
一 茶　五盃　　麴町　佐野屋　彦四郎　二十八

一 まんぢう　三十
一 小らくがん　貳升程
一 ようかん　三棹
一 茶　十七盃　　千住　百姓　武八　三十七

一 今坂もち　三十
一 煎餅　貳百枚　　丸山片町

申。同所に滯在いたし。病中の物入相續き不申段。申聞候。然處七八年も致滯坂候はゞ。同所御屋敷へ御屆申上候義と存候。具に可申聞候

答。如仰難病に付。其節過分の物入御座候に付。借用多く相成。折角御在處へ罷下り可申所存候て。御座候へ共。商賣候儀に御座候へば。大坂出奔仕候ては。以後御在處へ罷下り候ても。船乘出來不申候に付。無餘儀同處にて相拵罷在候。永々之儀に御座候へば。大坂御屋敷迄御屆可申上候處。御存之通之身分に御座候へば。夫迄行屆不申。不調法に奉存候

八月廿一日　水夫　重次郎

右之通御屆申候以上

長倉市郎右衛門

長嶺三藏

大坂柏屋勘兵衛船安穩丸。千二百石積。船頭水主拾三人乘内二人海上にて病死

一阿波　船頭　兵藏　一讃岐丸龜　猪之助

一讃岐高松　重吉　一同　義兵衛

一安藝　粂介　一同　政次郎

一備後　熊吉　一紀州　三平

一紀州　亦助　一伊豆八丈　鍋藏

一御在所　重次郎

右拾壹人

外貳人海上にて病死

備後尾道　惣吉　紀州　松次郎

〆拾三人

乙酉十二月朔日　中井乾齋錄

○大酒大食の會

文化十四年丙丑三月廿三日。兩國柳橋萬屋八郎兵衛方にて。大酒大食の會興行。連中の內稀人の分書拔

酒組

小田原町

一　三升入盃にて三盃　堺屋忠藏　丑六十八

芝口

一　同六盃半　鯉屋利兵衛　三十

其坐に倒れ。餘程の間休息致し。目を覺し茶碗にて水十七盃飲む

小石川春日町

吹折れ。楫も打折候に付。如何共致方の便無之。汐合に合せ流行申候。然處。三月末とも覺候時分。二三日の間水切にて。一統難儀仕。助命之程も難計御座候に付。乘組中髮を切。神佛へ誓願仕候處。冥慮に叶候哉。其夜四ッ時比にても候哉と覺候時刻。俄に大雨降出候に付。檣より樋を掛け。水溜二つ程取入候に付。一難を相免れ候内。拾三人乘之内。貳人病氣に付乘組中。彼是氣を付候へ共。永々の漂流に氣も勞候哉。相果申候。何方之沖共一向相分り不申候處。四月十日比にても御座候哉。遙に異國船と見請くる大船相見え候内。次第に近寄候。右唐船より橋船を卸し。迎に罷出候に付。一命には難替。直樣乘組中拾壹人共に。異國船へ乘移申候。然共一向相互に。何を申掛候ても。相分り不申。繪圖面抔出し。日本の富士山などを繪にかき。此山下より風に放たれ流候哉とまで。手樣にていたし候に付。其通りと相默頭罷在候。左候て菓子抔喰せ。彼是と一統氣を付呉候に付。乘組中拾壹人共に。安心仕。乘船いたし居候内。何方へ列行可申哉。右之通り大船に帆柱拾壹貳本も立て。風に任せ。廿四五日も走りし處。柱へ上り。遠目鏡にて日本の山見え候に付。四五日之内。日本の地へ着可申手樣にて爲知候に付。皆々相歡候内。申聞候通。五日目に相成。彌日本の山と見え候て。漁船相見え候。漁船よりは異國船と見受け。殘りなく艪を立迯候へ共。唐船には叶ひがたく。直樣追付候に付。何方の漁船に候哉と問掛候處。常陸國ひら方と申處の船の由申候に付。異國船より橋船三艘取卸。乘組中拾壹人ともに。右漁船に積送り申候。右之通り永々之事に御座候へば。何と申處も相分り不申候に付。相尋ねし處。五月四日と申聞候。左候て。同國河原鄉と申浦役所へ罷出。御改相濟み。五月廿六日右同所出立候て水戸樣より。頭役三人。横目四人。與力拾壹人附添候て。江戸小石川御屋敷へ御送届有之候。右御屋敷に十二三日滯留罷在候處。御勘定奉行遠山樣にて。御詮議に罷成候に付。大坂出帆後難船に逢ひ。異國船へ乘移候次第。逐一言上仕候。尤御詮議中日本橋錢屋又左衛門と申者の宅へ被置。御詮議相濟當御屋敷へ御引渡に相成候。此段左樣に御聞届可被下候

問。滯坂中病氣に被取付候に付。御在所へも下り不

べきに。今は鳶に似て。きたなげなりとよめるなり。此四の句。とびと假名にてありしを。こひとよみて。やがて木居と書きたるなるべし

乙酉臘月朔日　　龍珠しるす

○漂流人歸國

乙酉八月の頃。五島侯の藩士横山慶吉の談に云。今茲五月水戸沖へ異國船來て。日本の漂流人十一人を送りかへしたる中に。水夫一人。主人領處。五島目井津の者にて。重次郎といふものなり。官府の御吟味濟みて。當八月本藩に引き渡しになりたり。年三十恰好にて。隨分利根に。物の分りたる者なり。其者に五島侯より。異國船中の事共尋ありし口書の寫。左の如し

乙酉八月廿一日。重次郎を呼び出だし。問ひて云。其方事。御在所何方の者に候哉。難船に遭ひ。異國船へ乘り移り候一件。御詮議に相成。此度御勘定奉行より御引渡有之候。是迄之次第。始終具に可申聞候

答へて云。如仰私儀は。目井津出生に御座候。水夫之義に御座候へば。十六七の比より大藤津得丸。軍藏船權現丸へ乘り候ひて。船執行仕罷在候。然處。右軍藏大坂表借用多く。同處留船に相成候に付。其後白江町長次郎と申者の船へ乘候而。三四年も上下仕候所。右長次郎儀も。大坂表借財多く。同處留船に相成候。然處私風と病氣に被取付。十四ヶ月知人の方に罷在候而。養生仕候處。快氣致し候へども。病中の物入彼是。都合七百目位の借用に相成候。依之御國許へ罷下り候儀も難相成。彼是心配罷在候內。知人の許より申聞え候は。兵庫足屋仙吉と申者の船。水夫無之由。此船に乘候て。稼ぎ可申旨申聞候に付。右仙吉船に乘候而。三四年も蝦夷松前の方へ通ひ。賣買仕罷在候。然共格別の利益も無御座候に付。去霜月より大坂柏屋勘兵衛と申者の船へ乘り候而。江戶行き荷物諸色積入。去霜月廿八日同所出帆仕候處。順風にて急ぎ紀州三濱と申處へ着申候。翌日も相應の順風と存。同處出帆仕候處。四時頃より西風強く。東南を向候て。風に任せ流候內。一向山も見え不申相成。風は彌强く。其上沖中の事に御座候へば。船持留がたく有之候に付。柱を切り。荷物を打捨候て。相凌候處。彌風波强く相成。橋船二艘共二つに

感じて。薄金といふ鎧をなんきせたりける。岸近くよせたりけるを。石弓をはなちかけたりけるに。すでにあたりなんとしけるを。首をふりて身をたはめたりければ。かぶとばかり打ちおとされにけり。冑落つる時。本鳥きれにけりとあり。按ずるに。此時助兼本鳥を冑のてへんより引き出だして。着たる者なるべし。繪卷物にあり。此圖のごときあり。助兼もこの如く。かぶとを着たる故に。大石の落つる勢にて。本鳥ともにきれたるなり。冑の下に本鳥を折り曲げてあらんには。大石にうたれたればとて。冑とともに本鳥はきれがたかるべし。又源平盛衰記。玄の原合戰の條に。入差小太郎。高橋判官と組みたる所に。入差が叔父落ちあひて。高橋が冑のてへんに手を入れて。首をかくとあるも。高橋本鳥をてへんより引き出だして。着たるなるべし。折り曲げてあらば。てへん大なりとも。本鳥をしかとはとりがたからん。是をもて。助兼の冑をきたるさまをおもふべし

○參考太平記元弘三年。後醍醐帝船上山へ潜幸の條に。伯耆の卷を引きて。奈和長高が三男乙童丸とありて。小注に。正六位上。四郎左衛門尉高光。建武三年十一月一日。於西その第三番の弟の乙童丸十四歲なるべきやうなし。其うへ次男の孫三郎基長には。土用松とて三歲の男子あり。これをもて見れば。高義たとひ若年なりとも。二十あまりなるべし。悉く小注の誤なり

○若鷹

群書類從　定家卿鷹三百首

あまたとやふませて見ばやいまだにも
古木居に似る秋の若鷹

此四の句。予が藏本には。ふるとびに似るとあり。これは古鳶に作るかた勝れたり。古木居にては。歌の心何とも聞えず。すべて大鷹の今年生ひの若鷹は。形容さながら鳶にかはらざるものなれども。一とや經れば。毛色淺黃になりて。夫より鳥屋を出づる每に。次第にうるはしくなるものなり。歌の心も。あまたとやをかへたらば。毛もかはり。うるはしかる

すべきやうなくて。宰領の足輕三四人も。命からから逃げ出だし。屋敷へ歸りて。しか〴〵のよし役人中へ申しゝ故に。屋敷よりも侍分の者とりませ。追取刀にて馳せ至りしが。車ともにいづくへ持ち行きしか。其行方しるべきやうなければ。各齒がみをなしつゝ。手をむなしく歸れり。因りてだもふに。人心一たびうごきては。何樣の事をしいだすべきもしれず。されば。前漢の賈誼が言に。安民可ニ與行レ義。而危民易ニ與爲レ非とあるは。ならびなき名言なり

此時町奉行曲淵甲斐守。山村信濃守なりしが。町家のやうを見廻らんとて。大勢にて出でしかど。西河岸邊に三百五百の組を立てたるあふれ者。大瓦など積みまうけ。無事なる時は奉行を恐るべし。此節に至りては。何の憚るべきことあらん。近付けば打ち殺すべしと。口々にのゝしりし故に。兩奉行もすご〳〵と引きとりきとぞ

日々かくのごとき故に。御先手十組の面々。安部平吉。柴田三右衛門。河野勝左衛門。安藤又兵衛。小野次郎右衛門。松平庄右衛門。長谷川平藏。武藤庄兵衛。鈴木彈正少弼。奥村忠太郎。各與力同心を召して。江戸中端まで廻りしが。何の仕出したる事もなかりき

其頃の取沙汰に。御先手の面々。物馴れたる同心に道をはらはせ。打ちこはしの一むれある所をば通行せずして。脇道をのみ廻りきといへり

予がしれる御番衆。五月十七八日の頃か。御借米を受取りしに。其日の相塲貳百五兩なりき。われら其頃は小普請にて。六月の中旬頃に。玉落ありしが。はや大に直段も引き下れりといひしが。九拾八兩貳分にてありき

此時分。町家にては。白粥。あづきかゆ。麥挽わりを以て。最上とし。豆めし。そら豆めし。芋めしを上食とし。ひばめし。きらず飯。或はうどんの粉のつといれ等を。その次となす。甚しきに至りては。得しらぬ野菜をたはく鍋に入れ。鹽にて少し味をつけ。其中へひえの粉樣の物をふりちらして食とす。又わらをすさの如くに切りて。ほうろくへかけて。よきほどにこがし。それを挽舂にてよくひき。だんごとなして食らへり

此町觸れによりて。打こはしの鎭まりしにはあらず。江戸中の米屋共を不殘打こはして。人氣やゝみし上に。米穀下直にし。御救

九日に至りて。諸方の水勢漸く減ず。此時分。愛宕山切通の土手。山王山。三田春日山。麻布狸穴等の土手又崩れて。人多く死せり

此秋の洪水に溺死せしもの。萬をもて算ふべし。濁水に乘じて。蛇蝮の類ひ幾千となく漂ひ來りて。人身につくこと甚しく。誠にあはれなることといふばかりなし

此年のはやり唄に。「天竺のあまの川に白ィ小桶が流れた」とうたひしが。天に口なし。人をもていはしむるならひに。果して其しるしむなしからずして。洪水の變ありき。いにしへ。孔子も童謠にて考ありしこと。家語等にも見ゆ。浮きたることにはあらじ米價打ちつゞきて貴く。冬御切米百俵四拾三兩の張紙出でしなり

九月に後明院殿かくれさせ給ふ。ならびなき大凶の年といふべし

天明七未年打ちつゞきたる米直段。當春に至りては。ます〳〵貴く。春御借米百俵五十兩の張紙出。上米の相場は七十兩以上なりき。夏御借米五拾二兩にてありしが。五月に入りて米價いよ〳〵貴く。百三四拾兩となり。今日を送る市人等。已に飢に臨めるもことわりぞかし。五月十九日より、江戸中米穀の商ひなす者の見世に。打ちこはし亂妨なすこと甚しく。百人二百人。その黨を結び。時々ときの聲をあげて。晝夜のわかちなくさわぎあるく體。さながら戰世の如しとおもはる。夫より端々に至るまで。皆人氣かくの如し。後には米商賣にかゝはらず。見ぼしき町家に打ち入りて。手にあたるものを持ち出だして。其町内にても防ぐべき手段なく。或は酒を樽ながら呑口をそへ。或はかゞみをぬいて。柄杓をそへてもてなしとせり

米屋ならぬ家をも。物とりの爲に亂妨せしにはあらず。その見世の米屋に似たるあき人。或は酒屋餅屋そば切や。すべて食物をあきなふもの、見世は。打ちこはされしも有りしなり。そのそば杖を打たれじとて。銘々に見世先へ。さたう水など出だしおきて、あふれもの等にのませにき

此時名は忘れたりしが。何がしといへる大名。家中へ渡すべき扶持米とて。其本家へ無心して。貳拾俵許車にて。警固も大勢附き添へ來りしに。鮫ヶ橋にて打ちこはしの一むれ。百人計も追取卷きて。車の米申し請けたし。もし異議ある上は。力づくにて請取るべしとて。きそひかゝれる大勢のやうすに。な

廿四日北國西國の海上大風あり。冬御切米百俵四十六兩の張紙なりき。十月二日北國九州の洋中大風。同じく十一日大坂雷鳴甚しく。同所大手御門雷火にて燒失す。此後冬中大小の火災度々なりき
天明四辰年正月より。未申の方に彗星あらはる。米價甚しく。春御借米百俵四拾八南の張紙出。夏御借米も四拾八兩なり。町相場なるものは。上米に至りては六拾兩以上なり。公より米を出だして貧民に賜ふ。世の人横田火事といへるも。十二月廿六日鍛冶橋御門内横田筑後守より出火にて。殊に大火なり。此年は奥州南部。仙臺。津輕。八戸領等大に飢饉なりき
天明五巳年も。米價百俵に五十兩前後なり。八月十二日。五畿內及東海道筋洪水
同六丙午年正月朔日日蝕皆既。大小の諸星東方にあらはに。白晝くらきこと黃昏にも過ぎたり。此春中火災繁きこと。其數をゑらず。其中に正月廿二日湯島よりの出火。殊更おびたゞし。五月頃より天氣甚不順にして。土用見舞に綿入をかさぬ。老人のともがらは猶寒さにたへずといへり。さればいやしき口ずさびにも

春は火事夏はすゞしく秋出水
　冬は飢饉とかねてゑるべし

七月十二日より大雨篠をつくがごとく。一向に止みなく。十四日には。當地洪水にて。目白下大堤崩れ。牛天神下小石川邊滿水。其深さこと五六尺に及べり。御茶水昌平橋。淺草御門柳橋邊一面に大水にて。往來もとゞまりぬ。又上野。下野。秩父等の山水俄に發し。烏川。神川。戶田川。利根川等大水漲ること數丈なり。同十七日曉に。熊谷の土手裂けて。栗橋。古河。關宿。越谷。杉戶。千住。大橋。小橋。小塚原。淺草邊。本所。隅田川。向島。秋葉。三圍。牛島邊は偏に海の如しといへり。大橋。永代橋流れ落ち。其外小橋の類はゑるすにいとまあらず。兩國橋は數百人の人夫をもて。漸に防ぎ留めたり。淺草。並木。駒形。御藏前。八町。天王橋邊。船にて往來す。同所觀音堂他所よりも高し。諸人此堂舍に登りて。水を避けしもの多しとなん。又此頃東海道は。酒勾。馬入。六鄉等の川々往來なし。鶴見橋も巳に流落し。神奈川。新町。藤澤の宿々。滿水にて往來止め。十八

右校編數萬言楮數二十有五頁。所臨寫印本五頁亦在其中矣

著作堂云。丙戌春正月下浣。關潢南の通家宇多氏（名長直 號鱗齋）の隨筆。消夏自適を閱せしに。その編末に。天明荒凶の一編あり。こゝに抄錄して。もて比較に充つると左の如し

龍齋云。予が犬馬の年つもるうちに。天明の頃ほど凶年の繁きことなし。先天明二寅年七月十四日の夜。丑の刻にもやあらん。當地の地震おびたゞし。翌十五日夜戌刻前夜の地震よりも甚しく。老人子供など足よわなるは。歩まんとしては倒れたり。わかきものとても氣力の弱きは。目くるめきて。漸くに這ひ出で。行燈などはみなゆりこぼし。山林に響き震ふ音物すごく。予が幼き頃なりしが。外に戸板をならべて。家內打ちこぞりて夜を明しゝなり。翌朝に至るまで。ふるふこと十五六度に及べり。とりわけ相州小田原邊殊に甚しく。箱根山及城中石垣崩れ。民家多く破損し。人馬のそこなふもの多し。大山にては三四間。又は七八間もあるべき岩石崩れ落ちて。人々膽を冷せりといへり。八月四日に。江戸海邊に津浪の變あり

天明三卯年早春より。四月頃に至るまで。當地はいふに及ばず。諸州諸所に大小うちまぜて。火災またおほし。三四月頃京都及五畿內。時候の寒きこと冬のごとく。時雨降りて晴曇久しく定らず。六月十七日關東筋其外諸州洪水。北國。西國に海上大風にて。通船破損多し。大抵米相塲も引き上りて。上方よりかけて。一石に百二十目ぐらゐなりき。當地に至りては六七十兩迄にも至りしなり。七月朔日より八九日に至りて。北國。東國及京都。大坂。江戸。伏見。大津等山谷鳴動す。同日より上州。信州の地。夥しく震動して雷鳴のごとく。砂石降り下ること雨の如し。六日夜に至りて殊に甚しく。七日は白晝闇夜の如く。岩石を飛ばし。其近國諸國熱灰を降らしぬ。此時淺間山及草津山等燃え出で。烈火散亂す。八日未の刻。熱沙熱泥を誦出し。利根川の水上に溢れ。其近國の諸村を漂沒し。民家を破損なし。人民及牛馬鳥獸魚鼈死亡し。或は水火の爲に死せしもの四萬餘人といへり。七日夜より九日に至りて。江戸表も一天くもりて。日の光を見ず。灰降ること雪の如し。

を損ふに至るべからず。且丁未の忿劇も。餓民等唯米商人の奸詐貪婪を憎み恨みしのみ。露ばかりも野心のものなし。便是神州忠直の人氣のおのづからなるものにして。異朝の及ぶ所にあらず。しかしながら。亦かけまくもかしこき。上への御至德御威光によるものなれば。萬民各々業を奬めて。驕を袪け。泰平のうへにもなほ泰平を樂ふべきこと勿論なるべし。よりて錄して。みづから警め。人を箴むること件の如し

再いふ。予丙午丁未和漢災變當否の辨あり。あまりに編の長くなれば。そは又別にしるすべし。この餘。文化以來歲豐作うちつゞきて。米穀の價。或は金壹兩に石二三斗。或は石五六斗。又所によりて二石餘なるもありし事。是により諸家に命ぜられて。米粟を多くかこはしめ給ひ。又江戶町中にも。その分際に應じて。戶每に米を買ひ入れさしてかこはしめ。いく程もなくその事やみて。その米を御あげになりし事。文政に至りても。江戶中の商人等に。物の價を一わり引きさげて賣れとふれられし事。當時士農豐年を憂ひとせし事。今茲に至りて。奥州半熟の聞えあり。美濃は洪水によりて。人多く溺死せし事。甲州に蝗の風聞のある事まで。悉くしるし盡さば。その間には亦論辯のなきにあらねど。かゝる事には憚の闕をいかゞはせん。予は壯年より筆とる每に。謹愼を旨として。禁忌に觸るゝことは記載せず。見ん人これをおもひねかし

附けていふ。この兎園の集筵は。必。月の朔日にすなるを。來ぬる霜月には。文寶堂のあるじすべきを。さはることありとしも聞えしに。けふなん。關東陽の誕節なればとて。その祝席を相兼ねて。社友を海棠庵につどへられしなり。よりて。いさゝかことほぎのこゝろをよみて。おくり物にかふ。予がたはれ歌

よきたねのみばえし日とて筆柿の
わざに熟せし君をことぶく

黃鳥いまだ谷をいでずといへども。時今小春にして喬木に遷るのおもひあり。交遊兼愛の情こゝに言なきことあたはず。莫逆風流の佳席。燭を續ぎて長夜の闌なるをおぼえず。そも〳〵亦愉快ならずや

文政八年乙酉十一月の兎園小說第十一集中の一編

同年の冬十月廿三日　玄同陳人解識

天和元辛酉年十一月。江戸飢饉爲御救米三萬俵被下之　　今年迄百三年

同二壬戌年二月飢饉餓死多し。三月洛陽大雲寺誓願寺法輪寺。此外。於諸寺錢施行。又餓死の爲。一七日施餓鬼供養於北野松原從將軍家粥施行　　今年迄百二年

元祿九丙子年自夏至秋。中國稻虫生す。西國大名衆拜借餓民御救　　今年迄九十二年

享保十七壬子年關東五穀不熟。依之窮民御救　　今年迄五十四年

寶曆六丙子年五穀不熟。窮民御救　　今年迄三十七年

天明三癸卯年關東五穀不熟。江戸及奧州飢餓。此節五千俵田沼山城守に被下之。信州淺間山燒崩。溺死多し。窮民滿道路。依之被命於領主。以鐵砲追之。或は打殺之　　今年迄五年

同七丁未年自春至夏江戸及諸國飢饉。至五月白米三合代錢百文に及ぶ。都下の俠者及餓民等。江戸中の米屋を破却闕遺無し。京。大坂も亦如此。至秋鎮る。追日爲御救來て。直段下直に被下之

右友人吉岡雪碇錄して予に視レ之。因謄寫了といへり。解云。當時を考ふべきもの。管窺纔にこれらにすぎず。天明の季より寛政中に至りても。米穀の價いまだ廉ならず。これにより關東地廻りの酒造を禁めさせて。且池田伊丹も釀酒の斛高を減じられたり。是より先に寛政二庚戌年。江戸町中の法則を定め下されい。數ヶ條のくだしぶみを彫刻して。一冊となし。入銀百廿四文と定めて。町役人及家持の町人等に頒ち取らし給ひき。この時に當りて。江戸柳原の東北あたらし橋の向に。義倉を建てられて。これを籾藏町會所と唱ふ。すなはち即江戸中町入用の中。無益の雜費を省かしめ給ふこと。凡八分。その中七分を毎月籾藏町會所に納めしめて。窮民を救はせられ。且荒年に備へしめ給ひぬ。無量廣大の御仁政これを仰けばいよ／＼高し。孔聖仁を先にして。食を後にするもの。寔にゆゑあるかな。星移り物換りて。御規定の町法も頗變替したりといへども。義倉は猶巍然として。向柳原の外。又二ヶ所。その礎と共に朽つるときなし。假令今より後。凶荒年を累ぬとも。天明丁未の夏のごとき。四民困窮して屋を壞り。物

て。おん扶持米を拂はせ給はゞ。某は給はり候へ。餘人より價よく申しうけ候はんなどいふもの多くて。果はこれかれせりあひつゝ。ことばすまひ角口を起すもありけり。はつかの月俸すらかくの如し。大祿の人々はさぞ有りぬべき事ながら。よき夢は又覺むるもはやきや。これによりて永く富みたりといふ人をも見ざりき。かゝる中にも唐津侯の封内は。去歳豐作なりしにより。かこひ米多くあり。世上米價の貴きこと。今の時にますものあらんや。されば年中の月俸を。只今一度に取らせなば。家臣等の爲になるべしとて。その年十二月までの月俸を。五六月のころわたされしかば。みな歡はずといふものなし。しかるもわかきともがらは。俄に德つきたる心地して。後々の事を思はず。多くは品川がよひをしつゝ。秋をもまたでなごりなく。遣ひたりしかば。米の價のさがりしころ。饑ゑてせんかたなきもありしと。ある人の話說なり。ことの虛實は定かならねど。筆のついでに識すのみ。當時の米價を考ふるに。或書に。五穀無盡藏を載せて云。天明丁未夏六月上旬。諸國米穀の價左の如し

現米壹石　價銀貳百匁

江都は金壹兩に米一斗八舛或は貳斗

加賀米石に　百六給壹匁

肥後は　百九拾匁

筑前は　百七拾六匁

廣島は　百七拾四五匁

中國米二俵は價銀百五拾壹貳匁

柴田米七月四日入札貳百壹匁八分

大津澤米石に　百七拾三四匁

白米一石は　價銀貳百拾五六匁

小賣一升に　錢貳百三拾八文

岡大豆壹石に　價銀八拾匁

こはその崖略のみ。なほ詳なるものあらんかたづぬべし。又家伯兄羅文居士の錄中に。近世荒饑略考の一編あり。謄寫すること左の如し

寬永十九壬子年春より夏に至り。飢饉餓死多し　今年迄百四十六年

延寶三乙卯年天下飢饉餓死多し

將軍家下命從三月至五月。於北野七本松原四條河原。貧人を集。粥及米錢施行　今年迄百十四年

ちて。進退符節を合せたるが如し。彼坂間のともがらをして。なほも世に在らしめば。將これを見て何とかいはんや。れもふに享保元文中は。金壹兩を錢三貫八九百文。或は四貫文にかへたり。天明中の八九合に當るべし。これすら貧民の憤りに堪へざりし事。右の如し。まいて百文に白米三合を換ふに及びて。破却のなごりなかりしも。おのづからなる勢なるべし。この頃。（丁未の頃）御藏をひらかせられて。江戸中へ米の價下直にして下されけり。大約一人に玄米一升五合と定めて。隈なく頒下されたる。この御仁政に人氣感激し奉りて。市中靜謐する程に。新麥も既にいで來。古米も諸國より運送入津するにより。八九月に至りては。百文に白米六七合になりにけり。しかれども。その日稼ぎとかいはるゝ寒民は。なほ白米を求むるにちから及ばで。或は虫ばみたる陳米。或は穀麥を一二升づゝ購ひ求めて。これを日毎に一升德利とかいふ酒器に入れ。舂精げて炊て食ひけり。この年八九月に至りても。小まへの商人の妻子どもが。おのも／＼店前にて。いさゝか恥づる色もなく。彼德利にて米を舂きてをりしを。折々見たることぞかし。されば次の年戊申の春の季よりして。小人の曲子に。「思ひだしたよ去年の五月とくりで米ついたこともあると唄ひけり。これらは里巷の曲子なれども。今も折／＼うたはせて。魚肉なくて飯のくらはれずなどいふ世のわか人の。警にせまほしく思ふなり。しかるに。丁未の夏饑たる最中。伊豆。上總より鰹の生節を出だしゝこと限りもしられず。その市中賣りあるくものを買うに。いと大きなる生節一つを。十四文。或は十六文に買ひけり。又糟小鯛とかいふ小鯛を。日毎に賣りあるくものも多かりしかば。是も價のいたくやすかり。よりてこの魚肉をもて。飢に充つるも少からず。天の生民を養ふこと。彼に虧けば。こゝに盈つ。等閑にな思ひそと。こゝろある人はいひけり。予はこの市中の艱難にあはず。當時某侯に仕へて。切米の外。月俸はつかに三口を稟けたり。その月俸のうち。三斗の米を月々に售る毎に。價のますこと漸々にして。五六月に至りては。虫の巣にて糶りたる。陳米をのみわたされしに。その玄米三斗の價。金一兩三分になりたり。されば出入と唱ふる町人等。月俸のわたる日に。未明より宿所へ來

只今こゝにあるかとすれば。忽焉として隣町にあり。あふれものどものそが中に。年十五六の大わらはの。いつも衆人に先きたちて。檐に手をかけ。矮樓に飛び入り。奮撃すること大かたならず。これは人間わざならで。必。天狗なるべしとて。牛若小僧と唱へつゝ。人みな戰き怕れしが。後にその素生を聞きしに。大工わらはといふものにて。渠十二三のころよりして。身輕く力あり。つねに好みて梁をわたるものなりとぞ。はじめ兩三日の程。甲州も馬を出だして制せんとせられしかど。彼等いかにか角ひけん。搦み捕れしものありとも聞えず。そのいく隊なる溢れ者を。いづれの町の誰が店子ぞと。定かにしれるものもあらず。この故に。うちこわしの奴原あらば。速に搦み捕るべくも。手にあまらば撃ち殺し。斫殺すともけしうはあらずと。いふ嚴に町ふれ有りけり。これにより町々なる家主に。れの〳〵竹鎗を用意して。夜は暮六つより路次を閉ぢ。店番といふものを輪番せしめて。店中を巡らする物から。もしその店の米屋が家に。件のものどものむらだち來て。破却することあるときは。店番はあわてまどひて。拍子木だも鳴らし得ず。家主は竹鎗を引き提げながら。路次の戸内にふるひゐて。阿容たゝしくこはさせけり。この事只江戸のみならず。京。大坂も亦かくのごとし。凡米屋といふ米屋の。米をもてるも持たざるも。破却にあひしは闕遺なしと。六月の末に聞えけり。こは未曾有の奇事といはまし。かくて米屋にはなごりなく破却せらて。そのことはいつとなく。凡一旬あまりにしてかき消すごとく鎭まりぬ。さればとてそのものども召し捕れしとも聞えず。只湯島なる米商人津輕屋三右衛門（今の披齋が養父のさきなるべし）がいち宇のみ破却を免れて。かへつてその一人を擊殺せしといふ。こは津輕侯より足輕許多遣して。護し給ひし故とも聞え。或は鳶の者等に。多く錢を取らして。日夜防禦せし故ともいへり。昔享保十七年壬子の秋。五穀熟せず。これにより江戸中の米の價。錢百文に白米一升四合を換へしかば。衆俠忽に群り立ちつどひて。伊勢町なる。坂間といふ米商人のいちぐらを破却したるこそ。未曾有の珍事なれとて。故老の口碑に傳へたれども。そは只坂間一箇のみ。天明丁未の奮擊は。京攝。江戸の三都會。同月一時に起り立

て三日づゝたもつものとぞ。こは竹中半兵衛が救餓の方なりといふ。これらはちか比。水府の醫官原氏が砦草にも見えたり。又原氏の家方なりとて。同書に載せたるは

白蠟一斤。南天燭子。氷砂糖各半斤。

右蕎麥粉の粥もて。桃の實の大さに丸し。日々一拘を服すれば不レ餓。戰陣に臨みて。嚼みくだき。水にて服すれば。氣不レ乏。もし飯を食んとほりせば。鹽湯をもて解すべし。こはその先人の傳方なりといへり。この他。救荒本草を考ふべし。さのみは錄し盡さゞるのみ

人すらかくのごとくなれば。犬猫は瘦せ衰へて。骨立して道路に臥したり。五六月のころにやありけん。松島町なるむかひの武家の大溷（ドブ）に。瘦せたる犬のうちつどひて。草を啖ひゐたりしを。予はまのあたりに見たることあり。かゝる類多かるべし。さる程に。五月晦日のことにやありけん。この夜戌の比及（コロオヒ）に。俠客どものむら立ち起りて。麴町なる米商人のいちくら肆を理不盡に破却せり。これぞ世にうちこわしといふものゝ手はじめとぞ聞えたる。かくてその次の日より。或は四五十人。或は百數人一隊となりて。江戸中なる米屋の店を破却すること。日として間斷なかりけり。はじめは夜中もしくは早朝のみなりしが。後には白晝にもこの騷劇あり。その破却する物の響。罵り叫ぶ人の聲。沸騰囂塵として。十町の外に聞ゑたり。予は京橋南傳馬町なる。米商人萬作が店を破却せられし迹へ。ゆくりなくとほりかゝりて見てけるに。米穀はなみ俵を斫斷（キリ）て。その店前に引きちらし。衣類雜具は簞笥。長櫃をうち破りて。路中へ投げ棄てたれば。ゆくもの道をさりあへず。その米を拾はんとて。貧民の妻婆々小女さへ。乞兒（カタヰ）と共にうちまじりて。袂に摑みこみ。嚢にいるゝ有さまは。恥をしらざるものに似たり。さりとて制するものもなし。このごろ小日向水道町にて。豊島屋といふ米商人の。其店を破却せられし有さまを。予がめのをんなは見たりしに。そのことの爲體（テイタラク）。これかれ同じかりきといへり。この故に米あき人ならざるも。店のさまの相似たるは。破却せられしも間々ありけり。これにより市のかみより。寄騎同心を出だされて。制せさせ給ひしかども。勢當るべくもあらず。

はなし。扨其豆に麥まれ。稗まれ。野菜まれ。多く加へて炊きてたうべよ。そは腹もちのよきものなれば。一食にても足らんずと。ねもごろにいはれしを。誰とて承伏するものなく。稠人の後邊(アトベ)にをりて。遠く隔りたるものは。なか〳〵に憚らず。惡口しつるも少からねど。多人數の事なれば。アビ捕ふるに得およばで。ひとしく追ひ立てられしとなん。これぞこの人氣の寄立(イラダツ)はじめなるべし。このあはひ春米屋等相謀ひて。春米を買はんとて來る人別に。百文或は二百文と定めて。その外を賣り與へず。それすら黎明より巳の時まで。或は巳の時より正午(マヒル)までなんど。時刻を定めて賣りしかば。買ひ後れじとて。立ちつどふ老弱男女囂しく。罵るもあり。推さるゝもあり。果は突き倒し。摑みあうて。泣き叫ぶも少からず。それも後には札を出だして。何處の米屋も賣らずなりぬ。この故に麥を買はんとほりすれども。麥を得がたく。野菜を求めんとほりすれども。その價廉ならず。こゝをもてせんかたもつき。寒民は昆(ヒロ)布。海帶(アラメ)。鹿尾菜(ヒジキ)なども食として。一兩月を凌ぐもあり。又豪家と唱へらるゝ三井越後の呉服店。糸店。兩替店ともに琉球芋を多く蒸して。半切の桶に入れ。店の四隅便宜の處にすゑ置きて。十五歳以下の小厮の走り廻りをするものに。恣にとり喫せしかば。日毎に穀をはぶきしことゝ。大かたならずと聞えたり。又兵法をもて世わたりとせし某氏あり。こは避穀の方をもて。夫婦共に穀を喫はざること十五日にして。恙なかりしといへり。そは何の方を用ひたるかしらねども。救饑避穀の方は少からず。只予はいまだ經驗せざるのみ。こゝにその二三をいはゞ

一方に云。白茅根(チガヤ)を洗ひ淨め。細かにして。或は石の上に晒し乾し。搗きて粉として。水をもて壹匁を服すれば。穀を避けて暫不饑といふ。又一方に。赤小豆一升。大豆一升。各その半を炊て。共に搗きて粉となして。一合を新水もて服すること。日々に三度。その三升を用ひ盡すときは。十一ヶ日を經て。不レ飢といふ。一說に。小豆をくらへば。津液小便より去りて。人をして虛瘦せしむるとも見えたり

又一方に。松樹のあまはだ（日に晒して細末）壹斤。人參一兩。白米五合。右三種を粉となして。よき程に丸し。蒸籠もてむして。軍兵十五人に配分すれば。一劑をも

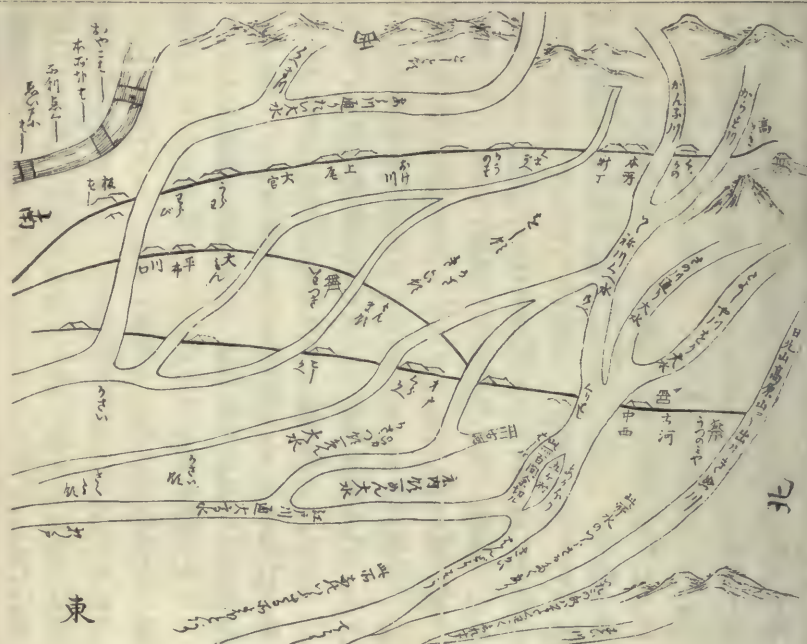
るものから。それすら買はんとはりするもの。容易くは得がたかりき。米穀かくのごとくなれば。麥。大豆。小豆。粟黍。稗の類まで。これに稱うて其價貴し。ことのもとを原るに。三年癸卯の秋。淺間山焼けて。關東に焦土を降らせしとき。上野。下野。信濃。美濃。武藏。（武藏は北の兩三郡）下總（上にれなじ）の國々に。熱湯砂石を推し流して。田畑これが爲に荒土となりし處少からず。この年奥の仙臺。南部。津輕。出羽の果まで。五穀登らず。餓莩相食ひし事。後に聞くすら駭嘆したり。この他も。五穀不熟にして。稻毛みつがひとつといへり。四年甲辰の秋のみいりぞ。去歳にはいさゝかましたれども。なほ豊作といふに足らず。この歳七月。（六日十四日）なゐふる地震こと兩度にして。（消夏自適には。この大地震天明二寅年七月十四日丑の刻。翌十五日兩度とあり。予がおぼえにたがへたるにやあらむ）朱門高厦も杜傾き。甍落ちざる處少からす。只人々の恙なきを祝するのみ。幸ひにして元祿癸未の凶變に似ざりしを。自他おしなべてよろこびにき。予が東西をおぼえしより。地震の甚しかりしは。この甲辰の七月兩度と。文化壬申十一月四日とのみ。しかれども甲辰は壬申よりも猶甚しかりしなり。かゝるに六年丙午の火災。水損は。既に上にしるすが如し。かゝる荒凶のうちつゞきて。四五年を歴しことなれば。米價のたかきことわりながら。商賈はなほ利を射ん爲に。あちこちの米粟をいちはやく買ひとり藏めて。蠹み朽つるまで出ださず。中買。小賣の商人までも。おのもく彼に倣ひて。且利の上に利を見ざれば。あれどもなしとて賣らざりけり。この故に貧士。賤民露命を繋くに由なくして。ことのよしを奉行所へ訴出でつゝ。あはれ米商人等が隱しもてる米を出だして。賣らしめ給へと願ひまうせしもありしとぞ。これより先に。良賤なべて粥をたうべよと徇させ給へり。このときの町奉行は。曲淵甲州と。山村信州なりしが。信州は新役にて。甲州は故舊なり。この夏五月のころにやありけん。甲州件のねがひ人等をよびのぼして。汝等が願ひにより。米商人等を穿鑿したれど。彼等に米はなしといへり。げにあき人の事なるに。ある米ならば賣るべきに。賣らぬはなきがまことなるべし。かゝる噉らぬ折からは、糧を食ふにますことなし。われ一方を諭んか。味噌豆をよく煮て。升の底もて推すときは。碎けてふたつにならぬ

御成道を船もて渡り。小石川。牛込にて。溺死するものはなし。かゝればこの水理の說を物にしるさば。後の世の人のこゝろ得になるよしもあらんから。予は深川にて生れしかひに。をさなかりし時。兩三度。人となりてもふたゝびまで。出水に屋を浸されて。その進退にこゝろ得たれど。江戶にてかゝる洪水は。前代未聞といひつべし。又この洪水の夜に七月十六日猿江わたりの民の女房。ふたつになりける兒を抱きて。いかにかしけん。溺れつゝ。半町あまり流されしに。ゆくりなく巨樹(オホキ)の杪(ウラ)に右の手をうちかけて。からくも推しのり留りたり。さりけれども。兒は左りに抱き揚けたる。腰より下は水を得いでず。とばかりにして。人のしらねば助けらるべき命にあらず。益なく膽を冷さんより。母子もろ共に死ばやとて。樹にすがりたる右の手をはなさんとしたれども。手は凝着(イッキ)たるやうにおぼえて。心ともなく絶えはなれず。とかくする程(ヨ)に天は明けて。たすけ船の漕きよせつゝ。船に乗らしてぞ將(イ)てゆきぬ。このときはじめて杪を見しに。いと大きなる蛇の。わが右の手を木の枝もろ共。いくつともなく巻きてをり。さてはわが手のはなれざりしは。この故なりきとおもふにも。忝きこと限りもあらず。そが船に乗る程に。蛇は忽巻ほぐして。ゆくへもしらずなりしとぞ。或はいふ。この女房は舅姑に孝順にて。且年來神佛をふかく信ずるものなれば。その應報かと聞えたり。そが村の名も夫の名も。まさしく聞きたることながら。しるしもつけず。年を經て。いふかひもなく忘れたり。この餘。溺死のあはれなる。當時の風聞耳を盈てたり。思ひいでなばいくらもあらんを。みな傳聞のみにして。定かならねば心にとめず。今さら思へば夢に似たり。かりそめの事なりとも。その折錄しおかざれば。後に悔しき事ぞ多かる。されば丙午の一とゝせは。火災。洪水に狼狽して。はかなく月日をおくる程に。九月に至りて大喪あり。この故に神田明神の祭禮を。十一月十五日に渡されにき。十五日の朝。白雪霏々たりしかれども程なくやみたり。雪中に祭のわたりしめづらしとにもかくにも上下の爲に。いとうれはしき年にぞ有りける

明くれば七年丁未の春より。米穀の價登躍して。はじめは金百文に。白米六合を換ふと聞えしが。五合に至り。四合に至り。五六月に及びては。三合にな

擔端をならべて。物としてあらぬがなし。されば夜毎にこの河水に劣らじとのみ集ひ仇るやかた。屋根船のいと多なる。さしも廣かる大河に。楫とりなやむばかりなり。そが中に花火〳〵とよぶ船あり。間酒さかなを賣る船あり。くだものを賣る船もあり。こよひは誰殿の花火あり。翌の夜は何がしが花火ありと罵りつゝ。水陸ともに人群集して。錐を立つる地もなかりき。昔三股河のおどり船と唱へたるも。いかにしてこの中洲にますべき。當時兩國河は。けおされて貧女の一燈ともいはましや。冬は又地獄とか唱ふる。かくし賣女のこゝにつどひて。媚を賣り客をむかへて。あだし仇浪よせてはかへす。淺妻ならで淺ましき。世わたりをすと聞えしかば。見し夕貌の冬枯るゝ。五條わたりに似るべくもあらざりき。當時書肆仙鶴堂が。北尾政美に畫せて板にせし。中洲の納涼の浮畫あり。燕石雜志に載せたるもの是なり　この他。兩國橋の東の岸を西へ一町ばかり築き出ださして。こゝにも亦茶店ありけり。この二ヶ所の出洲によりて。大河の幅狹くなりぬ。こゝをもて。川上より推しくだす水の勢。これらの洲崎にさゝえられ。洪水の時に當りて。水のますこと前よりは三尺にあまるから。その水四方へわかれ溢れて。下谷。淺草の濕地はさらなり。神田川の水逆流して。牛込。小石川の果までも。その蔽を受くるなりと。水理にくはしき人はいひけり。これ理りを官にもみこゝろつかせ給ひにけん。寬政の初に至りて。彼兩國の出洲を廢して。もとのごとくに浚せ給ひ。次に中洲を掘りとらせて。舊のごとくにし給ひき。このとし秋より冬まで。江戶中なる屋形船。屋根船も。みなその屋根をとりはなち。茶ぶねにたりにうちまじりて。土をかきのせつゝゆきてはかへる。その船いくそばくなるをしらず。まいて鋤鍬を把る人夫等の。數百人日毎につどひて。潮退けて堀りうがち。潮みちくれば休らふも。はてしなきまでらうがはし。當時四方山人のこの玉楊舟を見て。よめる歌

屋根舟もやかたも今は御用船
ちゝつんやんでつちつんでゆく

これらは後のことながら。福も基あり。禍も胎あり。およそ丙午の洪水は。兩國中洲の出崎によれり。その言たがはざりけるにや。件の二ヶ所の廢されてより。洪水はなほしばしなれども。本所。深川のみにして。

右水入の者不殘伊奈半左衛門様御屋敷のまへ通りに御小屋をかけさせられ御すくい給ること誠に廣代の御慈悲なりちう夜御見廻りの上病人ていの者には御藥を被下置小どもにはせんべい五枚つゝ女ともには髮の油元結差紙迄被下事ひとへに御慈悲深き事なりけり

そも〳〵この水。前には聞くことなかりしに。かう夥しく出でぬるよしは。必ゆゑあることになん。安永のすゑつかた。町奉行牧野隅州の聞えあげて。新大橋の西の岸を。南へ貳町四方あまり築き出だして。これを中洲町と唱へたり。この處夏は夜毎に百あまりの茶店軒を並べて數多の灯燈を掛けわたし。おのおの前に棧橋を投げわたして。船の客の登るに便りとす。仙臺河岸よりこれを見れば。衆星の晃くごとく。月なき夜半も金波流れて。玉兎もこゝに走るかと怪しまる。大橋の南の袂には。四季庵といひし酒樓あり。或は異形の見せ物。水からくり。乞兒(カタヰ)鶴市が身ぶり聲色なんどいふ。ゑせ俳優(ワザヲギ)に至るまで。かぞへ舉ぐるに遑あらず。小濱侯の邸のむかひは。米屋。酒店。煙草商人。薪屋。錢湯。太物店棟木をまじへ。

松もと村　小いわ村　笠つか村
かまたむら　ほり切村　寶木づか
小すけ村　小やの村　柳　原　村
おやせ村　水どはしむち　ゑのきど
大はら村　すのまたはな又村
うたゝ村　長田村　川はた村
大はたむら　木下　川　木下むら
彌五郎新田　長はつ新田　かまくら新田
嘉兵衛新田　久左衛門新田　八右衛門新田
おゝと新田　栽しん田　深川出村
まよりも　貳合半領　大水にて
船はし行とく　市　川　邊
八わたくまか谷　木下　風
松　戸　小　か　ね　みな利根川
の道すしなり

せられ欠來る水入の者どもを御すくいたまわることと實に仁惠の御ことなり實に伊奈半左衛門樣御屋敷の前通り同樣小家掛させられ水入の百姓を御すくいたまわる事ひとへに御じひふかき事どもなり又千住大橋小つか原まろき橋は今どのへんさんやとりこへ田中など水十萬せしとなれば中々往來也がたし水せいは吉原土手こし候へば郭の者ども此つゝみ切ては ほんに叶まじと日本つゝみに土俵を上け又大門のまへ通り壹丈あまりに土俵をつき水ふせぐとおびたゝしみのわ金杉三河島水入候事なればみな〳〵にげうせ候なり實に田町の通りも水まし三四尺づゝも是あるなり淺草くわんおん御寺内はよほど高き所ゆへ少々水出候へば此所へ人々はあまたあつまり水引をいやおそしと待けり並木こまがた近へんも少々水附御藏米八町天王橋迄水つよく往來舟にて通用す又下谷門せきまへこうとく寺の近へんも右同斷の大水なり扨東海道の川々は六こう馬にうさ川などいづれも川留鶴みのはし落候てかな川新町藤澤しゆく萬水のとなれば往來一面ならざりけり程なく雨もやみければ水も段々引にけりとさゝぬ御代のことぶきと水入御すくいたまはること廣代の御じひなり扨大雨にてくづれ候所をしるす芝あたご山同切通しまみ穴井伊樣御屋敷の土手山王の御山春日の山其外少々つゝの所は筆につくしがたし　大尾

まはづ課るし
んまのなへ

新全　僧補
村所附並ニ道の記

○まん本所に　小むめ村　押あけ村
うけち村　柳しま村　うめたむら
てらじま村　さなへ村　かめあり村
すさき村　若みや村　千ば村
四ッ木むら　大どむら　しぶへむら
善右衛門新田　龜いど村　れむらい村
平井むら　小松川石き村

のつゝみ戸田づゝみ十七日の卯こくすぎ水せいつよさにせひもなやみな一どう相切れは近江近村人々はあはてふためき立さわく寺々にてはやがねつき宿老店屋はほらがいふきたすけ船〳〵と命をかぎりにゝけうせたり誠に水せいのはやきこと三つばの弓矢のごとくにてさつてくり橋古河なわてとち木藤おか佐の行田關やど御領をはじめとしてかすかべこしがや杉戸邊うつまく水に人々は親の手を引子どもおせをいみな山林にかへらせけりいよいよ水先はそうかより千住通りへおし出しかもんつゝみを打こしてかさいりう二合半今井ねこさね一の井二の井さかさいきね川本所邊平一めんに海となる先隅田川向じま秋葉三廻り牛じまへん小梅竹丁中の江なり平横ばり割下水吉岡町吉田町三笠町邊の家居家根迄水上れば人々あわて立さわきとやせんかくやとうろたへる其のあり樣のあわれさは目もあてられぬふせいなり實に龜井戸天神の御やしろはよほど高き所ゆへ人々よふ〳〵にげのびて助船をぞ待にけり又立川通りよりきく川町おなき澤の近へん橋も平地もあらざればいかゞわせんと人々せん方なみだにくれける時中にも心きゝたる人五百らかんの御寺こそ高き所に候得は此所へにげたまへと申人の言葉につれあるいはさへつき人いかたおよぐもあれはざい木にとりつきながら渡るもありよふ〳〵らかんにたとりつきさゝいどうの家根にのりたすけ給へとねんぶつのこへよりあわれもよふせり此時はやくも御慈悲みなんぎの諸人を助んと御用船數百そうこき來あり樣みるよりも水入の人々は二階家ねからひさしより飛のり飛のり數萬人あやうき命を助しも誠にきみの恵なりみな〳〵うへにかつへしとなれば早速勘三郎桐座兩芝居の者共に焚出し仰付させられ燒飯として被下しは猶ありがたきことゞもなり扨又大川の水せいつよく候へば新大橋永代橋いつれも落て往來なし兩國の御はしは御用人足あつまりて橋をふせぎ候事すさまじかりける次第なり扨廣小路中通りに御小家を掛さ

住松戸の邊。葛西。行徳。千葉のわたり。熊谷。浦和に至るまで。みなこの水を受けぬはなし。されば十七八日のころよりして。水見まひの良賤奔走しつゝ。辨當。偏提。坐具。調度を。おもひ〳〵に齎らして。ゆくものちまたに陸續たり。又關東御郡代伊奈氏のうけ給はりて。馬喰町のあき地に假屋をしつらひ。水厄のものを入れおかせて。日毎に粥を下されけり。當時市中を賣りあるきし大水場所附といふ地圖二本。予が藏弆にあり。摹して左りに出だすもの是なり

丙午七月十八九日の比より市中を賣りあるきしもの
誤字并にかなちがひ等本のまゝなり。是より下の四頁も。乙酉十月廿二日臨寫す。皆同時のものなり

上野下野 秩父領 山水荒増記 上

▲ころは天明六のとし七月十二日夜より大雨しきりにふりつゝきて同十四日明方より江戸川すぢ出水して十五六日甚しく目白下の大といながれせき口のはし中のはしみははし其外小はし不殘おちにけり小日向水道丁牛天神の下通り御大小名様方のまへ四五尺つゝも出水す又龍けいばしどんどばし小石川御門水戸様御屋敷の前通り水道橋凡五六尺つゝも水上り候へば往來はならざりけり御上水の大といには鐵をつみ石を置きつなを附水をふせぐ人足おびたゞし御茶の水通りの土手二ヶ所くづれ夫よりせう平ばしすぢかい御門のはしきわより押上る水凡四五尺つゝも有ければ一向往來はなりがたしいづみばしは十六日四つ時にれちにけり新ばし淺草御門柳ばしは人とめ大川の筋本所へん少し水まし候所ふりつゝく大雨に上野下野秩父領の山水押出せはからす川かんな川戸田川とね川坂東ばしこと〳〵く出水す近江近邊の村々在々あるいは四五尺六七尺高水することれびたゞし時に戸ね川の堤へは左りに切て行とくの浦へ押出す人々おはてさわぐ内はや水せいはしはやくはまへ押わけてしほかま不殘こわしけり扨梅若の土手つゞきくまがやの土手ときこえしは日本無雙の大づゝみこけてあふれかゝりし葛水にあやせ

わざはひあり。まづ江戸は本所。深川。木場。洲崎。竪川筋。牛島。柳島のほとりの洪水いへばさらなり。下谷。淺草。外神田いづこも水に浸されぬはなし。予が叔父田原米岳翁は。本所林町なる武家に仕へたりしが。その身は立の先途に立ちて。家族（ヤカラ）を見かへるにいとまあらず。家の内のものどもは。長屋の屋根に登りつゝ。そが儘船に乘りうつりて。からくして脱れしとぞ。又次の叔父兼子翁は。御船手組の同心なれば。水のうへにこゝろを得て。船も亦自由なれば。これもやからをいちはやく。所親がり遣しゝに。危きことはなかりしといへり。又予がめのをんなは。大洲侯（當時加藤作内と申しき。後に遠江守に任ぜられたり）の母うへにみやづかへせしころなりければ。これも又御徒町なる邸中より。船に乘せられしが。しのばずの池のはたなる同家加藤氏の邸中へ。みまへに俱して參りしに。かしこも水の中なりきといへり。予もはらからも當時みな山の手にをりしかば。この水難にはあはねども。親戚のうへ心もとなし。ゆきて訪はゞやと思ふものから。永代橋。大川橋は往來をとめられて。柳橋も亦人をわたさず。この他新大橋の中の間破損して。和泉橋は落ちたり。只恙なきものは兩國橋一ヶ所なれども。本所。深川の水高ければ。船ならざるものゆくこと得ならず。凡。下谷はいづみ橋筋。あたらし橋筋。外神田御成道など。商人の見世さきを船にて往還しつる事。しらざるものはそらごとゝや思はん。只これのみにあらずして。小石川御門外。牛込揚端。どんど橋の邊りまでも。前もて聞かぬ出水高くて。溺死のものも少からず。かくて兩三日のゝち。牛込の水の退きしを。仲兄鶴忠子が見んとてゆきし折

　けさひきしわだちの水のふなかはら
　　泥鰍（ドゼウ）ふみこむ跡もどろ龜

當時鮒泥鰌なんどの泥に塗れてありけるを。まのあたりに見てよまれしなり。さはこの狂歌は絶筆にて。次の月の初の四日に。ときのけにて身まかりにき。享年廿二歳なり。いとかなしともかなしかりしを。身にしみ／＼と忘れがたさに。言のこゝに及べるなり。只此わたりの水のみかは。日本堤をうちこえて。田町へ水のれしたれば。聖天町。山の宿。淺草反畝もひとつになりて。金龍山の裙を遶れり。まいて千

てゝ。書きつけおきしことはなきを。こゝにはつかに思ひ出でゝ。その大かたをゑるすよしは。嚮に好問堂の出だされたる。天明癸卯の秋のころ。南部領なる凶荒の文署の編にちなみてなん

天明六年丙午の春正月元日の巳のときばかりに。日蝕皆既なり。貴賤となく。貧富となく。立ちかへる年のはじめを。なべてことぶくときなるに。くにのうち六合忽にとこやみとなりしかば。心あるもこゝろなきも。驚き怕れずといふものなし。このゆゑに殿中にても。總出の時刻などを。例年にはたがへさせて。蝕し果てゝ後にこそ。年のはじめの御禮を受けさせ給ひしと聞えたれ。かくてこの日。火災あり。これより後。雨は稀にて風のしば〳〵吹けばにや。江戸の中。日毎〳〵にこゝかしことなく。兩三ヶ所づゝ失火延燒してければ。人みな駭き惑ひつゝ。ぬりごめ土庫をもてるものは。家財雜具を索もてからげ。衣裳調度を葛籠簞笥におしいれて。所せきまで積みかさねつゝ。今や燒けぬと待つがごとし。こゝをもていまだ類燒せざるものも。燒きいだされに異ならず。客ある家のともすれば。茶碗にすらことをかきたり。さればとておのも〳〵遠謀遠慮あるにはあらで。人そよめきの勢ひなれども。これも時變の一端なるべし。から罵りさわぐこと。正月二月甚しく。三月に至りても。なほ人こゝろしづかならず。四月なかばになりてこそ。世はやゝのどかになりにたれ。されば南畝子の四方のあか集にあらはれたる。春日泉亭詠㆓雜煮餅㆒狂歌の序にも。ことしはひのえのわらは竹。うまにのれるとしなめりと。人々つゝしみおそれしが。はたして春日野のとぶ火にはあらで。もるてふ水の手あやまちより。市人のかりずまゐも。野守がいほの心地し侍りて。今いくかありてざれごといひてんなど。いひしらふもほいなしと書かれたり。とにもかくにも。この春は花見てくらす人は稀にて。只火事の噂をしつゝ。ありくらしゝもうるさかりき。當時燒原場所附とかいふものを。賣りあるきしも多かりけれど。見たるも忘れて思ひいでず。今もなほ好事の家には。藏弃したるもあらんかし。かくて夏にもなりにければ。火災の噂はやみ寢たりしに。この年七月十二日より。雨のふりそゝぐことおびたゞしかりしに。十四日より十六日に至りて。又洪水の

兎園小説

瀧澤馬琴等編

○丙午丁未

兪文豹吹劍錄云。丙午丁未年。中國遇之。必有災。謝肇淛五雜俎載是言。曰。亦有不盡然者。粤放清王士楨池北偶談。又有其辨云。丙午丁未。從古以爲厄歲。陰陽家云。丙丁屬火。遇午未而盛。故陰極必戰元。而有悔也。康熙丙午冬天朝寛文六年戸部尙書藪納海。督撫尙書王登聯等搆死。丁未春災祲疊見。彗星出。太白晝見。白告出西北經月餘。是歲七月。輔臣蘇克薩誅死。吾友程職方謂。予欲裒輯前史所載丙丁災變徵應爲一書。頃見宋理宗淳祐中。柴望所上丙丁龜鑑十卷。自秦莊襄王五十二年丙丁。迄五季後漢天福十二年丁未。通一千二百六十載。中爲丙午丁未者二十有一。備撫事實。係以論斷。元至正中。又有續丙丁龜鑑者。補宋元事之闕。前人已有此二書。當考據。故明三百年中事應。以續二書之後といへり。解いはく。天朝もいにしへより丙午丁未の年毎に。さるしるしのこりけるにや。いまだ考索にいとまなければ。

見ぬ世の事は姑く措きつ。只予が親しく耳に聞き。目に見しまゝをもてすれば。天明丙午の火災洪水。丁未の饑饉にますものなし。こは遠からぬ世の事にて。五十已上の人々には。めづらしげなく思はれんを。四十以下なる人々は。故老の語説によるのみなり。まいて今より後の人は。昔がたりに聞きながして。警め愼むこゝろ薄くば。遂に又荒年の憐ることもあるべし。この故に只見聞のまゝに記して。もて後生に示すのみ。しかれども。老邁よろづに遺忘多くて。記臆の壯年に及びがたきをいかゞはせん。かゝれば。漏らすも多かるべく。思ひたがへし事もあるべし。抑この歳の凶荒。京の人原氏が。五穀無盡藏とかいふものにしるしつけたりとは聞きしかど。予はいまだその書を見ざりき。さばれ只その書には。諸國の米の價をのみ。をさ〳〵しるしゝものとなん。しからんには。予が編のいと淺はかにて。疎鹵なるも考據の爲になるよしあらんか。されど乙巳のみな月には。わが身異特の憂あり。又丙午の葉月には。仲兄夭折せられたり。かくうれはしく物がなしき折なりければ。世上の事を只よそにのみ聞き捨

兎園小説目錄

兎園小説第十二集目錄大尾

文政八年乙酉小春念三　琴嶺

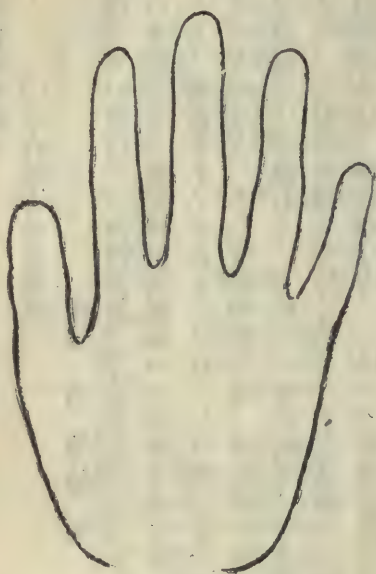
乙酉霜月兎園會

○天台靈空是湛靈空

平安　角鹿桃窠

享保元文の頃ほひ。沙門光謙。字は靈空といふ。天台宗の學匠たり。近年皆川淇園翁一たび其文章を賞せしより。其名ます〳〵あらはれぬ。その書もまた奇逸なるものなり。また寶曆明和の頃。浄土宗に靈空字は是湛といふ僧あり。寛政十一年の刻本。平捃印補正に。比叡山光謙字靈空と載せ。靈空是湛の二印を出だせるは。頗杜選なり。こはかの是湛靈空の印にして。天台靈空の印はあにらず。是湛靈空は。晩年寺町今出川の邊。西山派の寺に住せり。此二僧書風かつて似るべくもあらぬを。など誤り傳へたるにや

兎園小說第十一集終

一二寸にすぎず。脊力ありといへども。そのちからをあらはさゞりしとぞ。世に稀なる巨女なれども。全體よくなれあふて。しなかたち見ぐるしからず。顏ばせも人なみなれば。この巨女にあはんとて。每夜にかよふ嫖客多かり。當時その手形を家嚴にれくりしものあり。すなはち摹して左に載せたり。その手は中指の頭（サキ）より。掌の下まで。曲尺六寸九分。横幅巨指（オホユビ）を加へて四寸弱なり。その圖左のごとし

件のつたは出處駿河のものなりとぞ。ひが事をすとよまれたるいせ人にあらねども。阿漕の浦に引く網の。たびかさなれる客ならねば。手を袖にしてあらはさず。足さへ見するを恥おしとぞ。これらはをなごの情なるべし。あまりにいたくはやりにければ。瘡毒を傳染して。あらぬさまになりしかば。千鳥なくのみ客はかよはず。いく程もなく。その病にて身まかりにきといふものありしが。さなりやよくはしらず。又その翌年文化五年の冬のころ。湯島なる天滿宮の社地にて。れほをんなのちからもちといふものを見せしことあり。予はなほ總角にて。それをば見けるに。市のかへるさに立ちよりて。淺草のとしのつねのをんなより一炭大きなるは。偉きかりしが。よさのみ多力なるものとは見えざりき。彼品川のれは品川のつたが手形にくらぶれば。いたく見劣りて。をんなは是なるべしと。れもはする紛らしきものとしられたり。かばかりはかなきうへにだも。贋物いで來たる。油斷のならぬ世にこそありけれ。こゝにすぎこしかたを思へば。十八九年のむかしになりぬ。時に筆研の間。亦戲れにしるすといふ

迯に言語(コトバ)の通せねば。いづこのものぞと問ふよしもあらず。この蠻女二尺四方の筥をもてり。特に愛するものとおぼしく。しばらくもはなさずして。人をしもちかづけず。その船中にあるものを。これかれと撿せしに

水二升許小瓶に入れてあり。(一本に二升を二斗に作り。小瓶を小船に作れり。いまだ孰か是を知らず)敷物二枚あり

菓子やうのものあり。又肉を煉りたる如き食物あり

浦人等うちつどひて評議するを。のどかに見つゝゑめるのみ。故老の云。是は蠻國の王の女の。他へ嫁したるが。密夫ありて。その事あらはれ。その密夫は刑せられしを。さすがに王のむすめなれば。殺すに忍びずして。虛舟(ウツロブネ)に乘せて流しつゝ。生死を天に任せしものか。しからば其箱の中なるは。密夫の首にやあらんずらん。むかしもかゝる蠻女のうつろ船に乘せられたるが。近き濱邊に漂着せしことありけり。その船中には。爼板の如きものに載せたる人の首の。なまぐしきがありけるよし。口碑に傳ふるを合し考ふれば。件の箱の中なるも。さる類のものなるべし。されば蠻女がいとをしみて。身をはなさざるなめりといひしとぞ。この事官府へ聞えあげ奉りては。雜費も大かたならぬに。かゝるものをば突き流したる先例もあればとて。又もとのごとく船に乘せて。沖へ引き出だしつゝ。推し流したりとなん。もし仁人の心もてせば。かくまでにはあるまじきを。そはその蠻女の不幸なるべし。又その舟の中に△[symbol]△等の蠻字の多くありしといふによりて。後にれもふに。ちかきころ浦賀の沖に歇(カヽ)りたるイギリス船にもこれらの蠻字ありけり。かゝれば件の蠻女は。イギリスか。もしくはベンガラ。もしくはアメリカなどの蠻王の女なりけんか。これも亦知るべからず。當時好事のものゝ寫し傳へたるは。右の如し。圖說共に疎鹵にして。具(ツブサ)ならぬを憾とす。よくしれるものあらば。たづねまほしき事なりかし

○品革の巨女(オホオンナ)

文化四年丁卯の夏四月のころより。世の風聞にきこえたる。品川驛の橋の南なる(こゝを橋むかふと唱ふるなり)鶴屋がかゝえの飯盛女に。名をつたといへるは。この年二十歲にて。衣類は長さ六尺七寸にして。裾をひくこと

や。事新しきためしなりき

乙酉冬十一月朔　荻生蔆園記

○うつろ舟の蠻女

享和三年癸亥の春二月廿二日の午の時ばかりに。當時寄合席小笠原越中守（高四千石）知行所。常陸國はらやどりといふ濱にて。沖のかたに舟の如きもの遙に見えしかば。浦人等小船あまた漕ぎ出だしつゝ。遂に濱邊

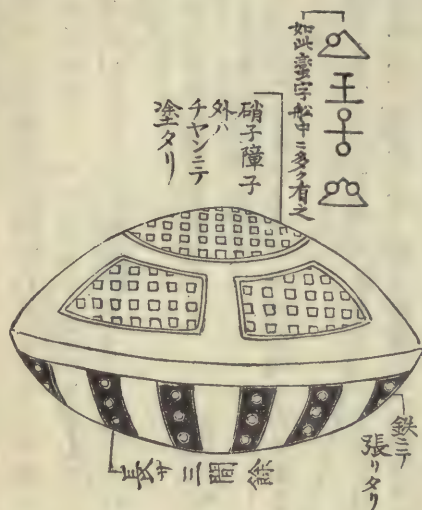
その圖左の如し

如此蠻字船中ニ多ク有之

硝子障子

外ハチヤンニテ塗タリ

鉄ニテ張リタリ

長サ三間余

に引きつけて。よく見るに。その舟のかたち。譬へば香盒（ハコ）のごとくにしてまろく。長さ三間あまり。上は硝子障子にして。チヤン松脂をもて塗りつめ。底は鐵の板かねを段々（ダンダン）筋のごとく張りたり。海巖にあたるとも打ち砕かれざる爲なるべし。上より内の透き徹りて隱れなきを。みな立ちよりて見てけるに。そのかたち異様なるひとりの婦人ぞゐたりける

そが眉と髮の毛の赤かるに。その顏も桃色にて。頭髮は假髮（イレガミ）なるが。白く長くして背（ソビラ）に垂れたり。そは獸の毛か。より糸か。これをしるものあることなし。

解按するに。二魯西亞一見錄人物の條下に云。女の衣服か筒袖にて。腰より上を細く仕立云々。また髮の毛は白き粉をぬりかけ結ひ申候云々。これによりて見るときは。この蠻女の頭髮の白きも。白き粉を塗りたるならん。魯西亞屬國の婦人にやありけんか。なほ考ふへし

可乎。又云。焉得儉。仁者必儉。管仲不得儉。則可謂之仁乎。昌齋曰。聞之錦城先生。曰。夫酒有清濁之別。有醇醪之品。飲清醇者亦醉。飲濁醪者亦醉。於爲醉之功則一也。爲其物厚薄則異也。管仲之功。濁醪之醉也。堯舜之仁。清醇之醉也。今夫清醇與濁醪。固有差別。覇與王。功同而本異。然至其一匡天下一也。傳云。君子成人之美。不成人之惡。故夫子盖其不知禮與器小。而特稱其功。如足下之言吹毛求疵。責人而無止。而與我聖人之道大有逕庭。於是大瓠言下敬

豊民云。予記此事。既在客歳。自後以來。有定期。而爲此討論。又毎會必筆。而藏諸篋笥中。今適捜篋笥中得之。亦以呈兎園社友。若有頑説。幸見敎焉。敬而受敎

于時文政八年乙酉小春念三

乾齋　中井豊民識

○梅が香や隣は荻生惣右衛門

といふは。其角が句のよし。世人の口碑に傳ふれども。解云。この發句。口碑に傳ふとのみ云へれども。其角が口調に疑なし。且梅がかや云々といひし梅が香は。御能役者梅若氏なりといふよしにて。當時茅場町に。これかれ相隣てなりし時の事ともいへり。其角と徂來と近隣なりといふ作にはあらず。かゝれば徂來のいまだ柳澤家へめしかゝへられざりし已前の事か。尙尋ぬべし近頃京傳が書けるといふ奇跡考に。其角がいづれの集にも見えずと出だせり。全く後人の贋作なるべし。其角は寶永四年に沒せしとかや。然るに徂徠は。六年までは吾藩の内に住居せしかば。其角と近隣なるべきやうやあるべき

今茲乙酉の二月二日のころ。野州那須郡大田原に。回祿ありて。城のこりなく災にかゝりしに。城下の民家にて。三日鳴物をみづからつゝしみて籠居せしとかや。四日めに及びて。有司のものより命じて。常に復せしめて。各々稼業を行ひしは。古國とていとたうとき事なりき。災しづまりし後。民家より造營の費をおの〳〵所望して。調進せんことを爭うて請ひしかば。有司にて造營の失脚の勞聊なかりしは。文王の靈臺にも齊しきめでたかりしためしなり。これによりて。速に造營をうながすに。國主領𢽾 ゐまさゞれば。わしゝとて。六月中に歸國すべきを。回祿によりて。二月中に歸國を請はれしかば。縣官にて在所の回祿にて。歸國をはやく請ひしためしなしとて。其沙汰に閣老方困り給ひしとかや。さりながら二月末には請の如くゆるしありて。歸國ありしとか

任者。有和者。有淸者。如伯夷者。所謂聖之淸者耳。伯夷之好淸潔。猶顏子之好學。伯倫之嗜酒也。天地開闢一人也。於是櫟葉又怒曰。子嘗孟子之餘唾。將折我言。雖孟子再生來。我猶將說却之。亦况於足下輩乎。退哉退哉。謙齋亦怒。四人猶戰場爭死生。市中賈贏利也。乾齋曰。予有一說。足下輩安意聽之。四人同曰。如何。乾齋曰。盡信書不如無書。書且倘疑之。則史記不能無疑焉。吾聞之。史記者大史公之未定之書。而且多攙入。今取一二證之。其攙入者。司馬相如傳贊曰。揚雄以爲靡麗之賦。勸百諷一。趙翼辯駁之曰。雄乃哀平王莽之時人。史遷固武帝時之人。而何由得預知百年下揚雄者。又自在岐互處。朱建傳謂。黥布欲反。建諫之不聽。事在黥布傳中。今黥布傳無此語。是亦古人辯駁之。由此觀之。未定之書。未足信之矣。雖然如伯夷傳。明確高論。非後人攙入。唯夷齊叩馬而諫之事。殊不經見。則疑是流傳之言。若果爲流傳之言。未足信之也。且明王直辯駁也。子輩知之乎。若未則熟視之。察之而後正其是非。蓋爭者事之末。其言雖有義理。終損君子之操。願暫聽吾說。莫爭莫譁。（莫當作勿）於是座中哄然笑。讀如故。畢伯夷傳。次讀春秋左傳。至莊公九年。齊管仲請囚之章。櫟葉門人大瓠。喟然歎曰。噫。漢土之人。何薄於忠義乎。管仲怯懦而無義。魯殺子糾。召忽死之。管仲不死。以余觀之。召忽可謂之能終事君也。然孔子特稱管仲。吾竊惑之。昌齋應之曰。子惑宜矣。昔者。子路之果敢。而不能無此惑。况於足下輩乎。夫孔子之不稱召忽。而稱管仲者。稱其功業也。蓋召忽一夫之材。若不死於子糾。三軍之虜也。管仲王佐之材。死子糾則不免溝瀆之死也。故孔子美其不死。而稱其功業。嗚乎。管仲功業之益於民。平王東遷。諸侯內攻。夷狄外侵。周室之不亡如線。向無管仲相桓公振覇業。則中國之不被髮左衽無幾矣。可不謂非仁乎。雖然於其爲人。孔子亦賤之。傳所云。不一而足。管仲之器小哉。焉得儉。管仲不知孔。由此觀之。孔子之稱管仲。所謂門上挑之。而在夷狄則進之。猶如稱文子之淸。美臧文仲之智也。亦何怪之管仲也。且子言曰。魯殺子糾。疎漏甚哉。經云。齊人取子糾殺之。殺子糾者齊也。非魯也。大瓠擊節乾笑曰。子席讀唐士之書。偏僻于唐人。一何甚。夫仁者而必有仁之功。智者而必有智之功。既云管仲不知禮。智者而不知禮。

夷齊。不食周粟而餓則可也。何輙食其土薇。詩曰。普天之下。莫非王土。薇亦非周土之生乎。夷齊之義。不食周粟。則薇亦不可食焉。孔子方稱夷齊賢。吾甚惑焉。且孟子論武王曰。聞誅一夫紂。未聞殺君。孟子何出此言也。夫紂雖無道而親戚背之。猶爲天子也。安得等之匹夫乎。敬齋揖櫟葉而進曰。甚哉。子言之過高也。夷齊不食周粟。乃是夷齊之僻。孟子所以爲險之也。足下不知其爲僻。而貴食其薇。足下亦是僻之又僻耳。必如足下言。則雖巢文許由卞隋務光。未以嗛於足下心也。若其充足下之心者。其於陵陳仲子乎。所謂蚓而充操者。我孟子之所不取也。足下坐未嘗讀聖經。是故出此言。退讀聖人之書。而後會我輩强齋在側。抗然大言曰。二子之言皆失矣。二子愕然曰。何。强齋曰。夫道一而已。分爲二爲三以往。復散爲千爲萬。故有陰則有陽。有剛則有柔。有君必有臣。有仁必有義。其所遇或異。則其所行亦殊。是以事雖萬殊。於其歸道一也。譬之忠質文。三代所向不同。其及合於禮。未嘗同也。武王之伐紂。夷齊之諫武王。其迹雖異。各盡其道。始非有二致也。武王見天下之溺。不極之。不免楊朱爲我之誚。夷齊扣馬諫。

不免賊其君之誚。聖賢之心。無所偏倚。隨物而應者。孰不規矩。何不準繩。以夷齊之準繩論武王。而曰不平。曰不直。亦其宜也。以武王之規矩。議夷齊。而曰出方圓之外復亦其宜也。又譬之。武王之德。大陽之輝也。夷齊之行。大陰之光也。微武王不能爲夷齊之光。武王亦不得夷齊。則不得著。其德輝也。二聖之在天下。猶日月之互行。而不相戾也。孔子盛稱之。不亦宜乎。盖孔孟之所毀譽。必有所試。又何疑其言。然足下疑孟子命紂爲一夫。是何其意繆戾也。紂雖稱天子。親戚衆臣。及四海內。無一人助之者。則非一夫何。昔者宋高宗。亦與足下同癖。問時碩儒尹焞曰。孟子何以謂之一夫紂。尹焞對曰。此非孟子之言。武王牧師之辭也。曰。獨夫受。洪惟作威。由是觀之。孟子非敢新言之。假令孟子言之。孟子聖人也。如何癈其言乎。足下實有蓬心乎。吾丁寧反覆雖頻提子耳。而大聲告之。子固褎如充耳。豈有益其是非乎。如子之人。謂之兼聾與瞽宜哉。不得其覩日月之光。聞大雅之音。於是三人相爭相怒。或瞋目或握拳喧䦧良久。謙齋猶然笑。徐々前席曰。三子之言。俱有理。雖然未得其所處也。夫聖之道。區以別之。則有時者。有

かば。そのまゝ逃げ去りぬ。その刻限より。かの老母せなかいたむといひければ。いよ〳〵うたがひつゝ。親族にかくと告げゝれば。ものゝふの身にて。すておくべきにあらず。心得有るべしといはれて。とかくためらふべきにあらざれば。雁股の矢をつがひて。よく引きつゝ。人をして屛風をあけさせたれば。老母おきなほりて。むねに手をあて。とても母をいるべくは。こゝを射よといふにひるみて。矢をはづしたり。又親族にかたらひけるは。それは射藝のいたらぬなり。すみやかにいとめよといはれて。このたびはたちまちにきつてはなちたれば。手ごたへして母にげ出で。庭にてたふれたり。立ちより見るに。母にたがふ事なし。やゝしばしまもり居たれども。猫にもならざれば。こはいかにせむ。腹きりて死なんといふを。おしとゞめて。あすまでまち見よと云ふ人有り。心ならず一夜をあかしたれば。もとかひおける猫のすがたになりぬ。其ののちたゝみをあげ。ゆかをはなちて見しかば。老母のほねとおぼしくて。人骨いでたり。いかにかなしかりけん。このことふかくひめて。人にかたらざれば。人しるものなし

評云。この鳥居の家老高須氏は。關潢南のしる人なり。はじめは定府なりしが。今は勤番にて。去歳より江戸にありといふ。又當主は今茲十五歳にならせ給ふなり。右の物語りかた〳〵いぶかし。もし在所にての事と。さらずば昔の事を今のごとくとりなして。人のかたり聞かせしに非ずや

〇明善堂討論記

文政七禩。六月朔日。予與二門人敬齋。强齋。謙齋。昌齋。笠齋一。約爲二會讀一。預期自二曉七皷一而始。至二黃昏一而終也。適予友櫟葉散人。携二其徒十數人一來共討論。乃記二其言一藏二諸篋笥一云

六月一日。晨各蓐食。集於明善堂。天將曉。月未落。焚篝燈倚九案。櫟葉散人忽到。散人者武州金杉根岸人。常好讀日本記事。其於正史稗說。無所不研究。能辨我邦治亂。論其興廢。言辭滔滔。若决江河。若驟雨暴至。沛然無禦之者。以予酷好西土書策。每往來會讀難問。此日方讀史記伯夷傳。櫟葉曰。嗚乎。

の戸をたて。戸ざしする音を聞きて。男はふるへ聲にて女をよぶ。女いかゞせしやと丶へば。かくしばられたり。ときてたべといふ。すなはち繩をときながら。此有さまを。かならず人にかたるまじ。あるじにも申すまじといひきかせてうちに入り。子過ぐる比にあるじかへりたれば。事ゆゑなきさまにて。やすませたり。あくる日。あるじ錢湯にゆきたれば。となりの同僚に逢ひたり。同僚のいはく。夜邊はそこには何ごと有りしやと。あるじ。それがしは。他行してしり侍らずと。いかゞなる事にや。たゞならぬ物おとしければ。耳たて丶きゝをり。猶物おとせば。出で逢ふべしと。身がまへせしが。その內に納りたれば。うちやすみぬと。あるじかへりて。かのひとのかくいはれしは。なにごとか有りしと丶へば。しか〴〵とこたふ。さばかりのことを。いかで告けざるやといへば。さん候。ぬす人おしいりたるのみにて。物もうせず。人もあやまたず候へば。申す迄もなしとおもひしなりとこたへて。打ち過ぎぬ。わがちかきあたりに。この家あるじの姉あり。長月なかばに。この女つかひにきたり。姉がいふやう。さきにぬす人しりぞけしは。だぐひなきふるまひなりき。その時いかゞの覺悟にて有りしぞと。女は堅固の田舍人にて。覺悟と申すことはしり侍らず。おしはかりてもみ給へ。白刃さげしもの丶。いくたりも入りきたれば。みづからが命はなき物とおもひしのみにて侍りとこたへし。越後のむまれにて。年廿あまり三になるとぞ。酉彥といふもの丶かたりきかし丶なり

○高須射猫

某侯の家令島井丹波守高須源兵衛といふ人の家に。年久しく飼ひおける猫。去年甲申のいつ比にや。ふと行方しれずなりぬ。その比より源兵衛が老母。人に逢ふことをいとひて。屛風引きまはし。朝夕の膳もその內にれし入れさせて。給仕もしりぞけてした丶むるを。かひまみせしかば。汁もそへものも。ひとつにあはせて。はひかゝりてくふ。さてはむかし物がたりに聞きしごとく。猫のばけしにやといぶかりあへる折から。その君のゆあみし給ひて。まだゆかたびらもまゐらせざりし時。なにやらん眞黑なるもの飛び付きたり。君こぶしをもつて。つよくうたれし

けるに。とある芝原の廣らかなる處に。大きなる猿二三十疋まとゐして。其中央にかの白猿は。藤の蔓を帶にしつ。きのふ奪ひし一腰を帶ひ。外の猿どもと何事やらん談じゐる體なり。これを見るより十郎はじめ。從者も刀をぬきつれ。切り入りければ。猿ども驚き。ことごとく迯げ去りけれども。白猿ばかりは。かの貞宗を拔はなし。人々と戰ひけるうち。五六人手負たり。白猿の身にいさゝかも疵つかず。度々切りつくるといへども。さらに身に通らず。鐵砲だに通らねば。人々あぐみはてゝ見えたるに。白猿は猶山ふかく迯げ去りけり。夫より山獵師共をかたらひけるに。此猿たまたま見あたる時も候へども。中々鐵砲も通らずといへり。此後いかになりけん。今に手に入らざるよし。その翌年かの地の者來りて語りしを。思ひ出でゝ。けふの兎園の一くさにもと。記し出だすになん

文政乙酉孟冬念三　文寶堂散木記

天正兎園

○越後烈女　輪池

ことし八月の末つかたに。小石川水道端に住める與力藤江又三郎の宅に。强盜入りしことあり。あるじはやも男にて。俳諧の會に行き。老母は親類がり行きて。下女と下男のみ留守に居たり。よる亥の刻過ぐる比。門をたゝく音す。あるじのかへりたるならんと思ひて。男出でゝあけたれば。白刃を提げしもの。五人おし入りて。この男をしばりあげ。部屋に入れて。二人はまもりをり。三人は内にいらんとせしを。下女窓よりのぞきみて。とみに歸り入り。燈火をふきけし。誰おきよ。かれ起きよと。有合ひもせざる人をあるがごとくによばゝり。さて雨戸を音たかくあけて。うしろのかたにさけ。椽を下りて庭に出で。玄關の前に行きてうかゞふに。人影なし。あたりをみれば。稻荷の祠の垣のかげより。さきにみしぬす人三人出でたり。女少もさわかず。こなたへき給へ。みづから道びきすべし。いざとて。先に立ちて刀を前にさげて。椽をあがり。物かげにかくれてまちゐたり。かくてひさしくまてども。入りきたらず。いかゞせしならんと。もとの如く庭にいでゝみるに。さらにかげもなし。垣のかげをのぞきみてもあらず。さてはにげさりしならんと。あけたる門

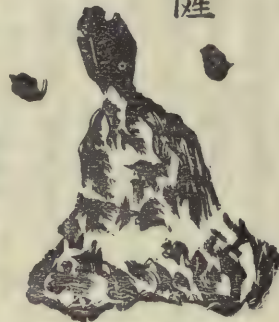
又盃をかたふけて。例の口とく

祐天がのりうつりたる名號の
ひかりをみたの二字にこそしれ

此娘の沙汰あまりにいぶかしき事なりとて。大傳馬町名主馬込氏。みづから升屋かたへゆきて。委しく聞き糺し。夫より娘に面會して。さまぐ\に詮議して。問ひつめければ。是非なく本性をあらはしたる處。狐のつきたるに相違なければ。馬込いよく\きびしく問答しつめて。此きつねを退けたりとぞ。此娘にきつねをつけたる事は。此升屋の後家なるもの。上州より年々來て滯留する絹商人。彌三郎といふ者と密通して。此絹うりのたくみなるよし。此事既に露顯に及びければ。絹賣は出奔しけり。後家をば親里へ預け。娘ゑいをば。親類方へ引きわたし。當主幼年なれば。事落着まで。是迄の通り支配人持とせり。これ皆馬込のはからひなるよし。此頃馬込の取沙汰よく。宿老はかく有りたきものなりと。人々いひあへり。これにつけても。名號を一度見られて。狐狸のわざとはやくさとられし。南畝翁の先見明らかなりといふべし。狂詠に「名號のひかりをみたの二字としれとは。もとより貴き彌陀の二字なれば。その光りにれそれて書きかへたれば。則此二字にて。怪しきものゝ所爲なるをしれれと。よまれしものなるべし

○白猿賊をなす事

佐竹侯の領國。羽州に山役所といふ處あり。此役所を預りをる。大山十郎といふ人。先祖より傳來する所の貞宗の刀を秘藏して。毎年夏六月に至れば。是を取り出だして風を入るゝ事あり。文政元六月例のごとく。座敷に出だし置きて。あるじもかたはら去らず守り居けるに。いづこよりいつのまに來りけん。白き猿の三尺ばかりなるが一疋來りて。かの貞宗の刀を奪ひ。立ち去り。ゆくりなき事にて。あるじもやゝといひつゝ。おつとり刀にて。追ひかけ出づるを。何事やらんと從者共もあるじのあとにつきて走り出でつゝ。追ひゆく程に。猿は其ほとりの山中に入りて。ゆくへをしらず。あるじはいかにともせんすべなさに。途中より立ち歸り。この事從者等をはじめとして。親しき者にも告げしらせ。翌日大勢手配りして。かの山にわけ入り。奥ふかくたづね

八瘤のできわりしを立願なせしに。頓にいえけり。是よりの後。近國より聞き傳へて。日々參詣群集しつ。このごろはいとにぎやかなりとて。福原家の臣。

原某が右の石の搨本をおくりてかたりき

乙酉仲冬集初冬念三　海棠庵

南無日蓮大菩薩

野州那須郡佐久山箒川出現御影

○狐の祐天

文政三庚辰年の秋。大傳馬町二丁目きせる問屋升屋善兵衛といふものゝ娘。年十八名はゑい に。祐天僧正のゝりうつり。此むすめ俄に六字の名號をかき。名をば則祐天とかきて。花押まで少しもたがはざれば。名號を書きて貰はん。十念をうけん。昔羽生村の累女を得脱させし僧正の。再び來らせ給ひしとて。愚痴無智の老若男女。升屋が門に市をなせり。此むすめ名號をもかき。十念をも出だせど。來り給はぬ時は。常の娘にて。平日にかはることなし。此娘のかきたる名號なりとて。元飯田町藥店小松三右衛門よりもたせこしたり。ひらきみれば。表裝は赤地の錦にて。いと立派に仕立たる絹地の竪物に

南無阿弥陀佛　祐天𠀋

かくのごとく彌陀の二字たがへり。これを借り得て南畝翁に見せけるに。折ふし酒宴の時なりけり。貴き名號なれば。今腥き口にては。親鸞ならば貪着は有るまじけれど。祐天にはちとふはむきなりとて。口そゝぎて一軸をひらき。よく〳〵見られて。此彌陀の二字をかへたるは。まさしく狐狸のわざならん。憚りてわざとかく書きたがへしものなるべし。口そゝぎてやくなき事をしたりなどいひつゝ。

に。今年は八千石目に餘りしとなん。秋は漁獵もなき場所なるに。思ひの外に得ものあり。その上松前より便船の都合よく。十二分の利を得たり。これ全く惣助が慈愛の陰德より。忽陽報ありしものか。彼惣助もこの冬は江戶に歸るとなん。なほ面談せばくはしきはなしもあらんかし

考異に云。獵得八千石目に及びしと云ふは。方便のことゝ葉にて。そは秋中二三ヶ月に得たる利なり。實は此四月のころより。九月に至りて。二萬石目の利を得てければ。これまでの借財を償ふて。猶あまりありしとぞ。凡一万石めは。金三千五百兩なり。かゝれば二萬石めは七千兩なり。かゝればその借財をつくなふて。猶あまりありし事さもありぬべく思ふかし

右野作異龜の編。予が聞きしと異同あり。彼此みな傳聞によるのみなれば。是非をいづれと定めがたし。しかれども。予が聞きし趣は。いさゝか具なるに似たれば。先夕席上においても。海棠庵主にしかじかと告ぐるに。さらばわが書に追記してよといはるれば。もだしがたくて。燈下に禿筆を把りて。蛇足の說をなすにこそ○再いふ。龜をはなちて善報を得たるもの。昔より和漢に多かり。予その故事の抄錄ありといへども。博雅の諸君素よりよくしることならんを。こゝに贅すべくもあらず。但ちかごろ仙臺のちかきわたりにて。このアツケシの大龜の事とよく相似て。なほ異なるものがたり一條。眞葛が磯づたひといふ草紙に見えたり。餘紙なきをもて。これ又贅せずといふ

乙酉十月廿四日　著作堂痴與追記

○佐久山自然石

野州佐久山福原家采地中町にすむ住吉や爲八といふもの。當文政八年乙酉の四月のころ。おのれが裏なる地面に鯉の魚溜を作るとて。まはりの石垣に用ふる石を。ちかきほとりの箒川より取り寄せける。その中に。丸き石に自然と二分程も高く佛像現れ。左右に日輪月輪めくものあるを見出だしたり。奇なるものなりとて。同州太田原城下の日蓮宗住持に見せけるに。祖師上人の御すがたに違ひなしと驚嘆せしかば。此爲

とてもかくても。この乙酉の年を限に。弗とやめんと思ひゐたり。かくて惣助ある日。獵場を見廻りしに。支配人彌三郎が云。けふはよきトッキ大龜の方言がかゝりて候。これまで稀に網に入りしは。五六尺のものなるに。それには五倍のものにこそといふ。惣助は濱邊にゆきて。件の龜をよく見るに。云々。この間はこの本文にいへるがごとしさて立ちかへり。又彌三郎にいふやう。われ今行きて。トッキを見たるに。實に大きなることは。實に未曾有のものなり。しかれども。われは彼助けて放ちやらんと思ふなりといふ。彌三郎驚きて。その故を問へば。惣助答ふること。本文のごとし。彌三郎又いはく。人を見てキヽとなくは。いづれのトッキもみな同じ。よく思うても見給へかし。向に得たるトッキどもは。五六尺四方なりしすら。あぶらを絞り。甲を賣れば。三十金。或は四五十金になるものありけり。さるをあのトッキは。その五倍なるをもて。二百金か。よくせば二百五十金にもなるべし。近年不獵にして。借財も多かるに。大金になるべきものを放ちやることやある。れん身のごとく。女らしきわはれみの心をもてせば。いかでかあのトッキのみならんや。凡網に入る魚をみなはなちやるべきや。まことに沙汰の限りなり。よをみづから思ひねとたしなめしを。惣助かさねて。否。わが思ふよしはしからず。もろ〳〵の魚を網するは。わが渡世なれば。何とも思はず。汝も亦よく思ひみよ。けふの網はあのトッキをとらん爲にあらず。しかるにわがほりする魚は入らずして。思ひもかけぬトッキのかゝりしは。これから網に異ならず。よしや。あのトッキが百金二百金になりたればとて。それにて生涯をすぎらるゝにもあらず。大獵をなすものゝ。さのみ小利を貪ることかはといふに。彌三郎なほ從はず。惣助又いはく。われは理もなく。思慮もなく。只何となくあのトッキをいと不便に思ふなり。そはともあれかくもあれ。いざわれともろともに。ふたゝびゆきて見よといふに。彌三郎は爭ひかねて。うちつれたちてゆきて見るに云々。これよりすゑは本文にしるされしが如し

扨その次の日より。漁獵の得ものいと多く。これまでに十倍せり。例歳の荷物高三千石目に過ぎざりし

まなれば。惣助つら\/思ふやふ。かくまで巨大なる龜の。いくばく年を歴しやらん。龜の齢は萬歳を保つとしも聞くものを。さらば又このものも千載を經しものにこそとおもふに。そゞろにかはいくおぼえて。さて龜にむかひいふやう。汝は齢の長からんを殺さんことの不便さよ。この濱はちかきころ。としとしに不獵のみにて。わがうへいたく仕合わろし。汝助命のめぐみをれもうて。海のさちあらせんやと。さながら人にもの云ふごとく。おもひ入りつゝ說き示すに。龜はいよ\/涙をながし。首をあげてキゝとなく。そのさまこゝろ得たるごとし。さてははや聞きわきたりな。さるにても不思議なれと思ふに。不便いやまして。又しか\/と說き示せば。龜も亦かうべをもたげて。キゝとなく初のごとし。これにより惣助は彌三郎によしを告げて。放ちやらんといひけるを。彌三郎從がはず。あの龜の油をしぼらば。三十金にもなりぬべし。甲も又二十金にはなるべきを。放ちやるべきとかはと。うち腹立て爭ふにぞ。惣助かさねて。大なる漁獵を業にすなるものが。はつかなる金の爲に助けやらんと思ひしものを。殺さんは不便なりといふを。彌三郎聞きあへず。あの龜より小さきを。さきの年に得たりし時だに。云々の利のありけるに。再び得がたき大龜を得て。又捨つるはえうなしとて。從ふ氣色なかりしかば。惣助が又いはく。まづあの龜をよく見て。後にともかくせよかしとて。さらに兩人つれ立ちゆきて。龜に向ひて。はじめのごとくしか\/と說き示すに。龜のありさま。又同じ。彌三郎も此體たらくに。あはれみの心おこりて。放ち給へといひしかば。惣助はよろこびて。後々のしるしにとて。甲のはしを少しけづりて。又かのろくろもて卷おろさせ。そがまゝはなちつかはしければ。龜は海底にしづみつゝ。凡十町ばかりにして。波の上に浮きあがり。こなたに向ひて。かうべを動かし。又沈みつゝ。はるかの沖にて浮きあがること。始のごとく。忽みえずなりしとぞ

考異に云。アッケシの濱近年不獵にして。三千石目の運上引きあはず。これにより請負人は。借財なども多くいで來しかども。今年はよき獵あらんか。明年は仕合のなほらんかとて。からくとりつゞきたれども。この兩三年いよ\/小獵なるにより。

たる中にも。いさゝかつゝの考いと多けれど。ことく〲く書きいでんもわづらはしければ。今又贅せず

文政乙酉十月廿有三日　山崎美成記

解云。この本文のうち。鰐の「ホアヤ」の事。又嫁のかたより草履。足袋各一雙つゝ聟へおくる事。この外にも予が考あり。これらは別にしるすべし

○蝦夷靈龜

江戸坂本町小村屋平四郎といふもの。松前東蝦夷地アッケシ（松前城下より行程四百里ばかり）といふ場所。受負人にて。手代惣助といふもの。當文政八年乙酉正月に。はやく松前へ渡海してけり。

考異に云。アッケシは三千石目。運上請負の獵濱なり。又惣助は平四郎が子にて。松前へ渡り。蝦夷地へ往來するものとぞ。手代にはあらず

おなじく四月よりアッケシへ赴きて。漁獵の事よろづ手くばりしてをりしに。六月にもなりければ。漁事いそがはしく。日に〲蝦夷人うちまじりて。網をおろしなどする程に。あるとき彌三郎とて。獵事の頭取をするもの。惣助が許に來て。今日の漁獵は殊によき勝利したり。濱邊に出て見給へといふ。

考異に云。アッケシは春三月ころより。漁獵をすなり。大龜を獲たるは四月ころといふ。且彌三郎は。この漁場をあづかるものにて。所謂支配人なり。是惣助がためには老僕なり

いかなるものを得しやらんとて行きて見れば。長さは貳間にあまり。横幅一丈餘もあらんとおぼしき大龜（龜とはいへど。鼈の類にて。方言にトッキといふものなり）の。網にかゝりてあり。濱邊にあぐるには。五人十人のちからにかなふべくもあらねば。船を引くろくろといふものにて。からくして引きあげたり

考異に云。この大龜は俗にいふ海坊主。正覺坊の類にもあらず。又常陸の海よりあがる浮木の類にもあらず。全體脂膏多く。且その甲のへりを細工にもつかふといふ。又云。トッキは五六尺のもの。たゞみ貳疊敷ばかりなるは。をり〲網にかゝることあり。さばれ如此大きなるは。稀に得がたしとぞ。おもふに。黿の類なるべし

よく見るに。その頭も又ふたかゝへもありぬべし。この龜惣助を見て。涙を流しつゝ。哀を請ふありさ

雙方に分ち。料理に用ふといへり。大蠟燭二丁の内。一丁をとめ。一丁は返しける。扨嫁入は同じ年齢の女中。二人は絹をかつき。嫁は顔をあらはして。右の十二本の笄を髮にかざり。手に金の輪をかけ。衣裝をあらためて。天くわんをさゝせてあるきける。目ざましきありさまなり。眞先に件の大蠟燭ちやうちん二張。先後に燈す。同道十二人ばかり。扨聟のかたには。一丁返せし大蠟燭をともし。半切に米をもり。その中に押立て。町の門口にぞ出だしける。嫁の燈し來りし夜。（此下脱字アルベシ）一族は勿論。朋友若もの抔。めい〳〵に一斤かけ。半斤かけの蠟そく持ち來り。火をともして祝儀をいひ。ろうそくを嫁の部屋に持ち行き。嫁を見んとなり。後には部屋にあまり。勝手臺所までともしつらねけり。女子は七歳より戸外に出ださずして育て。今日嫁入といふその夜は。ゆるして顔を見するとぞ。飽まで唄ひ舞して歸りけり。去程に。孫七思ひけるは。此に落ち付きて。凡六年の春秋を暮しける。（安永元年同二年）さのみくるしみもなく。不自由なることもなく。年を經たり。只故鄕の戀しきこと。起きても寢ても忘れがたし。つく〳〵思ひめぐらすに。此所の風俗。父母兄に孝行なることぞ。うへなければ。我父母にはわかれ。兄一人を父とも母とも賴みつれど。かねて二親ありとかたりければ。彌この事をたらんと思ひ。まづ主人の母親に語りけるやうは。我多年こゝに來り。御懇に預ること。此うへや候ふべき。されど我日本には二親ありて。我行末を案じくらし候べし。折ふし夢にも見えて候。願くは一度日本の地へ渡り。親どもの命あらん内に。一寸逢ひ見なば。いかばかりか悅び候はんとかたりければ。老母も淚ぐみ。道理やとぞいひける。此事やがて老母より主人にかたりければ。阿茶陀舟の出帆するに。主人念頃に孫七をたのみける。時なるかな。時來りて。この國をはなれ。九年の夏（安永三年）午の四月十三日。家内にも朋友にも。此世限りの暇乞。又こん秋を賴むの鴈だにも。鳴きてぞかへるふる鄕の。そら心の底の嬉しさも。久敷馴染し旅の空。主人の情ふかき江の淚にくもる水鏡。芦わけ船の竿さして。見かへり〳〵阿蘭陀が。もと舟にこそ乘りにける

猶この物語の前後の省けるところ。又こゝに記し

みけるに。杜の朽ちたるを押しやぶりて。件の「ホアヤ」内に入り水より上らんとせし人を延上り。片足股より喰ひ切りける悲しみ。わつとさけぶ聲に。番人ども追々にかけあつまり。聲々に呼はりければ。町々より大ぜい出で。松明ちやうちんにて。是を見るに。夜中といひ。聲々にさわぎける故にや。「ホアヤ」は元の出口を失ひ。搆の内をうろたへける。鐵砲にて打つに。一矢も通らず。數十人集り。棒にて打ちなやし。熊手にかけて引き上げゝるに。七尋ばかり有りけり。腹のうろこ少し赤く。舌はくれなゐ。眼大きし。今迄人を喰ひしこともなく。人も又「ホアヤ」を殺す事なかりしとぞ

美成云。この「ホアヤ」といふ魚は鰐なるべし。按ずるに。飜譯名義集に云。善見云。鰐魚長二丈餘。有二四足一似レ鼉齒至利。禽鹿入レ水。齧レ腹。即斷。又翻二殺子魚一。廣州有レ之と。おもふに。其長さ及形狀を「ホアヤ」と同じきうへに。禽鹿をかみ斷といふも。そのさま異ならず。しかのみならず。殺子魚の名あること。此孫七が話なからましかば。得思ひとくまじきことぞかし。鰐の蠻名「カイマン」。又「コローコジ」などいへり。「ホアヤ」も此地の方言なるべし。鰐魚の圖。紅毛雜話に見えたり

當年の八月。主人の弟「カンヘンカン」に縁談すみて。けふ吉日とて。嫁迎の用意ありけり。先つ聟のかたより嫁の所に送りけるその品々には。衣類を三通り箱に入れ。（祝儀には三重。不祝儀は四重なり）これ一人にて持ち。金の指かね六つ。手首にかくる。金輪二つ。箱にして一人にて持ち。金のかんざし十二本。箱にして一人にて持ち。金錢百二十文箱にして。草履壹足。たび壹足。これまた一人にて持ち。燒酒二瓶臺にすゑ。四人にて舁ぎ。らうそく二丁。（五十斤かけ。但蠟）貳人にてこれを持ち。牝牡の豬二足。雞一番。家鴨一番。二人にて是をはこび。仲人聟同道なる人。上下十八人なり。嫁の方に參り。祝儀調ひ。暮六つ時になりて。嫁入とぞ聞えし。かくて嫁のかたより送りける。其品々には。巾着一通り。是は嫁の手づから縫ひ。仕立たるを。聟に土産とす。猩々の毛を付し。笠一つ。是も土産。衣裝の入りし長箱一つ。くゝり枕六つ。（是二通り。枕の長さ二尺）聟の方より贈りし金錢二文をとめ置き。百八十文は返しける。此外豬雞家鴨共に男をとめ。女をかへし。

明し。門戸を閉ぢて祝籠し。儀式なり。偖七つ頃より衣服をあらため。町內ちやうちんにて。年頭の禮に出で。（明和七年）外より「サラマッタ」といふ。內より「ホリロウラ」と答ふ。銘々名札を門口にはるもの多し。又は兄弟近き一族は。戸をあけて內に入り。年頭の祝儀をのべ。燒酒肴にていはひけり。勿論元朝餅を廣む。白餅あり。黑餅あり。餅米を粉にして。砂糖の水にて是をこね。又蒸して臼にて搗き。餅にちぎるあり。押し平めて切るもありけり。白餅は白砂糖。黑餅は黑砂糖なり。年始初入とればしき客來り。一族の交り等我邦の町家に同じ。三月三日は節句。儀式はありながら。茶餅はなし。五月五日は糯米を水に炊し。笹の葉に包むごとく。砂糖水にて湯でるあり。又砂糖水にてむすもあり。扨町內を賣りありき。商人品々を分つに。聲をたてず。燒酒賣はさらをすり。醬油賣は鈴をふり。或は肉物（猪羊鶏）等には大鼓を打ち。みな荷ひ人をつれてあるくもの多し。此所は黑坊の借地なれば。所のわかもの常に來りて。我まゝなることあり。去れども。町より隨ひける。常に盜賊事たえず。國主よりも打ち捨てにせよとなり。

主人も我等に劍一ふり。鐵砲鎗等をわたし置くなり。町每に六人當り。每夜番をつとむ。しかるに此大河に不思議なるもの住みけり。其貌繪にかける龍のごとく。くちびる鼻かまちいかめしく。左右に長き髭あり。耳ありて龍の角なきばかりなり。手足四つ。爪四つ。尾先に鰭のごとき劍あり。うろこ厚く靑く黑し。六尋七尋より十三尋を長とす。これを「ホアャ」といふ。春のころ。岡に上りて卵を產む。大さ手まりの如く。三十六に極まる。卵ひらきて後二尋ばかりになりて。川に入る。親これを追ひまはすこと。波を起し。水を蹶立てすさまじく。あたりに居るを喰ひ殺し。やう〱迯ぐるを只一つ殘し置く。是を子として。大切に養育すること類ひなし。子連（此處落字ある歟）のあたりを通る（子連のあたりを云々。この文語をなさず。子連てあるくさき。このあたりを云々などありしが。字を脫せしなるべし）船あれば。甚怒れる氣色あり。人みな船をよせず。暖國なれば。常に下々は。晝夜に兩三度も川につかりて水をつかひ。暑を凌ぐ。大海なれば岸によせ。角柱を立てまはし通して。格子の如く搆へて。災をのぞく用心せり。ある時。夜廻り番のもの。暑をしのがんと。ひとりかこひの內の水を浴

て。親に孝行なることかたるに言葉なし。外の家々も是に同じとぞ聞えし。こゝも暖國にて。常に五六月の氣候なり。單物にて冬もよし。もはや九月に至りぬれど。氣候のかはる事もおぼえず。九日の節句はなし。扨野に出ては。十月の末に至り。二番稲あり。都て山をひらきて。畑稲多く。飯に油なく。三年米を喰ふに似たり。米は一升錢一文。（貳拾文錢）獅子の繪あり。是よりも下直なる年多し。三文錢は壹文錢より少し大きし。銀目百目の金錢あり。阿茶陀が走り舟（フネ）の繪あり。拾文錢は馬乘りあり。六十文錢は虎を畫く。銀は七十文にかへ。金錢はみな阿茶陀が持ち來る錢なり

美成云。此にいふ所の錢。文を見ざれば。何れの國の錢といふことをしるべからず。しかれども。西洋の錢は種類甚多し。獅子。走り船。騎馬等くさ〴〵あるが中に。獅子尤多し。虎といへるも恐らくは獅子なるべし。猶詳には西洋錢譜を併せ考ふべし

解云。金箔をたくは楮錢冥衣を燒く類なり。今も長崎にて。來舶人、神佛及ひ先靈を祭るに。金箔銀箔をおしたる寸楮を。金錢銀錢となづけてたくなり。これらの祭奠禱記に見えたり。その金箔をたくは。彼土に金多き故なるべし

又此國に「カハヤ」といふ鳥あり。是燕に似て少し大ぶりなり。この鳥の巣。川筋の岩窟の内に多し。その巣は猿の腰懸に似て。甚白し。くぼき内には黒き羽などの付きたるもあり。此巣いかなる藥やらん。れらんだより入銀して。懸目壹斤に付。銀八十匁に代ふ。是により國主よりみだりに取ることを禁ぜらるゝ。常に改の役人ありとぞ

美成云。こゝにいへる巣は燕窩なり。（解按に。燕窩の事茶餘客話に詳なり。併せ考ふべし。又唐山にて、宴會に燕窩を上菜となすさ。清人の小說鏡花緣に見えたり）泉南雜志に云。閩之遠海近蕃處有ㇾ燕云々。海商聞ニ之土蕃一云。鵞螺背上肉有ニ兩肋一如ㇾ楓。鵞絲堅潔而白。食ㇾ之可下補ニ虛損一已中勞痢上。故此燕食ㇾ之。肉化而肋不ㇾ化。幷ニ津液一嘔出。結爲ニ小窩一附ニ石上一。久之與ニ小雛一鼓翼而飛。海人依ㇾ時拾ㇾ之。故曰ニ燕窩一。かく見ゆれば。此孫七がはなしと併せて。その詳なることをしるに足れり

今年も浮世の泪にたゞよひて。十二月大晦日にぞ成りにける。先づ客の間の天井に。唐草の華布を縫ひ合せてはらせつゝ。壁のところも同じもやうの木綿にて張り。町並の門口に。大燈籠を夜な〳〵ともし

羊や犬に喰はせける。扨十五日の夕ぐれより。一町々々借合にして。大筏を拵へて。前なる大河に浮べて。われ〳〵より大蠟そくいくらともなく火をともし。靈具共に持ち出だし。件の筏にならべける。火揃ふとつなぎし筏を切り放せば。水に隨ひながれ行く。家々よりは佛の數蜜蠟にて。一斤かけ二斤かけも有りければ。風にも雨にも消えやらで。水上よりも流れ來る。その火の光り幾千萬。はるかの下まで見え渡るありさま。目をおどろかすばかりなり。扨さま〴〵の踊あり。引物あり。賑やかなりし盆會なり。勿論廟所は十三日の夕より。廿日の夕まで。燈籠をかけ。花を生うゑ。香をつぎ。毎夜の參詣。主人にも父親なく。餘人も親の墓あれば。みな如此すとぞ。同年の八月末に。近町に主人の一族あり。男死し。我も家內の働にとて遣しける。その葬禮を見るに。棺は長さ一間。厚さ二寸の板を以て拵へ。徑り二尺五寸の箱なり。內には金箔を敷き。ふとんを敷き枕を置きて。死人には四重の衣裝をかさねてきせ。あをのけに寐せ。巾着。煙草の道具等を入れ。又そのうへに。金箔を餘分に置きて。蓋を釘にて打ち付け。染絹にて上をおほひ。墓所にかき送るなり。扨地を少しほりて。棺を納め。廻り白土にて志つくいし。上の石を板瓦にて葺き。頭を西に埋みおき。石塔を立て銘をほり。香花を備へて。是をまつる。塀を見るに似たり。官ある人はしらず。此町の人みな甲乙ありて。如此家には佛具をかざり。魚肉鷄肉を備へて。妻子は是を食はず。勿論その妻子は。百日迄佛間にこもり。白き絹をかつぎて。香具金箔をも燒きて。生前のありさまを語りなげくこと。甚痛ましきありさまなり。只金箔を餘分に燒くを。未來の爲といへり。子としては百日墓に參り。香花を備ふ。三年は喪をつゝしみ。色の衣裝をきせず。音曲の席に至らず。これを喪の中の禮とすといへり

美成云。喪中に金箔を多くたくが如きは。蓋夷狄の俗なり。しかれども。登遐せず。且三年の喪あり。親の喪の愼み追慕の厚き。實に鄒魯の儒士と何ぞ別たん。誰か諸夏のなきにはしかずとやいはまし

主人にも父なく母ばかりなり。常に佛間に靈具を備ふるに。魚肉燒酒を備へける。日に三度佛前に向ひ

を廻り來て。初めて人の風俗に逢ひ。何れに我も賣り付くべし。こゝにうれかし買へかしと。心にぞ思ひける。よきにつけても幸五郎たま〳〵道まで伴ひ來て。爰にも屆かず。打ち捨てしは。殘り多きこそ悲しけれ。大方人も片付けるにや。われも來れとつれて行く。此町にても大家と見えし萬店にぞ入りにける。我月代(サカヤキ)もなで付くばかり。まだらかみに色黑く。目の內丸く見出しければ。家內の上下打ちつどひ。日本人のめづらしくや。仕事を止めてながめ居る。我も又口ゆがめ。眉をしばめて見せければ。常には勝手に出でぬ嫁娘。笑ひに傾く。髮の飾り觀世音の樣に見えける。かくて主とおぼしき人。船のものと物語し。臺所にて食事をさせ。夫より船子は歸りける。家內の人數廿四人。主人の名は「タイゴンクワン」妻の名は「キントン」といへり。年十八。この春此家へ嫁に來りしときく。老母あり。主人の弟あり。「カンヘンクワン」といふ手代頭「ハウテキ」「ヒヤウコウ」のふたり。家內よろづの裁判して。吳服を商ふ大店なり。外に下人十五人。その內「アルセン」「モウセイ」「カウセン」の三人は。黑坊にて朝夕の食事を別所にてつかみ喰ふ。下女「ハヒヲラヽン」「ウキン」「コキン」の三人は。是も遠國黑坊の娘なり。我名を日本とよぶ。初のほどは物每に仕形計にて。致させけるが。盆前なればいそがしく。言葉を習へと手を取らへ。物をとらへて「コンサミヤア」さればなにと云ふものぞとなり。「チナウサミヤア」なにをいたすとなり。先二事を敎へてより。其後は言葉をおぼえ。天竺口狀おぼえけり。主人も家內も慈悲ふかくして常に勘辨を加へて。召仕はるゝ。我が命あらん限りは。心もとけて仕へける。光陰夢と移り行き。七月も朔日になり。此所は今夕より。門口に燈籠を燈し。靈具を備へ。猪羊鷄の肉を備へ。聖靈を祭ると見えにける。十五日の夕は。又々寺々の御堂の庭に。大なるせがき棚を搆置き。町々われ〳〵より五升。思ひ〳〵分限相應に飯を炊き。五色の紙にその家の佛の名を書き付け。竹の串に挾み。飯の上に是をさし。くわし果子色々の肉を備へ。燒酒を器に入れ。施我鬼棚に備へける。寺より大せい僧出て讀經あり。經終りて後。若者子供等大せい集りて。備へし靈具を取り爭ふ。持ちかへりて。家々の

の廿人。都合乘組五十八。いづくにゆくとも夢心地。殘りし友のこと問へば。さらに行方もしらざりける。名殘をしくも見送り〳〵。沖津浪にぞ走りける。女を見れば枕も上らず。涙かわかぬありさまを。いかなる子細もしらざれども。後に思ひ合すれば。親にはなれ。兄弟に別れし人を。盗みて上荷に積み。遠き國に賣りに行く。その人々の心のうちこそ。思ひやられて悲しけれ。舟には黒砂糖。黒胡麻なり。かくて日數も廿日あまり過ぎければ。兄と頼みし幸五郎（このもの伊勢丸乘組廿人の内。孫七と此ものゝみなり）何とやら煩ひ付き。食事も絶えいろ青ざめ。たのみすくなく見えにける。死がいなりとも納めんと。舟の者にいひければ。海へ捨てよと仕かたする。いと悲しく。とや角いへど。幸ひ泊り港にて。岡近くてんまを寄せ。手を添へてと頼みければ。つばきはきしてかぶりをする故。是非なく〳〵も獨して。死がいを肩に岡へ上り。かいにて砂をほり。よきほどに納めてこそは船に乘る。思ひ暮して打ふすに。船のもの氣遣うて。又も煩ふかとて。藥よ水よと世話すれば。しほれぬ體してくらしける。行き向ふ船もたま〳〵にて。見馴ぬ帆かけ吹き流し。島も珍しく日本の道のりにて。海上凡貳千里ほど。日數も已に四十二日。しけにも逢はず。船はゆく〳〵みなとゝおぼしき川口に。十里ばかりぞ登りける。やがて瓦の軒見れば。碇を入れてゝんまをおろし。三十人の男女を乘せ。岡のかたにぞ着にける。舟方は十人ばかり。岡に上りて宿を極め。町々所々に人を賣りつけしとぞ聞えける。此所は中天竺黒房の國にて。「カイタニ」といふ國にして。「バンシャラマアン」といふ處とかや。いつの頃よりか始まりけん。中華。南京。福州。山東の商人出店して借地なり。家作りはみな瓦葺。富家も多し。町々總いたばりにして。往來の人土をふむことなし。諸國の唐船出入をあらそひ。おらんだ船も入津して。繁昌なるみなとなり。後には山もあり。里々廣く打ち續きて。前には大河あり。渡り二里ありて甚深し。大船岸ちかくつなぎならべて。水の流れなほ靜に見え。關戸小倉の海の如し。川上は南天竺龍砂の下まで續きて。その流幾千里といふことをしらずとかや。此處の町家千四五百軒。みな商家なり。人の形きれいにして。衣類にも目をさましける。孫七三千世界

ろに。はじめて筆を把りしより。さて書くとかく程に。夜もはや二更の鐘を聞きつゝ。このはたひらを綴り果にき。もちろ初稿のまゝにしあれば。さすがに心もとなさに。今朝はじめよりよみかへして。纔に誤脱を補ふものから。拙きうへになほ拙きが。巧にしてけふのまとゐの間にあはぬには。ますらめと。みづからゆるすも嗚呼なるべし

文政八年乙酉冬十月朔　愚山人解稿

○孫七天竺物語抄

夫今にして古をしらんは。書にしくべからず。又居ながら夷狄の風俗をしるも。亦書なり。ふるくは僧玄弉の西域記あり。近くは張鵬翮の俄羅斯日記の如き。目其事を視。足その地に至れり。此等の書實に徵とするに足れりといふべし。其他歴史中載する所。外國傳。及諸書に散見するもの。又むねと其事のみを記しゝ東西洋考。西域聞見錄等の如きも。多くはみな想像の言耳。其中たまく吾邦の事に及べるもの。妄誕少からず。概してしるべし。扨吾邦の舟人時として。颶風に吹きはなたれ。あらぬ國に到れるものゝ歸ることを得て。ものがたるは。みな目擊のことながら。一丁字をもわきまへぬ舟人なれば。事物はもとより。地名だに詳には得おぼへぬものゝみ。癡人に夢を說くの思ひなきことあたはず。其中に孫七天竺物語といふ冊子あり。明和三年。本書に三年とあり寶曆十二年也筑前國の船頭重右衛門といふもの。伊勢丸といふ船に二十人のりにて漂流し。數月海上にありて後。こゝかしこの夷人の手にわたり。果は孫七といふ者一人天竺にいたり。商家に奉公して。九年を經て。安永三年八月十五日本書に明和七年とあり廿六日故鄕に歸り來て。話せしを記したるにて。地名人名はいふまでもあらず。方言さへ詳に記したれば。此冊子こそ彼地の一斑をも窺ふべきものならんと。一わたりよみかうがへつるに。考據とすべきことなきにあらず。こゝをもて。今其天竺のことに及べるものを。こゝに抄し。且拙考の一二をも記すといふ

六月明和六年の初のころ。大船をしつらひて。「ソウロク」地名南天竺の内といふの小港にぞ入りにける。宿の主が案內して。われく二人孫七。幸五郎を。此船につれ行きけり。いかなる國に又もやと覺束なくも乘りにける。のり合には。老若の女八人。男は廿二人なり。水主梶取のも

いかでわれ眞葛（眞葛は文政七年某の月日に。身まかりしさぞ。今茲三月尾張の友人田鶴丸が松島見にゆきし折。言つてしに。眞葛ミ疎からぬ仙臺の醫師にたつねしよしにて。はつかにその訃聞ねたるなり　丙戌四月追記）の草子をゑりまきにして。世にあらはさんとは思へども。彼の獨考（ヒトリカンガヘ）は禁忌に觸るゝこと多かり。まいて予が獨考論などは。人に見すべきものにはあらず。されば此二書はそゞろにな人に貸しそと。與繼をすらいましめたり。又奥州ばなしなどいふものも。はゞかるべきこともまじりたれば。ゑもまきにはなしがたし。只磯づたひの一書のみ。その文の特にすぐれて。且めづらかなる説もあり。禁忌にふるゝことのなければ。是をこそとおもふ物から。いまだ時の至らぬにや。ふみやと謀るいとまなかりき。眞葛の齢を僂る（カゾフ）に。予に四つばかりのあねなりければ。今もなほ恙なくば。六そぢあまり三つにやならまし。おもふにいぬる文化のはじめつかた。尾藩の某氏の後室が。新潟といふ草紙物語を書きつめて。予が筆削を乞ひけるも。かたく辭びて還したり。又ちかきころ。本鄕なる田中氏の女の。予が教を受けんと願ふことゝ。既に十とせにあまりぬと聞えしも。いなみて終にうけ引かざりき。まいて男子の。予がをしへ子たらんと請ひし人々は。かゞなふに遑なきを。意見を述べ推し禁めて。いづれもゝとめに應せざりけり。予が人の師とならざりしは。柳宗元に傚ふにあらねど。素より思ふよしあればなり。さるを只この眞葛の刀自のみ。婦女子にはいとにげなき經濟のうへを論せしは。紫女。淸氏にも立ちまさりて。男たましひあるのみならず。世の人はゑぞしらぬ。予をよくしれるも。あやしからずや。されば予が陽に袪けて。陰に愛つるは。このゆゑのみ。かゝる世に稀なる刀自なるを。兎園社友にしらせんとて。いといひがたきことをすら。もしもつゝまでしるすになん。秋もはやけふのみとくれゆく窓の片あかり。風さへいとゞ身にしみて。火ともす程をまつまゝに。かくなん思ひつゞけゝる

から見きと思ふもわびし眞葛葉に
　人もなごりの秋の夕風

予は例のふみやらにせめられて。かゝるものかくいとまなきを。そのいとまなき折に。いと長々しう書かんこと。まことにかくにはあるべけれど。思ふも老のしはみたるなり。瘤を見するに似て。われながらいと〳〵をかし。さればきのふ巳のこ

とき。いづくまでもまじらひし事うけ給はり度思ひ侍れど。をとこをみなの交りは。かしらの雪を冬のゝと見あやまりつゝ。人もや咎めん。且わがなりはひのいとまなきに。とし來思ふよしもあれば。いとふるき友すらうとくなり侍りたり。かゝれば御交りも是を限りとおぼし召されよなどいひつかはしゝに。次のとしの春。みちのくよりのかへしとて。栽の尼の届けられたり。くだんの尼は。予が論の書きざまを譏れりと見て。うらみにけん。怒りは筆にあらはれにき。こはあねにおとりて。むねせまき婦女子の氣質としられたり。眞葛はさもあらずして。いといたくよろびうけたるせうそこのまめやかにて。おんいとまなき冬の日に。ふみやどものせめ奉る春のまうけのわざをすらよそにして。かうなが〴〵しきことをつゞりて。をしへ導き給はせし。御こゝろの程あらはれて。限りもなき幸にこそ侍れ。なほながき世に此めぐみをかへし奉るべしと書かれたり。このとき越前のさくにかみとて。賣物には絶えてなき小かたの美の紙十五帖と。おなじ國のはさみ。みちのく名とり川なるうもれ木の栞。もとあらの栽の筆などを贈られしにぞ。明の春きさらぎの頃。そのよろこびを一ふで書きてつかはしゝに。かしこのかへしは來にたれど。条路の橋のなか絶えて。ふみ見ることはなくなりぬ。いとかなしともかなしかりしが。かく遠ざかりぬる事を。いかにぞやと思ふ人の爲には。いふもえうなきわざながら。彼同胞は才女なり。齡はかれも小動のいそぢを過ぐる程なりとも。迭におもてをしらずて親しみ。としをかさねなば李の下に冠を正し。瓜の園に履をいるゝ人の疑なからずやは。且彼家のぬしにはしらさで。みそかにすといはるゝをしりつゝ。交るべくもあらず。いと捨てがたき思ありて。捨てずしてかなはぬはすくせありての事ならんと。かねてよりおもひしなり。これよりの後。まどろまぬ曉毎に思ひ出で。そのあけの朝。せうそこさへとり出だしつゝ見る毎に。なみだは胸にみちしほの。ふかきなげきとなりにたり。このゝちみとせばかりの程は。栽の尼が御窂をもて。予が家の奇應丸を求めさせつる事。をり〳〵ありしとむすめどものいひつるにて。汲は予が安否のほどをみちのくへ告げんとてのわざかと思ふも。いとはかりなし。

とをと。はし書きして

よの人のたぐひにあらずまめなりや
けふくさの戸にかへす心は

とありし。こは予が遣したるかへの服紗をかへせし折の事になん。是より先にやよひのころ。眞葛のせふそこに。おんなりはひの爲に。筆とらせ給ふにて。いとまなきにしば／＼わづらはし奉るを。こゝろなしとやおもはれ侍りてんなどありしに。かへしすとてよみてつかはしける

我宿の花さくころもみちのくの
風の便りはいとはざりけり　解

程經て眞葛のかへし

おやまたず君につげなん歸る鴈
霞がくれにことづてしふみ

こはその家のおきてあれば。予にせうそこをおくれることを誰々にもしらせずとか。嚮に聞きたることもあれば。歌の心もしられたり。是より後かねて書きつゞりたりし物をば。妹の尼に淨書せしめ。又予が爲に綴れるものをば。眞葛のみづから淨書して。くさ／＼おくりて見やられたり。この餘。そのせうそこのはしにも。眞淵。春海。宣長。大平などを論せしあり。いとけやけくおもはゆるを。さのみはとてしるしてつくさず。かゝり程に。このとしもはやしも月になりしかば。獨考のことは忘れ給はずや。かねての約束をたがへ給ふなゝどいひおこせることも。しば／＼なれども。今さらにそのふみを引きなほさん事易からず。もしそのわろきを刈りとらば。殘らんことの葉すくなかるべし。こは此まゝにうちおきて。別にさとすにます事あらじと思ひにければ。原本は假名づかへのたがへると。眞名の寫しあやまれるに。いさゝか雌黄を施して。別に獨考論二卷を綴りたり。その言つゆばかりも諂ひかざれる筆をもてせず。その是非をあけつらふに。敎訓を旨として。高慢の鼻をひしぎしにぞ。いとおとなげなきわざに似たれど。かくいはでかたほめせば。いよ／＼さとるよしなくて。にぶしといふとも。予が斧をうけたる甲斐はあらざるべし。人に信をもてするに。いかりを怕れて。諫めざらんは。交遊の義にあらずと。かねておもふによりてなり。かくて廿日ばかりにして。そのふみやうやく來りしかば。みちのくへつかはす

しかじ〳〵とは聞え給はじ。およそはこたみの御せうそこにて。あし曳の山の井のかげさへみゆるこゝちし侍れば。淺くは思ひ侍らねど。不動尊の示現によりてなど聞え給ふばかりうけられね。そはとまれかくもあれ。たのまれ奉りし一條は。よくもわろくもなし果て。おん笑にこそ供ふべけれ。しかれどもなりはひの爲に。たのまれたる書きものゝ多かれば。ことしのくれまで待たせ給へなどしるし果て。妹の尼の彌ふみを見るに。みちのくよりのせふそことゞけ奉る。さてもいぬる日ふたゝびまでとぶらひまつりしは。人づてになせそ。みづからゆきてしか〳〵と傳へよかしと。みちのくよりいひおこせたりしにこそ。さるをつぎのあしたにもあはせ給はぬにて。しか侍りぬ。かのるすゐのおきなこそ。こゝろにくけれ。かゝれば奥のたより毎に。尼がそのせうそこをもてゆきて。とゞけまゐらするもゑうなし。此のちは。いつも使をもてすべきにうやなしとて。御答め給ひそとゑんじたるふみの書きざまなれば。予は何ともそのことのいらへはせで

　ふみわきてとはれし草のいほりには。なほ春ながくかゝる君かもと。よみてつかはしゝかば。後のたよりにかへし萩の尼。「やぶしわかぬ君が心し春ならば。わりことくさもかれずやあらましと。ありしに又予がかへし

　ことくさを花とし見ればとゞめあへず
　　きのふをしみし春は物かは

とよみてつかはしけり。こは卯月朔日のことにぞ有りける。この萩の尼瑞祥院も多く得がたき才女にて。歌をよみ。和文をよくし。はしり書きうるはしくて。手すぢはあねの眞葛に似て。瀧本樣なるもめでたし。程へて予がことくさの歌をたゝへて

　ことの葉のしげき庵の下つゆや
　　ふるえの萩を花となすらん

とよみておこしたりき。又このとしのふゆ。萩の尼よりものをつゝみておこしゝ服紗を。あやまちて火桶の中へとり落したりけるをわびつゝ。かへしつかはすとて

　こがれつゝわたしかねたる川舟の
　　風のふくさにいとゞくるしき　解

といひしに。萩の尼のかへし。やけふくさといふこ

ちて遊ぶが如くもて渡り侍り。我も赤色なる御はたをたてまつりしを。御先に持ちてわたりしかば。御心につかせ給へるならめと有りがたく思ひ侍りしに。よひ過ぎてうすねむたきに。いざねばやと思ひて。はしゐしながら。籠にこめたる螢のやすげなくふるまふをまもりつゝ。何心もなくてありしほどに

ひかりある身こそくるしき思ひなれと。いふことの耳にきかれて。めさむるこゝちせしは。此御佛の御玄めしぞと有りがたくて

世にあらはれん時をまつ間はと。又下をつけそへ侍りし。此二歌をちからに。さらば心にこめしことゞもを書きしるさばやと思ひ立ちて。いとおほけなきこと共をいひ出だせるにぞ侍るなる。書き果て後に誰にしらげをたのまばやと。久しう思ひ煩ひて侍りしに。かゝる人に見せよと。不動尊の御玄めしありし故。そなたさまにことよせ侍りしにこそ。おろそかならず考を添へ給はらんとねんじ奉りぬ。今の此身はたとへば。小蛇の物に包まれて。死もやらず生もせず。むなしき思ひのこれるにひとし。君雨となり。風となりて。こゝろざしを引きたすけ給はらば。もし天に顯るゝことのありもやせんなどありて。こたみは瀧澤解大人先生樣御もとへあや子と書かれたり。この長ふみを見る程に。おもはず涙ははふり落ちて。あはれむこゝろになりたり。※名をいむ事はからくにの制度なるを。國學などのうへにては。ふかくいむよしもあらず。たとひ今はなべて忌とても。戯號を唱へらるゝには。はるかにましてほいに稱へり。但大人先生などたゝへられしのみ。當りがたきことなれば。大人先生のわけをしるして。かたくとゞめたりけれども。あやにくに用ひざりけり。こは羹に懲りしものゝ。韲を吹くたぐひならまし。そも〳〵この眞葛の刀自は。おのこたましひあるものから。をさなきよりの癇症の凝り固まりしにもやあらん。さばれ心ざますなほにて。人わろからぬ性ならずは。予がいひつることゞもを速に諾ひて。とほつおやの事をさへしるして見することやはせん。かゝる婦人のたのめる事を。猶いなまんはさすがにて。しか〳〵とことうけしつる。そのをりの予がかへしに。海なす御こゝろの廣からずは。木の枝に鼻をすらるゝといひけん如き。予が言ぐさをうべなひ容れて。

たのみ奉ることとやはある。この後とても。心つきなきこと多からんを。敎へられんとこそねがひ侍れ。こなたのうへをしらせよとあるに。いかでかつゝみ侍るべき。眞葛はしかくなり。又さきにわらはが消息をもて。とぶらひ侍りしは妹にて。しかじかとその身のうへをも。妹栲尼の名どころをも。つぶさに書きしるして。別に昔がたりといふ草紙一まきに。その先祖の事さへしるしつけてみせられたり。又その消息に。こゝには詞かたきもなく侍れば。只あけくれに物を考へ見かへすることの癖となり。病ともなり侍りたり。さておもふやう。何の爲に生れ出づらん。女一人の心として。世界の人のくるしみを助けまほしく思ふは。なしがたきことゝしりながら。只この事を思ふが故に。日夜やすき心もなくて苦しむぞ無益なる。今はやもめにもなりつるに。なげきをのこさんこそやゝてもなし。いきのかよはん限りは。この歎きやむことあたはじ。なかく生きてくるしまんより。いきをとゞむるぞ。苦をやすむるのすみやかなるべしと思ひて。ひたすら死なん事を願ひ侍りしに。時は秋のながき曉かたの夢に

秋の夜のながきためしを引く葛のといふ歌の上のおのづからふと覺えたるは。多年信じ奉る觀音ぱさつしめさせ給ふと覺えて。夢ごゝろに忝く。此下のつけやうにて。おのが一世のうらとならんとまでしめさせ給ふとおぼえて。いとうれしく心いとあわたゞしきものから。世々に榮えんとこそいはめと思ふ程に。さめはて侍りき。四の句いと大事ぞと思ひつゝ。やゝほどありて。たえぬかつらはとつけ侍りし

秋の夜のながきためしにひく葛の
　絶えぬかつらは世々に榮えん

と。一首のかたちをなしぬれど。いと心もとなくのみ思ひ侍りき。かくたえず。物をのみ思ひつみし故によりて。病者となり侍りて。身もよはく心もきえくにのみなり增さりしは。不動尊を信じ奉りて後。漸病もうすくなり侍りしか共。今に右の手のいたみて。筆取ること心のまゝならず。眼くらくして。細書をみる事あたはず。是は老の病とぞ覺え侍る。このちかきわたりに岩不動と申し奉るがたゝせ給ふ。とし每の五月廿八日には。このわたりなるわらんべ共のつどひて。御こしをかき荷ひ。御はたあまた持

かにはせざりき。もしまことに問はんとの。みこゝろあらば。かくはあらじを。馬琴とさへものせられしはいかにぞや。曲亭も馬琴も。予が戯號なれど。戯作狂詩狂歌などのうへにのみ交はる友ならば。しか唱へられんに咎むべき事にはあらず。もし實學正文のうへをもて交はる友に。なほ曲亭とたゝへられ。馬琴といはるゝは。是われをしらざるものに似たり。いかでか予がこゝろに恥づることなからんや。かゝれば刀自もよく予をしり給へるにあらざるなめり。近ごろ平賀源内が。儒學。蘭學のうへには鳩溪と號し。戯作には風來山人と稱し。浄瑠璃本の作あるには。福内鬼外としるしけり。又太田覃は。儒學に南畝と稱し。狂詩に寐惚先生と稱し。狂文狂歌に四方赤良。四方山人。巴人亭。李花園などもしるし。晩年には蜀山人と號したれども。戯作浄瑠璃のうへならでは。鳩溪を風來とも。鬼外とも稱するものなく。狂文狂詩狂歌のうへならで。南畝を寐惚とも。四方とも。巴人亭とも稱するものはあらざりき。よしやその著きをのみ呼びなれて。虚實の號を混ずるとも。まことによくその人をしれるものは。こゝらに心を

用ふべき事歟。刀自はよく予をしらず。予は素より刀自を知らず。男女みづから授け受けざるは禮なり。刀自は人の妻歟。母歟。その宿所だもつゝみ給ふには。われ答ふる所をしらず。こゝをもて只わが志を述べて。れどろかし奉るのみと書きしるしつかはして。めのをんなを呼びて。翌の朝しか〱の比丘尼來つべし。あるじはけふもはやきに出でゝあらず。こはきのふのおんかへしなりと告げて。わたせよといふに。こゝろ得果て。しかはからひつ。このゝち廿日ばかりを經て。又かの比丘尼より御宰めきたる使をもて。みちのくよりの消息を屆け侍るとて。おこしたるに。栲の尼としるしたる添ふみもありけり。まづ眞葛の狀をうちひらきて見るに。これみはいとおしくだりて。ふみの書きざまのねもごろなりし。そが中に。よろづにあは〱しきをんなの。よそをだに得しらねば。今はやもめにていとおよすげたる身にしあれど。をとこに物いはんにねもごろぶりたらんも。なか〱になめげなるべしと思ひとりしより。いや禮なしと見られにけん。露ばかりもそなたざまをあなどる心あらば。人には見せぬ筆のすさびを。

答へて。そはこゝろ得て侍れども。あるじはとし來筆とるわざに倦みつかれたればとて。いづ方よりよさし給ふも。かゝるものはうけ引き侍らず。殊更留守の宿なるに。あづかりおかば叱られやせん。又折もこそあるべきに。こはもてかへらせ給へかしといなむを。比丘尼は聽かずして。そは宣ふことながら。おん身の心ひとつもて。おしかへされんことにはあらじ。とまれかくまれあづかりてたべ。翌の朝は巳の比にまたこそ來めと。期をおして。いとまごひしてまかり出でにけり。予も亦書齋に退きて。まづその狀をひらきて見るに。いひおこしたる趣は。比丘尼のいへるにおなじけれども。ふみの書きざま尊大にて。馬琴樣みちのくの眞葛とのみありて。宿所などは定かにしらせず。いぶかしきこと限りもなければ。ひとりつらつらおもふやう。此とし來あて人より書を給はりしことのあれども。かくまでに尊大なるはいかなる人の妻やらん。仙臺侯の側室にて。御部屋など唱ふるものと。はるばるとよざしぬる草紙は。何を書きたるやらんとおもへば。やがてまきの稿本なり。その說どものよきわろきはとまれかくまれ。

婦人には多く得がたき見識あり。只惜むべきことは。まことの道をしらざりける。不學不問の心を師として。ろうじつけたるものなれば。傍いたきこと多かり。はじめより玉工の手を經て。飽まで磨かれなば。かの連城の價にもおとらぬまでになりぬべき。その玉をしも玉鉾のみちのくに埋みぬることよとおもへば。今さらに捨てがたきこゝろあり。さはさりながら。人づまか母かもしらぬ一老婆の。その宿所だに定かならねば。需に應ずべくもあらず。いでやわが志を見しらして。その後にともかくもせんすべあれとおもふになん。その夜かへしをものするに。おのれはいとはやくより市にかくれて。をんなわらんべ婦幼のもてあそびものとなるよしは。刃自にもしられたるなるべし。さばれこたみよせられしおん作のさうしは。それらのすぢにはあらぬを。世の人のわれをしれるものと異なる見どころあるにあらずば。江戶には名たゝる儒者も。國學者も多かるに。おのれにはたのみ給はじ。さることろもてせられなば。などていと尊大なる。およそ人にもの問ふには。禮節あり。いにしへの人は。一字の師をだも猶おろ

こはらからの。世をばはやくせしことのかなしくて。よしやわが身おうなりとも。人に異なる書をあらはして。世にもしられ。乃祖の名をもあらはさばやと思ふに。その諸侯の多くは。財主の爲に苦められながら。嬖妾に費を厭ひ給はず。或はつかさ位を望みて。そがなかだちするものにはかられ。あたら黄金を失ひ給へることなどをはじめとして。經濟の可否をろうずるとも。數篇全書三卷を獨考（ヒトリカンガヘ）と名つけたり。時に文化十四年冬十二月朔。眞葛五十五歲の著述とぞ聞えし。此記奥州ばなし一卷。磯づたひ一卷あり。予がこゝにしるしつけたるは。眞葛の予が爲に書きておこしゝ「昔がたり「とはずがたり「秋七くさ「筆のはこびなどいふ草紙の意をうけて。畧記しつるものなり

予はちかきころまで。眞葛をしらず。文政二年己卯の春きさらぎ下旬。家の内のものどものことしの始のことほぎにとて。やから許（ガリ）ゆきたりし日。齢五そおばかりなる比丘尼の。從者（ズサ）ひとりゐたるが來て。おとなふ有りけり。とりつぐものゝなき折なれど。うちもおかれず。みづから出でゝいづこより來ませしぞと問ふに。比丘尼のいはく。あまは牛込神樂坂なる。田中長益といふくすしにゆかりあるものに侍り。あるじに見參せまほしと。いひつゝにじりかゝりたり。予は文化のはじめより。客を謝し。帷を垂れて。常に人と交らず。をちこちの騷客のさはに來訪せらるゝも。舊識の紹介なければ。病に托してあはざりしに。ついでわろしとおもへども。せんかたのなきまゝに。いなあるじは出でゝ今朝よりあらず。家の内の人どもいづちへかゆきたりけん。おのれはしばし留守するものなり。何事まれ仰せおかれよ。かへらば傳へまゐらせんと。惟光がほに答へたり。そのとき比丘尼はふところより。一通の封狀と。さかな代としるしたるこがね一封と。ふくさに包みたる草紙三まきをとり出でゝ。こはみちのくの親しきものより。あるじにとゞけまゐらせよとて。おこしたるなり。草紙はをんなの書きたるを。こゝの翁の筆削をたのみ侍るとよ。猶つぶさには此しやうそこにこそあらめ。あまはこよひ田中がり止宿し侍れば。翌のかへさに又とぶらひ侍りてん。その折に一ふでなりとも。此かへしを給はれと傳へ給へかしといふ。予

果して後やすかりしといへり。又をさなかりしころ。奴婢のみそかごとをするが。もの丶いひざまとけしきとにしらる丶をうち見て。あなおろかにも立ちふるまふもの哉。人にしらせじと思ふことを。なか〳〵に人しれかしといはぬばかりなるはいかにぞや。かく淺はかなる心もて。しのびあふものどもの。後々までいかでか遂げん。慾にまよふもの丶心ばかり。おろかなるはなかりきとおもふ程に。果してその事あらはれて追はれしもの丶ありしとぞ。かくてみやづかへの身のいとまを給はりて。宿所にまかりしころ。母のなくなりしおば。猶をさなかりし妹どものうしろ見をもしつ。内ををさむることをさへ。うち任するもの丶なかりしにより。三そぢをなかば過ぐる迄。人づまとも得ならでありしに。はらからのうち。いづれまれ。國勝手なる人の妻とせば。元輔が爲によろしかるべしと。父のとしごろいひつれども。われ仙臺へ赴かんといふものはなかりしを。眞葛は父の仰にはもれ侍らじ。ともかくもはからせ給へといひしにぞ。父よろこびて。あちこちとよづるもとめつ丶。當時勤番にて。江戸番頭なりし只野伊賀とて。祿千石を領する人の後妻にえにし定まりしかば。仙臺河内はせくらとて。仙城の二の丸に程ちかき。只野氏の屋敷へ遣嫁せられけり。人あるひはこれを諫めしもの丶ありしに。眞葛答へていはく。遠く仙臺へよめらせんとほりするは。これ父のこ丶ろなり。又遠くゆくことをうれはしく思ふは。子の心なり。なでふ子の心を心として。親の情願に背くべき。われは三十六歳を一期として死したりと思へば。うれひもなく。うらみもあらず。死してすくせわろくば。必地獄の呵責を受べく。且親同胞にあふによしなかるべし。仙臺はもとも厭はしき所なり。且聲だみてむくつけきをとこにかしづき。詞かたきもなき宿を生涯うちまもりたらんも。地獄の呵責にはますことなからんやといひしとぞ。さてよしありて。父平助も身まかり。眞葛の良人伊賀も世を去りて。前妻の嫡子只野圖書の世となりにたり。この家いとかたくな丶る家則多くて。傍いたき事のみなれども。繼母の事なれば。何事も得いはず。いとおろかなるわざかなと思ひつ丶。そがまに〳〵せずといふことなし。はしめ女の本ッにあらんと思ひしを。得果さず。その

けるそが中に眞葛はいとをさなかりしころより。異なる志ありけり。明和壬辰の大火の比。物のあたひのにはかにのぼりて。賤しきものはいよ〱窮すると傳へ聞きて。ひとりつら〱おもふやう。いかなればあき人の心ばかり鬼々しきものにはある。あはれ民の父母たる身にしあらば。かく淺ましきことはあらせじを。悔しくも女に生れたることよとは歎きたり。これよりの後。われは必女の本になるべしとおもひおこしつゝ。とにかくに身をつゝしみ。おのれをうや〱しうすることはさらなり。女子はおもてこそ肝要なれとて。愛敬づきたらんやうにもしつ。又から文を讀まくほりせしに。父いたく禁めて。女子の博士ぶりたらんはわろし。草紙のみ見よといはれしかば。源氏物語。伊勢物語などを常に枕の友としつゝ。とし十六の時はじめて和文といふものを一ひらばかり綴りたりしに。父の平助これを村田春海に見せしかば。いたくめでよろこびて。その師なくてかくまでに綴れるは才女なりといひしとぞ。みづからは唯いせ物語を師として。綴りてけるに。譽められしことのけやけきに恥ぢて。このゝちは親にすら見せざりしかど。猶よくせんとおもひたり。手迹はをぢなりける人。瀧本樣の能書なりければ。その手を學びて。大かたは極めたれども。五十ちかきころ。右のかひなの痛むやまひにかゝりしより。物かくこともわかきときには劣り。目もかすむこと常になりたれば。細分のさうしは得よまずといへり。いづれも〱女の本にならんとほりせしに。日々のわざにして。何事まれ。人のうへに就きて。心のゆく所を考へ果さばやとおもふ心もつきにけり。かくて弟元輔に。四書の講釋といふことをせさせて。唯一とたび聞くことを得たり。これにより孔子聖人の教は。すべてかゝるすぢにこそと。いさゝかたのもしく思ひたり。佛のをしへもよくはしらねど。念ずれは必利益ありと思ひとりて。とし來觀音と不動を信じ奉りけり。これより先とし十六七なりしころ。仙臺侯の御まへにみやづかへにのぼせられし折。みやづかへはひとり勤なりと思ふこそよけれ。いくたりの同役ありとても。勤むることはわれ一人なりとおもはゞ。うしろやすかりけんと覺期せしかば。傍輩にも憎まれず。人のをこたりを咎むる心もなくして。

なるをもて。さのみはとて仙臺侯の醫師工藤某に贅して。そが養嗣にそしたりける。さばれ亦平助も實父の志をうけ嗣ぎて。圓頂長袖の身たらん事をば羞ぢしかば。侯に願ひ奉りて。俗體にて有りけれども。衛生の術にはおろかならず。思を蘭學にひそめて。發明する所も多かりしにぞ。その名も粗聞えたりける。かくて平助が子ども數人あり。長女は綾子所云(イハユル)眞葛是なり。次を工藤太郎といひて。才子なりと聞えしに。父に先たちて身まかりぬ。その次は女子。又其次も女子なり。これへもよすがもとめて。後いく程もなく世をはやうしたりとぞ。その次を工藤源四郎元輔とぞいひし。和漢の才子にて。詩をよくし。歌をさへよみたるに。方伎も亦庸ならず。惜しくは短命にして。子のなかりしかば。はつかに名跡の遺れりといふ。その次は女子にて。名を栲(タヘ)といひけり。こは越前の姫うへに。とし來みやづかへまつりしに。姫うへなくなり給ひしかば。比丘尼になりて瑞祥院と法號とり。今なほ鐵砲洲の邸内にあるべし。又その次も女子なりしを。ある醫師に妻せられ。こもまたはやく身まかりしとぞ。このはらから七たり。才も貌もとり／＼なりける。そが中に乙のかよのみやけの御まへにみやづかへにとて。まゐれるとき。兄の元輔が後のおこたりをいましめて。よくつとめよかし。ふた親のめぐみをおもふに。雨露のごとくひとしきをうけたる身の。心々にたがへるは。かの七くさてふ花のかはれるに似たりとて

おのがじゝにほふ秋野の七くさも
　つゆのめぐみはかはらざりけり

とよみてとらせたりしを。後に綾子の傳へ聞きて。よくもいさめたるものかな。さらばその七くさの花にたゝへんに。藤ばかまはかぐはしといへば。太郎よ。その次なる女かほよければ朝がほ。その次はをみなへし。をばなはそこにこそおはさめ。越の御まへなるは。萩。乙子はなでしことなるべし。葛ばなはめづるばかりのものならねども。葉のひろければ。はらからをさしおほふ子の上にしも似つかはしかるべくやと定めたりしより。物にはおや子を眞葛と唱へ。栲は萩と唱へ。祝髮の後は萩尼ともしるしたり。かゝるめで度同胞なりしに。五人は命長からで。文化のすゑには眞葛と。萩の尼(瑞祥院)のみぞのこりたり

じさへしらず。無下にかたくなゝりなどあり。もとは丹波の人にして。亭に住せしや。立圃門人なりしや。なほ考ふべし

乙酉十月兎園會　　　平安　角　鹿　桃　窠

芭蕉の謠曲に。近水樓臺先得月。向陽花木易爲春とす。朱人蘇麟が作にして。淸錄に出でたりと。孔雀樓筆記に見ゆ。また三井寺の謠曲に。月は山かせそしぐれに鳰の海といへるは。宗祇の發句なるよし。幽遠隨筆に載せたり

○眞葛のおうな

眞葛は才女なり。江戸の人工藤氏。名を綾子(アヤコ)といふ。性歌をよみ。和文をよくし。瀧本樣の手迹さへ拙からず。父は仙臺の俗醫士工藤（本姓源氏）平助。諱は平毋は管原氏とぞ聞えし。先祖は別所黨にて。播磨の野口の城主。長井四郎左衛門より出でたり。（長井の族を。加古右京といふ。幷に太閤傳天正七。三木合戰の條にみえたり）その子孫零落して。攝津の大坂にをり。數世の後。長井大庵に至れり。是則眞葛の祖(オホチ)平助の父なり。大庵は醫をもて業としたりしかば。江戸に到りて紀州公に仕へまつりぬ。そのこ子三人まで有りけるに。只武藝をのみ學ばせて。子ありとだにも聞えあげざりしかば。ある時公ちかく侍らして。汝が齡既に四十にあまりたらんに。子ども兩三人ありと聞きぬ。などて家督を願ひ申さぬぞと問はせ給ひしかば。大庵はあとさかり額づく程に。はふり落んとせし涙を拭ひて答へ申すやう。いと有りがたきまで。忝き御意を蒙り奉りし事。身にあまりて覺え候へども。かねがね申しあげし如く。先祖は一城のぬしで候ひしに。たづきの爲にかく長袖になりたるだにも。くちをしく候ものを。子どもをすら。親の如くにし候はんは。先祖へめいぼくなく思ひ候へば。不肖の某一代のみめし仕はせ給へかし。子どもはよしや涙々の飢に臨み候ふとも。武士にせまほしくこそ候へとまうしゝかば。公感じ思召して。さらば方伎は大庵一代たるべしと仰せ出だされて。跡をば武士になされたり。これにより。その長男は長井四郎右衛門と名のりたり。澁川流のやわらとりにて。師の允可を得たれども。生涯事にあはざりければ。名をしらるゝよしもなかりき。次を長井善助といひけり。こはさし箭の射手にて。いさゝか世に知られたり。この同胞は。紀州に仕へ奉りぬ。平助は三男

ひより。近世天正のころまでも。落武者どものヱサシへも野作地へも。のがれたるが多かるべし。かゝればそのともがらの。埋め置きたる錢にてもありけんかし。恨らくは。當時領主へ聞へあげざりしかば。その錢文をだも見るによしなし。今も猶その錢をもちたるものあらば。見まくほしきものにこそ候へとまうしゝかば。老侯やがてしかじ〳〵と松前へ傳へさせ給ひしとぞ。異日もし其錢を老侯へまゐらするものあらば。家嚴にもわかち賜ふべしと仰せられたりとばかりにして。久しうなれども。今に何ともうけ給はらぬは。あれどもなしと申して出ださゞる歟。實になきにてもあるべし。唐の黄巢が敗れて後。閩越の深山中に。あまたの錢を埋め置きしを。宋の時に至りて。樵夫ゆくりなく。その錢を得たり。只多くして。一人の力にかなはず。次の日。又取らんとて。その所に至るに。巨蛇ありて錢をみず。樵夫れそれて逃れかへりしといふ事所見あり。宛委餘篇なりしかと思へど暗記せず。抄錄したりと覺ゆれば。他日見出だすべしと。家嚴いへり。輿繼按ずるに。蝦夷は何にまれ。その寶とするものを。山野に埋め藏めて。妻子にも知らせず。そのものにはかに死する時は。子孫といふもの。是を取るによしなし。星霜を經て後にゆくりなく。他人の爲に掘り出ださることありといふ。アヒノマの古錢も。そのたぐひなるべし。又蝦夷地なるオコシリにても。今より九ヶ年ばかりさきつころ。文化十四年か古錢を掘り出だしゝといふ奇談あり。この他方コシリには。異聞も多かれど。おのれ連日持病の手腕搖動して。筆を把るに自在ならず。かばかりの短篇だもからくして綴りたり。こゝに漏せることゞもは。後の兎園に玄るすべし

文政八年陽月朔　琴嶺　瀧澤輿繼

乙酉初冬兎園　京　角鹿桃窠

明暦四年の卯本京童六卷は。中川喜雲の序ありて。其作なりと思ひしに。森許六の暦代滑稽傳に。雛屋立圃は。野々口氏なり。貞徳門人にして。撰集數多あり。畫を能くす。京童といふ名所記自畫なり。立圃發句ありとみえたり。しかれば喜雲作にして。畫と發句は立圃なるにや。京童の序に。そも〳〵やつかれは。丹波の國馬路といふ村にそだち。牛の角も

はよろこびて。その錢をいかにしつると問ふ。かしき桶にいれたるを。蓋してかしこにありと答ふ。いでやわれよく見んとて。納戸やうの處に至るに。その桶の上に。ちひさき蛇の蟠りてをり。しやつ憎し。などてこゝへは入りたるぞとて。きせるをもて拂ひ落しつゝ。終にうち殺して。背門へ棄てけり。其夜立之助は。件の錢をかぞへ果てゝ。よすにいふやう。求めて堀らばいくらも出づべき錢ならんには。畑はうたでも取るべき者を。等閑にしつるおろかさよ。翌はつとめて夙しるべをせよ。われゆきてあらん限り取りてみすべきぞと罵りたり。かゝりし程に。立之助は夜のあくるを待ちわびつゝ。まだき未明より妻を先に立たして。きのふの處へゆく〳〵。掘れども〳〵錢はひとつも出でざりければ。處まどひやしけんとて。いらちてよすを罵れども。正しくこゝなりといふに。きのふ掘りたる跡もあれば。さなるべくと思ひかへして。日ぐらし掘りに掘りたれば。土手の裾のみほり崩しつゝ。一錢だにも得ることなくて。手を空くしてかへりにけり。さばれきのふよすが獲たるは。めでたき古錢のみなれば。エサシ人の傳へ聞きて。價よく買ひぬといふ。村民時に批評していはく。よすが三貫の古錢を獲たるは。その寡慾なりけると。オカッテ婆々がとし來の慈善の陽報にてもあるべし。もしよすにのみ任しおかば。錢は猶日々に出づべきを。立之助が貪婪なる。靈蛇さへ撃殺せしかば。出づべき錢の出でずなりぬ。いと惜むべきことなりきと。いはぬものなんなかりける。彼の太山に貨あり。たからにこゝろなきもの。これを得ると。老子經に見えたるすら思ひ出でられて。ことわりにこそ聞えたれ。あるひはいふ。むかしアヒノマのほとりに。三千貫の錢を埋めたるものありしよし。故老の口碑に傳へたり。よすが堀出せしは。むかし人の埋めたる。三千貫文のうちなるべしといひしとぞ。三千貫といふよしは。いかなる故にかあらん。なほたづぬべし。かゝるものを堀り出ださば。私にものすることにはあらぬを。邊鄙村落の事なれば。領主へ訴へまうさゞりしかば。今茲やうやく其事聞へて。老侯もはじめて知ろしめされしとて。太田九吉といふ使をもて。家嚴に告げさせ給ひしとき。家嚴のいはく。むかし前九年後三年など聞へたる奥のたゝか

わたると聞き及べり。さてかくばかり大粒なる米をみし事はあらず。もしは慈恩傳にみえし大人米なるべきかといへり。按ずるに。慈恩傳にも。大人米は烏豆より大なりとみえたれば。いかゞあらん。高田與淸曰。駿河國に米官といふあり。いにしへ異國より渡りしとて。烏喰豆よりも大なる米を神體とせり。これ大人米なるべしといへり

○供大人米考

西域記八初曰。摩掲陀國周五千餘里。城少居人。邑多編戶。地沃壤。滋稼穡。有異稻種。其（其恐奇誤）粒麤大。香味殊越。光色特異。彼俗謂之供大人米

慈恩寺三藏傳三十三左大人米一斤。其米大於烏豆。作飯香鮮。餘米不及。唯摩掲陀國有此秔米。餘處更無。獨供國王及多聞大德。故號供大人米

續高僧傳四廿右曰。大人米一斤。大人米者。秔米也。大如烏豆。飯香百步。惟此國有。王及知法者預焉

新唐書二百廿一上十九左曰。摩掲陀國。一曰摩伽陀。本中天竺屬國。環五千里。土沃宜稼穡。有異稻。巨粒。號供大人米

○阿比廼麻村の瘞錢

松前領エサシの近鄕。アヒノマ村の民。立之助が母は。質樸慈善のものなり。人綽號（アダナ）してオカッテ婆々と呼びぬ。はじめオカッテ村より嫁し來れるをもつてなり。又立之助が妻の名を。よすといひけり。こも又朴素寡欲のものとぞ聞えし。かくて文政六年夏六月のころ。件のよすは。畑を打たんとて。ひとり田野（ノラ）に出でたるに。この日畑のめぐりなりける土手の下にて。思はず古錢を掘り出だしけり。勉めて掘りなばいくばくも出づべかりしを。素より寡慾のものなれば。初おもふやう。われはこの錢の爲にとて。こゝへ出りつるにあらず。さるをこの爲に畑の稼をおろかにすべきことかはとて。鍬にかゝれば取り。かゝらぬ共求むるこゝろはなかりけり。しかれどもとかくして三貫文あまりの古錢を獲たりしかば。そを簀にうちいれて。宿所へもて歸る程に。ちひさなる蛇のわがしりに跟（ツキ）て來るあり。はじめの程はみかへりながら追ひやらひたれども。猶あやにくに來るを。こゝろともせで。わが門に及べるころ。蛇は見えずなりぬ。かくてその黄昏に立之助も。よそよりかへり來にければ。よすはしかぐ\と告ぐるに。立之助

秋花之最美者。性畏寒喜肥。幷殘茶不結實。自霜降後。即當護其根。來年年便可分栽黄霉時扦亦可。廣州城西彌望皆種素馨。僞劉時美人葬此。至今花香。甚於他處

本草綱目　茉莉附錄

素馨時珍曰。素馨亦自西域移來。謂之耶悉茗花。即酉陽雑俎所載野悉蜜花也。枝幹裊娜葉似末利而小。其花細瘦四瓣。有黄白二色。采花壓油。澤頭其香滑也

二如亭群芳譜花部

[素馨] 一名那悉茗花。一名野悉蜜花。來自西域。枝幹裊娜。似茱裊而小。葉纖而綠。花四瓣細瘦。有黄白二色。須屏架扶起。不然不克自竪。雨中嫵態亦自媚人

○濃州仙女　　　輪　池

今年は雨多にて。濃州も前月十四日夜水災。長良川殊に溢決いたし。尾州領も堤三千間も溢決申し候。溺死も今日にて百人計も相分候へども。いづれも二百人からの儀と相聞候。總ては八百人とも。千人とも申候。可憐事ともいはん樣も無之候

大垣領にや。北美濃越前境にもや。根尾野村山中に仙女住居申候。初には齋藤道三の女子やと申し傳へ候所。さにはあらで。越前の朝倉が臣の妻。懐姙の身にて。朝倉沒落の時。山中へのがれ。女子を出產せし。その女子幽穴中にて成長し。今年は二百六十歳計。顏色は四十歳の人と相見え申候。髪はシュロの毛の如しと申候。寫眞も不遠來り可申存候。詳なる事は未所々水災にて。誰も〳〵途中の決口を恐れ。得往觀不申候也。奇な事に候

九月四日

右尾張公儒官秦鼎手簡なり

○鶴の稻　　　輪　池

この稻は十數年前に。奥州白河領に。鶴のくはへ來てをとしゝ稻穗なり。これをうゑて種とりて。こしにもつたはりしを。淺草關氏の園中にうゑてみのりしなり。穗の長さ九寸ばかり。粟粒凡八十五六七。粒の長さ三分五厘。廣さ一分二厘ほどあり。或人のもち米なりといひしほどに。やがてねりて試みしが。至りて淡味なり。これは朝鮮の種なるべしといひあへり

平田篤胤曰。藁よはくて用に堪へざれば。異國の產なる事明かなりといへり。西敎寺曰。鶴は朝鮮より

ちつどひて。ことのやうを尋ぬるに。答へていはく。其は京都油小路二條上る町にて。安井御門跡の家來。伊藤内膳が悴に安次郎といふものなり。先こゝはいづくぞと問ふ。こゝは江戸にて。淺草といふ處ぞと答ふるに。うち驚きて。頻りに涙を流しけり。かくてなほつぶさに尋ぬるに。當月十八日の朝四つ時比。嘉右衛門といふものと。同じく家僕庄兵衞といふものをぐして。愛宕山へ參詣しけるに。いたく暑き日なりければ。きぬを脱ぎて涼みたり。その時のきるものは。花色染の四つ花菱の紋つけたる帷子に。黒き絽の羽織大小の刀を帶びたりき。しかるにその時一人の老僧わがほとりへいで來て。おもしろきもの見せんに。とく來よかしといはれしかば。隨ひゆきぬとおえしのみ。其後の事をしらずといふ。いともあやしき事なれば。そのものゝはきたる足袋白木綿の足袋なりを。あたり近き足袋あき人等に見せて。こは京の足袋なり哉とたづねよ。京都の仕入にたがひなしといへり。その足袋にすこしも泥土のつかでありけるも。亦いぶかしきことなりき。江戸にてはかゝる事あれば。官府へ訴へ奉るが町法なれば。何と御沙汰あるべきか。その事もはかりがたし。江戸に知音のものなどのありもやするとたづねしに。しる人とては絶えてなし。ともかくも掟のまに〳〵はからひ給はれといふにより。町役人等談合して。身の皮を拵へつかはし。官府へ訴へまうしゝかば。當時御吟味の中。淺草溜へ御預けになりしとぞ。其後の事をしらず。いかゞなりけんかし

文政乙酉冬十月朔　文寶堂しるす

○素馨花

素馨花は遠からぬ世に。はじめて渡りしとて。いまだ世に稀なるを。この比手に入りたれば。になくめづるあまりに。本草のたぐひを書きうつしつゝ。かうがへ合するに。花鏡に。花郁李に似て。香艶これに過ぐといへる誌には合ひたれば。葉桑よりも大なりといふと。綱目および岸芳譜に。花四瓣といふにあはず。疑なきにあらざるなり

秘傳花鏡

素馨花

素馨花。一名那悉茗花。俗名玉芙蓉。本高一二三尺。葉大於桑而微臭。蟻喜聚其上。花似郁李。而香艶過之。

大工頭　中村半次

同頭取　西田清平

手木方　服部覺太夫

初めて石にほり當て候もの此兩人　石出吉太夫

大工頭

湯島天澤寺前松吉屋の裏　甚藏

本郷金介町吉兵衛

同所　吉藏

右一條は。加州邸へ日々入り込みたる傭夫のはなしなり

同年二月三日四日のころ。右同藩の家老村井又兵衛。小屋にて玄關前なる柱の下より。大工勘右衛門といふもの。石の地藏を掘り出だせり。同月初午の日。稻荷の社地へ堂を建立して納めけりとぞ。其圖左の如し

乙酉初冬朔　海棠庵記

長サ三尺許

二寸許

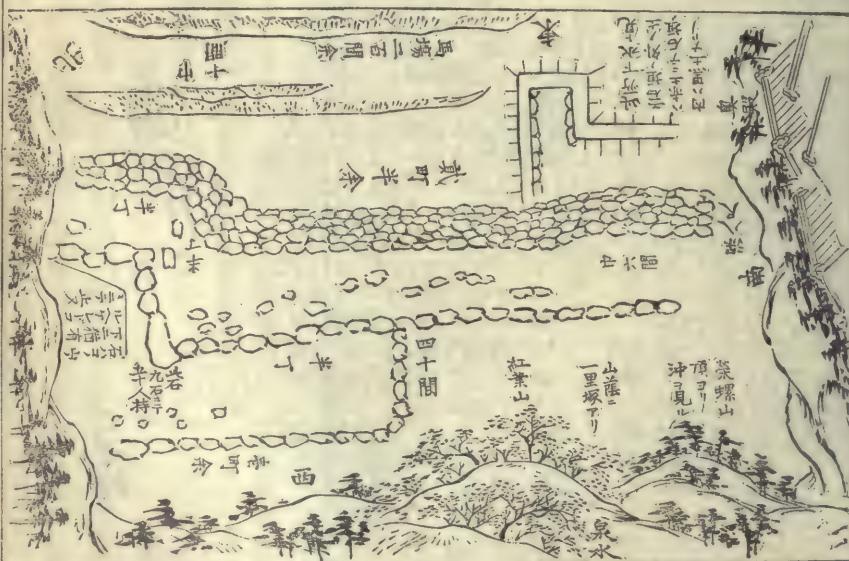
○人のあまくだりしといふ話

文化七年庚午の七月廿日の夜。淺草南馬道竹門のほとりへ。天上より廿五六歲の男。下帶もせず。赤裸にて降り來りて。たゝずみゐたり。町内のわかきもの。錢湯よりかへるさ。これを見て。いたく驚き。そのまゝそこへ倒れけり。かくて件のありさまを町役人等に告げしらせしかば。みないそがはしく來て見るに。そのものは死せるがごとし。やがて番屋へ舁き入れて介抱しつゝ。くすしをまねぎて見せけるに。脉は異なることもあらねど。いたくつかれたりと見ゆるに。しばらくやすらはせおくこそよからめといへば。みなうちまもりてをる程に。しばしありて件の男は。さめてかうべを擡げにければ。人みなかたへにう

半右衛門かたりき。おもふに。この村にこの石あるをもて。古來村の名におはせけん。猶尋ぬべし

○堀地得城壘

加州矦本鄉の上屋敷。梅の御殿といへるがありし跡も。此度御守殿の御庭となし給ふにより。植木うゑんとて。今茲文政八年乙酉二月二十八日。手の木方覺太夫吉太夫といふもの。土中六尺ばかり掘る程に。石垣に堀り當りにけり。これより大工棟梁甚藏。吉兵衛。吉藏といふもの。件の石を堀りとる事を請負に。同三月二日より。日毎に六十七十人。或は百人ばかりの人足をもて。七月廿日まで堀りたるに。石は皆丸石にて。面少しづゝつきてあり。その數凡三萬餘。堀り出だしけり。その石壹つに。銀貳匁五分づゝの請負賃にて。大小にかゝはらす。同屋敷内へとり片つけたりとぞ。何人の城郭なりしや尋ぬべし。解按するに。こはむかし豊島信盛が一族。丸塚某などの城廓にはあらぬかよりてその圖を下に出だしつ

加州普請奉行
關田十郎左衛門
松原牛兵衛

んはいかゞなり。去ながら。志のほどせちに思ひ給はゞ。我等がするごとくし給へ。佛間の中に小き穴あり。是へ志のほど落とし入れて。歸り給へ。さらば御手へ届く事もあるべし。よしやそのまゝむなしくなればとて。そこの志は佛こそ知り給ふらめ。志あつく。人々にあるじせられしむくいをせざらんは。犬猫にもおとれりと思ふは。人情のつねなどいひて。衣類。米麥等寄附するは。寺院に異なることなし。その術中に入りぬる人は。いかで理をわきまへ知らんや。實に淺ましきかなしむべき事。此ことに止れり

文政乙酉孟冬朔　山崎美成識

このおくら門徒は。はじめ延寶。天和のころ盛なりしが。露顯して。その繼は流刑せられたり。多賀潮古が。八丈島へながされしも。この故なりとぞ。かくて明和中また盛になりしを。ある人（天明中狂歌をもて。その名聞えたる町人なりとぞ。憚りてこゝに記さず）訴訟まうしゝかば。やがて罪なはせ給ひてより。絶えにたるはいとめでたし。近ごろ又富士講といふものあり。寛政中停止せられしが。今もなほあり。されば此の富士講の行者は。御廓內はさらなり。御門々々を過ぐることをゆるされずとぞ

○立石村の立石

下總國葛飾郡立石村（龜有村の近村なり）の元名主新右衛門が畑の中に。むかしより高さ壹尺計の丸き石一つあり。近き比（年月未詳）當時のあるじ新右衛門相はかりて。さまで根入りもあるべくも見えず。この石なければ。耕作に便りよし。掘り出だしのぞきなんとて。掘れども掘れども。思ひの外に根入り深くて。その根を見ず。とかくして日も暮れければ。翌又掘るべしとて。その日は止みぬ。翌日ゆきて見れば。掘りしほど石ははるかに引き入りて。壹尺ばかり出でゝあり。こは幸のことぞとて。そがまゝ埋みて歸りぬ。又その次の日ゆきて見れば。石はおのれと拔け出でゝ。地上にあらはるゝこと。元の如し。こゝにおいて。且驚き且あやしみ。その凡ならざるをしりて。やがて祠を石の上に建て。稻荷としてあがめまつれりといふ。（一說に。石のめぐりに只垣のみしてあり。祠を建てたるにはあらずとぞ）今も石を見んと乞ふ人あれば。見するとなん。右新右衛門は木母寺境內にをる。植木屋半右衛門が緣家にて。詳に聞きしとて。

南無あみだ佛。全く備り給ふなり。世に南無あみた佛とばかり唱ふるは。笑ふべきことなりなど。理りこまやかにいひきかせ。扨廣き座敷に。幾人も〳〵手をくみ。目をふさぎたすけ給へ〳〵といひて居るに。後を屏風にてかこひ。斯する程に。志の強きは唱ふる聲も。力を入れて見ゆるを。世話といふもの。後の方より兩脇へ手を入れ。抱きて藏へつれ行くなり。藏の内に佛檀ありて。前に燈明。線香。樒の花を備へたり。右の方に善兵衛冬にても單衣にすそばそをはき。左に行悦又稻葉屋などいふ宗徒居れり。緣とりたる敷ものゝ上に抱へ來れば。行者に善兵衛向ひ。目を開き給へといふ。始めて見れば。思ひもかけぬ座に直り居て。ことやうなるものども。あまた居るゆゑ。たれも〳〵も驚く。かくて善兵衛いふ樣。尊像あみた佛に向ひて。前のごとく目を閉ぢ。人の詞につき。たすけ給へ〳〵と唱ふべし。いか程くるしきことありとも。退く心あるべからずと云ひ敎へて。數多の人かはり〳〵。たすけ給へ〳〵と唱ふ。そのこゑに付きて唱ふるに。始はひきゝ。次第〳〵に高く唱ふる程に。助音するものは大勢にて。唱ふるものは一人なれば。苦しさいはんかたなし。又信ずるものは。少しもためらはず。はや〳〵死ばや。その心にてたゆまねば。やがて面もかはり。さながら死せるものゝ如し。女などは髮面にかゝりさけぶさま。信なくて見つれば。淺ましき事いはんかたなし。かの行者をとらへ。引きあふのけ。耳に口をあてゝ。助けたりといふ。その時の聲始めて耳に入り。はや往生の業成就したりと思ふにや。はつといふ聲を揚げて啼き出だす。傍なる智識もよくしたりとて悅びあへり。かくて人伴ひて藏を出で。靜なる所に臥さしめ介抱す。扨人々かたりあふは。今までは訪ひ申すべきも。禁しめなれば餘所にのみ見侍りしが。はやそのかた樣の人となりしとて。ものがたりす。近きあたりの人は。酒くみなどせり。すべてこれを終の日と定め。七々の法事一周忌三回より。つねに異なることなし。夫より後は强ひてまみゆることもなく。布旋などれくる煩ひもなし。一紙半錢にても人よりとり給ふ智識にあらずなどいへど。大きなる僞りにて。參詣の者施物香奠を奉り度由。かの引立どのにいへば。とく厭ひ給ふを。まのあたり奉り給は

凡三四十人も集りより。こぞり居る體。あやしくめづらかなり。辰の刻ばかりに。智識來り給ふなど。ひそかにいひあへり。かのまうけの座につくを見れば。若き男なり。こはいかなることにかと思ふに。いづれ〳〵此程同行衆の各いひ通して。佛法のことせちに求めおはする由をうけ給はりて。奇特に思ひ侍り。とくあひ奉るべきを。さはることありて。遅なはり侍るよしなど。ねんごろに云ふことの體。なめげならずうや〳〵し。是善兵衛なり。扨ていふやう。佛法の一大事は。法衣まとひし老僧の申し侍るべきを。在俗の年若き者のまみえ奉れば。あやしく思召べし。是には段々譯のあることなり。先蓮如上人の御歌とて「説く人の姿を見るな聞く人の。理り聞きて身の徳とせよ」と申す歌をかたり。八宗九宗の大意。神儒の極意などこそ申し聞せ候。愚昧のものは至極の法門と驚き入り候。今の一向宗とは。我慢愚癡にして。自力をとす。我傳ふる處は。蓮如上人より。江州金が森の道西へ傳へ。嫡々相承して。某に至れり。御文八十一通あり。其内肝要なるをよむべしとて。月の御文を讀む。坊主をいさしめの御文なれば。さきの詞に引き合せて京都樣をも譏り奉る趣明らかなり。又異かたにて座を設くるもきのふの如し。はや。きのふ説き勸められて。涙にくれ給ひたる故。けふは涙の落つることはやし。辰の刻より午の刻の頃までに。法談畢れば。男女殘りなく啼きさけぶ。外にかゝるためしあるべしやと思へり。夫より扇を持ち。地をうちて。「虎と見て石に立つ矢もあるものをといふ歌をいひ。命を捨つる程にといひしは。いまだ御志のしれ侍らざればなり。誠は命生きて歸らせ給ふとは難きなり。命なくなり給ふなれば。ゆめ〳〵くい給ふべからず。父に兄弟金銀何にても思ひ給ふことあらばとて。歸り給へりと。強くいひ。誓言を立てさす。是を懺悔（サンゲ）といへり。夫より五重の消息をよみ聞かせ。はや法談は止め。智識の前へ。ひとり〳〵出でゝ。手を組み合せて。鳩尾の下をしつかりとおさえ。目をふさぎ。扨いひ聞するは。南無といふはたすけ給へといふ詞なり。是をいく度も〳〵唱へ給へ。扨その程に。如來たより信心治定せしめ給ふ故。あみた佛のおのが身へ宿り給ふなり。是南無と頼む機と。阿彌陀佛の法と機法一體にて。

世話人承り。其勸めんと申者の行狀。又は宗旨その外。氣質まで。とくと承り。誤もあるまじく思ひ候へば。勸めさせ申候へども。至りて大事に不調法無之樣申含候。夫より晝夜不懈附まとひ。何につけても。深切に實情を盡し。神道信仰の人は。六根清淨の祓など神秘がましきことをほのめかせ。儒學など聞きはつりしものへは。顏子が所樂は何事ぞなど申す。そのもの丶心を引動し。又人の貴賤を擇まず。賤者のことに貴く存候譯は。我々が樣なる下賤のものを。御同行よ行者衆よと。歷々の人と同じく致候事。誠に利を貪る爲にもなく。外聞をおもふにてもなし。只此報恩には。金錢は力に及ばずなど。人を勸むべき手だてをめぐらし。敎訓し。又は佛法者なれば。人々は佛法信仰し給へども。いまだよき知識に逢ひ給はぬゆゑ。誠の事を聞き給はず。殘り多きことなりなど申し候故。扨は道德勝れし出家などに近付きて。人しれず貴き敎などを聽聞致すものと存じ。何卒か丶る智識あらば。我も近よりて法談にても。聽聞したきと思ふこ丶ろ出來。密に承り候へば。始はわざと隱す樣にもてなし。成程尊き師のおはしまし候。扨引合せ吳候樣に賴み候へば。何かに付き日を延し。爰彼この同行へしる人に致候て。法義物語りし。誠の道を求むるには。志淺くては至りがたく。不惜身命の心にて求め候はゞ。終には志願成就の時も可有之間。只心にたゆみなく。手足をはこび。家にありても專念し。我信ずる佛菩薩にも。誠の智識にあはせ給へと。一心に念じ給へなど申し聞え候ま丶。理に至極して。敎の通り怠りなく。念ずる內に。何卒片時もはやく智識の人に逢ひ申し度と。せちに賴み無餘儀ときは。京に至りて。信心の同行の招にて。上京し給ふの。或はみちのく。又はそこの田舍などゝ申し延して。待遠くおぼすべし。智識に逢ひ給ふまでにありしが。法談を先聞せ申すべしとて。高弟の辨說あるものにいはせ候。是を下催促と名付候なり。唯求むる心のたゆまぬ樣にとのみ。心はげませ。引立て候。是深き謀なり。近內智識江戶へ渡り給へば。案內申すべしとて。その日になれば。彼引立の同行伴ひて。同行の內とおぼしく。人あまたつどひたる處にゆきぬ。一間に檀ゑきて。經机など置きたるは。智識のおはするまうけなりと見ゆ。

〳〵しかるべきはとゞめつ。かの先生の名にきゝれおだたる人の。是をさへよしとおもふべければ。たゞすこしかきつけたるなり

文化九壬申年九月八日より。新吉原中の町より水道尻まで菊を植えたり。南求翁の詩歌あり

○明和元年秋　　成　章

南山不見東籬下。　西日將曛北里中。
整々斜々門種菊。　三々五々袖翻風。
五街燈月菊花芬。　黄白交枝曳絳裙。
中有飆纚長袖子。　宛如野鶴在雞群。
新買金蕖一萬根。　滿街佳色溢倡門。
藝家常慣爲之貴。　不似柴桑貧士村。

菊は花の隱逸なりと唐人の
　いひしはたはけみよ中の町

庫　法　門

往昔世に庫法門（俗に御庫門徒と云ふ）とて。あやしき宗旨ありしが。ある人その宗をいとあやしみて。彼法に入り。委しくその勸むるてだてを試み。いよ〳〵直ならぬ敎なりければ。官府へ訴訟し奉りしかば。やがてこれをいましめおきてさせ給へり。其訴へ申しゝ人の。其宗門の勸むるさまを詳に記し。庫裏法と題せし冊子あり。（又二樵閑話とて。かの庫法門のことを記したる。此二書にて。彼宗はつまびらかにしらるべし）其序に云。自レ古邪說惑レ人多矣。而庫裏法之行也。亡慮百年焉。人間無二一人知一レ之。則其險怪秘藏者可レ知也。此書一出邪徒屛息。冷膽無レ所レ施二其術一。其功不二亦偉一乎といへり。予このごろ何くれのわざしげくて。いまだ兎園の料を得ざりき。こゝに於て。嘗て庫裏法を鈔し藏めたりしを。寫しいでつ。徂徠翁の畸人十篇に題して云。遂俾下寫二一通一以爲中燃レ犀照レ怪之具上云と。予が此書においても亦いへり

敎主を善兵衛といふ。元來行德村の者にて。幼少より傳馬町中野屋と申す鼈甲細工致すものゝ方に奉公せしが。身持わしくて。彼家を追ひ出だされ。芝居役者の聲まねを申して。齒磨など商ひたり。其後此宗をひろむ。（按に。二樵用話に云。善兵衛法名は善生一人なり。外に源右衛門とて神田に在り。これを神田方といへり）傳來も四代迄は。姓名覺えたれど。其以前は名をしらずと云ふ。尤みな俗形にて。僧は無之よし。勸め方の次第は。江戸田舍ともに。右信仰のものどもの内にて。譬へば親族にても他人にても。此ものを勸め込み可申と心付候へば。事の序に世話人へはなし。

まし

乙酉菊秋朔

雙生合體追記

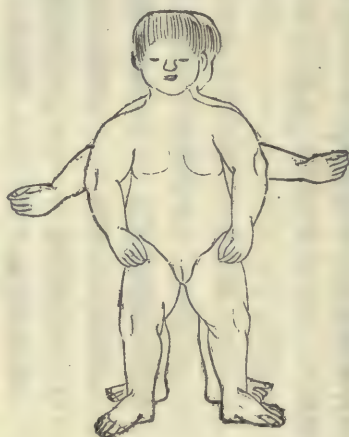
愚山人解識

文政八年乙酉二月十七日。本所柳島十軒川へ漂流したる異形嬰兒之圖

長一尺許。

産毛色濃く頬の邊まで生ひ。臍四つ股の眞中にあり。尤女にて陰門兩方にあり

予が伯父なるもの。本所清水橋にあり。この伯父に使はるゝ林右衛門といふ者。近所の事なれば。當時十軒川へゆきて見たるまゝをうつし來つるなり。この小兒の亡がらは。柳島のほとりなる何がし寺に葬りしといへり

著作堂主人のしるされし。雙生合體といさゝかも違はず。それは文化の酉のとし。是は文政酉の年。年はかはれど。一周の同支にあたりて。同物の異形あらはれしは。尤奇といふべし。よりてこゝに追記す

文寶堂しるす

文政酉九月兎園會　京　角鹿比豆流

徂徠翁のなるべしを難ぜしものに。ひなるべしといふあり。こはわが都人富士谷成章がかけるものにて。自序あり。近ごろなにはなる高芦屋が梓にせしより。やゝ世に行はるゝことにはなりにけり。さるをいかなる故にや。此本に成章が名をあらはさず。かつ其自序をもはぶけり。余終に世人の知らざらん事をしみて。其序文をこゝにかゝぐ

荻生先生のなるべしといふふみかゝれたるがありとは。はやく聞き置きたる故。このごろ人にかりてみるに。是なるべきはすくなく。非なるべきおほし。中について甚しきかぎりをかきいだして。非なるべしとなづく。おほかたかの先生初より我道に入りたゝれざりければ。只かたはしをうかゞひて。ひがこゝろをえられたる事どもにぞあるべき。たど〳〵しく難ずべき書のさまにもあらねば。本義どものなか

一足なるをもて來て。これ買ひ給はずやといひしかば。引きよしてよく見るに。げに一足なることは。寔に一足なるものから。その足らざる左の足は。皮肉の間にありとおぼしく。運動にしたがうて腹の皮うごもちたり。これ尫弱不具にして。眞の一足なるものならず。よりて鳥屋に示していはく。汝惠子の言を聞かずや。鷄有㆓三足㆒といへり。語は莊子に見えたるなり。蓋彼惠子がこゝろは。には鳥は二足なれども。その足を使ふもの。內に亦ひとつあり。故有㆓三足㆒といひにき。もしその理をもていはゞ。三足も尙足らず。宜しくもつて四足となすべし。いかにとなれば。凡手足の運動は。魂其用をなす每に。心まづ魂に傳へ。魂速に指揮して。その進止を自由にす。これによりて推すときは。には鳥の二足なるも。これをよく使ふもの。內にも亦ふたつなければ。足の用をなしがたし。かゝれば四足といふこそよけれ。惠子が言のごとくならば。足を動す魂のみありて。是を指揮する魂なきものなり。もしかくのごとくならば。進退その度を失うて。そのゆくところを知らざること。風に輙べる瓢におなじ。これに似たるは。狂人のみ。狂人の進退は神識衛りを失ふ故に。その動靜夢寐と異ならず。かくのごとくなるものは。二足にして三足なり。その魂位を喪ふ故のみ。この餘はすべて四足とすべし。われ三足の說をすら排斥すること既に久し。汝はこの鳥をもて一足なりといふめれど。われは則四足とす。夔をすら一足といふ謬說は。風俗通に辨じたり。豈一足の鳥あらんや。ゆきね〳〵と追ひたつれば。鳥あき人嘆じていはく。なべての鳥は二足なり。只この鳥のみ一足なるに。君は惠子の語を引きて。三足といひ。四足とす。わが一足といふよしは。目に觀るまゝをいへるなり。君が四足といふよしは。かたちを取らで。理を推すものか。その理の隱れて見えざること。なほこの鳥の一足の皮肉に籠りて出でぬがごとし。細人は理に疎かり。欲するものは只利のみ。君がいはゆるあし多かるも。われその足を取るよしなければ。魂のみありて。魂なきごとく。還らば妻子に虛走といはれん。足乎足乎。われ又赴くところあり。いとま申し候といひかけて。籠を抱きてまか出にけり。此あき人は。さるものか。野夫にも功者ありといは

くいへるなり。さりけれども。巖居水飲浮世に疎く。富貴を見ること糞土の如きは。是人情にあらずかし。窮達貧富を時に任して。生涯毀譽なく。命長きは。これ天命を保ずる大福長者といふべきのみ

文政八年長月朔　琴嶺興繼識

○雙生合體

文化十年癸酉の夏のはじめに。尾張の民銀之右衛門が妻。異形の子をうみにきといふ。當時同藩の陪臣山田生が。ある人におくりし消息にいはく

大番澤井圖書組松平傳右衛門知行所

尾州中島郡奥村

百姓　銀之右衛門

酉三十一歳

同人妻　き　を

酉二十一歳

右きを儀。當酉四月致出産候處。異體のもの出生。男子にて頭二つ。手足四本づゝ有之。軀(ムクロ)は一つに御座候。無事に致生育候。御勘定所へも申達。此間御見分御座候由。右之趣に御座候。實に異體の者にて。全く二子の別れ不申者と見え申候

右之通り承り珍敷事故申上候

六月六日　山田定之丞

この山田生は。尾州御家老石河土州の留守居なり。同年八月十一日。愚息興繼が一友人より借抄して見せけるを。雜記中にせめおきしかば。とう出てふたゝびこゝに錄しつ。こは攣胎(フタゴ)合體したるに疑ひなし。按ずるに。方書に果實の雙仁なるは毒あり。食ふべからずといへり。果子すらかくの如し。まいて人倫鳥獸の雙生合體なるものは。毒惡の氣の致すところ。不祥なることゝしるべきのみ。書紀仁德紀に云。飛驒國有二一人一曰二宿儺一。其爲レ人一體有二兩面一。各相背頂合無レ項。この宿儺は凶猛多力にして。朝命に背きしよし。六十五年の條下に見えたり。この他雙頭の子をうみしもの。和漢の書史に見る所。皆是攣兒の合體なるべし。又按ずるに。雙頭兩頭は蛇に多かり。蚖蛇はもとも毒あるもの。その毒惡の氣に感じつゝ。逐に胎を受けたること。これによりても曉り易かり

○一足の鷄

文化十一年の夏の比。飼鳥あきのふもの。鷄の雛の

おくべきか。貧乏神の數をそむかば」とよまれしを。ある人難じてこの歌一首自他なれば。語をなしがたし。おのれやれ云々といへる上の句は。自なり。貧乏神の云々といへる下の句は他にあらずやといはれしには。山人もいひときがたくて。怠狀を出だされたり。さればとて難ぜし人の賢にして。よみ人の拙きにもあらず。古人もかゝる謬あり。譬は芭蕉が發句に

梅さくらさぞわか衆かな女かな

といへるも。手にをはあはずにて。わか衆かな。女かなといへば難なし。又其角が發句に

この人數舟なればこそ涼みかな

といへるも。手にをはあはず。船なればこそ涼みなれといふべしと。家嚴いへり。皆是千慮の一失にて。英雄人を欺くにちかく。これらは家庭の餘聞なるを。筆のついでにしるすのみ

再いふ。鼠をも耗といへり。鼠は何にまれ嚙み損ふものなれば。破財の義を取りて。しか異名せしなるべし。洗存中が筆談に。慶曆中に（宋仁宗年號）有二一術士姓李一。多二巧思一。嘗木刻二一舞鐘馗一。高二三尺。右手持二鐵簡一。以二香餅一置二鐘馗左手中一。鼠緣レ手取レ食。則左手扼レ鼠。右手運レ簡斃レ之。以獻二荊王一云々。（見第七卷）この鐘馗のからくりに。鼠を敺ち斃させしも。鼠の事を耗といへば。彼唐逸史なる。虛耗の鬼によりどころあり

予つねに。人の家に至る每に。こゝろをつけてこれを見るに。その家の盛なるは。陽氣必室に充ち。又衰へたる家は。陰氣必室に充てり。夜分は燈火の明暗にても。その盛衰はしらるゝものなり。およそ人の盛衰は。時運に係るものながら。主人の心術行狀によらずといふこともなければ。業を勤めて奢ることなく。朝とく起きて陽氣を迎へ。埃を帚うて陰氣を逐らば。窮鬼も憑ることなかるべし。しかれども。眞の貧富を推すときは。あながち貴賤によるにしあらず。道をしるものれのづから貴く。足ることを知れば富めるが如し。かの愚福にして。蠢壽なるも。たからを積みて散らすことをしらず。老いて讓れる子のなきものは。臨終正念こゝろもとなし。もし顏淵原憲が志ありて。且貧しき家には入らんとしつる貧乏神も。鼻をつまみて。必逃げんと。家嚴はをり

まで來る程に。あやしき法師はいづちゆきけん。忽見えずなりしとぞ。いはれしことのしるしにや。かくて件の用人は。知行所へ赴きて。村役人等とかたらふに。たび／＼の借財なれば成り易からじと。おやぶみたるに。事立どころにとゝのひて。思ひしより物多くかり得てかへりけるとなん。この一條は。おなじ年六月の下つかた。蠣崎波響の話說なり。彼用人と親しきもの。波響にも亦疎からねば。渠より傳へ聞きしといへり。かの武家幷用人の姓名も定かにて。まさしき奇談なるよしなれども。世にはゞかりの關に任せて。そこらのくだりは具に記さず。猶遠からぬ程なれば。知りたる人もあらんかし

ちなみにいふ。世に福の神とて祭れるは。富貴を禱る爲なれば。貧乏神といふもあるべし。且福は禍の對。貧は富の偶なるを以て。神史に幸(サチ)の神あれば。又枉津日の神もあり。佛書にも吉祥天あれば。又黑暗天もあり。唐山にはこれを窮鬼といふ。東坡に送窮の詩あり。歳の十二月下旬。彼にて家の內を掃除して。新年を迎ふるを送窮といふ。この方の煤拂と相同じ。送窮の事は。荊楚歳時記。五雜俎等にみえたり。又耗といひ。旹いへるも。こゝにいふびんぼうがみと相同じ。耗は類書に載せたる。唐の逸史(この書傳はらず)に玄宗の夢にみえし。終南山の鐘馗の靈が劈き啖ひしといふ鬼の名なり。耗は即虛耗の義なり。よりて皇國にて。薰香(タキモノ)のにほひのうするに。耗の字を當てたるなり。耗は破財の鬼なるべし。又旹は牛に似たる獸にて。よく禍をなすといふ。黑旹の祟ありしは。宋元通鑑徽宗紀に見えたり。これ宋の衰ふる兆なりければ。耗も旹もびんぼうがみとよみて。その義に稱ふべしと。曩に家嚴のいはれし事あり。近世江戸牛天神の社のほとりに。貧乏神の禿倉(ホコラ)ありけり。こは何がしとかいひし御家人の。窮してせんかたなきまゝに祭れるなりといひ傳ふ。さるを何ものゝわざにやありけん。其神體を盜みとりて。禿倉のみ殘れりと。四方赤に見えたり。はじめこれを祭りしもの。敬して遠ざくる意ならんには。咎むべきことにもあらねど。貧乏神を盜みしは。いかなる心にかありけん。こは借金を質におくといふ諺と佳對なり笑ふべし。四方のあからにてれもひ出でたり。天明のころ。四方山人が。窮鬼の像賛に。「おのれやれ富貴になさで

く。又黒く。眼深くして。世にいふ鐵壺めきたるが。顔尖りていと瘦せたり。身には溷鼠染とかいふ袴の單衣のふりたるを。裾はさみして。頭には白菅の笠を戴き。頂には頭陀袋を掛けたり。跡につき先にたちてゆく程に。烟草の火などを借られしより。物いふこともしば〳〵なり。さて和僧は何處より。何所へ赴き給ふにかと問ふに。法師答へて。われは番町なる某の屋敷より。越谷へゆくと申す。用人聞きてふかくあやしみ。そはいはるゝことながら。われはその屋敷の用人なり。わが素より見しらぬ人の。わが屋敷にをることやはある。出家には似げなくも。そら言をいはるゝよと。爪彈をしてあざ笑へば。法師も亦あざ笑ひて。なでふ和どのをあざむくべき。和殿が吾を見しらぬなり。そも〳〵われを何とか見たる。われは世にいふ貧乏神なり。和殿は譜代のものならねば。むかしのことはしらぬなるべし。われは三代已前より。和殿の主の屋敷にをれり。さるにより。彼家には病みわづらふもの常にたえず。先代兩主は短命なりき。只是のみならず。よろづにつきて幸ひなく。貧窮既に世をかさねて。祿はあれどもなきが如し。かくても家の亡びざりしは。先祖の遺德によれるのみ。昔和殿の主家には。しか〴〵の事ありしなり。近ごろは又箇樣々々と。人にしらさぬみそか事を。見つるが如く說き示すに。用人いたく駭き怕れて。嘆息の外いらへも得せず。窮鬼はこれを見かへりて。さのみおそるゝことにはあらず。和殿の主の世に至りて。いよ〳〵貧窮至極したれども。その數やうやく竭きたれば。われは他所へ移るなり。今よりして和殿の主人は。さきくさおふる家となりて。世をかさねたる借財なども。皆返すべきよすがはいで來ん。ゆめよ疑ふべからずといふに。用人心おちゐて。しからば君はいづ方へ遷らせ給ふにやと問ふ。窮鬼答へて。さればとよ。わが行くところは遠くもあらず。和殿が主の近隣なる何がしの屋敷にをらん。その移轉の程。一兩日いさゝかのいとまあれば。越谷わたりに相識るものを訪はんとて。出で來たれども。翌は彼處に移るなり。見よ〳〵今より彼屋敷は。よろづの事にさちなくなりて。遂に貧窮至極せんこと。和殿の主の今茲まで。頭を擡ぬ如くになりてん。ゆめな洩しそとさゝやきつゝ。はや越谷

とおなじ所をめぐるのみなれば。人みなおそれおどろく中にも。亦興ある事におぼえて。こはけしからぬ物なり。いかにしてかくまで。同じ鼠の九つよくも揃ひけん。それすらあるに。尻と尻のはなれぬは。いかなる故ぞとの丶しりつ丶。とりはなしてにがしやらんか。うちも殺さんやなどいひどよみて。わりきやうのものをもて。兩三人左右より引きわけんとするに。得はなれず。こはおかしき物なりとて。つよく引きたて見れば。あやしむべし。此の鼠の尾と尾のからみあひたる事。あじろをくみたらん如くにて。つよく物せば。しり尾もぬけんずらんなどいふ人もあれば。そがま丶に置きたるを。ちかきわたりの人々聞き傳へつどひきて。扨もめづらしきものを見つるかな。われらに得させ給ひねとて。竹の先に引きかけて。處々もあるきて。なほ人に見せたる果は。川へや流しけん。土中にや埋みけん。その丶ちに又怪しきことの聞えなば。なほ又告げまゐらせんなどいひおこしたりと語りしよし。友人の傳聞にまかして。けふの兎園の數に入れ侍るになん

○佛像腹籠の古書

野州西鹿沼村（當時番町藪殿知行所なり）膳の畑の中に。古堂あり。其後堂に釋迦の木像あり。此みくらをぬきて見る時は。立どころに盲目となるといひ傳へて。誰もみくらを拔きて見るものなかりしに。蒲生伊三郎といへる儒者。その寺へ斷りて。佛像のみくらをぬきて。腹の内へ手を入れ。さぐり見るに一通の書あり。とり出だしひらき見れば

金　箔　　五百目

為再建令寄附之者也

元弘元年二月　　藤原少將

公　綱

とありしよし。野州栃木町渡邊某よりの文通に。いひおこしたれば。こ丶にしるす

文政乙酉長月朔　　文寶堂抄出

○窮　鬼

文政四年辛巳の夏のころ。番町なる四五百石ばかりの武家の用人。大かたならぬ主用にて。下總のかたはとりなる知行所へ赴くことありけり。江戸をたちて。ゆく／＼草加の宿のこなたより。一箇（ヒトリ）の法師あへり。見るに年の齡は四十あまりなるべく。面は青

くむねはなほおちつかず。かゝる時には。用心にしくことなしとて。火そくしてあなたかなたを捜索のいとまなさに。此事を記して。けふの兎園に充つるになん

乙酉九月朔　　海棠庵誌

○鼠の怪異

今茲文政乙酉四月。奥州伊達郡保原といふ所の大經師。松聲堂俗稱福井重吉俳名萬年の物語に。おのれ事は南部の産にて。此春親族の方より消息して。世にめづらしき事をしらせれこしたり。そは南部盛岡より。凡二十里許おくに。福岡といふ所にて。そこに青木平助といふ舊家あり。其家作のふるき事。五六百年前に造りなしたるが。そのまゝにて代々住居來れり。げに其家今やうの造りざまにあらず。いかにも由あるものゝ末ならんとおもはるゝとなり。しかるに。此春二月の比。あるじ兵助の夢に。棟の上に一塊のほのほ炎々ともゆと見て。驚きさめて。ふと仰ぎ見れば。こはそもいかにぞや。夢に見たるにつゆ違はず。おのれが寐たる上の棟に。火燃えゐたりければ。あわてふためき起き上り。手ばやくはしごをものして。手ごろなる器に水を入れ。水をそゝぎかけなどしければ。忽に火はきえて。させる事なし。あるじとゞろく胸はやゝしづまりしかども。いかなることにて。このあやしみのありけるにやと思へば。さらに心安からねど。かゝる事を家の内のものに告げしらさば。さこそものゝけたゝりならんと。いひのゝしりてうるさかるべし。何にまれ。今少し試みばやと。ひとりむねにをさむるものから。その曉までいもねられであかしゝとぞ。かくてあけの朝起き出でゝ。例のごとくうからうちよりて。朝いひたふべんとする折。かの宵にことありし棟とおぼしき處より。物のはたと落ちたり。思ひもかけぬ事なれば。女わらべなどはあれこさわぎて飛びのきつ。あるじは心にかゝるふしもあれば。さてこそとて。きとそのものを見とむるに。いと年ふりて。大きなる鼠のおなじ程なるが。その數九つ。尾と尻とつき合せて。わらふだの如くまろくなりつゝ。かたみに手あしをもがきて。かけりのがれんとするなりけり。しかるに。その鼠いかにもがきても。その尻と尻つながりてはなれず。只ひたすらにかけ出でんとするのみにて。くる〳〵

せ給ふと。世の人思へるは。あらぬことなり。是はうた上るりにおもしろく事添へて作りなどして。やがて誠のごとく成りしものなり。高雄は。やはり御たちにめしつかはれて。のち老女と成りて。老後跡をたて終はりしは。番士杉原重太夫。又新太夫と代々かはる／＼名のりて。祿玄米六百石 今目付役をつとむる重太夫は。その末なり。只野家近親なる故。ことのよしはしれり。杉原家にても。世の人あらぬことをまことしやかにとなふるはをかしと思ふべけれど。我こそ高尾が末なりと名のらんも。おもたゝしからねば。おしだまりて聞きながしをるとなり。これをいと珍らしきことゝおもひて。たづねおきけるに。この比。ある人のもとより。その法號葬地等の書付を著作堂の主にしめさんとて。こゝにのす。その記に曰。仙臺の人なにがし。遊女高雄が墓碑をすりてもちたるを。四谷にすめる醫生淺井春昌といふものゝうつしたりとて。島田某の見せたるをしるす

二代目　享保元丙申年

○　浄休院妙讃日晴大姉

三巴の紋十一月二十五日

杉原常之助

逆修　源範清義母

行年七十七歳

干時正德五年二月二十九日

右の碑。仙臺荒町法龍山佛眼寺に在り。仙臺の人のいふ。高尾實は國侯に從ひて。奥州にいたる。杉原常之助といふは。義子にて。名跡をたて給ひたるにいひ傳ふ。享保元年七十八歳にて天壽を終ふといふ綱宗朝臣は。正德元年六月四日卒去。享年七十六歳。仙臺瑞鳳寺に葬る。法號雄山全威見性院といふ

○奇　夢

いぬる八月二十五日の夜半に。日向稱名寺 淨土眞宗にて。廣國山と號す。余が菩提所なり といへるに。このごろはその邊處々に賊の入るよし。盗賊入りたり。人々心を付くる折なりしに。其夜納所の僧義山といふもの。いかゞしけん。子の刻過ぐるまでいねられずありしに。丑の時ばかりにぬるともしらずまどろみし夢に。賊四人おし入り。各手に白刃を提けて。義山をおし伏せ。刃をつきつけ。住持の居間に案内せよと責めらるゝと見ておどろきさめぬ。總身に流せし汗をぬぐひても。轟

さて天中記。唐逸史を引きたる。明望の夢に入りし終南山の進士鐘馗の外。唐に張鍾馗といふ有り。龍飾淨土文言。唐張鍾馗殺雞爲レ祭。忽見一人緋衣驅二群雞一來叫云。啄々四畔上啄兩目。流血受大痛苦とみゆ。これ王武後が將とは。おのづから別人にて。賤民とみえたり。さればまさしく馗の字を書きたる。六朝以來四人なれども。淨土文のごとき人も。しらざる賤民に。同名有る時は。猶幾人も有るべきなり。然るに。多く鐘馗は。名か字なるを。進士のみ鐘は姓。馗は名なるべし。たゞこれを異なりとす。要するに。六朝に鐘馗あるときく。唐にはじまるにあらずといひ。張說が畫。鐘馗を口する表開元に先立ちと有りといひて。鐘馗夢に入る事を疑ふ。又唐逸史世に傳はらざれば。諸儒疑ひて妄誕とす。按ずるに。宋の郭若虛が圖畫見聞志（佩文畫譜に引く）に。吳道士畫。鐘馗衣藍衫。鞹一足。眇一目。腰笏巾首而蓬髮。以二左手一捉レ鬼。以二右手一抉二其鬼一。自筆跡遒勁。實繪事之絶格也とみえ。正字通に。宋禁中舊有二吳道子一。所レ畫鐘馗。卷首唐人題云。明皇開元講武驪山還宮上不懌痁佐夢大鬼。制に鬼命吳道子畫之などみえたれば。明皇吳道子に畫かせられし事は實なり。又士上老君明皇の夢に入りて。直容の所在を告げしかば。夢眞容勅を碑に建てられしも。開元中の事なれば。邊士の夢に入りし類。推してしるべし

終葵。鐘馗同音通といへども。終葵と名付けしは。搥の義を用ひ。鐘葵と名付けしは。鐘は祭器の義。葵は百菜の長といふ義を用ひしもしるべからず。大鐘を姓となさば。馗は九逵の義にても有るべし然るを揚顧散人幽明に通ずる事あたはずして。たゞ目前の端直をいふにより。夢の跡を破して。鐘馗をも搥の義なりとす。實に然るべきや。予は荷擔しがたしといふ

〇遊女高雄

著作堂の珍藏にみちのくざらしといふ有り。それは陸奧の太守の醫師工藤平助が女の。同藩只野氏に嫁して。仙臺に在りしが筆記なり。その中に。高雄が事跡をしるしたり。世の妄說を正すにたれり。曰。昔の國主たか尾といふ遊女を。こがねにかへてくるわを出だし給ひて。御たちまでもめし入れられず。中す川（中す川は中洲川にて。則三派の事なり。後までも中洲さいふをもて知るべし）にて切りはふら

婦は夫を恐る。その恐るゝ所ある故に。行ふ所矩を踰えず。若矩を踰ゆることあれは。縱令は御家人以上は。國主に至るまでも。上よりこれを刑せられ。祠官。僧尼は寺社奉行これを刑し。農民は勘定奉行これを刑し。高家は町奉行これを刑す。倍臣及私地の農商も。各その本主領主よりこれを刑し懲すが故に。率土の濱。恣に法を犯すものなし。唯天子に至りては。恐るゝ所なく。矩を踰え。法を犯しても。纔にこれを諫むる者あるに止まる。然れば無道に陥り易し。故に妖薛を以て。これを恐れしめ。德を修めしむ。大戊の桑穀。高宗の雊雉以下皆然り。其章云。（天はおのづから天。人はお）天下不德なる時は。天變地妖頓に臻る。（のづから人云々。解云。是破道の說。君子の言にあらず。辨あり。そは別にしるすべし）又云。某星見るゝときは。兵喪あり。其星見るゝときは。水旱ありなどいふ類多端なり。其實を論せば。天は自天。人は自人。人の不德天に拘ることなく。天の異常また人に及ぶことなし。古書に天と稱する者は。皆物の自然にして。人力の爲すこと能はざる所を。天に托してこれをいふのみ。書の舜典に。惟時亮天功。大禹謨に。天降二之咎一。詩の大保に。天保二定爾一。節南山に。昊天降二此鞠訩一などいふ。以下六經に。天と稱するもの。みな然りといへり。見ん人其これをれもひねかし

文政八年秋九月朔　山崎美成識

戌月兎園　輪池

○鐘馗

鐘馗を辨せし書。升菴文集七。脩類草木日知錄。通雅。正字通等。皆人の知る所なり。淸の趙翼が陔餘叢考に至りて。詳悉せり。その要を取りて。こゝに記す。六朝古碣に。鐘馗二字あり。是唐人にあらずといへり。北史魏堯暄本。名鐘葵字辟邪（涌幢小品に。鐘を終に作る）おもふに。葵字傳へ訛る。提鬼之說。こゝにおこれりといふ。其餘。宗慤妹名鐘葵（沈括が筆談には。葵を馗に作る）魏文帝時。揚鐘葵又張衮之孫。白澤本名鐘葵。于勁亦字鐘葵。孝文時頓邱五李鐘葵（正字通には。馗に作る。然れども。喬鐘葵の類。悉皆馗に作りたれば信じがたし）北齊武成時。官右宮鐘葵。後主緯時慕容鐘葵。隋煬時喬鐘葵。隋宗室處綱之父名鐘葵。又別に。殷鐘葵あり。唐の時。王武後有將張鐘葵など。かぞへたてたれども。六朝古碣と。沈括筆談。二鐘馗の外は。みな葵の字を書きたれば。おのづから別なるが如し。

穴うるはし。穴うつくしと。我しらずよび出でられ。あはれかゝる折。相知る人もがな。呼ひとゞめて。倶にめづべきものをとをしまれけり。抑。此雲何地行くらん。いでその終る所まで見とゞけばやと。打ちまもりをりしに。纔二刻斗におのづからうすくなりもて行きて。はては只一村の白雲となりて。其所をも去らず。消え失せにけり。彼比丘に此雲はじめ何方より來りしぞと問へば。比丘の云。此雲外より出でこしにはあらざるべし。己が見つけし時も即こゝにありたりといへり。いかにも珍敷ことなれば。必外にても此雲を見し人あらんと思ひて。後人々に問ひものすれど。さることありしといふ人はふつになかりしとて。日本後紀などを引用せり。しかれども。予をもてこれを見るときは。我國に慶雲あらはるゝことは。文武天皇大寶四年五月。西樓上慶雲見云々。改ㇾ元爲二慶雲元年一と。史に見えたるぞ始なるべき。これより後もしば〳〵なり。北魏成帝興光元年二月。有ㇾ雲五色所ㇾ謂景雲太平之應なり。また吾邦。稱德天皇天平神護二年八月。改二元神護慶雲一。詔に甚奇久異爾麗伎雲七色交天立登とも見えたり。北海子も又五彩の雲をもて慶雲とせり。しかはあれど。漢書天文志及び。延喜式治部省祥瑞の條にいへるものを按ずるに。若ㇾ煙非ㇾ煙。若ㇾ雲非ㇾ雲。これによる時は。五色のいろどりある雲は。けだし慶雲にあらざるに似たり。又この比。人その夜ごとに。彗星のあらはるゝよしいひもて傳へ。そは凶年のさがにやなどいへり。按ずるに。彗星の名始めて春秋に見えたり。しかれどもその狀をいはず。其狀を記したるは。甘氏が星經などや始ならん。其後相承けて妖星とし。これが應をいへるもの。漢儒に至りて尤甚しといふべし。苟くも年をわたりて。これが應をもとめば必應ぜざる者なからんや。牽强といひつべし。今その一二をいはゞ。漢士の事は。歷史中敬々雲。しかれども五代史司天考に云。蓋聖人不ㇾ絶二天於人一。亦不ㇾ以ㇾ天參ㇾ人。絶二天於人一。則士道廢。以ㇾ天口ㇾ人。則人事惑。故常存而不ㇾ究也といへり。知言といふべし。荷田氏も又云。蓋古來天變地妖を以て。禍の前兆とするは。人君を恐れしめん爲なり。凡人恐るゝ所なければ。其行ふ所矩を踰ゆるに至る。縱令は臣は君を恐れ。子は父を恐れ。弟は兄を恐れ。

て上らず。依りて彼商人に。所のもの此明神の望み給ふ由を告げて。前の川にて洗はせ。瓶へなげ入れさせて通すに。荷はかろくなりぬ。鹽を荷ふものもかくの如し。年によりて瓜茄子多く。鹽の少き時も有りといへども。鹽かげんいつも替ることなし。誠に奇怪なるべしと云ふ。世の諺に。藪にも香の物とは。是より云ひ初めたり。扨此香の物は。毎年六月四日。此瓶の口を明け。五日の朝熱田大明神の神膳に具へて。五日の朝御膳過ぎて。尾州公へも獻じ。尾州公より江戸將軍家へ獻上のよしなり。此香の物の在所は。海道郡蜂須賀村と云ふ。香の物の瓜茄子の多少によらず。鹽壹斗有之。瓜茄子千斗有りても。瓜茄子百貳百位に。鹽五合三合にても。其風味鹽かげんは。少しも替らず。是亦奇事といふべし

文政八乙酉九月朔　　中井乾齋認

解云。この藪の香の物の事は。享和中。予目撃して。蓑笠雨談に誌したり。この説と頗異なり。宜しく參考すべし

○慶雲　彗星

吾友外岡北海。ひと日予を訪ひ來りていへらく。おのれさきの日。ゆくりなく慶雲を見ることを得たり。そのよしいさゝかしるしたりとて。予に示されし筆記に。去る八月五日午の一刻ばかりに。小石川傳通院の境内を通りかゝりしに。稲荷の祠前華表の前に。比丘二三人集まりて。大空を打ちながめゐたり。已近よりて何事のありて。空をばながめ居るぞと問へば。比丘の云ふ。あれ見給へ。五色の雲の棚引なり。昔もの語にのみ聞きつるを。今見ることの有りがたさよ。今少し早くおはさば。色こき所を見給はんものを。さりながら又も色こくなり侍らんかなど。とり〴〵いへば。おのれ何をいふとあやしみつゝ。木の間より伺ひ見れば。げに比丘のいふ如く。よのつねならぬ一村の白雲。日輪の傍に。長さ十丈あまり。廣さ四五丈もあらんずらんとおぼしきが。薄く棚引きたるを。日光に映じて。たちまち紅をときて流すがごとく。其麗しきことといはんかたなし。然るに。その紅雲の裏より。紫黄青綠など。えもいはぬ麗しき色幷起りて。譬はゞ鮑貝の彩を麗しくなしたらん如くにて。見るが内に淡く濃く。出沒變化なすことかぎりもなく。目ざましなどいふも中々おろかなり。

蓮葉凡百五六十葉。一同に上り。尤中には落ち候も有之候へ共。多分虚空へ上り。二三寸迄は相見え候へ共。其末は不相見。其中より白鶴壹羽下り來り。輪を懸け虚空へ上り。小鳥位迄は相見へ。末は一向相見え不申候。又程なく。東方より白鶴三羽來り。先の如く同所にて。是亦輪を懸。貳羽は東方へ飛去り。壹羽は虚空へ上り申候。餘り不思議之義に奉存候に付。此段御注進申上候以上

文政八酉七月六日　鷲田村組頭

藤兵衛印

同斷

彦六印

庄屋

助六印

木村甚助様

富田東作様

塚本平左衛門様

予此奇事を以て出羽の門人佐藤惟德に語る。惟德云。我國も亦一奇事あり。凡べて人の死する時。十に七八たましひ出で丶。或は故人を尋ね。又は親戚を問ひき。何もなくして死す。その來る時。只默して座するのみ。是と語らんとするに。更に答なし。又死後にして出づるも。亦これありといへども。多くは是生前の事なり。生前これを魄といひ。死後是を幽靈といふ。是又致知格物の至らざる所なり。予何の故をしらず。敢問。何の謂ぞや。雖レ然。人により性により。幽靈と魄とにあふ人あり。不逢の人ありと。惟德語りき。予亦未この二事に於て。敢て説あることなし。姑く疑を存して。以て後の君子を待と云ふ

〇藪に香の物の世諺

尾州公御領分尾張名古屋を過ぎ。琵琶の市といふ處。毎朝青物市立ち。名古屋の町へ出づる橋あり。琵琶橋と云ふ。是より少し行きて。津島海道土手を右へ壹丁半程に。逢手の森。反魂香の森あり。貳ヶ處ともに名所なり。此處を左りへ下りて。角に藪あり。此藪の中に。妙心山正法寺といふ曹洞宗の禪院あり。熱田明神の幽跡の寺と云ふ。此藪の中にあり。此處に四石入の瓶あり。然るに。此瓶地中に埋り。此中に瓜茄子二つ三つづ丶前の川にて洗ひ。彼瓶に入れて通る。瓜茄子荷ふもの。直に通る時は。荷重くし

その身は間近かくつきそふて。下谷をさして出でゆきけり。かくて亥中の比おひに。その駕籠のものかへり來て。かの越後屋何がしがよろこびの口状を。町役人等に傳へしとぞ

予は間近きわたりにて。これらの事のありとしも。絶えてしるよしなかりしに。そのあけの朝。河越屋政八といふもの。柴の戸に音づれて。緊要の一條を告げまゐらせんとて。詣來しなり。例の虛病をおこさずに。たいめんを允し給へといふ。こゝろ得がたく思ひながら。書齋より出でゝよしを問ふに。政八がいはく。きのふいとめづらかにも。あはれなる事の候ひき。その故は云々と。前條を擧けて説くこと一遍。やつがれ今茲は年番にて。しかもきのふは當番なりき。これにより彼婆々しけに素生を問ひしも。又源藏に問對せしも。大かたはやつがれのみ。かゝればこのくだりに就きて。かくつまびらかなるよしを誰か亦翁に告ぐべき。又おきなゝらずして誰かよく後に傳へん。願ふは賛して給ひねといふ。予感嘆のあまり。敢ていなまず。しばしうち案じて

面壁にあらで九年の旅ごろも
子を思ふ外に一物もなし

又おなじこゝろを

死なであひぬ片山の手の飯田町に
ふせる旅人あはれ親と子

このふた歌をたにさくに書きつけてとらせしかば。政八は受けよろこびて。いとまごひしてまかり出でにけり。是より後も。日に月になほとし毎に。事のしげくていまだ筆には載せざりしを。けふのまとゐの料にとて。聞きつるまゝにしるすのみ

文政乙酉秋八月朔賀二澂南先生誕辰良節一。兼披二講於兎園社友諸君子席末一

玄同陳人解撰

○蓮葉虛空に翻るの異

我君領内三州渥美郡鷲田村にて。蓮葉を乾しおきたりしに。故なく虛空に翻り。且白鶴一隻渉降せしにより。村人等が訴文の寫

當村御百姓三右衛門磯八と申す者。菱池にて六月十一日蓮葉を取り。村方字瓦野と申す處へ干し置き候處。翌十二日朝四時比より。壹葉貳葉づゝ虛空へ上り。其日晴天にて。風もなく候處。晝九時比に相成。

中間奉公しつるのみ。この春は下谷なる戸田和泉守殿にをり。けふしも守はいさゝけながら恙あらせ給ふにより。翌の日の當御番を同僚がたにたのませ給ふ御狀使ひをうけ給はりて。其處へとていそぐ黃昏どき。こゝの中坂を過りし折。倒れし母をわが母ぞとはしらずながらもかいま見しは。得がたかるべき幸なりき。その時。母の足いたみて。彼處に倒れ臥さゞりせば。よしや途にてゆきあふとも。面わすれせしことなれば。迭にしるよしなからんを。事みな不思議に候とて。感涙を流しつゝ。よろこびを述べしかば。町役人等うち聞きて。しからば今宵は此處に。老母を留めおきたりとも。けしうはあらぬ事ながら。母御のこゝろを推しはかるに。和殿をはなち遣るべくもあらず。引きとらんといふ宿あらば。町內より駕籠を出だして。只今送り遣すべしといふに。源藏歡びて。下谷久右衛門町なる番組宿屋。越後屋何がしといふものは。やつがれが親品なり。この處まで送らし給はゞいよ／＼幸ならんといふ。そも／＼この源藏は。世にいふ宿屋ものにして。渡り中間なりといへども。物のいひざまさかしげにて。身の皮もきたなげならず。倘巳の時ばかりなる松坂縞の布子を着て。胴かねしたる脇挿を帶びたり。扨しか／＼としげに告ぐるに。引きおちらされし蔽襤裂などを。いとをしくや思ひけん。やよ源藏よ物とり遣すな。包めく／＼といひしかど。源藏は恥ぢらひてや。蔽襤をば包みかねたれば。町役人等はさこそと猜して。定番人に手傳はせ。物おちもなく包まして。かの寺手形と錢八百を源藏に渡しけり。その辭し去らんとせしときに。既に齡のかたぶきたる。或は子共を旅にあらせて。親のあはれを知りたりける。町役人等一兩輩。又源藏を招きよせて。いふまではあらねども。九ヶ年心力を錯されし。母御の辛苦を思ひくみて。孝養をな怠り給ひそ。渡り中間ならずとも。さまで歷がたき世の中ならんや。大都會の忝さは。小商をしたりとも。只一はしらの母親を養ふよすがなからずやは。勉め給へと諭せしかば。源藏は感謝に堪へず。しかこゝろ得て候なり。故あることゝはいひながら。十三ヶ年ふる里へ。おとづれもせず。わが母を見わすれしまでになりにたる。面目もなく候といらへて。やがて母親を扶けて。駕籠に乘し移らせ。

の中間は。ともし火をさし向けて。とさまかうさまうち見つゝ。わが母に似たれども。年あまた經し事なるに。いたく老衰したるをもて。定かにはいひがたしといふ。町役人等これを聞きて。しかりとも渠みづから奥州白川中の町宮大工十藏が後家。名はしげと告げたりしことの由の分明なるに。をさなき時に別れても。親の名までを忘れはせじ。忘れやしつると詰められて。さん候。その名に違ひなけれども。世には又同名異人のなきにしも候はず。又いつはりて利をはかるものしもなしとすべからず。身につけたりしそが中に。證據となるべき物などの候はずやと問ひかへされて。町役人等諾なひつゝ。かの寺手形をひらきて見すれば。見つゝ小膝をはたと打ちて。わろくも疑ひつるものかな。わが母に相違候はずといふを。しげは聞きあへず。しからばそなたは源藏か。源藏にこそ候なりと。名のればしげは跂まつはりて。抱きつきつゝ涙ぐみ。やよ源藏よ。和郎に逢ひたい〳〵と思ふばかりに。九ヶ年このかた。日本國中うち巡り。いくそばくその艱難苦勞も願ひかなふて。うつせみの息のうちなる今宵いま遭ひ見ることの歡しさよ。やよ源藏よ。顔を見せよ。そなたはをさなかりし時。左の目ぶちに腫物いで來し。その折に。眼の中へ針二本まで打たせし事あり。その針のあと今もあらん。こちらをむきて見せずやと口説たてつゝ。又把りしめて。涙は雨とふりそゝぐ。その歡はなか〳〵に。譬ふるに物なかるべし。天地ををがみ。町役人等をひとり〳〵にふしをがむ。慈母の哀歡無量の恩愛。今さら膽に銘じけん。源藏もはふり落つる涙を袖に堰きかぬれば。人みな泣かぬはなかりけり。此ときしげが有りさまは。和漢巨筆の稗官なりとも。寫しとらん事易かるべからず。又俳優の上手なるも。よくまねんこと難かるべしと。後にぞ人の評しける。かくて源藏は町役人等にうちむかひて。思ひがけなく。母親に名のりあひ候ひしは。御町内のみかげによれば。よろこび言葉に盡しがたし。やつがれは十二歳のときより。親はらからに引きわかれ。ふる里白川に程遠からぬ某村にて。人となりしが。十八歳のとき。故ありて親にも告げず。その地を去りて。江戸に足をとゞめしより。今茲は三十歳になりぬ。手かきもの讀むこともしらねば。

峯をうち遶り。よんべは両郷（フタゴ）の渡りとかいふ。川邊のあなたなる里に宿とりつ。さてけふ江戸に來つるなり。かゝりし程に。あの御坂（ミサカ）のほとりにて。俄に足の痛み出でゝ。一歩も運ばしがたければ。思はず倒れ侍りきといふ

按ずるに。ふたごの渡りは。江戸を距ること西のかた四里許にあり。この地は甲州街道にあらず。大山道なり。かゝれば甲斐より相摸路を巡りて。江戸へ來つる成るべし

町役人等よしを聞きて。心地はいかにとたづぬるに。足の疾るのみにして。こゝちはつねにかはらずと答ふ。江戸にしる人ありやと問へば。いな知る人とては侍らざれど。八町堀なる松平越中守さまは。國屋敷にておはしますなり。（ささび言に。故郷の領主を國屋敷と唱ふ）かしこへ送らせ給へといふ。これにより先その腰につけたりし風爐敷包を解かして見るに。九ヶ年已前ふる里をたち出づるとき。十藏しげ等が菩提所なる。何がし寺（寺の名は忘れたり）より書きてあたへし。通り手形とかいふ證文一通あり。濕風（シフキ）塵埃（ホコリ）に汚れけん。紙中は茶をもて染めたる如く。いとふるびたりけれども。その印章は疑ふべくもあらず。この他錢八百文と。布の蔽襪（ボロ）のみありけり。そのいふよしと寺手形と。既に吻合するをもて。番屋の奥の間に臥さしめて。藥をあたへ。且つ夕餉をたうべさせなどする程に。日は暮れて。酉の初刻も過ぎたるころ。武家の中間とおぼしき男。自身番屋におとなひて。やつがれは嚮に主用の使にたちて。こゝの中坂を過りしとき。ゆきたふれたる老女を見たり。こゝろにかゝるよしもあれば。つばらに問はまほしかりしかど。火急の使なるをもて。時の後れんことのをしくて。思ひながらに打ちすぎにき。今そのかへるさなるにより。中坂にて人に問ひしに。番屋へ扶け入られて。こゝにありとぞいはれたる。そのおうなを見せ給へといふ。このときしげはまどろみたるを。町役人等呼び覺まして。そなたのゆかりの人にやあらん。見まほしとて只今來にたり。たいめんせよかしといふ程に。しげは急ち起き直りて。そはわが子源藏ならずや。やよそなたは源藏か。源藏にあらずやと。せはしく問ひつゝ跂よるを。町役人等推しとゞめて。さのみせきては事もわからず。心をしづめて問へといふ。そのとき件

たり。贄はちなみにしるすのみ。嗚呼。風流の藪澤にも。かゝる忠信孝女あり。いと憐むべきものになん

文政八年乙酉八朔　琴嶺識

○根わけの後の母子草 是編頗以二傳奇筆意一。雖レ然言則皆實事也

文政四年辛巳の春二月晦日の黄昏ごろ。元飯田町の中坂にゆきたふれたるおうな老女ありとて。これを觀るもの堵の如し。この日。自身番屋につどひゐたる當番の町役人等。定番人を遣して。その體たらくを見せけるに。旅行ものとおぼしくて。無下に老皺び(オイサラバ)たるが。長途に疲れ。足痛みて一歩も運ばしがたしといふなり。これによりて。町かゝえのものに脊負して。やがて番屋に扶け入れつゝ。事のやうを尋ぬれば。答へていはく。婆々は奥州白川の城下。中の町なる宮大工十藏が後家にして。名をしげと呼ばるゝもの。今茲は七十一歳になりぬ。良人十藏が世を去りて後。十三ヶ年已前文化六年の春。わが子源藏といふもの。逐電してゆくへもしらせず。人傳に聞ば。江戸にありといひにき。家にはなき人の前妻(モトツマ)の子どもはあれど。勇魚取。うみにあらねば孝ならず。日毎の口舌いぶせければ。世にある甲斐もなき身なり。いかでわが子の在處をたづねて。あはゞやと思ひさだめしは。九ヶ年已前の事なりき。かくて文化十年の春のころ。みちのくよりあくがれ來て。江戸に留まること半年ばかり。四里四方の外近郷まで。月毎日毎にたづねしかども。夢にだもあふよしのなければ。さては江戸にはあらざるならんと。やうやくに思ひかへして。いよ〳〵廻國の志念を堅うし。東山西國いへばさらなり。南海。北陸おちもなく。凡六十六箇國の靈山靈地を巡禮して。過去にはなき人の菩提の爲。現在には命のうちにわが子に逢りあはしめ給へと。念ずる外にわざもなく。乞食してゆく旅なれば。人の情にあふ日は稀にて。露に宿り風に梳り。あるときはあり磯のなみ風に吹きすさまれて。其終夜夢もむすばず。又或ときは深山路の雪に降りとぢられて。つく竹杖の節も届かず。百折千磨の艱苦を歷たれど。是までは一とたびも病みわづらひしことはなく。旅ねすること九年に及べり。今は既に巡り盡して。廻國すべきかたもなければ。ふたゝび江戸をこゝろざして。岐岨路をくだり。甲斐が

びになりにたり。はじめかの鍋かけにて。おん身にあひしは。十四のときにて。本の名をそよといへり。あぢきなき世にながらへて。はや十八になり侍り。こよひは父の命日なれば。身あがりといふことをして。客をむかへずこもりゐの。こゝろばかりのそなへ物。廻向をしゐる折もをり。思ひかけなく。恩ある君に。めぐりあひしはなき親の。こゝろざしにて侍るめりと。いひつゝよゝと泣きにけり。郷右衛門は聞く毎に。感歎せずといふことなく。わがうへさへに名のりしらしつ。そがまゝに立ちわかれしとぞ。かくて件の郷右衛門は。文化のはじめより定府になりて。江戸の邸にをり。おなじき二年丙寅の大火のころ。清花は年季闋ちて。そが親品なる河崎屋平八といふものゝ宿所にゐたり。かの平八は乳母奉公の口入とかいふことを世わたりにすなるものにて。郷右衛門が仕へまつる邸中にも。已前よりいで入をするよしあれば。この手より清花が消息を届け來て。年季の闋ちたるよしを告けられ。ながれの里をいでしかど。なほうき草の根を絶えて。よるべの岸も侍らずなんど。いとゞあはれに聞ゑしかば。うちも措かれず。訊ひ慰めしは。只一たびの事にして。そのゝちはいかになりけん。よくも知らずと聞えたり。そがあひかたのあそびならねば。疑はれじとの用心なるべし

そも〳〵この一條は。文化十三年丙子の秋。閏八月廿五日。かの藩の醫師櫻井立安といひしもの。老君の夜詰に侍りて。しか〴〵と申しゝに。さるすぢをも捨て給はねば。その孝信を感嘆のあまり。近習の人々にこゝろ得させて。次の日山本郷右衛門を遠侍まで召しのぼして。透見をしつゝそのよしを問ひたゞさし給ひしかば。郷右衛門はおそる〳〵有りつるまゝにまうしゝとぞ。その折の聞書のことさら奇談なるべしとて。わが父に見せ給ひしを。おのれ乞ひうけて。をさめおきにき。當時家嚴の贊歌あり。冊子のしりに書かれたり。可否をばしらず。贊に云

離火宅墜火坑　鍋掛猶如熱鬧場
一潮恩一汐信　圓鰕此苦海慈航

丸海老やつるにもにたり鍋掛の
ふたゝびあひぬすくはれし身は

本書は。只その意をうけて。及ばずながら文を易へ

果子を積みて。郷右衛門かほとりにもて來つ。こは清花さまよりまゐらせ給ふなりといふ。郷右衛門はこゝろを得ず。われはさる覺なし。人たがへならんといふを。わかいもの推しかへして。いな人たがへには候はず。口上もこそ候へ。おん目にかゝり度願ひ侍り。こなたへこそといはれしといふ。とさまかうさまおもへども。いといぶかしき事なれば。果子はそがまゝにして引かれて。その部屋にゆきて見るに。素より見しれるあそびにあらず。又清花は郷右衛門をうち見つるより。ふし沈みて。しのびねに泣くばかりなり。しばらくして頭を擡け。絶えて久しくなりにたる。君にはいよ／＼恙もあらで。おん目にかゝるうれしさよといふ。郷右衛門はなほこゝろを得ず。抑おん身は何人の娘にてありけるやらん。見わすれたるか。しらずと答ふ。その時きよ花は。楊枝挿の嚢をとり出でゝ。わらはを見わすれ給ふとも。是をばおぼえ給はずやと問はれても。またこゝろもつかず。これも知らずと答へけり。そのとき清花聲をひそめて。いぬるとし鍋掛にて。御合力に預りし。そのをりに賜はりし楊枝挿にて侍るよし。その折からは箇樣々々如此々々と說き示すを。郷右衛門は聞きも訖らず。さてはとばかりはじめて曉りて。うち驚くこと大かたならず。流れの里に沈みたるはじめをはりをたづぬるに。清花は又うち泣きて。君にはつゝむべうもあらず。わがふる鄕は越後なる高田にて侍るなる。ふるさとにありしとき。母は長き病着にて。世になき人となりしころ。早損。水損何くれとなく。わろき祥のみ打ちつゞきたる世をあぢきなく思ひぬる父は。歎きに堪へずやありけん。遂にわらはをたづさへて。なき人の菩提の爲。廻國にとて出でしより。ゆくへ定めぬ草まくら。旅ねはかなし鍋かけの。鍋ひとつだになき宿に。病み臥しゝたりし。わが親を。あはれまれたるおん身のたまもの。しか／＼なりとて見せしかば。父は驚き且感じて。かくまで慈悲ある人は稀なり。おん顏ばせを見おぼえて。めぐりあふ日のありもせば。此よろこびを申せよと。かへす／＼もいはれたり。その日よりして給はりし藥を用ひたりけれ共。定業のがれがたくや有りけん。いく日もあらで。親は身まかり。わらはゝしらぬあちこちの人手にわたり渡されて。里のあそ

腹大に張居申候間。開胎仕候處。猴子二頭呑居申候由。其所は治下より八里計の處にて。うきたる儀にては無御座候

是は去年申七月の書狀なり　七月念三

文政八酉八月　兎園之二

○ほりこてふ　京　角鹿比豆流

今はむかし。卯月のころ。洛の西なる木辻村といふ所に。數日遊びしことあり。其邊のわらはもちつゝじの實をとりて喰ふ。是をほりこてふといひ。また猫の耳ともいふとぞ。甚にがきものなるを。なれては味よきにや。猫の耳とは其かたちのよく似たる故なるべし。ほりこてふとは。いかにかくいふにや

解按ずるに。ホリコテフは。張子蝶ならん。ハホ音通なり。もちつゝじの實は。薄紅にして。聯蝶のかたちに似たり。しかれどもその片なるところ厚くして。且堅し。譬へば張粘の蝶の如し。ハをホと唱ふるは。越後。上野人のヱをイと唱ふるが如く。西京の方言かもしらず。又猫の耳といふも。猫の耳の裏のかたに似たればなり。すべては猫の耳に似たるものはあらずかし

乙酉八朔　　著作堂追記

○奇遇

予がとし來恩顧を蒙る某侯の國足輕に。山本鄕右衛門といふもの（この藩中には。內足輕。外足輕さて。內外の足輕あり。此山本鄕右門は。外足輕の上席なり）寛政四年壬子の夏四月。飛脚をうけ給はりて。江戶へ來つ。又みちのくへかへるをり。奥州街道鍋掛の驛はづれなる坂中に。廻國のもの親子ふたりゐたり。その父ちかごろ此わたりにていたく病みわづらひつゝ。命も危かりければ。驛のものどもあはれみて。渠等が爲に坂中にいとあやしげなる小屋を造りて。しばらくそこに置きたるなり。かくてその病者の小むすめ往還にたち。旅人につきて袖乞をしたりける。鄕右衛門これを見て。特に不便に思ひしかば。懷をかいぐりて。一片の南鐐に持ちあはしたる藥を添へ。此二くさを楊枝挿の嚢に入れてぞとらせける。その後五ヶ年ばかりを歷て。（寛政八年）鄕右衛門は。又飛脚をうけ給はりて。奥より江戶の邸にまゐりたる逗留の程。朋輩にいざなはれて新吉原江戶町なる。丸海老屋とか呼ばれたる青樓に登りしに。夜ははや更の闌けしころ。この樓のわかいもの（むかしはこれを妓有さいへり）高坏に

差より前。呉の日本へ通せし事なし。異域の人。我邦に來て臣民となるは。則是あり。其氏族を著別といふ。この類甚多し。その中に松野氏あり。新撰姓氏錄に曰。松野は呉夫差の後なりと。是呉人我邦に來るの始なり。日本紀に據るに。應神天皇三十三年春二月。阿智使主。都賀の使主を呉に遣し。縫女を求めしむ。ふたりの使者高麗に渡り。呉に至らんとするに。道路をしらず。知る者を高麗に乞ふ。高麗の王則。久禮波久禮志二人を添へて鄕導とす。是によりて。呉に通ずることを得たり。呉王工女兄媛。弟媛。呉織。穴織四人を與ふ。大織冠鎌足執政の時。百濟の禪尼法明對馬に來て。呉音に維摩經を誦す。よりて呉音を對馬讀といふ。呉音の源起なり。然れども。泰伯を天照太神といふ事。何れの書にも見えず。日本紀纂疏に。一條兼良公の說に。韻書を考ふるに。姬は婦人の美稱なれば。思ふに天照太神は。始祖の陰靈。神功皇后は中興の女主たる故に。國俗姬氏國と稱すとかや。只字義によりて。事を論ずるときは。此類常に多し。蓋物極れば變じ。人窮すれば則本に返る。天地の常道にして。古今の事宜なり。予兎園小說を作らんとす。囊底を叩きて考ふるに。奇說。新說諸君の筆に出づ。予が輩如レ之何そ筆すべき。於レ是本に返り。源を尋ね。天照皇の說を寫し。聊以て例の兎園に備ふと云ふ

乙酉八朔　中井琴民識

文政八年八月兎園會　京　角鹿比豆流

筑前御儒者井上佐市より。京都若槻幾齋翁へ之書狀與に

怪談らしく思召さるべく候へ共。實事に付。爲御慰申上候。去る六月初。弊邑管內宗像郡。初の浦と申す所の山圃に。煙草を作り置候處。何物かあらし候者有之候に付。百姓共申合。獮猴之所爲にて可有御座候間。逐拂可申とて。數十人一山に入候處。獮猴五十餘。群居候に付。扨社と能々見候處。中に長壹丈二三尺。圍一尺五六寸の大蛇を取り圍み。方さに鬪居申居候。猿ども口と手に。煙草の葉を持ち。蛇前猿にかゝり候へば。後猿蛇尾を曳。其鬪果しなき摸樣に御座候故。所之獵師鳥銃にて。蛇を打殺し申候。猴は火音に驚き逃去申候。猴共蛇の煙草を嫌ひ候儀を能く存候事。驚入申候。扨其蛇を改見候處。

れ共。御心に不叶事ありて。御〻を止めて引き籠り給ふ。仍りて法令の敎なし。人々難義に及び。これを天の岩戸に引き籠らせ給ひて。常闇の世といふ。然れば皆人なげき諫め申して。再び法令あるにつき。日月かゝやくといふ。彼渡海の時の御舟。是を伊勢國の船の御藏と申す神寶是なり。農具を入れ持せたる。今に御藏に納めたり。仍りて御倉と申す。其外司室童子の畫あり。髮を亂して童形の竿をさす處の繪なり。是渡海の御船を寫すと云ふ。又内宮に三讓伏あり。三讓の文字を寫す。是御殿に質朴禮義をふまへさせ給ふしるしなり。これによりて。内宮を泰伯。外宮を后稷と說き申すといふ。外宮は國常立尊と申すも此說あり。扨日本を姬氏國と。野馬臺の詩にも見えたり。周室又姬氏符合如斯

辨に云。此說古來より誤り來ること年久し。釋の圓月日本史を作り。朝に獻ず。其書に泰伯を以て始祖とす。故に議論ありて。おこなはれずと云ふ事は。蕉了子が記せる史記抄路に見ゆるなり。且舊事記。古事記。日本紀に。此說に似たる事。實になし。濱成の天書記。廣成の古語拾遺。倭姬世說。鎭座傳記。御鎭座次第。寶基本記。類聚神祇本源。元々集等の書に。亦見えず。野馬臺の詩は。世俗に傳はるばかり。書籍の中曾て見えず。梁の寶誌和尚の讖文なりといへども。誌か詩傳中にも見えず。假令寶作りぬるも。靈僧の詞證據とするに足らず。神皇正統記に。異朝の一書中に。日本は吳の泰伯の後なりといふ。更に當らず。思ふに唐土の人我邦の書をしらず。偏に商船俗侶の口に任せて。年代をも不レ辨。實非を不レ正。實を失ふこと常に多し。固と我邦の人。國史に暗き故。姬氏國の言に迷ひ。泰伯を誣罔し。佛者は大日孁の名を以て。大日を附會し。是周禮造言の刑を免れざるの人。國神正直の敎に背く。實に聖神の罪人なり。開闢の始。神靈を稱するは。古今の常。予別に說あり。此に略す。或云。天地開闢の始より我國有りて。大日本豐秋津洲と號し。我君の子世々統を續ぎ給ふ。所謂天照太神の御子孫なり。吳は泰伯より始まり。世の相おくるゝこと數千歲。日本何ぞ泰伯の子孫ならんや。史記吳の世家を按ずるに。泰伯卒して子なし。弟仲雍立つ。後十七世夫差。越の勾踐の爲に滅さる。此時我邦孝昭天皇三年に當る。夫

事三尺計といふ。奥壼より小山迄は。四十町計にて。松塚の面の端は。其やしきなり。同村に小右衛門といへる百姓。此火を見とゞけんとて。彼所に至りけるに。火は北より南をさして飛び行く。小右衛門は南より北に向ひて歩みよりたれば。此火小右衛門が前に來るとひとしく。急に高くあがり。小右衛門が頭の上を飛び越ゆるに。流星の如き音きこゑたり。頭を越ゆると。又以前の如く。地を去る事三尺計にて行き過きぬ。一說に。此時小右衛門杖にて打ちければ。數百の火となりて。小右衛門を取り卷きけるを。漸杖にて打ち拂ひ歸りたりといふ。其夜より小右衛病を發して死す。因りて小右衛門火と名つく。此事凡百年計以前にもなるべし

此火年をふるにしたがひて。火の大さもやゝ減じ。出つる事も次第に稀になりたり。小右衛門死してより。人恐れて近く寄らざる故にや。今に遠望にては見るものなし。若たまく見ゆる時は。螢火計の大さにて。夫かあらぬかといはん程なりといへり。

此松塚村は。我食邑ゆゑ。土俗の物語を能々尋ねきゝたるまゝに書せり

○天照太神を呉太伯といふの辨

或云。伊勢國天照太神を呉の泰伯と申す說。宋元の代より申す所にして。儒者よりこれを見れば。尤事跡に付きて左あるべし。神道者よりは此說を甚嫌ひ。堂上方禁中方にても不被用。これも亦たあるべし。日本は大唐と各別の式を立つる故なり。然れ共。仰ぎてこれを考ふるに。呉の泰伯は誰人ぞ。周室の高祖。后稷の嫡子にて。二男は王季なり。本ノマヽ后を王季と聖人なり。王季の子文王。その子武王。周公。何れも聖人なりと稱す。世子の說ありて。泰伯は弟の王季に讓りて。家を出でゝ去りぬ。是を三讓といひて。論語にも泰伯をば至德と稱せられたり。呉國へ去られしと古書にもあり。呉國より日本へ渡せらる。呉國は南京なり。日本と近し。其頃は。日本は纔の島國にて。鬼畜同前の土民住す。彼等穴に住し。獵漁して食せしなり。泰伯九州日向國鵜渡の港へ舟を留めらる。其後高千穗の嶽に上り住し給ふ。日向に今その事跡殘れりと申し傳ふ。彼國にても王代の古質あり。耕作を敎へ。人倫の道を敎へ給ふ。仍りて人道開けて。國人尊敬す。素盞烏尊は皇の御弟なり。然

その比にや。かれ祈禱をしたりけん。少しはそのしるし有りしかど。又あらはれて責めさいなむ。久三郎堪えずして。つひにはかなくなりぬ。歳暮に古主に來りし時。申しゝ詞によりて考ふれば。かの靈年あけばとりころさむなどゝいひけるにやといひあへり。この久三郎は。袋翁が弟子にて。うたを學びたるものなりとて。袋翁のもの語りなり

○隅田川櫻餅

去年甲申一年の仕入高。櫻葉漬込卅壹樽（但し一樽に凡二萬五千枚ほど入れ）葉數〆七拾七萬五千枚なり。（但し餅一つに葉貳枚づゝなり）此もち數〆卅八萬七千五百。一つの價四錢づゝ。この代〆千五百五拾貫文なり。金に直し貳百廿七兩壹分貳朱と四百五拾文。（但し六貫八百文の相場）この内。五拾兩砂糖代に引き。年中平均して。一日の賣高四貫三百五文三分づゝなりといへり

○本所石原の石像　龍珠館

本所石原多田の藥師の前。石工の家に。ある上下着たる男子と。かいどり着たる婦人の石像は。十萬坪を初めて開きたる者に。千田庄兵衛といへるあり。家富みて十萬坪一圓に。おのれが有となし。奴婢數十人つかひ。錢を鑄ることなど司れり。其盛なりしは。凡寶暦の頃にやとおもはる。庄兵衛總領の男子（名は聞不及）に妻をむかへて。兩人ともに死す。其像を石にて作りたるなり。次男も後に庄兵衛と名乘たり。其次は女子にて。名をゑんといふ。親庄兵衛。庄十郎といへるものをゑんへ聟養子とし。後の庄兵衛は庄十郎の妹の淸といへるを妻として。家を二つに分けたり。後には共に落魄して。後の庄兵衛は出家し。庄十郎は竹本濱太夫といふ義太夫かたりとなる。今は其家遺㯲なし。元祖庄兵衛は。石像今も猶十萬坪に存す。おくもりたる松樹の中に。小堂あり。座像にて頭にガントウ頭巾を着。袴羽織に手に扇を持ち。脇差を帶びたる形なり。所の者はゴエイ堂といふ

○小右衛門火

大和國葛下郡松塚村は。東西に川あり。西を大山川といふ。其堤に陰火出づ。（出でし初は。いつの頃よりさいふを知らず）土俗は小右衛門火といふ。百濟の奥壺といふ墓所より。新堂村の小山の墓といふへ通ふ火なり。雨のそぼふる夜は。分けて出づ。大さ提灯程にて。地をはなるゝ

きさまなりしかば。主人不便におもひ。念比に敎訓せしを。ふかくかしこまりおもひて。おこなひをあらため。まめやかにつかふるさまを。今の主人見て乞ひうけぬ。もとより手跡達者に。算術もおろかなくさかしゆゑ出頭せしなり。しかるにをとゝしの冬。故主の家に來り。わたくしことはからざる災難に逢ひ侍り。甚だ心をいたましむるよしをいふ。それはいかなるとにやとゝひけるに。そのよしは申し難くと。かたくすさびてかへりぬ。そのゝち又來りて。かのさいなんうらなひみたれば。祈禱せばよけなんと申すにつき。そのよし行ひければ。まづ心安き方にさふらふといふ。そのよしをばとひてもいはず。ほどなく年もくれぬとて。歳暮の禮に來り。かへる時に。もはや御目にかゝり申すまじといふ。あるじとがめて。ことしは御めにかゝりがたしといふことか。たゞおめにかゝるまじといふは聞えがたしといひければ。そこつにて侍りとわらひまかでぬ。年もかへりぬ。春のよろこびにいつも來るものゝ。日をふれども。まうでこぬは。いかゞと人してとふらはせぬれば。久三郎は身まかりぬといひこしたり。さるにても災難といひしは。いかなることにて有りしやと心にかゝりて。しりあひたる人としきけば。久三郎が事をとひたづねつるに。ある人いひけるは。そのことはわれよくしれり。久三郎とはへだてなくむつびつれば。我にのみかたりきかせたり。それは近きあたりに侍りし。年比の子もり女。久三郎にしたしくならばやとおもひけるを。そのとなりにつかへぬる若侍。聞きつけて。久三郎が艶書をしたゝめ。便をもとめておくりければ。あひおもふ中とてうけひきぬ。それより夜にまぎれて忍び逢ひけるが。ほどへて夜がれがちにやなりけむ。かの女ある日。久三郎に行きあひて。くねりかゝりけれども。久三郎はしらざる事なれば。こたふるにも及ばずして行き過ぎぬ、そのゝち又行き逢ひたれば。ひたととらへてはなさず。ありしうらみをいひつゞくるにぞ。さてはわがなをたばかられしことにやと心付きたり。しか〳〵とことふれども。さらに聞きいれず。からうじて引きはなちてわかれたり。そのゝち。かの女あつしき病にふして。日あらず身まかりぬ。その夜より久三郎がふしどに幽靈あらはれて。よもすがらくねりあかす。

文政八年乙酉八朔　山崎美成記

朧日兎園　輪池

○夷言粉挽歌

蝦夷地大臼山善光寺上人は。智徳のほまれ高く。靈巖寺中に旅宿ありしうちも。都下の信者歩をはこびて。歸依せしに。往西の期定めありて。こゝにて遷化あり。人々擧りて惜みあへり。其夷地に住まれし時。粉引歌を作りて。夷人を教化ありしとて。その歌をうつし贈りし友あり。かたはらに夷言を譯しあるもめづらしければ。うつして奉るものなりし

粉引歌

念佛上人ユホウンシンハイナ

是や人々　教を聞よ
タハアンウタレ　エハカシユカス

早い運いか　一度は死ぬぞ
トナシモイシカ　アリシユイライナ

死ぬがいやなら　念佛申せ
ライホコハナキ　ネンブッキカン

申す人なら　いつなん時に
キクルネヘキネ　センハラヤツカ

假のからだの　死たるさても
ウヽセネトハチ　ライハネヤツカ

蟬の脱がら　捨つるがごとく
ヤアキセイヘシ　ヲシヨウコラチ

月も日も　死せざる國へ
チコブアフレハ　シヨモライコタレ

往て生れて　心のまゝに
ヲマンセカトハ　ヤエラムアニネ

妻や小供が　かあいそならば
エマチホホダレ　ヲマツフハネチキ

共に念佛　申すがよいぞ
ウトラネレフツ　キイチキヒリカ

此世は必ず　災難受けず
タレムシリカタ　シヨモヤイホムシユ

後世は分　淨土に生れ
ムシリホッハユ　アヲラムトクテ

一つ蓮の　臺に乘て
シネツフユフイナ　カシケタオヽハ

永く樂しみ　死ぬ事ぞなし
ヲホンノヌヤツネ　シヨモライルネネ

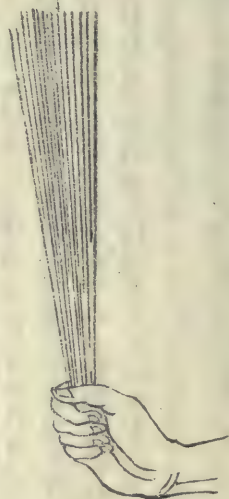
右一則檜山坦島。予にれくる所なり。此上人の事を誓願寺にとふに。名は辨瑞文政七年十一月頃遷化せしを。火葬しければ。舍利多く出現せしといへり

○ものゝけのぬれ衣

或家姓名はわざとしるさずの家來に。半田久三郎と云ふ者有りし。もとは近國の酒とうじの子なりしが。女色にふけりて。所の住居なりがたく。江戸に出で大御番某の所に侍奉公に出でたり。とかく色慾にて身をあやまつべ

いにしへ太占（フトマニ）のトを始として。竈輪（カマワ）の米占（コネヤラ）などいふ多かり。これらの類。和漢にいと多し。集錄して一卷となさんことをおもへど。いまだその稿を脫せず　今左に記す九姑課も。亦雜占の類のみ

輟耕錄云。吳楚之地。村巫野叟及婦人女子輩。多能ニ十九姑課一。其法折ニ草九莖一。屈レ之爲ニ十八握一。作ニ一束一而呵レ之。兩々相結。止留ニ兩端一已而拜開以占ニ休咎一。若續成ニ一條一者名曰ニ黄龍儻仙一。又穿ニ一圈一者名曰ニ仙人上馬。圈不レ穿者。名曰ニ蟢窠落地一。皆吉兆也。或紛錯無レ緖。不レ可ニ分理一者則凶矣。云々。愚意。俗謂九姑。豈即九天玄女歟。離騷經云。索ニ瓊茅一以筳篿兮。命ニ靈氛一爲ニ命卜一。注曰。瓊茅靈草也。筳小破竹也。楚人結レ草折レ竹。以卜曰レ篿。據レ此則亦有レ所レ本矣。予嘗て戲れに。この九姑課を試み。兒輩に授けて。消日の具に充しむ。玄かれども。猶うゐまなびの兒童等が。此文のみにては。とみにえさとるまじく思ひ。今こゝにその詳なるさまを記す。所謂老婆心切にこそあれ

草ノ莖九本ヲ二ツニマゲテコレヲ握ルソノサマカクノ如シ

此ところを掌もてす。願ひ望みのことを祈りて。さて。息を吹きかけて後。二本づゝ結びつけ。終にあまる二本をばむすばずして。のこし置く。これをもて左右へ引きわくるに。吉兆なれば左の三樣になるなり。わしき時は何かわからぬ。こくらがりたるものいで來るなり

黄龍儻仙

仙人上馬

蟢窠落地

末に病死したるよしを告け來りければ。いよ〳〵不思議に思ひ。しからば此小兒の男子なるも。右の娘の再來。實に變生男子ひとへに大悲の御利益ならんと。是より猶も深く信心しけるとぞ
右の產婦に服藥をあたへし。淸水の御醫師。福富主水老の直物語なるよし。友人利鄕といへるものゝ語りけるまゝに。こゝに記し出だしぬ

〇狐囑の幸

文化六巳年の冬。加賀の備後守殿の留守居役に。出淵忠左衛門といへる人あり。ある夜の夢に。一疋の狐來りて。忠左衛門の前にひざまつきいふやう。わたくし事は。本鄕四丁目糀屋の裏なる稻荷の悴なれども。いさゝか親のこゝろにたがひたる事のありて。此善親のもとへはかへられず。居所もこれなく。いと難儀に候へば。何とも申しかねたる事には候へども。召しつかひ給ふ下女をかし給へ。しばしのうち。此事をねがひ奉る。程なく友達のものゝわびにて。宿へかへるべければ。それまでの間ひとへに願ひさふらふ。けしてなやませもいたすまじ。又奉公の間もかゝずまじければ。許容し給へとなげく。忠左衛門夢ごゝろに不便に思ひ。なやます事もなくばかしつかはすべしといふに。狐こよなうよろこぶと見てさめぬ。忠左衛門いともふしぎなる夢をみし事よと思ひつゝ。翌朝起き出でゝ。下女をみれども。常にかはりし事もなかりけるが。晝頃より俄に此下女はたらき出だして。水を汲み。眞木をわり。米をとぎ飯をたき。常には出來かねし針わざまでなす。每日かくのごとく。一人にて五人前ほどのわざをなし。あるひは晴天にても。けふは何時より雨ふり出だすべしとて。主人の他出の節は。雨具を用意させ。後ほどは何方より客人ありなど。そのいふ事いさゝか違ふことなく。その外萬事此女のいふごとくにて。大に家內の益になることのみなれば。何とぞいつまでも此きつね立ち退かざるやうにしたきものなりとて。其ころあるじ直の物がたりなるよし。此あるじと懇意五祐といふもの物がたりき

文政乙酉中秋朔於二文寶堂一　南窓食山人誌

〇九姑課

上古卜筮ありてより以來。世に雜占ことに多し。鷄卜。棊卜。響卜。鳥卜の類。猶少からず。吾邦もまたか

て。紺屋なりし。善八はいそぐ旅にもあらねば。送り遣すべしとて。追手も氣づかはしければ。すぐに駕籠にのせ。取りいそぎつゝ。いせの津の紺屋何がし方へつれゆきければ。兩親をはじめ家内のものども。よろこぶこと限りなく。娘は始終をくはしく物がたりて。大恩人の善八なれば。しばらく此方に逗留し給へとて。日ごとにあつくもてなしける。善八もいつでとゞまりても。はてのなければ。家内の者に暇を乞ひしに。人々名殘を惜み。今しばしとゞめければども。はや支度などしければ。娘は猶更何となくわかれをしく。わらはも何とぞ御禮のため。一たびは江戸へも下りたきよしを。兩親にねがひければ。いづれ一兩年の内に。親父同道にて。くだり可申とて。厚く謝しけり。娘はふと心つきたるさまにて。此度思はず厚き御介抱うけしも。前世の御緣こそ有りつらめ。わらはもそなた樣の御恩わすれぬ爲。何とても御所持の内一品たび給へ。それを朝夕そなた樣と思ひ。後世をも願ひ申したしといひければ。善八も旅さきの事にて。外に持ちたる品もなく。懷中の守りに入れ置きし。淺草觀世音の御影を取り出だし。これを進上すべし。隨分信心し給へとて。娘にあたへ。暇乞ひして伊勢を立ち出で。去寅年（文政元年）四月江戸へ歸りけるに。留守中に。新婦(ヨメ)懷胎にて。男子出生し。則善八歸宅の日。七夜にあたりければ。善八も大きに悅びける。されども此出生の小兒。每日泣きて少しもやむ時なく。其上左りの手を握りつめて。いか樣にすれどもひらかざるよしを。善八にかたりければ。そはいかなる事やらん。まづ孫をいだきみんとて。小兒を善八の膝にいだきとれば。今まで泣き入り居たるが。即座に止み。又握りつめたる左の手をも。善八何となくひらかせたれば。忽ひらきたり。そのひらきたる掌の上に物あり。何ならんと取り出だしみれば。觀音の御影なり。みな〳〵奇異の思をなし。驚きければ。善八つく〳〵考へ見るに。此御影は。全くいせの津にて。娘にあたへし御影なりと。甚いぶかしく思ひ。家の内の者にも。道中にてかの娘に出であふたる始末。しかじかとかたりきかせ。其後いせへも書狀を出だしければ。右の返書六月十四日に着しければ。早速ひらき見るに。かの娘は善八にわかれてより。間もなくその年の五月

一無主犬。頃日は食物給させ不申樣に相聞候。畢竟食物給させ候へば。其人の犬の樣に相成。已後まで六か敷事と。存いたはり不申と相聞。不届に候。向後左樣に無之樣。可相心得事
一飼置候犬死候はゞ。支配方へ屆候樣に相聞候。於前條無之者。向後箇樣之屆無用事
一犬計に不限。生類人之慈悲之心を元といたし。あはれみの儀肝要の事
　卯四月
元祿八年亥十二月廿一日御渡し捨犬の子御吟味御書付
　　覺
小石川馬場近邊屋代越中守組。美濃部彌兵衛門外に。去る十八日之夜。近き頃生れ候體の白毛の子犬。二疋捨置候。此度町中之犬共御吟味之上。犬小屋へ被遣之候。然上は左樣之儀兼而有之間敷處。犬捨候段不屆候間。急度可被致僉儀候。組支配等有之向には。其むき〳〵にて。致僉儀捨候もの相知候樣に可被致候。後日に脇より相知候はゞ。可爲越度もの也
　十二日廿一日　乙酉八朔　海棠庵謄寫

○變生男子
文政二卯年四月の記。神田和泉橋通りにすめる經師屋の隱居善八といふ者。旅すきなれば。年中處々をあるきてたのしみとせり。一昨丑年より上方筋へゆき。大坂より大和路にかゝりける時に。むかふより十五六ばかりなる娘。只ひとりにて急ぎ來りけるが。善八の前へ程なく近つきたる所にて。氣絶して倒れたり。善八も通りかけにて驚き。懷中より藥を出しあたへて。かれこれ介抱しければ。やうやくいき出できて。目を開き。心つきたるさまなりければ。猶もさゆなどあたへて。扨御身はいづかたの人にてたはするぞ。供もつれず。わかき人のひとりありき。所のものとも見えず。いかなる事かと尋ねければ。此娘まづ一禮をのべて。わらは事はかどわかされて。大坂へつれらるべきを。さま〴〵と手だていたし。今朝よきをりをうかゞひ走り出でたる故。心もつかれ。思はず氣をうしなひ。はからずもそなた樣の御介抱に預りたる事忝し。何とぞ此上の御慈悲に。わらはが宅迄送り給はれかしと賴みければ。善八も不便に思ひ。住所は何方ぞと問ひければ。勢州津の驛に

き。窮民を救ふをもて業とせり。この故に近郷その風を慕はざるものなし。しば〳〵東都に遊びて。予と友たり。近來繼志編を著し。祖先を盗なりとせられし俗説を破るに足る。眞に篤實の君子なり

海 棠 庵 記

○婦女産石像

信州佐久郡北澤村名主惣兵衛申上候。村内に字入作に鎮守胸形大明神者。五間四方の生石にて御座候。往古より都て郷村に凶難等靈夢之告有之。又は流行之病難有之節は。捧幣帛候へば。自然と相除候故。隣村迄擧て鎮守と崇奉り罷在候。然る處。私妻みち儀。子無之を相歎き。密に廿一日之間。大明神へ毎夜參籠御祈願を籠候。私には一切相隠し有之。去未年妊娠之分け。前書之事共申聞候に付。驚入醫師へ相掛け見せ候處。全懷妊に相違無之由申し候に付。介抱仕。十ヶ月に及候へ共。出産不仕。十二ヶ月に至り。當五月十一日安産仕候に付。親類一同歎見受候處。五體相揃。石像にて。丈け一尺二寸五分。面上青み。瘂と相分り。手足腹脊共薄赤く。何共恐怖仕候。難捨置御訴申上候。何卒御慈悲を以。御検使被成下度奉願候以上

文化九年申五月十三日　信州佐久郡北澤村

名主　惣　兵　衛

年寄　與次右衛門

杉庄兵衛樣御役所

右兩條はこれを雜記中に得たり

文政乙酉八月朔　海 棠 庵 記

附　錄

嚮に文寶子の犬別帳に附けて。予がしるしれけるもの二條を。耽奇漫錄に附錄せしに。このごろ篋底をさぐりて。又一二條を得たり。よりて又こゝに錄す

貞享四年卯四月の御達

覺

一捨子有之候はゞ。早速不及屆其所の者いたはり置。直に養候歟。又は望の者有之候はゞ可遣。急度可及付屆事

一鳥類畜類人に疵付候樣成儀は。只今迄の通可相屆。其外ともくひ又はおのれと痛煩候計にては。不及屆。隨分致養生主有之候はゞ返可申事

拾兩差出し候はゞ。よく占ひ祈禱いたし。火氣水をも可相鎭旨申し候へ共。餘り高金故見合せ。又別の賣卜師に金子貳兩貳分遣し占せ候へば。判斷いたし候。不搆差置候はゞ。七里四方土地ゆるみ落入り沈み可申。右水火を鎭め候には。地主金左衛門幷に右井戶を堀候職人を。井戶の中へ投入れ不申候ては。水火相鎭らず。土地おち入り。泥の海に可相成旨。判斷いたし候よしにて。白根町は勿論近邊の者まで。無據事に候間。金左衛門幷に井戶堀職人を捕へ。井の中へ投込申外無之と申風聞に相成。金左衛門幷に井戶堀職人早々逐電いたし候よし。扨相集り候村々は

平片新田　下道かた　上道かた　沖新保　平片
萬年　吉崎　櫛笥　藤新田　藏主
兩木山　浦梨子　田非　鍋潟　兩曲り

戶頭組村々を始。この外四五里四方より駈集り候村々。枚擧にいとまあらず

右村々七日の間。晝夜白根町へ相集居候へ共。水火鎭り不申。夫より村々役人共相談の上。御領主へ相屆。檢使の役人出役有之。見分之上右の井戶を埋め候樣被申付。埋方等の差圖有之。其通にいたし候處。水火共に勢氣弱く相成。水は湯の花のにほひ甚敷。飮水にならず。其水を汲み溫め。藥湯にいたし候へば。諸病に宜く。湯治人も追々有之よし。火はからめき（からめきは地の名。土中より火の出づる處）同樣に竹筒にて。處々へ引取。相用候よし。且傾き候家も修覆致し。金左衛門も歸宅いたし候由

右は平片新田組頭甚右衛門弟仁太郞と申もの。先年奧州へ日雇稼に參り。予が家にもしばしはたらき居。予も存居候者にて。當三月不圖江戶本鄕丸山本妙寺中東岳院にて逢ひ。其後予が客舍へ折節來候處。六月初又予を訪ひて。國元に大變有之。書狀到來に付。歸國いたし候とて。暇乞に參り。歸國致し候處。六月十六日又々出府いたし。同十八日。予東岳院へ參り候節。仁太郞ものがたりを承り。其まゝ相記す。村名語音の聞違もこれあるべし

癸未六月十八日　熊坂盤谷記

熊坂盤谷は。奧州福島の鄕士にて。四郞入道長範が裔なりといふ。世々學を好み。常に倉廩をひら

の人遂に豊公の母をすら知らずして。或は天より降り給ひぬ。地より涌きにきといふものあらん。かゝれば豊公の事實を取りて筆に載せんと欲りするもの。いまだ織田家に仕へざりし已前の事は。闕如して可なり。獨竹中丹後守重門の書きつめたる豊鑑まきの壹。長濱の眞砂に云

羽柴筑前守豊臣秀吉。天文六年丁酉に生れ。（解云天文五年丙申とするものは非か）のちには關白になり昇り給ふ。尾張國愛智郡中村とかや。あつ田の宮よりは五十町ばかり乾にて。萱ぶきの民の屋。わづか五六十ばかりやあらん。郷のあやしの民の子なれば。父母の名もたれかしらん。一族などもしかなり（下畧）

予はこの説にしたがふべくおもはゆ。その事すべて實にして。その文青史に恥ぢずといふべし

文政八年乙酉秋七月朔　神田山脚の老逸稿

〇鑿井出火

越後國新發田領蒲原郡中野口組大庄屋。戸頭村三郎左衛門支配。名主助右衛門觸下。白根中町造酒屋金左衛門と申者。富有之者にて。屋敷内へ堀拔井を堀度。年來心がけ。文政六年癸未三月十日頃より取り懸り。三月廿六日堀拔候處。砂交り之水を五六丈吹上け。水夥しく出。近邊の土地トン〳〵と鳴りわたり。井の口段々に大きく相成り。其町水浸しにも可相成樣子に付。先溝を掘り。水を流し。水を止度存。金左衛門方に有之ものは。何によらず井戸へ投げ込候へ共。捧などの樣なるものは吹上け井戸へ落ちつかず候間。無據大豆俵拾俵ばかり投込。又疊石板等を並べ。石を上げ候へ共。水止み不申。其夜。白根町髭醫者（この者髭を長く延し置候間。其所にて髭醫者と呼びなしたり）井戸を見に參り。井石はこゝかと提灯をさし出し候へば。井の內より火もえ出で。提燈も髭も燃し。火氣やはり五六丈燃上り。遠近共に白根町出火なりと存。竹貝を吹きまどひ。高張提燈を押立て。村々より馳集り。大に騷動いたし。且兩三日の間。金左衛門屋敷の四五十間四方ゆるみ。力を入れて踏候へば。ドブリ〳〵とはいり候樣に相成。人家數拾軒少しづゝ柱めり込傾き。右投込候大豆を處々へ吹出し。井の中八九拾間四方もうつろに相成候樣に思はれ。火氣益熾に相成候。其節賣卜師參候に付。卜吳候樣賴み候へば。金子貳

て。筑阿彌は假父なり。母が野合の子なるをもて。實の父の事におゐては。その名をだにもいひしらせず。秀吉も亦これを悟りて。われには父なしといはれしなり。もし彌右衛門にもせよ。筑阿彌にもあれ。うみの父ならんには。はや世を去りて年を經るとも。秀吉武運比類なく。富田海をたもつに至りて。父の廟所を建立し。贈位贈官の追福あるべし。しかるにその事なかりしは。野合の子なればなりといへり

こは理りあるに似たれ共。又こは不經をまぬかれず。抑當時の小說者流。豊太閤のその亡父の爲に。廟所を建立し給はざりしと。贈官爵の事なきとを。深く疑ふこゝろを師として。臆說をなすものなり。今予が思ふよしはしからず。倩豊公の情狀を亮察して。よくその意中を推しはかるに。その恩すべて現世に過ぎて。過去の爲には絕えてなし。只信長のれん爲にのみ。大法事を興行して。廟所を壯嚴し給ひしは。諸將のこゝろを釣らん爲なり。その他。丹羽。蒲生。堀のともがら。百萬石を食せしも。旣に沒後に至りては。その國郡の三つがひとつも其子共に受けしめ給はず。これらは骨肉なるものならねば。恩に增減ありともいふべし。秀長卿は弟なり。その世にゐませかりし日は。數十萬石の主として。官職亞相にのぼせしも。そは沒後に至りては。はやくも忘れたるが如し。こは異父兄弟なるものなれば。かくてもあらんといはゞいふべし。彼棄君は豊公の老後にうませし愛子なり。その誕生のはじめより。天下の富も足らざるごとくめでいつくしみ給ひしに。忽早逝し給ひしかば。哀慕の涙は胸にこそ盈つらめ。その後々まで菩提の爲に。大かたならぬ法會などを。とり行れし事は聞えず。この情狀を推すときは。幼弱微賤の時にわかれて。その面影だも見しらざる。亡父の事には懸合せず。只現在なる母御前をのみ大政所と尊稱して。孝養を盡し給ひしなり。その母御前も父の如く。早く世を去り給ひなば。追慕の孝養なきにより。世

敗に依ること多かり。陳壽が米を甘なふとも。
氏族を飾るは人によるべし

唐山にもさるためしあり。秦の始皇を呂不韋が子といひ。晉の明帝を牛金が子なりといふ。これ將當時の小説なれども。史官をさ〳〵取るものあれば。かならずよしあることとなるべし。又蜀漢の昭烈の。みづから中山靖王の後なりと稱したる。劉宋の高祖武帝。みづから漢の楚の元王の後なりといふが如き。世系遙なるをもて。司馬光は猶疑ひぬ。（譬へば織田家を清盛の裔孫なりといふさいへども。世系まさしからぬをもて。白石はなほ疑ひて。遂にその辨あるが如し）又この事に似たるものあり。足利の義包を爲朝の子なりといひ。岩松入道天用を新田少將義宗の子なりといへる即是なり。しかれども義包の一條は。足利の族なりける。今川了俊の説にして。難太平記に出でたれば信ずべく疑ふべからず。只これのみならずして。梅松論にも粗そのよし見えたり。同書下の卷。足利尊氏卿西國より攻め上るをり。箱崎なる八幡宮へ參詣の段に。すなはち寄附地あるべしとて。御文章の爲に。社家の古文を召し出だされし中に。昔鎭西八郎爲朝の寄附の狀ありしを御覽ぜられて。當家の祖神實に難有思召して。御敬信淺からず云々といへり。このとき尊氏の當家の祖神といはれしは。八幡宮に爲朝朝臣をかけたることゝ聞ゆるなり。かゝれば今川氏のみならで。尊氏卿も素より亦其身の。爲朝の裔孫なるをしりておはせしなり。又天用の義宗のおん子なるよしは。岩松系譜に見えたれば。これらは平相國。豊太閤の素生をいふものとおなじからず。事迹に信と不信とあり。論者よろしく擇むべし。又或記に云。太閤秀吉公の父しれざるをもて。牽強傅會の說多し。それらは今さら論ずるに足らず。傳に云。秀吉はその母野合の子なり。そのいはけなかりしとき。つれ子にして木下彌右衛門に嫁したるに。彌右衛門はやく世を去りければ。その頃織田家の茶坊主にて。筑阿彌といひしもの。浪人して近村にあるをもて。すなはちこれを入夫にしたり。この故に。彌右衛門は秀吉の繼父にし

ノ實父ナリ 下略

按ずるに。豊臣譜に載するもの。秀吉公の兄弟四人。所謂第一秀吉公。第二大和大納言秀長。第三武藏守一路妻。第四南明院殿是なり。か丶れば東國太平記にいふ所も。一定しがたし。しかれども一書に云。初生の女子と秀吉公は。前夫彌右衛門が子なり。又秀長卿と南明院殿は。後夫筑阿彌が子なり。いまだ孰か是をしらず。さて明眼院云々の一說は。右に抄せし。持萩の中納言母子の事よりいできたるものにやあらん。げに秀吉公の母をさなくて。父を喪ひ給ひしとき。母と共に都にのぼりて。二八のころまでありし程。大内につかへまつりて。遂に天子のれん胤を宿せしなどもいはゞいふべし。しかれども持萩殿の妻といへるは。本妻ならで。配所にて娶りたる。かりそめの側室なるべし。昔も今も流罪の人のその妻を携へて。配所にゆくことなければなり。まいて勅免あらずして。配所にて身まがりし人のむすめを。いかにして内裡にて召しつかはるべき。縱ひその身の素生をかくして。つかへまつりし事ありとても。尾張にかへりてうみたる子の。はじめなるは女の子にて。次に生れしが秀吉ならば。亦かの天子の落胤なりといひけんことも。齟齬すなり。又持萩といふ人は。當時公卿の名號を出だしたるものに所見なし。か丶れば明眼に給はりし宮女云々の一說は。菅丞相を文德帝の落胤なりといふのと。平相國入道を白河院の落胤なりといふものと相似たり。皆是當時の稗說にて。鑿空無根の言なるべし。人の好めるに走りて。今も昔もか丶れど。菅丞相は大賢なり。平相國は將種なり。豊太閤は英雄也。至尊の落胤ならずといふとも。誰かこれを賤むべき。思はざること甚し。只これのみにあらずして。平大臣宗盛公をば。笠張の子なりといへり。その人暗愚なるときは。將相貴介の公子なるも。これを匹夫の子なりといひ。その人賢良英雄なれば。儒官武士匹夫の子をも。これを天子の落胤とす。世の褒貶は私議に起り。是非は成

太平記にいへるが如く。天文丙申の年に生れ給へば。猿に因みし名にはあらぬ歟。かの記なる略傳には。童名を猿といふといへり（本文は下に抄すべし）猿といひしは。綽號にて。日吉といひしは童名歟。そを辨ずるよしなけれども。日吉は即比叡にして。原山王の山號なれば。亦是猿にちなみあり。（いにしへは吉をエとよめり。よりて比叡を日吉。澄ノ江を住吉とも書けり。後世々の訓讀を失ひしより。日吉をひよしとよみ。住吉をすみよしと唱ふるは。皆あやまりなり）又俗說に。秀吉の面貌の猿に似たりといふものあれども。その肖像を今も見るに。まさしく猿に似たりとはれもほえず。稚き頃より小ざかしく且その本命丙申なれば。里人の綽號して。猿といひしといふ說を穩なりとすべきにや。されば信長公の罵りて猿冠者と呼び給ひしも。世の言くさによられしならん。かゝれば猿といひしより猿にちなみて。日吉といふ名さへ作り設けたる。當時好事の所爲にあらぬ歟。これも亦しるべからず。そはとまれかくもあれ。成形圖說に。一書を引きて。秀吉公の父の名を木下彌介としるしたる彌介は。彌右衛門のあやまり。その證は

東國太平記（一巻）に云。傳曰。秀吉は氏姓不レ詳。大德ヲ賞センガ爲ニ。種々ノ奇說ヲ記ストイヘドモ。皆不レ信。（中略）或說曰。秀吉父ハ本織田信秀之鐵炮之者ニ。木下彌右衛門ト云フ人ナルガ。奉公ヲ辭シ。其在所ナル尾州愛智郡中村ニ歸住ス。同母ハ同郡御器所村ノ人ナリ。持萩中納言ノ息女ナリトカヤ。其故ハ中納言罪有リテ。尾州持雲之里へ配流セラレ。息女一人有リテ。二歳ノ時。中納言卒去セラル。依之。後室ハ娘ヲ誘ヒテ京へ上リシガ。年經テ洛陽兵亂起リ。在京成リガタク。ヨリテ息女十六歳ノ時。又尾州へ下リ居玉ヒシガ。十八歳ノ時。彌右衛門ニ嫁シテ。女子一人ト。其次ニ天文五丙申春正月元日ノ朝。男子ヲマウケ給フ。是則秀吉ナリ。童名ヲ猿ト云フニ付ケテ。種々異ノ說アリ。皆不レ實。唯中年ニ生レ給フニヨリテナリ。父母何トナク。其名ヲ猿トヨバレシナリ。面貌モ自然ニ猿ニ似テ。又仕業モコザカシク猿ニ似給ヒケルニヤ。此說尤可ナリ。秀吉ノ姉ハ。成人ノ後。同國乙之村ノ民彌介ニ嫁ス。彌介後ニ三好武藏守。三位法印一露ト稱ス。是則關白秀次

不爭の盛德のみ。仁者不富富則不仁。かの人道の人となり。淸白盛德あることなければ。末世に淸く盛りならんとよませ給ひしよしは當らず。盡信レ書不レ如レ無レ書と聞えたり。孟子の誨いへばさらなり。これらのたぐひ世に多かり

又豐太閤の父の事。昔よりして云るよしなければ。さまざまにいふものあれども。いづれも不經をまぬかれず。そが中にも。後奈良院の孕みたる宮女をもて。明眼院に給はりしより。その宮女は尾張なる筑阿彌に遣嫁せられてうめりし。その子は秀吉なりといへる說こそうけられね。いかにとならば。明眼院ははじめより。淨戒を保つによりて。妻を娶らざるものにしあらば。假ひ至尊の恩賞なりとも。宮女を給はらんとあるときに。辭し奉るべきことなるべし。さるをいなまずうけ奉りて。一兩月の程なりとも。其身はくす師の事なるに。その懷胎をしらざりしは。いといぶかしき事にあらずや。しかのみならで。はるばると遠く貧しき尾張なる筑阿彌に遣すなど。ことわりにたがひし事のあるべくもあらずかし。又その母の懷へ日輪の入ると夢みて。秀吉公をうみしといへるを。俗說とのみすべからず。はじめ朝鮮の役を起さんとせられしとき。異邦へおくり示されし書翰の中に。彼日輪の一條あり。かゝれば實にその事ありしか。さらずばみづから神にせんとて。このとき猛ニハカに云々と書き示させしも知るべからず

寬永の末のころ。羅山林先生台命によりて。書きつめたる將軍譜にも。これを載せて云

秀吉不レ知二其所一レ生。或曰。尾張國愛智郡。中村鄕筑阿彌子。其母夢三日輪入二懷中一而生レ之。故名二日吉一

これも當時の小說を取られたるものながら。これより外に正文なし。しかれども世の人の。秀吉公の實父の名をだに知りたるものゝあることなきに。まいて末世にその母人の夢ものがたりを誰かしるべき。よりて思ふに。秀吉公の幼名を日吉といひしが實事ならば。東國

病ならずやとあり
此子二つと申しけるに。父とゝもに南おもてに出でゝあそびける。此子はゝがひざによりをり。ひろえんをはひありきけり。比は九月中旬のころ。南面のまがきに薯蕷はひかかり。その蘇なりさかりたりけるを。廣清これを見て
いもが子ははやはふ程になりにけり
とくちすさみければ。此母この子をいだきとるとて
今はもりもやとるべかるらん（已上德大寺實定卿舊都月見の段に見えたり）
又今物語にもこの事見えたり云。小大進と聞えし歌よみ。いとまづしくて。うづまさへ參りて。御前の柱に書きつける歌云々。程なく八幡の別當光清に相具して。たのしく成りにけり。子などいできて後。もろともに居たりける所。近き所にいものつるのはひかゝりて。ぬかごなどのなりたるを見て。光清
はふほどにいもがぬかごはなりにけりといひければ。程なく小大進「角
今はもりもやとるべかるらむ
この連歌は。菟玖波問答にも見えたり。これらは後のものながら平家物語にすら。異說ある事右の如し。かゝればぬか子の連歌をもて。清盛公を白河帝の落胤なりといふ說は。疑ふべく信ずべからず。譬へば源賴政卿化鳥を射ける勸賞に。あやめといへる宮嬪を賜はらんとありし時（さみだれに池のまこもの水まして。いづれあやめとひきぞわづらふ）よみけるよしは。平家物語。源平盛衰記。その他の冊子にも見えたれど。無住法師が沙石集（卷五）には。故鎌倉の右大將家。あやめといふはしたものゝ美人なりけるを。梶原三郎兵衛尉に給はらんとありし時。梶原すなはち云々とよめりしよしをいへり。但し歌の上の句。沙石集には。薦草（コモ）あまりの涙に茂りあひてとあり。無住は俗姓梶原の族なれば。彼集にいふ所をもてまさしとすべしと。先輩のいへるが如し。只是のみならず。清く盛れるとある御製によりて。清盛と名のりしといふことも信がたし。平家は貞盛より以來盛をもて二字名の下に置くこと珍しからず。さるにより清盛の清盛と名のれるならん。別に意味あるとしもおもはれず。もしその字義によりていはゞ。清白をもて後々まで盛りなりとせらるゝものは。無爲

惜ならば。さと位牌なども取り建てらるべきに。其事も聞えず。何れにも筑阿彌は。本生父にあらざるを己もしり給ひしなるべしといへり下略

解云。これらの說はふるくより世の人口に膾炙したり。しかれども平相國、豐太閤を天子の落胤なりといふがごときは。疑ふべく信がたし。よりて竊にこれらの說の出づる所をおもひみるに。かの平相國入道は。老後にこそわろくはなりたれ。保元。平治の擾亂には。功ありて不義あらず。就中平治には。信賴。義朝を討滅して。兵馬の權を執りしより。既に天子をさしはさみて。おのがまに〳〵せざることなく。富は三十餘國をたもちて。位は人臣の上を極め。遂に天子の外戚とさへなりにたり。源平兩家の始まりしより。かゝる例のあることなければ。猶その素生を至尊にし。且その人を神にせんとて。不經の言のいで來たるにや。按ずるに。彼いもが子の歌の出處は。只この一本のみならず。れのれ往歲考異の編あり。今錄すること左の如し

阿彌陀寺本平家物語

この書は　長門なる阿彌陀寺の什物なり。坊間に寫本にて流布すなる。長門本平家物語と同じからず。群書一覽を著したる。尾崎雅嘉もこの書を見ざりけるにや。平家物語。梶原が箙の梅の歌のくだりに疑ひをしるしたり。學者よろしく辨ずべし

に云。鳥羽院の御內に。小大進の局とて居けるが。いさゝかなる事によて。御內をすみうかれかたへんとなる處に。かすかなるすまゐしてぞ居ける。あるとき小大進の局。うづまさにまゐりて。七日こもり。我身のありわびたる事をぞいのり申しける。七日にまんじけるあかつき。下向せんとての夜半ばかりに。やくし十二せいぐわんの中に。衆病悉除のたのもしきをれもひ出だして

南無やくしあはれみ給へ世の中に
住みわびたるもおなじやまひぞ

とよみてまゐらせ。下向して十二日とまうしゝに。やはたのけん校廣淸に具そくしてうけたる子なりまうけたる子なりとは。待宵小侍從が事といふなり。これまでは著聞集。その他のふみどもに見えたるも相同じ。但し右の歌の下の句あり。煩ふも

るべき便宜もなかりけるが。ある時白河院くまのへ御幸なる。紀伊國いとり坂といふ所に。御こしをかきすゑさせて。しばらく御休息有りけり。其とき忠もりやぶにいくらも有りける。ぬかごを袖にもり入れ。御前へ參りかしこまつて

いもが子ははふ程にこそなりにけれと申したりければ。院やがて御こゝろ有りて。たゞもりとりてやしなひにせよとぞ付けさせまし〳〵ける。さてこそわが子とはもてなされけれ

此わか君あまりによなきをし給ひしかば。院きこしめして。一首の御詠をあそばいて。下されける

夜なきすとたゞもり立てよ末の世に

清く盛れる事もこそあれ　已上平語○源平盛衰記に。載する所左に同じ。但その文に小異あるのみ

それよりしてこそ清盛とはなのられけれ。　又成形圖記巻二十二山津芋糠子の條下に。右の本文を略抄引用して　曰。臣國柱按ずるに。世に不出非常の人。必その本生父の詳(サダカ)ならぬぞ多かる。豊臣秀吉公の平清盛に似たるにや。一書に太閤秀吉の父測(シレ)ずといふ。はじめ馬島明眼院といへる者あり。天子の御眼病を療治しまゐらせしかば。叡感のあまり宮女を明眼に賜はりける。此宮女天子の幸を受けて懷胎なり。是は後奈良帝の御宇の時の事にて。明眼てふ名も後に賜はりし名にや。始より宮女有身の事もしれざりしにぞ。しかるに明眼は淨戒を保ちて一向に妻を納れず。この宮女を尾州愛智郡中村の住人筑阿彌に與へけり。遂に筑阿彌許にて出生せしは。即秀吉なり。一說に。筑阿彌始中村彌助昌吉と號す。故に世には王氏の裔にいひなせるもあり。又俗說に。筑阿彌が妻。日輪懷に入ると夢みて孕み。誕生ありし故。童名を日吉丸と號すなどあるも。天子の御種を宿せしをいひなせるにや。太閤記などいふ草子には。其母は持萩中納言保廉卿の女なり。天文丙申正月元日誕生と記せり。一說には。信長の足輕木下彌助といふものゝ子なりとあり。然れども。秀吉の信長に仕へし次第を見るに。木下彌助が子ならば。始より信長に仕ふべき事なり。又筑阿彌の秀吉における。我が子のあしらひとも見えず。僧にもなさんとせし程に。秀吉父の所を逐電せられし事あり。且又秀吉一天下を掌握せられての後。親の廟所とて中村にもなく。又墓所もしれず。秀吉の父

かへされ給へは　冬ながら　春かとぞ思ふ
春來れは　あつまのさたを　ことさへぐ
えぞに傳へて　えぞ人の　うちもあほぎて
たのもしく　れもはんのみか　れしなべて
志るも志らぬも　ひな鶴の　千とせの後も
龜の子の　よろづよまでも　松竹の
さかゆるまゝに　かぎりなき　北のまもりは
君ならで　誰やはあると　かくばかり
ことほぎまつる　ことの葉に　よむともつきじ
さきくさの　さきくありける　ことのみにして

反歌

みちのくのえその高濱あれぬとも
　　立ちかへる浪の花ぞ目出度

曩に老侯より家歳に賜はりし大福米は。後の耽奇に出だすべし

文政八年七月朔　琴嶺　瀧澤興繼謹誌

○平豐小說辨

解云。小說野乘の信じがたき。誰か董狐の言を俟つべき。志かるになほ世の讀書の人。唯その舊記に因循して。曉らざるもの多かるも。むかしは井澤谷の兩先生。をさ〳〵これを辨じたり。されども言に當否あり。猶且遺漏も少からず。抑中つころよりして。かの平相國入道を白河帝のおん子といひ。又豐臣太閤を後奈良院の落胤なりといふものあるはいかにぞや。これらを辨ずるものしもあらねば。今その異同を折衷して。世俗の迷を解かんとほりす。極めて烏滸のわざに似たれど。學は異を得て成るにあらずや。かゝれば竊にこの編に。平と豐との二姓を擧けて。もて題目とするもの志かなり

平家物語に云。相國入道淸盛公は。只人にあらず。まことは白河院の御子なり。そのゆゑは。永久のころほひ。平忠盛東山祇園の片ほとりにて。あやしの法師を生ながら捕へたりけるけん志やうに。白河院御最愛と聞えし。祇園女御を忠盛にこそ下されけれ。此女房はらみ給へり。うめらん子女子ならば朕が子にせん。男子ならば忠もりとりて弓とりに志たてよとぞ仰せける。すなはち男をうめり。ことにふれてはひろうせざりけれども。内々はもてなしけり。この事いかにもして奏せばやと思はれけれども。志か

下代

鹿能與七

澤田忠五郎

安保佐左衛門

松村銀左衛門

右大福米於二簗川御役所一改之

但入二御覽一候に付。取出之。其後又納置候

樣仰に付。御藏へ納置之

家嚴既にこの福米の感あり。且老侯の愛顧を蒙り奉るも。はや年ごろになるをもて。文政五年の春たつころ。ことほぎのこゝろをよみてまゐらせし長歌あれば。ちなみにこゝにしるす折。をこなせそとてとゞめられしを。猶やみがたくて。ものすといふ

こたび舊領にかへらせ給ふことほぎのこゝろをよみてたてまつる長歌

瀧澤馬琴

みちのくの　えみしの國は　くさのきぬ
まゆつらなりし　なめ人の　たけきこゝろに
けものなす　おのがまに〱　おこなひて
親をれやとし　したはねば　君をきみとし
いやまはず　家しもあらで　をちこちに
あさりすなどり　朝なゆふな　ふす矢さつ弓
とりはこり　そむきまつるを　みかどより
いくさのきみを　またしつゝ　うたしたまへば
したがひつ　わかはみたれて　としわまた
みつきをたえて　ともすれば　青人くさを
ほふりたる　嘉吉のとしに　わかさなる
たけ田のとのゝ　しらま弓　はる〱みちを
ふみわきて　かゆきかくゆき　うちをさめ
をしへみちびき　まつりごち　しりそしつめて
常磐なす　松まへの城に　百とせを
よつかさねつゝ　いそのかみ　ふりにし事の
いやたかき　御代にきこえて　いやちこに
遠つみおやの　うるはしき　いさをもつひに
なまよみの　かひなきまでに　まかつひの
そこなひけらし　ものゝふの　やな川へとて
月も日も　うつればかはる　しまつ鳥
うかりける世に　よろこびの　時は來にけり
ゆくりなく　もとのさかひに　もとのごと

く。小大となく。慶祥すべてあまりあり。かの大福の米の名のむなしからぬも奇といふべし。件の瓶に附けられたる寛永以來の記錄に云ふ

大福米一瓶

此米　公廣尊公御在世。寛永十七年庚辰年春二月廿二日。沸ニ出蠣崎主殿友廣之家一。而後至ニ五月朔日一。友廣奉ニ獻之一。則被レ納ニ御穀藏一者也

寛永十七年五月吉日　封之畢。與繼云。傳に公廣朝臣は。松前家第七世さいふ。いまだその詳なるをしらず

此大福米寛永十七年二月廿二日。入來萬吉長久

明和四年丁亥十一月改而納之

御勘定奉行

青山園右衛門

因藤與惣治

小林兵左衛門

御鍵取

和田甚八

川村品右衛門

安永元年己十月五日より大福米御鍵取

川村左七

工藤庄左衛門

此大福米寛永十七年二月廿二日入來萬吉長久

文化十三丙子年六月四日改之

御勘定奉行

近藤兎毛

和田文藏

蠣崎喜惣治

工藤左太郎

明石寅次郎

下代

鹿能與七

右大福米於ニ簗川御役所一改之

大福米

此大福米寛永十七年二月廿二日入來萬吉長久

文政元戊寅年十一月二十一日改之

御勘定奉行

和田文藏

蠣崎喜惣治

工藤左太郎

明石寅次郎

三月廿二日。ゆくりなく松前の采地を召しはなされて。奥の伊達郡梁川へ移され給ひしとき。彼大福米をも梁川へ運送せしめ給ひしに。その米は近きころ迄。もとのまゝにてありけるに。このとき見れば。虫ばみ朽ちて米粉（コメ）の如くになりしもの。既になかばに及びしかば。その朽ちたるを篩ひ祛（ステ）て。そのまたき米をのみふたゝび瓶に納めさせて。梁川におかせ給ひき。かくて文政元年の冬十一月廿一日。松前家の勘定新役の者。倉廩中なる米穀を展検することあるにより。大福米の瓶を見て。未だその事をしらず。則これを主公に訴ふ。主君云々と説き示させて。封をきらせて見給ふに。曩に篩ひわけしより。十ヶ年にあまれども。一粒も損ずることなく。あまつさへいたく殖えまして。瓶七八分目になりにたるを。章廣朝臣見そなはして。且驚き。且悦び。次の年の春のはじめに。その米を幾合か。梁川より齎して。老父君道廣朝臣へ云々と告け給へば。老侯怡々斜ならず。昔よりして。大福米の瓶の封皮をゆくりなく披く事あるときは。吉事ありとか傳へ聞きたり。しかるに。吾家舊領にはなれしとき。この米過半減少せしに。今又殖えしは故こそあらめ。賀すべし〳〵と宣ひし。そのよろこびの餘りにや。このごろあわたゞしく使者をもて。己が父にその米一包を贈り給はり。この米は箇樣にと。その來歴を示させて。件の瓶に附けおかれし舊記錄。たちもなく寫しとらして給はりければ。家嚴しきりに嘆賞して。かゝれば今より遠からず。大吉事あらせ給はん。いにしへもさるためしあり。その事どもは云々と。則上に錄したる天智紀をはじめとして。和漢の故事を抄錄しつゝ。をさ〳〵ことほぎまゐらせし。これより後わづかに三稔。文政四年の冬十二月七日に至りて。かのおん家にゆくりなく。こよなき大吉事あり。松前の舊領を元の如くに返させ給ふ台命を蒙り給ひて。おなじき五年四月十五日に。志州章廣朝臣父子（是より先に。嫡男千之助殿任官あり。主計頭になられたり）もろともに歸國の御暇を給はりて。同月廿八日に。江戸の邸を發駕あり。既にして五月下旬に。松前の城に着き給へば。君臣上下れしなべて。みなとし來の愁眉を開きて。笑坪に入らずといふものなし。これに依りて。大福米をも又松前へ運送せしめて。舊所の倉に藏めらる。この時にして。事毎に公私とな

尺なり。長さ四五尺に紬を織り。蘇方木を以て赤く染め。その儘單にて用ひ。老若ともに是を前にて結ぶ。男は眞を入れ。くけたる帶を結びたるもありといへり

解云。これも亦帶かけの遺風なるべし。今佐渡にては女の帶の幅廣きをもて結ふ故に。帶ひらをば竪にたゝみて。その帶にはさむなり。又八丈島なる女は。いにしへの帶かけをやりて帶にせしより。たけをば長くせしにやあらん。孤島の他鄉の人をまじへず。こゝをもて古風の存すること多かり。此他五島平戶などの風俗をも訪求せば。かゝるたぐひ猶あるべし。抑。予が帶かけ考は。兎園にのせぬ別錄なれども。遺忘に備へん爲にして。且寫しとられたる一兩君に告けんとていふのみ

文政八年秋七月朔　　玄同　瀧澤解識

○松前大福米

いにしへより仁人義士貞婦孝子の天感によりて。或は米穀。或は錢帛の。不慮にその家に涌出せし事。和漢にためし少からねど。正しく國史に載せられしは。書紀天智紀云。三年冬十二月。淡海國言。坂田郡人。小竹田身之猪槽水中。自然稻生。身取而收。日日到レ富。栗太郡人。磐城村主殷之新婦。床席頭端。一宿之間稻生而穗。新婦出レ庭。兩箇鑰匙。自レ天落レ前婦取而與レ殷。殷得ニ始富一。これらは遠く見ぬ世の事にて。いと疑はしく思ひしに。近ごろ松前の藩中に。よくこれと似たる事あり。その由來を傳へ聞くに。寛永十七年春二月廿二日。松前の家臣蠣崎主殿友廣の家に。米數升涌き出でけり。是よりして或は一升。或は二升。日々に涌出せずといふことなし。かくてこの年の夏四月下旬に至りて。その事やうやくやみしかば。友廣あやしみ。且祝して。大福米と名づけつゝ。主君公廣朝臣に進上して。ことのよしをまうしゝかば。人みな驚嘆せざるはなし。主君すなはちその米數斗を受けとらして。一箇の瓶にこれを納め。又その事を畧記せしめて。倉廩中に藏め給ひぬ。その餘の米は。皆こと〳〵く友廣に取らせ給ひぬ。これより後の世に至り。不慮にその瓶をひらかせて。その米を見給ふに。絕えて虫ばみ朽つることなく。且遠からずゆくりなき吉事ある事もありけり。かゝりし程に。當主章廣朝臣（公廣朝臣より八世歟）家督の後。文化四年春

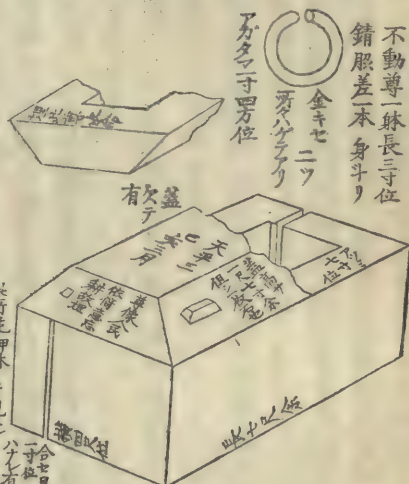
弟松之助が。王子權現の社頭と。十條村のあはひにて。土中より掘出せし黄金佛なる觀世音の事のくだりに。これをも併せ記すべきを忘れたれば。別に出だせり。按ずるに。白石先生の琉球事略に載せたりし林太夫が事と。佐藤木工左衛門が事と。よく相似たり。林太夫が溺れしとき。とり携へしは梅の枝にて。感得せしは天滿宮の木像なり。又木工左衛門が溺れしとき。堰留めたるは柳にて。感得せしは金の觀音なり。木は東方春の色。梅は菅家の遺愛たり。金は西方秋の色。又楊は觀音に因みいちじるし。これ彼共に奇といふべし

附けていふ。曩に予があらはしたるひやうし考。及圖説にも。松前にてイタヤといふ樹未詳。木蓮をイタヰといへば。これにはあらぬかとしるしゝは。猶ひがことなりき。再按ずるに。北海隨筆に云。楓を蝦夷人はタラペニといふ。松前にてはイタヤといふ。本邦の楓より大葉なりといへり。（下の巻夷言の條下に見えたり）これにより。イタヤは楓なるよしをしるものから。猶心もとなければ。いぬる日松前家の醫師牧村右門訪ひ來りし折。この一條を擧げて質問せしに。牧村が云。イタヤは即𢍁楓の事なり。その葉はよのつねなる楓より大きし。その樹松前に多くあり。蝦夷地にはいよ／＼多かり。よりて松前にて薪にするは。皆イタヤなり。凡ひやうしを造るもの。材竈木(マキ)などをもてすれば。ひやうしは必イタヤにて造ると思ふものもあらん。その木に拘ることにはあらずと。こともなげに答へらる。よりて思ふに。松前にてイタヤといへるは。大和本草に。その葉を圖したる大機(オホカヘテ)のたぐひなるべし。又ひやうしの綱によるといふ。シナの事をたづねしに。牧村が云。シナといへるも。木の皮なり。その皮をもて索(ナハ)にすれば。麻よりはなか／＼につよし。松前にてシナを文字に极と書くものもあり。當否はしらず侍りといひにき。この兩條はひやうし考の圖説の末につけ紙して。ゑるしおかれんことをねがふかし（今按ずるに。正字通极音笈。驢背上木以負物なり。极即极板或作笈と見えたり。かゝればシナに极と書くことさ。その義にかなはず。當に椴に作るべし）又いふ。今茲五月のはじめにやありけん。倉卒に書きつめたる拙者の帶かけ考にも。遺漏ありけり。伊豆國海島風土記（下の巻）に。八丈島なる男女の風俗をゑるして云。女の帶は幅壹

月中旬領主へ訴出候三月十九日に相越一見いたし候處。石棺圖の如くミカゲ石のやうにて。内の方は至りてカタク。外は水氣を持ちボロ／＼致すやうなり。天平三丶下に。何か文字體のもの見ゆ候。己亥の中にもれなたくあやあり。隨分古く相見ゆ申候。塚の大さ敷凡十間四方位。高一丈三四尺も有るべし

不動尊赤銅にて鑄ものと見え候。所々すりはがし申候

アガタマ金キセ殘り見え申候。右二品は隨分古く相見え申候

脇差は信用しがたし

右一條は上州なる從弟の方より。認め來りしまゝをしるし出だす。輪池翁のしるし給へるにあはせ見給へかし

乙酉初秋初五。蚊にさゝれ／＼燈下にしるす

文寶堂

○靈救水厄の金佛觀世音の事に付。文政二年四月七日松前家臣佐藤隼治より。君公へたてまつりし書狀の寫 イタヤカケ シナ帶 追考附

寬文二年壬寅九月廿七日。松前東蝦夷地シコッ下武川の内。キナオシと申す村にて。私歷代の内佐藤木工左衛門と申者。川流れいたし。柳の根に止まり候處。蝦夷共集まり引き揚げ候節。兩手に土を握み上り。其節手に握り候土の内に。觀音の金佛有之候處。同所へ祠を建て。右之金佛松前へ持參。于今所持仕候。寬文二年より今文政二年迄。凡百五十年餘に可相成哉と奉存候。右木工左衛門其町御奉行相勤。御同所出火之砌。立腹仕候由。松前年々記に有之樣覺え罷在候

卯四月七日　佐藤隼治

解之前會に披講せし。巣鴨の町醫大舘微庵が

浄瑠璃を語きしならんとの取り沙汰にて。浦太夫追日平癒せしが。其後は太夫をやめ。外のなりはひして世を送り。程へては折にふれて。人の望に應じてかたりしこともあれど。たえて業とはせざりし。實に安永年中の事なりとぞ。（岸和田藩中中茂大夫談　同藩三宅定昭が筆記）

○上野國山田郡吉澤村堀地所見石棺圖

唐金不動尊　たけ壹寸五分。臺座より火煙先まで貳寸四分。右一體鑄之中程金箔の光相見。臺に書物切付有之。但小像故不動不分明

赤がねの輪一　差渡し壹寸壹分。太さ壹寸廻り右は鑄懸り貳分四方程金きせ有之

脇差身計　長壹尺貳寸二分。無銘鑄厚く。しのぎ分り兼

御領分上州山田郡吉澤村。學音寺持地百庚申塚有之。百姓菊太郎心願有之。石坂拵度由にて。當三月七日庚申塚へ参り。石集候處。庚申塚東の方少々の崕（キリキシ）有之。墝所石數多く相見候間。堀出候處。四尺計掘候へば。左右大石にて積立候。石棺體之物出。其中より右之品々出申候これ村役人より領主への屆出なり。五月末の事なりとぞ

尊像人民
依倚意志
耕故埋

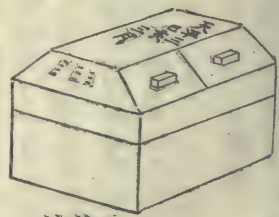
行智曰。倚依は歸依なり（集韻倚同寄）上州人はエをイといふ。江澤をイサハ。鰕をイビといふ類なり

輪池曰。天平三は辛未なり。天平寶字三は己亥なり。予その搨本を見しに。筆力書式ともに。その時代のものとは見えず。疑ふべきなり。行智曰。天正三乙亥なれば。天平は天正の誤寫。己亥は乙亥の誤字なるべし。輪池曰。搨本につきて見るに誤字にはあらず

乙酉六月　輪池再記

これは乙酉六月の兎園會の附錄なりとぞ

○石棺圖別錄

右文政八乙酉年春三月。黑田三五郎樣領分上州山田郡吉澤村の内に。數十五ヶ所の塚あり。其内親塚字は七日市と申處を掘候へば。圖の如き石棺出づ。同

くせる者有り。五畿內にて十人のかたりての一なり。常に此佐野村より大坂の座へかよひて。業とせしが。一日浪華よりの歸途佐野村は。岸和田城をさる事五十丁道。貳里とぞ。大坂をさる事をなじ道法九里許夜に入りて。同國泉郡布野といふ所を通りしに。布野は浪花より紀州への往還にして。高石といふ所の三昧寺の有るところなり。三昧といふは畬埋所をいふ。高石は古たかしといふ。即高しの濵なりふと人と道づれに成りしに。一人のいふ。先刻より說話を承るに。音に聞きし浦太夫丈のよし。自分はこの布野の下在なる此邊にては。山の在方を上と云ひ。濵の方を下といふ某の村の者なるが。此所にて行き逢ひしは。幸のことなり。何卒今より我方に來りて。一曲をかたり聞かせ給はるべしといふ。浦太夫何ごゝろなくうけあひて。其家に伴ひ行きしに。大なる農家にて座しきへ通し。休足させ置き。その內に大勢あたりの者寄り來りて。座に滿つ。主人盛に抔盤を待ちて酒肴を勸む。浦太夫いへるは。おまりに多く飲食をなせば。飽滿して淨瑠璃をかたるに迷惑なり。先語りて後に給はんとて。一二段かたりければ。坐中ひつそりとして感に堪へし有りさまなり。又暫く飲食して。大に興に入りしに。坐客又々かたらん事を望む。則其乞に任せて。數段を語りしが。席上實に感服せしにや。息もせずひつそりとせしに心をつけて見過せば。人ひとりも居ず。眸を定めて四方を見るに。夜少しゝらみて。東の方明けかゝるに。今迄座敷なりとおもひし所は。あらぬ布野の三昧なりければ。仰天して歸らんとせしに。夜はほの〴〵と明けはなれたり。草ばう〳〵たる墓所なりけるに。ぞつとして早々家に歸り。狐に魅されしと心付に。夢のごとく飲食せしものはさだめて。世にいふ馬勃牛溲にこそとおもはれて。何となくむねわるしく。心も心ならず。恍惚としてたゝしからず。數日わづらひて打ち臥したり。其頃和泉國中にて。佐野の浦太夫は。狐に化されしか。狐に淨瑠璃を望まされしかと。一國の評判となる折しも。或人のいひけるは。其夜浦太夫に饗せしものは。あらぬ不潔の物にはあらず。その夜近村に婚姻の禮有りしに。其用意の酒肴膳部のこらずうせて。あとかたなし。さだめて狐狸などの所爲ならんとて。其家には別に飲食をとゝのへしと聞く。されば布野の三昧に魚骨抔盤引散らして。さながら人の飲食せし如く狼籍たりしとぞ。これをきけば。浦太夫が食せしは實の食品にて。野狐其藝を感じ。酒食をもてなし。

數百日按じけれども。終にうちつかざりければ。武者小路家（實陰卿）に參りて。かゝることとこそ侍れば。しろおほき事に侍れども。この五文字つけさせ給はんことをこひ奉ると申しければ。受けひかせ給ひぬ。日頃へてうかゞひければ。さま〴〵おきかへぬれど。心にかなはず。よりて法皇に（靈元院）うかゞひ奉りぬれば。數日考へさせ給ひぬれど。おぼしめしにかなはせられず。かやうのとは北野が得手なりと仰せ有りしなり。はやく祈り申すべしと仰せ含めらるゝによりて。いとかしこきことゝて。その席よりすぐに參籠して。七日こもりて。丹誠をこらしいのるといへども。滿ずる朝まで何の託宣もなし。こはいかにせんとなげきながら還向して。七本松の邊まで歸りける折から。七十ばかりの齡とみゆる社人三人。朝きよめして有りながら。この頃のことはおもひねになりしと物がたりし故。思ひ寢のと初五文字をれきて。吟じ見しければ。よく相叶ひたり。よりてまさしく天滿宮の御告なりと思ひとりつゝ。いそぎ神前に參り。ぬかづきてかへり申し。たゞちに武者小路家に參り。事のよし申しゝかば。御感有りて。やがて院參せさせひ給つけ（本ノマヽ）。御手奏せさせ給ひければ。叡感のあまり。御製を下し給はりぬ

賤のをの心をよするいせの海の
もくずの中に玉の有りとは

この御製傳聞寫の誤も有りや。うたがはし。自然齋其無法師者。勢州阿濃郡。津城下。俗姓菅原。世々豪族。口壯年厭塵紛。脫家累。晦跡京洛。志好和歌。後卜地西山法輪寺疆内居之。寶暦五年乙亥初冬。持齋不起。終及十一月廿七日泰然而逝。享齡七十一。孝子渾空著存不忘乎心。建碑舊廬之傍。叙銘靈龜山天龍資聖禪寺賜紫沙門堅翠巖撰。銘曰

生レ勢長レ京　賦性溫柔　菅原之裔　似續箕裘
厥行不玷　厥言寡レ尤　厥塵界艱　遁跡緇流
寓ニ情和歌一　讀書優游　水兮滔々　雲兮悠々

銘　權中納言菅爲成卿
篆　從三位淸原宣條卿
權中納言兼左衛門督藤原隆前書

○野狐魅人

和泉國日根野郡佐野村といふ處に。世にしられたる食野佐太郎といふもの。この村に住す。岸和田にて食野を佐野と稱す浦太夫とて。義太夫節の淨瑠璃をよ

尾十郎兼高。兼安の男今この庄の頭。知盛の男より廿九代の孫。權少輔平時賢といふとぞ
右一條はわがれる世の事にして。且もとかくれましまし丶ことなれば。その實否は今よりいかにとも定め難けれども。聊拙案を參考して異聞に備ふとあれば。萬壽寺の僧が口づからの物語
去月廿六日。京師なる戸田君の御もとより。祇園祭禮番付三葉を下し給はり。且鈴木氏の書物に。西原氏先日當所御通行之節。御方へも御尋被下。久々にて。旦那も拜顏被致。大慶奉存候。其節貴君御噂山々御坐候。しかし御城中故。緩々拜顏も不被致。殘念奉存候。當地御出立の砌は。雨天にて伏見乘船留り居。京地へ兩三日御逗留之内。四條雨蛤てんかく見世へも御立寄被成候よし。右田樂見世に餘程ふるきたうからし入。ヶ樣の形に。竹にて作り候もの。殊の外望の由にて。亭主にいろ〳〵掛合候へども。餘程むつかしく申。手に入り兼殘念の趣にて。京地出立致被候。此よし美濃守致承知。其後向々へ相賴。此程漸手に入申候。西原氏格別望故。追日大坂表柳川藏屋敷迄差出し置。幸便之節柳川表へ相屆候積りに御座候。此段御慰に申上候。又云。大坂表蒹葭堂。此程參り候間。耽奇の本爲見候處。殊の外歡。大坂表へ是非とも持參いたし候趣にて。壹本不殘貸遣し候。耽奇會は殊の外浦山敷樣子にて御座候。此段申上候と記されたるを見るにも。千里面談の心地ぞする。か丶ればこの二條及番付ともに。ひとり見過さんも本意なさに。けふのまとゐの諸君と同じくせばやとて。そのよしいさ丶か記し出でたるになん

文政八年乙酉七月朔　北峯　美成識

相月兎園

○自然齋和歌　輪池

いせのくにあの丶津にすめる川喜田氏。やまと歌に心をよせ。家業を舍弟と子と從者とにまかせ。壯年にて薙髮し。自然齋と號し。京に出で丶。洛外千世の古道にかくれ住みけるが。ある時

心の花を玄をりにて。夢にわけ入るみよしの丶山といふことの。ふと心にうかびつ丶。初。五文字を

一說に。帝實は女帝にて。此に隱れ給ひし時。山伏ありて帝に配して子をうみ給ふ。神子和尙是なりといひ。又扶桑僧寶傳に。神子禪師諱榮尊。號神子。法嗣聖一國師鎭西人判官康賴平公子なりとあれど。いづれもいへる處いたく謬れり。その由下にいふべし

肥後國五家の庄より。平家の末裔の人々。おの〳〵系圖を携へ。(この五家の人々の先祖は。帝につき隨ひ奉りし人なり。その先祖の名。かれて聞けるをもて末に記す)且金子廿五兩を奉納し。主人の年忌なれば。備へ奉るとて。來りて法會の中も。敬ひ愼み。事果てかへりしとぞ。此一條は浮きたる事にあらず。今茲三月廿日。一友人森某ぬし(柳川侯の藩士)を訪ひたるに。町野氏(同藩)の士來りていへるは。去年かの川上あたりの温泉に浴したるころ。一夕萬壽寺に宿りて。住僧と話し〻中に。をと〻しの事にて候。か〻る事ありしとて。上件のことゞもかたり出でたりと。親しく予にかたられけるを。記したるなり。文政三年六百年忌なれば。承久二年の崩御なり。文治元年壇浦敗軍の時。帝賓算八歲なれば。崩じ給ふ御年。四十三歲にてましませしなり。か〻れば帝の御子といふ事は。もとよりひがことなり。詳ニ云帝もし御年十五六歲にて御子をまうけ給ひ。その子はやく出家せば。承久二年遷化の時。廿七八歲なれば。さのみ年紀のたがひあるにしもあらず。且神子といふも巫女の俗稱。公主といふも秦漢のとき。帝姬の稱なれば。一說に女帝なりしといふこと。公主萬壽寺神子和尙の名號に據なきにあらず。又神子和尙を康賴が子なりといふを。寺說によれば謬に似たれども。畢竟寺說とても證文なき事なれば。いづれを虛。いづれを實と定めがたかるべし。譬へば。藤澤寺なる小栗十士の墓。佐野の天明に常世を祭りて。大平權現といふがごとき古跡多ければ。萬壽寺の事もうけられぬ說なれ共。異聞なり。かくめづらしきことを聞くも。兎園の一得にて。交遊の忠告とやいはん。歡ぶべしとぞ

さて肥後國に。當時五軒ありしをもて。五家の庄と呼べり。その人々は帝に隨ひ奉りて。かくれすみし處にて。しか呼べるなり。その五家の先祖の名代は。從四位下少將平知時。(知盛の男)左中將淸經。(小松の男)上總介忠淸。(闘八州の侍大將)越中次郎盛次。(平家四士之家)菊地次郎高直(外族侍)瀨

の儀は御免候へかし。誤り入り候とて。漢法をやめしとかや。評に云。この事は先輩既に物にしるししもあれば。作り設くことなるべし すべて手前勝手にあらぬ事は。日本の古格に任せ。勝手の事は異國の風をまねんとせしは笑ふべし。わが知れる人。親の死せしとき。三年の喪を勤むるとて。喪服様の物を製し。唐流は精をなしとて。喪中に酒を飲み。肉を食ひ。自如として平日のごとし。殊にしらず。禮の本文に。疏食水飲菓果を不食とあり。菓果すら食はざりし喪に。酒を飲み肉をくらふは何事ぞ。是等の事ども世に多し。抱腹云々

乙酉七月朔　　乾齋識

○養和帝遺事附雨蛤竹筒

文治元年源義經。平家の一族を壇浦に鏖にせし時。安徳天皇は二位殿の懐き奉り。神璽寶劍を身にしたがへ。海底に沈みまし〱けるよし。史にも記し。人口にも云ひ傳ふれど。或は阿波に逃れまし〱けるとも。又は日向にかくれ住み給ふなど。異説まち〱にて。いづれを是とも定めがたし。しかるに肥前國に。川上といふ所あり。そこに水上山公主萬壽寺といふ寺院あり。開山を神子和尙といふ。これ則安徳天皇にてわたらせ給ふとなり。寺傳に云。昔安徳天皇西海にて戰ひ敗れしとき。事を入水に托し。二位尼及郎等五六輩ともに。此川上に逃れ來り。かくれ住み給へるか

閑田耕筆に。緒方三郎は無二の平家の方人なりしに。俄に心がはりせしといふは。實は平家の勢ひ。とてもさゝうべきにあらぬを知りて。帝をはじめ奉り。一門のしかるべき人々を。この五箇山に隱せるが爲の謀なり。その後つひに戰まけて。入水せるは。みなそのさまを眞似たる人なりといへり。この説によるときは。帝をはじめ奉り。この五箇山に來り。後に寺を川上に建たるならんと

帝御年二十になり給ふ時。建久六年出家し給ひ。入宋まし〱て。學問なるの後。歸り給ひ。此所に一寺を建て。萬壽寺といふ。寺内に寶劍堂といふものあり。こゝに寶劍を安置す。箱の長サ一尺五六寸計もありとぞ。古來より開くことなしといへり。これは三種の神器の一つにや。さらずば帝の帶ひ給ふものなるべし 寺の邊に。二位尼村といふ所もあり。かくて文政三年月日詳ならず神子和尙の六百年忌の法會を。萬壽寺にて執行せしに。

るは。大敵と小敵と戰ふ。小數の方勝つべしと宣ひしに。果たして小數のかた勝たれけり。近頃わが主君下莊の門前に甚しき鬪諍あり。大數の方は。長竿を持出で。且石瓦を頻に礫にうちけり。小數のかたは徐々と並居たりしが。その中一人剛勇の男短刀を拔きて。大敵の中に飛び入り。大に働きければ。大數の者ども。大に驚き。右往左往に馳せ散りけり。是わが親しく觀る所なり。しかれば則物の勝敗は。人心の誠と不誠にありて。人數の多少にあらざるなり

○腐儒唐樣を好みし事

或西方の大名に仕へて。三十人扶持を給はりし儒者あり。その名は忘れたり。この儒者何事も。孔子のごとくせざれば。儒道にあらずとて。沽酒市脯は食はずとあれば。酒もわが方にてかもし。鰹節も手まへにて乾させ。周尺にて諸物を揣へけり。家老の人意見せしめて。いかに唐樣を好めばとて。竊に傳へ聞くに。大小共に兩刃の劍を用ひらるゝよし。日本の劒術は。この國風に隨ふこそよけれ。且御邊儒をもつて仕ふとも。又是武門の奉公ならずや。縱文武周公孔子の世か。周なればとて。一切周の制にて濟さんと欲すとも。官途品級の次第。職掌の體などは。周禮にても考へらるべし。もろこしにてすら太古の事は。今日の用に當て考へとられざることあらんといふ。彼儒者答へて。好意寔に忝し。去ながら。周の代の事考へ得られざれば。漢の世の制を用ふる故。さしつかふることなしといふ。家老聞きてわざ笑ひ。智は非を淩ぐに足るといへるは。則御邊の事なるべし。今五穀を量らんに。周の制は考へがたし。漢の升をもて考ふれば。日本今の一合は。即漢の一升なり。漢書に牛一疋に三十六斛を駄すると見えしも。日本の三石六斗に當れり。御邊の月俸三十口なれば。これまで一ヶ月に四石五斗づゝわたしゝは。一ヶ年に五十四石の高なれども。周漢の制を好める故。扶持方も漢の升目を以て。壹人扶持は壹升五合なり。これを三十合にすれば。四斗五升なり。かくのごとくにしてわたせば。一ヶ年に五石四斗の高となる。十二ヶ月の內。大小のたがひはあれども。當月より四石五斗を四斗五升にしてわたす樣に。藏方に申し渡すべし。かゝれば御邊も漢法にて。扶持方をうけ取られ滿足なるべしといひければ。儒者大に驚きて。そ

へ引きとり程五郎は是まで不行跡により。家出してありしとぞさま〴〵療用しつゝ。本所邊なる修驗者名を詳にせずをたのみしに。右の修驗いまだ何とも告げざりしに。修驗は彼の蛇のたゝりの事。羽黒山に走りし事までとき示し。羽黒は神體白蛇にれはするに。却りてあしき事をせしといひけるとぞ。かくて程五郎が病苦日々におもりて。六月朔日にむなしくなりしかは。すなはち龍德院に葬りけり。初かの兩人が蛇を殺しけるとき。榮吉といふもの手傳しに。兩人が死せしよしを聞くと。やがて病氣づきてこれも危かりしを。漸平愈して。定火消の人足部屋にをるといふ。此物がたりは。柳川矦の中間部屋頭のものより。親しく聞きし人より傳へて記したるなり。凡物みな暗疑より病を生ずること。晉の樂廣が客の杯中の弓影を蛇なりとあやまり見て。病みし如きためし少からねど。抑この柳川藩のものども。三人まで鬼邪にをかされしも。亦一奇談なり

乙酉秋七月初八　　海棠庵再記

○勝敗不レ由ニ多少ニ之談

昔晉の智伯。韓魏の二家と志を合せ。趙襄子の軍を晉陽にて水攻になしゝ時。趙城の侵さゝるもの。幾に三版なりしに。襄子終に降る意なく。返りて水を智伯が陣に灌ぎしかば。智伯大に敗北せり。又西楚の項藉は。精兵若干にて。漢高祖の五十六萬人を敗り。漢の韓信は壹萬餘人の兵を帥ゐ。しかも水を背にして陣をとり。趙の陳餘が二萬人を暫時に打ち敗りぬ。我朝にても。判官爲義十八歳の時。終に十七騎にて南都法師二千餘人を栗栖山にて追ひ散らし。楠正成は百六十人にて。千劒屋に籠城し。關東の廿萬餘騎と二年の合戰あり。且落城はせざりしなり。大神君姉川の御戰。御勢五千にて朝倉の勢壹萬五千の兵を敗り給ふ。信長は三萬五千にて。淺井が三千の敵に突き立てられ。長篠の役に奥平九八郎は。至りて小勢を以て。長篠城に籠城し。勝賴貳萬を帥ゐて攻めたれ共。終に拔けざりき。これをもてこれを觀れば。軍の勝敗は。兵の多少にあらずして。人心の誠と。不誠とにあるなり。啻軍の勝敗のみにあらず。物皆然り。大神君竹千代君と申し奉りし時。五月菖蒲擊を御覽ありしに。その打合雙方東西にわかれ。いまだ戰始めざりしとき。竹千代君仰せられけ

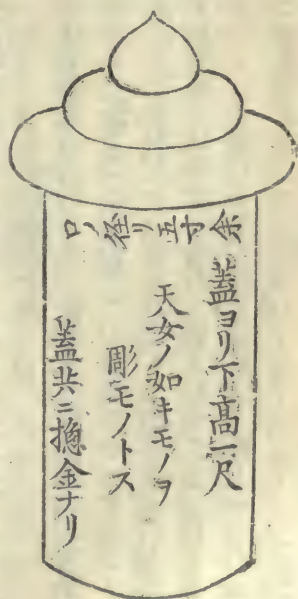
忠通公關白の時の事なり。文政八年乙酉まで。七百零七年をへたり。當時秦氏の人に高位のもの聞えず。散位の事はさま〴〵の說あれども。位の高卑に拘らず。冠位有りて官職なきを散位といふと。予は思ひをり。猶職事家にたづぬべし。秦氏は忌寸の姓にて。秦始皇の後なるよし。姓氏錄諸蕃の譜に見えたり。親任といふ名につきて思ふに。土佐の長曾我部などの上祖にはあらぬと。さばれ慥なる證を得ざれば。何ともいひがたし。當時熊野別當はいきほひあるもの丶よし聞ゆ。熊野別當堪增が爲義の婿になりしは。これより少し後の事なり。良勝はいづくの沙門ぞや。これも熊野の別當と。なほ考ふべし（著作堂主人追記）

○附錄蛇祟

文政八年乙酉四月廿七八日の頃。柳川矦淺草鳥越の中屋敷に住める火消中間千次郎。程五郎といふもの。田所庭中田字亭といへる茶屋のほとりにて。蛇の交接せるを見つけて。さん〴〵に打擲し。終に殺して。門前の溝へ捨てけり。（此時まで。蛇は死しても猶繩の如くによれて。はなれずと云ふ）かくて右千次郎。五月八日上野御成の節。上屍敷へ詰め。その歸より病氣づきて。甚苦みければ。彼程五郎は蛇のたゝりにやと察し。戶田川の邊に羽黑山といへるあるよし。（羽州羽黑の出張などにや）右にいたり堂邊の榎の虛(ウロ)中の水を乞はんとて。既に汲まんとしたるとき。釣瓶きれて落ちければ。いかゞせんとあわてしをり。寺僧立出で汝が祈る病人快氣すべからずと示しぬれど。兎にも角にも。水をば乞ひ奉らんとて。やうやくに得てかへり。千次郎に與へけれども。遂に五月十五日にみまかりぬ。（此千次郎は。川越在の產にてありし。その死せる時。兩手の指にて豆を拵へて果てしとぞ）淺草安樂院といへるに葬りしとぞ。扨程五郎は。その月廿日頃より。肩より腹へかけて痛むと覺えしが始めにて。日を追うて熱氣つよく。蛇の事のみ口ばしりて。狂ひ廻りしが。遂に走り出で丶。久保田矦の中間部屋に至り。それより淺草阿部川町龍德院（程五郎が菩提所也）といへるにゆきて。和尙に願ひけるは。おのれ頭に蛇とりつき。惱苦に得堪へず。あはれ御弟子となされ。髮を剃り給はれかしといひけるを。和尙は發狂にやあらむとて。程五郎が父淺草六軒町の組の頭取角十郞といへるもの。これも檀家の事なれば。則呼びよせて問ひしを告げゝれば。やがて角十郞方

日にして。その春彌生の廿日より。あまたの鳥。この處へ飛び來りて。人をおそれず。譬ば腐肉に蠅の集ふが如し。かくてこの日より次の日まで。銀器の缺けたりと見ゆるものを。數片掘り出だしけり。されば又廿二日に至りては。鳥の聚まることいよ〱多く。空中に飛び翔りて。翅をたゝき。嘴を鳴らし。殆。人の頭上を啄まんとするの勢なれば。心よはき雇夫等は。迯げ走りてこれを避け。壯々なるもの共は。怪み疑ひながら。そがまゝに土石を穿つに。その日も既に亭午になりしころ。土中より一つの瓷顯れ出でけり。そのさま今の世に見なれざる器なれば。人みなうちよりて。これを見るに。その瓷に彫れる文字あり。左の如し

熊野山如法經銘文
大般若一部六百巻
白瓷箱十二合
箱別五十卷
保安二年歳次辛丑十月　日
願主沙門良勝
檀越散位秦親任

この瓷中に黄金にて造れる圓龕一箇あり。其圖如下

此金龕の蓋をひらき見るに。内に閻浮檀金の阿彌陀佛の尊像一軀を藏む。御長け七寸。愛愍接取の慈眼あざやかに。瑞嚴殊勝の妖相尊くをがまれ。諸人奇異の思をなせり。先に得たる所の白銀の器とおぼしきものは。破れ損じて形全からぬも。取り集めて重さを量るに。八百目に餘れり。此度紀藩より修理の宰として。爰に來りし吏。石井傳左衛門といふ人。是を得て藩主に奉り。命を請はんと秘襲して。その月の廿四日に。本宮を發して府にかへれり
右一説は。藩にちなみある一友人に得たり
文政乙酉孟秋朔　海棠菴思亮記
解按ずるに。保安二年は鳥羽院の御宇にて。藤原

文政七年四月七日の夜。あやしき夢を見たり。たとへば。一つの山上に神人ゐまし。その側に人ありて神人に向ひて。日比信仰なし奉るものは。是にて候とまうす。その時神人のいはく。われ汝にさいはひを與ん。いよ／＼怠ることなかれと告げ給ふと見て驚きさめぬ。惣十郎奇異の思をなし。朝とく起きて。その妻にかくものがたり。みやしろを建てゝ祭りなんといへば。妻答へて。さるとは世間の聞えもいかゞあらん。心にて仰ぎ尊み給へといふ。その夜又妻が見し夢。夫につゆ違はざりければ。始めてその靈夢なるを語り。相共に謀りて。神祠を營まんとするに。夢中に見し處。惣十郎が本家なる。大琴村（本庄亀田矢島の界）の農民某が家の後の山に彷彿たりとて。先づ試に餅をつきて供しけるに。しるしありて牙のあとめきたるもの付きてあり。されば此處こそ神慮に叶ひつれとて。いちはやくみやしろを作りはじめしに。不思議なるは。その日よりはや詣來る人あり。全く秋田なる大平山より。神の移り給ふなるべし。かくて靈驗日々にいちじるく。響の物に應ずる如し。矢島にて女を携へ走りしものを立願せしに。おのれとかへり來つ。或は腰の立たざるもの。人に扶けられて詣でけるに。歸りには獨歩行くやうになり。又某といふもの。立願の事ありて。成就せば餅を備へまゐらせんといひながら。その事成就したれども。得備へざりければ。怨それが苗代を一夜に流されて跡なくなりし。その祟も亦速なれば。一人としておそれ尊まぬものもなし。近邊はさらなり。諸國より日毎に三四百人つゝ參詣群集して。さしもの邊鄙市をなし。彼惣十郎は別當して。自富を得ること大かたならずなん。右一條の話は當六月中旬。生駒家（矢島領主）の臣に。助川龍造に見も聞きもしつるなり。浮きたることにはあらずとて。同人のかたりしまゝをしるすにこそ

○土中出現黄金佛

今茲文政八年乙酉の春。熊野本宮社川除の堤を築かんとて。社境内の川上なる。大黒島といふ岩山より。大石を引き出だす。爰にあやしき事あり。石を出だす雇夫等。砂を穿ち磐石を割るのいとま。暫く勞を休めんと。側によりて憩ひ居れば。巖上の土石おのづから崩れ落ちて止まず。工人各その業をなす間は。土石崩るゝことなし。憩へば又崩る。かゝること數

いふ百姓。朝五時比。苗代を見んとて立ち出でゝ。こゝかしこ見過し居たるをり。青天に雷のごとくひゞきて。五六間後の方へ落ちたる様なれば。丈助驚きながらも。はやくその處に至り見れば。穴あり。手拭を出だしてその穴をふさぎ。おさへて廻りを堀りかゝり見れば。五寸程埋まりて。光明赫燁たる鶏卵の如き玉を得たり。これ所謂かね玉なるべしとて。いそぎ我家へ持ち歸り。けふはからずも。かゝる名玉を得たりとて。人々に見せければ。是やまさしくかね玉ならん。追々富貴になられんとて。見る人これを美みける。丈助もよろこびて。いよ〳〵秘藏しけるとぞ。此丈助は。日比正直なる故。かゝるめぐみもありしならんと。きのふ房州より來て。はが菴を訪ひける。堂村の喜兵衛といふ人の物がたりしまゝけふの兎園にしるし出だすになん

此かね玉の事につきては。いさゝか考もあれど。けふのまとゐのあるじなれば。ことしげくてもこらしつ。猶後にしるすべし

ことし乙酉の夏ほど。鰹の獵のありしこと。むかしより多くあらざる事なりとて。右の房州の客の語るをきくに

東房州　小みなと　内浦　あまつ　はま荻　磯村

浪太[ナフト]　天面[アマツラ]　大ま崎　よし浦　江見　和田

西房州　白子　千倉[チクラ]　平館　忽戸　平磯　千田

川口　大川　白有浦　野島　洲崎　館山

那古　多田羅

右は獵船の出づる所の地名あらましをしらす。壹ヶ處にて釣溜り（鰹の獵船を釣りためといふ）十五艘。或は廿艘ばかりづゝも出づる。中にも。あまつは二百艘も出づるよし。凡一艘にて鰹千五百本二千本位づゝ。六月六日比より同十四五日比は。毎日打續き夥敷獵のありし事めづらしとてかたりしまゝ。筆のついでにしるしおきぬ

文政八乙酉初秋朔　　文寳堂誌

○由利郡神靈

羽州秋田（佐竹侯封內）に。大平山といふあり。鎭坐の神を三吉大明神。三助大明神と號す。又土俗三助れ村。あるは福の神など唱へ。月の八日廿一日を縁日とす。しかるに同州由利郡知島領（生駒家封邑）下村づゝ大琴村の農民惣十郎といふものあり。その性質朴なるが。年ごろかの秋田なる三吉明神を信仰しけるに。いぬる

年をおひて進みて。京の智恩院になりて。聖譽大僧正とぞ聞えける

○古墳女鬼

江戸松島町家主吉兵衛悴
五郎吉事
幸　次　郎
酉廿歳

右之者。拾ヶ年以前文化元酉年春中。日本橋通り貳丁目善兵衛店忠兵衛方へ年季奉公に差遣。是迄奉公相勤罷在候。然る處。一昨年春中と覺ゆ。堺町勘三郎芝居見物に罷越候處。神田邊みよと申す。十六七歳位の女。棧敷に罷在候處。住所も不存者に付。芝居打出候之砌。相別れ申候。其後同年秋中と覺ゆ。又候勘三郎芝居へ見物に參候處。右みよ義も致見物罷在候間。猶又其棧敷へ這入合せ。其節も同樣之義に而相別れ。其後一向出合も不致。相過申候。然處。右幸次郎義當八月頃より濕刀瘡相煩。氣分あしく罷在候處。先月廿六日夜八時頃と覺ゆ。右みよ義幸次郎臥居候枕元へ參り。咄致候と夢の樣にも存候處。翌二十七日より同月廿九日夜。又々右みよ參候に付。宿へ付添可參とかねて支度いたし置。宿元を小用可致體に而出。往來等は不辨。同道致罷越候處。淺草今戸町無何心寺之垣を越え。墓場へ參り。石塔へ水手向候處。右みよ義見失ひ候に付。不計心付宿元へ可相歸と存候處。右體之義故證據に可致と。同寺垣にいたし有之候塔婆壹本引拔持歸り候途中。淺草田町に而夜明け。煮賣酒屋へ立寄り酒飲。猶堺町三線屋(本ノママ)へ隣の蒲鉾屋にて。かまぼこ二枚買ひ求め。主人方へ罷歸り申候。尤途中等に而。幸次郎みよと咄杯いたし候へ共。みよ義請答等は不仕候由に御座候

右之通風聞有之候に付。當人呼寄せ承糺候處。前書之趣申候に付。奉申上候以上

松島町
文化十年九月　　名主　五　郎　兵　衛

こは町奉行所へ訴狀のうつしなり

此後。幸次郎事とかく心氣不定故。親元へかへしけるよし。幸次郎主人忠兵衛妻の姉夫。元飯田町醫師本田雄仙の話なり

○金靈并鰹舟の事

今茲乙酉春三月。房州朝夷郡大井村五反目の丈助と

さけ。いしやませは。無といふこと。ひるかは嬉しきといふこと。てつひは肴といふことゝいふ

○北里烈女

天明の比。三緑山の所化に。靈瞬といふ僧あり。したしき。友にいざなはれて。よし原にゆき。玉屋の琴柱といふたはれめにあひぬ。此僧容顏美麗なりしかば。琴柱それにめでしにや。しば〳〵とはせ給へといふ。僧もとよりあるまじきことゝは思ひつれど。愛欲の情おさへがたく。ぬれぬさきこそとうつゝなくなりてかよふほどに。琴柱に身の上をとはれて。ありのまゝにかたりきかせたり。さらば末々は。たかき位にのぼり。よき寺をもたせ給ふべきやとゝふ。凡わがともがら。學文をはげみぬれば。こゝかしこにうつりすゝみて。幸あれば大僧正にもいたらるゝなり。しかしながらこがね乏しくては。すみやかにすゝみがたしといひしを。こまかに聞きゐたりしが。そのゝちとひし時。琴柱いふやう。えにしあればこそ。君がしたしみをうけまゐらせたり。これもすくせのことなるべしとて。一包のこがねを出だして。わたへ。これをもとゝして。かならずなりのぼらせ給へ。こよひをかぎりとして。こゝにも來たり給ふな。あだし女にも近づき給ふな。みづからはちかきうちに身まかり侍りて。君が身をまもり侍るべし。必わすれ給ふなといふ。僧も初はおもひよらざることゝて。いなみけれども。そのこゝろざしのまめなるにめでゝ。うけひきぬ。かくて日あらずして。琴柱みづから身にきずつけてまかりぬ。心のみだれしにやと聞きて。かつはおどろき。かつはかなしみ。法號をつけて。日々に回向して有りけるが。一とせばかり過ぎにしかば。去ものはうとき習にて。又友にすゝめられて。品川のあそびのもとにゆき。とかくして雲雨のちぎりをもよほす比。琴柱が在りし姿あらはれて。いかでちかひしことを忘れ玉ひしかと。いさむるかほばせ。恨骨にとほりしおもざしなりければ。おそろしく覺えてにげかへりぬ。日ごとにゑかうする事はをこたらざれど。年月をへて。又あそびのもとにゆくこと有りしが。かの幽靈いでゝいさむる事。前のごとくなりしかば。それよりまた〳〵不犯の身となり。勇猛精進なりしかば。

走りにかよひあてゝ見ろといふも。名詮自性なりと。後に人のいひしさぞ。延壽が菩提所は。日蓮宗深川淨心寺なり。戒名妙聲院誓音日延信士○是より先。延壽齋剃髮改名のすり物に。剃髮の剃を剃と書きたり。是も前兆なるべし　延壽は呼といひたるに。挑灯をもちし男驚き。こはいかにと立ちよりたれば。はやく駕籠を雇ひくれよといひて。二町程あゆみて駕籠に乘り。本石町鐘撞堂新道なる。我家へ來りしと聞きて。其まゝ息たえたりとなん。をしむべし〳〵

此延壽齋の一條は。前編の因にしるし出だせり

何ものゝよめるにか

いつきならつかるゝこともあるべきに　こは前生の因えん壽齋

又發句に

五月やみあといふ聲や聞きをさめ

文政八乙酉夏六朔　文寶亭記

○松前貞女

寛政の末の比。若狹國の人。松前にゆかんとて。敦賀より船に乘りたり。そのふねの内に。さた過ぎたる女一人あり。いづくよりいづくにゆくにかと問ひたれば。京より箱館のしらとりに歸るなりとこたふ。いかなるゆかりにて。京に在りしかとゝへば。ことなるゆかりもあらず。みづからは。ふるさとに在りし時。人につれそひしかど。故ありてわかれ。やもめとなりぬ。れやはふたゝび人にみえよといはれしがど。かたくいなみてのがれたり。みやこの見まくほりせしかば。ひとのまうのぼるとて。船にて能登國につきぬ。さて京にいりて。あき人の家より。つふねとなりて。一とせ侍りしかど。おもふほどは都の手ぶりもしられざりしかば。高倉さまに參りて。二とせつとめ。さて故鄕にかへり侍るなりといふ。それがづくりしからうたとて。その人うつし傳へたり

春盡早回一葉船　薰風拂淚向胡天

誰憐去程三千里　旅恨悠々碧海煙

又その國のことばにてよめるうた

春くればちようかい心ひるかして　霞のうちにちつふみえけり

ちようかいは已。ひるかしては悅意。ちつふは小舟をいふ

あぶらさけやくさけまでもいしやませは　ひるかてつひもなにゝかはせん

あふらさけは美酒。やくさけはねぞのにごり

のものなどあまた居合せたれば。忽とらへられ。盜みたる品を取りかへされ。からさめにあひて逃げうせたりしに。そのゝち鮫が橋のおかてふものに訴へられて。遂に召し捕れ。きびしく御吟味ありけるに。此者も夜分人を突くわるものなりければ。すみやかに其罪さはまり。江戸中引廻しの上。品川鈴が森にて。獄門にぞ行はれける。是四月十八日に召しとられ。同廿三日にかく行はれたれば。この後はさる事あらじと。世上安堵の思をなしたるに。はや其廿三日の夜。淺草西福寺門前にて。又候つかれたるものあり。牛込改代町飽桑橋にて。十八歳になる盲人。出刄庖丁にて突き殺されたり。これは五月二日の夜の事なり。同夜同所神樂坂上寺町にても。つかれたるものあり。いかなる事にて。何者のなすわざにや。猶々おほやけよりも。さま〴〵觸出だされし事共あれど。とにかくにしれがたし。其後自然と此沙汰やみたるに。又八月の末より春中のごとく。夜分非人或は盲人を突く事。所々にあり。かへす〴〵もいぶかしき事なり

此頃甲州にてあやしき法を行ひて。婦女子の膽を取りて。藥に用ふるよし風說あり

水銀蠟。當春以來賣買いたし候哉。有無の返答書差出候樣。名主より申し渡され。飯田町にても。町內の藥種や一同賣買不致旨。連印いたし。返答書を差出だしゝ事あり。後に聞くに。水銀蠟を妖術に用ひ。又は鎗にて突く事にも用ふるよし。依之右の御尋ありなんど。種々の說々あり

同年十月の中比より。少し此沙汰やむ。一體春中より。月の夜はしづかにて。暗夜に此事多くありける故。其比の落頌に

春の夜のやみはあぶなし鎗梅の
　わきこそみえね人はつかるゝ

月よしといへど月にはつかぬなり
　闇とはいへどやまぬ鎗沙汰

やみにつき月夜につきの出でざるは
　やりはなしなるうき世なりけり

これは切れさ。當酉五月廿六日の夜。豊後節淨瑠璃太夫清元延壽齋芝居よりかへるさ。乘物町にて。何者ともしらず。延壽齋の脇腹を一突つきて。いづくともなく逃げうせたり。

この時葺屋町市村座狂言曾我祭淨瑠理まてみたりしゑのちせりり名題嫐三人色地走と地走は血

火の用心大切は〱。上々様方へ御奉公〱れ客人さまは大切〱。わいらが親を孝行にしてやつたかはりの奉公だぞ。諸神様。諸佛様〱諸佛様上々様〱〱。お慈悲〱〱ぞよろしい。いつて休息〱〱

子供新造一同に

おありがたふ存じ奉ります。おやすみなされませといふて。皆々臥所にいるといへり

此毎日の唱事。正月元日は。れしよく女郎をはじめ。新造。禿。男女出入の者に至るまで。殘らずならび居て。かくの如くいふとぞ

右女房のことばの中に。親を孝行にしてやつたかはりの奉公といふ事。解しがたき故。かの家のものに問ひしに。それは銘々れやの爲に身をしづめし上。折々其おやども來りて。くらし方難澁のよしにて。金子借用の願を出だし。少しにても借りうけて。先當時々々の困窮をも凌くは。是奉公をして居る故に。親の貧苦をも救へば。自然と孝行にあたるべし。その孝行をさせてやるは誰がかげぞ。是おやかたのかげならずや。其かはりの奉公なれば。大切につとめずばなるまいといふ。無理に理屈をつけたるいましめことばなりとかたりき

〇突くといふ沙汰

文化三丙寅年正月の末より。夜分往來の盲人。或は乞食ゐざりの類を。鎗にて突き殺す事はやりて。月の中比より。此事甚しく。三月のはじめ比より。少し此沙汰やみたるに。同四日芝車町より出火して。淺草たんぼまでやける。此大火の後。又々鎗の沙汰有りて。日暮過よりは。人々用心して。他出する者稀なり。夜分はいよ〱往來淋しければ。わる者は時を得たるにや。猶所々にて突く事多かりけり。されども大かたは盲人。或は至極下賤の者ばかりにて。よき人つかれしといふことなし。盗賊の所爲かと思へば。さのみ金銀を目がくるにもあらず。いかにもあやしき事にて。れほやけよりも。いと嚴しく仰渡され。町中にても。火事後猶更夜番をなして。たゆみなく心をつくすといへども。さらに其わる者しれざりけるが。四谷天王の社内地形の普請場へ。いとあやしき侍來りて。別當所の座敷に有りし頭巾と。衣二品をぬすみて去らんとす。折しも石工。或は鳶

○新吉原京町一丁目娼家若松屋の掟（所謂めでた若松これなり）

右若松屋の掟は。毎朝神棚の前へ。新造をはじめ子供殘らず居並び。神棚に向ひ。皆同音に

おォめェでェとう引　三べん

おありがたふ存じます　これも三べん

此事言ひ終りて。見せのわき座敷にて。又三べんづヽいひて。夫より佛檀に向ひ居ならびて。又三べん。是をしまひて。內證女房の前に出でヽ

おめでたふ引　こればかりはじめの如く三べん

女房これをさヽていへらく

めでたいとおつしやつた御供（ゴクウ）いたヽけど。れつしやつたと。これを三べんいふと。それより御新造子供同音に

廊下でさわぎますまい　つまみぐひいたしますまい　ね小べんいたしますまい　れ客人を大切にいたしませう　わるいことをいたしますまい

などヽ。その外此類の箇條をならべ立てヽいふ。これを聞きて

女房

一々申しつかつた通り。まちがへるな。旦那さまがれゆからおあがんなさつたら。御祝儀に出よ。わるい事をしたらば。友ぎん味をして申し上ぞ。一々申しつかつた通り。まちがへるな

子供又新造同音に

火の用心を大切にいたします　三べん

お客樣を大切に仕ります　同

これを聞きヽて女房

火の用心〳〵大切は〳〵。上々樣方へ御奉公〳〵御客人樣大切は〳〵わいらが親を孝行にして。やつたかはりの奉公だぞ。よろしい。いつて御供（ゴクウ）をいたヽけ

新造子供同音に

おありがたうぞんじ奉ります

女房いふ

まちがひると棒だぞ○たて

是よりみな〳〵次へたちて。朝飯をくふなり

毎夜引け過ぎ。女房の前へ。又新造子供殘らず居並ぶ

女房いふ

延享五年戊辰（この年寛延と改元）春正月十三日の夜の明がたに。大坂四ッ橋にて。そのほとりなる非人金五拾兩拾ひしに。その包がみに宇津屋氏と書きつけてありしかば。隈なくたづねて。終にそのぬしに返しけり。金のぬし歡びて。謝物として金子少々とらせしかども。つや〳〵うけず。よりて又酒代として鳥目三貫文つかはしゝに。左の詩を相添へて。その鳥目を返しつゝ。非人はゆくへしれずとぞ

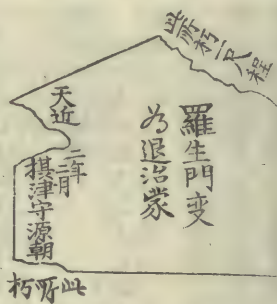
橋上路邊一二錢　往來終日幾千人
死生富貴任天命　昨日錦今日草莚

たからぞとおもへば袖につゝみけり
　ひらへばおもき障りなりけり

又いづれのとしにかありけん。豊後國（郡たづぬべし）地藏寺門に。行き倒れの尼あり。その住所をたづねしに乞食のよしなればしれず。その傍に辭世あり

漸出人間界　忽今上昊天
即捨敝簑笠　夢醒寺門前

予これらの人の塵埃に埋もるゝを哀み。錄してもて人に示して。後に傳へんと欲するのみ

京都安井御門跡。諸寶物くさ〴〵の中。うす綠の大刀。羅生門へ渡邊綱がもてゆきしといふ禁札は。わきてめづらし。番の侍某を賴みて摹寫せし圖

幅貳尺貳寸　長壹尺貳寸
厚三寸
人王六十四代　圓融院御宇
寶延二巳年迄七百七十三年

右の板は。榎木にて文字消えて多くよめず。變の字の下にも。文字見ゆれども讀みがたし。撫づれば手に障るのみ。又蒙の下にも文字あれども。これ又よめず。蒙の下は者也とあるやうに見ゆ。手にて撫づれば。少し障るのみ　右獲自古記錄中

文政八年乙酉六月朔　乾齋主人識

著作堂云。この禁札といふものは。ある人の摹刻せしを予藏弃せり。友人美成にも所藏にありといふ。羅城門を羅生門と書きたるなど。すべて疑はしく信じがたき者なり

上州眞壁郡野瓜村にての事なりし。寛延四年辛未是年改元寶暦四月中。百姓ども寄り合ひて。なら茸といふきのこ。大さ三四寸ばかりなる。いと美事なるを取り來て。四五人より合ひ。吸物にこしらへ。酒を飮まんとせし折。同村なる不二澤幸伯といふ醫師來にければ。五人のもの申しけるは。さて〳〵よき處へ御出候ものかな。今日ならたけといふきのこを採り候故。吸物にして酒をたべ候なり。幸ひの折なれば。御酒ひとつきこしめされよといふに。此醫師もそはよき處へ參りあはしゝなどいふ程に。吸物膳をもて出でければ。蓋をとりて見るに。特に美なるなら茸を。四つ割にして出だしたり。幸伯これを吸はんと思ひしに。はじめ座につく時。腰にさげたる印籠巾着を膝の脇にや居しきけん。忽はつしと音しにけり。幸伯ひそかに驚きて。こは印籠をひしぎしならんと思ひつゝ。とりて見るに。させることもなし。こはいかにと疑ひまどひて。やがてその巾着の紐をときつゝ。内を見るに。いぬる年兄道伯がくれたりし。三つ角の銀杏くだけたり。そのとき幸伯思ふやう。曩にわが兄の。この銀杏をくれしときにいへらく。その理あるにあらねども。三つ角なる銀杏は。毒けしなりとて。むかしより人のいひ傳へたり。よしや醫師なればとて。文旨見義に用ふるぞよき。かゝる事は俗にまたがひて。其方にも一つ懷中せよとくれたるを。この巾着に入れおきしに。今摧けしは不審の事なり。且この吸物は。わが好物といふにもあらず。いかにせましと思ふ心の。とかく心にかゝりしかば。吸はぬにますことあらじものをと。やうやくに思ひとりて。もろ人にうちむかひ。われらけふは。大切なる精進日に候へば。御酒ばかりたまはらんとて。盃をうけて。少し飮みしが。遂に療用にかこつけて。酒宴なかばに辭し去りぬ。しばらくして彼吸物をくらひし百姓の家より。幸伯がり人を走らして。只今見まひ給はれかしとて。急病用の使。推しつゞきて來にければ。幸伯ふたゝびゆきて。彼五人の中。亭主と外一人の即死したれば。療治屆かず。殘る三人は。その腹いづれも大皷のごとくにはれたれども。命運や竭きざりけん。からくして順快しけり。そのゝの。幸伯は江戶へ出府せし折。かゝる事にや。不思議に命を助かりしとて。朋友某に物かたりしなり

いふものなり。此孫右衛門より六世ばかりの祖。孫右衛門（代々孫右衛門なもて稱す）とかいひしもの。江戸に出でゝ歸るさ。何がしとかいふ原（原の名を詳にせず）をよぎりし時。傍に若き女のひとりたゞずみしが。呼びかけていへらく。われは下總なる云々の村にゆくものなるが。ゆき暮れていとなやみぬ。願ふは和君もそのほとりにしれはさば。伴ひ給はれかしと。他事もなく頼まれければ。孫右衛門止む事を得ず。うけがひて。その夜はおのが家にとゞめ。とかくして一兩日をふる程に。彼女のふるまひのまめ／＼しければ。孫右衛門が母なるもの女に問ひていふ。我子いまだ妻あらず。わがよめとなりなんやといひしに。女答へて。われに實は親兄弟もなく。たよるべき方なし。云々の村は些のゆかりあれば。尋ねゆかんと思ひしのみ。兎もかくも御心にしたがひなんといひければ。母悅びてつひにめあはしぬ。いく程もなく男子をまうけ。そが五歳といふとき。又をのこ子をうめり。冬の事にて。稚子に添乳して。しばし爐邊にまどろみしに。五歳なりける男子があはたゞしくてゝごよ見給へ。かゝさまのかほが。おとうか（狐の方言なり）によく似たりといふにれどろき。彼女は忽身を翻してかけ出でぬ。みな／＼打ち驚き。臍（アハテ）まどひて。そがあたりをたちもなくさがし求めしに。向の小高き山に。狐の穴ありて。その穴の口に。小兒のもて遊びの茶釜と。燒ものゝきせると。書きおきやうのもの一通あり。さては彌狐にてありけりと。はじめてさとる物から。なほ哀慕に堪へざりけり。かくてその生れし男子成長して。また孫右衛門と稱し。老いて廻國の望ありとて。家を出でしが。何地ゆきけん。遂に歸らずなりし。そのあたりのもの後々までも。狐のおぢいと呼びしとぞ。かのみねは右きつねのおぢいが爲には。ひまごにや當りぬべしといふ。みね嫗が話に。をさなきころ赤法華村にゆきて。彼茶がま。きせるなど見し事あり。わなみも狐の血すぢにて侍りと。こまやかにかたりしを諳記して。こゝに志るしぬ。老嫗がむかしがたりなれば。郡村の名さへ詳ならぬもあれば。遺漏なは多かるべし。もし委しきことをしも得ば。後のまとゐに補ふべし

乙酉六月朔　　海棠庵主人識

○なら茸　乞兒の賢　羅城門の札

たゝせたり。故にあかし屋はじめ二人のもの。難なく深川にいたりつきぬ。居ること數月にして。江戸をも畧一見をはりぬれば。すでに深川をうち立たんとするに。明石屋某常に觀音を信じ。たび／＼淺草寺に詣でけるに。御いとま乞の心にや。今一度參らんと。二人の男をもすゝむるに。彼等は旅の用意にいとまなく。明石屋のみ詣でけるに。いまだ吉原を見ざれば。一見せんと立ちより。日本堤を東へかへらんとするに。俄に大雨ふり來て。衣服もしぼる程濡るゝにより。とある人の傘に。しばし雨を凌ぎけるに。かのもの云やう。汝も見しりあらん。我こそ桑名より跡先になりて來つるものなり。神奈川にてあざむかれたることの口惜しさ。今こそ思ひ知らせんずといふに。明石はめぐり／＼て。又かの賊にあふことも。過去の宿業と覺悟して。正に淺草觀音を念じゐけるに。かの賊腰のものを拔きて。一打に切りつける。きられてどうと倒るゝ迄は。物覺えしが。その後を知らずなりにけり。深川に殘れる二人の男は。明石屋がかへるをまてど。夜半を過ぐるまでさたなし。二人のものかねて明石屋がやぶさかなるうへに。遊興などには。心なきをとこなれば。よし原へいたるとも。今迄かへらぬことやはある。いかさま變事のいで來たるならん。いで尋ねばやといふ所に。明石屋かへり來れり。いかにと問ふに。物をもいはで。倒れふしたり。人々打ちより。何ゆゑなるかと立ち騷ぐ程に。夜明けてあかし屋起きあがり。茫然たる體にて。こゝはいづくぞ。我こそ日本堤にて。賊にきられつるものをと。膚を見るに。疵だになし。たゞ懷にしたる金のみうばゝれたり。まことに大慈大悲の我身に代りて。刃をうけ給ひしふしぎさよと。信心いやまし。三人ともに事故なく歸國し。彼刀難にあひし時のありさまに。覺えたるまゝを畫にしたゝめ。寳前へそなへたりとなん

○狐孫右衛門が事

過ぎし兎園のまとゐには。きつね。たぬきの事など諸君のしめし給ふ物から。予も亦聞きつる一條のものがたりあり。こは予が家に年ごろ出入なせるもの。元は下谷の長者町に住みし。萬屋義兵衛が母みねのはなしなり。みねが生國は下總相馬郡宮和田村のほとりにて。みねが父は同國赤法華村の農民孫右衛門と

卯十一月十一日　惠比須屋

善　六

井筒屋

三郎兵衛樣

平兵衛樣

傳兵衛樣

○身代り觀音補遺

四月の兎園會に。輪池翁の錄し給へる身代觀音の一條あり。その年月。及人名等詳ならざるをもて。名ところは糺すべしと注し給へり。しかるに淺草寺志の中に於て。その記事一篇を得たり。年月旅宿等はしるし給へど。その事少しく異同あり。參考に備ふべしといふ

淺草寺志本文　美成記

明石屋甚藏刀難圖之額　額に。文化四年丁卯四月大坂新町住人。明石屋甚藏法橋周南畫。本堂右の方にあり。文化三年大坂新町の遊女屋明石屋某といふもの。いまだ江戸を一見せざれば。同所のもの二人を打ちつれ。關東に下りけるに。いづれも家まづしからねば。旅用の財をもそこばく持ち出でんと欲すれども。長途の事なれば。盜難を恐れ。順禮の姿にやつし。わざと物などもたぬ體になしけるに。伊勢の桑名のあたりより。あやしきものども。その跡あることを知りつらん。跡になり先になり。隙をうかゞふ體にて。つひに武州かな川の驛まで來たり。明石等がとまりたる宿の向に。彼もの共とまる。明石屋は宿のあるじに向ひて。われら旅中よりあやしきものにつけ廻され。千辛萬苦せしとかたる時に。むかふのあるじ周章しく走り來り。此うちに順禮のかたちをなしたるものとまりつらん。かれらは大坂より子細有りて出奔せしものなり。わが內にやどせる人これをとらへんが爲。はる〳〵これまで下りたり。あすは定めて曉に立つへし。其時に待ちぶせして。からめとらんと思ふなり。その用意あれと告ぐ。あるじはすでに明石等が物がたりにて。その盜賊たることをしれるにより。向のあるじにも委しく是をかたり。何れ穩便に計ふこそよけれとて。明石屋にとはかり幸三人の知音なければ。深川靈巖寺中何某院へ船にて送りつくべしと相談し。向のあるじは。かの賊をわざむき道にて捕へ給へとて。曉に先たち。神奈川を

鹿と申候而賣候を馬と存ながら價の下直に任せ馬肉を買ひ能鹿と申候直段平生のかつとせい抔の如く目方にて賣買致し鹿に不限何品にても食物に相成候品總て魚等の直段に御座候

一御城下端に近在遠在之子共を悉く海川へ投込申候者數不知右之樣子承り候に哀之品は數々御座候へ共皆凶作之なすわざに御座候其內しに樣にも色々いさぎよきも未練なるも有又は名を惜み候者は猶又深林の中へゆき候てくびれ或は淵川へ行き石をいだき沈み申候は數多難計奉存候然共子被捨候者は澤山御座候得共親を捨候ものは于今不承候尤殊勝之事に御座候

一去月末より別て火事多く毎日毎夜五ヶ所六ヶ所より出來燒取に仕候或は五十人七十人徒黨を結び在々へ押込理不盡に働仕家財穀物奪取候由所々より毎日承り候扨々一日片時も安心無御座候

一此間も承り候得者定家卿の御短尺古筆目利所にて極め相添米五升に取替申候由大坂御陣に高名仕候正宗の刀を稗壹斗と取替申候よし箇樣之時節なり餘は御推量可被下候

一仙臺領。津輕領。盛岡御領共に皆無にて候內尤盛岡御領には少々も實入有之候哉有之候由是迚も種分んも無御座候由譬種之分御座候ても種々相成候樣に實入無御座候然者生殘り明年仕付申候節右種物も無御座候て何を以仕付可申哉千萬無心元候

一古來稀成義は非人共犬猫牛馬を喰候は世に不思議に存候處死掛り候人々肉を切はなし格別うまき味なるよし申候言語同斷かゝる時節にあひ申候事いか成事に御座候哉と奉存候乍然箇樣之儀不存候はゝ生涯佛も御經もうはの空にて至敬の信心も有間敷奉存候處六道四生之有樣凡俗之身にて目前に見申候事こそ難有奉存候乍去知りぬる佛見ぬる花とも申候何卒無難に明年をむかへ豊作を祈り申候外他事無御座候總體當地之事中々難盡筆紙實に九牛が一毛に御座候猶追便萬々可申上候恐惶謹言

候依之毎日捕手見分之役人衆隙なく相廻り候へども中々手に合不申候
一只今　難澁の者共食事には
一おも香煎　是はわらびの屑をたゝきさらし。粉を取申候かすをサヽメさいふ細成るをアモさいふよし
一松皮香煎　一同餅
一蘘採香煎　一豆から香煎
一犬たて香煎　一あざみの葉
右之類専食物に仕候拐餓死之者唯今國中半分餘と相見え申候間來正月より三四月迄之内如何様に成可申哉難計奉存候乞食非人往來如市そのありさま元來世並宜敷砌伊勢熊野抔へ參詣仕候に路用澤山所持仕候而も南部案山子と出立に御座候まして況此節の體譬可申者無御座候顔色憔悴髮亂れ眼星のごとく色青くつかれ衰へ頬骨高く口尖り手足跰如くからだ赤裸に菰をまとひし有様何と申候而も更に人間とは見ゑ不申候右故に店々も相しめ戸蔀など指堅め居候戸口開置候へば非人共無體に押入食事をあたへ不申内は更に立退不申候故無據白書に門戸を閉申事御座候者戸口より用事を達し志に有之旅行抔仕候節は家内中立わたり世話仕候へ共我勝に前後を爭ひ泣きさけび老弱の者の費候食物を奪ひ取なきさけびし聲身にしみ胸に答申候互に食を奪ひ合溝へ落入半死半生之者數多呼喚八寒紅蓮のくるしみ食を奪合打合つかみ合互に疵を得候體修羅道の有様目前に御座候火事は一夜に二ヶ處三ヶ處より出來燒死する者數多焦熱大焦熱の炎に入煙にむせび牛馬鷄犬之燒死夥敷御座候世尊滅後二千八百年彌勒の出生迄は餘程間も有之様に承り候處今その期來候哉と心細く少も安心無御座候依て御上様にも何卒飢渇之者御救ひ被遊度思召候へ共近年打續不熟損毛に付御貯も悉く盡候故不被任思召御心遣被爲痛候へとも更に其無甲斐殘念に被思召乞食非人へ御施行被遊候ても大海之一滴中々相屆不申氣之毒千萬に奉存候
一捨牛馬は御制札第一之御法度に御座候へ共此節悉捨申候右之牛馬を乞食共引參り皮をはき

者共當秋は豐作無相違由申居候故右之季候も左而已驚不申罷在候次第に不順に相成春一度花咲候藤山吹之類など六七月頃山々春の如く花咲九輪草唐葵抔は春より霜月まで四度も五度も花咲夏菊十一月下旬まで盛り九月十月中旬に竹の子生じ九月下旬に蟬なきやまず種々の季候違に御座候稻作は七月下旬に至り候而も出穗無之たまさか穗出候而も葉の內へかくれ花もかゝり不申穗出るは百分一其外一圓に穗出不申候右之次第に御座候間一粒も實入無御座候大豆小豆粟稗蕎麥等は八月十三日之夜大に霜降り是に當り種なしに罷成誠に古今未曾有之大凶作元來三四年以來打續半作に不滿飢饉に御座候處當夏麥不作其上秋作皆無に御座候間諸穀物一向無之相場は市每に引上け當時相場左之通り

一　玄米　　壹升に付　　貳百五拾文
一　こぬか　仝　　五拾文
一　大豆　　仝　　百五拾文
一　搗粟　　仝　　貳百三拾文
一　蕎麥　　仝　　百廿文
一　豆腐粕（ツキ）　仝　　廿五文
一　片舂麥　仝　　貳百文
一　フスマ　仝　　六拾文
一　粗稗（アラヒエ）　仝　　百　文
一　兩替六貫貳三百文

右之通何品によらず。食物に相成候類過分之直段に御座候間食物在々に無御座蕨野花葛等（トコロ）を堀り食事仕候夫も幾千百人と申限りなき事に御座候間さしもの大山も忽に堀盡し申候間葛蕨の粕あもそゝめなど申もの計食事に仕候に付右之毒に中り五體腫れ大小便不出して忽に相果候者數知れ不申候當九月頃乞食共犬猫猿等を食事に仕候事承り候間肝を潰し候處去月頃より犬猫は不及申牛馬を打殺食事に仕候非人乞食等は眼前犬猫を捕へ鹽も付ず喰候體誠に鬼共可申哉おそろしとも何とも可申樣無御座候夫に付在々は押込強盜夥敷起り家內不殘しばり置穀物は不及申家財奪取其上家を燒立退候事數多く如此之事共中々書盡しがたく

ㇾ飢。白玉千箱何能救ㇾ命。いでや今のれは御代はしも。何事も足らぬことなく。凶年饑饉などいふことは。嘗てあらず。いにしへより凶年のためし少からねど。近き年のうゑたるは。人々もよくしりてあれば。常に昔語にのみ聞きなしたる。此大江戸のことにこそあれ。遠鄉僻地はいかばかりなりけん。只推しはかるゝばかりなるを。この比。友人のもとより。その比。陸奥よりことのさま。つばらかにいひおこしたる。書狀一通を示されき。彼わたりはことに甚しきよし。ほの聞えたれど。思ふにましたることのみにて。今のれは御代に思ひくらべては。いとおそろしく。魂も消ゆるこゝちす。さればかけまくもかしこきことながら。國家盛德のおほんめぐみの有りがたきをも。更に思ひしらるゝわざなりけり。かつは時ならぬ氣候もあらば。此後もその意得べきことならんかしと思ふからに。錄して後葉に傳へまほしくこそ

文政乙酉六月朔　山崎美成識

天明三年癸卯十一月十一日。奧州三戸郡南部內藏頭殿領分。八戸の惠比須屋善六より。本店江戸田所町かど。井筒屋三郎兵衛へ遣しゝ書狀左の如し

一筆啓上仕候甚寒御座候得共先以其御地御揃益御勇健可被成御座珍重奉存候拙者共無異罷在候乍慮外御安意可被下候

一追々御承知可被遊當地當年凶作前代未聞御座候全體去冬寒中甚暖に而如夏霜月比より氷候へ共寒に入悉く解平生三四月頃の季候に等しく夫より年明正月に成少々寒く候得共例年よりは格別暖に御座候二月三日迄不寒四月頃より卯辰風北風計に而寒中如極寒雨降四月中に雨不降日漸々七日御座候夫も薄曇東風に而霧多晴天は一日も無御座候五月も同斷に而朔日より降初五月中不降日漸々六日六月中も五日程も右之如く快晴は無之七月には四日八月には六日右之通不天氣に候得共當春より麥作之景氣至而宜近年に不覺作合に相見え候間諸人甚大悅罷在候處苅頃に成右之雨續候故熟し兼存之外日數おくれ苅取候處一圓實成無御座諸民大困窮仕候然共稻作大豆小豆豆稗等は例年に勝候作合宜相見え申候間秋作者十分に可有之と素人の拙々共は不申及老農老圃年來の巧

のぬしなるものに引き込まれたり。死骸は終に出でざりしといふ。按ずるに。鼈も性蛇と近し。いづれまれ蛸の八足ならぬものをば。くらふまじきことぞかし

○雙頭蛇

文化十二年乙亥秋九月上旬。越後魚沼郡六日町の近村。余川村の民金藏。雙頭蛇をとらへ得たり。この金藏が隣人を太左衛門といふ。この日。金藏所要ありて。門邊にをり。その時件の蛇地上より走りて。隣堺なる垣に跂登るを。金藏はやく見だして。箒をもて拂ひ落しつゝ。やがてとらへしなり。この蛇長さ纔に六寸あまり。全身黒く。只その中央は。薄黒にして。腹は青かり。則桶に入れて養れきけり。近郷傳へ聞きて。老弱日毎に來たりて。觀るもの甚多し。はじめこの蛇の跂出でんとするとき。雙頭をふりわけ。左の頭は左にゆかんとするごとく。右の頭は右にゆかんとするがごとし。既にして雙頭一心に定むる時は。眞直に走るといふ。又桶に入れて屈蟠るときは。雙頭かさなりてよのつねの小蛇の如し。時に近郷の香具師これを數金に買ひとりて。もて見せものにせんとはかる。その事いまだ熟談せざりし程に。忽。猫に銜み去られて。これを追へども終に及ばず。主客望を失ひしといふ。當時同郡鹽澤の質屋義惣治。その略圖をつくりて。家嚴におくりぬ。かの金藏は義惣治が亡息の乳母の子なり。これにより。その蛇をとりよして。よく見て圖したり。こは傳聞にまかせたる。そゞろことにはあらずとぞ

按ずるに。小蛇はその色皆黒し。初生兩三年のゝち。きぬを脱て。色の定まるものなり。件の雙頭蛇も。その黒きが本色にはあらぬなるべし

文政乙酉林鐘月氷室開かるゝ日

琴嶺しるす

○奥州南部癸卯の荒饑

古にいへらく。食者天下之本也。黄金萬貫不レ可レ療

きれそれず。猶しも取りな逃がしそとて。終にうち殺してけり。扨引きあげてよく見るに。その蛇。既に蛸に變じ裂けたる處は。足になりて。肬(イボ)さへはやくいで來たるに。頭もはじめの蛇に似ず。俄にまろくふくだみて。さながら蛸に異ならず。只その色は。白はげて。聊も赤みなし。日を經れば。あかみさすといふ。只そのかたちの異なるよしは。八足ならで七足なるのみ。さればにや。凡この地の漁父共の。七足の蛸を獲ることあれば。こは蛇の化したるなりとて。うち捨てゝ是をくらはず。しかれども。まのあたりに蛇の蛸になりぬるを見つるは。いともめづらしとて。事をちこちに聞えたり。こゝをもて當年かの地の一友人ゆきて。その蛸を見つ。且文四郎に。その折の有さまをよく聞きて。地理さへ圖して。家嚴におくれり。よりて今その地圖を乞ひ得て。ちなみにこゝに載するのみ。予嘗て越後の總地圖によりてしりぬ。この老曾岩のほとりには。蛇崩と唱ふる處あり。且その邊にふかき淵あり。この淵のぬしは。大なる蛸なり。又大なる龜なりなどゝもいへり。近ごろ漁者のむすめ。海苔をとるとて。こゝに來て。そ

文政八年六月小暑後之朔。識於著作堂南窓合歡花蔭

蓑笠漁隱

○蛇化して爲ㇾ蛸

越後の刈羽郡なる海濱は。古歌にも八百日ゆく越の長濱とよみたる當國一の荒磯なり。この所。出雲崎に相つゞきて。東南は嵯峨たる海巖のつらなりたる。さながら刀もて削れるがごとく。西北は渺茫たる大洋にして。見るめもはるかに限りしられず。うち寄するしら波の。摧けてかへるすさましかるべし。かねて聞く。この邊すべて沙濱(スナハラ)にて。石地といふ漁村あり。抑この町は。海を面にし。山を背にす。こゝには松多しといふ。この山に相つゞきて。又松山あり。この山の根かたには。石の六地藏建たせ給へり。よりて里俗。この邊を賽の河原と唱へたり。これより松の林あり。この林のうしろよりして。柏谷宮川と唱ふるかたは。みなこれ峨々たる岩山なり。この岩山の前にあたりて。閻魔堂あり。そのうしろの岩を穿ちて。閻王の木像を安置せり。これより海邊又數町にして。岩山の半腹に辨天堂あり。この天女堂の前なる磯の涯打際に。男根石あり。土俗はこれを裸石といふ。三四尺なる天然石にして。飴色なり。遠近の石女(ウマヅメラ)等この石に禱りて。子を求むることありといふ。されば石地町なる童子等は年々の夏毎に。この濱に出て丶。水に戯れ。終日游びくらすこと絶えて虚日なしとなん。しかるに。いぬる文化九年夏六月十六日。石地町なる民の子文四郎といふもの。時に十五歳その友たち兩三人とゝもに。賽の河原の海邊(ウミツベ)に出でゝ。水をあみんとしたる折。石の六地藏のほとりより。長さ四五尺なる蛇はしり出でけり。文四郎等これを見て。彼打ちころしてんといひもあへず。手に〳〵捧をとりて。打たんとせしに。蛇はたゞちに海に入りつゝ。波を凌きて泳くほどに。文四郎等は衣脱き捨て逃ぐるを追ふて。水中のところ〴〵にあらはれ出でたる。岩角つたひに飛び越え〳〵。飛石老曾など呼びなしたる海岩をつたひゆきしかば。れいそ岩のほとりに到りぬ。そのとき蛇は岩角にしは〳〵その身をうちつけしを。いとあやしと見る程に。蛇の尾は忽にいくすぢにか裂けたるが。そのほとりの海水は。たちまち黄色になりしとぞ。さりけれども驚

越居候處。當正月廿五日夜。主人用事に而。罷出立歸候節。夜四時頃王子權現ゟ。稻荷社之間十條村之方へ。拾貳三間も參り候往還端にて。光り候品見江候間。立寄見候得ば。土中より光り出候に付。少し土中を堀候へ者。小さき佛像出光り居候間。持歸り洗見候得共。金佛之觀音に付。能々改見候處。黃金佛に而。長さ壹寸八分程有之間。即刻兄徽庵方へ持參り。同二月五日御用番永田備後守樣御番所へ御訴申上候へば。御糺之上。上け置候樣被仰渡。當八月廿六日徽庵町役人組合肝煎名主一同。右御番所へ被呼出。月數相立候に付。右之品は。松之助へ被下旨。右に付。不審議異說等不申觸義は勿論。猥りに人々に爲見候事不相成候間。其旨存候樣於御白洲被仰渡。右佛像御渡被成候 下略

子閏八月十八日

かゝる事を江戶町々なる借屋店借りの者迄に。ふれ繼かれしは。いとめづらし。おもふに。黃金佛なれば後日にぬしの出づとも異論あらせじとの爲か。且靈驗などをさへ唱へさせじとの爲なるべし。按。本草載ニ地鏡圖ニ云。黃金之氣赤。夜有ニ火光及白光一。かゝれば件の佛像の。夜その光りをはなちしは。黃金ゆゑ歟。靈ある故歟。この事極めていひがたし。且その土中に入りしことの深からざりしは。雨後などに人の遺しゝことありしを。知らで踏み込みたるもの歟。これも亦しるべからず。是より先にも夜な夜なに光をはなちしものならば。見いだす人もあるべかりしを。松之助が目にのみかゝりて。堀り出だされしも亦奇なり。おもふにむかし佛像の水中に光りをはなちて。或は漁者の網にかけられ。或は木杪（コズヱ）。井の底より出現し給ふことゝいへば。靈驗あらぬものなく。堂塔伽藍美を盡して。今も衆生にをがまれ給ふに。いかなればこの觀音のみさるよしもなく。世の人にしられも得せず。をがまるゝことすら許され給はぬは。佛にも幸不幸やある。もし猶時のはやしとて。そこに智識をまたせ給ふか。さらずは國の寶をもて。そのみかたちとし給ふを。耻ぢさせ給ふこともやあらん。これらの靈のある故に。凡夫のめづる靈驗をあらはし給はぬものならば。寵辱利害を解脫し給ふ。それこそ眞の靈佛ならんとまうさんも。なほかしこかるべし

と答ふ。かゝるあやしき物語には。そら言も多かれば。疑はしくは思ふものから。はたちに足らぬ田舍兒の。正しく見きといふなれば。作り設けし事にはあらじ。彼地の人にあふ事あらば。ふたゝび問はんと思ひつゝ。雜記中にしるしおきしを。けふのまとゐに寫し出でたり。扨そのゝちは。いかにしけん。又問ふよしもなくて過ぎにき。按ずるに。見聞集に云。慶長二年のころほひ。行人江戸へ來たりいふやう。神田の原大塚のもとにて。來る六月十五日火定せんとふれて。町をめぐる。是をおがまんと。貴賤ぐんじゆし。廣き野原も所せき立ぞなかりけり。塚本に棚をゆひて。その下に薪をつみ。火を付け燒き立つる處に。行人火中に飛びいりたりとも。弟子の行人ども。そばよりつきおとしたりともいふ。我たしかには見ざりけり。次の日朋友とうちつれとぶらひゆき。大塚のあたりを見るに。人氣はひとりもなく。跡には骨まじりの灰ばかりのこりたりと。志るしつけたる事もあれば。およそは慶長元和より。明暦萬治のころ迄も。さる名聞の爲などに。命をうしなふゑせ行者の。江戸の外にもありしならん。火定は弟子に突き落されても。立ところに死にたらめ。土定して百五六十年さすがに死も果てざりしは。なほこの火宅に愛惜したる。慾念の凝れるにこそ。迷ひのうへの迷ひなるをも。よに理にあきらかならで。只奇に走り。信を起すは。なべての人のこゝろなりけり。今も又さる人あらば。智識の杖もて破却せしめて。成佛させたきものにあらずや

右の前年。文化十三年戊子の春正月廿五日の夜。巣鴨の町醫師大館微庵が弟松之助といふもの。王子權現の社のほとりにて。黄金佛なる觀世音の小像を堀出せしことありけり。かくて。同年の秋閏八月中旬。肝煎名主等市のかみの旨を得て。ことの由を書きしるしつゝ。町々へふれ傳へしかば。志りたる人も多かめれど。本文のまゝ抄錄す。其ふみにいはく

拾四番組名主政右衛門支配
巣鴨町抱兵衛店
町醫師大館微庵弟
松之助
子廿六才

右松之助義者。亥年中より王子村金輪寺雇に而罷

琴嶺瀧澤興繼

○土定の行者不レ死　土中出現の觀音

信濃國伊奈郡平井手といふ村に。いと大きなる槻(ケヤキ)ありけり。平井手村は。下の諏訪を距ること三里許に在り。内藤家の封内なり　文化十四年丁丑の秋のころ。させる風雨もなかりし日に。此木おのづからに倒れけり。かくてそのうでもちおばけし坎(アナ)の中に。ひとつの石櫃あらはれたり。里人等いぶかりて。みな立ちよりて見る程に。この石櫃のうちよりして。鈴鐸の音。讀經の聲の洩れて。かすかに聞えしかば。人々驚きあやしみて。彼に告げこれにしらせ。つどひて評議したりける。そのとき里の翁のいはく。むかし天龍海喜法印といふ山伏あり。當時この人の所願によりて。生きながら土定したりと傳へ聞きたることもぞある。おもふに。彼法印は。今なほ土中に死なずやあるらん。是なるべしといひしかば。里人等うべなひて。櫃の上に殘りたる土を搔拂ひつゝ。よく見るに果して歲月名字などの彫りつけてあるにより。感嘆敬信せざるもなく。俄に注連を引き遶らし。芦垣をさへ結びなどして。みだりに人を近かつけず。かゝりし程に。近鄕の老弱男女。傳へ聞きて。參詣羣集したりしかば。更に又假屋やうのものを修理ひて。線香洗米などを備へ。なほ日にまして繁昌しけり。しかれども石櫃をばそがまゝにして。戸をひらかず。鈴鐸の音。讀經の聲は。月を經れども絶ゆることなし。その石櫃の上のかたに。息ぬきの穴三つ四つあり。その入り口は二重戸にて。第一の戸はひらけども。二の戸は内より鎖したるが。はじめひらかんとしたれども。得披かれざりければ。その後は里人等もおそれて。いよ〱開くことなし。この年冬のころまでも。參詣日毎にたえずとぞ。抑この一條は。同年の霜月より。予が家に來て仕へたる初太郎といふ僕の云々とかたりしなり。渠は信濃國高島郡下の諏訪眞字野村のものなり。そのふる鄕にありし日より。件の事を傳へ聞きつゝ。こたみ江戸へ來つる折。同行のものもろともに。平井手村へ立ちよりて。かの石櫃を見きといへり。しからばその年號は。何とかありしとたづねしに。年號はればへ候はす。大約(オホヨソ)今より百五十餘年に及ぶと聞きつといふ。さらば明暦萬治の中か。寛文にはあらずやと。一二を推して問ひ質せども。いひがひもなく知らず

○奥州平泉毛越廢寺路舞歌唐拍子

ちなみにいふ。みちのくの田うゑ歌は。古風なるものなればこそ。芭蕉の發句にも。「風流のはじめや奥の田うゑ歌といへれ。この田うゑ歌の事は。本居氏の玉勝間に載せたれば。世の人のしる所なり。しかるに奥州平泉に。中尊寺。毛越寺といふ寺ありて。各十八箇の子院あり。今毛越寺は廢して。唯子院十八箇をのみ殘したり。この毛越寺に。むかしより傳へて。唐拍子といふ歌あり。路舞歌ともいへるよし。今も毎年毛越寺廢墟の阿彌陀堂に。子院の法師集りて。この舞樂を行ふとぞ。そのうた左のごとし

唐拍子歌

○ソヨヤミイユ。ソヨヤミユ。ゼイゼレゼイガ。サンザラ。クンズルロヲヤ

○シモヅロヤア。ヤラズハ。ソンヅロロニ。ソンヅロメニ。コウコロナンズリシニ。ワヨヤミイユ

○ヲウヅラユク。ヲウヅラユク。カリノハネヲトヲヤ

○シッライ。ディガ。サイドノトノ。サアラサラメニ。ユクヨナ。ザレヲ。ノウトメの。コヅノ。タマメハ。ミヤノウマイ

○ハアチヂウ。ヨヨノ。ミヤワカアイ。ハチヂウヨヨノ。ミヤワカイ。チヨノタマメハ。ミヤノマイ

○ワラワロニ。タマワロウトサユワイ。クサヲハ。アユノ。チヨインニ。サワケタマイ

○トウリノ。ミヤコニハ。トウリノミヤコニハ。ホトケノ。ミナヲバ。シラヌナリ。リリヤ。リリヤリリヤ。リッ

○ゴダイ。サンニハ。モンジユコソ。ロクジニ。ハナヲバ。チラスナリ。リリヤ。リリヤ。リリヤ。リッ

この一條は懸川侯の儒生松崎慊堂。文化中ある夏。東游の日。件の舞踏を目撃し。且その幾曲を寫し來つるよし。同藩の留守居役。長鹽氏平六は。家嚴といさゝか由縁あり。予も相識れるものなり。文化の末。長鹽氏家嚴に消息のおくに。この事を告げおこせたり。さきの日。反故をえりわくるとて。これをもたづね出でたるを。こゝにしるせといはれしによりなむ

文政八年五月朔書於神田若壺庵

又右馬の儀も箱崎傳兵衛甥カ従弟龜次郎と申當時瀨之上驛に別宅仕馬喰商買仕居候間同人へ懇意仕候出入園吉と申者申含承合候得は龜次郎心易受合候間伯父傳兵衛へ申込候處中々放候樣子無之旨態々以飛脚申參り候右紙面貴公樣迄指上候間可然樣御取繕御沙汰奉願上候乍併此上是非々々被爲有思召候はゞ又々一手段仕見可申候得共先此段奉申上候猶又箱崎傳兵衛居宅寺墓所等麁繪圖認奉指上候彼是可然樣御取合奉願上候殊更此間家內に病人有之延引仕候段奉恐入候何分宜敷御執成奉願候右之趣可得貴意如此御座候恐惶謹言

六月二日　櫻井肬齋

土屋翁平樣

別紙奉申上候合紙面入御覽候瀨之上後藤龜次郎者箱崎傳兵衛方より別家仕候者之子にて傳兵衛とは從弟に御座候此段御含み被置御披露可被下候以上

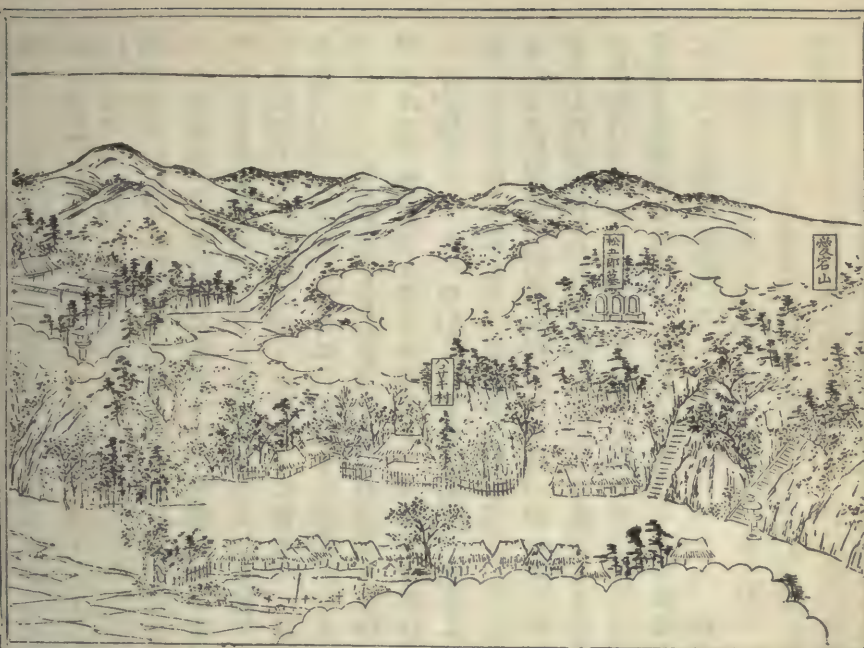
翁平樣　肬齋

傳兵衛從弟龜次郎手簡

飛脚を以て申上候暑氣甚敷候得共彌御勇健に可被成御凌と奉賀候然者先日は御目懸大慶奉存候其節御咄被成候箱崎傳兵衛方へ馬之儀申聞候處實に忠義に相當り候馬之儀に御座候得ば傳兵衛方にて飼ころしに仕度よしに御座候尤前々より悴松五郎氣に入壹人にて飼立候馬に御座候へば猶更右樣之義有之候而は相はなし兼候趣に御座候右之段何分御斷り申上候早々如此御座候以上

五月廿七日　せの上　後藤屋龜次郎

新田屋園吉樣　要用

長尾友藏は松前家の臣なり。後改所左衛門　又櫻井肬齋も同家臣にて。當時在梁川なりし醫官なり。又龜次郎といふ者は。高橋傳兵衛が從弟なり甥なるべし。櫻井肱齋かねて園吉が龜次郎としる人なるをもて。則園吉をもて。彼馬の事をはからはせしに。傳兵衛かたく辭して售らざりし事。簡牘に見えたるがごとし。抑この奇談は。浮きたることにあらず。忠孝の端にもかゝづらへるよしあれば。いさゝかもたがふことなく。ありつるまゝにしるしれくべしと。家嚴のいはれしによりて。このことに及べるのみ

嚴寺といふ。住持は覺應法印とて。文政元年その齢六十七歳なりとぞ聞えし。又この寺は傳兵衛が居宅よりは。三町許北のかたにあり。又その墓所は寺を距る東南のかた五町許にあり。傳兵衛が宅より墓所は東南の隅にあたりて。相去ること二町程なりといふ松五郎が戒名は寂光院貞心自了信士文政元年戊寅十月廿七日二十歳松前家より件の趣をよく質し問ひて。家嚴に示し給ひしは。文政二年六月十三日のことなり。後考の爲に。その簡牘を寫し書する事左の如し

松前藩長尾氏手簡

昨夕は罷出御目通殊に寛々御物語仕大慶至極奉存候其節申上置候箱崎馬之巨細書指上候樣被申付則爲持指上候間御落手願上候早々頓首

六月十三日　　長尾友藏

瀧澤樣尊下

同藩櫻井氏手簡

一筆啓上仕候甚暑之砌御座候得共上々樣益御機嫌能被爲遊御座御同意奉恐悦候隨而貴公樣彌御安泰被成御勤仕目出度御儀奉存候然は蒙仰候箱崎名馬實説巨細書奉指上候宜敷御披露奉頼候且

冬十月廿七日に。享年二十歳にて身まかりけり。曩編に文政二年十二月十二日に病死せしよしをしるされしは。暗記の失なるべし

かくて次の日。松五郎が亡骸を棺に歛めんとせしとき。祖母并に二親哀傷に得たへず。松五郎が手道具やうのものを。おちもなくとりあつめて。棺に納めんとしたりしを。親類たるものひそかに諫めて。其事甚しかるべからず。當今は六道錢すら嚴しく停止せられしに。ましてかゝるしな〲を。むなしく土中に埋めんは。物體なきことゞもなり。ゆめ〱思ひとゞまり給へと。まめやかにいさめしかば。祖母ふた親も。その儀に託して。さる事はせずなりぬ。しかるに。この宵。同村の貧民四五人手傳の爲にとて來てをりしに。はじめ松五郎が棺の内へ。手道具やうのものを納めて。つかはさんといひし趣をもれ聞きて。そのゝち親類なるものゝ諫によりて。さる事はせずなりしことをしらず。こゝをもて件の四五人。竊に示し合しつゝ。同月廿九日の薄暮より。打ちつどひて。酒四五升を求め來つ。これをのむとのむほどに。酒氣に乘じて。松五郎が墓所に赴き。既にその新墓を發きし折。松五郎が遺愛の馬は。厩の横木を推し破り。墓地に走り來つ。件の惡もの四五人を蹉仆しゝ事の趣は。曩編にしるされしがごとし。これを隣村の百姓なりしといへりしは。傳兵衛が聊遠慮もていひし事にて。實は同村の百姓なりけるよしなり。すべてこの箱崎わたりは。人氣よろしからぬ所にやありけん。かゝるまさな事をするもの。をり〱ありとぞ聞えたる

さて件の馬は。青毛なり。曩編に栗毛としるされしは。是又暗記の失なり。この馬は鞨鼓野といふ牧より出でたるを。二歳のとき。傳兵衛が從弟龜次郎といふ者。馬市にて買ひ取り來たり。松五郎は馬を好むに。傳兵衛も又馬を愛する心ある者なりければ。すなはち乘馬にせんとて。乘り立てしかど。地道よろしからずとて。遂に小荷駄にしたりける。されども松五郎ははじめにかはらず。この馬を鍾愛して。みづから秣を飼ひ。又ある時は。餅菓子などをも食はせ。田畑へ牽きもてゆくときも。決して家僕雇人などにあづけずして。みづから牽きてゆきかへりせしとぞ。又傳兵衛が菩提所は。眞言宗にて。普賢山福

の餘紙になも。ことの趣をしるしつけて。愚稿とゝもに。これをしも披講せんことをねがふのみ

乙酉仲夏朔　　　　江戸　著作堂　識

〇松五郎遺愛馬の考異

今茲暮春朔日の兎園會に。家嚴の書きつめて披講したりりし馬之一。陸奧の伊達郡箱崎村農民傳兵衛が子の松五郎が遺愛の馬の事。當時松前老侯。その近習に命じ給ひて。圖說をつまびらかに錄し給はりし物。嚮に家嚴ふかく藏め失ひて。たづね求めたるに。かいくれ見えざりければ。暗記をもて書かれしなり。しかるに。いぬる日ゆくりなく。その圖說をたづね出でたり。扨披閱せられしに曩に誌されしと大かたは違はねど。暗記の失なきにあらず。家嚴則その書畫を興繼にしめしていへらく。かゝる實錄にいさゝかたりとも錯誤あらんは。遺憾の事なり。そのたがへるところ〴〵を。なほあらためて。後のまとゐに披露せばやと思へども。おなじすぢなることどもを。ふたゝびせんはわづらはしく。且ことふりにて勞にしも得堪へず。汝われに代りて。これかれをよく比較して。足らざるを補ひ。違へるを正せかしといはれたり。おのれ不似にして。文辭のうへには。その才露ばかりもあることなし。いかゞすべきと思ひ煩ふものから。もしかゝる事なかりせば。いかでか不文の筆すさみを。晴なるむしろにおし出だして。諸先生の玉をつらね。錦をひるがへせる文場に加はることを得べけんや。いなむも事によるべきものをと。思ふばかりを心あてに。おち〳〵たがへるところ〴〵を。さらにしるすこと左のごとし

奧州伊達郡箱崎村は御領にて。桑折御代官所の支配たり。同郡の百姓傳兵衛は。高橋氏にして。文政二己卯には年方四十七になりぬ。渠は元祿年間より。代々當時に住居して。相應の百姓なりしに。近年いよ〳〵ゆたかになりぬ。男女の子ども三四人あり。彼松五郎は家子（ウヒゴ）なり。又この家に老母あり。傳兵衛素より孝心ふかく。よく老母に仕へしかば。松五郎もその心親に劣らず。これによりその二親の志にたがふことなく。祖母にもよく仕へたり。且その性。馬を好みしこと。曩編にしるされしごとし。かくて松五郎は文化十四年の夏の比より。勞瘵の症にて。病みわづらふこと二とせに及びつゝ。文政元年戊寅

は。もと端午のものにて。童の袖にかけたる藥玉の遺裂なるべし。かざり花といふべきを。後には只花とのみ言ひしよしは。四民往來年中故事要覽。枕草紙春曙抄などにも見えたり。享保の印本。女用花鳥文章のさつきまもりの圖は。かの紙に貼したる花によく似たれば。其比は。さも言ひしにや。かざり花を。年始またはうぶ子の方へ贈りて。祝儀とせしは。めで度もの故さはせしなるべし。藥玉をうぶ子のかたへおくりしもよしなきにあらず。赤染衛門家集に。いか五十日の程なる兒に。藥玉をやるとて。「れひたらんおともゆかしきあやめ草。ふた葉よりこそたまと見えけれ。是は五月の事ながら。うぶ子に藥玉をおくりし事ありしといはゞいふべし。ふり〳〵きてうの事は。醒齋老人の骨董集に。くはしくしるし。余が考をものせつれば爰にはいはず

右客篇二通

桃窠は京師の人。角鹿清藏といふ。名は比豆流。桃窠はその號。又號青李庵。家は一條通千本東に入る町にあり。持明院家の書法を學びて。筆學の蒙師たり。その性好事にして。尙古の癖あり。予二十年來文通の遠友にして。老實温順の人なるをしれり。よりてこの春つかはしゝ狀に。予は神田に移住のゝち。をり〳〵閉居の慮を推しひらきて。月毎に五六名家とまとゐするをたのしみとすなり。そのあそびはしかじ〳〵なりとて。耽奇。兎園の事どもを。いさゝかほのめかして聞えしらせしに。きのふその回報東着したり。披き見るに。おはれちかきわたりならば。さるかぐはしきむしろの末にも。れしてつらなるべかめるに。東西山河のはるかなるをいかゞはせん。せめてものこゝろやりに。耻ぢかゞやかしき筆すさびを。ふたひら三ひらまゐらする。これいとはしく思はれずは。さ月の會におしいだして。披露してたびねかし。さても貴所のわたりには。輪池翁など聞え給ふ名家のおはしますよしは。年ごろ耳なれて侍り。かの翁は持明院家の筆法を傳へさせ給ふとなん。おのれもかの御門人をけがし奉れば。仰山景慕のこゝちすと。ねもごろにゑめしこしたり。その志のいと淺からぬを。おしつゝみてをらんには。朋友のみちにあらじと思ふばかりをよすがにて。かれが稿本

ければ。奇談怪説多かれども。まことしからぬこともまじれり。これらは童蒙も耳目に熟して。今しも折々いふことなるを。又さらにこゝに識さば。冬の透間の風に似て。さこそは人に厭はれもせめ。世の諺に。大風の吹きたる跡といふ如く。風のはなしが是までにして。然して後のまとゐを待つのみ

文政八年皐月朔　　著作堂解識

前々會拙編中補遺附錄

宛委餘篇云。呂布有二赤兎一。張飛有二玉追一。曹眞有二驚帆一。曹洪有二白鶴一。又云。驚帆魏曹洪所レ名駿馬也。馳馬呉孫權所名快舫也。二事正相反。而又相對出二一時一甚奇。見第三八丁右この條の曹洪とあるは。曹眞の誤なるべし。とき馬に帆をもて名つけ。はやふねに馬をもて名つけし事。共に三國鼎立の時にあれば。實に奇なり。この事季春の集合に出だせし拙編錦颿の條にいふべかりしを。うち忘れたりければ。追うてこゝに志るしつくのみ。六日のあやめ。十日の菊。おくれていまだ遠くもあらぬを。見かへる人もあらんかとてなり

解　再　識

乙酉五月隨筆會　　平安　角　鹿　桃　窠

雨森東五郎のかける戲草といふものに。この國の筆法といへるは。壬辰の亂後。とりことなりて。此國にすめるから人の敎へしを。賀茂の甲斐つたへたるなり。されど今から人のものかくを見るに。筆の意はなはだ違へり。から人の筆の意も。もろこしとは同じからずと以上戲草按ずるに。賀茂甲斐敦直は。天文年間飯河治部少輔秋芸老後。一雨齋妙佐と號せし人に。上代の書法を傳へうけたるなり。其事。實書博士家の系圖に見えて。いとあきらかなり。かのから人に筆法をうけしとは。さらに意得がたし。されども。芳洲老人は博雅のひとなり。其頃かゝる傳へもありしにや

文政八年乙酉隨筆會　　平安　角　鹿　桃　窠

花

京師の俗に。小兒生れて初の正月。母かたの親里などより。男子にふり〳〵きてうを贈る事は。今もまれ〳〵にあり。女子に花をおくりしは。漸くたえたるに似たり。浪華あたりにては。はま弓てふものを贈るとか聞きしが。其事はよくもしらず。花といふ

十郎が宿所のほとりは。昔春日局の別莊にて。素より由緒あることなれば。年々の秋毎に。園に生じたる栗を採りて。つぼねの廟に備ふるを恒例とするものなり。しかればこの日も採りたる栗を。ひとりの從者に齎しつゝ。湯島なる天澤山に赴きて。役僧にわたしてけり。さて辭し去らんとする程に。風はいよ〱烈しくなりぬ。猶しばらくと留められしを。れはやけざまの所務あればとて。いそがはしくまかる程に。寺門を出でゝいく程もなく。門內なる樅の木の。十圍にもあまりつべく見えたるが。只推し揉りたるやふに。樹は眞中より吹き折られて。大地を撲ちて落ちしかば。從者は大枝に肚を撲しで。矢庭に即死したりける。年十六になりしものなりとぞ。その名をしらず權十郎も打ち仆されて。半死半生なりけるを。寺より駕籠にたすけ乘して。宿所へ送り遣せしに。家路にかへり着く程に。忽ち息絶えにけり。享年四十二歲といへり。大風烈の折などには。鬼魅蛇蝎の風に乘じて。飛行することありとしもいへば。已むことを得ぬ急用ならぬに。犯して出づるは愚に似たり。しかれども。又風の吹かぬに。物の倒るゝとも有りけり。近くは文政六年癸未の夏六月廿三日の未の時ばかりに。淺草寺の地內なる。三社權現の石の鳥居の。忽然と折れたるを。人みなおどろき怪みて。さまゞ〱にいひしかど。笠木の三つに折れ碎けしは。その續目の甘き延びて。落つる勢にて折れたるならん。折れて落ちぬるものならずは。さまで怪しとするに足らず。これよりもいと奇なりと思ひしは。文化四年丁卯の秋。八月廿三日の未の時ばかりは。御城內御焔硝庫のほとりなる。ふりたる松の二株まで。自然と折れしことありけり。その樹は。十圍にもあまりつべし。この日は。しかも美日にて。そよふく風もなかりしに。只是のみにあらず。上野護國寺の巨樹。河越侯邸中の大銀杏など。おなじ時刻に折れたりといふ。これも亦一奇事なり。しかれども。この月の十九日に。深川八幡宮の祭見んとて。永代橋を踏み落しつゝ。をよそは四百八十餘人。水に沒して死にたりける。このことの噂にのみ。世の人耳を側てつる最中にてありければ。件の巨樹の折れたるをいふものもなく。知るもの希なり。又去々年癸未の秋八月十七日の夜の大風烈は。近來未曾有の暴なり

及びしといふ。しかるにその風は南よりして。特に潮氣を含みたり。さればにや南を受けたる草木は。すべてその葉を吹き凋まされて。枯れ果つるに至るもありけり。この年の冬十月。予は榎の島。鎌倉に遊びしに。海道の松毎に凋落せぬはなかりけり。かゝれば南表なる漁村は。彌烈しかりけん。風に潮をまぜて吹きしは。こもめづらしき事になん。是よりも猶奇しき事あり。この大風烈前二ヶ月。七月十日の事なりき。侍醫山本宗英法眼。其通家官醫野間氏の本所なる宿所に赴きてのかへるさに。夜ははや亥中とおぼしき比。兩國橋を渡る程に。河上に一團の火焰あり。吾妻橋のかたよりして。大橋の方に過ぎけり。おもはずこれを仰ぎ望つるに。その光の青く引きたる。青衣の官人騎馬にして。前うしろに從ひつゝ。火焰を守護するものに似たり。その容はおぼろげなれども。すべては衣冠束帶の如くにぞ見えてける。橋の上を相距ること。凡一丈ばかりにして。徐々とねりゆくを。立ちとゞまりて猶見る程に。漸々に滅えうせしとぞ。予は次の月の下旬まで。さる事ありともしらざりしに。風聞他所より聞えしかば。八月廿よかの日に。與繼を遣して。法眼に問はせしに。聊もたがひあらず。見し趣は云々なりとて。詳に語られけり。扨も件の法眼は。予と三十餘年ばかり。交遊の義を辱うせられたる。少年よりの友にして。齡は五つの弟にておはせしによりて。その心ざまも大かたならずしりたるに。絶えて浮きたる性ならねば。實説なりきと思ひしのみ。何の故とは曉らざりしに。後の葉月の四日に至りて。法眼の見きといはれし兩國河の怪物は。かゝる烈風。洪水のありぬべき前象なりきと。初めて思ひあはしけり。かゝれば橋南谿が。東遊記に載せたりし。名立崩れの前月に。神佛の空中を飛び去り給ひしなどいふ事も。一概には誣えがたかり。これよりわづか三とせにして。文政元年五月下旬に。彼法眼は身まかり給ひぬ。享年四十八歳なりき。いとをしかりける齡にこそ。（文政癸未八月十七日の夜の大風雨のさきは。その大き醬油樽ばかりなる陰火の飛行せしを。まさしく見たる人あり。非常の暴風のさきには。必そのしるしあるこそなるべし）かくて。又文政三年庚辰の秋。九月八日の大風烈に。駒込不動坂のほとりなる。名主内海權十郎主從二人。巨樹に撲たれて身まかりけり。そを相識れる商人の。次の日に來て。告ぐるを聞きしに。權

負せしなり。さればこの時四方山人。送二風神一狂詩あり。録してもてこゝに證とす

引道(ヒクナラク)此風號二谷風一。鬪々淡咳響二西東一。惡寒發熱人無レ色。煎様如レ常藪有レ功。一片生姜和レ酒飯。半丁豆腐入レ湯窓。送レ君四里四方外。千壽品川問屋中。

又文化元年にはやりし風邪をお七風と名つけたり。こは八百屋お七といふゑせ小うたの流行せしによりてなり。又文化五年の秋はやりし風邪を。ねんころ風と名つけたり。そのよしは上にいへるが如し。又文政四年の春二月の比。いたく流行せし風邪を。たんほう風と名つけたり。こはこのときのはやり小うたに。たんほうさんや〱と。謠ひしとのあればなり。かくて去年甲申の春二三月の頃。はやりし風邪を薩摩風と名つけたり。こは西國よりはやり初めて。こゝまでうつり來つればならん。此うち谷風。お七風。ねんころ風。たんほう風は。はげしかりき。家々毎に五人三人枕をならべて。うち臥さぬはなかりけり。西は京攝に至り。東は安房上總。西南は甲斐伊豆の海邊。北は信濃越後まて。なべて脱るゝものなかりしよし。その折々に友人の郵書にも聞えたり。

たんほう風のはやりしとき。何ものかよみたりけん

　みやこから乘せてくるまのたんほ風
　　ひくものもありおすものもあり

いとおかしきや。例の人の癖なるべし。かゝれば此風は京よりはやり來つるにこそ。この他。寛政享和中にも有りけんを。さる名を負せざりける歟。いふかひもなく忘れたり。抑この一條は曩に北峰子のしるしつけたる。風の神の圖説の後につけてもいはまほしかるまゝに。伊豆の千わきのわけなし言もて。科戸の風の神やらひしつ。鋭鎌。八重鎌。刈りはらふごと如。禿(チビ)たが筆を走らせし。みそぎのやゝのやく體もなき。只是嗚呼のすさみになん

　○兩國河の奇異　庚辰の猛風　美日の斷木

右の風の物語にて。思ひ出だしゝ事あるを。更に又こゝに書きつく。文化十三年丙子の秋閏八月四日の大風雨は。予(ヨ)が日記中にしるし置きたり。其前日より雨ふりつ。天明けて。雨は歇(ヤミ)たりしに。又巳のころより大風雨にて。樹を拔き。屋を破りつゝ。申の比に雨霽れて。其夜子の比及(コロオヒ)に。やうやくに凪てけり。この時。本所。深川は水出でゝ床の上壹貳尺に

しことありけり。そのうたを聞くに。わしがわかいときやれかめといふたがのんころ。今は庄屋どの丶子守するねん／＼ころ／＼ねんころりとうたへり。此うた。もとは歌舞伎狂言に始まりしを。遂に江戸中に推しうつりて。いたく流行したるなり。又みめよりと名つけたろ。下品の餡餅を市中の辻々にてうりはじめしも。この時のことなり。こは右のうたの中。別に人はみめより。只心といふことのあればなるべし識者或はいへることあり。今茲は秋のころに至りて。感冒必流行せんか。細人小兒おしなべて。寢々轉々と謠ふこと。是病臥の兆ならんといへり。果して八九月の頃に至りて。風邪感冒流行して。良賤病臥せざるはなく。輕きは兩三日にしておこたるもありしかど。重きはその症疫熱に變じたる三四十日に至るもあり。或は庸醫に惑られて。よみぢに赴くものもありけり。このときのゑせ狂歌に

はやり風無常の風もまじりけり
　　ねん／＼ころり用心をせよ

かくて病むと。やむ程に。關の八州いへばさらなり。京攝の間まで脱るゝものなかりしとぞ。童謠はいにしへより和漢の歴史に載せられて。應驗あらずといふもの稀なり。又はやり病は。なべてみな。年の氣運の順逆にて。せんかたもなきことながら。それよりも猶疎ましきは。市井の風俗のくだれるなり。その水上を尋ぬれば。劇場よりいでぬはなし。風を移し俗を易ふるも三絃にこそよるべけれ。その三絃といふものも。雜劇を師とするのみ。知らずひがごとならんかも

予が東西をおぼえしころより。大約五十年このかた。時々の感冒に。世俗の名を負はせしもの少からず。まづ安永の中葉にはやりし風邪を。お駒風と名づけたり。こは城木屋お駒とかいふ淫婦の事を旨として。作り設けたる淨瑠璃のいたく行はれたればなり。又安永の末にはやりし風邪を。お世話風と名つけたり。こは大きにお世話。茶でもあがれといふ戲語の流行せしによりてなり。又文明中にはやりし風邪を。谷風と名つけたり。こは谷風梶之助は。當時無雙の最手なりければ。これに勝ものあること稀なり。谷風嘗て傲言して。とてもかくても土俵の上にて。われを倒さんことは難かり。わが臥たるを見まくほりさば。風をひきたる時に來て見よかしといひしとぞ。この言世上に傳へ聞きて。人々話柄としたる折。件の風邪を谷風が。いちはやくひき初めしとて。遂に其名を

しかるにかの城下なる田地どもの。或は十間ばかり。或は二十間四方づゝに皆きれて。水の上に浮みたり。それを又並木の松の大きなる。伐らば臼にもすつべき幹に。藁の繩もて繋き置きたり。何ものゝわざといふことをしらず。天明けて人みなこれを見て。驚きあやしまぬものなしとなん聞きて候ひしとかたりき。その時。同行の老人與五右衛門とかいふものゝ云ふ。田地の水に浮きたるとしを。つら〳〵とおもひみるに。むかし佐倉の城地を築かれしとき。今の城下のほとりには。沼溝の多かりしを。竹木芥坌の類をのみ夥しく投げ入れて。やうやくにうづめつゝ。扨田地にはなしゝよし。故老のいひもて傳へたり。大凡。洪水は降る雨よりも。土中より涌き出づる水の多きものなり。されば下樋より涌き登る水の勢もて。田地のきれて浮きたるを。流さじとおぼしめしゝ神々の神わざにて。※夜の中に並木の松に繋ぎ留めさせたまひしならん。その浮田の體たらく。畔に竹のしげりたる。杉榛の樹の並びたちたる。そがまゝに浮きたるを尋常なる藁索もて。あちこちに繋がれし。その田地は少しも動かで。水の上に渺々たり。やつがれらは他領の民にて。佐倉より七里ばかり上なる在のものにはべれど。きのふ目前にさる不思議を見て。かくはいふなり。かの地には。領主より船四十艘ばかり出ださせて。人を渡し給ふなり。（百姓わたし但し無錢）されば佐倉の人々には。田地を流されざりし事。こはまたく堀田侯の徳の致せるものなりとて。感嘆大かたならざりけり。けふ行德まで來て聞きしに。この地の水はきのふより一尺あまり退きたりといへり。佐倉の水も。さぞあらん。和君よゆたかにおはしませ。誘まからんといひかけて。皆つと立ち出でゝゆきけり。此事いとめづらかに覺えしかば。雜記中にしるしおきしを。今又此に抄し出だしつ。おもふに。出羽なる大沼の島あそびは。先輩既にものにも誌し。又同國秋田のからす沼。及龜田の山中瀧の股なる峯形といふ沼にも。亦島游びの奇異あるよしは。拙著放言中に收めたれども。佐倉の浮田はこれと異なり。亦一奇談とこふべきのみ。（文化五年春より秋まで。霖雨しば〳〵せり。この年三月より八月上旬に至りて。雨天一百零七日なり。九日までも快晴はなほ稀なりき）附けていふ。右の前年（文化四年）の冬より。五年の春夏の頃まで。里巷の小唄に。ねん〳〵ころ〳〵節とかいふものゝ。いたくはやり

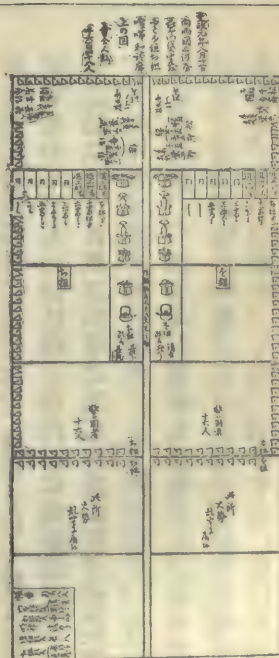
大造にて。既に即死に可成程之事に候處。快方いたし。今日手打に相成り。誠に安心致し候。右萬五郎。千之助。清五郎。與三郎咄に御座候。段々喧嘩の樣子手負之者。左之咄承り候へば。身の毛も動き候樣なるこゝち恐ろしき事に御座候

一向兩國三河屋喜右衛門二階座敷和談之場所。長さ十二間。幅五間。片々壹間之長通り有之。八疊敷十二間に仕切り。中仕切有之。何れも襖なり

一八月二十二日朝五時より。段々三河屋へ打寄。手打相濟み。刻限者夕七時頃に御座候

右座敷繪圖面左の如し

前條に載する所の。を組の纒持卯之助が幸吉とかいふものに代りて。解死人にならんと請ひし事。匹夫の勇には似たれども。取るべきところなきにあらず。難にのぞみて死を惜まざる勇氣は。をさ〳〵武夫といふとも及ばざるもの多かり。もしよくこの志をもて。義を求め。道を聽き。君父の大事に出でしめば。名を竹帛に書すに足るべし。わづかの爭鬪に性命をおやまらんとす。豈をしからずや

文政乙酉五月朔　海棠庵再識

○佐倉の浮田　安永以來のはやり風

文化五年戊辰の秋八月。下總佐倉の洪水は。風聞こゝにも聞えしころ。その月廿三日の事なりき。予はたま〳〵著述のつかれを保養せんとて。ひとりそゞろに立ち出でゝ。あちこちとなく逍遥しつゝ。眞菰が淵と呼びなせる。おん塹端（ホリバタ）の出茶屋なる。牀几に尻をうちかけて。しばしやすらひたりし折。下總の旅人等に（そのもの同行三人なり。その内に老人あり。その名を問えば。與五左衛門といへり）かり初にものいはれにけり。よりてかの水の虚實をとひしに。その人答へて。聞かせ給ふが如く。こたみ佐倉の事は。近來稀なる大水なり。つや〳〵そらごとには候はず。

纏持は紫縮緬。黄ちりめんの單物。せなかに纏と云ふ字をぬひ付け。帶は何れも天鵝絨に御座候。其外紫ちりめん。黄縮緬。びろうどの帶を致候ものの貳三百人も相見え候。其外。所持之きせる烟草粉入。紙入等は。何れも金五六兩共相見え候品計に御座候。尤側に居候を見請候人の咄に。阿部川町與三郎。り組の長治など所持之多葉粉入は。くさり計にても五六兩も可致品と相見え申候

一十番組の頭取萬五郎。仙之助。清五郎。八番組頭取孫市。九番組頭取吉五郎。右いづれもはなし候は。右喧嘩之相手方。ち組の怪我人廿人。内二人は即死にも可相成と申もの纏持藤兵衞。幸次。を組の怪我人十三人。内纏持卯之助。幸吉と申。右幸吉ち組の藤兵衞。快方無之死去致候節者不得已事。此方纏持幸吉解死人に可相成段。幸吉是を申居候。然處怪我は少々疵も宜候得共。餘病之發り候處。先役之卯之助十人を組總中へ願出候は。此度之解死人幸吉儀は。當り前之處に御座候得共。同人義は御存知之通り若年者之事。殊に此節餘病差發り候事故。只今解死人之取沙汰格別之心勞致させ候も。私先役にて外組へ對し相濟不申候間。何分解死人には私に相究り候樣にと。卯之助達而申入候得共。解人之事故容易ならず。組中一統卯之助へ申聞候は。願之趣尤に候得共。此度之義は。幸吉解死人と相極り候間。此段左樣可相心得候と申候處。又候卯之助申出候者。被仰候處御尤には候得共。幸吉儀も餘病も有之。萬一病死等仕候節は。跡にて解死人之取沙汰江戸中へ對し。外聞不宜候。名前にも相拘り候間。何分解死人は拙者に御極め被下候樣。達て之願に付。又候一統仲間申談卯之助心底に任せ。ち組之方へ卯之助解死人之趣相屆置候。然處。手負人も快方に相成。今日和談之塲所へ相詰合候得共。座敷之式へ列座に出し候ては。盃事何か手事も相懸候間。其内には麁略聞違等も有之節は。又候破談喧嘩之元と相成候故。允之塲所へ取出だし不申候。總代として圖の如く。を組より榮五郎。ち組より長藏兩人差出だし。手打相濟候。尤壹番盃に相出だし。ち組の纏持藤兵衞と申者は。喧嘩の節に。を組之纏持幸吉に鳶口を左之鬢先へ刺し倒され。貳間程引かれし由誠に疵も

樣。肴の請樣。亦は肴役。銚子役之者。酌み取樣。肴之摘樣不限何事。前後有之歟。又は世話人。中人。巳之助杯之口上に少しも前後間違等有之候節は。其場所にて和睦破談に相成大變之基故。銘々迄三獻之盃事相濟不申內者。誠にひや汗を流し。心配此上もなき事に御坐候。先年も和談之節。盃取遣りに少々麁畧有之に付。其和談之場にて。直樣破談喧嘩に相成事も有之。其節は組合も不足之事故。格別之事も無之候へ共。此度は和談近年覺無之大場所にて。誠に仲人初頭取之銘々迄。心配之段申盡しがたく候。三獻盃之內は。敵味方列坐の面々目を皿の如く致し。麁畧間違等計氣を付居候事に候。誠に恐しき事に御坐候。今日の人數も帳場に祝儀を差出し。帳面へ相記候人數。千六百四十八人程有之。然共雨天に付。遠方之者は。禮儀一通りにて。仲間へ相賴罷歸候者も五六百人有之。手打相濟候迄。相詰居候者は。二階座敷に六百人餘。下座敷に貳百人餘。奥の間に老人共七八十人詰居候。都合九百人餘之人數に御座候。誠に近年不承和談に御座候。駕も四五十挺も三河屋之前に有之。右之趣具に十番組頭取萬五郎に。六人之者はなしに御座候

一先達右喧嘩の節。手負之者有之に付。根津音羽兩所之遊所より。拾三兩弁堂前より金七兩貳分。ゐたけより金五兩。右見舞として進上致度趣。內々聞合申入候に付。此方頭取世話人共より存つき之處。至極尤之段忝趣を申遣候之處。早速樽肴に金子差添。世話人方迄致持參候に付。受取申候。都て火消組之內に。喧嘩に不限。混雜之事有之候節は。江戶中之遊所より見舞として。樽肴金子差越事。今日之和談とても右同樣。此方より頭取世話人方へ內々申入。江戶中之遊所より樽肴金子等。祝儀差越候へ共。是等之事は。今日張札に不相成候事に候。右之趣八番組頭取孫市。九番同吉五郎。十番組同仙之助。阿部川町同與三郎。右四人のはなしに御座候

一今日和談に打寄候年寄。仲人。世話人。取頭共之衣裳は。八丈之せいひつ縞などの袷。或は單物。又は龍紋袷。羽織は絽の紋付など。なゝこ龍紋抔にて。帶は縞はかた。薩摩琥珀。厚板類に御座候。

だし。口上にて。御銘々御盃事仕候筈に御座候得共。大勢之事故。時刻も移り候間。餘はいかゞ可仕哉と挨拶に及候處。一統思召に隨ひ候と返答に及び。夫より一禮畢りて。巳之助元座に直り。長次郎。平次郎と申談候て。又候上座に進み。何れも樣吉日に付。御和談も盃も首尾能相濟候に付。御總中樣へ御手打を願候と及挨拶候所。一統承知にて。一禮致し。夫より巳之助元座に直り候而。三々九之手打目出度相濟申候

廿二番　巳之助上座に罷出。何れも樣。遠路之所御來駕被成下。御苦勞千萬に奉存候。依之御座を和ぎ。ゆる〳〵御酒宴可被と及挨拶。巳之助元座に直る

廿三番　熨斗三方瓶子土器。銚子喰摘兩方一所に引き取る

廿四番　花莚を引き取り。を組。ち組と書候張札を取り。夫より巳之助。清吉。平次郎。長次郎。長藏何れも下座へ引き取り候

廿五番　是より又候座敷を掃除致し。肴。銚子。盃出でゝ。酒宴初まる。此節巳之助。清吉。長藏。長次郎。平次郎其外仲人に罷出候人々の内より。四五人も座敷へ罷出。何れも樣今日は吉日に付。御和談手打も無滯相濟。依之ゆる〳〵御酒宴可被下候と及挨拶候而。何れも下座敷へ引取候

此節阿部川町文吉といふ者。和談手打にも首尾能相濟候に付。私共拾人計南御番所へ罷出候間。此跡は酒宴計にて。別に相替儀無之に付。拙者共歸り可申旨及挨拶候

一其節。を組世話人與三郎。十番組頭取萬五郎。仙之助。清五郎。八番組頭取孫市。九番組頭取吉五郎。右六人之者咄申候は。此度之和談は。近年覺無之大場所にて。江戸中にもれ候所は。深川八幡前。芝。麻布堺ばかり相殘り。其外江戸中千住。品川。染井。巣鴨邊之組合にて。誠に心遣成る和談に御座候。其譯は。今日三獻盃之內に。盃之取

一所なり

十六番　銚子を持ち出だし。を組の平次郎方へ參り。同人一獻給。ち組の纒持藤兵衛へ持ち出づる。同人一獻給候節。肴役の者。喰摘を持ち出で肴を遣す

又ち組の長次郎給候盃は。を組の纒持千松へ遣す。同人給候節。肴役の者。喰摘を持ち出だし。肴を遣す。三獻給候て。銚子土器喰摘。何れも元の座に直る。夫より藤兵衛。千松元の座へ直る

十七番　巳之助上座に出で。懷中より書付を出だし。を組の吉五郎樣。ち組の幸次樣と呼び出だし。兩人圖の如く座に着き。一禮畢りて。巳之助元の座に直る

十八番　三方役之者。土器を持ち出だし。を組の平次方へ持ち參る。同人一獻給候盃は。ち組の幸次方へ遣す。同人一獻給候節。肴役之者。喰摘を持ち出だし。肴を遣す

又ち組の長次郎給候盃は。を組の吉五郎へ遣す。同人一獻給候節。肴役之者。喰摘を持ち出だし。肴を遣す。三獻給候て。銚子土器喰摘何れも元の座に直る。夫より兩人一禮畢りて元座に着く

十九番　巳之助上座に罷出で。懷中より書付を出だし。を組の榮五郎樣。ち組の長藏樣と呼び出だし。兩人圖の如く座に着き。一禮畢りて巳之助元座に直る

二十番　三方役之者。土器を持ち出だし。を組の平次郎方へ持ち參る。同人一獻給候盃は。ち組の長藏方へ遣す。同人一獻給候節。肴役之者喰摘を持ち出だし。肴を遣す

又ち組の長次郎一獻給候盃は。を組の榮五郎へ遣す。同人一獻給候節。喰摘致候者喰摘を持ち出だし。肴を遣す。右三獻相濟とて。銚子土器喰摘引き取り。夫より兩人一禮畢りて。元座に直る

廿一當　巳之助上座に進み。懷中より書付を出

り。子五月五日の朝。右之川岸を出だして。同七月にふき屋町へ引き付けたりといへり。此時の金主は。上州太田宿ふぢや新五兵衛といふ者なり

此上州の一條は。太田宿佐衛門といふ人よりの文通をしるし出だす

文政乙酉中夏朔　　文寶堂しるす

○町火消人足和睦の話

いぬる文政元年の秋八月。町火消人足。を組。ち組喧嘩の和談のありさまを書けるものを見しに。いとおごそかなる事にて。いにしへ戰國の講和もかくやありけんと。自笑してゑるす事左の如し

文政元寅八月廿二日。向兩國三河屋喜右衛門貸座敷において

一膳面相濟候後。座敷を掃除

壹番　進物の札を張り

貳番　總中座に着き

三番　座敷の襖をはづし

四番　座敷の眞中に花莞筵を敷き

五番　熨斗三方を持出づ

六番　瓶子を持出づ

七番　三方喰摘を持出づ

八番　三方土器を持出づ

九當　銚子を持出づ

十番　平次郎　清吉　巳之助　長藏　長次郎座に着く

十一番　巳之助上座に進み。和睦之口上を述ぶる。その節一統一禮畢りて。巳之助元の座に直る

十二番　熨斗三方上座に進み

十三番　瓶子喰摘土器上座に進み

十四番　巳之助上座に進み。一禮有之。懷中より書付を出だし。を組の千松樣。ち組の藤兵衛樣と呼び出だし座に着く。一禮有之。巳之助座に直る

十五番　三方役の者。土器を持ち出だし。を組の頭取平次郎。清吉方へ持ち出づる。三方役之者土器を持ち出だし。ち組の頭取長次郎。長藏方へ持ち出づる。何れも

有馬殿の火の見櫓の屋根紛失の事
新し橋にて。車力釜を落とし釜數四つ割れし事
四谷にて。堀りぬき井戸を堀りかゝり。錐のぬけざりし事
この外にも種々聞きたれど忘れたりけるは。あやしき惡日なるべし

芝居の梁をれより三四年前。（文化酉年比）するが臺。伊藤金之丞殿（御兩番）のやしきに。十四五歳の比よりつとめ居りしこし元。（名はきは）俄に發熱し。狂亂狐のつきたるごとくにて。口ばしりける中に。我住居した宮を損じさせ。跡にて修覆せんと僞りて。今に其沙汰もなく。打ち捨て置きたる事。甚腹だゝしく。芝居繁昌を守ることは扨おき。このうらみには不繁昌させ。永く芝居に崇るべしといひつゝ狂ひまはりける故。やしきにて請人方へ引き渡し。宿にて能く療治すべしとて遣しける。五日目に此女は身まがりしとぞ

傳に云。此女の父母とも。にはやうなくなりけるゆゑ。祖父方へ引き取りて。親類方へ頼み。右伊藤氏へ奉公に出だしけるよし。此祖父といふ者は。ふきや町羽左衛門の座がゝりの者にて。その三四年以前。程ヶ谷の法性寺にて。芝居の梁の木を買ひ出だしにゆきたるものなり。當時宮居大破に及びたれば。住僧修覆の事を頼みける故。芝居懸りの者。茶や一同にて。一日に一錢づゝの日掛をして。其積金を以て。宮破損の修覆致すべし。貴僧には猶も芝居繁昌の祈禱を頼み入ると。約諾いたしたるまゝにて。其後修覆の事にも及ばず。打ち捨て置きたるよし。さるゆゑに此度神のたゝりにて。梁もをれたることなるべし。三四年以前女の死したるころは。親類がたへ任せ置きたる故。さのみ氣もつくまじけれど。今かゝる變事の出來たるにより。さはおもひあたるべしと。かの屋敷にても語られしと。牧村氏（御兩番五百石）隱居一甫君のかたり給ひしなり

此梁の落ちたる後。取りかへたる梁は。出所上州新田郡岩松村鎮守八幡宮の境内にありし松を伐り出だしたり。此代金拾六兩。岩松村より堀口村といふ川岸迄八町の間。此入用金廿五兩な

に見えけるを。人々あやしがりしに。是は水氣なりしといひしが。げに雨となりしより。人々奇童とたゝへて。れひさき世のすぐれ人となりなましとかたりあひしも。今猶かいなでの物しりなり。こたび東路をのぼるとて。遠江國新坂のすくつゞき。伊達方村なる石川方救にはじめてたいめんしたるに。是はいつゝのよはひなり。冷泉中納言爲泰卿の御弟子となりて歌よむとて。東路の奇童といへりしも。物がたりしてこゝろむれば。粟田土滿にまなび。今は夏目甕滿にとひきゝて。なべての古書まなびする人なり云々といへり。これらみな經驗の言ぞかし。又奇童もあまりにほめ過ぐれば。後にかたはらいたき事多かり。この條にしるされし紫式部は。小式部內侍を覺えひがめたるにはあらぬか。小式部のいとはやくより。奇才ありしよしは。ふるくものにも見えたり。そはとまれかくまれ。すまひ草の歌などは。當時の歌のくちさきをよくもしらぬものゝ。つくりまうけし小說なるべし

○葺屋町なる歌舞伎座の梁の折れし事

文化十三丙子年五月三日　葺屋町桐長桐座梁折候に付御役所言上帳之內書拔

一去る酉年。葺屋町類燒之砌。元羽左衛門芝居普請之節。東海道程ヶ谷宿裏通り古町と申所。日蓮宗寺院 爲馬云。星川村法性寺といふ 杉山大明神と申社有之際にて。松伐り出だし芝居梁に致置候處。神木のよし。右たゝり故不繁昌之趣風說に付。町家別に百文宛取集。當時桐長芝居より下谷龍泉寺地中本淨院へ祈禱を賴。出家五六人舞臺にて祈禱致かゝり候處。梁表方三側內に有之中が折候。怪我者無之候

同日七時頃新吉原京町壹丁目より出火。遊女屋共不殘燒失。龍泉寺町まで燒け拔けて鎭まる。此龍泉寺は右ふきや町芝居祈禱に來たりし龍泉寺なり。その龍泉寺町まで燒け出でゝ。火のしづまりしも奇といふべし

この日所々にさま〴〵の珍事あり

永代橋邊にて。伊豆船帆柱折れし事

赤坂にて。鳶のもの登天せしといふ事

兩國廣小路のかるわざ綱より落ちて怪我ありし事

聲も高けれすまのうら波

野　雪

空さむみふりまさるらんしら雪の
　つもりうつれる冬の夕くれ

友千鳥

風さそふ音ぞさみしき夕くれに
　友よびつれて千鳥なくなり

右の四首を即詠しければ。則書寫して。太田備中守資愛殿へ差し上げたるよし。其比家老衆より。戀の歌を望み申されければ。戀の歌はよめ申さずと。爲藏申し上げたるよし。その夜父に負はれて歸るさ。月の出づるを見て

玉ぼこの道のひかりをさしそへて
　霜にさえゆく冬の夜の月

右田舍にはめづらしく存候間。寫御目にかけ申候と。遠州掛川宿。匂坂屋彥兵衞といふ者よりの文通に。いひこしたるをこゝにしるす
書名をわすれたり。何やらの中に。南殿の庭中に。夜のまにすまひ草の生ひ出でければ。公卿達いづれも詠歌有るべしとありし時。紫式部六歲の時

けふばかりまけてもくれよすまひ草
　とる手もしらぬむつ子なりけり

かく詠じければ。速に消滅したりとなん
これは雲の上にそだちて。後はかの物語をもつくれる程の才女といひ。ことに和歌などは常に耳ばさみがちなれば。かくもあらん。爲藏は鄙に生れて。誰敎ふる者もあるまじく。實に天才奇童といふべし

著作堂云。この爲藏が事は。予もはやく聞きしなり。この兒人となりては。石川方救と名のりて。和學をせるものながら。其幼かりし時に比ぶれば。才のやうやく劣りやしけん。其よめる歌はさらなり。その名も都下には聞えずなりぬ。淸水濱臣か旅の打聞にいはく。小時了々大未ニ必佳一といひれきけんやふに。をさなき程のかしこさは。れとなになりて。さばかりならぬものにて。大かに幼なき程のかしこさは。癇症のわざなりと。あるはかせのいはれしはさる事なるべし。おのれがしれる人にも猻野某は。八つになりけるとし。つごもりの夜に。月のかたちの空

し俄にしれがたし。捜索の間。日延をねがふ所なりと申して。今に御こたへ申さずといへり。安永。天明の頃にて有りし。吉田家參向ありて。傳奏屋敷にあられし時。傳奏留守居羽田氏の人。夜毎に昵近せしが。ある時問申しゝは。稻荷の正一位本社になき事を。人の言にまかせて。こゝら授け給ふは。いかなるとにやと申しゝかば。左やうのことをとはれては。迷惑せしむる事なり。何事もてゝのたねじやによつて。平田大角曰。稻荷山に正一位を授けさせ給ふ事なしといふは。こゝろえぬことなり。その故は。いにしへ三位を授け給ひし後。日本國中の神社おしなべて。一階を昇せ給ひし事。宇多天皇御時より。すべて四ヶ度有り。さればとくに正一位にておはすことなり。さるゆゑをばいかで御答申されざりけん

輪池

文政八年五月四日。定吉稻荷の禿倉を破却せらる。此日。寺社奉行より役人來て。云々にはからはせしといふ。つまびらかなる事は。猶よく聞きたらん日にしるすべし。但しこの事。前條に追書せられたれど。なほ具はらず。風聞はさまざまなれども。みなたしかならぬ事のみにこそ

著作堂識

○神童石河爲藏詠歌の事

遠江國佐野郡山口莊伊達方村鄕士。石河惣太夫悴爲藏寛政三亥年の出生にて。六歳になりける。とらの九月比。同所掛川連雀町温飩屋金八方へ。父惣太夫同道して行きける時。あるじ金八かねて聞き及びたる事故。爲藏に歌を望みけるに。折しも庭の菊さかりなりければ「秋ふかき庭のまがきに色そへて咲きそむるらん露の白菊」かく詠じけるを。遠近の人々聞き傳へ。六才の童子の詠歌なりとて。扇などにしるしもてあそびける。掛川城内へきこえて。其冬父惣太夫に。悴爲藏召し連れ罷り出づべしと仰せ下されければ。即刻兩人共罷り出でける時。御城代太田外記殿。河野十郎左衛門殿。その外家老衆列座にて。子細御聞糺しの後。題を出だされける。其題

霜夜月

やまのはの梢あらはにおく霜の
影もさえゆく冬の夜の月

浦千鳥

ゆきかへりしは島つれて友ちどり

されど町々をわたらせ給ふ時は。御出あるなり。よりて。常に鎮座ある樣に社を建てよかし。又曰。御膳講といひて。年中とり集むる物は。社家の德分のみ。さらに本社のためにならねば。今より後。止めよといふにより。この月より廢せしとぞ。或人十四日に。かの稻荷に詣でければ。あまたたてならべし。のぼり數すくなくなりぬ。こはいかにとかたへの人にとひければ。社家のいはく。きのふ或人來りて。白刃にてきりさきたり。富の願をかけしにあたらざりければなり。恨をはらすなりと言ひける。さての夜。俄に心ちそこなひて。くるしむことたとへんかたなし。これいなりの罰ならん。わびして給へとて。今日たのみ來りたりとぞ

輪池

乙酉五朔

〇定吉稻荷尾

神田明神の神は。柴崎大隅寺社奉行松平伯耆守へ呼び出だされ（乙酉五月三日の事とぞ）新規勸請の稻荷祠。すみやかにこぼち候へと申し渡されたり。柴崎大隅かしこまり申して。さてかのいなり。はじめは町家にて家の内に祭りおきしを。俗家にては崇敬もとゞかざれば。境内に移したき志願にまかせ。建てし所の祠なれば。新規勸請被申にもあらず。されば許容を仰ぐ所なりとこふ。いなその陳狀うけがたし。すみやかにこぼつべしとなり。大隅又申さく。私の建立にあらず。願主有之。建てし所なれば。せめて境内に元よりあがめつるいなりに。あはせまつらんとはいかゞ候はんとこふ。それも許されがたし。大社の神主に似合はざる申事とて。いよ〳〵しからせられしうへに。今日の内に毀つべし。あすの四時には。檢使をつかはすと有りければ。五月四日に。俄にこぼちけるとぞ。その日黃昏に。その跡を見しに。社の所を土をほりて。こぼちし材を燒きすてけるさまなり

〇稻荷正一位

定吉稻荷正一位を願ひ。吉田家の許狀。五月中には下るべしといへり。それにつきて思ひ出でしと有り。京師梅宮神主橋本肥後守橫經亮曰。いなりに正一位といふ事。更に跡なき事なり。櫻町院御宇。吉田家へ御尋ね有りけるは。稻荷山にだに正一位授け給ひし事はあらず。いかなればその他の小社に。正一位をゆるすやと。この御こたへにつまりて。其ゆゑよ

だめて。さらば此書を春塘につかはせとて。判紙をさきて五言四句を書す。是を見ば自ら會得すべしと云ふ。

盤中黑白子　一著要先機
天龍降井澤　洗出舊根碁

すなはち講中とりて傳へたり。さらば歸るなりといへば。定吉は臥して得もしらず寢たり。翌日夕七時頃出でゝ例のごとくみせに出。釘を直しをるを見れば。何とやらん疲れたる體なり。いかゞせしかとゝへば。かはることもなしとこたふ。ひもじくはあらずやといへば。ひもじくさふらふといふ。さらばとて食事させければ。殊の外にねふたしといふ。わそ心のまゝにねよとてねさせしに。夜中おき出でゝ。我は一たん歸りたれども。又來りたり。野島屋敷の某をよべといふ。むかへきたれば。さきに言ひもらしゝ事有りとて。何ことならんさゝやきて。のち又かへるなりといひけるにぞ。定吉は常の樣になりぬ。このこと十五日の夜。春塘にしたしく聞きて。その書をも摸せしなり。さらにうきたる事にあらず。かの詩は。觀音籤の第四十四籤なり

美成曰。予が抱屋敷小船町に在り。その所の家守勘七來りていひけらく。町内にて崇奉する天王の寶物に。去年戸帳を納めしに。日あらずしてぬすまれたりとて告げ來る。ふたゝび調はすべしなどいひおへるほどに。失せぬる戸帳出でたりといふ。いかゞしたるさまにかとゝへば。紛失せし後。深夜に本社のほとりを見めぐりければ。隨身門の内に白き物をまとひて。臥し居る人有り。あやしさに立ちよりたれば。その人おどろきて逃げ出でたり。かのしろきものは戸帳をうらがへして在りしなり。そのかたはらにかな網もあり。是もともにぬすみしものなりとこたへき。さてこの比。定吉はつきし狐の。われは明神の社地に來りて。七十年をへたり。子八疋有り。もとは末廣稻荷の社の下に住みけり。正一位になれしより。そこを出でゝ小船町の天王のみこし藏の下にうつりたり。さればかの戸帳。かなあみもわがてだてにて。もどせしなりといふ。又曰。天王のみこしにおほひをして。うすくらき内に置く。よからぬとなり。みこしは人の乘物のゝごとし。常に鎭座有るべきやうなし。それゆゑ常はこゝにはれはせず。

の事をいひける。就中。尤奇なりしは。野島屋敷の某は十年ばかりさきつころ。水に溺れし事あり。いと危かりしが。明神の仰にて。我行きて助けたり。その者不動尊をも信ずるにより。不動の加護にて助かりしと覺えをるなり。さおぼえ居たりとて。御咎もなし。神さまはおはやうなるものなりといひしとぞ。この水に溺れしことは當人深く秘して。家族にも語らざりし事なり。この類のことあまた有りし故。人信ずることたぐひなし。さて明神の境内に祠を建てくれよ。さあればわれ位を得るなりと云ふ。さらば門内に建つべしといへば。いな我は外を守る故なり。門外に建てくれよといふにより。今の地を占めしといへり。七日の夜。われはこよひ歸るべしと云ふ。その比。稻葉丹後守醫者河原林春塘來りて。わが思ひたつ事有り。此事心の如く成就すべしや。問ひ決せんといふ。諸人尊敬する事神佛のごとし。然るに春塘は禽獸のあしらひゆゑ。それをあかぬ事に思ひしにや。答にも及ばず。春塘云。其方は神通を得たりときけば。わが心中のことはいはずともしるべし。さつして成否をことわれ。いないふまじ。その方は我身のことにもあらぬ。人のことに勞する馬鹿者なりといふ。曰く。人の道に義といふと有り。その人の爲に身をわするゝ事も有り。しかるにその一の否をことわることも得せざるは。さすがは禽獸なりとなじる。狐いふ。わがしる人にもあらず。いかでか教ふる事の有るべき。塘曰。いかさま。犬や猫にはしりたるもあれど。狐には見しりたるもなし。たとひ神通を得たりとも。祠をたつるも人にたのまねばならず。正一位をさづかればとても。人がねがはねば給はらず。されば人ほど尊きものはなきに。いかで人のとふことを。ひとことだにもこたへざるやなど。あらがふほどに。講中きのどくに思ひて。はやかへり給へ。こよひは稻荷もかへらせ給ふ約あり。夜の更にふけゆくはとて。稻荷にもさま〳〵わぶれば。さらば春塘は木村定次郎が方へ行くべし。跡より告やるべしといふにぞ。定次郎が家に至りてまつに。時うつれども何の音信もなし。定次郎に問ひてたべといふ。下男を遣して問ふに。定次郎自身來りて。願もせよ。下男を遣すこと無禮なりとて。ます〳〵いかる。講中とかくこしらへつゝ。やう〳〵な

の娘の小野の小町なり。康秀の三河椽と成りて下向の時。「詫びぬれば身一代浮草の根をたねて。誘ふ水あらばいなんとぞ思ふと詠みしは高雄國分の娘の小町なり。「思ひつゝぬればや人の見えつらん。夢としりせばさめざらましをの歌。又出羽郡司小野良實が娘の小野の小町なり。高野大師の逢ひ給ふ小町は。常陸國王造義景が娘の小町なり。かく一人ならざる異説ある而已。中にも良實が娘の小町は美人にて。和歌も勝れたれば。ひとり名高く。凡て一人の樣。傳へ來るのみ。かゝる類。萬事に多し。暫く記して疑を存し。亦以て博雅君子に問ふ

奥州吉野の邊にまちかひ草とて草有り。深き山谷に生じて。誤りて食すれば。當時死を免るとも。一年の内必ず死す。此草本草等にも不見。其味甘して根はかなのよの字に似て。和草なり。根も實も甚似たり。□□□□なり。葉の形定まらず。種々にて四角も有り。丸きも有り。尖りたるもあり。三角もあり。細き。廣き花々。今年は殊の外美事に咲くといへども。來春はみにくし。年々歳々不定草なり。可謂異性草

乙酉五月朔　　中井乾齊誌

○定吉稻荷

ことし(文政八)四月四日。神田明神境内隨身門の外。東の方に小祠を建て。定吉稻荷大明神と題せし幟あまたたてたり。其緣起をとへば。いと不思議なる事どもなり。神主柴崎の家事を講中の者より合へて經濟せんとて。境内の伊勢嘉といふ茶屋に集まる事有りしに。永富町釘屋清左衛門方に會せり。其つれ來りし年季もの。定吉年十四歳なるに。供待の內に居眠りしける間に。狐付きて座敷に出で。主人に向ひ。清左衛門とよびかく。こは何ごとぞといへば。われは明神の門を守る野狐なり。其方共に云ひきかすべき事ありて。定吉につきたり。その故は。其方共神主の家事を。親切に世話いたす段。奇特なり。然るに。その筋の還合某には不正なるものなれば。事行ふまじ。某は正しきものなれば。向後はその人に應對すべし。此事とくより云ひきかさんとおもひしかども。折を得ず今日に至れり。講中にとりても清左衛門は。わけて正直なるゆゑ。かく告ぐる所なりといふ。事はてゝ。家につれ歸りても。狐放れず。さま〲

兎園小說

瀧澤馬琴等編

○家相談

近年我邦も亦家相の學行はれて。病難を救ひ。火難を免かれ。其術に心服する者少からず。衆人の歸する所。其功驗なきにしも非ず。余是をゐる人に聞けるに。曰。嘗て松永宗因藥研堀にて。家宅を買ひ求めて移らんとす。其日濱町會田七郎宅にて。金蘭に邂逅して。家相の談に及び。其言に服し。其判斷を請ふ。金蘭一見して。家に死骨有り。此に住む者必ず病死之由申す。宗因畏愼て其家に移らず。直に人に讓りけり。女隱居の其家を買ひて移りたる者。一月餘にして病死せり。其後醫生有り。其家を買ひて此に住みけり。程なく是も亦病死せり。金蘭又久松町河岸へ行きて。其長屋の病氣長屋之由を申し。聞直すべき由申す。然處其言にも從はすして。後果して如之

遠州屋久三郎家內死絶して奉公人を養子とす。今の久三郎是也。妻勞咳にて。老母中風に相成腰拔なり。手代兩人有り。一人は病死し。一人は脚氣病に苦しむ

大黒屋彌右衛門老母手足之指拘屈して不伸。二十年來腰拔なり。俗呼達摩婆々と云ふ。五年來之內妻二人不幸す

大黒屋次郎右衛門祖父二三年前病死。其孫二人偏疾なり。其父亦脊むしなり

松坂屋某。其妻向島にて變死し。手代一人かたり刑囚と爲りて死にけり。其餘略之

余亦米山の遺書を受け。數々其術を試みたるに。數々しるしあり。近き頃。池之端仲町へ行き。南側書物屋某の家相を見。其家の子なきを辨じ。日々試に家並子なきを相す。書物家某曰く。誠に御教の如く。俗呼此長屋を子なし長屋と申傳由是亦奇中奇。暫く論じて後の君子を待つといふ

或云。小野小町の事。牛馬問に委しく辨じ置けり。却て小町を一人と思ふより紛れたる說多し。實方朝臣陸奥へ下向之時。髑髏の眼穴より薄の生ひ出で丶。「秋風の吹くにつきてもあなめ〳〵。小野とはいはじすゝき生ひけりと有りし歌の。小町は小野の正澄

兎園小説第十一集目録終

兎園小説目録

れるものにたづぬべし。人の嗜慾のくさ〲なるそが中にも。王子猷が竹をこのみしは。秀色清風をめづるなり。綯弘景が松風を好みしは。閑雅の餘韻をめづるなり。又劉邕が瘡痂（カサブタ）を嗜みしは。劉邕嗜瘡痂見宋書本傳 多くわるべきことならねども。そも口腹の爲ならばいかゞはせん。ひとり狸庵が一生涯狸をのみ好みたる。すくせいかなる因果にか有りけん。是も一個の畸人ならずや寛政中狸のをんなにばけたるが。夜な〲山の宿の辻に立ちて。人をたぶらかし。そのゝち堀の船宿っ西村屋の庭なる。青樹のほとりに穴してをりしを。彼處の船宿どもうちつどひて。生捕たることの趣は。去歲の冬。海棠庵にて大かたはかたりき。さばれまさしき事なるに。いまだ聞かざりしとのばらもわなれば。これも亦のちのちに別にしるして披講すべし。こゝには只北峯子のいはざるを補ふのみ

乙酉仲夏初三　　著作堂

兎園小說第五集終

よふし給へとそゝのかされて。まづ北峯子の拔講を聞きつ。又その狸の書を見るに。曩に予が聞きたるも。これ彼暗合したるにより。さては予が聞きたりしも。まことにてありけりと。又さらにおもひなりて。これらのよしをしるすのみ。世にいふ餘計の仕事に似たれど。心ざまのあへるどちをひとつ穴なるむじなといへば。狸の事にもかばかりの事しもあらんと自笑して。諸君の書寫の紙かずをかさぬるは。をこならんかし

因にいふ。北峯子の末篇にしるされし狸庵には。予も一兩度たいめんせしなり。渠が當時の本宅は。中橋なりしか。よくもしらねど。年來。芝新橋の橋つめに。さゝやかなる祇店を出だして。賣卜をもて活業にせしものなり。寛政中。予は伊東蘭洲に誘引せられて。そが店に赴きて。畜ひれける狸を見し事ありけり。この時は。狸二三頭を。前を竹簀子にせし箱に入れて。その座右に置きたり。毛いろのいさゝか異なるを。いかにぞやとたづねしに。一頭は玉面狸なり。その餘はよのつねなるものなりとて。ほこりかにとき示しにき。このゝち文化の初にや有りけん。誰やらが書畫會の席上にて。又彼狸庵に面をあはせし日。渠が年來秘藏すと聞えたる狸石を携へ來て。予にも見せ。人々にも見せけり。その石はまろくして。長さは纔二寸に足らず。薄青白なる石のうちに。黑く三四分ばかりなる狸のかたちあり。是天然のものにして。さながら畫けるに異ならず。見るもの嘆賞せざるはなし。只是のみにあらず。そが煙包（ダバコイレ）の諸飾紙囊（カミイレ）のかな物なんど。すべて狸にあらぬはなし。又好みて狸の寫眞をよくせり。予その畫きたる狸を見しに。形狀毛色分釐をたがへず。畫は唯狸をのみよくして。その他のものを畫かずといひにき。予が爲にも一ひら畫きて給はれといひけれども。この頃は著述にいとまなき身なればとばかりにして。ふたゝびもとめず。今さら思へば。後このかたりくさ（話柄）にもなるべきに。畫かせざりしを悔ゆるも甲斐なし。その畫は今も。もてるものあらん。狸石は誰が手に落ちけん。し

けわたしゝさへ。いとあざやかに見えてけり。人々おどろき怪みて。猶つら／＼とながむるに。こはこの時の込きわたりにて。六才にたつ市にぞありける。珍らしげなき事ながら。陣屋の家中の庭もせの。かの市にしも見えたるを。人みな興じて。のゝしる程に。漸々にきこえうせしとぞ。是よりして狸の事。をちこちに聞えしかば。その書を求むるものはさらなり。病難利慾何くれとなく。祈れば應驗ありけるにや。緣を求めて詣づるものゝおびたゞ敷なりしかば。遂に江戸にもそのよし聞えて。官府の御沙汰に及びけん。有司みそかに彼地に赴き。をさ／＼あなぐり糺しゝかども。素より世にいふ山師などの。たくみ設けし事にはあらぬに。且大諸侯の陣屋なる番士の家にての事なれば。さして咎むるよしなかりけん。いたづらにかへりまゐりきといふものありしが。虚實はしらず。是よりして。彼家にては紹介なきものを許さず。まいて狸にかはする事は。いよ／＼せずと聞えたり。これらのよしを傳聞せしは。文化二三年のころなりしに。このゝちはいかにかしけん。七十五日と世にいふ如く。噂もきかずなりにけり。此ころ。兩國廣巷路にて。狸の見せ物を出だしゝさありしに。彼大賈村なる狸の風聞高きにより。官より禁ぜられしなり

抑北峯子の爲に。この一條を追書すること。聊緣故なきにあらず。本月朔日の小集は。わが庵にてあるじせんとて。かねてより契りしかば。北峯子。乾齋子いちはやく來りつる折。北峯子予にいふやう。さてしも例の事ながら。けふわがかきしるしてもて來つるは。めづらしげなき事なれども。狸の書きたりきといふ文字を影寫して來つるのみ。ありしふでもあるものぞ。披講の折に見給へといはれたり。予これをうち聞きて。さればとよ。文化のはじめ。江戸近鄉なる人の家にすめりしといふ狸の。をちこち人の需に應じて。字を書きて與へしことあり。その故は云々なりとて。上にしるせし趣を詞せはしくかたりいづるに。北峯頻に領きて。わがけふ影寫して來つといひしも。その狸の筆迹なり。さればその事はわが總角の時なりければ。さるつばらかなる事は得聞かず。ねがふは。わが書篇の末に書きしるしてたびねかし。わが物せんはかたくもあらねど。傳聞にはあらずもあらん。

とだにいへば。求め得て藏めもたるよし聞けり。且そのことゑるしたる隨筆めくものありといへど。予はいまだ見るに及ばず。これらの事も載せたりやしらず

文政乙酉五月朔　　山崎美成記

○老狸の書畫譚餘

下總香取の大貫村。藤堂家の陣屋隷なる其甲の家に棲めりしといふ。ふる狸の一くだりは。予もはやく聞きたることあり。當時その狸のありさまを見きといふ人のかたりしは。件の狸は。彼家の天井の上にをり。その書を乞はまくほりするものは。みづからその家に赴きて。しかじかとこひねがへば。あるじそのこゝろを得て。紙筆に火を鑽りかけ。墨を筆にふくませて。席上におくときは。しばらくしてその紙筆。おのづからに閃き飛びて。天井の上に至り。又しばらくしてのぼりて見れば。必。文字あり。或は鶴龜。或は松竹。一二字づゝを大書して。田ぬき百八歳とゑるしゝが。その翌年に至りては。百九歳とかきてけり。是によりて。前年の百八歳は。そらごとならずと。人みな思ひけるとなん。されば狸は天井より。折ふしはおりたちて。あるじにちかづくこと常なり。又同藩の人はさらなり。近きわたりの里人の。日ごろ親みて來るものどもは。そのかたちを見るもありけり。ある時あるじ戲れに。かの狸にうちむかひて。なんぢ既に神通あり。この月の何日には。わが家に客をつどへん。その日に至らは。何事にまれ。おもしろからんわざをして見せよかしといひにけり。かくて其日になりしかば。あるじまらうどらに告けていはく。某嚮に戲れに狸に云々といひしことあり。さればけふのもてなしぐさには。只これのみと思へども。渠よくせんや。今さらに心もとなくこそといふ。人々これをうち聞きて。そはめづらしき事になん。とくせよかしとのゝじりて。盃をめぐらしながら。賓主かたらひくらす程に。その日も申の頭になりぬ。かゝりし程に。敷座の庭忽廣き堤になりて。その院のほとりには。くさぐさの商人あり。或は葭簀張なる店をしつらひ。或はむしろのうへなどに物あまたならべたる。そを買はんとて。あちこちより來る人あり。かへるもあり。賣り物のさはなる中に。ゆでたこ湯蛸をいくらともなく簷にか

此書をもらひし書通あり

此間。御話申上候。たぬきの事。被仰下致承知候。則書付入御覽候。乍然是は此方にて願掛致候間。願之叶候と申事にも無之。あの方へ參り。直にたぬきへ願申候と申事に御坐候間。此段篤と御相談被成候て。御願かけ可被成候。委細は左之通御坐候

下總國香取郡大貫村藤堂和泉守樣御陣屋

陣屋奉行　猿山源兵衛

悴　要介

右之所に御座候成田へ御參り候道より。餘ほどより候由。江戸より廿二三里御坐候由。成田之道にて承り候得共。人々存罷在候よし

先方へ參り候ても。みだりにはたぬきに逢候事出來不申候

江戸藥研ぼりにてみの田吉右衛門

當時隱居

有甫

右之仁。如何の譯やら。たぬきと懇意之由。下谷之去る御屋敷方より先日人被遣候節。右有甫より手紙もらひて參り候と申事御坐候。是は只一通り見物に參るにて。願かけには無御坐候。咄之通至て奇怪之咄御坐候。近所之者抔は病氣と申し。願ひ參候ものも見かけ候と申事故。御人にても被遣候はゞ。右之有甫より手紙もらひ不申候而者。陣屋之事に御坐候間。內へは入申間敷被存候。外に餘り知れ不申樣致し候よしに付。江戸より參候と申候而者。中々たぬき殿へ逢せ候事出來間敷候間。此段能々御考御願かけ可被成候。やがて神に祭り候と申事にて。實見大明神と申名を付候て。祭り可申と申事之由。咄承り申候

眞に右之通御坐候。右之名にて願掛可被成候

三月朔旦當賀　中久喜

宇兵衛樣

右一條いと近き事ながら。世上に知らるゝを嫌ひて。深く秘めかくしゝにや。噂をだに聞かざりし

附けて云。中橋にすめる醫生の。いとも狸を好める癖ありて。みづから名を狸庵としも號のれる人ありて。書に畫に何くれのものにても。狸

三社の託宣にて。篆字。眞字。行字をまじへ。文章も違へる所ありて。いかにも狸などの書たらんと見ゆるものなるよし。これは狸の僧のかたちに化けて。此家に止宿し。京都紫野大徳寺の勸化僧にて。無言の行者と稱し。用事はすべて書をもて通じたり。邊鄙の事故。有り難き聖のやうにおもひて。馳走して留めたりといふ。この後武藏の內にて。犬に見咎められて。くひ殺されぬ。狸の形をあらはしゝとのことなりとぞ。その頃。此事を人々にも語りしに。友人鹿山の同日の談ありとていへらく。予往年鎌倉に遊びしとき。川崎の驛に止宿し。問屋某の家に藏する所の狸の書といふものを見たり。不騫不崩南山之壽と書けり。その書體。八分にもあらず。眞行にもあらず。奇怪言ふべからず。いかにも狸の書といふべし。問屋の話に。鎌倉の邊の僧のよしにて。其あたりを勸化せし事五六年の間なり。果は鶴見生麥の邊にて。犬に食はれしよし。此事はさのみ久しき事にあらず。予が遊びし十年も前の事なりといふ。此二條その年月を詳にせずといへども。今その墨跡の現にその家に存したれば。疑ふべからず

因に云。五雜爼曰。狐陰類也。得陽乃成。故雖牡狐必托之女以惑男子也といへり。吾邦にもむかしより。とかくに狐は婦人に化けたるためし多かり。しかるに。狸はいかなる因緣かありけん。茂林寺の守鶴を始めとして。いつも〳〵法師の姿になれるもをかしからずや

又いとちかき年に。一奇事あり。或人の筆記に。文化四年丁卯ある人のもとにて。狸のかける書といふものを見たり

霞たばしる那須のしの原

續後拾遺集に見えたり。此歌を思し召し合せ給ひて。よみたまひしなるべし

先祖堀田三郎兵衞。大納言の君御生害の後追腹もきらず、のらりくらりと百姓になり。今の安兵衞に至りて。うなぎやとなりしは。先祖が腹をきらぬかはりに。今うなぎの脊をさくもをかし

○古狸の筆蹟

世に奇事怪談をいひもて傳ふること。多くは狐狸のみ。貒猯猫の屬ありといへども。これに及ばず。思ふに狐の人を魅す事甚害あり。狸の怪はしからず。かくて古狸のたまく〳〵書畫をよくすること。世人の普くしるところにして。已に白雲子の芦雁の圖は。寫山樓の藏にあり。良恕のかける寒山の畫は。護園主人示されき。その縮本今載せて耽奇漫錄中に収めたり。これまさしく老狸の畫けるものにして。諸君と共に目擊する所なり。しかるに。その書をかけることを予嘗て聞けるは。武州多摩郡國分寺村。名主儀兵衞といふ者の家に。狸のかきたりし筆跡あり。

ひぬれば。寒き事もればえず。かくゆたかにあるこそ。實に有りがたき事なれと。仰せられて

こての上にふりし世しらであつぶすま
かさねて夜の霰をぞきく

と。詠み給ひて。其方も紀氏の末流なれば。即詠せよと仰せありける時。此むすめ

あつぶすまかさねても猶さむき夜に
道ゆく人の聲ぞきこゆる

後に此娘御いとま給はりて。牛込御納戸町近江屋半三郎といふ者のかたへ嫁すべき時に。殿の御歌

一かたに心さだめよ小夜ちどり
いづくの浦に浪風はなき

といへる御歌を給はりきとなん。此安兵衞の遠祖は。駿河大納言につかへ奉りて。其比。堀田三郎兵衞といひしよし。君御生害の後。武州草加にゆかりもとめて。百姓となり居たりしかば。今の安兵衞より三代まへの事なりといへり

右白川候の御歌は。鎌倉の右府實朝公の御歌に

武士の矢並つくろふこての上に

唱者也と。蒙レ仰直に御暇被下置流涙して。一錢職分渡世致來候處。其後慶長八卯年關東武塲へ德川樣御入國被爲有。其砌一錢職分藤七郎。東武繁花之地と相成候に付。武藏國芝口海手邊に罷出居住渡世致來候所。其刻預ニ御召ー。先年之爲ニ御褒美ー。青銅千足。伊奈熊藏殿御取次を以。頂戴之。愈益一錢職分致來候處。其後萬治年中。嚴有院樣御代。北小路藤七郎四代之孫。北小路總右衛門。神田三河町へ引移居住。御府内一錢職分株敷御願申上候處。御糺の上。由緒有之に付。御取立被爲遊。御公儀樣御朱印被下置。株敷被成下。其上尙御燒印之御下札等。頂戴之仕候に付。株敷補ひ一錢職分渡世相續致來候處。其後享保年中。有德院樣御代。東都御町奉行大岡越前守樣御役所へ諸職人被召出。株敷有之者共。夫々之御役義被仰付。其砌。一錢職分之者へは。先年神君樣天龍川御難儀之刻。淺瀨御案內奉申上候由にて。御役義御免と被仰出候得共。一錢職分之者共。一同株敷被下置候。爲冥加相應之御役義奉願上候に付。則御聞濟有之。以來出火之砌。兩御町御奉行所へ欠付。御記錄入ニ御長持ー御役義相勤。株敷渡世相續致來候事

相嫡男幸次郎依ニ幼年ー。不レ辨ニ於職分由緒ー。與レ書者也

享保十二丁未年九月十二日

北小路宗四郎藤原基之

前書之趣に付。諸國諸武家落人百名以上之面々。虛無僧と一錢職分に相成忍渡世にて。先君へ召通し。可相待者也以上

慶長八卯年

大御所樣於ニ御前ー。本多上野介正純を以。東都酒井讃岐守殿へ仰渡置。此段道中奉行松浦越前守殿へ。被ニ仰達置ー候事。仍而如件

右髮結職と相成。鬢盥持參して渡世之事は。萬治元年八月十六日よりはじまりしといふ

○兩國藥研堀うなぎや草加屋安兵衛は。紀名虎が末流のよし。娘は松平越中守殿につかへけるが。ぁるとしの冬の夜。此娘御側に侍りける時。折ふしあられ降り來りければ。守の殿。此音を聞き給ひて。かゝるさむけき夜も。今泰平の御代に生れぁ

地不淨なりといふ夢の告ありしによりて。程なく駒込の原へ遷座あり。今の駒込の富士これなり。駒込へうつされしは。寛永三戌年なり。享保二年六月朔日より。鐵砲洲船松町より。毎年五月晦日の夜。かけ念佛にて駒込富士へ萬度を一本持ち來りて。これを納むる事。今にたえず。此事はいかなるゆゑにか。猶たづぬべし

此一條本郷六町目駿河屋喜太郎話なり

○壹錢職分由緒の事

一職分之儀。文永中
人皇八十九代御帝龜山院樣御宇上北面にて
北小路左兵衛藤原朝臣基晴卿
故有之。流㆓浪長門國下之關邊㆒居住。子息三人有之。嫡子北小路大藏亮。藤原基詮右四人流居之內。吉岡久左衛門以㆓介抱㆒爲㆓渡世㆒。大藏亮太物賣。兵庫亮染物師。采女亮儀は父基晴卿爲㆓養育㆒髮結職と相成。難㆑顯㆓面體㆒往來住宅雨落より三尺張出し御免にて。長暖簾四尺二寸。縫下五寸。鏡障子三尺寸法と相定致。渡世の內。父基晴卿經㆓年月㆒死去之後。關東鎌倉繁花の時。居住桐ヶ谷にて。松岡と號し。采女亮七代之孫。北小路藤七郎從㆓美濃國岐阜㆒。元龜天正之比。流㆓浪於遠江國比久間味方ヶ原㆒。東照大權現樣甲駿信之押。武田太膳太夫兼信濃守法姓院機山兵德得榮晴信入道大僧正信玄と御一戰被爲有。比者元龜三壬申年十四日。東海道見附驛之間道一言坂より池田迄。及㆓夕陽㆒總御同勢共。濱松之御館へ御引揚被爲遊候時。其日大風雨にて。東海道天龍川滿水にて。渡船難相成に付。渡守仕候者共。我家々へ引取り。川端に一人も不居合。御渡船難被爲遊候。然る所に北小路藤十郎行掛候に付。奉蒙嚴命。尤水練功者之事故。奉畏則淺瀨踏に御案內奉申上候。右に付無御難。濱松之御城に御引揚相濟。御悅喜有之。以來諸國關所川々渡塲等迄。無相違御通し下置候なり。尤其節後殿之義。本多中務太輔忠勝殿被相勤候事。猶又其後三河國碧海郡原之鄉迄。奉御供其砌蒙㆓嚴命㆒。東照源太神君樣奉㆑揚㆓御髮㆒。當座之爲㆓御褒美㆒金㆒。錢一錢。御笄一對。榊原式部太輔康政殿。御取次を以頂戴之。以來結髮之總名を一錢と可

朝がほのうたをよみしが。よくとゝのひたりと。師もよろこびける。その歌

いかならん色にさくかとおくる夜を

まつのとぼその朝顔の花

其冬。此むすめ風のこゝちにわづらひしが。つひにはかなく成りにけり。兩親のなげきいふべくもあらず。朝夕たゞ此娘の事のみいひくらしゝが。月日はかなくたちて。ことし亥の秋。かの娘の日頃よなれし。文庫の中より。朝顔の種出でたり。一色づゝにこれはしぼり。あるはるりなど。娘の手して書き付け置きたる。つゝみをみて。母親猶更思ひ出でゝ。かく迄しるし置きたる事なれば。庭にまきて。娘のこゝろざしをもはらさんとて。ちいさなる鉢に種を蒔きて。朝夕水そゝぎなどしたるほどに。いつしか葉も出で蔓も出でたれど。花は一りんもさかざりければ。すこし時刻おくれにまきたるゆゑ。花のさかぬ成るべし。されども。秋に秋草の花さかぬ事やはとて。さま〲にやしなひしが。さらに花の蕾だになし。ある日。父彌八郎は東えい山の御普請塲へ出でたるあと。母は娘が事のみわすれかね。朝顔を思ひながら。うつら〲とねむりたるが。娘の聲にて。おかゝさま花がさきましたといふに。驚きさめぬ。あまりいぶかしく思ひければ。朝顔のそばへゆきみれば。一りんさき出でたり。いよ〲あやしと思ひて。夫彌八郎が歸るを待ちかねて。此よしをもかたり。花をも見せしよし。此はな。晝後にさきて。翌朝までしぼまずして。ありとなん

右は文化十二乙亥年の事なり。花のさきしは。翌子年なり

文政乙酉孟夏朔　　文寶堂しるす

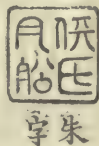
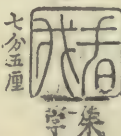
○駒込富士之由來。幷加州御屋敷氷室之事

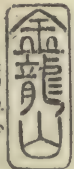
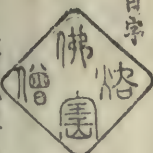
江戸本鄉加州御屋敷氷室の塲所は。慶長八癸卯年六月朔日。雪ふりたる所也。其雪富士の形につもりたるゆゑに。其所へ淺間の宮を造立し。毎年六月朔日まつりをなす。其比。本鄉に桔梗屋何がし。水野兵九郎。源右衛門といふもの三人にて。萬の事を取りはからひけるとぞ。其後右淺間の宮の所も。加州御やしきへ園ひこみとなりても。以前のごとく參詣ありて。同所御屋敷の御門を出入しけるを。いかゞしきとて。此所御弓町眞光寺へ。淺間の宮を引き移されしが。

下總國葛飾郡風早莊小金
金龍山梅林院
一月寺
院代
傑秀看我

八分 朱字

白字 八分

七分五厘 朱字

文化八年辛未年五月
授與何某

朱字一寸四分 ヨコ五分

白字 一寸二分四方

本則の紙ハ鳥の子半切大六寸余
表包帋ハ糊入紙立三ツ折ニテ

普化禪林
本則
授與何某

尺八曲名
無碍箎　虚空　靜攪　瀑布音
休愁　厭足　座草　善哉
賤子　意子　雲井　興
夕暮　波間　獅子吼　盤涉
虚靈　巣鶴
右十八曲
倫絶　槽骨　鈴普挑
凡二十一曲是を表組といふとぞ

此外に猶裏組もあるよしなれど。いまだゆるしなければ。しらざるよし。右十八曲の中に。こくうといへる名二つあり。はじめにあるは。普化禪師相傳の曲にて。あとのは後人の作りし曲なりといへり

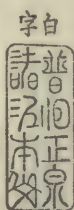
文政八年正月朔　　文寶堂しるす

○湯島手代町に岡田彌八郎といひて。御普請方の出方をつとむる人あり。此人のひとり娘。名をせいとよびて。容儀もよく。殊に發明なれば。兩親のいつくしみふかく。しかも和歌に心をよせ。下谷邊に白蓉齋といふ歌よみの弟子となりて。去年十四歳にて。

常に武門之正道を不失。何時にても還俗申付候間。表には僧之形を學。內心には武者修行之宗法と可心得者也。爲其日本國之內往來自由に差免置候樣。決定如件

慶長十九年戊寅正月　　本多上野介　在判
板倉伊賀守　在判
本多佐渡守　在判

右上意之趣。相渡申候間。奉拜見。會合之節能々爲申聞可爲守者也

白字　一寸三分　四分

普化常於街市搖鈴曰明頭來明頭打暗頭來暗頭打四方八面來旋風打虛空來連架打臨令侍者去纔見如是道便把住曰總不與麼來時如何普化托開曰來日大悲院裡有齋侍者回舉似濟濟曰我從來疑者這漢

白字　二寸五分四方

尺八

朱字　一寸六分

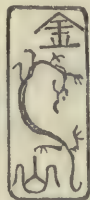
夫尺八者法器之一也謂尺八大數也取三節之中定上下之長短各有所表三節者三才也上下之二竅者日月也表裏之五竅者五行也此是萬物之深源也吹之則萬物與我融冥而心境一如也

天蓋

夫天蓋者莊嚴佛身之具也故我門準擬之也

靈山一月影　輝萬派

朱字　一寸五分　一コ五分

普化孤風德　馥三州

勿論諸士之外。下賤之者へ。一切尺八爲吹申間敷候。尤虛無僧之姿爲致申間敷候事
一虛無僧多勢集り。逆意申合者於有之者。急度遂吟味。本寺並番僧に至迄可爲重罪事
一虛無僧托鉢修行之者。同行二人之外許不申候事
一虛無僧渡世之義。所々專と仕之候。其段差免申候。
一編修行之內。於諸國々法抔と申虛無僧。無束慮外之體。又は托鉢等に障。六ヶ敷義出來候はゞ。子細改本寺へ可申達候。於本寺不相濟之義は。江戶奉行所へ可告來事
一虛無僧托鉢に罷出。或は道中宿往來所々何方にても。天蓋を取り人に面を合せ申間敷事
一虛無僧托鉢之節。刀脇差並武具之類。一切爲持申間敷候。總而いかつかましきなり形致間敷候。尤一尺下之及物爲懷劒と差免可申事
一虛無僧勇士之道。敵體尋廻國抔之義も有之。依而芝居渡舟等に至迄。往來自由に差免之事
一似虛無僧於有之は。急度宗法に可行候。若又賄賂を以見遁し抔致候はゞ。番僧に至迄可爲重罪。總而猥に無之外可申付事
一托鉢に罷出。下賤之者之痛を不顧。托鉢不可致勿論。辯舌を以。遊興賄賂預饗應事。堅停止。總而正道一巳之情無之者。本則を取上可申候事
一虛無僧自然。互に敵に候はゞ。還俗申付。於寺內勝負可爲致候。勿論諸士之外。一切不差免之勝負を以片落なる取扱堅停止之事
一諸士人を切。血刀提寺內へ逃込候共。留置子細を改不寄何事。武士之道に候はゞ。宗法に可仕候。科有る人は。一切隱置申間敷候。若隱置後日に顯候は。難遁義に付。早速繩を掛差出可申候事
一虛無僧に罷出敵討仕度者於有之は。其段子細相改。差免可申候。乍併多勢相集申間敷候。同行一人は免可申候。諸士之外一切不差免事
一往來之節。馬駕籠一切無用。所之關所番所に而は無沙汰無之樣。本寺より之本則。往來出爲相改通り可申事
一住所に離れ。他國所々城下幷町。托鉢修行滯留一日之外。堅無用。若鳴物停止等告來候はゞ。宗門傳學之虛無僧之外。吹申間敷事
一虛無僧之義は。天下之家臣諸士之席に相定候上は。

與ニ吹桐一成レ音。其音錚々有レ似ニ琵琶一。蓋因以得レ名云。文獻通考云。民間有ニ鐵葉簧一。豈簧之變作歟。余因謂。琵琶笛豈鐵葉簧之又變者歟、戯作レ詩詠レ之。在昔武伯蒼汴州聞レ角。詩曰。單于城上關山曲。今日中原總解吹。余則非下必有ニ此感一而作上也

裂石餘聲尙可レ尋。誰銜ニ寸鐵一學ニ龍吟一。尖形半噤金鴉觜。巧舌全磨玉女針。風珮鏗鏘成ニ急調一。綿弓嘈囋送ニ繁音一。抹挑都在ニ兒童口一。解否潯陽曲理心

乾齋評レ之曰。當今天下之害。莫レ如ニ於夷狄一。嘗夷狄寇ニ於海濱一。知幾君子豈無レ歎乎。夫琵琶笛者。軍中之所レ用。今自然吹レ之。有ニ嚴命一禁レ之。宜哉

文政八年乙酉孟春朔　乾齋中井豊民識

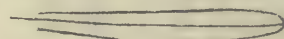
著作堂附記

琵琶笛童穉訛りて。ビヤボンといふ。文政七年甲申の冬十月上旬より。江戸中流行す。春に至りて彌甚し。その製作鐵をもてす。一笛の價。錢百文より銀五匁に至るものありといふ。大小の楊物等。多くこれを擬したり。その他。新作のれとし咄も。駱駝とゝもにこの事多し。又小うたにも作りてうたへり。遂に風俗の爲よろしからざるよしにて。八年乙酉の春二月。禁止せらる。いまだいくばくもあらずして。松風こま流行し。同年夏四月に至りて。又雲雀こまといふものを作り出だせり。ひばりこまは眞ちうをもてこれを作る。その價。六十四文。松風こまは。はじめは竹。或は鯨の鰭にて作り。後にはちりめんの裂にてもつくれり。その圖は耽奇漫錄中にあり

○虛無僧御定

一日本國中虛無僧之儀は。勇士浪人一時之爲。隱家（本ノ）之（マヽ）不入守護之宗つゝ依之て。下々家臣諸士の席に可定之條可得其意事

一本寺へ宗法出置たる其段。無油斷爲相守可申候。若相背者於有之は。末寺は本寺も。虛無僧は其寺より急度宗罪に可行事

一虛無僧之外。尺八吹申者於有之は。急度差留可申事。尤懇望の小寺は。本寺より免し出爲吹可申候。

斷髪東之といひけんごとく。いかにもせんやうなかるべきに。蟬折。なましめ。をし鳥。本田。いてう。引出し。二つをり。まるまげなど。くさ〴〵の名目ありときけり。あなことわざしげき世にてぞある

文政八年四月朔　　好問主人謾書

○虹霓　伊勢踊　琵琶笛　奇疾

虹霓の立ちて西に有るは。明日必雨降り。東に見ゆるは。必風吹く。切れ〳〵に光り散るは。風起る。日暮に東南に見ゆるは。天風なり。稻光の坤の方に見ゆるは。天氣はる。乾の方に見ゆるは。雨降る。亂開するは。雨晴れて風もなし。夏の風は稻光の方より來る。秋の風は光りの方へ向ひて吹くなり

享保十四年八月の頃。本所石原德山五郎兵衞。中間八郎俄に尻に犬の尾を生じ。五日の朝飯食し兼ねしことありき。摺鉢に食を入れ與ふれば。快く食す。夫より人相も大に變じ。全く犬の如し。夜中犬の聲を聞くときは。必。飛び出だす。日ごろ犬を殺しゝ祟と。皆人傳へ云ひき

寛永元甲子の歲二月上旬より。諸國に自然と伊勢踊大に流行す。泊舟傳馬人夫と號し。太神宮を送り來る。耕作を妨け措二生業一。費二精力一。此事達二上聞一ければ。則吉田家に可二相尋一とて。子細を板倉勝重。同重家方へ嚴命有り。則板倉より吉田家へ申し遣す。吉田某按二諸傳一曰。伊勢國度會郡內外の神を鎭めしより。四時の祭禮不レ怠。然るに。內外の神何を以て飛びたまはん。是等の事。諸氏の兒戲。生者のものゝかずとする所に非すと云ふ。將軍家。尙。御僉議あり。去る慶長十九甲子年。神踊京より始めて駿州に至りぬ。東照大權現嚴禁せられし所。程無くして大坂兵亂。又元和二丙辰年。春の頃。伊勢踊流行す。後果して東照大權現御他界あり。先幾を考ふるに。皆是不吉の兆なりとて。御評定一決して。彼邪神を野外に送り捨つ。於是人馬の勞弊止むといふ

嘗て民間に琵琶笛流行し。其弊都下に亦流布せり。石厓と云ふ人有レ詩。又有レ序。戱に記レ之

笛本津輕民間玩器。或呼爲二津輕笛一。近日都下童穉盛玩レ之。其制鐵片三寸許。拗成成レ環。環之兩端所レ餘各寸餘。展成二雙股一。削銳如レ錐。環內植レ舌。精鋼薄片爲二之舌一。長二於股一三四分。少鈎上向。口横銜吹レ之。指肚連鼓。舌鼓

師にとへども。斯る者は知らずと答ふ。三才圖繪にやあらんと。普く尋ねもとむれども似たるもの更になし。或人是は世に云ふ風の神ならん。その故は。近年文金風。あるひは豊後節風などいふ。前々よりも辰松風助。六風など。みな風の字を氏にして。釆王。大王の風。庶人の風といひし。癈人の中にも至りて惡き風なり。若しこれに逢ふもの。風を引き煩ふのみならず。心の臟に入りて狂氣のやうになり。身を亡し。家を破るとなり。偖は道にてあはんをさへ心うきに。家の内へ來らんことは。いと心うかるべし。かやうのあやしきものは。和歌にて鎮むと云ふこと。むかしより聞き傳へ侍りければ。一首の歌を詠じて。これをまじなひける

道しらぬ友にひかるゝ小車の
　これも片輪のたぐひなるらん

あはれぞと見るさへうしや小車の
　かたわとて世に引く人もなし

有レ人告レ予曰。近時有二風塵先生者一。其容異レ人矣。畫工圖レ之以示二於世一。足下稍似レ之。豈爲レ士者之風俗乎。予聞二此言一。不レ忍二默止一。賦以解レ嘲

枯楊蕭寂不レ生レ春　莫レ道娼家對レ酒人
縱有二秋來俠名士一　清操豈得レ混二風塵一

無名氏

この一條は。よしなきことながら。當時の手ぶりをまのあたり見る心地にて。うつし出でぬ。その中。文金風。辰松風などいへるは。いづれもみな髮の結ひやうをいへるものなり。文金風といふは。元文元年より。上方上るりの大夫の髮の風を學び。油にてかため。毛筋われめなく。元結少し卷き入れ髮をいれ。宮古路風ともいへり。又辰松風といへるは。享保のころ。辰松八郎兵衛と云ふ人形遣。この風にゆふをもてなりとぞ。いでや。何ごとにまれ。今よりして古を見る時は。ことたらはぬことのみなりけりと疑はるゝもの多けり。むかし蠟燭のながれを油にとぎゆるめ。文七元結もなくて。こよりにて結びたりしことも。なほなき世の人は。飛蓬の如くにやありけん。此後伽羅の油といふものいできたりしより。髮結わざも。おのがさま〴〵になり行くめり。婦人の髮は。そのゆひざまの異なれば。おの〳〵其名のわかるゝもことわりなれど。男子の髮は。もろこし人の

り太原とかきて。おほはらとなのるべし。紋も亜如此あらためよ。これ王の字の古文なりと仰せられしより。今に至るまでこれを用ふ。王春庭身まかりしかば。伊更子長應寺の後山に葬る。その時。遺言にまかせて。衣服および隨身の器物を。のこらず墓にうづめたりとて。家につたはるものは。琥珀の觀音一體有るのみなり。五世の孫も長生にて。予がわかゝりし時。八十有餘なりき。すこぶる好事にて。我ならばおやの遺言そむきても。遺愛の物をうづめずして家に傳ふべきをとて。常に歎息せしなり。予かつてそのはかじるしを搨でたり。大明國王春庭三官と題せり。この文字は次の耽亭に出だすべし

乙酉四月　　輪池

寛保のころ。あやしきものを見たり。その形は人にして。年の頃廿あまりなるが。髪の結ひやう。首の際よりまげの末まで壹尺五六寸。伊達もやうの下着袖口より五六寸計長く。羽織は地を引くばかりに玉尺あまりの紐を付けたり。黒塗の下駄をはきたりしが。羽織の紐とき／＼足駄の齒にからみて。是をはづさんとすれば。髪のまげ木枝にかゝり。袴は下駄の齒のかくるゝばかりなりければ。行きなやみたる風情なり。脇指は二尺五六寸もあらん覺ゆるに。刀のやうなるものをわきばさみたれども。立てざまに差したれば。柄は脇の下にかくれて見えず。棒やらん。刀やらん。おぼつかなし。手には八尺あまりの

煙管を持ちたり。そのあやしさいはんかたなし。家にかへりてこれを圖して。是は何といふものぞと人にとへども。さらにしる人なし。異國の人か。化物か。鳥獸虫魚の類ならば。本草綱目にやらんと。醫

の内にきず付きし痕もなし。さらば尊き守りにてもかけたりやと丶へば。さる物も丶たず。懷中に有る者とては。淺草觀世音の御影のみなりとて。取り出で丶ひらき見れば。不思議なるかな。紙にすりし御影されて有り。さては我が身がはりにた丶せ給ひしならんとて。渇仰の涙おさおへず。頓て上のくだりゑが丶せ。ゆゑよしをしるして。觀音堂の內に揭げて有りしを。享和年中檜山坦齋まのあたり見たりといへり。今はなしとぞ

○耳の垢取

慶長年中。唐山の漂流船一艘水戶の浦に着きたり。異國の者かと問ひければ。大明太原縣の者なりとて。七人乘組なり。このよし威公に申し上げ。かくそのものどもに尋ねさせ給ふやう。汝等國に歸りたくおもはゞ送り遣るべし。此國に居りたくば。置くべしと仰せ下されければ。御國に居りたきよし願ふ所なりと申すにより。みな江戶に召して。藝能をたづねさせ給ひければ。王春庭三宮といふもの按摩導引をなすと申す。さらばとて御側勤のものに試みさせ給ふに。妙手なりと申すにより。威公御自ら療をさせ給ふに。無比類名人なり。殊に御耳の垢をとり。內を掃除する事。これまでなき術なりとて。大におぼしめしにかなひ。日每に昵近して奉りければ。永く御舘にめしつかはるべし。然るうへは。此國の風俗になれとて。月代をそり。衣服を改め。遠藤氏の女をめとりて。遠藤勘兵衞と改めたり。さて男子出生しければ。名を賜はりて。造酒之助と稱す。是より代々當主は勘兵衞。總領は造酒之助といふ。この造酒之助成長せしかば。何役にても望み候へと仰せ下されしより。いかゞおもひけん。能役者を願ふ。ねがひのごとく仰せかうぶり。高安の弟子になりて。脇師になりたり。六世孫迄は。嫡流にて有りしが。部屋住にて沒し。男子なかりしかば。其弟を總領にして。家つがせしに。それも男子なかりしかば。從弟を養ひてつがせたり。英一蝶がかける耳の垢とりは。此乘組の內歟。もしは王春庭が弟子にても有りしなるべし。二代造酒之助家督をとりて。勘兵衞と改めけるは。義公の御代なり。或時仰せ有りける家は。汝が親は太原の王氏なるに。遠藤をなのりて。藤の丸の紋付くるは。和漢の故事にかなはず。今よ

右之通被仰付今日申渡事
一京都御築地之內江戸御曲輪之內兩山などは可
致遠慮其外右に準候場所者憚候而可然事
一禮作病死之趣等急度相分候は丶慥成證據を以
立戻可申事

御差添
足輕　五左衛門
同　萬十郎
下番　惣九郎
御雇御賄方使番
朱平

文政八年乙酉夏四月朔　海棠庵錄

○身代觀音

善光寺如來の百姓幸助が身代にたゝせ給ひし事は。あまねくしるす所なり。享和年中淺草觀音の影像。身代の事をきけり。そのさま幸助が事にさもにたり。ある田舍人(名所はよく糺すべし)靈巖寺の塔頭に逗留して。日每に江戸見物にいでけるが。七月中。淺草觀世音にまうで。還向して新吉原の燈籠を見。かへり二更過ぐる頃。歸路に趣きし所。土手にて酒狂人有り。白刄を振り。群集の人々あわてさわぎけるに。かの田舍人あやまちて。刄にあたりたふれふしたり。かたへの人はまさしく殺害と見たり。當人もきられたりと覺えつゝ。倒れて氣絶しけり。そのひまに酒狂人は行方しれず。人々寄りて是を見るに。刄傷の樣子にもなし。いづ方の人にか。息たえたれば。尋ねとはんやうもなく。とやせんかくやといひあへる折から。一人がいふ。この者晝のほど觀音境內の何屋といふ茶店にて見しものなりといひければ。いでやとて駕籠にのせて。其家につれ行き。いづ方の人にかと問ひけるに。茶店のあるじもあからさまに立ちよりし人なれば。住所もしらずといふ。こはいかゞせんと當惑しける折から。ふといひ出でたり。よつて其住所をたづねければ。そこ〳〵とこたふ。すなはち深川の旅宿につれ行きたり。宿坊にては。深更に及びてもかへらねば。いづこにかやどりつらんとて。戸かぎをしめてねたり。さるに曉に及ひて音づるゝにより。さしつる戸をあけて。たそとゝへば。某歸りたりと云ふ。いかにしておそかりしといへば。しか〳〵と答ふ。まさしく切られたりとおもひしかども。身

右之者父武市琢八義當申閏八月九日土州高岡郡於宮內村百姓禮作致無禮及爭論禮作義琢八を棒に而打候處琢八義右疵に而翌十日相果申候に付禮作其村役人共より番人を付置右之趣城下へ及注進候跡に而禮作義番人を散々致打擲逃去候に付國內は勿論隣國迄も嚴敷尋申付候得共行方相知不申候右に付粉（本ノマヽ）善次郎同弟爲次郎御府內幷何國迄も相尋親の敵打留申度段願書承屆仍之見逢次第打留候はゝ其所之役人等へ相斷可申段申渡候に付御帳へも被付置候樣致度候此段以使者申入候

松平土佐守使者

十一月　宮井守衛

土州侯にて被申渡候書付

山內昇之助御預鄕士

門田力右衛門養育人

門田善次郎事

武市善次郎

門田爲次郎事

武市爲次郎

右之父敵追放者禮作行方相尋打果申度候願出達御聽候處神妙に被思召

公儀御帳にも付候間勝手次第可致出達候且爲

御介補金三拾兩被下置候首尾能打果候はゝ其所之役人へ始末相屆御作法之通被計御國幷京大坂江戶之內最寄之御屋敷へ可相屆其節撿使被差立候間諸事麁忽之振舞無之樣急度可相心得候

正月廿日

右於御目付方仰付之

山內昇之助御預鄕士

門田力右衛門養育人

門田善次郎

同　爲次郎

右之父之敵追放者禮作行方相尋打果申度願書差出於江戶御詮義有之候處鄕士之名前に而者差問候を以一領具足より御屆に相成且本姓武市を唱候樣に仰付候

公義御帳にも一領具足門田力右衛門厄介武市善次郎同人弟爲次郎と被付置候

許年なり

乙酉夏孟朔甕齋老人于著作堂南窓綠樹深處

○建治の古碑武市兄弟　海棠庵　記

武州埼崎玉郡戸が崎村の農家。道祖土三郎右衛門といふ人あり。こは余が相知れる友なり。三郎右衛門過ぎし文化十年癸酉の正月。その住居の西なる山をほるとて。大なる杉の丈餘ばかりとも思はるべき根に堀り當てたり。とかくしてほり起すこと六尺あまりにして。忽古井あり。水いと清冷なりけるが。石塔婆めくものをもて。おほひありける。取り上げてきよめみれば。阿彌陀佛供養の碑にして。則建治二年丙子十一月日。願主敬白となん刻みたる。今を距ること五百四十年。古木の下に埋もれしも。いく星霜をか經にけん。そのゆゑよしをしらねばとて。井をばそがまゝ又埋め。碑は藏弄なせしとて。搨りて贈りぬ。案ふに。建治は後宇多帝の御宇。鎌倉惟康親王（北條七代時宗執權たり）の時に當る。三郎右衛門云。余が祖先は道祖土下總守長之とて。惟康親王に屬して。一方の大將たりき。もしくは供養せられしものにや。そはその館の跡さへ詳ならねば。いかにともさだめがたしとなり。二月の會に。北峯子の出だされし。多摩郡なる古碑と。年號もはるかに四五年の違にて。又堀出せるも十年を隔つるのみ。かくて同じ武州の内にして。あまりによく似たることのありしも。奇といふべし

土州侯の臣。武市兄弟のもの。去りし文政七年の秋。父を農民體作なる者に打たれ。復讐のねがひ立てゝ。侯より公に告げ給ひ。今年正月。本國を立出し。ことよし書けるを。この頃その藩士より得て讀むに。彼の小田原侯なる淺田兄弟の志に繼くべく思へば。そがまゝしるして。後の忘に備ふ。その本懷を達せん日。また寫し添へて。終始全からんことをまつにこそ

公邊へ之屆書

松平土佐守家老山内昇之助組付

一領具足門田力右衛門厄介

武市善次郎　二十三歲

同　爲次郎　十三歲

中ハッシと音して。痛むこと甚し。こはいかにと驚きあわて。神前をまか出つゝ。からくして雪の下なる旅宿にかへりて。人に見せしに。めのたま目子既に碎けり。初かのみやしろは。何等の神を祭れりともしらずしてをがみしに。かくなりて後に聞けば。鎌倉權五郎景政を祭るといへり。故こそあらめ。某は彼景政が眼を射て。咎の箭に命をおとしゝ鳥海の彌三郎が後裔なり。數ふる年の後にして。某が身に及ぶまで。今なほ神怒のさがなる。いとおそるべき事なりとて。頻に嘆息したりとぞ。この一條は。文化のころ。件の庄兵衛予が爲にいへり。こは池北偶談に載せたりける。朱の秦會か後裔。秦某明朝に仕へしとき。みづから岳飛を廟に祭りて。血を吐きて死せし事と。日をおなじくしてかたるべし

愚息琴嶺 興繼 この稿本を閲して云。景政の神靈誣ふべからずといへども。彼鳥海生が一眼の眚せし事。その風眼のわざなるべし。大約。風眼の病たる。にはかに瞳子の破るゝ事あり。その破るゝとき必音あり。譬へは豆を彈くが如し。渠を病症といふときは。神靈を誣ふるに似たり。又神罸といふときは。病症に疑ひあり。この書。本日披講の後に。諸君の批評を聞かまほしといへり

解云。寛政中には。上に云るしゝ馬喰町なる六奇異を聞きしのみにて。いまだ鳥海が事をしらず。後に彼庄兵衛に。その事を聞くに及びて。歳月時日を敲きしに。これも寛政十一年夏四五月の事なりきといへり。しからば上の六奇異と同年同時の事にして。前件は馬喰町第一第二の町に在り。後の一條は相摸なる鎌倉にての事なれども。そが旅宿はこれも亦馬喰町の隣町なり。こゝに至りて同年同所に。又七不思議ありしを知れり。抑。寛政兩度の七奇異。就中鍬の錢より花卉を生じ。二牡犬同時に一牝犬に合したることなどは。もとも奇中の奇といふべし。前記を藏めし家兄はさらなり。後の七奇異をつげ報たる人も。多く鬼籍に登るものから。今も彼町々にて。四十歳已上の人は。記臆したもなほあるべし。筆錄の際。懷舊に得たへず。こゝにすぎ來しかたを思へば。ほと／＼三十

にれちいりしを。あたりに人の見るものなくて。たすけ出ださんともせざりしかば。そがまゝに死したるなり。天水桶に入水して。はかなく命をおとしゝは。一奇事なりといふもの多かり

一又同月同町に。若き者共の爭論あり。仲人和睦をとり結ばせて。酒くみかはしなどせし後に。そが相手のもの湯かへりを。したまちして。したゝかに斫りてけり。手疵廿五ヶ所なり。この他手負猶あり。和睦して後に斫りしは。是もめづらしき事なりといへり（これらの人の名。みな忘れたり）

一又同月三日。馬喰町と鹽町のあはひなる三日月井戸を晒しける日。綱曳のものども鬪諍して。遂に出訴に及びにしに。次の月の三日に至りて。やうやくに和睦しつ。まうしおろして事をさまりぬ
　三日月井戸は。井の水中に板を建てゝ。左右のしきりにせしものなれば。そのかたち半輪のごとし。よりて三日月井戸と呼びなしたり。初この井を掘りしとき。雙方の地主こゝろを合せて。共に雜費を出だしゝに。後に迭に不足起りて。遂に鉾盾に及びしかば。所詮井をしきらんとて。井の中に界を立て。南なる店子どもは。南のかたなるしきりの内の水を汲むのみにして。界の外へ吊桶(ツルベ)を卸すことを免されず。北なる店子も亦かくの如し。今はさまでにあらねども。三日月の名の高かるに。百日咳を愁ふるもの。この井にしば〳〵祈るときは。應驗ありといひもて傳へて。朝とくまゐるものゝあれば。井に立てたりしさかひ木は。今もなほとり除かで。もとのまゝにて有りといへり。しかるに。その月三日のあらそひ。三日月井戸より事起り。又月の三日に至りて和睦しけるも。奇なりといへり

一これも又おなじ年の夏の比。馬喰町に相隣る岡附鹽町なる旅人宿庄兵衛が客なりける。奥州のたび人鳥海何がし。しばらく江戸に遊歴して。更に又鎌倉に赴きつゝ。御靈の社にまゐりし折。左の眼にはかに失けり。その人江戸にかへり來て。庄兵衛等に告げていふやう。其嚮に鎌倉にて。御靈の神ををがみし折。譬へば豆を彈くが如く。左の眼

蚊屋の内よりこれを追へども。驚き走らず。あやしみてつら〳〵見るに。いとおそるべき獸なれば。おうなはいたくうち騷ぎて。妖怪ありと叫びしかば。板木師金八その鄰人ともろともに走り來て。うちに入る程に。件の獸ははやくも逃げて。金八が家に入りぬ。金八等は又にぐるを追うて。蠟燭に火をともしつゝ。先そのかたちを見んとせしに。件のけもの飛びかゝりて。その蠟燭を喫ふこと兩三度に及びけり。既にしてけだものは隱れて。竈の下にをり。金八等はからひ相計て。米櫃のからなりしを横さまにしつゝ追ひこめて。やうやくにとらへたり。後に聞くに。かの獸はある人長崎より求め來て。このごろ家にかひおきたるに。箱鐵網を咬ひ破りて。急に逃げたるなり。しかれども。異國の獸を私にかひける故にや。とらへられしを知りながら。そのぬしはしらず貌して。終にいふよしなかりけり。官府にては件のけものをしばらく留めおかれしのみにて。そがまゝ返し給ひにければ。憖にはなちもやられず。その餌かひには。日毎々々に。油揚の豆腐十五六枚をくらはする事にしあれば。金八は困じ果て。後悔しつと聞えたり。扨そのゝちはいかにかしけん。後々までは知らず

一同年同月。おなじ町なる布袋屋といふ商人の裏借屋に住める人の女房。（その良人の名を忘れたり）卵を産みけり。これもまさしき事なりと。その隣なる人の話なり。しかれども。卵にはあるべからず。そはふくろ子のたぐひなるべし。（布袋屋のうちにて。袋子をうみたるも名詮自稱歟）

一又同月同町一丁目なる木戸際にて。一疋の牝犬に。二疋の牡犬。同時につるみたり。これを觀るもの堵の如し

一又同月同町にて。四つになりける小兒。水溜桶におちいりて死にき

こは商人の店の前におくなる。天水桶といふものなり。夏の日の事なれば。その桶の水涸れて。なかばゝかりにたゝへたり。しかるにその小兒手にもてる人形を。件の桶にをとしゝを。取らんとしつゝ。あやまちてさかさま

大人星出づる年は。怪しき事有りといへり。當年星合これにあたるといふ。且五穀無實兵動と申事に御座候

右之外越後高田大風雨。人多死す。信州松本大地震之由

寛政三年七月

這個の一通は。寛政十年の冬。家兄羅文の遺篋中に得たり。解云。唐山の歴史中必五行志あり。そのと漢魏六朝より。京房管輅郭璞等にまじはりて。隋唐の時いよ〳〵盛に。諸子百家の書に至るまで。禎祥妖孽書せざるとなく。禍福吉凶推ざるとなし。その不幸にして當れるもの。十に七八なり。君子はこゝに於て愼み怕れ。小人は是にれいて喋々たり。豈多端ならずとせんや。もし房璞のともがらを。今の世に在らしめて。この寛政の怪異を示さば。渠將とれを何とかいはん。しかれども。この時に當りて五穀倉庫に充ち。四境兵疫の愁をしらず

國家の動きなきこと。五嶽をかさねたる如く。四海安静なること。三春の風なきに似たり。國道あれは。鬼亦鬼ならず。妖の盛徳に勝たざること。只寛政中のみならず。二百年來すべてかくの如し。仰ぐべし。亦歡ぶべし（翌年壬子の夏。米穀高直につき。江戸中粥をたべよと町ぶれ有りけり。しかれども粥をくらふものはなくてやみにき）

寛政十一年巳未の夏。江戸馬喰町に。亦七奇異あり。（馬喰町に六奇異あり。岡附驪町に一奇異あり。合して七奇異とす）彼町人等は。予が相識のもの多かり。當時その人々に聞ける趣をもて。しるすこと左の如し

一寛政十一年夏六月。馬喰町なる板木師金八が家にて。ある夜あやしき獸をとらへ得たり。そのかたち鼠に似て。常の鼠より甚大きく。胸より腹に至りて。虎斑あり。もとも非常の獸なれば。翌日將てまゐりて。官府に訴ふ。當時その獸の名をしるものなし。或はまみならんといひ。或は雷獸にやといへり。その言。みな非なり。おもふに蝦夷鼠の類なるべし

この事。金八が家の向ひ長屋におうな老女隱居住めり。ある宵に。行燈の油を舐ぶるもの有りけり。此おうな鼠ならんとおもひつゝ。

木村默老云ふ

熊膽四時によりて。其在所をことにすと云へるは。聊受けがたし。小子も初本草綱目抔を見て。信なりと存せしに。後に隣國阿波祖谷の深山中。久保と云ふ所の獵師八郎なる者小子が宅へ一隻の熊を。一昨日鐵砲にて打ちたるを齎來て。安達了益と云ふ醫と。同時にて解體せしめて。膽をも獲たり。其時は秋なりしが。膽の在所本草の如くには非ず。獵右の八郎も。疑問せしに。是迄れのれ等が取りたる熊に。四時によりて。膽の在所かはることは覺えずと答へき。且其以前是も祖谷より齎來りし熊を。高原通玄なる醫。解體せし事あり。是も膽の在所替はることなし。故人の說いかゞにか

○七ふしぎ

あやしき事のかさなれるを。俗に七不思議といふなるは。越後よりおこれるにや。彼地にはくさうづ臭水。土中の火。三度栗など。他鄉にはなき奇しき事の七つまであればなり。そは只越後に限れるのみ。一時怪異のなゝつまでかさなる事のあるべしやはと。かねては思ひおきてたりしに。寛政のおはひに至りて。予が視聽を經たるもの。ふたゝびまでありければ。けふのまとゐの草紙料にかきしるすこと左の如し

寛政三年亥年。甲斐國に七奇異あり。甲斐に六奇異あり。遠江に一奇異あり。合して七奇異とす　當時ある人の消息に云く

一甲州善光寺の如來。當春二三月汗かき。寺僧兩人づゝにて日夜拭ひ候事

一甲州切石村百姓八右衛門家の鼠。大さ身一尺餘。爲猫之聲候事

一右村より一里許山に入石畑村に而。馬爲人話候事。尤一度切にて後無其事

一同八日市場村切石村荊澤村にて。牝鷄各化爲牡鷄候事

一同東郡一町田中邊三里四方許之間。六月雹降り深さ三尺餘。鳥獸被打殺候事

一同七面山鳴御池の水濁渾候事

一遠州豊田郡月村百姓作十郎方の鍬に草生候事。及先より三寸。一本枝十六本。如杉形三日にて花を開。似櫻花枝木花共に皆鍬のかねなり

のかつてしらざる事にて。いと珍らし。又猫と虎とは形状もよく似て。歌にも猫を手がひの虎などよめり。しかるにその所爲も亦おなじき事あり。無寃錄（巻下八十二丁）云。虎咬死云々。一云。月初咬ニ頭頂一。月中咬ニ腹脊一。月盡咬レ足。猫咬レ鼠亦然。これらうきたることにあらず。奇といふべし

解云。象と熊とは。その膽四時にしたがひて。その在る所の異なるよしさへ。古人辨じおきたれば。右の月の輪の説なども。ことわり或わさるよしあらん。しかれども。猫と熊とはおなじかるべくもれぼえず。めのをんなのわかゝりし時。好みて黒猫をかひしこと。年ごろをふるまゝに。その年々にうませし子も。多くは黒猫なるをもて。これらのうへは。予もよく知れり。しかるに。黒猫毎に胸のあたりに。月の輪めきたるものあるにあらず。稀にはあるもあれど。そは黒白のぶちなれば。熊の月の輪に類すべからず。いかにとなれば。熊はすべて雜毛なく。猫には雜毛多ければなり。かゝれば鉢石なる人の説も。ひたすらにはうけがたく。無寃錄に載せたる説も。必とすべからず。虎は皇國になきものなれど。猫の事は知り易かり。大約猫の鼠をとるに。必。先その吭（ノドブエ）を拉きて。半死半生ならしめつゝ弄ぶこと半時ばかり。既に啖はんとするにおよびて。必。鼠の頂より咬ひはじめて。扨全身を盡くすものなり。或は巣だちせし雛鼠などをば。只一口にくらふことあり。或は多くとり得し時。又は大鼠にして。飽く時は。その頭頂より咬ひはじめ。その足より啖ふことは絶えてなし。こは予がさかりなりし時。凡はたとせあまりの程。いくたびとなく見し事なれば。遠く書をあさるに及ばず。もし疑ふ人もあらば。ためし見て。予が言の誣へざるを知りねかし

附けていふ。猫の純黑なるものは。尤得がたし。その純黑と見えたるも。その毛をわけてよく見れば。必。白きさし毛あり。よしや。さし毛なきものは。或はその爪の白く。或はあなうらの白きあり。かの藥劑に用ふといふ眞の純黑の得がたきこと。かくの如し。かゝれば黒猫の胸の白きは。偶然たるぶちにして。熊の月の輪と異なり

利右衞門正美といひて。是もおなじ君につかへて。添番をつとめたり。然るに實子なくて。血脈は絶えたりとぞ。家の傳ふる所は。族稱本氏ともに染木なりといへり

文政八三朔　輪池

○むじなたぬき　海棠庵記

ある人のいふ。むじな。たぬきは雌雄にて。雌をむじなといひ。雄をたぬきといふとかたりき。されどさだかならぬことにて。いと心得がたく思ひしに。このごろ羽州由利郡の農民與兵衞といふもの來にけり。この與兵衞は。むかし獵人にて。南部より出づるといふ。兕狀てふものまで所持して。をさ〳〵巨魁なりしと聞えければ。まねきよせて。むじな。たぬき。まみなど問ひしに。答へていふ。むじな。たぬき。まみ皆よく似たるものなれど。各別種にて。みな雌雄あり。まみとむじなとは。毛いろも肉の肥えたるも。わきがたきまでよく似たり。只その別なるところは。まみは四足ともに。人の指の如く。方言に熊のあらし子（落灑さいふが如し）といふ。むじなは四足犬に類す。狸はあくまで瘦せて胴のわたり長し。やつがれ十七歲より山かつの業になれて。はや六十餘歲に及び。獸の事はよく知り侍るなどかたりぬ。和名鈔にも。狢。狸。猯おの〳〵わかちあれば。むじな。たぬき雌雄なりといふ俗說は。固よりとるには足らねど。嚮に曲亭ぬしのまみ考の因もあれば。そゞろに聞きしまゝにしるすのみ

彼與兵衞いふ。熊につきのわとて咽喉の下に。白き毛あり。形月の輪の如くなれば。しかいふとなん。さるに。そのつきの輪に不同あり。圓なるあり。半輪あり。纎月のごときあり。またつきのわのなきあり。こはその熊の生るゝ日。十五日なれば。輪圓なり。晦日なれば輪なし。餘は月の盈缺によりて。准知すべしといふ。一奇事なり

佛庵老人の云。日光鉢石町の人の話に。黑猫にも月の輪めきたるものありて。月の盈闕によりて。あるとなきとありとかたりしが。今熊の事につきて思ひ出だしぬとかたらき

乙酉三月　海棠庵

美成云。右佛庵翁の黑猫と。熊と似たる話。世人

もの。預かられたる馬を殺して。わが身に恙なければとて。人には面をむけがたかるべし。世の風說を傳へ聞くに。彼死したる三人のうちに。一人は馬の轡づらにすがりつゝ。死してありしといへり。これらは特に賞すべし。予嘗て馬を好む癖あり。その馬を預けおくものを馬持といふ。俗はに別當とよびなせり。さればこの別當には。わだし中間小ものより。一しほに心をつけて。折々よびて酒などのませ。馬の事を問ひなどして。手いれを等閑になせそといふ。則これ子につけたる乳母にひとしく。子を愛する情に近し。そを十疋まで燒き殺したる沼田が意中。いかにぞや。いとも怪有なる事になん

此頃。黑澤竹所よりよせられし簡牘のはし書に。
この比。高松藩失火之節。厩より出候事故。沼田逸平次誠に丸燒。一向諸道具等持出し候隙無之候由。私も一兩度相尋申候氣之毒成事仕候。殊に私は貸置候書籍燒失。是非なき事なり。あなたよりも貴藏の書。參り居候よし。如何候哉。多分むづかしく候半と奉存候　下略
文政乙酉春三月朔　松蘿山人

○山王靈聖　輪池堂

駱駝の故事。諸家の纂むるところ。各網羅せりと見ゆるに。山王靈聖とあがめて拜せし事と。その糞を線にぬきて。頸にかけしことは。いまだいはざることにや。よりてこゝに錄す。能改齋漫錄 宋吳曾 云。李昉言。建隆初。王師下㆓湖南㆒。澧湖之民。素不㆑識㆓駱駝㆒。隨㆑軍負荷。頗有㆓此畜㆒。村落婦女見而驚異。競來觀㆑之。有㆓拜而祝者㆒曰。山王靈聖。願賜㆓福祐㆒。及㆑見屈㆑膝而促。又走避㆑之。曰。卑下小人。不㆑勞㆓山王遙拜㆒。軍士見者無㆑不㆓大噱㆒。又拾㆓其所㆑遺之糞㆒。以㆑線穿聯。戴㆓子男女項頸之下㆒。用禳㆓兵疫之氣㆒。南中相傳以爲笑

○染木正信

御天守番飯島平次郎話。予が番に。染木某の祖先は韓人にして。李氏なり。豊太閤の時に。童にて姉とゝもに。片桐市正にいけどられて。皇國に來れり。市正此二人に唐山の童子の衣服をきせて。臺にのせ。天樹院君にまゐらせたり。姉は成長して。早尾といふ。弟は老女染木が養子になりて。染木八右衛門正信といひて。兩人ともに生涯つかへ奉り。その子を

て。予どもが馬術の師範には。誰をかすると問は
せたまふに。老臣等は閉口して。今に何の沙汰も
なく。そがまゝ江戸におかるゝなり。予も去歳の
十二月。國勝手をいひつけられしに。いさゝかの
故ありて。發足の延引すれば。扨しか〴〵といへ
るなり

風説とかくに定かならねば。みづから安否を問はん
と思ひて。其日の黄昏に。沼田がりおとづれしに。
宿所はなほも上屋敷にて。假住居なる玄關には。冑
の鉢鐙挾箱の鐵物。藥鑵の類の燒けたるを。處せき
まで積みかさねたり。かくて沼田が子息源太郎出で
迎へて。かゝる仕合賢察を給へかし。れもてたちた
るおん届は。人馬ともにそこなはず候とは申しゝか
ども。人にも馬にも怪我あれば。心ぐるしくこそと
いふ。嘆息の外なかりけり。そのときあるじ逸平次
は。麻上下の下のみを着て。いそがはしく立ちいで
つゝ。見給ふごとくかゝる仕合。今朝しも使を給は
りしに。今又みづから訪はせ給ふ。おんこゝろばへ
淺からず。いとよろこばしく候といふ。物のいひざ
ま。眼ざしさへ怒りをふくめるやうに見えたり。逸平
次又いふやう。きのふ見よとてつかはされたる鏃も。
共に火中に入りぬ。今さらに面ぶせなり。殊さら遺
留物の唐鞍なども。灰になりて候はんといふ。そは
ものゝ屑にもあらじ。彼書籍卷物なんどは。燒やし
たると尋ねしに。さればとよ。非常の時の爲にとて。
長櫃にいれたりしがまゝ。燒けて殘るものなり。只
これらのみならず。十二疋有りける馬を。馬は十疋。
人三人まで。燒殺して候なり。きのふ高松へ飛脚を
立たせて。一くだりは申しつかはし。けふ又つばら
に云々と申しつかはすべき爲に。飛脚の用意はした
れども。下役のものどもを日に〳〵よびて。問ひ質
せども。そのたび毎にいふよしたがひて。書きとゞ
むべくもあらず。ほと〳〵當惑至極せりと。詞せは
しく物がたれり。そはやすからぬことなりけり。はや
その事を果し給へ。又こそ來らめと別れを告げて。
そがまゝにまかりぬ。猶問はまほしき事はあれども。
さるいとまある時ならねば。思ひながらに默止せり。
孔子の馬を問ひ給はざりしは。只人畜輕重のわいだ
めにこそあらめ。いまの諸侯の厩には。馬一疋に或
は二人。或は一人隷かぬはなし。そが爲に奉公せん

文政八三月朔　　　文寶亭誌

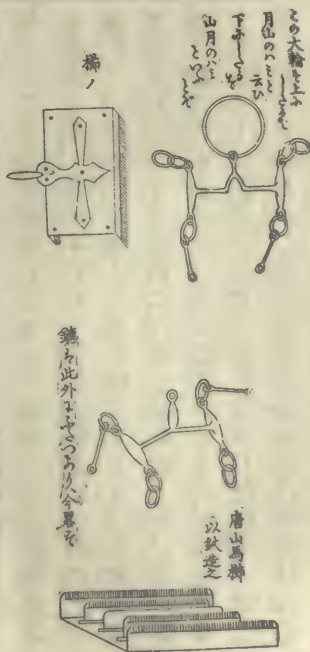
○高松邸中厩失火の事　松蘿館記

文化八年乙酉二月廿三日の夜。小石川御門内なる。高松の邸の厩より失火せしよし聞えしかば。沼田は逸平次といふ馬役なりいかに燬をのがれし歟。書籍巻物なぞはいかにしけんと思ひつゝ。ひと日二日と過ごす程に。あちこちより風説聞えて。馬あまた焼殺せしといふに。うちもおかれず。物なれたる人を遣して。その安否を問はせしに。家の内のものどもは。恙もあらず候へども。さきの日見よとて寄せられし鑣は。皆焼けたりとて。焼け殘りたる巻物の紙に包みて返してけり。抑。わが此鑣は。古書に載せたることもありや。よく見て考へ給ひねとて。沼田に預けおきしなり。しれる人に問はまほしさに。今圖する事左の如し

木村默老云

此銜二つは。小子も以前藏弃せり。師傳にては。朝鮮國の調馬轡なりと云ふ。嘗て乘馬にかけ試みしに。用ひ様によりて大に益あり。存するなり

唐山馬轡と云ふものも。疑ふらくは。非唐山之物歟。蘭人ケイヅルなる者の書ける書冊中に此物見えたり

全體。此沼田逸平次國勝手へ申付たる節。在國にて委敷儀は不知とも。此書面とは相違の事ある様に存ずるなり

この時。沼田が口狀に。和君もはやく柳川へかへり給へ。長居は實にれそれあり。われらけふまで江戸にあらずば。この災をのがるべきにと。かごとがましくいひれこせけり

沼田はおとゝし。家老の處分にて。國勝手たるべしといひつけられしに。目黑にまします。老君の聞こしめして。今故もなく逸平次を國勝手たらしめ

きり。不作法にたべ相歸り申候に付。不思議に存じ。同夜傳吉妻いくと申者。右之忍冬湯向米屋へ禮に參り候處。右體之娘無之由申候に付。近邊も相尋候處。一向相知れ不申候。猶又翌朝廿八日早朝に。右之娘參候間。住所再應相尋候得共。彼是申し紛し候に付。右いく同人悴粂次郎と申す十六歳に相成候者。兩人にて行先を付見屆可申と申合。右娘歸り候節。跡をつけ參候處。南横町より西紺屋町河岸へ足早に參候間。見屆可申と存候內。何方へ參候哉。見失ひ。一向行方相知れ不申候に付。右町內を近邊とも再應承り合候處。右の小女此節處々へ參り。娘の子の髮などゆひ遣し候に付。宿を承り候へ共。家々にて替り候名前のみ申候儀に付。全く狐狸の成す業にも可有之哉。此節專ら處々方々にて。右體の取沙汰御座候に付。此段申上候以上

子十二月十一日

新肴町名主後見
西紺屋町名主
彌五右衛門

右書上げのまゝ寫し。こは文化元甲子年の事なり

○安宅丸御船修造之節の漆の事

武州草加宿百姓大岡八郎右衛門といふ者。町奉行所より御差紙にて。御呼出し有之候。其趣むかし安宅丸御船出來之節。右大岡先祖此御船を塗りたるよし。其節の漆調合之法。今以書留有之哉と御尋なり。然るに今八郎右衛門事。今は百姓なれば。一向右樣之書物など有無とも辨へず。いづれ相尋候上にて。御請可申上とて。夫より家內に昔より持ち傳へたる簞笥等吟味したるに。其中より右安宅丸漆塗之法書等。其外右に付きたる書物共出でたれば。大によろこび。早速上へ差し出だしたり。右書物にて考ふれば。平日家內にて遣ふ給仕盆三枚。硯箱壹つ。硯ふた一面とも。昔の漆のあまりにてぬりたるものゝよし。則此三品をも差し出だしたれば。給仕盆一枚とめれかれ。殘の品は隨分大切に所持いたし候樣にと。被仰渡て下しおかれしとなり

此大岡氏は本町藥店小西九郎兵衛の內緣あるものゝよし

右小西かたにつとめたるものゝ話にて。これも文化子年の事なり文化は元年と十三年と子年ふたつあり。いづれの子年にかたづぬべし

彫刻し。羽州。湯。月。羽黒三山靈場の麓に奉納し

玉滴隱見に。湯殿山麓に金色の光を顯したるよし見え。新著聞集に。近所のもの湯殿山に詣うで竹にあひたりといへるを。謬り傳へしものならんか。於竹がこと右二書より外に。詳に且誕すべきものなし。されば。これをおきてもとづくべきなく。その他はみな妄誕なると論をまたず

此會かねてけふをしもおのれが宅にと約したるに。上巳のまへはことしげゝればとて。節過ぎて後こそよからめと。かたりあひしに。思はずも曲亭子に促され。著作堂に集ふことになりければ。何をかしるさんと。枕をわるの思ひなりしが。過し比。小梅村の南無佛庵をとぶらひける道のほどにて。このお竹がことをかたり出でたるに。來れる月の兎園會にものせよとありけるを。思ひ出でゝそのよしを記して。小說の料に充つと云ふ

文政八年乙酉春三月朔

○あやしき少女の事　文寶亭錄

新肴町嘉兵衛店大工傳吉儀。先月廿五日朝五時比七歳に罷成候娘。かめと申す者を連れ。弓町大助店忍冬湯と申す藥湯渡世致し候ゝ榮吉方へ入湯に罷越處十一二歲位に相見え候女子。髮ゆひ候者右女子同樣に入湯いたし居。右かめと友達の樣に心やすく咄などいたし。傳吉歸り候節。娘かめにはよきものを遣し可申間。殘置候樣申候に付。何の心も不附殘し置。傳吉罷歸り申候處。しばらく過ぎて右之女子かめを連れ。傳吉宅へ參り。なれ〳〵敷いたし。右かめの髮などゆひ遣し。菓子抔遣し候に付。住所相尋候得は。右之忍冬湯向米屋の娘之由申聞。夫より直にかめをつれ。木挽町芝居へ參り。歸りに同人伯父のよし。同所二丁目邊裏屋へはいり。かめへ古き丹後島の帶壹筋。木綿島子供前垂壹つ。黑縮緬おこそ頭巾壹。右三品を呉れ。相歸し申候。又候翌朝德利へ酒壹合程入持參。母より遣候趣申候。即刻又々酒少々德利へ入れ。めざし鰯一くし持參。自分とかんをいたしたべ。傳吉方に有合候淺漬香の物を貰ひたべ。是は何方にて何程に買ひ候哉と承り。相歸り。又候間も無之右淺漬一本調ひ持參。自分洗ひ一寸位づゝ大きく

婦は両脇立と成りて。今に有りと云々。此こと彼御山の佐藤宮内と云ふ。神人語レ之。また淺草新寺町獅子吼山善德寺に。如意輪觀音の石塔あり。性岸妙智信女。延寶八庚申天五月十九日と彫刻したり。是ゐ竹が墓なりと云ふ。此二條を併せ案ずるに。玉滴隱見何れの年。誰の撰と云ふこと詳ならねど。その書を閲するに。寛文ごろの事。いと多く見えたれば。そのころのものとしらる。扨墓碑の延寶とあるに合へり。されどその月日の違へるを思ふに。墓碑の正しきは論ずべくもあらず。書に記したるは。遠く出羽の人の傳聞なれば。もとより聊の違ひはあるべきことなり。されば元祿としもいはんは。さることなれども。文祿とするはいと謬なり。再びおもふに。かゝることいと近き世のことは憚りなきにあらず。その比。忌むところありて。しか記したるもしるべからざれば。强ひて咎むべきにあらずかし〔此墓碑の事。溫故名跡志。淺草志等には漏らしたりき〕

湯殿嶺上戒行堅固の聖あり。正身の大日如來を拜せんことを願ひ云々

此一條は。書寫上人〔書寫上人とのみにては詳ならず。書寫山の性空とあるべし。こは童蒙にいふのみ〕の生身の普賢を見奉るべきよしを祈請し給ひ。夢の告ありて。神崎の遊女を尋ね給ひし事〔詳見二古事談僧行篇一〕を附會したるものと思はる

〇勘解由に見あらはされ

佐久氏は解勘由にあらず。玉滴隱見に。善八と見えたり

事跡合考を案ずるに。佐久間平八といふものは。元祿後斷絶とぞ。菩提所增上寺中心光院佐久間下女のながし板ありと見ゆ。佐久間氏の名。孰れか是なるをしらず。けだし合考の方。實に近からんしかはあれど。勘解由と記したるは。新著聞集に。佐久間勘解由と誤りしによりしものなるべし

竹女が容。消然として去るところをしらず

是また妄誕なること。辨をまたずしてしるものから。佛家にはかゝる瑞端をいふこと常なり。愚俗はあざむくべし。敢て識者を誣ゆべけんや。已にしるしたるがごとく。今墓碑現に存せり。且玉滴隱見に。死をしるし。新著聞集に精進にして大往生をとげしと見えたるを併せおもふべし

勘解由若干の貲財を拋ち。ありし面貌を尊像に

ならば。武江佐久間氏何某の下女を拜せよとて夢覺めぬ。斯の如きの異夢三度に及びければ。疑ふことなく武城都下に尋ね來り。夢の告なるよしを語り。佐久間主人に物して。ひそかに竹女が面容を拜すれば。光明輝然として。十方をてらし。尊貌紫磨の金身なりければ。主客ともに驚嘆不思議の感涙に咽び。禮拜恭敬して。大悲難思の應用。末世の奇瑞心肝に徹して。ふかく渇仰の思をなせり。不思議なるかな。如來は隨處應度の悲願に酬いて。難化利益の機關を上人及び勘解由に見あらはされてや。咫尺の間。竹女が容。消然として去るところをしらず。人々驚愕し。悲慕捜索すれども跡を認むべきなし。常に起臥せし小房をひらき見れば。只靈香馥郁と薰じ。光明まさに眼裏にあるごときのみ。宜哉。擧家只聚頭傷々とし。如來お竹年ごろ馴親し。離情の切なるに叫び。佛陀善巧の恩德になくのみなり。此に於て勘解由若干の貲財を擲ち。ありし面貌を尊像に彫刻し。羽州。湯。月。羽黑三山靈場の麓に奉納し。永く靈像の檀那となり。黄金堂に安置し奉る所なり。星霜いまだ遠からず。此こと人口に膾炙して。世人おのづからお竹大日如來と稱しならはせり。下略出羽國羽黑山麓別當玄良坊

世にありとある神社佛刹の緣起といふものに。妄誕ならざるはいと稀なり。此に載する緣起を。かゝるを實にありと思ひて疑はざるものあらんは。愚に近しとこそいはめ。されどあながちに無しとせんも。又誣ゆるに似たり。こゝに於て。今この緣起を左に辨せん

文祿年中の比。武江佐久間何某召仕ふところの婢女に竹といふあり

玉滴隱見に云。江戸大傳馬町の名主の佐久間善八といひける者の召仕なる竹と云ひける下女。去年三月廿一日に死したり。此竹こと主の善八は。問屋にて有りければ。大勢の者の食餌にかゝづらひけれども。聊も穀三寶を麁抹にせずして。非人を憐み。其雜炊の餘を以て。牛馬を飼ひ抔して。一生を送りしが。死して其儘羽州湯殿山麓に。金色の光り一度の内にあらはして。竹は中尊娑婆にて。主なりし佐久間夫

者（長尾友臧）來訪して。命を傳ふるにより。同月十八日に創しつゝ。廿日にこれをまゐらせにき。駿馬の名はじめは錦帆と書かれしを。予がこの記を綴るに及びて。帆を騆に作れり。使者この義を詰りしかば。予答へて騆は帆と通ふ義あり。且字書に。水行曰レ帆。陸行曰レ騆とも候。駿馬の爲には。舟帆の帆たらんより。その字馬に從はんこそ。勝れたれと覺え候は。いかゞ侍るべからんといひしを。使者やがて歸りまゐりて。云々と申しゝかば。老侯頷き給ひしとぞ。かくて次の年にやありけん。聊所要の事ありて。書肆より淵鑑類函兩三帙を借りよせつ。是彼と披閲せしが中に。第四百三十三巻獸の部。馬の三に。古今註を載せて。曹眞有二駛(トキ)馬一。（駛音史即駿也）名二驚帆一。といふよし見たり。かゝれば唐山にて。魏の時はやく馬の名に帆をもてしつることはありけり。これによらば。錦騆もはじめのごとく。舟帆の帆に作るもよしなきにあらず。拙文のうちこの故事を引きもらしたりしのみ。今しも堪へぬうらみにぞありける（右二馬之二）

右五馬。三馬。二馬の拙編おもひしよりは。ことの多くて。紙の數はかさなりぬ。世にいふ下手の長談義なるべし

文政八年乙酉春三月朔　著作堂解識

○於竹大日如來緣起の辨　好問堂稿

安永六年丁酉七月江戸にて。於竹大日如來の開帳あり（此より先にも開帳ありやしらず）その緣起に云ふ

抑。當山の靈像於竹大日如來の權輿を尋ぬるに。文祿年中の頃。武江佐久間何某召し仕ふところの婢女に。たけといふあり。深く三寶に皈依し。雜染浮花世間の樂しみをよしと願はず。たゞ白淨信心にして。常に愼むところを見るに。日々三時おのが喫殖(ショク)する分量の飯食をとゞめて。困餓窮飢の者に施し。朝暮烹炊につき。自ら流れすたる所の粒飯(メシツブ)をおそれうやまひ。厨下流盤(ダイドコロナガシ)のすゑに茶袋を羅布(アミシキ)て。是に止まる。淡薄の麁食を嘗めて自活の料とし。專ら卑下柔順にして。慈悲曾て怠ることなし。その頃同國比企郡に。湯殿嶺上戒行堅固の聖あり。正身の大日如來を拜せんことを願ひ。此山にあゆみをはこぶこと年あり。ある夜の夢に。汝生身の如來を拜せんと

櫪中如牧馬一般。蓋隨馬性也。是以馬力壯勇。駑馳如意。福藩嘗有駿馬一瞬。得之薩摩侯封内喜入野。至享和元年五月九日斃。老君乃請山本北山。識其顛末。一瞬家記是已。今之所獲。不讓於一瞬。名曰錦驅。是馬出於下總州葛飾郡小金原中野。其圉人吉野嘉橘養之七八年矣。奔蹄神速。不與群馬倶。村翁牧童。嘗稱龍種。吾老君聞而徵之。其牽來之日。初見之。全身薄黃。即驕馬也。其高勝常馬四寸。年紀八歳于此。左右稱良。老君欲試之。即命家臣蠣崎廣晃。遠到于鎌倉。時二月十四日。廣晃跨錦驅馬。曉天寅三點出邸。辰牌（辰鼓過六分）到鎌倉。謁鶴岡神廟。是日申牌（申正鼓）還邸。明曉（十五日寅一點）廣晃鞭錦驅馬。復赴鎌倉。巳牌（巳鼓過八分）謁鶴岡神廟。進退如昨。社人安田進吾。謂廣晃曰。江府騎馬之士。終往返一日。而詣本宮者。爲不尠矣。其名簿歴々在於此。然同人同馬。而連日造於此者。未之有也。宜錄竹帛以藏神庫。屢歎賞不已。（明日神主大伴氏。與廣晃書以慶賀爲）是夕（戌二點）廣晃還邸。邸在江戸下谷三絃塹上。至相摸州鎌倉郡鶴岡八幡宮。坂東道一百里又二町。（天朝之制。揣里數以町段。六十間爲一町。一町即三十六丈也。昔者關東。六町爲一里。謂之坂東道。今則三十六町爲一里。坂東道一百里又二町者。今之十六里又二十六町也。下谷三絃塹。至日本橋三十町。日本橋至品革驛二里。品革至河崎驛三里四町。此間有餘戸二十六町。加以爲三云云。河崎至程谷二里九町。程谷至戸塚驛二里。戸塚至鎌倉四里六町。土俗私以五十町爲一里者往々有之。謂之田舎道。戸塚至鎌倉亦復如此。因以爲三里。其實則四里六町也。三絃塹至鎌倉鶴岡社頭。二十六里又二十六町。即坂東道一百里又二町也）兩日路程。無慮四百里。而有餘也。（以今之里數。即六十六里三十二町）而錦驅馬。四蹄無一蹶。廣晃亦不敢曰勞。其詰旦使於箕輪郷某侯。亭午返命。進退自若。僕所聞見。類如此。敢請。叟文之則足也夫。予聞之。瘦膝交進。不覺炙痂之潰。喟然嘆曰。善哉老侯之愛馬也。能養士。然後養馬。是以其食足矣。其食足。則其材美矣。非獨其馬有千里之蹄而已。其家臣亦有千里之能。可謂士馬之養得其方矣。因語使者曰。解先人。亦有馬癖。嘗善一條馭法。解也不幸。髫歳喪親。犬馬之齡。五十有三。不知鞭靮爲何等之物。雖狗才愧驥德。將始自隗。冀稱先人之遺志。使者欣然竟去矣。明日乃綴是記。未遑易稿。使者再來。誅求甚急。繼補誤脱以呈焉

文政二年己卯春三月　　飯台瀧澤解撰

この記文の事。その年の春三月十六日に。老侯の使

錦帆と名付け給ふ。則撫養の方を替へて。其厩に屋根を葺かず。又板をしも敷くこともなく。只その牧にありけん如く。馬のまに〳〵せられたり。かくて二年の春二月。錦帆馬を試みよとて。長臣蠣崎氏（左兵衛た廣晃。後にあらためて釆女といふ）を乘せて。鎌倉に遣し給ふに。其月の十四日十五日の兩日に。往返既に兩度に及べり。こは未曾有の事なれば。老侯特に歡びのあまり。解に其記を求め給ひき。おのれはわきて漢文をようせず。能文の儒者おほかるに。この義はゆるし給へかしと。頻に推辭（イナミ）まうしゝかども。おだし人には望みなし。とにもかくにも綴りてよとのたまはするに。免れがたくて。俄に創してまゐらせたり。然るにそのふゆくりなく。その草稿を探り出だしつ。いとをこがましきわざながら。錄して數に充つるのみ

駿馬錦驪記

松前老侯使者謂レ予曰。吾老君性愛レ馬。頃購ニ得良馬一。因徵ニ叟其記一。是以傳レ命。予謹對曰。昔者秦少游序ニ八駿一。杜甫贊ニ韓幹馬一。八駿韓幹即畫馬也。若ニ李伯樂相馬經及劉禹錫說驥一。雖レ云ニ生馬一。而非ニ爲ニ一馬一爲レ之者一。解之寡聞。加レ之昧ニ于馭法一。何以能レ之。然懇命不レ可ニ得而辭一。敢問。老侯之愛レ馬。爲ニ武備一乎。爲ニ畋獵一乎。又唯爲下衣以ニ文繡一置以ニ華蓋一。席以ニ露牀一。啗以ニ棗脯一。以倣中楚莊之轝上乎。天下不レ憂レ無ニ千里之駒一。千里之駒。獨苦三於不レ遇ニ伯樂一。貴使所謂良馬者何也。曰三四蹄疾如ニ飛禽一乎。曰三二鬃髦如ニ貞松一乎。逸態稜々爲ニ虎文一者乎。駿骨超然擬ニ神龍一者乎。嘗所レ牽ニ於大宛一乎。抑所レ出レ自ニ月支一乎。願聞ニ其詳一矣。使者莞爾笑曰。僕也。以レ叟爲ニ通達洒落之士一。不レ憶言之悖ニ于此一。夫善騎者。知レ驥而取レ之。猶ニ明君知レ賢而用一レ之。安俟ニ伯樂一。然後求ニ良馬一之爲哉。齊景公馬有ニ千駟一。而孔子譏レ之。楚莊王。馬以ニ士禮一。而優孟諫レ之。吾老君亦以爲ニ話柄一。大約馬之用。在ニ載而馳一。奔蹄速爲レ良。遲爲レ蹇。蹇驢股駑無レ用。是以人々却レ之。良馬武事有レ用。是故人々求レ之。雖ニ則求一レ之。然良馬難レ致。非ニ良馬之難一レ致。知レ之難也。骨法卓然。未レ足ニ以爲一レ良。毛色鮮明未レ足ニ以爲一レ良。飾以ニ錦繡一。置以ニ銀鞍一。非レ所ニ以愛一レ馬。加レ之以ニ衡扼一。齊レ之以ニ月題一。非レ所ニ以養一レ馬。吾老君毫無レ取焉。唯考ニ其臧否一。而擇レ馬養レ馬。廐

寮のうしろなる。一瞬冢是のみ。江戸にて駿馬の碑を見ること。いとめづらかに覺ゆれば。錄すこと左の如し

駿馬一瞬碑文

良馬世多有。然傳焉者無幾何也。非遇良主知其能。不得奮其力而盡其用。主亦或有爲之輝揚威悳於一代。関侯赤兎翟悳玉追是也。若能傳後長存者。在辭以文之。漢武蒲稍以樂府。楚項烏騅依悲歌。享和元年五月初九。松前老侯愛馬一瞬。病死于厩櫪。侯雅善騎。無駿稱意。聞薩摩國出良馬。求之薩摩重豪公。辭云。吾不敢欲若少年輩所愛。鬃毛如油。髀項如腴。步驟協聲律。馳驅合曲度。唯神速若掣電流星。則足矣。至旋毛吉凶。尾鬣疎密。毛色驪黃。皆非所拘論云。公壯之。贈封內喜入野所出駿馬。一瞬是也。亡論眼如鈴。蹄如鐵。形色大小。不更細說。人望知其爲神駿。自薩摩至江戸。路程數千里。跋涉嶮巇。力不少罷。蹄不少損。精神自若。無異常日。於是乎侯喜可知也。試其能。繫紅練於尾後。驅而奔之。一匹練長引不墜。如紅虹經天。脚下飀颯。只聞風聲。瞬目間盡調馬上。力猶有餘也。侯鍾愛之。朝夕撫養以爲樂。及其死。不能割愛。乃取其鬃。瘞于江戸駒込吉祥寺後山。取其尾爲拂子。朝夕手執之。寓愛惜之意。又欲求北山信有辭。以傳于後。嗟呼一瞬。遇良主。幸也夫

享和元年辛酉夏五月　　北山信有撰

文化の末にやありけん。老侯ある日。輿繼に告げてのたまはく。我曩には只馬に乗るゆゑをのみ知りて。馬を養ふみちを知らず。さるにより彼一瞬に乗る每に。色衣なんどを引かするに。その絹の地に着かで。いと長くひるがへるを興あることに思ひしは。甚しき誤なりき。若しさる事をせざりせば。彼馬をば殺すまじきに。今に至りて三折の效を悟るも甲斐なしとて。いとをしみ給ひきとぞ。此ごろ使者をもて予に馬尾の拂子を見せさせて。いまだこの拂子の箱書つけなし。何とかかゝすべきと問はせ給ひしかば。驤拂とやあるべき。孟反拂などもしかるべからん歟と。答へまうしき右二馬之一

文政元年戊寅の冬のころ。老侯又駿馬を求め得て。

且義烈なるもの。又簗川の近村なる農夫の飼へるは惡馬なり。これらは上に論じたり。河越なるは靈馬にして。高輪なるは狂馬なり。又松前の家臣の馬は。是を痴馬ともいふべし。しかれども。身を絆絏に繫がれては。虎狼なりともいかゞはせん。譬へば人の利祿に繫がれ。或は妻子に繫がれつゝ。愛惜嗜慾に榮衛を減却せらるゝものに似たり。利祿妻子は絏なり。愛惜嗜慾は鼬の如し。これを火宅の煩惱といふ。かゝれば人の賢。不肖。禍福。得失。寵辱。榮枯皆この五馬の中にあり。莊氏が一馬禪家の十牛及劉安が塞馬の音も。よにこの外はあらずかし

附けていふ。文政五年壬午の春閏正月十六日。戯作著式亭三馬死す。享年四十七歳なり。（三馬は江戸の人。名は太助。板木師菊池茂兵衛が子なり）同年の夏六月二日。烏亭焉馬死す。享年八十歳（焉馬も江戸の人。名は和助。はじめは大工なり。後に商人となりて。足袋を鬻けり）同年月日。錦馬死す。享年七十許歳なるべし。（錦馬は。富本豐前太夫が俳名なり。その實名を午之助といへり。よりてその親しきものは。渠を午さのみ呼びしとぞ）識者戯れにいへることあり。今茲は支干壬午に當れり。壬は水なり。逝きてかへらぬ象あり。この春三馬が死せしより。焉馬。錦馬も亦死せり。かくて三馬の名の數の空しからぬも奇なりとぞ。ある人これを予に報て。和君も用心し給へかしといはれしに。予答へて。いなその數には入るまじ。錦馬は素より識る人ならず。焉馬。三馬等とはこのとし來絶えて親しく交らず。忌嫌ふること聞えしに。いかでかは伴ふべき。且そのわざは似たれ共。行ひざまの異なるを。閻王はよくえろしめしけん。かゝれば。氣づかひあるべからずとうち戯れたりければ。ある人いたく笑ひにけり。これらは要なき事ながら。そゞろに筆の走ればなん（右三馬）

かさねていふ。松前の老侯の。をさ／＼馬を好み給へば。乘りくらのかへなども。大かたならずと聞えたり。さればにや寛政中鍾愛の駿馬あり。老侯みづからこれに名つけて。一瞬といふ。蓋一瞬は瞬目の間に走ること。いくばく里にか及ぶの義なるべし。この馬は前薩摩侯（中將重豪公）より贈られし。その封内なる喜入野の牧より出でしものなりとぞ。かくて享和元年の夏。一瞬病みて死せり。實に五月九日なり。老侯則その尾をもつて拂子とし。又その鬣を駒籠なる吉祥禪寺に送りて葬らしめ。その上に碑を建つるに及びて。碑文を山本北山子に徵し給ひき。かの寺の學

し大熊は。まづその馬をくらひ殺して。おのが舂に引きかけつゝ。走りて山にもてゆくとぞ。これによりおのも〳〵。廐の戸鎖(サシ)を固くして。その害を防ぐこと。夜盗を禦ぐに異ならねども。これらは常の事なれば。彼地の人は何ともおもはず。それにもましてめづらかなりしは。文政五年壬午の春のころ。松前の家臣何がし(その姓名をわすれたり)が廐の馬。ある夜頻りに狂ひ騒ぎて。いと苦しげに嘶きたり。あるじはこれに驚き寐めて。廐に熊や入りにけん。みなとく起きよと呼び覺して。下部に紙燭をとらせつゝ。出でゝ廐にゆきて見るに。戸ざしは元のまゝにして。物の入りたるやうにもあらず。戸を推しひらきて内を見るに。目にさへぎるものもなし。されども馬は苦しげに嘶くことはじめの如し。こゝろ得がたく思ひしかば。紙燭を高くかゝげさせて。猶あちこちをつら〳〵見るに。あやしむべし。ひとつの鼬馬の頂にうちのぼりて。その鬣を喰ひ破りつゝ。血を吸ふてぞをれりける。さては彼奴がはざなりけり。要こそあれと持ちたる棒を取りなほさんとする程に。鼬ははやく飛び下りて。袂の下を潜ると見えしが。ゆくへもしらずなりにけり。げに繋がれたる馬のうなじを。鼬に喰はれては。せん方なきことはりなり。そのきずはいと深くて。拳も入るべきばかりなるを。酒にて洗ひ藥を傳へてとり〳〵すれども。久しく愈えず。凡二ヶ月あまりにしてやうやくおこたり果てしかど。その處にのみ鬣なくて。疵物にこそなりにたれ。鼬の馬を喰ひし事は。松前にてもめづらしとて。人みな舌を卷きしとぞ。この一條は蠣崎生(字は三七)その年文月の初めつかた。我庵を訪はれし日云々と話せられたり。おのれ是を打ち聞きておもふに。天智の帝の御宇。高倉の御時に。鼠が馬の尾に憑(ツキ)て。巣をくひけるは事はふりにたり。新奇に走る今の世には。鼬が鼠に代はるべく。亦その尾にはつかずして。鬣をこそくひつらめと。あからさまに答へしかば。蠣崎生は手をうちならして。ほと〳〵笑坪に入りにけり(右五馬之五)

すべてこの五馬の奇談は。いぬる文政二年より五年までの事にして。予が聞く所かくの如し。されば宇宙の廣大なる。かゝる事はいくらもあらん。よりて竊に評すらく。かの箱崎なる農家の馬は。神にして

良馬來謂曰。我本侯家乘馬。得ㇾ寵久矣。後有ㇾ故獲ニ於商人家一。又轉ニ貲農家一。耕ㇾ田馱ㇾ糞。體羸力竭無ㇾ幾而斃。棄ニ之壙野一。獸工剝ㇾ皮烏鳶啄ㇾ肉。竟莫ニ異於凡馬之死一也。願子垂ㇾ憐瘞ㇾ之。我有ニ良玉一。在ニ吾屍中背隆然處一。聊以報ㇾ子。寤而異ㇾ焉。往視果有ニ馬屍一。獲ニ玉大加ㇾ毬。所謂鮓答也。乃謀ㇾ所ニ以葬一ㇾ之。近里傳聞。損ㇾ貲戮ㇾ力。葬ニ諸里中觀音寺一。建ニ碑其上一。稱以ニ馬頭觀音一云。聞牛藏性任俠。好趨ニ人急一。意駿馬之靈。知ㇾ之來託也。可ㇾ不ㇾ謂ㇾ怪乎。余因ニ其請一略記ニ來由一。係以ㇾ銘。銘曰

生一獲ㇾ寵　可ㇾ謂ㇾ遇ニ伯樂之知一　死祀以ㇾ佛
鹽車之困彼一時

文政辛巳年春三月　　小島蕉園記

辛巳に夏六月二十七日。予この寫本を獲て聞くこと上にしるすがごとし。傳寫の誤多かりしを。意をもて僅に是を補ひ。點を加へて語勢もたすく。文は雄固に似ざれども。その事はこれ實なるべし（右五馬之三）

又一奇事あり。文政五年壬午の春三月二十一日。品川大木戸の西のかた。高輪の初めの町の海邊にて。荷を負はせたりける馬を。杭に繫き置きたりしに。空車を推すもの丶走りて。其處をよぎりしかば。この馬いたく駭きて。飛あがり〳〵兩三度狂ふ程に。ゆくりなく杭の頭に馬の腹を衝きあてたり。其勢ひやはげしかりけん。急。腹を突き破りて。背までぞ抜けたりける。馬は頻に苦みて。いよ〳〵狂ひ騷く程に。終には杭を推し折りけり。その時馬奴走り來て。杭を拔かんと立ちよりしを。なまじひに馬に蹴られて。阿と叫びつ丶仆れたり。見る人あわてまどふのみ。おそれて近かづくものもなし。とかくする程に。馬はやうやく狂ひつかれて。そが儘に死にき。馬奴はなほ半死半生なりけるを。その町より轎に乘せて。宿所へ送り遣しけり。こは目黑のほとりより。牽きもて來つる馬なりとぞ。予が相識れる豪家の老僕。この日高輪なる薩摩侯の屋舖へまゐるをり。親しく目擊したりとて。おなじ月の廿六日に。予が爲にいへり。これも怪有なる事にあらずや（右五馬之四）

又一奇事あり。松前の藩中にてしかるべき輩は。馬一二疋をもたぬはなし。しかるにともすれば。夜中に熊の廐に入りて。馬を啖ふことあり。殊にすぐれ

ふものも亦すくなからず。それ身の爲には。この一條を警とすべきのみ右五馬之二

又一奇談あり。武藏國入間郡河越の城下なる石原の里人に。增田半藏と云ふものあり。其性俠氣あるものなれば。人の爲には骨を折りて。たからをも惜しとせず。されば親に愛を失ひし不肖の子。良人に飽かれて去られし妻。或はわかうどの物あらがひしたる。或は男女の痴情によりて。相携へて奔りし類も。たのむと云へば身に引きうけて。必。和睦をとり結ばせて。その本にをさむるを。よにおもしろき事に思へり。しかるに文政四年辛巳の春。ある夜あやしき夢を見たり。そは一疋の良馬忽然と半藏が枕に立ちて。さながら人のもの云ふ如く。いとうれはしげに告げていふやう。それがし初は何がし侯の乘馬にて候ひしを。後故ありて馬商人の何がしに買ひとられ。遂に又賣りかへられて。果は農家の駄馬となれり。この故に。水田を鋤きては。泥に塗れ。糞土を負ふては穢に犯さる。百折千磨の艱苦によりて。いく程もなく斃れたる。わが亡骸は榎の木野に擡ぎ出だして棄てられたり。かくて屠兒に皮を剝かれ。鳶鴉に宍を啖はれて。只よのつねなる駄馬にひとしき死ざまをしつる事。耻かしく且歎くにあまりあり。願ふは和君愍みて。我がなきがらを埋め給へ。我身にはよき玉あり。そはなき骸の背築のあたり隆き所にあらんずらん。聊これを報とす。探りとり給へかしと云ふかと思へば覺にけり。半藏驚きあやしみて。半信半疑しながらも。天明(ヨアケ)てその野にゆきて見るに。果して馬の屍有り。いはれしあたりを掻き撈るに。既にして玉を獲たり。其大さ毬の如し。則これ鮓答なり。俗にはへいさらばさらといふ歟。西域の人。尤至寶とす。密呪して雨を禱るもの是のみ。半藏既に玉を獲て。里人によしを告げ。その馬の亡骸を葬らんとて議する程に。近郷の民傳へ聞きて。力を戮せ錢を集め。遂に石原の町觀音寺に葬りて。上に建つるに碑をもてし。稱へて馬頭觀世音といふ。碑銘は則同鄉の士。小島氏蕉園の創する所。今錄する事左の如し

馬靈誌幷銘

天地之大。庶物之夥。有㆓足㆑稱㆑怪者㆒。聖人特不㆑語耳。不㆑可㆑謂㆑無也。河肥石原里。有㆓增田半藏㆒。夢一

ず。馬ははやくも走りかゝりて。その肩さきにくらひ着きけり。こはそもいかにと驚き叫びて。牽き放さんとてすまひ(爭)しかば。ひとへ衣もろ共にしゝむらを喫ひとられけり。さばれしばしは苦痛を忍びて。とり鎮めんとしつれども。かなふべくもあらざれば。林の中に逃げ走りしを。馬は透さず追ひかけ來て。仰(ノケ)さまに蹴ひ倒し。又胸さきにくらひ着きて。頻にその血を吸ふ程に。ぬしは忽息絶えけり。折から旅ゆく獨の武夫。足輕體のものなりしといふその有さまを見てければ。林の中にわけ入りて。絆(ホダシ)のはしを取りあげつゝ。牽きはなさんとしたれども。馬はそが儘ちつとも動かず。眼中血ばしり人を射て。鬼燈(カヾチ)の如く赤かりける。氣色定にすさまじきを。すてゝゆかんはさすがにて。その刀をもて鞚ながら馬の尻を撃つ程に。終には鞚をうち摧きて。したゝかに砍りてけり。きられてすこし怯(ヒル)みし馬を。やうやくに牽のけて。絆を取りつめ。樹の幹に繋き留めんとする程に。あたりをよぎる里人等追々に來にければ。件の武夫は初より見しありさまを告げしらせて。馬を里人にわたしつゝ。林を出でゝゆきにけり。後に聞くにこの武夫は。二本松の藩中にて。何がしといふものなりとぞ。さる程に。農夫の子は里人等がしらせによりて。あわてまどひて走り來つゝ領主に訟へ。撿使を請うて。親の亡骸を葬むるものから。猶そのうらみのやるかたなさに。馬は則その處に生ながらにこれを埋めて。竹鎗をもて思ひのまゝに刺(ツキ)殺したりといふ。こは當時松前家の領分の事なりければ。老君の興繼に物がたらせ給ひしを。おのれも傳へ聞きしかど。書きしるさんともせざりしかば。今はその農夫の名も村の名も。みな忘れたり。こは文政二年三年と打ち續きたる事にして。おなじ郡の百姓の貧富。おの〳〵異なれども。等しく愛せし馬なるに。松五郎が遺愛の馬は。古主の爲に賊を禦ぎて。鄕に忠義の譽を得たり。又この農夫が愛せし馬は。故なく主を喫ひ殺して。五逆に漏れぬ罪を醸せり。おもふにこの件の馬は。その途中よりゆくりなく。疫熱の疾をうけて狂亂したるものなるべし。人にも亦かゝる事あり。牛馬にのみ限るにあらねど。畜生は猶測りがたかり。されば牛馬猢猻をもて。世をわたるもの多かれども。やすきに馴れて用心に懈り。動すれば。その害にあ

わが子の墓を發るを。よく知りたるは。奇といふべし。もしこの馬のなかりせば。誰か又我子の爲にこの辱めを雪むべき。能くこそしたれと。馬を譽めて感涙を拭ひつゝ。獨つら〳〵思ふやう。翌この事の趣を領主に訴へまうしなば。怨をかへすに似たれども。今この五人の惡者等は。鄰村の百姓にて。面を識れるものどもなるに。墓の土こそ掘りおこされたれ。いまだ棺は發くに至ず。よしなき罪を造らんより。我子の菩提の爲にもとて。その非を謐めて向後をいましめ。そのまゝ放ちかへせりとぞ。されば又松前の老君は。殊さら馬を好み給ふに。これらの由を傳へ聞きて。我其馬を得まくほりす。縱ひ他領の百姓なりとも。價は論せず買ひとれとて。簗川にをる家臣等に下知せられたりければ。家臣何がしうけ給はりて。箱崎に赴きつゝ。云々とかたらふに。傳兵衛つや〳〵諾なはず。千々のこがねを賜はるとも。この馬のみはまゐらせがたしと。言葉をはなち推辭まうして。其子の在りし時にかはらず寵愛しつと聞えたり。抑この一奇譚は。箱崎のほとりなる鐵醫正宅といふもの。松前家の太夫の子蠣崎生（字は三七）に消息して。云々と告げにければ。江戸の邸にもはやく聞えて。老君にもしろし召されし。次の年の睦月の末に。その臣長尾友藏（後に名を改めて所左衛門といふ）を以て。解に告げさせ給ひしかば。雜記中に書きつけおきしを。今又こゝに抄錄せり。おもふに。此松五郎が遺愛の馬は。かの宋の周密が齊東野語（卷七）に載せたりし。畢再遇が遺愛の名馬。黒丈蟲にも一しほ優りて。多く得がたき美譚といはん歟。よに人の臣僕たる者。忠臣節義の心薄くば。かの馬にだも耻ざらんや。この一條は勸懲の端なるべければ。はじめに出だしつ（右五馬之一）

こは又其次の年。おなじ州おなじ郡。簗川の近村なる貧民の駄馬一疋をもてる有り。（その人の名をわすれたり）かくてあら田をかへす日も。この馬をもて資けとし。又耕作のいとまある日は。薪を負はせ旅客を乘せて。駄賃をとること大かたならぬに。その馬素より柔順にて。主のこゝろに隨ひければ。世に亦二なきものに思ひて。とし來を歷る程に。その年（文政三年）の夏の頃。ある日又物を負はして近鄕に赴きつ。足を獲てかへるさに。家路も近くなりし時。その馬忽くるしげに一聲高く嘶きしを。見かへらんとするほどしもあら

一疋もてり。さればをり／＼乘り走らするに。その秣飼ふことも。又撫で洗ひする事も。よろづ人には任せずして。手づからするをたのしと思へり。その馬。既に五歳になりける文政二年己の卯の冬のころ。松五郎は病みわづらひて。その年の十二月十二日に身まかりぬ。享年二十なりけるとぞ。さは獨子の事にしあなれば。親のなげきはいふべくもあらぬを。貧しくもあらぬ民なれば。松五郎が器用調度のめでたしと思ひしものは。その亡骸(ナキガラ)ともろ共に。みな只棺に斂めつゝ。家を去ること二三町なる田の畔の墓所に送りて。かたのごとくに葬りけり。田舍は亡者を寺に送らず。その所持の田の畔を墓塋として葬むることも。此わたりに限らず。關東大かたはかくのごとし されば松五郎が遺愛の馬は。ぬしの不幸の事に紛れて。誰とて見かへるものもなく。纔に秣を與ふるのみ。厩に繫ぎ置きたりしに。その次の夜の子の時ばかりに。馬はにはかに狂ひたけりて。絆(ホダシ)をちぎり。戸を蹴はなちて。いづことはなく馳せ出でたり。あるじはさらなり。僕共もこの物音に驚き覺めて。こはいかにまさしく。馬こそはなれたれ。とく追ひとめよと罵り騷ぐに。眞夜中の月鮮やかなれば。松明を把るまでもなく。索を腰にし。棒を引き提げて。おのも／＼追ふ程に。馬はゝやくも松五郎が墓所のほとりに馳せゆきて。其處につどひし癖者等を驅けたふし蹈(フミ)にじる勢ひ特に猛くして。當るべくもあらざりけん。矢庭に四五人蹴仆されて。しばしは起も得ざりし折。傳兵衛が奴僕等は推しつゞきて。追ひかけ來て。此ありさまに又おどろきて。あたりを見るに。松五郎があら墓を發(アバカ)れたり。扨はしやつらが所爲にこそ。みな迯すなと罵りて。ひとりも漏さず生捕りけり。其時主傳兵衛もやゝ走り來て。驚嘆しつゝ。まづ癖者等を責め問ふに。つゝみ果つべくもあらざれば。なき人の棺の中には。物あまた入れられしといふ風聞に。惡心おこりて。是彼示し合せつゝ。竊に墓を發く折。この馬忽走り來て。其等を踶み仆したり。筋骨痛みて。阿容(オメ)々々と搦め捕はれたりければ。後悔その甲斐なけれども。命ばかりは助け給へと異口同音にわびにけり。傳兵衛これをうち聞きて。この馬わが子の恩を感じて。その別れを悲みけん。かの日よりして。はかゞ敷秣だも食ざりき。それだに奇特の事なるに。その身は厩に繫がれながら。今宵この盜人等が

深川六間堀町清兵衛店
源兵衛召仕
卯之助

両頭蛇

當申文政七年十一月廿四日夕七時頃。本所竪川通り町方掛り浚場所より。右卯之助土船乘人足に罷出候處。一の橋より二十町程東之方川内にて。土浚上け候節。鋤簾え掛り長さ三尺程有之候。兩頭之蛇を引掛申候。名主町役人立合見分之上。
筒井伊賀守殿え申立差出申候

背通り黒き島二筋あり
一ツの頭ハ余程小ぶりニ御坐候
此所穴有之便道と相見申候
鱗合め如此
腹の筋目も此所如図

右者數原清庵病用にて。本所竪川肝煎名主關岡長兵衛方え見舞蛇一覽書寫

右二ヶ條　海棠庵
乙酉仲春端八

予が藏弆せるこの壹貳の合巻一冊。いぬる壬辰の冬十二月より。今年癸巳の春夏の間にや。紛失したり。さりとは思ひかけずして。ふ月なかばに所要ありて。とりいださんとしつる折。あらずなりしに心づきて。家の内いへばさらなり。猶あちこちとあさりしかども。終に是あることなし。予は書を愛すること大かたならねば。貸進の折などには。そを心えるしつけて等閑にせざりしに。此ひとまきのうせたるは。あやしきまでにおもふものから。せんすべもなかりしを。いぬるとし。默老翁に。この書をかして。かしこにて寫しとゞめられしかば。そを又こゝへ備へんとて謄寫すること四日ばかり。やゝ足らざるを補ひ得たり。時に

天保四年秋七月二十八日　著作堂主人識

再云。この一二の巻のうせしを。甲午の春もくりなく見いだしたれど。前本は寫し宜しからざるもあれば。これをもて正本とす。この書知音の者。一兩人の外は見ることをゆるさず。まいて謄字をゆるしゝは。只二度のみなりき

○五馬　三馬　二馬　著作堂稿

陸奥の伊達郡箱崎の農民傳兵衛が子に。松五郎と呼ばれしものは。その性馬を好むにより。栗毛の馬を

ふなり。重ねて斷ずるにおよばず

澁川六藏源則休

猪飼豊次郎源又一　謹誌

此古暦は。元飯田町釘屋權兵衛所持す

右三ヶ條　　文寶堂

乙酉二月初八

○兎園會第二集小話　海棠庵識

下總國藤代村にて。八歳の女子が子をうみし事は。あまねく世の人のしるところにはあれど。年經なば疑惑もおこらんかし。よりてことふりにたれど。余が藩より公に告げし口達一通を。兎園の集に加へて。實事を永く傳へんとおもふのみ

文化九年壬申十月十日。御勘定奉行柳生主膳正樣へ

口達

土屋治三郎使者

大村市之允

拙者在所。下總國相馬郡藤代村百姓三吉厄害忠藏娘とやと申當申八歳罷成候者。去月十一日曉出產之處。男子致出生候段屆出候に付。年頃不相當之儀に御座候間。見分之者差遣。樣子相候糺處。同人儀。文化二丑年五月十一日。致出生四歳之頃より經水之廻り有之候得共。全病氣と心得罷在候。然所去秋の頃より。腹滿之氣味有之。醫師へ爲見候處。虫氣にても可有之哉に申聞。腹藥灸治等無油斷相用候得共。相替候儀無御座。當春に相成。彌致腹滿候に付。種々致療治候得共。同篇にて。猶又醫師にも相尋候處。病氣に相違は有之間敷候得共。萬一懷胎にても可有之哉。容體難決段申聞候。其後近比に相成。乳も色付。不一通樣子に付。彌懷胎に相違も有之間敷段。醫師申聞候間。右之致用意等罷在候處。去月二日夜中より虫氣付。翌三日曉平產。母子共丈夫にて。乳汁も澤山に有之由。且又とや儀は年頃より大柄に相見え候。出生之小兒は。並々之小兒より產髮黑長き方に有之。其外は相替候儀無御座候由申聞候。依之當人は勿論。兩親初三吉家內之者。其外村役人組合之者へも。委敷相尋候處。幼少之儀。是は如何と心付候儀も無御座候。尤疑敷風聞等も一向及承不申候段。一同申聞。口書印形差出申候段。在所役人共より申越候に付。此段以使者申述候

○兩頭蛇

○駿河町越後屋替紋合印の事

文寶亭

桃灯などに此ゑるしあり。これは江戸四里四方。丸で十分に商ひをするといふしるしなり

芝口松坂屋も。三井の持にて同店なり。暖簾につくる松のしるし。葉形かくのごとくなるは。三井といふ文字なりといへり

此しるしは。表方立番などの者の半臂などへ付くるゑるしなり。〇〇二つは二わはまはり〳〵は人といふ字にて。庭まはりの人といふ合じるしなりと。三井本店につとめ居たる。兵七といふものゝ話なり。されども。此印は。長崎西築町乙名荒木宗太郎といひしもの。元和八壬戌年。御朱印頂戴し。異國渡海の船を。金札船と稱したるよし。その船のしるしに此印あり。されば三井にては。後に考へて付けたるものなるべし

○銀河織女に似たる事

南亞米利加のうちに。「アマツウネン」といふ所あり。此所の山に女ばかりすみて。一年一度河を渡りて。男に逢ふといふ。その河の名を蠻語にては。「リヨデラタラタ」といひ。紅毛語にては。「シリフルリヒール」といふ「シルフル」は銀なり。「リヒール」は河なり。もろこし人のいひ傳へし銀河織女の事などは。かゝる事を聞き傳へたるにや。その山の邊に。男つねにかよへば。竹鎗にてふせぎて入れずといふなれば。阿蘭陀通事今村金兵衛話なりと。蜀山翁申されき

解。按。坤輿圖說。韃而靼附錄。亞瑪作搦條下曰。逈西舊有女國。曰亞瑪作搦。最驍勇善戰嘗破一名都。國俗春月容男子一至其地。生子男輒殺之。今又爲他國所併。今村生所話。亞瑪作搦女國事蓋據之也　著作堂追記

○元文五年の暦のはし書

世俗一晝夜と云ふは。明け六時を一日の初とし。次の明六時迄を終とす。月食をしるすことも俗間にしたがひ。右之通用ひ來れり。然れ共。元より子丑寅卯の四時は。次の日の處分なる故に。今より後此四時には。翌の字を附けて。是を知らしむ。並に二十四節土用も。皆右のごとし。自今已後此例にしたが

狐の所爲歟といひしを。なほこゝろ得ざりけん。尾さき狐はいかなるものぞと詰ひ問はれしに。ふたゝび答へて。尾さき狐は。上毛。下毛に多かり。戸田川をさかひとして。江戸には絶えて入らずとなん。その狀鼬に似て狐よりちひさし。尾はきはめてふとかるに。尾さき裂けて岐あれば。尾さきの名さへ負はせしならん。上毛。下毛のみに限らず。むさしといふとも。北のかたには此けもの稀にあり。ともすれば人の家につくことありといふ。そが一たびつきたる家は貧しかりしもゆたかになりぬ。しかれども。多くはその身一期のほど。或はその子の時に至りて。衰へ果てずといふことなし。そが既に憑たる家の。年々ゆたかになるまゝに。狐の種類も次第に殖えて。むれつどふこと限なし。もしその家のむすめなるもの。他村へよめりする事あれば。尾さき狐も相わかれて。壻の家につくといふ。こゝをもて人忌嫌せざるものなく。寇を防ぐが如しとなん。近ごろ伊豆の三島のほとりにて。尾さききつねをつかふものあり。この事江戸に聞えしかば。有司うけ給はりて。彼地に赴き。狐つかひを搦め捕りて。やがて將て參る程に。川崎の泊りまでか。夜毎に鼬のあまた鳴きしこと。夜もすがら絶えざりしに。六郷川を渡りては。さる事もなかりしとぞ。これらを合せ考ふるに。件の少女梅が奇病も。鼬にはあらずして。尾さき狐の所爲なるべし。しかれども。かの狐は戸田川をさかひとして。江戸へは絶えてより來ずといふ。げにさる事もあるべきにや。彼三島なる狐つかひも。川崎の宿までは。猶その狐のつきそひ來けんを。六合川をさかひとして。江戸へは終に得入らぬなるべし。いともかしこき御膝もとのおほんいきほひにこそあなれ。かゝれば件のあやしき病を。尾さき狐のわざなりとさだかにいふべきよしもなけれど。又かの狐をつかへるものゝ他鄕より來ぬる事。亦これなしとすべからず。さても此尾さき狐は唐土にもあるものならん。その漢名をしらまくほしとて。としころふみぞもあさるものから。未だ見る所もあらず。和君は二世の蘭學者なり。蠻名などをも考へてしらせ給へといひし事あり。例の蛇足の辨ながら。ありつるまゝにしるすのみ

乙酉如月初八　解　再　識

等痛候義も兩度有之而已に而。追日全快致候に付。先月晦日神田お玉池御用達町人川村久七と申者方に。奉公に指出し候處。兩三日過候得は。亦又氣分惡敷罷成り。食事も致兼候樣子に付。暇取。當月九日九時過引取介抱致候處。身内處々頻に痛候旨申し。甚苦み候間。痛候處捺り遣し候得共。乳之下皮肉之間に針有之。皮を貫き先出候に付。爪に而引拔遣し候得共。猶又同樣襟より（襟は猶項さいふがごさし）壹本膝より貳本。小用之節陰門より三本。九日十日兩日に出。何れも銹無之。絹縫針に有之。右之趣外科にも爲見得共。塲處惡敷候故。療治致兼候段申し候間。致方なく其儘差置候得共。いまだ水落之邊に（水落は猶鳩尾さいふがごさし）針四五本殘り居り候樣子に而。同廿三日朝同所より長さ二寸餘も有之候。木綿仕付針一本銹候儘に而。出候段むめ幷に同人母きん申し候間。右に付何ぞ當り候儀も無之候哉に承糺候得共。むめ儀小島町に罷在候節。次助宅座敷幷に二階等え小便致し候樣子に而。疊より床迄通し濡有之候儀度々御坐候に付。若もむめには無之哉と。疑心を請候儀も有之。且又新右衛門町え引越候後。夜分むめ臥居候側を。鼬駈わるき。又は同人蒲團之下え這入。夥敷小便致候儀。毎度之樣に相成り。追々氣分惡敷罷成り候段申し候。全く狐狸之所爲にも可有之哉。專奇病之趣。此節近邊取沙汰仕候に付。取調此段申上候

右最寄組合肝煎
神田佐久間町
名主　源　太　郎

かくておなじ年の六月廿七日。小濱の醫官杉田玄白。わが庵に來訪して。鼬の妖怪狐狸にひとしきなる事ありやと問はれしに。予答へて云。鼬の怪は平家物語に。治承四年五月十二日午の刻ばかりに。鳥羽殿にいたちおびたゞしく走りさわぎしかば。法皇やがて近江守なるかね（時に藏人）をもて。安倍泰親にうらなはせたまひしに。泰親すなはち今三日が中に。御よろこび幷に御なげきあらんとうらなひ申しけるに。はたしてその事おはしまし丶よし見えたり。この他。狐狸にひとしき怪談は。和漢に所見なしといひしに。玄白すなはち前件を擧げて。先月既にこれらの事あり。いかゞ思ひ給ふにやと。又問はれしに。予答へて。こはその鼬と思ひしも。鼬にはあらずして。尾さき

又按ずるに。いたちは和名鈔[部 群]に。爾雅集註を引く。鼬鼠[上音 酉]狀云々。今江東呼爲レ鼪。[音生]和名以太知。揚氏漢語抄云。鼠狼也といへり。いたちの釋名は。白石の東雅。契沖雜記にも見えず。按ずるに。いたちの言はきたちなり。又火たちにもかよふべし。イ‖とキとヒと連聲なればなり。さて鼬をいたちと名つくるよしは。此けもの。夜は樹にのぼり。或はむらがりて。氣を吹くときは。火氣天に冲ることあり。俗にこれを火柱といふ。この故にいたちと名づく。即氣立也。又火起也。鼬の火ばしらの事。本草綱目に載せず。李時珍は知らざりし歟。漏しゝ歟。大和本草には。この事あり。鼬の怪は。これらにすぎず。彼が羣居せし事は。平家物語に見へたり。さばれさせる怪にはあらず。しかるに近ごろ異聞あり。そはいたちにはあらじとおもへど。ちなみに附錄することと左の如し

文政四年辛巳の夏。江戸牛込袋町代地なる町人友次郎が妹。[名は 梅]十四歳奇病あり。このとし五月神田佐久間町の名主源太郎が。この事を官府へ訴へ奉りしうたへぶみの寫を見たり。今その實を傳へん爲に。俗文のまゝ謄錄す。かゝる事は。風聞聆とて。その事實なれば。向寄の肝煎名主より。町奉行所へうたへまうす事なりとぞ。是もそのひとつなるべし

牛込袋町代地金次郎店
友次郎妹
む め
巳十四歳

右友次郎儀者。當巳十七歳罷成り。時之物商賣致候者に而。店借り名前には御坐候得共。內實九歳之節より。奉公致し居。母祖母妹むめ三人暮しにて。平生洗濯物等致し。聊之賃錢を取り。漸取續罷在候ものに御坐候處。去辰八月中むめ義。下谷小島町藥種屋に而。松屋次助と申者。兼而懇意にいたし。無人之由申候間。右之者方え預け置候處。次助義同十月新右衛門町へ引越し。むめ義も連參候處。一體むめ義持病に癪有之候處。新右衛門町に引越候後も。何となく氣分惡敷罷成り。入湯致し候節。手足其外處々腫色付候義抔も有之。奇病之樣子に而。次助義藥種渡世致候事故。藥用も致し遣し候得共。同樣に候間。去辰十二月中。宿元引取候處。其砌腕幷に足膝

のねも。けむりけもの丶義にあらざるを知るべし。さばれ狸狢の類は。眞の睡りにあらず。そらねむりなれば。ねといはずといはん歟。猫とても熟睡は稀にて。多くはそらねむりなり。かれがいざときをもて知るべし。且けもの丶けの字反。コなりとのみいひて下のマの字を解かざるはいかにぞや。前輩千慮の一失歟。いと信じがたき説なり。按ずるに。猫をねこまと名つけしは。さるよしにあらずかし。猫はねう〳〵と鳴くけものなれば。ねこまと名づけたり。（猫のねう〳〵となくよしは。翁丸の段に見えたり）是もこまのコはケと五音通へり。マとモと是も音かよへり。コマはケモにて。けもの丶ノを略したり。是ねう〳〵と鳴くけものといふ義にて。ねこまといへり。（今も小兒は。猫をにやあ〳〵といふ。その義自然とかなへり）か丶ればねことのみいへばネけなり。こまとのみいへばケもなり。（の丶字を略せり）いづれも略語の中にことわり。背くといふべからず。然れども。ねこまといふにますことなし。又鼠の類なるつらねこのねこは。ねこまのねことたなじかるべくもあらず。こはよく考へて追ひしるすべし。又。鄙言に猫の老大なるものをねこまたといへり。この事つれ〴〵に見えたり。又くだりて貞享中の印本。猫又つくしといふ繪草紙あり。又今川本領猫股屋敷といふふるき淨瑠璃本もあり。このねこまたは。丸太にこたなどの如く。ねこまにたを添へて唱ふるにはあらで。猫岐（マタ）の義なるべし。猫の老大に至りて。變化自在なるときは。尾のさきに岐いで來て。ふたつに裂くることありといへば。老大にて岐尾なるものを。ねこまたといふ歟。こはまたくさとび言なり。又按ずるに。猫は貓に作るを正しとす。埤雅に。陸佃云。鼠善害レ苗。猫能捕レ鼠。故字从レ苗といへり。ねこまをなへけもの丶義といへるは。これより出でたり。すべて字體によりて。和名をとくものは附會なり。信ずるに足らず猫よりも。猶よく鼠を捕ふるのは鼬なり。その字鼠に從ひ。由に從ふ。按ずるに。鼠に從ふよしは。形狀をもてす。由に從うよしは。由は讀みて猶豫の猶如し。鼬もその性疑ふものにて。人を見れば走りつ丶。しば〳〵見かへるものなり。よりて由に從ふなるべし。譬へば狐の字の瓜に從ふが如し。瓜は讀みて孤獨の孤の如し。狐は群居せざるものなり。よりてその字瓜に從ふ（瓜は即孤なり）

いふとも。大かたの江戸人は聞きしらぬものなれば。鼢鼠の千載を歴たるなりとて。欺きたるなり。當時の巷談に。こは本郷なる麹屋の空室(アキムロ)より。夜な〳〵出でゝ。食を竊みしを。生捕りたるなりといへり。虚實はさだかならねども。空室の内なればとて。市中に栖むべきものにあらず。おもふに。好事のものゝ畜ひけん貓の放たれしより。麹屋の空室のかたに穴して。久しく棲みたるものにやあらん。遙に過ぎ來しかたをおもへば。こもはや四十八年のむかし語になりけるなり

再いふ。松蘿舘のつくしだちも程遠からねば。この小集をなごりとす。こはいとゞわかぬこゝちすなれば。又一二條を附錄とす。そはねこま。いたちの和名考。奇病の評等。即是なり

猸は和名鈔(毛群部)に。和名禰古萬なり。しかるに中葉より下略して。禰古といへり。枕草紙(翁丸の段)にうへにさふらふおんねこは云々といひ。又源平盛衰記(義仲敗屆の段)に。猫間中納言の猫に。間の字を添へたり。こは猫一字にてはねこと讀む故に。猫間と書きたるなり。これふるくよりねこまといはず。ねことのみ唱へ來れる證なり。しかれども。彼を呼ぶときは。上略してこま〳〵といふ事。枕草紙(これも翁丸の段)に見えて。今も亦しかなり。いづれまれ略辭なれば。物にはねこまと書くこそよけれ。契沖雜記に。猫はねこま。鼠子待(ネコマチ)の略歟。鼠の類につらねこといふあれば。ねことといふは略語の中に。ことわり背くべし。猫の性は鼠にても。鳥にても。よくうかゞひて必とり得んと思はねばとらぬものなり。よりて待とつけたる歟といへり。その書の頭書に。眞淵云。ねこはたゞ睡(ネフリ)獸(ケモノ)の略なるべし。けものゝけの字反。コなり。ある人苗の字につきて。なづけしもの歟といへるはわろしといへり。解。按ずるに。兩說共にことわりしかるべくもおぼえず。鼠子待は求め過ぎたる憶說なれば。今さら論ふべくもあらず。ねむりけものゝ義といへるも。いかにぞやおぼゆ。大凡。睡を好むけものは。猫にのみ限らず。狸貉。鼬の類(ぐゐ)みなよく睡るものなり。わきて陽睡をたぬきねむりと唱へて。ねふりの猫より。たぬきむじなのかたに名高し。是この和名に。ねもじをかけて唱へざりしをもて。ねこま

とりにては。鼯鼠の老大なるものを。モモンクワアといへり。モモンは。モミの訛なり。クワアはそが鳴く聲なるべし。又高老の義にてもあらん。物の老大なるを高老を歴たりといふ是なり。さてこのもみを。下野にてはもんぐわあと唱へ。又武藏にては。まみといへるなるべし。モミマミ音通へりかくて昔麻布長坂のほとりには。人家もあらで樹立隙なく。晝もいと闇かりけるころは。鼯鼠などの多く栖むべき所なり。故にモミ穴の名は遺れるにや。今も小兒を擔(オド)すに。もんぐわあといふ。鼯鼠の狀は。いとおそるべきものなればなり。マミ穴の名の高かりけるも。今はこの穴なしこれらをもておもふべし。縱その處に鼯鼠の棲みたる事はあらずとも。いとおそるべき穴なりければ。モミ穴といひけんかし。今もおそるべきものを。もんくわあといふが如しさるを後の人は。モをマにかよはして。まみ穴と唱へしは。是亦魔魅にもかよひて。おそるべきの義なり。且モミをマミといふよしは。今俗ののきりをのこぎり。わたゝびをまたゝびといふたぐひなるべし。しかるに。本草者流は。その物をこそよく辨ずれ。多くは古言に疎く。和名にくはしからねば。貒又獾をマミと訓せしのみ。そを當れりとすべからず。俗にいふマミは。鼯鼠の事なるを。遂にいよ〳〵訛りて。貒の事とす。かゝれば麻布なるまみあなを。眞名には鼯鼠穴と書くべし。江戸の地名を誌しゝものに。かばかりの考だもなきは。もとも遺憾の事にあらずや

附けていふ。安永七年の夏。信濃なる善光寺の阿彌陀如來。回向院にてをがまれ給ひしとき。兩國橋の東のつめにて。千年もぐらといふ物を見せたり。もぐらはウクコモチの訛りて。鼢鼠の事なり。おのれ尙總角のころなりければ。親しく目擊したりけるに。その形は小狗に類して毛は短く。薄黑に褐色を帶びたり。喙尖りて狸の如く。四足は鼢鼠に類して。人の手の指に似たり。その物鐵の條もて繫がれたるが。いと疲(ツカ)勞(レ)たるやうにて。頭だも得擡げず。築山の如くに積みたりける砂の上に臥したり。その折は。何とも思ひわかざりしを。後に思へばそは鼢鼠にはあらず。まことは豬獾にして。貒なること疑なし。見せ物師などいふものは。只あやしう珍らかなるを旨とするに。貒といふともマミと

水。和名を剿入してマミとす。李時珍云。貒猪也。獾狗獾也。二種相似而略殊。狗獾似小狗而肥。尖喙矮足。短尾深毛。褐色。皮可爲裘領といへり。かゝれども和名をマミといふけだものはなし。益軒若水の両老翁。或は猯をマミと訓じ。或は獾をマミと讀ませしは。訛をもて訛を傳ふ。世俗の稱呼に從ふのみ。今按ずるに。獾は和名鈔に見えず。猯は和名ミなり。和名鈔巻十八毛群部。猯の下に。引唐韻云。猯音端。又音旦。和名美似豕而肥者也。本草云。一名獾純歡屯二音といへり。只野必大が本朝食鑑にのみ和名鈔を引きて貒をミと讀めり。必大云。貒頭類狸。狀似小純。體肥行遲。短足短尾。尖喙褐色。常穴居。時出竊瓜菓而食。本邦處々山野有之。人多不食。憔言能治水病。予昔略見狀。然未試之。則難辨爾。卷之十一。獸畜部。狸の附錄に見ゆたりといへり。これらの諸說を合はせ考ふるに。近來世俗のマミといふけだものは。ミを訛れるに似たり。則猯なり。又田舍兒は是をミタヌキといふ。その面の狸に似たればなり。いづれにまれミとのみは唱へがたきにより。或はマミといひ。或はミタヌキといふにやあらむ。かゝれば麻布長坂なるマミ穴も。むかし猯の棲みたる餘波にて。その穴のありしにより。マミ穴と唱へ來れるなりといはゞいふべし。しかれども。猯をミタヌキと云は。よりて來るあり。貒はその頭狸に似たり。ミとのみは唱の不便なるによりて。ミタヌキといふ歟。又猯をマミといへるは。よりどころなし。いかにとなれば。猯に眞僞のふたつなければなり。よりて再按するに。かの麻布なるまみ穴のマミは。元來貒の事にはあらで。鼯鼠をいふなるべし。鼯鼠は和名モミ。一名はむさゝびなり。和名鈔鼯鼠の下に。引本草云。鼺鼠上音刀水反。又刀追反 一名鼯鼠。上音吾。和名毛美 兼名苑注云。狀如猨而肉翼似蝙蝠。能從高而下。不能從下而上。常食火烟。聲如小兒者也。かゝれば鼯鼠の和名は。毛美なれども。いとふるくよりむさゝびとのみ唱へたるにや。歌にもモミとはよまず。萬葉集第三に。「むさゝびは木ずゑもとむとあし引の。山のさつをにあひにけるかも」といふ歌あるを見ても知るべし。しかれども。古言は多く田舍に遺るものなれば。むかし關東にては。鼯鼠をさゝモミとのみいひしなるべし。その證は。今も日光山のほ

なかく＼の歌にて召しかへさるといへるにおはず

附けて云。來處誤まれるもの世に多かり。烏鵲橋の事。淮南子に出づとし。池魚の災といふ事。風俗通にありと記したれど。いづれも本書には見えず。又世にあまねく用ひ來りて。本據なき文字あり。佛典毎に紫雲の字見ゆれど。大藏五千卷。如來金口の說。嘗いはざる所。大人常に紅楓の字をつかふといへど。本唐三百年。名家詩聖の集。此字あることなし。おもふに。初學前人の誤を襲ひ。是等の事ゆるかせにすべからず。古人の文をかける一字といへども。來處なきものあらず。解。追記。近世の詩に紅楓の字をつかふは。近世の歌に。もみぢを紅葉とかくに倣ひしなり。然れども萬葉集には。紅葉とかきたるものなく。ふるくは黃葉と書けり讀書看ニ破萬卷一。下レ筆如レ有レ神。けだし虛語にあらず。予生來問ふ事を好むによりて。好問をもて堂に扁す。しかれども。あへて大舜の德を慕ふにはあらねど。切に問ひ近く思ふは。學者の急にする所ならずや。故に一疑を得るごとに。これを人に質し。其得るにあたりては。手の舞。あしの踏をしらず。猶その本據を得ざるもの大約一百條。題して好問質疑とす。明の陸儼山が傳疑錄。吾邦の貝原益軒の大疑錄に似るべうもあらねど。しるして博洽の君子に問はんとす。しかれども。いまだ稿を脫することを得ず。今こゝにその一隅をあぐるのみ

文政八年乙酉春二月八日

山崎美成識于好問堂北窓之下

〇まみ穴。まみといふけだものゝ和名考。幷にねこま。いたち和名考。奇病 附錄

著作堂主人稿

江戸麻布長坂のほとりなるまみ穴は。いと名たゝる地名なれば。しらざるものなし。沽涼が江戸砂子には。雌狸穴と書きたり。雌狸をマミと訓ずるは。何に憑れるにやしらず。こは記者のあて字なるべければ。論ずべくもあらねど。貝原が大和本草には。卷の十六。獸の部 貒をマミとす。篤信か云。マミ。タヌキとも云ふ。野猪に似て小なり。形肥えて脂多く。味よくして野猪の如し。肉やはらかなり。穴居す。其四足の指五つ。恰如ニ人手指一。獵師穴をふすべて捕レ之。行くことおそし。貛は貒の類なり。狗に似たり。並に穴居すといへり。又本草綱目卷五十一獸之二 貛の下に。稻若

たん爲なるに。このやうなるまつりごとにては。鳳凰の來るねんはなし。桐の葉を打ちおとして。秋のよの月をさはりなくながめたるがよし。見ぬもろこしの鳥は鳳凰なり。此歌の底意は。君をそしれる歌なるにより。さそらひしとなり。去る程に。書記の誦處へ歌友達見まひけるに。七月十四日の歌とて。かたり給ひしうた

なか／＼になきたまならばふる鄕に
かへらんものをけふの夕ぐれ

この歌の心は。命あるがつれなし。死にたらば。しやうりやうになりて。この夕にはかへるべきものをと。ふる里を戀ひしく思ひつる心ざし。いとあはれふかし。扨この歌。禁裏へきこえしかば。あはれに思しめして。めしかへされけりとなり

美成按ずるに。この故事人々常にいひ傳へ。日本古今人物史にも。徹書記傳に。嘗以㆓一首諷詠㆒。而左㆓遷洛外山科之地㆒。又因㆓一首之愁吟㆒。而逢㆓歸洛之喜㆒といへるも。このなか／＼の歌をさしていへるなり。又和歌詞德抄にも見えたり。草根集には此歌見えず。出處を考ふるに。百物語月苅藻集などに載せたれど。この書の時代をおもふに。百物語は。烟草の禁ぜられしを。このころのやうに書きたれば。元和の撰といふべし。月苅藻集のはじめに。于時寛永庚寅春書之。佚本寛永午春とありとしるしたれば。寛永の比の記とおもはれたり。再びおもふに。百物語は。やゝふるしといへども。俗書なり。月苅藻集は。世人曾てしるべきものにあらず。いづれも來處は定めがたし。又賑草(ニギハヒ)に。この事を載せて。「四の海をさまりがたきしるしにや。雲の上までのぼる白波 招月内裏へ盜人の入りたる時よめり。この類にて左遷せらる「なか／＼になき身なりせばふるさとへ。かへらんものをけふの夕ぐれ。流罪の內に。盂蘭盆によめり。叡聞ありてあはれに思し召し。召し歸さるとあるは。異なる傳にて。初め罪を得し歌かはり。次のなか／＼にの歌も異同あり。此書をあらはしたる佐野紹益は。本阿彌光悅が聟にて。縉紳家へもまゐりしものなれば。傳へ來れるものありしや。これにては世にいへる。なか／＼の歌にて罪を得。

宋之愚人得ニ燕石一。藏レ之以爲レ寶。周客聞而往觀掩レ口。笑曰。此燕石也。主人大怒藏レ之愈固

美成かつて此故事の來處を捜索するに。淵鑑類函に。筍子を引き。佩文齋韻府に韓非子を引けり。故に本書につきて撿するに。二書ともに載せず。まだ瑯琊代醉篇に。闞子といへるものを引きて證とすれども。闞子といふ書名。他書にも引用のものありやしらねど。四庫全書總目。又古今の叢書に名目だに見えざれば。其書いづれの世。誰の撰といふことさだかならず。また此故事をのせて。湘中記。書言故事を引くといへども。古書にあらざれば。證とするに足らず。こゝに於いておもふに。隋珠和璧の如きは。古書に多く見えたり。此故事古書に見えざれば。疑らくは。後世類書ひとたび謬りてしるしゝより。遂にその謬を襲ひ來りて。世人も亦みだりに。その書名によるとのみおもひたれど。文心雕龍を閲するに。魏氏以ニ夜光一爲ニ怪石一。宋客以ニ燕礫一爲ニ寶珠一。この二事を引きてもて喩とす。此書は梁の劉勰が撰する所なれば。その來れるも亦ふるしと云ふべし。魏氏が故事は。尹文子にいでたり。されば此故事も梁よりあがれる世のものに載せたる事は疑ふべからず。いまだ何れの書に出づといふ事をしらず

正月十四日。此兎園會をひらきし日。海棠庵にて曲亭子ものがたらふ事の次に。此故事をあげていへらく。足下燕石雜志の撰あり。解。追て按ずるに。燕石の故事は。後漢書應劭傳に出でたり。正字通。胡字注にも。應劭傳を引きたるなり。多貪の學生あまりに深く求めて。後漢書を忘れしはいかにぞやおもふに。その來處を詳にし給ふべし。願くば示し給へといひしが。後廿二日書牘の返しに。山海經を鈔出して贈らる。實に忠告の志いとうれしうなん。されど宋人の寶とする故事にはあらず。おのれ委しくも物がたらず。勞し奉るの本意なさに。今おもふよしを右にしるし侍る

徹書記のころは。ことの外亂世なりしに。たはふれに歌をよみ給ひしにより。さすらひ給ふとなり。その歌に

なか〳〵に見ぬもろこしの鳥はいでじ
　　桐の葉落せ秋の夜の月

此うたの心は。いまの世の政事あしきにより。世がみだれし禁裡にうゑ置く桐は。鳳凰の來儀をま

此くだりは。戯れに同じ類ひを記しつけて。けふのまとゐに諸君の笑具に充つと云ふ

文政八年乙酉春二月八日　好問堂記

蚘蟲図　奥州南部領　蒲野沢村　兵八　申三十九歳

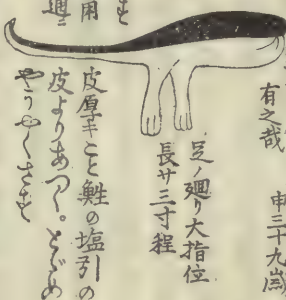
此首の長五寸位廻り八寸位

足より下一尺五六寸も有之末程細く蛇の如し

色黒く腹ろも色牛の膽を用ひ候処右之通ニ可有之哉

此所口ニ有之哉

足ノ廻り大指位長サ三寸程

皮厚キこと鮭の塩引の皮よりあつし。とゞめやうちくさもと

右兵八文政六未年二月比より相煩。同七申年五月十七日。晚より悉痛甚敷。六月二十日朝右之通之異物相出候。尤五月六日狂氣のごとく相成候。後水七八升呑候由

別紙

一當夏蒲野澤村書面之者。長々相煩居候而。別紙の通り之者相出に。今碇と不宜。此比脇野澤元良抔之療治を請申度由に而。此元へ罷出候に付。承り候處。右樣之物。いまだ左之臍より下に有之由。元は左右に在し處。右は下り候趣。其病へ鍼を四五本相立候へば。病人くるしみ　鍼抜候得者。病ひ背中之方へ隱れ候由に御坐候。先生方へ爲相見御承り可被成候。又一つ珍敷事は。三上左五兵衛殿覺居候。てうまん病に御坐候。當三月朔日より初は風邪に而引籠。夫より次第に腹大く相成。込り居候處。當八月十一日比より臍出。へその樣にはり出居。同月二十日七時。ほそ相破れ。濁酒色の水へくらげやうのもの加り。あるひは玉子のふはく\の樣のものも加り。其日一升ほど。翌日三四升。翌々日二升ほど。追々出候處。既に八升餘九升ばかり相出。右ほその破れ候處。碇と直り不申居候。是又爲御知申候得は。先生方へ被相咄御承り可然候

右奇病二條。乙酉正月二十八日友人堀尙平に得たり

美成識

○好問質疑

といふ。げびさうとはさもしき事。れがんとは正月中の節の食ものなり。まがきとは廛（ミセ）と落間のあひだに立格子戸の所をいふと。寫本洞房語園に見えたり。武野俗談後篇に。契情遊女は。その家々にて。かくし詞。相詞。又はふてう辭などありて。昔より客の聞きしらぬことを。女郎同士は。いひさやぐことにて。外へは何といふことゝ。しれわからぬやうにすることなり。松葉屋にては。聊も鄙しきふてう辭をつかはずして。瀬川が作意にて。源氏六十帖なりといふ。風流の事なり。今にかはらずその通りなり。その一二をだにしるす。はゝき木とは。間夫を云ふてうなり。「ありとは見えてあはぬ君かな」といふ歌の心なり。かゞり火とは。やりてと云ふ事なり。心の火を焼きたり。消したり。ものおもふと云ふ心なるべし。蓬生とは。たばこの事なり。夕顔とは。うらに來る客の事。「よりてこそそれかとも見めたそがれに。ほの〳〵見ゆる花の夕顔」といふこゝろなるべし。朝顔とは。後の朝のこと。雲隱れとは。きれた客の事。唐衣とはきのしやの事。葵とは錢のことなりとあり。今俗の隱語に。遺漏あまたあり。かぶ伎もの丶ハネル。ヒヤメシ。クニチキル。人形づかひの左平次。トン兵衛。ボツトセイ。幇間は。さがりと云ふ。カミ。セメ。シハラ。薦のもの丶テンポウ。オモタカ。家根フキ大工のヒヤカスなど。猶いくらもあり

柳里恭の獨寢といふ隨筆に。女郎仲間にて。こよひはよい客じや。あしき客じやなどいひて。物がたるに。唐音にて云ひたきものなり。といひしなり。長崎にては。内になしや。此ごろはこちのれもはくは。何してやら。すつきりれとづれさへなく。さりとは。權平でんにやくしんとがりじややらひやうあどないはなしにて。すまして置けりとぞ。その次に。皆さまがた。客の前にて用ひ給うて。よき唐音のかたはし記して。こゝにれく。嫖子（ヒヤウツウ）。けいせいのことなり。面的不好（メンサホハウ）これはきつう顔ばせのわるいとなり。看々（メンカン）。あれを見よといふこと。拿茶來（ナツサウライ）。茶をもてこいと云ふこと。酒兒（ツエンウ）。酒の事。老臉皮（ラウレンヒイ）。つらのかはの厚いこと。未曾去（ウイツヱンチヱイ）。まだかへらぬといふことなどしるされし。また閨中の隱語に。をしのふすま。羽をならぶる鳥。鶴のあさり。帆引ぶね。つながぬ舟。月でもり。さやの中山。甲斐がね。碓氷の山越。よろぎの磯ぶりなどいへることのありとしもきゝたれど。そのよし辯ふべからず。詳なる事は有職者に就きて問ふべし。閨中の隱語のわきまへがたきにはあらず。さればさゝ人前にて披露すべきなりは。是等はこゝにのせずもあれかし

⊠⊠ ⊠久。茶及び煙草店に。ノ○レ九⊖吉目ナこれらの記號をもて。數目をしるす。此類藥種屋。紙屋にても異なり。俗に是を通りふてうと云ふ。商家各々別に記號あるをもてなり。大路を魚或は野菜など荷ひ鬻るもの丶云ふもの。一をソク。二をブリ。三をキリ。四をダリ。五をガレン。六をロンジ。七をサイナン。八をバンドウ。九をガケといひ。一緡を一萬石。二緡五十錢を奴ともいへり。さて商買はもと。利をもて世わたる業とするものなれば。さる隱語もいで來るは。自らの勢にて。和漢ともに人情の常なりけり。僧徒に隱語あるは又ふるし。東坡志林に。僧謂レ酒爲二般若湯一。魚爲二水梭花一。鷄爲二鑽籬菜一。といへり。また一休はなしに。一休和尙の蛸をもとめられて。千手觀音蛸手多と云ふ頌を作られしも。その比の隱語なるべし。今も酒を唐茶といひ。蛸を天蓋といひ。妓童を善男子。衣服のなきものを誕生佛ともいへり。去りし比。山岡明阿の話とてきけるは。甲斐の身延山の僧徒の隱語に。女のことを花といへり。ある時一寺の門前を。女の通りけるを。僧の見てよき花のとほるはといへば。一人の僧たてぬかといふ。答へて。花瓶がないといひけるとかや。花瓶とは。金の事なりとぞ。かねなくては心にまかせぬといへることとなるべし。また盜賊の隱語とて。ある人のかたれるは。土藏を娘といひ。犬を姑といへり。たとへば某の所によき娘あり。見ずやといへば。一人の賊いへらく。しかなり。おのれさいつ頃。ゆきてあたり見んとおもふに。しうとめのいとやかましういひければ。折わろしとおもひてやみぬなどいへるとぞ。これらは作りまうけしものにもやあらんかし。されど。これらの事あへてなき事ともいひがたし。物に見えたるは。臥雲日件錄に。盜賊中有二隱語一。曰二止湯一。曰二合沐一。曰二錢湯一。錢湯者不レ論二貴賤一。各領レ所レ盜。曰二合沐一者。諸賊等分二其財一。曰二止湯一者。不レ論二多少一。所レ盜歸二賊中首一也とあるを見れば。その來れることも亦久しと云ふべし。また劇場にては。趣向を世界といひ。意地わろきを皮肉といふ。茶屋にては。物を小がひにするを久松といひ。鹽を行德といへり。また遊女の隱語あり。ぬしとは客人を始め敬する人をいふ。さと丶はやぼと同意。さはりとは月の不淨を云ふ。今は大かた行水

余が隣村多摩郡貝取村の百姓。雨後に家居のうしろなる山に登りて。薪を採らんとする處に。いかゞはしけん。片あし土中におち入ること。その深さ二三尺ばかりなりければ。いとあやしみて。其所を穿ちくだること。大よそ五六尺ほどにして。一大穴あり。穴洞縱横二間餘もあらんとおぼしく。その傍に小穴あり。亦六七尺ばかり。めぐりに小溝をかまへて。漏水を通はす備とせり。その遺棄する埋樋。みな石塔婆をもてつくりまうけ長三四間。その數凡四五十基。みななり出でたり。年歷を撿するに。弘安元年より。文明九年に至る。今を距ると五百三十有餘年。しかれども。金字の梵篋猶存せり。惜らくは缺損の者半に過ぎ。且文字磨滅。多くはよむべからず。その中全形のもの二基を摺打してかへる。實に當時の質朴を見るに足るものなり。思ふに。當時足利持氏。成氏等の爭戰止む時なき比なれば。此邊上州北越の官道にて。民家その亂妨をおそれ。貲財雜具などを。かくしゝ所ならんといへり

春登は和學を好み。萬葉用字格をあらはしたり

○隱語（かくしことば）

唐土に市語あり。委巷叢談に見えたり（なほ彼邦に隱語謎語等あれど。予が猜囊に載せたれば。こゝにしるさず）吾邦の工商おの〳〵その職業によりて。隱語あり。屋根屋にて熱き飯と。冷飯とをまじへしをふる板ませといひ。縫はく屋にて。から汁にむきみを入れたるを雪に千鳥といへり。これに似て非なるものあり。忌詞といひ。謎語といひ。方言といひ。記號といふ。是なり。今その一二をいはゞ。忌詞は延喜式に。神言の内外の七言を載せたればいとふるし。今も雨をおさくり。（滑稽雜談）寢るをいねつむ（世事談綺）といふは。正月の忌詞なり。謎語は。鑷子を南方といへば。不毛の意なり。（毛吹草）豆腐に紅葉を付くるは。かうえうにとのこゝろなり。（堺鑑）方言は出羽にて。アヰベチヤ。コイチヤ。ゴサモセチヤといひ。大和にて。テイテイゴザレ。ソウハツチヤカタツカ。ケンズイ。ヱツマツリといへる類にて　なほ詳には越谷吾山の物類稱呼に。諸國にいへるを載せたり。この因にいはゞ。都下にて無賴の徒の常言を目して。センホウと云。愚なるをはねと云ひ。錢なきをひつてんといへるなど。擧ぐるに遑あらず。これ一種の方言ともいひつべし。記號は荒ものに大へ △×╳

穂として。こがねにて備へ給へといふ。寺僧のこたへに。この贄神託よりおこりぬれば。さらに私の事にあらず。用途給しがたくば。やむるも心に任せらるべしとなり。禰宜等謀りしことなれば。さらばやめんとてやめたり。そのとし祭禮の日に。大木折れてあやまちなど有り。池の鯉も絶えにたれば。是たゞ事にあらず。神怒のとがめなるべしとて。おとゝし文政七年より。又もとの如くおくる事になりぬ。神威のいちしるきこと。あふぐにあまりあり。ことし正月十七日に。その鯉を料理せしとて。拙僧もまねかれて。賞味せし時。住持の歌よめとこはれしかばよめる

千代にこそたてまつらめと飯沼の
　神は契をたがへざりけり

となん有りける

○賢女

天文方高橋作左衛門。その父作左衛門。もとは浪花の同心なりしが。天學に長ぜしかば。兼ねて登用せられしなり。いまだ浪花に在りし時。庭に大なる柹の樹あり。秋ごとにその實をうりて。若干のこがねを得しとぞ。然るにその邊の若者ども。夜にまぎれてぬすむこと數しらず。よりてその守りにあるじいもやすからで。夜もすがら見めぐりなどす。ある時番より歸りて見れば。さばかりの大木を根ぎはより伐りたふしてあり。こはいかなることぞとおどろきあわてければ。妻のいふやう。わらはがきらせぬるなりと。何故にさはせしぞと咎めければ。さん候。ぬしは天學にて。必。家をおこさせ給ふべききざし見え侍り。されば夜ごとに家根にのぼり。霄漢をうかゞひ。深更に至り。そのうへにこの樹の爲に精神をつえやし給ふはびんなき事なり。此木あらずば本業專一にてよかるべしとおもひ侍るによりて。かくはからひしといひけるとぞ。いにしへの何がしらが妻にもおとらぬ女とぞ思はるゝ。これ今の作左衛門が母なり。さるに夫のこゝにめされし比は。よみの國にまかりし後なりき。かなしともかなしき事ならずや

文政八年二月初八　輪池

○武州多摩郡貝取村にて古牌を
掘出せし話　好問堂記

予が友なる沙門春登。ある時訪ひ來りて。ものがたらふことの次にいへるは。去りし文政六年癸未三月。

彼此に聞えしかば。日毎にもてあるきてをがますする程に。一日の賽錢三四貫文づゝあり。これによりて。大般若經のたやすく成就すべきいきほひなるに。なほ十卷二十卷の施主たらんといふものあまたあり。十一月に至りては。はや三百卷あまり買ひ得たりといふ。かゝれば程なく全部すべし。彼幸助は今なほ江戸にあり。逗留春をむかふといふ。うたがふものあらば。渠が旅宿にゆきて問ふべし

文政七年甲申十一月十五日燈下識

神田老逸　隱誉簑笠居士

幸助は。甲申の冬より旅宿を轉じて。神田鍛冶町繪の具あき人。大坂屋庄八といふものに寓居す。又はじめに大般若經勞緣の事を發起せし。幸助が叔父を淨泉坊といふ。原是久保寺村正覺院の沙彌なりしとぞ。正覺院の現住を廣昌といふなり

○神靈　輪池堂

いぬる朔日。耽奇會に行かんとせし折から。若狹國の妙玄寺の住持釋義門訪ひ來ぬ。折あしくて遲刻せしは。本意なしとこゝろせかるゝに。何くれとかたらふ内に。今日の料になるべきことを聞き得たれば。それにて思ひのぞめぬ。そも〳〵淺草報恩寺。もとは下總國飯沼に在り。開基を性信上人と云ふ。常陸國鹿島郡の產にて。在俗の時は。與四郞と云ひ。又惡四郞といふ。十八歲になりし時。法然上人に謁して。佛敎をきかんと請ふ。上人親鸞をして敎化せしめられしかば。たちまち發心して。剃髮染衣の身となり。親鸞左遷の時も隨身して。北國に在り。廿五年が間。かたはらを去らず。歸路に及びて。鸞師の命をうけて。飯沼にゆき。この寺を建立せり。そのとしの冬ゞ老翁來て聞法隨喜して。我は是飯沼の天神なり。師の爲に永く擁護すべしとのたまひき。天福元年正月十日。天滿宮禰宜が夢枕にたゝせ給ひ。師恩の爲にみたらしの鯉をとりて。報恩寺に贈るべしと告げ給ふによりて。鯉二口をとりておくる。性信聖人これをうけて。鏡もちひ二を奉りしより。恒例となれるとは物にも見え。世人もしりたる事なり。然るに。飯沼よりこゝにおくること用途少からず。禰宜等評議してやめむ事をはかり。二年申しおくりけるは。年ごとに費用たやすらかず。其寺よりも初

かけものゝおのづからにまろびれちて。横たはりければ。いぶかりながらいそぎあげ見るに。かけ物はなかば斫られて。佛の肩より血流れたり。こはいかにとばかりに驚き怪むこと限なし。さてあるべきにあらざれば。隣れる人々にもつげしらせて。うちかたらふに。こは幸助がうへに凶事ありけんを。御佛の示させ給ふならん。さればとて迎の人をつかはさんにも。さしてゆくへは定かならぬを。いかゞはせん。なほも利益をねがふこそよかめれとて。ちかきほとりにをる法師を招ぎて。阿彌陀經をよませなどする程に。幸助かへり來にければ。人みなその無異を祝して。云々と告げ知らするに。幸助聞きて且れどろき。且たふとみて。感涙を拭ひあへず。けふ上野にてありつる事云々なりと。說き示せば。扨はこの御佛の身がはりに立ち給ひしなりとて。人々はじめて靈驗利益の合期したるをさとりきとぞ

いぬる十月十一日。神田平永町なる本屋山崎平八。あはたゞしくわが隱居に來て。文化中やつがれが手代なりける清助といふもの。こたみ信濃より來にたるに。一奇談侍るなり。その故は云々なりとて。上

に玄るし、趣を物がたりして。けふなん彼御佛を。人々にをがませんとて。清助を招ぎよせたり。いざゆきて見給へといふ。しかれどもおのれはまことゝも思はざりしかば。まづこゝろみに老婆と下女とを遣して見せ。次にせがれをつかはしたるに。相違あらずといへり。よりて最後にゆきて見たるに。畫像は處々の俗家にある印行の佛像にて。三尊の彌陀なり。左右に觀音勢至下には月海長者夫婦の侍るもの。こは善光寺にて三四十文に賣り與ふといふ。田舍表具のかけ物なり。さてよく見るに。むかひて右のかた。表具のはずれより船護毫をかけて。阿彌陀の肩さきまで。よく切るゝ刃ものもて切りたるごとくはすに切れて。佛の肩より血のしたゝりし事一寸弱。横三四分なるべし。おのれが見つるときは。はや十日ばかり經たれば。その血にくろみあり。いかに見ても血しほに紛れなし。奇なりといふべし。件のかけ物は。幸助が曩に。善光寺にて三十六銅にて受けて。もて來ぬるものなれば。いと新らしく見えたり。幽冥の事は。得て論ずべくもあらぬを。かゝる奇特あるをおもふに。これ孝感のいたすところ歟。この事。

清助事

百姓　幸　助

申四十二歳

この幸助が（幸助は太田氏なり。その清助さいひしは。文化中。江戶の高家につかへし時の名なり。よりて江戶にては。清助さよべり）叔父なりけるもの丶世にありし程。同村正覺院月輪寺（號紫慶山。善光寺の行願所なり）へ。大般若經を寄進せんと思ひれこしつ丶。あちこちと券緣したれども。田舍の事なれば。事ゆかず。纔に六七卷を寄進せし程に。その身はまかりたり。これにより幸助は叔父の遺志を繼ぎて彼經を券緣せん爲に。今茲文政七年の秋。江戶に出で丶白壁町（金八店）紙商人安兵衞といふもの丶家を旅宿にしつ丶。逗留數日にれよびけり。その故鄕を去るときに。善光寺へ參詣して。如來ををがみけり。某云々の宿願あるにより。こたび江戶にれもむかんとす。わが母は齡既に八十にあまれり。ねがふは宿願成就して。かへり來ん日まで。母のつ丶がなからん事を守らせ給へと。念じつ丶。すなはち阿彌陀の畫像一幅を買ひとりたり。かくて江戶に至りて。旅宿の棚に。件の佛像かけ奉りつ丶。日每にをがみ。朝暮に燈明を揚げなどするに。その身他にゆきて。かへりの遲き日は。必御あかしをまゐらせ給へと。旅宿のあるじにたのみしかば。そのこ丶ろを得て。去かしてけり。か丶りし程に。九月晦日になりぬ。幸助はこの日。日本橋なる須原屋許（ガリ）赴きて買ひとりたりける。大般若經十卷ばかりを脊おひつ丶。東叡山に參るなほ元三大師の遷座ををがまんとて。程に。はや申の時ばかりなりければ。參詣の群集みちさりあへず。辛うじてをがみ果てたるかへさに。雪踏の尻をふまれて。うつぶしに倒る丶折。わがあとなりける武士の。彼も人におしたふされて臥したるうへに。まろばんとする程に。脇ざしの刃鞘はしりぬけ出で丶。幸助が肩のあたりへひらめき飛びて落ちたりけり。さりけれども幸に身を傷けらる丶に至らずして。只。經卷をつ丶みたる風呂敷の。左の肩にあたりたる所は。切れたり。いと危かりきと思ふものから。身に恙なかりしかば。ふかく恐れつ丶しむまでもなく。又そのかへさにあちこちとしる人がり立ちよりて。日くれて宿に歸りにけり。その黃昏に。宿なるあるじは彼幸助が。阿彌陀の佛像に御あかしをまゐらせんとて。不圖仰ぎ見つるに。佛像の

方をくりてなだらかにす。綱の摺れてきれぬ爲なり

一うなぢ綱。長さ二尺四寸餘。但。これをわかれてふたつにす。長さ各壹尺二寸餘。むすびめふたつなり

一手綱の長さ木環より別につくるもの。れよそ七尺九寸。上のひやうしを貫くもの。長さ壹尺九寸許。これらの綱は一すぢづゝなり

一上の方。ひやうしを繫く綱は。ふるき絹の裂をもて綱をわけて。是をまく馬の鼻つらにあたるところなるによりてなり左右へひらくこと三寸八分。この他はすべて圖中に見えたり

右の內。中二つの木環はさのみ必用のものにあらず。こは只綱のむすぼれぬ爲。又よりのもどらぬ爲なりといふ。しからば。これも有用のものなり。必なくばあるべからず

このひやうしの圖說は。拙著玄同放言第三集に載すべきものなり。この故にしばらく帳中の秘とすといへども。同好親友の爲に。こゝにかさねて略抄す

諸君ねがはくば。この義をもて。他見をはゞかりたまはせといふ

乙酉夏肆月初四　　著作堂解再識

北海隨筆に云。楓を蝦夷人はタラペニと云ふ。松前にてはイタヤといふ。本邦の楓より大葉なりといへり。下卷夷言の條に見えたり　これにてイタヤは楓なるよしをしるものから。猶心もとなければ。このごろ松前の醫官牧村右門訪來せし折。この一條を擧げて質問せしに。牧村が云。イタヤは即楓の事なり。その葉はよのつねの楓より大きし。その樹は松前に多くあり。蝦夷の地はいよ〳〵多かり。よりて松前にて薪にすなるは。皆イタヤなりといへり。よりてれもふに。大和本草に。その葉を圖したる大機オホカヘデのたぐひなるべし。又ひやうしの綱によるといふ。シナの事をたづねしに。牧村が云。シナといへるも木の皮なり。その皮をもて索にすれば。麻よりもつよし。シナは松前にて。文字には板に作るものあり。當否はしらざ侍りといへり今按ずるに。正字通。板音槃駅背上木以負物也。扸即扱扱或作笈さ。かゝればシナの木に扱さかたさ。その義にかなはず。當に拷に作るべし

○百姓幸助身代り如來の事

信濃國水內郡久保寺村

どふこともあるべし。程徑て不圖そのよしを思ひ出でつヽ。追て載するもの。左の如し

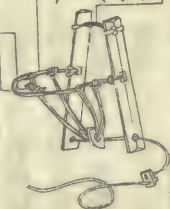
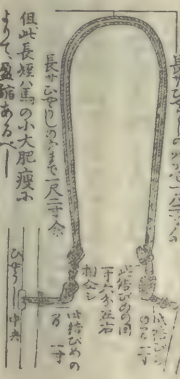
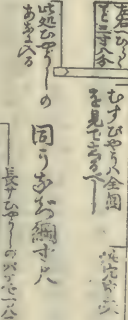
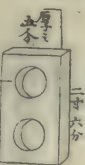
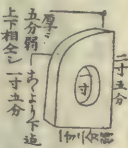
一ひやうしの事。松前にてはイタヤをして造るといふ

イタヤは。漢名いまだ考へ得ず。木蘭の和名イタヰといへり。木蘭。即。木蓮なり。これ歟。猶たづぬべし

長さ曲尺にて八寸六分。横幅上にて一寸三分弱。下にて一寸六分。綱をとほす穴三つ。そのうち。上と中央の穴は方なり。（中央の穴は。少し大きし）下の穴は圓なり

表は中を高くす。裏は平齊なり。裏のかたは馬の頬にあつればなり。但木の厚さ上の方にて五分なり。端にては二分五厘

一木環二つ造る所の木左の如し

内一つはそのかたち半扁なり。長さ貳寸壹分扁の肩あり。下まで一寸五分。綱をとほす穴の長さ壹寸。横六分なり。又一つはそのかたち方なり。長さ二寸六分。横幅一寸二分。木の厚さ各五分。綱をとほす穴二つ。その穴の徑り六分。穴の四

るもの歟。さらずば。當時鎧の草摺を馬のひやうしに摸したる威しざまありて。それをひやうし鎧といひしかもえるべらかず。いづれにまれ。安齋翁は。馬にひやうしをかけたることをしらずやありけん。そは千慮の一失なるべし。扨かの鷹三百首にも。義經記にも。ひやうしとのみありて。正字詳ならず。眞名には鏣子と書くべきにや。よのつねなるをくつわといひ。木鏣をひやうし（即。鏣子也）といひけん。關東の方言なるべし。しかれども。軍陣夜討のをり。人すら枚を含むといへば。馬には必このひやうしは。關東にのみ限るべきにあらねども。關東にては。軍陣夜討の時ならでも。鷹狩などの折。多く馬に是をかけたるなるべし。野作（エゾ）人は。今も裸馬に乗る故に。馬にはひやうしをかくるといへり。當初關東騎馬の形勢。これらによりてしるべし

ついでにいふ。南留利志五に。火の用心とよぶは。火あやうしといふことなり。本朝文粹に見ゆ。拍手木も火危木なりといへり。夜行翁は。（和名。火アヤフシ）和名鈔にも見えたれど。ひやうし木を火危木なりといはれしは信じがたし。易繋辭下傳に。重門撃レ柝。以待二暴客一。蓋取二諸豫一と見えたる。柝はひやうし木なり。こは唐山の制度なるものから。天朝にても。いにしへよりかゝる例はあるべし。しかれば。ひやうし木を夜行翁の撃つものとのみせんは非なり。そのかたち元來馬のひやうしに似たれば。やがて鏣子木といへる俗語ならん。物には柳子木とも書きたり。これらは後世文字ひらけしより。字をあてたるなり。愚按も必とはしがたけれども。こは試にいふのみ

右の考は。拙著玄同放言禽獸部。名馬の條下にしるしつけんと思うて久し。しかれども。その書。いまだ稿を續がざりければ。こゝに略抄す。遺漏。なほあるべし。早春俗事蝟集して。筆をとるいとまなきを。けふのまとゐにものせんとて。巳牌より机案にむかひて。亭午にははや稿し果てたり。かの兵貴二拙速一。不レ貴二久而後巧一といへることのこゝろにも似たらんかと。そゞろに自笑して。毫をとゞむ。時に乙酉春正月十四日なり。

瀧澤解識

鏣子の事。その圖なくば。この書を見ん人の思ひま

（小鷹の部。第二首にあり）此ひやうしといふものを。こゝろ得がたく思ひしに。奥の松前にては。馬に轡をもちひず。ひやうしといふものをかけて。乗るとありと傳へ聞きしかば。このごろ興繼をもて。松前老君に問ひまつりしに。老君すなはち家臣船尾吉藏といふものに。ひやうし一具をつくらせ。手簡一通をそへて。たまはせしその書を云く

此ひやうし拵候は。舊領松前より西在五里はなれ候て。エラマチ村の百姓なり。村役にて。一ト年中間奉公に出候。然る處。簗川へ引取り候節より。故郷へ不歸。當年迄江戸屋敷に勤居候。下々ながら志有之者故。當春取立大小さゝせ候身分にいたし候。當時は船尾吉藏と申候。此もの。村方に居候時は。馬十二ばかり持ち。これを渡世にいたし候。當地へ參り候は。三十一歳のときなり。當年は四十歳になり候。古風の荒ものとて。馬に乗り候は。裸馬子供の時より得ものなり。山谷を馬場同樣にこゝろ得候ものなり。此ものに拵させ候故正眞なり

ひやうしは。イタヤといふ木にて造る。縄はシナをよりて用ふ。イタヤもシナもこゝ許に無之故。麻にてよらせ候

ひやうしの事。これによりてはじめてつばらかなる說を得たり。今そのものを展覽に備ふるをもて。こゝに圖せず。諸君圖せんとならば。席上にてもうつし易かるべし。おもふに馬にひやうしをかくると。定家卿のころまでは。松前のみならで。關東にてはのこしありけんかし。よりて又按ずるに。義經記。土佐坊夜うちの段に。草摺のしころなるひやうし。鎧の札よきに云々といふことと見えたり。平義器談（卷下）に。これを引きてひやうし鎧。つまびらかならず。是は譽めたる詞にて。威毛などのことにはあらず。是は辨慶が馬に乗りて。土佐坊を召しにゆくときの有樣をいふなり。草摺のしころなるといふによりて見れば。馬のあゆむにつれて。ひやうしよく草摺の鳴音あるをいへるにや。古の鎧は草摺の裏に。革をも布をもあてねば。馬のあゆむにつれて。草摺れぞりて音あるべしといはれたれども。此ひやうしも。馬の足搔の拍子にはあらで。馬にはひやうしをかけ。さて又鎧は札よきを着たる。辨慶がありさまをいへ

○神主長屋惣八が事　　文寶堂

淺草元鳥越明神前に。神主長屋といふあり。此長屋をあづかり守れる惣八といふもの。年ごろ多病なるにより。くすしの匙をつくせども。させるしるしのなかりしかば。ある人のすゝむるまに〳〵。俄に宗旨を改めて。日蓮になりてけり。このもの元來淨土宗にて。その菩提所は。淺草なる小揚町の淨念寺なりければ。ある日病の間ある折に。淨念寺に赴きて。やつがり長病祈禳の爲に。日蓮宗にあらばやと思ひさだめ候。しかれども。改宗は只わが夫婦のみにして。子どもらはさる望もなし。かゝればかれらはいつ〳〵までも。貴寺を菩提にこそたのみ奉るなれ。この義をうけ引き給へかしと。亦他事もなくまうしゝを。住持は聞きて。一議に及はず。いはるゝ趣こゝろ得たり。更に仔細あるべからずと答へられたりければ。惣八ふかく歡びて。しからば今よりやつがらは。何がし寺(寺號を忘れたり)を菩提所にたのみ侍らんとて。まかり出にけり。是より法華を信仰して。題目をのみ唱へしかども。病はいよ〳〵たもりつゝ。ふるとし(文政七年)の大つごもりには。わきてあやふく見えけるに。みづから淨念寺に赴きて。過ぎつる比。しかじ〳〵と申して改宗したれども。病はおなじやうに侍り。かゝればいかではじめのごとくみてらに葬り給はれかし。やつがりくすしの力にも及ばず。今はよみぢに赴き侍れば。又さらに此事をたのみ奉らん爲に。病苦を忍びてまゐりぬといひ果てゝ。いでゝゆきけり。住持は竊にあやしみて。そのゆふべ人を遣して。惣八がりとはせしに。惣八はきのふ夕つがたに身まかりぬと聞えけり。住持は聞きて。且れどろき。さては來るはかの者の。なき魂にこそありけれとて。いとゞ不便に思ひつゝ。すなはちかれが願のまに〳〵。淨念寺に葬りぬ。こは今茲(文政八年)正月二日の事にぞ有りける　　文寶堂識

○ひやうし考　　著作堂手稿

定家卿鷹三百首。「武藏野の駒に付けつゝ引く繩の打ちならびたる小鷹犬かな」といふ歌の注に。關東はる馬上にてつかふにくつわの音高ければ。鳥よせぬゆゑひやうしといふ木をあてゝ。棄つるとなり。引繩とは。犬のやり繩の事。口のとまりたる犬なれば。鷹にならへるといふかと見えたり。(この書。第一春。第二夏。第三秋。右の歌は)

にして。思ひ込みたる事なれば。速にうけ引かず。互に些もひかずして。八日九日と過ごす程に。御代官所より嚴密に制し給ふて。しば〳〵なれば。雙方やうやく納得して。十日に伊香保を引き退きて。れの〳〵家路にかへりきとぞ

因にいふ。伊香保の宿に。八左衛門といふものあり「こは武太夫と同家なり。八左衛門は既に沒して。この時後家もちの世帶なりしに。いとかひ〴〵しき婦人なれば。手ばやく家財を取りかたづけて。みづから隙なく立ちめぐり。手代下女等にいひつけて。手ごろの石を多く拾はせ。是を二階につみのぼせ。又灰を紙に包みて。木鉢などにあまた入れたき。かゝる折には間者などの忍びよることもあるものなれば。みな油斷すべからずとて。庭の木の蔭。雪隱までもうちめぐりけりとなん。又阿久津村なる左市といふものは。去年十月江戸四谷にて。親の仇安兵衛を撃ちとりたる宇市が養父なり。此ものも樋口の弟子なりければ。かの日。伊香保のむれにあり。そのとき先生にむかひていふやう。此たびの先陣は。某に仰せ付けられ下さるべし。劍術未熟に候へば。先輩をうち越えて憚あるに似たれども。死にくらべをせん時に至らば。某に及ぶもの一人も候はじとて。廣言を吐きしとぞ

抑。樋口念流の初祖は。應永のころ。相馬四郎義定より傳へ來て。七代永祿のころ友松兵庫頭氏宗の門人樋口又四郎定次。皆傳へて樋口定雄まで九代。上毛馬庭村に在住して。世々劍術をもて家聲を落さず。世に稀なるべき名家なり。定雄は予と同甲子にて。今茲六十五歲。なほ矍鑠たり。予嘗てこの門に入りて。劍法を學びし故に。件の事の趣は。上毛なる同門人より傳へ聞きたるをしるすのみ。今この昇平の世に。輕薄浮靡のともがらの。義を捨て利に走れるも多かる中に。かゝる愉快の事もありきと。たろたろ思ひ出づるにも。老のねざめを慰めたり。さてもこれらの事の趣は。そのはじめはけしかりしに。おもひしよりは後いと安く。萬死を出でゝ一生得たる。果は笑ひのたねにぞなりける。こは初春のはなしにはめでたし〳〵といふべからん

文政八年の春正月　　　　　　　　梭江しるす

のなければ。内弟子なんどを引きいれて。車の進退制止のため。伊香保をさしてゆく程に。これを見。これを聞くともがらは。すは馬庭の先生も乗り出だし給ふはとて。なほあちこちよりはせ出でゝ。いかほの宿に集まるもの大凡七百餘人に及べり。かゝりし程に。七日になりぬ。この日千葉周作は。弟子どもをあまた將て。伊香保をさして來る程に。かの人この體たらくをその途にして聞きしかば。さうなくはすゝみかねて。その夜は野宿したりとぞ。五日六日のころよりも。罵りさわぎし事なれば。岩鼻の御陣屋へも大かたならず聞えにけん。御代官より差紙もて。新町宿なる本陣と宿役人を召しよせて。その顚末をたづね給ひ。又伊香保なる周作が宿のあるじ武太夫をも召しよせて。これ彼に問糺し給ひ。額奉納をとゞむべき旨を仰せわたされたりければ。事忽に無異に屬して。鎭まるに似たれども。千葉かたにても。亦怒りてかくはこたびの催を妨したる。樋口の奴原捨ておくべきにあらずとて。引間村なる浦八が宿所にみな〳〵集りて。談合評議區々なるよし。伊香保へ告ぐるものありければ。樋口も今この時に至りて。一あしも引くべからず。各覺悟あるべしとて。なほも伊香保の宿にをり。敵推しよせて亂妨せば。擊ち果たさんこと勿論なり。しかれども。こなたよりはやりて手ざしすべからずと。いと嚴重に下知しけり。はじめは只穩便に制せられたるのみなりしに。今この指圖をうけしより。おの〳〵得たりかしこしとて。先一番に赤堀の仙大郞が。ぬば玉の夜の月しるしにとて。白布の鉢卷におなじ色なる襷して。樽を床几に尻うちかけて。わが弟子どもを左右に從へ。敵や寄すると待ちたりける。その時の面。まゝひげに一軍の大將めきて。いと物々しく見えたりとて。人々後にいひ出でゝ。互に笑ひけりとなん。かくて樋口を本陣として。各すみとり紙をもてあひじるしとし。合圖を定め。列を正して。用意とり〳〵なしける程に。その日も既にくれしかば。あちこちの山林に。鐵砲をうち響かせ。ほら貝を鳴らしつゝ。推しよせ來つべき勢あり。事大變になりもやせんと思はざるものなかりけり。かゝりける程に。岩鼻なる御代官所より人を出だし。制止をかへて。雙方をれし鎭め。和睦させんとし給ふものから。大勢の事

なり

文政八年正月十四日　弘賢識

○伊香保の額論　松蘿館述

文政六年の事なりき。上毛高崎のほとりを徘徊し。一刀流の劒術者に。千葉周作といふものあり。その伎。鬼神にひとしといひもてふらして。弟子を集め威を逞しくする程に。おなじ州なる引間村に。浦八といふものありて。これと交ること淺からず。そが中には。念流破門の弟子さへあるをかたらひつゝ。その年の四月八日に。伊香保の湯前の藥師堂に。門人等の姓名を悉く識したる額を掛け奉らんとて。しめしあはすることありけり

この周作は。浪人なれども。實は若州小濱の家臣にて。由緒も正しく。且劒術の名人なれば。公儀にもしろしめされ。執政がたの御免を蒙りて。諸國修行に出でたれば。此度額奉納の事なれども。御内意を受けたりと僞りけるとぞ

この事同州馬庭の念流に。志厚かりける若ものども傳へ聞きて。恐るゝこと大かたならず。こはまたく念流を侮りたるこゝろより。かゝるわざをばするならん。抑馬庭村なる念流は。天正年中より相續して師家に代々達人出でその術を學ぶもの。今もなほ千人に下らず。他郷より。來つるもの。いかばかりの事やある。われ〳〵が手なみの程を見しらせずばあるべからずと。竊に示し合はするのみ。師家（樋口十郎左衛門と云ふ）へは。絶えてこの事をつげしらせず。その中にも赤堀なる本間仙太郎は。その身のとり立てたる身子凡六七十人を將て。伊香保の宿に推し登り。東は平塚田部井の鄕黨榮八が子（名を忘る）十五歳。なほ少年なりけれども。このものを頭として。大竹新兵衞つきしたがふ。この一むれは。四五十人おなじ所へ馳せつどふ。この餘。吾妻の里人等向寄々々（モヨリ〳〵）に頭を立てゝ。みな劣らじとぞ集りける。されば この伊香保の宿に。湯亭十二軒あるを。すべて大屋と唱へたり。その他くさ〴〵の商人等は。彼十二軒の支配を受けて。世わたりをするとなん。その大屋なるものゝ小樽（コクレ）武太夫と呼ばるゝは。こたび千葉周作が額奉納の宿なれば。只この所をのみ除きて。その餘の湯亭十一軒をみな借り盡して宿とせり。このよし馬庭に聞えしかば。樋口はいたく驚きながら。今さらとゞめんよし

にて

いさみませいと。大音にて申すと

御翠簾の內。大勢の女中の聲にて。笑ひ候事御庭まで聞え。女嬬もはやくかけでゑ申すあり頂戴ものは。御翠簾の內より。段々紙に鳥目其外色々ものをなげ出だされ。頂戴仕候。その內に金壹分五つ五色の糸にてよくからみたる一つ御坐候。是は中宮樣より賜候歟。其外。院の御所がた。右之通りなり。宮方公家方へは。御召御坐候得共。御問これなきときは。まゐり不申候といへり（附たり。素あしにて草履をはけり）

右者ある人の覺えし趣を書き付け侍りしとて。おこせたるをこゝにしるす

右一條これを友人の筆記中に得たり

文政乙酉上元前一日　　山崎美成錄

○吉　兆　　輪　池　堂

小田原侯は。むかしより吉事ある每に。必城の櫓に。鯛一打すゑてあり。今の侯に至りて。あるとき五六寸の鯛二枚あがりてあり。家臣これを見て。例の吉瑞なりとて。とりおろして侯にたてまつりしかば。料理せしめてめしけるに。はたしてめし狀到來して。顯職を得給ひき。是人間わざにあらず。かの人の所爲ならんといへり。又御先手頭山本原八郞は。家の紋鳥居に鳩なり。吉事あらん前には。鳩の來集まるとあり。もとは新御番にてありしが。鳩一羽家の內に飛び入りし事有り。いかなることにかと思ひあやしみける程に。やがて組頭になりけり。その〻ち又五六羽庭上にゐたたることあり。吉兆なるべしといひあへる程に。西丸小十人頭にすゝみたり。去年の冬。御手先になる前には。二十あまり來つゝ馴れたりといへり。これをおもふに白澤圖に。野鳥入レ屋。鬼名不穴（一作 不窳）と見えて。怪とせしも一概には信じがたし。予ははじめ國鏡の手傳に出でし時は。母の忌日にめし狀到來し。御加增のときも母の忌日にめしけるなり。この母は。予が十歲の時身まかりしが。その遺言を守りて。日夜覯じをるゆゑ。相感ずる所ありしにや。この事を記しゝ文を。故（モト）の吉田侯見させ給ひて。感心のよし仰せ下されし。されば親の守りは。現世のみならずなき後までもかくあれば。おろかにな思ひそと。わかき人に常にいひきかすこと

にて。細きけむりもたてかねし身の。わづかに二三十年にかくなり出で候事。天運にかなひ候ものに御座候

せき御ふたかた様　　和田たち

右傳原本のまゝにゑるしつ

乙酉孟春　闕　思亮

○禁裏萬歳之御式　　好問堂錄

此時所司代より警固出役等もなし。又諸人拜見もならざりし故。彼地にれいても誰も存じ申すもの覺なし。此に記すも亦その大概のみ

京都住　萬歳　小泉　豊後

毎年正月四日。紫宸殿の御庭にて舞ふ

裝束は三位烏帽子。（此烏帽子は古へより給はりしよし申し傳ふ）大紋着。（但し下は半袴のこさく裾短し）脇は紅の兩面の小袖紋（尤無）下に白無垢を着。小さ刀を帶す。舞ふ時は兩人ともに脱劒なり。歳若（サイワカ）は萬歳烏帽子素襖を着。（但。下は半袴の如く裾短し）纐（シラ）纈斗目（紋は丸の内に笹龍膽則小泉の家の紋なりとぞ）を着。刀脇差を帶す。物羯鼓中啓を持（但。豊後は羯鼓を持ちて。手にてこれを打つ。歳若はいづれも持たずして舞地なり）唄ひものは。委敷はしれず。大かた三番叟の舞に似よりしか。始には

「トウ〳〵タラリ〳〵ラッ

其次に。一本の柱より十二のはしらと申す。神々の御名を申し終りて

德若に御代萬歳と。枝も榮え益します愛敬ありける。あら玉の年立ちかへる日の朝日より。水も若やぎ。木の芽咲き榮えけるは。誠に目出たう候ける

北面の武士大紋長袴にて。御階の左にありて。（附たり小さ刀を帶び牀几を用ふ）勇みませいと大音にて申す

其後。うたひ候は空穂の猿の舞に。うたひ申す唱に似より候樣に見ゆ。（本のまゝ）又太子御誕生の事あり。

そのあとは年々承り候事に承りし

五位殿上人中啓を持參候て。御階六段目（御階十二段あり）にて北面へ御渡し。北面より豊後へ被下候。弓塲殿（此所土間や蔦をしく）にて休息仕。御料理御酒。御鏡餅頂戴仕。勘解由使青銅十二貫文。米一石持參にて。中啓と取替に相成るなり

中宮樣へ參り候とき。御庭にて女嬬と見えて。白小袖に袴を着。檜扇にて顏をかくし御階の上

兎園小説

瀧澤馬琴等編

海棠庵録

○文政六年の夏の末。駿州沼津驛和田傳兵衛といふものへ。娘より遣しゝふみの寫

豆州岩地村と申す所の獵師の子。齋藤重藏と申すもの。十四歳のとき。兄と共になりはひのため。家出いたし。しひたけを作り。其商賣にて處々ありき候處。おもひ候やうにもなく。兄は三四年すぎて。弟をすてゝ國に歸り。ふた親ともに暮しをりしは。三十年ちかき前の年に御坐候。然るに。去年豐後國岡中川侯の城下と申す所より。私方名あてにて。金子廿五兩岩地へ遣され候樣にとたのみこし候。私方にては。一切存せぬこと故。はるばると豐後より岩地へいかなる縁ある人にやと。早速書狀を出だし。飛脚をよび。相渡し遣申候處。その人のはなしにて。始めて相わかり。十四歳のとき。家出いたしゝ重藏のよし。岩地村にては。三十年ばかり便なき人より。かく書狀並に金子まで贈りし事なれば。夢かとばかり悦び披き見るに。豐後國にいたり。椎茸の製作をしらぬ所へつくりかたを教へ。國益なりとて。御領主の御かゝえになり。年毎に七十兩の金を賜はり。岡の岳山と云ふ所にて。大造に家を建て。追々仕合よく。三百餘人召つかひのもの有之。日々しひたけをつくり。串にさしやきて。大坂に出だし。春と秋とに二萬両餘もとりいるゝ身上になりし事。書載御坐候よし。當年五月上旬。亦復豐後より當地ゆきの金子百兩。私方へたのみこし候。いはち村は。至りて邊土にて。家もやうやく廿軒ばかりゆゑ。村中こぞりて稱譽いたし候よし。只今は重藏母ばかりに御坐候。當六月右重藏妻と共に母にあひに參り。氏神へ唐木綿の大幟をあげ候よし。誠にめで度珍しき事ゆゑ。あらあら申上候

かの重藏と申す人。當年四十三歳になり。只今にては山の中へ家を建て。その家つくりの大そう三百餘の手人をつかひ。自身は日々椎茸を作り候所を見廻り候に。のりかけ馬にてあるき候よし。妻は阿州のものゝよし。領主より苗字帶刀上下御免あり。まことに重藏もとは獵師の子

兎園小說第五集目錄　終

兎園小說目錄

の中に加へたしと乞はれければ。曾て篇中諸子の傳記をも見聞に隨ひ書き留め置けるもの。詳略のまゝ卷首に掲げ。且此書の來歷をも附記して授けぬ

明治二十四年七月

如電居士　大槻修二誌

文寶堂　龜屋久右衛門本姓實名共に詳ならず飯田町に住みて藥種を商ふ後に二代目蜀山人の號を襲げり文政十二年三月歿す年六十二歳

讓園　荻生維則字は式卿本姓は淺井氏なるが物徂徠の孫鳳鳴の養子となり年二十餘にして郡山藩の儒官を襲ぎ家の通稱惣右衛門を稱す文政十年正月徂徠百年忌に大に都下の文學雅藻の士を會せしといふ歿年未詳

遜齋　清水正德は通稱俊藏號を赤城といふ上野の人にして經學及び兵學に通曉せり嘉永元年五月八十三歳にて歿す案ずるに林門五藏の一人若くは此人か

乾齋　中井豐民は太田錦城の門人なりといふ其出處經歷いまだ詳ならず後考を待つ

琴嶺　瀧澤興繼は宗伯と稱す馬琴の男なり松前侯の醫員にて天保六年五月歿す年三十八

以上十二人を本員とす

青李庵　角鹿氏京師人　晁　樹　西原氏柳河人

以上二人は客員なり角鹿氏は著作堂の紹介にて西原氏は松蘿館の親族なりとぞ

この兎園小說は。本篇十二卷に外集別集餘錄を并せ。總て二十卷を全本とす。其本書は著作堂に傳へたりしが。天保十四年の歲末に臨み。故ありて伊勢の人小津桂窓に。金五圓にて讓りたりしよし馬琴が日記に見ゆ。余が藏本は疊翠軒藏書の朱印あり。この藏主は幕府旗下の士石川左金吾（祿三千石麻布古川町に邸あり）にて馬琴と交り殊に親しく。八犬傳第九輯の序に。琴嶺園人とあるは即ちこの人なり。天保十二年六月卒すと聞けば。桂窓に讓らざる以前に於て。全部を寫し置きたる者なるべし。余の藏書となりて既に十餘年なり。さて此書は。抄略の本。まゝ世に傳はりたれど。全本のものいと稀なるよし。伊勢の本は今尙小津の家に存せりや否やさだかならず。家藏の完本なるは殊に珍らしとて。年ごろ朋友の中にもてはやされたり。前年馬琴の外孫なる渥美正幹子に借し與へたりしが。子は全くこれを寫したりとぞ。又書中にて馬琴の手記にかゝる者を抄出して。同子が編纂せる曲亭雜記にも載せたり。此度吉川より百家說林

兎園小説は。瀧澤馬琴山崎北峯等の發意にて。文政八年乙酉のとし。同好の諸子と謀り。毎月一回互に奇事異聞を書記し來りて披講し。是年正月海棠庵の發會より。十二月著作堂の集會に終る。毎會の記事を輯めて一部十二卷となせるものなり。兎園冊子といへること五代史に見え。鄕校俚儒。敎ニ田夫牧子ニ之所ㇾ誦也とあり。この書の題名も此書より取れる者ならんか。會合諸子は左の如し

著作堂　瀧澤馬琴　嘉永元年十一月歿年八十二略傳既に出でたり

好問堂　山崎美成字は文卿通稱は新兵衛北峯と號す下谷長者町の藥商なり是年十月海棠庵の例會に馬琴と文學上の口論をし兩人の問永く絶交したりとぞ文久三年七月六十七にて歿す

海棠庵　關思亮は源吾と稱し東陽と號す書家關其寧の孫なり天保元年九月歿す年三十六

輪池堂　屋代弘賢通稱は太郎のち銓文と改む幕府の小吏なり俸祿十五俵御臺所人より起り十二年間に御右筆格となり後本役となりて祿百石を賜はる天保十二年五月八十四歲にて歿す博識にして藏書に富めるは世の遍く知る所なり

松蘿館　西原好和通稱は新右衛門立花侯の留守居なり是年三月其藩柳河に赴きしかば四月以後は此會に出でず元來好事家にて且當時留守居役の風習として驕奢遊蕩を競ひしが文化十二年四月幕府より風聞不宜國元蟄居の譴責を受けて歸國し天保のはじめ歿せりといふ

麻布學究　大鄕良則字は伯儀通稱は金藏信齋と號す越前鯖江藩士なり林祭酒に學びて松崎退藏（慊堂）葛西謙藏（因定）佐藤捨藏（一齋）等と林門五藏の稱あり（一藏は其人を忘る）文化の初め師命を以て學舍を麻市の古川端に開く因て城南讀書樓と稱す弘化元年十月歿す

龍珠館　桑山修理幕府旗下の士なり祿千二百石にて屋舖は本所三つ目通り富川町にあり此人は耽奇會の發起人なり

畫の氣韵は。遊心にもとづくと云ふに。かゝる拘泥なる事にて。向上の道を得べけんや。是らの畫法は。學び得るほど。俗了するなり。みな古人畫論の旨をも解せず。其上此方には物ごとに秘事傳授と云ふを好む風より。唐人もさることやあると思ひ。云ひ出だせりとのみ。又書をよみ遠きに行かざれば。畫に俗氣有りて遠意なしと。古人云へり。宋の趙大年の畵たくみなり。其人宗室にて。遠くいづることなく。山陵に朝する道すがらの景のみ有り。又書を多くよまぬゆゑ。俗氣ありと云へり。不レ行二萬里道一。不レ讀二萬卷書一して。畫祖となることはかたしと云へり。明の唐寅は。周臣が畵を學ぶ。畵格は周臣より高し。胸中に數千卷の書あるゆゑなり。又宋の鄭剛中は。唐の鄭虔と。閻立本を評して云。二人同じく名畫なり。鄭虔は學才高く。諸儒と列す。畵も興到りて。物象胸中にうかぶを寫す。立本は幼より畫のみたしなみ。文學のきこえなく。帝の苑游に召され。其身重位に在りながら。畵師と同じく技を獻ず。畫も自然に佳妙すぐれしと云へり。古人の其爲レ人多レ文。雖レ有二不レ曉レ畫者一寡矣。其爲レ人無レ文雖レ有二曉レ畫者一寡矣といへるも。文學の有無にて。畫に雅と俗のあらはるゝを云へり。又欲レ除二畫之俗氣一。多讀レ書宏二達胸襟一とは。書をよまざるは。胸中陰陋にて。圖外の高尚なし。つとめて。書をよむべきを云へり。嗚呼少年輩。咕嗶の餘暇。時々丹青に從事せんも。亦風塵に落ちざらんかし

畫譚雞肋　大尾

○宋成道は善畫にて。石に刻むことも妙なり。吳道子壁畫を縮めて刻みしに。眞畫のごとく有りしと。戴安道は善畫にて。又佛像を鑄ること妙なり。後漢の明帝は。天竺よりはじめて佛像をもとむ。古像は朴陋なりしを。安道は威信をまさんために。藻飾をくはへしとなり。又楊惠之は善畫にて。塑像をも妙にせしなり。後には壁畫をも塑にて作りしと云ふ。郭熙はまた新意を出だし。壁上に泥を凸凹にたゝきつけ。かはきたる時。かたちに隨ひ。山水樓閣となし。さいしきをくはへしとなり。是を影壁と云へり

塑の法は。土にて佛像にても作り。其上に絹をきせ。紙にてはりかため。うるしにてぬり。髹をくはへ。のちに土をぬきさる。これを摶換と云ふ

○陳の楊子華は。世祖の寵ふかく。禁中に在らしめ。みことのりなくば。畫くことゆるされず。宋の戴琬は徽宗に用ひられ。其ひぢを封じ。わたくしにゑがゝしめず。ゆゑに二子の畫。當時の人もとめえざりしとなり。又李成。鄭所南。王拔。文徵明諸子は。高介にして。權勢財力ある人のもとめにはゑがゝず。文雅の友にはゑがきあたへけるとなり。後世はあるひはみづから筆をとめ。其事を尊くし。權貴豪富の外は。其畫をえがたし

○畫學のこと。古人の論に。大人至士は。一家にかゝはらず。ひろく諸名家の。長ぜる所をあはせ見てあつめて。みづから家をなせり。一家の法則のみまもり學びては。たとひ其師の畫に似ても。皆病なりといへり。今も畫師の。我が畫に似ることなかれ。我は一應。法則ををしふるのみと云ふも。たま〳〵有りても。其師も。近世通俗の喜ぶ。畫法のみをつとめ學び。古名手の高き所を仰ぎもとむる心なきより。弟子は其ならひに化し。高き所は目に見えぬより。古名手の跡をみては。から流にて。合點ゆかぬ物なりなど云ひて。うちやりつひには。いづれも同じく。一家法に落ち入りとゞまるも多し。古人も。畫は古意を尊ぶ。古意なきはたくみなるも益なしといへり。古名手に目をつけ。學ばずして古意あるべき樣なし。又こゝに古を學ぶと云ふを。取りちがへ。甚しきは。俗書家にをしふる七十二點例のごときをこしらへ。筆法傳授など云へば。弟子はいよ〳〵拮屈なる筆づかひをして。古よりの家法と云ひ。

鏡端。已經顏索莫。漸覺鬢凋殘。淚眼描將レ易。愁腸寫出難。恐君渾忘却。時展二畫圖一看と題して。よせおくる。梵才は是を見。志意風流。情義纏綿をかんじ。やがて歸りて。相伴ひしとなり。又河中倡。崔徽は。裴敬中は使者として。蒲中にゆき。崔をよびて。相たのしみける。職事をはりて故鄕へ歸りしに。崔はしたがひ行くべき道もなく。うらみ悲しみ疾に臥し。自ら貌を寫し。崔一旦不及卷中人矣と題して。よせ贈りしとぞ

此方五條御は。ふかく思ふ人の。久しく音信なかりしかば。自ら貌を火焰の中にゑがき。歌一首書きつく「君を思ひなまく〵し身をやくときは。煙おほかるものにぞ有りける」艷情閨秀いづくにも傳ふ。然しながら。王穉登は。仇英が女の畫事を贊し。終りに律之女行。亦牝雞之晨といましめたり。書經に。牝雞は先立ちておしたをつぐるは。家のほろぶると有るより云へり。げにも女は中饋(チウコ)をつかさどる役にて。內を守り。食物。衣服の世話を第一とすべきに。詩歌連俳書畫にても學ぶは。風流とみゆれど其人自然に。高慢になり。男子の前をもはゞからず。さし出でしたりがほなるさま。婉娩聽從の意容なく。女德をうしなふもれほし。猻樓雜記に。管夫人の竹石卷に。吾竹房は。好嬉子の印をさかさまにおしたり。是はおしあやまりしかと云ひけるに。子昂見て女の身にて。かゝる畫事も。好嬉子の事ならぬと云へるいましめに。わざとかくさかさまにおしたるならんと云はれしとなり

○圖樣を粉本(ヱホン)にて。うつし傳ふるは。謝赫よりはじむ。隨便省レ工とて。早わざなれども。古にあらずと古人も云へり。此方の畫事を論じ。人へおくりし拙序有り。上略 輓近世有二探幽齋者一。其畫。衣二鉢周文雪村一。間峻鹿筆蓋喜陳子和張平山所レ爲也。務造二澹泊圖樣一。自爲二一家一。觀三其所二以導一。後進亦以摸二倣其樣一爲レ學。且禁出新意。是其俾下人率由上レ之。奉以爲二金科玉條一。則未レ免レ有レ弊矣。如二稚魯不レ可レ學者。專以レ此爲レ足。則其究。至下平據レ樣畫胡廬虎鵠之類ゆ狗鶩上。猶且不二自知一レ之。扼二臂其間一。自謂。可三以列二作者之林一。滔々者皆是。嗚呼探幽之垂二惠於后一。其誤レ人亦不レ尠矣云々

うさ紙畫より出で。日本人の繪色を用ふる甚れもしとそしれるも。かゝる畫法なるべし

○古人紙畫さいしきどうさ紙にては。墨色ひかりて士氣なし。ふくさ紙は。墨路外へにじむゆゑ。皂角(ソウカク)をつきくだき。水にひたし。煮てうはずみを取りて紙へ引きかはかし。明礬(メウバン)を湯にたてゝ。その上へ引き。かはかしてゑがけば。墨色ひかりなし。又墨へ。藥物を入れ製し置き。或は秦皮を水にひたし。墨ををすりなどしてふくさ紙へゑがき。にじまぬ法あれども。用ふべからず。ふくさ紙墨畫は。にじみて風致あり。さもなくば。皂角紙にてよろしきなり

○さきに死して。見しらぬ人をも魂をむかへ。鏡にうつし。像をゑがき。又畫圖。晝夜に所をかへ。入りかはり。或は鳥をゑがき。庭上の群鳥をよび。其外。佛像より光をはなち。舍利を生せしなど。書紀にも。僧傳にもみゆ。皆畫妙にはあらずして。邪術のたぐひなるべし。又鏡の面に。佛像等ゑがき。いかほどみがきても。その畫のきえぬ藥法ありて。古今醫統にもいづ

明の萬曆間に。利瑪竇(リメトウ)といふ者。西洋十萬里をへてきたり。天主敎十字架と云ふことをおこなひ。君民の心をみだりしことみゆ。術書も是らの屬類なるべし。範天圍。龍尾車。遠鏡。候鐘(トケイ)。天琴等の奇器。此時はじめて持ち來りしと云ふ。又利があらはせる。天主實義。友論等の書ありと云ふ

○生(シヤウ)うつしはれらんだに過ぐるはなし。しかるに本所五百羅漢寺藏物。花鳥二幀のごときは。今はかの土にもゑがき得ずと云ふ。油にて繪具を和し。紙にはゑがゝず。絹布にゑがくゆゑ。唐土にては蠟絹畫とよぶ。慰遲乙僧は唐時の竺法畫師なり。遠く望めば。畫の內もり高く肉ありて見えしと云ふ。又竺畫には。人物まづ五臟をゑがき。後に全身をゑがき。色どり日に映じて。穩然としてはらわた見ゆるも有りとぞ

○加賀のそめ畫はたくみなり。をしむらくは。圖樣佳なるすくなし。唐土には染畫は聞かず。綺綉刺綉(オリモンヌイ)。克絲(クミモノオリ)等は。說苑諸書にも出づ。此方近日。かけもの畫をおり出だして妙なり。上古は中將姬のまんだら。綺綉のたくみなり

○濠梁の南楚才が妻。瑗薛は楚才旅游して。かへらさりしかば。自ら容をゑがき。欲レ下ニ丹青手一。先拈寶

だし。壁にかけ。風を入れ。匣に封じ。濕氣をよけてよし。此二候すきなば。開きかくべし。古畫は。三五日ほどづゝかくべし。久しくかくれば。濕を引く。卷紐も。やはらかなるを用ひ。和らかに卷き收むべし

○此方にて。藤黃を雌黃と云へども。雌黃は石なり。すりて用ふ。雌黃は雄黃と對せし名なり。雄黃は雞冠石とも云ふ。唐畫には。雄黃。雌黃。藤黃みな用ふ。又大赭石も此方上古は用ひしなり。山水淺絳には。赭石を用ふべし。燒上は色俗なり。唐土には。山水の松樹等には石黃を用ふることあり。又綿臙肢。藍靑。藤黃を。此方にては。水具とてにかはをくはへざるゆゑ。ふくさ紙に畫きしは。久しくなりては皆色ぬける唐土はいづれも。にかはにてとく。にかはあれば。臙肢も。表背の時にじまず。又煙煤此方に用ひず。油煙にても。松煙にても。上へ皿をればひて。烟のとゞこほりたるに。にかはを和して。烏の黑毛。蝶の翅等に用ふ

綿臙肢は。繪事指蒙には。梗木をせんじ。その汁を。わたにひたして作ると云ふ。天祿識餘には燕脂とは。紂は。紅藍花にてべにを作らしむ。燕國より出づるゆゑ。かくよぶと有り。又藤黃は。藤花の蘂にてつくると云ふ。此二品は。何物なるを知りがたし。近時此邦にて。作れる。綿臙肢あり。色美ならざるなり

○畫に刷毛を用ふること唐人にはなし。排筆よろし。此方にて畫絹をれらぬ前は。どうさ紙へのみゑがきし時は。排筆をばしむるゆゑ。はけをかへ用ひたるにや。又韓退之。熟紙なきを謝せる文を見。紙畫も。生紙を用ひず。右はみな。膠礬紙なりと云ふ人あり。熟紙とは。擣やはらげたる紙なり。唐六典にある熟紙匠も。打紙匠なりと有り。又川麻紙を。黃色に染めたるは。詔勅に用ひしなり。故に黃にそめぬを。白麻と云へり。澄心堂紙も。水に浸し。槳碓して柔なりと有れば。今の毛紙とはことなり。今の毛紙は。ふくさ紙にてゑがきてよろし。六朝にもふくさ紙へゑがきしなり。絹はどうさを用ひしに。雲林の徒。生絹へゑがき。畫師の流を避けたり。唐の章孝標。畫屏風に。雨滴膠山斷。風吹口海秋はどうさなり。此方中葉どうさ紙にゑがく。やまと松等は。ど

今は周濂溪先生の圖に逢ありとて。いみ嫌ふ。虎は千里行きて。千里歸るとて。婚娶筵には。いむなどいへり

虎は百出づれば。道にまよふゆゑ。遠くは出でずと云ふ事。倦游雜錄にも出づ。千里かへることはなし

○九朽一罷と云ふは。人物畫は體容とゝのはざれば。戲筆と云ひて。品に入らず。ゆゑに朽を度々用ひ。頻をとゝのへさだめて。後に一たびうすゞみを用ひてゑがきはじむるを。かく云へり

朽はやき筆なり。土筆とも腐筆とも。柳炭とも云ふ。唐人は。石筆のごとくに作りて用ふ。絹をはるわくをば幀と云ふ

○書畫の裱具を美にせしは。范曄はじめなり。軸は金銀珠玉はおもくて幅を損ず。角は濕を引く。檀香よろし。香氣にて自然に蠹をさる。唐時には紫綾標首紅綾引首。珊瑚軸にて。藏經のごとく有りしと云ふ。奝然は年代記。孝經等を。宋の時もち渡りしに。金縷紅羅褾。水晶軸なりしとあれば。此方は此時も猶唐時の好尚にならひしにや。宋人は。奝然が年代紀により。此方洪荒よりの帝統をしるせるは。文獻通考にも載せたり。又康熙字典。奝字注に。日本僧奝然を引けるも奇なり

○古は竪幅なり。橫幅は米元章はじめなり。みじかくして人のかたにさはらぬ爲にせり。挂幅の風帶は。もと燕の巢くひて。泥などにて。けがさんをおそれ。白紙を二條たれ置く。燕をおどしゝなり。夫ゆゑ唐土にては。驚燕と云ふ。又屛障等に。丸角團扇。いろ／＼にたちわけて張るを。氷裂碎紋と云へり。又唐畫にすだれのごとき物にて。卷物をまきたるをゑがく。是は帙なり。卷軸は不便なれば。唐時よりとぢて葉子とせり。書册の上をつゝめるをば。外函と云ふ。又まがれる木の上に書をのせてよむ古圖有るは。經槕なり。漢李尤。經槕銘も有るなり。香爐も几案の外は。まがれる枯樹の上に置くなり。古圖にも多し。杜詩にも其ことといづ

○畫は度々裱具すべからず。又度々あらふべからず。畫神を損ず。かたはらのそこね有るも切りさらずしてこまかにつぎなはしむべし。又書畫はつねに風のとほる所にたくはふべし。五月。八月前には取り出

以後。畫史にも是を用ふ。文才つたなければ。畫意も俗なり。元來詩畫一塗にて。詩を有聲畫と云ふ。畫をば無聲詩と。古よりも云へるなり

○喬鍾馗。喬三教。趙樓臺などいへる畫人有り。つねに鍾馗一圖。三教樓臺ばかりをゑがくに長ず。夫より傍人も。名をばよばず。かく名つけよびたるなり。唐人は。專門畫とて一しなの畫に妙なるおほし

此方專門畫家は。鳥羽僧正の人物。光琳。宗達の草花眉間毫珪甫の。水のみ猩々。瀧の鯉。馬渡高雲の達磨。古磵の大黒神。松花堂の布袋等なり。近時は梅竹山水等にも。專門名手おほくみゆ

○張操は。左右の手に筆をもち。樹枝をゑがきわかてり。王輝は左手にてゑがく。人々左手王と云ひしと。戚仲趙廣も。左手なり

此邦左轉の人ありて。善書はたまたま聞けども。畫はきかず。劒工。彫工に。左某有るは。左手と云ふことにや。又は姓なりや。京師の僧。聞中禪師は。高儒皮の法をえて。朱印彫刻にたくみなり。左手なり。向きに二三顆を乞ひ得たり。甚精良なり

此方にて手とばかり云ふ。又手跡墨蹟と云ふは。書のみの事と思ふ人あり。さにはあらず。唐山にては。誰某が手。又は誰某手跡。墨蹟と云ふは。書にも畫にも通じて云ふ。書籍にもしるしありとしるべし

○眞行草と云ふは。書家の名目なり。畫家には畫様によりて別に名有りて。眞行草とは云はず。又細巧人物畫をみて。是はしま繪なりと云ふ人有り。島繪とは。くまとるべき所をも細筆にていくらもすぢを引き。しまもやうの如くにせる畫の事にて。あらんだ板繪のたぐひを云ふ。細巧畫の事にはあらず

○畫は。聖賢。道釋。人物の勸戒あるを第一とす。山水は。無窮の趣ある尊ぶ。畫家十三科も此次第あり。其餘。士女。花果。貴游。戯閲は雅玩にあらずと古人云へり。貴游とは。高貴豪富の宴游等。繁花なる圖なり。戯閲とは。一興ありてをかしきおどけたる圖なり。是らは俗人の目には。はづみたるなどゝ云ふ。もてはやすことなれど。意象いやしくて。雅人のもて遊ぶには。ならぬを云へり。此方にも。三四十年前は。三幅對の中に。道釋も用ひしなり。

房廊すべて八千五百餘ありとぞ
○畫成りて名を題するに。一幅の內に恰好の所あり。落欵其所を失すれば。全局を損すと。畫人云へり。又畫ごとに花押を署せしは。徽宗なり。[illegible]。いづれにもかくのごとくに有り。程史には押字は晉よりはじまると云ふ。然るに唐の文皇の時。群臣の奏は眞草を用ひ。名は草を用ひず。草を以て花押とすとあり。此時にても形摸はなさず。今のごとく成りしは。又のちなり。集古錄。癸辛雜識等にも五代已來。帝王將相の署字あり。あはせみるべし
○趙子昂は。歸去來辭を書し。餘紙へ既書歸去來。餘興未レ盡乃作二竹石一。淵明亦當レ愛レ此耶と書し。竹石をゑがきそふ。又洞庭兩山の二小幅騷語を處々へ題す。文徵明は草千文を書し。後に撥旣の圖を附す。千文に。稽琴旣嘯あるゆゑなり。畫は書より。書は畫より。たがひに注脚となして致あり。さもなく拙き詩を題し。あるは見まねに。みにくき字を書きつけたるは。却りて畫のきずと成るなり。自題非レ工。不レ若レ用レ古。若非レ解。不レ若レ無レ題と古人云へり。書筆つたなからんは。沒字碑にならふべし

此方上古の畫人。印を用ひぬは。唐時にならへり。宋以來。名印明らかに署す。此方も中葉。宋元畫を學び印をも用ひしなり
○米氏畫史に。たから有りて人の目をかりて。古書畫をもとむるを。好事家と云ふ。其身眼力ありてこのむを。賞鑒家と云へるなり。沈氏筆談には。畫の善惡をしらず。人の言によりて。取予するを耳鑒と云ふ。甚しきは。繪の上をなでゝ。指にさはらぬを喜ぶのたぐひを。揣骨聽聲と云ふ
○唐土にて。畫師をあらたにあげ用ふるに。試目とて。詩騷等の句を。題としてゑがゝしめ。其才をこゝろむることなり。詩句に。行鎖橋邊賣酒家の句に。竹林上へ酒帘ばかりを少しあらはし。行鎖の二字を活し。踏レ花歸去馬蹄香に。馬蹄に蝶をそへて。香の字みゆ。嫩綠枝頭紅一點。惱人春色不レ須レ多に。危亭外綠柳相映じ。欄干に美人をゑがく。解語花の意見え。胡蝶夢中家萬里。杜鵑枝上月三更に。蘇武羊を牧ひて臥したるに雙蝶をそへ。樹上に。子規午月をゑがく。皆才氣秀拔にて首選に入りしなり
試目とは。學生の文才をこゝろむる題目なり。朱

紫竹は南海或は蜀山中に生ず。方竹は呉越山中。武陵桃源にも生ず。此方には薩摩より出づ。今は都下にもまゝみえて。朱睡公の嘆惜を勞せず

○墨竹。根より梢へ。一筆にゑがきのぼせ。はじめより節々をわかたぬは東坡なり。米元章はじめて坡公を訪ひしに。公は石竹をゑがきあたふ。節をわかたぬを尋ね問ひしに。竹のはじめて生ずる節々に意なしとこたへられしとなり

○劉松年は。東坡の畫を學ぶ。其人奇を好み。俗にしたがふ事をなさず。印にて巨濟震子名松老者の八字をほる。巨濟は劉涇が字なり。涇の子なり。米元章は名の印に米芾氏と鐫りたり。畫學博士米芾之印は。篆を用ひず。隷にて刻めり

字に氏の字をそふるは。字を以て氏とするよりなり。芾は名なり。氏の字そふべからず。米も異をこのむ人にて。知りてかく刻ざむ。此方畫家の印。杜撰なるもみゆ。印中の字。五字とせるは。漢武の時なり。其後は四字とす。私印は。官印とはことなれば。物ずきなるもあれども。大がい姓一字。名一字ならば。之の字をくはへ。何々之印と四字にすべし。姓名にて三字ならば。之の字くはへず。何々印と。四字なるべし。字と號との印には。之印の字なかるべし。又字の印はあざ名ばかりか。又は字何々とか。氏の字くはへてか刻むべし。字曰二何々一とほりたるは。唐人にはなし。字レ余何々と。余の字をくはへたるは有り。楚辭に。字レ余曰靈均と有るによる。また宋元人の尺牘に。墨印藍印あり。喪に居て平日の朱色は意に安からず。古人敬謹の心より藍墨にせり。此方の古畫にたまたま墨印あるは。喪中の印を見て。あやまりならひしにや。もとより喪にゐて。ゑがくほどの人は。敬謹のこゝろあるべきやうなければ。墨印を用ふべきにはあらず。唐人も藏物の印記には。墨印たま〱有り。又新渡の印譜に精良なるも見えず。莆田の林熊と云へるは。周氏所藏の古印をかずかずみて。それより時様にそむき。いにしへにさかのぼれると聞けり。見たきものなり

○此方古畫の壁障に殘り有るは京師なり。紫野大德寺。とりわきおほし。唐土には。成都に。唐時の名跡多く。大寶慈寺第一にて。寺院九十六。殿塔廳堂

して楚石化す。碧いかゞせんと思ふをりふし。日本人かず／＼來り。わが國の祖師の像なりとて。われも／＼と買ひもとめ。歸りければ。秋碧は富を得たりとぞ

楚石は。元帝にしたがひ北行し。北にてひつじの骨をうづみ。羊の子をつくり出だすをみて。詩を作りしなど。奇なる話もあれども。此方へ來りし事はなし。又おびたゞしく。かひ來りたらば。今ものこりあるべきに。見ることなし。日本人といへるは。北人にてはなきか

○毛文昌。陳坦。朱光普。左建等は。おほく村野のことをゑがく。村童入レ學。田家娶レ婦。村落祀レ神。村醫。村巫等の圖あり。尹質は。神佛眞人より。伎藝迄も凡そ人の見及ぶ事はゑがきしとなり

此方菱川某。英一蝶。宮川長春。西川祐信の輩。畫様はおの／＼ことなれども。人間平生の情態をゑがく。唐人は服飾雅なり。此方は衣冠のほか。後世民俗。畫圖に入らず。ゆゑに上古の服飾にゑがくことなり。唐山も清人は。服飾美觀ならぬより。雅畫は。古服にゑがけり。土佐家は古人物をゑがくゆゑ。圖様雅なり。光信は畫格高く。筆意勁逸。神韻兼備はれり。後世の大和繪家。いづれも企ておよびがたし

○婦人の圖。いにしへは半滿にて。自然に莊重なり。後世は。手足ほそくゑがく。劉項。謝赫がやまひを傳ふと云ふ。この方にて。たけ長く手足ほそきを。町繪風と云ふ

町繪は。末畫（マツグワ）なるべし。委巷。逐レ末の徒と有り。末は利のことなり。市中にて。利をもとめて。畫がくものをいへり

○界畫は五代より妙手あり。郭忠恕は其傑なり。吳道子は界尺を用ひず。高逸なりしとなり

界畫は。入りくみたる。樓閣臺榭等をゑがく事なり

○朱にて竹をゑがくは。東坡試院にて。興到りて墨筆なし。朱筆にてゑがきしなり。宋仲温もゑがきし事あり。程堂は紫竹を畫き。解處中は雪竹をゑがき完顏亮は方竹をゑがく

古人朱紫竹をゑがけるは。竹色の有無にはわたらず。逸興をうつせり。朱竹は實に延平山中に生ず。

文に。大轉運使を鄙刺史とし。知州を大守とす。尹和請みて。文は脱俗なれども。當時此官なし。希文の名世におもし。恐らくは後世のうたがひをなさんとありければ。范は大に喜び。即時改められしと云ふ。なほ嚴滄浪詩話にも。王中宣。劉公幹。諸子の稱謂正しからぬを論ぜる。甚明正なり。あはせみるべし。これら畵事にはあづからねども。

少年輩ゑるべきことなり

○唐土にても。古人の像をあやまり傳へしは。韓退之の像なり。紗帽美髯なるは。韓熙載なりとぞ。熙載は文靖と諡(オクル)。江南の人は。韓文公とよぶ。退之をも。韓文公と呼ぶより。あやまり傳へたり。退之を孔廟へ從享せし時も。郡縣には。熙載像を用ひしとなり。退之は肥えて。髯すくなしと。常熟方塔寺に。青鰓菩薩あり。赤髮藍面にして。口に巨蛇をふくむ。是は唐の張睢陽なり。張巡は忠憤を以て。自らちかひ。死して厲鬼となり。賊をほろぼさんと申されし。厲鬼の像なりと云ふ

○戴文進は。秋江漁父圖をはじめて獻せし時。衆畫師はねたみ。漁父の朱衣を着たるを。そしりてければ。朝廷にもちひられず。杜處士某は。戴嵩が鬪牛を藏めしに。牧童はみて。たゝかふ時は。一身の力は角に有り。尾は兩またの間へ。まき入るべきに。尾をあげたるは。鬪牛にあらずと笑ひしとなり。又吳道子。子路の圖に。木劍をおび。王知愼が梁人は。馬にのり。閻立本が王昭君。帷帽をいたゞく。吳王斫レ鯉圖は。右衽なりとこれら古人評して。木劍は周になし。梁人は車なるべし。帷帽は隋に始まる。吳人は左衽なりと云ひしなり。牧童の穎敏は賞すべし。數圖の典古にくらきは笑ふべし。然れども畫妙を論じては。あづからぬ事にて。はじめに出だせる。此方のあやまれるたぐひとは。同日のことにあらず。漁父朱衣は。妄なるそしりなり

木劍は南史に出づ。かりに木にて作り。朝服に用ふる劍なり。漢時も防刃に有りて。眞の劍なり。騎馬の事。武靈王。李牧等の騎射を習はしめしことあれば。梁時に。必なきにしもあらじ。又古卓父。來朝走馬は騎馬ならんと。我友金峨山人云へり。猶。考證もありと

○楚石大師像を。胡秋碧は。千福ゑがく。なかばに

一生甲冑をきず。城門にて琴を彈ずる等も。陳壽三國志にはなし

孔明も畵をよくし。南夷にゑがきあたへられしこと有り。又玄宗幸レ蜀の古圖に。民みな白巾なり。これ蜀民は。孔明を喪してより。後世吉筵にて改めず。近時は風をあらためしと

○關羽の像。唐山にては鎭護とす。關帝菩薩。又は伏魔大帝など稱せり。劇にも三國志の事を。多く用ひて。關羽。張飛等は。曾我十郎五郎を江戸の兒女までしれるごとくなりとぞ。雲長の圖。此方には陳壽の志になきもの多くみゆ

康熙年間。千昌と云ふ人。夢により。井中より。關氏の誌を得。羽の祖。名審。字問之。其子。名毅。字道遠。是羽をうむと云ふことを。つまびらかにし。碑をたてしこと有り。雲長はじめ。漢壽亭侯に封ぜらる。漢壽は。蜀の郡縣の名なり。亭侯は亭長なり。後世。壽亭侯印と云へるが出で丶。漢壽の亭侯たるを。人しらずなりしとなり。一雲長に。後世私印などのごとく。數々あるべき樣なし。是は關廟ある所に。後人印を鑄てをさめしが。あやまり鑄たる印。世に出で。後出をもあやまれるなり。不朽のことは。みだりにすべからざるなり。

然るに後世は。地名をも。みだりに命じ。常州を南蘭と書く。蘭陵をきりてもちふ。江寧を白鍾と書く。白門鍾山を裂きたり。超然臺を楚臺と云ふ。瑯琊臺を秦臺と稱し。皆世にも通ぜぬ事なりと。容齋四筆にはそしれり。安州を安陽と稱し。錦官城を錦城と云ふは。古より云ひならはせり。さもなく思ひ付くまゝに。雅馴のみを事とし。當事の人にも通ぜぬ名を。紀事紀行などにも書き置くは。後世に傳ふる意もなきにや。浮薄なりと云ふべし。又詩中に。地名の字を加へ。聯對を屬せしは。宋人せしなり。東坡諸子は。詩を游戲とせしゆゑ。かゝる事多し。唐時の詩人は。詩を不朽の業とこゝろえしゆゑ。舊名をあらためかふる事はせず。此方近日宋詩を見ること讐敵のごとし。然るに時々舊名をかへもちふるは。宋人にならひ。又たま〳〵。能き聯對にても。舊名を用ひたるをば。概していやしみそしるは。いかなる故にか。又官啣稱謂も。はなはだみだりなるも多し。范文正公の

孫太初は家まづしく。友人許九杞は米をれくり。太初は鶴田劵を書きしこともあり

○七福人は。七福即生と云ふよりゑがく。大黑。恵比須は大貴巳。事代主の二神と云ふ。今ゑがくは。天竺の大黑神なり。天竺の大寺には。食厨柱のかたはら。又は土藏門前には。大黑神を安置し。油を以てぬぐひて黑くす。たからをいのるなり。大黑神梵語には。莫訶歌羅と云ふ。又うち出のつちと云ふこと。新羅國旁扂と云ふもの。山中にて金の椎をえて。たからをうち出だせりといふこと。續酉陽雜俎に有るをとりあはせてゑがけるなり。白きねずみをゑがく。後魏にも。明にも。多く出でしは凶兆なりしとぞ

又布袋和尚は。經山寺の僧にて。淸儀をみだり。寺をおひ出だしゝに。怪異あり。よびかへせば。安穏なりと云ふゆゑ。寺の鎭護とせるなり。常人の家。吉筵にもちふべき事はなし

○渡唐天神の像は。林和靖をあやまり傳ふと云ふ。さも有るべし。夢中に經山寺に法を問ひ。又明の詹仲和が夢にみて。雪舟ゑがきしなどは。跡かたもなき事なり。元の薩天錫が詩に。天滿宮と題し。無常法顯ニ神通一。千里飛梅一夜松。萬事夢醒雲吐レ月。觀音寺裏一聲鐘と有りて。菅公は佛理にも達し。唐土までもゑれりと云ふ。雪舟が畫に。詹仲和詩を題せしと云ふこと有るより。取り合せてあやまり傳へしにや

○菅公自筆の像と云ふ畫軸あることなり。多く黑き袍にゑがく。是うたがふべし。上古黑色は。喪服なり。四位以上の人。黑色を平生の服とするは。後世の事なりとぞ。自像は黑く有るべきいはれなし。是は後世菅公をしたひて。像をゑがき。あるひは菅廟へをさめしが殘れるなるべし

像をゑがき。家々にまつれるは菅公。唐土にては司馬温公なり。村學生は。菅公を先師とす。唐山にても。雲南にては。義之を先師と云ひてまつる。元に至りて。はじめて孔廟をたて。學舍を置さ。釋菜の禮をおこなひしとなり。義之は一生滇の地へゆかず。何ゆゑ先師といへるにか

○諸葛孔明。甲冑せる圖。此方に有り。孔明は白綸巾。鶴氅裘にて。素車にのり。白羽扇にて指揮し。

とうちまじはりて。醉放せるを。子美の調せるなり。童子にはあらず

宋時。鑑湖懶民は。善畫にて。賀知章の裔なり。

鑑湖は。玄宗の知章へ賜ひし所なり

○福祿壽とは。福人。祿人。壽人の三人をあはせゑがける名なり。此方にてかしら長きを福祿壽と云ふはあやまりなり。頭ながきは。壽老人なり。此三人を。三星の圖とも云ふ。是洪範の儔。華封の祝よりゑがきはじむ。又壽老人に。蝙蝠と。鹿をそへゑがきたるもあり。福祿壽の圖と云へり。蝠と福。鹿と祿の音通ずればなり

○阮仲容曝ニ犢鼻褌一圖に。竹竿に幅帛をゑがくはあやまりなり。褌は。今のパッチに似て。みじかし。人身兩膝下。有ㇾ穴。犢鼻と名付くと有り。犢鼻へといくばかりなるを云ふ

○子路負米も。米たはらにてはなかるべし。米嚢に畫がくべし。ふくろの口をくゝりて。餘りのはらりとちりたるが。罌粟花(ケシノハナ)のちりたるのちに似たるより。けしの花を米嚢花ともよべり。又擣衣の圖。六朝の畫には。兩女むかひ立ちて一のきねを。二人してとり。たちながら衣をうつ。今時田舍にて。米なぞつくに似たりと。字林に。眞舂と有るは。是なり。後世はさはせず

○陶淵明の琴に。絃を畫がくべからず。無弦琴とて弦はなし。此方にて絃をゑがき。又箏にゑがけるは誤なり。松竹柳菊は。其文辭よりゑがく

菊いにしへは。黄色のみ多きゆゑ。黄花と云へり。白は唐の比も。すくなかりしにや。許棠も人間稀有此。自古の無詩と作れり。花經に。九華菊は白くして。淵明賞せしといへるは。無稽ならん。又白菊は日本に有りしと。范氏菊譜に出づ。凡そ菊を歌に詠ぜしは。桓武帝御時はじめなりと。舊紀にもみゆ。菊のいにしへより。此方にありしとはいぶかしきなり

○林和靖を。唐の冠服にゑがけるが。此方に有り。林は一生つかへず。野服にゑがくべし。雙鶴をやしなひ。孤山に梅多く。十詠も有るより。梅鶴をぞゑがく

隱士の圖に。鶴あるをみて。林なりとのみ思ふ。人有り。唐山の隱士は。鶴をやしなふ多し。明の

に歸愚死し。文集世に出でしに。集中に。日本國某。詩の和を乞ひたれども。與へぬよしを志るし。みづから詩一首作りて。詩中には。あざけり輕んぜる意をのべたり。是にて商徒のいつはりあらはれたり。元來。天外敻絶の地へ來り。貨利をもとむるともがらなれば。かゝることも有るべし。雅人高士の。來るべきにあらず。唐人といへば。賢愚の差別もなく。れどろき尊ぶは。おろかなることなり

○猩々は。雲南に生ず。酒と履を置き。醉ひて履をはくとき。とらふと云ふ。朱氈（シヤウ〴〵ヒ）も。猩血にてそめると云ふは。唐山にも云へり、能くものいふとは。曲禮。又は山海經。荀子等にもいづ。雲南武平のあたりも。後世は王封に入りて。中國の人も往來すれども。猩々の物いへるをば聞かずとかや。崑崙兒よく水にすむと云ふ。水に入れば。溺れ死すとぞ。かゝることをあやまり傳ふるも多し。清谿にては。ころして煮てくらふと云ふ

此方の畫に。美服朱髮にて舞ふは。散樂の圖なり。吉筵に用ふれど。能く物をいへども。禽獸をはなれずとは。凶物と云ふことなり

○此方にて。石公は馬にて。張良は冠劍にて。蛇のかしらにたてるあり。張良は野服にて蛇はなかるべし。石公も。かちなるべし。是も猩々と同じく。散樂よりゑがきあやまれり

○西湖の圖は。此方にて。大船帆舟をゑがく。西湖は水あさく。所もせまし。遊山舟。小漁舟をゑがくべし

西湖と云ふ所。畫林。惠州。潁州の三所にあり。今ゑがくは武林の西湖なり。唐時。白樂天。杭州司馬たりし比より。賞しはじめ。宋元に盛なり。明清變換より。十境も。所さだかならずとかや。又十境と云ひて。畫きはじめしは。唐の雪鴻は。嵩山にかくれ。境地の十勝を圖となし。詩を題せり。其後。宋廸は。瀟湘八景をゑがく。夫より往々名を命じ。圖となす。古人はかやうの題名。二四同聲ならぬ多し。近江八景は。其覺悟なしとみゆ

○飮中八仙圖に。崔宗之を。童形にゑがけるが。此方にあり。宗之瀟灑美少年とは。年わかくて。老者

あまり卑俗なるものあるまじ。詹景鳳。謝肇淛の見たりし繪は。文意にてかんがふれは。蠻畫ならんと思はる。畫のみにあらず。蠻器をも倭物とあやまりて。賞せしことも多くみゆるなり

雪舟は。明にて太祖の御容を寫し。禮部院の壁に畫がきしと云ひ傳ふ。明は代もちかく。明書もれほく渡りて。日本微細の事まで志るし有るに。雪舟の畫事。とりわき。御容。院壁等は。小事にあらざれば。志るし傳ふべきに。いさゝかも。それとおぼしきこともなし。志かるに。其時の畫師。李在にまなびしと云へば。かゝる盛事を。外國の弟子。末學のともがらに。志がゝしむべきにあらず。是は此方にて。雪舟の畫を賞するあまり傳へたりと思はる

上古。高麗國より。師廉呂。僧曇徵。百濟國より。白加歸化す。善畫なること國史にみゆ。宋の時。高麗國李寧少は。善畫にて仁宗の賞をえしこと有り。朝鮮には。奸尙もかはりしにや。聘使に志たがひ來る畫員に。妙手見えず。畫法は北苑。雲林。石田等を學ぶと云ひしと聞けど。此方もおなじく。風土ことなれば。書畫ともに。彼土一種の流風あるなり

朝鮮人來聘のとき。書畫詩文題名の上に。東華あるひは小華と書す。是は淸は夷人なれば。中華は。朝鮮と云ふことゝかや。然るに古より。中國人も。中華某とはかゝず。わらふべし。是もかれら。此方へほこる手段なり。かれらにおびやかされて。東華某君へ呈すなどゝ書きおくりしも有りしと聞く。何とこゝろえて。かく書きしにや。大體に暗しと云ふべし。又かれら。詩文章に。號を書きて。此方の人へおくる。往時。高貴の家へ。字印ばかりにて。書を贈り。其禮をせめ問はれ。答もならず歸り。其後は。書法をたゞし來るとぞ。又朝鮮人。あるは長崎へ來る。商舶等に託し。書畫詩文をみせ。序文等を乞ふ人あり。來聘の一面。又は萬里外はじめて通せる人の。褒揚を得たりとて。美とすべきにもあらず。さきに何人にか。商船に託し。淸の老儒。沈歸愚へ詩をおくり。和を乞ひたり。歸愚は私に書を通ずるは。國禁なればとて。詩を返す。是に依りて。商船徒は。いつはりて和詩を作り。もち來りて。其人をあざむきける。後

相見。公忠。公望。千枝等。其余。舊紀に。名のみ聞えしも。畫は見えず。僧家には弘法大師。書筆は人しれり。善畫にて高野山。東寺等にも。畫跡有りと云ふ。智證慈覺。兩大師。慧心院僧都。無外。曇芳。鐵舟。一休。愚極の諸和尚。日蓮上人等皆畫事有り。可翁。如拙。兆殿主。啓書記。周文。雪舟。秋月。雪村等は粹をぬけり

此方上古畫法。金岡のともがら。唐以前の法による。細筆にて。人物道釋を專とす。墨畫卓々たるは。北條氏のころ。僧徒元へわたり。宋元畫法を學びえて。墨畫の法をなす。如拙にいたり。牧溪を法とす。周文は出藍の才にて趣あり。雪舟のともがら是より出でゝ。皆中葉の畫なり。雪舟は。明にて李在に學ぶ。李在は。夏珪。馬遠の派にて。ことに豪放をよろこびしなり。雪舟は。其峻氣をえて。くはふるに。牧溪の法を以てす。牧溪は。一筆にゑがくをこのみ。禪機をよろこぶゆゑ。麁惡にして古法なく。雅玩にあらずと。古人もそしれること有り。畫法流派をゑらぬ人は。雪舟は。李龍眠にりて畫がけるなど云ふは。大なるひがごとなり。龍眠は。王維の派にて。文人畫法なり。唐の吳道子と敵すべしと云ふ。吳が大畫は。いよ〳〵峻豪なりと。龍眠は。わざとふくさ紙へ。小畫をなして。畫師の流をばせぬ人なり。雪舟は大畫にたくみなり。つねに禿筆にて。どうさある紙へゑがけり。山水皴紋も。大斧のみなり。龍眠とは。畫法こと〴〵くことなるものなり。近時は昇平の化に浴し。何の藝も。本源をさぐり。典雅をもとむるより。畫紀をもよみ。文人畫法をこのみ。尙む人もあれども。我も人も。根機うすく。古人の專にせしごとくにもなく。一班をもうかゞはずしてやみぬ

○此邦の畫を。唐土にて賞せしは。馮永功が家に。著色山水一幀あり。日本畫にて。李思訓に似たりと。米元章云ひたり。上古は唐を學べるゆゑ。かくありしにや。思訓は。唐時の山水畫祖なり。是に比せしは。大に尊べるなり。また郭若虛。鄧椿も。扇面の繪を賞し。中國の善畫も。或は不レ能也といへり。上古は。此方の畫人。おほくは文雅なりしゆゑ。その畫も高妙なりけん。又倭僧多能畫ニ墨觀音一といへるも。元の時に僧徒往來せしなれば。渡海せるほどの僧に。

にやすんずと云ふべし。劉廷美陳道復を。王元美の逸品と題せしさへ。祿量不レ平のそしり有り。畫は奇巧をなして後に。造化を師とせよとをしへたるも。かゝる弊をすくへり

○此方。畫史のはじめは。大岡忌寸男龍なり。雄略帝の御ときに歸化す。武烈帝。其畫を賞し。姓を賜ふと云ふ。又倭畫師と云ふは。忍勝に姓をあらためて賜ひしと。是ら國史にみゆ。拾芥抄に。春日繪所の事有り。古は奈良に。宅間。住吉。粟田口等の繪所ありて。おほく佛像をゑがくと。國史にも繪佛師と有り

○紫宸殿聖賢の障子は。上古より唐までの名臣を。巨勢金岡ゑがき。賛詞は。小野道風書す。其後は。金岡の圖をうつし。賛詞はなく。畫像の姓名をば。道風の書をうつす。是持明院御家。つかさどらるゝとかや。大學寮先聖像は。唐畫の圖にて。金岡うつせりと。古今著聞集に出づ。障子圖も。金岡ゑがきしは。古典刑を存しけん。見まほしきなり。姓名は。今も道風の書をうつし。玄宗八分に似て巧妙なり

大內裏の制は。唐時にならへり。障子も唐の凌烟閣に擬せり。西漢には功臣を麒麟閣にゑがく。長樂宮には。堯舜を畫がく。後漢には。鴻都門に畫がく。又家語に。孔子周の明堂四門墉に。堯舜をゑがき。周公は成王をたすけ。南面して諸侯を朝せしむる圖を見玉ひしことあれば。上古よりもゑがきしことなり。後漢の高彪を。東觀にゑがき。學者をすゝめられ。金日磾の母死せる時。詔ありて。甘泉宮に畫きしことも有り。婦人をゑがきしは是はじめなり

○後鳥羽帝は。御幸あらん時。まづ源信實に命じ。行列圖を畫がゝしめ玉ひしなり。是鹵簿圖なり。鹵簿は。唐土にても。名畫のゑがけるあり。鹵は楯なり。甲楯を外とし。行列を簿にしるすゆゑ。鹵簿と云ふとも。又鼓は皷なり。行列を皷聲にてとゝのふとも。又は香爐にて。前導とするゆゑとも。周氏書影には。鹵は鹽なり。行列のさきに鹽水うちて。塵ほこりの久しくおこらぬためにすともあり

此方にて。事の先に。鹽水うつも。かゝる事にならへるにや

○此方上古には。貞仁公。飛鳥部常則。巨勢金岡。

もとむる人は。事を知り。眼力ある人にみせ。眞僞を正すべし。宋南渡の後は。曹勳龍大淵の二人。書畫鑒定を任じ。二人ともに學識あさく眼力さだまらず。往々見あやまりたりと云ふ。此方にても。唐土の事にうとき人は。深き吟味もなく。大概に名をつけ。又畫風。わが好みにそむけるをば。極まらずと云ふ事になりて。眞物の世にすたるも多く。其餘。印記時代を見あやまりたるをも見えたり。ある畫人。薩摩の僧。秋月の畫を見。是はからの秋月なり。中品の畫なりと云へり。からの秋月なれば。顏輝の事なり。名は輝。字は秋月なり。顏は元人にて。上品畫なり。僧秋月の類にはあらず。又牛の畫に胡大年と。虎に毛松と。魚に季鱗と。名を付けしをも見たり。何ゆゑかく目きゝしにや。毛松は宋人にて。花鳥をよくす。胡大年は。明人にて。葡萄に妙なり。季鱗も。明人にて。仙佛にたくみなり。此三人に。生虎魚の名はなし。又名なき唐畫に。ある畫人めきゝし。やがて唐土名畫の名を書き付けて。わが印を其へれしたり。古人の畫に。あとよりみだりに名をかきつけて。わが印をおす事は。唐土目きゝの法にはなき事なり

僧秋月は。周文の畫をまなび。周月と名付く。のちに顏輝の佛畫を。多く寫し。此畫法をまなび。字を秋月とかきあらためしとなり。古人をまなびて。其名を用ひしは唐土にも有りしなり。さはなく。此方にては何の藝にも。師匠の名の字を。きり用ふること有り。是は禪家に。後世は流派の字あるをまねたるにや。唐土にては。君父師のごとき尊むべき人の。名の字は。よけて用ひず。是禮なり。諱と云ふも尊みて。いみ。よくるより云ふことにて。平生の文にも。其字をばよけてもちひぬ事なり

唐人も。畫に上中下をわかち。又神品。妙品。能品と云ふこともあり。逸品を神品の上に置きたり。歷代名人の中にも。張志和と盧鴻の二人は。逸品にはづることなしと。古人もいへり。この二人。學德隱操古今に照映し。高尙の手筆。さもと思ひやられぬ。今時放縱なる畫をなし。拙きをかくせば。傍人は。逸品などもてはやすことと有り。小成

奇趣をひらけり。袁安臥雪は。王維名高き圖なり。のちに相國寺にて。米元章は此眞跡を買ひ。途中にて。范君錫にわざむきうばはれしこともあり

○梁の時に。江陵天皇寺の柏堂は。僧繇ゑがく。盧舍那佛と孔子十哲を畫がく。帝は佛寺へ何ゆゑ聖像をゑがくと問ひ有りしに。聖像にて向來をたのみ申すなりと答ふ。後周には佛法をほろぼし。天下の寺院をのこらず焼きはらふ。柏堂は聖像まし〳〵て。やかず有りしとぞ

呉仲圭は。梅花道人と號し。山水竹畫の名家なり。生前に。はかをつくり。梅花和尙之墓と題す。後に賊兵。所々のはかをひらきしが。このはかは僧をうづみしと云ひて。ほらずといふ。僧繇。仲圭ともに名畫なり。前見も同じかりしは。いかなるゆゑにか。此はか明のすゑまでも。大椽樹おひて。つゝがなかりしことゝ。明季の人もいへり。又上古は柩の四方にはまぐりのからをうづみ。是へ人物をゑがき置きしとなり。ふるきはかより。漢人のゑがきしはまぐりをほり出だしゝことゝ。路史にもみゆ。其畫みな春情なりとぞ。帝王のはかへもうづみしにや。上古の哀册文にも。往々みゆるなり

○耕織圖。唐土いにしへは。守令の門に畫がき。民をすゝめ。吏たるものにも其本をゑらしむ。宋高宗。即位有りて。天下へ勸農の詔あり。樓璹は於璹の令にて有りしが。耕織始終を。四十餘條にゑがき。各詩を題す。都へめされて後。この二圖を上進しければ。賞賜ありしとなり。農ゑは浸種より登廩まで。織圖は浴種より剪帛まで。條をわかち詩を題せしは。是はじめなり。仁宗も寶元の初め。延春閣に。二圖を畫がゝしめられしことあり。康熙帝は二圖を印行せしめ。畫册となし。序を附し。群臣へたまひしとぞ蠶圖には。烏新藏國の。佛像をまつるをゑがく。是は輪廻を度する佛なれば。蠶種に輪廻の理あるゆゑなり。愛染明王に似て手足多し。此方へはこの像いまだわたらず。耕織二圖を。畫册畫卷となして。樓璹の詩を題せるもまゝみゆ。唐山にて。女を嫁する時。この二圖をもたしむ。此方にて。げむじ。いせ。百人一首等もたしむるごとし。それゆゑ名手をいつはりしも多し。凡そ書畫等の似せは。唐人は上手なり。いづれにも。唐書畫をかひ

然たりとなり。石案に。某閼氏(エンシ)之墓と。蒙古書もてゑりてありとぞ

○李太白逸跡圖あり。大白一生狂逸の事をあつめ。子昂ゑがけり。かたはらに其事をしるす。采石掬レ月等はなし。采石の事は。太白酒にゑひて。舟中にて。水中の月影をとる圖なり。此とき。水に落ちて死せりと云ひ傳へ。梅聖俞の詩には。鯨にのり。昇仙すと作る。新唐書には。醉死の事なく。舊唐書には。醉死于宣城と有り。然れども。文集の序は。族家の季陽氷が文にて。公の疾亟なるとき。枕上は命をうけてかきしとあれば。やみて牖下に死せること明らかなりと云ふ

太白は。彰明縣青蓮鄉は生る。依りて青蓮居士と稱すと

○虎溪三笑圖は。僧惠遠。陶淵明。陸脩靜と云ふ。石恪の畫に。東坡題して。三人皆笑ふ。衣服冠屨に至るまて。皆有二笑態一。其うしろの童子。罔レ知大笑と有り。三人の名はさゝず。三人の名を命ぜしは山谷なり。其後蓮社傳なども出來たり。遠公と脩靜は同時にあらず。脩靜は遠公亡せて後。三十年餘にしてはじめて。廬山へ行きしなり。淵明よりも廿年もおくれたり。志操同じきより。取りあはせしなり

○寒山は。唐興縣西の寒岩と云ふ所にすむ。依りて號とす。拾得は豐干禪師。天台の道にてひろひ得しより名付く。豐干は天台國淸寺に住し。髮をきりてまゆとひとしくし。ぬの衣を着て。虎にのりて往來す。寒山拾得は。二人つねに手をたづさへ。大にわらひしなり。豐干とは道を論じ。又拾得は寺主と道を論じ。はゝきにて地をはきしことあり

寒山拾得ともに詩を善くし。詩中に道をときて奇逸なり

○十六羅漢を。十八人にゑがく。龍虎二尊は。畫師そへ入れしとなり。又釋迦涅槃像に。樹傍に杖鉢(ギヤツハチ)あるを。小兒輩は藥師より藥をくだせりと云ふ。佛徒は。頭陀(ヅダ)乞食(コツジキ)とて。鉢をもち。杖をつき。食を乞ふものなり。ゆゑに杖鉢有り

○雪中芭蕉は。王維ゑがく。袁安大雪中。屋裡に臥す。宅邊にばせを青々たるに。雪のつもれるをゑがく。雪中に芭蕉青き理なし。王維は景物よきは。季節にかゝはらず。ゑがきしなり。是ら圖をつくるの

○畫水は。孫位たくみをはじむ。うつばり。かべなどに。龍水をゑがくも。舊しきことなり。此方にては。東福寺の仰板に。兆殿主は蟠龍を畫きしがはじめなり。水は火難をしづむるためにゑがくなり

常州太平寺佛殿に。徐友が畫水有りて。兵火をのがれしと。又趙洲柏林寺に。呉道子畫水あり。石刻となし。はりて火をしづむ。此邦にて。鸓鳥圖のごとくせしと云ふ。のちに梁のあたり。汴水あふれ。水難にあひて。又畫水のたゝりなど云ひて。今はもちひずとぞ

○張南本は。孫位とともに。水をゑがく。孫におよびがたく。改めて火をゑがき。妙にいたる。不動明王の像等。奇異なりとなり

○鐘馗は。玄宗の夢に。虚耗といへる鬼を。鐘馗ころせるを。呉道子に畫がゝしめられしと云ふことは人しれり。鐘馗とは蒭葵と云ふことなり。古來一大神の椎にて。小鬼をうちころす畫ありしを。齊人はつちを蒭葵と云ふより。蒭葵と鐘馗の音同じきより文人のたはふれに。鐘馗進士傳をつくり。玄宗と呉道子を取り合はせて。云ひ出だせり。又虚耗とは。貧乏神といふことなるゆゑ。貧をさると云ふより。世人喜ぶ圖と成りしなり

石恪が年少婦人に畫きしは。朱氏の妹鐘馗なりとぞ。孫知微。石恪等は。鐘馗の鬼をになひ。鬼と碁をかこみ。鬼の脈をとる等の圖有り

これら圖中に皆諷情ありしとぞ。然れども圖樣俗なる事は。見あくものなり。さるを此方にては。名賢道釋の像をも。たはれたるさまにゑがく人あり。輕薄不敬の至り。いとひにくむべき事なり。又朱鐘馗は。疱瘡に赤きを用ふるより。此方にて畫き出だせしなり。運大黒の類にてわけもなき事なり

○王昭君は。漢の時胡國と和睦し。胡を聟として。宮人王牆をたまふ圖なり。貌をうつすは毛延壽なり。馬上に琵琶をひくは。胡へ行き。漢宮をしたひかなしみて。彈ずるなり。是を明妃曲とてうたひ物にせしなり

昭君を明妃と云ふは。晉にて司馬昭の諱をよけてより。後の世までも云ひならはせり。昭君の墓は。いにしへより青冢と云ふ。今も遠くのぞめば。蒼

以來さかんなり。是も貴人。又は高貴へつかふる女の事と見え。明の高皇后の足大なるを。大祖のたはふれ笑ひ給ひしも。此后はじめいやしかりし故なり。清の康熙年間。纏足の禁ありしと聞く。又唐畫に。額ひろくゑがくは。才女は。ひたひひろければなり。此方にて。唐土の女子額せまくゑがけるは。わけをしらぬゆゑならん

○襪は。足をかざるきぬなり。白か。淺紅かにして。鞋は深紅か。青なるべし。襪いにしへは底ありて。鞋なくても歩せしにや。羅襪生レ塵とも有り。にしきにても製し。楊妃の錦袎襪に。玄宗のたはふれ有りしこともみゆ。後に馬嵬驛にて。老媼のひろへる事も有り。後世は。男子の足衣を襪と云ひ。女子のは褶と云ふ

○女の耳に。環をれびたる圖。晋唐の畫にもなきゆゑ。後世にれこると云へども。莊子に。天子の侍御は。爪をきらず。耳をうがたずと有るも。是なりと云ふ。中葉には諸葛恪のこと葉。又杜詩等にも。證有れば。上古より世にありといへり。又婦人のゆびに入るゝ環をば戒指といへり

○唐山にて。人の面をうつすを。寫照とも。傳神とも、寫眞とも云ふ。人物家に。妙を得し人多し。江戸にては。戯子(ヤクシャ)の面をうつすはあれども。雅畫には。妙手は聞かず。唐人は。みづから畫師へこひて。寫すこと多し。三十歳にみたざる人は。精魂をうばゝるゝゆゑうつさぬものなりと俗士は云ふとかや。伊川先生の家。少師影帳に。蒼頭福郎像あり。一畫師たはふれに。ゑがきあたへけるに。まもなく蒼頭死せり。家人はゑがきころせりと云ふ。先生は人壽長短有ニ定數一。畫のよくする所ならんやと。辨じ玉ひしと云々と。家世舊事に出でたり

明の王敞へたる武夫。像を乞ひしに。此人左の眼眇なり。武官の像なれば。石ゆみをはなちて。左の目をふさぎたるをゑがき。癈所をかくしてければ。大に悦びしとぞ

○祝壽圖は。人の年壽を賀する時。東方朔。西王母壽星。或は松。又は梅竹等をゑがきおくるなり。壽星は。壽老人なり。又別れをおくるにも。畫卷にておくる事有り。後世は松柏(ソンペ)をゑがく。松柏と。送別(ソンヘ)の音通ず。凋(シボム)におくるゝの意も有りと

光尾のうしろに向ふを。順風光と云ふ。これら皆非なりと。定果の光明。圓滿なるを正とすと。古人いへり。呉道子は。大衆中壁畫に。光明を一筆にゑがきしと云ふ

○地獄變相圖は。呉道子。酆都の寺壁にゑがき。愚民をいましむ。是をみて。鳥獸魚肉の市も。しばらくやみしとなり。地獄と云ふこと。地藏菩薩本願經。淨度三昧經。正法念佛經問地獄等に。あら〱とときて有り。呉道子は。それをあつめそなへかきしと思はる。はじめは愚民のいましめともなりしが。殘酷の吏は。圖中の刑具にならひ。のちは民のくるしみをましたりといへば。弊もあるべし

倶生神は。經說になし。華嚴經に。有二二天一。一曰二同生一。一曰二同名一と有るより。作り出だせるにや。此方にも。古代書人の。地獄圖をゑがきしと有り。又罪人に夷人なきをば。唐土にてもわらひしこと有り。此方にも。外人をゑがゝぬは。愚民目なれたるをゑがくなるべし

○醉僧圖は。張僧繇はじめて畫がきしなり。諸道士は。此圖にて僧徒をあざける。僧徒は又閻立本に。醉道士圖を乞ひて。是にて道士をあざけり返したりとぞ

唐土にて。律により僧となるをゆるしゝは。魏の黃初の比なり。魏武西征の時。長安の僧徒。あつまりて。酒のむをみて。酒具をさがし出だし。ことごとく誅せしと云ふ。唐にいたりては。醉ひて舞ひうたひしなり。唐僧懷素は。草書に妙なり。みづから醉僧圖をゑがきしこと。宣和畫譜に出づ。詩あり。董其昌。戲鴻堂法帖に載す。人々送レ酒不二曾沽一。終日松間挂二一壺一。草聖欲レ成狂便發。直堪三畫作二醉僧圖一

○唐畫に。女の足を。ちひさくゑがく。女子はいとけなきより纏足とて。きぬにてまきかため。小く弓のそりたるごとく。ならしむ。弓鞋と云ふも是なり。上古にはなし。周禮屨人(キヨジン)にも。女子の屨。小なることはなし。漢唐にもなきゆゑ。漢雜事秘辛。中華古今注等にも。女足の事はあれども。纏足はなし。南唐の窅娘にはじまるとは。諸說もあり。輟耕錄には。五代以來なれども。熙寧元豐の前までは。すくなかりき。近年これをなさぬを。はぢとすとあれば。元

り

○聖像を。文宣王ゑがくは。唐よりなり。司寇像は本意なれども。今の圖は。漢晉服にて。古にあらず。顧愷之。吳道子。王維等の圖あり。闕里誌にも出づ。玄端章甫なるは。唐は殷人也。生二于宋一。故に服二章甫之冠一なり。殷は水德。黑きなり。孔叢子に。子思の先君生れて無二鬚眉一の言により。吳道子の多鬚の圖をそしれるもあり

先聖を文宣王に封じ。聖裔を繼ぎ。爵を襲ふ人を文宣公とよぶ。宋にいたり。祖無擇。奏して。文は諡なり。子孫を稱すべきにあらずとて。夫より衍聖公と稱せり。聖裔は世々にたえず。いづれの代にしも爵を封じ。闕里は撿見もなく。孔廟へ附せらるゝ事なり。又明の孔禰禱は聖裔なり。畫を善くし世に傳ふ

○僧服は。竺服方衣なりしなり。方衣とは。袖ゑりもなく。角にぬひたるを。うへ下にして。身に引きまとひたるものなり。是を七乘といふ。くはしき製法は。南海寄歸傳等にもみゆ。色は木蘭色。黑色。青色の三色なり。唐にいたり。武后は。僧懷義を愛幸し。梁國公に封ぜらる。其時竺服は。朝廷列坐に。見ぐるしきゆゑ。大袖の衣を製し。直裰。偏衫。寛衣など名づけ。錦繡をもくはへしより。餘の僧もこれにならひ。つひに後世の僧衣はじまる。それより紫緋黃等の色をも。官人の服にならひて。賜はりしなり。佛像に。梵僧。唐僧のわかれ有るも。是ゆゑなり。又方衣圖は。一角垂前とて。身にまとへるはしを。肩より前へたるゝなり。山城嵯峨釋迦文佛像は。西竺の像をうつしゝと云へば。是らも證すべきか。釋尊登天の時。波斯匿。優塡の二王。佛像を作らしむ。其後梁武部は。決勝將軍等。八十人をつかはし。かの像を乞ひたれども。天竺よりも。眞像をわたへず。うつし作りてわくる。宋に至りて。奝然渡海し。かの朝へ乞ひて。其摸像を又彫佛二張榮にうつし作らしめ。奉じて歸り。嵯峨に安置すと。舊記にみゆ。阿育王像とれなじと云ふ

木蘭色は。赤色とも云ふ。くろとび色なり。黑色は。くろねづみいろなり。青色は。あいくすみ色なり

佛光明を。佛身そばだてば。光も側だつ。行佛に。

有りて。空海の詩有り。性靈集に出づ。唐土にも。念佛鳥と云ふありて。是も鳩のたぐひなり。其かたち佛法僧鳥に似たり。佛をとなふる聲を發すと。唐の韋蟾の。靜聽林飛念佛鳥の句あり

○余さきに。異方の禽獸圖を。數々見し中に。邵火雀と。火鼠の圖有り。邵火雀は。唐順宗の時。拘弭國より獻ぜしに。火に入りやけずと聞く。火鼠は。火山にすみ。此毛にて。火浣布をれると云ふ。余が見し圖も。しかる物にや信じがたし。然れども。魏文帝は。火浣布をみて。典論をやきしと云へば。曠々たる天地間。怪物の有無はきはめがたし

火浣布は。火鼠の毛にてれると云ふの外は。玄中記。齊東野語。輟耕錄等には。樹皮。樹根。或は火浣草。又は石岩中の絲にてれると云へり。又大紅火浣布あること。淸人の書にみゆ。紅色なるは。何にてれりたるにか。此方にも。石岩の絲はあれども。こはくて。はゞ廣くはれりがたく。又たび〳〵火に入るれば。へり損ずと云へば。眞の火浣にてはなかるべし

○象は。西南夷に有りて。中國には。畫像にて見ればえそれゆゑ。象とよびたり。唐畫にありしを。獅子のごとく畫がくは。眞象を見ぬゆゑなり。此方には。さきに渡りて。眞圖をうつし得たり。又佛書には。四牙六牙なるも有りと云へり

○冠服制度。唐山にても。古を知りがたく。古畫によりて論せしもみゆ。袞冕は。典刑も存せり。常服は時々變移有り。二十成レ人。士は冠。庶人は巾とありて。上古は。冠巾わかれてありしなり。漢は幘を用ふ。是は朝服なり。漢末には幅巾を雅とす。羃羅は齊隋よりおこる。幞頭は後周にもちふ。烏紗帽は隋にさかんなり。後に四脚巾おこなはる。唐には進德冠。圓頭官樣巾子あり。又三代は襴衫なり。秦より紫緋黄等。位にしたがひ。袍色をわかつ。帶魚は。唐高宗におこる。履は。三代は木にて作る屐と云ふ。伊尹は草にて作る。屩と云ふ。周は麻。晉は絲にてつくる。靴は秦よりはじまる。二世は鳳首を加ふ。西晉には伏鳩を加ふ。古服は。黃白靑紫多し。綠はすくなし。賤者の服色に近きゆゑと云ふ。又袞冕は。秦には除きて用ひず。玄衣。絳裳。一具のみなり。漢永平中。古衣圖を案し。ふたゝび袞冕に復せしな

らずとぞ。包貴が虎圖は。草むらの中。いばらをすこし畫がきしも。是ゆゑなり。又上に鵲をゑがく。虎は猬をおそる。鵲は猬を食ふゆゑ。鵲のすむ山には猬なきを知りてとゞまると云ふ。又古畫に。耳の。のこぎりのごとき虎あるは。暴虎なりと云ふ。人を食ふごとに。耳かくとぞ

○龍畫は。古人も。蟠蛇のかたちを妙なりと賞せるも。全身あらはれたる圖にていへり。三停九似の法も。全身をゑがく事なり。陳所翁。牧溪にはたまたま首ばかりゑがき。足すこしあらはるゝ圖もあれども。是は醉後の戯筆にて。龍畫の本色にあらずと。古人いへり

龍は無きものなりとて。畫法をもわらふ人有り。其說に。龍とは聖德を頌せる名なり。周禮豢龍氏も。此龍は馬のことにて。馬を養ふ役人なりと云ふ。畫事はさにあらず。吳道子。鬼神の畫。東坡跋として。鬼神は見ざれども。情態動止。鬼神なりとみゆれば。是鬼神なるをいへるは。知言なり。其上。傳古。王庭鈺は。眞龍をみてゑがけりとも云ふ。又今も飛昇。彷彿たるに見ることなり。驅ニ蛇龍ニ而放ニ之菹ニも。蛇と馬にはあらじ

○獅子圖に。毬をそふ。毬をあたへて。もて遊ばしめ。挑擲(ハネアガル)の猛氣をへらしむとぞ。閻立本が圖には。虎首熊身にして。黃褐色なりしと。又獏をも獅をも。僻邪とよぶ。温邪をさると云ふより。かくよぶなり。近日白澤をゑがく。獏の一名を。白澤とも云へり

唐時の人。屏風に獏をゑがくこと多し。白樂天も頭風をうれへて。獏を屏にゑがゝしめしこと。集中にみゆ。此方にて。まくらに。獏の字を書きつくるは。是によれり

吼と云ふ有り。兎に似て。兩耳とがれりと。獅も。吼には恐るゝとぞ。明の弘治中。西番より獻せしこと。偃曝談餘に出づ。禪語に。獅子吼有るより。吼の別にあるを。人しらずと云へり

○雷圖。舊しくゑがき傳へ。王充論衡にも擧ぐ。山海經に。龍身人頬と有るも異なり。雷獸。此方にも。近時とらへて。うつし印行せしなり。唐土の書にも。天雷の時。豕首鱗身なるを。刃斬せしとあるは。雷獸なり

○佛法僧鳥は。所々深山にすむ鳩なり。高野山にも

○墨竹は。宋の文與可。はじめて法をなす。唐の時よりも。ゑがきしが。墨のこきうすきにて。おもてうらをわかち。種々奇趣を出だせるは。與可なり。東坡も。畫友にて。與可と。一辨香を拈と云へり。凡そ墨畫は。古人も。蕭散を妙とす。夏仲昭も。名手なれども。法にかゝはる所多く。古人も院畫なりとそしれり

院畫も院體も同じく。畫院の畫師風を云ふ。梅竹をも。古より畫竹。畫とは云はず。寫竹。寫梅と云ふは。梅竹の清魂を。畫人の胸中に得て。筆下に寫し出だせばなり。倪雲林は。醉後に燈下にて。竹樹を畫き。翌日みれば。竹樹に似ず。似ざる所。いたりやすからずと云ひて。笑ひしは。戯言なれども。墨畫の妙解なり

○墨蘭は。宋にて名手もあり。任諠は。花にそれぞれ名を命ぜしなり。蘭は。梅竹よりは事すくなにて。ゑがきやすく見えて。奥妙は得がたし。古人も。妙絶なるは。すくなきにてもみるべし

○墨菊は。專門名家もすくなきは。畫様韵すくなきゆゑ。專らとゑがゝぬなり。後世は。梅竹蘭菊の四品にて。花葉幹莖の畫法を。ゑがきならふなり

○葡萄は。僧日觀妙を得。日觀の畫妙。當時ゑれる人なく。鮮于樞のみ。其妙を知りて。尊み賞す。後世にいたり。人々珍玩し。贋も多く出づ。眞跡は葉つる等に。草書の妙筆有りて。たれも寫しえずと云ふ。總じて唐畫は。書と筆意同じ。書を善くすれば。畫意を知る。畫にたくみなれば。書をさとる

○畫馬は。唐より盛なり。唐の時。騎馬を用ひ。名馬貢獻も多く。士大夫も。良馬を好み。圖して傳へ。詩にもれほくつくれり。小馬を一筆にゑがくは。韋偃なり。此方にて。一ふで馬は。韋を祖として。大馬をも一筆にえがく。大馬の一筆は。雅韵なし。李用及は。病馬をゑがく

○畫虎も。大家多き中に。包貴。其子鼎ともに。虎を畫がき。子孫代々是を業とし。世に包家虎とよべり

此方虎の圖。大竹林。或は雨中にゑがく。豹の雨をさくると。列女傳にも出で。虎豹ともに毛を愛し。雨には出でず。又大林には。䶂鼠すむ。此毛に觸るれば。虎は虫を生ずるゆゑ。大林へは入

文學もなく。たゞ朝廷富貴の事のみ見ればえ。風流の趣もすくなく。畵格もいやしきなり。世人のこのみとは。よくかなふゆゑ。自らうつしやすき所あり。近時。沈南蘋の花鳥畫。大きにれこなはる。かれが畫。甚たくみなり。然れども畵法俗にして。格ひくし。是もうつしやすき畫風なり。それゆゑ。喜びこのむ人も多しと思はる。古人も畫のやまひを論じ。俗なるは第一にいましめたり。錢舜擧は。その身。得意の畫を。世人みて。そしりわらへば。却りて喜びしと云ふも。俗氣ぬけて。世人の好みに。あはぬを知るゆゑなり。又山水は。伊孚九の畫は。格高く。蕭散の趣有り。たまく詩を題せるも。雅致有り。伊は落第の士にてもありしにや。其餘。商舶徒いづれも雅畫はみえず。畫法も。山水花鳥ともに。畫成りてのち。藍すみにて。總地をそめ。細かきのそめもやうのごとくにせるも多し。古人も畫なりて。のちの墨染にていろをますは。畫のやまひなりといへり

○畫梅も。唐の比までは。さいしきなり。墨梅の祖は。花光和尙なり。衡州花光山に住し。禪意識學ともに。深き人なり。方丈のかたはしに。梅を多くうゑ。花の時は牀をうつし吟哦す。ある夕。月下の疎影をみて。はじめて墨梅をゑがく。うすゞみにて花を點せるは。かげなればなり。世に花光梅とてたからとす。揚補之は。圈法とて。花を一筆に。まろくゑがく。氣條も。補之。妙をつくす。此時。墨梅名家六人ありしが。花光。補之の二人を宗とす。湯叔雅は。倒暈とて。地をくまどり。花を白からしむ。僧惠洪は。早子膠にて生絹扇面へ畫き。月前燈下に映じ。宛然たる梅影なりとぞ

氣條とは。枝のまがらず。すなほにのび立ちたるを云ふ。おも木をも。大筆にて一筆にゑがくべし。近時は。墨のこきうすきをまじへ。數筆にゑがき。枝もまがれる多く。花びらも。二筆に。花びらの端にて。畫きわかつ等は。皆俗流なり。墨梅は。白梅の枝ぶりにて雅致あり。是古意なり。紅梅はいにしへは。姑蘇にのみ有りてはるか後に諸州へもうつれり。宋の晏元獻の詩に。更遲開三二月。北人應ㇾ作㆓杏花看㆒。是も紅梅をはじめて見たる意なり

唐畫の精良ならぬを見て。是は畫師の筆にはあらず。素人畫なりと云ふ人有り。唐土にて。畫祖とよばれしは。皆文士なり。其餘名畫と稱するも。多くは畫師にはあらずとしるべし。畫師の畫は。院體とて。文士の畫よりはいやしめり

○花鳥畫古よりも名手を傳ふるに。五代の末より。徐熙と黃筌二人より一派にわかる。山水に。玉。李二派あるごとし。黃筌は。墨がきこまやかにして。色をもちゆるも。いけるがごときを事とす。徐熙は。樹葉花葩も墨筆艸々とし。色をもうすくほどこし。花鳥の神韻を專とす。俗士は黃筌が美麗なるを喜び。雅士は。徐熙が。灑落なるを尊ぶ。宋一統し。黃筌は。さきに召され。徐熙はのちにめさる。黃は。徐が畫の高逸にして。及びがたきをねたみ。麁惡にして。格に入らずと奏しければ。徐は一生用ひられず。されども高尙を守り。當時の俗眼にこぶる畫をなさず。其子崇嗣は。志も父におとり。家法をかへ。一切に墨筆を用ひず。繪の具ばかりにて。うつくしくそめ出だし。生鳥生花のごとくにゑがく。是を沒骨畫と云ふ。沒骨とは。墨がきなきを云ふ。其後。劉常は。繪具ばかりにて。艸々とゑがく。一筆に二色をそめまじへ。花葉をわかつ。此邦にて。沒骨ノ草畫と云へるなり。劉夢松。殷仲容。鍾隱は。墨筆にて色をわかつ。丘慶餘は。一筆にて草虫を畫かく。陳常。僧布白。趙孟堅は。飛白筆にて。雙鈎白描をゑがく。郭思畫論にも山水花鳥は。上古よりも。後世にたくみをなせる多し。といへるも是なり。白描は。人物に云へる如し。雙鈎はかごうつしのことなり。飛白は元來。書家の骨法の名なり。後世はかごうつしのごときを云へり。又花鳥に。蜂蝶艸虫を。そへ畫がくを。點畫と云ふ。山水に人物を。そへゑがくを。點畫とも。點景とも云ふ。山のふちがきなきをも。沒骨山と云ふ。又禽鳥は。雌雄ゑがくべきに。此方にては。三羽五羽ゑがく。宋の夏奕は。鸂鶒(ケイセキ)をも。雄ばかり畫がき。俗流にそむけりとかや

徐と黃二人の畫を。古人評して云ふ。黃筌はうつしやすく。徐熙はうつしがたしと。其ゆゑは。徐は南唐の處士にて。學文ひろく。人物高し。俗士の胸中とは。大にことなるゆゑ。其畫。筆才ばかりにては。うつしがたし。黃は孟蜀の畫史にて。

畫譚雜肋

仲山高陽著

○畫のはじめは。黄帝の臣。史皇なりと云ふこと。世本。呂氏春秋等にも出づ。舜の妹嫘よりとは。畫史會要に出づ。封膜よりとは。張彥遠名畫記に出でゝ。穆天子傳を引きしが。畫史會要にはあやまりなりと辨ず。伏羲の八卦は。書と畫の祖なり。太古文字

日 月 鳥 蟲

等は。象形文とて皆畫なるも。書畫。一途にいづるゆゑなり。端冕袞衣は黄帝の製と云ふ。是十二章の畫有るより。黄帝の時に始まると云へるにや

○人物道釋畫は。漢魏よりも名手多し。後世は。人の精神うすく。畫神も上古に及ばず。獨。趙宋の。李龍眠の妙絶。古人にはおぢずとかや。上古は大着色なり。考工記に。設レ色の工。謂二之畫一と。釋名に。畫は挂なり。采色を以て。物象にかくとも有るは古意なり。唐に至り。呉道玄。一變す。是を呉裝と云ふ。此方中さいしきは。呉裝より出づ。陳鑑が寫照法有り淺絳なり。此方うすさい色は。是より出づ。白描とは。細筆にて畫き。色を用ひぬなり。此法なしがたし。此邦上古は傳はらず。中葉よりは。たれも白描を畫かけるは見えず。減筆は。梁楷はじむ。筆すくなく。艸々とゑがく。今此方すみ畫人物は。水墨法なり

○山水畫。唐以前は。筆をもちふることこまやかなり。是を拘研と云ふ。諸名手も。人物はどにはたくみを用ひず。唐に至り。山水畫にたくみを用ふ。中にも。王維。李思訓の二人。妙をつくす。是よりこの二家を宗として。畫法二流にわかる。思訓は。風骨奇峭にして。妙用をなす。王維は。裁搆幽澹なる中に神韻あり。王維の派には。荆浩。關仝。李成。范寬。李龍眠。王晉卿。董北苑。米元章。父子。黄子久。王叔明。梅道人。倪雲林。趙子昂。沈石田。文徵明。董其昌。諸子これを文人の畫法とす。思訓の流には。夏珪。趙幹。趙伯駒。馬遠。戴文進。呉偉。張平山のともがら。是を畫師の風とす。金碧山水は。思訓はじむ。綠黄を以ていろどり。金泥にてゑかきわく。王維は渲淡を專らとし。圖様缺除の所に。圖外の意をふくむ

家姪幼好畫。索居亦邈矣。時々求粉本而已。余嘗讀畫紀。抄謄爲譯。積爲巨冊。盖寄與。以誘其進乎技者云。日者岩太初。得稿本而喜之。就抄其便於學者數十條。謀上之木。余曰止矣。夫畫之妙用在運斡。豈空言所能盡。且淺狹所及。亦畫家常談耳。曷足流傳。但直筆獨斷。間砭時好。廼是家庭警誨也。恐引世君子之譏議。不若止之爲勝。固請者數次。遂與焉。岩生亦豈雞肋視之耶

乙未之春

高陽山人仲廷冲

序

有鄙夫同游名山者。其一曰。使之在輦轂之側。吾開舍其間。以司往來之利。必不難於得富也。其一楩梓豫章。大可以爲棟梁。小可以爲鏘觴者。不知其幾千萬。而遠不能致之也。是未始不欲觀於山也。唯其有見於利也。所以亂其思也。傳曰。耳目之欲接。則損其精。凡今稱能畫者。思殆且精。敗者從至。其心則謂。是足以取大人之游。而施名於一時耳。夫名從譽生。譽不博乎。則名不侈。苟要其博。惡得不從流俗所好乎。既與流俗同其好。則是流俗也。以若所爲欲出於流俗。猶却步而求及前人。不亦左乎。故其輝然。煌然。穠々然。翕々然。因說人目。以爲奇貨者。皆觀於山之類也。宜乎畫史之無風韻也。仲子和盖進乎技者也。其好之不措既已樂之。樂之至。則喜怒休戚。榮辱好憎。曠焉忘之。不少頃于胸中。夫如然者。又何亂思損精之有。今試使世畫史膠目塞耳。知學斯文。亦必無如鄙夫然。然則子和之精。學之所致。致思之至。畫之於詩也同。子和又善詩。是其所以出乎衆與。此編則其土苴也已。純卿性拙於詩。而喜言詩。不能畫。而好論畫。每見子和。等斯二者。頗聞其發墨行筆之意亦久矣。世傳子和之畫。或有不必然。盖其爲人。不能峻拒。請者麕至。求之大苛。有代爲之者云。及岩太初乞來余言。次其所知乎子和。以爲之序如此

安永乙未之夏五月

金峨井純卿撰

耶律德光(遼太宗)に。一時の權言にて殺を止むる慈悲の善き工夫とは云へども。矢張聖賢の云ふ所とても。是れを天下一統極まりなき厚恩を蒙ると云ひ。莫大の國恩と云ふなり。されど夫れには樹之風聲と云ひて。自身聊も人に對して。不實薄情なる仕方をせず。惟々律義木帳面にて。聊も乘邪(タルヒヅメ)なき一言の信をも間違はぬ所を教として。此の世の風俗を第一に正し。人々掟を金科玉條とするは勿論。朝夕末々のものまでに。心に感謝させるが大風化の基なり。遏レ惡揚レ善。從ニ天休命一を大有と云ひて。有レ大を大日如來同樣の所作とするなり

訓蒙淺語終

据るに。西戎の覇にして。中國の覇に非ず）の玉は
れたる程の秦穆公。老人蹇叔が鄭を征するは。何分
千里の遠方にて。且つ中間にある覇國の晋の邊土の
僻地を遙々跋渉して。鄭を襲ひ伐つ事は不注文にて。
迚も出來兼ぬるべしと言上しければ。穆公の逆鱗に
觸れ。流石蹇叔程の賢人にて。一圖に主人思ひなれ
ども。其忠誠は一向に通らず。却りて種々の惡口讒
呵を受けたれども。戰爭の事故。靦面のためし有り
て。鄭まで行き着かぬ中に。晋の國内にて最初蹇叔
が兼ねて申上げたる塲所へ。晋の先軫（當時一の家
老なり）大將にて。大軍を召し連れ行くを遣らじと
遮斷て。大戰せしかば。先軫は城濮にて楚の家老の
天下無レ敵と極め居りし人の。大軍を散々に打靡かせ
打擺したる智勇の名將なり。夫れ故。何の苦もなく
大將共を生擒となしゝが。秦と晋との間柄の事故。
晋の旦那（檀那）の御適母の内赦を蒙りて。逃げ歸り
たるは僥倖なり。さて最初に。穆公が鄭の城内へ守
護の爲めにとて納れ置きたる太夫三人。杞子。逢孫
楊孫の方より大欲心の奸計にて。鄭を襲ひ伐たば。
今取るべしと。極内に書面を以て届け來りしかば。

流石の穆公も亦之れが爲めに大欲心動き。以前の鄭
の守護と云ひ替はし。内々起請したる兩國の信義を
結びし誠を取り失ひたり。縱令注文通りに行くとて
も。世間の惡評を受け。後々迄も。心有るものには
後指さゝるゝ事なるべし。俗に云ふ。人は一代名は
末代と云ふ。此の塲所なり。先王は人の年壽は。假
令如何程永くして百歳に到るとも。百歳後の世話は
出來まじ。左すれば差詰は。當時は若輩なれど。至
誠實體に智慮深密。且つ臨機應變の早速能く主君思
ひの關までは。隷也不レ力。軍陳にては籠凍軍士のと
云ふ人を。人の内の第一の遣ひものにして。有鈎無
上の賢才とし。夫れを我無き跡。末々迄の世話させ
る筆頭とするなり。夫れ迚も。亦々其跡は追々右樣
なる人に兼ねて言ひ含め。指圖を致し置き（孔子の
仲弓に仰せらるゝ所なり）賢人は事扱ふ第一の大切
なる品物なれば。成丈截間無き樣にして。其外種々
の大小政事式目を。水も漏さぬ樣にするが。先王の
永く何事も無き清論の御宇となし。四民安堵の思を
させ。親を供養し。子孫を育てゝ。心靜に世を送ら
せ。天下百姓。佛亦救不レ得。惟君王救得と。焉道が

あること必定なりと云ふ意味を教訓ありたり。此等は實に善き言葉なり。孝行の誠の德に協ひなば。祈らずとても神や守らんとは妙言なり

○弟とはもと兄に事ふる稱にして。夫より轉じて他人の長者を敬禮する名目と成る。夫れ故に。入則孝。出則悌と云ふなり。入とは內に入るなり。出とは外に出づるなり。さて王制には。父之齒隨行。兄之齒雁行とあり。曲禮の肩隨レ之は。即ち此雁行の事なり。其譯は。父親程に年齡(齒なり)の違ふ人には。途中連れ立つ頃は。供の樣になりて從ふ。後に從ひ。兄程の違ひなれば。筋違(雁行)になりて從ふ。夫れを肩にて隨ふと云ふなり。何事に寄らず。古の敎には。夫れに準じて少長の極りあることなり。さて老人長者を敬禮するは。我父兄并の人を敬禮する譯にて。即ち吾が父兄を敬禮する一念の波及するなり。此れ是非とも。人は長者を敬ふべき筈の理一つなり。龜の甲より年の功と云ひて。兎角の智慧なれば。迚も老人長者の。浮世を多く暮し。事を多く取り扱ひ。手馴れたる者には追ばぬ姿なり。此れ老人長者を敬ふべき理二つなり。家語に。孔子見二羅レ雀者所レ得。皆黃口小雀なり。夫子其の所以を問ひければ。大雀善驚而難レ得。黃口貪レ食而易レ得といへり。其譯は。大雀は餌を拾ふとき。兎角氣を付け。心にて每度愓(ビク)々する故に取りにくし。善猶レ多也。小雀は餌に付けば。貧僧の輩御齋に付きたる樣に。餘念も無ければ。餘所も見ず。夫れ故に。取り易し。夫に付。長者之智。少者之贛。(家語)といひて。長者の言葉は相應智慮ある人なれば。多分は取り用ふべし。若輩の言葉なれば。發明なる人の謂ふ事にても。虚氣(ウカ)と取り用ふべからず。老夫自分の田へ水を引くの下地を爲るにては無けれど。智慧の有る無き計りに限らず。若輩は乘強(ノリツヨ)く刎剛(ハネツヨ)く。事と時宜とに寄りては。野猪武者の四郎にも案內して上手となるが。男の健氣心と。軍談師が評駁交りにて言ふとを聞きたり。此れは小々古の淳于髡が。一鮒魚一豚蹄の辨歟。奧山濱藏が左傳神道の講釋歟。何連にもせよ。滑稽に似て滑稽に非ず。此の軍談師の申す通りの譯故。存外賢智の君主にても。老人深切の言は聽かずして。若輩共の見込違ひなる不註文を用ふることあり。既に孟子は。賢君にて一時中國の霸者に成りたる樣に(左氏傳に

無き人物共は。父も母も同斷と覺え。と丶樣。か丶樣と云ひて。平日に分隔なきは。愚昧の一德なり。學者にも限らず。總じて身柄にて辨へ有る人程。平日より母を何の辨もなき者と承知し。輕侮する姿あり。此れは途方もなき了簡違なり。何か改まりて母の女子了簡にて。行き屆かぬ理窟を云ふとても廉立(カドダ)て謂はんには。士の身分にては。一先づ畏まり受くべきことなり。さて亦母親不心得者にて。分外なる事ありても。下賤は異見差し加ふべき事を知らず。身柄の者は。夫れ式の事は誰とても知らぬ者はなし。兎角物は一得一失ある者なり。禽獸知レ母而不レ知レ父と云ひて。周公喪服の制を建て定めし時よりの御言なり。都邑之士。知レ貴レ禰と云ひて。禰とは父の廟所なり。左すれば周公の敎なき前より。主君の祿を食む者は。自然天然に知りたることなり。夫れ故に無ニ恒產一而有ニ恒心一者。惟士爲レ能と。孟子（惠王上）はの玉ひたり。人は武士とは其所にて。士の心得能き方は。中々萬卷の書を讀む。我等の如き。愚昧のもの丶迨ぶ所に非ずかし

○前條申す通り。下賤の子育は容易ならぬ者なり。夫れ故。七拾五度泣くと云ふ。牛にも馬にも蹈まれず。一人の男。一人の女となりて。自分一人にて生長せし樣に思ひ。己が我儘のみを云ひ散らし。一向に親の指圖を用ひず。親の助力をもせず。酒色杯に耽り。惡き錢設けなどをなし。有頂天になりて。大騷ぎするもの。世間には間々あり。夫れを罰中りと云ふなり。始終改めざるものは。一生の所。覺束なきことなり

○さて亦孝行の事に付。一條（一件）の善き敎話あり。佛嬲(ホトケナブリ)は老人の事にて。若輩には無きことなれど。中華にて宋朝の時に。若輩の佛嬲り流行せしにや。王梅溪（十朋）といふ賢人ありて。御手前夫れよりも人々在家佛を大切にすべしと云ひたりしかば。若輩の者共。鳥渡分り兼ね。夫れは何の事にやと尋ねければ。王梅溪の答に。貴樣方の家に居らる丶親達のことなり。此佛は貴樣方大恩を受けたる佛なれば。釋迦牟尼佛よりも。貴樣方に於ては。別段信心すべし是を家の守本尊として。天にも地にも無き樣に。難有者と思へば。自然に天の冥覽に叶ひ。鬼神の加護

親より言へば親の當前(分內)の事なり。惟々貧乏人數人の子供持ちては。父親の拵一通りの事にては。養育出來兼ぬるべし。支那にて云ふ。七手八脚位の働をし。其上に兩親共三椀食ふ飯を。一杯宛も減じ。子供共に給させる樣にして。漸々に育つることなり。是を哀し〳〵泣き〳〵育てると云ふなり。夫も年柄に寄りては。困り果つる事もあらん。夫れ故に子を持ちて知る親の恩と。世に謂ひ傳ふるなり。是れは名言なれども。併し子を持ちて。初めて親の恩を知りては。遲蒔(當レ作ニ遲播一)後馳せなり。此言を聽聽(尙書)して兼ねてより呑込み。小々宛も親の助力をし。手支ぬ樣にする者は。了簡能き人と云ふなり。さて兩親には。右樣艱難苦勞して。育て上け呉れられたる事なれば。自分亭主となりて。專家の拵をし。兩親を養ふ時には。親の恩報じと思ひ。自分には成る丈旨物などは。喰はぬ樣にして。兩親には三度に一度は。肴の一頭一尾一臠も進せるが。孝の第一なり。與ニ椎レ牛而祭一レ墓。不レ如三鷄豚逮ニ親存一(韓詩外傳)と云ひて。何程大なる牛を椎殺して。親の墓所の祭をせんよりは。親の存命の內に。小さき鷄豚にても。一臠宛も進せるが孝行と云ふなり。右樣に心懸くる人は。第一天の冥覽に叶ひ。神佛の加護ありて。行末は相應なる門並の暮方もし。一生惡事災難なきは請合。事と時宜とに寄りては。富豪ともなるべし。世の中を能く〳〵考へ見るべし

聖人の敎に。父は貴く。母は賤しとして。父親存生の內は。父へ對し。母の喪服を一年に切り詰むることなり。父親果てし後は。母も父と同樣にして。三年の喪服なり。是れは周公御定めの喪服の例なり

さて父貴母賤と云ひて。聖人の御言葉に。父を天に較べ。母を地に較べて。天地の高卑を以て父母の貴賤を表するは。聊も相違なきことなり。併し天地を以て謂はんに。天より何程に穀物を始め。一切の物を生ずる陽氣を施すとても。下に大地なきならば。一切の品物生產する場所はある間敷なり。大日如來は。天の總括にして此世の御頭なれども。相手なければ仕樣もなし。夫れ故。其譯に準じて父貴母賤と云ふとも。父は第一。母は第二と。次第の有る計りなり。生中下賤の何の辨へも

斷なり。夫れ故。莊子は盡有レ天といひ。朱儒は盡ニ人事一而俟ニ天命一と云ひて。劉子の所レ謂の如くにして。夫にて思ふ通りに行き兼ぬる所を。天命（前の天命とは違ふなり）天運と定む。孔明の至忠至誠。大賢大才にて。今十年の年壽ありたらんには。天下は蜀の天下となりしなるべし。然るに天より年壽を貸し與へざるは。命之理微矣と。朱儒が論語の子罕言命の所にすゑたる一句は。鐵板註脚なりと云ふ挨拶に及べり是にて大先生顏の人も愕然として返答なし。世間に讀書する人は多くあれど。皆實に淺近なるものゝみにて。能く此の所の理を辨へたる者はなければ。誰と共にか語らんや。此條は儒學の根本土臺なり。儒學に志ある人は。反覆熟覽すべし

○忠の一字は。此世にて至重の事なれども。別に條を立てゝ反覆辨論せし故。今復茲に贅せず。惟小學題辭の瀠川熊氏の言の如く。論語の第六章孝弟謹信の所は。門人衆への敎には非ず。末の行有ニ餘力一。則以學レ文と云ふの一句にて分る。夫れ故。次七章の子夏の言も。亦不レ學之學を說けり。弟子とは子弟壯者（二字孟子）を云ふなり。世の若輩を敎導することなり。余謹みて先づ右一條を奉けて。當世の町在若輩の訓とす

○聖人のの玉ひし敎方を。金科玉條として崇奉恪遵し。先づ敎の手近き所より。其仕方を說かんに。人の木の岐（マタ）（節用集作俣訛）より生れたる者は無きなれど。貴人は勿論。下々にても。相應株家督ある者は。大勢の子供養育致す事。格別の苦辛は有るまじ。惟々下賤極難澁の輩は。子育の事は容易ならぬものなり。夫れ故。蓼莪の詩に。哀々父母。生レ我劬勞と云へり。其譯は我等の如き不肖の者恩報じする事も出來ぬ輩を。哀しく泣き〳〵養育して。莫大の劬勞なされたり。欲レ服ニ之德一。昊天無レ極と云ひし譯は。德は恩德の德。即ち恩のことなり昊天無レ極とは。天は穀物を始め。一切の品物を此世に生じ與へて。此世の人一統限りなき恩を蒙るものなり。夫を親に引（ヒキ）較（クラベ）て云ふなり。兩親の大恩。天地の如く。恩報じせんとは思へども。中々容易にむくゆ可きことならず。其大恩の仔細の譯を出入腹レ我等の事に付。蓼莪の下文に說きたれども。今日の事理にて考へ見るに。母親の抱擁（ダキカヽヘ）（俗作ニ抱拘一）位は。面倒とは言ひながらも。

ふは料揀違ひたり。素門の戒は愼み守らざる可からず

○往昔我等江都に在りし時。或る一先生余に語りて曰く。命定ニ有生之始一と。朱儒のの玉ひしは。吉凶禍福の命のみに限らず。皮之不レ存。毛將安傅の譯にて。命の土臺根本は。年壽長短の命なり。其年壽の長短。强ち養生不養生に在ることに非ず。顏子の早世にて顯然として分りたるとなり。夫にて推し考ふるに。年壽の長短にも限らず。吉凶禍福の命にても。興亡盛衰の命にても。皆自然の天運なり。中々人の心懸の善きと否とに付きて。吉凶禍福の受け方に違ひ有り。政事の仕方の善きと否とに付きて。盛衰興亡の違ひ有る抔と云ふは。俗儒拘墟之見にて。天下の大理を知らぬ者の說なりと。大先生顏にて我等に告げにき。我等忌々敷辨口を言ふとは思へ共。長者の事故無レ據。一先づ感歎せし顏をして受け。其跡にての返答に。併し先生仰せの通りの理ならんには。聖經賢傳の敎を立て。世に垂れたる千語萬語は。皆無用之言にて。（今俗間に。人の爲し事を嘲するに。いかひ御苦勞と云ふ諺なり）其虛事の經傳を。古來より崇奉する者は。皆大馬鹿の動天井なり。（此左傳に劉康公の民受ニ天地之中一而生。所謂命也。（此命は性のこと）是以有ニ動作禮儀（三百）威儀（三千）之則一。以定レ命也。能者養以之レ福。不能者敗以取レ禍（成十三年傳）との玉ひしは。凡爲ニ人上一者の心得方を說く儒學の根本なり。縱令最初は人々天地中和の氣を受け。天命の性は中分なりとも。（矢張性善譯なり。）後來人の了簡にて。種々の狂ひある事故。（寐惚先生の千なり瓢簞の狂歌に。捨て置けば。心の儘になりひさご。性は善なりとは申せどもと云ふが如し）周公木帳面なる禮儀三百。威儀三千の定規を建てゝ。天の授け與へし中分の性命にくるひの出來せぬ樣に。仕方を建てたる者なり。其譯を能く呑み込みて。萬事の取り計ひ。所作一切の行狀間違へぬ者は能者なり。天命の性を能く養ひ育でゝ。大賢。大聖となりて。以て大福を迎へ受く。是を養ふ以レ之曰レ福と云ふなり。之とは趣り向ふの譯なり。不呑込の者は天の與へし中和の性を。散々に我と打ち壞りて。萬事の所作取計一切の行狀を間違へ。果は已れが身に禍災を蒙ることあり。國家の事も亦仝

如くにして。氣血凝滯なければ。血脈營衛も自ら和平にして。黃髮鮐背若くは鷄皮鶴髮の老翁となるとも。病氣は聊も有間敷なり。右の箇條を愼み守らば。格別强壯の性質ならずとも。百歲の壽は得らるべし。又嗜ニ異味一者得ニ異病一(五雜俎)と云ふて。喫物喰(當レ作ニ奈何物喰一)する人は。偏病を煩ふとて戒しむ。併し總括の所は。兎角憂ひ恐るゝを以て。氣元(佛典に出づ)を傷らぬ樣にすると。色を愼しむとは。養生の肝要なり。軟かな藥研で研す命哉とは妙句なり。夫れ故。呂氏春秋には。論早定。則知ニ早嗇一。知ニ早嗇一即精不レ竭。(老子第五十九章莫レ若レ嗇云々。呂氏所レ本也)と云ひて。腎臟の精血は。肺臟眞氣の土臺にして。水火坎離。交合相濟ふは參同契の秘密藏なり。故に神仙傳に云へり。服藥(藥囊ともあり)百裏。不レ若ニ獨臥一と。是れ皆深レ根固レ柢之道(老子第五十九章)にして。老子の教なり

○或人謂ふ。醉而入レ房は。素問には不養生第一の戒として。精々いひ置けり。併し飲食男女。人之欲存焉とて。聖人も旨酒。珍味。美婦は此世に誰とても嗜好まぬものはなしと云へり。惟其中。酒天之美祿(漢書)なるに間々御手前の如き生得嫌の野姥(俗に作ニ野暮一。今改ニ野滕一。極新奇)店の鉢植あり。歷々方は勿論。下々にても町在富豪の家なれば。豔妻は申すに及ばず。二人三人の美麗なる妾滕を取り替へ引き替へ樂しむ輩は。壯年の內は勿論。晩年追々草臥武者になりても。每夜多々者相手に酒盛し。酩酊の跡の句切には。何れ也(說文長箋に也の字を女の陰門とす)の字を用ふるなり。此は世間一統の定例なれば。素問に何程親切の戒ありとも。誰か守るべき。夫れ故に。貝原先生は謹愿篤實の君子なれども。人の晩年の所を案じ。養生訓の中に、孫思邈の房中補益の秘術を委しく書き載せたり。仁人君子。此世此人を思ふの一端なり。御手前などの議論とは。大相違なりと。余之に應じて曰く。夫れは朱の黃震と云ふ賢人の。黃氏日抄に孫思邈が房中補益の術を委しく辨駁せり。大意謂ふ縱令全く漏精せずとも。小々づゝ精氣の費えぬことはなし。生中に補益の術を恃みにして。滅他無性に婦人を弄べば。身命を殞し失ふ基なりと云ひたり。左すれば縱然補益の術を行ふにもせよ。稀れ〳〵に行へばよし。稠げ〳〵に行

百年第一の賢君と成りたり。されば朝日氏が言へる如き。卑き議論の實體なるを。今日通用の論とす。先年江都に在りし時。武州桶川在の名主某といふものあり。小々青表紙を喰かじり。王の鼻にて餘姚（王陽明の學なり）の學問を人に聽きしにや。其流を汲み取りし心地にて。乃ち我等も今日より聖人の巢立となれりと云へり。聖人の巢立とは。面白き。左禮言なれども。中々聖人の巢立は。自暴自棄にはあらね共。容易にはなれぬ者と。我等は諦らめ居れり。夫れ故。此條賤は苧環の如く反覆して。演舌するなり。老婆の絮々を厭ふ事なかれ

○人不レ可二以無一レ年。顏回不レ死可二以聖一。諸葛亮不レ死可二以王一と云ひしは。千古不易の名言なり。兎角人間は成丈の養生を能くして。長命を保ち。稍々と何事も心永に爲すべし。さて顏淵程の大賢人は。不養生などは。聊もこれなき事は必定なれば。其早世は定命と謂ふべし。兎角世間には。不養生にて早世するもの多かるべし。其理奈何と云へは。至極生質强壯にて却りて若死し。生質虛弱にて。却りて相應年壽を保つものあり。强壯の人は。己の强壯に任せて。大酒多房の人多し。是れ早世の基なり。虛弱の者は。多房は勿論。大酒。大食も喫物喰は勿論。少しにても氣味惡き物は箸も下さず。總じて軀殼に碍る事は。自身にて氣を付くる故。却りて年壽を保つなり。俗に甲斐なき星が夜を明すと云ふは此譯なり。人の長命。短命は。養生。不養生に預る事に非ずと云ふは僻事なり。今行燈を風蔭に置くと。風當りに置くとは。燈心の炷方油の減方に違あるべし。瀨戶燒皿鉢の碎け易き物にても。取り扱ひ方丁寧ならば。永持し。遣り放しなれば永持はせじ。孟子の物得二其養一無レ不レ長。失二其養一無レ不レ消（消亡なり）とは。大賢の妙言なり。さて養生の術には。種々の仕方あり。夫故。貝原先生は養生訓數卷を著せり。今惟大略を擧げて玆に記す。厚酒肥肉。爛腸之食（呂氏春秋）と云ひて。別段の濃酒。脂濃肉食は。腸胃を腐爛さする物なりとて戒しむ。靡曼皓齒。伐レ生之斧（同上）と云ひて。肌目細く（靡字）滑なる（曼字）白齒の新造は。人命を截斷する斧なりとて戒しむ。流水不レ腐。戶樞不レ蠹（同上）と云ひて。兎角身を程能く勞動して。着坐勝にせず。水の流れ行く如く。樞の廻轉するが

は不筋不道の聚まりたる氣味惡き財寶にて。子孫にまで及ぼすことの出來ぬは申すに及はず。我一生とても持ちれはせる事も覺束なし。さて我等の願望は。生涯人を欺瞞して借り倒しなどせず。折々は極難澁の輩には。當百一枚二枚の施をもして暮らせること。今日の姿ならば。實に難有事なり。个樣ならば欲得を願ふ内にも。小々づゝの天理とて。善念善心を拌合せたる理に中る。至極結構なる送り方と存ぜらるゝなり。さて我等に限らず。大小とも夫れ〳〵の身分に應じて。天理。人欲能き程の調合ならば。今日の善人君子と云ふべきに非ずや。先年朝日直次郎といふ偏屈なる書生來りて。一體人は惡くてはならず。左はいへ餘り善に過ぎても。亦惡しゝ兎角中位の所がよしと云へり。此人多年妻召し連れ。處々歴廻りて。心付たるにや。中庸の續俚諺抄を作りて。我等は中庸の中を。今日人々の取り用ひ。よき所の譯と定む。即ち古人の云ひし。恰好道理とは此事なりと説けり。其時。我等直次に向ひて。御手前の云ふ所は。胡廣柳子厚(宗元)のいへる中にて。左樣なる中は。中には非ずと難じたりしかば。同人答に。其所は至極御尤千萬なれども。我等がいふ所の中は。何國にても相手ある中なり。御説の中は。迚も世間には相手あるまじきなり。夫れ故我等は是を中と定むと云へり。其時我が弟子共大勢打ち寄り。直次を嘲弄せしが。此節に到りて。能く〳〵考へ見るに。學者と云ふものは。兎角唐山にて云ふ。羊頭牛角にて。招牌と所作とは。大相違のこと多し。韓退之程の人にても。張籍が異見に。先生の議論は千古に卓絶すれども。行狀は守レ常庸人にも不レ及と云ひたり。(博賽の戲を咎めたるなり)左れば看板は少々化地に見えても。功能書と相違なき藥を丸散として。賣り出だすと同斷にて。口能言レ之。身能行レ之。國寶也(荀子)と云ふ所を目的として學問し心懸けて。人にも敎ふべきとなり。併し此理は實體なる譯にて。卑近なる樣なれども。我々にても他人にても。手取りて直樣行ひ得らるゝ事なり。漢文帝は。天資拔群の君なれど。張釋之と云ふ賢人に治道を尋ね問ひ玉ひしときに。毋二甚高論一。使三今可二施行一と云へり。夫れ故に張釋之も。秦滅漢興の理を明細に言上せり。此れより文帝。何事も夫れを定規として取計ひ。前後四

之利在レ樹レ德。德とは恩德恩惠を云ふなり。平日下々を惠み。幼氣に取り扱へば。天の冥覽に叶ひ。國家に於て幾久しき利益あること疑なし。其中尤も凶荒の賑濟は。數十萬生靈(人民のこと)の命を救ひ。全活する事なれば。在上の人の心得べき緊要の事なり。范文正公が杭州の飢民を救ひ取りて。我多年宰相を勸めし內の勝業なりと謂ひたりしは。聊も相違なき事なり。陳錫載レ周。能施也(昭十年左傳)と云ふも。文王卑服(儉なり)即ニ功田ニ(勤なり。田作見廻)の勤儉を基するに非ずや

○聖人赤條々一團天理。衆人滿腔子利欲心と云ふ。赤條々とは裸體のことなり。一團とは一塊なり。(一團血の一團と同じ)天理とは仁義の善心善念なり。腔子とは軀殼のことなり。聖人は裸體にして天窓の天邊より。足の爪先まで(孟子の摩レ頂至レ踵なり)天理の善心善念計りにて。聊も自分の欲得には搆ひ拘はらぬと云ふ譯なり。さて何程心得能き人にても。迚も聖人の一塊の善心善念には及び難きことは。既に後漢の第五倫ほどの大賢人にても。我が私心のある事を。千里の馬と子の病氣の事にて。白地に言ひ置かれたり。況んや常人凡輩に。何程聖人の道を思ひ慕ふと雖ども。天に昇るか如き所作(孟子に据る)にて。及ばれざることは明に分りたる事なり。さて史記貨殖傳に載する。曹の邴氏が家の約束。內極に俯有レ拾。仰有レ取と云ひしは。今我邦俗に轉びても。徒は起きるなかれと云ふ譯なり。荀子に載する。民語曰。欲レ富乎。忍レ耻矣。(一條)傾絕矣。(二條。楊註。謂傾レ身絕レ命而求也)絕ニ故舊ニ矣。(三條)與レ義分背矣。(四條。楊註。如ニ人分背而行ニ)此譯は金持にならんとには。耻をかくことを堪ふべし。(忍レ耻)盜人追剝の事ならねば。絕體絕命の危き事までも臆せず致すべし。(傾絕)舊き知音昵近は。事と時宜とに寄りては。世話の懸ることあれば。一切絕交すべし。(絕故舊)筋道には後向きになりて行ふべし。(與レ義分背)是れは今我が邦俗に三闕とて。耻をかけ。(忍耻)義理を闕け。(絕故舊に當る樣なり。與レ義分背にはあらじ)用を闕け(事を闕けと云ふ)と云ふ所なり。迚も世間並の了簡にては。金持にはなれぬとなり。倘し右二書(史記荀子)に載する事にては。縱令奈何なる長者になるとても。我等は一向望なし。夫れ

借金とならば。大身とても。追々には旦那の御用も勤まり兼ね。甚た本意なきことゞもなり。されば諸事倹約にして。出納の世話までも能く行き届き。主君の仰せ付けらるゝ用向は。何なりとも手支なく勤むるが。士の本意たるべし。此理は上下とも同様のことにて下部微賤の者は。寸時も懈怠なく。力限りに働き。其上。何事も節倹にして。追々には暮せる様にすべし。今日門並の暮しが出來れば。門並の義理仁義も出來る姿にて。楚莊王が人生在レ勤。勤則不レ匱と。(左傳宣十年傳)下々へ敎へられしは。此譯にて實に妙言と云ふべし。先年江戸にて。野師の言を聞きしに。世の中は蠅虎(ハイトリグモ)に袋蜘蛛(フクロクモ)。挊(カセ)ぐものもあり。挊がぬもあり。挊がねば一生天窓(アタマ)は揚らぬ提挑の川流れなりと云へり。旨い哉。此言や。野師の言なりとて。侮るべからず。さて能く挊ぎての上は。諸事倹約するを肝要とす。荀卿曰く。偷生淺知之屬。糧食大侈。不レ顧二其後一。操二瓢嚢一。爲二溝壑中瘠一。(瘠與レ胔通。楊倞從レ字作レ解。可レ笑。日知錄詳矣)偷生淺知之屬とは。假初に此世を暮す智慮淺き者を云ふ。糧食大侈。不レ顧二其後一とは。喰物(糧食)が澤山あれば。(大侈)跡には頓着なしに遣放(ヤリパナシ)(鑓話に作るは非レ是)にしてしまふこと。操二瓢嚢一爲二溝壑中瘠一とは乞食となりて。手に瓢簞と嚢とを持ち。物貰ひにゆき。はては途中に倒れ。溝や壑へ投げ込まれてしまふと云ふことなり。此の荀子の言は。天下の下賤。一統の心得居るべきことなり。さて亦史記貨殖傳に。夫千乘之王。萬家之侯。百室之君。尙有レ患レ貧。而況匹夫編戸之民乎とあり。千乘之王は。大國諸侯にて天子には非ず。萬家百室は。當時の御旗本位の人をいふ。右樣の高持にても。貧困に迫る事あり。況んや匹夫の戸口を並べて(編戸。史記註家無レ解。編者。編連之義也)住居する者は貧乏にて。安穩に送り兼ぬるは。當前のことゝ云ふなり。周赧王は避債臺といへる臺を築き。逃げ上りて債催促の者を避けたりしが。終に滅亡に及びたり。實に無レ臺(當レ作レ無レ端)事共なり。有國有土の君は。勤倹を以て倉廩府庫を充仞するは。凶荒之賑濟。不虞之警備。行理往來之厨傳。四方奔命之嚢。槖より何事に寄らず。手支なきの土臺なり。然れども管仲言へるあり。曰く。一年之利在レ樹レ穀。十年之利在レ樹レ木。百年

授け。多分の手當を與へ。老母の養をさせたり。其時に文正公同人に。春秋の讀法を授けられしが。其後文正公も睢陽の太守を引きて。都へ歸られたり。其節。孫明復も亦引き拂ひ。舊里へ還り。其後。十年程經て。天朝にて孫明復を召されし時に。倩々見れば。先頃御世話なされたる孫生なりしと云ふこと。言行錄に委しく出でたり。左すれば貧は諸道の妨と(北窓瑣談に見えたり)我邦にて云ふは。實に妙言と謂ふべし

○貧者士之常也(列子天瑞)と口占に。榮啓期の言を引き(口占は唐人の詩題にては。口號と同斷。今漢書に据りて口占に直す)士の貧乏は。當前にて頓着するには及ばぬ抔と極め居る人あり。夫れは武家なれば。相應の祿。百姓。町人なれば。相應の株。田地持ち居れば。(株は羊溝之鷄三歲爲レ株之株)貧乏とはいへ。兩親妻子の養に困る程の事もある間敷なり。左様の人は。貧にても清貧とも云ふべき貧にて。知レ足の道を以ていへば。至極面白し。若し水飲捧手振の百姓町人は勿論。武家にても一向小給の人は。具慶(兩親存生のこと)の時。その養も出來かぬ。亦風木(家語に見ゆ。兩親死後のこと)の後とても。子供多くして。冬煖而兒號レ寒。年豐而妻啼レ飢(韓文進學解)と云ふ姿ならば。實に進退維谷(詩大雅)の譯にて。奈何に頓着せじと思ふとも。人情左は出來ぬものなり。俗間に。凡百四病(佛典に出たり)の煩も。貧ほど難面ものはなしと云ひて。朝夕妻子に歎き付かれては。奈何なる人にても。木佛。金佛には非ざれば。傷心すべきことなり。中華諺に。好男子沒東西と云ひて。至極爽なる好男子なれど。赤貧にて(南史)自分の餬口にも困る所は。笑止千萬なりと云ふ。況んや妻子眷屬多くして。其日〳〵を送り兼ぬるに。夫れをしも頓着せぬと云ふは。小々痩我慢に似たり。沒東西とは金錢のなきことなり。方以智の通雅に見ゆ

○貧者士之常といへば。侍(士なり)の錢淰は。(紙捻りの捻はひねることなり。いじるに用ふべし。淰の字にては不通なり)いらぬことゝ口癖に云ふ人多し。夫れは貪欲貪濁を戒めて。清貧を樂しむと云ふ心地なれば。前條申す通りにて。至極面白し。倘し不身持にて。酒嗜。女好。旨物嗜などにて。頸も廻らぬ

聊も人の陰私などは申度なき誓願なり。庶ニ幾于免レ罪乎

附記。土生(ハブ)熊五郎(名應期)といふ書生ありしが。此人は井上四明先生の弟子なれども。青藍の譽ある才人にて　拙老が十四歳の時。廿八歳と言はれしが。一寸したる經義の諸説ある所などは記臆し居り。且つ歷史は大自慢にて。文章も達者なり。兵學は平山行藏先生(名潛字子龍)の弟子にて。武備志。紀効新書などは熟覽したる人なり。我等も厚く世話になりたり。同人錦帶子と何れの所にて出會せしにや。ちゝの學問の自慢言はれしかば。錦帶子の返答に。御手前左樣に御詫宣を謂ふならば。墨子を讀み取りて見よと謂はれたり。又熊五郎挨拶に知れぬ所あらば。張紙にて持參あるべしと。兩龍の戰。互角の勝負にて。火焰口より出でぬ計りなりし。併し此掠脚(角力)の團扇は指しにくけれど。面白と人々言へ傳へたり。熊五郎歷史は大自慢なれども。實は古今名將傳を帳秘として其外の御笥は五代史一部なり。さて五代史に付。大嘘の事あり。我等十六歳に到りて。同人の學問に。無理我慢多きことを窺ひ知れり。一日五代史の唐本にて。(和版の五代史は。矢張唐本の儘にて改正せず)中筋の所に指違(サシチガヒ)ある所を讀ませければ。熊五郎非他(ヒタ)と差し迫りて。其返答に李克用射ニ針於百歩之外ニの事を問はれたり。我等答に。夫れは李克用射術の妙。且つ眼精の强きを云ふ計りのことにて。別に譯はあるまじきなりと云ふ。同人の說に。針は釘の訛なり。若し針ならば見留まりもせじ。射樣もなしと云ひたり。我等又答に。針も疊(タヽミ)差(ザシ)の針の樣ならば。見分らぬ事はなし。且つ通鑑に。鍼孔と有るを引きて證とせしかば。流石我慢の强き人なれども。大にひるみたる樣子なりき

○宋の范文正公(仲淹)睢陽と云ふ所の太守(郡代)たりし時。孫明復索遊(人に金錢を貰ひて。遊歷をするなり)して。二年に兩度罷りたりしかば。其度々に一貫文づゝ賜はり。跡の時に。文正公仰せらるゝには。其元は書生の樣子にて。濫吏の乞客とは見えず。奈何の譯にて廢學して往來ばかりするかと尋ねられしかば。私儀老母の養に因りての事と答へたり。文正公仁者の事故。不便に思ひ。睢陽の學職を

り。俗に云ふ人の振見て我か振直せとは妙言なり。我が振の見苦敷くなき樣に仕度ものなり。兎角人は譏咄の席にては。釋迦牟尼如來の牟尼と云ふ字を守るを肝要とす。（牟尼は寂默の義なり）竹林の大先生阮嗣宗は。阮籍胸中壘塊。是故以レ酒澆レ之と云ふの流義なれども。晉文帝に阮嗣宗至愼。未三曾臧二否人物一と賛められたり。流石に嗣宗日々醉鄕に遊び。蜉蝣の身世を忘るゝ。此れ或は一道なり

○我十五六歲の頃。和歌師春海。畵工芙蓉の兩人。亡父と懇意にて每度宅へ來りしが。兩人共に否は轆轤の如しとも言ふべき辨者にて。至極面白き人物なり。併し兎角譏話は好物にて。兩人共に人の惡口は鰻鱺の蒲燒よりも旨しと言はれしに付。亡父跡にて。あれは散々不德の事と云へり。我等も亡父の傍にて。每々兩人の興に乘じて譏話するを聽きしに。人の陰私（內證の事）までも。一々披露に逮び。聽くにも聽きにくき事共あり。子貢の惡三訐以爲レ直者一と云ひしは。此兩人のことにや。息夫躬の歷詆は。人畏二其口一と漢書に云ひしは。至極尤千萬なり。芙蓉は世說を諳記して。世說にて惡口を云ひ。春海は和漢の學を記臆し。夫を引き〳〵惡口種子とし。面白く謂ひなされたり。荀子の傷レ人之言。深二於矛戟一と云ひしは。此兩人の如き口給のことにて。今俗に如レ劍と云ふ譯なり。其前既に大噓の一事あり。諸葛錦帶（諸葛次郎大夫）といふ儒者あり。北山先生（山本喜六）の果てられし時。亡父宅へ來りしが。未だ初見の禮も直魂逝ぬ內に。䫌（唐の俗字）と懷中より似山先生哀辭といふ文を取り出だして示されたり。錦帶子は。一體徂徠學にて流行後れの學問なりと嘲笑するもの多けれど。其哀辭を見るに。精思銳筆にて中々綴りたる模樣も能く。北山先生の晩年に。內々にて勾欄（芝居のこと）の金主をせし事を。意地惡く天下へ流布せんが爲め。結尾に司馬樂司馬樂と云ふ辭を置き。洒落（左禮）たる所などは至極手際なり。併し其喜可レ知也と云ふ氣色にて。實は祝詞なり。射レ人必射レ馬。擒レ敵必擒レ王と。古來より云ひ傳ふる如く。徂徠先生九世の讎を復する心ならば。徠家の忠臣とも云ふべきにや。我等とても。錦帶子同樣にて。學者達の惡口を云ふと多くあり。併し我等は只學問文章の事にのみ辨駁して。餘力を遺さず。されど

ひ述べたるにはあらず
○禮居ニ是邦一。不レ非ニ其大夫一と云ふは。孔門の敎なり。其譯は領主の見立にて。大夫に仰せ付けられ。領主に成り替りて。一藩の取扱より町在までも。見張りて下役共へ下知する人なれば。其下に住居て。何事に寄らず。世話を蒙むること莫大なり。然るに小々の疵瑕を指して。彼是批判するは。忘ニ我大德一。思ニ我小怨一と云ふの理に當る。澆季の惡風俗なり。併し人は君長は申すに及はず。同儕なりとも。妄に之を誹謗するは不厚德の事なれど。兎角議話は。世間一統大流行なり。さればこそ二三人打ち寄れば。彼是と人の噂を言ひ。人の爲す事を批判して。樂むこと多し。夫れ故に。多人數會合の席にて。人の惡口を謂へば。誰とても挨拶に及ばぬ人はなし。人を譽むる話なれば。一統皆不受なり。韓退之が文に云ふ通りの譯なり。往昔より同樣の事と見えて。三國の司馬徽は。厚德の人にて。一世の弊風を矯め直さんが爲めに。誰とても皆善と謂ひたり。或日に。人來りて。拙者悴相はてたりと云ひしに。折節耳が小々龍の耳に（龍の聽は以レ角不レ以レ耳と。王李海云。困學紀聞に見えたり。再び按するに。七修類藁には。易林を引きて云。牛龍耳聵也と）なりたるにや。餘所の人の好殃（ヨシアシ）（唐の俗語）を言ふと思はれたれば。亦善と挨拶に及びぬ。女房氣の毒に思ひ。其人の歸りし跡にて。理窟もなきことを已來は云ふまじと異見せしかば。卿の言葉も亦善と云はれたり。諧謔話とは雖ども。至極味あることゝなり。宋人の詩に。人の善惡を謂はぬ人を譽めて。師云。耳重知ニ師意一。人是人非不レ願レ聞（聯珠詩格に見たり）と云へり。これ妙句なり。家語にも言ニ人之惡一。非ニ所ニ以美一レ己。言ニ人之枉一。非ニ所ニ以正一レ己。故君子攻ニ其惡一。無レ攻ニ人之惡一と云へり。其譯は。人と云ふものは。人の惡きことは。早速に心付きて誹謗すれども。自分も夫れと同樣の事。澤山あれども。心付かず。左すれば自分の行狀を直して。結構にする理に非ず。（非ニ所ニ以美一レ己）人の枉りたる事は精々咎むれども。自分の枉りたる事には心付かず。左すれば己の行狀を正しくする理に非ず。（非ニ所ニ以正一レ己）韓文に謂ふ。同レ浴而笑ニ裸體一の譯にて。聊も自分の益にならぬことゝなり。且つ左傳の尤而效レ之。罪又甚焉と云ふの理に當れ

きことなり。要レ有二前程一。勿レ作レ沒二前程一（此語は西遊記に見えたり）と。中華の諺に云へり。先々の途。差し迫らぬ樣にと願ふことならば。兼ねてより窮途（阮籍。窮途之嘆ある故に斯く云ふ）の歎なき樣にすべしとなり。さて亦人間重二晩晴一（天意憐二幽草一。人間重二晩晴一は。古人の詩句なり）と。華人は諺に言ひ傳へて。日暮の霽は朝朗より晴るゝとは。一際好晴にて。天氣の永持するものなりと云ふ。夫れと同斷にて。人間晩年の開運は。一入（ヒトシホ）能く富貴長久にして。子孫までへも及ぶものとて。心得ある人は。別段に悦ぶことなり。奈何にも早年より分外の立身出世は。事と時宜とに寄り。魔の指すこともあらんか。併し夫れ迚も。積善の餘慶ならば。天之所レ授にて。福祿の子々孫々へまで及ぶこと疑なし

○天之所レ授。雖レ賤必貴。（史記趙世家に見えたり）雖レ貧必富。（此一句以レ意加）無レ災無レ難到二公卿一（東坡の詩の句なり）堆レ玉積レ金充二室家一（老夫の續貂なり）兎角此世は。先祖仁德の餘慶。祖父親達の骨折られたる餘澤と。當人の心懸とにあることなり。併し我邦は。支那後世の樣に。農人鋤鍬を擲ちて。浮華の詩文位にて及第して。歴々となるが如き。不木帳面の事なき國にて。大名小名は。永く大名小名。士農工商は。永く士農工商なり。今日泰平の目出度御世は。夏殷周三代の盛時と異ならずとす。匹夫などは老子の所謂。安レ分知二止足之道一の教に從ふを。第一の心得となすべきなり

○唐の薛能が漢南春望の詩に。詩賦求レ才不二是才一。と云へり。唐人の詩賦は。兎角浮艶の詞のみを貴びて。世務には用たゝず。惟々唐朝の掟の審言書判の判は。入り組みたる事の判斷取扱を認めさする事なれば。是は至極人才を試むる目的となすべきなり。言は言舌の爽なるを主とす。是も啌と才智を見留むる譯には中らず。審は人品骨柄なり。書は手迹なり。皆浮艶の詩賦同樣にて。經世の才を試むるに足らず。さて我等は。學事ならば古人にも劣るまじと思へども。今日の取扱事などは。固より不功者にて。在地の名主にも及ばぬことは必定なり。且つ山鹿野麋にて。性質橫着物なれば。縱令當時の如く老病にならずとも。此世の用だゝぬ事は。自身辨へ居るが故に。前文の如くに言ひたるなり。虛僞を飾り。空言を言

馬遷其所を不辨にて。彼是分疏(言分をするとなり)せし故。自身も宮刑(陰莖を取る仕置なり)の罪に罹りたり。夫につき發憤して。其事に似寄たる事の有る所には。史記の中處々に憤懣の語を述べたり。游俠傳を作りて。游俠を賢豪間の者と云ふ。游俠は賢人と豪傑との際の人にて。生中に季次。原憲(皆孔子の弟子なり)などよりは勝れたる樣に謂はれたり。夫は自身の宮刑を被りし時。朱家の季布を救ひたる樣に。俠氣(男立氣なり)の人。側より分疏(言分)する者なきを歎きての事にや。文章の所は絶妙なれども。理窟はもとも聞えず。さて太史公(司馬遷なり)と云ふ人は。古人も是非謬二于聖人一と云ひて。仁義の道には深き執心はなき人なり。夫れ故に伯夷傳には。天道是耶非耶と云ひ。貨殖傳には。貧賤好語二仁義一。亦足レ羞なりと云へり。經濟向き當世の取扱方などには。至極面白き工夫なれども。兎角英雄嗜にて修身齊家等の事には。頓着せざる學問の仕方は。能く左傳を讀みて。春秋の間の事を覺ゆるが歷史を讀む基本。又善人君子となる基本なり。夫れ故。温公其御趣意にて通鑑を作られたり。實に千古の卓識。聊も相違なきとなり。近時清朝にて。左繡。左氏紀事本末等の書を作りしも。是亦皆左傳を崇奉する見解より出でたるなり。左氏の二百四十二年は。封建の時の話にて。支那後世の郡縣とは。摸樣大相違なれど。併し治亂興亡の總轄(總括なり)には替りなし。其上。列國大夫の賢人君子の言行具に存する書なれば。詩。書。語。孟等を除きて外は。左傳に及ぶ所の書なし。實に大官家(天子の御臺所のことなり)の料理。公羊。穀梁等の賣餅家(魏志鍾繇傳)の比擬すべき書に非ず。最左傳中にも。小々の疵瑕は有れど(鬻拳の兵諫。齊人殺二哀姜一等の論なり)夫は白璧の微瑕にて。總體の所は奧床敷道理を述べ治亂興亡の鑑にて。古今紀事の書の奇妙不可思議とも云ふべき書なり

〇人は縱令少年の時は。辛苦艱難(世俗に用ふる難行苦行なり。難行苦行は本佛語なり)するとも。老年に迨びては。隨分門並の暮しをして。安穩に老を送り度ものなり。夫れには平生心懸を能くして。人を欺誑め借り倒す樣なる事をせず。亦貧乏人などには。折々は小々たりとも惠施し。總體筋道に間違はぬ樣にして。行末晩年の窮迫せぬ所の冥理を考ふべ

俊傑在レ位則有レ慶（告子下）とは。諸侯の國にて。俊傑のすぐれ人。上の位に立ちて政事の取扱をすれば。天子巡狩の時褒賞あるを云ふなり。荀子非十二子篇に。仲尼。子弓（仲弓なり）を稱して曰。群二天下之英傑一。而告レ之以二大古一。敎レ之以二至順一。同上儒効篇に。又仲尼。子弓を稱して曰。其窮也。俗儒笑レ之。其通也。英傑化レ之。豪傑と云ひ英傑と云ふは。皆同樣にて。衆に勝れたる人を云ふなり。白虎通卷三に。禮別名記と云ふ書を引きて。百人曰レ俊。千人曰レ英。倍英曰レ賢。萬人曰レ傑。又楊倞が儒効篇の註にも。別名記に据りて。倍二千人一曰レ英。倍二萬人一曰レ傑と云ひて。人數を以て俊傑等の字を分てるは。拘泥の愚説なり。右前に申す通り。左傳。國語の二書には。並に英雄豪傑の字なし。戰國に到りて大騷亂の世となり。説客の策略用ひられ。始めて英雄豪傑の名目顯れたり。是れ亦民之多レ幸。國之不幸（左傳宣十六年）の一端なりとす

○前條に云ふ學者口癖に。英雄豪傑を稱するは僻事と雖も。實は學者の罪に非ず。其本は皆史記より始まれり。凡そ我邦にて。讀書の者は。素讀の仕舞次第に。直樣史記に取り懸ることゝす。左傳は。經例ある書故に。初學には自力にて讀み分くる事六ヶ敷けれども。史記は小々才氣ある者には。數遍讀めば荒増の似寄りたる噺は。出來得べし。其上項羽高祖の本紀。陳勝世家。蘇秦。張儀。范雎。蔡澤列傳四公子列傳（孟嘗。信陵。平原。春申）韓信。黥布。彭越列傳。刺客の聶政。荊軻等の列傳を讀めば。其人其事を眼前に見るが如く。文采人を聳動するに足りて。不レ覺不レ知遂に學者先入の主と爲りて。動もすれば輙ち英雄豪傑の四字口癖に出たがることとなり。宋儒の讀レ史令二人心粗一（粗とは。今日事の道理を細に考へぬこと）と云ひしは。尤も千萬なる言なり。さて司馬遷が史を作りし本意は。與二任少卿一書に委しく述べたり。併し李陵が匈奴にての戰。流石名將の子孫にて。天晴の働とは雖も。不幸にて兵家の忌む所の天井へ（四面高く中卑所なり）陷り。生擒と成りたり。時の運にて無二爲方一事とは雖ども鼎鑊に就くまでも。氣健に了簡を定め。降參せぬことと蘇武と同樣ならば。司馬遷の左袒して贔負執り成すこととなれど。何にもせよ。匈奴へ降參しては無二申譯一姿なり。司

者はなけれど。去りながら其學流一時天下に流行蔓延せし故。今に到りて矢張書生の心腸に沁込て。其習氣拔け兼ねる事と見えたり。我等も先年同藩の士衆の頼にて孫子。呉子。司馬法。六韜。三畧を講釋せしことあり。尉繚子太宗問答は。未た講せず。(尉繚子は註家。梁惠王の時の人と云へども。的證なし。史記。秦始皇本紀に。大梁人。尉繚來說二秦王一。捨二三十萬金一。六國を滅す事を教へたれば。始皇從二其計一。毎レ見二尉繚一抗禮。衣服食飲。與レ繚同じくせり。然る所。始皇惡相形なれば。油斷ならぬ人物なり。不レ可二與久游一なりと云ひて亡去らんとする位の人なれば。尉繚子は此の人の作に相違なし)右五部の書を直解開宗徂徠先生の國字解などに据り。又我が流義の考證を加へて。一家の兵學を建立せしかど。追々老年に及びて。無益なること心付きたり。名將は不レ讀二兵書一といへば。青表紙にて極めたる兵學は。實事には覺束なし。趙括の兵法は。大敗軍の基なり。俗に火燵(巨燵火坑なり)兵法。白田水練と云ふは。即ち此事なり。戚南塘は。百戰百勝の名將にて。武事を講究して大部の兵書を著述せしが。薊鎭へ遷りて 今の清朝の兵を押し伏するには野戰はせず。惟々薊城を層々と高く築き立てゝ。大熕(大砲)を製造して打ち放し。一發に多人數を打ち殺して。血肉狼藉たるに付き。流石勇猛なる滿洲人も夫れに恐れて。二十餘年仕懸け得ずと云ふこと。明史並に五雜俎地部に見えたり。(戚繼光守二薊遼一日。以レ意製二大熕一。毎レ發輙斃二千餘人一。血肉枕藉。而終。不二肯退一。然れども虜亦畏レ之。甚不二敢窺一レ邊者二十餘年と云ふ)左すれば。今日砲術功者の世界となりては。七書の講究などは。無益なる事必定なり。其上。儒者は仁義道德の講究はすべし。右樣なることは先づ我等には不似合のとなり。唯孟子中にいへる豪傑は。志行人に勝れたる者にて。周公仲尼之道を悅ぶ所の陳良のとを彼所謂豪傑之士なりと云ふ。(滕文公上)又豪傑之士。雖レ無二文王一猶興と云ひて。(盡心上)假令 君の敎導なき昏濁の世界と雖ども。自力を以て奮ひ興りて。仁義の道を行ひ。一世の模範となる。此豪傑は至極羨敷ことなり。世儒の口癖に云ふ所の英雄豪傑。扼腕慷慨は。太平の世には。無用の品にて。老子所謂不道早已とは。此等の類を云ふなり。又孟子に。

失火焚死。(自ら火にて燒死するを云ふ)明日元日。買㆓棺須百里外㆒。(次日元日に家内の者。棺槨及び其外の葬禮に入用の品を遠方へ買ひに行く)未㆑及㆑去(行ぬ内なり)爲㆓群犬㆒。一夜食㆑之殆盡。噫。彼之作孽。雖㆑因㆓歳飲㆒。天之報施。(史記伯夷傳の字)終不㆓一爽㆒。可㆑不㆑畏哉。紀胸が灤陽消夏錄に。崇禎末。河南山東大旱蝗。草根木皮皆盡。乃以㆑人爲㆑糧。官吏弗㆑能㆑禁。婦女幼孩。(小兒なり)反接鬻㆓於市㆒。謂㆓之菜人㆒。屠者賣去。如㆑刲㆓羊豕㆒。(反接とは。後へ手を返して縛ること。鬻とは賣ること。屠者とは獸屋なり。刲は易の註にては。刺と訓ずれども。文は皆裂に用ふるなり。素讀にもさくとよむ。聊も間違なきことなり)

○今日の學者は。兎角英雄豪傑と云ふことを口癖に言ふ者多し。英雄豪傑は。もと人に勝れたる人の名目なれど。春秋の時までは。絶えて世間に謂はざる名目なり。夫れ故。左傳國語の中に。英雄或は豪傑と。二字聯屬して云ふ所見えず。戰國秦漢の間。大騷亂の世に到りて。張耳陳餘從㆓武臣㆒北略㆓趙地㆒。時に(畧、は切り從へることなり)至㆓諸縣㆒說㆓其豪傑㆒と云々。(張耳陳餘傳)蒯通(此人の名は。本蒯徹なれども。上の諱を避けて通とす。故に通字音徹)曰俊雄豪傑建㆑號一呼。天下之士。雲合霧集と云々。(淮陰侯傳)張陳傳の豪傑は。諸縣の魁帥(親方株なり)口給の輩。淮陰侯傳の豪傑は。建㆑號と有れば。陳勝を始め。國々にて王號を唱へたる大將分なり。右様なる亂世には別段のこと。治世に於ては。皆草臥者とす。夫れ故。許劭は曹操を評して治世之姦賊。亂世之英雄といひたり。儒者は仁義道德を講究する人なれば。扼腕慷慨して英雄豪傑抔のことをいふは。甚た心得違なり。徂徠先生は戚繼光(南塘)の武備志信向にて。鈐錄を著して。頻りに兵事を說かれたり。徂徠は物茂卿と稱して王朝の物部の子孫なりと云ふ。物部は王朝の武官なり。武夫を。ものゝふと云ふは。物部の義なりと。神道類聚抄に見えたり。左すれば。先生の頻に武事を講究せしは。禮不㆑忘㆑本。狐死正丘㆑首の理にや。亦は治不㆑忘㆑亂の理にや。兎角先生は陳同甫(龍川)辛棄疾(稼軒)信向の流なれば。論語徵の片手間(傍業)にせし事と見とたり。今日に到りては。誰迚も徂徠學などを招牌(看板のこと)にする儒

居りて。房州産の女子を下婢に召し遣ひし時。我等が日々養生喰に百合を用ふるを見て。私共の邦にては。處々の山々にては山丹夥敷有りて。花盛の節は。至極見事なり。夫れ故。冬分などは。山へ往きて掘り取れば。霎時に擂鉢一杯位は得らるゝなり。山丹は唯の百合と違ひて。苦味強くして。直には用ひられず。一淪泡て苦味を去り捏(ネツ)ちて餅とすれば。至極宜しと云へり。飢饉の凌になる物は。いづれ甘藷。大芋。山丹の類なり。自然生にて食ふべき物は。蒲公英。藜。芹。菠薐菜の類なり。併し芹は人の嗜み食ふ物なれども。小々毒あれば多食をなすべからず

崇禎の飢荒は。支那にても往古より稀なる飢荒ゆゑ。諸書の記したる所を茲に載す。徐岳が見聞錄に。崇禎の壬午(十五年)發未(十六年)の間。斗米升錢(銀の訛也。趙翼が廿二史劄記の卷三十六。及二崇禎中一。米價始大貴。李繼貞傳。崇禎四年斗米價銀四錢。民多從レ賊。左懋第傳。崇禎時。山東兵荒。米石二十四兩。河南乃每レ石一百五十兩）天下皆凶。而河南山東尤甚。在々以二人肉一療レ飢。雖二至親好友一。不三敢輕造二人室一。守レ分之家。(身の分限を守る律儀なる家なり）老幼婦女相讓而食。(親く懇意なる友達の家にも行かれず。行けば食はれ。守分律儀なる家は。互に讓りやつて喰ふとは奈何なる事にや。不人情千萬なり)强梁者搏レ人而食。奸巧者誘レ人而食。(奸巧は奸智有る巧なる人なり。誘とは計畧にてそゝぬかし出だすことなり)甚有下母殺二其子一而食者上。故李賊檄文云。家有二食レ子之母一。野無二完皮之樹一之語。以見下飢荒之甚。天意不上屬也。(天の意明に付かず。朋を助けざるを示すなり) 前記二食量一之楊貴。(人を食ひたる數を記したる楊貴と云ふ人なり。勿論懸意の者の事なり) 嘗語レ余云。彼時食二人肉一者。一至二麥黃一。相繼病レ疫。死無二子遺一。(無二子道一とは。のこり無きこと。雲漢の篇の語なり。又清人の記したるに。一同次年の麥の黃なる節に到りて。黃疸黃胖の病にて死したりと云ふ) 惟一叔(一人のをぢなり)食レ人頗多。壬午歲除。人首人足。人肝人肺。羅列而食。至レ今年餘二七十一。尙未レ死。時順治十四年之言也。至二十五年一。貴扶二母喪一。(母の柩を昇手傳(カツグテツダイ)をするなり) 歸二河南一。而其叔於二去年(前年也)除夜一。

になる程の大饉にて。天の吳國を虐する時節なり。其時節に付け込み。兵を加ふるは。餘り情なきことなりといふ意味なり

周禮に荒政十有二有れども。別段の奇特もなし。後世は荒政輯要等の書有りて。粥を喰せる廠を通りぬけにして。人の寄り淀まぬ樣にする抔は。至極功者のことなれども。別段に奇妙なる仕方もなし。兎角平日より圍米(カコミマイ)をするを。第一の良策とすべし。漢の元帝の時。耿壽昌が言上せる常平倉(御上の粟倉)及び後世の社倉(鄕倉)などより。外に手段はなし。後漢書の劉愷傳に。常平倉の害を謂ひたれとも。夫れは其時の役人の取扱の惡き故なり。常平倉は廢すべからず。明の宋景濂が。社倉記に。社倉の害を謂ひたれども。夫れも矢張其時の取計ひ方の宜しからざるなり。社倉は廢すべからず。江戶の御粟倉及び國々在々の御倉は。即ち常平倉。社倉の姿にて。萬世不刊の典と謂ふべし

史記貨殖傳に。蜀汶山之下。沃野。下有ニ蹲鴟一。至レ死不レ飢と有り。沃野とは膏を沃ぎたる如き肥饒の野を云ふ。蹲鴟とは大芋如ニ蹲鴟一なり。(　義に。華陽國志と云ふ書を引きて。汶山郡安縣有ニ大芋一如ニ蹲鴟一と云へり)汶山之下に。大芋有る故に。生涯飢饉に困る事はなしと云ふなり。左すれば唐山にては。芋は飢荒の凌ぎになると云ふことを。秦の始皇の時より氣付きたる人あり。(至レ死不レ飢と云ひしは。蜀の豪富の卓氏の言なり)當時我邦は。專。甘藷を國々所々にて。植ゑ置き。平常には嗜者の慰み喰なり。就中。燒藷は蒸藷とは違ひ。風味格別にて。先年より八里半と唱へ燒き栗に少々不足と云ふ。(今半道にて。くりとなると云ふは。洒落の名なり)女子供下戶の輩は。最も之を嗜好するものなり。又萬一飢荒の節には。下賤を救濟するには。第一の物なり。此品を沙に埋め。能き程に圍ひ置かば。枵腹を療する奇品たるべし。然る所。明崇禎の末には。連年大飢饉(十五年。十六年最甚)にて。流賊蜂起せし時。闖賊李自成が回したる檄文(廻狀文也)に。家有ニ食レ子之母一。野無ニ完皮之樹一と云へり。木の皮を譯もなく引き剝ぎて喰ひたる樣子を見れば。卓氏が往昔謂ひ置きたる大芋の凌になる事も氣付かず。甘藷を種うる手段をも知らぬ樣子なり。さて亦我等先年江戶に

覺寮雜記に詳なり）夫れにて荀子（賦篇）の蠶賦の身女好而頭馬首者と云ふこともしれり。周禮馬質職に云。禁ニ原（再也）蠶者一とは。二度子を取れば。馬疫病が流行する故。周の法にて禁制をと云ふことも分りたり

○我等は。寛政七年乙卯の生にて。今茲に慶應元年乙丑に到りて。七十一歳なり。夫れ故天明の飢饉のことは。聊も知らず。惟人の噺にて承りたり。世の中に飢饉は。海より起ると云ひ傳へて。海の漁獵なきは。飢饉の始なりとす。されど亡社（淮南子說山訓に。東家母死。其子哭レ之不レ哀。西家子見レ之。歸謂ニ其母一曰。社何愛ニ速死一。吾必悲ニ哭社一。註。江淮謂母爲社と有り）の物語を聞きしに。天明飢饉の砌に。夏分は松魚など夥しく取れ。買ふ者稀にして甚た下料なりと承りたれど。併し詩小雅に。三星在レ罶。人可ニ以食一。鮮レ可ニ以飽一（苕之華篇）と云ひ。罶は笱なりといふ。干魚を取る大ざるを流れ先へ沈め置けば。心の三星の光が映るといへば。ざるの中に魚の跋刺すること無くして。水靜なるをいふ。左すれば。川や溝の中に。魚生せぬ姿なり。又越語下に。勾踐曰。今其稻蟹不レ遺レ種。其可乎。註。稻蟹。食稻蟹也。月令疏にも。稻蟹。謂ニ蟹食レ稻也と有れども。先づ事理を以て推し攷ふるに。當時吳は大國にて。三江。五湖の間とは云へども。中々岸邊通り計りの狹塲には非ず。假令蟹が稻を喰ふとも。沿岸を離れて數十里の先までも喰ふことは有るまじ。然るに吳の王孫雒も。亦范蠡に對して今吾稻蟹不レ遺レ種。子將ニ助レ天爲レ虐といへり。奈何にも譯わからぬことなり。且蟹の害を爲るならば。蟹疾蟹災と云ふべし。（詩大雅瞻卬篇。蟊疾と有り。蟊は蝗也。疾は害を云也）稻蟹とは不成語なり。唐詩金粉（卷十）載ニ唐彥謙詩一云。湖田十月淸霜墮。晚稻初香蟹如レ虎。（勢の盛なること）淸の顧祿が淸喜錄（卷十）に。府志を引き蟹出ニ太湖一者。大而色黃。殼軟曰ニ湖蟹一。稻秋（稻の熟する時を云ふ。麥秋と同じ十月のこと也）蟹食既足。腹レ芒朝レ江。（腹レ芒朝レ江とは。腹に稻穗を澤山納れて江へ上ると云ふこと也）江蟹黃蟹（湖蟹也）皆出ニ諸品下一（外の蟹よりはまづき也）と委しく述べたり。左すれば王孫雒が云ふ所は。飢饉は海より起るの說にて。不斷夥數有る蟹までも生せずして。種子なし

々一穂走りと云ふ位のとにて。十月に到りて刈り取る。其所は支那も中國筋は。大抵我が國と同樣に聞ゆれど。唐の米は白田地に作ることなれば。縱令尺溝を立て丶(尺溝とは畎也。耜の金五寸。岐頭也。兩人にて寄せて一挺となし。白田を反すを耦耕と云ふ。乃一伐のことなり。又一撥とも云ふ。夫故畎も畝も共に一尺なり)其中へ種子を蒔き。追々生へ立つに從ひ。畝の土を落し。根を堅めて。風にも耐ふるとは云へども。水田の樣なる善き事はなし。且つ第一に旱魃には困り果て丶。蟲は附き易し。故に桑山の禱。(殷湯)雲漢の詩。(大雅周宜)螟(食心)螣(食葉)蟊(食根)賊(食節)秉畀二炎火一の事より。唐の姚崇が遺二使捕一レ蝗。夜中設レ火。火邊掘レ抗。且焚且瘞めたる事も能く呑み込みたり。我等は五穀不レ分(論語微子)と云ひたる歷々同樣のことなれど。田舍廻りをして御米のことは分りたり。又木綿着物絹着物は。何にて織りたる物にや知らず。夫故青梅機留。太織紬。絹縮緬。羽二重は江戶產にて。朝夕耳に聞き居し故に。品物は承知し居れど。草木綿の絲蠶絲などにて織りたりと云ふこと誌。一向に辨へなし。衣服在レ躬。

而不レ知二其名一為レ罔と。禮記少儀に云へり。今我が品物の名は知れど。何にて織りたるやも知らざる時は。矢張罔の類ならずや。然るに其後每度上毛邊を遊歷して。木綿の事も覺え。又蠶を養ふ所を見て。絹絲の事をも覺えたり。さて又家に住ても。棟梁のことも豏とは知ちず。夫れ故論語を說くに。亡父の傳授にて山節の節はます形と云ふて。堂宮にのみあるものと承知し。藻梲の梲は侏儒柱(短柱)と云ひて。つかなることを知れり。併し搏風欄間と云ふ所も知らずして困りたり。夫れに付き古への諸儒先生を攷へ見るに。我等と同樣のこと多し。宇野三平(明霞)などは。反坫の所へ陳祥道が禮書。黃氏日抄。升庵外集等の書を引きて博覽を示したれば。四阿反坫の四阿を。始終回阿と書き。四阿は八棟作りのことなるを知らず。大笑のことあり。さて其後。追々に處々を遊歷して木綿にも草もめんもあり。木もめんもあり。蠶の三眠三起と云ふことは。我邦にては何々と稱することを知り。列子(湯問篇)以レ目承二牽挺一と云ひしは。まね木のことなるを知り。蠶の神は。我邦にては馬頭觀音。支那にては馬頭娘。(朱新仲の猗

濟したり。幼少の頃より。日夜學問にのみ懸り果てたれば。遠方へとては出でたることなし。江戸内は。淺草觀音へも。母の供にて折々參詣なし。其外大抵の場所は承知し居れども。品川。千住は申すに及ばず。吾妻橋を渡りたることはなし。夫れ故。米と云ふ物は。奈何なる所へ生ずるやも知らず。書傳に所謂幾不レ知ニ馬之幾足一（朱穆也）の類を免れ得ざりし。十四歳の春。前髮を剃りたる頃。亡父の門人篠崎英次と。始めて久喜の遷善館へ赴き。孟子の講釋をなしゝが。五畝の宅の註文に。田中不レ得レ有レ木。恐レ妨ニ五穀一（惠王上）と云ふは。泥深き所には木の植ゑ樣はなしと說きて。其席の御茶にごしは濟みたれども。恐レ妨ニ五穀一と云ふとは。自分の心にて何のことにやと思ひたり。歸途に越ヶ谷へ止宿して。次日の朝。食事の時に。逆旅の主人が此地はをか穗なれども。隨分風味はよしと云ふに付。をか穗とは何のことにやと問ひければ。畠へ作るを岡穗と云ふ。此地は總じて米を畠へ作ると云へり。逆旅主人の言にて孟子の註文も分かりし。成公二年左傳に。盡く其畝を東にすれば。吾子の戎車を利すと云ひしは。白田の畝が。皆東向になれば。戎車の仕掛くるに便利能しと云ふ譯も分り。畎畝の白田へ細溝を明ける譯も呑込みて。唐は白田地へ米を作る國と云ふことを始めて知りたり。王維が詩に。漠々水田飛ニ白鷺一陰々夏木囀ニ黃鸝一とあるは。中には我邦と同く泥田もあることを知れり。其後陶淵明の種レ秔種レ秫の咄にて。支那は餅米にて酒を作る。我邦の酒とは違ひあることを承知したり。又或醫家に止宿したる時。大唐米といふ物を始めて見しに。細く長くして。我邦の米とは大違ひの惡米なり。左すれば吳語の市無ニ赤米一と云ふ註に。赤米とは姦者と云ひしなどは。何樣なる惡米にや。唐の米は酒にも作れぬ惡米なれども。素問には天地之精氣なり抔と。自慢を云ひたり。實に大笑なる事共なり。其後追々事物を考究して。我邦の米は。五大洲中第一に位せることを知れり。唐にては閩の田は。兩收（二度取り）嶺南は三收（三度取り）と云ふ安南。緬甸。天竺抔は。皆三收なり。種蒔すれば直に生じ。直に長じて直に實り熟する所なれば。米の姦なるとは云ふに及ばず。我國の米は三月に種子を播き。五月に苗代をし。二百十日に稍

備はりて。凡夫皈生の料簡違なき様に指示するには。隨分餘りあるべきことゝ思へり。此を流れ込みと云ふなり。さて嘗て困學記聞を見しに。莊子の逸篇を引きて。人而不レ學。命レ之曰二視皮一（一作レ肉）學而不レ行。命レ之曰二輙囊一（輙繫著也。一作レ撮。）と云ふことを載せたり。何の事にやと思へり。のち釋氏要覽志學部を見しに。法苑珠林を引きて云く。莊子曰。人而不レ學。謂二之視肉一。學而不レ行。謂二之撮囊一とあり。此の視肉撮囊にて能く分るなり。撮囊とは學び聚めて納れたる計りの囊にて。之を行ふことは出來ぬと云ふことなり。家語始誅篇に。其居處足下以撮レ徒成上黨。王肅註。撮聚とありて。荀子宥坐篇には。居處足下以聚レ徒成上群と作れり。又荀子彊國篇に。執拘則最。註。最聚也。公羊傳曰。會猶レ最也。何休曰。最聚也。韓詩外傳卷六。作二執拘則聚一とあり。最と撮とは通用して。皆聚と訓ず。故に人の頭髮を聚め寄せて。之を括るを莊子人間世に會撮と云へり。されば撮囊の義は。斯く明白なるに。王應麟は宋朝第一の考證家として。清人は深く之を崇奉し。五家箋註など作りたる程なれど。輙の字を繫著など〻いひしは。牽强の甚だしきものと云ふべし。又視肉と云ふことを。史記李斯傳の此禽鹿視レ肉と云ふ處の註に。莊子及蘇子曰。人而不レ學。譬二之視レ肉而食一と。索隱は引けり。李斯が云へる視肉は。視レ肉而食と云ふことなり。莊子の逸篇には。惟視肉撮囊とありて。視レ肉而食と云ふことなければ。而食の二字は。司馬貞が滿讕の入れ字たりとす。視內とは。肉に眼は着き居れど青盲なりと云ふこと。肉とは後世に。所謂。肉陣。（王仁裕開天遺事）肉屛風。（郎瑛七修類稿）肉鼓吹。（李肇國史補）の類にて。人のことを云ふなり。さてむかし甯越は耕作の勞苦を免れんが爲めに。十三年の間學びて竟に周の威公の師となれりと云ふ。我等は孺者の子なれば。書を讀むことは。我が天より申し付けられたることなれども。今に莊子の所謂撮囊にて。學び得たることとは。聊も之を行ふ事能はざるは恥づべき至りなり。

○八たるものは。學問のみには限らず。何事も覺え置くべきことなり。我八歲の時。始めて素讀を習ひて。三七廿一日の中に。兼山翁の孝經。大學。中庸。學記だけを終り。夫より後は四聲字引にて。素讀は

レ篋視レ之。則論語二十篇也とありて。書を讀むことは博くもあらざりしが。其藩鎮（大郡代なり）の權を奪ひて。天下の亂源を塞げると。太原（北漢）を跡廻しになしたる手際とを見れば。天然の才智とも稱すべきか。さて齒を拔かんとには。何程堅固にても廻りの小さき齒を拔き取らば。自然にゆるぐへし。夫ゆゑ趙普は。諸國を打ち滅して後は。彈丸黑痣（黑子と同じ）之地。將レ無レ所レ逃（言行錄卷一。彈丸黑子とは些しの場所といふことにて。小國を云ふ。痣は。本。あざの事なれども。此痣はほくろをさすなり）と云へり。然るに。先つ北漢（太原）を打ち滅せば。契丹と西夏との間に隔りなく。直ちに隣國となる故。始終合戰の止む日なく。迚も一統の業は成就すまじ。其上。契丹は固より大國にて。士卒の剛勇なること。中々支那人の及ぶ所に非ざる譯を熟知せる故。太祖に勸めて契丹を伐つことを止めたり。其後太宗の河東を平げ。勝に乘じて幽燕を伐たんとせし時も。又々上書して諫められたり。さて文公趙普の才の如きは。所謂不世出にて。迚も常人の及ぶべきにはあらず。併し我等同士にて言へば。流れ込みといふこともあり。大戴禮に。孔子學問のことを論じて曰く。譬レ之如二洿邪一。水潦灟焉。莞蒲生焉。從レ上觀レ之。誰知三其非二源泉一也。（勸學篇）洿邪を說苑に汚池に作るは。傳寫の誤なり。孟子（惠王上）に。數罟不レ入二洿池一。又（文公下）壞二宮室一以爲二汙池一とありて。洿汙同じにて。洿池は。くぼたまりと池のこと。洿邪は山間の沼田のことなり。說苑復恩篇に。下田洿邪。得二穀百車一。史記滑稽傳には。汙邪滿レ車。註。司馬彪曰。汙邪。下地田也とあり。皆同じ。さて學問を土地に譬ふれば。山間の沼田の如く。處々の潦水流れ込みて。莞蒲など曲輪に生ひ茂りたる時は。上より之を見れば。誰とても地中より湧き出づるの泉に非ずと思ふものは無し。又原泉とは。源あるの水にて。孟子（離婁下）にも原水混々とあり。さてそれと同樣にて。人は聖經賢傳をはじめとして。種々の書を讀み。天下古今の事物道理を覺えて。周禮にて言へば。有德（賢者）有道（博學）の有道。孟子にていへば賢。多聞の多聞ともなりて。王公大人の師ともなり。一世を敎導するの任にも膺るべきなれど。其事は容易のことには非ず。しかし我等は。王公大人の顧問に

を藏する文淵閣を預かる故に。閣老と云ふなり
○中書は奥御右筆。尙書は表御右筆。門下は御側衆なり。中書尙書門下を宰相と云ふ時は。筆頭のとなり。唐の時は此の三役所を三省と稱ふ。天下の執權職即ち宰相なり。併し唐の時は。中書尙書門下相並びて宰相と成りて。重き時もあり。又中書尙書門下の中にて。中書尙書のみ重くなりたり。或は尙書門下のみ重くなりたり。最初の中は定例なし。末には中書と門下とを重んず。夫故に宰相を中書門下平章事といふ。平章事は尙書の平二章百姓一(堯典)の語に本附きて。百姓の事を平章するは宰相の職なり。併し本役は稀にして。平章事並にて。務むる宰相多し。故に同平章事と稱す。同とは同樣にて並のことなり。夫れを宋に至りては知らずして。同平章事と稱へたり。笑ふへし。晉の荀勗が中書を以て鳳凰池と稱したる時。既に中書を重んせり。南朝は陳の後主の時は。中書有二舍人五人一。分掌二二十一局一。尙書諸曹聽受而已。北朝惟重二門下一。三公尙書。非レ帶二侍中銜一。不レ得レ聞レ政也。(通雅官制) 尙書は表御右筆故。奥御右筆御側衆には始終及ばぬ姿なり。此れ自然の勢なり。又唐の時には。左僕射。右僕射となりて。宰相を務むる人もあり。夫れは一時のことなり
○晉の文公は。書を讀むことを胥臣に三日の間學びて曰く。吾不レ能二行也咫一。聞則多矣と。咫は八寸なり。少しのことを云ふなり。(容齋隨筆。黄魯直和二王定國一詩。聞三蘇子由病臥二績溪一云。湔祓瘴霧姿。朝趨去レ天咫。蜀士任淵註。引二天威不レ違レ顏咫尺一。予按。國語。楚靈築二三城一。使三子皙問二范無宇一。無宇不レ可。王曰。是知二天咫一。安知二民則一。韋昭曰。咫者少也。言少知二天道一耳。酉陽雜俎有二天咫篇一。黄詩蓋用レ此。徐師川喜二王秀才見レ過。小酌翫レ月四言曰。君家近レ市。所レ見天咫。庭戶之間。容レ光能幾。菰蒲之中。江湖之涘。一碧萬頃。長空千里。正祖二述黄所レ用云) 三日の間。讀書の稽古をして。聞くことは澤山に聞きたれども。行ふことは少しも出來ぬと云ふことなり。宋の趙普は學究なり。(宋人の隨筆に。趙學究とあり) 太祖の勸めに因りて。晩年には手に卷を釋てずと云ふ。宋史に。毎レ歸二私第一。闔レ戶啓レ篋。取レ書讀レ之。竟レ日。(終日と同じ) 及二次日一臨レ政。處決如レ流。既薨。(死するなり) 家人(家内の人) 發

君にても。右樣なる間違の夢あれば。(古人の詩に。可ㇾ憐一覺登ㇾ天夢。不ㇾ夢ニ商巖一夢ニ櫂郎一)常並々の人は。魔神の夢枕に立ちて欺瞞すること多かるべし。必ず靈夢なりと云ひて。乾沒の企て事。又は乘るか反るかなどの事は。すべきことには非ず。梁武帝は。某月某日に。天下一統となると云ふ夢を見たり。某月日に到りて。魏の叛人候景果して降參し來れり。朱异も亦精々執り持ちて。縱臾せしに付き。武帝大に悅びて引き納れたり。其後。候景に謀叛せられて。餓死して滅亡に及べり。此等は實に魔神の欺誑したると顯然たり。又夢にも限らず。宋王偃(康王とも云ふ人)は城の隅にて。雀の鸇を生みたるに付き。國家益廣大になる吉瑞と判して。射ㇾ天笞ㇾ地の暴虐をなせし故。竟に滅亡に及べり。(射ㇾ天笞ㇾ地の事は。呂氏春秋。戰國新策序に詳なり)朱の徽宗の宰相は王黼。家の柱に玉芝を產するに付き。益繁榮の吉兆と判して。徽宗へ言上し。御覽を願ひたり。徽宗御幸の時。王黼の家。內官の頭梁師成と。鄰家にて家の內より通路ありて往來し。別段入魂にする樣子認められ。夫れにて平日何事に寄らず。掎角して打ち合せすることを氣附かれ。遂に滅亡に及べり。明太祖の宰相胡惟庸は。神姦鬼黠とも云ふべき才智拔群の人にて。始終太祖の目を忍び。種々の姦曲のみをなしゝが。當人思へらく。太祖は匹夫より起りて。天下を取る程の賢明なれば。何れ永き年月の中には。己が惡事を見出さるゝこと必ずあるべし。其節は。手早く兵を擧げ。不意を襲ひて。序手に天下を取るべしと。兼ねて覺悟をなし。極密に往來する日本人までも應援に賴み置きたり。然るに胡惟庸が先祖の墓所に。每夜炎火の如き光明顯はれ。又家の井戸より石筍の生ずるを見て。希代なる吉瑞なり。速かに謀叛すべしと決心して。夫れ夫れの手配をなしゝかば。流石に明祖の事ゆゑ。直樣心附き。生擒りて極典に處し。誅滅し玉へり。明太祖右の宰相に。專ら天下の權を任せ玉ひしことを後悔し。夫れより後は。宰相(宋は中書門下同平章事と云ふ)と云ふものを立てず。大學を宰相代にして召し遣ひ。後々は閣老と稱す。今の清朝も。明の跡を承けて。矢張宰相と云ふ官は別になし。大學士を以て宰相とせり

附記。大學士を閣老と稱するは。大學士は上の書

ひしは。流石に兵家の大先生の言葉にて。名言と謂ふべきことなり

○さて前條に云ふ見德夢見等のことに付き。人の能く能く思慮すべきことあり。書傳に云ふ。目瞤得二酒食一。燈火華得二錢財一。乾鵲噪而行人至。蜘蛛集而百事喜。（西京雜記卷三）目瞤とは。目の端のぴくぴくすることなり。乾鵲噪とは。唐鴉(カラス)。かさゝぎの啼き噪ぐことなれども。今我邦にても。喜鴉(ヨロコビガラス)が啼く時は。遠方に參り居る人が歸ると云ふ。蜘蛛は。くものとなれども。此れは高蹺と云ひて。足高蛛を指すなり。天華板（藻井綺井は。皆合天井のことなり。惟の天井は天華板と云ふなり）より足高蛛がさがれば。諸事吉なりと云ふ。又俗間に。鳥の糞に衣服を汚さるれば。最も大吉事なりと云ふ。往々驗あることに似たり。又夢なども。俗間に一富士。（不二）二鷹。三茄子とて。吉夢にも。吉に段々の次第あるを云ふ。さて周禮。列子には六夢のことを載せたれども。夫は强ち吉凶に拘はることに非ず。唯周禮に。季冬獻二吉夢于王一。王拜而受レ之。乃舍二萌于四方一。以贈二惡夢一（周禮占夢職）とあり。舍萌とは釋菜と云ふが如し。野菜の初芽を採りて供する祭なり。四方の神々へ初芽供物の祭をなして。一年中の惡夢の分は。皆祓除すと云ふことなり。併し詩經に。幽王の時。諸事亂れ。間違ひたるを刺譏して。召二彼故老一。訊二之占夢一と云へり。（斯干無羊の夢占は。常例の御咄なり）左すれば。今の周禮に云ふ所は。實に周の典禮にや。又は劉歆等が加筆にや。此等の條。甚だ覺束なき所なり。併し泰誓に。朕夢協二朕卜一。襲二于休祥一。戎レ商必克（本二于周語單襄公語。及左傳昭七年衛史期之語一也）と云ひしは。少しも間違なきことなり。逸周書に（程寤解第十三）据るに。太姒（武王之母）夢見二商之庭產レ棘。武王取二周庭之梓一。（與レ蘖同）樹二于闕間一。化爲二松柏一。（此下有二柞棫字一。下に闕文あり）此夢は太姒武王の夢なれば。正しく殷亡び周興るの吉兆を示したること顯然なり。是れより以前に。高宗の傅說を夢に見しも。矢張同樣にて。靈夢聊かも相違なし。漢文帝の夢に。鄧通に助けられて。推して天に上せられたることは。驗なくして衣裻帶後の穿ちたることばかり後の驗あり。（文帝後に鄧通を媚子に召し遣はさるゝは。帶後敗るゝ象なり）文帝程の賢

儀解に。介ニ雀之徳一の徳と同じ)能き夢見などにて。毎度利運あるに付き。夫より乗込みて。竟に身上仕舞となるなり。是れは小得而大喪。此小人之禍也。とも云ふべきにや。先年江戸に。石橋彌兵衛と云ふ名高き町人ありて。少年の頃より。始終大坂へ往來し。相場事にて年々勝利を得て。大分の世帶になりしにや。深川の三角と云ふ所へ。立派なる普請をして。二十餘人の手代を召し遣ひたり。其節畫工芙蓉の案内にて。一夕亡父を請待して。饗應せられたり。我等も供にて罷り越し。珍膳美味の馳走を受けたり。さて彌兵衛の人となり。拔群の俊才と見受けたりしが。其後程なく浪華にて十七萬兩餘の大損失をして。右金子を一文殘らず馬荷にて。三度に送り届け。自身は眷屬召し連れ。裏屋へ引き籠り。泰然として居られたりしが。其後程なく果てられたりとの噂承りぬ。此等は書傳の乗レ龍上レ天。豈可ニ中下一(晉書載記呂超の語)と云ふ樣なる勢にて。引くにも引かれぬ所より。斯くなることゝ見えたり。併し傍觀者より云へば。三角へ家作せし時分に。早く大坂通ひをやめて。惟々什分一の利を見る貸金。又は賣買をせば。大分の基手ある故。追々大家となるとも。右樣に逼塞することはあるまじきなり。書傳に。善游者溺。善騎者墮(淮南子原道訓)と云ひ。俗にも。獵師は河で果てると云ふは。彌兵衛がことなり。後漢の梁冀は。跋扈將軍と質帝に名を付けれたるに付き。怒りて質帝を毒殺し。桓帝を立てゝ二十年の間。天下の權を專にし。奢侈を窮極せり。其後宦者に(與の衆なり)單超と云ふ忠正の人ありて。桓帝の爲めに謀りて。梁冀を誅滅せり。夫れに付き。桓帝不明の人故。宦者は總じて皆忠義なるものと思ひ。何事も宦者に任せたり。然るに其後の宦者には。單超の樣なる忠正の人はなく。皆惡物のみにて。天下の權を專にし。種々の惡業を働き。竟に滅亡に及べり。其れを後漢書に。以レ此始。必以レ此終と云ひたり。彌兵衛が相場事にて利運し。相場事にて身上を仕舞ひたるも。矢張同じ道理なり。陳餘は百戰百勝之名將なれども。一旦運を失ひ。泜水と云ふ河端にて。韓信に討ち取られたり。今川義元が桶狭間の事も。矢張同斷なり。兎角勝負あることは。早く切り上ぐるを能しとす。孫子の百戰百勝非ニ善之善一者也。と云

安平危。於二忿懥一。(武王踐祚)と云ひ。論語には。忿思レ難(季氏)と云ふ。皆肝積を堪へて。身の無事安全を保つべきことを云ふなり。人は婁師徳を手本にして。小々なりとも似寄る樣になしたきものなり

○人は兎角胸襟を開廣して。人を容るゝが第一の事なり。寛仁大度などゝ云ふとは。中々凡人の及び難き事なれども。隨分氣を付け。人の撰嫌(エリキラヒ)なく。人と交はりたきことなり。別して大身富豪の家にて。大勢の郎等番頭丁兒を召し遣ふ所は。容の一字は極めて肝要なり。とても三拍子揃ひたる人は。金の草鞋にて搜索すとも。此世にはあるまじ。さすれば小々づゝの疵瑕不足は頓着せず。鈍き人は金の番人。才發の者は入り組みたる掛合向と云ふ樣なる。手配にして。人を遣り廻すべし。唐の俗諺に不レ瞽不レ聾。不レ能レ爲二富家翁一と云ひて。兎角見えぬ振り聽えぬ振りして。少々のことは捨て置かねば。富家の亭主にはなれぬと云ふことなり。夫れ故。管仲歿に臨むの時。桓公に自分の跡替(アトカヘ)を言上して。鮑叔牙は潔廉の善士なれども。一聞二人之過一。終身不レ忘と云ふ人物なれば。此人は家老には宜しからず。隰朋は其於レ國有レ不レ聞也。其於レ家有レ不レ見也と云ふ人物なれば。まだ〳〵此人の方。宜しかるべしといひたり。(以上莊子徐無鬼篇)さて易にも包蒙包荒と云ひて。蒙昧者。荒妄者も。皆包みて容れ置くと云ひたり。いづれもこせ〳〵と搜ることは。人の上に立つ所作に非ず。夫れ故に。仲弓季氏の宰となり。(論語子路)政事を問ひし時に。孔子は赦二小過一との御指圖なり。是にて寛容を崇ぶことは。政事の主意と知るべし。不レ瞽不レ聾の語は。本。愼子に出でたり。不レ聰不レ明。不レ能レ爲レ王。不レ瞽不レ聾。不レ能レ爲レ公とあり。愼子の語は最も妙語なり。王は聰明にて天下の事を通知し。三公宰相は大度にて何事に寄らず。官吏の少々の不調法は知らぬ振りして居るなり。又倖門如二鼠穴一(言行錄)の譯にて。不正も小々の不正は寛容することもあらんか。勿論此れは事と時宜とに寄るべし

○さて町在にて。指折の衆に勝れたる人。相場事などに溺れ。結構なる株家督を擲ちて。手振編笠となるものあり。(株は莊子逸篇。羊溝之鷄。三年爲レ株の株に同じ。以上困學紀聞)如何なる事か。段々其咄を尋ね問ふに。始は能き見德。德は瑞なり。家語の五

天にも仕方なき所なり。予幼弱の時。江戸深川八幡の開帳にて。神輿を載せたる牛車。永代橋を戻る時。大勢の中押し分けて通ること故。大運金剛力を出だし。揉み立てしかば。神輿は恙なく通り越したれども。大丈夫なる永代の橋桁。餘程蹈み折れ。其所よりぞろ〳〵押し流されて。溺死せしもの餘多あり。其節「深川の八幡地獄怖ろしや。是は永代浮ぶ瀬もなし」と云ふ落首など承りたり。其後。善光寺如來開張の時。(弘化四年丁未の三月なり)折惡しく大地震にて。軒並屋潰れ。跡は一圓の火となり。諸國參詣の人は勿論にて。所の者までも。許多死亡せし由。爰元にて承りたり。されば大群聚の所へは寄附かぬを第一とす。若し人に誘引せられて。無レ據罷越すとも。隨分用心して。何事かある時は。手早く飛び拔ける覺悟をなすべし

○人は兎角堪忍するが緊要なり。佛の云ふ娑婆世界とは。堪忍すべき世界と云ふことなり。天笠にて。索訶。又沙訶と云ふことを。中華の譯文に。娑婆に作りたれども。舞貌の婆娑の倒語には非ず。娑婆とは堪忍の譯なり。夫れ故に袈裟を忍辱鎧と名付く。袈裟衣では人と捽り合ふことはあるまじ。鎧とは堅固なる譯なり。何程人が無理を云ひ懸け。喧嘩を仕掛くるとも。袈裟を肩に纏ふ上は。相手になることはあるまじ。孔子の仰せらるゝ端衣玄裳(齋服)志不レ在ニ於食ニ葷。(葷は葱薤の屬なり)斬衰菅屨(喪服)志不レ在ニ於酒肉ニ(荀子哀公篇)と云ふ所なり。さて町在にても。他所より新規に移徙せるもの。中華に云ふ僑居の人は。舊く住居する輩。すき次第に捻りたがるものなり。仕官の人は。新參を故參打ち寄りて捻るが世の習なり。惟々柔和にして堪忍し。聊かも爭心なければ濟むべし。宋鈃が見レ侮不レ辱(荀子正論篇。莊子天下篇)と云ふ所なり。唐の婁師徳は。弟を敎ふるに。若し人が已の顏へ唾を吐き掛けたらば。拭ひ去りては宜しからず。乾くまで捨て置くべしと云ひき。(尙書大傳に大公望曰。唾レ女毋レ乾)右樣に心懸けられたる故に。一生宰相と成りて。無事無難は申すに及ばず。天下の人に厚德の君子と崇められたるなり。俗に云ふ。ならぬ堪忍するが堪忍とは。實に妙言なり。易の損の卦に。懲レ忿と云ひて。人の損し度事は。怒なりと敎へられたり。大戴禮には。

訓蒙淺語

大田晴軒 著

○易は乾坤の後に。六卦の坎を上下に帶びたる卦を著はせり。坎は險難なり。天地間には。兎角種々の變難あることを表するなり。夫れ故。人は何事によらず。隨分氣を附け用心するが肝要なり。さて大都會繁華の地は勿論にて。此東海道筋にても。吉田。岡崎。濱松位の城下。相應繁昌の驛場にて。神事祭禮の時。近方馳せ聚まり。大群聚するときは。兎角物騒がしきことあり。神は其所其地を呵護するものなれば。隨分安靜に祭禮をさせ度趣意ならん。俗間に神は血を見たがるなど丶いふは僻事なり。若し左樣の事ならば。神は皆惡魔にて。阿修羅とも云ふべき者なり。左傳に。祭祀以爲レ人也(僖十九年)と云ひて。氏神の祀は。氏子の爲にする祭なり。若し氏子の怪我。過ちに頓着なきことならば。氏神の祭は爲すに迨ばず(産(ウブ)神。産(ウブ)子なり今暫く俗に從ひて斯く謂ふなり)只々祭禮の時は。若者大連打ち寄り。酒宴を催し。一杯機嫌にて。大噪すること故。喧嘩口論も始まるなり。又町々の氣負にて。互に負けじ劣らじ抔と云ふ所より。喧嘩捽搏の事も始まるなり。書傳に。人衆者勝レ天(史記伍子胥傳)と云ふ道理にて。神と天とは一理なり。天にも神にも。仕方なき所なり。夫れ故に僨車(今本作二奔車一訛)之上無二仲尼一。覆舟之下無二伯夷一(韓非子安危篇)と云ひて。總て危き場所へは。聖賢とも云ふ智慧ある人は。寄り附かぬことなり。孟子の知レ命者。不レ立二乎巖墻之下一。(盡心上)俗に君子は危きに近寄らずと云ふ。皆一理なり。兎角少年の人は。男女共に剽輕なる者にて。祭禮に限らず。開帳にても狂言輕業にても。總て人の群聚する所へは。眞先に飛び出したがる者なり。夫れ故に。老子は雖レ有二榮觀一。燕處超然。(第二十六章)と云ひて。何程花やかなる見物事あるとも。氣を鎮め居て。高く料簡を搆へよとの戒なり。又喧嘩などにも限らず。大勢群聚する時に。意外の變難あることもあり。天之愛レ民甚矣。(左傳襄十四年。師曠言)と云へば。天道に於て。人を一網に打ち盡すが如きことは有るまじけれども。是は流沙の洴河(ハンカ)(宋沈括夢溪筆談に詳なり)に行き遭ふが如くにして。

天下豈有二二道一哉。聖人豈有二兩心一哉。故今此編之所レ述。亦皆以二本經及四書老子之言一爲二之根據一。而旁及二史傳百家之浩瀚一。其中有下一二可三以當二韋弦之佩一。夜誦之音一者上。乃表而出レ之。以訓二蒙士一。此亦老生一片之婆心也。其分爲二上下二卷一。而各冠以二自序一。我亦私竊有レ所二摹倣一焉。何也。曰。易以二八八一起レ數。六十四卦 。一貫而已。老子以二九九一起レ數。八十一章。亦一貫而已。然易與二老子一。皆分爲二上下經一。截然有二界限一焉。而聖人序卦之傳。雖レ明二每卦相受之序一。其於二乾坤一也。乃粗有二劈頭之語一。而不レ著二乾坤之名一。其於二咸恒一也。亦有二許多劈頭之語一。而不レ著二咸名一。乃層々說去 。以明二天下之大理一。既爲二敘引之體格一矣。故我亦不下敢自揣中其擣昧上。私竊摸二倣之一。以作二爲二篇之自序一。奚翅學レ步效レ顰之可レ譏。固知二踰レ垣竊レ號之罹一レ罪。然讀者幸勿レ笑下我之屋下架レ屋。床上安上レ床可也

慶應紀元乙丑之春三月

晴軒老人　大田敦叔謹撰

訓蒙淺語自序

夫一念苟正。衆妄盡消。萬行不同。同歸於善。故曰。同歸而殊塗。一致而百慮。天下豈有二道哉。聖人豈有兩心哉。老子之稱至道也。曰。大曰逝。逝曰遠。遠曰反。顏子之贊夫子也。曰。瞻之在前。忽焉在後。至道之微。或逝或反。臣德之妙。或前或後。老子之與顏子。其言如合符節。老子之論戰伐也。曰。樂殺人者。不可得志於天下矣。孟子之對梁襄也。曰。不嗜殺人者。能一之。夫撥亂反正之事。雖湯武之用兵。亦不得徒謂神武不殺也。惟其所戒者。嗜樂二字而已。老子之與孟子。其言亦如出一口。我獨怪。荀卿戰國之大儒。意欲繼周公孔子之統。而其論子思孟軻也。曰。亂天下者。子思孟軻也。故其論老子也。亦謂。老子有見於屈。而無見於伸。不知老子之屈。則其所以伸也。易所謂尺蠖之屈。以求伸也。抑不啻此也。龍蛇之蟄。以全其身。故能免亢極之患。此亦屈之能伸也。屈而能伸。伸而能屈。潛見飛躍。變化不測。聖人之處世也。何嘗有一定之規乎哉。然則荀卿者。雖名爲大儒。而其實則於至道之微。未全有得者。故其書中所載至言妙理。皆傳抄孔氏弟子之所記而已。譬之是猶借珍瑰之器于人。以陳諸其堂上者。久假而不歸。惡知其非有也。惜乎。夫明林兆恩者。閩之陋儒也。其少之時。嘗捐千金以葬無主之屍。故其名譽震爆于一時矣。然晩得心疾。狂奔不避水火。逾年而死。則其人其學之不能以治其心。亦可知也。故其所著三敎會編。亦皆淺末謬悠之議。其中無片言隻語之中其肯綮者。故君子無取而已矣。然我由是嘗竊有悟焉。彼陳圖南者。何人也。華山一道士而已。故其刊石于華山也。爲圜者四。目謂無極圖。乃方士習煉之術。而深根固柢之說也。然其人則聖賢之徒。其道則止足之道。周元公取而轉易之。更名太極圖。宋儒詡爲千聖不傳之秘。然圖南之所刊。元公之所標。其原皆出于老子。老子之學。亦皆出于周易。孔子晩而喜易。韋編三絶。鐵撾三折。遂有十翼之作焉。其論道論理之宦奧。除復艮二卦之外。乃在大象文言繫辭之傳。其處世處事之要眇。乃在彖與小象之傳。然則孔老之學。其所歸一也。

我宿草跋

漁翁烟浦に歌ひて。咸富貴を稱し。樵者雲樹に謠ひて。共に理す。國の慈を樂むも宜かな

おほんいつくしみ至らぬ里もなく。ふみの道開けざる隈もなし。斯る御代に生れあひぬる身の幸は。僕が如き履うち。蓆織りても駒隙を消すべき外に。伎能もなき廢者のふんでとり。紙を汚す。嗚呼のすさみなんれほんめぐみの雨に潤はずんば。いかで斯すぐしてんや。此頃の永き夜の宵間の月にうかれて來れるは。細合の閑翁なり。家にふるく持ちつたへられたる太田道灌の大人の筆すさみとて。取り出でらる。こや聞きつ白石新井君の讀史餘論に。北條泰時の朝臣のおりのすさみしるし給へるもとつ文にて。年ごろたづねはべるものを。かしこうぞ見せられしと。寐覺の床のふすまきそうるうきをわすれ。くり返しふるき人にも見せ。後の世にもつたへんと。梓に鏤む

壬戌の冬　　橘潜夫誌

てやいひけん。此説もゐやしからずや。つれ〴〵よめる人は。よく用捨すべき事多かるべし。唯文をとりて。事をとるべからず。答問兼好も伊賀國阿群郡松尾村國山にて死せしとかや

世人なべて人の知れる歌をもてあそばず。めづらかならぬ。古人の歌こそおもしろけれ。世人いにしへよりつたはれることをちがへて。新しくいひなししるすはつたなし。なべて人のしる事を知るまゝにして。いにしへにたがはざるこそゆかしけれ

我宿草 終

揚て後。却つて百錢を水底に投ぐにことならずとかや。誠に賢人の謂ならずや。或とき足利直義正成に對して。語りて云。古の人の勇は。みな匹夫を本とせり。其道は佐々木と梶原が宇治川の先陣。熊谷。平山の一の谷の先陣等。用ふるに足らぬにこそ。みなこれ端武者の勇にして。人を主る勇にあらずといふ。正成が云。佐々木梶原と。熊谷平山が勇を論じ給ふはおろかにこそ。など頼朝の勇を用ひ給はぬ。彼四人の者いづれも百騎より下の者にあらず。しかるに身命を惜まず。士卒に先だつて戰ふことは。頼朝大將の器あつて能く人を勇まし給ふゆゑならずや。今の世にも。頼朝のごとくに人をいさめる大將あらば。從ふ者皆々佐々木梶原がごとき勇をなすべし。直義大に感じて云。頼朝はいかなる事をもつて人をいさましめるや。正成が云。頼朝は天下を奪ひし人なり。今の世の臣として此謀計を悦ぶべからずと。直義耻ちて歸るとあり。正成の心をおもふに。袖をうるほさすなり。賢きは限ある身とて　なほ愼む。おろかなるはあだなる世とてほしいまゝにす。朝に學んで夕に死すもおこたらぬ理をしらぬ世と成り行くこと歎くに餘りあるべし。夢の世に見るこそ迷ひなれ。かしこき人に夢のあらぬは。才智は天のあたふる處にて。求むるに難し。行ひは力勉て學ぶときは。誰が亂臣賊士に落んや。くらからぬ心の玉はありながら。みがきえざらぬ人ぞかなしきと。貫之の鬼神の心をもやはらぐるは歌なりと書きし事したはれずや。心ある人たれか敷嶋の道をあはれみざる。然るに滿誓沙彌と云ふ者。世の中を何にたとへん朝ぼらけ。こきゆく舟のあとのしらなみと詠みしは。敎を誤るなるべし。おなじ世捨人ながら。賀茂の長明が。月影は入る山の端につらかりき。たえぬひかりを見るよしもがなとよみしは。其心したはしきにあらずや。菅家の歌の。心だに眞の道にかなひなばいのらずとても神や守らん。かゝる歌こそ我人の鑑となり。其制も貴けれ。歌人の德とすべきにや。哀を催すことは。世捨人の心なるべし。淘潛山に居て古鄕をおもひ。白鷺をはなち。西行法師が。月見よと契りて出でしふるさとの人もやこよひ袖ぬらすらむとよめるも。おなじこゝろなるべし

愚にして年を經ぬれば。おもき罪人となるをおもひ

ず。手を用ひて足を捨て。足を用ひて手を捨つるがごとし。今の世には文もなく武もなければ。手はとる事をうしなひ。足はゆく事をうしなふに似たり。何ぞ其體安からん。世また何ぞ慕はしからん。傳へきく。文王は武を以て亂臣賊子を退け。文を以て天下の民を安んじ給へり。君何んぞこれを學び給はざる。今亂臣の高時ほろびぬ。文を以て安治の道政こそあらまほしけれと。藤房書き給へるとかや。貴きにあらずや

同書に。藤房人として愼むべきは驕なり。天子はなほつゝしみ給はずんば叶ひがたし。茅茨きらず。柴椽けづらざるは。聖代の度なり。四岳の民其澤に懐いて。八音を遏密せしを聞き給はずや。武にはこゝをもつて。軍法の本とし。文にはこゝをもつて。仁政の源とす。しかるに。今暫く世のしづかなるにまかせて。民の勞をかへりみ給はず。大内裏造營あらん事詮なかるべし。孔子は周公の才ありとも。驕あらば見るにたらずとのたまへり。謹みても愼ませ給はんは驕なるべしと書き給へるなり。貴ぶに餘あり

同書に。正成云。それ天子位をうしなはせ給ふことは。費をいとはせ給はざればなり。天照大神の民の勞を憐み。物のついえをいとはせ給ふ。世人のあまねく知る處なり。君其御末として何ぞ神の御政にたがはせ給ふべき。費を知らざれば。奢の生ずる事やすし。天子位をうしなひ。庶人家をうしなふ。源は皆奢侈なり。陰陽は四時の運びを正しく。萬物を化生す。天子は萬機の政道を直して諸民を養育したまふこそ常なるべけれ。昔日。青砥左衛門と云ふ者有り。一錢を水中に落して。數多の錢を以て是をあぐる。これ一錢を惜むにあらず。永くすたる費をおもふにあり。今の世をこれに比するに。王道年久しく衰へし事は。沈みし錢のごとし。頃日漸いにしへに復る。錢の岸に浮ぶに似たり。此時あらたに此錢を揚げずんば。又水底に沈む事やすし。今王道新にし給はずんば。またおとろふる事安かるべし。君王道を興し給はん爲に。義兵を擧げ給へり。爰において君の爲に死する者は。これ青砥左衛門が一錢の爲にせし數多の錢の如し。道理明なれば。其死せる者を痛むにたらず。然るに累年の亂に。民の勞せるをも省みず。大内裏以下に小國寶を費されん事。沈める錢を

に。一千餘騎の敵喚て落す。通盛散〳〵に駈け立てらる。敵はしか〳〵戰はず。すぐにかけ通つて爰かしこに火をかけ。能登殿を田代の冠者が討つたりと。こゑ〴〵に呼はる。これを聞きて。味方の勢大に力を失ふ。宗盛初め一門の人々。能登殿うたれ給ひなば。いかでかかなふべきとて。船に乘んと渚に打ち出でらる。敎經すこしもさわがず。ひかえしが味方の軍敗れぬと見て。急ぎ人を以て。宗盛の方へ敎經こそ手を碎いて義經を討ち候ひつれ。今は恐るゝものなし。追手搦手の敵ども。みな討取りて見參に入れんと聞えければ。軍兵ども大に力を得て勇みけれ共。宗盛大に騒いで。耳にも入れず。落ちられし故。追手搦手の軍。一度に破れたり。敎經は陣を猶堅うしてひかえたりしかども。屬徒軍兵ども。味方の敗北を見さん〴〵になる。義經二千餘騎くつばみを添へて。駈け落し給ふ。敎經も危く見え。いかでか叶ふべき。乳夫の長沼十郎と云ふもの。敎經となのつて討死す。敎經は其の隙に落ち行き。多くの中を切りぬけ。播磨の高砂より船に乘りて。八島に渡りぬと。朝政きゝて聞きしにまさる能登殿かなと感せしと。ふるき東鑑にあり。今是を按ずるに。敎經は大將の器あつて。謀能言も賢しかりしぞかし。宗盛勇謀こそなからめ。敎經が義經を討ちたりと云ひて。士卒をいさませしを。誠にいつはるとおもひ。信ぜざるは。これ愚將の至りたるべし。言を愼めば。身の過をおもふ故なり。過をおもはず言のよきは詭者なるべし。言をこそ愼み得ざらめ。人の授くるを愼み得ずして。宗盛の如く名を流すたぐひあさましきにあらずや

世にをしき事あり。楠正成と藤房と相議して。朝廷の政のそむけるを諫めんとて。本朝の事を正成が書し。異邦の事をば藤房書し給ひて。二卷にし給ひたる書。上杉家に傳はりしが。いかなるものか盜みけん。今はなし。其書のはしを見たる人の語れるは。天子より庶人に至る迄。文武の備へなくば。天子の世を治むる事なく。政おこなふことかたかるべし。庶人は家を治むることなく。身を保つことかたかるべし。それ亂世は武を以て治め。文を以て正しくするは。聖賢の法なり。守らずんば有るべからず。武を用て文を忘れ。文を用ひて武を忘れぬるを非と

常に異ならぬ事を要書とせるこそつたなけれ。上杉家につたへたる東鑑こそ。昔のまゝの書なれども。これさへ此ごろは闕卷あり。末の世にいかゞ成りゆきけんもしらず。人として事と言とを愼むこと大要ならん。人を主どる者はつゝしまずんば。有るべからず。ふるき東鑑に上總の五郎兵衛鎌倉にて囚はれしとき。小山判官朝政問ひけるは。一の谷の合戰。源平雌雄を決せし軍なるに。源氏は僅四萬餘騎。平家は十萬餘騎にて。然も要害に籠らせ給ふ。尤合戰勢の多少によらず。謀にあたるに利ありといへども。いかなる事にて。一日がうちに敗られたまへるや。上總が云。平家の一類の中には。能登守敎經壹人勇謀有りければ。一門をはじめ屬徒の軍兵まで。敎經を深き海。たかき山とたのみぬ。しかるに判官義經三草合戰にうちかち。丹波路より搦手にむかひ給ふと聞ければ。宗徒の人々に大勢を相添へて。鵯越の方へ向はんと議せしかども。一門の人々花洛を木曾義仲に追ひ落され。世に義仲に勝る弓取はあらじとれもはれしに。義經木曾をたやすく討ち取りて。馳せ向ひ給へば。いよ／＼恐れて。義經に向ひていくさせんと云ふ人なし。今は敎經ならではたのむべき人なし。一萬餘騎を相添へて。差し向けらる。敎經三千餘騎を卒して。鵯越のふもとに陣をとり。七千餘騎を舍兄越前の三位通盛に相添へて。後陣とす。義經ひよどりごえを半落して凱歌す其聲山に響きて夥し。これを聞きて。人々あはや。山の手の軍こそ敗るれと。周章さわぐ土居次郎が七千餘騎たゝかひ疲れて見えしが。是に力を得て攻め戰ふ。義經麓にかけれとさんとし給ふに。敎經陣を堅うして。前に馬の駈塲をのこしひかえたるを見て。左右なく落したまはず。其勢千計岨傳に弓手の方に向ふ。敎經これを見て。是は大將義經か。さらずば東國に名を得たる武士どもなるべしとて。後陣の通盛に敵こそ御陣をめがけ岨をつたひて懸ると見えたり。されども二手にわかりぬるは。味方の陣を亂さん爲の謀か。敵かけ落さばむかひたまへ。さなくば陣を堅うしてひかえ給へと云おくる。しかる處に敵の勢馬のはなをならべかけ落さんとす。通盛これを見て。山際にかけ向はる。敎經これを見て拙き人の軍かな。山の根に付きては何とか防ぎたまはんと云ひもはてぬ

へばたやすく死する心なれば。道たる教を聞きなば。いかなる節義も守るべきに。僞僧の遺教を守り。死すべきところに死せず。骸の上まで恥をさらす。今さら論ずるにたらず。今の世には盗僧のみぞあらん。其法を聞くもの善道を守る事稀なるべし。實に歎くべきにや

或人の云。正成が義經を評して。敵を知つて。味方をしらずと云ふは。何ぞや。答へて云。正成がいへるは。梶原は能く謀を得たり。義經はよく戰を得たりとあり。梶原逆櫓を立てんと云ひし事。勇を失ひて云ふにはあらず。義經は是を無勇と云ひて。憤を含めるは。味方を知らざるなり。されども。其軍に利を失はざるは。能く敵戰を得たる故なるべし。又問。正成は梶原が逆櫓の謀ひとつを以て梶原をはかるや。答云。逆櫓の謀はいにしへも有りしことなり。藤原の純友伊豫國にて謀叛をおこし。船に逆櫓を立て。軍をよくすといへり。ふるき東鑑に曰く。梶原平三景時手勢五百騎。夜をこめて生田の森に押よする。景時下知しけるは。敵大勢なれば。軍は定めて急なるべし。討ちたる敵の首ばしとるな。敵の笠じるしをとりて。我笠印とせよ。目印して味方討たすなとて。大勢の中へ攻め入りぬ。景時が軍兵ども笠印をとらざれば。敵を討つたる事明かならざるを恥ぢて。身命をしまず。敵を討ちて笠印をとる。初のほどは敵味方分明なりしが。しばらく時うつりてければ。景時が勢みな笠じるしをさしかへて。いづれを敵と見分け難し。景時諸勢に息をつがせんとて。しづかに引けれども。敵見咎むることなし。嫡子源太が見えざれば。又取つて歸し。敵の中へ駈け入れども。敵しか〴〵と見知ることなしとあり。これらのたぐひみな謀を得たる德なるべし。一言をもつて賢愚を知れば。一計をもつて大畧を知らんにこそやすけれ。或大將郎等に令なしけるに。人を褒貶することなかれといへり。愚なるべし。善惡の褒貶なくしては。非義節義をも分ち難し。人を譏り。人を嘲り。人を諂ひ。人を妬むたぐひこそあしからめ。善を善とし。惡を惡とする褒貶なくば非なるべし

吾妻鑑は詮なき事多く記せる書なりとていつのころよりか。何者か省きけん。今の世に流布せるは畧せること多し。詮なき事をはぶくとて。要説を除き。

代の嘲を招く媒なり。人の重んずるは命なり。命を捨つれども時と義とを知らずして死するは。人の道に非ず。義經耻の爲。名のために。命をかろんずれども。却つて耻をなし。名をながす。これを無學の人と云ふ。道をしるは聖賢の法なり。聖賢のをしへを求むるを學と云ふ。天に有りては日月の明。地に有りては山海の有。人に有りては聖賢の度なり。煙雲は天の明を闇まし。不政は地の有を毀ふ。無學は人の度を失ふ。この三つは惡の本なり。亂さずんば有るべからずと書けり。誠に貴き事ならずや
世人かならず語はよくして行はあしきこと多なり。言を以て人を捨てず。人をもつて言を捨てざるは。聖敎なれども。人の善言を聞きては。其いふ人の短を識る非ならずや。正成が智謀に。義經義仲の計略比すべきに。土中の金玉惡人の善を捨てざる謂なり。義仲。義經が謀戰可なる處をば。正成も用ひたり。不善を見て。みづから宥むる聖賢なるに。れのれをしらず。人を識るは拙きにあらずや
或人。家富み一族も多かりしに。大なる佛像をつくり。家財を費す。家臣これを諫む。其人の云。佛を造るは善心ならずや。これを造るとも。我財寶盡るにあらず。汝はいにしへの守屋なるへしとて。いさめし者を追放し。れもひのまゝに佛をつくり。寺をこんりうす。一族家人これをよしとし。家財をつえやしける。富めるものこそあれ。まづしきものは衣服をうつて僧にあたふ。しばらく世もしづかなれば。兵具の用をも忘れ。鉾鈍く刄しらめども知ることなし。然るに將軍義敎。持氏と牟盾の出來ぬれば。彼ねぢけ人も遁るゝ處なく。戰場に出でしが膚には佛經を書きたる衣を著せり。かゝる愚人なれば。いかでか謀戰の道をしるべき。千葉之介氏胤と合戰し。散々に討ち負けて。遁げ走りしが。沼に驅け入れければ。經書きたる衣は。泥に染みて。文字も見えずなり。建たる寺へ遁れ來たり。一族百餘人いかゞは騷動す。住僧出て云。輪廻は車の輪のごとし。今の有樣これ過去業障の果る處なれば。遁れ給ふべきにあらず。一心に佛を念じ。自害有るべし。後世を弔ひまゐらせんと云ふ。實にもとて。みな自害しける。住僧そのかばねを溝瀆にすて。物具をことごとくはぎ取りたり。淺ましきにあらずや。死せよとい

ずるに。いかなる弱兵なりとも。三萬人の軍兵をいけどらるゝ事はあらじ。支那人は韃靼人勇ありとす。日本の人は韃靼人をやすく拉ぐときは。支那と日本を比して勇の强弱を知るべし。赤松圓心がいはく。正成つねに云。謀をもつて敵を討つは。良將の法なり。偽りはかりて敵を殺すは。將の法に非ず。たとへば圍碁をいどむに。敵の石を盗みて勝ちたるは勝にあらずとなり。古き東鑑に云。賴朝奥州の秀衡が子泰衡國衡を討たんと評議しけるとき。泰衡が昵近の家人犬間の三郎と云ふ者。小山の判官朝政に所縁(ゆかり)て。密に通じけるは。重賞あらば。泰衡をうつて鎌倉に參らせんと云ふ。朝政が云。彼は人非人なり。我又これに同意するは耻なり。されども是に隱すべきにあらずとて。賴朝にうつたふるに。賴朝のいはく。我はからひにたらず。朝政がこゝろにまかすべしと有りければ。朝政犬間がはからひを推擧せず。却つて秀衡が方へ御分の家人。かゝる密計ありと告げしらせければ。犬間これを聞きて大におどろきにげ失せぬ。泰衡をはじめ從類みな是をあやしみ疑ふ。敵より味方の力となりぬれば。うたがふも理なりとしるせり。正成これを評して云。賴朝大將の德あり。朝政臣下の義あり。泰衡は不義の者なりしが。爰に於ては愚將の器ありけらし。實に面白き評なるべし

人として。道にうときは人と云ふ道をしらざる成るべし。耻ぞとおもひ命をすつれども。耻にあらざる事とおもふには。却つて耻なり。上杉刑部太輔憲春。滿氏の無道を諫めし一卷の書に。貴賤を別たず。耻をしらざるは人にあらず。源の義經は名高き人なれども。道に疎ければ物の理をしらず。理をしらざれば耻をしらず。大義をおもひ立ちて奥州へ下るに。たのめる商人の財寶をとらんとて。盗賊共多く入りたるに。義經か居ながら防がざるは耻とおもひて。身命を捨て防ぐ。天下に義兵をおこす志あるものは。左程の小事を耻とおもひ。身を捨つるは却つて耻ならずや。義經また身を捨て弓を取りて。名の爲にすといへり。ゆみの弱きこと敵にしらるゝは。大なる耻とおもふや。大將としては謀にかしこく。戰をよくし。國を治むるを良將とす。色を重んじ。政に懈り。匹夫の勇をなすを惡將とす。これ大なる耻。末

くし給へり。武家にしてこゝをまなぶはあしかるべし。君の非を知るならば。死をはやくすべきにや。能くそのときを知るにありと云ひおくれり。彼を見これをきくにも。正成の遺教感涙を催す事のみぞ多き

正成はつねに小松殿を忠臣として貴まれしとかや。今の世には正成の行ひを尊みてこそよからめ。高の師直が奢侈をうらやむもの多きこそいたましけれ。終に命を路頭に捨て。彼玄宗の貴妃も安祿山と通じ。天寶の亂はありしぞかし。異國本朝ともに。いろにはふけるまじきことなりとあり

世につたふる事に。あやまり多し。爲朝大島にて討たれ。義經衣川にて討たれたりと云ふはいつはりなり。爲朝はうるまへ渡り。義經は蝦夷へ落ちし事もしるく明らけし。世には似たる事こそ多けれ。世人のもてはやす草紙に。主に無禮をなし。親に仇をなしゝたぐひを。いさぎよく書きなし。道理なりといひなすともがら多し。つたなき事にあらずや

或人の云。本朝の人と。異國の人は。いづれか勇つよからんといふ。答云。異國は文を以て國ををさむれば。人智をみがき。心柔和なり。謀深うして節義を守ることつよし。本朝は武を以て國を治むれば。人才を磨くこゝろ強なり。謀淺くして節義を知るものまれなり。異國とて善人のみあるにあらず。本朝とて惡人のみにあらじ。その勇の強弱をいはゞ。本朝のつよかるべし。また問ふ。本朝の勇のつよきとはいかに。答云。支那の夷のうちに北方の韃靼人軍を得て勇つよしと云へり。秦の始皇がごとき勇人も。韃靼には大におそれたり。然るを本朝弘安年中元の世祖が代に。日本を攻むとて。大勢を渡す。これみな韃靼人なり。先陣十萬餘人。肥前國平壺島に陣をとる。九ヶ國の武士。松浦。原田。菊池等三萬餘騎にて押し寄せて合戰す。だつたんの軍大に敗れぬれば。其勢三萬餘騎しりぞいて陣す。菊池以下すゝんでこれを攻む。韃靼の軍兵は。大におそれ鋒をすてて地に伏して呼喚せしを。壹人も殘さずみな生捕て。これを誅す。吳萬戶。子閭。莫靑といふもの。僅三人をたすけて。本國に返す。こゝを以て。これをおもふに。軍の勝負ははかりがたし。三萬の士。生捕らるゝは勇のよわきゆゑならずや。日本の國風を按

あらず。漢楚七十餘度の合戰に。高祖度毎に利なかりしは。韓信。張良が謀拙く。軍を得ざるにはあらず。ときの至らざるなり。木曾が義經に討たれたるは。其積惡を罪するときなれば。いくさの拙きにはあらずと。義貞が云。慮ある木曾積惡有事はいかに。正成が云。慮は學んでいたるにあらず。生れ得たる處なり。聖賢のをしへをもつて。道理をおこなへば。その慮善となる。盜賊の人の物を奪ふに。希代の謀をなすを見給はずや。木曾も道理をしらざる故。其慮惡となる。關白とならんと云ひしとき。覺明法師が大職冠のすゑならでは成り給はずと云ふに。これを用ひて關白とならず。夷心にもならぬ事はやぶらざるはやさし。此心の木曾なれば。君をなやますを逆心とて。惡の頭とすと知りたらんには。惡行はすまじ。士の色にふけるは恥と知りて。最後の軍に巴をかへすもあはれなり。義經は木曾よりはるかに器量おとりぬべしと。直義がいはく。義經より木曾が器量はいかなる處がまさる。正成がいはく。一字一文をもしらずして。事をまもるこゝろ有り。義經は兵書の一卷もよみしかども。ことを守るこゝろなし。されば生れ得る處の器は義仲まさるべしと。長年が云。木曾大將の器ありとはいかに。正成がいはく。謀と軍とを得たるとは。大將の器にあらずやと語りければ。義貞以下これを感じてける。こゝをもつて思ふに。世の人は義經にならぶ軍の人はあらじとぞ思ふに。楠の評を見れば異なるが。正成は貴ぶにあまりあるにや。聖人だにも古今の道理を知ることかたしと宣へり。今の世の人々の怨となる事を云ひ。恨を含むことをいうては。我とも當然なりと云ふ。つたなきにあらずや

正成みなと川に下るとき。正行が爲に一卷の書を殘す。池田某傳へて重寶とす。其書に異朝には孝子忠臣の聞え數をしらず。されども。文に心をよせずして。これをしることかたし。今扶桑戰國と成りて。貴賤やすきいとまあらざれは。文を學ぶべきことかたかるべし。日本にも上古には。孝子も忠臣もありこそしつらめ。これをしらず。近き世に其人を慕はゞ。親に孝をなさんには。小松殿をまなぶべし。君に忠をなす事は藤房の卿をまなぶべし。しかれども藤房の卿は公家なれば。政の背けるを見て。身をか

き君の寵僧なるを。さかしらを宣ふものかなと云ひければ。正成いやとよ。是は戯ながら貴きとにこそ。折なくてはいかでかかゝるとを聞んとさゝやきければ。藤房是を聞き給ひて。正成の賢にて我短を貴まるゝこそ。憚多けれ。圓心のさかしらを云ふとはよしなかるべし。圓心さばかりの戰功あれども。其賞すくなきは。和人の不幸をおもひ。上を恨むる意を捨てらるべし。正成の宏才も時にあはざれば益なし。惡僧なれども。文觀等のときを得て富めり。不義にして富めるは。夫子の惡むところなり。我も人も會して善行を求むる事こそあらまほしけれ。重賞のもとに死者有りと候。兵書の文なり。臣たるものゝまもる處ならずや。臣としては義のために節を守る敎こそたふとけれ。百年の齡を保ちて。わづかに三万六千日一旦の榮耀は浮べる雲のごとし。何ぞ是に就て義名を墜し。君にむかつて怨をふくまん。聖人不君につかへて其君の非を非とせず。その身を非にして。非に事よせて國を去る。聖人の行にこそおよばざらめ。君に恨をなす事あらじと語り給ひき。正成これを聞きてこれ偏に圓心が憤あらんを知り給ひて。君の爲に宣ふにこそと。ふかく感じける。圓心は何事も聞きしらず。畏つて居ける。藤房

けふまでも有ればあるかの身をもちて。ゆめの中にも夢を見るかな」といふ古歌を吟じて。涙ぐみたまひければ。正成偖は世をながくもおもひ給はぬにこそと。そゞろに涙をながし歸りぬと。ふるき太平紀に見えたり。實に藤房の卿はたふとき徳おはせし人にこそと。今の世までも慕はまほし

今の世の人。徳といへば欲の事とおもひ。財寶を集むるを徳と云ふとおもへり。大きに相違せり。ふるき太平記に。正成が宿所にて。新田義貞。足利直義。名和長年等會して。古人の合戰を評す。義貞のいはく。軍を得しは義經なるべし。正成がいはく。義經は戰を得て謀をしらず。敵をしつて味方をしらず。長年がいはく。木曾が軍はいかに。正成いはく。義仲は謀を知つて軍を得たり。大將の器あつて慮あり。惜いかな一字をも書かず。一文をも讀まざれば善惡の道理をしらず。直義がいはく。木曾軍を得たりとはいかに。義經に手もろくうたれぬるものをと。正成がいはく。軍の勝負によつて軍の善惡の辨ずるに

ことなるべし。日本宗廟大神宮は小社を茅葺にして渡らせたまへとも。御惠みは秋津洲のうちに通せり和僧のこゝろこそたゞしからね。功の大小によらず。こゝろざし道にかなふときは。もとめざるに善縁ありと勸めばよかるべきに。われを賺して。伽藍をたてよといふは。大に蜑運（本ノマヽ）にこそ。今伽藍をこんりうせば。其費大なるべし。國の煩たるべし。これ安民の便ならず。民の苦しみなるべし。理世安民とは何事ぞや。世ををさめ從類眷屬をはごくむより外なし。我子孫善人ならば。いのらずともさかえ。惡人あらばいのるともほろぶべし。われ家業だに能くしる事難し。況。我道ならぬ事をや。賢聖の法。神道の意味。深長なる事をいかでかしり盡くすべき。一天のあるじ萬乘の君も。渴仰し給へる佛法なれば。あしき事はあらじ。和僧鎌倉にあらば。政の妨ともなるべし。淺智の輩家職をうしなう媒ともなるべしとて。鎌倉を追ひ出だしけり。其後はかまくらの僧。これにおそれて人を誑さず。泰時はかゝる賢才ありしかども時賴が代に建長寺といふてらを建てしより。かまくら中に五山とて。大きなる寺どもあまた作る。其外國々に寺をつくる事數をしらず。國賓大きにつひえ。國賊街に滿てり。尊氏は夢想國師と云ふ僧に。誑かされて天龍寺を建立し。あるとあらぬことのみおほかりき。武將の身としてかゝる疎きに惑ひては。國を治むる事かたかるべし。寺をつくるこゝろざしあらば。先四岳に滿てる流勞の民を救ふはかりごとこそあらまほしけれ

昔。藤房卿の宿へ楠正成と。赤松圓心と二人ゆきたり。藤房出で給ひて。四方山の物語どもして居給ふ處に。文觀法師出で來れり。君の惠みに飽ける法師なれば。矛を持たせ馬をひかせて。おびたゞしきありさまなり。藤房文觀にむかひ。惡僧どのゝ訪ひよしなしとありければ。文觀顏色かはつて。惡僧とはいかに邪見法逸の僧をこそ。左は云ふべけれと云ひければ。藤房智有る人にて。戯にとりなし。朝廷の臣につらなれども。臣の道を得ざれば。良臣にあらず。和僧も佛のをしへを行ひ給はねば。眞の僧にあらず。善ならねば惡。眞ならぬは僞なり。和僧は惡僧。我は賊臣なりと聞え給へば。文觀言葉なくて歸りぬ。圓心つく〴〵聞き居て。文觀は世にならびな

れどもいやしき身も和歌の道には心を寄すべきことと
にや。或人の兵家に和歌を翫ぶこと。かならずこれ
愚なるべしといへども。家職を捨て翫ばゝこそあし
からめ。是に心をよせば。おのづから人欲を避くる
媒とも成るべし。唐の李陵が蘇武が別をしたひ。携ㇾ
手上ニ河梁一。游子暮ㇾ何之。徘徊溪路惻恨々不ㇾ得ㇾ辭。
晨風鳴ニ北林一。熠燿東南飛。浮雲日千里。安知我心悲と
作りし類ひ。目前に哀を催すにあらずや。物に感ず
る人有りてこそ。憐むこゝろあらめ。道理を聞きて
は心に感じて。これをたもち。惡を見聞きては。心
に避けて捨つべし。感ずるこゝろなくば千萬の金言
を得たりとも。萬卷の書を讀みたりとも。益なかる
べし。哀をしりてこそ道理を知る端とはなりぬべけ
れ。もろこしの詩。日本の和歌は。あはれをしるの
はじめならずや。おろかなる人の恐るゝは狐狸の化
したると盜なり。唯おそろしきは佞姦の人。愚盲に
して勇をふるふ人のたぐひなり。無道の人にあひて。
詮なき事の出來たらんは。恐るべきことならずや。
かしこき人のおそるべきは。今の世の佛法なるべし。
そのもとを案じ見るに。釋迦といふは西方の聖人と。
ふるき人も記しおかれたれば。さのみ無道の教はあ
るべきにあらず。されど文字三寫を經て。烏焉馬と
なるの如く。その道を失ふ今の佛法は。みな非法と
なれり。釋迦のをしへは身を捨てゝひとり心を安ん
ずるに有りて。人の勞をいとふにあり。欲心をはな
るゝにあり。然るに釋迦の法とて幼稚なる童。老に
耄たる尼法師を誑し。飢餲に賤家の粮錢をとりあつ
むる盜僧のみ。ちまたにみち。あるひは國郡の主。
あるひは富貴の人を誑しては。國財をつひやし。堂
を建て佛を作るたぐひ。みな亂民の賊なり。百人の
僧を集めて發心堅固の僧を撰はゞ。一人あらんこと
かたかるべし。ふるき東鑑に。北條泰時執權のとき。
一人の僧ありて泰時に云ひけるは。公もし善心あら
ば。ひとつの伽藍をこんりうし給へと云ふ。泰時建
立することはやすかりなん。その德いかなることに
かと問ふ。僧の云。一字の塔伽藍をこんりうしぬれ
ば。治世安民。後生善所。子孫繁昌の功德ありと。
泰時のいはく。佛法と。神道と。聖法とは何れ勝劣
ある。僧の云。神道。聖道は佛法におよびがたしと。
泰時笑うて。一師闇うして萬弟道に迷ふとはかゝる

の神も同體なり。天地の同體にして萬物の靈と同樣なり。萬物の靈と同樣にして。爲す處願はずして成就せずと云ふことなしと宣ふは。本心の德そなはるときは。人欲の私なるべからじとの禁めなるべし。誠に人としては大極にして。無極の味をこそしらざらめ。天地の道理を近く守り守つて。寐ても寤めても三綱五常に心をよせ。其道に背く事をおそるべきにや。本心汚れずして。おのづから神明に通ずとの大制なり。たつとぶに餘有るべし。國に居ては。其國の太夫をも譏らざるは。これ禮なるべし。神託に云。國に居ては。國を尊まざるは非なりとあるも一理なるべし。國風をよく知るべきなり。東夷。西戎。南蠻。北狄の風俗一ならざるは。人みな知れるところ也。東夷の人。東夷の風俗を非とし。西戎の人。西戎の風を非なりとするは。其國の太夫をも云はざるは國をたつとぶゆゑならずや。氣凝りて地と成り。地を分つて國とす。其國を守る者は。其國の靈なり。其國に居てたつとばざるは非なり。日本に產るゝ國風なれば。神道のかたはらをも知るべきことこそよからめ。予去ぬる頃。上洛しつるとき。一條油小路にて禮記を讀む人あり。予も其席に入りて聞きしに。讀む人の云。日本は夷國ゆゑ人の風俗人に非ずといへり。孔子は太夫の事だにもいはずと宣ひしに。其國に居て。其國をいふは。大なる罪なるべし。天地の間に孕れる人なれば。受け得るところはみな天地の體なり。然るに人として人を害するは。身に論ふるに。左を以て右を截り。右をもつて左をきるがごとし。されども。天地の間に惡氣あり。人中に惡人あり。その惡人を殺し。世を治むるは。病の療治をなし。身健になすがごとし。君子は身の爲にことをはからず。なす處皆世の爲にすといへり。論ずるにたらねども。今の世のありさま私のうらみによつて。事なきに人を害し。臣として君を弑し。兄弟相別れて怨をふくむ。これ日本のみにあらず。文學盛なる異朝だにも。乱臣賊士のみ多くして。古聖人の貴法みな廢れて。獸類にひとしき者。猰㺄に世を奪はゝるゝ。これを思ふに。日本は小國なれども。天照大神の。德澤。今にのこりて。廢れぬれども王室のかたち猶殘るこそたのもしけれ。唐の人は詩をつくりて志を述ぶ。日本の人は歌をよみて思ひを述ぶ。さ

我宿草

太田道灌著

天開け地はじまり人生ず。三つの物は陰陽の凝れる形。氣の守る處なり。天の氣を神と云ひ。地の氣を鬼と云ふ。上に有るは陽にして君なり。下にあるは陰にして臣なり。上明にして下正しきを應といふ。いにしへ日本の大法は皆神道なり。正しく直く身心を治むるを神道とす。天地の氣質を受けたる人なれば。天理地道を守らずんばあるべからず。天照大神の萬民を教へ給ふに。人は天地の靈なり。静謐なるをよしとす。目に不淨を見て。心に見ざれ。耳に不淨を聽きて心にきかざれ。鼻に不淨を嗅いで心に嗅がざれ。口に不淨を云ひてこゝろに觸れざれと宣ふは。誠に本心の徳をさめよとの制教たつとぶに。猶あまり有るべき事にや。靈とは天に有り。人に有り。磨くときはあきらかにして惠深し。蔽すときは昧にして害大なり。君として靈をみがく時は。萬民を憐み。政道を正しくするにあり。臣として。靈をみがくときは。上を敬ひ義を重んずるにあり。靈を蔽すといふは。親に孝をなさず人のうれひを顧みず。道を廢すといふ。靈忽にこれをばつするなり。人の惡む處のものは死なり。死も道理によつてにくまざるは。君子の道なり。夷齊が餓ゑて求めず。正成時を見て討死するは。道理を守る故なり。人の道理にかなはぬは。禽獸にれなじ。生れながらにしては聖人ならん。學んで惡を避くるは賢人なり。今の世に賢人もなし。惡のすくなきを善人とやいはん。今の世の良臣はいにしへの賊臣と。古人の宣ふも理ならずや。實に歎くに餘あり

君臣。父子。夫婦。兄弟。朋友のまじはり正しきを人とす。此交亂るゝを禽獸とす。君に仕ふるに禮義をまもり。忠を盡し。子父に仕ふるに孝を盡し。婦をつとに仕ふるに節を守り。弟兄に仕ふるに敬をなし。朋友に交るに信をもつてすべし。君臣を仕ふに恩を厚くし。勞をいとひ。父子を憐むに道ををしへ。兄弟を愛するに慈を以てすべし。鸚鵡よく言へども飛鳥をはなれず。猩々よくものいへども獸をはなれず。人として禮なくば禽獸の心ならずや。聖教貴いかな天照大神の大制に。五臟の神。安寧にして天地

り。頃日の霖雨の淩に。是を見るに。其意微にして
君子の度にはわらねども。其志の發る所また優美な
り。しかれども其致はまたひがめり。たまくいと
まの日。其體にならひて思ひいづるに寸陰を惜むは。
聖賢の意なれば。たよぶべきにわらざれども。いた
づらに寐て。一生を終らんより。世の怨敵とならざ
らんことを書きわつむるは。後の人つれぐ〃をしの
ぶ與にもなれと。書きすつるものになん

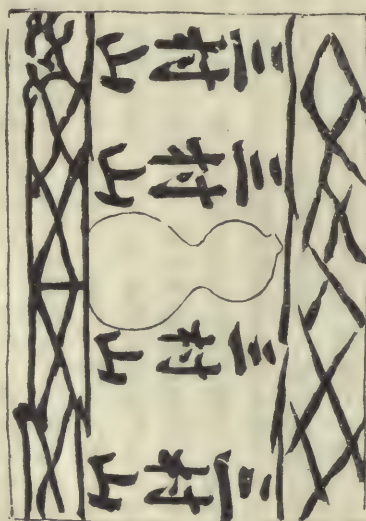
我宿草自序

我宿は松原つゞき海見えて。富士を軒端に眺めやる言葉のたねのつれ〴〵に。ふりにしかたの世を求め。今の世に較べて。ひとりこれをなげき。コノ一句本ノマゝあはれ治りし代に生るゝむかし亂臣賊士の威をふるひて。隨ひし時をば避くるよし。文宣王の德も時いたらねば。國民を救ふにおよばず。伊尹の仁は文宣王に比するにたらねども。時に隨ひて。其澤世をうるほしき。至聖後世の爲に易をなす。易はこれ時の一をしるに有りと云ふ。時を悔ゆるは愚のいたす處にやあらん。凡。三綱五常の敎へをはじめて。治世安民の謀みな聖人の意を本とせり。王位をふみ國を守る御身にしては。堯舜禹湯文武の德を慕ひ。攝政の身としては。周公旦の遺行を貴び。夷齊が節。杵臼程嬰が忠を鏡とせんには。過不及の誤ありとも上を犯し。國を亂る罪すくなからず。抑我朝の昔を傳へ聞くに。天照大神遍く世を憐み給ふ事。茅茨不剪。柴椽削らぬ聖代にこえぬ。四岳の民。征をうらやみし世を求むるにたらず。恩澤萬歲にあまりて神道をもつて王室の助とし。萬機の政たゞしかりしに。聖德太子初めて靈瑞の法を尊み賢臣守屋の大臣を殺されしより。佛法世に弘まり。次第に王室衰微して。鳥羽白河の二帝にいたつて。つひに武家のために代をうばゝれ給ひぬ。卑夫闇才の輩も。彼佛法と云へば尊むに足らずとしらるべきに。何ぞ王位をふみ給ひて。是を尊崇したまふ。まのあたりにも伊勢の僧を避け給ふを見れば。なぞか佛法の不善なる事をしらざらんと。心なき身をなげかし。然るに源の頼朝天下を治めてより武家相續きて世をとる。北條泰時才逞くして僧徒を廢し。より〳〵書を讀みて求めざるに功を得。聖賢の遺書を見。道德の一端を知り。行ひ少し道にかなひければ。國家よく治りしに。高時が世に及びて德衰へ。惡盛んにして家ほろぶ。後醍醐帝も國民を惠み給ふの義兵ならねば。尊氏に世を奪はれ給ひぬ。尊氏も世を治むる器にあらねば。逆賊ちまたにみちて。闘諍の聲やむことなし。されども其の餘慶や末に傳はりけん。今にいたりて斯くのごとし。そのかみ高の師直が家人躊躇して。隱遁の儀法を論じ。一卷の書となし。徒然草となづけゝ

造茶

竹屋三書曰。造茶新採。揀ニ去老葉及枝梗ー碎屑。鍋廣二尺四寸。將ニ茶一斤半ー焙レ之。候ニ鍋極熱ー始下レ茶。急炒。火不レ可レ緩。待レ熱方退レ火。徹ニ入篩中ー輕團。那數遍復下ニ鍋中ー。漸々減レ火焙乾爲レ度。中有ニ玄微ー。難ニ以レ言顯ー。火候均停色香全美。玄微未究。神味倶瘦と。按ずるに。いま唐茶を製するに。茶の葉を採り。よく洗ひ、水氣を去りて。鍋にて炒し。手にて揉み。よく青汁をさり。又炒し茶のしんなりと柔になる時に。とりて日に干すなり。始は青色日を經て。黒色となる。此法と大畧同じ。那は那換の那にて節中にまろめて置く所を移し易へて。青汁を去るにて。揉みて青汁を去ると同意なるべし

瓦硯

先に三村山と識したる瓦硯を觀るに。眞に古物なり。匡房寛治元年悠紀歌近江國みむらの山。時雨ふるみむらの山のもみぢ葉はたがおりかけし錦なるらんこれ新勅撰に載せありて。三村山は近江國の名所なるゆゑ。諸書を考ふれども。三村山知るべからず。近江の國圖を撿するに。三村山これなり。三村あり。按ずるに。後世三村山の所を失ふによりて。三村と誤り讀むにや。意ふに。古。三村山の邊に。官府あるひは。佛寺ありて。その瓦なるにや。圖の如し三村山の文字。及び上下の罘罳の形の如きもの。骨となして作りたる瓦なるゆゑ。文字及び罘罳の形に似たるもの。皆隆起す

續昆陽漫錄 終

レ火攻。盡焚レ之。荷蘭人遁歸二其國一。成功既有二臺灣一。以二赤嵌城一爲二承天府一。改二臺灣土城一。爲二安平鎭一。總名曰二東都一。未レ幾。成功死。其子經居二鷺江一。即今厦門成功弟世襲。陰有二竊據意一。經故逐レ之。世襲渡レ海來歸。經僭立。改二東都一曰二東寧一。改レ縣曰レ州。設二安撫司三一。南北路澎湖各一。辛酉經死。子克㙮嗣。康熙二十一年壬戌福建總督姚啓聖用二間諜一。陰結二傳爲霖一爲二內應一。事洩爲霖遇レ害。明年癸亥靖海將軍施烺奉レ命率二舟師一進討。六月自二銅山一抵二澎湖一。入二臺灣一。連克二處井桶諸嶼一。誓レ師戒嚴。鄭克㙮表レ降。詔赴二京師一隷二旗下一。十二其地一設二臺灣府一。統二臺灣一。鳳山諸羅三縣隷二福建布政使司一云々と。按ずるに。水道は東我國に連ると云ふは誤なり。我國の甲螺及び歸一王何人なるにや

敬空

同書曰。沈存中筆談補云。前世風俗卑幼致二書尊者一。但批二紙尾一答レ之謂二之批反一如二詔書批答之義一。故紙尾多作二敬空字一。謂下空二紙尾一以候中批反上耳。按昔人謂謙空之。空乃九拜之空。首擣也。二說互異と。これにて敬空の二義あることと知るべし

妾亡

智品曰雍本爲二吳縣知縣一。吳民有二妾亡者一。妾父訟下其夫密殺二我女一。兩月匿中屍湖中石下上。召訊二其夫一。曰妾逃兩月。踪跡莫レ得レ知。妾父脅レ賊始知二死所一。公使下人視二其屍一。乃訊レ父曰。夫匿レ殺二汝女一。汝安知レ匿二于石下一。此又豈兩月屍邪。此必非二汝女一。殺二他人女一冀レ得レ賄。一考而服と。按ずるに。何人の女を殺すと訊を記さゞるは闕文なるべし

理寃

同書曰。黃紱爲二四州參政一。過二崇慶一。忽旋風起二輿前一。擁不レ得レ行。公曰。即有レ寃。且散吾爲レ若理。風遂止。抵レ州沐而禱二城隍一。夢中若有神言。州西寺云。公密訪州西四十里。有レ寺當二孔道一。倚レ山爲レ巣公且起率二吏兵一急抵レ寺。盡係二諸僧一。其中一僧少而狀甚惡。詰レ之無二祠諜一。即塗二酣堊額上一。晒洗レ之。隱有二巾痕一。公曰是盜也。即訊二諸僧一。諸僧不レ能レ隱。盡得二其奸狀一。蓋寺西有二巨塘一。夜殺二投宿人一。將レ屍沈二塘中一。衆共分二其囊貲一。有二妻女一。則又分二其妻女一。匿二妻女隱窖中一。恣淫二毒之一矣。公盡按レ律殺レ僧。毀二其寺一と。黃紱風に託して。よく寃を治むと云ふべし

別募死士。為緝事軍。令各攜善畫者而入。夜行晝伏。分道深入。至則各圖其山川道里以出。又恐邏者逐及。以藥筆傳之紙。絕無可覘見者。出則按圖聚汝為山谷狀。不二三月間。府江所轄諸夷砦。其最狡且險者。八十二處。稍次者百餘處。大略如掌股間矣と。これより諸猺を料ると云ふべし

井田

經濟成書曰。天下無百年不變之法。貴有百年行法之人。竊意井田有三代之君則可行。無二代之君則不可行。何也。阡陌既開。而呑并難出于下。阡陌未開而侵奪生于上。春秋戰國之時可覘已。又井田無三代之君不可行。即有三代之君則不必行。何也。與其奪民田為歸授。而傷干煩擾。何如因民田以均限而禁其賣遷。魏晉隋唐之制。亦可擧已。後世徒慨古法之莫返。不思行法之未善。商君擅廢井田。固為三代罪首。而新莽強復之。豈即為周家功臣乎と。林一瓚の說はなはだ理ありと云ふべし

臺灣

香祖筆記曰。臺灣古荒服。在福建東南大海中。西界于漳。南鄰于粤。北與閩安相直。其水道則東連日本。南鄰琉球邏羅呂宋荷蘭諸國。其沿革莫得而詳也。明嘉靖四十二年流寇林道乾作亂。都督俞大猷勦之。追及澎湖。道乾遁入臺灣。大猷不敢逼。偏師駐澎湖島。時哨鹿耳門外。徐俟其敝。道乾遁往占城。道乾既去。澎湖駐師亦罷。天啓改元有顏思齊者。為日本國甲螺。（猶頭目也）引倭首歸一王屯臺灣。閩人鄭芝龍附之。始建平安鎮城。既而阿蘭國人舟遭颶風至此。愛其地借居之。遂與倭約。盡有臺灣之地。而歲輸鹿皮三萬。阿蘭國人善火器。其居臺灣也。以夾板船為犄角。雖兵不滿千。南北土酋咸畏之。又建赤嵌城以居。順治庚寅。日本螺郭懷一謀逐阿蘭人。事覺懷一被殺于歐汪。（今在鳳山縣界）卒丑鄭成功自江南敗歸。勢日蹙。頓軍廈門。適日本甲螺何斌與荷蘭酋長隙。潛誘成功進取臺灣。鹿耳詰屈回旋。沙沿水淺。卒難飛渡。成功舟至。水忽漲餘丈。巨艦縱横畢濟。遂克臺灣。荷蘭國人與成功戰不利。退保平安鎮城。其酋歸一王以死拒之。成功力攻不克。乃環山列營以困之。荷蘭人勢窮。以十除艘決戰。成功用

白　酒

楊州府志曰。白酒各州縣皆有。用二草麴一三日可レ成。味極甘美。少入レ水。曰二水白酒一。冬月煑過窨レ之。曰二臘白酒一と。醫書に出づる白酒はこれなるべきにや

小　學

前漢書律曆志に其法在二算術小學一。是則職在二太史羲和一。掌レ之とあれども。小學は文字の學ゆゑ。律曆志國字解に小學を曆學のことゝなしがたかりしに。同書王莽傳に。令下天下小學戊子。代二甲子一爲二六旬首一。冠以二戊子一爲中元日上。（師古曰。冠者士喚反元善也）昏以二戊寅之旬一。爲二忌日一。（師古曰。昏謂レ取レ妻也）百姓多二不レ從者一とあり。これにてみれば。前漢には文字の學を小學と云ふのみならず。曆學をも小學と云ふとみえたり

ヒントスタント國

先年。和蘭人敎書に語りて云。凡そ天下の國。その國の物を賣りて。他國の物は買はざるなし。然るに。天竺の内ヒントスタントと云ふ國は。其國產を賣りて。他國の物を一切買ふことなし。如レ此なれば。天下の金銀終には此國へ寄り集れども。饑ゑたる時に。金銀を食ふべからず。寒えたる時に。衣るべからざるを集め貯ふるは怪しむべきなりと。和蘭人の言の如く。金銀平日は至寶なれども。饑寒の用をなさゞれば。金銀を集むるは何の爲に

難波村

ある人の云く。攝州尼崎の西の町はつれより半里ばかり西に。東難波村西難波村あり。西難波に村に。難波の梅（白花にて紅を帶ぶ）あり。古の難波の京これなりと。或說の如くなるべきにや

折　獄

益智編曰王元美在二靑州一時。官校捕二七盜一。逸二其二一。盜首妄報二逸者姓名一。俄縛二一人一至。稱レ寃。公令レ置二盜首庭下一。差遠而呼二縛者一。跪二堦上一。其足躡二緣絲履一。盜首數從レ後窺レ之。公密呼二一隷蒙縛者一。首同出而易二其履一。以レ人令三盜首諦レ之。盜首不レ知二其易一也。即指二緣絲履一曰。此逸盜也レ公大笑曰。爾乃以二吾隷一爲レ盜。即二釋縛一者と。元美博物のみならず。よく獄を折むと云ふべし

幹　辨

同書曰。茅坤爲二廣西僉事一。欲三入剿二猺賊一。以二卿導不レ審。諸猺獞並阻二山谷一。或師偵者不レ得レ入。于是

即十分度之九分八五六四七三六五八歲差則謂。恒星每年東行五十一抄不特天自爲天。歲自爲歲。而星又自爲星。其理自明。其用尤便。上編仍之。其後西人奈端範屢測歲實。又謂。第谷所減太過。酌定歲實爲三百六十五日五時三刻三分五十七秒四十一微三十八纖二忽三十六芒五十六塵。以周日一萬分通之得三百六十五日二四二三三四四二〇一四一五。比第谷所定。多萬分之一有奇。以除周天三百六十度。得每日平行五十九分零八秒一十九微四十四纖四十三忽二十二芒零三塵。即十分度之九分八五六四六九六九三五一二八二三五比第谷所定。少五纖有奇。每年少三十微有奇。蓋歲實之名數。增則日行之分數減。據今表。推雍正元年癸卯天正冬至。比第谷舊表。遲二刻。日躔平行根比舊表少一分一十四秒。見推日躔用數而第谷去余一百四十餘年。以數計之。其差恰合是亦取前後兩冬至相距之積日時刻。而均分之。非意爲增損也。至於歲實消長。統天授時用之。新法算書雖爲之說。而實未用其數。茲不具論と。按ずるに。周天三百六十度は。西洋の渾天儀三百六十度となして算するに。甚た便なり。統天は南宋の慶元五年に。楊忠補造りたる暦なり。授時は郭守敬作る暦なり。これにてみれば。歲實に消長をなすは。統天暦より始まるとみゆ

群書治要

三代實錄に曰く。清和天皇讀群書治要。參議正四位下行勘解由長官兼式部大輔播磨守菅原朝臣是善。奉授書中所抄紀傳諸子文。從五位上守刑部大輔菅原朝臣佐世奉授五經之文。從五位下行山城權介善淵朝臣受成爲都講。從四位上行右京大夫兼但馬守源朝臣覺豫侍都講席。至是講竟。天皇觴群臣於綾綺殿。蓋申竟宴也。大臣以下各賦詩とあるは。群書治要唐の魏徵の作ゆゑ講せらるゝこと如此なるべし。これより盛に行はれしと見えて。古き寫本あり。神祖の大德この書を刊行せられ。後にこの板を紀府へ賜ふとかや

藥斑布

江南通志曰。藥斑布出嘉定縣及安定鎭。宋嘉泰中。有歸姓者。創爲之。以布採灰藥而染。青白相間有樓臺人物花鳥詩詞各色。充帳幔衾帨之用と。これ今の加賀染の類とみゆ

その序に。子夏易傳漢書藝文志に載せざれば。後人の爲すところといへども。意ふに全く後人の僞作にあらずして。古この書ありて。前漢に失亡し。孟康の時。この書の殘編あるにより。孟康易傳と註し。後人に殘編に因りて僞り作るも知るべからず。孟康易傳と云ふは。この策數によるにや。姑くこれを記して。後の君子を俟つなり

測歳實法

雍正元年。雍正帝の序ある御製律暦淵源の內の暦象考象上編に歳實を測る法あり。左の如し

測ニ歳實之法一。古人皆測ニ冬至一。然冬至之時刻難レ定。不レ如下用ニ春秋分時一得レ數爲上レ眞。盖冬至時。黄道與ニ赤道一平行。其緯度一日所レ差不レ過ニ數十抄一。儀器無ニ從分別一。春秋分。黄道與ニ赤道一斜交。其緯度一日差ニ二十四分一。其差易レ見。且求ニ平行一。須下用ニ平行歳實一而測量上。止能得レ視レ行惟二分時。去ニ中距ニ不レ遠。其平行實行之差甚微。可ニ以不レ許。況冬至時。太陽之地平緯度少。清蒙之氣甚大。古來歳實難レ得ニ確準一。此其故也と。これにて西洋は春秋二分を以て。歳實を測りて宜しきこととみるべし

歳實

同書後編に。歳實のことを說くこと詳なり。その文左の如し

日行レ天一周爲ニ歳周一。歳之日分爲ニ歳實一。古法日行一度。故周天爲ニ三百六十五度四分度之一一。歳實爲ニ三百六十五日四分日之一一（周日爲ニ一萬分一。四分之一爲ニ二千五百分一）堯典曰。朞三百有六旬有六日。杜預謂。擧ニ全數一而言則有ニ六日一。其實五日四分日之一。是也。漢末劉洪始覺ニ冬至後レ天。以爲ニ歳實太强一。減ニ歳餘分二千五百一爲ニ二千百六十二一。晉虞喜宋何承天祖冲之調歳。當レ有レ差。乃損ニ歳餘一以益ニ天周一。歳差之法。由レ斯而立。元郭守敬取ニ劉宋大明戊寅以來相距之積日時刻一。求ニ得歳實一爲ニ三百六十五日二千四百二十五分一。比ニ四分日之一一減ニ七十五分一。而天周即爲ニ三百六十五度二千五百七十五分一矣。西法周天三百六十度。第谷定ニ歳實一爲ニ三百六十五日五時三刻四十五秒一。以ニ周日一萬分一通レ之得ニ三百六十五日二四二一八七五一。較ニ之郭守敬一。又減ニ萬分之一三有奇一。以除ニ周天三百六十度一。每日平行五十九分零八抄一千九徵四十九纖五十一忽三十九芒。

罪なるを。死を減じて枷號兩個月にて留養を准すは。惠政に似るといへども。先王刑を用ふる意にあらざるべし

北瓜

長垣縣志に。北瓜與二西瓜一味同。色白而形長とありて。肉の色なけれども。今の白西瓜なるべきにや

派剩

應天府志曰。派剩平米八千八十九石一斗九升餘。派剩者留之餘貯二積於縣一。如遇二不時加派一則取二給於此一。不三復重擾二于民一と。これ等の法よろしけれども。役人あしければ名のみ存して。米はなきものなれば。妄に行ひがたし。誠に正人を得ざれば良法も益なし

落花生

嘉定縣志に落花生七八月間。開二黄花一。其墮レ地即生。風逐二隣畦一亦然。香胡嗽レ之。有二別味一。又有二一種無レ花者一。更佳。子黄色而甜。有二花子白者一不レ甜と。これにてみれば。落花生も一種にあらず

和蘭銀錢

和蘭のハロフロベイと云ふ銀錢。圖の如し。ロベイ二種あり。大を（重さ三匁）ロベイと云ふ。小を（重さ一匁五分）ハロフロベイと云ふ。ハロフは半のことにて。半分のロベイと云ふことなり

敦書先年和蘭貨幣考を著す時。和蘭人この錢あることを云ふ。今年初めてみるなり

易傳

敦書去年律暦志國字解を作る。陽九百六の孟康注を過揲の策を以て釋せしに。其後子夏易傳に策數の説ありと思ひ出だしたるにより。易緯を撿するに左の如し

陽極二其數一。萬物畢逐二其成一焉。故九也。陽極則剝。陰長而壯消之極也。故其變六也。消而息レ之。陽復而長。陰之退也。故爲二少陽一。其數七也。老陽九也。四而九レ之。其策三十六也。老陰六也。四而六レ之。其策二十四也。合二乾坤六爻之策一當二期之日一也。少而七也。四而七レ之。其策二十八也。少陰八也。四而八レ之。其策三十二也。合二少之策。當二期之日周一。老陽老陰之策也

各省遇有特旨蠲免錢粮之省。業戶既當一應徭將蠲免錢粮之數。分作十分。以七分蠲免業主。以三分蠲免佃種之民等因。具題奉旨依議。欽遵在案。誠恐地方官員日久玩忽。業主仍有照常勒取者。小民不能均沾。寔惠之處。亦未可定。應將顧素條奏之處。仍炤前件通行。直省遵行。康熙四十二年六月初三日奉旨依議　右例安全集

毆死胞兄父乞有留

康熙五十四年□月刑部會議得。湖撫劉殿衡題。王四兒毆死胞兄王天順一案。經刑部等衙門議得王四兒依弟毆胞兄死者斬律。擬斬立决。具題奉旨。九卿詹事科道會議。具奏。欽此欽遵。査若四兒有茶壺。包掃寄放天順家。因向天順妻討回。天順詢知罵。四兒聞兩兩相角口。天順越打四兒。絆跌傷磕頭顱等處。天順仍扭抱四兒。四兒計圖解脫。奉毆天順胸膛。次日殞命。據伊文王李章程。稱年七十有三。僅生天順四兒。皆無嗣息。今將四兒擬抵。必致絕嗣。懇乞留養。屍妻聶氏亦呈請將四兒留養等情。康熙五十年二月內原任江西進撫卽題。周貫生毆死胞兄周達先一案。經九卿會議。以貫生之母熊氏年過七十止生二子。俱未生孫。若將貫生低價則伊母熊氏年老無依。將周貫生免死減等。枷號兩個月。責四十板。准存留養親。題結在案。今王四兒之事。與周貫之案相應。將王四兒。免死枷號兩個月。責四十板。准其留養。奉旨依議右成案質疑

減等盜犯在監打死人命擬絞不准援赦案

刑部爲報明事會看得。金五打死吳斌一案。據音撫諾敏疏稱。緣金五吳敏郝三充子俱係部哲禁之人。于康熙六十年十一月二十七日。金五與郝三充子爲火爭吵。吳斌左袒郝三禿子。拾石擲打金五。金五拾石還擊中吳斌左耳竅殞命。歷審供認不諱。將金五照鬪毆律以絞罪援赦。具題。前來査。金五係行照鹽客周啓廸案內。免死減等暫寄渾源縣監內。俟修姑完日發遣。和樸多鳥蘭古木之犯。今在監內又復行兇。將吳斌打死情由可惡。金五不准援赦。擬絞監候。秋後處决。雍正元年十一月奉旨依議　右成案彙編

按ずるに。王四兒胞兄を毆死するは。人倫を壞る大

工程做法曰。紫檀木每㆑觔舊例銀三錢。今核定銀二錢四分。見方一尺桐木舊例銀一兩。今核定銀九錢。松木徑二尺二寸長三丈五尺。舊例銀九十六兩。今核定黃松銀八十六兩四錢。紅松銀七十六兩八錢。これにてみれば。西土の木價の貴きこと知るべし。官へ買の價なれども。これを以て推せば。、民間の木價も賤しからずとみえたり

決湖溉田

康濟錄曰。朱討元知㆓丹陽縣㆒。縣有㆓練湖㆒。決㆑水一寸爲㆓漕渠一尺㆒。故法盜。決湖者罪比㆑殺㆑人。會㆓歲大旱㆒。元請借㆓湖水㆒溉㆑田。不㆑待㆑報決㆑之。州守遣㆑吏按問。元曰。使㆑民罪㆑令可也。溉㆑田萬餘頃。歲大豐。謹按。民可㆑救而恩未㆑逮。心雖㆑切而事不㆑奮。雖㆑有㆑仁而不㆔繼以㆓仁政㆒。終未㆑有㆔以傳㆓朝廷之德澤㆒也。許尹決㆑水溉㆑田。寧甘自罪。有㆑猷有㆑爲非㆓良牧㆒而何。この案の如く仁心ありても。勇敢にあらざれば民恩德を被らず

種菜活民

同書曰。明季戊申河南大旱。知登村令梅傳見㆓麥俱枯槁㆒因思㆓蕎麥可㆒㆑種。勸㆑民備㆑種而待㆑之。所禱畢。信㆑步行㆓數里㆒過㆓一隱士㆒。揖曰。令君勤苦。然兩關㆓天行㆒。非㆓旦夕之可㆒㆑得也。梅曰。蕎麥尚可㆑種乎。其人歎息曰。可㆑惜一片仁心。向㆓樹下㆒一指曰。公欲㆑活㆑民非㆑此。不可。視㆑之則菜也。梅遂令民㆘廣收㆓菜子㆒與㆓蕎麥㆒並種㆖。未㆑幾。又霪雨不㆑止。蕎無㆓一生者㆒。惟菜則勃然透發矣。且逾㆓常年㆒數倍。民賴以不㆑死。謹按此亦救㆓雨災㆒之一法。留㆓心民瘼㆒者。不㆑可㆑不㆑知也と。この案の如く民を救するものは。微物にも心を盡すべきなり

三　案

例案全集。威案質疑。成案彙編の三書のうち。僅にこの三案を記して。清の代に政に心を盡さゞるゝことをしめす

遇㆑蠲減㆑租　爲㆓思詔屢頒等事㆒

戶部題。御吏顧素條奏。查㆓定例㆒。凡遇㆓水旱交傷㆒。蠲㆓免錢糧㆒。業主不㆑行㆛照㆘蠲㆓免錢糧㆒分數㆖。減㆚免佃戶㆙。仍照㆑常勒取者。或佃戶告發。或旁人出首。或科道糾參。將㆓業主㆒議處所㆑救之租追出給㆓還佃戶㆒等語。至㆘奉㆓特旨㆒蠲㆓免錢糧㆒之處㆖。康熙二十九年七月內。原任東撫佛倫條奏經㆓九卿會議㆒題覆。後直隸

則として。民間の量は木を以て造るなるべし。元文中觀たる所の清の工部より頒出したる江南の官升。我國の六合少弱にあたる。この九升七合七勺弱を九升七合六勺九撮とし。清の一升を五合九勺としてみれば。九升七合六勺九撮は。我國の五升七合六勺三撮にありたり。度量考に。周の一鬴。我國の伍升漆合肆勺捌撮漆貳玖貳にあると比較すれば。壹勺四撮九八零八多しといへども。大抵度量考の說と相合ふなり。元文中觀たる清の工部より頒出する江南の官尺。小尺官尺は。我國の鈔尺一尺一寸四分八厘にありたり。小尺は。鈔尺九寸三分五厘にあたる。これ今尺を官尺とすれば。官尺八寸一分は。鈔尺九寸二分九厘にて。周尺長きに過ぐるなり。小尺八寸一分は。鈔尺七寸五分七厘にて。度量考に。周尺を我國の漆寸貳分弱とするより長ければ。今尺は小尺を指すなるべしと思ひしに。書隱叢說に。周尺乃今之匠尺也。今匠尺當ニ裁衣尺十之八一とあれば。小尺の八寸一分にあらざるにや

夏草冬蟲

書隱叢說曰。昔有ニ友人一自レ遠來。餉ニ予一物一。名曰ニ夏草冬蟲一。出ニ陝西邊地一。在レ夏則爲レ草。在レ冬則爲レ蟲。故以レ是名焉。浸レ酒服レ之。可ニ以却レ病延一レ年。余所レ見時僅草根之枯者。然前後截ニ形狀一。顏色各別。半青者僅作ニ作草形一。半黑者略粗大。具ニ蠕欲レ動之意一。不レ見ニ傳記一。書レ之以俟ニ後考一云。享保年中。清の商人夏草冬蟲を持ち來る。誠に萬國の生物はかるべからず

火浣布

同書曰。火浣布有ニ幾種一。有ニ火鼠毛所一レ成。有ニ火雞毛所一レ成。有ニ火光獸毛所一レ成。有ニ火浣草所一レ成。皆可ニ入レ火不一レ然。又西域際布里島火浣布煉レ石而成。又膠州有ニ不レ灰木一。燒レ之而成レ炭而不レ灰其葉如ニ蒲草一。東以爲レ燎。謂ニ之萬年火把一。又蜀建昌有ニ石絨一。出ニ石隙一亦名ニ火浣布一。又武當山有ニ石皮一。入レ火不然。亦火浣布之類と。これにて見れば。火浣布一ならざることと知るべし。且建昌に石絨を織るのみならず。別怯赤山の石絨を織ることは。元の前よりとみえて。元史阿合馬傳。別怯赤山出ニ石絨一。織爲レ布。火不レ能レ然。請遣レ官採取とあり

紫檀木桐木松木價

繫中所在獄上。或私置二牢院一。而州縣不二聞知一。歳千百數不時決。段俑奏。許下州縣糺二列所一繫。申中本道觀察使上。幷具獄上。上聞許レ之と。子孫を繫ぎ及び年久しく繫ぐは刻吏の爲ところにして先王の罪人なり。五雜俎曰國朝論レ囚。常以二冬至前三日一。而遇レ有二慶澤一。常免二論決一。詿誤殺レ人者。老二死圜扉一而已。浩蕩之恩。視二之徃代一爲二獨度一矣と。堯典に眚災肆赦とあれば。時勢によりて行ふことあるべきにや

俗舞

經世大訓曰。唐人俗舞謂二之打令一。其狀有レ四。曰。招。曰。搖。曰。送。其一記不レ得。蓋招則邀レ之之意。搖則搖レ手呼喚之意。送者送レ酒之意。舊嘗見二深村父老一。爲レ余言。其祖父嘗爲レ之。收二得譜子一。因二兵火一。失去。舞時皆裹二幞頭一。列坐飮レ酒。少刻起舞。有二四句號一。云。送搖招邀。三方一圓。分二成四片一。送在二搖前一。人多不レ知。皆以爲二瓦謎一。朱載堉律呂精義二打令。蓋亦推舞之俗名也。招即內轉也。搖即外轉也。送即下轉也。其一記不レ得。疑即上轉也と註し又上轉若二邀レ賓之勢一。下轉若二送レ客之勢一。外轉若二搖出之勢一。內轉若二招入之勢一とありて。上轉。下轉。外轉。內轉の圖ははなはだ多きゆゑのせず

尖量平量

周官義疏曰。今市俗尖量平量二法其尖量者。吳人亦曰二脫尖一と。元文中。西土より來る戶部より頒出する江南の部斗官升方にして。口廣く底狹し。福建の斗升は圓くして。桶の如く。中ぶくらなり。其實は江南福建違なし。これ等にて觀れば西土は量の形ち色あるとみゆ

嘉量

同書。奧人嘉量註曰。按金鑄之量。司市守レ之民間及小邑小市。必准三其所二容受一而以レ木爲レ之。若必以レ金鑄。則過重而難レ運。且比戶之資用。民力亦不レ能二多鑄一也。又曰。案此方尺。深尺。所二容約一。當二今量九升七合七勺弱一。與下稟人一月食米。人四鬴爲二下年一。三鬴爲二中年一。二鬴爲二下年一者上。正相彷彿。但疑圜外之脣。如作二實體一。則重不止二一鈞一。而體太厚者。聲石叩レ之亦未三必中二黃鐘之宮一也。意內之方尺以二銅版一作レ隔。而四畔皆中空者與。臀一寸若二方尺一。則實當二六升四合一。止豆者。臀挾レ上爲レ少。則鬴底非二方尺一矣。この說の如く。周の嘉量司市の官これを以て

罪。且窃盜因事主追逐。始行拒捕。而槍奪在白晝乘機攫取。與大盜黑夜明火執仗。公然行切者。有間。倘概參疎防。地方官畏愼處分。轉多諱匿。似宜稍爲分別。等語應如該按察使所請嗣後窃盜臨時拒捕傷人。與白晝夥衆槍奪殺傷人者。若未經獲賊。辨雖獲賊。而爲首。及下手之兇賊未獲者。仍照例題參疎防。若己經獲有爲首。下手兇賊。雖夥賊未經全獲者。應免其概參疎防。夥賊照案緝拿と。先年舌人をして淸人に問はしむるに。封印とは淸の法にて。在京の六部外省の總督巡撫より。知州知縣まで印信ある官は。毎年十二月廿一日封印し。正月二十日開印と云ひて印を開き用ふるなり。封印の內は。一切公用を計らざるなりしかれども。至りて急務。或は盜賊の人命にかゝり。或は急に官錢を與ふる等の文移の往來。開印まで待ちがたきことは。京都外省ともに文移の年月を書きたる兩側へ。印信遵封の四字を朱書するなり。或は小さ木の印に。印信遵封の文字を彫りて。年月の兩傍へ押しありて色々なれども。僞印をなしやすきなり。これは吏部衙印を造り易ければ。今より封印の時に。地方の大小政事の繁簡を計り。印を押し。白紙の文移を貯へ。本印と一所に大小の官の內衙に置きて。其時に臨み。其事を書記し。これを用ひ。開印の時に至りて。用ひ餘りたる印を押したる白紙の文移をば。燒きすつべく及び竊盜あるとき。首兇を獲ば。疎防の罪を免るゝ等のことを陳ぶるなり。これにて封印しるべし

留獄

淵鑑類函曰。後漢書曰。安帝初。淸河相叔孫光坐贓抵罪。遂增錮二世。釁及其子。是時居延都尉范邠犯贓罪。司徒楊震等議依光比。劉愷獨以爲。春秋之義惡惡止其身。禁錮子孫。非先生詳刑之意。唐書曰。唐扶字雲翔。太初五年爲山南宣撫使。同鄉倉督鄧琬負度支漕米七十斛。吏責償之。繫其父子至孫。凡二十八年。九人死於獄中。扶奏申釋之。詔切責鹽鐵度支二使。天下監院償連繫二年以上者。皆原。又曰。白居易度支有囚繫閿鄉獄者。更三赦不得原。仍奏言。父死繫其子。夫久繫妻嫁。債無償期。禁無休日。請一切免之。奏凡十餘上。朝廷許之。又曰。初鹽鐵度支屬官。悉得以罪人

屬二周詳一。且州縣理繁治劇。必督撫平日留レ心試看。酌二量人員一。才具果能。人地相宜。始行二保題一調補。若如二該按察使所一レ奏。曾任二沿海沿河苗疆等缺一。服滿州縣人員。概爲三預行二分發一。不三特各省民情土俗俱不二相同一。該員未三必盡屬二諳練一。且甫經二蒞任一。其才具二優劣一。督撫亦無レ由二確知一。與二要缺一究屬二無益一。而定例實爲二紛更一。應下將二該按察使所一レ奏沿海等缺。服滿州縣人員。仍發二該省一題補之處上。無中レ用レ議

一竊盜槍奪傷レ人

題二參疎防一。宜二酌量分別一也。伏査乾隆三年三月內。吏部議二河南按察使隋人鵬條奏一。嗣後如地方有下竊盜臨レ時拒レ捕。與中白晝夥衆槍奪殺二傷人一者上。俱照二强盜案件一。初報即分二別專兼統轄文武名職名一。揭二參疎防一。勒レ限比緝。照二强盜例一分別議處等因。奉レ旨依レ議。通行欽遵在レ案。臣査竊盜拒レ捕與二白晝夥衆槍奪殺二傷事主一。此等兇賊殊雖二疎縱一。前地方官因レ無二處分一。未レ免二緝捕懈弛一。是以定例照二强盜案件一題二參疎防一。分別議處。勒レ限比緝。立レ法誠爲二至善一。第强盜案件。定例不レ論二已未獲賊一。概參二疎防一者。蓋强盜無レ分二首從一。均擬二斬決一。非レ若二竊盜拒レ捕。槍奪殺傷。止下レ手者一。當二其重罪一。且竊盜因二事主追逐一始行二拒捕一。而槍奪在二于白晝一乘レ機攫取。與下大盜黑夜明レ火執レ仗。公然行レ刼者上。有レ間。倘概參二疎防一。地方官畏二愼處分一。轉多二諱匿一。似レ宜下稍爲中分別上。嗣後竊盜臨レ時拒捕。與二白晝夥衆一槍奪殺二傷人一。若未レ經二殺賊一。並雖二獲レ賊而爲レ首。及下レ手之兇賊未レ獲者一。仍照レ例題二參疎防一。其疎防限內。已經レ獲二有爲レ首下レ手兇賊。惟夥賊未レ經二全獲一者。免レ參二疎防一。夥賊照レ案組拏。如レ此則竊盜槍奪。與二大盜一疎防輕重有レ別。而地方文武各官見二獲レ賊可一レ免二其疎防一。必上緊緝拏。不レ致二懈弛疎縱一。等語査竊盜臨レ時拒レ捕。白晝夥衆槍奪殺二傷人一者。其爲レ首下レ手兇賊。與二强盜一無レ異。是以吏部議二覆河南按察使隋人鵬條奏一照二强盜案件一。分二別專兼統轄一。揭二參疎防一。勒レ限比緝。悉照二强盜例一。分二別議處一。原因三爲レ首下レ手之兇惡。爲二害地方一。重二其處分一。正所下以嚴二其比緝一。勿レ致二兇賊漏網一。若爲レ首下レ手兇賊已獲。其未レ獲二夥賊一。罪應中分別問擬上。與下强盜不レ分二首從一。均擬二斬決一者上不レ同。今該按察使旣稱。强盜無レ分二首從一。均擬二斬決一。非レ若下竊盜拒レ捕。槍奪殺傷。止二下手一者。當中其重

補水師之例。嗣後遇有前項赴部起復人員。仍發與海疆省分。以要缺題補。俾得駕輕就熟。拜准接算前俸。循例報滿。以示鼓勵。則在外可省揀補之煩。而要缺亦收得人之效矣。至沿河州縣以及苗疆要缺。似應一例分發。補用以略畫一。等語查乾隆三年八月內。監察御史沈喩條奏。凡有服滿州縣。原係沿河沿海三項四項相兼人員。起文赴部。請照服滿直隷州之例。引見請旨。即補最要之缺。或發原任省分。或發別省候補。經臣部議駁查。州縣應行題補之缺。恐初選之員。不能勝任。令該督撫于現任屬員內。揀選才猷幹練。熟悉風土之員。題請調補。若將服滿候補。會題要缺人員。概發各省。一遇題缺補授。不但民情風土。各員甫經到彼。未能深悉。即該員之才具。與員缺之相宜。與否。該督撫未經試看。亦無由得知。迨至題補之後。人缺不宜。自必覆議更調。徒滋紛擾。于要缺究屬無益。况各省應題各缺。少者十之二三。多者亦不過十之五六。其于中簡各缺。爲數尚多。現任各官自可酌量揀選。至各省所屬官員內。如果實無可調之員。該督撫原可據實具題。臣部即于候補人員內。揀選引見。請旨簡用。是在部候補人員既可備各省請旨簡用之需。即令制補中簡等缺。到任後。若果堪繁劇之任。仍可以爲將來調神之用。較之預行發往。尚須試看者。更爲有益。應將該御史所奏之衆。毋痛議。奏旨依議。欽遵在案。今該按察使奏請。將曾任海疆要缺起復州縣人員。授照武職水師之例。仍發與海疆省分。以要缺題補。至沿河苗疆要缺。一例分發補用。與沈喩候奏。大畧相同。臣等竊查定例。各省沿河沿海苗疆。以及衝繁疲難四項三項相兼者。該督撫揀選題補調補二項一項者。歸于月分銓選。等語又乾隆四年十二月臣部奏。准各省應題之缺。如該省不得其人。會其奏聞。臣許于在部候補人員內。揀選引見補授等因。亦在案。再查丁憂服滿候補。州縣歸于單月。按班銓補。定制以來導行已久。是各省州縣。凡衝繁疲難二項一項者。俱歸月選。原非盡屬中簡之缺。至曾任海疆要缺服滿人員。其中果有才猷幹練者。在部候補。未經得缺之時。既可以備各省揀選要缺之用。既經補授之後。亦可以備該省調補要缺之需。從前定制本

備空白牌劄。存留待用。如批發各屬申請文書。不能鈐印者。先用牌劄。飾知詳文。俟開印後批發。仍各登記號簿。詳愼檢查。餘剩空白。開印時即行鎖燬。無致存留滋弊。如此則與封印例不致有違。而緊要事件均有印信爲憑。自無假冒詐僞之慮。等語查定例。各部院衙門于封印前一日。各用空白印紙幷封套數件。以備封印後遇有緊要公文之用。記開件數。交與各堂官收貯。有緊要文書方行塡用。開印之後。除用去記檔外。將所存件數。驗明銷燬。如有官吏借端作弊。及該堂官不行參奏。照禁止空白印信例議處。又定例各部院在門。在外各衙門文移。俱令鈐印編號一應空白俱著嚴行禁止。倘有仍用空白不行查察之。在內堂官。在外督撫司道。俱照不行詳查例罰俸六箇月。不得回明。用印之司屬。仍用空白之府州縣等官。俱照例罰俸一年。等語是各部衙門封印前。各用空白印紙封套收貯。開印之後。除用去記檔外。將所存件數。驗明銷燬。原以防僞杜奸。今該按察使既補直省。遇有最關緊要事件。因不敢違例用印。有于年月兩旁硃寫印信遵封字。鈐于年月之下者。其上司牌票。有將本官花押刻一木戳。鈐蓋年月之上者。行用不一。易滋詐僞。蓋緊要事件。鈐用印信。猶慮奸徒私刻描摹。若用硃寫木戳。何難任意假造。雖後經查出詐僞。已屬事後追求。等語應如所請。嗣後直省自督撫。以及州縣。及有印信衙門。亦照各部院之例。于封印前一日。各用空白文移封套幷牌劄等項。酌量件數。同印信存貯內衙。以備緊要事件塡用。仍各登記號簿。詳愼撿查。于開印時將所在件數。驗對銷燬。如有官吏借端作弊。及該上司等不行查出參奏。俱照例分別議處。一沿海州縣起復之員。宜仍要訣補用也。查沿海州縣缺出例。于現任州縣內。揀選題補。誠以缺屬緊要。非操廉才裕。熟悉海疆情形之人。不能勝任。是以令于現在中逐一揀選。蓋愼之也。緣向無仍補海疆之例。凡丁憂治喪之員。一經起復。俱應歸班詮補。而在外海疆要缺例。由督撫揀選具題。若將此等人員歸班輪選。僅止中簡之缺。未免用違其材。且諳練之員。外省亦不能多得。可否准照武職水師仍

べし

救饑

三朝實錄曰。順治十一年諭二戸部一曰。四海蒼生朕赤子。飢寒流徙。深切二痌瘝一。前各督撫奏到二災荒地方一。已經二察恤一。分數酌量。蠲免。名府州縣衛所等官。務要二眞寔奉行一。不レ許三仍行混征徒飽二貪腹一如該管官吏朦朧征收。督撫司道不レ能二覺察一者。事發。一体究治。有三極荒地方非二蠲免所レ能者一。該督撫速察奏聞。別行二息郵一。至下于畿輔重地房屋田土多經二圈占一。加以二去年水荒持甚一。尤爲中困苦上。朕夙夜焦思。寢食弗寧。亟宜二拯救一。庶望二生全一。但荒政未レ修。倉廩無レ備。非レ須二發內帑一何濟亟需。茲特命二戸禮兵工四部一發二庫貯十六萬兩一と。これ先王民を恤む遺意にて。清の升平を開く誠に宜なり

封印內文移

上諭條例曰。封印內文移塡二用空白一。竊盜拒捕。槍奪傷レ人。已獲二首兇一。兇レ參二疎防一吏部爲三敬陳二管見一等事。考レ功淸二吏司一案。呈下吏科抄二出本部一。會二同刑部一。題二前事一等因上。乾隆五年三月二十九日題。四月初二日奉レ旨依レ議欽此抄出。到レ部相應開二錄原題一。知照各省督撫可也。爲レ此合二咨前去一。欽遵施行。計抄錄原題。一紙會議得。內閣交二出浙江按察使完顏偉奏稱一。一封印內緊要公文宜レ酌二定章程一也。査歲暮封印乃。

國家定制由來已久。所二以與レ民休息一。使三レ之共樂二昇平一。故一切征二收錢粮一。審二理詞訟一。例得二展レ限辦理一。但地方事務有三最關二緊要一。如下一時盜賊竊發。毆二斃人命一。及緊要工程。關二支錢粮一。調二署官員一等類上。文移往來勢不レ能レ待レ至二開印一。向來直省。遇レ有二此等事件一。因レ不二敢違レ例用一レ印。有下于二年月兩旁一硃二寫印信遵封一者上。有下用二木戳一。刻二印信遵封字一。鈴二于年月之下一者上。其上司牌票。有下得二本官花押一刻二一木戳一。鈴二蓋年月之上一者上。行用不レ一易レ滋二詐僞一。蓋緊要事件。鈴二用印信一。猶慮二奸徒私雕描摹一。今用二硃寫木戳一。何難二任意假造一。雖下于二開印後一。責上令二レ補印一。而事務紛乘。不レ保レ無二遺漏一。即或于二補印時一。査二出詐僞一。已屬二事後追求一。是防奸杜弊之法。尙未レ周。臣請嗣。後封印時。地方官酌二量地方大小政務之繁簡一。預備二空白文移一。用レ印鈐蓋。同二印信一存二貯內衙一。遇レ有二前項緊要事件一臨レ時塡用。其上司衙門亦須下預

陌ニ國定ニ邑里ートあれども。國數なし。延喜式國數。今と同じければ。延喜の比より國數定まりたるにや

小田郡

延喜式の陸奥國小田郡を。續日本紀天平勝寶元年に。陸奥少田郡に作る。按ずるに。前漢書匈奴傳曰。少吏之敗レ約。顔師古少吏猶レ言ニ小吏ー。と註すれば。延喜の前は小田郡と讀みしゆゑ少の字を書きしとみゆ。今は陸奥に小田郡なし

鏌

西土の人長崎奉行へ差出の書に。數年所レ蓄金斤自訴共計二百九十四斤。兩鏌の字解しがたきゆゑ舌人に問ふに。金一分なりと答ふ。按ずるに。これは西土の辭にあらず。西の商人長崎へ來りて。一分鏌と云ふなるべし

生臙脂

今西土より來る生臙脂の書に。雙紅雙脂水粉等の字ありて解しがたし。唐舌人に問ふに。雙紅は二遍染なり。雙脂は二枚重を云ふなり。水粉は胡粉なり（漢名綿臙脂なり）

硝子

格古論要に。假ニ水晶用藥ー燒成者。色暗青有ニ氣眼ー。或黃青色者。亦有ニ白者ー。但不ニ潔白明瑩ー。謂ニ之硝子ーとあれども。今船上の硝子は。潔白眞水晶に劣らざるなり。然れ共咶りみれば冷ならず。眞水晶は冷なり

門子

日知錄に。門子者。守レ門之人。舊唐書李德裕傳。吐蕃潛將ニ婦人ー嫁ニ與此州門子ー（王知興爲徐州門子）今門子。乃是南時所謂縣僮と。これにて門を守るの人も。門子と云ふことみるべし

頓

舌人云く。湯煉或湯煎にするを俗語に頓と云ふ

五十集

大坂邊にて。魚をいろ／＼商ふを五十集（いそば）と云ふなり或云く。今はいさばと云ふと。案ずるに論語曰。加ニ我數年ー。五十以學レ易。可ニ以無ニ大過ー矣。朱註卒與ニ五十字ー相似。而誤分也と。五十集も元來卒集にて。盡く魚を集むと云ふことなるを誤りて。五十集となりたるなるべし。越後にては四十集（あへの）と書きて。あへものと讀むこれは五十集を轉じて四十集と書くなる

同書二十三曰。陰陽頭從五位下兼行曆博士大春日朝臣眞野麻呂奏言。謹撿豊御食炊屋姬天皇十年十月。百濟國僧勸勒始貢ニ曆術ー。而未レ行ニ於世ー高天野原廣姬天皇四年十二月。有レ勅始用ニ元嘉曆ー。次用ニ儀鳳曆ー。高野姬天皇天平寶字七年八月。停ニ儀鳳曆ー用ニ開元大衍曆ー。厥後寶龜十一年遣唐使錄事故從五位下行內藏正羽栗臣翼貢ニ寶應五紀曆ー。紀云。大唐今停ニ大衍曆ー。唯用ニ此經ー。天應元年有レ勅令下據ニ彼經ー造中曆日上。無ニ人習學ー。不レ得レ傳レ業。猶用ニ大衍曆經ー。已及ニ百年ー。眞野麻呂去齊衡三年申ニ請用ニ彼五紀曆ー。朝廷議云。國家據ニ大衍經ー造ニ曆日ー尙矣。去レ聖已遠。義貴ニ兩存ー。宜ニ暫相兼ー。不レ得ニ偏用ー。貞觀元年。渤海國大使孝愼新貢ニ長慶宣明曆經ー云。是大唐新用經也。眞野麻呂試加ニ覆勘ー理當ニ固然ー。仍以ニ彼新曆ー比ニ校大衍五紀等兩經ー。且察ニ天文ー。且參ニ時候ー。兩經之術漸以麤疎。令ニ朔節氣既有レ差。又勘ニ大唐開成四年天平十二年等曆ー。不下復與ニ彼新曆相違上。曆議曰。陰陽運隨動而差。差而不レ已。遂與レ曆錯者。方今大唐開元以來三改ニ曆術ー。本朝天平以降猶用ニ一經ー。靜言。事理實不レ可レ然。請廢レ舊用レ新。欽若ニ天步ー。詔從レ之と。我國、古曆これにて知るべし。按ずるに。宣明曆數百年行はれて。差あるに依りて。貞享元年元の授時曆の法に因りて。推步加減して貞亨曆改めらる

賜地

同書百五十曰元慶元年六月戊寅。以ニ右京五條一坊庶人伴中庸宅地三十二分之八ー。詔賜ニ唐人崔勝ー矣。此事先レ是貞觀十三年八月十三日。太政官處分。令下ニ唐人崔勝ー寄中住右京五條一坊中庸宅地三十二分之八上。至レ是崔勝言。歸化之后二十八年於茲ー矣。未レ有ニ立レ錐之地ー。曾無ニ處レ身之便ー。平生之日無ニ復所レ愁。身亡之後。妻孥何賴。請永給ニ此宅ー以爲ニ私居ー。詔賜レ之也。とこれにて我國教化の及ぶことと廣きをみるべし

甘草

同書十九陸奥國産ニ甘草ー。出羽國産ニ甘草ーとあれば。我國いにしへより甘草ありとみゆ

國造

同書九十六に。光孝天皇御宇。國造之號永從ニ停止ーとあれば。國造の止みしも久しきことなり

國數

日本紀に。成務天皇五年隔ニ山河ー而分ニ國郡ー。隨ニ阡

に讀みしこと明なり。萬葉集に。石上振乃尊者とあるは。石上は布流の社ある地名なれども。石上朝臣のことゆゑ石上振乃とよみつけたるものにて。尊は貴ぶ詞にして。萬葉集に。吾父母を貴みて。父の尊。母の尊と夥多詠じあれば。朝臣の義を取るにあらず。且續日本紀に。和銅四年三月辛亥とあり。この碑には。甲寅（辛亥より甲寅まで。四日を經て宣命多胡郡に到るなるべし）もあり。官より建つる碑に。辛亥を書かすして。甲寅を書くべからず。宣命の名御に朝臣を尊と書くべからず。田夫の說に。今の碑面は。正面にあらずと云へば。必ず縣を建つる碑とも云ひがたし。依りて考ふるに羊郡を賜はりて。自ら官德を頌して建てたる碑ゆゑ
宣命を書き甲寅と記し。朝臣を貴みて尊と書きしなるべし。しかれども其の書古雅。後人の及ぶべきにあらざれば。和銅中に建てたる碑なるべし

貞觀政要

慶長五年の承兌の跋ある貞觀政要をみれば。今れこなはるゝ天和に鐫めたる貞觀政要と。本文注おなじくして評なし。承兌の跋左の如し

唐太宗文皇帝。創業守成一代英武之賢君也。千載之下。仰其德慕其風者。今之
内大臣家康公。是也。故令前學校三要老禪校訂貞觀政要。去歲開家語於板。今歲刻政要於梓。遵聖賢前軌而作國家治要。宜也。豐國大明神。際辭下土之日。受
令嗣秀頼幼君賢佐遺命。爾來寬厚而愛人。聰明而治衆。不異周勃霍光安列氏。輔昭帝也。矧又海内弘此書。而協和士民之心。則爲明神不忘舊盟。爲幼君盡至忠者。其用大矣哉

慶長五年星輯庚子花朝節

前龍山見鹿苑承兌叟謹誌

これにてみれば。貞觀政要も孔子家語と同じく。三要の校合にして。神祖の政事。古今に勝り給ふこと知るべし

釋奠

類聚國史（百十一卷大中臣安則奧書あり）釋奠者權興仁德天皇歟。其製法凡出傳王仁者也。然前代未全備故。先朝今上度上有酬酌漸得全と。これにてみれば釋奠の始まりは。久しきことなり

古曆

本紀云。聖武天皇天平十一年三月。石上朝臣乙麻呂坐レ奸ニ久迷連若賣一。配ニ流土佐國一。若賣配ニ下總國一焉。萬葉集載下石上乙麻呂配ニ土佐國一時歌三首上。其一曰。石上振乃尊者。云云

伊藤氏盡齋錄載ニ多胡碑圖一。而碑中半字。石上藤原字下尊字。並爲ニ蝕壞一。然今親觀ニ其碑一。羊尊字昭然而在焉。意囊觀者。卒爾寫レ之。遂以爲ニ蝕壞一矣。又曰。碑在ニ本鄉村界一。今屬ニ長崎豫州之采邑一有ニ大樟樹一擁ニ其傍一。碑半身爲所レ慴。今並亢レ之

符　王羲之黄庭經

国　鍾繇法帖。羲之曹娥碑。虞世南法帖。蕭子雲法帖。作レ国。

罡　漢仲定碑字樣。又右軍法帖

綠　古碑帖多作レ綠。又王僧虔法帖

給　羲之十七帖。又右軍瘞レ鶴碑字樣

四　孫叔敖碑文。又粱高帝唐太宗並作レ四。又王獻之法帖

寅　褚遂良陰符經。又張旭書

正　王右軍法帖

治　羲之黄庭經

眞　同レ上又瘞レ鶴碑

政　王右軍淠陽縣龍泉山普濟禪院碑銘

禝積　古多禾从レ示

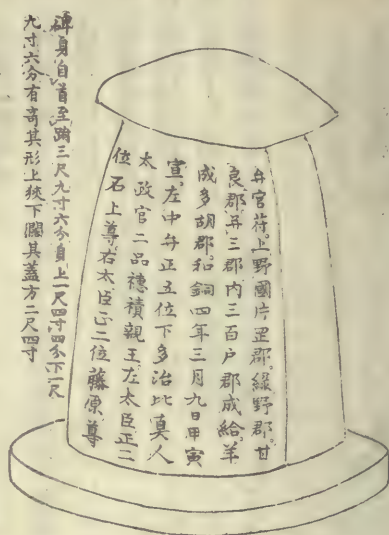
尊　王獻之法帖多作レ尊。又褚遂良法帖

東都平鱗所レ著考證。上毛高克明鑒定ニ眎レ予。其涉ニ繁褥暨俗傳一。不レ足レ徵者。不レ錄

又按吾邦古之制。諸國置ニ國司郡司一。其郡司並取下本土人性識清廉堪ニ時務一者上。爲ニ大領小領一。猶ニ中國土官一也。考ニ碑所レ載。當時蓋有ニ羊氏者一。任ニ郡領一賜ニ多胡郡邑三百戶一。史失ニ其傳一。事蹟不レ詳。今邑人所レ說。亦托レ奇不レ可ニ據信一焉

右與窓隨筆

按ずるに。延享中に聞く田夫の說の今その時にあらずとも。遠年なるべからざれば。享保以前は此碑樹下に倒れ埋もり。文字見えがたかるべし。或云。三百戶は一郡となすに足らず。日本紀に大化二年。凡郡以ニ四十里一爲ニ大郡一。三十里以下四里以上爲ニ中郡一。三里爲ニ小郡一とあれば。三百戶は中郡なるべし（延喜の時この制を改めたれども。延喜式に凡郡不レ得レ過ニ千戶一とあり）倭名抄に。胡音如レ吳とあり。今も江州高崎郡多胡庄をタゴと讀めば。古は吳の音

上毛多胡郡碑圖

來今の碑面の後と左より書き續けて。今の正面は碑の左なるべけれども。三面缺けて文字みえず。其近き地の八束に。羊大夫の墟あり。其他の寺社の記錄に羊大夫の事あれども詳ならず。貞平の說如㆑左

右上毛高克明所㆔摹以行㆓于世㆒。別有㆓打碑一本㆒。文字古而有㆑法今之所㆑不㆑及。亦可㆑觀㆓前代典章之隆㆒矣

盍簪錄曰。此碑在㆓野州多胡縣本鄕村界㆒。今屬㆓長崎豫州之采邑㆒。有㆓大樟樹㆒擁㆓其傍㆒。碑身半爲㆑所㆑囓。土人呼爲㆓羊大夫之社㆒。不㆑知㆓何故㆒。或以爲㆓穗積親王之墓㆒。不㆑知㆓前世置㆑縣之碑㆒。按續日本紀云。和銅四年三月辛亥。割㆓上野國甘良郡織裳韓級矢田大家緑野郡武美片岡郡山等六鄕㆒別置㆓多胡郡㆒蓋此時所㆑建。又按慶雲三年一品穗積親王知㆓大政官事㆒。和銅元年石上麻呂任㆓左大臣㆒。藤原不比等任㆓右大臣㆒。故碑上各列㆓名御㆒。但石上藤原字下字。蝕不㆑明。以㆓上例㆒推㆑之。當㆔各有㆓朝臣字㆒。觀㆑之則前時王化之隆。郡國幷者建置。必有㆓表碣㆒以徵㆓後禩㆒。但陵谷變遷。水火焚蕩今不㆓復存㆒。殊增㆓考㆑古者之一慨㆒

多胡郡碑考證

碑在㆓多胡郡池村㆒

郡成給㆑羊。義未㆑詳。土人呼爲㆓羊大夫碑㆒。民家患㆑瘧者。禱則止。乃采㆓水中之石㆒以祀㆓其神㆒云

和銅四年。廼元明天皇四年。唐睿宗景雲二年也。至㆓寶曆六年丙子㆒。千四十六年。多治比眞人。

續日本紀和銅中。稱㆓多治比眞人㆒者多矣。未㆑詳㆓各誰㆒

石上藤原字下。尊字。盖取㆓義於朝臣㆒耳。按續日

錢邊三分とあり。隋書經籍志に。陳廷之小品方十二卷と載す。唐以前の書なれば。錢半邊錢邊三分は。五銖錢にて抄するなるべし。且外臺の深師の療レ瘦方に。白麴熬錢一分とあり。錢邊一分とすれば。至りて少し。字の誤なるべし

一錢匕

外臺秘要の風濕痹方の古今錄驗の六生散服一錢匕。同書の十水方の古今錄驗の十水丸に半錢匕とあり。古今錄驗は。唐の甄立言の書なれば。開元通寶の一錢匕半錢匕なり

度梅嶺詩

皇元風雅に。丞相伯顏の度二梅嶺一を詩を載せて云く。馬首徑從二瘦嶺一歸。王師至處悉平夷。擔頭不レ帶江南物。只插二梅花一兩枝一。これ伯顏師を帥ゐて。宋を伐ちて宋を平げて歸る時の詩なり。宋を平ぐるの時。江東大疫あり。伯顏倉を開きて賑はし。醫人を遣して民の疾を治せしむ。民大に悅ぶ。函史に云く。伯顏深沈有二謀略一。不レ嗜レ殺。善斷。將二三十万衆一伐レ宋。如レ將二一人一。諸將仰レ之如二神明一。還レ朝口未三嘗及二平レ宋事一と。如此の臣あれば。元の世祖天下を有つ宜なり。元史伯顏傳この詩をのせず

多胡郡碑

延享二年この碑を夜話小錄に載すれども。先年小冊を集めて。昆陽漫錄へ收め入るゝ時。詳ならざることあるによりて。これを除く。其後この打碑及び安原貞平著の輿窓隨筆を觀て詳ならざることを得るに因りて記す。ある人嘗て敦書に語りて云く。その地の田夫いひ傳ふるは。上野國多胡郡下池村の碑は。小幡羊大夫勝宗

按ずるに。姓名錄抄に。小幡氏みえざれば。和銅の時小幡氏あるべからず。續日本紀に。慶雲。和銅の比。從四位下布勢朝臣耳麻呂爲二左京大夫一。正五位下猪名眞人名前爲二右京大夫一。又攝津大夫等ありて。羊大夫の如き大夫なし。勝宗和銅の比の人名に似ず。羊は其人の名なるべし。小幡羊大夫勝宗は羊の後裔なるへし

の墓碑にして。久しく榎の下に倒れありしを。今は九尺四方に石をしき。其中に碑を建て。石垣をなし石垣の外の左右に。石燈を置き。石垣の傍に小祠を建て且碑文の右に大なる文字ありしと見ゆれば。元

ニ之節帖一。臺諫不ニ敢與爭一（節帖即精採之名）淵鑑類函曰。宋時毎ニ上引一仍給ニ附茶一百篚一。中引八十篚下引六十篚。名ニ酬勞一。宋諸道置レ邸以收レ税。謂ニ之地錢一。至ニ我朝ニ納焉。謂ニ之差發一と。封椿を記すに因りて。宋の諸錢を記す。これにて宋の虐政みるべし

錢五匕

ある人。敦書に語けて云く。本草序例に錢五匕とありて。陶弘景今の五銖錢を以て釋すれども。方書に五錢匕なきにや。本草綱目の序例に。錢の字を削りて。五匕となせども解しがたければ。一錢匕の誤なるべし。敦書答へて曰く。仲景全書肘後方に。錢匕と云ふなければ。宋齊梁の時の醫師錢五匕を用ふるゆゑ。陶隱居今の五銖錢を以て云ふとみゆ。今の五銖錢は。即の梁の武帝の鑄たる四銖三絫一黍（一本二黍に作る）の五銖にして（梁の五銖重さ九黍。すくなしといへども。薄くして。大さは漢の五銖と同じかるべし）稍錢邊に五の字ある者と

宋の孝武帝の初。四銖を鑄て文を孝建と云ひ。一邊に四銖をなす。後は四銖を去りて。專ら孝建とす。文獻通考にあり。意ふに。梁の時に孝建四銖の四銖なき如く。五銖の字なき五銖ありしによりて。邊五字と云ふにや

其後外臺秘要を讀めば。狂風方の深師の鐵精散鐵精茯苓芎藭桂心蝟皮（炙各三両）右五味。擣下。篩。以レ酒服ニ錢五匕一。日三。不レ知。稍增至ニ一錢以上一。知レ之爲レ度。忌ニ酢物生葱等一とあり。千金方に。小金牙散温酒服ニ錢五匕一とあれば。宋齊梁より唐まで。錢五匕を用ふること明なり。（千金に宋齊の間釋門僧深師とあり）唐以前の輕重定まらざれば。衡に錢の名なし。前に論ずる如く。仲景全書に錢あるは疑ふべきの一なり。深師の至ニ一錢以上一の一錢を。五銖の一錢の重さとすれば。五銖は今の二匁八厘三毛餘にあたり重きにすぐ。因りて熟考するに。一錢は一銖の誤なるべきか。五銖錢孔及び指もつ所を除けば。五銖錢にて抄したる錢五匕は。今の三分にすぎざるべく。其上稍增とあれば。遽に一錢以上に至るべからず。一銖は今の四分一厘六六餘にあたるゆゑ。三分の藥を用ひて効驗なくば。四分以上に至るべし

錢半邊

外臺祕要の水腫方の小品の麝香散酒服。錢半邊老小

南兩架。北亦兩架。東南一架。名曰レ楣。前承レ簷以前名曰レ扆。棟北一架爲レ室。南壁而開レ戸。卽是一架之開廣爲レ室。昏禮賓當レ阿東面致レ命鄭云。阿棟也。入レ堂深。明レ不レ入レ室。是棟北乃爲レ室也

詔勅

楊文公談苑に云く。學士之職所レ草文辭。名目漫廣。拜二免公王將相妃主一曰レ制。賜二思宥一曰二赦書一。曰二德音一。處二公事一曰二勅榜文一。號令曰二御札一。賜二五品以上一曰レ詔。六品以下二勅書一。批二勅群臣表奏一。曰二批答一。賜二外國一曰二蕃書一。道曰二靑詞一。釋門曰二齋文一。聞二敎坊宴會一曰二白語一。土木興達曰二上梁文一。宜二勞賜一曰二口宣一と。これにて詔勅の式みるべし

祗候人

雞肋編に云く。古所謂媵妾者。今世西北名曰二祗候人一と。これにて祗候人しるべし

乙夜

嘉話錄に云く。絢曰。五夜者。甲乙丙丁戊更相二送之一。今惟言三乙夜與二子夜一何也。公曰。未レ詳と。これにて。乙夜子夜の詳ならざること知るべし

封椿

宋元通鑑に云く。藝祖平二荊湖西蜀一。收二其金帛一。別爲二內庫一儲レ之。號二封椿一。凡歲終用度之餘。皆入レ之以爲二軍旅飢饉之儲一。神宗時。手實法。官爲定二立物價一。使下民各以二田畝屋宅資貨畜產一隨レ價自占上。凡居錢五。當二蕃息之錢一。非二用器食粟一而輒隱落者。許レ告獲レ實。以二三分之一一充レ賞。預具レ式示レ民。令二依レ式爲一レ狀。縣受而籍レ之。以二其價一列二定高下一。分爲二五等一。既該二見一縣之民物產錢數一。乃參二會通縣役錢本額一。而定二所レ當輸錢一。○比二較酒務一。及度二公家出納錢粮一。量二其羸一。號二經制錢一。○計二民之貧富一。分二五等一。輸レ錢。名二免役錢一。若二官戶女戶寺觀單丁未成丁者一。亦等第輸レ錢。名二助役錢一。後又增二取二分一以備二水旱欠闕一。謂二之免役寬剩錢一。○隨二商人所一レ指而與レ之。給レ劵爲レ驗以防二私售一。謂二之貼射一。○商人入二芻糧塞下一者。隨二所在一實估。度二地里遠近一。量增二其直一。給レ劵至レ京。一切以二緡錢一償レ之。謂二之見錢法一。以二內侍楊戩一主レ之。皆按二民契劵一。而以二樂尺一打二量其羸一。則拘二入官一。而刱立二租課一。謂二之公田錢一。○淳祐九年九月。嚴二中外上書之禁一。是時臺綱不レ振。嬖寵干レ政。彈文及二其私黨一。則內二降聖旨一。宣諭删去。謂

霤 內

塾西內門 棖 梱 闑 棖 門內東塾

塾西外門 外門 閾 廓 門外東塾

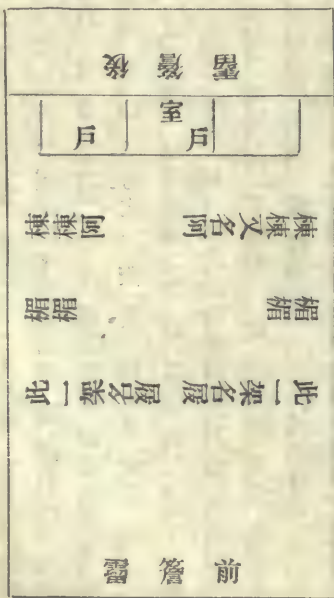
爾雅曰。室有東西廂曰廟。無東西廂有室曰寢。西南隅謂之奧。西北隅謂之屋漏。東北隅謂之宧。（盈之反）東南隅謂之窔。（一印反）東西牆謂之序。扉片之間謂之扆。宮中之門謂之闈。門側之堂謂之塾。廟中路謂之唐。堂途謂之陳。（唐與陳皆堂下至門之徑特廟堂異其名）又曰柣（千結反）謂之閾。棖謂之楔。（革鎋反又告結反）橛謂之闑。（魚列反）蓋界于門者柣也。亦謂之閾。旁于門者棖也。亦謂之楔。中于門者橛（巨角反）也。亦謂之闑。士喪疏云。房戶之外。由半以南謂之堂。士昏疏云。其內由半以北亦謂之堂。堂中北牆謂之墉。士昏尊于堂中北墉下。是也。堂下之牆曰壁。士虞饎爨在東壁。是也。堂隅有坫。以士爲之。坫有東坫西坫。士喪疏云。是也。塾有內外。士冠注云。西塾門外西堂。是也。月令曰。其祀中霤。古者複穴以居。是以名室爲中霤。又有東霤。燕禮設洗當東霤。此言諸侯四注屋之東霤。又有門內霤。燕禮賓執脯以賜鍾人門內霤。是也

于聘禮賈疏曰。門有東西兩闑。又玉藻公事自闑西。私事自闑東。疏云闑謂門之中央所豎短木。則門只有一闑。未知孰是。今案爾雅云。橛謂之闑。注云。門中之者橛名闑。又曰在地者謂之闑。注云在地及門者名闑。當以玉藻疏及爾雅爲正

少牢疏云。大夫士廟室皆兩下五架。正中曰棟。棟

非ニ特明皇時一。但葵馗二字異耳とあれば。古鍾馗を人名とすることとみるべし

宮廟門圖

儀禮圖儀禮を讀む助なれども。その説多きゆゑ。宮廟門兩下五架の二圖をひだりに圖す。その詳なることは儀禮圖及び三禮義疏をふべし

五寸爲二斛法一。衡之通二於量一也。百二十斤爲二石法一と。按ずるに。衡の石名量に移るとあれども。これにてみれば。石の名なく。衡量に石の名あり

金方寸

同書に云く。方立一寸爲レ金。率十六兩。銀率十二兩。玉率十兩不等。鉛率九兩五錢。銅率七兩五錢。鐵率六兩。青石率三兩不等。と按ずるに黃金方寸重一斤は。漢書に載せたれども。銀以下の率みえず。暦算全書に。金十九又廿一之十九。須十四又一百四十七之卅二。鉛十二又廿一之一。銀十又六十三之五十二。銅九又廿一之九。鐵八又廿一之八。錫七又一百零五之八十九。蜜一又二百十零之一百九。水一又廿一之一嚬一とありて。分を通ずれば。金十九兩九錢の大さに水銀の大さをすれば。十四兩二錢强。鉛十二兩一錢弱。銀十兩八錢强。銅九兩四錢强。鐵八兩三錢强。錫七兩八錢强にて。少しの不同あれども。數度衍の率大抵宜しとみえたり

暦林問答

暦林問答の寫本を藏むる人あれども。序なし。近ごろ板本の暦林問答をみれば。作者在方の序ありて。應永甲午孟春日正議大夫司暦賀茂ノ在方書すとあり。在方占ひの名人ゆゑ。今も占者ありまさあり。まさと云ふとかや。享保中四言雜字の我國にて刻める本を得て。官へ上る。是等にてみれば國初の板本絕ゆるもの多しとみゆ

不增一椽

明史云く。袁洪愈通レ籍四十餘年所。居不レ增二一椽一。出入徒步。卒年七十四

以豆腐爲號

同書に云く。王信歷任五十七年所。處皆膏腴地。自奉簡淡。日食止豆腐。時因以爲レ號と。この兩人眞率に禮に中らざれども。寧ろ儉せよにて奢るに勝れり

米奇

嘉靖癸己の使。琉球錄に民下造レ酒則以レ水漬レ米。越レ宿令下婦人口嚼手握爲上レ之。各曰二米奇一とあり。琉球にて今も米奇に造ると云ふ。まことに國々の俗あやしむべきことあるものなり

鍾馗

續博物志に。俗傳鍾馗起二於唐明皇之夢一非也。北史堯暄本名鍾葵字辟邪。子勁字鍾葵。宋宗愨妹名鍾葵。

宛是側柏扶疎無ニ小異一。根所ニ附著一如ニ鳥藥一。大抵皆化爲レ石矣。此與ニ石梅一雖レ未レ詳下可レ入レ藥否上。皆奇物不レ可レ不レ志と。石柏は。今江島より出づるほろまきの類なり

立物掟

駿州駿東郡獅子濱村にある掟を見れば。大阪にて加賀米。筑前米宜しきゆゑ立物米と云ふも。古き詞に見ゆ

口野五ヶ村立物之掟

一しび海鹿其外之立物龍見來は五里十里成共乘出可狩入事

一細船朝は六つを傍に晩は日之入を切る船共乘組無油斷立物可守事

一此度改而立物爲奉行菊地被遣之間彼者申樣に方端可走廻奉行人之輩下知不出舟を式乘組致油斷之旨奉行人出申上は可爲曲事

右者三ヶ條付而は代官百姓可遂成敗之間能々守書付奉行人之請指引可走廻者なり依如件

申七月廿三日

植松右京亮殿

五ヶ村百姓舟方中

按ずるに年號なければ。何れの掟なるにやしるべからず。されども二百年餘の紙とみゆれば。今川か北條の掟なるべし。口野は村名より。海鹿は此掟の裏の端に。入鹿の御印判と書きあれば。入鹿と讀むなるべし。立物は。小魚にあらざる日立てたる魚と云ふことゝ見えたり

石

數度衍に云く。通曰。家語黃帝設ニ五量一。曰ニ權衡一。曰ニ升斗一。曰ニ尺丈一。曰ニ里步一。曰ニ十百一。不下以ニ升斗一獨爲上レ量也。度量衡同レ律。皆以レ黍生。里步不レ通ニ量衡一。十百可レ通ニ五量一。故今之五量用有下非ニ一則一者上。有ニ數相通者一。十之上分之下。皆同ニ十百之名一。惟升斛無ニ分名一。皆遇レ十則升。而權衡量步稍有ニ不同一。斤法十六里。法三百六十故也。權衡之用有レ三。或用レ斤。或用レ兩。里步之用有レ三。或用レ里。或用レ畝。或用レ弓。十百之用無レ窮矣。度之通ニ於量一也。二尺

一錢

古秤に錢の名なし。唐の開元通寶一錢。徑り八分。重さ二銖。四累にして輕重の中を得たるゆゑ。錢を秤の名とす。しかるに傷寒論大陷胸湯大黃六兩芒硝一升甘遂一錢とあるは。傷寒論疑ふべき一なり。若くは一錢は一銖の誤にや

青碌

大明會典に。黑鉛一斤。燒造黃丹一斤五錢三分三厘。水銀一斤。燒造銀朱一十四兩八分二銖三兩五錢二分。次靑碌石礦一斤。淘造淨靑碌一十兩四錢三分。暗色碌石礦一斤。淘造淨石碌。一十兩八錢七分六厘。硇砂一斤。燒造硇砂碌一十五兩五錢とありて。次の字解しがたきによりて。本草綱目次の字を削る

月食

明和二年七月十四日の月食暦に記す如く既けたれども。赤色にして純黑ならず。西曆にその說あり。誠に西洋の人は天文に委しきなり。その文左の如し

湯若望曰。月全食時。其光色往々更迭變易。其初食既與朱生光。當此二際。則成赤色。夫月入地景果必失光。宜爲純黑。不應復顯他色。今赤色者得無是其本光乎。曰次光之物惟。无光之處。能顯其光。一遇大光之體。則次光之光泯矣。又曰。月居食甚之中。時顯襍色。時但靑黑。皆須因光而先。若幷無光當純黑色也。前已言既入此界。即無太陽入氣折照之光。則所由見色者意或月體自有微光乎。曰凡襍色之映見。皆不由于純光。純光自當無色也。雜色所從著見必因濕氣居其中間如虹霓是已。若虹霓是濕雲所映。無從可證。試以玻瓈瓶滿貯淸水。別爲密室。止穿一隙以達日光。瓶水承隙。則光透牆壁。亦成虹霓。大氣之體。本是熱濕因於地氣晴重時輕。若太陽之光從地旁過。而地景在濕氣之中。則月體所至生種々色。亦此理矣

砂紙

桂海虞衡志に云く。澁竹膚麤澁如木工所用砂紙可錯磨爪甲と。砂紙は西土より來る紙錯りとみゆ

石柏

同書に云く。石柏は生海中一幹極細。上有一葉。

木は。葉室の木にて。室にあらざるにより。非室と云ふなるべし。同國の明石の海底に。赤き大石ありといへば。日本紀に赤石と書くよろし

狹 狹 波

日本紀大化二年。畿内東自二名墾横河一以來。南自二紀伊兄山一以來。西自二赤石櫛淵一以來。北自二近江狹狹波合坂山一以來。爲二畿内國一とありて。或云。狹狹波は滋賀の一名なり。按ずるに。名墾は伊賀國名張郡。赤石は播磨國明石郡にして。合坂山滋賀郡なれば。或説よろしかるべし

還 銀

丹桂籍に云く。江南旱。西門囘子哈九開二飯店一。有三江浦人遺二糧銀五十兩於店中一。哈九追至二江邊一還レ之別後得レ銀者至二江浦一。見二太風覆レ舟人溺一。忽思譬如二哈九不一レ還二我銀一何。將レ銀救レ人。遂呼二漁人一曰。救二得一人一謝二銀五兩一。漁舟爭救レ之。救二得一人一問レ之。即哈九之子也。此順治五年三月廿三日事。因二還レ銀一事一。而子即免二於死一と。西土は少しのことをも記せども。我國記す人少し。深く嘆ずべし

樹 掛

使朝鮮錄に云く。(明の嘉靖年中龔用卿朝鮮へ使するの書なり)予將レ至二永平一宿二七家嶺驛一。一夕霧氣凝聚。起視田野山川如皆二霜霰一。著二草木之枝葉一堅厚糾結比レ雪特重。俗呼爲二樹掛一。自二豐潤一至レ此。凡兩見焉と。朝鮮にはしば〳〵あるとみえたり

三 寸 叔

朝鮮の書に三寸叔。四寸兄弟。五寸叔六寸兄弟。七寸叔八寸兄弟とありて。解しがたかりしに。朝鮮の服式と云ふ書をみれば。三寸叔は伯父叔父。四寸兄弟は從父昆弟なり。これにて五寸六寸七寸八寸は推知すべし。服式の文を略載すること左の如し

同生兄弟妹姉(期年)兄弟妻(小功)○三寸叔及妻叔母姪姪女(期年)姪妻(大功)○四女兄弟姉妹(大功)妻(緦麻)大父及妻大母孫孫女(小功)孫妻(緦麻)○五寸叔及妻叔母姪姪女(小功)大父及妻大母姪妻孫孫女(緦麻)○六寸兄弟姉妹(小切)大文及妻大母孫孫女(緦麻)○七寸叔及妻叔母姪姪女(緦麻)○八寸兄弟姉妹(思麻)

近頃敬民編と云ふ朝鮮の書をみれば。三寸叔父母與二我父母一同出二於一人一とあれば。三寸叔は父母の字を省きたるものなり

字に。又口即布袋とあれども。啇麻布のことなし

家　言

荀子に云く。此家言邪。楊諒註に。家言謂ㇾ偏見自成二一家之言一。若二宋墨一者上とありて。家言の語こゝに始まる

價　錢

見聞錄曰。洪武十九年五月二十八日　禮部欽奏。聖旨今後但係二光祿寺買辨供用一。物件。比二民間交易價錢一每多十文と。官の買辨は如ㇾ此なるべし

鈴　印

品字箋に云く。鈴印文文書之縫印也

沙　糖

康熙字典曰。橘錄沙橘取二其細而甘美一。或曰。種二之沙洲之上一。故其味特珍。然邦人稱二物之少而甘美者一。必曰ㇾ沙。如二沙瓜沙蜜沙糖之類一特方言耳

田　票

去年。はまたのせうもんの寫をみる。その文左の如し

はまたの　せうもん

謹辭　賣渡進梅濱田新立劵文章

合壹段六十分內（半卅分者）字濱田　但平道
右攝津國小田村十條四里八坪
四至（限東他領 限北他領）（限西道 限南濱）
充直錢貳貫百文慥請取候事
右件田地元者鶴松女之先祖相傳私領田也雖然依有直要用限永代黑石馬爪仁所賣渡在地明白也若於彼田有後日違亂時者鶴松女ゐてゝ屋敷口二丈南北ゑ六丈所を此代に入たてべく候敢以不可有雖爲子々孫々他人妨有て但本劵文一通副相之候仍爲將來龜鏡所賣渡之狀如件

賣人　鶴　松　女
元亨二年四月廿日　相文　タコミ次郎
嫡子　尺　迦　石　丸

これにて元亨の時の票文知るべし

室

三州にてめぼうと云ふ木（關東にてねずさしと云ふ阿蘭陀にてはぜれいぶるさ云ふ）此木播州室に多くして。室の木と云ふ。按ずるに。石の寶殿あるにより。地を室と名け。其地に多き木ゆゑ室の木と云ふなるべし。これにてみれば。ひむろの

者。曰ㇾ樸。一曰ニ伏兎一 亦謂ニ之幞一。見ㇾ易。已上韓人

筍

筍譜に云く。今呉會間鄕人。往々掘ㇾ土探ニ鞭頭一爲ㇾ筍。向ㇾ市而鬻。然終傷ニ損春筍一。且害ニ竹毋一とあれば。何國も利を計ることとみるべし 鞭は竹根なり

牡丹

續博物志に。牡丹初不ㇾ載ニ文字一。惟以ㇾ藥見ニ本草一。唐則天以後。洛花始盛。謝靈運言。永嘉竹間多ニ牡丹一。或曰靈運之所ㇾ謂牡丹今芍藥。今芍藥とあれば、正集に載する如く。古へより牡丹あることといよく明なり。すべて草花盛りに行はるれば。種々の花出來ものにて。唐以前愛する人なく。竹間にあるゆゑ後の人芍藥とするなり

艇板

徐氏筆精曰。古樂府暫泊ニ于渚磯一。歎ㇾ不ㇾ下ニ艇板一。板即今上ㇾ岸透板也。刻本誤作ニ廷板一非と。これ艇板は舟のあゆみの板なり

辟窠書

明史に云く。王涯道六歲善ニ辟窠大字一。温公通鑑曰作ニ銅匱一發ニ而倫一。毛晃曰。撿ㇾ書撿ニ印窠封題一也。陽升菴全集曰。擘窠書顔眞卿集糢畫稍細。恐不ㇾ堪ㇾ之と。これにてみれば。擘窠は印文の如く。文字はそしる見ゆ

打秋風

注釋幼學須知雜字曰。打抽豐俗謂ニ打秋風一と。按ずるに。打抽豐の打は意なく。たゞ抽豐にあふと云ふことにて。打秋風の打は。擊打の打にて。關隘にて税を出だして。商人の貨を損すること。草木の秋風に打擊せられて枯れ傷むがし

海分

海分近比渡り多きによりて。通詞をして清人に尋ぬるに。海分はもと奥湊に產するゆゑ少かりしに。近來は閩省の海島に生ずるゆゑ。渡り多しと云ふ。海分は海藻をごの類にて。青色四角なり

叉口

西土には俵なく。米を袋に入るゝことは。人々の知ることにして。何の袋を用ふるや詳ならず。先年清人に。今の米は何袋に入るゝと尋ねしめしに。年貢米を入るゝ。袋は。叉口と云ふ。叉口は苘麻の皮にて織りたる袋にして。官より借るといへり。注釋雜

もの知るべきことなり

卸

飲膳正要の馬思答吉湯補益。温レ中順レ氣。羊肉（一脚子卸成二事件一）草菓五分官桂二錢回々豆子（半升搗碎去レ皮）右件一同熬成レ湯濾淨下。熟回々豆子二合。香粳米一升。馬思吉一錢。鹽少許調和。匀下二事件肉芫荽葉一。同書の鹿頭湯鹿頭蹄（一付退洗淨。卸作レ塊。）とありて。卸八骨を去ることゝみゆれば。俗の魚を卸すと云ふはことによるなるべし。（馬思吉何物たる事を知らず）鹿頭蹄は。鹿の頭と蹄とにや。一付退請得レ之

車制名目

敦書　先年兵車考を作る時。車の名目明かになしがたかりし。三禮義疏に載する車制名目をみれば。其名誤り少し。その文左の如し

案陳氏傳良嗇二萃車制名目一頗便二學者一。但舛誤甚多。恐レ滋二疑眩一。略爲二改正一。夾二車兩旁一而圜轉者。曰レ輪。輪之外輮而行レ地者。曰レ牙。（亦曰二車輞一。關西曰レ輮）牙之中直指湊レ轂者。曰レ輻。（亦曰輪轑。）輻之所レ湊而貫レ軸利轉者。曰レ轂。（亦謂二之低一。見レ詩）轂內之大穿曰レ賢。轂末之小穿曰レ軹（轂中鐵。關西曰釘輨。轂端沓也）轂中空壺處容レ軸者。曰レ藪轂外以レ皮約二束之一。而畫以二五采一。曰レ篆。以レ革輓レ轂曰レ幬。輻之近レ轂稍𪘲處曰レ股。輻之近レ牙稍細處曰レ菑。輻樵之入二轂鑿一者。曰レ蚤（亦曰弱）輻榫之入レ牙者。曰レ蚤。轂與レ牙之受二菑蚤一者。曰レ鑿。鑿有二機以固レ之。曰レ槷。輪牙稍偏二於外一。而輻股向レ內隆起者。曰レ綆。（漢時人曰輪箄。已上輪人）車身受レ載者。曰レ輿。輿之深曰レ隧。輿後橫木曰レ軫。（六二分車廣一以一爲二之軫圍一）全輿之底。通曰軫。（軫方象レ地。又曰加二軫與レ轐四尺。長四尺。謂二之庇軫一。亦謂二之收一。見レ詩。又云弓）車兩旁爲レ闌者曰レ犄。（亦謂二之犄之輒一）犄之植者橫者。曰レ軹。（與二轂末一同名）兩犄上出レ式。人立可下用二一手一馮上之者。曰レ較。（九辨倚輪兮輪即是）自レ較以前。揉曲以二周於當面一。人可下俛馮レ之以爲上レ敬者。曰レ式。（式低較高。如二兩層一較然。故曰二重較一。亦曰二重耳一。若二牛車及後世之車一。無二高低兩層一。謂二平較一。亦曰二之平鬲一）式之下。植者橫者曰レ轛。（已上輿人）車轅曰レ輈。（前曲如レ梁。謂二之梁輈一）輈之前持レ衡者曰レ頸。（又輈前胡曲中曰疾。見大行人）輈文後承レ軫者曰レ踵。輈之當二伏兎一者曰二當兎一。輿下三面材持二車正一者曰二任正。（左右並前軏爲レ三）任正之當レ前一面曰レ軌。（軏前十尺。亦作レ軔）任正三面亦通曰レ軌。（鄭注軏謂二輿下三面之材一）輈之前頸。所下持而下屬二兩輗一以駕上服馬者。曰レ衡。兩輗之間曰二衡仕一。兩端貫二於轂中一橫二輿下一。爲二伏兎所一レ鉗。而承レ輿者曰レ軸。（軸末以レ鐵止二輪之外轄一者。曰レ牽。見レ詩）上連二輿底一。下鉗レ軸。爲二駕說之用一

無寃錄泥に。凡物之色。皆稱顏色とあり。これにて繪具なども顏色と云ふことゝゑるべし

蟚蜞

世說に云く蔡司徒渡江見蟚蜞。大說曰。蟹有八足加以二螯。令烹之。既食。吐下委頓。方知非蟹。後向謝仁祖說此事。謝曰。卿讀爾雅不熟。幾爲勸學死。大戴禮。勸學篇曰。蟹二螯八足。非蛇蟺之穴無寄託者用心躁也 按ずるに爾雅に云く。螖蠌小者蟧。郭璞注云。螺屬見埤雅。或曰即蟚螃也。似蟹而小と。その形狀を載せざれば。何を以て熟不熟を論ぜんや。荀子勸學篇に云く。蟹六跪跪ハ蟹ノ足ナリ二蟹。大戴禮。蟹二螯八足。本草綱目。蟹二螯八足。正字通。蟹二螯六跪とありて。蟹足の全數を擧げて。八足と云ふ。蟹の末足の形。稍異なる者を除きて。六跪といへば。六跪八足みな蟹なり。畢竟謝仁祖戲謔の言にして。蔡謨勸學にあやまらるるにあらず。蟹をゑらざるの過なり

清官

湧幢小品に云く。清官之後多不振。劉司空元瑞其一也。天道信不可知。然吾亦未見貪者厚積。世々受用。總只各據所見。各就得意處行去。不必相笑相訾議也と。此論おもしろし

均

國語王問律於伶州鳩。對曰。律所以立均出度也。古之神瞽考中聲而量之以制。の均を韋昭注して云く。均者均鐘。木長七尺。有弦繫之以均鐘者。度鐘大小清濁也。漢大予樂官有之と。文獻通考に宋均曰。長八尺而施絃。然古之神瞽考中聲而量之以制度。則二五合而爲八尺。而施絃固足考中聲均鐘音而出度。韋昭七尺之說。豈亦溺於七音之失。後世京房之準。晉之十二笛。梁之四通。皆所以考律和聲。而說者以爲定律之器。始於管。種於鐘。移笛衍於通。蓋立均之變體也。胡人有五且五耽之名。亦均之異名歟とあれども。弦を以て鐘を打ちて鐘聲を均くするにや。その用つまびらかならず。且文獻通考均を俗部に入れ。後世均を用ふることまれなると見ゆれば。均は正しき器にあらざるにや

塚

紀談錄曰。有爵者宜稱塚。無爵者稱墓。有爵及尊貴者稱公。無爵者咸稱君と。これ墓誌を作る

又有ニ一種省訛俗書一。同一時也。文人奇士多用ニ古字一。官府文移通ニ用今字一。市以下流則用ニ省訛俗書一。如ニ錢作レ分聖作レ全盡作レ尽。是也由レ是例レ之推ニ千萬世以上隆古之極一。未ニ必悉用ニ蝌蚪一推ニ千萬世以下世變之極一。未ニ必悉用ニ俗書一也これにてみれば分省訛の俗字なり

鼮　鼠

爾雅曰。豹文鼮鼠。郭璞注曰。鼠文彩如レ豹者。漢武帝時得ニ此鼠一。孝口郎終軍知レ之。疏曰。武帝得ニ豹鼠一。以ニ爾雅一辨ニ其名一。藝文類聚曰。竇氏家傳曰。竇攸治ニ爾雅一擧ニ孝廉一爲レ郎。世祖與ニ百寮一大會ニ靈臺一。得レ鼠身如ニ豹文一。熒有ニ光澤一。世祖異レ之。問ニ群臣一莫レ知。唯攸對曰。名ニ鼮鼠一。詔問以レ何知レ之。攸曰。見ニ爾雅一。詔案ニ視書一。如ニ攸言一。賜ニ帛百疋一。正字通曰。摯虞三輔決錄載ニ攸此事一。郭璞爾雅注。及藝文類聚。皆誤云下武帝時得ニ此鼠一。終軍知上レ之。野客叢書謂。前漢諸書不レ聞下終軍有中此語上。以ニ摯說一爲レ是。唐書韋若虛。多才博物。時有下獲ニ異鼠一者上。豹首虎臆。大如レ拳。職方辛怡諫謂ニ之鼮鼠一而賦レ之。若虛曰。非也。此許愼所レ謂鼨鼠豹文。而形小。一坐皆驚。按爾雅鼤鼠鼨鼠郭璞未レ詳。下文豹文鼮鼠。郭注文彩如レ豹。據ニ此說一。說文以ニ豹文鼠一釋レ鼨。誤也。韋不レ考專信ニ說文一。謂レ鼮爲レ鼨。亦誤也。康熙字典曰。爾雅本文鼨鼠豹文鼮鼠。。郭璞鼨注未レ詳。鼮注鼠文彩如レ豹者。許愼鼨文鼠。豹文二字或上屬。或下屬。未レ知ニ孰是一。敦書按するに藝文類聚說文を引て鼨鼠出ニ胡地一可レ爲レ裘とのすれば今の說文よりかたく康熙字典深く考へざるなり

賜一字

鎌倉年中行事に云く。元服有りて御一字を被レ申時は。三獻有御一字を被レ下樣は。折に名乘許被レ遊て。御酒より前に。公方樣有ニ御直一被レ下也。參りて給ひて三度頂戴仕りて後。懷に入れて。其後御酒を被レ下也。正月元服の方々有レ之令ニ記錄一者也と。これにて一字を給ふの式みるべし。さて樣の字を用ふるも此比よりとみゆ

引　付

同書に云く。引付の衆と云ふは。評定衆之下司を云ふなりと。今の與力などの類なるべし

顏　色

たるは腐り。洗ひ蒸して乾したるは。紙縮まるといへども腐れず。この說信なり

ソンネウエイスル

日時計を阿蘭陀にソンネウエイスルと云ふ。其製一ならず。今その一圖を載す。阿蘭陀は晝十二時。夜十二時。晝夜二十四時。一時六十刻。晝夜千二百刻なり。阿蘭陀の東西南北と。一より十二までの文字を知りて時を計るべし

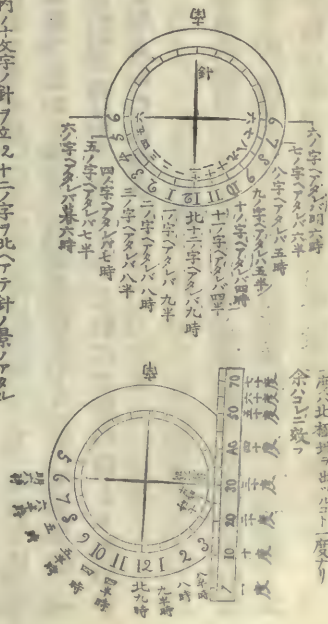
ソン子ウェイスル圖

コレハ阿蘭陀ノ東西南北ノ十六位ヲ略スル八位ナリ

コレハ阿蘭陀ノ東西南北ノ十六位ヲ畧スル八位ナリ

内ノ十文字ノ針ヲ立12十二ノ字ヲ北ヘアテ針ノ景ノアタル文字ニテ時ヲ知ルナリ

コレハ北極地ヲ出ル度數ナリ　一度ハ北極地ヲ出ツルコト一度ナリ　余ハコレニ效フ

分

續文獻通考に云く。書契既出。字體悉具。蝌蚪古文大篆小篆各有ㇾ所ㇾ用。如下禹刻ニ岣嶁碑一則用ニ蝌蚪一。宣王刻ニ石鼓文一則用中籀書上。如ニ今之傳世文字一也。至ニ於用ニ之庶民媒妁婚姻之約。市井交易之券一。則從ニ簡易一。止用ニ小篆一。何以知ニ其然一也。唐人錢譜。載ニ大昊氏金。尊盧氏幣一。其文具存。與ニ今小篆一不ㇾ異。昔在ㇾ京得ニ太公九府圜錢一。近在ㇾ滇得ニ黄帝刀布一。其文悉小篆。乃知下小篆與ニ大篆一同出。決不上ㇾ始ニ於秦一也如ニ今人楷書一亦有ニ數體一。有ニ古字楷書一。有ニ今字楷書一。

略をしるべし。文繁きゆゑ略して載す。なほ本書を考ふべし

石佛

傳道粹言曰。明道官ニ守京兆一。南山有ニ石佛一。放ニ光於頂上一。遠近聚觀男女簇集。爲レ政者畏ニ其神一。而莫ニ敢止一。子使レ戎ニ其從一曰。我有ニ官守一。不レ能レ往也。當下取ニ其頭一來上觀レ之耳。自レ是光遂滅。人亦不ニ復疑一也と明道其頭を取らしめて光の滅する策はなすべけれども。人また疑はざるは。明道の大德なるべし

我國書

書史會要曰。南海商人船。自ニ其國一還。得ニ國王弟與レ照書一。稱ニ野人若愚一。又。左大臣藤原道長書。又治部卿源從英書。凡皆二王之迹。而若愚章草特妙。中土能書者。亦鮮ニ能及一。紙墨光滑。左大臣乃國之上相。治部九卿之一也と。按ずるに。清異錄に云く。建中元年。日本使眞人興能來朝。善ニ書札一。有ニ譯者乞ニ得章草兩幅一。皆文選中詩。沙苑楊履顯德中爲ニ翰林徧紲官一。言譯者乃遠祖出ニ兩幅一示レ余。有ニ晉人標韻一。兩幅一云ニ女兒靑一。微紺。一云ニ印品晃一。白滑如レ鏡。而筆至ニ止多レ褪。非ニ善書者一。不ニ敢用レ意。但雞林紙似レ可レ比レ肩と。これにて慶長の比まで我國の書。二王の筆意にて。西土に抗衡し。且紙の西土に勝ることしるべし

邸報

日知錄曰。宋史劉奉世傳。先レ是進奏院每ニ五日一。具ニ定本報狀一。上ニ樞密院一。然後傳ニ之四方一。而邸吏輙先レ期報下。或矯爲ニ家書一。以入ニ郵置一。奉世乞下草ニ定本一。去ニ實封一。恒以ニ通函一。謄報上。從レ之。呂溱傳農智高冠ニ嶺南一。詔。奏。邸毋レ得ニ備報一。溱言一方有レ警。吏ニ諸道聞レ之。共得レ爲レ備。今欲ニ人不レ知ニ此意一。何也。曹輔傳政和後帝多ニ微行一。始民間猶未レ知。及下蔡京謝表有丙輕事小輦七賜乙臨幸甲。自レ是邸報聞ニ四方一。邸報字見ニ于史書一。蓋始ニ此時一。然唐孫樵集中有下讀ニ開元雜報一一篇上。則唐時已有レ之矣と。これにて唐の時より報の字を用ふること知るべし

水漬書册

王氏談錄曰。公言藏書之家。書册或爲ニ雨漏及途路水潦一。所レ漬者皆可ニ大甑中蒸而暴一レ之。至ニ一二番一。及以レ物塡壓平處。逮レ乾色雖ニ微漬一。而略無ニ損壞一と。享保中小石川洪水の時。書籍水に漬りしを洗ひ干し

療二腹痛氣一。調レ中木香人參散男子女人通用法木香半兩人參去二蘆頭一半兩茯苓去二黑皮一一分白朮去兩微炒枇杷葉去レ毛一分厚朴去二麁皮一用二姜汁一製丁香半兩藿香葉一分甘草炒半兩乾薑半兩濁陳皮半兩濁浸去レ穰右件一十二味修事了秤二分兩一。搗羅爲レ末。每服二錢。水一盞。入二生薑錢一斤棗二枚一。同煎至二六分一。去レ滓温服。此藥老人常服合レ喫と。西土の書に。生薑一斤の重を記したるを見ず。これにてみれば生薑一斤の重さ一匁と見えたり。同書に入二薑半分一。とあるは。五厘にあらずして。一錢の半分にて五分なるべし。大抵薑一斤一錢ゆゑ半分と云ふと見えたり。先年朝鮮の醫に。薑一斤の重を尋ねし人ありしに。一斤の重一匁と答ふるも妄ならず。厚朴分兩なし。丁香の分兩なるにや

百花香

同書曰。百花香一兩。甘松二兩。芎麝香少許。蜜和同圓如二彈子一。安二爐上一。恰似二百花一。疑二曉風一と、藥品少くして。香百花に似たるは愛すべきことなり

五材

進修楷範曰。記室新書曰。五材是宜百工維叙。城郭都鄙定二其規一。士農工商得二其所一と。五材かくの如くなれば。國を治むる人第一に心を盡すべきことなり

氷文

同書曰。陳襄守二淮陽一時。屋瓦氷文作二花果鳥獸狀一。僚屬請レ奏二祥瑞一。公曰。此事當レ奏。但非二祥瑞一耳。但作レ奏云。有二此祥異一不三敢不二レ奏。識者以爲レ得レ體と。造化の爲すことははかられざるものなり

煙草

本草彙言曰。煙草晒乾。細切如二絲縷一。成レ穗裝入二筒口一。火燃吸レ之と。これ今の煙管なきゆゑなり。我國にても。遠國の窮鄉にては。煙管なしに。竹筒の口へ煙草を入れて吸ふものあり。今も西土より來る煙草は。切ること至りて細くして絲の如し

東山殿書

先年ある人東山殿の書なりとて示す。その文左の如し。按するに。今云御內書なるべし

碧黑白紫赤黃綠

陰陽寶鑑尅擇通書曰。寅申巳亥碧黑白紫白赤白黃綠碧黑白。子午卯酉紫白赤白黃綠碧黑白紫白赤。辰戌丑未白黃綠碧黑白紫白赤白黃綠右分二三元年一。排二定逐月之下所レ値之星一。これにて大

れにて見れば。琉球は西土を恐るゝことしるべし

奇石

日下舊聞曰。天子在二奎章閣一。有下獻二文石一者上。平直如レ砥。厚不レ及レ寸。其陽丹碧光彩。有二雲氣人物山川屋邑之形狀一。自然天成非三工巧所二能摹擬一。其陰漫理紫潤可レ書可レ鐫。有レ勅命レ臣集二記諸一。而攻レ材製二匡廓一。植以爲レ屏焉と。誠に奇石と云ふべし。この天子は元の文宗なり

鄞縣咨

先年我國の船西土の定海縣へ飄流せしによりて。船頭等十三人を長崎へ送り歸す。浙江、寧波府。鄞縣の咨。ひだりの如し。その事は咨に詳なり

咨口　咨は文書の名なり

浙江。寧波府。鄞縣爲レ咨明事恭照

本朝德邁二唐虞一。率士仰二車書之盛一。恩隆二覆載一。普大沐二雨露之深一。遐邇向レ化。中外輸レ誠。茲有二貴國殿培等壹拾三人一。船隻在レ洋。疊遭二颶風一飄二流定海縣境一。查二明船內一。裝有二烟葉等貨一。先經二定海縣一。移二關敝縣一。查傳二通事一。譯訊供レ情。殿培等壹拾參人幷貨物壞船通二詳各憲一。移送到レ鄞。當即照レ例設レ館安置。日給二薪水一。加レ意撫恤。幷查二明原船一。不堪二修整駕駛一。准二其變賣一給レ價飭二商信公興一。護送回レ國。除下將二開レ棹日期一通中報各憲上。外擬二合咨明一。爲レ此合レ咨二　各憲は所レ屬上臺のことなり　貴國王一。煩レ請查レ咨。希將二殿培等壹什參人附送回レ國日期一。修レ文。交發口二商信公興一。飭令二迅即回レ棹以レ便轉請。題覆幸勿二遲滯一。須レ至レ咨者　題覆は文書の名にして。文書を以て奏聞せよとなり

右咨二

日本國王一

大清乾隆 拾捌 年拾貳月　初七　日咨

我國を一字を擡し。西土を二字擡し。且日本國王へ咨すとあり。奏聞せよとあるは時勢を知らずと云ふべし。長崎の舌人の云く。移關關は交關とつゞく文字なれども。これは關會の關にて會知の意なり

生薑一片

壽親養老新書曰。老人和二脾胃氣一。進二飲食一。止二痰逆一

竹林。王生自有性。平子本留心。王子去求仙。丹成入九天山中。方七日世上已千年。已上數語凡鄉學小童臨倣字書。皆昉於此。謂之描朱作傳我。習幾徧海內。然皆莫知所謂。或云僅取字畫簡少。無他義。或云。義有了了可解者。且有出也。諸暨陳儒士洙今日云。嘗見。宋學士晩年以眼明。自夸細書小字。嘗及此。學士其知所自者耶。猥談曰。上大人。丘。乙巳化三千七十士爾。小生八九子佳。作仁。可知禮。右八句未曳世字。不知何起。今小兒學書必首之。天下同然書坊有解胡說耳。水東日記言。宋學士晩年寫此。必知所自。又說郭中會記之。亦未暇撿。向一友謂予。此孔子上其父書也。上大人（句上上書大人謂叔梁紇）丘（句聖人名）乙巳化三千七十士爾（句乙一通言一身所化如詳）小生八九子佳（句八九七十二也。言弟子三千中七十二人。更佳）作仁（句作猶爲也）可知禮（仁禮相爲用言七十子義爲仁。其於禮可知）大概取筆畫稀少。開童子稍附會理也と。水東日記にて見れば。倘仕由水中人坐竹林。王生自有性。平子本留心。王子去求仙。丹成入九天山中。方七日世上已千年の四十字も。學書の童子これを習ふとみゆ

粟米

同書曰。朱子答張仁叔之問曰。李悝百畝。而收百五十石者粟也。晁錯百畝而收不過百石者似。恐是米。然則其多少固有不同矣。粟一石直錢三十文。一歲而止。用三石可見吉釆錢重。然其賣買皆然。則人亦不以爲病也。又按。宋鄭宣撫鎭蜀時。於關外四州營田二千六百餘頃。除糧種外。歲入官十四萬石有奇。及其於金州營田五百餘頃。歲入却止萬八十餘斛。以此觀之。其爲不同者。或者亦州田腴金州田薄之故。則晦庵粟米之分所料亦恐未爲的當也と。この言尤理あり

書板刷墨

同書曰。獨石書板刷墨用帶毛兎脚。廣州則大香櫞。厚皮又獨石苦寒處。素不產藤竹。人家箍桶等用。則取綿柳條爲之。不異藤竹也。乃知天地生物不絕生人之用。顧用之者如何爾と。按ずるに。高橋氏にある柳。はなはだ柔にて箍にもなれば綿柳の類なるべし

琉球

皇明政要曰。永樂三年三月。琉球國進閹者數人上曰。彼亦人子無罪刑之何忍。命禮部還之と。こ

典史。諸州の知州同知判官主典史。諸府の官人れよび萬全都司。幷各衛經歷北直隷各衛經歷知事南京各衛經歷等の官の姓名號生國を記しありて。その書ふるく西土の人ばかりにて。滿州の人なければ。明の官林備覽とみゆ。さて淸の爵秩便覽。諸官を記したる始なるべしと思ひしに。これにてみれば。明の時より諸官を記して刋行せしなり。今の武鑑も。官林備覽に習ふにや

飛銃

師律提綱（朝鮮の書）に。將誠選士敎武敎弓法軍行安營等を論ずること詳にして。その中に。飛鎗盞口大銃並手把銃。皆神機禁器。其制外無レ所レ傳とあれば。軍器は朝鮮にても秘する物あり。營邊如無レ水者以下地生ニ葭葦水草一之處。及地有中蟻穴上。其下必有ニ伏泉一。可ニ開レ井取一レ水。又尋ニ野獸踪跡去路一。不レ遠有レ水。如遇ニ緊急備一レ水。隨行者須下用ニ羊皮渾脫一盛上レ之。或大葫蘆亦可とあれば。これ軍行の時考ふべきことなり

六等田

天典詞訟類聚（朝鮮の書）に曰く。一等田尺長。准ニ周尺一。四尺七寸七分五厘。二等田五尺一寸七分九厘。三等田五尺七寸三厘。四等田六尺四寸三分四厘。五等田七尺五寸五分。六等田九尺五寸五分。實積一尺爲レ把。十把爲レ束。十束爲レ負。百負爲レ結。周尺一尺於ニ禮器尺一七寸二分。於ニ營造尺一六寸八分餘。於ニ布帛尺一四寸四分八厘。營造尺於ニ布帛尺一六寸一分四厘。一等結准ニ三十八畝一。二等田十四畝七分。三等田十四畝二分。四等田六十九畝。五等田九十五畝。六等田一百五十二畝。各等田十四負。准ニ中朝田一畝一。〇六尺一步。百步一畝。百畝一夫。夫即頃也。古以ニ百步一爲レ畝。今則以ニ貳百四十步一爲レ畝。古之百步今之四十一畝。本國六等田尺長各異。皆以ニ一等尺一打量。以トレ數降除。一等方田長廣皆八十四尺。自相乘七十空五十六尺。七十負五束六把。二等田五十九負九束七把六寸。三等田四十九負三束九把二寸。四等田三十八負八束八寸。五等田二十八負二束二把四寸。六等田十七負六束四把と。これにて朝鮮の田制知るべし

上大人

水東日記曰。上ニ大人一。丘。乙巳化三千七十士爾。小生八九子佳。作レ仁。可レ知レ禮也。倘仕由山水中人坐ニ

南西北東南東北行ヿ。雖下依二針盤所レ分正角中諸線一引レ舟。而其實所レ引之舟。與二所レ行之道一異。蓋所レ行之道非二大圈一。亦非二平行圈一。且亦非二圓圈線一。何者大圈因レ過二天頂一。斜二交子午圈一。則所レ交子午圈之角不レ等。必漸遠得レ角漸大。而平行圈皆以二直角一交。乃舟道之交二子午一者爲レ等。角隨レ處方向同。故自與二大小一等圈レ不同也。今舟行二正南北或正東西赤道下一。即未三嘗離二子午一。或赤道因而皆爲二大圈一則須以レ度加二減之一。乃可レ得二其路程一。即正東西與二赤道一爲二平行一。亦不レ離二此小圈一而以二所レ去度一。化爲二赤道度一(平行圈の卷大小不レ等)復以加減求レ之。亦可レ得。惟斜行推路甚煩。故或以二經緯一推二距度及方向一。或以二經及方向一。推二距與一緯。又或以三緯與二距度一。推二經及方位一。或以二方向及距一。推二經緯一。必先知二總方所レ引(西南ヲ北東南東北全圈四分之一)及原界之緯度所レ開。乃依二本球一求得。此簡法也

按ずるに。新製靈臺儀象志に。海中舟道を求むることを載せて。立成わりて。甚詳なりといへども。暗夜に舟道を求めがたきゆゑしるさず。猶阿蘭陀人に尋ね詳なることを得て。委しく記すべし

德政害民

後太平記に。當將軍義政卿の御代と成りて。一年課役算ふるに有レ餘。大嘗會を行ひ給ひ。十一月九ヶ度臨時を掛けられ。同十二月八ヶ度に及びしかば。今は萬民饉死を苦しみ。都鄙一般に德政の歎訴を企てしかば。武家ともに借金を遁れんことを悅び。既に愁訴に及びしかば。忽、是を免されて。今年に及びて十三度迄こそ行はれけれ。誠に貧人富人哀樂を不レ同は。自レ是富者一錢を以て貧きを助くる事なく。飢饉は尙も勝りてけり。是に付きても代の盛衰を慮らるヽ。上道不レ直故。下猶瘦馬の僻路をたどるが如く。富貴の人は不レ喜。仁義もなく。慈悲もなくして遠近ともに交を捨て親を離れ。貧者は還りて慈惠の德政ゆゑに非人となり。或は人強盜と成りて。皆横道亂妨を事とせりとあれば。德政の民の救にならざることとしるべし

官林備覽

書の始に。正陽門裏。東城墻下湖廣吏氏。新刊全號官林備覽とある書をみるに。順天府應天府の尹丞治中通判推官經歴知事照磨撿校。諸國の知縣縣丞主簿

是昆摘取搗之。計出成塊。則或温挨陽地。布乾。更搗作末。以米穀二合作爲稀糊可天沙鉢四分其糊先以一分。飲下。使腸胃通潤。次一分。和松葉末四合而食。最後餘一分糊。飲下則胸無滯氣。口無粘滓。氣力勝於白粥者。若下道不通。則嚼下生太數三枚。下注通氣可也。牧官亦嘗試之。因令在庭之民分飲。皆曰好甚。松葉段得之不難。用之無窮。救荒之策。莫切於此爲齊と。按ずるに。松葉の飢を救ふは。人の知るところなれども。此法尤よろしく見ゆ

與粥飢人

同書に云く。飢饑困極之人。熱粥飲下。則腸内薰蒸。氣塞必死。須以糊物盛器沈水。待冷飲下爲乎。久飢之極。遽即與食。腸絞而氣不通。必至於死。須先以冷粥飲下。徐々與食可也。依右法救療。又云。凍傷之人。遽就熱處。則必死。先以温物飲下。就温物救療と。この二條牧民の人知るべきことなり

蝦夷

日本紀に曰。飽田。渟代蝦夷。續日本紀曰。文武天皇元年二月。賜越後蝦狄物と。これにてみれば。今の津輕蝦夷の如く越後に住する者あるなり

鑄錢

同書曰。和銅元年正月。武藏國秩父郡獻和銅。七月令近江國。鑄銅錢と。按ずるに。國家寛永中令近江國。鑄寛永通寶錢。古銅錢を鑄たる國ゆゑにや

求海中舟道

西洋曆求海中舟道を載す。その文左の如し

漂海者。依指南針行。此定法也。總分針盤爲三十二向。如正南北東西乃四正向。如東南東北西南西北乃四角向。又有在正與角之中。各三向各相距。一十一度一十五分而各向線乃其過頂及交地平之大圈也。臨行時其道有三等。皆依盤上向線引舟。而實有與盤所載直線。異同者。蓋正南北行。則依針線所引之道與所指子午圈同。正東西在赤道下。行則依東西線所引之道。與所指過頂之赤道圈同。若正東西在赤道內外行者。雖依東西線引舟。而其實所行之道與赤道爲平行。與線所指之圈則不同（線指過頂交地平大圈。因至地平并交赤道與之斜行。乃舟離去界。皆距赤道等而略以直角交中子午圈。必與赤道平行）若西

저조）芒短。莖白。實黃。土宜上同。 六月熟。
猪啼粟（돌우리조）芒長。莖赤實微白。膏瘠皆
宜レ種。七月。初熟。 都籠筽粟（소을리소）無芒。
莖與實微白。土宜上同。 七月熟。沙森犯勿羅粟
（사솜이으베소）芒長。穗長實稍青。土宜種候上
同。 臥余頂只粟（와져보기조）無芒。莖白頂長。
實黃。土宜種候上同。 茂件羅粟（으프레소）芒
短。莖青穗長。熟則灰色。土宜上同。八月熟。
漸勿日伊粟（져으이리조）芒長。莖青。熟則黃。
不レ擇レ地。晚種。八月晦熟。鳥鼻銜粟（새고히이조）
芒長。莖微白實黃。膏瘠皆宜レ種七月熟。 孽子赤
粟（벽즈이사조）無レ芒。莖青穗短。而本小末大。
實黃種候上同。 漸勿日伊粘粟（지으사리즈조）
芒短。莖赤。熟則微白。宜二膏地一。五月初種レ之。
八月晦熟。 生動粘粟（빙동즈조）芒短。莖赤。
熟則灰色。膏瘠。地皆種レ之。七月熟。 婁亦粘粟
（우벽즈조）無芒。穗多レ岐。莖青。熟則黃。土宜
種候上同。 黑德只粟（기우리기조）芒短。莖赤。
熟則黑。土宜種候上同。 開羅叱粟（기랏조）芒
長。莖青。熟則黃。土宜上同。四五月種レ之。八月
晦熟。阿海沙里稷（아히스리피）無レ芒。熟則微白。
二月晦。膏濕地種レ之。六月晦熟。 五十日稷（쉬나
리피）無レ芒。熟則微白。二月晦。膏濕地種レ之。
六月望熟。長佐稷（댜재피）芒長。熟則微白。水
氣膏瘠。地皆種レ之。七月初熟。 中早稷（늉올피）
無レ芒。熟則微白。宜種候上同。 羗稷（강피）無
レ芒。熟則黑。土宜上同。八月晦熟。 無應厓唐厓
（몽아뉴유）無レ芒。熟則赤。土宜種候上同。 米
唐種（닫유유）無レ芒。熟則微白。土宜種候上同。
盲干唐黍（잉간유유）芒長。熟則赤。土宜種候
上同。 秋麰芒長。熟則微黃。宜レ種二膏地一。八月
晦播種。明年五月初熟。節早則四月晦亦熟。 春麰
芒長。熟則微黃。宜二膏地一。二月解レ氷。初種レ之。
五月熟。兩節麰上同。 或秋耕。或春耕。米麰無レ芒。
無糖熟則微黃。播種節候與二秋麰一同。 眞麥芒長。
熟則實黃。膏瘠地皆宜種。種候上同。 莫知麥（뫼
디을）芒長。熟則實黃。宜二膏地一。二月解レ氷種レ之。
五月熟。

忠州救荒

忠州救荒切要（朝鮮書）に曰く。松葉設食レ之。可二以延一レ生。

色皆白。米白甚軟。最宜レ作レ飯。性健宜レ種二膏濕
地一。仇郎粘（구랑찰）無レ芒。初發レ穗時色微赤。
熟則甲微赤。米白性健宜レ種二膏濕地一。所伊老粘
（쇠눈찰）芒短初發レ穗時色青。熟則黃。皮薄米白。
性健耐レ風。膏瘠皆宜レ種。多多只粘（다다가찰）
與多多只。粗同。粘山稻無レ芒。初發レ穗時色微
白。熟則甲白。米白稍强。耳弱耐レ風。宜レ種二膏燥
不濕之地。八月上旬熟。趖山稻（보리조오）無レ芒
初發レ穗時色青。熟則微白。米赤强不レ宜レ作レ飯。
性健耐レ風。宜レ種二瘠地一。早種。黑太。甲黃。實
黑。如二榛子大一。宜二膏腴地一。五日種レ之。吾海波
知太（오히와이롱）甲白實赤白。如二梅子一。太趖根
種レ之。八月熟。黃太甲或微白。或微黃。實微黃
如二榛子大一。麥根種レ之。八月晦熟。百升太（온
외콩）甲與レ毛灰色實黃。如二鼠眼大一。火太（블
콩）甲微白實深赤。皮薄如二梅子大一軟。麥根種之。
季秋始熟。者乙外太（잘외올）甲黃實黑。如二鼠眼
大一。宜二於膏濕地一。三四月種レ之。九月熟。臥叱多
太（와에콩）甲黑青色實黑赤如二榛子大一宜二瘠地一。
種候上同。青太時最軟。六月太甲白實白。如二冬

背大一。三月種レ之。春小豆（부사리퐃）甲白實赤。
眼白如二櫻桃大一。黍粟田雜播。八月熟。根小豆甲白
實深赤。眼白如二櫻桃大一。趖麥根種レ之。八月熟下
同。山達伊小豆甲白實白。眼赤白如二麻子大一。趖麥
根種レ之。渚排夫。蔡小豆（져븨우체）與二山達伊一
同。而稍大。黑小豆（여퐃）甲白實黑。眼白如二櫻
桃大一。黍粟田雜播。早小豆（올퐃）甲黑實赤。
眼微黑如二櫻桃大一。黍粟田雜播。七月熟。升伊應
同小豆（되둥퐃）甲白實甲白半黑。莖微赤黑。眼
白。三四月種レ之。沒衣菉豆（될와록우）甲灰色。
實微黃。五月膏瘠地皆種レ之。青菉豆。甲黑實青
宜レ種二膏地一。五月種　東背甲長微白。每レ甲實十
莖青。熟則微白。眼赤瘠地種レ之。光將豆實赤眼
白。二三月種。八月熟。上亦同。豌豆　宿九里黍
（잘으리기장）莖青。甲灰色。實白。三月膏田種レ之
走非黍（주비기장）莖稍黑。甲灰色。實黃。種
候上同。達乙伊黍（달이기장）莖赤。甲灰色。
實黃。種候上同。桼黍（옷기장）莖青。甲灰色。
實黑。種候上同。三葉粟（세닙조）芒短。莖
赤實微黃。宜早種二膏田一。五月熟。瓜花粟（이삭一

健。宜二虛浮不實之地一。種候上同。　倭子芒甚短若
レ無。初發レ穗時色青。熟則芒黃甲微白。米光白作
レ飯。則强性健耐レ風。宜二虛浮水寒不實之田一。　所
老狄所里（쇠오온소리）無レ芒。初發レ穗時色青。
熟則黃。米光白作レ飯則軟。耳鈍性畏レ風。忌二瘠田一。
須レ種二膏濕地一。　黃金子。芒長初發レ穗時色白。熟
則深黃。與二所老一大同。子長大稍早。米白作レ飯則
軟。耳鈍性畏レ風。忌二高瘠一。宜二膏濕地一。慶尙道好
種レ之。　晩稻　沙老里（재오리）芒長初發レ穗時
色赤。熟則微赤。米白作レ飯軟。耳鈍性耐レ風忌二瘠
田一。宜二膏腴水寒之地一。牛狄所里（쇼되오리）無レ膏
初發レ穗時色青。熟則白。得レ米多而色白。作レ飯軟。
耳聽性畏レ風。宜レ膏腴不渴之地一。　黑沙老里（거
믄사오리）有二短芒一立レ苗時色青。　胎則色紫黑。藁
節著レ葉處深黑。初發レ穗時芒甲皆黑。熟則甲微白。
眼黑着レ子密。米白作レ飯軟。耳甚鈍性健耐レ風。不
レ擇レ地。　沙老里（사오리）有二短芒一。初發レ穗時
色青。土宜上同。　高沙伊沙老里（고개시오리）
芒長初發レ穗時色白。熟則微黃。土宜上同。　所伊
老里（쇠오리）芒長初發レ穗時白。熟則微黃。甲微
黃。子長大。米白而强不レ宜レ飯。耳鈍性忌二瘠地一。
而又惡二虛浮一。須レ種二膏腴地一。　晩倭子（늣왜조）
芒短。初發レ穗時色微白。芒則芒黃甲白。　東謁老
里（동이오리）芒短。初發レ穗時色青。熟則黃。米
白作レ飯軟。性健耐レ風。不レ擇レ地種レ之。　牛得山
稻（우녹[illegible]도亦名二우이리一）芒長。初發レ穗及レ熟
色皆赤。米白而差小。作レ飯强。耳弱耐レ風。膏瘠
皆宜レ種。　白黔夫只（희검우기）芒長赤。初發レ穗
時色微白。熟則眼微黑。甲微白。米白作レ飯軟。性
健耐レ風。土宜上同。　黑黔夫只（거믄거우기）芒
長。亦初發レ穗時色微白。熟則里眼皆微黑。米白而
軟宜レ飯。性健耐レ風。土宜上同。　東鼎良里（동
솟지리）芒長。初發レ穗時色微白。熟則甲白。眼微
赤皮薄。米白作レ飯軟。性健耐レ風。土宜上同。
靈山狄所里（령산오리）無芒。初發穗時色青。熟
則微黑。甲微白皮薄。米白作レ飯軟。性健耐レ風。
宜レ種二膏腴地一。　高沙伊眼塡伊（고새눈거이）芒
長。初發レ穗時色白。熟則黃。芒節黑。米粗白作レ飯
稍强。性健耐レ風。膏瘠地皆宜。　多多只（다다기一
名御飯米）芒長。而稍曲。（고쇠옷）初發レ穗及レ熟

山名殿〇對馬島 歲賜米太共二百石。正德七年約條時。減二一百石一。按ずるに。太讀みかたし 島主宗盛長。歲遣船二十五隻。內大船九隻 每船四十名 中船八隻 每船三十名 小船八隻 每船二十名 とあれば。室町殿の時朝鮮へ使を遣されたりとみゆ。島主へ朝鮮より米を惠むは。何の爲なるにや。島主より船を遣ることは。互に商をなしたりとみゆ。これ其大畧を記したれば。なほ弘事撮要を考ふべし

倭人朝京道路

同書に。倭人朝京道をわけて。中路。左路。右路。水路の四路あり。その中路。廣川。牧慶。安驛。廣州 利州府。國王巨酋使俱有宴享 無極驛。陰竹 陰竹縣。陰城縣。槐山郡。國王巨酋使俱有宴享 延豐縣。安保驛。延豐 聞慶縣。幽谷驛。聞慶 咸昌縣。尙州牧。國王使有宴享 善山府海平。善山屬縣 仁同縣。八莒 星州屬縣 大丘府。國王巨酋使俱有宴享 慶山縣。省峴驛。淸道 淸道郡。楡川驛。密陽 密陽府。國王巨酋使俱有宴享 無訖驛。密陽 黃山驛。梁山 梁山郡。蘇山驛 東萊 釜山浦。東萊 左路。右路。水路も。國王巨酋の使。俱に宴享四たびあり。國王の使ばかり宴享五たびなり。これによられて朝鮮の使。來聘の時。所々にて宴享ありとみゐたり。さて我國より自ら朝鮮へゆくことなけれども。倭人京に朝すと云ふによりて。今民間にて。朝鮮人來朝と云ふなるべし

朝鮮儀物服用

同書に。明の洪武三年。凡。儀物服用始倣華制とあれば。洪武三年の前は。朝鮮の儀物服用をなすとみゐたり

穀品

衿陽雜錄 朝鮮の書 に。穀品を載す。我國になきものあり。朝鮮より貢せしめて作り試みば。民の益になるものあるべし。其文左の如し

穀品

早稻 救荒狄所里（구할되소리 一名氷折稻 어을갈이） 無芒色黃皮薄。其性太早。耳甚聰。米白而軟。宜膏腴不渴之田。須於三月上旬解氷。初種之。自蔡有芒。初發穗時色白。熟則黃。土宜種候上同。 著光有短芒。初發穗時色微白。熟則黃赤。米白宜飯。耳鈍耐風。性忌瘠田。雖虛浮不實之地。亦能發穗而實。種候上同。 次早稻於伊仇智。（베우리） 有短芒。初發穗時色微白。熟則芒黃赤。甲深黃。米光白作飯甚軟。耳甚鈍性

ゑ試みんとしたれども樹うべき地なくして。いまだ試みず

人參有毒

八住順庵云く。西溪叢話に。人參。許氏說文。人參字與レ參同じ。扁鵲云。有レ毒或生二邯鄲一。梁書。阮孝緒母疾須二人蓡一。舊傳鍾山所レ出有レ鹿引レ之。鹿滅得二此草一とあれば。倭名鈔に人參を鹿のにげ草と訓ずるはこれによるなるべしと。按ずるに。說郛等へ收むる西溪叢話に。此事なし。全部の西溪叢話にこれあり。鹿のにげ草は。八住氏の說よろしかるべし。神農及び諸醫人參毒あることを知らず。扁鵲ひとり毒あるを知る。まことに古今の名醫と云ふべし。梁書阮孝緒傳曰。孝緒於二鍾山一聽レ講。母王氏忽有レ疾。兄弟欲レ召レ之母曰。孝緒至性冥通必當二自到一。果心驚而返。隣里嗟二異之一。合レ藥須レ得二生人參一。舊傳鍾山所レ出。孝緒躬歷二幽險一。累日不レ値。忽見二一鹿前行一。孝緒感而隨レ後至二一所一遂滅。就視果獲二此草一。母得レ服レ之遂愈と。これ孝感の致す所也

盞

弘事撮要曰。煎レ藥時所謂水一大盞者約二一升一也。一中盞者約二五合一也。一小盞者約二三合一也と。弘事撮要は。朝鮮の魚叔權が作にて。明の嘉靖甲寅の歲に梓する書なれども。これ和劑局方指南の說なれば。明量にあらず。宋量なり。度量衡考に。宋の一斗當二今三升二合肆勺伍撮一とあり。一升は。今の三合二勺肆撮有奇。伍合は今の一合六勺二撮有奇。三合は今の玖勺七撮有奇なり

頒祿

同書に。頒祿第一科。正一品春。中米。四石糙米。十二石大君加三石田米。一石黃豆。十二石紬。二匹正布。四匹楮貨。十張夏。中米。三石糙米。十二石麥。五石紬、一匹正布。四匹秋。中米。四石糙米。十二石田米。一石麥。五石紬。一匹正布。四匹冬。中米。三石糙米、十二石黃豆。十一石紬、一疋正布。三疋とありこれにて朝鮮頒祿の制しるべし。中米。田米いかなる米にや。朝鮮のことなれば解し得ず

接待我國使臣事例

同書に。我國の人を接待する事例。日本國王使例有二正副二船或至二三船一。巨酋使只正副二船國王殿。國王姓源氏。唐僖宗乾符三年。其淸和天皇賜二皇子貞純姓源一。源氏始レ此。國王殿在二天皇宮西北一。於二其國中一不二敢稱一レ王。只稱二御所一。○每二一起一上レ京二十五人畠山殿。畠山殿以下謂二之巨酋一。每二一起一十五人。唯少二殿則九人大內殿。以上二殿。不レ限二年次一來朝小二殿。左武衛殿、右武衛殿。京極殿。細川殿。

之即子枯
附冬青
陳藏器曰。冬青木肌白有レ文。作ニ象齒笏一。其葉堪
染緋一。李時珍曰。凍青亦女貞別種也。山中時有之。
但以ニ葉微團一而赤者爲ニ凍青葉一。長而子黑者爲ニ女
貞一。玄扈先生曰。女貞吳下稱冬青產蠟處。皆稱ニ蠟
樹一。此冬青吳下稱ニ水冬青一。或稱ニ細葉冬青一
宋氏雜部曰。水冬青葉細利ニ于養ニ蠟子一。玄扈先生曰。
冬青樹凋枯以ニ猪糞一壅レ之。即茂。或云以ニ猪溺一灌レ之
附水槿
玄扈先生曰。水槿葉似ニ女貞一而邊有ニ鋸齒一。五葉攢
生不花。李所謂水蠟樹必此也。蜀中又有ニ一種插蠟
葉一似レ菊尤易レ生。插之一年便可レ寄。子三四年大
如ニ酒杯一。只即衰壞須與插矣。此與ニ水種一異種。水
槿雖ニ扦插易一レ生。却難レ大。又蜀中蠟子生ニ女貞一。
樹上少生下插ニ蠟樹一上上者多。故當以ニ蜀種一爲レ勝
李時珍曰。有ニ水蠟樹一葉微似レ榆。亦可ニ放レ蟲生一レ蠟
宋氏雜部曰。水槿細葉小黃花。又名ニ水据臘月一。斬ニ其
條一而插レ之。易レ成レ大。木材可レ爲レ器。宜下養ニ蠟子一
以取上レ蠟

附櫧山海經曰。前山有レ木。其名白櫧（郭璞註曰。櫧子似ニ柞子一可レ食。冬月采之。木作ニ屋柱棺材一難レ腐也）江穎食物本草曰。櫧子生ニ江南一。皮樹如
レ栗。冬月不レ凋。子小ニ於橡子一。櫧子有ニ苦甘二種一。
治作ニ粉食饑食一。褐色甚佳
李時珍曰。□子處々山谷有之。其木大者數抱。高
二三丈。葉大如ニ栗葉一。稍尖而厚堅。光澤鋸齒峭小
凌レ冬不レ凋。三四月開ニ白花一成レ穗。如□花結レ實
大如ニ槲子一。外有小包□□□□內子圓褐而有レ尖。
大如ニ菩提子一。內仁□□□□食苦澁。煮炒乃帶レ甘。
亦可磨粉胡櫧子粒小□□□□俗名ニ麵櫧一。若櫧子粒
大水□赤文。俗名血櫧。其色黑者名ニ鐵櫧一
李時珍曰。甜櫧子亦可レ產レ蠟。玄扈先生曰。余所レ聞
樹。可レ放レ蠟者數種。以レ意度レ之當レ不レ止レ此。即如ニ
飼蠶之樹一。世人皆矣レ有ニ桑拓一矣。而東萊人育ニ山繭一
者。於樹無レ所レ不レ用。獨楊樹否耳。諸樹中獨椒繭最
上。桑拓次レ之。椿次レ之。樗爲レ下。由レ此言レ之。事
理無レ窮。聞見之外遺佚甚多。坐レ井自拘何爲哉
按ずるに。蠟樹はいぼたの木にて。細葉のいぼたよ
り蠟を生ず。大葉のいぼたは蠟を生じがたし。民用
の益なるゆゑ。元文中この文を國字を以て譯し。樹

レ可レ剝矣。剝時或就レ樹。或剪レ枝。俱先洒レ水潤レ之
則易レ落。乘二雨後一或侵レ晨帶二露華一采レ之尤便。次取二
蠟花一投二沸湯中一。鎔化候二稍冷一。取二起水面蠟一。再煎
再取レ滓沈二鍋底一。勺去レ之。若蠟末レ淨再依二前法一煎二
澄之一。既淨乘レ熱。投二入繩套子一。候冷牽レ繩起レ之。
成二蠟堵一也。又曰。浸二穀水一漬二蠟子一。剝下苞レ之。
此是婺州法。吳興人但于二立夏後一剪レ子。到二小滿前
三日一。連二舊枝一作レ苞寄レ之。亦生レ蠟携李及吾邑有二
自生之子一。不レ煩二寄放一。亦生レ蠟可レ見。傳生之物。氣
足爲レ上。若三吾鄉傳有二上子一。不レ論二節氣一。但俟二其
氣足欲レ迸時一。速剪下寄之可也。又曰。立夏前一日剪
レ子。此是常法。但浙東氣暖。從二他方一鬻レ子還恐二蟲
迸出一。故以レ此爲レ期。若二吳興在北吾邑一。又在二吾興
北一。則吾鄉往二吳興及浙東一買レ子者。宜二立夏後剪小
滿前後寄一也。若浙東從二吾鄉一鬻レ子。仍須二立夏前剪
去一耳。吾鄉以北愈寒。寄宜二愈遲一。依レ此消二息之一。又
曰蠟子若下本地所レ無傳二買他方一者上。可レ行二千里一。如二
浙中一獨金華業レ此最盛而鬻二子於紹興台州湖州一。川中
獨南部西充二嘉定一最盛而鬻二子于紹興一其間相去各數
百里。蓋蠟子在二立夏前一。氣已足可レ剪。小滿前雖レ未

レ出可レ寄耳。亦須二疾行一。遲則蟲先レ期出。不レ及レ寄
折損多矣。諺云。走馬販レ蠟謂此若依前法先作苞置器
中蟲出不離箬苞中尚可遲二三日寄也。又曰。金華之
於湖州也。嘉定之於潼川也。歲鬻子以去而傳レ子。明
年又鬻之。叩之則云。金華嘉定但生レ花不レ生レ子故然。
金華尚有二十子一。其價以レ斗。嘉定絕無之。鬻子之價
十二倍潼川一。此理殊不レ可レ曉。嘗臆度之。大都樹少多
生レ花。樹老多生レ子。樹卑多生レ花。樹高多生レ子。
一樹之中剪子多則生レ花。寄子少則生レ子。又北種販二
至南一多生花。南種販二至北一多生レ子。如二湖州子一販
至二金華一盡生レ花。金華子販至二閩中一又生レ花。故金
華子多入レ閩而轉。販于吳興。若金華種販至二湖州一又
生レ子矣。吳興在レ北。金華在レ南。閩又在二金華南一也。
又如潼川販至二嘉定一盡生レ花。若嘉定種販至二潼川一又
生レ子矣。潼川在レ北嘉定在レ南也。蓋花性喜レ煖。子
性能レ寒。其以二老少一異。以二高下一異。以二南北一異理
則一耳。又曰。或云。樹生レ花即無レ子。生レ子即無レ花
此間有之不二盡然一也。大概多二花子並生者一。但欲留種
不宜早收花絕不可見至春中方著枝如二螺贅一。入レ夏頓
長則花與レ子不二相見一耳。子盛長時有レ膏如二餳蜜一。去

膏。而瑩徹。人以和油澆燭。大勝蜜蠟也。玄扈先生云。（蟲白蠟純用作燭。勝他燭十倍。若以和他油。不過百分之一。其燭亦不淋。故爲用頗廣。多植無害。）宋氏雜部云冬青子可種。堪入酒。至長盛時。五月養以蠟子。七月收蠟。不宜盡採留迨來年四月。又得生子。取養蠟曬乾。以越布蒙於甑口。置蠟布上。置器甑中。釜內水沸蠟遂鎔下入器。凝則堅白。而爲燭材。其滓盛之以絹囊。復投於熱油中。則蠟盡。油遂可爲燭。凡養蠟子經三年。停亦三年。又曰、巴蜀擷其子。漬浙東水中十餘日。搗去口種之。蠟生則近蹄伐去發肄。再養蠟養一年停一年。採蠟必伐木無老幹。玄扈先生云。女貞收蠟有二種。有自生者。有寄子者。自生者初時不知蟲何來。忽遍樹生白花。（枝上生脂如霜雪。人謂之花。）取用煉蠟。明年復生蟲子。向後恒自傳生若不燒寄放。樹枯則已。若解放者傳寄無窮也。寄子者取他樹之子。寄此樹之上也。其法或連年。或停年。或就樹。或伐條。若樹盛者連年。就樹寄之。俟有衰頓。即斟酌停年。以體其力。培壅滋茂仍復寄放。即宋氏雜部所謂。養一年停一年者也。伐條者取樹栽經寸以上者種之。俟盛長寄子生蠟。即離根三四尺。截去枝幹

收蠟。隨手下壅。冬月再壅。明年旁長新枝等蘗。以後恒擇去繁冗。令直達。又明年亦復修理。恒加培壅。第三年可放蠟子。四年再放。五年復放。迨收蠟仍剪去枝。如是更伐無窮。此謂經三年停三年者也。凡寄子。皆于立夏前三日內。從樹上連枝剪下去餘枝。獨留寸許。令子抱本。或三四顆乃至十餘顆作一簇。或單顆。亦連枝剪之。剪訖用稻穀。浸水半日許。灑取水剝下蟲顆。浸水中一刻許。取起用竹箬虛包之。大者三四顆。小者六七顆。作一苞。韌草束之。置潔淨甕中。若陰雨頓甕中可數日。天熱其子多迸出。宜速寄之。寄法取箬包剪去角作孔如小豆大。仍用草係之樹枝間。其子多少視枝大小斟酌之。枝大如指者可寄。枝太細幹太粗者勿寄也。寄復數日間。鳥來啄箬包。攫取子勤驅之。天漸暖蟲漸出苞。先緣樹上下行。若樹根有草即附草。不復上矣。故樹下須芟刈極淨也。次行至葉底棲止。更數日復下至枝條。嚙皮入咂食其脂液。因作花約略蟲出盡。即取下苞。視有餘子并作苞。別寄他樹。秋分後撿看花老嫩。若太嫩不成蠟。太老不成蠟。太老不

蠟樹

農政全書曰。女貞山海經云。貞木
李時珍云。女貞木凌レ冬。青翠有二貞守之操一。故以二貞女一狀レ之。東人因二女貞茂盛一。亦呼爲二冬青一。與レ冬音同名異。物盖一類二種也。一種皆因レ子自生。最易レ長。其葉厚而柔長。綠色面青背淡。女貞葉長者四五寸子黑色。冬青葉微圓。子紅色爲レ異。其花皆繁。子並纍々滿レ樹。近時以放二蠟蟲一。故俱呼爲二蠟樹一。唐宋以前澆レ燭所レ用白蠟皆蜜蠟也。此蟲白蠟自レ元以來人始知レ之。今則爲二日用物一矣。四川湖廣淮南閩嶺吳越東南諸郎有レ之。以二川滇衡永產一者爲レ勝

便民圖曰。蠟月種レ下。來春發レ芽。次年三月移縱。長七尺許。可レ放二蠟蟲一。栽二女貞一略如二栽レ桑法一。縱橫相去一丈。上下則樹大力厚須二糞壅極肥一。歲耕レ地一再過。有レ草便鋤レ之。令二枝條壯盛一。即多蠟也。李時珍云。蠟蟲大如二蟣虱一。芒種後延二綠樹枝一。食レ汁吐レ涎。粘二於嫩莖一。化爲二白脂一。乃結二成蠟一。狀如二凝霜一。處暑後剝取謂二之蠟渣一。過二白露一則粘住難レ刮矣。其渣煉化濾淨。或甑中蒸化瀝二下器中一。待二凝成一塊即爲レ蠟也。其蟲微時白色。作レ蠟及レ老則赤黑色。乃結二苞於樹枝一。初如二黍米大一。入レ春漸長。大如二雞頭子一。紫赤色纍々抱レ枝。宛若二樹之結一レ實也　蓋蟲將レ遺レ卵作レ房。正如二雀甕螵蛸之類一爾。俗呼爲二蠟種一。亦曰二蠟子一。子內皆白。卵如二細蟣一。一包數百。次年立夏日。摘下以二若葉一。包レ之。今繫二各樹一。芒種後。苞拆卵化蟲乃延二出葉底一復上レ樹作レ蠟也。樹下要二潔淨一。防二蟻食二其蟲一

玄扈先生云。女貞之爲白蠟滕國以前略無記載。今則遍東南。諸省皆有之。向嘗疑焉。以爲古人著書未暇遠徵遐僻耳。非昇昔無今有也。然見婺州人言。彼中放蠟不過二十年。吳興人言不過于許年。即余邑五年前亦無人知。此自余庚戌營。先隴始樹女貞數百木。擬作蠟。近年來村中亦多自生。蠟蟲頃寄子半用。吳興子半用土。子土人言。土子爲勝則昔無今有理亦存之。事固非目前所見。可懸斷也

汪機本草彙編云。蟲白蠟與二蜜蠟之白一者不レ同。乃小蟲所レ作。其蟲食二冬青樹汁一。久而化爲二白脂一。粘二敷樹枝一。人謂二蠟失著レ樹而然一非也。至レ秋刮取。以レ水煮溶濾置二冷水中一。則凝聚成レ塊矣。碎レ之文理如二白石

倭名鈔に。國々の鄕を載せて。一郡三鄕より。一郡二十四鄕なるあり。按ずるに。延喜の制一郡千戸に過ぎざれば。戸多き鄕は。三鄕にて千戸なり。戸少き鄕は。二十四鄕にて千戸あるゆゑなるべし。後世は一郡の戸數の定なく。鄕村の分なきゆゑに。村數多くなりたりとみゆ

外腎

折骨分經云。睾丸外腎也。屬ニ足厥陰肝經一と。これにて內腎外腎しるべし

分金

袪疑說云。地理之學莫レ先ニ於辨レ方。二十四山於焉取レ正。以ニ百二十位一分ニ金之用一。丙午中針則差ニ西南一者。兩位有半用ニ子午正針一。則差ニ東南一者。兩位有半吉凶禍福豈不ニ大相遠一哉と。これ磁石の針を百二十位へあつるによりて。分金と云ふ。記ニ分金一とあるも百二十位の當る所を記すなり

以物戲驚小兒

元史に云く。諸以レ物戲ニ驚小兒一。成レ疾而死者。杖六十七。追ニ徵燒埋銀五十兩一と。これにてみれば。今の面を被り。戲れに小兒を驚すも西土に習ふにや

錠

元史に云く。諸殺レ人者死。仍於ニ家屬一徵ニ燒埋銀五十兩一。給ニ苦主一。無レ銀者徵ニ中統鈔一十錠一。會レ赦免レ罪者倍之と。元の時火葬行はれし故。燒埋銀と云ふ。さて鈔の一錠いかほどなるにや。諸書詳に載せず。これ銀五十兩の代に。十錠を徵せは。元の鈔一錠は。銀五十匁に當ること知るべし

角法

唐書に云く。醫博士一曰體療。二曰瘡腫。三曰小少。四曰耳目口齒。五曰角法と。崔氏方曰。凡患ニ殗殜等病一必瘦。脊骨自出。以ニ壯丈夫一屈ニ手頭指及中指一。夾ニ患人脊骨一。從ニ大推一向レ下。盡レ骨極レ指復向レ上釆去十二三廻。然以ニ中指一於ニ兩畔處一極彈レ之。若是此病應ニ彈處一起。作レ頭多可ニ三十餘頭一。即以レ墨上記レ之。取ニ三指大靑竹筒一長寸半。一頭留レ節。無レ節頭削令レ薄。似レ剜煑ニ此筒子一。數沸及レ熱出レ筒籠ニ墨點處一。按レ之良久。以レ刀彈ニ破所レ角處一。又煑ニ筒子一。重角レ之。當レ出ニ黃白赤水一。次有レ膿出。亦有ニ蟲出者一。數々如レ此角レ之。令下ニ惡物一出盡上乃除。とこれにて角法明なり

將軍家譜に云く。嘉吉三年五月。朝鮮人來朝。將到ニ兵庫一。時德本謂。朝鮮人託ニ事於貢職一。然實爲ニ商賣一也。且將軍家尙幼稚。諸大名國役之費。旁爲ニ無益一也。不レ可レ入ニ於京都一云々。彼國使者言爲レ奉レ吊ニ普光院殿ニ來朝。不下敢爲ニ商賣一來上也。於レ是使レ入レ都。六月朝鮮人入レ京。館ニ之於雙林寺傍景雲菴一。斯波千代德監ニ供給事一。而下ニ行之一。十九日朗鮮人參ニ室町殿一。謁ニ將軍家一。其路次作レ樂。或吹レ笛。或擊レ皷。或打ニ鉦皷一。或彈ニ琵琶一。凡馬上者五十騎也。（德本は管領畠山入道德本也）これにて朝鮮人竊に商賈をなして。我國を欺くことしるべし

鰹

つれ〴〵草に。鎌倉の海にかつをといふ魚あり。彼さかひには。左右なき物にて。此頃もてなす物なり。それも鎌倉の年寄の申し侍りしは。此魚おのれらわかゝりし世までハ。はか〴〵しき人の前へ出づること侍らざりき。頭は下部もくはず。捨て侍りし物なりと申しき。かやうの物も。世の末になれば。上ざまでも入りたつわざにこそ侍れとあれども。倭名鈔曰。鰹魚唐韻云。鰹（音堅。漢語抄云加豆乎。式文用ニ堅魚二字一）大鮦也。大曰レ鮦。小曰レ鯇（音集）鰹を加豆乎となすは中らざれども。式文は延喜式の文にて。大膳。大炊。内膳式に堅魚あり。其一二を擧ぐるに。東鰒十二斤。島鰒。熬海鼠。蛸。雜腊各六斤。堅魚九斤。雜鮨六十斤。（御膳神の竈神供御）（供御）東鰒二斤。猪宍 雜腊。堅魚。海藻各二斤。堅魚十五斤。堅魚煎汁七瓶（平野夏祭）とあれば。徒然草誤るとみゆれども。兼好の時は。書籍甚だすくなくして。延喜式。和名抄廣く行はれざるゆゑなるべし。或の云く。延喜式の堅魚は。今の堅魚節なりと。按ずるに。今も西國にて生魚を斤を以て秤る所あれども。夏祭の比。堅魚生にて京師へ持ち來るべからず。且上下の物にてみれば。堅魚節なるべきか。堅魚煎汁は煎取なるべし。さて徒然草を作る比。鎌倉の東人は。堅魚節をもしらず。古へ堅魚節の供御になりしことを猶更しらざるゆゑに。生にて上ざまでも入りたつことを云ひきとみゆ。いま大坂邊にては。堅魚節を加豆乎と云ふ人あり。豊前小倉にては。堅魚節を都べて加豆乎と云へば。延喜式の堅魚は。堅魚節たること明なり

村

得ず

胡蘿蔔

胡蘿蔔は。形の人參に似たるを以て。我國の俗。人參と云ふと思ひしに。先年八住順菴の話に云く。明錢希言集曰。治レ疾當レ得ニ眞人參一。反得ニ支羅服一。當レ服ニ麥門冬一。反得ニ丞橫麥一。三代以下皆以ニ支羅服丞橫麥一。合レ藥病日痁而遂死也。按ニ潛夫論一如レ此。支羅服今小朱蘿蔔也。吳越間有レ之。謂ニ之丁香蘿蔔一。其形如レ參。故誤用耳。丞橫麥疑卽本草穬麥是矣。陶弘景曰。根似ニ穬麥一故謂ニ之麥門冬一。以レ訛傳レ訛。曷所ニ底止一。

按ずるに。潛夫論に。治レ疾當レ得ニ人參一。反得ニ支羅服一。當レ得ニ麥門冬一。反丞橫麥已而不レ識レ眞。合而服レ之。病以侵劇不ニ自知一。爲ニ人所ニ欺也云々。三代以下皆以ニ支羅服丞橫麥一合レ藥。病日痁而遂死也に作る

と。これにて觀れば。小朱蘿蔔は胡蘿蔔にて。人參に代へしゆゑ我國にて人參と云ふなるべし。胡蘿蔔。味。甘美にして極めて補益の功あるべければ。人參に代へたればとて。何ぞ病日に痁して遂に死するに至らんや。名醫褚澄の言に。世無ニ難レ治之疾一。有下不ニ善治一之醫上。藥無ニ難レ代之品一。有下不ニ善代一之人上とあれば。潛夫論治レ世不レ得ニ眞賢一の譬なれども。曲かれるを矯めて直に過ぐと云ふべし。本草綱目に。元の時より胡蘿蔔西土に來るとあれども。潛夫論にてみれば。胡蘿蔔は後漢の前より西土にありとみゆ。小朱蘿蔔。丁香蘿蔔の名を載せざるは。本草綱目一缺なるべし

沙子

證類本草に。日華子曰。穀精草凉餒ニ飼馬一肥二三月於ニ田中一生ニ白花一者。結ニ水銀一成ニ沙子一とありて。沙子は水銀をかためて鉛の如くなすなれば。沙は白めの類なること見るべし

不入斗村

武州に不入斗村(イリヤマズムラ)あり。古老の云く。古へ村となすにたらざる地を。不入計(イリヨマズ)と云ふ。のち村となりて。不入計村(イリヨマズムラ)と云ふ。村數に入れかぞへずと云ふことにて。草字の計を斗とあやまりて。不入斗(イリヤマズ)と讀み誤れりと

この說のごとくなるべし

朝鮮人來聘

祿山之亂一。何哉と。五星の聚ること決して理なし。たとひ天變にて。五星あつまるとも。天變なんぞ量るべけん

禁銅佛

宋史曰。鑄ㇾ銅爲二佛象及人物之無用一者禁之。同書曰。凡金銀銅鐵鉛錫監冶場務二百有一と。二百有一は少きにあらざれども。銅佛無用の者を鑄ることを禁ずるは。治體を知ると云ふべし

染紙

洞天紙錄曰。染ㇾ紙作ㇾ畫。不ㇾ用ㇾ膠法。用二膠礬一作ㇾ畫。殊無二土氣一。否則不ㇾ可ㇾ著ㇾ色。開染法以二皂角一搗碎。浸二淸水中一一日。用二沙礶一重湯煮一炷香濾淨調句刷ㇾ紙一次。掛乾用以作ㇾ畫。儼如二生紙一。若二安藏三二月一。用更妙と。これを試みるに。膠礬を用ひずして甚だ雅なり

賜金於僧

宋史曰。眞宗崩内遣下二中人一持ㇾ金賜中玉泉山僧寺上市ㇾ田。言爲二先帝一植ㇾ福。後毋三以爲ㇾ例。繇ㇾ是寺觀稍益市ㇾ田と。金を賜ふは格別。田を買はしむるは大に政體を失ふと云ふべし。宋の振はざる宜なり

沙尾錢

同書曰。廣間多毀ㇾ錢。夾以二沙泥一。重鑄號二沙尾錢一と。按ずるに。沙尾錢は。沙錢と異なり。此比思ひ出だすに。先年羽倉東之進。元の沙錢大さ寶永通寶の大錢の如きを示して。沙錢の使用を問ふ。（表は元の至大の年號にて。裏は沙錢とありきと覺ゆ）元史に。沙錢の使用みえざるゆゑ知らざるを以て答ふ。今考ふれば。元の沙錢は沙泥を雜へたるものにあらず。白自の類にて鑄たるものにして。宋の沙錢と同じとみえたり

匱

證類本草に。丹房鏡源を引きて云く。凝水石爲ㇾ匱。水銀可ㇾ爲二湧泉匱一。乳石可ㇾ爲二水匱一。陽起石可ㇾ爲二外匱一ト。袪疑說曰。世以二黃白之術一自詭者名爲二藝客一。又曰。爐火小則輕二瘦金銀一。以爲二糝制一。大則結二成丹母一。名曰二匱頭一。持二燕雀不ㇾ生ㇾ鳳狐兎不ㇾ生ㇾ馬之文一。以證二用ㇾ母之說一。或切二其眞母一。易以二他物一。或制而爲ㇾ匱。以邀二重謝一。凡水銀入ㇾ匱。必食二其母一。以成ㇾ寶再三爲ㇾ之。母氣既竭。金銀已盡則水銀爲二煙之煙歸一矣とあれば。凝水石爲ㇾ匱の匱は。この匱なるべし。湧泉匱。水匱。外匱は予淺學にして解し

衡位救均成枚行。佐禰眞信實誠良孚校。乎男雄緒濟尾臣水。比呂弘廣博淵泰尋寛。加太方賢家堅周良。阿如秋明章顯著。毛呂諸師庶認衆度。毛利守盛護衛積。加須員數笇和重。加介景影陰咎蔭。支與清淨潔済聖。須惠季末標愷。佐止里卿隣吏識。佐太定貞完愷。都木繼次嗣序續。阿津厚篤敦淳。奈良並比波秘南。那名聲命稱。須美澄角純處維。加香芳芬馨。波留春治玄晴霽。加奴兼包懷該。止乎遠遐寛通玄。阿不相會遇合。江多枝枝族條。多不任堪能妙。衣江柯兄柄。宇也禮恭敬。比佐久尙之。比止人仁者。布美文收書。加都勝遂葛。於木息興居。多禰胤種殖。與世代。伊也最彌。比天秀英。加止門廉。世木關塞禰根福。止久德得。伊末今未。乎加岳岡。末須益增。阿由布似。加世風吹。多倍妙絲。多介武健。津加冢墓。加比穎柄。津奈綱。多女爲米。知千。比古彥。加禰金。布知藤。末津松。須加菅。阿佐朝。止與豐。止美富。奈津夏。布由冬。天留光。屋麻山。

蒙古

間中古今錄曰。北狄稱ㇾ銀曰二蒙古一と。これにて觀れば。蒙古は金の如く。銀を以て國號とするなり

豬水胞

明黃淵玉。涵海萬象錄曰。予幼時戲將二豬水胞一。盛二牛胞水一。置二一大乾泥丸子內一。用ㇾ氣吹二滿胞一畢。見下水在二胞底一。泥丸在上ㇾ中。其氣運動如ㇾ雲。是即天地形狀也。此大虛之外。必有二同ㇾ氣者一と。これ豬水胞を以て。天地を說く始なり

雷公

文海披沙曰。嶺南有二雷公一。冬蟄二地中一。人堀得便擊殺而食ㇾ之と。雷狩は西土にもあることなり

食檄

膳夫錄曰。弘君擧食檄有二麞肶。牛膝。炙鴨。脯魚。熊白。麞脯。糖蟹。車螯一と。食檄は今の獻立のことなり

毀銅佛

南史南平王偉傳曰。武帝軍東下。用度不ㇾ足。偉取二襄陽寺銅佛一。毀以爲ㇾ錢と。これ銅佛を毀ちて錢となす始にして。權時の策を得たりと云ふべし

五星

管窺集要曰。吾聞周王代ㇾ殷。五星聚ㇾ房。齊桓稱ㇾ霸。五星聚ㇾ箕。漢高入ㇾ秦。五星聚二東井一。宋室太平。五星聚ㇾ奎。此皆吉占也。唐天寶間五星聚二箕尾一。而有二

年裝二載各貴物一。就二安南國一赴レ京。拜稟置賣。以通二兩國一。交二易貨財一。副中其恩義上。茲令

永祚六年五月

令旨

朱印

用名文字

姓名錄抄に。名に用ふる文字と訓を載す。その文左の如し。この書の終に。故准后閣下以二菅諫議大夫眞筆之本一。被二書寫一訖。正長丁酉三月日。右僕射判とあり。右僕射は一條兼良公なり。これは學者の拘らざることなれども。我國のことなれば知るべきことなり

(乃利)則義儀憲範敎章孝敬乘德法矩規典利慶猷度經紀式命繩期象明書述朝藝背似載彝軌雅仙言伐永化政知至。(與之)吉良好義儀慶善能濟懿令嘉榮理綏徽美愛佳珍至資休由德賴承燕宜喜賢鞏穀命麗可時克備敬。(多太)忠眞政公齊渡正格理陟位董尹箴唯資身子倶只紀匡江睢兄帝忩賢彈孫彥。(乃不)信延述順陣宣舒書取別修序敍演暢展正房總命言政誠惟將攄董舒遙。(末佐)正昌政理兌方當雅匡順尹將齊繩蕆幹緝賢蔚睿元容。(止毛)友公奉倫共知類大倶偕與兼僚具伴朝明比等誠。(太加)高隆敎孝卓擧貴堯喬標楚陟尊幸牢岑生懷山鷹考。(須介)助資輔傅相祐亮右佐副方扶弼毗冀介爲揀高良。(由支)行幸之如將由隨于往致以通適舒至元焉役。(奈利)成生業濟齊爲登作平位救均就得尙有忠周也。(知加)近邇親愛隣周允幾庶懷用身躬子實愼元。(止之)俊利敏載年歲稔逸聰明智鏡照詮信章季曉。(美)三實膽省相視覽觀鑒鏡子身躬見親皆現臣。(哉須)安保康泰愷懷寧恩得綏逸穩易緣。(與利)賴依資倚自仍方賢形典利寄月據適。(木)材木與城樹黃紀息置起來杖減軴規申。(毛知)茂用以持望荷住蔚將式復申殖。(阿支良)明昭章信朗詮在顯著卿光耀亮行。(美知)道通康方達遙途路陸徑盈滿充。(古禮)是惟維斯伊之時此寔身比緊。(美豆)光滿充實盈三看苗並明水。(志介)重成滋繁董蕃茂爲兄。(毛止)元本職基資幹舊意臺採。(止岐)時說節候秋辰言朝昔宗國。(布佐)房總林滋番重成芝維。(牟禰)宗致統棟胸各順旨至。(都良)連行貫列綿陳屬宣。(津禰)經常恒庸方懷昔綱。(阿利)有在茂滿光盈順照。(奈加)長永脩條度仲中榮。(比良)平

レ限。不レ合ニ加減一。奏可レ之と。これにて我國封戸の制しるべし

阿蘭陀尺圖

寶暦三年。高橋氏にて見たる阿蘭陀尺。銀にて造り。三寸より折りて藏るやうになしたるなり。阿蘭陀の尺。一箇一尺二寸にて十二段になし。一尺は。曲尺一尺二分弱にあたる。阿蘭陀は。都べて十二となすゆゑなり。これは阿蘭陀のレイン。テンツセドイムストツコンと云ふ尺なり

石和

甲州の石和(イサワ)を。倭名鈔に石禾(イサワ)に作る。石禾(イシアワ)とは言ひがたきゆゑ。古より石禾(イサワ)と云ふと云へり

三郡

日本後紀弘仁二年。於ニ陸奥國一置ニ和我。稗縫。斯波三郡一とあれども。延喜式にこの三郡なし。今奥州五十二郡にして。和賀。稗貫。紫波の三郡あれば。和賀は和我。稗貫は稗縫。紫波は斯波なるべし。按ずるに。延喜の時。この三郡を廢すれども。奥州にて窃にこの三郡ありて。官制の郡となるとみゆ

多褹

多褹島は古へ一國なりと云ふひとあり。按ずるに。續日本紀天平五年六月丁酉。多褹島熊毛郡大領外從七位下安志託等十一人。賜ニ多褹後國造姓一。同十四年。制。大隅。薩摩。壹岐。對馬。多褹等國云々と（薩摩。壹岐。對馬は日本紀にあり。和銅六年始置ニ大隅國一）あれども。この文疑はしければ。多褹は島にて國にあらず

安南

安南總鎮營の書及び清都王の令旨の寫をみれば。我國の商人安南へ往きて賣買をなしたりとみゆ。その書斯の如し

安南總鎮營爲ニ繳報事一。茲有ニ船主問小左衛門一。有ニ中鎗一件一。已准買應用爲レ此繳ニ來本國一。所レ該等員人驗實並停ニ勾擾一茲繳

印

永祚十年正月二十六日　　永祚は安南の年號なるべし

繳　[押字]　（此二字押字さみゆ）

元帥統國政清都王令旨。日本國義客彌右衛門。許下匝

大水

同書に云く。貞觀十一年五月。陸奥國地大震動。流光如レ晝隱映。頃之人民叫呼伏不レ能レ起。或屋仆壓死。或地裂埋殪。馬牛駭奔。或相昇踏。城郭倉庫。門櫓墻壁。頽落顚覆不レ知ニ其數一。海口哮吼聲如ニ雷電一。驚濤涌潮泝洄漲長。忽至ニ城下一。去レ海千百里。浩浩不レ辨ニ其涯涘一。原野道路。總爲ニ滄溟一。乘レ船不レ遑。登レ山難レ及。溺死者千計。資產苗稼殆無ニ孑遺一焉と。これ元文三年信濃國の大水の山鹽と云と略同じければ。古よりありしことゝみえたり

唐商

同書に云く。貞觀十六年七月。太宰府言。大唐商人崔岌等三十六人。駕ニ船一艘一。六月三日著ニ肥前國松浦郡岸一と。これにてみれば。唐商の我國へ來ることは久しきことなり。これより前にも來りしことありと覺ゆ

周髀

續日本紀に云く。天平三年。制。自今已後習レ算出身不レ解ニ周髀一者。只許レ留レ省と。古出身の詳なることみるべし

鳥羽表

同書に云く。延曆九年。高麗國遣レ使上ニ鳥羽之表一。群臣莫ニ之能讀一。而辰爾進取ニ其表一。能讀巧寫。詳奏ニ表文一と。俗に云ひ傳へたる。西土より鳥羽に文字を書きて來りしを。湯に蒸し讀むと云ふに。このことなるべし

高瀨舟

三代實錄に云く。元慶八年。令ニ近江丹波兩國一各造ニ高瀨舟三艘一と。これにてみれば高瀨舟と云ふは久しきことなり

土官

容齋隨筆曰。靖州蠻首自稱曰レ官。謂ニ其部之長一曰ニ都幙一。邦人稱レ之曰ニ土官一と。土官は長たること知るべし

封戶

續日本紀曰。天平十九年五月。太政官奏曰。封戶人數緣レ有ニ多少一。所レ輸雜物其數不レ等。是以官位同等所レ給殊差。於レ法准量。理實不レ堪。諸毎ニ一戶一以ニ正丁五六人中男一人一爲レ率。則鄕別課レ口二百八十。中男五十擬爲ニ定數一。其田租者毎ニ一戶一以ニ四十束一爲

續昆陽漫錄

青木昆陽著

細馬

唐書百官志に。毎歳孟秋。群牧使以二諸監之籍一。合爲レ一。以二仲秋一上二於寺一。送寺送二細馬一。則有二牽夫識馬小兒獸醫等一。（按ずるに。唐時凡厩牧之坊。禁苑給仕者。謂二之小兒一）とありて。解せざりしに。延喜式左馬寮に。凡細馬十匹。中馬五十匹。下馬二十匹。牛五頭。毎年四月十一日始飼二青草一。十月十一日以後飼二乾草一。（馬刀二束半。牛二束。別重十斤二兩）其飼丁馬別一人。以二衛士一充。但刈二青草一丁。幷飼レ牛丁。總七十四人。幷充二仕丁一。其飼レ秣者。冬細馬日米三升。大豆二升。中馬。下馬各米一升。大豆一升。牛米八合。夏細馬日米二升。中馬一升。下馬及牛不レ須とありて。細馬は上馬なり。延喜の比は。遣唐使あれば。唐の事を見知りて書きしゆゑ細馬の上馬たること明なり

砂金

續日本後紀に云く。承和三年賜二大使御衣一襲。白絹御被二條。砂金二百兩一と。これにてみれば。承和の比。砂金通用ありとみえたり

白銀

日本紀持統天皇五年。伊豫國司田中朝臣法麿獻二宇和郡御馬山白銀三斤三兩鉟一籠一あれば。此時伊豫國より白銀出づとみえたり

川口湖

三代實錄に云く。貞觀六年六月。甲斐國言。駿河國富士大山忽有二暴火一。燒二碎崗巒一。草木焦熱。土鑠石流。埋二八代郡本栖幷剗兩水海一。水熱如レ湯。魚鼈皆死。百姓居宅與レ海共埋。或有レ宅無レ人。其數レ難記。兩海以東亦有二水海一。名曰二河口海一。火焰赴向二河口海本栖剗等海一。未二燒埋一之前。地大震。雷電暴雨。雲霧晦冥。山野難レ辨。然後有二此災異一焉と。これにてみれば富士山の燒くる時は。砂ありて人家を埋めきとみゆ。さて今も川口村に湖水あり。古の河口海なるべし。元文元年。敎書命を蒙りて。甲州を行り。古書を求むる時。勝山村より川口湖を舟にて。川口村へ渡る。一里ありと云ふ。此湖水水落なく。伏水にて一里ほど脇へ。水ふき出づるなり

續昆陽漫錄目錄終

續昆陽漫錄目錄

れど。禁中にても。女官は晝夜私の宅へ退く事なき故。長上とて詰切勤の取扱にせらるゝ古法なり。考課令にみえたり。されはかの部屋々々とても。役所に准じて局といふ事。誤にはあらず。京。鎌倉の古繪圖にも。長局の名見えたり

家居雜

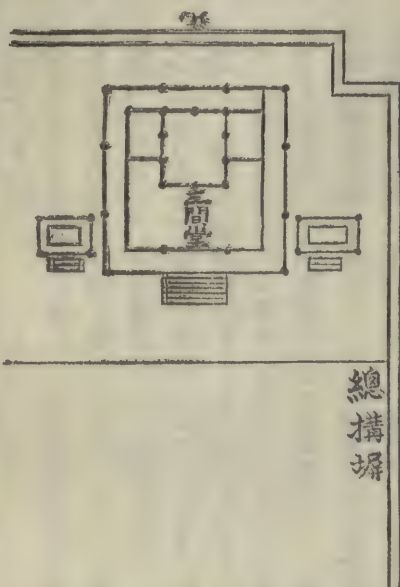
大抵。人の住居とする所。山莊。野亭。庵室等。人々の好による事とて。定制なし。此外。農家。商家に。古今異同なきにあらざれども。通篇玄るすところを以て。大概をれしみるべし

家屋雜考終

くかなへり

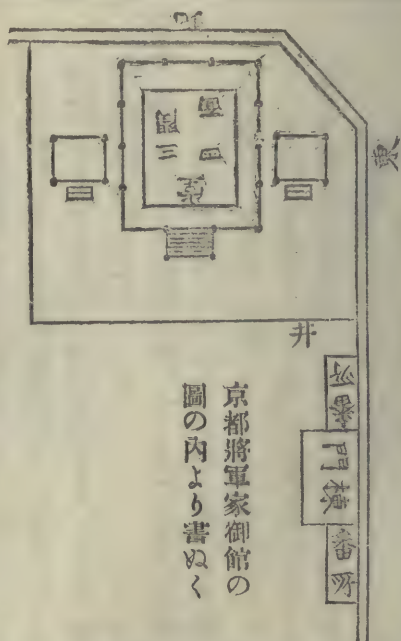
御中居御末　今時諸大名の奥に。御中居御末等の稱あり。婦女の役名の如く唱ふれども。皆かの奥の屋の小名なり。海人藻芥に云。內裏に御末といふところあり。常人の所ならば。中居などの邊なり。內裏幷仙洞にかぎりて。御末と申すにや。近頃はその外にも御末と申すとかや上巳とみゑ。また長祿二年以來申次記といふものに。室町家の御奥の事を記して。上の御末と中の御末との間は。遣戸にて候。廣さ三間九間(サンゲンコヽノマ)。なり（三間九間とは。三間四方にて。九坪あるをいふなり）其眞中に柱あり。其柱の際より遣戸間半(マナカ)づゝ兩方へ明けられ候間。中一間明きたる所へ掛筵を掛けられ候。朝夕の供御參り候時も。此掛筵の際へ。中﨟御出ありて。供御の御膳をうけとられ候て。御前へ持參なり。（中略）總じて此筵の內へは。誰々も不及參入候。去ながら。公家には。日野殿。三條殿。其外伊勢守自然御供衆中にても。少々參入も有りしなりなどみえ。上の御末。中の御末。下の御末などいふことは。他の書にもみゑて。もとそこに勤仕する女をさして。御中居。御末などよぶなり。御末は一說に。婦人食を調ふる所なりともみゆ。又大平記。鹽冶判官云々の條に。北臺のもとに中居する女などいふこともみゑたり

鈴ノ間　（鈴間下）表奥の境に。廊下を設け。たがひに鈴を鳴らして。人をよぶこと。今時は諸家の通法となれり。こはいと古き世よりの事也。顯宗天皇の御時。置目といへる老女を御優愛あり。大宮近き所に居所を賜ひ。是を召さむとするや。とき〳〵綱をひき。鈴を鳴らして。まうのぼらしめ給ひし事。日本紀に見えたり。中昔以來も。禁中にて人をよぶに。鈴を用ひらるゝ事は。禁祕抄等の書どもにみえたり

長局(ナカツボネ)　局はすべて。役所の事にて。女には限らざれども。今は女にのみいふごとくなり來れり。若菜の卷に。女房のつぼね〳〵まで。細かにしつらひみがゝせ給ふとあるは。今時の長局のさまなり。さて是を長局といふは長く一棟につくりて。いく住居にもわけおくゆゑなり。こはおのれおのれが部屋にて。役所にはあらざるに似た

後世鬼門にむかふところ。かならず角をかくといふ事あり。いかなるいはれにか。陰陽家の説などあれども詳ならず。古き圖左に抄出して。參考にそなへおくなり

表奧

今時武家には。必。表奧の稱あり。奧の屋。奧のおましなど古き唱へながら。いま時の如く。男女の居所をわけて。表奧といふ事に。室町頃よりの事とおぼし。三内口訣に。堂上家にて。對の屋といひ。武

鎌倉御殿繪圖の内抄寫

京都將軍家御館の圖の内より書ぬく

家には奧の屋といふ故實あることなりなど見えたるも。餘の義にあらず。堂上家と武家と。家作のおなじからざるいはれ。前に記せるところの如くなるにて。考へ合すべきなり。奧の屋の事。猶。左に擧ぐ

奧　表奧に對しいふ奧は。たゞ奧深き所の稱にて。もと字義など撰びて名つけたるにはあらず。しかれども字書に。奧の字を注して。室西南之隅爲レ奧。主人所ニ安息一也。入則退安ニ於靜一。故位ニ乎西南一。地之道也とみえて。今時の奧の屋の稱によ

あるも。間數多くして。いちじるきわかちなければ。諸事につきて紛らはしき患あるゆゑなり。必しも其所を花麗にせむ爲のみにはあらず

焚火之間(タキビノマ)　圍爐裏之間　貴人の御座近く焚火の間を設くる事あり。鎌倉御殿繪圖。京都將軍家御館繪圖などいふものにもみえて。圍爐裏あり。その外。ふるき繪圖どもにもみえたり。大道寺友山が雷鳴論といふものに。甚雷の時。火を多くたけば。雷火の災を免るゝ故なりといへり。また圍爐裏の間。長圍爐裏などいふは。煮焼をもする場所にて。焚火の間とは異なり

雷之間　後世雷の間とて。二重天井などにして。甚雷の憂を避くる事あり。古くは聞き及ばざることなり

地震之間　こは鎌倉。及京都將軍家御所繪圖などにもみゆれど。その造りかたを詳にせず。近世に至り。釣天井などいふ祕傳ありともいへり

地震口　是は雨戸の内。所々へ小き樞戸(クルヽト)を設け。かけがねをはづせば。おのづからひらくるやうにしたるを便利とす。こは地震に限らず。諸事につきて。便利の事ながら。是も雨戸といふもの出で來て以來の事なれば。古くは聞き及ばず

屋敷

屋敷とは家居を造るべき地所の名にて。其地所は主人々々より賜はるところなれば。後世は主人々々より賜はりて。住する家居をばおしなべて。屋敷と稱する事とはなれり

長屋

長屋といふ事は。萬葉集に。橘の寺の長屋。また橘のてれる長屋などいふとも見えて。古き代よりの稱なり。武家の代となりて。屋敷地を賜はる人々。またその從者を住ましむる所を長屋といふは。梁間を長く建て續けて。其内を仕切りおく事ゆゑ、此名あり。こは武士にのみもかぎらず。商家にもいふ所なり

部屋

部屋は下部の居る所ゆゑいふといふ說のあれども。左にあらず。部は隔にて。へだつる義なり。是も一家の内を仕切りて。へだておく故の名なり

鬼門角を缺く

とよぶ事となれり。廣廂より轉じたる名なるべし。さてこの廣廂といふもの出で來て以來。遠侍の武士どもを。廣間へ移し。武器兵具を飾りて。警衛に備ふる事となりしかば。遠侍とて。別に設け置くことはなくなりぬ。今時廣間の番士を外樣衆と稱する家々あれども。實は皆家人にて。そのかみの外樣衆とは異なり。又廣間の近邊に。別に御遠侍といふ所を設け置く家々あれども。是もそのかみの遠侍とは違ふ事なり。今時弓の間。鐵砲の間。長柄の間などいふありて。皆主人々々の備へ置く所なり。そのかみの遠侍の如く。武士どもの手々に携へ來れるを飾りれくにはあらず。是等を考へ併せても。古代と今と家作のさま異樣ならざる事。能はざるを知るべし

廣敷

廣敷は。廣間の一名ながら。婦人の居所に分け唱ふる事なり。故に廣敷は番士をおかず。武器。兵具を飾らず。室町の末の頃より。此名みえたり

敷臺

玄關の板敷を敷臺とよぶも。近世の名なり。或は式臺。或は式第等の字を用ふ。一說には。客人を式待する所なる故。此名ありともいへり

白洲

玄關の前には。白砂をしきて。淸らかにする事故。此名あり。沖の白洲など歌によむも。白洲のあるところをいふ。今時は小石など敷き詰めにするも。常のことなり

面廊（メンラウ）

面廊の名。京都將軍家御館の繪圖中にみえたり。常ざまの廊下なり。便廊の轉にや

間雜

繪之間　焚火之間　圍爐裏之間
雷之間　地震之間　地震口

此間は。御座の間。御次の間。上の間。下の間などよぶ間にて。猶さまざまあり。左に注す

繪之間　總じて間數多ければ。何れの間とさしいふときは紛らはしき故。後世大家には。繪の間とて。壁或は戸障子に繪をかゝせて。一間の名とせらるゝなり。東鑑に。鎌倉御所御障子の繪さまざまの圖は。將軍家の御心にかなはずとて。建暦三年八月。事書を以て改め畫かゝせ給ふなどみえ。また東山御所などにも。繪の間の事どもも多くみえたり。後世諸家に繪の間といふこと

も實檢あるに。主上光嚴院御簾を卷きて叡覽あり。兩六波羅庭上に敷皮しきて。是を檢知ありし事。太平記にみゆ。天子だにかくれはしましゝを。武將たらん人。連子を隔てゝ實檢あるべき事とは覺えず。またかゝる例をば。ふるく聞き及びし事もあらずといへり。猶考ふべし

長圍爐裏

近世大家には。必。此一間ありて。中央に長大なる圍爐裏を設け。烹炙りの場所とす。こは客人の爲に設け置くのみにあらず。家人共を大勢つどへて。酒食など賜はる所もなくて。叶はざる故なり。こは武家々作の條にいへる如く。土着の武士ども。家人といふものになりかはりし以來の事なり。されば今の世となりては。諸士の拜謁をうけ。公私の號令を傳へなどするにも。間數坪數を增さざる事能はず。つひ〳〵諸家ともにかたの如く。手廣なる事となれるは。時勢のしからしむる所にて。驕奢節儉等の儀の關るところにあらず

客　殿　客亭

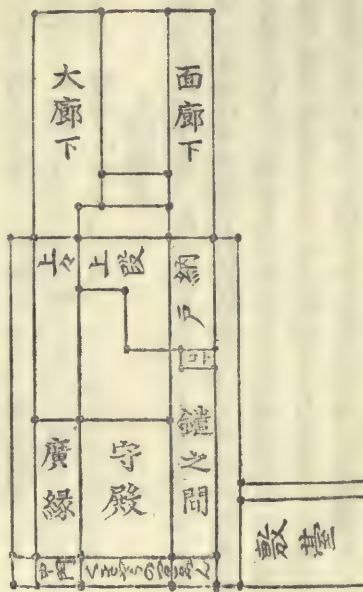
客殿の名は。小右記に參ニ齋院一於ニ客殿一云々とみゆ。吉部秘訓抄に。文治二正十云々。大夫史廣房入來。先立ニ中門外一予出ニ客殿一などみえて。今時の客對の間といふほどの稱なり。又古くは客亭ともいふ。眞言院。長者坊の古圖。母屋の内を分ちて客亭としるせる所あり。一說に。客殿はいはゆる出居なりともいへり。後世は專ら僧家にのみ此稱あれども。もと僧家には限らざる事なるべし

玄　關

玄關は。書院につきたる名にて。是をば僧家にていひ初めしなるべし。其故は。傳燈錄に。法師者踞ニ師子之坐一。瀉ニ懸河之辨一。對ニ稠人廣衆一。啓ニ鑿玄關一。開ニ般若妙門一。等ニ三輪空絕一（慧海和尚の話）と見えたれば。もと。僧家にて。學問所の入口を名づけて。玄關とよびしが。是もまた漸々に轉じて。學問所にあらぬ家居の入口をも。かく呼ぶ事とはなれるなるべし

廣　間　弓之間　鐵砲之間　長柄之間

廣間の名も。古くは聞き及ばず。然るに寢殿造の家居には。正面に階あり。階を升りて廣廂に入る事にて。別に入口とてなきを。玄關とて別に入口を設くる事となりて以來。玄關の内を廣めて。そこを廣間

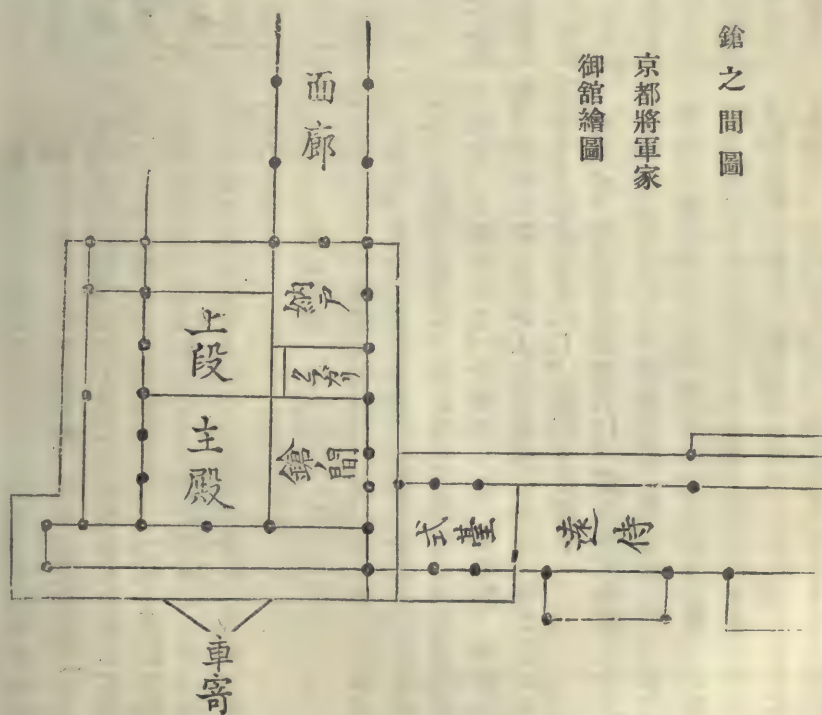
いかでかゝる事をば申しぬらむ。されど其議にや從はせ給ふべきと答へ申したり云々。又云。大學頭信篤も。鎗の間といふところなるを以て。鎌倉殿の代の圖にあらずして。近き證にて候と申しゝなど聞ゑたりき已上などみえ。鎌倉御殿とは。いづれの世をさししるせるにか。又京都將軍御所とさせるも。萬里小路。室町等の圖とはみえず。何れも詳ならざれども。何さまふるくより傳へたるに疑なきをば。所見なきにあらねば。今其内の名どもを擧げて。舊名を遺しおくなり。件の繪圖どもの事。一名は殿中差圖ともよぶにや。今は相似たるものども數本あり。いまこゝに引く所は。何れもやんごとなき御家々に傳へたまへる。古寫の圖による所なり

實檢之間 實撿窓

後世武家々作の圖に。實檢之間。實檢窓といふ所あり。其由りて起る所を詳にせず。土肥經平が春湊浪話に。此事を論じて。古代の寢殿造には。中門の廊といふものあり。中門の廊には。必。窓を開きて。連子を造る。後の世是を實檢窓と唱へて。廊の連子といふものなし。それのみならず。主將たる人敵の首を實檢あるに。此窓より見給ふ式なりなど。作りなしていへる事あるにや。かくいふなり。今城中の殿宇寢殿造にあらず。中門もなき所に。かならず實檢の窓をつくるを作法の如くいふ人あり。無稽の俗説といふべしとぞ。元暦のむかし源九郎義經木曾を討ちて院參ありし時。白河法皇中門の連子より。六人の武者を叡覽ありし事。平家物語にみえたれば。是等に基きて取り出だしゝ說にやといへり。又云。其後元弘三年。河野。陶山等鳥羽にて赤松が軍と戰ひ。首七十三討ち取りて。六波羅へ馳せ歸り。その首ど

改め作らるべしと仰せ下されしに。鎌倉右大將家以來。武家には門に屋根を覆ひし物を用ひられざる故實あり。其證據として。右大將家の圖をまゐらすといひし事あり。此事を以て某に問はせ給ひしが。我むかしより見もし聞きもしつることゞもをしるし。此圖もわが許にうつしつたへし所なり。されど鎌倉殿の代の物にあらず。其證は多く詞を費すにもおよばず。今の世の鎗と申すものゝ始は。太平記にて見侍り。然るに此圖に鎗の間と申すものゝ候にも。其餘はれしはかりぬべき事なり。又遠く古の事ども申すまでもなし。二條の御城にて。寛永の頃の御門どもの。礎ども候。此時の棟門唐門は。後に仙洞へ參らせられて。今はその礎のみ殘れり。又南禪寺の內。金地院の宮門は。むかし神祖聚樂の御所の門を寫されしなり。さらば當家代々にも。棟門。唐門等用ひさせ給ひし事明なり。只此御所には。いまだ夫等の御門建てられざりしなり

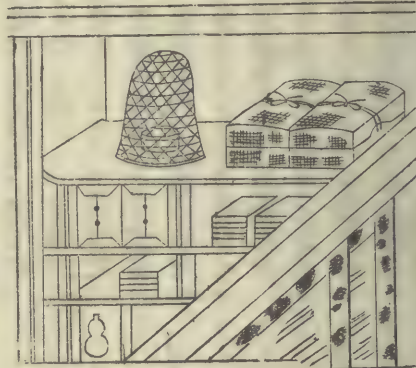
鎗之間圖

京都將軍家御館繪圖

故に上段中段下段などいふを設けて。尊卑を分けらるゝ事となれり。平相國の時。妓王。妓女寵衰へて。長押の外の一段下りたる所にのみ侍らしめ給ふなどいふこともみえたり。また落間とて。一段も二段も卑く造る所あり。こは便利につき。又は主人々々の好みによることにて。あながち尊卑を分けらるべき爲にはあらず

古代の棚の圖

こは圓光大師の繪傳に見えたり大抵古代の棚は常人の家のといへども多くはかくの如くにて造り付にあらず

鎗之間

鎗の間の名は。鎌倉御殿繪圖とて。古く傳へたるものにみえ。また京都將軍御館繪圖といふものにもみえて。警衛のために。數鎗など設けれかれし場所とればし。其圖のさま。今時ならば。弓の間。鐵炮の間。長柄の間などいふべき場所なれば。何さまふるき世よりの名なるべし。略圖下に載す

果して御供の人々股立高くくゝりあげて。速にかけ入るべき勢にてありしといふ事あり。當時雨戸といふものゝめづらしかりしことをしるべし

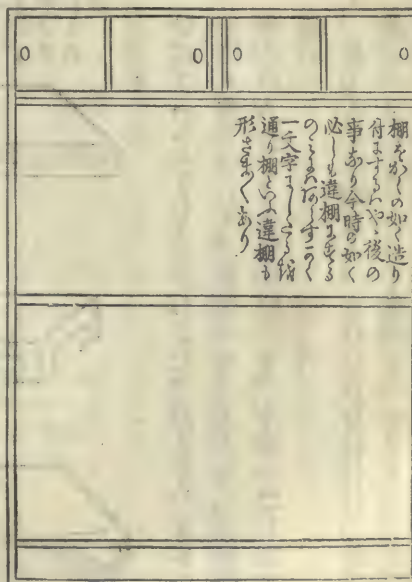
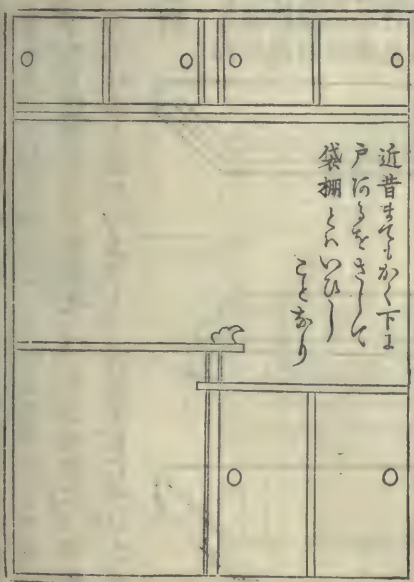
因に云。白石翁の折焚柴に。鎌倉御所繪圖といふものゝことを評して。其圖を寫し得てみしに。鎌倉の代の物とはみえず。又京の代となりし後。鎌倉殿と聞えし時の物ともみえず。是はたゞ末の世の人の屋形の圖を。匠の家に傳へしところとみえたり云々。又云。その後。朝鮮聘事によりて。中門

上段之間 中段 下段 落間

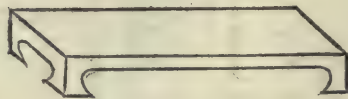
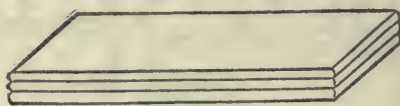
大抵。寢殿造の母屋は。一段高くして長押あり。其外は廣廂にて卑く。其外は簀子にて。また一段卑し。書院造の家は。母屋と廣縁との間。まづは高卑なし。

杉戸　杉戸は。もと妻戸を略し。遣戸にして用ひたる物とおぼし。其故は古書に妻戸のあるべきところを。板戸の遣戸にして。明りうけの所へ建てたる圖多く。またその木理をみるに。必しも杉を用ひしとはみえず。古歌に槙の板戸などよめる。杉に限れるはやゝ後の事なるべし。さて此杉戸の上へ。行の節とて。竹節のごとき木をたて。欅とて細き木を打ちがへおくも。古き事と覺えて。是もまた古書に多くみえたり。秋の夜長物語に。杉障子とかけるも即此杉戸の事なり

雨戸　書院造の家には。必。雨戸あり。敷居。鴨居を一溝にして。繰戸にする事は。書院造といふ事出來てよりも。やゝ後の事とみえたり。信長公在京の頃。東照宮その旅館へおはしまして。暮に及びしに。御産所の雨戸を繰る音。いと騷がしく聞えしかば。信長公はやくも心づき給ひて。御供の人々この音を聞きしらず。騷動出來ぬと心得んもはかりがたし。たゞあるとく告げ知らせよと仰せあり。その人走り出でゝ見るに

後世の棚

袋棚の圖

り。飾附の書には。長さ九尺なとあるもみえたり

棚

中古以來武士の住居には。必。棚といふものあり。一說に。軍防令に。軍團の府庫へ棚を設け。兵士をも一人々々の甲冑及髓身の具を納め置きたる事みゆれば。是等の遺制にやといへり。いまだ其始を詳にせず。但。是も寢殿造の家なれば。御厨子。黑棚などいふ器物をのみ用ひられし事なれば。今時の如く居間客對の間ともに違棚。袋棚などいひて。つくりつけにする事は。武士の家居より移れるにてもあるべし。一書に。違棚は武士の高名したる首どもを載せ置く所なり。首には尊卑ある故。二段にも三段にもするなり。袋棚は。右の首どもを納め置く所にて。首桶の高さ一尺の定法なれば。袋棚の高さは。内のり一尺一寸にするなりなどいふ事見えたれども。ひとつとして據もなき妄說なり。慶長の頃。寫し丶匠家の傳書には。上の棚。中の棚とて。中の棚をば一文字にして。打ち違へざるもみえ。上の棚には戸ありて。是を袋戸といふよしみえ。袋棚といふは。今時地袋戸とて。別に下へも仕付けたるを圖せり。其口傳書に。押板の右にあらばかやう〳〵。書院を前に受けたらむにはかやう〳〵などしるし。古きものなること疑もなき物にて。萬治の頃。上木せし武家雛形といふ書と。大旨相似たり。今其一二を左に載す

押板圖

こは和歌會席作法圖及相阿彌か飾附の圖等に見えたるを出す猶さま〳〵あり

押入　是もとは棚なり。それに戸を仕付けて押入棚といひしは。いたく後の世の事なり

左に古圖ども。少々縮寫し出だせり。猶。併せ考ふべしまた出文棚(イダシフミダナ)ともいふといへり

書院床　圓光大師繪傳

床間　床間は。佛壇の略なりといふ説あり。さもあるべし。安齋翁の説に。今武家の書院に。眞の飾とて佛像三幅對をかけ。三具足などいふものをおくは。僧家の習俗の遺りたるなりなどもいはれき。然るにそのかみ書院造とても。今時の如く疊をしき。閾を入れたるものとてはみえず。皆押板を用ひて。その押板の上へ。三具足などを飾られし事なれば。やがてかの押板をさして。床といひし事もありしが。漸々れしうつりて。今時の如く作りつけにし。それを床の間といふ事とはなれり。押板の事は。後鳥羽院。順德院の頃より。殊に多く見えて。料紙。硯。懷紙。短册等をおくに用ひられしものなり

同上　土佐家古寫粉本

押板　前にみえたり。古圖とも左に載す。和歌會席作法の圖。相阿彌が飾附の圖等に見ゆ。大小あ

は僧家にのみ傳はれる事故。書院といふ事も。初は僧家にのみありて。漸々武家へ移れるにても有るべし。さて秋の夜長物語に。何某律師の。人まつさまをしるし。書院の杉障子より遙に見出だしたるに。（中略）書院の戸をほと〳〵とたゝきてなどみえて。僧侶の常に勤學する所のさまなり。太平記。新將軍都落の條に。爰に佐渡判官入道道譽。都を落ちける時。我が宿所へは定めてさもとある大將を入れ替へられんずらむとて。尋常にとりしたゝめて。六間の會所には。大紋の疊を鋪き並べ。本尊脇繪（今時の三幅對にて。中尊維摩左右山水などの類なり）花瓶香爐鑵子盆に至るまで。一樣に置き調へて。書院には義之が草書の偈。韓愈が文集。眠藏には沈の枕純子の宿直物をとりそへて置くなどみえたるは。やゝ武家へ移りてのさまなり。但。此書院とあるは。今時の書院床の事にて。書院造の家の事にはあらず。然れどもその書院床といふも。元來書院造といふ事始まりて後。書院造の家には。必此物ある故の名なれば。こゝに引き出でゝ書院造の證としたるなり。猶。下の條見合すべし

書院造　（附書院　櫺子　床間　杉戸　押板　雨戸　棚　欄間）

大抵。書院といふものゝ造りは。梁間を長くし。明障子を用ひて。蔀格子を用ひ。敷居。鴨居にしてみな遣戸なり。こはもと學生をつどへて。書を讀ましむべき爲の造方なれば。かたの如くつくり設けて。明きを旨としたるもの故。その廣さをいはんとては。何ッ十何ッ楹などいひし事とみえたり。然るに古代の寢殿造は。七間四面十二間四面などいひて。梁間向脊ともに齊しく。暗くして便利ならざる事ども多かりしかば。室町の末より。漸々押し移りて。此書院造といふ物を用ひられしより。さてその書院造には。書院床。床間。棚袋戸等の物ありて。寢殿造とは。大に異なる事をもあり。左に載すべし

附書院　是を書院床。また明床。明書院などもいふ。そのかみはたゞ書院とのみいへり。こはもと書籍を載せ置き。又よみかきをもせし所なれば。やがて其所をさして。書院といふとこゝろゑ。時俗の唱へ誤りしものなり。偖。是等の事。後世床の間。明床。袋戸。違棚などいふ物を便利とし。貴賤家作のさま一變せしほどの事なる故。もと其造りさま〳〵なりしことをしらむため。

造あり

鍮石門（チウシヤクモン）

鍮石門とは。其造鐵門の如くにして。金具を鍮石にしたるなり。鍮石とは眞鍮の事なり。さてこの造は。神社などにのみあり。常人の家には稀の事ながら。武家に用ひたる事どもあれば。こゝに出だせり。後世中爵。中雀。中尺等の字を書きて。別に造方ある如くいふは誤にや

石疊（イシダヽミ）

石疊また甃（イシダヽミ）の字を用ふ。大抵門に屋根ある所は。石疊。石階あり。玄關といふもの出來て後は。門より玄關の道。また玄關の前。石疊を用ふる事となれり。石疊の名ある事も。古き世よりの事なり。金葉集に

俊頼朝臣

名にしればゝ身もひねぬべし石だゝみ
かたしく袖にころもかさねよ

礎（イミズヱ）

上古の家居には礎なし。奈良の都の頃よりはじまるよしかけるものあれども。正史には詳ならず。藻鹽草に載せたる古歌

すみれさく奈良の都の跡とては
いしずゑのみぞかたみなりける

書院

書院の名。古き書には見る所なし。秋の夜長物語。太平記等に見えたるなどや。始なるべき。安齋翁の秋草に。今時武家にて。客人に對面するところを書院といふ。古代は。大家には主殿といひ。又客殿といふ。小家には出居といふ。いづれも對面所なり。元來書院とは。寺院にて佛書を講ずる所にて。俗家にはなき事なりと見えたれども。書院はもと僧家にのみ限れる名にあらず。宋の時。應天府の民曹誠といふ者。舍を廣むる事。百五十楹。書を聚むる事千餘卷。廣く學者をつどへて講習せしかば。眞宗是を嘉し。名を賜はりて。應天府の書院といひ。また開寶中に。潭の守朱洞といひける人。嶽麓といふ所に於いて。書院をいとなみ。是また勅ありて。名を賜はり。又元和年中衡州の李寛といふ人。石鼓といふ所にて。書院を創め。後世是に廬山の白鹿洞を加へて。天下四書院といへり。是等書院といふ事の始なり。しかるに皇朝にては。中古以來學問の筋。多く

人繪傳に。櫓門の圖あり。左に繪圖を出だせり。應仁頃までも。櫓門は有りし事にや。應仁記にもこの名みえたり

木戸門(キドモン)

木戸は。もと城戸より轉じたる名なるべし。其制戰國の頃。外郭の門々。大抵木戸にて。透すは今と大に異ならず。扉を格子にして。透すは敵を通じ。矢砲をはなちいだすべき爲なりといへり。又兵家の傳に。扉の合せ目をいさゝかすかして。槍の突き出ださゝるほどあけれくが。城築の故實なりといへり。又件の扉へ小さき潜戸(クヾリト)を設け。是を鼠木戸といふ。鼠木戸の名は。太平記などにも見えたり

簀戸門(ストモン)

簀戸は。扉へ竹簀(タケス)を打ち付けて。外をすかし見るなり。兵家に木戸門を簀戸門ともいふ。しかれども相混ずるはあやまりなり

鐵門(クロガネモン)

鐵門とは。扉へ鐵の筋鐵を渡し。角鐵具などしたる造方をいふ。今時も武家の門々には此

多くは廣さ四坪の間。五坪の間といふ事。上の間よりかぞへて。第四にあたる間の事にはあらず。されば此四間も主殿の内など補理ひ分けたる四坪の間といふこととなるべし。但。節用集等の書に。餘間或は餘間の出居などいふ事みえたれば。しつらひなどせざる明間をさして。餘間といふにや。猶。間補理の條下と併せ考ふべし

出居　餘間の出居

出居は今時の對面所といふ程の所なり。中昔以來。武家の住居には。必。此名あり。しかれども堂上の家々にもなきにはあらず。古くは柏木の卷に。大殿にやがて參り給へれば。公達あまた物し給ひて。こなたに入らせ給へとあれば。おとゞの御いでゐのかたに入り給へりなどみえたる類なり。武家には。常ある事なり。東鑑。建仁三年の條に。廷尉(能員をさす)云々。入二總門一昇二廊沓脫一。通二妻戶一擬レ參二北面一。中略遠州出二於出居一見レ之給ふなどみえたるも。對面所のさまなり。餘間の出居とは。別間のうちの小座敷などいふほどの名と聞えたり

大床

大床は。廣廂の別稱なれども。武士の家居にては。廣廂といはず。大床とかける事ども多し

藥醫門

鎌倉御殿繪圖。京都將軍御館繪圖。ともに藥醫門あり。或は役居門ともしるせり。武家雛形に圖あれども。其名の由りて起るところを詳にせず

拎門

拎門の名。またく右にれなじ

櫓門

櫓門は城寨の物なれども。武士の家の門に。平常ともに櫓をあげれく事あり。但そのかみ櫓といひしは。板を並べたるのみにて。其造り極めて麁なるものなり。鬼一法眼が堀川の宿所などは。四方に櫓をあげ置きたるよし義經記にみゆ。又一遍上

小侍(コサフラヒ)と稱する所あり。こは內侍のうちの小名なり東鑑等に見ゆ

武者所

武者所は。右大將家鎌倉に於いて。始めて武者所の別當を置かる。しかれどもこは職掌を命ぜられたるにて。別に一箇の役所を設けられたるには非ず

公文所(クモンジョ)

公文所も。右大將の時。鎌倉においてはじめて是を設けられ。京都の記錄所に准ぜられ。もろ〳〵の訴訟を裁斷せらるゝ役所なり。猶次の條にいふべし

問註所(モンチウジョ) (門或は文ともかけり)

問註所も。また公文所の別稱なり。東鑑曰。元曆元年八月四日。被レ新ニ造公文所一。今日立レ柱上レ棟。大夫屬入道主計允等奉行也。廿八日。新造公文所被レ立レ門。安藝介大夫屬入道足立右馬允筑前三郎參集。大庭平太景能經營勸ニ酒於此衆一。同十月廿日。諸人訴論對決事相具。俊兼盛時等召ニ決之一。且令レ注ニ其詞一。可レ申ニ沙汰一之由。被レ仰ニ大夫入道善信一云々。仍就ニ御亭東面(ヒガシオモテ)廂二箇間一。爲ニ其所一號ニ問註所一。打額云々。問註所の名爰にはじめて見えたり。後是を評定所ともいひし事なり

評定所

鎌倉年中行事に云。御評定之所は十五間。中は油磨(アブラミガキ)紫緣(ムラサキベリ)の御疊。中略 面は皆御格子の間にて。障子を立てらるゝなり(此障子は。衝立障子などいふなり)などみえたり

學所

東鑑曰。建曆三年。昵近祗候人中撰ニ藝能之輩一被レ結番。號ニ學所番一。各當番日不レ去ニ御學所一。令ニ參候一。面面隨時御要又者和漢古事可ニ語申一之由云々。武州被ニ奉行之一已上と見えたり。今按。そのかみ文武天皇の御時に始めて學校を設けられ。京に大學あり。國々に國學ありて。學問の道最盛なりしが。朝廷の御政。漸々衰へて。當時學問の筋は。貴賤となく僧家にのみ仰ぎ需むることゝなれり。しかるに今鎌倉において。此學所を設けられし事。一時の善政なる事は勿論。後世まで武家にて。學問を設けらるゝ事の例とさへなれるものなり

四間(ヨマ)

四間或は四間所などいふところあり。盛衰記。平家物語。義經記等にみえたり。後世四間五間(ヨマイツマ)といふは。

總じて大名の宿所を屋形と申す事。元弘。建武の頃。天下打ちつゞき亂れたる時。濃州へ行幸有りけるに。當國小島といふ所に行宮をたてられけり。定林寺殿賴貞あつかひ御申あり。世治まり。御入洛の時。之を屋形と號し。住居あるべきよし勅定にて御賜はりあり云々。然る間。土岐は殊に子細あるによりて。其後かの行宮を土岐郡へひかれ。屋形と號せらるゝなり。皇居の時のまゝ丸柱なり。修理ありて。今に至るまで遺るなり。大名の宿所を屋形といふこと是より始まりて。諸家にも申すよし申しつたへたり。當家においては。子細ある間可レ申云々。但。他家へ對して。主人を屋形と申す儀は無禮なり。三管領の者も。主人を屋形と他家へ對して申す事は。斟酌する事なり上已などもみえたり

館(タテ)　楯(タテ)

和名抄に。館唐韻に館に作る。和名多知(タテ)。一云。無知豆美(ムチツミ)、客舍也と見ゆれど。多知は必しも旅舍をいふ名にあらず。又東國にて。武士の居所を館といふ。タチ。タテ相通へばかくは呼ぶなり。一說に。大抵タテと稱するは。常の居館と異なり。館持などいふ人の館をみれば。城寨の制に近し。館の字或は楯ともかくを思へば。楯を築き置くべき程の住居といふ意にやともいへり。增補大節用に。奥羽土俗謂ニ城壘地ニ爲レ楯ともみゆ。平泉の楯。衣川の楯などいへる。即是なり

侍　內侍　外侍　遠侍　小侍

侍(サムラヒ)とは。武家にて武士の詰所をいふ名なり。前に出だせる京家の侍所とは聊異なり。さて此侍といふに。內侍(ウチサムラヒ)。外侍(トサムラヒ)。遠侍(トホサムラヒ)等の別ある事。前の武家々作の條に辨ずるが如し。さて遠侍といふも。もとは內侍。外侍といひしが。後やゝ轉じて。遠侍といふにや。保元。平治物語。盛衰記等には。外侍とかきて。トホザムラヒと假名つけたるところ／＼あり。さてこの遠侍といふは。前にも註せる如く。本家とは別棟にて。戶。建具などもなく。板敷にて。そこに詰め居る武士共の物の具など飾り置く所なり。貞丈の秋草に。今時の幕番所の如きものなりといへり。さもあるべし。義經記に。遠侍(トホサムラヒ)に究竟の若者五十人計居流れと見ゆ。大平記に。遠侍を見るに。蟬もと白くしたる青竹の旗竿ありなど見えたる是なり。又

且は新井筑後守といふ儒者勸め奉りて。堂上の故事を殘らず。關東へ移されむとの思召立あり。筑後守上京して。禁中の公事祕訣を學び來り。大奧の女中達を禁裏女官の如くし。節會の舞樂。舞姫等を始められ。大典。新典。小典三位の局を立てさせ給ひ。其外禁裏不老門を學びて。四足御門を御玄關の脇へ御造立あり。有章公までもそのまゝさしれかれしかど。有德公御世繼せ給ひて。速にかの四足門を破却すべきよし仰せ出ださる。此時いまだ御中陰の間なれば。今少し見合せ候ても然るべくやと諫め奉る人々ありしが。父祖のよろしからざる事をば。一日もはやく除き去りてこそ。孝とはいふべけれと宣ひて。遂に毀たしめ給ひぬ已上と見ゑたり。いかさま深き御尊慮ありし御事なるべし。是等武家の家作沿革の大概なり。此外。諸大名達の居所を屋敷と稱し。其從者の居る所を長屋と稱する等の事。猶以下の條々にいふべし（御車寄。四足御門等の事。白石翁の折たく柴にも見えたり。末に出せるを併せ見るべし）

御所

御所の稱は。禁裏御所。仙洞御所などいひて。尊稱なる事勿論なり。しかれども。官家の制ある稱にはあらずとみえたり。三内口訣に。御所是は大臣家以上の家執。其主人の故家(コカ)等稱レ之候。公界へ出でざる事に候云々。又云。大臣の孫以後は。於二內儀一も御所之號不レ可レ有事に候。しかりといへども。先祖の家僕申來候所故。不改儀も可有之候歟。於二關東一久我の御所。小弓の御所有レ之上は。不レ及二異論一候歟。（今按。久我は古河也。小弓又は生實(オヒミ)御所とも申しゝなり。）是にて當時までのさまをしるべし

屋形

古代は。館の字をヤカタと讀みて尊稱にはあらず。水莖の岡のやかた。旅屋形。苫屋形などいふ是なり。然るに中古以來。大臣家の第宅を屋形と稱せしゆゑ。もはら尊稱のごとくなれり。されど是も官家の制ありし事とはみゑず。室町將軍家の末より。歷々の大名達に。屋形號免許といふ事はじまりて。もはら尊稱となれり。谷川士清が說に。當時の諸大名。屋形號を許されざれば。召仕の諸士の。烏帽子。直垂。素袍等を着する事ならざる御定めありし故。人擧りて競ひ望みけるなりといへり。又土岐家聞書に。かの家の傳へをしるしていはく。當方を屋形といふ事。

といへども。時勢の轉變。必しも先蹤を蹈みがたき事。大むね皆此類の如し。東照宮いまだ江戸内大臣と聞えさせ給ひし頃。御城中の御住居よりはじめ。よろづ質朴なる御事どもにて。御内の諸大名達も。陣營にひとしき家居に住居せられしよしいひ傳へぬ。今その一二をいはんに。近くは落穗集追加に。當時の有樣を註して。御城内に柿葺(コケラブキ)とては。一箇所も是なく。日光そぎ。甲州そぎなどを以てよりぶきにし。御臺所は萱葺にて。手廣にはあれども。殊の外なる古家なり。御玄關の上り段には。古き船板の幅廣なるを。二段にかさね。外に板敷とても是なく。たゞ土間にて差し置かれしかば。本多佐渡守かくてはあまりに見苦しく御座候。他所よりの御使なども なくては叶はざる事に候へば。せめて御玄關廻り計も。御普請仰せ付けられしかるべしと申し上げられしに。其もとはいはれざる立派だてを申すと御笑ひあそばさる云々。又いはく。右御玄關の船板。久しく御とらせあそばされず。其外御殿向の御普請とても。御手輕にて是ありしかば。御家中衆の拜領屋敷共。身上不相應にても見咎むる者も無之云々などみえたるにても。其餘をれししるべし。元和以來。天下の御政務となりては。御城の内外。改めて御經營ありしかども。かたの如く。質素なる御しなしより。時勢に應じて御損益ありし事故。あながちに鎌倉。室町等の舊例に倣ひ給はず。織田家以來の制作を規とせられし事ども多しといへり。然るに文昭院殿の御治世に至り。文學の道漸く盛なりしかば。惜いかな。當時の御制度は。たゞに戰國の餘風をうけ繼き給へるのみにて。文物典章いまだ備はらずなど議し申す者ありしかば。やがて營中の諸事を。皇朝古代の遺制に返させ給はむとて。新に御車寄。四足御門等御造營あり。其餘をも追々改め作らるべきよし。その聞え大かたならざりしが。いくほどなくして。御他界ましく〵。有德院殿の御世に至りて。其事遂にやみぬといひつたへぬ。按ずるに。明君享保錄といふものに。其折の事共を註していはく。文昭公は萬事上方風を御好みあそばされ。禁裏雲上の故事共を學ばせ給ひき。近衞殿の御聟にて。近衞殿江戸へ御下向あり。愛宕下にて御屋敷をまゐらせられ。三箇年まで御逗留あり。されば近衞殿よりの御勸め。

一變して。如何とも舊例に倣ふことを得ず。儲の御所を以て。寢殿に准へ。外に四足門を建てられたるのみにて。對屋。東西廊。中門。釣殿。泉殿等の所なし。但し儲の御所は。城中なれども。檜皮葺にて。瓦屋にはあらず。御階。御車寄あり。南庭に舞臺あり。樂屋を両所に設けらるといふ。行幸は天正十三年四月十四日にて。日數五日御逗留あり。此間の御饗應善美を盡くさる。供奉の公卿殿上人。其外有功の諸將召しに應じて。參り集るもの數をしらず。其つどひ居る所の廣大なる事も。北山室町の比類にあらず。されば舊例に任せ。堂上武家相交りて。和歌の御會ありしに。夏日侍聚樂亭。同じく詠ずる和歌とて。自詠を奉る人百餘人に及べり。もし首毎に是を披講せんには。日を以て夜に繼くとも。事はつべからずとて。遂に披講の式を止めらる。時の人是を評して。神武天皇以來。未曾有のためしなりと申しき。其後寛永十三年の秋。台徳院殿。大猷院殿同時に御上洛あり。二條の御城にましまして。主上幷に中宮東福門院女院を行幸御幸なしまゐらせらる。此折の事ども。北山殿。室町殿等の舊例はさらなり。近くは聚樂の御例あれば儲の御所。四足御門等のことをはじめ。都べて前代の儀式に減ぜず。寛永行幸記とて。今猶人間に落ち散れるものあれば。こゝに洩しぬ。然るに此行幸は。長月の六日にて。同じき十日まで。御逗留の間。城中の天守といふ物叡覽あらまほしきよし御氣色あり。やがてその用意を命ぜらる。俄の事にて。筵道の設なければ。重々及び御道すがら。紅氈をしきつめにし。狭間以下御見通しになるべき所々。皆翠簾を垂れ。主上幷に中宮女院相共に成せられ。隨ひ奉る上﨟。女房雲の如く花のごとし。御眺望數刻に及ぶといふ。其後又一日を隔てゝ。ふたゝび天守へ成せらる。こは先の日。快晴といへども。遠山に雲霧たなびきて。見えがたき所々あるによるといへども。且はめづらかにあくよしなき叡慮によれるなるべし。さればそのかみ仁徳天皇の。高き屋はいかに有りけん。石壁さかしき城上の天守櫓に。玉垂をかけわたして。四極を叡覽ましましゝことも。またはた未曾有のためしといふべし。是を以て是をいはゞ。聚樂の行幸。今度の行幸。ともに舊例を探り索め給ふこと精しからざるにあらず

は各別。其餘私の手勢を卒ゐて。相從ふほどの武士は。皆己々が宿所ありて。主人々々より貸し與へて。食糧を賄ひおくものにあらず。譬へば義經記。堀川夜討の條に。こよひ何事もあらば。義經にまかせよ。侍共は宿々に歸れと宣ひければ。各宿所へぞ歸りける云々。又云。武藏坊。片岡両人は。六條なる女のもとへ行きてなし。根尾。鷲尾は堀川の宿へ行きてなし。佐藤四郎兵衛。伊勢三郎は室町なる女の許へ行きてなし。その夜は。下部に紀三太と申す者ばかりぞさぶらひけると見えたるなどにても知るべし。さればむかしの大名はかくまで手人の小勢なるもの故。寢殿。對屋。東西廊などいふ住居。一箇所だにあれど。ことかくことなかりしかど。前にいへるが如く。自國の兵士どもを殘らず家人といふものにし。城下々々へつどへ。藏米を以て養ひおく事となりし以來。從軍の諸費より先々止宿の塲所。口糧の配り方までも。悉皆主人々々より辨ずる事となりし故。おのづから主人々々の居所をも廣大に設けざる事能はざる習とはなれるものなり。されど今時在江戸諸大名の屋敷々々の如く廣大なるは。和漢いまだ其例を聞かざるほどの事にて。たゞに家屋の制。廣大になれるのみにあらず。應仁以來。漸を以て國體の變改せるが致す所なり。しかるに。世の古實を談ずるもの。多くは古を是とし。今を非とし。時勢の沿革を詳にせず。稍もすれば。古代の家作は約にして規律あり。今はたゞ廣大にして制なきに似たりなど。嗟嘆する者あり。故に今聊其然る所以。一朝一夕の事にあらざるを辨じおくなり。公家。武家沿革の事は。余が爲政雜談といふ物に委しく註したれば。こゝにはその大概をいふなり さて豐臣家海内一統の後。專ら絕えたるを繼ぎ。廢れたるを興さむの御心あり。まづ聚樂の新城を營みて。行幸を催し給ふ。是によりて應永十五年。北山殿への行幸。永享九年室町殿への行幸等。夫々の記錄によりて。舊儀を探索せらる。殿内の補理をはじめ。鳳輦。牛車等の品々。年久しく絕えて見知り。聞き覺えたる老人だになかりしかば。攝家。華族の御傳説どもを尋ねとはせ給ふに。是又區々にして一定せず。德善院玄以法印。大閤の仰を承りて。諸家の舊記を拾ひ。又は當時有職の聞えある人々と相はかりて。儲（マウケ）の御所を營む。しかれども前に註せる如く。此時既に公家武家の人員居所

の兵ある世となりては。主人に立ち添ふて腹心謀士となり。又手足に代りて。諸卒を指麾するものは。皆以て家人の内より撰び使ふことにて。土着の武士共は。たゞ戰卒にのみかゞり出だされ。一大事の軍評定にだに預る事あたはざる故。諸國の武士ども。擧て大名の家人たらんことを競ひ望み。先祖代々の功作を以て。名田など賜はりし者も。皆其國主々々より本領安堵のしるしを申し請ひて。家人に列せしなり。しかれども舊來の住所を離れず。田地をも前々の如く耕作する間は。已にすら家人と國侍との差別を辨へざるほどの事なりしが。織田家の兵勢。漸く盛なりしころより。豊臣太閤御治世の間。海内の諸大名十に八九は。累代の領國を移し替へられ。新古の家人共を引き具して移り住せられ。其武士共をば皆以て城下々々へまとめおきて。百姓に混ぜず。いづれも舊來の家人並に藏米を以て扶助せられ。土地を割き與へらるゝは。極めて稀なることゝはなれり。偖その土地を割き與へらるゝ家人といふも。知行を地方にて賜はるといふのみにて。土地付の武士にせられたるにはあらず。いづくまでも主人々々に附き從ふべき家人なれば。古代の武士とは。大に異樣なるものなり。爰に至りて一天下の間。土着の武士といふことは。地を拂ひてなく。總じて武士と稱するほどのものは。皆以て公私の家人にあらずといふことなきに至れり。是皇朝國體の大なる變革なり。されば中昔の大名といふは。數十萬騎の大將といへども。手人の數とてはさばかりの事にあらず。たとへば新田義貞義兵を起して。本國を打ちたち給ひし時は。兄弟一族合せて百五十騎に過ぎず。其鎌倉を攻め給ふに及びては。總勢六千萬七千餘騎ありしよし當時の記録どもにみえたり。是を以て是をおもふに。古代の大名は。從軍に定數なし。今時の御大名衆の如きは。五百騎の將は。いつも〳〵五百騎。千騎の將は。いつも〳〵千騎を貯へ置かるゝ事にて。治亂には拘らず。是又國侍と手人との差別なり。さてそのかみ國侍共の軍にしたがふといふは。皆國役にて。國郡の總力を以て。用度を辨ずる事ゆゑ。領主々々の手人にあらざる限りは。其軍に從ふの諸費等。主人々々の府庫より辨ずる物にあらず。また先々止宿の塲所。及び食料の諸品なども。主人々々の手人

の者にて。耕作を業とし。何れの國。何れの郡。何れの住人と稱し。農民の總人高にかぞへ。年貢諸役をつとめし事。今時の百姓と異なることなし。但し事ありて。軍役に召し仕ふときは。年貢諸役をゆるして。兵士の業を專につとめさせし事なり。その委しきことは。田令。軍防令等を見て明らむべし。さてその國々の武士ども勳功あれば。名田(ミヤウデン)を賜はりて。賞譽せらるゝこともゆゑ。名田を多く所持する者をさして。小名といひしものなり。さてかたのごとく。名田を賜はるものは。たゞ田地を賜はるのみにあらず。其土地の内に百姓も武士もありて。耕作を勤むるゆゑ。事ある折は。其武士どもを引き擧げて。手勢に召し具し。無事平安の時とても。その武士どもの内より領主々々の宿所へ在番せさせ。非常の警衛に備へ置きし事なり。しかれども。件の武士共は。元來土着の者にて。領主々々の家に附きたる家人とは違ふこともゆゑ。家附の家人どもは宅中へ置きて日用の雜事に召し仕ひ。在番の武士は。宅中へだにれかず。別に一棟の番所を構へ。武器兵具を備へて。不虞をまつのみの事なり。此内外の番所をさして。

内侍(ウチサムラヒ)。外侍(トサムラヒ)。遠侍(トホサムラヒ)など稱す。是いはゆる御内(ミウチ)外樣(トザマ)の差別なり。さてまた右のごとく。國侍を疎遠に取り扱ふこと。武士は元來土地着の者にて。其地に在る間こそ主從なれども。もし其領地を召し替へらるゝ事などあれば。舊主は家人ばかりを具して。他へ移り。武士共は殘りとゞまりて。新主へ仕ふる事。又々かたの如くなるべきはづのものなる故なり。さてまた右家人といふは。家子(イヘノコ)。郎等(ラウドウ)もしくは譜代の從者にて。主人々々家附の者共なれば。私の田地とてはもたず。また主人々々への勤も多端にて。みづから耕作するいとまなき事故。主家の納米の内より分け與へて。是を養ひおく事。今時の藏米渡りと異なることなし。是國侍と家人との差別なり。然るに應仁の大亂起り。天下の大名小名各國々へ引き籠り。割據の勢をなしゝ以來。家人は世を追うて尊く。國侍は追うて微々なるものとなれり。その故いかにとなれば。元來土地付の武士は。公民にて國司直支配の者。家人は又者にて。國司の名籍にも載せられざるものにて。武士は尊く。家人は卑しかるべきはづのものなれども。郡縣の制。漸く廢れ。國々自家

高位貴人を請待する折にあらざれば。上疊を設けず。又翠簾を略せしが。今の世までの習俗とはなれるものなり

疊

疊の事。大抵。右にいへるが如し。しかるに是をタゝミとしもいふこと。上古は後世の如く。厚く作りたる物に非ず。常にたゝみおきて。客人などある折々取り出でゝしくもの故。此名ありと見えたり。古事記に。皮疊。菅疊。絁疊。八重絹疊。日本記に八重席薦。萬葉に。虎といふ神の皮疊。薦疊。八重疊。延喜式に。編疊などいふ事見ゆ。敷皮。敷ぶとん。しとね。圓座。莞莚。半疊。薄縁などいふ類をも。すべて是をタゝミといひしと見えたり。然るに敷物はすべてあつきを以てよしとする事故。いつとなく世を追ふて。今時のさまになれる物なるべし。されば今とても。莞莚。薄縁などは莞莚たゝみ。薄縁たゝみといふ事にて。古とは名を異にするのみのものなり。枕草子に。御座といふ疊のさまして。高麗などいと淸らかなりとかけるをおもふに。彼時代までも。莞莚を疊と云ひし事知るべし。さればそのかみは。主客の尊卑により。厚簿又は一重二重等時々に見計ひて座設したるが。やがて後世の作法となれるものなり。奉公覺悟記に。主人の御前にて。疊を敷く事。たゝみ一疊を二人して。兩方のはしをとりて。疊のうらを主人に見せ申さぬやうにして敷くべし。又御成の時。御座（御上座をいふ）を立候事も。二人しての役なり。其時も主人にうらを見せ申さぬ事なりなど見えて。室町頃に至りてはかゝる類の事多し

武家家作

古代堂上家。武家の家作一樣ならざるいはれは。前に辨ずるがごとし。しかるに。中頃相混じて。堂上。武家の差引なきがごとし。應仁の大亂以來。又々一變し。今に至りては。堂上家の家作と。武家の家作と。大小廣狹。大に相似ず。今時江戸諸大名の居所を屋敷と稱し。二箇所。三箇所。賜はらざるはなく。又その諸大名の城下々々に於ても。執政重臣の居る所々は。そのかみの武士の居所と異なり。人或はそのしかるいはれを詳にせず。たゞ世の亂につれて。古制を失ふとのみおもへり。故に今聊其由りて起るところを辨ずべし。總じて古代の武士は。皆土地付

座なりとは。右の廿間とても。常々わけおかるゝにはあらず。時に臨みて補理はるゝ御座敷なりといふ事なり。是等の類も。兼ねて心得おかざればおもひまどふ事故。繰言ながら辨じおくなり

補理(シツラヒ)

中古以來。もろ〳〵の記錄草子ともに。諸家大禮など行はるゝ度々。必。補理といふ事あり。たとへば寢殿の母屋に。一間をしつらふ。又は廣廂の東に二間をしつらふなどいふは。柱と柱との間をかたとり。東向にも西向にも座をまうけ。うしろをば屛風をめぐらして。是をいひ。前へ翠簾(アヲスダレ)をたるゝなり。其座をまうくるとは。いはゆる上疊を。一枚も二枚もしき。女性なれば。几帳などをも設けおくなり。枕草子。泊瀬詣の事しるせるところに。日のくるゝにまうづるは。こもる人なめり。小法師ばらのもたぐべくもあらぬ屛風などの高き。いとよく進退し。疊などほうとたておくとみれば。たゞ局(ツボネ)いできて。狗(イヌ)ふせぎ。ますだれをさら〳〵とかくるさまなどぞ。いみじくしつけたるは。やすげなり。已上なと見ゆ。こは女性の堂中に。通夜せむとするゆゑ。小法師ばらの。頓に其補理するさまをかけるなり。類聚雜要抄等に。補理の圖さま〴〵見えたり。偕又室町頃の代となりては。御所及び諸大名達にて。大禮等行はるゝ時は。主殿會所等の內を幾仕切にも仕切分けて。其仕切の內。三坪あれば三間の御座敷。四坪あれば四間の御座敷などいひて。人數の多少を見計らひ。廣くも狹くも仕切わけて。補理する事故。兼ねて補理奉行といふ役義を命じおき。座每の補理を司らしめられしなり。當時の文書に。失禮(シツライ)奉行と書きたる事どもあるは。補理の二字をこゝろえ誤れる僻事なり。さてまた其頃の補理は。中古以來。堂上家の補理とも聊づゝ異同あり。三好亭御成之記に。屛風は必松竹の金屛風立つ云々と見ゆれど。そのかみはかならずしかありしとは見えず。又云。屛風は人の物着用の如くに立つる上座は。人の物着る如く。それより下座は。上座の屛風の下にかさなるやうに立つるなりなどみゆ。是等　客人大勢にて。幾仕切にも仕切に時のさまなり。後世諸大名の家々書院造といふものになりても。舞樂申樂など。興行する時は。必。此形の補理あり。されど敷詰の疊ある事ゆゑ。

ふ事の始なりといへり。尤もさもあるべきなり されば寢殿。對の屋。客殿。書院。出居の類。すべて客人を通すべきところは座敷に非ずといふ事なし。是後世客座敷。廣座敷等の名のよりて起るところなり

間

間といふにさまぐ／＼あり。古代多くは柱と柱との間をさして間といひ。それを一間二間といへり。後世は柱にかゝはらず。一圍の所をさして御座の間。御次の間などいふ事となれり。又幾ケンと唱へて。町間の間數といふ事あり。たとへば七間四面の寢殿。十二間の廐などいへば。町間の間數にて。極めてまぎらはし。故に東鑑の頃より。柱と柱との間の事をば。幾箇間と箇の字を加へて。書き分けたる事どもあり。然れども母屋廂の廻りならでは。一間毎に柱ある物にもあらねば。常の有無にかゝはらず。坪割にして。一坪の所をも間とかける事ともあり。故に五間四面の母屋の内へ七間を補理ふなどいふ類も。常の事なり。さてまた室町時代の記録どもに。三間の御座敷。四間の御座敷など書きたる事とも多し。是等も三坪の補理。四坪の補理といふ事にて。今ならば三間は二間九尺にて。六疊敷の座敷。四間は二間四方にて。八疊敷の座敷といふほどの事なり。然れども前にいへる如く。そのかみは總板敷にて。疊あれども敷詰にあらざれば。幾疊敷とはいふべくもあらず。故に右のごとく間とのみ唱へたるなり。今時の人は。舊き記録どもに。九間の御座敷。十間の御座敷など記せるを見て。後世の書院造のごとく。九間は上の間より第九に當る間。十間は第十に當る間と心得る故。稍もすれば。其間數の多きをうたがふ事あり。よく／＼心得おきて見分くべきなり。但そのかみとても。一仕切の内をさして一間といふ事も絶えてなき事にはあらず。譬へば鎌倉年中行事に。新造御所の事をしるして。勝光院殿樣の御代には。七十間なり。長春院殿樣御代には。二十間になされ。坪を廣げらる。二十間は臨時の御座なりなどあるは。御所の總坪數をいふにはあらず。先々御代には。大小名總出仕の時。御主殿并に御會所等の内を補理ひわけて。詰所とせられし場所々々。すべて七十仕切ありしが。先御代には。それを廿間に合せて。仕切の内の坪數を増れしといふ事なり。廿間は臨時の御

楣 和名抄に。門戸上横梁也と見ゆ

楣 和名砂に。門楣横梁也と見ゆ。又功程式を引きて。鼠走といへり。此名猶ふるき物どもにも見えたり

閾 和名抄に。門限也。和名之岐美。俗云度之岐美と見ゆ。枕草子に。かどのかぎりを高く作りける人も聞ゆるはど書きたる是なり。然るに中昔以來。車の出入あるところは。大抵。門限は取り置きにせしと見えたり。稍後の事ながら。室町の時。諸大名御成被申入記といふものに。御門に。石のなき事は。御車の時しきゐをのけらるべき爲にて候などいふ事も見えたり

棖 一書に云。門柱多くは丸木にして。扇をつけがたし。故に傍に扁柱を立て。是を棖といふ。口旁の輔車に似たり。故に俗是を頰立といふといへり。但。頰立の名は。いたく後の世の俗稱に非ず。保元物語に。鎭西八郎の敵を射たる矢門のほうだてにとゝまるなどかける事あり

座　座敷

古代座といひ。座敷といひしは。人の座すべき所へ。敷物をしきまうくる事にて。今時の如く。一圜の所をいふ名にあらず。總じて古代の殿舍は。總板敷にて。主客の座すべきところ〴〵にのみ。時に臨みて敷物を設けし事なれば。古き物語どもにおましをしく。御座をしくなどかける事多し。こは疊圓座など敷き設くるをいふなり。古書に。主客相對したる所のみ疊ありて。其餘。皆板敷なる圖どももあるは。即是なり。鎌倉年中行事に。御評定所は。十五間中は油磨紫緣の御疊廻り敷にて。衆中の座は。一重外に半疊あり。御座は常の御座を紫緣の御疊の上にかさねてしかるなりなどあるにても。其さまをしるべし。稍後の事ながら。三內口訣に。公卿座は。四疊敷なり。淸華御所の公卿座は。六疊なりなどあるも。主客の座。幾疊をしくべき廣さといふ事にて。敷詰にしたる疊の數にはあらず。然るを上下おしなべてしきつめにする事となれるは。應仁の大亂以來。漸々にれし移りし習俗なり。然れども貴人高位を請待するには。かの敷詰の上へ。又別に座を敷き設くる事故。後世には是を上疊としもいふ事なり。永祿四年三好亭御成の記に。敷詰の上へ上疊を敷きたるさま見えたり。又一說に。神代記に。海神彦火火出見尊を敬ひ。八重の席薦をしくさあるけ。上疊さい

上東門を評したるなり。常人の家なれば。ツチモンと唱へ來れり。承久記に。京極表はむな門平門にて。小門なり。京極表の門をばさゝせ。高辻表の土御門ばかりとざさせて。相待ちけるなど。みえたる是なり

上土門(アゲツチモン)　揚土門とも

上土門の名は。玄慧か庭訓往來。又は海人藻芥などにも見えて。やゝふるくよりのことなり。古代は屋上を少しひらきて。土をあげたる物なれば。此名

上土門圖 こハ圖光大卿繪傳ニ見ゆ此外猶あ

ありといへり。しかれども。後世は土をば上げず。一つの造方となれり。應仁記に。大名の屋造。吉良。石堂。石橋。澁川等をばまづれきて。細川。武衞。畠山。山名。一色。六角は上土門をぞ建てにけるになどしるせるを見れば。當時上土門を尊びけん事しるべし圖下に載す

平門(ヒラモン)

總じて平門といふは。屋上を少し平にしたる造方なり。古寫の雛形等にもさまざま異同あり

瓦門(カハラモン)　門戸雜　這入

瓦門とは。屋上を瓦葺にしたるをいふのみにて。別に造りかたあるにはあらず。總じて松杉の門。竹の門。槇。眞柴の門などの類。擧げてかぞへたし。又小家の門を這入といふ。古歌にも見えたり

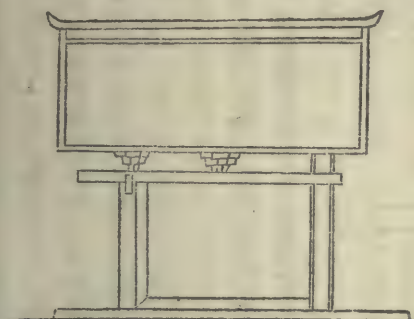
門戸具

門戸の具は。さまざまにて擧ぐるにいとまあらず。其內いさゝか左にしるしぬ

關木(クワンノキ)　宮衞令に。關者持レ門横木也。また和名抄に。俗に云。貫乃木とみゆ。今は關貫といふ。古言度佐之(トザシ)なり

四足門妻(ツマ)

四足門圖

古寫雛形に見えたれどもと工匠の書なれば返りて詳ならさるところあり兩圖を併せ考ふべし

ふる作方なれども。室町の御所をはじめ。當時大名の家々。外門は冠木門なりしよしみゆれば。もしさる類には笠木など用ひしにや。一書に云。冠木門立二四柱一。其二則閫(コシカタ)之代以止レ扉と見えて。四足にも造る事なれども。最後世の事なり

四足門

四走門の事。大臣以上の御家々ならでは。なき事のよし。海人藻芥に見えて。そのつくりかたもまたさまざま精粗あり。古き圖左に出だす四足門の事は。書中所々に註す。猶。併せ見るべし

樓門

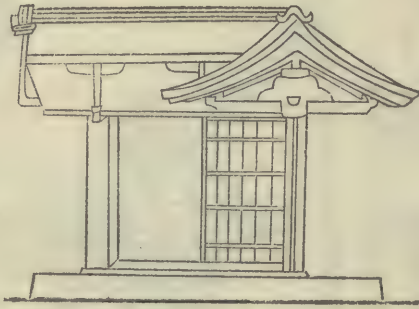
樓門は。常人の家に用ひず。豊臣家の聚樂の第には。樓門ありしよし。當時の記錄にみえたり。こは俗にいはゆる山門造の事なり

土門(ツチモン)

土門とは。左右を築地にして。屋根なき門をいふ。上東門を東(ヒガシ)の土御門(ツチミカド)といひ。上西門を西の土御門といひしも是なり。枕草子に。つちみかど中略などかこ(カヘ)とみかどのやうにあらず。此つちみかどしも上もなく作りそめけむとあるも。屋上なきをいへるにて。

韓門は。皇朝古代の制にあらず。故に此名あり。太平記に。高師直が家を棟門。韓門四方に開けなど見えたり。向韓門。平韓門などいふ。ともにから國のをうつし作れるなるべし

冠木門（カブキ）

冠木門。又衡門とかけり。衡門は詩の毛傳に。横レ木爲レ門と註し。両柱の上へ木を横たへたるまでにて。屋上なきなり。また鳥居の笠木の如く。件の横木の上へ板屋を設くるもあり。こはもと賤者の家居に用

棟門 古寫武家雛形

韓門 同上

がはしくなど見ゑたる是なり

門戸

門戸の事。古代の制詳ならざれども。大抵。唐代の制によられし事。前に辨ずるが如し。唐令に。三品以上五架三門。五品以上三門兩下。六品以下庶人不レ得レ過二一門兩下一と見ゑて。高貴の家々には。必三門あり。いはゆる總門。四足門。中門是なり。庶人の家々に至りては。一門兩下にして。是亦唐代の制にゐなじ。しかるに是等の事。世を追うて變革せしにや。海人藻芥に。家屋門戸等の事を註して。大臣家には四足門あり。上中門あり云々。又云。名家以下月卿雲客の亭の事。四足は不レ可レ有レ之。上中門は同レ前云々。又云。武士之家には。不レ造二檜皮屋一。皆板屋造也。然近年稱二將軍家渡御之在所一。各構二檜皮屋一畢。中門廊以下月卿の家に同じ。但不レ立二棟門一。皆もろ折戸也。又上土門を立つる輩少々有之云々。凡武家屋形造（ヤカタツクリ）之樣。隨二時代一隨二威勢一。其法式なき歟（已上）と見ゑたるにて。其大概を知るべし。海人藻芥は。後土御門院の長享二年に。權僧正宣守といふ人のしるしゝ書なり

總門　大門　小御門　大御門

總門は。總構の大門なり。故に大門（ダイモン）ともいふ。其造りさま〳〵あり。たとへ冠木門を以て總構の門とし。平門造を以て外門とする類なり。神社佛閣に總門造とて。別に一つの造方あり。こゝと出だせるは。其總門の事にはあらず。さて大御門。小御門といふも。別につくりかたのあるには非ず。東鑑。比企能員誅戮の條に。遠州云々。帶二弓箭一可レ儲二兩方小門一之旨。下知給。（此小門は兩中門をさすなり）廷尉（能員をいふ）入二總門一昇二廊沓脫一など見ゑたるは。即鎌倉御所の大御門。小御門なり。又成氏年中行事に。管領は大御門の並び。南の小門（ミカド）より參らるなどあるも同じ。但古くは貴人の家ならでも。大御門といへる事どもあり。枕草紙に。大みかどはさしつや云々。此頃はぬす人多かりなどかけるは。たゞ常人の家の外門をいふなり

棟門（ムナモン）（ムナカド）

棟門は。もと樓門へ對して。樓なくして常の屋棟（ヤノムネ）のごとく作れる門をいふなり。古き大工の書どもに圖あれども。異同なり

韓門　向から門　平から門

重ねたるを。きりかけといふともいへり

鰭板（ヒレイタ）　こは板屏の別名なり。東鑑。砂石集等に見えたり

透垣（スイガイ）　こは前に見えたる如く。板と板との間を聊づゝすかしたる屏なり。又板と板との間へ。竹を交へて。打ち付けたるものあり。古圖どもを見るに。その造りさまゞゝもあり。是もスキガキといふべきを。音便によぶなり

籬（マガキ）　和名抄に。末加岐。一に末世（マセ）以レ柴作レ之。言疎離也と見ゆ。末加岐は。透間ある垣をいふ。末世は間狹の義なるべし

組垣（クミガキ）　檜垣　小檜垣　あや杉　上古以來。竹木を組みて墻垣とするもの種々あり。古書に。八重の組垣。八重の韓垣などあるをはじめ。檜垣（ヒガキ）。小檜垣（コヒガキ）。綾杉（アヤスギ）などいふ類。皆組垣の名なり。韓垣は韓國の制をまねびて組むなるべし

屏（ヘイ）

和名抄に。屏。爾雅の註を引きて。小墻當二門中一也と註し。もと見かくしの事なれども。こゝにいふは。それのみにあらず。鈴虫の卷に。西のわたどのゝ前。へいのひんかしの際をれしなべて。野につくらせ給へり。又をとめの卷に。此町此中のへだてには。屏ども廊などをとかくゆきかよはしてとあり。是等築地も板屏もあるべし。かならずしも板を並べたる垣の事にはあらず

倉垣（クラガキ）

催馬樂に。此とのゝ西のくらがきといふ事みゆ。第二段にゆけどもつきず。西のくらがきやとありて。倉垣といふ事詳ならず。舊説に。倉の垣をいふとあれども。いかにかあるべき。今按。こは長く建て續けたる土藏を以て。家の圍としたるなるべし。枇杷左大臣方一町の家構の内四分の一を以て屋舍とし。其餘皆府庫建て續けて。珍寶を貯へられたりなどいふ事あれば。倉の廣大なることをいひて。此殿の富貴なるさまを祝へるなり。今時の家造にもまゝある事なり。

立蔀（タテシトミ）

立蔀は見かくし屏の類にて。蔀の如く作る。所によりてはとりおきにもする事なり。野分の卷に。ところゞゝのたてじとみすいがいなどやうのものみだり

塀の類。總べて家居の圍(カコヒ)となるものはカキにあらずといふことなし。今時。塀垣とて。二つに心得るはたがへり

築墻(ツイヂ)(ツイガキ)　和名抄に。都以加岐。また豆以比知と見えて。もと築垣といふ事なるを。音便にてツイヂ。ツイガキ。ツイガイなどよぶなり。今築地とかくはあたらず。さて今の京以來。築地の制を考ふるに。禁中の築地は。高さ五尺六尺より。一丈まであり。諸臣の家々は。高さ垣基(カキモト)三尺にて。高さはとり〳〵とみえたり。延喜左京職式に。京都町制の定を註して。大路廣十丈。自二垣半一至二溝邊一八尺。垣基三尺犬行五尺溝廣各四尺。兩溝間七丈六尺とみゆ。是公卿殿上人の家々にて。其外圍はなべて築地なりし事しるべし。枕草紙。人にあなつらるゝものといふ條に。築地のくづれとかけり。當時家居のつき〳〵しかりし事。又おしてしるべし

犬走(イヌハシリ)　古代の定。築地の外には必溝(ミゾ)あり。溝と築地との間に犬走あり。又犬行ともいふ。廣さ五尺を定制とす。前に見えたり。又新六帖に信實

崩れそふやぶれついぢの犬はしり
ふまへどころもなき我身かな

などもよめり。今時犬走は。城郭の制にのみあることの如く心得る人あれども。さにはあらず。保元物語に。犬走にいでゝ戰ふなどあるも。御所の犬走をいふなり

板垣　今時の板屏なり。蓬生の卷に。下部どもつかはしてよもぎはらはせめぐりの見ぐるしきに。板垣といふものうちかため。つくろはせ給ふなど見えたる是なり。また是を切掛(キリカケ)ともいへり。大和物語に。きりかけをせさせてとて歌あり

まがきする飛彈のたくみのたつきたと
あなかしかましなぞやよの中

とみえたり。此まがきとよめるがすなはち。板垣の事なり。
又夕顏の卷に。きりかけだつものとかけるも。板屏めく物といふはどの事なり

切掛　板垣なり。前に見えたり。一説に。板屏の内板と板との間をすかしたるを透垣(スイガイ)といふ。また板と板とのあはせめに。目板をうたず。雌羽に

などいふ類なり。又闕板とて。常ざまの一間板の如きを雌羽に重ねて。横に棧を打ちたるあり。又横竪に竹をうちつけて。石など載せおくあり。こは板屋の最麁なるものなり。高貴の家の雑舍下屋の類。平侍の家ななどにも用ふる事なり。義經記。忠信吉野の寺に火をかけ。闕板をかばと蹈み破りて。逃げ出づなどいふ事みゆ。其不堅固なる事知るべし。又小板葺。といふものあり。闕板の細やかなるやうなるものなり。中と古今と。大に異ならず。柿屋といふは。今の小羽板葺なり

一圖

こは闕板の最麁なるものなり

屋雑　苫屋　丸屋
　　　苧売葺　そぎ葺

苧売葺は。苧売を束ねて葺くなり。又日光そぎ。甲州そぎなどいひて。木を苧売の如くわりさき結び束ねて葺くなりといふ。武家々作の條下にいふ其外。萱屋。藁屋。葭葺。篠葺などさま〴〵あり。又鳥羽屋といふは。鳥の羽を覆ひたるごとくするにて。萱藁の類。何に限らず。苫をトマと訓むも。鳥羽の轉なり。また丸屋とて。稻乳の形の如く。内をうつろにして作ることあり。古代は旅舍など。今時の如く便利ならず。旅行の者みづから此丸屋を作りて。やどりし事なりといへり。拾遺集よみびとしらず

旅人の萱刈りおほひ造るてふ

またやは人をおもひわする丶

蘆の丸屋などは。常の事なり

垣墻

和名抄に。垣墻を賀岐とよみ。新撰字鏡に牆をよめり。ともにカコヒの義にて。カキのキはコヒの約言なり。舊説に限りの義と丶けるはあたらず。日本紀に。民の字をカキとよめるところあり。是も藩屛の義にて。カコヒといふことなり。されば築地塀。板

以來是を最上とせしなり。さてその檜葺の內にも。厚檜皮。薄檜皮。熨斗葺。目がくし葺等樣々あり。厚檜皮のよきは。もとよりながら。厚からずして密なるをも。薄檜皮とて賞翫する事なり。太平記。上杉。畠山流罪の條に。都にては。さしもけだかゝりし薄檜皮の屋形の。みつばよつばにつくり並べてなどみえたる是なり。しかるに薄檜皮は。針穴をよく覆はざれば。雨露の漏る憂ある故。またその穴をおほふ葺方あり。是を目隱葺といふ。即穴の事なり。今物語に。京極太政大臣宗輔公いまだ賤位にておはしましけるころ。雲居寺のほとりを過ぎ給ふとて。贍西上人の屋をふくを見給ひ。雜色をはしらせて

　ひじりの屋をば目かくしにふけ

といはせ給ひけるに。あれより小法師をはせて

　あめのしたにもりてきこゆることもあり

といはせけることとみゆ。こは目かくしを妻隱といふ事にとりなして。たはふれ給へるなり。又檜皮屋造といふは。たゞ檜皮にて。葺きたる屋をいふにあらず。雨下にて搏風を入れたる屋造をいふといへり。士岐家聞書に。室町御所の造方を注して。御主殿。會所は妻戸あり。その外は。板葺屋造なり。上下の御雜事所に至るまで。檜皮屋造破風を入るなり。御臺所ばかり板屋の破風也と見えたる是なり。舒葺は。今時もする事にて。檜の生皮を剝き。よきほどに斷ち切り打ち平めてふき。厚薄ともに同樣にて。最上の葺方なりといへり

　板屋　關板　小板葺　柿屋

板屋の造。精粗さまざまあり。槇の板屋。杉の板屋

板屋關板圖

こは古に寫粉本見えたるを抄出せるなり

ほどのものとればし。すべて陶器に藥をかけはじめたるも。此比よりの事なるべし。猶別に考あり

牡瓦（ヲカハラ）。牝瓦（メカハラ）　和名抄に。乎加波良（ヲカハラ）。女加波良（メカハラ）。こは俯仰の形によりて。名つくるところなり

花瓦（アフミカハラ）　和名抄に。阿布美加波良とみゆ。形によりて名つくる所なり

䟽瓦（ツヽミカハラ）　和名抄に。都々美加波良とみゆ。是亦かたちを以て。名つくるところなり

鵄尾（クツカタ トビノヲ シヤチホコ オニカハラ）　和名抄に。久都賀太。また是を字

棟瓦古圖

こは春日驗記伴大納言繪詞等に見えたるを抄寫するところなり

古圖

の如くトビノヲともいふ。履の形にも。又鵄の尾にも似たる故の名なるべし。屋棟の兩端。榑風の上にある大瓦なり。義經記に。東のとびの尾はやけざりけりなどあるも。此大瓦の事なり。しかるに後世さまざまのかたちを作りなす事となりて。オニカハラ。シヤチホコなどいふものも出來しかば。鵄の尾の二字を。シヤチホコ。オニカハラなどゝもよむ事となれり（今は。蚩吻鯱等の字をもよむ事なり）

檜皮屋（ヒハダヤ）　厚檜皮　熨斗葺　薄檜皮　目かくし葺

檜皮（ヒハダ）を以て屋上を葺（フク）は。古き世よりの事にて。中古

るを眞といへば。眞屋の義ならむといふによるべし。但。此說のみにては四阿（アツマヤ）の兩下（マヤ）とつゞくる義詳ならず。よて又按ずるに。對屋造の事。兩下は屋の兩端榑風ありて。角木を入れず。榑風なく。即寢殿造の事なれば。東屋のまやとは。何くれの論までもなく。寢殿の對の屋といふほどの事なり。しかれば催馬樂にうたふ雨そゝぎの歌は。寢殿より對の屋へ行かんとおもふにいでむかふる人だになくて。しかじかとよみしなるべし。寢殿對屋ともに。もと。から國の制をうつせるものながら。和語の唱なきをいぶかしくおもひたりしが。よくよくおもへば。四阿兩下（アツマヤマヤ）すなはち是なり。さて兩下のあまりといふあまりは。檐の事ながら。柱より外へあまり出でたるところをいふ名にて。漢字にあてゝは軒の字よくかなへり。字書に檐宇（マヤ）之末曰レ軒とみえたり。又四阿といはず。兩下とのみいへる例。歌には殊に多し

千載集後賴朝臣

梅がゝはおのが垣ねをあくかれて
まやのあまりにひまもとむなり

月淸集

板間もる月はよなよな影さえて
まやの軒端に木葉をぞきく

又義經記に、引き入れてまや一つありなどかける類は。たゞ二方葺卸の家といふ事にて。必しも對の屋には限らず

瓦屋（カハラヤ）

屋上に瓦を用ふる事は。聖武天皇神龜元年以來の事なり。家作の條下に詳なり しかれども。常人の家居は。大抵。檜皮葺。棟瓦のみなる多し。古代の畫卷等を見ても想像すべし

瓦（カハラ） 和名抄に。加波良燒レ泥爲レ之。蓋ニ屋宇上一とみゆ。舊說に。瓦は屋上の皮なれば。此名ありといふ。また一說に。甲冑の古名を伽和羅といふ。古事紀。下卷 日本紀 崇神紀 等にみゆ。又龜甲を伽宇羅といふも。すなはち伽和羅と。伽波羅と假字違へるは。和訓相近き故。轉じて分れたるなるべし。又按に。續紀。天平神護二年。瑠璃瓦を用ひて。新殿の屋を葺かれしかば。世に是を玉宮（タマミヤ）と稱せし事見ゆ。こは後世の青磁燒などいふ

高貴の家々。此家造なれば。此屋をさして宮殿造とも。又は御所造などもいへり。舊説に。こはもと東國の屋作を移されたる故の名にて。即ち東屋の義なりといへども。信じがたし。其故は。文武天皇以來。國家の仕置。凡べて唐代の制に倣ひ給ひ。宮殿の造方とても。もはらかの國の制を移し。唐令にいはゆる。宮殿皆四阿施ニ鴟尾一などあるをうつし造られしは論ふまでもなき事なり。しかるに東國界賤の屋造をうつされしなどいふは。據もなき妄談なり。依りて今按ずるに。加茂眞淵が催馬樂考といふ物に。あづまやのあは阿にて。字音なれば。今の京以來の名ならむとみえて。此説尤當れるに似たり。然るにかの催馬樂考は。未成の書にて。委しくもしるしおかざれば。今少しく其説を辨ずべし。まづ四阿の阿は。字書にも説々ありて。檐の事ながら。逸周書傳に。宮廟四下曰レ阿と見えて。四阿といはずとも。阿とだにいへば。屋の四方に垂れたる事なり。ツマハ屋の端の古言なれば。時俗の唱に。四方に垂れたるツマヤといふことを分知せんとて。阿ツマ屋といふまじきにあらず。すべて和名の紛らはしき物に。漢名をそへ。笙のフエ。箏のコトなどいふ類も少からず。是等になずらへて。四阿の訓義を知るべし。しかれば東屋　吾妻屋など書くは訓を借りたるにて。東海。東山等の字の義にはあらず。因にいふ。太平記劍の卷に。夫より渡邊黨の屋作には破風をたてず。四阿(アツマヤ)造(ツクリ)にするとかや見えたるなども。四阿に搏風なき一つの證とすべし。催馬樂に

　東屋のまやのあまりの雨そゝぎ　我立ちぬれぬ其戸開かせ

源氏紅葉の賀に

　人妻はあな煩はしあつまやの　まやのあまりもなれしとぞ思ふ

東屋の卷に

　さしとむにむくらやしげき東屋の　あまり程ふる雨そゝぎかな

是等皆此四阿をよめる物なり

　雨下(マヤ)

和名抄に。唐令を引きて。五品以上三門雨下。和名萬夜と見え。是も眞淵が説に。屋の前後に垂れたるなり。左右手を眞手(マテ)といふごとく。物二の備はりた

り。故に蘆蕹の字を用ひ。又棧板とて。板をも用ふる事なり

榑風 韓榑風 千鳥榑風 障泥榑風 柧格子 柧戸

屋脊の兩端山形をなす所をさして。榑風といふ。彫物などあるをから榑風といふ。さて其山形の内をかくのごとく格子にしたるを。柧格子といふ。また柧戸ともいへり。もとは此格子を遣戸にしたるをのみ柧戸と分けよびしなるべし。土岐家聞書に。御主殿にから榑風沓脱あり。又御主殿。御會所の屋は柧戸ありなどみゆ。併せ考ふべし

古圖

障泥榑風　千鳥榑風

懸魚 六葉

和名抄に。屋脊桁の端に懸くる板の名なりと注して。懸屋脊の兩端山形をなす所に。かくの如く桁のはしを覆ふなり。懸魚和名なし。からざまを寫し作れるものなるべし。又按。懸魚の古圖に。かくの如き物を彫れる圖多し。今時は是を六葉と唱へて。何物なる事を詳にせず。おもふにこは菱の葉にて。風俗通に。菱藻は水中物以厭二火災一也といへるものなり

箱棟

箱棟は。屋棟を鞍箱形にして覆ふなり。造方精粗さま〴〵あり。古書にみえたり

鬼板

鬼板は。棟の兩端鬼瓦あるべき所へかくの如く。板にておほふなり。是又古書に種々の形あり。

四阿

和名抄に。唐令を引きて。宮殿皆四阿。和名阿豆萬夜と見ゆ。阿は簷の事にて。四隅へ角木を亘し。榑風をいれず。檜皮を葺き卸にしたる造方なり。是を東屋造といふ。然るに。古代は内裏の諸殿をはじめ。

下屋

箒木の巻に。源氏のれはしまさむとて。家の女どもをば。下屋におろすなどいふ事もみえて。寄合居風呂などあるほどのところなり。假文字には雑舍をも。しもやとかける例多し

厠　小便所　西淨

釋名云。厠或謂二之圊一。言至穢處宜三常修治使二潔淸一也とみえ。舊記に。是をカハヤいふは。上古質朴の世至穢を嫌ひ。川の流にそひて。一屋を設けしゆゑ。此名ありといへり。三好義長朝臣亭御成の記といふ物に。御西淨（厠の別稱なり）新造二御小便所一。御湯殿いづれも同前。御掛莚あり。緒太置之。御西淨之內に棚あり。其れにれく紙奈良紙也。石を杉原にて包みて。紙鎭におくなり。桶杓あり。御手水をも桶にて置く。同じく杓いづれも黒塗にて蒔繪あり。などみえたり

樓閣

和名抄に。樓を太加刀乃と出だし。閣をも舊くよりタカトノとよめり。古代は常制なし。此名。歌には多くみえたれども。其造作等詳ならず。菅文時が上書の內。高堂連閣。貴賤共壯二其居一といへる即是なり

倉庫　久良雑

和名抄に。府庫倉廩の類を擧げて倉圜曰レ囷。萬呂久良一曰二與奈久良一。倉也。甲倉古不久良。校倉阿世久良と見ゆ。又別に。庫をあげて。豆波毛乃久良など注せり。一説に。府庫の造。大抵。內を暗くす。故に久良の稱ありといへり

屋上

屋上を屋根といふは。ヤノウへの約言にて。根は假字也。しかれども。上古以來雅言には。やとのみいへり（家屋の條。併せ見るべし）

棟梁　棟をムネといふは。山の峰に象るなり。ムとミと相通ず。梁をウツバリといふは。內張の義なりといへり

桷　和名抄に。屋四阿大椽也と注して。四方葺卸の屋に。梁より四方の隅々へ渡す木なり。角木の字をも用ふ

椽　垂木の義なり。上古千木といひしは是なり。タリの約チなればなり

棧　和名抄に。衣都利。萱屋。藁屋などを葺下地な

見えたり御厨所の下仕をみづし女といふ。別當は其つかさなり

厨(クリヤ)

和名抄に。庖屋也と見え。字鏡には。マナクリヤと訓せたり。今時の料理の間なり

炊屋(カシキヤ)　大炊司(オホヒヅカサ)　大炊殿(オホヒドノ)

炊屋は。飯を炊き出だす場所の事なれども。諸臣の家々には。なにゝよらず。煮焼をもする事にて。今時の下臺所なり。中昔の雙紙どもに。オホヒヅカサ。オホヒドノなどゝもかけり。れはひづかさのいひかしく屋とみえ。明石の巻に。おほひどのとおぼしき屋に。うつし奉るなどみえたるも是なり。大炊をオホヒといふは。大飯(オホイヒ)の義にて。もと焚き出しの場所をさしいふ名なり

釜殿(カマドノ)

釜殿は。炊屋の別稱にて。是も中昔の雙紙どもにまゝ見えたり

湯殿　湯船

湯殿の造りは。中昔以來。今と異なる事なし。垂板敷にして溝あり。湯船を居う。建武年中行事。六月十一日の條に。とのもんれう御湯まゐらす。御船にとるなり。めすほどにうめたりとみえ。又御湯かたびら。御手水の粉。一かはらけなどゝもしるさせ給へれば。高貴の家々とても。さして異なる事なしとみえたり

湯殿上

湯殿の上(ウヘ)といふは。湯殿つゞきにある。一間の名なり。大内のは御湯殿よりは。少し引きはなれて。女房達の勤仕せらるゝ所なり。御湯殿の上の記とて。後柏原。後奈良院の頃より。慶長頃迄の女房達の日記。今猶寫し傳ふるものどもあり。高貴の家々かならず此一間あり。永享九年行幸記に。室町御所御湯の殿うへの御調度どもをしるして。御硯。御火鉢。御茶湯棚金の御建盞。銀臺。御茶器。御茶筅。象牙御茶杓。銀の御鶏飼茶碗。御食籠一對 中略 御はんさふ。手洗島わりこ。作り物折。御杯の臺などしるされたるにても。その一間のさま押し知るべし

雜舍(ザフシヤ)

雜舍下屋とて。主殿のうしろに、大抵。二棟づゝあり。雜舍は。雑物を置き。雜事を取り行ふ所なり。今時の勝手方なり

會所の名。古くは聞き及ばす。こは主殿。對ノ屋等をはなれて。別に設る所なり。三内口訣に。會所は押板書院(この書院は明る床なといふ)等。常のごとし。庭あり。或は池あり。座敷の便りに隨ふべし。已上又云。主殿。會所。山莊等は。皆角木をかけ。狐戸を入る(此狐戸は。狐格子を云)ふとありて。人あまた集會すべき料に設くるところなり。東鑑。愚管抄等にもまゝみえたり。又諸大名衆御成申入記(室町頃の記なり)といふものに。會所への入御の事。御馬御覽せられ。則會所へ御成なり。御着座なりなどもみえたり

車舍(クルマヤドリ)

車舍は。中門の外にあり。車にて來る客人あれば。牛をはづして。車を引き入れ置く所也。此方の車をも。常にひきいれ置く所なりといふ。輿舍に同じ

輿舍(コシヤドリ)

北山殿行幸記に。寢殿南面七箇間垂二母屋ノ御簾一。卷二廂御簾一。階間修理職儲二御輿寄一。掃部寮敷二筵道一。兩面等。中間南腋儲二御輿舍一。官方沙二汰之一など見えたる是なり

臺盤所(ダイバンドコロ)

臺盤所は。膳部といふほどの名にて。臺盤所といへば。膳部を取り調ふる場所の事なり。禁中にて臺盤所といふは。女房達の食事所にて。御膳所の事にはあらず。然れども。臣下の家々にては。主人食料の膳部を仕出す所とす。こは大抵。婦人女子の司る事故。大臣。大將の北の方をさして。御臺盤所(ミダイバンドコロ)と稱し又御臺所とも申す事なり。猶次の條併せ見るべし

臺所(ダイドコロ)　上臺所　下臺所　小臺所　御厨所(ミクリヤドコロ)　膳所

食物を製し出だすところを臺所といふも。臺即ち臺盤の義なり。故に後々は臺盤所をさして。上臺所。また小臺所など稱せし事をも見えたり。東鑑に。鎌倉御臺の內。上臺所。下臺所。また御小臺所などいふ事みえたる是なり。室町頃諸大名の家々までも。皆此の稱あり。海人藻芥に。御厨所(ミクリヤドコロ)とは。內裏。仙洞の外。諸官には不レ可レ申云々。又云。常の貴き所には。臺所と稱レ之。又膳所と稱レ之歟。臺盤所と申すところは。內裏。仙洞。執柄家有レ之。又內裏の御厨所を臺所とも可レ申にや。臺所の別當とて。中臈の女房の中に然るべき仁體を撰びて。此職に補せらる。別當の局と號するは。臺所の別當の事なりなども

しかれども屋根なきをもて。式とするにはあらざるよし。伶家の書にみえたり。室町將軍以來。武家には申樂をのみ。多く用ひらるゝ事となりて。おのづから舞臺樂屋ともに兼ねて造りおく事とはなれり。當時諸大名の家々。皆舞臺あり。こは申樂の舞臺にて、皆屋根あり。雅樂の舞臺と。申樂の舞臺とは。其制大に異なり。各其伎を業とする家々に。傳授ある事なりといへり

切立（キツダテ）

切立とは。松を切りて舞臺と。樂屋との間に立つるなり。こは元來舞臺には限らず。東鑑に。御所の北の御壺に。切立（キツダテ）を搆へらる。皆松を用ひらるなどみえ。また北山殿行幸記に。樂屋の前には。切立の松四本に。藤の造花をそへらるゝよしなども見えたり

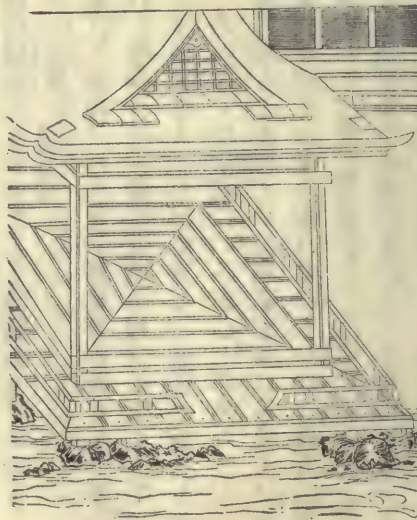
鞠塲（マリバ）　鞠（マリノ）庭（ニハ）　遊の庭　鞠の壷　鞠の掛り　掛りの壷

鞠塲は。中古以來高貴の家々には必あり。鞠の庭。遊の庭。鞠の壺。鞠の掛り。掛りの坪など。蹴鞠の塲所をいふなり。こはそのかみ。大織冠鎌足公。天智天皇に獲られ奉り。天が下を平治し給ひし事。蹴鞠より事起れるいはれを以て。藤原氏の人々。此伎を尊び。家々必蹴鞠の坪あり。後やゝ諸家にも此伎を尊崇し給ふといふ。鎌倉以來。將軍家の御所々々にも。皆此御坪なきはあらず。行幸御幸の毎度。必此伎を叡覽あり。武家の人々といへども。この御坪の内へ入るには。刀劍を帶ぶる事を得ざる古法なりと云ふ。今川大雙紙に。刄をさゝぬ所は。鞠の庭。風呂。貴人の御近所とみえたる是なり。其塲の作り。松楓柳櫻の植やうなどさま〴〵秘實ありといへり

茶室（チヤシツ）（チヤヤ）　數寄屋　圍

類聚國史に。畿內。幷丹波。播磨等の國々へ。茶を植ゑられし事みえ。皇國にて茶を用ひし事も。やゝ古き世よりの事なり。しかれども。其後の史にみえたるところ。多くは僧家にのみ翫びし事とおぼし。夢窓國師に至りて茶道といふ事武家へひろまり。室町將軍家代々。その業を翫び給ひしかは。高貴の家々。皆茶室あり。或は數寄屋とよび。或は圍とよぶ。いづれも末茶を點ずる所の名にて。その作り方。さま〴〵あり。其道を傳ふる家々に。深き習ひなりといふ。故にこゝに省けり

會所（クワイシヨ）

も御泉殿と稱せしところなり。古くは義經の堀川御所などにも。泉殿といふところみえたり

樂屋

前にいへるごとく。樂屋は樂を奏するところにて。池の中島にあり。こは皆時に臨みて設くる事なり。北山殿行幸記に。樂屋縵結の幔(マン)など。きら〳〵しう見えわたさるなど。記されたる是なり

舞臺

舞臺もまた時に臨みて。是を設く。多くは屋根なし。

ろこしだゝせて。さる大きなる池の中に。さしいでたれば、まことにしらぬ國に來たらんこゝちして。あはれにおもしろく。見ならはぬ女房などはおもふなる。島の入江の岩かげに。さしはせてみれば。はかなきいへのたゞずまひも。たゞ繪にかきたらむやうなり。已上などあるにても。當時のありさまをしるべし。武家の世となりても。かゝる御遊たび〱あり。さかゆく花に。（こは永德三年。室町花の御所へ行幸の時の記なり）中門の外にて。大將。次將立ちかはる。此間樂屋に亂聲（ランジャウ）を發し。樂人。龍頭鷁首の船にのり。さしよせて樂を奏す。いとおもしろくなどみえたる是なり

遣水

庭に池はなくて。たゞ遣水のみなる所あり。地勢による事なり。作庭記に。池はなくて遣水ばかりならば。南庭に野筋の如きをあらせず。それを便りに石を立つべし。又遣水の廣さは。地形の寬狹、水の多少によるべし。二三尺。四五尺。是皆用ふるところなり。家は廣大に。水も巨多ならば。六七尺にも流すべし已上など見えたり

釣殿

東西廊の南端。池に臨める所に。一屋を構へ。是を釣殿といふ。舊記に。水面へつりおろしたるごとく作る故。此名ありとも。または釣を垂るゝ料に設けおく故。此名ありともいへり。今按。宇治平等院に。釣殿觀音あり。こはもと河原左大臣の別莊ありし地にて。後陽成院の御時に至り。行宮を營みて。宇治院と號せられ。宇多法皇も。また爰を領せられ。朱雀院も此所に遊獵せさせ給ひし事など。李部の記に見ゆ。後六條左大臣。御堂關白等此所をもて山莊とし給ひ。その御子關白賴通公の時。寺となして平等院と號せらる。時に永承七年なり。件の觀音は。そのかみの釣殿へ安置するところなるよし。舊史に傳へ。また山州名跡志には。此堂はそのかみの釣殿にて。逍遙の人々釣をたれ給ひし所なるよし註したれば。釣殿はもと釣をたるゝ料なりといふ說を當れりとすべし

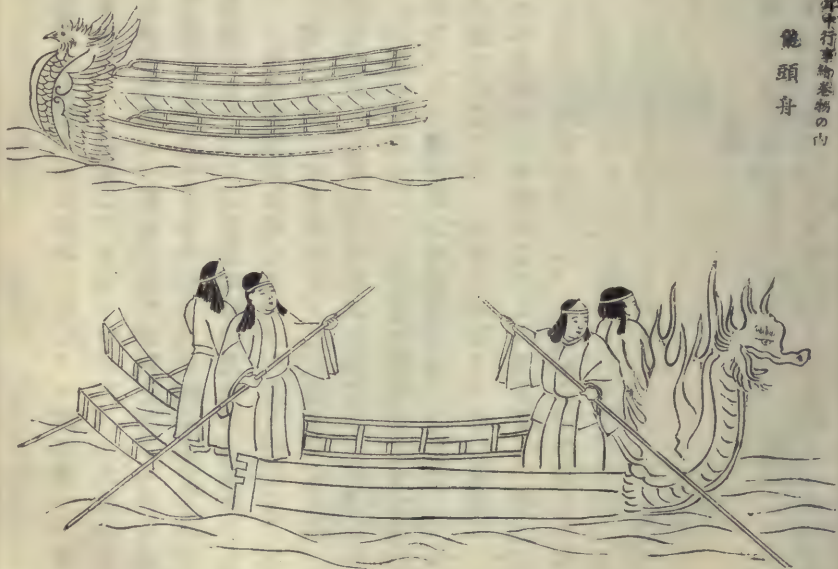
泉殿

泉殿は。必水邊にあり。四方壁なし。納涼などの爲に設くるなるべし。室町御所。小川御所などいづれ

船

歌に苔の砿。又はいはゝしの　近きなどよめる是なり。又萬葉集に。いはゝしのまゝに生ひたる貌花のとよめるは。水中へすゑたる飛石の事なり。石橋とれもひまがふべからず

池中には。かならず船あり。當時のならはし樂を奏するには。龍頭鷁首を用ひられし事なり。新古今集賀。紫式部が歌のはしがきに。若き人々さそひ出でゝ池の舟にのせて。中島の松蔭さしまはすほどなどみゆ。又狹衣に。わらはべなど池の舟に乘りて。こぎかへりあそぶを。しか〴〵などしるせるは。常ざまの小舟なり。されど儀式だつ折々は。かならず船中の樂あり。故に古代高貴の家々には。龍頭鷁首の備なき事あたはざるほどの事とみえたり。室町の行幸御幸などは。やゝ後の事ながら。每度此御あそびあり。さてこの船人は。みづらゆひたる童子。又は唐冠など着る常の事なり。そのさまは。胡蝶の卷に。東の釣殿にこなたの若き人々あつめさせたまふ。龍頭鷁首を唐のよそひにしつらひて。かぢとり棹さす。わらはべみなみづらゆひて。も

年中行事繪卷物の内
龍頭舟

て。假板敷をしきつゞくべきなり。假板敷をしく事は。島の狹き故なり。いかにも樂屋の前に。島の多くみゆべきなり。反橋の下晴の方よりみえたるは。よにわろき事なり。しかれば橋の下には。大きなる石をあまた立つるなり。又島より橋をわたす事。正しく階隱の間の中心にあつべからず。筋かへて橋の東の柱を階かくしの西の柱にあつべきなり。山を築き。野筋をしくことは。地形により。池のすがたにしたがふべきなり。又透渡殿の柱をば。みじかく切りなして。いかめしく大きなる岩のかどあるをたてしむべきなり。又釣殿の柱には。大きなる石をすゑしむ可し已上とみえ。その大概をしるべし。さてかく廣庭に。池を掘りて島をしく事も。古き世よりのならはしとみえて。萬葉集に。島とよめる歌ども。實の島にはあらで。此庭中の島をよめる事ども多し。巻六に鶯のなくわが島。又。巻廿。鴛鴦のすむ君が此島。又巻二に。御立しゝ島のなか磯をなどよめる類なり。融大臣の陸奥の鹽竈の浦をうつされしなどいふも。その最大きなるものなり。伊勢物語に。惟喬親王の御事を島好み給ふ君なりといへるも。すなはち此島の事は。御庭好はといふほどの事なり。

假山石立　假山は築山なり。又石立（イシダテ）といふ事あり。是は庭の岩組をする事なり。推古紀に。百濟の人をして。南庭に須彌山のかたちを造らしめられ。又齊明紀に。飛鳥岡本宮に。石山立を造らしめられ。また甘檮丘の東の川上及び。石上の池邊に。須彌山の形を造らせられしなどいふ事みえ。是等庭に山を築き。岩組などする事の始なり。石立といふは。やゝ後の事ながら。鎌倉右大將家の時。仁和寺の僧靜意といふもの。石立の業に巧なるを以て。鎌倉にめして。其業を命ぜられし事。東鑑。今鑑。續古事談等にみえたり

橋　右の如く。池ありて中島を設くれば。必橋あり。橋あれば必反橋にする習なり。是を石橋にするも。常の事なり。萬葉二に島のみはしにしか〳〵などよめる是なり

矼（イハヽシ）　こは石橋（イシハシ）とは別にて。庭中のはね石の事なり。

侍は。侍者の居る所にて。今時の詰所といふほどの名なり。是も古代は。必。東西廊の内に設けしなり。一說に侍所といふは。關白家にのみありしが。鎌倉右大將に至りて。始めて是を置かるゝともいへり。盛衰記に。十二間の侍とあるは。遠侍などのさまなり。東鑑に。東の侍。西の侍などあるは。東西廊の侍にて。遠侍とは異なり。熊谷直實は鎌倉を立ち退きし折の事をしるして。直實云々。西の侍へ行きて髻（モトヾリ）を切り。殿の御侍（トンサムラヒヘ）倍登利波天（リハテ）云々といひしことあり。是も即廊中の侍なり。又小侍といふことあり。其所の大小によりて。名つけしなり

隨身所（ズヰシントコロ）

大抵。廊中にあり。侍所におなじ

雜色所

隨身所。雜色所いづれも相合して。侍所ともいへり。前におなじ

庭　南庭　小庭　廣庭　中庭

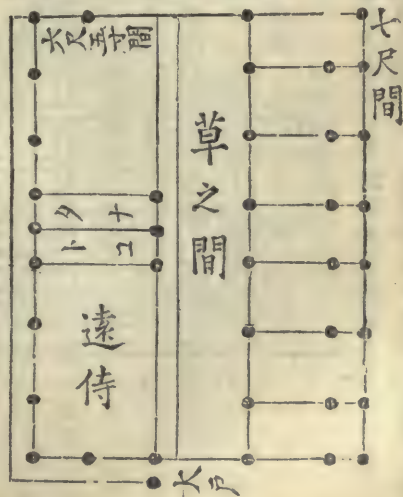
寢殿の前。東西の廊の廻する內を庭とす。小庭といひ。また中庭などよぶも是なり。其外に。假山を築き。池水を廻らし。橋をかけて往來す。是等をすべては南庭とも。また廣庭ともいふ。主人の分際によりて。廣狹さまざまなれども。その造りは奈良の都の頃より。大抵相同じとみえたり。後京極殿の作庭記に。池をほり石をたてんところには。まづ地形を見立て。たよりに隨ひて。池の姿をほり。島々を作り。池へ入る水たち。並に池のはしりを出だすべき方角を定むべきなり。南庭をおく事は。階隱（ハシカクシ）の外の柱より。池の汀に至るまで六七丈。內裏儀式ならば八九丈にも及ぶべし。拜禮の事用意あるべき故なり。但。一町の家の南面に。池をほらんには。庭を八九丈おかば。池のこゝろいくばくならざらむか。能々用意あるべし。堂社などは。四五丈も難あるべからず已上などあるにて。その大概をしるべし

池　池の事。前に見えたり

島　島とは。かの池の內に設くるところの中島をいふ。作庭記に。島をおく事は。所の有樣に隨ひ。池の寬狹によるべし。但。しかるべき所ならば。法として。島の崎を寢殿の半にあてゝ。後に樂屋あらしめん事。用意あるべし。樂屋は。七八丈に及ぶ事なれば。引き下りたる島などを置き

つくりつゞけ。或は別棟にしたるもなきにあらず。三内口訣。禁中には左右馬寮をたかれ。御馬を被レ繋。是を寮の御馬と號す。以レ之准據して。諸家面向に於いては。不レ立レ厩。武士者依レ爲レ守護一。以ニ弓馬一爲レ業。然間於ニ面向一。必立レ厩。是公武之差別也。二間三間者。諸人通法也。五間七間以上者。依ニ分圖多少一有ニ其員一。仍而細川家者十三箇國拜領。依レ之十三間之厩。規摸之由承及候なと見えたり。また厩の内に。侍とて客人の從者などをつどへおくところあり。是を遠侍ともいふ鎌倉年中行事に。管領の供をはじめとして。七間御厩の侍に集り。正印の太刀どもをば。我々が側にたてゝおく。管領其外衆中の座位のやうに供も居るべしなど。見えたり。七間厩といふことは。高貴の家々にありて。後々は正式の造り方のごとくなれり。古き厩の圖ども左に載す

厩地割圖京都將軍御所繪圖

鎌倉御殿圖といふものにも遠侍草之間などいふ所ありこはいはゆる七間厩なり

井戸屋

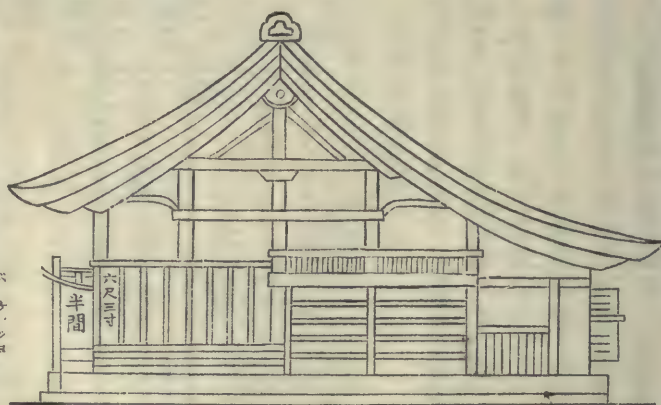
古代は。今時の如く。家々に數多くある物にはあらず。寢殿造の家には。對の屋。または小庭の内などにあり。十訓抄に。何がし大臣の事をしるして。北の對の前に井あり。下女等清涼水と名つけて。集まりて汲みけるなど見えたる是なり。是等の類。皆井戸屋とて。檜皮葺の一屋を設けおく事なり。古畫にもまゝみえたり。

侍 侍所

氏夕霧の巻に。塗籠も殊に細やかなるもの多くもあらで。かうの御から櫃。御厨子などばかり。或はこなたかなたにかきよせて。けぢかうしつらひてぞおはしける。狭衣に。よろづのものとりしたゝめ。さるべきものは塗籠にをきなどみえて。下ざまの物置なり。然れども或は是を寝所に用ひたる事どもあり。夕霧の巻に。ぬりごめにおましひとつしかせ給ひて内よりさしておほとのごもりにけりなどみえ。中昔の雙紙どもに。多く見えたり。こは寝殿の内にありて。北の塗籠。西の塗籠なとよぶなり。地下の家居には。帳臺を塗籠にして。居間にも物置にも用ひたる事ども平治物語。忠宗心變の條に。長田めをうたばやとて。金王丸と二人一人は玄光法師なり面もふらず。切つて廻り。あまたの敵切り伏せて。塗籠の口まで攻め入りけれども。美濃。尾張のならひ用心きびしき故。帳臺の構へしたゝかにこしらへたれば。力なく云々などみえたる類なり。また土庫とかきて。ヌリゴメと訓せる事どもあれども。今時の土藏とは別物なり

馬塲殿

馬塲殿の事多くは廊の内にあり。野分の巻に。うまばのおとゞ。南の釣殿などはあやふげになんとて。事行ひのゝじるなどみえたる是なり。武家の寝殿造には。かならずあり。今時の馬見所なり

廐　中昔の制。廐は多く廊の內にあり。また廊より

とは。御一家の內。一段御心易き仁たるべし。近くは細川治部少輔殿。（壽文房といふ喝食）今一人は一色兵部少輔殿此兩人うちかへ〳〵夜每に祗候にて候。女中に御しづまり候事は。御座なく候。又女中の御蚊帳は。二所に釣れ候。一は水引角ともに赤き段子。水色棹黑し。釣滅金一は梅染水引角ともに黑き繻子に棹黑し鉤赤銅またつり始め候時は。伊勢名字兩人此御役を勤め申候。近くは同苗肥前守盛種。我等每日あげおろしは。女中上﨟の御役にておろし申候時。又兩人參りておろし申候。已上又同書に。御燈火の事を註して。御寢所には御短檠にともされ候油つぎ。銅必下かはらけへ水を入るべし。御短檠の臺に。油入候手がめとらじみ以下入れ申候。已上など見えたり。また後花園帝義敎將軍の御所へ行幸の時は。寢殿の御帳臺を以。夜の御殿とせらる。御帳臺黑漆金蒔繪菊唐艸。御障子の繪桐竹に鳳凰。御帳臺の引物には。靑地金襴を用ひらる。平組の緖五筋ありて。半を褰けらる。御宿直物紅の綾御紋雲立涌裏御紋菱なり。御むしろは。金襴の緣。沈の御枕二つ。ひとつは黃紅葉の薄樣。ひとつは紅のうすやうにて。是を包む。又外に蒔繪の御枕二つ。御用意あり。御劔をば。紅の唐錦の袋に入れて備へられ。御屛風一雙たてめぐらさるなど。その折の御記にくはし

納殿（ヲサメドノ）　納戸（ナンド）

納殿。納戸はおなじ。古くはヲサメドノといひ。納戸は。やゝ後の稱なり。金銀。衣服。調度の類。何によらず納めおく所なり。禁中にては。後涼殿の內にある由なり。源氏桐壺の卷に。くらづかさ。をさめ殿に物を盡くして。いみじうせさせ給ふなどみえたる是なり。納戸といふ名は。室町將軍の頃より專見えたり。高貴の御納戸の內には。押板などありて。客人をも通さるべき構なり。三好亭御成の記に。御納戸の內に。文臺硯引合杉原の紙鎭置之など見えたり。大抵此類なり。大僧正慈圓の歌

　納殿くるゝの妻戸おしあけて　けふ七夕にかす物やなに

塗籠

塗籠は圍を壁にして。明取をつけ。妻戸ありて出入する故。塗籠とはいふなり。是も納戸類にて。衣服。調度など手近き品どもををさめおくところなり。源

て明るみへ圍ひ出だしたる一間の名と心得べし。古繪圖に放出といふ所の見ゆるも。事ある折。必。放出に用ふる場所などいふほどの所なるべし。室町以來の寢殿には。かやうのところみえず。參考のため古繪圖一圖前に出だす

障子上(シャウジアゲ)

障子上は。三内口訣に。攝關の人。内覽のうち。此所に出でらる。凡家には無レ之と見ゆ。攝政關白の人。内覽の宣旨を蒙りて。諸司の執奏を内覽し給ふ時。此障子上の内へ出座し給ふと云ふ。是も寢殿の内にて。しつらはるゝ事なり

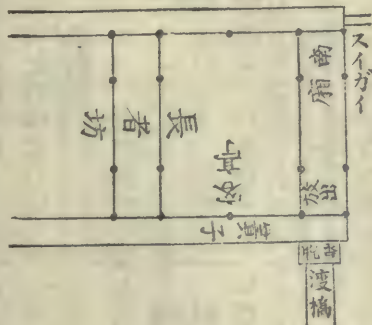
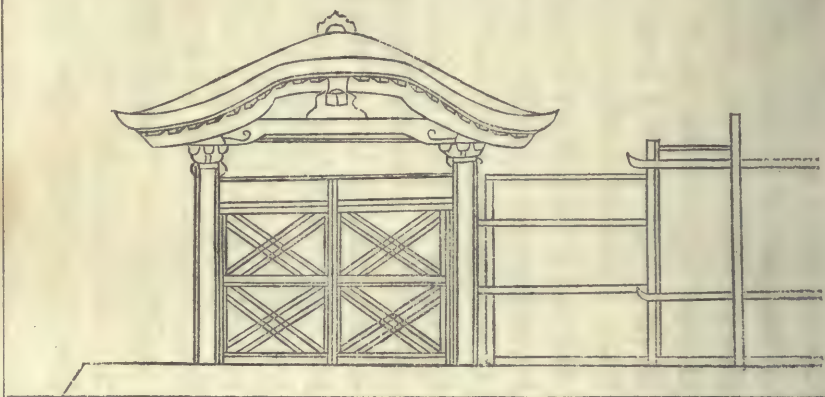
帳臺(チャウダイ)

帳臺は。寢殿の内に。帳臺構とて。一構あり。三内口訣に。主人常住安の所なりとみゆ。入口に帳を垂れ置く故。此名あり。一説に。もとは帳内なるが。稍轉じたるならんともいへり。こは禁中にもある名ながら。必しも貴人の家に限らず。中昔以來は。地下の家々にも必ありし事にて。外々の間よりは少し高く造れるも見えたり。源平盛衰記に。帳臺をさして。タカドノともかき。又他の書どもに帳臺に登るといひし事見えたり。貴人の家なるをば。御帳臺(ミチヤダイ)とよびて寢所に用ひられ。又は常の休息所にも。もちひられしことあれども。元來寢所とば別なるべきものなり。後世書院造といふものになりては。必。上段の間とて。一段高き所あり。帳臺の遺制なりといへり。しかれども。今時高貴の御家々には。上段の間の外に。御帳臺あり。上段をその遺制といふ事おぼつかなし

寢所(シンショ)

高貴の家々。臥内のさまとて。委しくしるせる事。古き物にはいまだ見及ばず。宗五大雙紙に。室町將軍の御寢所のさまを註して。公方樣の御寢所には。御座をしかれ候。(御上疊といふ)其上に御筵をしき申され候。御筵は緣繝物(ヘリオリモノ)裏に生絹のきぬ付候。表は常の筵。御とのゐもの。御小御衣(コオソ)二つ。置き申され候。御枕常の如し。黑く塗り候なり。かまち同前。一方には獏といふ獸を畫き申候。夏は薄(ウス)き小御衣一つ置き申され候。御蚊帳は水色。角水引は段子棹黑漆鈎(カギ)赤銅七つ打ち候へば。必同朋の役にてれろし申候。夏冬ともに。御部屋衆一人づゝ毎夜御側に祗候。御部屋衆

放出（ハナチイデ）

放出といふは。寢殿の放出。西の放出。中の放出などと見えて。一間の名なり。宇津保物語には。ハナチデともかきて。中昔の雙紙どもに多く見えたり。源氏細流に。梅が枝の卷の。東の中のはなちいでといふ事を注して。兩方に。小寢殿ある母屋の中をなかにして。御帳を立てたるものなり。母屋の中をいへり。外ざま向をいふなり。晴の意なりと見ゆ。花鳥餘情に。放出は母屋なり。梅が枝の卷に。東の中の放出といふは。東の對の母屋なり。中といふは。母屋と東西の廂との間に。障子を立てゝ隔てたれば。御帳を立てたる所を放出とはいへるなりなど見えたれども。詳ならず。古繪圖のうち。放出としるせるもの兩三圖見及びしかど。是亦詳にはわかり難し。よて今按ずるに。こは南開き北開きなどいふほどの名にて。外ざまの明るみへ向ひたる所をいふ。細流に。外ざま向をいふ。晴の意なりといへるは。即此事にて。必しも常ある一間の名とは聞えず。俗是を放出と唱ふるいはれは。時により大客などある折々。遣戸。障子の類を放ち出だして。圍ひ廣むる故の名とればし。其證一二をいはゞ。若菜の卷に。南のおとゞの西のはなちいでにおましよそふ屛風。壁代よりはじめ。あたらしくはらひしつらはれたり。（こは女三の宮の。六條院へ移り給ふ時の御設けなり）又同卷に。對どもは人の局々にしたるをはらひて。殿上人。諸大夫。院司。下部までの設いかめしくせさせ給へり。寢殿の放出を例のしつらひて。螺鈿の倚子たてり。又梅が枝の卷に。東の放出にしつらひ。殊に深うしるさせ給ひて云々。同卷に。宮のおはします西の放出をしつらひて云々などみえ。放出は時々にしつらふ所の名にて。常ある一間の名にあらざる事知るべし。鈴虫の卷に。北の障子もとりはなちて。翠かけたりなど見えたるも。即ち放出にて。障子。遣戸などはなち

大內裏圖眞院言之內長者坊路圖

切妻　切妻は。廊中切通より寢殿へ入る口にて。是を中門の切妻といふ。妻（ツマ）は詰（ツマリ）の義にて。端の事なれば。此名あり。永亨九年の行幸記に。寢殿の南の簀子を經せさ給ひて。中門の切妻をおりさせ給ふなど見え。又同記に。中門の切妻にて。御家の賞を行はせられし事などもみえたり

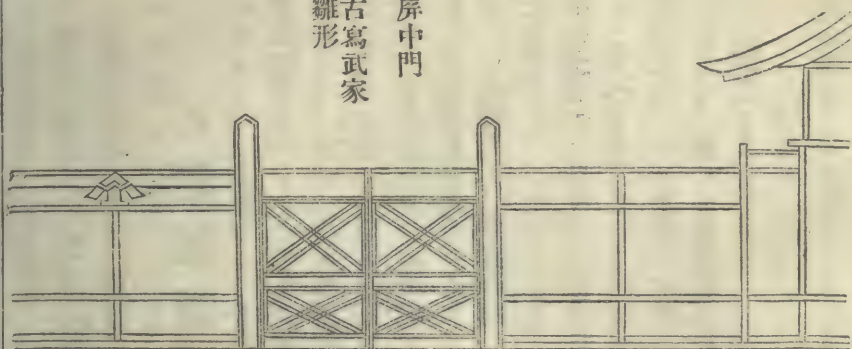
公卿間（クゲウノマ）

公卿座ともいふ。是は殿內に兼ねてしつらひおく所の客座敷なり。三內口訣に。廣緣の西面に妻戶あり。是公卿座の入口なり。公卿座は。四疊敷なり。淸華御所の公卿座は。六疊敷なりなど見えたる是なり 今按。こゝに四疊敷六疊敷などあるは。敷詰にしたる數にあらず。上疊を敷くべきほどの廣さを云ふなり 三內口訣の內客來奏者等作法之事とある條に。攝家宮門跡渡御の時は。主人自身中門へ被ニ罷出一。迎へ入れ奉らるべし。御座定まり候後。主人計我が座の程に可レ有ニ祗候一也。此時奏者之人。蹲ニ居庭上一。奔走の作法あるべからず。御歸の時。主人出座のうへ。送り申され。御乘輿之時。歸り入らるべきなり。奏者之人出ニ門外一。御供奉の人々へ一禮可レ被レ申上巳などみえたる。客對のさま。皆公卿座にての事なり。猶本書に委し

ある長廊下の内へ。開きたる往[illegible]にて。屋根あり扉なし。俗にいはゆる切通(キリドホシ)なり。こは藤のうら葉の巻に。中の廊の壁をくづし。中門をひらきて。霧のへだてなく御覽せさゝせ給ふなどみえたるも。切通にせられたるさまなり。すべて中門に椙閾(トガミシキミ)なく。扉をも設けざるは。車の往來に便ならしむべきためなるべし。

屛中門　右にいへる如く。廊の壁を切通にしたるを。壁中門といひ。また廊なくして。築地ばかりなるを屛中門といひ。また是を壁中門(カベチウモン)ともいふ。武家には廊なくして。屛中門にしたる多し。東鑑等所々にみえたり。屛重門と玄るせる所あれども。玄かかきては字義にかなはず。さて此屛中門の造方。古くより多くは屋根なし。一説に。古畫に屋根あるもみゆれど武家には屋根なきを用ひらるゝ例なり。こは旗幷に長具足など出し入るゝに便なる故なり。猶武家々作の條。所々にいへるをあはせ見るべし

壁中門　前にみえたり。三好亭御成之記に。御馬の事。壁中門より被ニ曳入一可レ然など見えたるも。

平(ヒラ)屛中門
古寫武家雛形

則ち此屛中門の事なり。後世書院造といふものになりても。玄關の左右にはかならず。屛中門あり。其制多くは掛屛にて。いはゆる壁中門なり。又かた〳〵をば廊中門にし。かた〳〵をば廊下にして。切通を設くるもあり。皆古代よりの遺制なり。屛中門の圖左に載す

位によりて。大小あり。的の時の數塚より。大きに候など見えたり

屋宇　梁より四方に桷といふ物を渡し。四方葺卸にして。搏風なきを四阿といふ。和名抄に。宮殿皆四阿。和名阿豆萬夜とみえ。是を寢殿造の通法とす。故に此造りかたをさして。宮殿造とも。又御所造などゝもいふなり。對屋は。桷なく搏風を入れて二方葺卸にする故。是を雨下といふ順が抄に。和名萬夜と見えて。かやうの造りかたを。眞屋造とも。對屋造ともいふ。いづれも檜皮葺にて。棟瓦或は箱棟なり。徒然艸に。後德大寺のおとゞ。寢殿に鵄ゐさせじとて。繩をはられたりけるを。西行の見て。とびの居たらむは。何かはくるしかるべき。此殿の御心。さばかりにこそとて。其後は參らざりけるなどみゆるも。此屋棟の上に。鳥除の繩をはられたるをいふなり　四阿。雨下等の事。下の對屋屋上の條を見るべし

對屋

三內口訣に。對ノ屋二。東を一ノ對と號し。西を二ノ對と號す。北ノ方と東西行如ニ鳥翼一作レ之。對とは主殿に對する義なり。武士の家に。奧ノ屋と稱す。是故實也。堂上の諸家には。對ノ屋と號すとみえ。其大さ主殿ト相同じとみえたり。猶下の四阿雨下の條と見合すべし

廊　細殿　渡殿　透渡殿　壁渡殿　廊下　渡廊　廻廊　橋廊　打橋　打板

廊の字ホソドノと讀みて。今時の廊下なること。前の沿革條にいへるかごとし。廊下渡廊。廻廊。橋廊等の名あり。大抵。橋ある所の廊をば。渡廊とも。渡殿とも。反橋の上なるをば反渡殿とも反渡廊ともいへり。また壁渡殿。透渡殿といふあり。壁渡殿は。左右を壁又は板壁などにしたるなり。透渡殿は。柱のみにて勾欄あり。翠簾を垂れて。往來する所をいふ。古畫などにさまぐの作り見えたり。又打橋とて廊中の土間へ。跂橋。の如き板橋をわたす事あり。是はこゝへもかしこへも移すべき料なれば。ウッシ橋の義なり。ッシの約チなれば。此名ありといへり。又打板とて。船の步板の如き物をも用ふる事あり。物語の類にまゝ見えたり

中門

中門の事は。沿革の條にいへる如く。正殿の東西に

などみえたる說なり

廂 廣廂 孫廂 廣緣　廂の事。前に見えたり。廣廂。廣緣いづれも廂の別稱なり。又孫廂とて。常の廂の外へ屋を出だし。格子。蔀などあるもあり。しかれども。簀子をさして孫廂と書る事ども多し

土廂(ツチヒサシ)　孫廂の下を土間にしたるなり。後世の造りにある捨柱の如し。こは昔は禁中にもありし事なり

簀子　廂の外にあり。簀子緣ともいふ。こは小板敷なれども。竹簀の如く。間を聊づゝすかして打ちつくる故。此名あり。さて間をすかし。面をとるは。雨露などのたまらぬ爲なりといふ

沓脫　こは簀子の內階の上へ。平なる板を敷きおくなり。又階より一段低く設くるもあり。其造りさま〴〵と見えたり。東鑑知家前右衛門尉參上午レ着ニ行縢(ムカハギ)一經ニ南庭一直昇ニ沓脱(クツヌギ)一於ニ此所一撤ニ行縢一參ニ御坐之傍一云々などいふ事もみゆ

廊沓脫　是は中門より廂への上り口にあるなり。階の沓脫とも見えたり

階　殿の正面にあり。五級を通法とす。但周制に。天子七級。諸侯五級などいふ事あれど。こゝには定制なし。南階には欄あり。また東西の妻戸の前にも階あり。こゝには大抵欄なし。常の出入大かたは。此東西の階より昇降するなり

階隱(ハシカクシ) 階藏とも　舊說に。階の上へ角屋のごとく。屋根を造り出せるをいふをいへり。三內口訣に。階藏は。大臣家に有之。爲レ可レ申ニ行幸一也とみえたり

砌(ミギリ)　こは雨落の所。石などしきたくところをいふ。歌に庭の事とゝしてよむは。やゝ轉じたるなり

車寄　こは。東西の妻戸の前にあり。廂の屋根さし出だして。下を敷石にし。高貴の人の車をよせらるゝ爲に。設け置くなり

輿寄　前に同じ。後世車を用ひず。多くは轅を用ひられし事故。この名あり

立砂(タテズナ)　こは。車寄の前。左右へ砂をつきたてゝ。車の衡(クビキ)。輿の轅などを持する爲に設け置くなり。宗五大雙紙に。立砂の事をしるして。沓脫より間半(ケンナカ)ばかりさきなり。霤(アマダレ)のかゝらぬほどなるへし。妻戸の両柱の通りなるべし。大さは其家の

まへ引き出だして。それにて上げて結ぶべし。神社の前のみすは。かざもこまるも外にあるべしとみゆたり。總じて簾をかへる事。格子の內へたるゝを內みすといひ。外へ垂るゝをれほひみすといふ。母屋は內みす。廂は覆簾(オホヒミス)常の事なり

戸帳 戸帳は。主人の好による事なれども。帳臺の入口へれ。翠簾をたれず。必ず戸帳を用ふる事なりとす。すゞむしの卷に。御帳のかたびらよ。れもてながらあげてなど。かけるも。此戸帳のことなり 催馬樂に。我家はとばりちやうをもたれたるに。大君きませむこにせんさうたふも。帳臺などのさまなり

掛莚(カケムシロ) こは疊表へ緣をつけて。帳の如く垂れたるなり。長祿二年以來。申次記に。室町御所の事を注して掛莚と申すは。上の御末と。中の御末との間に。高敷居有之。其上より掛けられ候なり。莚は二枚にて候へども。一枚を中を分けて。緣を常のごとくさし候へば。小數四枚になり候なり。一間の所にかけ申すなり

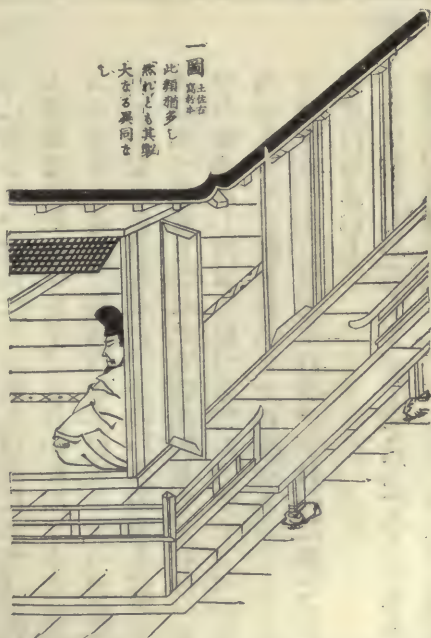
戸帳 圓光大師繪傳に見えたる圖 帳の條下ミ併見るへし

ことなり。板しとみ。竹しとみ等の名あり。歌に草の葉しとみとよむは。葎蔦などのまとひたるさまをいふなり。別に葉蔀といふものゝあるにはあらず。又半蔀といふものあり。こは小蔀といふほどの名にて。半の字にはかゝはらず

翠簾（スダレ・ミス）

翠簾は。大抵母屋と。廂と二重なり。然れども臨時の補理によりて。そのさま一様ならず。其掛やう詮せる事どゝも。またあまたありて一

妻戸古圖　土佐家粉本

一圖　土佐古寫粉本　此類猶多し然れども其製大なる異同なし

定せず。今其一二をいふべし。三内口訣に曰く本式の主殿の時は。母屋の簾は各別なり。小壁無レ之候故。裏板より直に是をかく。依りて其長さ過分に候。無二釣丸一其外。廂。妻戸。格子等常之翠簾無二差別一候。其外廂妻戸は。釣丸あるべし。此外はあるべからずと云々。又。宗五大雙紙。翠簾かくる事といふ條に。かぎも釣丸も内にあるべし。内へ卷きてかくべし。又かぎなければ杉原を四つに折りてたゝみて。同じほどざ

又みからしの間の出入を嫌ふ事は。何故とも承り候はずなどみえたり。猶妻戸の條にいふべし

障子 障子は屛障とて。戸。建具。衝立の類をもいふ名なれば。格子をさし。障子としるせる事とも。中古以來の書に多し。明障子といふもの。そのかみに絹布などを用ひし故。うすものヽ障子などいふ事あり。皆格子の略なり。古代は紙あれども。後世の如く薄紙のかたきはなかりし事故。厚紙にてはりたるを被障(フスマ)などいひ。また紋がらなどあるを唐紙障子とはいひし事なり

妻戸 妻戸は。殿の四隅にありて。主客ともに出入する戸口なり。妻戸。狐戸等の字を用ふるは。いづれも。訓を借り用ひたるにて。端戸(ハシト)の義なり。ツマとはすべて物のはしをいふ名なればなり。さて其作りは。板戸を兩開にして。内外ともに鐵具あり。開く時は外のかたへ開き。其戸のあをらざる爲に掛鐵をかけてとめおく。是をさるつなぎといふ。閉づる時は。又内にかけがねありてしめおく事なり。總じて主殿の四方を格子にし。格子間は。つねにとざして出入せさせず。別に妻戸といふ物を設け置きて出入する事は。もはら要害の爲にして。貴人高位のおはします所は。もとよりさもあるべき事なり。されば妻戸の造りは。精粗さま〴〵あれども。いづれも厚板に鐵具をしつけて。堅固にするなり。格子も細やかに木を打ち違へて。飾をのみむねとしたるものヽ如く思はるれど。後世の明障子の如く。むげに手薄なる物にはあらず。いはゆる書院造の如きは。四方薄紙の障子にて。奥端れもに明(アカ)るく。間毎にあけたて自由にして。便利多き事なれども。格子。妻戸の堅固なるには准ふべくもあらず。織田内府本能寺にて。御生害のさまなどをおもふに。そのかみの如く。格子。妻戸にて翠簾をたれたる御座所ならんには。たとひ賊兵はしたなく近づきまゐらすとも。鎗先にかヽりて。薨じ給ふまでの事はあるまじきなり。妻戸の制さま〴〵あり。下に一二圖をいだすなほ考ふべし

蔀(シトミ) これは格子をおろして。其上をおほふものなり。賤者住所に格子なくして。蔀ばかりなるも常の

し

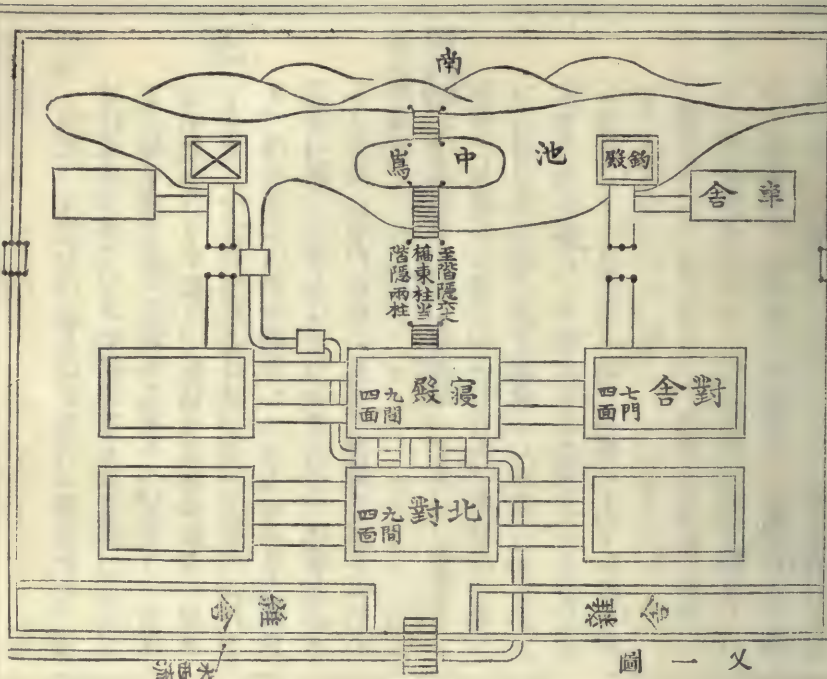
柱寄　大抵。丸柱を用ふるほどの所は格子あり。丸柱にては。格子をさすに便ならざる故。柱寄とて。格子或は妻戸などある所々へばかり。方なる木をそゆる事なり。或は是を櫳檻ともかけり

長押（ナゲシ）上中下　中古の寢殿造には。必ず上下の長押あり。門の柱には中の長押といふものあり。後世玄關の制。又多くは中の長押あり。但後世とても。玄關に中の長押あるは。高貴の家に限れる事なり

壁　板壁小壁　中古以來土壁（ツチカベ）。板壁（イタカベ）等の名あり。土壁多くは白土を用ひし事とのみえたり。板壁は後世にいふ羽目板（ハメイタ）にて。上を紙張にしたることゝ見えたり。義經記に。板壁を叩きて笑ふなどとみえたるも是なり。又小壁とは。戶窓の上下にある壁をいふなり

格子　和名抄に𥴩子と出だし。又作レ𥴩俗用ニ格子二字。竹障名也とみえ。もとは竹にても作りしにや。中古以來は今時の制と同じく。墨塗にて間毎に格子あり。上に一枚。下に一枚掛鐵（カケガネ）にてかけおき。開くときは上なるは外の方へ釣り上げ下ばかりをかけれくなり。物語にもみからしまゐるみからしはなつなどあるは。此事なり。また內格子とて。外の方へ釣りがたき所は。內へ釣り上けれくも常の事なり。母屋と廂と二重に格子あれば。母屋の格子は。內へつり。廂のは外の方へつりて。かけがねをかけおくなり。是等上古よりの遺制とみゆれど。書院造といふ事はじまりて以來。高貴の家々とても明障子をのみ用ひたれは。格子は廢れたるなり

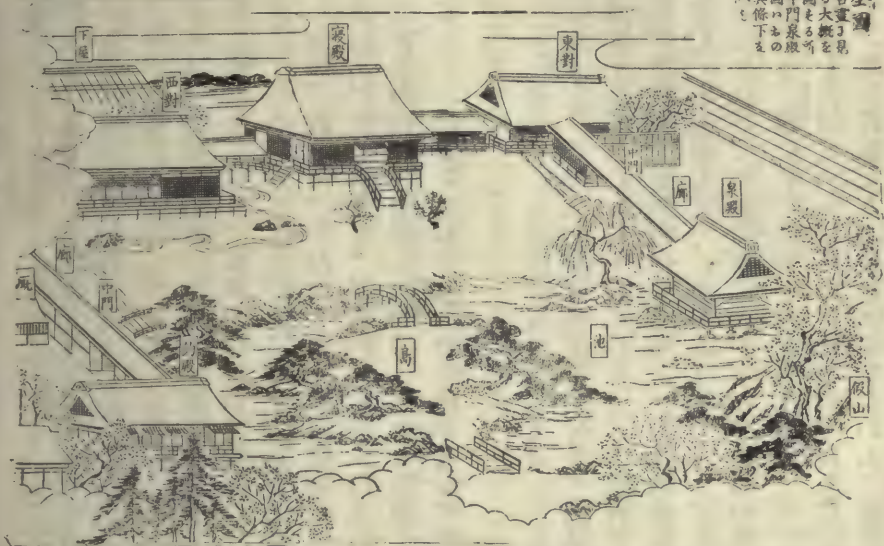
格子間　格子間とは。大抵寢殿の四方は格子にて。その格子あるところは人常に出入せず。四隅に妻戸あり。是を妻戸の間とて。主客出入の所とするなり。故に客來などあれば。上の格子をば釣り上ぐるなれども、下の格子をばまづは迯さず。こは出入に用なき故と見えたり。宗五大雙紙にみからしの間。出入の事大かた法の如く。嫌ひ候なり。中略又常に死人をみからしの間より出し候時。みからしの上をばおろし下ばかりとり候間。假初にも下ばかりをばとらぬ事に候。

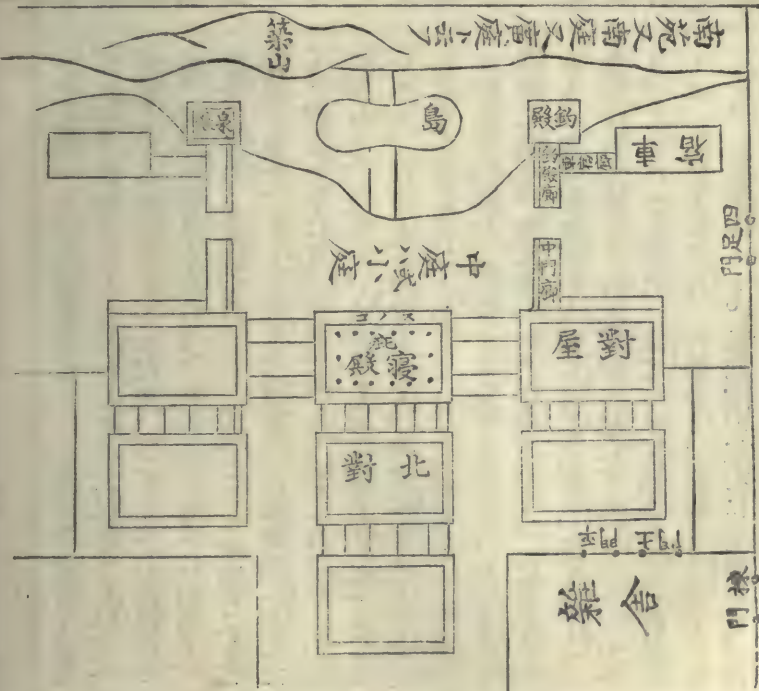
又一圖

又階毎に沓脫(クツヌギ)あり。さてこの母屋と廂との內をさま〴〵に仕切りて。客人應對の所とし。或は寢臥の所とし。納戶。塗籠。帳臺等にも用ふる事故。その補理さま〴〵にして一樣ならず。此外大禮等執り行ふ時は。臨時の補理どもあり補理の條にくはし大抵。今の京となりて攝關大臣をはじめ。高貴の家々皆かくのごとくならざるなし

母屋(モヤ)　前に見えたり。こは寢殿にのみ唱ふる名にあらず。對屋にも。本屋をさてひしふは常の事なり

天井(テンシヤウ)　今時屋根裏を覆ふ板を。天井とも。また裏板ともいへど。天井とは板と平にはりて。井の字の如く。格子をなすをいふ。裏と板は屋根形(ヤネナリ)に板をはりて。椽を打つをいふなり。故にそのかみの記錄に。裏板あり。天井なしなど註せる事ども多し。思ひまがふべからず今俗間は。格天井。または格天井などゝ唱へて。格子にするは返りて本制にちかし

裏似　前に見ゆ

柱　寢殿の柱は。丸柱にする例なり。或に母屋のみ丸柱にて。廂は角柱を用ふるもあり。定制な

一圖

こは古圖のよしにて松岡辰方か許より贈りはさせつる所の略圖なり次に出すところも後に同家よりこひもとめて寫す所の圖なり

る事誤なるよしいふは委しからず。今時守殿の字を用ふるも。音に依りて誤れるなり

寢殿

寢殿の名は。皇朝の古稱にあらず。西土に倣ひて。一家の正殿をいふなり。爾雅の釋宮に。周制。王公六寢。路寢一。小寢五。路寢治レ事之所。小寢燕息地也。又公羊傳に。路寢何。正寢也と見え。史記樂書に。凡居室。皆曰レ寢とみえて。寢臥の所をいふにはあらず。故實家の說に。主殿は寢間なる意にて寢殿ともいふなりとかけることあり。極めて麤漏なるに似たり

寢殿造

寢殿の造り方は。大抵七間四面を常法とす。或は五間。或は十二間なども なきにあらず。三光院内府の御記に。主殿は七間四面通法とみえ。源氏物語梅が枝の卷に。七間のしんでん廣く大きにつくりなしなどもみえたれば。七間四面は、中古以來通例の間數と見えたり。舊說に。其制一丈を以て一間とし。柱を立て是を大間といふ。丸柱。總板敷。屋上は檜皮葺にて。四方葺卸なり。是を四阿造といふ。是その大概なり。大間の事延喜式をはじめ。さまぐ見えたれど。後世は必しもしからず。六尺三寸を以て一間としたる事ども丶みえたり。さてその七間四面の内。五間四面は本屋にて。其外一間通りは廂なり。其外簀子あり。此五間四面の本屋をして母屋といふ。身屋。身舍などもかけり。延喜式。江次第等にみえたり。母は假字にて。面屋の義とも。また身は諸木の幹に准へて。身屋といふべきを母と轉じよぶなりともいへり。四方上下長押ありて。母屋は廂より少し高し。格子又は妻戸ある所は。柱毎に檽檻あり。其外の一間通りの廂を。廣廂とも廣緣ともいふ。柱。長押等母屋に同じ。大抵廂の四方は格子にて。四隅に妻戶あり。條々聞書といふ物に。室町御所の事を注して。公方樣御主殿は。四方ながら蔀にて候なるよしもいへり。しかれども諸家一樣ならずと見えたり。扨又簀子は。通例廣さ五尺。勾欄あり。正面より左右へ廻らす。正面に階あり。五級階の左右にも欄あり。西東の妻戶の前にも各階あり。此階には欄なきを通例とす

てあきなふものありしなど語り傳へたるも。此程の事なり。されば此後の人々。前代の遺制とてまのあたりみるべき家居などは。地を拂ひてなし。書中引くところの。三光院內の御口訣なども。舊事の絶えはてんことをかなしみて。としごろ見覺え。聞傳へ給へる事どもを手記し給へる所なり。されば此後の大名達は。人數をも多く召し具せられ。間數なくしては便あしき事どもある故。其第宅も大方は書院造といふものになりて。中古以來の寢殿造といふ事は。殆。絶え果てたり。さてかの書院造といふは。玄關。廣間。書院。客坐敷。居間。奧の屋などいふ造りかたにて。中昔の武士の第宅とも。また大に異樣なるものなり。こはたゞ武家のみにあらず。堂上の家々とても。屋造のさま一變して。かへりて武家に習ひ給へる事ども多し。是等の事は。是よりさき義尙將軍の小川御所のさまなどより。漸々にれしうつれるものにて。此時始めて造出でたるにはあらず。豐臣太閤の聚樂の第行幸（後陽成院）の事。近くは寛永三年二條の御城の行幸（後水尾院）の事など。いづれも鹿苑院殿以來の故事によらせらるゝよし書き傳へたるものどもあれど。御所は寢殿造にあらず。其折の記錄どもにも。たゞ儲の御所とのみしるせり。是等上世以來。屋造の沿革なり。猶末の武家々作の條下を併せ見て。かく變革せる所以の大概をあきらむべし

主殿

主殿（シユデン）とは。一家總搆の內。宗とある殿をさしいふ稱なり。されば主殿の造方とて。別に定まりあるにはあらず。土岐家聞書に。主殿のからはふと見え。三好義長朝臣亭御成之記に。主殿の破風新に申し付けらるるなどみえて。寢殿の造てかたにあらず。對屋造なるにてもしべし。然れども中古以來の制。主殿と稱するは。多くは寢殿造なる故。主殿といへば。寢殿の事としられたるなり。舊說に。寢殿一名主殿と注したる事あれば。心得誤る人多し。さてかく別けて辨ずることは。定式の寢殿造なれば。對屋。東西廊。中門。池島。釣殿などいふもの具足せされば。舊制に叶はず。主殿といへば。其造りに拘はらず。一家の內むねとあるところをさしていふ事故。主殿と寢殿と差別なきにはあらず。又今故實を談ずるもの。主殿は正殿にて。表座の名なるを。後世奧屋の稱とす

りと見ゆれど。そは人々の用意。花鳥の噂などいみじく形容せるのみにて。殿舍の搆より御饗應の次第等。此頃の行幸。御幸等に較ぶれば。物の數にもあらず。また當時諸大名衆へ御成の記といふものをみるに。その第宅いづれも寢殿造にあらずといふ事なく。諸事の用意もまた皆多くは行幸の例に准せられきとみえたり。爰に至りて。堂上武家の差別なきのみにあらず。公家の人々かへりて武家の榮耀を羨み給ふ事となれり。應仁記を按ずるに。義政將軍の御代。君臣上下奢最甚しく。諸家の第宅を廣めて飮食にふけり。文正元年三月。花見の御遊には。百味を以て百菓を作り。御相伴衆の箸をば。黃金を以て是をのべ御供衆中の箸をば。沈を以て是を削ると見ゆ。其費いくらといふ數をしらず。されば鹿苑院殿の御代四季の倉役をかけられたるすら。諸民艱難に堪へ兼ねしを。普光院殿の御代に至りて。一箇年に十二かけられ。又此御代。臨時の倉役とて。大嘗會の行はれし年。十一月一箇月八九度に及び。其十二月に至りて。又々八九度まで懸けらる。しかのみならず。その借錢を破り捨てられんとて。前代にも聞き及ばざる德政といふことをはじめられ。此御代に至りて。十三箇度まで行はれしかば。倉方も地下方も金銀錢のこらず盡き果てたりしよししるせり。しかるに。程なく應仁の大亂起り。公家。武家大小の屋舍兵燹に罹るもの三萬餘宇。東は室町に至り。西は大舍人（オホトネリ）寮（レウ）に至り。其折燒殘りし家々も。追々にやかれて。洛中洛外多くは皆焦土となりぬ。然れども。此室町の花の御所のみは。幸にして恙なし。細川勝元の計ひとして。主上（御土御門）上皇を御所へ迎へ奉り。三種の神器とともに行幸御幸あり。上皇は終に此御所にて崩御まし〳〵し程の事なれば。義政將軍の御代までは。そのかみの經營改められず。殿屋猶相備はりし事しるべし。義晴將軍以來漸々に衰廢し。義輝將軍に至り。三好。松永が亂に。御所みな燒け失せて。纖芥も殘るところなし。應仁元年に燒き拂ひし三萬餘宇。此時いまだ再建ならざるもの。十に八九。攝關大臣の御所々々とても。纔に雨露をしのぎ給ふほどの事なりしかば。禁中の有樣といへば。紫宸殿の御築地崩れはてゝ。三條の橋のほとりより。內侍所の御燈火のひかり見え。左近の橋の本には。茶を烹

ふ。世にいはゆる花の御所是なり。されば此御所出來し以來。行幸御行等度々あり。其一二をいはゞ義教將軍の御代。永享九年十一月廿一日。室町の第に行幸（後花園帝なり）寢殿の東の廂四箇間を以て。御所に据ゐらる。翠簾にそへて御屏風をたてめぐらし。廣筵をしきみつ。よてまづ寢殿に入御。御遊宴あり。御帳臺を以て夜の御殿とし。外に寢殿の內をしつらひて。常の御所と定めらる。翌廿二日。西向の御懸の壺にて。舞樂御覽あり。舞樂はてゝ御臺所の對屋へ成らせられて。御酒宴あり。其後寢殿に於て。和歌の御會あり。夜陰に至る。廿三日中庭に於て舞樂御覽あり。きのふの所作人は。堂上地下相交はる。けふは地下の舞人を召され。御供の公卿殿上人より。本所の女房達まで。所々より御見物あり。廿四日雨ふりて。異なる御遊なし。寢殿の西の御六間にて。終日御酒宴あり。廿五日西向の御懸にて。蹴鞠を御覽せらる。御簾の內にて。御酒宴あり。夜に入りて。詩歌管絃三舟の御遊あり。寢殿の南の廂東の妻戶より出御。御船舍への道の程。掃部寮筵道をしき。殿上人脂燭をとりて。前行。宰相。中將一人御劍に候せられ。關白前攝政。（兼良公なり）室町殿以下御後に立ちて供奉したまふ。主上和歌の御舟にめさる。樓船の上に二鳳を造り。白玉二箇各臺に居ゑて舳先に飾らる。詩の舟は龍頭。管絃の舟は鷁首なり。桂男おの〳〵唐冠を着く。御池の渚。中島等所々に篝をたく。又西の馬道の軒に魚腦の挑燈あまたかけられ。御供の上﨟。女房。本所の女房達。御臺所をはじめ。南面の廣廂にいでゝ御覽あり。管絃はてゝ。御會所の端のおましをしつらひ。釣殿に准へて。詩歌の披講あり。廿六日。けふは還幸あるべしとて御會所へならせられ。（通鑑に。泉殿とあり）御酒宴進獻數種あり。道風が自筆の手本。黄金の箱に入れ。白銀にて作れる松の枝に。玉の緒を以て是を結び付けて奉らせ給ふ。此外。將軍家よりも御臺所よりも。金銀。衣服。調度の類。數を盡くして奉らる。供奉の公卿。殿上人。上﨟。女房達まで。種々の御引出物あり。御酒宴はてゝ。曉に還御成りぬ。鹿苑院殿以來。度々の行幸。御幸。大抵此類なりといへども。此時を尤盛なりとす。今按ずるに。そのかみ光源氏の六條院へ行幸のことなど。專。當世のありさまを摸し。文飾を加へしるせ

獻二盃酒一。其儀强不レ極レ美。以二五色鱸魚等一爲二肴物一云々。時に御前に侍ひて。此宴に預るもの。上總介。千葉介。小山。畠山。工藤。土屋。梶原父子等纔に十三人に過ぎず。此一事を以ても。その質素押し量るべし。北條氏執權の世となりても。猶武家の古質を失はず。將軍家の御所をはじめ。さばかり時めきし北條一家の人々といへども。儉素を專とせられし事。かの最明寺殿の母公。手づから明障子の切張せられしなどいふにてもおもひやるべし。これよりさき。泰時。賴經將軍に執權たりし時。御所にて御物語のついて。泰時が家（板屏の事なり下に載す）破れて見くるしと聞こしめし及ばるゝよし。仰せ有りしに。ありあふ人々。執權に追從せまほしとおもふ折なれば。我々もとくより心付きをり侍るが。今かく仰も候上は。我々相計りて。築地になしかへてまゐらせ候はむといひしに。泰時答へて。各の御志うれしとはおぼゆれども。今新に是を築かんとならば。人夫多く費えて。是も亦世の煩ひにこそ侍らめ。泰時が家。假令築地にて圍ひたりとも。運盡きなば助かるべしともおぼえねず。若又運つよくして。かくながら召し仕はれ

候はむには。緒板など手薄くとも何事の恐れか侍るべきとて。固く辭し申しけるよし。砂石集にみねたり。されば此頃。專。北條家へ追從し。自家の榮耀を希ひし輩といへども。又皆其好むところにおもねりて。つひ〳〵かたの如く質素の風俗をなしけん事また推して知るべし。其後。南北相別れ。將軍家の御所を京都におかれしより以來。國々の大名。小名多くは都にのみ在住せしかば。鎌倉質素の風儀はいつしか。一變して。堂上家。武家の差別なく。殿舍を造りみがき。相互に華美を競ふならはしとはなれり。師直兄弟のごときは。一時の奢侈よりいでたる事なりといへども。おのづから公家堂上を羨むの唱首とはなれるものなり。義詮將軍。三條坊門萬里小路に於て。新に御所の經營あり。諸將に命じて。一殿一閣を分營（ワケイトナ）ましめ。日を刻して落成を急がれし事。當時の記錄どもにみゆれど。其造作のさまとては。詳に傳へず。鹿苑院殿の三條室町の御所に至りては。其構方四町。鎌倉の舊例に傚ひ給はず。公家攝關の制に基き寢殿。對屋。釣殿泉殿等數箇の屋舍あり。其外前代にも聞及ばさるほどの華麗を極めらるとい

て扉なし。是を兩中門といふこと。いはゆる回廊にて。東の渡殿。西の細殿などいふ是なり。其廊の回れる内をさして。中庭といふ。その庭よりつゞきて。池島などあり。さてまた件の廊の内には。家司。所從の役所々々等ありて。今時の神社の回廊。或は寺院の東西寮などの如し。こはそのかみ攝關大臣の御屋形をはじめ。四位。五位の家々とても。大抵右やうの屋造ならざるはなし。されば今時神社の水殿。拜殿。寺院の本堂。客殿。東西寮など。常人の家に較ぶれば。大に異樣なるごとくおもはるれど。そのかみはそれもこれも。各相似たるものなりしとみえたり。但。當時武士の家居といふは。又別に一つの造方ありしに似たり。其故は總じて武士は國々に所領ありて。其地に常住し。時に臨みて。在京をもする事なれば。たとへ官位尊き家柄の人々とても。何

直今度南方の軍に打ち勝ちて。彌。心驕り。擧動おもふやうになりて。仁義をもかへりみず。世の嘲哢をもしらぬ事多かりけり。常の法には四品以下の平侍武士なんどは。關板打ぬ舒葺の家にだに居ぬことにこそあるに。此師直は。一條今出川に。故兵部卿親王の御母堂。民部卿殿の住み荒らし給ひし。古御所を點し。棟門。韓門四方に開け。釣殿。泉殿。棟梁章く造立てゝ。奇麗の壯觀を逞しうせりとみゆ。當時の常法には。四品以下の平侍。國々土着の武士などは。關板打ざる熨斗葺の家にすら住まざるほどの事とみゆれば。そのころまでの質素おもひやらるべし（關板のし葺の事。上の條下にいへり）屋抑。鎌倉右大將家天下一統の後。平家の奢侈に懲りて。よろづの事。公家の風儀に習ひ給はず。其身鎌倉に常住ましくて。上世以來武士といふものゝ。かたちをれしたてゝ。海内治取の大さまなども。極

東鑑に云。建久
厩等造畢之間。
九郎盛長甘繩家
能於新造御第

形一。刻二作荷菱水物一。所二以壓一レ火とみゆ。東井は宿星の名にて。形〻〻〻〻かくのごとくなるに象るなり。荷菱水物をきざみつくるとは。俗にいふ彫物のことにて。寢殿造の家には。必此物あり。所謂韓門。韓榑風。懸魚。鵄尾の類は。皇朝古代の遺制にはあらず。猶。沿革の條にいふべし

家作沿革

上古貴賤家作のさま。國史の載するところ。いまだ其詳なる事を得ず。神代に。造レ宮之制者。柱則高太。板則廣厚。また以二千尋栲繩一結。爲二百八十紐などあるによりて。太古の有様を想像すべし。神武天皇以來といへども。其精しき事に至りては。探るべきやうなし。しかるに。そのかみは遷都しばしばありて。經營に隙なく。大宮の諸殿をはじめ。高貴の家々とても。すべてみな質朴なりし事とはみえたり。聖武天皇神龜元年の紀に。冬十一月。太政官奏。上古淳朴冬穴夏巢。後世聖人。易以二宮室一。京師帝王之居。萬國所レ朝。自レ非二壯麗一。何以示レ威。板屋草舍。中古遺制。難レ營空殫二民財一。請命二有司一。令三五位以上。及庶人力堪二營辨一者。以レ瓦葺レ屋。塗爲二丹堊一。奏可とみゆ。是皇朝にて屋上に瓦を用ひ。丹土。白土等の飾を施しゝはじめなり。しかるに。今の京となりて以來。高貴の屋造は。おしなべて四阿造といふものになりしとみえたり。四阿は。唐令に宮殿皆四阿と注し。後世のいはゆる宮殿造にて。皇朝古代の遺制とはみえず。當時の書に。寢殿としるせるもの是なり。其經營專觀美を競ふこと。世を追ひて盛なり。然るに村上天皇天德元年。右少辨菅文時封事三條を奉りて奢侈を禁ぜられむことを請ひ。第一の箇條に。俗之凋衰。源自二奢侈一。不レ塞二其源一。何救二其俗一。方今高堂連閣。貴賤共壯二其居一。麗服美衣。貧富同寬二其製一の語あり。然れば。此頃。專。居所ノ衣服等奢侈に成り行きゝとみえたり。さてその寢殿造といふは。一家一構の內。中央に正殿あり。南面。其東西もしくは北に對屋といふものあり。正殿は主人常住のところ對屋は家內眷屬の居るところなり。さてまた正殿の前數十歩に。池を湛へ。中島を築き。橋をかく。又東西の對屋より。南へ通ふ廊あり。其廊のはし池に臨める所に。一屋を構へ。是を釣殿とし。又泉殿とす。東西廊の中程に。各小門あり。廊の內を切通しにし

り。祝詞。宣命等に。某の宮の瑞の御殿など書きたることをもみて併せ考ふべし。西土にても。宮とは尊者の居る所をさしいふ稱ながら。天子にも諸侯にも限らず。古代は上下通じ用ひしとみえたり。されど皇朝にて宮と稱するは。天皇の大御家に限ることなり。大御家の御子なればなり。譬へば關白の御子をさして。殿の大將。殿の大納言。又は殿の僧正殿の法印など稱するにれなじ。其餘。天神地祇を祝ひ祭れるところをいへど。勅許なくしては。宮と稱することを得ず。況や人臣をや。是を以て西土にて宮といふと。こゝにて美也なりといふとの差別を辯ふべし。たゞ文字につきて。れもひ紛ふ事なかれ

殿（あらか　との）

殿を日本紀に安良加とも美安良加とも。又美安利加ともよめり。ともに在所の義なり。萬葉集には。御在香とかけり。香は假字にて。是も所の義なり。古語拾遺に。正殿謂二之麁香一とかけるは。二字ともに假字なり。是等いづれも尊き方にのみいひて。上下の通稱にあらず。又和名抄に。殿を止乃と注し　神代紀に齋機殿。八尋殿等の名見え。上古以來。尊貴の人の在す所をいふ名なり。されば殿の字。安良加をも止乃とよみて。同じく尊稱なれども。安良加は尊き方にのみいひ。止乃は必しも尊稱のみに非らず。其故は殿の字。字書に堂也と注して。安良加の名へはかなへど。止乃といふ稱へは叶はざる事ども多し。納殿。湯殿。渡殿。細殿の類是なり。さてまた止乃を尊稱にいふことは。日本紀に。正寢。内殿。正殿いづれも於保止乃とよみ又中古以來。攝政關白の父君をさして。おほとのといひ。其餘をも。尊稱。にはとのとよび。其御許とよぶほどの人を。和殿といひ。名をさして某殿といひ。從者より主人をさして殿といふ類。みな其居處をさしていふより。稍轉じたるものなり。海人藻芥に。内裏にれいて人をさして。殿と申すは。執柄家の外と不レ可レ有レ之。御前に於ては。只關白殿。攝政殿と申すなりとみゆ。是等も殿の字の義には叶はずたゞ。皇朝古代の遺稱なり。しかれども。皇朝宮殿經營。すべて唐代の制に傚ひ。諸殿の名をも。彼國の稱を取り用ひられし以來。臣下の第宅にも。主殿。寢殿等の稱出來て。其制もまた西土に傚へる事ども多し。風俗通に。殿堂象二東井

家屋雜考

澤田名垂著

家屋

家ハ。和名抄に伊閉。人所レ居處也。一曰。宅有二甲乙次第一。故曰二第宅一と注して。宮殿官舍第宅等。總じて人の居所ハ伊閉にあらずといふ事なし。唯其居る所の人々によりて。制を殊にし。名をも異にするなり。然るにいと上津世には。やとのみいひて。伊閉とはいはず。やハもと屋根の事なれば。屋根あるほどの住所をば。やといひしことと見えたり。古事記八千矛神の御歌に。伊刀古夜能伊毛能美許等とあるに寢牀屋の妹命といふ事にて。屋は即家なり。又神武天皇の御歌に。阿斯波良能志祁去岐袁夜爾とあるは蘆原の繁き小屋といふことにて。是も亦家の義なり。神代記に。宮。窟。産屋。喪屋などいへるも。やは皆家の義なり。谷川士淸の和訓栞に。孝德記を引きて。かの天皇の御宇に五家相保といふ事みえ。民家五戸を以て。一組とせられしより。大寶の令にも其制を用ひられ。又光仁紀の童謠に。五家らぞさかゆるなどいひしこともあれは伊閉は五戸の義ならむといへり。しかれども。伊幣といふ假字のまさしく見えたるは。是よりさき。仁德天皇の御歌に。儺餓伊幣劑虛曾云々。又古事記履中天皇の御歌に。迦藝漏肥能毛由流伊幣牟良都麻賀伊幣能阿多理などみえて五戸の義にあらざること明らけし。訓釋の事はこゝに用なきに似たれど。强ひていはゞ。伊閉の伊は寢なり。閉は戸の義にて。そのもとはたゞ宿所をいふほどの名と聞えたり。又宿舍 族 奴 などのやまた家をさしてやどといふも。又也加といふもともに家所の義にて。也計とも轉じよぶなり。大宅を美也計公を於保也計などよむも。やは皆家の義なり。是にて家といひ屋といふ。稱の由りて起る所を詳にすべし

宮

宮を美也とよむは。御家の義にて。至尊のおはします所を博くさしいふ名なり。さて其宮の内にある御座所をさして美安良加といひ。また止乃ともいふ。ともに殿の字をかけり。稍後の世となりて。大極殿。紫宸殿などいふもの即是也。されば宮といふは。もと總構の名にて。もろ〳〵の御殿は。其内にあるな

家屋雜考目次

家屋雜考序

上古以來。貴賤家作の制。種々沿革あり。國史紀傳の載する所。とみに辨じ難き事また多し。故にこたび堂上家。武家家作の沿革をはじめ。つくり同じくして名を殊にし。名同くして作を異にするたぐひ。是かれ考へ合せて。好古の一端に備へさせ給はむのればしたちあり。まづやつがりにおほせて。筆をおこさしめたまひぬ。但そが中に。禁中及び神社。佛寺等の制は。古く傳へたるものども多かれば。しばしさしおきて。まづ家屋といふことの起りより。堂上家。武家家作の沿革をのみむねと。手近きふみどもよりかいあつめて。やつがりがおもふところをしもしるしそへたり。さるは此の五卷。みながらにやつがりが狹布のふところよりとりいでつる事のみにはあらで。折にふれつゝねもごろにのたまひさとし。またはみづから筆とりて。かいしめさせ給ひしくさ〴〵をさへわがものがほにしるしゝことども。はた多からずとせず。よていまだ淨書にいたらずといへども。まづ御かたへの人々とはかり。したがきのまゝさゝげ出だして。みけしきをうかゞひ奉るになん。

天保十三年葉月十日餘り　臣　澤田名垂

たからともおもはゞ袖につゝまゝし

うき世のちりを何にかはせん

となん。あるじいよ〳〵はぢらひて。はじめよりたゞ人とはおもひも侍らず。いかならんだいとこ（大徳）の。世をいとひてかく侍るならん。孫氏がわらのしとね。許氏がひさごのこゝろにもまさりけんとぞ。ひめおきし事をもわすれて。こゝろをおなじうする友がきにかたりけるが。一犬の噓をほゆるならひにて。つひにわがともがらの茶話とぞなれりける

こがねぐさ をはり

ろをえて。あるじをがみ。またかたゐ人のかたををがみてうれしさに泣きけるを。あなかま（喧騒）こと人のきゝてはわぎへ（吾家）のおきてごともうしなふめり。つねのごとやすらけきふりしてなんと聞ゆれば。な（何）ごとなくふしどにはいりぬ。あくるあしたはつとめ（早朝）ておきいでゝ。いへのこ（家人）にきこへけるは。あすはとほつおや（遠祖）のためにおもふむねあり。こハいひ（強飯）そくばく。そがうへに伊丹の里につくりなす白菊てふ酒五樽てうじてよと聞えければ。かしこまり（拜）うけひき（承）て。やがてよね（米）かしぎさけとゝのへ。ちかひし日のあした。こハいひハはんぎりてふうつはにうづたかくもり。いひはくるまにのせ。酒ハ馬におふせて。かのたから失へる男をもそへて。辰さがるころ五條の河原へハおくりやりぬ。なほたへずや思ひけん。こがねはたひらをさかなのれう（料）とかいつけ（書付）て。酒だるのうちへいれておくりけるとなん。さて河原にいたりて。馬ゆ車ゆとりおろして。ところせきまでつみおけるを。見る人も。こはいかなるほどこしにかといぶかりけるもことわりになん。さてかたゐ人はかねてまちまうけしにや。とみに出であひて。なれたる袖ながら。ゐやたゞしうして。ちかひ（約）しよりきよらかになしたまひて。くさ〲はにめぐみ給ふことのかたじけなさよ。さてこそおのれがほいとぐるわざなりとて。よろこぶ事かぎりなし。河原にゐなみたるかたゐどもは。をどりあがりて。かゝるおほんめぐみは。かみ代よりもきゝ侍らず。あめのかみのたまものか。つちのかみのめぐみかとうたひなせるもめづらかなり。さてはおくりゆきしものも。いとまつげて立ち歸り。ある志に志か〲とけいすれバ。ほいとげたりとよろこび思ひけり。その日もくれてあくるあした。おもてのかたの志とみあくるほど。なにとは志らず。ちりといへるいやしげなる紙につゝみたるものをなげいれて。その人はいづち行きけん影だにも見えず。志とみあけゝるものこをひらきみるに。こがねなりければ。うちおどろきつゝ。あるじにかくとけいすれば。あるじとりて見けるに。きのふ酒だるにかくしておくりつる。こがねはたひらにぞありける。そのつゝめる紙に。一くさのうたをぞかいつけゝる

まかりしに。ゆくりなくともがきみたり四たりにいであひ侍りしが。それらにいざなはれて。祇園の坊なる。井筒がりのたかどの(樓)にのぼりて。はじめはあらしゑのぐばかりに。ひとくさ二くさのな(肴)にて。さけたうべ侍りしが。いつしかうつゝごゝろ(現心)をうしなひ侍りて。白拍子せうじ(請)させ。しをり栽などうたはせ侍るより。おもはずおほみき(大酒)になりて。さかみづき。まへうしろもわすれ侍り。ともがきにもいつべ(何方)にてわかれけん。それもおぼえ侍らず。たゞひんがし山のほとりをとかくさまよひて。そがうちにたからもうしなひ侍りけん。みち〳〵にはいぬてふものゝよろこぶといふなる。けがれ(吐)し事などなし侍りて。まがきがしまのうちに。たふれふし侍るにや。川風のひや〳〵と身にしみけるに。目さましぬれば。おほいなる松がねをまくらにして伏し侍るなり。かくて酒のゑひもおこたるまゝ。やう〳〵眞心になりておもへば。ありしとも夢なる心ちして。たからはいづちにておとしけん。それをしらで。こはいかなるちなみ(因)ぞや。わめのよこしま神のみいれたらんか。のらのくつね

(野狐)のあだ事なしゝかと思へど。まうしひらかんあてもなし。いざやこと國へもゆきなんとするに。そはまた白浪(賊)のうき名もはづかし。さらばこのくだりをつばらにかいのこ(書殘)して。加茂。桂のみくづ(水屑)ともなりなんと。松原の坊なるともがきのがりゆく道にて。むかへる人に行きあひ侍りぬ。その人のいへるは。とまれかくまれ。君のふかきみこゝろあらんに。一たび御まのあたりなしまうせよと。せち(切)にいさめけるまゝ。げにたらちをたらちね(父母)にもまさる御いつくしみかうぶれる君に。御ゐや(禮)まうしてのち。いのちすつべくもおそからじと。ゑたゝる汗(搔)かいぬぐひてかへりまゐりさぶらうなり。またうしなへるたからの。君のおほん手に侍るもいかなる御事に侍るにか。さらにわいだめ(分別)もなしと。なく〳〵けいす(申上)れば。かたゐ人のいひけんも。わが思ふにもつゆたがわず。ゑか〴〵のことにこそあれど。はじめよりたはりまでかたりきこゑて。こたびはかたゐ人のほい(本意)によて(依)つみゆるすなれば。これゆ後のことをこそふかくもつゝしめよなどきこえければ。はじめて人でゝ

此こがね百あまり五十ひらは。そこにまゐらせん。やつがれ萬々一が富におよばずとも。三百ひらばかりのこがねうしなひ侍るとも。さらにをしとも思はず。そこのきよきこゝろざしを。たゝへまうすしるしなりとてあたへければ。かたゐ人かしらうちふりて。やつがれもしあまりのたからほりすることゝろあらば。など三百ひらのこがねをかへし申さんやとて。さらにことうけもせず。あるじも其こゝろをとみにくみて。やつがれこがねもてゐやとするにはあらず。それのこゝろざしをうけひ(承)侍るうへ。わがこゝろをもうけひたまへと。せちにきこゆれば。かたゐのまうしけるは。さらばやつがれのぞむ事あり。わがごとく河原にさまよひなすもの。百人(モヽタリ)にもありぬらん。これらに一たび。あくまでいひ(飯)たうべさせ。酒のませてんとほりするなり。あすさりての日。(明後)こはいひ(强飯)むして。酒いつたるをそへて。五條の河原へおくりたまへ。是ぞこよなきおほんめぐみならんといふにぞ。いとやすき事なりとうけひて。けふしも風あれてはださむし。そのなれぎぬもすて給へ。ふるくともわがきぬまゐらせんなどきこゆるに。さらにうけひかず。はだへにしむあらしに秋のなさけをしるは。西風に鱸魚をおふも。(張翰遠官見二秋風起一思二故郷鱸膾蓴羹一遂歸)たのしびは同じことなり。久しくかたらひまゐらば。人もくし(奇)とおもひたまはん。またこそおほんかどまではまゐりも侍らめ。さる時は。なだれいを。(頽魚)のこれるいひ(殘飯)もあらんときは。御めぐみたまはらんと。いひもはてずまかんでぬ。それよりあるじは。人もてたからうしなへるしもつをとこ(下男)を見するに。からうじてつれきたりぬ。かのをとこは。今やおほやけにうたへていましめ給ふか。又はおやはらから(兄弟)にもおほせ(課て。うきことを見せたまふやと。まさ(正體)なきこゝろに。身もふるひ。いろはまさを(眞靑)になりてあるを。あるじのねやにまねぎて。なれ(汝)がけふのあやまちはたぐふべきものなし。されどうしなへるたからは。ゆゑありてとみにわが手にいりぬ。こをもてつみゆるし侍るなり。さらばやすきこゝろもて。たから失へるむねを。つばらにきこへよといへるにぞ。よみがへりしごと。こゝろおちいていふやうは。けふしも御つかひからうぶりて。四條の坊まで

ふほどに。あるじさゝてとかくをなだめ。やつがれこそ此いへのぬしにはあれ。申すむねあらばうけひき侍らん。されどこは大路も近く。こと人のくしき(奇)ことにおもはんもいかならん。まづこなたへとせう(請)じぬるに。なれたる袖。けがれたるかたちもはづるいろなく。奥ふかくまゐりて。ゐや(禮)たゞしく。やつがれは加茂河原にさまよひ侍りて。あだ名にかまぼこてふなる小屋にすまひなす。かたゐにて侍るなり。けふ五條の橋のほとりにて。こがね三百ひらに。そこよりそれのぬしへおくりなせる。かいつけもあんなるを。つゝみなせるものをひろひ侍るなり。こは仕へ人のあやまちてうしなへるにこそあらめ。よりてこをかへしまゐらんとてまかりけるが。とみ(頓)に此事をきこえまゐらせんとは思ひ侍れども。うしなへる人のつみなはれんもこゝろぐるしく。さてこそみそかにかへしまうし。このいさをしに。うしなへる人のあやまちをなだめて。のちのいましめをこそたゞし給へ。やつがれがほいに侍るなりとて。みはひらのこがねかいつけつゝみなせるきぬともに。かへしわたへけるこそ。いとめでたきこゝろざしなりけれ。あるじもあまりの事に。たゝ(稱)へつべぎ言ばもなくて。なみだおしぬぐひつゝ。かくふかき御こゝろざしとも知らで。ずさ(從者)どものゝりきこえまゐらせしこそはづかしけれ。などてか御めぐみのこゝろにたがひ侍らん。けふこのたからうしなひ侍るものも。つねにひが(僻)めるものにもあらず。さてこそさはのたからもあづけおきしなり。けふはたまさかに外出し侍るより。さかみつきてのあやまちにぞありなん。とみにたづねよびて。後の事をこそいましめてめ。けふのあやまちは。きみがめぐみになだめおきて。こと人に聞ゆることゆめあるまじ。かへすぐ\もそこのみこゝろざしこそ。たゝへまうさんに言葉さへなし。なれたる袖あかつきたるたもとも。やつがれがまなこには。あやにしきにも。まさり侍るなり。ことぐ\しくかうぶり(冠)さうぞく(裝束)して。ゐやたゞしき人も。そこのきよきこゝろにたぐへば。とをが一つもあるべからず。こはおきぬ。こがねにまれしろ金にまれ。ひろひし人の。おほやけにうたへ出づるときは。そのなかばをわかちて。下したまはる事の御おきてなり。さらば

こがねぐさ

石川雅望著

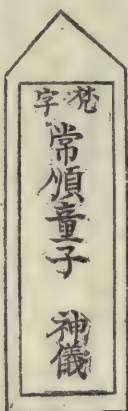
ちかきころになんありける。みやこ五條わたりにさまよひけるかたゐ(乞児)なるもの丶。橋のほとりにてきぬにてつ丶みなせるものをひろひけるが。いとおもかりければ。あやしとおもひなして。あけて見けるに。こがね三百ひらに。かいつけ(書付)やうの物もそへてありけるにぞ。やがてこがねのぬしも。こをおくりやる人の名も。あからにぞしられける。かたゐなるもの丶おもふに。か丶るさは(多)のたからを。いたづらにとりおとすべきやうもあらじ。こはつかいなせるもの丶。此ほとりなるさぶるこ(遊女)にたはれて。おほみき(大酒)たうべさかみづき(遊宴)たるに。眞ご丶ろをうしなひつるものにやあらん。さらば酒のゑひもおこたりて。こ丶ろなほからんには。いのちすつべくもこそおもはめ。そはいたましき事にあらずや。とみにかへしあたへむも。その人をしるべからず。なほこ丶に待たうとも。とめ(尋)てきたらんもはかられず。たゞ時のまもはやくぞ。こがねのぬしがり(許)ゆきてかへしあたへば。つかひなせるもの丶ゆくへもしるべし。このいさをしにそれがあやまちをもこひうけなば。おのれがほいもとぐるなるべしと。なれたる袖にたからおしつ丶みて。あしをそらにかのがり行きつ丶。かどべにたちて。これのあるじにみそか(密)にかたらひ侍ることありて。まかりしなりと申すにぞ。もとよりとめる家にて。つかふるものもさはに。ところせくゐなみ(處狭居並)て。みな口にのり(罵)聞えけるは。か丶るかたゐもの丶身もて。あるじにまのあたり聞えごとせんとはをこの事なり。まさごと(正言)にはあらじ。みだれご丶ろのものにやあらんなどいひて。ことうけなす人もあらねば。猶いらち(心急)て。さなのたまひそ。やつがれこ丶ろみだれたるにもあらず。けふしもそれのがりへ。こがねおくり給ひしことやある。何事にぞ。みそかにきこえまゐらせんとて來つるなりといふにぞ。さらばそのことわりを聞えよといへども。さらにいはずして。たゞみそかに。あるじにきこえまゐらせんとぞいふなる。かくいどみのりあ

分別あるべし

庶人は塚をつくるべからず。碑面にも法名を彫刻して。俗姓名は記すべからず。全く今の俗にならふべきなり。水戸侯の封内にては。庶士以上の外は。俗姓名をきざむことをゆるさず相傳へて。義公の定められし所なりといふ。準據の一つとなすべきにや

追加

少童の石神主の図

梵字 常順童子 神儀

これは佐竹四郎義元の子竹壽丸の墓なり父戰死の時共に害に逢ふ義元の墓の側にあり義元の神主の圖前にあり

右墳墓僻案一篇者賢敎難默止注付候事に御座候宿稿とても無之倉卒之間認候草案之儘進呈候間胸憶之說而已にて定而可招他人之嘲弄事に候歟旁不足御信用事に御座候兼て以其趣御一覽可被下候信名頓首再拜

八月念三日

本書は山田安榮氏の所藏を請ひて原本となしたるなりここに一言して山田氏に謝す

墳墓考　終

れらによる時は。姓をのみ記してもよかるべけれど。墓碑には官位姓名を具記せること。古法なれば。猶諱をも記さるゝ方なるべし。（吉備氏の母の墓誌ども。諱など記さねば。其子の姓名など錄して。其人がら。おのづから明なる故なり。たしかに碑銘の例には。あてがたかるべし）思ふに。七歳未滿の女子は。未だ許嫁せざるものなれば。外に記すべき事跡もあるべからず。されば碑面には。本姓苗字諱之墓と記し、背面には。年號月日卒月日葬など記して。然るべくやあらん（但。卒の字を用ふるは。諸侯の女子に限り。其餘は歿。あるひは逝などの字に從ふべし。凡人ならば。死としるすべし）今推考を以て。其體樣を爰にしるす

菅原氏前田……………姫之墓（これは上等なり。大概四品以上十萬石以上の諸侯の女子にもちふべし）
（諱也下同じ）

源氏島津……………子之墓（これは萬石以下三千石以上に用ふべし。但。萬石以上はしなによりて。姫の字をも用ふべし）

藤原氏上杉……………女之墓（これは三千石以下平士に用ふべし。但。五百石以上は品によりて。子の字をも用ふべし）

大概。右の體樣にあるべし

皇朝の古俗。女子の至りて貴きを。ヒメといひ。其次をコといひ。其次をメと云ふ。卑賤の女子は。メをもそへずしていひしなり。今女子の諱には。必子の字を加へ用ふるごとく覺えたるは。中古よりの誤なり

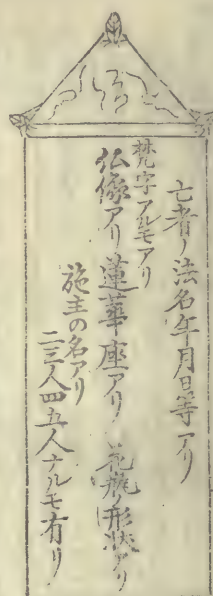
されど是は全く臆說を以て記す所なれば。必あたれりとすべからず

苗字を加へ記すことは。新意に出でしごとくに見ゆれどしからず。今の世となりて。本姓のみを記しては。返りて古意にそむくべし。其由はくだくだしければ。爰にもらす

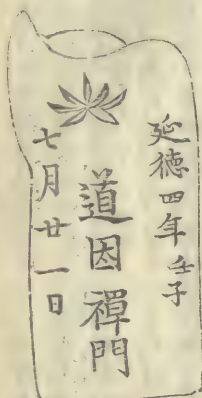
さて其墓の形狀は。圓龍を築きて碑を建て。松樹を植うべし。廻りには石にても。木にても垣を作るべし。中にも石にて作るをよしとす

但墓前には。垣に門あるべし。鳥居の形にてもよし。是は人々の意に任すべきなり。こゝに記せる墳墓の形狀は。大方吉事畧記に見ゆる所を潤色せしなり。四面に溝をほることは。山陵に限れる如くなりたれば。なすべからず。松樹あるは。前に載せたる。因幡國なる德足比賣臣が古墳にも。大なる松樹ありしといふ。旁。古法なるをしるべし

墳壟の大小は。成人のひとゝ。小兒とはおのづから

○佛龕を擬まくる石碑の圖

大概かくの如し形狀は相類せるが多けれども碑面に刻めるさまは一樣ならず佛像を背面にきざめるもあり此体の石碑今に多くあれども佛像あるは希なり

自然の一片石をもて作れる石碑の圖

延徳四年壬子
道因禪門
七月廿一日

此碑は江戸谷中本行寺にあり普庶人の石碑也かくの如く自然石にてつくりたる簡畧の石碑は今に存せる者多し梵字を上にほりたるもありもとより自然石なる故形狀は一樣ならず畢竟士大夫の墓に建つる所の神主に混せざる爲に大覺位神儀など云ふ文字を刻まぬなるべし且は卑賤の者なる故もあるべし

右に圖せる二樣の碑は。何れも庶人の墓に建つるものなり

七歳未滿の女子石碑に諱可記哉否の事

七歳未滿の小兒も墳を築き。石碑を建つることの難なかるべき由は。粗。前文に述ぶるがごとし。さて其碑面の書法。古制に見る所なきは。畢竟三位以下の人に。（七歳未滿の人。三位に升るべきいはれなければなり）碑を建つることを禁せし故なり。されど。今にいたりては。碑を建つる事を制せざるならひとなりたれば。小男女も亦碑をたて。銘を勒すること難あるべからず。たゞ成人のひとに准じて。潤色あるべきのみ。前に載せたる。吉備氏二人の母の藏骨器に。下道國勝。國依二人母夫人と記して。姓名もなく。又吉備公の母の墓誌には葬二亡妣楊貴氏一之墓とありて。諱をば載せず。こ

石碑主の圖

梵字 飯篠伊賀守
長威 大覺位
長享二年戊申四月十五日

此碑下總國香取郡梅木山不斷所にあり擊劍家の大祖飯篠伊賀入道長威の墓なり此神主浮居工夫を多く加へたり

又

物故 善林常頓 神儀

此碑常陸國那珂郡小場村傳燈院にあり當地の城主小場三郎義積の墓なり明應二年四月三日沒す

又

高巖常秀大禪定門 神儀

此碑同所常秀寺にあり同所の城主小場式部大輔義實の墓也義實は天文九年庚子三月十四日戰死す

又

乳勝巖常悅大禪定門 神儀

此碑同郡部垂村の故城にあり城主佐竹四郎義元の墓也義元は義實と同月に戰死す

右に圖せる形狀なるは。士大夫の墓に建つる者なり。またゝ石の龕を作りて。其内に安せるもありときけどいまだみず

も建てたりしが。大寶の制令いでしより。三位以下又別祖氏宗の外は。此事を禁ぜられたり。さて中頃より。貴賤おしなべて。世俗大概是にならはぬはなきことゝなりぬ。（當今。俗間にて石碑のことをなべて石塔といふは。是よりいひならひしなり）されば。前にも云ひし如く。卒塔婆はもと亡者の追福の爲に建つるものにして。墓表の義にはあらざりけれど。おのづから墳墓の標に建立せるものゝさまになれり。世間かくなりしより。塔婆を建つる力なきものは。一片の石を佛龕のさまにほりなし。其面には佛像をきざみ。亡者の法號をしるし。建立の年月施主の名字をもほりそへてこれを墓上にたつる事いできたり。（佛像の下に花瓶をほりたるもあり。又施主の名字の下には。大かた敬白の二字あり。又佛像なれば。背面に彫りたるもあり）かくのごとくなるは。大かた庶人の墓に建てたるが多し。思ふに。塔婆を作るには。雜費多くして。少家の堪へざる所なればなるべし。これも亦亡者追福の爲に。建立せるものにて。墓表の義にあらず。然れども。年久しきならひとなりては。全く墳墓の標のごとく思ひなりければにや。當今世俗の石碑には。此形狀なるがまゝ存せるあり。さて又。鎌倉將軍家の時。禪宗渡來して。彼徒專ら埋葬を司とりしより。士大夫の墓には。石の神主を作りて建つる者まゝいできたり

其圖。後にあらはす。たまたまには石を以て。龕を作り。其中に神主を安ぜしも有りといふ。信名はいまだ見ず。神主は佛家にいはゆる位牌なり。さて武士には。諡といふものなかりければ。その神主には。道號法名をしるせり。其中には梵字。或は蓮華など彫りたるもあるは。全く浮屠の工夫を加へたるなり

是より後。庶士以上の墓には。卒塔婆を建てたると。神主を安せるものと。兩樣になれり。されど猶塔婆を建つる者多しとす。又庶人の墓には。佛龕のさまなる外に。又一種あり。夫は自然なる一片の石にて。法名をきりつけ。左右に年月を記せるのみにて。外に文飾を加へざるものなり。（蓮華或は梵字をほりたるもあり。略圖に下にいだす。この石碑は士大夫の墓に建つる所の神主にならへるものと見ゆ。されど法名の下に。神儀又は大覺位などいふをも記さず。形狀も自然のまゝにせるは。武士の神主に混ぜざる爲なるべし。武士には神主には。必。神儀の字あり。大覺位と記せるもの多く見ゆ。大覺位は。浮圖のいふところにて。神儀神位などいふるゐなり）上にいへる神主に類せるもの。又佛龕の形狀なるもの。則今の石碑の起源なり

津の乙女塚。眞間の手兒奈塚。何れも墳壟を起し丶者と見ゆ。然れども。これらはともに大寶以前の者なれば。制外ともいふべけれど。畢竟令條に。女子の制度をいはざるは。男子と同じき故なるべし。さらば三位以上の女子は。墓を營み。碑を立て丶官位姓名を具記せるを本義とすべし但。女子には。別祖氏宗といふものなければ。これのみ男子と異なり凡。女子の古墳の當今人の知りたるは。備中下道郡なる下道國勝。國依二人の母の墓。大和國宇智郡なる吉備公の母の墓なり。下道郡の墓は。元祿十年。野人墳をあばきて。骨をいれたる銅器を得たり。其銘に以二和銅元年歳戊申十一月廿五日己酉一銘下道國勝。弟國依朝臣。右二人母夫人骨藏器。故知二後人一。明不二可稱破一とあり。又宇智郡の銘は。享保十三年に墳を穿ちて。墓誌を得たり。銘に從五位上守右兵衛督兼行中宮亮。下道朝臣眞備葬二亡妣揚貴氏一之墓。天平十一年八月十二日とあり

信名思ふに。揚貴はヤギにて。八木氏なり。然るに揚貴の文字のれかしきまヽに。假り用ひしなり。今尾張の熱田其外にも。揚貴妃の墓といひ傳ふるがあるは。八木氏の女子の古墳なるべし

此二墓共に。大寶以後の者なり。是を以て。女子も亦圓壟を造り。墓誌ををさむること。男子に異ならざるを知るべし。三位以下碑を建てざるは。前にいふがごとし中古以來。尊卑共に卒塔婆を建つること丶なりては。女子は夫の塔にならひて。同じく塔婆をたつるならひとなれり今に殘れる夫婦の塔。大かたかくの如し又七歳未滿の女子の墳墓の制。今たしかに見る所なしといへども。亦成人の女子に異なる事あるべからず。源爲義の幼息四人の塔。山州松岡山にのこり。豐臣太閤の幼男棄君の塔婆。葛野郡に存せるも。共に別制ある事を聞かず。棄君は。祥雲院玉岩麟公と稱す男兒既に別制なければ。女子も又准じてしるべし。但。墳壟の大小は成人のもの丶墓にならひて。少しく潤色あるべし

當時の石碑起源の事

太古。墓碑といふもの丶なかりし事れ。更にいふべくもあらず。さて雄略帝の時。功臣小子部栖輕の墓に。碑を建て給ひし事。日本靈異記に見えたれバ。猶古き世よりの事なるを知るべし。當時。墳墓の制度いまだ定まらざりければ。位階の高下に拘れらず。人の貧富に從ひ。其心に任せて。墓をも營み。碑を

と。まゝいできたり。其よしは後にいふべし

庶人墳墓の事

上古の法。皆圓壟なり。碑を建つる事を得ざるよしは。前に云ひたるが如し。又溝をめぐらさず。埴輪を用ひず。墓誌ををさむる事なし

但庶人の墓と見ゆるものにも。車塚に築けるかたは。溝をめぐらし。埴輪をも埋めたるがあり。これは一所の貴領。もしくは一門の統領などいふものにて。凡民の例にあらず

但棺中に。劒玉以下。くさ／＼の器財を納むる事は禁せず。或は佛像をいるゝもあり

佛像をいるゝは。佛敎盛になりし後の事なり。是は貴人より庶人迄に達せしと見ゆ。天子の御棺にも御本尊を納むる由は。吉事略義にみゆ。又庶人の墓にいるゝ玉には。甚精巧あり。玉石もて作れるもあり。瓦にて作りたるものあり。皆壺中に。これを棺の内にいるゝなり

其葬穴の制。石を以て上下四方をたゝむ。たま／＼大石を穿ちて。棺とせるもあり。實に石の唐櫃ともいふべきさまなり。其上に。土を覆ひて塚とす。大小一にあらず。或は小石を墳中に築き入れたるもあり

近世古墳をあばきたるを聞くに。大概本文に云ふが如し。官位なき者の墳墓は。車塚に擬して。巨大なるものといへども。墓誌を出だせる事なし。よつて庶人の墓に。墓誌をいれざるを知れり

いま諸國なる驛家の古跡に。長塚が塚といふ往々存せり。或は長者夫婦が塚などいふもあり。皆圓丘なり。いはゆる長者は驛亭の長者にして。庶人の富豪なるものなり。これを以て。粗。庶人墳墓の制を見つべし。中頃。士大夫以上は。大かた石卒塔婆を建つることゝなりて後。民庶は。大かた片石をもて。佛龕の形狀を作り。石面に佛像を彫りなし。其傍に。法名年月などきりつけたるを。墓上にたつるならひとなれり。又は自然片石に。法名年月のみ彫りたるをも建つるがあり。詳なるよしは。猶後に云ふべし

民庶にても。富豪なる者は。塔婆を建つるもあるべけれど。大方は本文にいへるが如し

女子の墳墓の事。又七歳未滿の少女墳墓

石碑の事

古代の制。女子も男子に異なることながるべし。攝

孫被管の輩など留住せし故なり

なべて國司なる輩も。三位以下は碑を立つることなければ。圓龍をいとなみしのみなるべし。墓誌ををさむる事の禁なきよしは。前にいへるがごとし さて中頃佛教我國に流布してより。尊卑の別なく墳上に石の卒塔婆を建つてことといできたれり。もと卒塔婆を建立せるは。其人追福の爲にする業にして。墓碑の例にあらざれば。三位以上以下の分別なく。庶士大夫も皆卒塔婆を建つるを以て常とせり 卑賤の者は。塔婆をば建てざりしを見ゆ。是その雜費を給するに堪へざればなり。猶後に云ふべし 又諸國の守護人は。鎌倉右大將家の時に。始めて置かれし者なれば。是に卒塔婆を建つるをならひとして。別に墳墓の制あることなし

今洛中洛外に。公卿大夫列侯郡牧の古墓多く存せり。大方石の婆塔を建てたり。又江州番場の蓮華寺に。北條仲時以下大名諸士の墓數十あり。何れも塔婆を置けり。又薩州島津莊に。島津家の始祖忠久の父。入文字民部大輔廣言。及其妻丹後局の墓に。從者數人の墓ありて。何れも塔婆を建てたりと云ふ。常陸の府中にも。常陸大椽家數代の墓ありて。悉く塔婆ありその餘は。信名が親覩する所。大名將士の墓。皆塔婆なり。今相模國石橋山など。眞田與市義忠。及其郎等文三が墓と云ふあり。其制作。當今の石碑の如し。されば。是は論ずるにたらず。亦吉野拾遺に。楠正行が墓に。或人の書き付けたりとて。俳諧歌一首をのせたり。楠の木の墓のしるしを來て見れば。實に石とはなりにける哉といへる歌なり。是はいかなる制の墓表なるをしらざれども。大かたは卒塔婆を建てたるなるべし

さてその卒塔婆には。供養の年月。亡者の法號。建立施主の名などをきりつけたるもあり。梵文。或は經文を彫めたるもあり。その體一樣ならず

但亡者の俗姓名を彫めたるものは。未。見る所なし。先年土州にて古き塔婆を堀出せることあり。それに源義秀といふ名ありとて。或人摺寫しもて來て。信名にも示せしか。その字形いかにも疑がはしき者にて。いたづらに彫りそへたるにやと思はれしなり

鎌倉將軍の中比。禪宗渡來せしより後。石の神主を造り。道號法號をきりつけ。士大夫の墓表となすこ

る那須國造韋提の墓等なり。磐井が墓のことは。筑後風土記に。上妻縣南有二筑紫君磐井之墓一。墳高七丈。周六丈。墓田南北各六十丈。東西各四十丈。石盾各六十枚。交陣成レ行。周二匝四面一。當北有二一別區一。號曰二衙頭一。裸形伏レ地。號曰二偸人一。側有二石猪四頭一。號贓物一。亦有二石馬二匹石殿三間石藏二間一と見ゆ 釋日本紀に引たり 石人。石殿。石獸等今猶存するものありと云ふ。磐井は繼體帝の時筑紫の君なり。驕奢にして後に誅せられし人なれば。其墳墓の制過分なるも推して知るべし 磐井が事國史にみゆ 又那須の古墳は。水戸義公の時。始めて顯はれし所なり。其頃。野人古家をあばきて銅器數品を掘出せしに。又其側にて。古碑の橋となりてあるを得たり。義公命じて元のごとく墳墓を封じ。碑も其上に建てしめたり。いはゆる國造の碑なり。銘文に朱鳥四年己丑四月。飛鳥淨御原大宮。那須國造追大壹。那須直韋提。評督被レ賜。歲次庚子正月廿一日。壬子日辰節物故。意斯麿等立レ碑。銘レ德云爾。云云とあり。

此碑を得たりし時。朱鳥四といふ三字。よみかねたりしを大金何某といふ者。みだりにほりうがちて。永昌元と云ふ文字の如くに造りなせり。故に。異朝の年號を用ひしと思へるものまゝ聞ゆ。されど。よく〳〵眼をさだめて見る時は。朱鳥四の字形おのづから見る所あり。此三字。餘の字面よりは際だちて。低く見ゆとぞ。是は大金がいたづら業をなし。時にしかなれるなるべし

此韋提は。孝德。天智の頃。那須國造なりしを。天武帝の時の評督になされし人と見ゆ。國造といふは其國の君なり。評督は郡の大領なり この二墓は。大寶以前一國の君たる者の墓なり。制度定まらぬ以前なれば。位階の論もなく。碑をも建てたりしなり。夫より郡縣の法。やうやく定まりて。國々には國司を遣はされ。年期を定めて。或は六年を限り。或は四年を限れり 各國を治めしむる事となりければ。任限滿ちぬれば。頓て歸京せる故に。國司の墓とてたしかなる古墳の國々に存せるは。多く聞えず。たま〳〵在國の間に卒せし者も。骨をば京師に送りて葬れるならひなればなるべし。畢竟任國には祀をいたすべき親族なきが故なり

源滿仲朝臣の墓。攝津に存し。賴信。賴義朝臣等の墓。河內に殘れるは。彼國に莊園もありて。子

は。山陵に限りて。凡人にはあたはざる事となり但是より前にも凡人の墳墓壯大にして。全く山陵に似たるをば驕奢の事なりとて。いまれたりしなり。和名抄に。日本紀私記を引きて。山陵（美左々岐）埴輪（波邇和）山陵紀作二埴人形一。立如二車輪一者なりと見ゆ。是は此制度山陵に限れる定となりて。後の記文なり。如二車輪一とは。墳墓のめぐりに輪をなして埋めしを云ふなり。今存せる車塚の埴輪。皆かくのごとし

いはゆる大寶の令は。凡三位以上。及別祖氏宗（謂別祖者別族之始祖也。氏宗者氏中之宗長也）並得レ營レ墓。以外不合と見ゆ。又墓皆立レ碑。記二具官姓名之墓一とあり。（別祖は家分れの始祖なり。氏宗一つの長にて。いはゆる氏長者なり）是より後。三位以上別祖氏宗の外は。墓を造る事を得ざるならひとなりたり。されど。これは葬儀を嚴重にし。墳墓を壯大にし。碑を建て姓名を勒することを制止せられしのみにて。圓壟を造り。墓誌を納むるやうの事をば禁ぜられしにあらず。其證一二を爰にいふべし。先河内國なる高屋牧人の墓誌に。故正六位上常陸國大目高屋連牧人之墓。寶龜七年歳次丙辰十一月乙卯朔廿八日壬午葬とあり。又因幡國法美郡なる伊福古部徳足比賣の墓誌に。（安永三年古墳をあばきて得たる所なり）因幡國法美郡。伊福古部徳足比賣臣。藤原大宮御宇大行天皇御世。慶雲四歳次丁未春二月廿五日。從七位下被レ賜。仕奉矣。和銅元年次戊申秋七月一日卒也。三年冬十月。火葬。即殯二此處一。故末代君等。不レ應二崩懐一。上件如レ前。謹錄碑とあり。これ皆大寶以後の事にて。何れも六位七位の墓なり。又和銅元年に。葬れる吉備國勝。國依二人の母の墓。（大和國宇智郡にあり）及天平十一年に葬むれる吉備眞備の母の墓（備中國下道郡に有り）何れも墳壟を起しゝと云ふ。又兩墓何れも墓誌ををさめたり。（此二墓の事後に注せり）これらの墓ともに制令いでし後にあり。されば男女の差別なく三位以下の者も。圓丘をいとなみ。墓誌ををさむるのみの事は制外なるをしるべし。太古の世には。貴賤なべて墓碑のなかりしことは。今さら云ふに及ばされど。或は樹を植ゑ。或は杭を建てゝ。標とせしなどやうの事はありしなるべし

國司守護人等の墓。古今差別の事

大寶以前諸國の國君等の墓の。世にしれる者は。筑後國人形原なる筑紫君磐井の墓。及下野國那須野な

墳墓考

中山信名著

大古墳墓の制大略

皇朝にて。大古の世より墳墓を築きしことは。日向の山陵嚴然として。今に存せるを以て明なり。凡。墓を築くの制。宮車に似たるものあり。兜に類せるものあり。中にも車に似たるもの多し。何れもめぐらすに溝を以てす。當今諸國に古家墳墓に車塚。兜塚等の稱あるは。此故なり。車に類せるは　のごとく。ひくき方轅に取りなしたるなり。兜に似たるは。　のごとく。高きを鉢とし。低きをシコロに取りなしゝなり。（兜塚には三段に築けるもあり）宇治拾遺に。クツカタの塚といへるは。即ち車塚なり。その形狀亦靴に類せるを以てしかよべるなり

何れも高き所に尸をさむ。一説に。車塚は。文官の墓。兜塚は武官の墓なりと云ふは。後世の附會にいでたる説にてよからず。大古の世決して文武官の差別ある事なし

たま〳〵自然の丘陵を穿ちて。墳墓に用ひしもあり。（尸を納むるには。一大石をほりて。棺につくれるもあり。又上下四方に石をならべて棺とせるもあり）されど。大方は前にいへる制造のごとし。上古の貴賤の別なく。皆この制を用ひたり。但。其大造なるものは。一所の貴領たるもの。もしくは豪者の墳墓にして。凡民はたゞ圓壟をつくれるのみなり。（諸國なる古墳の内に。車に似て大造なるはすくなく。圓壟は多きを以てしるべし）魏志の倭人傳に。其死有レ棺無レ槨。封レ土作レ冢とみえたるは。我國の古法を彼土にも傳聞せしなるべし。墓をよみてツカとし。亦古言に墓をオキツキといへるは。ツカツキ何れも築の意なり。オキとは尸を置の心にて。もとより尺を納むべき爲に。築き立てたる所なれば。しかよびしなるべし紀傳（道の讀法に。葬をオクとよめり。今の辭にトリオクといへるも。此遺言なり）垂仁帝の時。殉をとゞめられしより。埴輪をつくらしめて。これを陵墓の側に埋むるせいいできたり。（埴輪は埴つちもて作れる人形なり。この事は國史及菅原氏本系帳にみゆ）たゞ皇親のみにあらず。諸國の豪民また是にならひて。まゝ埴輪を用ふる者あり。（今諸國なる車塚の傍より。間々埴輪を掘り出る事あるを以て知るべし）當時いまた墳墓の制度定まらざりしかば。貴賤通じて同制を用ひし者なり。大寶の令いでゝより後。墳墓宮車にかたどり。又埴輪を用ふる事

集在レ左。如或不レ勤負ニ此燈火一
楊升菴外集に見えたり。しかれどもことに貧困にせまりては。あるひは夜學に燈火のそなへなきに及びては。螢をあつめ雪に映ずるに至れり。今そのたぐひ數條をこゝにしるす。後進のものかならず貧窶をもて。學を廢することなかれ

壁を穿て書を讀む

西京雜記云。匡衡字稚圭。勤レ學而無レ燭。隣舍有レ燭而不レ逮。衡乃穿レ壁引ニ其光一。以レ書映レ光而讀レ之

雪に映じて書を讀む

孫氏世錄云。康家貧無レ油。常映レ雪讀レ書（蒙求註引）

螢をあつめて書を照す

晉書云。車胤恭勤不レ倦。博學多通。家貧不ニ常得一レ油夏月則練囊盛ニ數十螢火一。以照レ書。以レ夜繼レ日焉

糠を燃して書をよむ

南齊書云。顧歡八歲誦ニ孝經詩論一。及レ長篤志好レ學。毋年老躬耕誦レ書。夜則燃レ糠自照

月の光に隨ひて書を讀む

南齊書云。江泌少貧。晝日斫レ屧。夜讀レ書隨ニ月光一

宋史云。陸佃字農師。越州山陰人。居貧苦レ學。夜無レ燈映ニ月光一讀レ書。躡屩從レ師不レ遠ニ千里一過ニ金陵一。受ニ經於王安石一

薪を燃して書をよむ

唐書云。畢誠蚤孤。夜燃レ薪讀レ書。母䘏ニ其疲一奪レ火使レ寐不ニ肯息一。遂通ニ經史一工ニ辭章一

木葉を燃して書を讀む

唐書云。柳璨字炤之。公綽族孫也。爲レ人鄙野。其家下下以ニ諸柳一齒上。少孤貧好レ學。晝採レ薪給レ費。夜然レ葉照レ書。彊記多レ所ニ通涉一

明世說新語云。鄒智居ニ龍泉菴一。貧無ニ繼晷之給一。掃ニ樹葉一蓄レ之焚以照。讀レ書達レ旦如レ是者三年。遂成ニ大儒一

竈火を吹きて書を照す

天寶遺事云。蘇頲少不レ得ニ父意一。常與ニ僕夫一雜處。而好レ學不レ倦。每欲レ讀レ書。又患レ無ニ燈燭一。常於ニ馬廐竈中一旋ニ吹火光一。照レ書誦焉。其苦學如レ此后至ニ相位一

天保十二年辛丑の歲秋分の日

山崎美成しるす

世事百談 終

和歌に點かくるに可否を對ふるに。加點とてそのよろしきものへ點を加ふることあり。また廻文散狀など領諾して。その書面をかへすをりにも。加點とて勾を懸くることあり。これらをすべて點するといふは古實に違へることとなるべし。古書を考ふるに。懸鉤といひ引墨ともいへり。さて懸鉤といへるは。その點のかたち翠簾(みす)の鉤のごとくに點ずるをいへり。山槐記 執筆要 云。勘文並申文。懸鉤樣「　」。又說「　」。可レ用二何樣一乎之由。申二相府一之處已兩說也。但以レ云レ勾知レ之。可レ橫二翠簾鉤一歟。可レ用二端樣一之由有レ答云云。また達幸故實抜 陣右筆問事 に。懸鉤樣事。永萬元正廿一日功過定。予懸二鉤於表紙上一文。勘解由大勘文了。如レ此懸レ之 資仲抄懸樣如レ此也。然而鉤體以レ無二割目一爲レ善云々とあり。これらを見て懸鉤のやうをしるべし。また引墨といふは玉勝間に。封字を書くべき所に〆とかくことは。北山抄に封字のかはりに近代は忽引レ墨といふことありといへり。菟玖波集に

墨を引くかと見ゆるくろ髮

思ふすぢかきやる文のむすびめに　良阿法師

と連歌の附合などにも。文にすみを引くといへり。三中口傳に引墨懸事也。但非二秘藏事一不レ書レ封して。引墨也ともいへり。引墨といふは。〆または夕などの體のことをいふ。今公家方にて白紙にものを包みていださるゝをり。各右二やうの引墨あり。或人云。唐書の中に斜封といふことあり。引墨のことならんといへり

苦學

古人苦學のもの少からず。その圓き枕に睡りをさまし。戶を閉ぢて人にあはざるの類ひ。あるひは。勤仕のしげく活計のいそがはしきにいたりては。夜をもて日に繼ぐ。わが邦のいにしへ大學寮の書生に學文料をたまふ。これを燈油料といへり。延喜式に見えたり。またともし火ののぞみともいふこと。續世繼物語にあり。なべて晝のほどより夜は物しづかにこゝろおちゐて。書よむにはことにたよりよければ。閑人の兼好法師などすら。ひとりともし火のもとに見ぬ世の人を友としてなどいひたり。晁無咎が書燈銘に

武子聚レ螢孫生映レ雪。雪固易レ消螢亦易レ滅。惟此銀釭不レ斂二其光一。黃簾綠幕永夕煌々。經史在レ右子

も。古人云。工その事をよくせんとおもへば。必まづその器を利くすといへり。已に晉の王羲之與二謝安石一尺牘に。復與二君此章草一。所レ得極不レ爲レ少。而筆至惡殊。不レ稱レ意。かゝれば右軍の能書をもて。なほ既已にしかり。紙筆を擇まずして。佳を要するは通論にあらず

見々ず書

世人手の拙きを蚯蚓のやうになどいへり。榮花物語に。姫みやみゝず書きにせさせ給へる。これいかであての御もとに奉らんとのたまはするにつけても。ほとゝぎすにやつけまじとあはれに御覽ぜらるとあり。歌には。信明集云。返事にみゝず書きしてれこせたれば

わびしきに戀にまどへる心には
　そのことゝしも見えずぞありける

と見えたり。そは文字筆力なく。蚯蚓の蟠行ごとしといふことにて。わが邦のみならず。はやく唐土にも見えたり。續書譜に。草體をいへる條に。唐太宗云。行々若レ縈二春蚓一。字々如レ綰二秋蛇一。惡レ無レ骨也といへり。陸放翁の喜三小兒輩到二行在一詩に。阿綱學レ書蚓滿レ幅。阿繪學レ語鶯囀レ木なども見えたり

和歌に印を押す

兼好法師が自筆の三社の和歌といふものあり。その歌

すなほなる心をまもる男山
　榮ゆくことのあらんかぎりは
五十鈴川流れの末も絶えやらず
　たまらぬみづに光りあるつき
むかしより跡たれそめしみかさ山
　祈るそでにもかよふかみ風

この歌のかたはらに。兼好といふ篆書の印あり。そはかならず正しきものにはあらざるべし。さて和歌に印おすことはあるまじく思ひゐたりしに。照高院道晃親王の。竹の畫に和歌をかゝせ給ひて。御名はなくて印ふたつおしたるを見しことあり。これは畫賛なれば例にいなりがたし。後烏丸光廣卿の歌に三角なる朱印を押したるが。浪華の雜喉塲なるクる魚屋某の藏にありしと。蜀山翁はなしなり

光廣卿印

懸鉤引墨

きの怪異のしわざにこそとて　家内のものにかのあやしきもの語して。われは心を納めたればこそ。妖孽隣家へうつりて。その家のあるじ怪しみ驚きし心より。邪氣に犯されたりと見ゑたれ。これ世俗のいはゆる通り惡魔といふものといへり。またこれに似たるとあり。四ッ谷の邊類燒ありし時。そこにすめる某が妻。あるじの留守にて時ははつ秋のあつさもまだつよければ。只ひとり緣先きにたばこのみつゝ夕ぐれのけしきをながめゐたるに。燒後といひ。わづかのかり住居なれば。大かた礎のみにて草生ひしげり。秋風のさわ〳〵とおとして吹き來りしが。その草葉の中を白髮の老人腰はふたへにかゞまりて。杖にすがりよろぼひつゝ笑ひながらこなたに來るやうすたゞならぬ顏色にて。そのあやしさいはんかたなし。この妻女心得あるものにて。兩眼を閉ぢこはわが心のみだれしならんとて。普門品を唱へつゝ。心をしづめ。しばしありて目をひらき見るに。風に草葉のなびくのみ。いさゝかも目にさへぎるものさらになかりしに。三四軒もほどへたる醫師の妻俄に狂氣しけりといへり。これもたなじ類ひの怪異なるべし。むかしより妖は人よりおこるといふこと亦うべならずや。鳩巢云。陰陽五行の氣の四時に流行するは。天地の正理にて。不正なけれども。その氣兩間に游散紛擾して。いつとなく風寒暑濕をなすには。自不正の氣もありて。人に感ずるにてしるべし。されば天地の間に正氣をもて感ずれば。正氣應じ。邪氣をもて感ずれば。邪氣應ずといへり。色にまよひて身命を失ふもおなじことわりとしるべし

能書不レ擇レ筆

能書不レ擇レ筆といふ語は。李笠翁東ニ同學一書に見えたりと。蜀山翁の筆記にあり。この頃唐書をよめるに歐陽詢傳に。褚遂良亦以レ書自名。嘗問ニ虞世南一曰。吾書孰ニ與詢一。答曰吾聞詢不レ擇ニ紙筆一。皆得レ如レ志。君豈得レ此。また裴行儉傳に。行儉常曰。褚遂良非ニ精筆佳墨一。未ニ嘗輙書一。不レ擇ニ筆墨一。而妍捷者余與ニ虞世南一耳とあり。これ即能書筆を擇まずといふに同じ。また楊升菴外集に。太白浣沙女詩。一雙金屐齒兩足白如レ霜。又越女詞云。屐上足如レ霜不レ着ニ鴉頭襪一。又云。東陽素足女再三張愈光戯答云。太白可レ謂ニ能書不レ擇レ筆矣。聊記以餉ニ一笑がと見えたり。しかれど

分爲レ三。一曰ニ大税一。二曰ニ糶穀一。三曰ニ郡稻一也。この税ハ一國々々に貯へおくなり。たとへば十五萬束の稻を民に割りつけて貸し。その元を大税といひて。毎年に不レ動おくなり。さて貸したる利を取りて京へ上る故の名なり。右の大税を田力といふは。春百姓のかりて田を耕す力とするよしなりと。祝詞考にいへり

通り惡魔の怪異

世に狂氣するものを見るに。大かたは無益のことに心を苦しめ。一日も安き思ひなくて。はてには胸にせまり。心みだれて狂ひさわげるなり。されば男たるものには先はなきはづのことにて。婦人にはまゝあることなり。しかれども男女にかぎらず。何事もなきにふと狂氣して。人をも殺し。われも自害などすることあり。それはつね〳〵心のとりをさめよろしからざる人の。我と破れをとるに至るものなり。かゝれば養生は藥治によらず。平生の心がけあるべし。こゝろを養ふこと專なるべし。その。ふと狂氣するは。何となきに怪きもの目にさへぎることありて。それにおどろき魂をうばはれ。おもはず心のみだるゝなり。俗に通り惡魔にあふといふこれなり。游魂變をなすの古語むなしからず。不正の邪氣に犯さるゝなり。こは常に心得あるべきことなり。むかし川井某といへる武家。ある時當番より歸り。わが居間にて上下衣服を着かへて坐につき。座前をながめゐたりしに。椽さきなる手水鉢のもとにある葉蘭の生ひしげりたる中より。焔炎々ともゆる三尺ばかりその烟りさかんに立ちのぼるを。いぶかしく思ひ心つきて家來をよび。刀脇指を次へ取りのけさせ。心地あしとて夜着とりよせて打ち臥し。氣を鎭めて見るに。その焔のむかふなる板屛の上より。ひらりと飛びおりるものあり。目をとめて見るに。髮ふりみだしたる男の白き襦袢着て。鋒のきらめく鎗打ちふり。すつくと立ちてこなたを白眼たる面ざし。尋常ならざるゆゑ。猶も心を臍下にしづめ。一睡して後再び見るに。今まで燃え立てる焔もあとかたなく消え。かの男もいづち行きけん。常に變らぬ庭のおもなりけり。かくて茶などのみて何心なく居けるに。その隣の家の騷動大かたならず。何ごとにかと尋ぬるに。その家あるじ物にくるひ。白刃をふり廻し。あらぬことのみ罵り叫びけるなりといへるにて。さては先

もし背かば。此牛のごとくきり屠らるゝ罪にあたらんと。諸神に誓ふなり。周禮左傳等にくはしくしるせり。日本にては天照大神素盞嗚尊と誓ひましませば。神代にもありけるなり。始めは盟誓といひしを。人の代の末にいたりて。白川鳥羽の御時も起請文といふことあるよし。貞永式目起請の裏書にありといへり。これによれば中むかしよりのならはしと見えたり。あるひは慈恵僧正よりはじまれりともいへり。さて起請文に一枚起請二枚起請。また七枚起請百枚起請などいふことあり。義經記に。土佐坊が七枚起請かけること見ゆ。後のものながら室町殿日記。豐太閤朝鮮文書にも七枚起請といふこと見えたり。七枚起請の文をばかつて友人より得てもてり。文明年間のころ書きたるを寫しつたへたるなり。七枚各文章別なり。そは誓言いく通にもしるしたるものなり。おもふにそのかみは尋常のことは一枚にかき。その誓ごとの重かるは幾枚にも。かへす〴〵書けることと見えたり。源平盛衰記に。百枚の起請といふことあり。驢鞍橋に一枚起請二枚起請三枚起請といふことも見ゆ。これにて法然上人の一枚起請といふもこれにて明けり。起請といふ文字は。後漢書劉盆子傳に。其餘不レ知レ書者起請レ之といふより出でたり。因に云。起請文の前書に。伊豆箱根の兩社をしるすことは。北條家盛なりし頃のならはしにて。關東には今にそのまゝ沿襲して改めざるなりといへり

無盡錢　たのもし

今無盡と稱する講あり。たのもしともいへり。無盡錢といふ名目は。はやく建武式目に見えたり。さてたのもしといふことは。田物代の約語にて。田實の意にて。これはむかしの國制に貧富强弱を平等に配り合せて。互に伍人組を立てたのもしをもて出だしあひ。村役所に預かりおき。貧民のもの租なく食なく進退に迫るときは。その錢を役所より出しあたへ。一郷一村の中を結び合せ。立て行くゆゑ。富有なるものは一生涯にその田のもしを取ることなく。年々賭け入るゝことのみなせり。是上古の貸稅の制度の遺れるなり。貸稅のことは書紀の天武記の詔に見えたり

貸稅

租稅といふは今の年貢のことなり。古語にちからといふ。賦役令の義解に。凡官稻之源出レ自二田租一。而

いふを手綱にその染を用ふるからに。手綱染とはいへり。さて小六染といふよしは。嵐小六といふ俳優の好みて常にこの染を專ら用ひたれば。とり染をやがて小六染といひならはしたり。石疊を市松といふも佐の川市松が好み用ひたる故なり。猶その色に路考茶大和柿の類もみな俳優より出でたり。すべて物の名の俗稱は轉訛してあらぬとになり行くこと少からず妾は女子にかぎることなるを男めかけあり。いはれなき詞とれもうに。唐土に男妾といふ熟字あり。遊山の字は蒙求にいでゝ。山に遊ぶこと勿論なるを。舟遊山といへり。これも唐土に遊山舫といふ文字あり

文七元結

元ゆひに文七元結とて。上品の稱とす。俗説に。これは切元結のことにて。ふるくは輪元結のみ長きまゝ縮ねたるを。浪華の俠士雁金文七といふもの。常にさかり場にはいかいし鬪諍あれば。生きて再びかへらざるの勇を示さんため。元結をゆひ切り。その死を決するをあらはしゝかば。切元結の短かきを文七元結と人みないへりとかや。この説ひがことなり。案ずるに。紫一本に。永坂の下にて文七髻結とて名物の元結をこしらふなり。文七といへるものゝこしらへ侍るかとたづねければ。ある老人の物語に。文七といふは。元結にこしらふ杉原紙の印の名なりと申されき。元結車にてよるなりと見えたり。かく彼俠士の時代よりふるき名目なり。この説を正しとすべし

四十二の物爭ひ

四十二の物爭といふ歌ものがたりの冊子あり。そは似たるものふたつを問にて歌をよめるなり。遠碧軒隨筆に。四十二年の禁忌のこと書物に見えず。雙六の釆の目兩箇にて四十二あり。されば四十二までは。王老衰微の爭あり。これを過ぐれば法外の心にて。何事も足らずと云ふことなしと云ふかとの俗説あり。是おもしろしといへり。これにて物あらそひの數を四十二とすることの據。あきらかにしられたり

起請

徒然草に。起請文といふこと法曹には。その沙汰なし。いにしへの聖代すべて起請文につきて行はるゝ政はなきを。近代此事流布したるなり。野槌に。起請文といふこともろこしに盟誓をたてゝ牛馬の血をすゝり。其詞をしるして土にうづみ。約するところ

頃より定りたる詞にか。むかしは幾寸にてもなべてきとのみとなへり。雑和集に

逢坂のすきまの月のなかりせば。

いくきの駒といかでしらまし

私云。馬は四尺を馬たけといふを。それに一寸まさりたるをば。一きとし。八寸まさりたるをばやきといふなりと見えたり。幸若の舞の高舘志田などの詞に。名馬のことをいひて。さんのへ（三戸）だちのしらあしげ（白芦毛）七き。八ぶんあけ六さいにひきよせゆらりとのつたりけりといへり。この七き八ぶんは七寸八分なり。幾寸にてもキといへることの證とすべし。おもふに寸をキとよめることは。古事記傳に。寸を伎といふは刻むの意なり。萬葉集に。玉刻春と伎に刻の字を書けるも。その意にて。伎といふぞキダキザムなどの本語なりといへり。ある人は。寸は樹の省字にて。その訓をとれるものなるべし。漢土にも此例あり。古鏡に鏡を竟。鑑を監に作るものまゝありといへり。これも一説に備ふべし。されど鏡鑑の省文には別に論われど。こゝにえうなければいはず。因に云。錢の壹文の半をきなかといへることは。算勘の詞に。壹文半を壹文五分といへり。そは五分は一寸の半なればきなかとはいふなり。寸半の約語なるべし。再びおもふに。たゞ半が五分なればきなかとのみいひてはくはしからず。錢の徑りは壹寸なることと開元錢よりの定めにて。吾邦も同じければ。もと尺度よりいでゝ壹文の半を五分ともきなかともいへるとしるべし

手綱染

斜に筋を染めたるを手綱染といひ。世俗に小六染などもいへり。正しくは取染といふが本名なり。諸時當用抄に。手綱はとり染にいたし候。まづ手綱の先壹尺ばかり萌黄。それより一寸ほどづゝ淺黄白萌黄に。横筋をつけ染め候。腹帶同前。また弓馬聞書に。とり染手綱本色尺不レ定五寸ばかり一色に染めて。又一寸づゝ段々に三つばかりいろ〳〵に染め候て又五寸ばかり一色に染むるなり。色は何にてもくるしからず。このとり染めはれの時軍陣のときならでは不レ用候。小笠原備前入道宗信傳なり。また上覽抄に。手綱はかちんにて筋を一寸まだらに可レ付。これをとり染めといふと見えたり。かゝればもとより染めと

やといふに餅せおもへば。西國の俗のみにはあらぬか。ある冊子に大隅の片里にといひて。五月五日とて黒米の餅を包みけるは。これなん上がたに。見しまこもの粽のかはりなるべきとあるなど見えたるにても。江戸のみのことゝも。思ひがたく。もとより木の葉はすべてかしはといふこと。いにしへの詞なれば。いづれの木の葉にもあれ。餅つゝみたらんは。かしは餅とゝなへんも難なかるべし

牡丹餅　萩の餅

ぼた餅は牡丹餅とかけるが正字にて。かのあんをつけたる餅を盆に盛りならべたる形の牡丹花のごとくなれば見たてゝ名をおほせしなり。一名を夜舟といへり。その意はいつつく(舂、著)やらしらぬといふことなりといふ隱語なり。また圓めずに器にもりて。その上に小豆のあんをかけたるを萩の花といふ。女詞にはおはぎともいへり。これは萩の花に似たればなり。下總の邊にては。俗にかい餅といふ。これは餅のうちにてことさらにやはらかなるをもて。粥餅の訛れるなりといへり

海　鼠

海鼠の生なるを生海鼠(なまこ)。湯でゝ熬(いり)たるを海熬鼠。串にさして干たるを串海鼠といひ。奥州金花山の海邊にあるもの別品にて。そのほしたるを金海鼠とて。世に賞美することとなり。又虎海鼠といふ一種あり。六俳園立路隨筆に。大磯の驛にて綠泰寺といふ寺の門前に。小牌をたてゝとら子石と記しあり。行きて見れば彼生海鼠のとらこ(海鼠虎)に似たる形の大石なり。貫目など付きて小さき藏に卓にのせてあり。その藏の壁に此石持ちあげたる人々の名反故の如くひしとしるしてあり。力量を試むるかと問へば。左にあらず。此石を持ち得し人は戀の叶ふなりといふにぞ。これをもて世には大磯の虎石と云ふなめるとあり。かゝれば今彼寺にて。大磯の遊女虎が石といひて。旅人に見するはひがごとなり

寸をきと讀める

馬の丈四尺を定尺とし。それよりあまれるは一寸より三寸までを。スンといひ。四寸より九寸までをば寸といはず。キといひ。又八寸より九寸までを又スンといへるよし。今の馬乘人はいへど。そはいつの

も又ふるき世よりのならはしにもあらざるにや。ものに見えたることなし。徳元が俳諧初學抄に。五月の季に見えず。かゝれば寛永の頃より後のことか。寛文年間のものとおもはるゝ酒餅論といふ冊子に。彌生は雛のあそびとてよもぎの餅や。端午にはちまきのもちや。柏餅。水無月はじめの氷餅。嘉祥のもち云々といふことあり。延寶八年の印本不卜作の俳諧向之岡に。柏餅の句あり

　餅なりけふ世人はをみがく玉がしは　兼豐

　押しならべ兩葉が間やかしはもち　水巴

延寶九年の印本言水作の俳諧。東日記に

　端午の御祝儀として柏木の森冬枯れそむ　盲月

　井樓の山や梢の四方のかしはもち　兼豐

これらの句によりておもふに。この頃よりあまねく節物となりけんもしるべからず。さて予過ぎし文化ころ西遊せしをりから。豐前の中津にて。端午の日にあひたりしが。菝葜の葉に餅をつゝみて家ごとにもこしらへ。餅あき人も賣れるを見たり。名をば何といふにか問はざりし。案ずるに地錦鈔に。菝葜は荆の類なり。葉丸く柿の葉のちひさき如くにて。葉中に三の筋あり。冬葉落ちて春出づ。秋あかく實あり。俗にサンキライとも。又はサルトリバラともいふ非なり。さるとりばらは葉の形。槐の葉のごとく。花色本うこん。花の長さ一尺ばかりにて。針大きくありて。各別の物なり。又の名をかめいばらともいふなり。近ごろ武州秩父の山中へまかりしに。農家客ある度に小麥の粉を水に練り丸くちぎりて。此ばらの葉を兩めんよりあて。柏餅のごとくにしてはうろくに燒きてもちとなし。饗應しぬ。葉をとれば餅に三條の紋見えてあいらし。猶しほらしくこしらへなさばいかにいみじき物ならんとおぼえしまゝに。家の女あるじに是はこの所の名物にや。此葉を用ふるも子細ありやなど問ひ侍るに。聲高に打ちわらひて何條事の候はん。是を龜甲餅といふ。此葉をかめいばらと云ふ。葉の形龜の甲に似て。また齡を延ぶる大事の藥にも入るといへば。食して無毒といひ傳ふと答ふ。さればこそいさゝかの人のこと葉も捨てがたしとは。かゝることにや。おもひ出づれば實てに殊勝なる事もこそあれど。や菝葜は。屠蘇の一味なれば長壽の縁にもなるべし

が師走の月といふ俳書に

月の鼠よめ入りするやむこの山

といふ句あり。これにつきて滑稽の一話あり。荻生徂徠ある人にいへるは。われかつてより讀書に心をひそめ。和漢ともに表紙のつきたらん書によまざるといふものなし。およそ世にしれぬといふものはなきものをと廣言いはれしかバ。その人云。さらバ鼠のよめ入りといふ冊子に。道具持の宰領につきたる侍の鼠の名を棚渡仲右衛門といふ名あり。かゝることにも據あることにやと問ひけるに。されバとよ。そはどぶ鼠の仲間が出世して。足輕になりたるにて。抱朴子内篇に。鼠壽三百歲。滿二百歲一則色白善憑レ人。而下。名曰レ仲といふことあり。その侍鼠も年へしからに。名をバ仲とよべるなりとこたへられしに。ある人もその博識に服せしとかや

箱入娘　錢樹子

幽遠隨筆に。今俗間に深窓に養ひかしづく娘を箱入娘といふハ。竹取物語に。竹取の翁かぐや姫を竹の中に得てうつくしきことかぎりなし。いと稚ければ。箱に入れて養ふといへり。今の世に箱入娘といふ是よりとあり。このごろ舶來の。事物異名錄をよみたるに。明皐雜錄。許子和倡家女。能變二新聲一臨レ卒謂二其母一曰。阿母錢樹子倒矣といふことあり。この錢樹子といへるハことわざに金のなる木といふに同じ。また娘を金箱といふことにもかよひてきこゆ

竹簪

この竹簪は關氏に傳ふるところにして。その家の女子享保年間やんごとなきあたりに宮仕せしころ。拜領の物といへり。或書に云。天正のころより今に及びて。昇平百二十年。世俗の奢侈日にまし。月に長じて。婦女の笄簪。多くは金銀もて造り。玩物および人形手遊までも。金銀箔をもて飾ることなかりしかば。命をくだし禁止あり。また婦女の衣服髹器。みな質素を用ひさせ給へりと見えたり。竹簪の時代と符合す

竹簪
総丈け六寸巾三分五厘　足の丈四寸二分
根のあき二分

柏餅

端午の日に柏の葉に餅を包みて。互に贈るわざは。江戶のみにて他の國にはきこえぬ風俗にして。しか

木偶まはしにたよりよきやうに作り。花見幕の内などにて是を興ずるなり。人形樽の詞を轉じて樽人形といひけるとぞ。西武撰の砂金袋。明暦三年印本に。

影うつせ人形樽のかゞみ餅　康重

人形樽の名はふるくこゝに見えたり。また山岡元隣が寳藏萬治の印本後に幸藏と名を改むの花見の事をいへる條に。こゝら行きかふわび人の人形樽につめ懷辨當にをさめて。花はいづれの情に見つるかしらねども。とり〳〵ほこりがなる顔つきも實に春は春なれやとあり。これらにて人形まはしに用ひしことはいはざれど。人形樽の名のあかしとすべし。また桃青が俳諧次韻延寶九年撰に

前　樂やつこ（奴）隱れて風流林とよふ　其角
附　樽に羽おりをきせてあふぎし　桃青

この句かの樽を人形としてまはすことのあかしなりけり

津輕笛

文政甲申の秋。兒童のびやぼんといふ鐵にて造たる笛を專ら翫ぶとの行はれたりしが。その笛はそのころはじめて造りいだしたるものにはあらで。むかしより邊地などにはもてあそびしものとぞ。翠軒翁筆記に。ホヤコンといふもの薩州にて吹く物。神事に用ふ。岩城八幡にもあり。その形かくの如し。又關東陽話に。百谷といふ人。薩州に遊びしころ。かの地にて見しも同じさまにて。名をシユミセンといへり。その笛の唱歌あり

チウサノベントヽ。カヂキノベントヽ。ノドクビトラヘテ。ビヤコン〳〵

こはいかなることゝもおもひわかねど。ある人は。チウサは中山にて琉球のことか。カヂキハ。加治木にて筑紫の地名なるべしといへど。その外はいまだ考へ得ずといへり

鼠のよめ入り

ふるき繪冊子に鼠のよめ入りといふことをつくりしものあり。今も猶錦繪などにのこりて。たま〳〵見ることあり。こは鼠の異名を嫁とも。嫁の君ともいへるより。作意したるものとおもはれたり。古歌に

秋なすびわさゝのかすに漬けませて
棚におくともよめにくれすな

といへるも。鼠をよめといふあかしなり。また季吟

二つには此人軍法によりて一錢切といふことを始めらる。たとへば一錢を盜めるにも死刑にあつ。刑罪既に重くなりしかば。重罪の輩をは或ハ切腹。或ハ斬罪獄門にかけ。はりつけ火あぶりなど云ふ刑出來たりといへり。これにて一錢切の義分明なりといふべし

樽人形

ある人の說に。延寶。天和の頃のものにやとおもへる浮世繪を見しに。そのおもむき遊女のごとき女の。小き樽に衣をうちかけ。編笠をきせたり。おもふに酒宴などの席にてのたはむれにて。遊女のもてあそびとのみおもひしに。寶暦七年の印本に。繪本吹分

櫻といふ册子に。こゝに載する圖あれは。そのころも猶この戯れありしことゝ見えたり。これによりておもへば遊女のみのとにハあらで。なべて花見野がけなどのをりから。興じもてあそびしなべし。あるる日柳亭翁に。この樽人形のゆゑよしをとふに。翁いへらく。一老人の話に。むかし人形樽といひしものあり。野邊などに持ち行くとき。ふくさやうのものに包めば。その形木偶に似たるをもて名を負せたり。さてその樽に小兒の小袖。または羽織など打ちきせ。人形廻しの戯れをなしゝが。つひにひとつの遊戯となりて。はては酒をいるゝ事をば用とせず。

書籍器物ともに多くこの時に分捕し來れることゝ見えたり。また洞天清祿集に。淳化閣帖既頒行。潭州即摸㆓刻二本㆒謂㆓之潭帖㆒。余嘗見㆓其初本㆒。當㆘與㆓舊絳帖㆒雁行㆖。至㆓慶歷八年㆒。石已殘缺。永州僧希白重摸。東坡猶嘉㆓共有㆓晉人風度㆒。建炎虜騎至㆓長沙㆒。守城者以爲㆓砲石㆒無㆓一存者㆒。紹興初第三次重摸失㆑眞遠矣といへり。吾邦にも弘法大師の益田池の碑を毀ちて城壘の石垣としたるの類にて。唐土にはしば〳〵の兵燹にて古書のほろぶるもの數ふるにいとまあらず。吾邦も安元の火。應仁の亂こそ。またなき典籍の一大厄なれ

小兒の詩

童蒙先習に。やさしきものといへる條に。和朝文祿の頃ほひ兵をつかはし異國をおびやかすことありしとき。人を多く取りて歸朝せし中に。七歲の兒のありしが。夢裏分明歸㆓故鄕㆒雙親向㆑我問㆓扶桑㆒。華鯢樓上一聲響。撫㆑枕猶疑在㆓大唐㆒とぞ作りし。寔にやさしうもあはれにもおぼえたりとあり。この事は已に秉穗錄にもしるして。世人もたま〳〵話柄とせり。猶これよりふるく絕えてよく似たるとあり。臥雲日件錄に。寬正五年二月廿三日。壽向來語。雲州海賊侵㆓大明㆒。投㆓兩小兒㆒來。兄七歲作㆑詩曰。異國更無㆓靑眼友㆒。空江秖看白鷗群。秋風洒㆑淚三千里。吹滿西山日暮雲。弟六歲亦作㆑詩曰。煙水微茫歸路口。滄波萬里在㆓他鄕㆒。與㆑人欲㆑語語音別。終日無㆑言送㆓夕陽㆒。吁。在㆓此方㆒則八十八翁亦道不㆑得乎と見えたり。二書に載する小兒の詩を誦し。そのかみのありさまを想像すれば。實に酸鼻するに堪へたり

一錢切

信長記に。信長卿は淸水寺にまし〳〵けるが。洛中洛外に於て上下みだりがましき輩あらば。一錢切と御定めありてといふこと見えたり。この錢切といふことをおもふに。淸正記に載する。高麗軍中の制札にも。軍勢於㆓味方地㆒。亂妨狼藉輩可㆑爲㆓一錢切㆒とあり。また上總國望陀郡眞里谷村に。天寧寺眞如寺と云ふ上總國曹洞派總錄の寺あり。その寺の門前に禁榜あり。條目の文に。門前百姓於㆓非法有㆑之者可㆑爲㆓一錢切㆒事などゝもあり。これらによりて考ふるに。戰國の時の刑名と見えたり。この一錢切の義詳ならざりしに。讀史餘論の豐太閤のことをいへる條に。

ばいさぎよき死は仕にくきものにて候間。よく〳〵心を武にきざむこと肝要の事

右之條々晝夜可ニ相守一。若右之ヶ條難レ勤と存輩於レ有レ之者。暇を可レ申。速に遂ニ吟味一。男道不レ成者之印を付可ニ追放一事。不レ可レ有レ疑仍如レ件。加藤主計頭清正在判

侍中

僧日遙傳

肥後の本妙寺第三代日遙上人といふは。もと朝鮮國の人なり。文祿二年豊太閤朝鮮征伐の時。加藤總大將として彼地を攻めなびけ。凱旋のときにあたりて雙溪洞の普賢庵にて。ひとりの小兒の居たるを見て。名を問はせたまふに。何ともそのいらへはせで。やがて筆をとりて。獨上ニ寒山一石徑斜。白雲生處有ニ人家一。とかきたるのみ。その時。兒の年十歳なり。清正これを見て奇兒なりとおもひ。わが邦へつれかへれり。生長の後。天資伶俐にして書をも見事にかき。佛門に入り。名を日遙といへり。これ即本妙寺の三代なり。清正の歿後も懇に香花の手向おこたらざりしといへり。本化別頭佛祖傳に見えたり。これ亦清正の蓮宗を信ずることのあつきに出づる所といふべし。先年淺草幸龍寺にて京師妙滿寺の開帳ありしが。その靈寶いと多かりし中に。日遙が眞蹟の題目あり。草體尋常ならず。友人南野摹刻して同好に贈れり

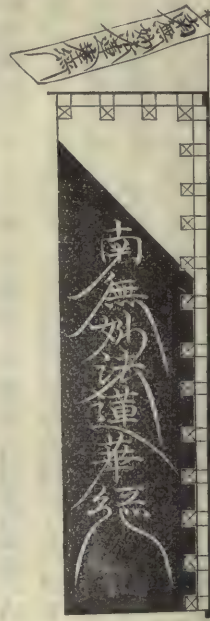
赤國

豊太閤朝鮮征伐の時。彼地のことをいふに。赤國靑國といふことあり。豊太閤軍令に。赤國のこらず悉く一ぺんに成敗申しつくるなど〻も見え。また太閤記。朝鮮征伐記などにも。此詞見えたり。案ずるに。舊聞記に。今度赤國征伐のことは。太閤の命旨にあらず。諸軍の私意に起るとぞ陳じける。此赤國といふは晉州のことなり。朝鮮の繪圖をうつして太閤御覽あるに。國々を五色八色に彩りわけて。歷覽に安からしむ。この晉州をは赤色に彩りければ。赤國とは申しけりとあり。これにて赤國のわけあきらかなり

書幅にて穢を拭ふ　潭帖を砲石とす

甲乙剩言に。劉玄子從ニ朝鮮一還言。彼中書集多ニ中國所一無者一。且刻本精良無ニ一字不レ倣ニ趙文敏一。惜爲ニ倭奴一殊毀至下圖溷之間往々以ニ書幅一拭上レ穢。亦典籍一大厄會也とあり。また三韓記畧に。西韓之士編著素稀。今播ニ上國一者皆壬辰所レ俘などともいへば。かの國の

加藤肥後守

南無妙法蓮華經

公大神儀など、仰ぎまつれるも亦故なきにはあらず。その旗の縮圖諸將旌旗圖といへるものに載せたり。それのみならず。南品川なる妙國寺にも。加藤清正の自筆にてかける題目の指物ありときけり。加藤清正は世にきこえたる文武兼備の名將にて。その傳記は木村又藏のしるしたる清正記といふものあり。いと正しき記錄なり。印本には續撰清正記といふものあり。世には大かた續撰のみ行はれて。寫本にて傳ふる清正記をしる人少なし。この外清正の事の見えたるは。太閤記。朝鮮征伐記。高麗陣日記の類もつとも多し。さて清正の家中へ申し渡しといふもの七條あり。今こゝにしるす

加藤清正家中へ申渡し七ヶ條

奉公の道不レ可二油斷一。朝寅刻に起て兵法をつかひ。食を喰ひ弓を射。鐵砲を打ち馬を乘るべし。武士の嗜み能者には別けて加增を可レ遣事。○慰に出づべしと存じ候はゞ。鷹野鹿狩相撲かやうの儀にて可二遊山一事。○衣類のこと木綿紬の間たるべし。衣類に金銀を費し手前不成旨申すものは可レ爲二曲事一候。不斷身上相應に武具を嗜み人を可二扶持一。軍用の時は金銀を可レ遣事。○平生傍輩つきあひ。客一人亭主の外咄申すまじく候。食は黑飯たるべし。但武藝執行の時は。多人數可二出合一事。○軍禮法侍の可二存知一事なり。不レ入事に美麗を好む者可レ爲二曲事一事。○亂舞方一圓停止たり。太刀を取れば人を切らんとおもふ。しかる上は萬事は一心の置處より生る爲にて候間。武藝の外亂舞稽古の輩可レ加二切腹一事。○學文の事可レ入レ精。兵書を讀み。忠孝のこゝろがけ專用たるべし。詩聯句歌よむ事停止たり。心に花車風流なる手よわきことを存じ候へば。いかにも女のやうに成るものにて候。武士の家に生れてよりは。太刀かたなを取りて死する道本意なり。常々武道の吟味をせざれ

るよしあれば。訶陵は國の名なること明なり。頻伽は鳥といふことの梵語なり。その證は十誦律に頻迦軍持とあるを。南海寄歸傳に鳥頭瓶と譯して。かけるにてもれもふべし。かゝれば訶陵頻伽は。訶陵國に產する鳥といふことなるを。その聲のうるはしければ音聲のかたに譯したりと見えたり

蕣を行燈につりて蟲除とす

物類相感志に。三月三日收二棠花一置二燈檠上一。則飛蛾蚊蟲不レ投といふことあるは。吾邦のならはしに。四月八日蕣をとりて行燈につり置きて。蟲よけとするに似たり

木中に佛像あられる

文政己丑の夏。谷中なる多寶院といふ眞言宗の寺にて。樫の木をきりしことのありしにその木のきり口に佛橡の繪がきたるごとく現はれありしかば。人みな奇異のおもひをなし。日を經るまゝに。そのこと世にあまねくきこえたれば。かの佛像にまうづるものいと多かりけり。くはしき紀事および佛像の寫眞は。予が隨掃篇に載せたればこゝにしるさず。曠園雜志に。有二柏樹一大十數圍。以二其堅重難レ擧鋸而折レ之。中有二觀音大士像一。極二其端好一。崖石水竹童子鸚鵡之影。纖細備具儼若二圖畫一。此面所レ有合二之彼面一無二亦少別一と見えたり。木中に文字あることは和漢にそのためあしりてめづらしからねど。佛像畫圖の現はるゝことはいと稀なることゝ見ゆ。これみな木の滋の染みて。自。文字畫圖をなすなり。木中に文字ありしことは。述異記。酉陽雜俎。夢溪筆談。春渚紀聞。および吾邦の國史。今物語。砂石集。佛書には寶積經などにも見え。折たく柴の記。俗説辯にも論ありて。人もしりたることなればこゝにはいはず

清正題目の旗

加藤清正の朝鮮國へ渡海のとき。題目の旗をたてゝ征伐せしといふこと。兒童走卒も話柄とすることなり。その事實の正しくものに見えたるは。清正記に。加藤には南無妙法蓮華經の御旗をぞたまふ。この御旗は秀吉公播摩國拜領のとき。信長公より赦したまふ吉例にまかせてくだしたまれるとあり。これによりてこれもへば。もとより加藤清正は日蓮宗にて。これかつ信仰もあつかりければ。ことさらに題目の旗を賜はりしことゝ見えたり。されぱその宗門にて清正

穴金星解レ厄といへる條に。伯欽道風晌是個山猫來了云々。只見ニ一隻斑爛虎ニとあり。形似をもて互に異名とすることおもしろくればえたり

とり貝

鳥貝は赤貝に似て。殼薄く。貝の表うすあかし。丹後の宮津にて茶碗貝といへり。肉はまぐりに似て色黄なり。正二月その肉を酢に浸して京師へおくりて賣る。この貝鴉に化す。ゆゑに鳥貝とよべりと。介品にいへり。江戸にてもつねに賣り來り。鮓にも專に製し鬻く。されど味さのみ美からず。上總の國人のいへるには。海上に千鳥といふ鳥多くゐて。その鳥の水に入り。化して貝となれば。鳥貝といふとかや。その肉の卵の如くなるは。この故なりといへり。また伊勢のあたりより廻船の舟人。船がゝりのをりとり貝を求めて食料とす。そは價のことの外にやすき物なるゆゑとぞ。その貝をはなし肉を見るに。鳥の形ありといへり。かゝれば鳥貝といふは。いづれのわけにて名をおふせしにか。未だおもひえず。しかれども月令に。雀の化して波となるとあるをおもへば。鳥の貝に化するといへるがさもあるべくや

旃檀は二葉より香し　頻伽鳥

旃檀は二葉より香しといふは。佛說に出でゝ。吾邦にも舊くいひならへる諺なり。觀佛三昧海經に。牛頭旃檀生ニ伊蘭叢中一。未レ及ニ長大一。在ニ地下一時。芽莖枝葉如ニ閻浮提竹筍一云々。仲秋滿月卒從レ地出成ニ旃檀樹一。衆皆聞ニ牛頭旃檀上妙之香一。永無ニ伊蘭臭惡之氣一と見えたり。撰集鈔に。せんだんは二葉よりかんばしく。梅花はつぼめるに香あり。また寶物集に。縱へば伊蘭といふ樹あり。その香臭くして一枝一葉を嗅ぐに。猶醉臥して死門に入る。其伊蘭四十里の間に生ひ茂らん中に。旃檀といふ樹。その中に生ひ出でゝ未だ二葉に及はずして。葦の角ばかりならんが。香芳くして。伊蘭の臭氣を消し失ふ。また源平盛衰記に。旃檀は二葉より芳くして。四十里の伊蘭林を翻し。頻伽鳥は卵の中にてあれども。其聲諸鳥に勝れたりと見えたり。因に云。頻伽鳥または訶陵頻伽鳥ともいへり。翻譯名義集などに。訶陵頻伽を妙音と譯したるは義譯にて。また訶陵を美妙。頻伽を音聲と譯するよしもあれど。ともに誤りにて正しからず。おもふに唐書に。訶陵國より頻伽鳥を貢す

生集に出づといへり。猶ふるく見えたるは。元次山丐論に。古人鄉無二君子一則與二山水一爲レ友。里無二君子一則以二松竹一爲レ友。坐無二君子一則以二琴酒一爲レ友。東坡詩に。風泉兩部樂松竹三益友といへること。陔餘叢考歲寒三友の條にいへり。唐の李邕が題畫の詩に。對レ雪寒窩酌レ酒。敲レ氷暖閣烹レ茶。醉裏呼レ童展レ畫。唉題二松竹梅花一とあり

梅に鶯

梅に鶯をよめること和歌には常のことなり。鶯宿梅の故事。拾遺和歌集に見えたるより。猶さらなべて世人も鶯といへば梅はかならずあるべきものともおもへり。いとふるくも萬葉集にも鶯には多く梅をよみ合せたり。詩にも葛野王の春日翫レ鶯五言に。素梅開二素靨一嬌鶯弄二嬌聲一。といふ句あり。唐土にはいはぬことゝのみおもへるに。王維の早春行の詩に。紫梅發初遍黃鳥歌猶澁といへるぞ。鶯梅を對する據ともすべし。また竹林に虎の住めること。佛說金光明最勝王經に見えたり

九尾の狐

玉藻前の謠曲にて。那須野の殺生石の故事を世人のきゝなれ。かつ過ぎし年。妖狐傳といふ册子なども印行したることありしからに。九尾狐といへば。惡狐とのみおもへり。ふるくも下學集。琉球神道記などにも。この俗說を載せたり。下野なる玉藻稻荷の社は。かの惡狐の靈を祭れりとかや。しかはあれど九尾狐はもと瑞獸にて。已に太平御覽に。山海經。竹書紀年。吳越春秋。白虎通。古今註。魏略。郭璞九尾狐贊等を引用せり。因に云ふ。官妓を九尾狐といへること。侯鯖錄にあり。これは官妓の聲色のために人の蠱惑せらるゝを。狐に魅さるゝに喩へしなるべし

手飼の虎 山猫

虎と猫とは大小剛柔ははるかに。殊なりといへども。その形狀の相類すること絕えてよく似たり。さればわが邦のいにしへ猫を手がひの虎といへること。古今六帖の歌に

あさぢふの小野のしの原いかなれば
手がひのとらのふしどころなる

また源氏物語女三宮のくだりに見えたり。唐土の小說に。虎を山猫といふこと。西遊記第十三回。韜虎

大かたは浮説のみにて。正しき事實にあらず。堺鑑に載するところ傳記やゝ實に近し

富士山の高

駿河の富士山は。三國にまたがりて。吾邦に無比の高山にして。その高さいくばくといふとはかるべからず。塵塚物語に。直に立つれば九十六町ありといひ。月刈藻集に直立して二十五町といへり。何れか正しきといふをしらず。近きころ享保十二年の夏。福田某といふ人測量せしに。駿河の吉原宿より富士山の頂まで。二百十六町二分一六。（二十間四方の盤にてこれをはかる差一寸八分五厘）里數にすれば。六里〇〇六〇〇六となり。山の高さは三十五町六分二一六三（兩柱の間一丈一尺にて。高差一尺九寸七分三厘）と。ある筆記に見えたり。こは町見の測法なるべければ正しき積りなるべし

翁問答

吾邦にてはじめて陽明王氏の學を唱へ。心法を専に敎へさとしけるには。中江藤樹なり。近江の國の人にて。そのころ世人德を崇みて。近江聖人とよべりといへり。その人物おもひやるべし。猶行狀のくはしきことは年譜あり。藤樹年まだ若かりしより。心に守り。身に行ふべき道理をもとめて。釋敎を學びしが。その道人倫日用にたよりあらずとて。儒道に入り。遂に一家をなし。敎へて倦まず。勉めて怠らず。迷ひをわきまへ。德に入るべきことをむねとして。老翁の物がたりに託し。かな書に聖經の語意をやはらげしるして。翁問答といへり。その書に心學は凡夫より聖人に至る道なりとあり。かな書にはあれど。實に類ひなき心法傳授の書ともいふべし。今心學といふものはおこなはるれども。心法の學ははやく藤樹におこれりといふべし。心學の書くさ〲多かる中に。この翁問答におよぶものなし

松竹梅

松竹梅を。わが邦には慶賀のものとす。唐土にては歳寒三友といふこと。月令廣義に見えたり。葛原詩話に。世俗の恒言にして賦咏に顯ること稀なり。高士奇が金鼇退食筆記に。五龍亭舊爲ニ太素殿一。創ニ于明天順年一。在ニ太液池西南一。向後有ニ草亭一。畫ニ松竹梅于上一。曰ニ歳寒門一。また元張伯淳題ニ皇甫松竹梅圖一詩あり。曰。三友亭々歳晩時。政緣ニ冷澹一易ニ相知一。何須近舍今皇甫。卸向ニ圖中一覓レ補レ之。元詩二一集養蒙先

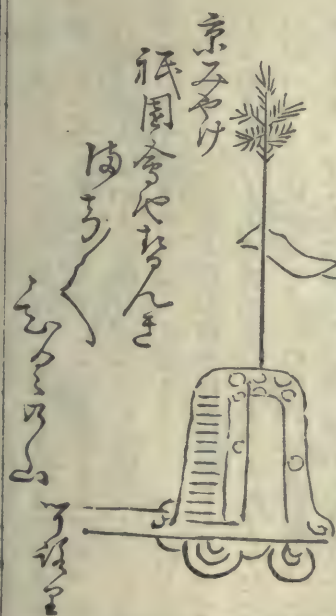
きにあらず。菅笠日記に。安倍文珠の岩屋は。高さもひろさも七尺ばかり奥へ三丈四五尺もあらん。これもみないと〳〵あがれる世にたかき人をはふりし墓とこそおもはるれといへり。また陵墓志に。倭姫命の御墓のあられたるを。土人の字に隱石窟といふよしも見えたり

豊太閤

豊臣太閤の素生は知れざることなるを。眞顯太閤記などに。母は持萩中納言の女と書きたれど。あとかたもなきそらごとなり。持萩と家號をいへる公卿は。かつてなきものをや。豊鑑は豊太閤まだ世にいましたる時にしるしたる書なるに。父母は知れざるよしかけり。生ひたちのことゝ遺老物語に收めたる。太閤出生記やゝ實に近かるべし。さて朝鮮を攻めて後に大明を攻め取んと欲したるは。器量大なる人とて稱美する人多かれど。安齋の論に。器量の大なるにはあらず。器量少くして欲心ふかく大なる人なり。器量といふは才智なり。豊太閤は無學文盲なる人にて。惡才邪智あり。善才正智なし。唯。虎狼のごとく武威をはりて。人を怖畏せしめて國を治めんとす。假令朝鮮を抜きとりたりとも。何の徳ありてか。その後をよく治平ならしめん。いわんや大明をや。治術を知らずして。大國を得んことをのみねもふは。是欲心限りなく廣大にして。器量は甚だ小き人なりといへり。この論實にしかり。はやく已に貝原篤信の懲毖録の序にも。朝鮮征伐は所謂忿兵貪兵なりといへり

曾呂利新左衛門自畫贊

曾呂利新左衛門は。滑稽の人にて。豊太閤の御伽衆にて。ことに寵遇を得たるものといへり。その事蹟人口に膾炙して。くさ〳〵のはなしありといへど。

原本縦二尺六寸五分　幅六寸三分

をもて國ととなふること。その證少からず。神武紀に。難波を浪速國とし。饒速日命一鄕を睨て。虛空見日本國と名づけ。その他。珍彥をもて倭國造とし。劍根をもて葛城國造とすといへる。郡に鄕に。みな國とするものなり。されば安藝とよめるは安來の訓を訛れるものにて。可愛川は安來鄕をながれ經て。伯耆の大川といふもの是なり。その源。出雲の仁多郡能義郡の堺。葛野山より出でゝ。川上を。いしを川といひ。安來をへ。伯耆國に入りて。日根川といへり。伯耆國にて。その川を總て大川と名づくといへり。これまで宣昌說なり。猶いはゞ。出雲風土記に。意宇郡安來鄕。神須佐乃烏命天避立廻坐之。爾時。來二坐此處一。而詔。吾御心者安平成詔。故云二安來一也。この文にて素戔嗚尊の詔にて安來と名づくるよしも。神代紀一書の傳へにも符合するを。鳥上二水考證にも。古事記傳の須賀宮つくらしゝ條にも。引きいでざるはいかにぞや

おこつへいの窟

越後國會津領。新發田領入合の山に。字をおこつへいといへる地あり。文政七年の夏のころ。戸倉村の樵夫七人いひあはせ。山深く尋ね入りたるに。往來の道より二十五町ほど入りこみ廣きところにて。凡そ人數三十人ばかりも住むべきほどの窟あり。その窟の深さ五十間も行きたりとおもふところ。打ちひらけ。人の六七十人も住むべきほどの所あり。いづくより明りのさし入るにか暗からず。それよりおくのかたへいくらばかりともその深さ知りがたし。この所より奧へ行べき穴の口に。鐵の格子ありて。いかほど押したりとも開くとなし。をりから何となく物すごくおぼえて。おの〳〵立ちかへりしとかや。その七人のうち。三人はかへるとそのまゝ。發熱して。やがて身まかりぬといへり。こは過ぎしころ。友人柳菴のはなしなり。この類ひの窟。諸國にまゝあるとにて。予が曾て聞けるは。常陸國關本鄕に隱里といふ所あり。これも。越後のおこつへいの窟に似たり。猶隱里といふ所。信濃にもあり。壤鑑といふ地志に見えたり。大井平の洞穴の圖說は。予が耽奇漫錄に載せ。下野都賀郡の洞穴のことは。随掃篇にしるしたれば。こゝにもらしつ。それが中に。或ひあがれる世の廟穴の。野人の爲にほり穿たるゝもまゝな

源もと一にして出雲にてはこれを簸川といひ。安藝にこれを可愛川といふ説あれど非にて。一書に大蛇の居る所を鳥上の峯とす。出雲と安藝とは。境を接する國なり。されは鳥上の峯より西北。出雲に流るゝを簸川とし。鳥上の峯より西南安藝にながるゝを可愛川とすともいへり。これらの説みな非なり。もとより出雲と安藝とは境を接する國にあらず。寛政年間藤原宣昌といふ人。鳥上二水考證と云ふ書をあらはして。簸川可愛川の辨あり。そのいふところ千古の卓見。前人未發の説といふべし。其説に宣昌按ずるに。重遠の説に。今安藝國を尋るるに。可愛川あることを聞かずといふもの當れり。予友祝利萬呂といふ者。安藝の國の人にて。日本紀に心をひそめ。可愛川を安藝國に求むれども。その處なし。これによりて予出雲を捜り索めて。その舊跡を得たり。夫安藝國は。國の名に非らず。出雲風土記に載する意宇郡安來郷にして。今能義郡に屬して。八杉郷といふ地なり。先輩の。文字に泥みて山陽道の安藝とあやまり混じて。アキノクニとよめり。遂にその正しきを失へり。改めてヤスギノクニとよむべし。郷を

ならずと云ふを。さにあらず。家業といへども殺生の報はあることゝて。庭なる露しげくれきたる樹をゆり見よとこにへけるまゝ。やがてその木の下に行きて動かしければ。その人にれきたる露かゝれり。さてその人云ふやう。怨みのかゝるもその如く云ひつけたる人よりは。大刀取りにこそかゝれといひしとかや。諺にも盗する子は惡くからで。繩とりこそうらめしけれといへるは。なべての人情といふべし。これにつきて一話あり。何某が家僕。その主人に對し。指したる罪なかりしが。その僕を斬らざれば。主人に對して義の立たざることありしに依りて。主人その僕を手討にせんとす。僕憤り怨みて云ふ。吾さしたる罪もなきに。手討にせらる。死後に祟りをなして。必。取り殺すべしと云ふ。主人わらひて汝何ぞたゝりをなして我をとり殺すことを得んやといへは。僕いよ〳〵いかりて。見よとり殺さんといふ。主人わらひて。汝我を取り殺さんといへばとて。何の證もなし。今その證を我に見せよ。その證には汝が首を刎ねたる時。首飛んで庭石に噛みつけ。夫を見れはたゝりをなす證とすべしと云ふ。さて首を刎ねたれは。首飛びて石に噛みつきたり。その後何のたゝりもなく。ある人その主人にその事を問ひければ。主人こたへて云。僕初にはたゝりをなして我を取り殺さんとおもふ心切なり。後には石に噛みつきて。その驗を見せんとおもふ志のみ專らさかんになりしゆゑ。たゝりをなさんことを忘れて死にたるによりて。祟なしといへり

安藝國可愛川

日本書記神代卷の一書に。是時素盞嗚尊下ニ到於安藝國可愛之川上ニとある傳への。安藝國甚うたがうべし。そは出雲にこそあれ。安藝にながるべき水脈にあらず。又安藝に同名の川あるにもあらず。しかるに通證に安藝郡府中にありとも。又は山縣郡戸河内村に十方山あり。雲石二州に接し。甚。峻高にして石窟あり。相傳ふ。大古大蛇こゝに住めり。今にいたりて雲霧朦々として風雨時ならず。その郡に可愛淵といふあり。十方山に出づ。奇石怪巖多し。凝ふらくは。この地なりといへり。また私説。藻鹽草などの説には。安藝出雲は疆界を接す。蓋。簸川安藝に入りて埃川となるとも。或は可愛川簸川と。水

に漂ふひまに。終に鬼のために誘はれて溺死し。彼と同じく鬼となることもあり。ある舟人の物がたりに。人火は所を定めて動かず。鬼火は所を定めず。右にあがり。左にかくれ。鬼猶且遠く數十の僞帆をあげて走るがごとくす。人もしこれに隨ひて行くときは。彼がために洋中に引かるゝなり。これも人帆は風にしたがひて走り。鬼帆は風にさからひ　行くといへり。されどもこの場にのぞみては。事になれし老舟士といへども。あはてふためき活地に出づることかたきものとぞ

呪咀の驗

安齋の記に。ある人問ひて云。人を恨みにくむ事ありて。その人を呪咀し。神木などに釘を打つことあり。婦人の所爲なり。神は非禮を亨けずといふなれば。驗あるまじきことなるに。まゝ驗あるものを見聞せり。その理さとりがたし。このわけはいかゞといへる答に。人を恨み憤るとも。初は胸につゞみてあり。さかんになれば包みあまりて。口より溢れ出で。人にも語り獨り言にもいひ出でんほどなれば。言語にも詈りいかるのみにては。ことたらで。心に堪へ忍びかねて。形にあらはし。態にうつして恨みたもふ人を。一途に惱さんと欲する執念專らになるにれよびて。神木に釘を打つ如きの呪咀をするなり。神氣ふかくさかんなるが故に。其强氣邪氣にれふるれて。人惱むなるべし。惱さるゝ人は彼がさぞ恨むべしとれもふ心の虛あるが故に。かの邪氣にかぶるるなり。漆の氣にかぶれ。熱病人の氣にかぶれて病むがごとし。我身に虛したるものなければ。かぶるゝことはなきなり。狐の氣にかぶれてばかさるゝもれなじ理なり。此かぶるゝといふこと。萬事にあり。思慮すべし。正しき人にかぶれては善人となり。邪なる人にかぶれては惡人となるなり。かぶるるといふことを文字にかゝば。感とも感冒などゝも書くべし

欺きて寃魂を散ず

人は初一念こそ大事なれ。たとへば。臨終一念の正邪によりて。未來善惡の因となれる如く。狂氣するものも。金銀のことか。色情か。事にのぞみ迫りて。狂を發する時の一念をのみ。いつも口ばしりゐるものなり。ある人の主命にて人を殺すは。わが罪には

て。唐人は湯あみぎらひなどゝはいへるにやとれもひたるに。ある書に。李笠翁が一家言に。倪涵谷孝廉に與へて澡盆を借るの書あり。其文に。弟入㆑都半載塵垢滿身。未㆑經㆓一浴㆒無㆓其具㆒也。北人都不㆑辨㆑此。且謂多浴耗㆑神不審。此地諸公得㆓此養生妙訣㆒果能與㆓彭籛㆒比㆑算否。老年翁以㆓南人㆒居㆑北必能避此迂風㆒。幸爲一假磁盆寓中儘有。但恐浴至㆓好處㆒忽然瓦解。喫驚致㆑病則耗神之說驗矣。將爲㆓北地諸公㆒所㆑笑。故必求㆓其木者㆒と見えたり。今已に長崎にて來舶の淸人ども湯あみすることなし。熱湯に手巾をひたして肌をふき拭ふのみといへり。この一家言の文を見れば北人の迂風なるべし

舟幽靈

海上にて覆溺の人の寃魂。夜のまぎれに行きかふ舟を沈めんと。あらはれいづるよしいふことなり。唐土の鬼哭灘といふ所は。怪異いと多し。舟の行かゝれば沒頭隻手獨足短禿の鬼形とて。首のなき片手片足のせいのひくき幽靈。百人あまり羣りあらそひ出で來り舟を覆へさんとす。舟人の食物を投げあたふれば消え失すといへり。わが邦の海上にもまゝあるなり。風雨はげしき夜ごとに。この怪多しとかや。俗にこれを舟幽靈といふ。その妖をいたす。はじめは一握ばかりの線などの。風に飛び來るごとく。波にうかみ漂ひつゝ。やがてその白きものやゝ大きくなるにしたがひ。面かたちいでき。目鼻そなはり。かすかに聲ありて。友を呼ぶに似たり。忽數十の鬼あらはれ。遠近に出沒す。已に船にのぼらんとするの勢ありて。舷に手をかけて舟のはしるをとゞむ。舟人どもゝ漕ぎ行きのがるゝとあたはず。鬼聲をあげていなたかせといふ。そのものいふ語音分明なり。こは舟人の俗語に大柄杓をいなたと名づくる故なり。さて事に馴れたる者。柄杓の當をぬき去りて。海上に投げあたふれば。鬼取りて力をきはめて水を汲みいれて。その舟を沈めんとするのたもむきあり。もし當あるものをあたふれば。波をくみて舟をしづむといへり。また風雨の夜は海上の舟道の目あてに。陸にて高き岸に登り。篝火を焚くことあり。鬼もまた洋中に火をあげて。舟人の目をまよはす。これによりて人みな疑ひをれこし。南なるが人の焚くにや。北にあがるが鬼火かと。舟道を失ひ。かれこれと波

ゝ毎日水にて三十日のめは。死ぬまで一切の食物くひたからず。壽世保元黒大豆をよくむして一日食物をくはず。翌日かの黒大豆を食し。外の食物をくふことなく。渇時は水を飲むべし。如此一年ほどすれば。後には一切の食物をくふことなくて仙人となる博物志黒大豆五合。胡麻三合。水に一夜浸し蒸すこと三度。さてよく干して二色ともに手にて皮を取り舂き碎き。拳の大さ程につくね甑の中に入れて。戌の時より子の時まで蒸して。あくる日寅の時に取り出し。日に干付けて食ふべし。拳程なるを一食へば。七日飢ゑず。二食へば四十九日飢ゑず。三食へば三百日飢ゑず。四食へば二千四百日飢ゑずして。顔色おとろへず。手足の働き少しも常にかはることなし。王氏農書この三方は唐土にて飢饉の時に。多く人を濟ひたる名方なりといへり。因に云。人の通はぬ谷底。又は井の中などへあやまちて落ち入りたるか。あるひは海上にても一切の食物なきところにて。命をつなぎ。しかも身體氣力おとろへざる方。壽世保元に。口に唾を一はいためてはのみこみ。又ためては飲みこみ。かくの如くする事一日一夜に三百六十度飲みこめば。何十日へても飢ゑずといへり。これにつきて話あり。正德のころのことゝかや。奈良宗哲といふ人武藏に住みしをりから。常にこゝろやすく交る僧の祈願ありて。七日斷食して禮拜行道す。同行の僧一人あり。彼僧に右の唾を飲みこむ方を敎ふ。彼僧ふかく信じて相勤む。同行の僧はあざけり笑ひて。これを用ひず。行法六日に至りて。同行の僧は手足痛みことの外にくるしむ。又唾を飲みこみし僧は。つねにかはることなく。行法とゞこほりなく。滿願成就したりとぞ。おもふに。この唾を飲みこむの方は効驗さもあるべくおぼゆ。唾は身液なれば吐かずして飲まば。身體の潤をまさんとことわりあり。常の養生にも心得あるべし。已に遠唾高枕壽を損すと醫心方に見えたり

唐人は浴せずといふ諺

世人の唾に。唐人は浴することを好まずとて。人のよごれあかつきたるか。物くさき性のものをは。唐人などゝいふことをおもふに。癸辛雜識續集に。蜀人未二嘗浴一雖二盛暑一不三以レ布拭レ之耳。諺曰。蜀人生時一浴。死時一浴とあり。これらのことを訛りつたへ

て蓄ふべけん。されど世に琥珀手と称するもの。まづは上品なり。已に本草綱目に。熊膽陰乾にして用ふ。しかれども偽のもの多し。但粟粒ほどを茶盌へ水をくみ。その中へ入るゝに。線のごとくすぢを引きて散ざるものを正直とす。又熊膽の佳きものはすき通り。米粒ほど水に入るれは。運轉して飛ぶがごとくめぐるものを上品とす。外の獸の膽もめぐれども。熊膽よりめぐること緩やかなりと見えたり。今わが邦にてもかはることなし。また苦味の草根木皮をせんじ練りつめ。偽造するものあり。水中に入れて線を引くを良とすること。誰もしりてあれは。偽物も亦線を引くやうに造れり。そをわきまへんには。熾火の上に少しはかり置き試見るに。あとなきものは上品なり。焦げてかすのこるものは偽造とするべし。膽もと血なれは。火上に置くときはながるゝなり。練りて造るものは糟あり。これ鑑定なき人といへども。その眞偽をわきまへ易し。こは心得て益あることぞかし

鬼魔たるものゝ治療

憶病なる人か。あるひは婦人などの妖怪に出であひて。鬼魔死するものあらは。しづかに手にても又は風呂敷のやうなる物にても。病人の口鼻にあてゝ。息の出でざるやうにしておくべし。扨病人の眼をあけたらば。あつき小便一はい口に入るべし。しはしありて正氣になるなり。またはその病人を喚び活すべからず。脚の跟を力一はい口にて咬むべし。又は面へ唾を吐きかくべし。初より燈火ある所ならば。そのまゝ燈火をおくべし。もし初よりくらがりにて魔死(おそはれし)たるには。燈火をともすべからずときけり。これらもかねて心得おくべきことなり

食せずして飢ゑざる法

串柿を糊の如くにして。蕎麥粉を等分にまじへ。大梅ほどの大さに丸じ。朝出づる時二三を用ひなば。一日の食事になれり。もし蕎麥粉なき時は。餅米の粉にてもよろし。又三色あはせても用ふべしと。安齋漫筆にあり。また芝麻一升。糯米一升をともに粉にして。棗一升を煮て。それへ二味をこねまじへ。團子として。一丸食すれば。一日飢に及ばずと。白河燕談にあり。猶これらの法あり。予嘗てきけるは。白米一斗を井籠に入れ。百度蒸し干しおき。一握づ

以レ銅作レ鐎。受二一斗一。晝炊二飯食一夜擊持行。故君曰二刁斗一と見えたり。刁字を用ふることもふるきことゝ見えて。扶桑略記拔萃に。十月甲刁日とかけり。また盡を尽に作るは。盡の草體尽とかけるより。草體を眞書となして尽とかけるなり。これによりて書を昼。晝を昼に作るは非なり。また釋を沢に作るは釋尺同音なれば。筆畫の少く書寫に便ならんとての假借なり。文字は似たりといへど。澤を沢に作るは非なり。そは澤に尺の音なければなり。秉燭譚に云。今俗に田一反といふは反は段の字の草體なり。互市の互を牙の字に書きて。牙郎牙行と云ふと同じきことなり。互の草書牙の字に似たり。遂に牙の眞字を書くなりといへり

時の鐘

晝夜六時の鐘の數は。はやく延喜式に見えたり。諸時擊レ鼓子午各九下。丑未八下。寅申七下。卯酉六下。辰戌五下。巳亥四下。並平聲鐘依二刻數一とあり。またある説に。時の數うつことゝ晝夜九つを數の終りにして。九つ時の數を九々にて合はするなり。たとへば六時は六九五十四にて六あまるなり。五時は五にて。五あまるなり四時は四九三十六にて四あまるなり。九時は九々八十一にて九つあまる。八時は八九七十二にて八あまるなり。七時は七九六十三にて七あまるなりといへり。さていとふるくは楊子雲が太玄經に見えたり。五行大義にも太玄經を引きていへり

熊膽の功幷に眞贋の辨

子癇とて懷妊の婦人月數重りて。俄に氣絶し倒れ。眼を見ひらき瞳子をつりあげて。歯をかみ舌を出だし。手足をふるひ動かしそりかへり。人事を知らず。癲癇やみの如くなるを子癇といふ。はやく正直の熊膽を濃水にてときて。口中へ入るべし。度々用ふべし。甚妙なり。予その効驗を直に見たる故。右の病する婦人の命を救はんとおもふゆゑ。是をしるし置くなり。懷姙の婦人ある家には。兼て正直の熊膽を求め蓄へおくべし。急には得がたし。母に用ふることなくとも。赤子に用ふることあり。いづれにも求めおくべきものなりと。これも安齋の記なり。熊膽を蓄へて急に備ふること。姙婦のみならず。小兒ある家には。急症を救ふ必用の藥品なり。されど。その正直と下品の鑑定なくばいかでかその正眞をえ

或書の說に。すべて女の男撰むには心をば見よ。人をな見そ。必しも男さだめんは。父母のはからひに從ふべし。我とちゝくひあひつる中は。いかにもくやしきことこそ多かりなめと十訓抄にしるしたりといへり。今も男女みそかに心をかよはすをちゝくり合といふは。ふるき詞と見えたり

瘠せたる人をひがいすといふことのよし。友人渡邊奎輔の淡海魚譜に。ひがいす漢名いまだ詳ならず。鰟魚の類なり。そのかたち痩せて骨高きを以て。土俗の諺に。瘠人をひがいすといふといへり

なべて世の人情はかはらぬものにて。詩歌に物を詠ずるも。こゝろばへはおなじかれど。その詞の和漢異なるのみ。されば句題の歌にも。白氏の句を定家卿のよみたまへるなど。そのたくみまたあるべくおぼえず。かくて鄙賤のものとても。月は月。花は花。樂しみ憂はいさゝかかはることなけれど。詞の雅俗によりて。そのことのうるはしく聞ゆると。いやしかるとわきためあるなり。ある人云。陸放翁と西行法師とは。時代も大かた同じく。その吟味のたえて似たりと。放翁の詩に。何方可㆑化身千億。一樹梅前一放翁。西行の歌に

よしの山こぞのしをりの道かへて
まだ見ぬかたの花を尋ねん

といへるは。詩歌ともに。その心ばへ全く相似たり。また唐詩の陌頭楊柳枝。己被㆓春風吹㆒。妾心正斷絕。君思那得㆑知　といへるを。服南郭の和語に譯したるに

道のべの青柳すがた。風に吹かれてゐるわいの。わしが心はやるせなや。ぬしがこゝろにしりはせん

省　文

省文にくさ〴〵の別あり。その大むねは己に文敎溫故にいへり。省文に似て省文にあらざるものあり。十二支の寅を刁に作ること。安齋の記に。寅の字の代りに日本の俗刁の字を用ふること。刁は火熨斗の如くなる器なり。軍中にて湯をわかし。食物をも煮る物なり。これをどらの如く打つて鳴り物にも用ふるどらといふ心にて。寅のかはりに用ふるなるべしと云ふ說ありといへり。刁斗をどらの如く打ち鳴らすよしは。漢書季廣傳に。不㆑擊㆓刁斗㆒自衛。注に孟康曰刁斗

莫夜行愼莫不忠愼莫不孝等也といへり。愼莫の二字はつゝしみて何々することなかれといふことなり。これにて俗語のしんまくといふこと始めて心付きたり。近年の人。著したる書なりとも。書をば見るべきものなり。不慮の知見を開くことあり。愼莫の二字古よりある詞なり

ひきやうと云ふ詞。常々人のいふことなり。古今著聞集に所々見えたり。その外の古書にもある詞なり。比興とかくは誤にて例のあて字なり。非の字を用ふべし。興もなきこと興のさめたるなどといふ意なれば。非興と書くべきことなり。比の字にては義理通せず

ごさんなれといふ詞。平家物語その外の古書にもあり。この字濁てよむは非なり。ごさんなれとは。こそあるなれと云ふ詞なり。何とこそあるなれと云ふ事なり。この五條は安齋說なり

幽遠隨筆に。遊里にすいといふとは久しくいひならはせりと見えたり。職人盡の印本に。すい御覽せよとありといへり。七十一番職人盡印本に。すい御覽せよ。けしからずやとかきあやまてるを見ていへる。ひがことなり。古本には。すは御らんせよとあるをや。今按に。すいといふ詞は近きことなるべし。粹の字音なるべし。萬事にくはしき人といふ義にぞあるべき。江戸にて通といふを。大坂にてすゐといへり。通といふも萬事に通達する義なり。禁短氣に。いやがることのみきかせて粹のていしゆをこかしぬ。またかならず粹のいきかたをわるうのみこんだる大臣など見えたり。この外にも猶あまたあるべし

江戸には盜賊をどろぼうといひ。大坂にては放蕩者をどろぼうといへり。今按ずるに。盜賊をどろぼうといふは。取るといふ詞の轉なり。物を盜み取るより負はせたる稱にて。ぼうといふ　人をいやしめいへる詞なり。吝嗇なるものを吝ぼう。色黑きものを黑ぼうといふの類にして。この詞の例など多かり。放蕩者をどろぼうと云ふはどらと云ふ詞の轉なり。このどらといふは墮落の訛言にて。取り締なき人をしだらくといふもおなじといへる說あり。また今昔物語の度羅島の故事より起るといふ說もふるくいへり。いづれかあたれる

その藤壺の腹に光源氏の子出來たり。帝この事を知らずして。我子としたまへり。後に帝崩じて光源氏の子位に即きたり。是を冷泉院といふ。右のごとく伯父にして姪を妻とし。子として繼母に密通し。臣としてわが子を帝位につけ。これらの非禮。不義。亂逆も實事にて。その事蹟を記すならば。是非におよばず。素より無きことを設けてつくるならば。右の如き非禮。不義。亂逆のことを作らずとも。人倫の道に背かざる好色のものがたり。いかやうにもおもしろく作りやうはあるべきなり。歌學者流は。源氏物語を聖經賢傳の如くに貴べども。あしき作りやうの物語なり。女のつくりたるものがたりなれば。咎むるにおよばざれど。紫式部は文才もありて。菽麥を辨ずるほどの智もありしなれば。これを咎むるなりと安齋說なり

田舍詞　俗語

田舍人の詞に。何をぎやあるといふは。何と御意あるといふ詞の轉じたるなり。また何とれもしやるといふは。何と御申しあると云ふ詞の轉じたるなり。又何とすべいといふは何と爲べきなり。きといと音相通なり。源氏物語。枕草紙にも。べいと云ふ詞あり。又何としたつけと云ふは。何としたりきといふ詞の轉じたるなり。いつたつけと云ふも。いひたりきといふ詞の轉じたるなり。又うつちやると云ふはうちやるといふ詞の轉じたるなり。かくのごとくみな詞の轉じて鄙しくきこゆるなり

たまぎるといふは。たましひきゆるの略語なり。たまは魂なり。きるは消なり。強く驚くをいふなり。田舍詞にたまげると云ふけは。きゆの約りたるなり。（きゆの切音け）古歌に雪消をゆきげと云ひ。消えたがうへにといふことをけたが上にとよめる類なり。江戸詞にきもをつぶすといふは。鄙俚なり。田舍詞にたまげるといふは。古雅なり。古風なることは田舍に多く存りてあり。江戸には漸々にうつりあらたまれり

俗語に。物事猥ならざるやうに取り治むるを。しんまくすると云ふ。しんまくといふ字詳ならず思ひしに寬保癸亥年南溟といふ僧。梓行の續砂石集といふ書あり。その第五に火葬の坑に向ひて。豆を燒きて食する物かたりを述べて。其事に付きて敎戒を記したる詞に。人は常に愼莫の二字を忘るべからず。愼

を得たるにて。金釜にはあらざるなり。法苑珠林に
この事をしるして。於二土中一得二一釜黄金一とかける

は。益證とすべし。過ぎし年。畫師永納が郭巨が故
事をゑがけることありき。永納は本朝畫史などの著
述あるほどの人なれば。蒙求をよみて云ふ。見二黄金
一釜一とあり。金の釜ならば。一金釜とあるべきを。
黄金一釜とある時は。釜といふは量の名なり。論語
に。與二之釜一の釜にて重一釜の金といふことにて。
金釜にはあらずとて。やがて圓き形の金錠をゑがき
たれど。これもまた非なり。おもふに論語の注に。
釜は六斗四升とありて。斗斛の類にて。目方のこと
にあらず。猶蒙求注に釜上銘に云ふと。あるをもて
も。六斗四升の釜にあらざること知るべしといへり
畫史會要に。島繪とて載する埋兒賜金の圖には
かくの如き金を數多く堀りいでたるかたをかけり。
同書に載する探幽が圖には　かくの如き。形にゑ
がけり。されば釜にゑがくことはふるくは。なきこ
とにや。これらの圖にても已にいへるごとく。釜上
銘といふこと。本文にあれば。猶誤れりといふべし

源氏物語

源氏物語のはじめに桐壺のみかどゝいふ帝あり。更
衣の女官を寵愛し給ひ。その腹に皇子出生す。是を
光源氏といふ。その母はやく死去す。帝哀みに堪へ
ず。その心の慰めに帝の姪なりし。姪宮を中宮とし
て。藤壺に住ませらる。是伯父にて姪を妻とするな
り。光源氏藤壺の宮に密通す。是繼母に通ずるなり

歳の時にあたりて。貞亨三年の事なり。されば淨家の二連數珠はいと近くいできたるものなり

氏寺

氏寺といふは氏神といふに同じく。神護寺を和氣の氏寺なりと云ふことと。源平盛衰記に見えたるは。已に氏神の所にいひたり。猶れもひ出でたるまゝにいはん。古今著聞集に。渡邊にそのかみの堂あり。藥師堂とぞいふなる。源三左衛門かけるが先祖の氏寺なり。また平家物語に。治承五年正月一日の日。内裏には朝拜とゞめられ公卿一人もさんぜられず。これは氏寺燒失によりてなり。また遊行廿四祖修行記に。（永正十七年六月）廿九日信濃より甲斐へうつらせたまふ國堺近きところに。村山といふ里に日なたの圖書助といふ人あり。自身兄弟ともに輿をかきさゝげて。わが氏寺へ入れまゐらせなどいふことも見えたり。ふるく江談抄にもありとればねたり

古畫を證とす

安齊説に。凡故實を考ふるに。古畫を以て證とすることあり。古代の畫工當時眼前に見る所の體を直にうつして。畫きたるものゆゑ。後代に至りて。その昔の事を考ふる證になるなり。しかれどもそのむかしの畫工後代の證に備へんといふ志にて畫きたるものにあらざれば。唯その事物を大體に似せうつすのみなり。諺にいはゆる繪けうごとも交ることとなり。又細密なることを。省略することとなり。されば古畫は信じてしきゆゑ。その通りに畫きては畫體見ぐる證とすべきものなれども。取るべき所あり。捨つべき所あり。取捨は學者の意に在り。古畫なりとても。悉く信じて取捨せずば。あやまることとあるべしといへり。青蓮院にありといふ古畫の。小野道風の像に。硯筥を左にたけり。また明の仇英が畫帖を見るに。硯を几の左りに置きたるを二ところ三ところ畫けり。かゝれば硯を左に置くことにやとなひゐたるに。秘傳花鏡の花園欵設の部。堂室坐几の條に。古人置㆑研倶在㆑左。以㆓其墨光不㆑閃㆑眼。且於㆓燈下㆒更宜といへり。これら古畫を證とすべきの一なり

郭巨が黄金釜

盍簪錄に。郭巨將㆑坑㆑兒。忽見㆓黄金一釜㆒。釜上云々。蒙求註に。孝子傳を引けり。今廿四孝の圖を繪けるもの金釜をゑがくは誤なり。こは一釜に滿つる黄金

至りて。鄭萬鈞草書心經を書すと。唐文粹に出づ。大師よりは凡百年ほども古し。總べて草書もてかける經文希なる故。大師ばかりにやとおもひ侍りしに。已にいへるごとく。はやく大師より以前にあり。但しこれより後は聞ゆることなし。北宋にをよびて。蘇黃の諸賢禪宗を好みしゆゑ。佛經を書きしこと多し。宋末に至りて。蒲蔔の能書なる僧日觀に行書の心經あるよし。剡源集に見えたり

いらたかの數珠　平形念珠　二連數珠

謠曲の詞などに。いらたかの數珠をしもみてといふことあり。このいらたかといふは。あらたかの轉訛にて。阿羅陀迦は念珠の梵名なり。あかの水など云ふ例なりとしるべし。また四宗要文の淨土宗の條に。大勢至經を引きて云。以二平形念珠一者。是外道弟子也。非二我弟子一。我遺弟必可レ用二圓形念珠一とあれど。今はなべてみな平形のみなり。たま〳〵異邦より舶來のものは多く圓形なり。されども。わが邦の念珠を造るもの丶平形が。つくるにたよりよければにやあらん。また今淨土宗にて。二連の念珠をもてることのよしは。淨土宗諸廻向寶鑑は。淨家二連數珠。濫觴出二御傳四卷一上人常成二給仕一。有下謂二阿波介一佛者。仕二出二連數珠一。始二此阿波介一。彼阿波介持二百八數珠二連一。其所以尋レ人弟子無レ隙。爲二上下一盡二易其緖一。一連稱二念佛一一連取レ數。所レ積數取二弟子一易レ緖被レ盡云々とあるによりて。圓光大師御傳を案ずるに。阿波介といふ陰陽師。上人に給仕して。念佛するありけり。かの阿波介百八の念珠を二連もちて念佛しけるに。その故を人たづねければ。弟子ひまなく上下すれば。その緖つかれやすし。一連にては念佛をまうし。一連にては數をとりて。つもるところの數を弟子にとれば。緖やすまりて。つかれざるなりとまうしければと見えたり。か丶ればこの御傳をもて。今の二連數珠の始とするは非なり。阿波介の念珠二連をもてるにて。據にはなりがたし。和漢三才圖會には。大樹寺の上人造れるよしいへるも謬なり。忍徵和尙行業記に。師生平唱號之數珠五十四珠。而別穿二麥形二十珠一。鉤鎖相連指レ之記レ數。蓋鉤鎖一穿以二一過一爲二千聲一也。且麥形之新製護二其珠之放過一也。天下淨業之徒尤爲レ便二稱號一。取以爲レ則靡レ弗レ效レ之。とあるをもて。正しき證とすへし。これは忍徵の四十六

ば後拾遺集に。敷島の大和歌といふことあり。またそれより轉じては和歌のことを。やがてしき島の道ともいへるなり。これは枕詞をもてすぐにそのことにいへる例なり。おしてるを難波のこと丶して。難波の宮をおしてるの宮ともいひ。あし引を山のこと丶して。あし引の嵐などいふ類なり。猶くはしきことは。石上私淑言に見えたり

東百官

東百官の名は。相馬將門が定めし官名なりといふは。大なる僞說なり。近世の人官名に似せて妄作したるなり。古記に。東百官の名つきたる人は見えず。天正慶長の頃より以來の書には。東百官の名つきたる人も見ゆるが。古今著聞集印板の本卷の十には。松尾神主賴母がもとにたつみの權守と云ふ翁ありけり。わづかに田をもたりける。相論の事ありて。六波羅にて問注すべきに定まりけり云々。右賴母とあるは。神主の實名にて。賴何とぞいふ實名なるべし。母字は傳寫の訛にて。賴母と書きたるを印板にするときに。たのもとかなを付けたるならん。鎌倉將軍の時に。もはや東百官の名ありしとて。右の賴母を證據に引かんことは誤りなりと。安齋の說なり

法華經の卷數

妙法蓮華經は。誰にても八卷にかぎれること丶のみおもふに。宋藏明藏および淸朝の本にも。みな七卷なり。空華日用工夫集。貞治六年十一月五日の條に。法華本七軸。本朝作二八卷一者。乃慈覺大師爲二八講會一。分爲二八卷一。而配レ之。藏本有二七卷一。乃添品也。非二今本一也とあり。案ずるに。法王帝說に。太子の法華經疏七卷を作るといひ。また日本靈異記に。縮八隻の法華經八卷に化したるよしのことあり。か丶ればはやく七卷にも。八卷にも分てりと見えたり。猶いはゞ。出三藏記（梁僧祐記）に法華七卷とし。慧琳音義には八卷とあり。開元釋教錄には七卷とも。八卷ともしるしたり

草書心經

ある人の說に。高野大師の眞蹟眞草二體の心經。今なほ世に遺れり。唐土にて書に名ある人の書ける經文は。道家の黃庭經。晋の時に書して佛經よりふるく。心經は唐の虞世南の書きしより。續ぐに褚遂良の心經あり。いづれも眞書にてかけり。睿宗の時に

り。和歌の詞に。おもひに身をやき。戀にこがるゝなどいふも。みな躁急心熱の謂なり。この詞のふるく見えたるは。大須本將門記に。胸上之炎焦二心中之肝一とよませ。源平盛衰記に。肝を焦すといふことあるも。もとは肝をいるとよませしならん。顔子家訓に。墨翟之徒世謂二熱腸一。腹朱之侶謂二冷腸一。また。呂覽に。焦レ脣乾レ肺。費レ神傷レ魂といへるも。肝煎といふに語意似たりといふべし

中人

婚姻の媒妁する者をなかうどといふは。中人の義なり。雙方の中にたちて婚儀をとりむすぶよしの名なり。中人をなかうどといへるは音便なり。旅人をたびうど。商人をあきうどと云ふ例なり。さて朝鮮の訓蒙字會に。媒妁俗呼男曰二媒人一女曰二媒婆一總稱二中人一とあり

敷島の道

安齋の説に。わが國の歌を敷島の道といふこと。上古には聞えず。後代の詞なり。しき島は日本の總名なり。道は人倫の道なり。人倫の道は聖人の敎の法なり。應神天皇の御代。始めて聖人の道渡り來て以來代々の天皇聖人の道を本として。我國の風俗に隨ひて。斟酌して天下國家を治むる法を立てゝ。律令格式等をさだめ給ひしをこそ。しき島の道といふべけれ。神武天皇東征を始め。代々の天皇天下國家を治むるに心勞し給へり。君臣ともにうかうかと歌ばかりよみて居たればとて。治まるべき道理なし。歌を敷島の道といふは歌人の私言なりといへり。この一條の論げにさることながら。もと吾邦の風俗は武勇に勝れたれば。めゝしき歌などを丈夫のよみ出づべきことかは。男子は男子。婦女は婦女らしくわが持ちまへを吟咏するこそ眞心なるべけれ。文物さかんなれば。その弊浮華になり行き。和歌の風體もおのづから淫靡にのみながるゝを。たとへていはば聖敎は仰ぐべけれども。後學者に僻説いと多し。佛説も尊けれど。末世の僧徒に破戒あるごとく。歌道も名人君子にはなきことなれど。歌にすさむことも亦なきにあらず。なげくべし。因に云。もとしき島といふは。大和國の地名にて。欽明天皇のそこに都し給ふところなれば。しき島をもて。大和の枕詞とはしたるなり。萬葉集人麿が歌に見えたり。かゝれ

んと思ふやらん。琴三線は我得たるわざなれば。ことゞく傳ふべし。但し外に望みあれば申すべしとありければ。その時佐次郎は。伯父にいふよやう。音曲の業は田舍育にてればつかなし。何卒針治の業をまなびたくといへば。樋口は大きによろこび。げにもよき心入かな。音曲の道は老後はいかゞなり。仁術こそ賴もしけれとて。やがて師をもとめ學ばせけるに。他念なく修行して。上達し。高貴のあたりへもまかりて。しば／＼功ありければ。その名四方に賞せられ。つひに　伯父の養子となりて榮えたりと。ある人の物がたりなり

慶安　女術　肝煎

今世にて人の口入れするを。けいあんといひ。遊女の口入れするをぜげんといひ。これらのことを媒するを。すべて肝煎と云ふ俗語をれもふに。慶安といふは。江戸木挽町に大和慶安と云ふ醫師ありけるに。また同じ頃に。伊達三郎兵衛。長谷川助右衛門といふ浪人。かの慶安と參會し。入魂の上にて。世間の人の出入。あるひは男女婚姻の媒妁など。右三人して肝煎す。しかるにある諸侯の緣邊を取りもち。その息女金五六千兩持參の筈に相定め。彼三人のものども。いひ合せて。その中二千兩ばかりかすめとるたくみを仕けるところに。此事世上にあまねくきこえ。寛文五年己巳八月廿四日。かの三人[illegible]やつばら追ひ放たれぬとかや。その頃よりして。人の世話するものを慶安といひけりと。諸家深秘錄にいへり。又ぜげんと云ふは。女術の轉訛なるよしかけるものあるを見たり。術はうると讀めり。俗語を字音にあつるは。文人の附會ならんとれもひゐたりしに。俳人不角が作の一騎討敎集といふものに。うれしがらせ／＼といふ前句に

　女見（ちよげん）をば親父ぢやといふうて遣る妹　　柳水

といふ句あれば。ふるくも女げんといひしと見ゆ。されば女術の字音といふこともあるべし。また肝煎といふは。ふるき詞なり。室町殿日記に見えたれば。ふるき俗語なるべし。獨琉球神道記に。村の肝煎といふことも見えたり。今の如く職名となりしは。いと／＼近きことゝれぼゆ。れもふにきもいりといふは。源氏物語に。ある心いられと云ふ詞と同じこゝろばへにて。即今いふ氣のいれるといへることな

をたひて凌ぎたれども。くやしきことのみなりしにぞ。この程は伯父を尋ねん力もなく。命ばかりもつなぎかね。哀れはかなくきのふ今日と宿りつる身のうへを歎きつゝ。兩國ばしに至りしに。頃しも六月なかばにて。川の中には。數十艘の涼舟波のうへに漕ぎつらね。琴三線の音色おもしろく。げに大都會のありさま耳驚かす賑はひなれど。憂きことつもる。佐次郎が身には。いよ〳〵己が身の拙なく生きがひなしと思ひ極め。川水に身をなげんと。欄干より飛び入りけるをりから。橋間よりこぎいづる船の中へ飛び入りければ。船中の人々は。あわやとおどろきけるが。この船の中に樋口檢校といふ人をはじめ。琴の弟子多く居合せしが。その時檢校は。佐次郎が身をなげんとして。船の中へおち入りし體を聞きて。おなじ盲人とある故。わが身につまされ不便とおもひ。介抱を云ひつけて。後に側近くまねぎ尋ねけるは。いまだ歳もゆかぬ身にて。何故命を捨てんとはせしぞ一河の流を汲むも。他生の緣とかきく。まして死を極めしものゝ。此船に入りて命つゝがなきは。ひと方ならぬ因緣なり。身の上をうちあかし語らば。助力しても得させん。死なでかなわぬ罪にてもあるかと深切に問はれて。佐次郎淚をながし。その賴もしき詞の禮をのべ。それより伯父の諏訪都を尋ねて。信濃よりはる〴〵のぼりて。この日頃久しく艱難辛苦をこらへ尋ねあぐみて。はては一錢の貯へも盡き。詮方なく覺悟をきはめて。この川へ命を捨てしに。目の見えぬ故。あやまりてこの御船へ落ち入り。御遊興の妨げとなりしこと免し給へとわびければ。樋口は是を聞くうちに。はや淚をうかめて。扨はその方はわが妹のうみし佐次郎といふものなるか。我こそ尋ねる汝が伯父の諏訪都にて。今は樋口檢校といふものなり。故ありて國元の人々には音信不通にはなりたれども。その方は我ためには正しく唯一人の甥なれば。なつかしく思ひゐたるに。今日はからずも必死にのぞみて。伯父甥の名のりすることは。先祖の靈の引合ならんと聞くより。佐次郎は夢かとばかり悅びつゝ。先だつものは淚なり。船にありあふ人々も。いと〳〵まれなる會合と希しきことに稱しけり。さあれば樋口は佐次郎が名を。今日より諏訪都と改め。この以後は。何をもて身を立つる職業とせ

まなく。空腹になりし故なるべし。それを軍書に軍にはしつかれ給ひしなど〻しるしたるハ。さすがひだるくなりしからといひに〻ければ。飾り詞といふものなり。これを孔子の足レ兵足レ食。民信レ之と仰せられき。また論語に。既に庶あり。富レ之教レ之とのたまひしを。ある人庶とは軍兵の多きこと。富ますとは兵糧のこと。教とはかけ引き操練のことなりと解しハ。活きたいひやうなりといへり

必死を極めし人開運せし話

元祿の初。信濃國下の諏訪なる百姓佐左衛門の一子佐次郎といふもの。盲となりけるが。父母身まかりて後。その里に住みがたく。十四歳のとき。伯父の諏訪都といふ瞽者。江戸高輪の邊に在りとのみ聞きて芝に至り。こ〻かしこ尋ねしかど知れざりければ。いかゞはせんと心を痛めてぞ。日を送りける。かの伯父の諏訪都は。二十四年以前に。江戸へ出でしハ。佐次郎が生れぬ前のことにて。古郷へは音信もなく。是まで一度も逢ひたることもなけれど。父母に別れてより。家貧しくして。國元に住居成りがたく。縁あるもの〻話つたへに。諏訪都がことを聞きしかば。それを便りにはる〲と江戸に立ち越え。わが身の上を頼まんとの心なりしに。その伯父のありかもゆくへもさらに知れる人のなかりしゆゑ。心ぼそさかなしさいはんかたなし。れもひわびて日毎に芝の町々を問ひ尋ねしが。その名に似たる人だになければ。佐次郎わづか十四歳にて。田舍育なれば。江戸のひろきをわきまへず。唯芝の邊とのみ聞きて登りしことなれば。江戸の中にて。三つがひとつにたらぬ芝をのみ尋ね。もはやこの上は尋ぬべき便りもなしと思ひきハめ。たま〲盲人などにいで合ひて。尋ぬれど。それかとれもふ心あたりありとも。わづらはしきをいとひ。知らる〻便宜もかたり聽かせぬ。たのもしげなきものにのみ問ひければ。遂に知るべきよすがもなし。そも〱佐次郎が。古郷を立ち出でしことのもとハ。父母の家さへ斷絶し。遠縁の人の方に身をよせてありしが。なほその家も貧しければ。ながくは頼みがたく思ひて。心をさだめ伯父を便りに。わづかの路用をもて江戸に來り。はや〱日かずを過し〻かば。今は旅宿にやど錢さへつくなふ貯も盡きはて。この四五日は人の軒ばにた〻ずみて食

づれて。終には詞のもとのわからぬこと多かり

米穀は國の基

黄金萬貫不レ可レ療レ飢。白玉千箱何能救レ冷と書紀にもありて。食は天下の本なれば。上古にも祈年祭と て。豊年を祈ることあり。令に仲春祈年祭。義解に。欲レ令ニ歳災不一レ作。不ニ時令順度一。即於ニ神祇官一祭レ之故云ニ祈年一といへり。安齋筆記に。凡生活する物。その生命を保つものは食物なり。鳥獸魚蟲に至るまで。食物を求むるを以て勤とす。況や人倫をや。亦子出産すれば直に乳味をもとめ。生長して四民れのく其家業を勤むるは。食物を求むるが爲なり。食せざれば生れ得たる生命を保つことならず。されば人倫の至寶は五穀なり。金銀珠玉を寶とすれども。その金銀珠玉をもて五穀を買んとすれもふといへども。凶年饑歳。あるひは兵亂などにて。五穀を賣るもの無き時にいたりては。金銀球玉は食はれぬ物なれば。忽ち餓死すべし。然れば五穀は至寶なり。五穀は生にては食はれぬ物なり。五穀を食へども。衣服を着ざれば凍死す。されば衣服は五穀にひとしき寶ものなり。食物と衣服の外は。有用の寶物にはあらず。皆無用の寶なり。永祿年中の兵亂に。天子も饑渇にたよばせ給ひければ。富有の商家より米を獻りて。饑を凌がせ給ひしよしいひ傳へたり。上もなき三種の神器は。禁中にありといへども。天子の御饑を助けたまふことはなかりしなり。彼時にあたりては。米穀は神寶よりも貴かりしを考ふべし。世に寶物と稱する物は。寶なることなれども。五穀。衣服。食物を調ふ器物よりも劣りたる寶物なり。後代には食ひて生命を保つべき米を賣り拂ひて。食はれもせぬ金銀を求むるは。愚なるよしいへるは。げにさることぞかし。百姓足らば君たれとともにか足らざらん。百姓足らずんば君たれとともにかたらんといふがごとく。國家の富饒は。その次第一やうならざれども。まづは耕作の力めて。出精なると不精なるとにもよるべし。しかるに米穀の人を養ふ徳のたふときこと。上にいへるがごとし。一宵話に。劍術の達人子馬の名人にても。腹の中からひだるいといふ大敵にきりかけられては。防ぎも遁れもならばこそ。昔の名將勇士たちの。名もなき雜兵の手にかゝり。あへにく討たれ給ひしも。大かたは數日食事のいと

よこれこそ鬼よ。簑きて笠きてくるものが鬼よ

方言

漢の陽子雲。輶軒絶代語の撰あり。世に楊子方言といへり。わが邦にて近來越谷吾山といふ俳人の物類稱呼をあらはしたり。ある人大和の國の方言をすべいへる諺とて

　ていくござれ。さうはつちや。かたつか。けんずゐ。ゑそまつり

れもふに。ていくござれは。歩行の義。あるきてござれと云ふに同じ。さうはつちやは左樣と云ふ詞にて。はつちやは助語のはたらきなり。かたつかは。はつまらぬといふ俚語に同じ意ばへにて。かたつかもないなどゝもいへり。けんずゐは。間炊なるべし。中食のことなり。籠耳に。晝食くふことを人によりて。その名目たがひあり。侍は中食といひ。町人は晝食といひ。寺がたに點心といひ。道中はたゞ屋にてひる息(やすみ)といひ。農人は勤隨といひ。御所方にて女中のことばには御供御(おくご)といふとあり。又風俗文選の汶村が南都賦に。なら茶をヤチウと名づけ。晝食を硯水といふともいへり。しかれども勤隨また硯水ともに字音の假借なるべし。ゑそまつりは。ゑそは魚の名なり。大和は海なき國にて神事祭禮ありとも。ゑそなどの海魚の得がたきをもて。肴に酒宴することはなみのことにてなしといふこゝろにて。珍肴をそなへたるふるまひなどのあるときの言なり。出羽の方言をいふ諺に

　あいべちや。こいちや。ござもせちや

あいべは行けといふこと。こいは來れといふこと。ござもせはござれといふ方言なり。ちやは助語にてかの國にてつねにいふことゝぞ。盛岡あたりの方言をいふ諺に

　びる。どんぼ。がに。げいる

蛭。蜻蛉。蟹。蟇なり。陸奥の俗は濁音多ければばなり。また筑紫がたにては詞の末にはつてんといふ助語をそへていふことあり。聞きなれぬものは耳にかゝりてをかしきやうに思へど。今常にさういうたればとて。しかじかなりといふこと誰もいふことにて。ばとてといふ詞の國のなまりにて。ばつてんとなるなり。すべて國によりて品物の名の異なるは。さもあるべきことなれど。詞の轉訛は大かた音便よりく

一樹の陰に宿るも他生の緣といふ詞

いにしへ白拍子のうたひものに。一河の流れを汲み。一樹のかげにやどるも。みな他生の緣といへるは。說法明眼論に。宿二一樹下一汲二一河流一。一夜同宿。一日夫妻皆是先世結緣と見えたり。この書は世に聖德太子の作といひつたへたれど。僞書なること辨を待たず。源平盛衰記。太平記。義經記。保曆間記などにこの詞見えたれば。ふるき諺とおもはる。さて珍書考といふ書に。古文類談と云ふものに載すと云。隋張即之詩に。汲二流一川一接彌深。屛二雨一樹一思殊親とあるが來處なりとあり。この詩を夏山雜談。閑田次筆などにも引たれど。疑ひなきにあらず

兒啼を止むる諺　手々甲(せゝがふ)

籠耳といふ冊子に。小兒の啼を止むるとき。むくりこくりの鬼が來るといふこと。後宇多院の弘安四年北條時宗が執權のとき。唐土元の世祖たび〳〵日本をせめけることあり。元の國を蒙古國ともいふなり。世祖よりこのかた大元と號せり。さるによつてむくりこくりといふは。蒙古國裏といふことのいふあやまりなり。鬼がくるといこの夷賊をいふなり。又いとけなき子を威し賺すときに。顏をしかめて元興寺といふことあり。むかし大和國元興寺といふ寺に鬼すみて。人をなやますとて。世間さわがしきことあり。本朝文粹に見えたり。これよりして元興寺(げごじ)とて顏をしかめておどせば。小兒なきやむといへり。又小兒をすかしゆぶるとき。虎狼來〳〵といふこともあり。もろこしにては張遼來といへば。小兒なきやむとあり。張遼といふもの。たけき兵にてありしとなり。又日本にて手をくみ顏にあて。手々甲(せゝがふ)というて小兒をおどすこともありといふこと見えたり。むくりこくりのことは櫻陰腐談に見ゆ。元興寺のことは南畝莠言にありとおぼえたり。手々甲といふことは。今土佐國にて兒女などの常の遊戲にすることとて。その國人祖父江氏の過しころ訪ひ來られしをりの物がたりに。その戲れは左右の手を組み合せて。手の甲をたがひにうち鳴らしながらとなへて。その詞の終るところにあたれるものを鬼とさだむるよし

その唱へ詞

むかひの河原で土器やけば。五皿六皿七皿八皿。八皿めにおくれてづでんどつさり。それこそ鬼

つもすこりはいるぞまさる
うれしさよ。には(庭)のたけ(竹)のふし(節)〴〵
に。きみ(君)がよろづよ(萬代)のよはひ(齢)こめ
て
むかしうらめたろん。あかつきのとりん。今と
しにならすしらなあなや
つき(月)やむかし。つき(月)やすが。かはてゆゝ
やひとごゝろ(人心)
つきひ(月日)かさ(重)なれば。とし(年)やゝよれ
ども。ゑりなけるいそぐたび(旅)のそら(空)よ
たび(旅)やはまやとり。くさまくら(草枕)こゝろ
ね(心寐)てもわすら(忘)れんそかれそは

その彈くところの三味線は。はが邦のものよりは三四寸も短く。棹は紫檀黒檀にて皮は海蛇皮なり。調子ことさらに高く。聲にも合せず。彈くやうに見ゆ手はいたつて繁手なり。なか〳〵わが邦のごとき妙手にはあらず。伊勢のあひの山なるお杉お玉のひく三味せんに。やゝ似たりとかや

ゑらぶ鰻

琉球よりわたる三味線の皮は。實は海蛇皮にはあらで。かの國に産するゑらぶ鰻とて。漢名を慈鰻と云ふものゝ皮なり。ゑらぶは島の名にて。その島は薩摩と琉球との間にありて。口のゑらぶ。中のゑらぶなどと唱へて。二つ三つある島と見えたり。中山世譜などにも。島の圖はありとおぼゆ。この島に住むゆゑに名づけてゑらぶ鰻といへりとぞ。いと得がたきものにて。常に島の岩窟に海よりあがりて住み。ことに冬にいたれば。かの鰻の總身へ落葉をまとひつけて。窟の中にかくれ臥す。そこへは島に住める人といへども。なか〳〵往きがたきけはしき海岸なり。球琉よりは十里ばかり南にイトマンといふ島あり。その島人つねに裸にて。海中を自由に往來すといへり。その島人が楠の獨木船に乘り。かのゑらぶ島にわたり。小刀を携へ。水中より海岸の窟にのぼり。かの鰻をとらへて刀にてさしとほし〳〵して取るといへり。小さきは二三尺。大きなるは壹丈にあまれり。その大きなるものは三尺ほどづゝに切りて。舟に積みかへると。中陵翁のものがたりなり

○三味線の皮エラブウナギに非ズエラブウナギハ多キモノニテ獵師手ニテ捕フ刀ナドニテ切ルモノニアラズト或人云へり

あの君さまは。いつもさかりよな。

檢校これに次ぎて七組の曲を作る。琉球組もその中なり。この時猶三味線の寸尺定まらず。一二三ともに上駒をかけたり。それ弟子虎澤檢校新に六組を作る。その後柳川檢校はじめて三味せんの長さを二尺一分と定む。その弟子淺利檢校。佐山檢校。市川檢校などみな三味せんの名人と稱す。ことに佐山檢校の端手七組を作り。手事といふことをはじむ。かつ二上りの調子をはじめて彈き出だす。若みどりといふ唄二上りの調子のはじめなり。この後連川檢校一下りの調子を引きいだすといへり

本手組十三組端手組七組あはせて二十組なり。今も京大阪にて法師のならひ傳へて。やんごとなきあたりの好ませ給ふか。あるひは神佛の法樂ならでは彈くことなし。みだりになみ〳〵の人の爲に彈きて聞かすることをゆるさず。强ひて所望すれば復すとて彈くなり。この法師といふ者は四分の瞽者にて。芝居狂言などの淨るり小歌をば。座歌と唱へて彈くことをかたくいましむることとなり

—石村檢校——虎澤檢校——山野檢校—
—石村平兵衛　—柳川檢校——
—淺利檢校——伊豆檢校——岩崎檢校—
—佐山檢校　河村檢校
—市川檢校

琉球國の小歌

琉球國にはいまも專三味線を翫ぶよしなり。京師堀川なる南溪といふ人　天明のはじめ薩摩國にあそびしころ。琉球の喜屋筑登之顏鴻基字は延德といふもの三味線を彈き。當間筑登之紹逵道字は隆嘉といふもの。小歌を唄ふを　ける時の筆記とて。ある人の見せけるは

きよのほこらじやな。たれがなたてろ。つぼで(莟)をるはな(花)の。つゆ(露)けたごと

この歌は祝儀のうたにて。始めをはり　唄ふよし。高砂の謠をうたふが如しといへり。さて酒もりなかばに二人にてうたふ小歌

こゝのへのうちに。つぼみ(莟)てつゆ(露)まちよ。うれしもきく(菊)のはな(花)やゆる

ときは(常磐)なるまつ(松)のかはるもなき。まい

常以レ大闘以二小螯一食レ物。和名訓稱二加佐女一。以下生二江海二而大者上爲二佳品一。用二鹽水一煮熟則全體變作二純赤色一。脱レ甲取二白肉一和二薑醋一食。其黄最美也とあり。蝤かざめ諸書みな擁劍に充れど。怡顔齋介品には。蝤蛑にあてたり。さて蟹は常に腹上に卵を含めること。最多きものなり。かゝればその腹上に卵を孕めるかざめ蟹の裕に。鹽水に調理せんと水責をおぼめかしいへるなり。こは忠臣藏九段目の切に。くらひ醉ひたるその客に。それ加茂川の水雜炊をくらはせいといふにおなじかる文勢なり

節付の各目

浄るりの節にレイゼイ。また三重などいふ名目くさ〴〵あり。そはみなよりどころあることにて。三河國やはぎの長が娘浄るり姫に牛若丸の戀ひせしことを。十二段に作りし物語に。節付をしてかたりけるに。かの物語のしのびの段に。柴のあみ戸をおしひらきといふ所の。あみといふ詞のふしをアミといひ。更科冷泉もろともにといへる侍女の立ちいづるところの。れいせいといふ文句のふしを。レイゼイといふ節の名となれり。またたゝきといふは。むかし網笠を着て扇を持ち手を打ちたゝきて唄ふものをたゝきといふ。人倫訓蒙圖彙に見えたり。その節を用ひたる所をタヽキといふ。三重といふ節は。鉢扣の歌の節といへるは。ひがことなり。ふるき琵琶の手なり。何某勾當の師直が前にて。平家をかたるに琵琶の三重を上げたりといふこと太平記に見えたり

三味線

三味線はもと蠻樂の器にて。琉球にて專ら翫び。海蛇皮もて張りたれば世俗はジャヒセン（蛇皮線）といへり。文祿年間瞽者石村檢校それが弟の平兵衛といふものとおなじく琉球國に渡り。兄の檢校は其曲を習ひ。弟はその製作をならひ得て歸り。石村平兵衛はじめて三味線をうちたり。そのかみは寸尺定まりなし。さてかの石村檢校が琉球にて習ひたる唄

チャウリヤウ。フリヤウ。ソレヒヤウラニ。リヤ〳〵ニ。イヨアリヤヨイ。フリヤウソレルリヒヤウフリヤウ

このうたの三味線の手にて。石村檢校のはじめて作りたる唄

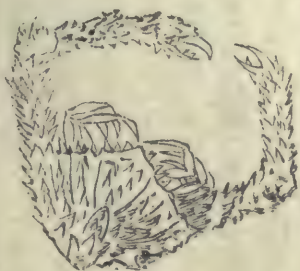
ちよの始のてんに照る月は。十五夜が盛りよの。

生會といへり。光正天皇は元正天皇をいつのほどよりか。よみおやまりて唄ひひがめけん。そはともあれ。作者のあづかるべきことかハ。養老四年季の秋といへるハ。かゝる唄ひものにも。さすがに神事の原始をいふことの正しかることよとれもはれたり。そは宇佐宮にて。始めて放生會を行はるゝよしは。宇佐宮縁起に。養老四年九月。征夷の事あり。大隅日向兩國亂逆す。公家宇佐宮に祈禱す。その禰宜辛嶋勝波豆米神軍を相率ゐて行きて。彼國を征す。其敵を討ち平ぐ。大御神託宣して曰。合戰の間。多く殺生を致す。宜しく放生會を修すべし者。諸國の放生會この時より始まれりとあり。さるを清元のながれをくむものゝ唄ふを聞くに。養老四年中の秋といへるはいかにぞや。石清水に勸請し奉りし後こそ。八月十五日なれ。諸國にはじまるといふにも心づかで。なまじひに改めたることよと。いと拙くればねたり。何ごとにもあれ。ふるき人の書きれけるを。あらためたらんには心すべきことぞかし

讀書會意に。余少年時好ニ院本一。以レ今考レ之乖レ實者。十而一二。皆存ニ善惡之戒一。迨ニ近松氏書行一據レ實者。十不ニ一二一。使ニ人不レ知レ倦。壞ニ風俗一亂ニ倫理一。不レ可勝言一。經ニ三十餘年一。兒女好尙大與レ昔別。老婦撫ニ兒女一。絕不レ及ニ古之事一。無レ誦ニ勸戒之語一。嗚呼近松之罪不レ容レ誅也

腹に子のあるかざみ

壇浦兜軍記あこやが琴責の段に。腹に子のあるかざみの格鹽こひて水のませいといふ文何を。ある人腹に子のあるかざみといふことの。わきがたけれバとて問はれたるに。予云。かざみハかざめの轉訛にて。蟹の一種なり。知名類聚鈔に。擁劍本草云。擁劍和名加散女。似レ蟹色黄其一螯偏長三寸。また本朝食鑑に。凡本邦所レ食者擁劍石蟹二物也。擁劍者一螯大一螯小。

かざめ蟹の図

しゆゑ。つひに人の肉を食ひしといふ述懐の段。あはれに聞ゆ。西鶴が小夜あらしに。閻魔王の地獄を落つるさまもまたあはれなり。名人のかけるものにはかゝるあはれたるものを。ものあはれに見すること。筆力の妙なり。吾妻淨瑠璃の清玄が。さまざまの蟲けらを護摩の火にくべて。祈りしが。されどもしるしのあらざれば。ぼうぜんとして立ちたりける。かの清玄がこゝろのうち。あはれともなか〱申すばかりはなかりけんとかけり。今の世の下手作者がかきなば。あはれとはいはずして。おそろしとかくべし。惡人といへども。戀の心は一つなり。あはれとかける文。まことにその情をつくせりといふべし

隣の小女が唄ふ豊後ぶしの聲をきけば。青樓の詞に後生でざんす。をがみんす。こはばからしいと抱きつきといふは。何とも語をなさゞる文にして。並木五瓶が作なるべし。五瓶は上方ものにて。江戸の青樓の詞はしらず。人傳に青樓の詞をきゝて。わからぬことをかきしなるべし。かゝる作者さへ五人切大あたりあり

この二條南畝翁の記より鈔出す。翁はかりそめに書かれしもいにも筆力あり。その敏捷滑稽おもひやるべし。因に云ふ。淨るりの文句には。作者のふるき唄ひものゝ詞をみだりに摸擬標竊なすからに。もとの意を失ふとまゝあり。また作者はさもあらで。後にうたひひがめたるもなきにあらず。お房徳兵衛の道行の文句に。番場の町をあとにして月のかさ木もはる〲と。のびあがらねば見めぐりのといふは。河東節の隅田川舟の内の文句に。若葉にうゑし鳥居こそのびあがらねばみめぐりのといふをとれるなれど。こは舟の内より土手を望むけしきなれば。のびあがらねば見めぐりといふ詞。おもひやられたり。さるを堤の上をゆく道行の文には似げなし。また源太の文句に。あつはれ敵よ。のがすなと。はちきがなかにとりこめられといふは。はやく箙の謠曲にも。はちきとあれど。平假名盛衰記の文には。箙の梅のむろ咲とはちきが中にとりこめてとあり。八騎に鉢木をかよわせたる作者のはたらき巧といふべし。また長唄のよし原雀に。凡いけるを放つこと。光正天皇の御字かとよ。養老四年季の秋。諸國に始まる放

とよめり。舟は羞也と辨毛披意といふ書にありとて片紙に記して言上す。諸人その本を見んといふといへども。秘して出ださず。博陸より急に詰問せられければ。件の本を出だす。開き見れば唐本の傍に舟羞也の三字を細字に。日本にて書き入れたるなり。元信面目を失へり。又小野頼風が女郎花の事。深草四位少將が小野に通ふことも。謠に作れり。この兩人は公卿補任にもなしといへりと。建仁寺の雄長老語られき。この長老は謠の注作るときの棟梁なりと見えたり。この條は丁阿大德のかんがへなり。予がいとわかゝりし時。示されしをおもひいでゝこゝにしるす。これによれば。謠曲に解しがたき詞のまゝあるもことわりとおぼえたり

小歌

糺物語に。糺河原にてある上﨟の三味線ひきてうたう小歌に

何の因果に娑婆に出て〱。とおしかへしうたひ給へると書けり。この册子は日蓮宗門のことをむねと述しものなれば。さる唱歌をも作りしものならんとおもひゐたりしに。吉原小歌總まくり。ならびに吉原たゞのりといふものを見るに。替りぬめり歌に

みしやう(未生)いぜんがはるかにましじやなにのいんぐわにしやばへきて

またさらへ考の中。大石内藏助(表徳うき)がつくれる狐火といふうたの文句に

何のいんぐわに娑婆へ出ていきてそれるゝ身ではなし

などみえたれば。何の因果に娑婆へ出てといふ唱歌の。そのかみはやりしこと見えたりある人の見せし烏丸光廣卿の作り給ひしとて。自筆にかゝせたまひしに

おなじ空なる影かとおもて見れば。あやしや月さへサマともに見ぬ目がかはるげな

淨瑠璃の評

南畝翁記に。酒顚童子の忌日は。八月十日なり。大江山千丈が嶽の由來縁起に見えたり。童子はもと越後のものにて。叡山に上り兒となりしよし。甲陽軍鑑にもしるせり。今も越後に童子屋敷といふあり。近松が酒顚童子枕言葉といへる淨るり本に。童子が母の童子を愛して。成長にいたるまで。乳をのませ

と見ゆ。その證は鵜の注に。一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛云々。此文を山門寶地坊證眞は。中陰經の文とは引きたれども。今彼經を考ふるに。なしとありて。遊行柳の注に。中陰經云。草木國土悉皆成佛云々。西行櫻の注に。草木國土悉皆成佛。是中陰經の文なり云々。當麻の注に。中陰經云。一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛と。說きたまふなどゝあるを見れば。後の三條は實地坊の說。はじめの一條は他人の意なることとしるし。これによりておもふに。この鈔は諸家の說を集錄したるものと見えて。猶三輪の注に來歷は神道より記しいださるべきものなり。阿漕の注に。贊のおし吉田殿へ御尋ねあるべし。また兼平の注に。我たつそま叡山のことなり。委しきこととは天台宗よりしるさるべし。小鹽の注に。神もまじはる塵の世。和光同塵のこと吉田殿注あるべし。蟻通の注に。和光此末に神道よりしるし申すべし。俊寛の注に。山中檢校申す。葛城の注に。紹巴申すなどゝあれば。その家々の說を集められしものと思はる。また詞の中にむかしより典據のつまびらかならざることあり。そは富士大鼓の注に。しうこうが手を出だし。はんらうが涙にても。此故事往古よりいまだかんがへず。二人靜の注に。もろこしのさこく自レ昔此故事知れざるなり。自然居士の注に。然れば。ふねの船の字を公にすゝむと書きたり。船の字をわけて。舟の字をすゝむと讀みたる訓見えず。近くは建仁寺の月舟へ相國寺の惟高のとはれたれども。つひに見ぬとあつたぞ。出處未審。これらをもておもふに。梅村載筆に。秀次關白の時。謠百十番を注せられしに。五山の僧衆相國寺慈照院に聚り。故事ども其家々へ尋ねられたり。知れぬ事ども多かりといふに。全く符合せり。猶載筆に云。遊子伯陽が月を愛せしこと。唐土のさこくは花に身を捨てたること。しうこうが手を出し。はんらうが涙のこと。船の字を公にすゝむと書きたることなんどの類。げにも不審なることゞもなり。俗間に古今和歌集の注とて。やくたいもなき假名がきの物あり。遊子伯陽は史記にありと云ひ。柞國は後漢書にありと云ふ、みな大なる僞なり。それをすぐに謠に作りたるなり。此時元信と云ふ僧。足利より上落して。大佛の邊にゐたりしが。詩の邯鄲柏舟を柏にすゝめむ

を受け。大魚となりて。その脊の上に大樹を生じ。苦惱を受けたりしか。此師舟に乘りて。海中を過ぐるに。魚あらはれて師を怨むるによりて。此師の弟子の罪を消滅せん爲に。その形を造り。佛前におきて。日ごとにこれを打ち鳴らして、經をよめりとかや。この事大智度論に出でたりとも。あるひは婆娑論に見えたりといへど。すべて經論中に見えず。あとかたもなき妄説なり。しかれども。おもふに五百問論に。師弟子に教示せず。その弟子龍身を受くるに。師舟に乘りて。海中を過ぐるに。その龍師をうちみて舟をくつがへさんとせしかば。師罪を悔いて自水舟に身をなげたりといふこと見えたれば。これらの事に附會して。木魚といふ文字によりて。魚の脊上に樹生じたりといふことにつくりまうけしなるべし。こはもと木魚といふは木にて造りたる魚といふことにて、魚の脊の上に木ありといふ事にはあらず。玄透和尚の清規の首書。佛像圖彙などの書にみなこの妄説を載せて。人をあやまることまゝなきにあらず。三才圖會に。木魚刻レ木爲ニ魚形一空ニ其中一敲レ之有レ聲。釋氏謂閻浮提乃巨鰲所レ戴。身常作レ癢則鼓ニ其鬐一。川山爲レ之震動。故象ニ其形一擊レ之。此荒唐之説。然今釋氏之贊ニ梵唄一皆用レ之とあり。これにも已に荒唐の説といへり。古今原始に。木魚隋僧志林作とあれど。此人も僧傳中にかつて見ゆることなし。唯百丈清規に。相傳云。魚晝夜常醒。刻レ木象レ形。擊レ之所ニ以警ニ昏惰一也といへるぞ。正しき説といふべし。さて明の瞿祐が木魚詩云。長廊懸掛發ニ鯨音一鱗甲光芒欲レ倍レ尋といへり。この詩のおもむきにては。初めは高く懸けて打ちたる魚形の版なりしが。後に形の變じて。今の如くなりても。猶懸けたるならん。置きて打つは後のことにて。これを打ち鳴して經呪をよめるは。いよ〳〵また後のことゝぞおもはるゝ

謠抄の勘文

謠曲の抄物に。謠古鈔と稱する注釋あり。その書の時代は文祿年間に撰みしものとおもはれたり。第一なる熊谷の注に。百聯抄解のことをいはんとて。この本は嘉靖四十二癸亥年あつめし書なり。文祿四年乙未年までは。三十三年なりとあり。又芭蕉杜若等にも。みな同じおもむきに載せたり。おもふにこの謠鈔の撰みは。一人の手になりたるものにはあらず

はそんいたしければ。弟子あまた引きつれ。大鼓鉦のひやうしをそろへ。躍念佛をくはだて。繁昌の地へをどり出で。一錢半紙の勸進をゑて。堂塔伽藍を建立したまふとかや。されば。いま末代にいたつてほうさい念佛と名づけ。大鼓鉦をたゝきれもしろくをどりければ。をさあひはまうすにれよばず。老いたるわかきもわれさきとこぞり出でゝ。これを見くわんじんを入れければ。ゑもひのまゝに米錢をもつてやぶれたる堂寺そこねたる橋までを建立をなし。そのところはんじやうするとぞまうしける

右の繪卷は。寛永正保の頃のものとはれもはれたり。そのよしは寛永十八年に印行の。そゞろ物語といふ冊子の。江戸中橋の女歌舞伎のことをいへるところに。猿若いでゝいろ／＼の物まねすることをかしけれ。ほうさい念佛猿まはしといふこと見ゑたり。これに次ぎて。これかれものに見ゑたるは。仁勢物語に。をかし男いとかじけれところへて。米錢もなかりけり。さるをいなことをならひていざなふものにつきて。世の中をすぎんとれもひて。出でゝ躍らんとれもひて。かねなどを買うて首に懸けゝる

出でゆかば心くるしとわらはれん。

　世のほうさいを人のしらねば

とよみれきて出で申しけり。卜養狂歌集に。ある人ほうさい念佛を繪にかきて歌よめといふ

　人はみなさいはうとこそ願ひしに。

　さかさまことぞほうさい念佛

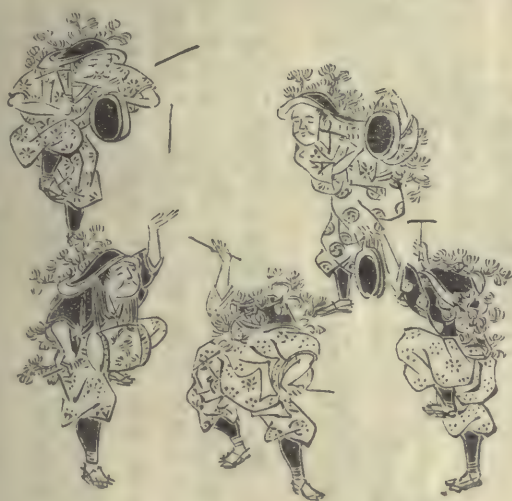
世事談にも。寛永のもろほうさいといふ狂人の法師ありて。町々小路を走る。わらんべあつまり。氣ちがひよほうさいよとはやせり。今以て云ふ事ありて。氣ちがひの名目となれりと見ゑたり。今これらの文を考ふるに。寛永よりまへかたほうさいといへる僧ありて。躍念佛をしけるが。寛永のころそのまねをして勸進するものありしかば。自。躍念佛の名目とはなりしなるべし。世事談の説はあやまれりといへり。この一條はこゝに載する繪卷のもと。わが藏品にて人にもしば／＼みせけるに。ある人の書きてれくりしなり

木魚

木魚といふ佛具は。むかし或僧の弟子に。聊も敎示することなかりしかば。その弟子命終して海中に生

愍。即爲書ニ此隨求大明王陀羅尼一繫ニ於頸下一。若惱皆息。便即命終生ニ無間獄一。其苾芻屍殯在ニ塔中一。其陀羅尼帶ニ於身上一。因ニ其苾芻纔入ニ地獄一。諸受レ罪者。所有苦痛悉得ニ停息一。咸皆安樂。阿鼻地獄所有猛火由ニ此陀羅尼威德力一。故悉皆消滅と見えたり。この經說にて隨求呪の功德はしらるゝものながら。〓字をのみ一字かけることは何のゆゑにか。おもふに。これは吾邦のふるき傳へと見えたり。そは寶物集に。大地獄におちて苦患をうくるに。隨求羅陀尼の文字一つ風にふかれてきたり。かの墓所にかゝりける。その功德力によりて。地獄の鼎にはかにやぶれて。忽涼しき池となれり。また沙石集にも。隨求陀羅尼の一字風にふかれて。屍にふれたるゆゑに。婆羅門地獄より出でゝ天に生ず。如來の等流變化の分身の字として。佛の化身なり。いかでかその德空しからんといへり。これら書にもたゞ一字とのみしるして。何の文字といふをいはず。されば〓字を書けることは。曹洞宗の先德よりいでたりと見えたりいつのほどより烏八臼とはあやまり傳へけん

ほうさい念佛

ほうさい念佛の繪卷の詞書に。さてもほうさい念佛とて。花を造りて笠にさし。大鼓鉦のひやうしを打ち。躍りとびまはる姿を見るに。をかしく腹すぢをかゝへ大勢こぞりて見侍りける。是わたくしに躍るにあらず。むかし常陸國に貴き僧一人おはしける。その名をほうさいばうとぞまうしける。わかすむ寺

と見えたれば。近きことにもあらざるべし。もと氏神といふは。藤氏に春日明神を祭るごとき。わが氏の神をいふなり。伊勢物語に。むかし二條の后。まだ春宮の御息所と申しけるに。氏神にまうで給ひけるといふことあり。これは大原野の社といへり。古今和歌集には。すでに大原野にまうで給ふと書けり。藤氏の氏神は。春日明神なれども。京よりは道のほどもいと遠ければ。仁明天皇嘉祥三年に。閑院左府冬嗣公の。はじめて平安城大原野に勸請ありて。ながく王城ならびに藤氏の守護神とはし給ふよしなり。吾妻鏡に。平家の氏神といふこと見ゆ。これは平野を平氏の氏神とするよしは。古事記傳にも見えたり。また源平盛衰記に。八幡の神松名を護り給ひし所なれば。神護寺と名づけたり。故に此寺を和氣の氏寺なりとあり。神社のみならず。氏寺もありと知るべし。猶氏神氏子の辨のくはしきよしは。予が好問質疑にしるしたれど。今思ひいづるまゝにいさゝかこゝにしるす

彌陀の手糸

新古今和歌集の法圓上人の歌に

　なむあみだ佛の手にかくる糸の。
　　終りみだれぬこゝろともがな

長秋記。元永二年十二月十四日の條に。阿彌陀佛手付二五色糸一。引付件佛去年臨終料丁寧所レ奉レ作也。また盛衰記に。佛の御手に奉レ結二付五色の糸引かへたまへる心地にてなども見えたり。本説のくはしきは法苑珠林に西域祇洹寺圖を引きていへり

鳥八臼

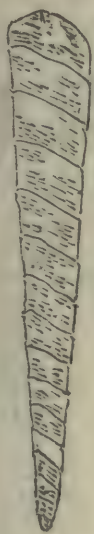
禪宗の寺院に。延寶元祿のころなる石塔の上のかたに鵮あるは。鳴あるは鴛などの文字と彫りたるなり。かの宗旨の僧などにとへど知るものなく。むかしより鳥八臼ととなへ來れるのみ。何の義といふこと詳ならず。予が弱冠のころ聞ける梅塢先生の説に。こは隨求呪の中なる。〔梵字〕（チシュタン）といふ文の。〔梵字〕（タン）字を釋して鵮（かん）とかけり。その鵮字をあやまりて書けるなるへし。さて鵮字にすぐれたる功德あるよしは。曹洞引導集といふものに見ゆといはれたり。その後大隨求陀羅尼經をよめるに。〔梵字〕とありて。經に。時彼苾芻無二救濟者一作二大叫聲一。則於二其處一有二一婆羅門優婆塞一。聞二其叫聲一。即往詣二彼病苾芻所一。起二大悲

どふるき詞にて。十府の枕といふ枕ともあり。舞の伏見常磐にとふのうらなしといふことも見えたり。かくあるによれば。すべて敷くものをいへるか。みなめざめは回文なれば。しひて説くべからず。なみのり船は船のつくりやう。常とは別なるが。俳諧世話燒草の附合に戸といへるに。なみのり船とあり。かゝれば波よけに。戸などある船などにもあるべし。この歌假字つかひの訛り。詞のことわりなくとゝのはざるは。回文なればなるべしといへり

こさ笛

蝦夷人の吹けるこさ笛といふものは。長さ壹尺五六寸より。二尺までにて。大小あり。吹口に竹の菅を入れて。異木の皮をぐるぐると卷きて。丸く制したるものなり

古歌に

こさ吹かば曇りもやせんみちのくの
蝦夷には見せずあきの夜の月

れもふにこゝに圖する笛は。こさ笛といふものなるべけれど。古歌の意は笛のことゝはれもはれず。龍宮船といふ書に。蝦夷人のこさ吹くといふことは。かの地の人は壽を吹き出だして。吾身を隱す術ありて。せんすべなくせまりたる時は。かのこさを吹きて身をかくすよしいへり。その事の虚實はともあれ。歌のこゝろはそのことをよめるに似たり

神社の位階

神社に位階を授くることは。尊卑をわかつためにはあらず。これは正五位なれは田十二町。正四位なれば田二十四町を奉らるゝなり。かゝれば正一位なれば。田八十町の神領を寄附するなり。これを位田と云ふ。くはしきことは令の定めのごとし。さるを今は一歩田もなく。有名無實にして。稻荷とさへいへば。必。正一位なるものと。世にも思ひ社家よりも免許することいとをかし

氏神

俗にうぶすなの神社を。わが氏神と心得たるはあやまりなれど。いつの頃よりかいひならひけん。臥雲日件錄に。世人以三神明主二于我所生之地一。謂二之氏神一

身を捨てゝこそうかむせもあれ

また世人の口碑に傳ふるには

河水に流れながるゝちから藻も

身をすてゝこそ浮む瀬もあれ

かく異同ありといへども。空也上人繪詞傳なる歌しらべもよく。正しといふべし

四月五日に家ごとに厠にはりおく歌

ちはやふる卯月八日は吉日よ。

神さけ虫をせいばいぞする

この歌は虫よけなるよしにて。都鄙ともにする風俗なり。これにも所によりて歌の詞異なるあり。周防國野上の里の邊にては

年々の卯月八日は吉日よ

尾ながの蟲をせいばいぞする

予過ぎしころ。日光道中の間久里なる秋田屋といふにて見しは

今年より四月八日は吉日よ

神さけ女郎せいばいぞする

とあり。この虫よけの歌のこゝろ何ともわきまへがたし。曳尾菴の説に。この歌は神職の佛をいやしめたるなるべし。そは四月八日は釋迦の誕辰なり。さて神は佛を忌み避くることにて。神宮の忌詞にも佛をなかご。經をそめがみ。僧をかみながなどいへり。神さけむしは佛をさしていへるなり。むしといふ詞は物をいやしめのゝしる時の詞にて。涕泣するものを泣きむし。柔弱なる者を弱むしといふ類。俗語にいと多かり。されば佛生日に神さけむしの佛を成敗する今日こそ。吉日なれといふことならん。その歌を厠にはりおけるは。ことさらに不淨なる所をもとめ置けるなるべし

正月二日の夜はつ夢とて。家ごとに寶船を繪を枕にしくことむかしよりのならはしなり。その寶船の繪に

ながき夜のとをの眠のみなめざめ

なみのり舟のおとのよきかな

といふ回文の歌をかけり。この歌もその意何ともわきまへ解しがたし。柳亭翁の説に。この歌は九月頃の詠吟なるべきを。いつのほどよりか。初夢にして寶船には書きくはへけん。歌のこゝろは。長き夜すがらに。十府とねふるとなり。十府は十府の菅薦な

ゑたり。かの贈答の歌は妄誕無稽なること辨ずるに及ばす。殊に異説あるは妄中の妄にて。夢中の夢を說く類とはいふべし

蘇迷嚕の山の歌

大雜書の卷首に。須彌山の圖ありて。その傍にある歌に

北は黃に南は靑く東しろ
西くれないにそめいろの山

とあり。この四方の配色は。須彌山の北は金山。西は紅玻璃。南は吠琉璃峯。東は銀山なり。かつ須彌山を梵語に。蘇迷嚕山といふ。飜しては妙高山と釋するをもてなり。されば蘇迷嚕を染色にいひかけたるいとたくみによめる歌なり。此歌を日本紀通證には。和泉式部の歌とすれども。據なければ信けがたし。謠曲の歌占に須彌をよみたる歌にて候とて載せたり。この頃應仁記を見るに。京師のありさまをいふ條に。毘沙門谷に。梅坊百梅を盡くして。木密にきり山を作りて。色々に谷嶺をこそ通しけれ。北は黃に南は靑く東白。西紅にそめ色の山とは。この事にやありけりと。いぬ人こそなかりけれと見えたり。かゝればむかしはこの歌專ら人口に膾炙して。ことわざにもいひ出でけることゝぞれもはるゝ。

人口に膾炙する和歌

世人の戒めにいへる歌に

そりたきは心の中のみだれがみ
つむりのかみはとにもかくにも

これは鴨の長明が歌なり

何ゆゑに捨てける身ぞとをり〳〵は
すがたにはぢよ墨ぞめのそで

これは圓光大師の熊谷蓮生にしめされし歌なり。繪詞傳に見ゑたり

身を捨てゝこそうかむ瀨もあれといふ歌の。下句人口にもいひ。かつ擊劍家の傳書といふものなどにもしるしつたふれども。上の句を知るものまれなり。空也上人の詠歌なり

繪詞傳に

山川の末にながるゝとちがらも
身をすてゝこそ浮むせもあれ

また尤草紙のうかぶものゝしな〳〵といふ條に

ものゝふのやたけ心のひとすぢに

葺など常のことなれば。和歌にも板屋もる月茅がのき端などよめり。只寺院は壯麗を專らとすれば。瓦葺に造りしなるべし。さて唐土にもやゝ似たることあり。孔平仲が談苑に。羌人最重二佛法一。居者皆板屋惟以二瓦屋一處レ佛　と見えたり

さしもぐさ

實方朝臣の歌に

かくとだにえやはいぶきのさしもぐさ
さしもしらじなもゆるおもひを

このさしもぐさのさしといふ詞。百人一首の諸注釋も多かれど明解なし。さすとは灸をすゑることなり。鍼灸ともに肌にたつるをさすといへり。陸佃が埤雅に。醫用二艾灸一一灼謂二之一壯一者。以二壯人一爲レ法。其言二若干壯一謂二壯人一當レ依二此數一。老幼羸弱量レ力減レ之。これ灸をすうることを何壯といふ。尋常の說なり。されど揚子方言に。凡草木刺レ人北燕朝鮮の間謂レ策或謂二之壯一とあるによれば。鍼灸ともにさすといふべし。かゝれば壯も刺も同じ義にて。灸を一つするを一壯といふのみ。壯人によりて數を定めしといふは。謬なるへし

京間　田舍間

間數に京間。田舍間の二やうあり。京間といふは。豐臣大閤の時。一丁は三百六十歩なり。これは一年三百六十日にして。民の食料一日に一歩づゝの積りにして。六尺五寸四方なり。田舍間は慶長以後に。一丁三百歩の御定めとありしゆゑに。六尺繩を用ふることゝはなりしなり

格天井

組みたる天井をごう天井といへり。文には書言字考などに。合天井とあれど。いかにぞやおぼつかなし。格天井とかくぞ正字なるべき。格ハ隔と同じ。四方に組みたるをいへり。格をかうと唱ふるは音便なり。已に格子をかうしといふにてもおもふべし。その後閑情偶奇を見るに。天井のことを頂格といへり。これ即格天井なり

片岡山の贈答和歌

太子と達磨との片岡山にての贈答の和歌は。書紀はいふもさらなり。法王帝說にも見えず。其ものに見えたるは一心戒文よりふるきはなし。また片岡山の飢人を文殊菩薩なりといへるは。俊秘鈔奧義鈔等に

建てたるなるべし。五百年ばかりさきに密嚴律師の藥師寺を中興して。戒律を弘め給ふこと。本朝僧傳に見えたれば。唐の菩提樹はその時に植ゑたるもしるべからず。今按ずるに。扶桑略記にて見れば。唐にて鑒眞の寺を龍興寺といふ。また僧傳に。鑒眞の入滅を聞きて。唐の龍興寺にて。大法會を修することあれば。この墳寺をも龍興寺と名くるなり。二寺とも藥師寺の遺跡なれども。安國寺は本坊龍興寺は一院にて。墳寺の殘りたるなり。故に安國寺には古瓦多し。龍興寺には存せず。これをれもふべし。藥師寺驛小亭の燈下にしるす駒山西教寺潮音。」この一條は駒山師かの地に遊歷の筆記より。鈔しおきたるなり。駒山師は大藏はさらなり。和漢の博識にて。ことに華嚴經に精しく。予も曾て俱舍論の講談を聞きたることあり。著す所出定後語を辨破したる摑裂邪網編。印行して世に流布す

道成寺

道成寺の謠曲の安珍淸姬がことは。もと法華驗記に見えて。寡婦と旅僧の事として名をしるさず。元亨釋書の安珍が傳に。その事をしるして安珍がこととせり。日高川の繪詞。あるひは道成寺の繪詞ともいひて。安珍がことを繪がけるもの三卷あり。又賢學物語とて。賢學といふ僧のことゝして作れる畫卷一卷あり。その道成寺のことを謠曲に作れる時に。安珍にまなごの庄司が娘淸姬が戀慕するよしに作意して。かつ許多の脚色をそへたり。おもふにまなごは氏にはあらで異名なるべし。あまりに娘をふかく寵愛するといふ心にて。愛子の庄司とは名づけしなるべし。されば謠曲の文句にも。庄司娘を寵愛のあまりになどいふこともあり。愛子をまなごとよめることは。萬葉集の歌に

人ならばおやのまなご(母之最愛子)ぞあさもよひ
紀のかはかみのいもとせのやま

また催馬樂の我門に。まなむすめといふ詞も見えたり

寺を瓦葺といふ

神宮の忌詞に。寺を瓦葺といへり。異稱日本傳に。本朝舊制皇宮用二檜皮葺一佛寺用レ瓦。故神事忌レ言二佛寺一曰二瓦葺一。出二延暦儀式帳延喜式等書一とあり。おもふにそのかみは。貴人は檜皮葺を用ひ。賤民は板屋茅

を洗ひてゐたり。知事僧と見えしは。襤褸の衣を着して。竈下に火を燒けるさま。誠に僧のかたちとは見えず。僕は二三人もありて。農事をなすことゝ見えたり。寺僕に案内を賴みて戒壇の古跡を尋ねもとむるに。組物立ての六角なる堂ありて。中に誕生の釋尊の像を置けり。戒壇を建つるには作法ありて。具には南山の行事鈔などにも見えたれど。この堂は戒壇の制法には少も似ず。秋の草のみ芊々として茂りて。懷古の涙に堪へがたく。こは末法とはいひながら。如來の敎法は世に盛なれども。戒律のかくのごとくれとろへたることを思うて。去るにしのびざるのれもひあり。人みな戒壇の下には天竺の土ありとて。床の下に入りてとるものあり。鑒眞の傳を案ずるに。祇園精舍の土三斗を携へ來りて。三戒壇の下に埋むことあれば。據どころなきにあらず。それより竹樹の中を分けて寺のうしろに至るに。この所を堂跡と字せり。塔跡か堂跡か俚言にて明にわきまへ聞えがたし。餘の古寺の跡とは換りて礎石は一所も見えず。たゞ碎瓦のみ路のかたはらに彌滿せり。たま〳〵藥師寺といふ文字ある瓦ありといへり。四方に盛なるものは。只麥稃の類にして。見るべきものさらになし。この寺を安國寺といへり。されども古の藥師寺なること疑なし。足利將軍のとき。一國に一寺を建てゝ安國寺と名づけたり。れもふに。此寺もその時に寺號を改めしものならん。天子詔ありし寺號を武將の命にて改めかゆること。心得がたけれども。時の勢なるべし。さて寺をいでゝ驛に至る右の方に。館あとゝいふ所ありといふ。これは藥師寺次郎左衞門が屋敷跡なるべし。左の方龍興寺なり。今は燒失して小堂小屋のみあり。堂の左に小き木戶ありて。その內に小高き岡あり。これを弓削道鏡の墳といへり。上にひとつの古碑あり。文字存せず。いとふるきものと見ゆ。下のかたはらに鑒眞の塔あり。そのかたちまた道鏡の碑に似たり。しかれども。正面に鑒眞大和尙。左に天平寶字の年號あり。れもふに碑は古物なれど。文字の漫滅したれば。後世彫り加へたるものと見えたり。前に菩提樹を植えたり。これ又鑒眞の菩提樹子を將來のこと僧傳に見えたれば。その緣なきにあらず。この地にて遷化にはあらねども。戒壇を開きし律の鼻祖なればこの所に塔を

の艾草に化すことありといへり。まれ〳〵には。土人はそのあたり見る事ぞ。螻蛄の平地にひしとつきて動かずにしばしあると。それがすぐに根となりて艾草の生ひいづとかや。その圖草木性譜に見えたり。この條。なかば書きさしたるをりから。友人畑銀雞訪はれたりしかば。予物化のことといひ出でたるに。さればとよ過ぎしころ。れのれ草津に遊歴のかへるさ。松井田と安中とのあひの宿に。原市といふところあり。そこを通りしに。人あまたつどひて。何やらさゞめきけるゆゑ。何事にやと立ちよりて見しに。道の傍なる柿の木に桑蠶のとまり居たりしが。頭ははやく反鼻（まむし）に化りて。體はまた蠶なり。これめづらしとおもふものから。なほ人々をおしわけつゝ近くよりて打ち見るほどに。口はいとおほきくさけて。體は見す〳〵延びると見えて。動脈の運動體の上にあらはれて。見るも氣みわろき心ちす。一人の老婆そばにありていへるは。桑蠶を取りて。柿の木へうつしおくときは。三びきのものならば。必ひとつは反鼻に化る。桑蠶あるものとぞ。さればいかなる桑蠶の變化するにや。その見わけはしらざれど。いづれ四五日を經れば。全身こと〴〵く反鼻となること。わかきころよりいくたびも見たり。銀雞は金雞道人の子。その家奇品を藏す。六足の蛙あり。三足なるものは本草にも見ゆといへり。六足のもの古にもきかざることゝぞ

下野國藥師寺

下野國河内郡なる藥師寺は。國史にも見えて三戒壇の一なり。むかし鑒眞和尚我朝へ律部を傳へ弘め給ひし時。聖武上皇の詔によりて。東國の沙門は。此寺の戒壇にて。受戒すべく。西國の沙門は。筑紫の觀音寺にて。受戒すべく。中國の沙門は。大和の東大寺にて受戒すべしとて。三所の戒壇をば定めたまへり。これ今の世にて。本寺本山といへることのはじめとはれもはれたり。鑒眞和尚のことは。宋の高僧傳。扶桑略記。元亨釋書。本朝高僧傳。及び思純の東征傳に見えて。人のしるところなり。驛塲より三町ばかり入りて前藥師寺といへるあり。鐘樓のわきより本堂にいたれば。藥師如來を安置し。左右に弘法興教の二大師をおき。前に鈴杵等を置きたり。住持の僧と見えしは草鞋をはき。井のほとりにて鋤

これは黄金の壺にて。高金の品なれば。たやすくは買ひ請けがたし。そのところの村役人より。あかしの文書を添へたらん上に。價銀をまゐらすべしといひしにより。再び持ちかへりたりとぞ。その壺蓋とも四貫六百目あり。かゝればその價を廿兩がへに積りて。金千六百兩餘になれり。この事は一話一言に見えたり

物化

譚子化書に。老楓化爲ニ羽人一。朽麥化爲ニ蝴蝶一。自ニ無情一而之ニ有情一也。賢女化爲ニ貞石一。山蚯化爲ニ百合一。自ニ有情一而之ニ無情一也といへり。已に生物に胎卵濕化の四生あり。されば鳥獸昆蟲の變化することはことさらにめづらしきにもあらず。月令に。田鼠の鴽に化し雀の蛤となることをしるし。子々の蚊となり。毛蟲の蝶に化するなどは。世の人常に目なれて奇とするに足らず。なほいまだ見聞にふれざることゝいへども。亦理外のことにあらず。蛸魚に柳蛸魚といふ一種あり。そは蛇の化したるものとて食はぬ人もあり。獨醒雜志に。蛇の蟠りながら鼈に化したることをしるしたり。山居四要に。鼈腹有ニ蛇蟠痕一者不レ可レ食といへり。地蟲の蟬に化すもつねのことなり。東遊記には。竹根の蟬に化したることをしるせり。またあら海布(め)を刻みて。泥土に交せおけば蛭に化し。鼠尾草(みそはぎ)を蒸して濕地にをけば。なめくぢとなり。蕎麥からにて泥鰌を造り。鼠の糞にてげぢ〳〵をこしらへるなどの類。あぐるに遑あらず。西域聞見錄に夏草冬蟲とて。夏は艸の葉岐に出で。韭のごとく。その根朽木の如くにて。冬に至れば葉枯れて。その根蠕動し化して蟲となるといへり。この夏艸冬蟲のこと諸書に見えたり。醫賸に詳なり。又三河にては蟋蟀

に似たれども。たゞ一具にて日夜の昵近を勤められたるは。かの晏子が一狐裘三十年の類にて仰慕すべし

野寺の鐘

回國雜記に。野寺といふところこゝにも侍り。これも鐘の名所なりといふ。此鐘いにしへ國のみだれによりて土のそこにうづみけるとなん。そのまゝ掘りいださゞりければ

音にきく野寺をとへばあともなし

ことふるかねもなき夕かな

と見えたり。この野寺といふは。武藏國新座郡野寺村にあり。近きころ此寺のあたりにて。ひとゝころ薯蕷づるの生ひいでゝ。ぬかごの常よりも大きなるができたれば。土地のもの彼つるのやうすにては。薯蕷も亦大きかるべしとて。堀りて見れど。たもひもうけしよりも。薯蕷のいと少さければ。猶深く堀りて見んとて。よりつどひてほるほどに。深く堀りたれば。鐘の龍頭にほりあてたり。いとふしぎにれもひ。やがてその鐘をほり出だして見るに。古鐘を得たり。その銘には野本寺とあり。これ即回國雜記にいへる野寺の鐘なり。薯蕷のつるをほるとて得たれば。土人はいも鐘と稱するとぞ。輪池翁の物がたりなり

黃金の壺

河內なる打上村といふところにて。むかしより山中に石の蓋をせし壺の土中より。いさゝか現れ見ゆるがあり。いつとなくあたりの者もかれこれ見しりたれど。大かた古墳などにてやあらんとて。そのまゝにてありしが。安永三年の七月十三日に。ある人行きて。かの壺の蓋をとりて見るに。內に又壺を入れこにしたり。その蓋をもとりて見るに。又その內に色くろき壺あり。さて密にもとのごとくにして歸り。その夜又ゆきて壺を掘りいだして見るに。そとなるは陶器にて。高さ五尺ばかり。その內なるは三尺ばかり。又その內なる色くろみ。銅器にて六角なる壺なり。瓔珞を覆ひ蓋もあり。蓋のうらに明骨と彫付けあり。その壺の中に骨ものこり。朱もいさゝかありて。水たまりてゐたり。やがて持ちかへり。その次の日。大坂の町へもち行き。商人に賣らんことをはかるに。商人彼壺をよく〳〵打ちて見いふやう。

懸隔せり

八朔白小袖

今吉原にて。八朔には遊女のかならず白小袖を着ることむかしよりのならはしなり。その説洞房語園。吉原大全などに見えて。薄雲が瘧をわづらひし時のよそほひとも。又は夕霧が病中ながら客を迎へしすがたともいへども。もと時候にかゝはらで。小袖を着用することは。遊女も俳優もよそほひを專らとすればなるべし。しかはあれど。八朔に白きを用ふることゆゑなきにあらず。その證は古來禮家の服色にて。はやく宗五大草紙にも。古い八月朔日より袷をめしたるとて候とあれば。袷をきること已にその來ることとふるし。かゝれば遊女の綿入を用ふるは。かの地ばかりのならはしなるべし。また秋草に。七夕八朔白かたびらをきること。七月八日とも秋の季なり。秋は西方金氣の司る時なり。金の色は五色に取りて白なり。この故をもて。白帷子を用ふるなりともあれば。遊女の白小袖もかの廓にての傳説は。もとより附會にて。古禮のなごりとこそいふべけれ

純子の上下

禮服には。貴賤ともにれしなべて。麻上下を着用することなり。その外には。龍紋絹の小紋などにかぎれり。昔は仕官の人なども繻子純子の上下を着たるなり。今も越後の農家などにて。婚姻などはれの時は純子錦の上下を用ふときけり。戲場にては常のことなり。これらもみな古風のなごりといふべし。むかし純子の上下を着たることの物に見えたるは。寛永頃の記錄に。靑柳某といふ人の。純子の袴くゝり股だちにて。羅紗の雨羽織數奇屋足袋高木履に。下人に傘をさゝせ通りけるといふこと見え。また白石遺稿に。むかしはしかるべき仕官の人は大かた緞子繻子等の裏付候上下を用ゐられ候と承り及び候。ある人の親父はしかるべき御役をつとめ世のもてなしも大かたならず候人にて。齡も其の頃五十計にても可有之。しかるに唐織の緞子の上下たゞ一具にて。日夜の昵近し候て。君のかくれさせ給ふ御あとまでも存生にて候ひしが。その上下のきれにて候とて。その子息の時に。茶入の袋にせられ候を。それがしも見たるに。花色の小紋なる緞子にて候ひきとあり。今よりおもへば。純子の上下を着用すること。奢侈

月二日に出かはりしが。明暦三年丁酉正月十八日。江戸大火事により。その年三月五日に出代りすべきよし仰せごとありて。夫より毎年三月五日となりしよし見えたり。この說いづれか正しからん。むかし〳〵物語に。昔は家來の家の出かはり。二月二日なりしが。寛文八申年より。三月五日になるといへり。されども。今にても越後わたりより。冬の入ごろ。江戸へ奉公に出でくるを。世に冬奉公人といへり。これは春になれば。二月二日に一統國にかへれり。是のみむかしの名殘にはありけるなりと思はるゝを併せおもへば。編年略の說正しとすべし。再案ずるに。寛文八年二月一日。江戸大火あれば。安齋のいはれし明暦の大火は。寛文の火事をあやまり傳へしにはあらずや。そは二月一日大火あるによりて。二日の出かはりを。三月五日までのばしたるが。そのまゝ通例とはなれるなるべし

しきせ

召つかひの者に時の衣服を給するをしきせといへり。文字には仕著。あるひは四季施などかけり。書言字考に見えたり。古鈔の曾我物語に。四季をりをりの小袖をたまひといふことあり。かゝれば四季施とかゝんこと義におきてかなへるとおもひ居たりしに。他日琉球の中山傳信錄に。春秋四季賜二袍掛衫襌一といふことのあるを見出でたりしが。猶ふるく鑒眞東征傳に。四季給二時服一ともあり。おもふに。四季施と書ける施の字おだやかならず。四季著の約語なるべし

彼岸

彼岸といふは。もと佛語にて。到彼岸といふことなり。さるを暦本に書きくはへて。春秋分の時節の名目となりしは。いつのほどよりかいひそめけん。暦林問答集をはじめ。このかたの書どもに。たしかに證據をいへる說も見えず。今は彼岸を農事の助にのみ暦にしるすこととぞおもはるゝ。天野信景が鹽尻に。日本後紀。延暦二十五年二月官符。應三五畿七道諸國轉二讀金剛般若經一云々。宜下使二國分僧一春秋二仲月別七日存レ心奉中讀之上云々。是爲二崇道天皇一也 信景云。春秋二仲一七日佛事。盖和俗彼岸會權輿歟。讀二金剛般若經一而起乎。然延暦二十五年春分中日也 彼岸會之始也と見えたり。この說正しく僧徒などが附會の說には

望雲の詩に。日出五丈高白雲浩如レ海といへるなど。はやく己に雲海のおもむきをいへり

雪の竿

信州越後北陸など。雪の深さを知るに。棹に一丈までの寸を。竿に刻みて。水の高さを見るが如くにしてはかるを。雪の竿といふ。夫木鈔に載する。大炊御門爲佐の歌に

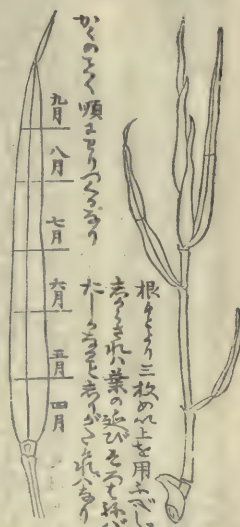
越の山立ておく竿のかひぞなき
日をふる雪にしるし見えねば

とあるこれなり。さて越の雪は世人のたとへぐさにもいひ出でゝ。かの國人のあらはしゝ雪譜といふものあれぞ。その越後よりも越前近江の國境なる湯尾峠あたりなどは。すこしといふが五尺ばかりにて。大雪といへば一丈よりも深くつもれるとぞ。また越前大野能登の邊。いづれも越後より雪ははるかに深しといへり

節序の賣物

南畝翁の筆すさみにかゝれたるものに。正月の削掛は門松の木をけづり。又は柳にても削りしなり。二三十年このかた削りかけ〳〵とて賣りありけば。誰もけづるものなし。盆の精靈祭の團子をさへ賣りに來れば。うす引く家もまれになりぬ。靈棚の杉垣をつくりうるも。我わかかりしころはなかりき。七月十六日のあしたに。精靈さまのおむかひ〳〵とて。靈棚を崩せしものをも買ひにくれば。世は便利にのみ走り行きて。はて〳〵は飯も汁も朝ごとに買ふて食ふべし。五月の本手の鎗。または纒など。漉がへしの紙もてつくり。價もいやしかりしが。今はなし。盆大皷團扇太皷とて。紙にてはりしものをうりに來りしが。これもやみぬ。よろづの玩物も價高きもののみありて。いやしきはすくなし。かかる時に逢ひて。錢のなきを歎くものあるもをかし。錢のなきは。必然の理なりといへり。この記は文化六とせの頃。翁が金杉に僑居のをりからしるされしなれば。二三十年といはれしは。明和の頃なるへし

奉公人出かはり

近世武家編年略に。寛文八年十二月十六日。新有レ命曰。舊例江戸士民之家入仕之奴僕。以二二月二日一爲二放遣之期一。來年以後須下以二三月五日一爲上レ期。又安齋隨筆に。江戸奉公人三月五日出代りの事。その前は二

この圖の如く。四月より九月までを順にわりて見れば。節のわりどころによりて。某月出水といふことを知らるゝなり。今の圖にては。七月十日ごろの出水なり。餘の月もこれになぞらへて知るべしと。穗立手引草にいへり

雨足風手　雲海

風はよく物を動かすこと手あるがごとく。雨は一むらふり過ぐること足あるが如しとて。風の手雨の足といふことあり。雨の足は唐山にてもふるく雨足ともいへり。晉の長景陽が雜詩に。雲根臨ニ八極一雨足灑ニ四溟一。又云。翳々結ニ繁雲一。森々散ニ雨足一と。文選に見ゆ。蘇東坡の詩に。疎々雨脚長などもいへり。和歌にも平兼盛集に「君をれもふかずにしとらばをやみなく。ふりしく雨のあしはものかは」蜻蛉日記に。けふは廿四日雨のあしともれつるなみだ哉。こあはれなり。「ふる雨のあしともひくだけば」など見えたり。風の手とまかに物をれもひくだけば見えず。白樂天の謠曲に。いふことど。かつてものに見えず。白樂天の謠曲に。手風神風に吹きもどされてとあるを。拾葉鈔に風の手と歌によめば。手風とはいふなりといへど。古歌にも風の手とよめることは見およばず。ある人は王涯詩に。平生敏疾如風手。力振ニ綦綱一專所レ難と云ふを據とすれど。この如風手とあるは。敏疾をたとへて風の如き手といふことゝにて。風の手とは自その義別なり。また雲海といへることあり。清の袁枚が遊ニ黃山一記に。食頃有ニ白練一繞レ樹。僧喜告曰。此雲鋪海也。初濛々然鎔レ銀散レ綿。良久渾一片靑山。群ニ露角尖一。類下大盤凝脂中有ニ笋脯一隱現狀上。俄而離散則萬峯簇々仍還ニ原形一と見えたり。吳梅村などが雲海を詠ずる詩あり。願豐堂漫書に。晦菴劉少師健爲ニ庶僚一時。奉レ命往祀ニ華山一。正及ニ夏日一晦菴與レ客高登顧ニ見山下一白霧瀰漫若ニ大海一然。而山頂赤日了無ニ纖翳一。また佩文齋詠物詩選に載する。元の黃石翁が

るへし。暦は算法に拘泥することなきはあらねば。天時の花草にて節氣を知ること正しとかや。ためし試むるにたがふことなしとある人いへり

大風大水を知ること

知風草といふ草あり。和名をちから草とも風草ともいふ。茅に似たり。そのふしの有無を見て。その歳大風のあるなしを知る。節一つあれば。その年一度大風吹く。二つあれば二度ふく。三つあれば三度吹く。本にあれは春吹く。中にあれば夏秋ふく。末にある時は冬大風ありと。鄙事記に見えたり。又蒹葭の葉にて出水を知ること。その年の氣候によりて洪水といふまではあらずとも。田などに水押のあることあり。然れば湊田河付などの田を作る人は。これを心得て。たとはゞ。今茲は水三合いでんとおもはゞ。河付にて植ゑ出のいでくる地なりとも用心して。水に逢ひても稻のいたみにならぬほどのところまでうゑてよし。さてその水の出づるを知るには。二月三月の頃蒹葭の若ばゑの葉をとりて見ればこゝに圖するが如く。葉にくせありて節あるものなり。此節一つあるは出水一度なり。もし二つあらば二度。三つあれば三度。水出づるとしるへし。水の多き寡きはこの節はつきりとあらば。大水いづるとしるへし。もしかすかにあれば出水すくなく。五分七分それは節のありやうを見て定むべきなり。月を知るには。芦葉を中央より二つに折りて。二枚となし。それを二枚のまゝにて。又三つに折りて開き見れば。折りめ六段につくなり。さてこれを月に配當するに。正月より三月までは。出水の節にあらず。十月より十二月までも。また水の出づる時にあらざれば。春の三ヶ月と冬の三ヶ月とをば捨てゝ。葉の中の折りめに入れず。四月より九月までの六ヶ月を割りつくることにして。葉の本の方の一段を四月。二段を五月と。段々に九月まで順に配當して。其月に當りたるところの節にて。某月出水といふことを知る。又その一ヶ月の中を上中下と。十日づゝ三つに割りて見れば。上旬の出水か下旬の出水かといふことも明白に分ることにして。其驗數年ためし見るに。聊もたがふことなしと。小西米重が物がたりなり。されば此事をひろく傳へて益あることとなれば。今こゝに載せてその圖を出だせり

を入れ。その中へ錢一枚を入れて。四五步も退きてこれを見るに。錢見ゆるなり。是は水氣によりて。底なる錢の見ゆるにて浮くにはあらず。雨ふらんとする時。山の近く見ゆるも。この水底の錢とおなじ理なり

雨歇まんとする時は。茅屋の上に烟透り昇るに。はたして天氣なり。」夏日の旱天に畠などにある蜘の巣に。白く霧のかゝりたる時は。かならず天晴るゝなり。」井の水の濁るときは。また雨ふる。」高き木に風あてゝ木の葉うらを見する時は。翌日雨あり。」犬圃中をほり穿ちて伏する時は。かならず霖雨なり。」狐鳴くときは三日の中に雨ふるなり

朝霧の空より晴るゝときは天氣よし。地よりはれて空に收まるは雨なり。おもふにこれは雲霧の空にたちのぼる時は。冷際にいたること近く。凝結て雨となるゆゑなり

赤とんぼの北へ飛びゆくこと少き年は。雪多くふらずといへり。かゝれば豐兆にあらざるに似たり。また杜鵑のまれなる年は。雷鳴ることしば〱なりとかや。これは豐兆なるべし

曆の下段に田かりよしとある日多き年は。稻のみのりことの外によろしといへり。十度あるはあまりにでき過ぎてかへりてよろしからず。八九度くらゐあるをよしとせり。何事も十分はあふるゝといふ戒は。常にあるべきことおもふべし

農家にていふ諺に。彼岸太郎。八專次郎。土用三郎。寒四郎といふことあり。これは彼岸の節に入りはじめの日。天氣よく。八專は二日め。土用は三日め。寒の入りは四日め。天氣よく晴れて。寒暖も順にれだやかなれば。豐年なりとて。その日の快晴を祈るとかや

宋の孔平仲が談苑に。江南民言。正旦晴萬物皆不ㇾ成といへり。これもためし試むるに果してしかり

梅雨

梅雨の節に入るを入梅といひ。あくるを出梅といふ芒種五月中の前の壬を入梅とし。小暑六月節の後の癸を出梅とするよし。本草綱目に見えたり。しかれども。時として。陰晴定まらず。時節のわかちがたきことあり。其時には花葵の花咲きそむるを入梅とし。だん〱標のかたに花の咲き終るを梅雨のあくるとし

へり。小兒の養育治療の書も少からず。されど余かつていふ。五雜俎に。保嬰論云。若要ニ小兒安一須レ帶ニ三分饑與レ寒此格言也。終身守レ之可也といへる。知言といふべし。因云。婦人產後乳のいでざるもの富豪なるものは。乳母をもて嬰兒を養ふべけれど。貧賤に至りては。これに充つるの食なく。はてには嬰兒の病を引きいだしなどすること常に見ることなり。近ごろ乳の粉といふ物を製して。坊間に鬻くものあり。世の乳にともしき嬰兒を救ふこと。その功最多く。しかれども坊間のもの。あるひはその製麁なるものあり。予最上氏より聞きたる製法精且すぐれたりといふべし

餅米の寒晒を水にてときゆるめ。ひめ糊の如くすべし。茶碗に一はいほど一日の食料に充つ。水飴一匙ばかり。右の寒晒の中へ入るゝなり。かゝれば飴にて米粉融化してことさらゆるくなるなり。世上にては砂糖を用ふるよろしからず。燒鹽白牛酪この二味桐子大ほど入るべし。世上にてはこの二味を入れず。鹽は腹中へ入りて。育ひとなることその功あり。白牛酪は鮫皮にておろし末として入るゝ。さてその飲ませやうは常のごとくにてよろしけれど。よく〳〵飲せこゝろみて。嬰兒の飲みよきやうにすべし

天時占候

古へに云。朝霞不レ出レ門。暮霞走ニ千里一といへり。朝霞は朝やけ。暮霞は夕やけなり。朝やけは雨ふり。「夕やけは晴るゝ兆なりといふ諺なり。予年ごろ試むるに果してしかり。俗間いひ傳ふる天時の占候いと多し。今たま〳〵記憶するもの數條をこゝにしるす。巳の時に晴るゝ雨には傘をはなしがたく。又未の時にはるゝ雨には簑笠を脱く。」また夜中に晴るゝ雨は日ならずしてまた雨ふるものなり。」明星地を照すも明日雨ふるの兆なり。」朝に鳶なけば雨ふる。夕に鳴けば晴を主る。又朝夕ならで鳴くは風吹きいづる兆なり。鳶は泉流も井水も飲まず。雨ふればおのが羽をうるほして。その滴を飲むもの故に。雨ふらんとするを知りて飛鳴すといへり。」蜉蝣の群り飛ぶは風のふく雨なり。また春くごとくむらがり動くは。雨の兆なり。」山を望むに近く見ゆるは雨ふる。晴天には遠く見ゆるものなり。これはたとへば茶わんに水

べくされもはるゝよしは。海人藻芥にもそのこと見えたり。神皇正統記にも。鳥羽院のころより裝束もかはれるよししるされたり。男の眉ぬきかねつけしことも。とりかへばやの物語にも見ゆ。明月記。嘉祿二年七月廿七日の條にも。成實直衣初の所に。鐵付眉作りといふことも見えたり。猶これより先に。清少納言に。さねりが顏のきぬもあらはれ。白き物のゆきつかぬ所は。まことに黑き庭に雪のむら消えたる心ちして見ぐるしきとも書きたれば。さる賤しき舍人さへ白粉つけたりと見ゆるなりと。類集名物考にいへり

華甲重逢

六十一歲を本卦がへりとて。生年の支干にあたるをもて生誕の日をいはふこと。世のならはしなり。唐土にてもあることにて。本卦がへりを華甲重逢といへるよし。明の陳白沙集に詩あり。また七十七歲を喜賀。八十八歲を米年といへり。喜賀とは喜字の草體を。喜とかくによれり。橘窓自語に。四條隆蔭卿權大納言正二位にて八十八歲の時。依レ勅米字を書く。請人貴賤八千七十五人に及べりと聞きつたへたり。延文年中すでに米字をかくことありと見ゆといへり。按に。運歩色葉集に。米年八十歲のことゝす。また幸菴對話に。人八十八齡にして米の字を俗家に書くことあやまりなり。堂上方には八十歲にて書くなり。よねは八十の人と書くよねなりとあるを併せもへば。八十歲を米年とすること據なしといふべからず。さて高年長壽の人は。古より尊敬することにて。恩賜のあつかりしためし國史にも見えたり。近く江村專齋などのはなしは。畸人傳にもしるして。人のしるところなり。安永五年世上高壽のもの御尋ありしに。都て書き上げたる者十餘人に及ぶ。みな江戸の人にて。百歲以上にて九十歲を最下とす。大方武家の中長壽の人多し。その中れ玉が池の大工喜兵衛といふものゝ祖母百廿一歲になりし。この老婆八百屋れ七が帶解の小袖を裁縫せしよし。常にものがたりしけるといへること。我衣に見えたり

嬰兒の手あて

嬰兒はものいはぬものなれば。すべてのことゞもかたはらより察して。養育も治療もするものなれば。小兒科を啞科ともいひて。啞をあつかふに同じとい

巵言享保十五年に。三浦屋四郎左衞門内に。あげまきあり。又享保十九年の細見に。あげまきあり。元文五年の細見に。かうし　あげまき。寛保三年の細見には。あげまきなし。その後延享四年の細見に。かうし　あげまき見えたり。延享五年の細見。寛延二年の細見に。あげまきあり。寶暦四年あげまき太のぶげんじ同五年の細見に。あげまき太のぶげんじとあり。同八年に三浦の家絶えたり。これによりておもへば。兩巴巵言より元文の間に見えたるあげまき一人にて。延享四年より寶暦五年までを。又一人とおもはるれバ。これにて二代はありとしられたり。これより先正德四年に。助六の狂言をはじめてしたる時に。楊卷の役玉澤林彌なり。享保よりはやく已にあげまきあれば。すべて三人はありとおもはるゝものから。猶そのくはしきことは後考を俟つのみ

甲乙人

寺院の制札に。軍勢甲乙人といふことあり。この甲乙人といへるは。深きわけあることにあらず。已に令にもありて。一二とか上下とかいふほどのことにて。次第をいへるまでなり。古寫本の節用集に。甲乙とよみて注にまた魁殿とあ　軍防令義解に。若有ニ先鋒一甲乙斯首五級丙丁四級。次鋒戊己斬首五級庚辛四級者。則是戊己雖レ不レ得レ爲ニ先鋒一。而其功勳過レ多ニ於次鋒一之人。即以ニ甲乙丙丁戊己庚辛一。爲ニ歷名次第一之類。又云。陣列之法一隊十楯。五楯列レ前五楯列レ後。楯別死兵五人即以ニ前列廿五人一爲ニ先鋒一。後列廿五人爲ニ次鋒一とあり。令抄に云ふ。たとへば

其國某郡軍團其隊

先鋒甲乙某

先鋒丙丁某

先鋒戊己某

先鋒庚辛某

先鋒壬癸某

これにて甲乙人のこと明なり

男子化粧

男子の化粧することは。白河院の頃より始まるともいひ。あるは鳥羽院の御時に。裝束を強張にして。ふくさ裝束をあらためられしは。花園大臣のきらを好まれし故。仰せ合されしかば。その時より紅粉を粧ふことの始れるにやといへり。今按に。さもある

もやゝ似たることあり。捜神記に。孫堅夫人吳氏孕而夢ニ月入ㇾ懷已生。策及權在ㇾ孕又夢ニ日入ㇾ懷。以告ㇾ堅曰。妾昔懷ㇾ策夢ニ月入ㇾ懷。今又夢ㇾ日何也 堅曰。日月者陰陽之精極貴之象。吾子孫其興平とあり。豊公はいふまでもなく。孫權も亦尋常の人にあらず。且陽勝日蓮各僧徒の傑出といふべし

八百屋お七

世人の口碑に傳ふる八百屋お七が事實は。流布の書には。江戸著聞集に見えたり。その中にいへる。湯島の天滿宮へ。松竹梅の額を。かのお七が自書きて。奉納したりと。世に云ひ傳ふれど。その實は谷中感應寺なる祖師堂に。常在靈鷲山法華最第一と云ふ額を。お七が十一歳の時。書きて。延寶四年辰春二月と。落款に年月をしるしたるを傳へ誤りしなり。さて罪を得しは。十六歳の時のことにて。天和二年戌二月なり。葬所も駒込吉祥寺なるよしに世にいへど。これも實は小石川指谷町なる。天台宗にて。南縁山圓乘寺といふ寺なり。お七が法名は秋月妙榮（天和二戌三月廿九日）と石碑に彫りてあり。天和笑委集といふ。天和年間の江戸大火をしるしたる書にて。十三卷あり。その書の卷實三卷には。八百屋お七が事のみを詳にしるしたり。此書は當時の記錄なれば。さだめて實に近かるべし。このお七が事は。はやく淨るりに作りて。歌舞伎狂言にもせしからに。兒女までの話柄となれることゝぞなりぬる。予が幼かりし頃は。からくりにお七がことをうたひながら見することの。いたく行はれて。兒童の口ずさみにも。かの唄をまねたることなりしが。今にその名ごりありて。街にはをり／＼お七がからくりを見ることあり。かのからくりのいひ立てにうたふ唄の濫觴をおもふにふるき小唄をあつめし。松の葉の類に松竹梅と云ふ冊子あり。その中に載する凉の唄の文句に。八百屋の娘お七こそ戀ひぢのやみのくらがりに。よしなきことをしいだして。罪は死ざいにきはまりてといふこと見えたり。かゝればこれらをやもとゝして作りまうけたるものならん

遊女總角が世代

世の口ずさみに。高雄七代。薄雲三代。總角一代といふことあり。高雄は古人の考ありて。世代も事蹟もいと明なり。按ずるは。總角は一代には非ず。兩巴

ヽす。東坡集に。西方眞人誰所見。（註云。西方眞人言佛也）衣被七寶從雙狻。（厚後猊獅子也）また岳柯が程史に。余嘗得東坡所書司馬温公解禪偈。其精義深韞眞足以得儒釋之同。特表其語而出之。偈之言曰。文中子以佛爲西方之聖人。信如文中子之言則佛之心可知也。また元の沙門祥邁が辨僞錄に。史志經云。孔子在魯。老子在周。以魯望周之洛陽。故在西方。盖指老子爲西方聖人也。云々。辨曰。此夫子推佛爲西方大聖人之語也。未聞老子在周。孔子在魯。故指老子爲西方聖人とありて。自注に唐琳法師對太宗之表。張丞相作護法論。皆引此文佛西方聖人也といへり。さてこの西方聖人といふこと。もと列子にいでたり。列子には。たゞ西方聖人とのみありて。佛とも何ともいへるにあらず。文中子にいたりて。始めて佛の稱とせしより。後世異論なし。しかるに貝原篤信の自娯集に。西方有聖人辨あり。云。世有一人之私言。而後爲天下後世之通論。人皆信之而不疑者。此迷衆之言不可不辨。坦齋通篇曰。列子述孔子言曰。西方有聖人。佞佛者以爲指釋氏而言。皆妄也。國語註曰。周詩誰將西歸西方之人。謂周也。孔子果有此言。謂文王也。於佛典何與。篤信按。羅泌路史亦云。列子所稱西方之聖人者。盖指文王也。今併按之。坦齋羅泌之言。恐可爲得之矣。莊子讓王篇亦曰。伯夷叔齊二人相謂曰。吾聞西方聖人似有道者。試往觀焉。分明是指文王。盖周在西方故文王爲西伯。云々。夫佛法入中國也。後漢明帝之時。孔子未可知佛之爲人。曷得有其議論乎。是必後世佞佛者所附會也といへり。劉氏鴻書に。原始秘書を引きて。商太宰問孔子孰爲聖。孔子亦稱葛天氏無懷氏。爲西方聖人也。其商之世封文王爲西伯居于西方。亦曰西方聖人ともいへり。また西方聖人の一說に備ふべし

日を呑むと夢みて孕む

朝鮮征伐記に。載する豊太閤の朝鮮王へ賜はりし返翰に。予當于托胎之時。慈母夢日輪入懷中とあり。俗說も自據なしといふべからず。これによりておもふに。扶桑略記に。天臺山沙門陽勝元是能登國人。其父僧善迭俗姓紀氏也。母亦同夢呑日光。即有妊胎。また註畫讃に。蓮師姓三國氏云々。母清原氏恒仰朝曦念誦。夢日光映胸而娠。なほ唐土に

談にも名はありて。實にはその人なしと云ふ説もありとおぼゆ。さるに近く甌北集を見るに。關索挿槍巖歌あり。萬仞危崖拔地起。磴道盤空有遺壘。士人相呼關索巖云。是前將軍子。曾從諸葛征南釆。丈八鐵槍挿於此。我讀蜀志典可徵。髯翁一子平與興。此外不聞更誰某。毋乃荒誕未足憑。然而滇黔萬里境。到處俱有索名嶺。若果子虛無是公。安得威聲至今永。年深世違不銷蝕。此豈得謂無其人。嗚呼書生論古勿泥古。未必傳聞皆僞史策眞といへり。かゝれば趙翼が史學に精しきをもて。關索をありとす。さて賽關索の賽は似たりといふことにて。俗語にいふ梅もどき雁もどきなどのもどきと云ふに同じきよし。葛原詩話に見えたり。また病大蟲薛永。母大蟲顧大嫂あり。大蟲は。虎の異名なり。本長鳥山氏の水滸傳解に。虎を大蟲といふことは。本長沙景欽といふ佛書に出づといへり。この解甚あやまれり。虎を大蟲といふことは。已に本草綱目にもいでたり。搜神記に。扶南范尋養虎於山。有犯罪者投與虎。不噬乃宥之。故山名大蟲とあり。搜神記は。晉の葛洪撰なり。大蟲の名。はじめてこゝに見えたり。これはもと北齊の時に。諸州の鎭兵を發する時の符に。銅虎符あり。それを北齊書に銅獸符に作れり。北齊書は唐の世に撰みたるによりて。唐の諱を避けて虎を獸にかへたるといふことあり。かゝれば大蟲といふももと諱をさくるより起れるなるべし。因に云。鳥山氏の解に。長沙景欽といふ佛書といふは。何ともおもひわかざりしが。五燈會元に。長沙の景欽和尚勇悍なりしかば。人よびて岑大蟲と綽號せりといふことのあるを傳へ誤りたるものとおもはる。再按に。佛說陀羅尼集經の。畫毗俱知像法に。作曼茶羅結界於中誦呪。一切師子大蟲禽獸水牛白象囉闍朱囉水等。皆不能害といふこと見えたり。また兩頭蛇解珍雙尾蝎解寶といふも。明の陳章候が繪によるに。解珍解寶ともに各半弓を手に持ちたり。弓を蛇に喩へ。弓筈を蝎に比したるよりいでたる名と見ゆ。旱地忽律朱貴の忽律は。獅子の蠻名なるよし。猶餘はこゝにもらしつ

西方の聖人

文中子に。或問佛。子曰聖人也。曰其教何如。曰西方之教也とあり。これによりて世に西方聖人を佛のと

掌とせるところにして。六月十五日午の時。社家五人この假面をきて。馬上にて二王門を入りて。本堂の前なる舞臺の西の方より。本堂のうしろをまわりしころに。神官配下の社家二人をつれて。これも二王門より入りて。本堂をめぐり。三社權現にいたり。祝詞をよみ。柏板をもてるもの六人。舞臺にのぼりて舞ふ。この舞をはりて階をくだり。御供所の內より。それ〳〵傳法院へ入る。次に神官及び社家二人とともに。舞臺にのぼり。その一人は幣と錫杖を手にとりもちて。舞曲あり。また劒の舞あり。この二段を翁大夫の舞とて。かの元久の古假面をきて舞ふなり。この舞をはりて。後に三人太夫の舞あり。毎年六月十四日祭禮の前日。田村氏にて舞の稽古あり。過ぎし文政甲申の年。谷文二。西原梭江とともに。田村氏にゆきて舞をみ。かの古假面をも見ることを得たり

猿田彦の假面のうらには。あかき漆もて。元和の年號と。造りし人の名と花押あり。ほかの四面には年號なし。とるところの錫杖劔なども。さだめて古物なるべけれど。その時は假面のみを手にとりて見たり

廿四孝　七賢人

廿四孝は。元の郭居業が作なるよし。典籍便覽に見えたり。羅山隨筆云。俗所謂二十四孝者。嘉語怪異寔非ㇾ有道之者所ㇾ述也。昔程夫子謂。十哲者世俗之論也。余於廿四孝亦云矣といへり。また竹林七賢とて。畫家にてゑがける人物は。據もたしかにて。晉書嵆康傳に。所ㇾ與神交者。惟陳留阮籍。河內山濤。豫其流者。河內向秀。沛國劉伶。兄子咸　瑯邪王戎。遂爲竹林之游。世所ㇾ謂竹林七賢也とあり。これも又貝原篤信の論に。七人放曠荒醉不ㇾ可ㇾ爲ㇾ賢といへり。和漢名數に見ゆ。二大家の論まことに知言といふべし

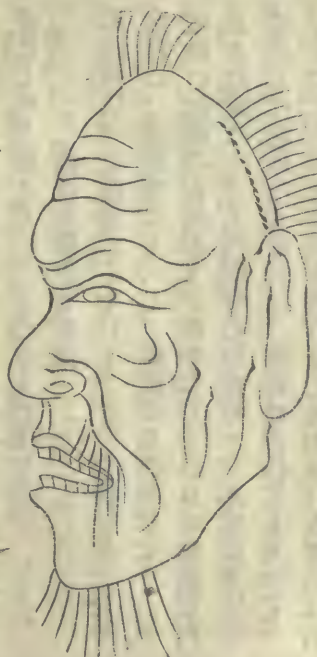
水滸傳の諢名

水滸傳百八人の諢名。はじめその義を詳にせざるもの多かりしが。後その說を得たることまゝあり。病關索揚雄。宣和遺事には。賽關索に作る。こは蜀の關羽の子に關索あれバ。それにおもひよせたる諢名なり。花榮が弓をよくするからに。小李廣といふに同じ。さて關索が名三國志に見ゆることなく。池北偶

觀音の緣日にて。十八日の事なるに。常より人群集す。中略 淺草寺は。仁王廿四代推古天皇の御時。定居二戊子年建立也。本尊は聖觀音。關東最初の伽藍靈驗無雙の處なり。種々の舊說不思議の事。舊記に載する所。不レ可ニ勝計一と見えたり。さてこの定居といへるは。古年號にて逸號年表に載せたれど。逸號年表には。古本水鏡。古代年號。年代記。皇代記。神明鏡。海東諸國記などを引證して。推古天皇十九年を定居元年とす。しかるに今こゝに載する。永亨記。關東兵亂記の二書には。定居二戊子とあるによれば。推古天皇卅五年を元年とするなり。逸號年表に。これを引かず。一說に備ふべし。又本尊聖觀音とありて。今も現にかの御寺に詣づる人の拜み奉るごとく。聖觀音にてましますを。回國雜記には。十一面觀世音とするしたるはいかにやあらん。ある人の回國雜記を證として。淺草寺の御佛を疑ふは。諺にいふ耳を信じて。目を疑ふといふにひとしく非なりし

淺草寺神事舞

淺草寺には。一年の中に七十五度の行事あり。その中。三月十八日の田樂なぞりと。六月十五日の神事舞は。古風を存して。そのかみの手ぶりを觀るに足れり。ことに神事舞に用ふるところの古假面。すべて六つあり。その最ふるきものを翁大夫といひて。元久の年號あり。次に三人大夫と稱する假面三つあ

翁大夫の假面

り。これは三社權現なるよしいへり。この外。猿田彥大神および福女の假面あり。おもふに。この福女は。鈿女命なるべし。その神事は。神官田村氏の職

しく目立ちたるよりいへるが。古來より蓮の字をかけりとあり。また棠大門屋敷に。大坂の事をいへる所に。釣鐘町の上。尤。江戸。京。いせの問屋多ければ。名にたてる　すは云々。女中玉鏡に。首筋生(はひ)ぎは剃りあげて。白粉濃くぬるは。問屋はすはの樣にていとはしたなしなどもいへり。これらによりておもふに。長唄娘道成寺の文句に。都そだちはすいなものじやへといへるは。中村富十郎がおのれを謙退の心をふくめる詞なるべし。富十郎は京都の生なればなり。作者の用意のほどおもふべし。また落葉集の小唄樽踊といふもの丶文句に。袖ひきやひん〳〵なせ顏ふりやるへ。わしがとこにふつたぞへ。はすはなことはおかんせやといふ文もあり。今の俗語におてんば。又はやつこなどいふこ丶ろばゑにおなじ。このはすはの一條は山東京傳が考のよしにて。或人のもとよりしるしおこせたるなり

人に忌みきらはる丶をはちぶさる丶といふ詞あり。源氏物語に。にくき顏をはななど打ちわかめ丶はぢぶきいへばといふことあり。仙源抄に。はちぶくは。發服。蜂吹。發服ハラタツなり。若菜に。女三宮侍從なにしに參りつらんとはちぶく。松風に。宿問はな打ちわかめてはちぶきといへばとあり。紫明に。蜂吹といふは拂ふ心なり。是は澄みて可レ讀と見えたり。後の歌ながら下河邊長流の山家の心をよめる

捨つる身は虎もおそれぬおく山に
なほ世のうさは蜂ぶかれつ丶

おもふに。蜂は螫すものなれば。人の畏れて近づけまじく吹き拂ふといへる心なるべし

淺草寺觀世音菩薩

大江戸に。古蹟多かる中にも。今に古物を存したる舊蹟は。淺草寺なるべし。鐘銘は至德四年なり。且境内に西佛の古碑あり。每年六月十五日の祭禮に用ふる古面には。元久三年の年號あり。本堂のうらのなげしに懸けたる長刀は。靜御前の持てるものといへり。また梶原景時奉納の繪馬もあり。古書には吾妻鏡を始め。古本永亨記に。城の東淺草寺は。推古天皇御宇定居二年戊子に建立の所。佛法最初の靈場なり。關東兵亂記に。大永二年九月の初め古河の御所へ御使あり。御使者は富永三郎左衞門尉とぞ聞えし。その歸りに富永武藏の淺草へ參詣しけるに。その日

硫黄なりといへり。かゝれば硫黄の色の黄なるが。彼鳥の目の色に似たるゆゑなるべし

俗語

いぢめるといふ詞あり。これは意地の音を活用していへるなり。されば。いぢるともいぢめるともいへり。又かするといふことあり。これは上のかゝ助語にて。よわきをかよわきといひ。よれるをかよれるといふのかにて。唯するとばかりの義なり。延喜式に座摩巫を。ゐかすりのみことよめり。摩字をかすりとよめり

人の身に觸れて笑はしむるをくすぐるといへり。書言字考に。檪また櫪をよませたり。字鏡抄に。檪をこそぐるとよめり。節用集大全には。櫪コソグル櫪二人身一也出二止覰一と見えたり。このころ慧琳音義にて。その詳なることを得たり。治禪病秘要法經曰。擊櫪下音曆。鬼以レ指擊二觸人一令二心不レ定也とあり。これにてその義いと明なり

女子のれとなしからぬを。はすはものといへるは。蓮葉女より出でたる諺なり。蓮葉女と云ふは。昔大坂の問屋に抱へ置きて。旅人の伽せさせたる賈女とひとしき者なり。立居ふるまひ賤くはづかしげなき女をはすは女のごとくといふこゝろばえにて。はすは者。はすは娘など今もいふことなり。西鶴が一代男に。大坂の事をいへる條に。あれはいかなる女とたづねける。人のめしつかひかまど近きものと申す。あれは問屋方にはすはと申して。眉目大かたなるを。東國西國の客の寐所さすためかゝへ云々。また一代女に。難波の浦は日本第一の大湊にして。諸國の商人こゝに集りぬ。上問屋。下問屋數をしらず。客馳走のために。蓮葉女といふものを拵へ置きぬ。是は飯たき女の見よげなるが。下に薄綿の小袖。上に紺染の無紋に。黑き大幅まへだれ。吹鬢の京かうがい。伽羅の油にかためて。細緒の雪踏。のべの鼻紙を見せかけ。その身持。それとはかくれなく。隨分つらの皮あつうして。人中をれそれず。尻居ゑてのちよこ〳〵ありき。ひらしやらするがゆゑに。此名をつけぬ。物のよろしからぬを蓮葉ものといふこゝろなりと見えたり。其角が句。兄弟に

どろぼうの中を出づるや蓮葉もの　玄札

其角云。はすはもの蓮葉笠をかつぎたる姿の見ぐる

もいふべきを。昔よりなめらるゝと云ひきたれるはゆゑあることならん。おもふに蟲のことにはあらで。下食といへる鬼に舐められしといふ義なるべし。唐土にて云ふ。鬼舐頭といふ病なるべし。その證は。江家次第に。追儺後主殿寮供二御湯一。注に雖レ物二歲下食一猶供。流布の印本には下食を日食に作る。今古鈔本に従ふ一條禪閤鈔云。其日注レ曆下食者。鬼神之名。此日沐浴則鬼舐レ頭而髮落故憚レ之。倭名類聚鈔瘡類云。病源論云。鬼舐頭師說爲二天狗下食一所レ舐是人頭或如二錢大一或如二指大一髮不レ生也。曆例曰。歲下食は天狗星の精。下界に下りて食を求むる日なり。吉日なれば妨なし。凶日なれば忌むべし。今曆家古來相傳書拾芥鈔云。下食日沐浴誦妙喜王金著女追杖鬼參尾王波羅々鬼。又云。下食日自二節中一計レ之。又毎月戌日定下食也未正戌二辰三寅午子申。巳亥丑卯とあり。これらの諸說は隋唐にもとづきし古傳なるゆゑ。鬼舐頭の文字存せしならん。かゝれば俗說のげじいげじきの約りたるなるべし。げじきは今の假名曆にもしるしたり

歲月のうつりゆくことのはやきをたとへて。光陰矢の如しといふことは。山谷詩集に。日月過レ箭疾といふ句より出でたるなるべし。年の矢といふことも同じこゝろばへなれど。千字文に年矢とあるは漏刻のことにて自別なり

僧をいやしめてすりこ木坊主といふこと。內典に似たることありとて。西教寺駒山のいへるは。成實論云。勤行故名二精進一。乃至如二優鉢羅鉢頭摩等隨レ水增長一。懈怠行者。猶如下木杵從二初成來一日々滅盡上とあり。これ世諺にいふに同じといへり

高野六十那智八十といふことは。男色のことのやうに世にいへど。さにあらず。これは紙の一狀の數なり。高野紙は一狀六十枚。那智紙は一狀八十枚むかしよりの定めなりとかや

目かどをつけて人を見るを。諺にうの目たかの目にて。油斷のならぬなどいふことありこの二鳥は目の疾きものゆゑに。たとへていへることゝのみおもひたるに。六俳園立路隨筆に。世の諺にうの目たかの目といふことあり。いかなることゝもおもひわかたでありしに。硫黃にうの目たかの目といふありて。いづれも上品なり。是にておもへば。おとらざるにいひ侍るなるべし。硫黃うの目鷹の目ひぐち。この三種の外なし。ひぐちといふは。附木などに用ふる

唐土にもむきの似たることは。冷齋夜話に。老杜詩云。身輕一鳥過。文忠公。梅聖愈。初得二一本一而失二過字一。諸公讀レ之曰。一鳥疾。一鳥落。一鳥去。及レ得二善本一乃過字。乃知一字之工。才力有二短長一也といへり

漢和

漢和といふものは連歌より出でたるものにて。詩歌ならべてしかるなり。さてその事のものに見えたるは。古筑波集に始めて見ゆ。されども一條兼良公よ後の事なり。さあれば兼良公の息冬良公の作にてもあるべしと。遠碧軒隨筆にいへるはさもあるべし。百物語といふ册子に。策彥と紹巴との百韻漢和を見侍りしに。いもしろき句どもいほき中に

難レ奈讀殘書といふ句に

秋風に飛び行くほたる吹き消えてと脇し給ひける

また懷紙の中に策彥

沙濕履無レ聲といふ句に

亥のぶ夜の雨はなか〳〵たよりにてとしられけるおもしろき句どもときこえし

と見えたり

俚諺

歌人は居ながら名所をしるといふ諺あり。ふるくいへることゝ見えて。平家物語に。こゝに武藏國の住人平山の武者所すゝみ出でゝ。すゑしげこそ北山の案內よく存知仕りて候へと申しければ。御曹子は殿は東國そだちの者の。けふはじめて見る西國の山案內者。大に誠しからずとの給へば。すゑしげかさねて申しけるは。こは御おやうともおぼえ候はぬものかな。吉野初瀨の花をば見ねども歌人がしり。かたきの籠りたる城のうしろの案內をば剛の武者が知り候とぞ申しけるとあり。又近きものながら豐臣勝俊の九州道記に。まことに歌人はゆかずして。名所をしるといふ諺にいへる如くとも見え。一條大閤連歌千句序に。歌の道なかりせば。いかにして足を動かさずして千里の境をわたるべきなども見えたり。げぢに舐めらるゝと髮落つるといふことあり。伊澤氏の說に。世に頭髮のなにとなく脫けて錢の大さ。あるひは指のはらばかりにはげたるを。げぢに舐められしと云ふを。げぢ〳〵といふ蟲のことゝもふものあり。かの蟲のなしゝわざならばはひ行きしと

世事百談

山崎美成著

過ぎし頃つれ〴〵のすさみに。筆にまかせて記したることぐさのつもりたるを。かりそめに三養雑記と名づけしが。その後もなほ筆をとゞめずして。おもひ出づるまゝに書きつけたるに。巻は四まき事は百條にみちたれば。やがて世事百談とは名づけぬ

清家の訓點

明經道清原家の訓點論語古刻本あり。その中。先進ニ於禮樂ー野人也。後進ニ於禮樂ー君子也と訓みたるは。諸注釋の意に異なり。されどかくよめる釋義のふるくよりありしと見えて。東坡が孔子從ニ先進ー論には。清家の訓點のごときこゝろばへに先進後進を用ふるところあり。かゝれば清家の讀法かならず據ありしるべし

平仄

四聲に平仄といふは。上下の平聲を平といひ。上去入をすべて仄といふことは。宋の沈約始造ニ四聲ー謂ニ上去入ー爲ニ仄聲ーと。古今韻會に見えたり。平仄の名宋に始れり。さて平聲は音韻の平なるゆゑに平といひ。上去入はいづれも聲の平ならぬものなれば仄といふなり。仄は說文にも側傾也と注し。漢書の漢首なる古字の條に仄古側字とあり。おもふに上去入の聲は側傾不平なれば仄聲といふなり

韻塞

中むかしの遊びに韻塞といふ戯れあり。これは古人の詩の句を書きてそれが下の一字ばかりを隱して。上をよみてその下なる韻字をなにそれとおしあてにいひて。あてたるを勝とすることなり。これはもと古代の及第の對策とてするに。古語の中をいだして上下を塞ぎてなにの文句ぞとあてさするなり。さることより出でたる戯れならんか。源氏物語にも見えたり。枕草紙したり顔なるものといへる條に。ゐふたぎの明けとほしたるとあり。中務集に堀河の中宮のゐふたぎの

なつ山のしげりをわけて鳴く鹿を
いかでとものゝ人たづぬらん

原稿百條今見やすからんためにあるひは合せあるひは分ちて百三十八條とす

世事百談目錄終

世事百談目録

ことなくて待ちよろこばふ友垣に

も(悉)なくてあへる我もうれしな

旅にして見聞きしことを語らはゞ

みやこはこりと人やれもはむ

言の葉のれとろへのみぞ名ににほふ

みやこのはなはまこと世に似ぬ

遊京漫錄卷之下終

たる錦綾のうるはしさは。いはずとも思ひやるべし。かくてその日となりて。家ごとにおとらじと。かゝやかしいだしたつるに。花紫のかしらのかざり。おほかたのに過ぎて。花やかなれば。誰もみな目をおどろかして。とよみあへるを。おなじほどのあそびどももいとたい〳〵しき事に思ひて。くぜち(爭論)いで來にけり。長者花紫を近くよびて。はじめよりさだめたるを。かく數に過ぐしたるは。いかに心得たるにか。そこにもおなじつらに。櫛かむざしの數をへらし給ふべしといふ。花紫こたへて。おほせ。さる事には侍れど。よく〳〵おもほしめぐらして。わなみの心をおしはかり給へかし。かゝる身のならひ。ふけうなる申し事にははべれど。こがねにかへて。子をうれるおやなれば。おやあれどもなきは同じく。夜ごとにかはる枕のちぎりは。つひのよすがさだめんをとこもなし。いふまでもなく。子とては侍らず。何のほだし(羈)もなく。ことやすき身に侍り。さるからには。すゑを樂しむたのみもあらず。けふを思ひてあすをはからぬがわなみらが身のうへなり。されば一日も花やかに身をかゞやかし。名をしられ。人にめでられ。おのれをたのしむなりはかのこと侍らず。たゞ其身の花やぎて人にめでらるゝを。はかなき樂とし侍る身なれば。心のおよばんかぎりは。錦綾を身にまとひ。さんご。たいまいに。かしらのうへをかざらんとこそ思へ。又うしろみ給ふ人も。さればこそ。はかなきわなみのために。寶をもつくし給へ。おほせごとにしたがひて。人なみ〳〵にさしまじりたちならはんとならば。何のめいぼく(面目)かは侍らん。わなみは此つらにまじり侍るまじといふに。長者もてあつかひて。さらば今日のみは。そこの心にまかせん。あすよりはさだめのごとくせよといふに。其日は花紫が心のまゝにかざりて。道中ありき。げに群鳥の中に。鳳凰のまひくだれることく。千羊の中に一虎のたちまじれるが如くなん有りける。二日の日よりは。さだめのまゝに。數をへらしけるが。とにかくに。やまひのことにことつけて。其つらにまじらぬやふにしけり。心ぎもしたゝかなるあそびなりけり

都よりかへりて後。人々つどひ來。物かたらふに

濱　臣

て。つひに此山に分け入ることたえにけり。そもそも此山は。薪多くきり出だす山にて。殿の御はやしも有りければ。かゝる事のありて。木こりども山にいる事かたきよし。うれへ(訴)申したりしかば。其あやしのものとりて參らすべしとて。弓矢の道にかしこきもの。二十人ばかりつかはされにたり。きのふ見出でたりとて。とよみあへりしが。又見うしなひぬ。ひゝといふけものゝ。年經たるなるべしといふ人もあるを。かたへより。否あらじ。ひゝは人をとりくらふものにはあらず。猶こと(異)ものならむといへり。とまれかくまれ。殿のつはものかこみたれば。近きうちにたやすくうちとりなまし。今二日三日もおそくおはせば。とらへたるを見給はんにとかたりぬ。けしかる事をも聞くものか。かゝることは。そゞろなる昔ものがたりにこそ聞しか。まのあたり見聞すべき事とは思はざりしを。かたゐなかには。今もなほあやしきことの有りけるはと。とかくものかたらふほどに。若山の城のべ近く舟はて(到著)にけり

○西扇屋花紫

難波に新町と云ふは。あそび(遊女)どものつどふ(集)所にて。いとにぎはゝしく。むね〳〵し(重立)き家居ども。數たてつらねたる中に。九軒の揚町とて。ことにすぐれしあり。去年火のさわぎにかゞりて後。あらたにつくりみかげるなれば。いときらぎらし。しかのみならず。今年は大江門のよし原のさだめにならひて。こゝにも櫻をうゑつらねたれば。往來の人。道もさりあへず。物いはぬ花に。ものいふ花たちまじりて。色をあらそふさま。いはむかたなし。三月廿日より道中とかいひて。日ごとに九軒のあたり。花のもとをあそびどもねりありく。まことに天の下の綾錦をつくしにけり。西扇屋の花紫といふは。わきて高名のあそびなりけるが。今年の道中には。かねてより心だくみしたるに。たのもしきうしろ見人もありて。よそほひかざりたるかたち。あるが中にぬけ出でたり。さだめ有りてかむざしはみぎひだりに六本づゝ十二本。櫛は二枚とおきてたりしを。花紫は右ひだり十本づゝ廿本。櫛は三枚をさしいたゞきたり。かむざしも櫛も。玉に金にみがきたてゝおほくのたからをつくせるなりけり。ましてきそひ

に女をつとかきいだきてはしり行くを。男おどろきておひかくるに。鳥のかけるやうにて。おひつきがたし。此あやしのものは。いくたびかへり見て。わらふ／＼ゆくに。いつか行方を見うしなひぬ。男くやしさいはんかたなく。猶いかで女をとりかへさばやと。木の根。岩かど。たゞこえにふみこえて。山路ふかくわけいるに。月なほ山の端に殘りて。木の間もるかげすごし。谷川の岸にいたりたるに。岸のむかひに。女つひゐたり。うれしさいはんかたなし。聲をあげてよぶに。かしこにもよぶ聲す。見ればあやしのものもをらず。わたせる板橋をば。かしこの岸に引きあげおきたれば。渡るべきてだてなし。男大聲に。其橋はやわたせといへど。女たゞ手をあげて。こなたをさしまねぐのみなり。男心いらだちて。いかでとく／＼といふに。女物をたよりにて。たちあがらむとすれど足たゝず。こなたを見てなくことかぎりなし。男いとかひなきことゝいらち(心急)て。いかにもして。其橋わたせとさけぶに。女又かしらのうへにおほへる松の大木を指さしてなく。男目をさだめてよく見れば。松のうへに。あやしのものののぼりゐて。下なる女をにらまへてをり。見るにおそろしとは物かは。身の毛いよだちてわなゝか(戰慄)るゝよりほかなし。せむかたなくまもりゐたるに。あやしのもの。木末よりすら／＼とおりて。女のもとゞりをかいつかみて。あふのけにおしたふしぬ。女やゝとさけぶを。たしかにおさへて。つるぎのやうなる長き爪にて。乳のあたりより下へ二かへりばかりなづるやうにするに。きたるものも。むすびたる帶も。すだ／＼(寸々)にさけて。はだへのあらはるゝを。胸先にくちさしあつるやうにみゆるに。女あと一聲さけびて。のけさまにそるを。うごかしもあへず血をすふ。手足をわなゝかしてなきさけぶ聲。いとかなし。男もたましひきえて。われさへ腰たゝずうつぶしぬ。やう／＼血をすふにつけて。よわり行く聲かすかなり。はては腹わたをかき出でゝくひつくしぬ。さてなきからをさかしまに松の枝に引きかけたるを。男一目見るより。まことにたえ入りぬ。つとめて逐ひ來る人々。此所まできたりて。男のたえ入りたるを。とかく見あつかふに。いき出でゝ。ありし事かたり聞えければ。人々おぢおそれ

（疫病）の事と思ひて。白紙には書きつたへしなりとぞ。もとよりおとなしごとは。心とむべきことならねど。何事をたねとして。かゝる言葉をばいひちらしけん。さそはれやすき人ごゝろ。かばかりはかなきものは。なかりけりかし

○白髪畑の恠

やよひ十日。高野山のふもと。矢立といふすく（宿）を。つとめて（昧旦）たちいで。高野辻と云ふ所より舟にて。紀の川をくだすに。川瀬はやくして。こなたかなたの岸の。さるなく聲みゝにとゞまらずとも。いはまほしき所なり。五里ばかりくだりて。左にかたくそばえたる山を。白髪畑といふ。かぢとりのものがたるを聞くに。此ほど此嶺にあやしのもの出でゝ。人をとる事有りければ　紀の殿より。うて（討手）の人たち。をとつひの日。此所にきたりて。とかくあなぐり（求）せらるれども。いまだとらへ得ずといふ。そはいかなるあやしのものにかととふに。舟人くはしくかたり聞かするは。きさらぎ末つ方よりの事なりけり。此山の麓の村々の女ともすればゆくりなく（不意）うすることあり　はじめのほどはみそか（密）男などのありて。心をあはせぬすみいに（去）たるならんといひて。さがしもとめしかど。たれひとりさがし出でたるなかりければ。まよはし神にさそはれつらんなど。いぶかりあへるほどに。たれいふとなく。白髪畑の山陰には。あやしのもの出でゝ人をとりくらふとなりといひさわぎしかど。たしかに見たりといふものもなくて。日頃ふるに。此山のふもとに。某村とかいふありて。そこのむらをさのむすめ。年はたちばかりなるが。ゐなかめづらしきすがたかたちなりければ。とかくよばふ（言入）人もおほかりけり。さるにはやくけさう（懸想）じける男ありければ。おやのゆるさぬ中にて。にはかにこと男をむこにとらんとしけるを。女くるしいことに思ひて。みそか男とはかりて。夕月のたど／＼しきまぎれにあくがれ出でにけり。おひくる人あらんをしのびて。山路を經てのがれ行くに。うしろよりくるもの有り。男にやあらむ、女にやあらん。丈ひきく顔いとしわみて。かしらには。はりをうゑたるやうなる髪を。尺ばかりふりみだして。みる（海松）のやうにさけわゝけ（壞亂）たるつゞれをきたるが。ゆきすがふまゝ

聞えぬをと。かへすぐ\もわすれがたくて。人にむかひては。先かたりぐさとしたりき。されどまた思へば。むかし。もろこしの陳譯とかいへる人の詞には。小時了々大未必佳といひおきけんやうに。をさなきほどの。かしこきは。おとなとなりてさばかりならぬものにて。大かたをさなきほどのかしこきは。癇症のわざなりと。あるはかせのいはれしも。さる事と覺ゆるなり。近くは。おのがしれる人にも。荻野某は。八つになりけるに。つごもりの夜に。月のかたちの空にみえけるを。人々あやしがりしに。是は水氣なりといひしが。げに雨となりしより。人々奇童とたゝへて。おひさき世のすぐれ人となりなましとかたりあひしも。今猶かいなで（普通）の物しり人なり。こたび東路をのぼるとて。遠江の國。新坂のすく（宿）つゞき。伊達方村なる。石川方救にはじめてたいめしたるに。是はいつゝのよはひより。冷泉中納言爲泰殿の御弟子となりて。歌よむとて。東路の奇童といへりしも。たびものがたりして心むれば。粟田土滿にまなび。今は夏目甕滿にとひきゝて。なべての古歌まなびけるぞちなり。されば此多田田舍の奇童も。おひさきいかならん。ゆかしきばかりのことどもあらじとは。思ふものかな

〇酒うるおうな

四月はじめつかたより。京におしなべて。上酒有りといふ三字を紙のはしにかきて。門ごとにおしはることあり。たがいひ出でしともなく。せまり（困窮）たるあやし（賤）のうば（媼）が。酒うりありくことあるべし。もし其酒をかはゞ必あしき病をわづらはん。よしかいずとも。門にいたらばおしかりなまし。さるからに。上酒有りと書きておしはりたげば。酒うるうば來ずといふ。やんごとなきみつはよつは（金殿玉樓）ののきばより。賤がふせやにいたるまで。門といふ門に。此三字かきておしはらぬなし。をりしも。江門の太田博士都にのぼり來てをられしが。門におしはらせたるは

有酒如池　有肉如坡　謹謝妖婆　勿過我家

後に聞けば。難波よりいひつたへ來しなりとぞ。難波にては。其うば來る家には。もがさ（疱瘡）をやむといひのゝしりて。門ごとに赤き紙にしか書きて出だせりとぞ。それをつたへあやまりて。たゞにおやみ

ある人ならんと思ひて。てゝき(父君)はいづこにかととへば。畑打にといふほど。あるじだつおのこかへりきたり。何人の。世にはひかくれたるならんと。ゆかしさに。先此子をほめて。おやのこゝろをとらんと。とかくかたらへど。むげの賤の男にて。おのが子のふみよむもしらずして。こたへいふやう。の給ふごとく。此をさなきものは。わが子にてはべれど。大かたのをのわらはどもにまじりて。いしなつぶて草むすびなどのすさびもこのまず。ともすれば。ふづくゑのもとにかゞまり居て。さうしめくものとりまさぐり。口になにごとをかいひはべれど。おのれは。何よむか知りはべらず。此村に侍る山寺の老法師のもとに。日ごとに行きてのみ侍り。おひたちて後も。何にかはなり侍らむ。老法師のために。法の子とやなりなまし。いとやく(益)なき事と。心もゆかぬかほにいふに。思ふところたがへば。こゝろのうちにつまはじきして。何事もかたらはず。此子に向ひて。あごは手ならうわざもすや。其老法師をよろづの師とやたのむとゝへば。あらず。法師は年老い給ひて人を敎へさとし給ふ心だましひもなし。

たゞかたへにありて。見ならひ聞きならふばかりなり。いかでまことのすぢは。まなび得侍らんといふに。いよ〳〵ゆかしくて。唐詩選をとりてよまするに。かたこと打ちませてよむ。大方そらにうかべたり。また實語敎をそらにうかべよむ。又筆とらせて。何にまれかけといへば。手はまだならひおぼえずといふ。さらば。先いろはをといふに。すこし打ちわらひて。いろはをやはかくべきとて。上大人丘(上大人丘乙巳。七十子。爾小生。八九子。佳作仁。可知禮○右秉燭談云。祝枝山猥談。引水東日記)とかきて見す。手のしたゝかなるよりは。此廿一字を所ならふはじめにかく事をしりしが。おどろかれて。こは彼老法師やをしへたりしととふに。うなづく。いとゞゆかしくめづらしく。おひさき思はれて。猶かたらはまほしきことおほきに。從者ども行くさきとほし。しらぬ山路に日暮れぬべしと急がせば。げに日も山のはに落ちかゝりぬるをとて。何事もかたらはでたちぬ。道すがら思ふに。都にだにかゝるばかりの年にて。心よりふみよまんとする子はなきものを。としかげがむすめの。うめりけむ子も。けふの心はたけくこそありけめ。うつぼ木のもとに。書よみしとは

にうたへたてまつりて。申すやう。女はおのれが子にてはべれど。おほやけのおんさだめをも。まちきこえたてまつらず。心にまかせて。かうべうちおとし侍りしおこたり。おほやけの御のりのまゝによりて。おのれをもつみなひたまへ。露うらみ奉らずと。おめたるさまもなく聞えあげければ。つかさ人たち。とかくかうが(考)へさだめ給ひて。いましに罪なし。とかくのさだめあるまじきなりとて。女のなきからは。父にたまひて。とかくのわざいとなませさせたまひぬ。此よしつたへ聞き給ひて。殿にはいとゞをしみ給ひて。あとのこと。ねんごろにいとなむべしとて。こがねどもあまたゝまひぬ。父のはじめの主と聞えしよりも。こたびの事によりて。ふたゝびめしつかひさせ給ひて。昔のまゝのろくたまはりてけり。此烈女のことをほめさせ給ひて。津の君より。大湊に石ぶみ立てゝ。ことのゆゑよしくはしくしるしつけさせ給へりけりとぞ。こゝには山田人のかたりきかせしまゝをしるしぬ。おのれ山田に有りし頃にて。大湊までは程もとほからぬ所なるを。尋ね見ざりし事。かへすがへすもくやしかりき

○多田の奇童

有馬のいで湯あみてよりのかへさ。中山の觀世音にまうでゝ。滿願寺の山ごえして。多田の社にと心ざす道。あやしのふせ庵にしばしいこひたりしに。年の程四つにやあまるらん。いつゝにやたらざらん。はした(端)なるをさな子の。たすきゆひたるまゝにてあるが。ちひさきふづくゑにおしかゝりてふみよむさまなり。いろ白くこえて。ほうづきなどをふきふくらめたらんやうに。いとあいぎやうつき。うちゑめ(莞爾)るまみ(目元)などいはむかたなし。おのれもとより。みどり子めづるくせのあれば。ちかくよりて。あご(我兒)はいくつとゝへば。むつなりといふ。かしこきものは。たかち大きやかならぬならひにて。此ちごも。年よりは打ち見たる處の。ちひさやかなるべし。何事すとゝへば。書よむなりといふ。何よむぞとゝへば。唐詩選をといふに。まづおどろかれぬ。かゝるおく山中に。まだをさなき子の。いかでとゆかしくて。とりもてるくだ物。一つふたつ出だしてあたふれば。打ちゑみておめるいろもなくくふさま。世のつねの子にかはらず。父ぬしやゆゑ

いとくるしかれど。もたしあへでなんといふに。父もことわりと思ひ。殿に聞え參らせたりければ。うしろぎたなからぬ心の。いとゞゆかしくおぼして。とく參らすべしとの給ひければ。父はよろこびて。家にかへるすなはち。うから（家族）にもいひしらせり。彼男にもかくすべきならねば。女よりしていはせけり。男。心に思ふに。まこと。かたみ（互）に思ひたえて。さるかたのしるしぶみ（證文）をさへ。とりかはしつることなれば。今さらにうらむべきふしもあらす。さこそいへ。はじめはわが物となしたる女を。目に見す〱。人の花とよそにみんも。心よからぬ事なり。又思へば。彼殿の若子君とやらんには。はやくより心をかはしてや有りけん。さてわれをば中たえたるならん。われをくびほそ（頼少）しと思ひあなづりて。にぎはゝしきに思ひうつりたるにやなど。おのがおこたりをばかへり見で。さらかへりねだく思ひつゝ。ひたぶる（一向）心なるわからど二人をかたらひて。其夜父の。家になき程をうかがひて。女をぬすみ出だしてけり。女こゝろをあはせたることならねばとかくあらかへ（諍）ど。きゝもいれず。しひてとらひ來て。大湊にゐ（率）て來て。三人心をあはせて。けしからぬわざせんとしけり。一人はうしろよりつといだかひ。ひとりは足をとらへてをり。彼男すゝみよりて。あながち（無理）なるすさび（玩）せんとするを。女こゝろをさだめて。やをら（徐）おさへられたる手をふりはなち。男のはきたる太刀をむかひざまに引きぬぎて。打ちかけたるに。高名のかぢやうちたりけん。男。一太刀にたふれぬ。やがてうしろざまにかゝへたる。一人のわきばらをつきとほしければ。これも一聲さけびしまゝにてしにぬ。足とらへたる壹人は。是におぢてにげんとしたるを。おもひざまに尻たぶらをしたゝかにきりさけたれど。つひにゝげうせぬ。女はたち返りて。打ちふしたる二人に。とゞめの刀さしつらぬきたるほど。父はせつきてければ。はじめをはりの事聞えて。今は何をか聞え參らせんといふまゝに。みづから高むなさかをつらぬきぬ。父もたゞものならざりければ。ことわりなり。かくこそあらまほしけれ。よろづよきにははからはん。心なのこ（殘）いそといひながら。女のからべ打ちおとしぬ。すなはち所のつかさ

某殿に今参りをもとめ給ふなりと。そゝのかすものあり。むすめにもかくといふに。むすめもよき事と思ひて。うけがひぬ。さてわたくし男にあひて。いふやう。父のの給ふによりて。某殿につかへたてまつらんとす。わ君の心。みづからを妻と思ひさだめ給ふさまにもあらず。みづからもいたゞく君いで來ては。身を心にもまかせねば。有りし契りは夢と思ひさまして。御心にかなひたらん御よすがをも。さため給へといへば。男もさいはいの事とや思ひけん。まことしかりとて。ことゞ(離緣)をわたすとかいひけん神世のしわざをまねびにけり。かくて女は殿に參りたるに。よろづのわざにかしこく。心まめ(忠)まめしくつかへ奉りければ。殿をはじめ奉り。御かた〴〵うるせき(利口)ものにまつれし(令親近)給ひけり。此殿に廿に一つふたつあまり給へる若子君たはすが。此女の心ざしのまめやかに。すがたのにくからぬをめで給ひて。いかでそひぶしにとればしければ。うち〳〵にの給ふこと有りけり。女。數ならぬ身の。やごと(貴)なき御具とは。いかでかはならん。ふえうなることゝいくたびかいなみ(辭)聞えしを。はい(本意)にればしつめて。父の方へ申したまはしけり。父は身にあまるかたじけなさに。女をよびとりて。いかで御心にはしたがひ奉らぬぞ。そこの身のなりいづる時ならずや。をんなは氏なくてとかいふことわざもある物をと。さとしけるに。女しばらくさしうつぶきてゐたりしが。父にむかひて。の給ふ事げにことわりなり。何をかつゝみ聞ゆべき。父の御めをしのびて。わたくしをとこせしこと有り。其罪さりところなきはいかゞはせん。男の心いとあさくてくやしきことたびかさなりしかば。契りをたちて。かたみにゐのがよゝにはかけはなれ侍り。かくて後。殿へは參りたれば。の給ふごとくおほせごとにしたがひ奉りて。こともなきことながら。わたくし男有りしことを。父にも聞え參らせず。殿もしろしめさず。さるを今めしつかひ給ひて後。うしろきよからぬ名の。ほころび聞えなば。いとたい〳〵しき(不可有)ことならじやは。かゝれば父にも此事聞え奉り。父より此よし殿に申しあげ給ひて。さてもなほ御心に思ひ捨て給はぬえにし(緣)侍らば。心よくうけがひ參らすべしと思ひ侍りてなん。此事あらはに聞え侍るは。

にけり

○難波の夜發

難波にはじめてくだりしは。やよひのついたち頃なりしに。あはれなる打聞こそ有りしか。難波新地といふ所に。よな〳〵辻かげにたちて。往來の人になさけをあきなふものどもつど(集)ふ中に。むつき(正月)きさらぎ(二月)のほどにや有りけん。ひとりの女の。みめかたちよげなるが。いづくより來るとしる人もなくて。おなじさまに立ちまじりて。さるわざしけるを。いくり(海石)の中の眞玉ひろひ出でたるやうに。うかれ人たち。此女をいとぞあひける。十夜ばかりはさて有りしが。物のはしに歌をかきつけおきて。又の夜よりたえて見えざりけり。その歌

あだし世に露のうき身のながらひて草のむしろにぬれぬ夜ぞなき」いかなる人の。身をはふら(零落)して。かゝるはした(不都合)なるさまにはなりはてしならんと。此頃のことぐさには。みな人いひあへりけり

○大湊の烈女

去年のことなりしとかや。伊勢國度會郡。山田の里より。二見の浦への道に。大湊と云ふ所あり。こゝにて。をとめの一人して。男三人までそこなひたること有りき。其故よしをとひ聞くに。此ほとりに一人のものゝふ有り。はやくつかへし君に。いさゝかかんだう(勘當)かうぶり(蒙)ていとまたまはりければ。ふたゝび主といたゞくかたもなくてかそけき(幽)煙を立てつゝ。春秋をおくりむかへけるに。むすめひとりもたりけり。かほかたちかいなで(並々)にはこよなくまさりにけり。十といひて。六つなゝつにやなりにけん。をさなきほどより。大かたのをんなにかはりて。太刀とるはざに心を入れたりき。されど男を思ふ心はかはらざりけん。いつのほどよりか。とかくいふをとこ有りて。人しれずむつまじうなりにけり。はじめの程こそありけれ。此男いとたはれたる本性にて。こゝかしこにかゝづらふかた多く。此女をつひ(終)のよすが(便)とも思ひとまらざりければ。女心。かろく身をまかせたることゝくいなげきけり。父はさることありともしらで思ふやう。われこそかくうもれたれ。むすめをだにいかで宮づかへにいでたゝせて。人めかしくあらせばやと思ふに。

ひ。心にかなふ身なりせば。はやくすまひとなりて。今の世のはて（闕取）ともいはるべきを。力をいだしこゝろ見し事なきからに。おのづから出づべき力もいでぬなるべし。京にては。六條村といふに。ゑとりどもの住むところ有りて。そこにしばしをりき。日ごとに大男見にとて。六條村へと行く人。ぬのびきにつゞきたり。たのれも人にそゝのかされて。行き見しに。家ゐむねしき有りて。村をさめく者の家に大男居たり。こゝかしこよりたまへりと見えて。衣服をはじめて。よろづの物うづ高くつみかさね。紙にその品々某殿よりなどゝかきて。うへにおしはりたり。さるたよりありてともなふ人と行きしかば。村をさけいめい（敬命）して。かみくら（上座）にれのれをすゑて。大男をともなひ出でたり。みづからかたりいふ。姉にて侍るものは。たけ八尺侍り。弟も七尺八寸侍り。おのれは中のおとりにて。實は七尺三寸侍るなりといふ。あかりしやうじのたてわたしたる。なげしのうへに扇をれきて。ゐながらに。手さしおよぼしてとるに。いとやすし。居たけの高さ思ひやるべし。又かたらふ。くちをしく。せんかたなきは。大路を行きかふを。見る人ごとにおなめづらしの大男や。たけたちのすぐれたるのみかは。みるめもいやしげなきを。ゑとりにだにあらざらましかばといふを。聞くたびに身の程のくやしくて。きゝも入りぬべきこゝちし侍りといふ。げにさるこ となるべし。祇園會にも。人の家に入り居て。見ることはなしがたし。大路にたちてはかたへに見る人のおしごりて鉾などのわたるに。所せければとて。七日の祭をば見ざりしを。うちにとかくのたまはすかたや有りけん。十四日のわたりをば。ある家のひさしのもとにかゞまり居て見しとぞ。内わたりにも。たれ聞えあげゝん。よそながら一目見まほしげにの給ふ女房たち。うへ人などやおはしけん。すべてかゝるものゝたぐひ。犬猫のいたづら（死）になりたるを。とりすてにまゐるありければ。その人數の中にまじりてみかきのうちにも入りしとぞ。かゝるものゝ。世の人にまぎれて。こゝかしこにあそびうかるゝことも。しのびてはある事なれど。忍ひおへぬべき姿ならねば。さるかたのたのしさは。たえてしらずして。水無月の廿日過ぎて。京をたち歸り

けまくもかしこしや。御をさな名を鍠宮(チャノミヤ)と申し奉るとぞ。鍠の字は。説文に。鐘鼓聲也とあるのみにて。をさとよむゆゑたしかならず。或人のいふは。毛詩小雅斯干篇に。其泣喤々とみえて。説文に。喤は小兒聲とあれば。小兒の啼聲とあるより。をさなき心により給ひしにや。さらばをさなとはいふべし。をさとのみにては聞えず。又鍠の字を用ひ給ひしは。喤と鍠とは通字なるに。今年は金性なれば。金扁の字を用ひ給ひしならんかなどさだめいへりき。いかにもいぶかしきことなり。されど江菅兩家の博士たちのえらび考へて奉られし御名なるべければ。いかばかりよしあることならん。おのれらが口のはにかけて。とかくの事あげつらふべきならず。あなおそろし〳〵

〇大洲の大男

さつき末つがた。都に有りしに。伊豫の國より。世にめずらしき大男の來て。難波に旅居するよしいひさわぐ事有り。是は伊豫の國。大洲のゑとりなりけるが。手のすぢをたがへてければ。難波にさるかたのいたづきつくろふ道にたへたるぬし有りければ。ふりはへのぼり來て。いだつきつくろふほどとゞまれるなりけり。いづくにもめづらしきにうつる人心にて。此頃はたゞ大男をのみことぐさとしたりき。六月ついたち頃には。いたづきもいえにければ。京に六條の御堂にまうでながら。祇園會もをがみまつらばやとて。難波よりのぼりくるよし。又いひさわぐに。五日には。彼大男のぼり來たり。けふは六條にまうづ。あすは北野になどいひて。某がしのさうしにいひけん鬼娘のやうに。辻大路を西東にはせ。南北にかける人おびたゞしく。らうがはしさいはんがたなかりき。されど鬼娘はうきたることなり。是はまことなりけり。しかれしどりて行く人の中を。たちまじりてあゆみくるものが。肩よりかみはあらはれて。遠目にもまぎれざりけり。年は廿七。たけの高さ七尺五寸。身の重さ三十八貫目ありとぞ。なり形よくとゝのほりて。すまひ(相撲)めきたるさまはなし。六條の御堂にまうでしをり。門主より米二俵給へりしを。左右の手に引きさげて。かしこまり(謝辭)申してしりぞきたりとか。力はかたちにはおとりたりとぞ。人々いひける。そは世の中のまじら

まで。いとくはしくかきつゞけて。中には。人々の歌もれぼく見え。末に。建保五年九月二日とかきて。左古麻呂へ經房とあり。經房は。帝をもり奉りて。かくれ忍びしぬしにて。其子左古麻呂へかき殘したる文なりけり。其次々に。左古麻呂が末々經久と云ふまで。十三代つたへしと見えて。ひとりびとにみづからの手してしるしつゞけしが。天正の時。家の棟の上にゆひつけれきしまゝの物と見えたりとて。津國池田人。山川正宣かたり聞せしを。れのれうけがはずして。かゝる事はつね聞く事にて。なまざかしうする人の。いつはりつくることあるものなり。見まほしくもれぼえずとて。かゝづらはねば。正宣もしひてもいはず。難波人井辻尙監も。いとめづらしきものなり。見給ひつやといふにも。れのれ又後の人のつくりごとゝれぼゆれば。ゆかしくもあらずといらへて月をへしに。此文書白川少將殿の見まほしきよしの給ふとて。江門にくだしたりしに。又都にて日野中納言殿のゆかしがり給へバとて。江門より申しのぼせて。正宣みづから持ちて五月朔日都にのぼりて。けふ日野殿にもちて參るなりとて。れのれが旅居をとひぬ。もて來れる者なればひらきて見るに。文字のこまやかなるに。筆のいきほひをゝしく。はたにほひありてめでたくみゆ。かなづかひいにしへにも。今にも叶はずいとみだりなるが。多くてにをはもとゝのはぬ所まじれり。歌も一きはいかにぞやれぼゆるあれど。近き世のものとはみえず。あながちに後の人のつくりものとれとしめにくきものなり。其事の正史どもにたがへるはもろこしにもこゝにも。れほくあることなれば。とかくのさだめやくなきことならん。其文詞は別にうつしれけり。れくに。經房卿の懷紙の書法めきてかゝれたる

かきくもる雪げの空をふきかへて月になり行くすまの浦風」と云ふ歌あり。正宣是を板にゑらせて。ふることとこのむ人たちにはとらせぬ。此經房卿といふは。たしかにしられず。おなじ頃。別に藤原經房といふ卿あれども。こと人なり。猶つぎ〳〵に考へ得る事もありぬべしと。大よそをかくなん

○皇子の御いみなの字

五月なかばにや有りけん。皇子降誕まし〳〵ぬ。か

河内攝津などより。ふるき墓誌これかれ堀り出でたるものあれど。かく昔にちかく位たかき人の。こがねもてつくれるさへあるに。文字のかきざまめでたく。よろづとり具したるはあらざりけり。いでや。都にかくめづらしきものをほり出でたるをりしも。都にのぼりあひて。まのあたりその物を見し事のかしこくも。うれしくも。たふとくも。めづらしくもればゐて。このたびの旅路のつとには。これにまさるものあらじと。人にもほこりぬべし。墓誌の文のくはしきことは。こともの にしるしぬれば。こゝにはぶきて。たゞ其堀り出でたるゆゑよしのみを。かきつけぬるになん

廢帝天平寶字六年九月。紀曰。御史大夫。正三位兼文部卿。神祇伯。勳十二等石河朝臣年足薨。時年七十五。詔遣攝津大夫從四位下佐伯宿禰毛人。信部大輔從五位上大伴宿禰家持弔賻之。年足者後岡本朝大臣。大紫蘇我臣牟羅志曾孫。平城朝左大辨。從三位石足之長子也。率性廉勤習於治體。起家補少判事。頻歷外任。天平七年授從五位下。任出雲守。視事數年。百姓安之。聖武皇帝善之。賜絁三十疋。布六十段。當國稻三萬束。九年。至從四位春宮大夫兼左中辨。拜參議 勝寶五年授從三位。累遷至中納言兼文部卿。神祇伯、公務之閑。唯書是習。寶字二年。授正三位。轉御史大夫。時勅公卿。各言意見。仍上便宜。作別式二十卷。各以其政繫於本司。雖未施行。頗有據用焉

○養和のみかどのおやしの傳

文化十四年春ばかりの事なりけり。攝津國能勢郡出野村に。辻掛兵衛といへるは。いとふるくより此村にすむたほんたから(百姓)なりけるが。茅屋のむねふきかふとて。長さ壹尺五寸ばかり。めぐり六寸にたらぬほどの。竹筒のいくへかつゝみたるが。棟木のうへよりおちにけり。あやしと思ひてひらき見しに。竹をふたつにわりて。中には石灰にてつゝみこめたり。一ひらの紙に。何にかあらん。書ける有りけり。石灰をふるひきよめて。書ける物をよみ見るに。いとこまやかにて。かしこくも安徳帝の御あさまりをかきしるしたるなり。其大かたは。帝西海の底にしづみ給ひしにはあらで。しかじかの人たち。五人六人具し奉りて。但馬國にひそかにみゆきましまして。黒木の御所と云ふをつくりて。かくれおはせしを。文治三年五月十七日に。もがさにわづらひ給ひて。つひにかくれさせ給ひきとぞ。みゆきの事。御なやみのほど。かくれさせ給ひての後

し見るに。こたびは。三尺までほらぬに。墓誌の金牌をとりでたり。あるじは心なしの賤男なりければ。はじめにも心づかざりしなるべし。多門院打ちかへし見て。つちにまみれたるをあらひきよめければ。こがねの光かゞやきて。文字あらはれ出でたり。多門院。さればこそありけれ。是はいともいにしへの墓誌なりとて。其掘りし所をばもとのまゝにうづめさせて。金牌をば寺にもちかへりぬ。多門院は歌よむ法師とて。西六條の門主につかへまつる。瀧詮に物まなびければ。すなはち持ち行きて見せけり。詮見ておほきにおどろき。是はいとたふとくめづらしき物なり。門主に見せ奉らんを。しばしあづけよとて。門主にも見せ奉りぬ。門主もめづらしき物とて。めでさせ給ひて。詮にかへし給ひけり。詮つくづく思ふやう。すべて墓誌と云ふものは。後の世にいたりて。おくつきどころさだかならずなりたらむをり。人にほりかへされたらんにも。是を見て。某が墓なるをしりて。堀りも出ださず。もとのまゝにをさめしめんが爲のものなり。されば今此墓誌も。もとのまゝにうづめて。さていしぶみをたてばや。其いしぶみには。たゞに續日本紀に見えたる。此朝臣の傳を。それがまゝにゑりつけて。石のうしろに。いさゝか掘り出でたるよしを記しそへてんと思ひて。其よし多門院にもかたりて。墓誌はしばらくがほど。多門院がもとにあづからせおきぬ。かゝるほどに。やんごとなき御かたがたよりも。ほの聞き給ひて。いかで一目見ばやとの給ふに。もたしあへぬかたには見せ奉り。又ふるものこのむおのがどちは。多門院にとひ行きても見るほどに。都べにはやうやうかくれなくなりにけり。おのれも二人三人ともなひ行きて。五ひら六ひらはうちぬ。そもそも此石川年足朝臣は。平城のみかどにつかへ奉りて。つかさくらひ三位式部卿までなりのぼり。天平寶字六年に身まかられし事。續紀廿四の卷にくはしく傳ありて。金牌とあはせ見るに。たがふことなし。しかのみならず。作意見別式廿卷と有りて。おほやけのまつりごとにいさをおはせし朝臣なり。又萬葉十九の卷に。天爾波母五百都綱波布萬代爾國所知牟等五百都々奈波布と云ふ歌見えたり。父の石足朝臣も。懷風藻に。五言。春苑應詔詩一首のせられたり。近世に。大和

角なるもの有り。其かたへを堀りくづしたるに。中に白骨のいと薄らぎたる有りけり。六右衞門も夢がたりをも思ひあはせて。何となく物おそろしくおぼえしかば。もとのまゝにつくろひうづめぬ。某もうたがひははれたれど。すゞろ(不覺)むくつけ(恐)ければ。言葉ずくなにて。かたみ(互)にくちかためてわかれかへりぬ。かくて人にもかたらず有りしに。六右衞門が弟の。法師になりてみやこ東寺の近どなり。六孫王をいつき奉る寺のうちに。多門院と云ふに住みてあるが。年のはじめには。兄のもとにとてとひゆくを。今年は何くれと事にまぎれて。三月の十日ばかりにゆけり。よろづの事かたらうついで。六右衞門も。弟の事なり。ことに法師の身なれば。つゝむべき事にもあらずと思ひて。しかじかの事なんある。そこは佛につかふる身なり。彼の松の下に行きて阿彌陀佛となへくれよかしといふに。多門院しばしとていふやう。まち給へや。そは聞きおける事あり。三十年あまりのむかし。此村にいみじき行者の有りしが。小鳥をこのみて。多くすえ籠にこめてたのしみけるを。あしき狐ありて。よなよなとりしかば。行者はらだちて食とめののろひごとしけり。狐のろひごとにうてゝ。日にけにやせおとろひゆきつゝ。つひに此岡を枕としてしにけり。故六右衞門殿。是を見つけて。人しれず母とじと二人して。ひそかに此松のもとにうづめられにたり。其夜より母刀自物のけにわづらひて。あらぬ事ども口はしりつゝ。年久しく。わがかくりやう(領)じをする所に、いかなればけがらはしきものをばうづみたる。とく堀り出しきよめずば。いみじきめ見すべしと。かへすがへすいひのゝしれど。何のたゝりといふ事をしる人あらねば。たゞあぎれたる計なり。故六右衞門殿。ひとり其心をしり侍られしかば。ひそかに松のもとに行きて。狐のなきがら堀り出でゝ。外にうづめかへられしかば。刀自の物のけおしぬぐひたるやうに。こゝちたひらぎにけりとぞ。おのれをさなき耳に聞き覺えをれり。かくて思へば。此松のもとは。たふとき人のおくつき所なりしならむ。其まゝに打ち捨ておかん事もいかゞなり。よくあらためて見て。せんかたあるべし。いざ給へ。おのれも行きて見んとて。共に行き見て。かたへよりはじめのやうにほりかへ

をりぞと思ひて。我もしか思ふなり。三日をも過ぐさばもろともに堀りたひらげん。其こゝろしたくせよと。いひあはせてある程に。三日の日になりぬ。つとめてとなりにすめる某名忘れたりとかやいふ賤の男。年のはじめのことぶきとて來しが。ひそかに聞ゆべき事侍りといへば。れくまりたる所にいざなひて。何事ぞととふに。某ちかくゐよりていと聞えぐるしく。うちつけになめげ(無禮)なることには侍れど。そこには。もし年のくれに人をそこなひて。なきからを人しれずうづみかくされしことは侍らずや。おのれはかく軒をならべて。やからのやうにむつびかはせば。いかならんこともかくし給ふべきにあらず。もしさもれはせばへだてなくかたりきかせ給へといふに。思ひもかけぬ事なれば。しばしあきれゐたるが。わぬしはそゞろごといふ人にあらず。何事を見聞きてかくはいふぞ。ふつ(全)に思ひよらぬ ことなりといふ。れしかへして。いなあらがひ(諍)給ふな。たしかにうづみ給へる所をしり侍りといふ。あるじいよ〳〵いぶかりて。そはいづくぞととへば。荒神松のもとよといふ。あるじさらにしらぬことなり。

いかなればしかいふぞといふ。某いふやう。たのれきのふのつとめて。れき出でゝ草のへだてのあらがきゆひつくろはんとさしのぞきたれば。荒神松のもとの。いつも草れひぬ所。あらたに堀りかへしたりと見えて。つちうでもてり。年の暮には。たれもことたらはぬならひにてあれば。いとうきたるれしあてごとなれど、そこにはあるまじきことながら。心よりほかに。もしこがねもたる人をやそこなひて。人しれず埋めたまひしと思へば。へだてなき中は。うしろやすからず思ひ參らせて。かくは聞ゆるなりといふ。あるじいぶかしきことかな。何事もいはじいざ行きて見むとて、二人して。松のもとにいたり見るに。まことに。あらたにつちをほりかへして。物をうづめしやうにうるほひうでもてり。あるじもれどろきて。弟の夢がたりをもかたりて。いかにまれ。堀り見ばやといふ〳〵。二人してうがつに。四尺ばかり下にいたりいとかたし。つちをかき出だしてみれば。下は炭もてひたうづめにうづめたり。又うがつに。炭ばかり壹尺も堀り出でたらんと思ふ下に。朱にて。一尺一二寸に。七分ばかりの。かたち

ところ紙に。この墓誌の文かきて。（文は別にしるせり）文中にうたがはしき事などしるし出でゝ。おのれが思ふ所もとはまほしき。　一日二日のうちに。又もとひ來なましと。いひおきてかへりぬ。さて高雄よりかへりて。先うち見るに。めづらしくおぼえて。明日はとく詮がもとにとひ行きて。其金牌をも見。又つたへのくはしき事をもとひきかんと。あくるをまつに。つとめて（昧旦）より。人々とひ來ていとまなく。日を暮しぬ。廿九日の夕ぐれいとまを得て。詮をとひて。先金牌の事をとふに。詮くはしくかたりきかするやう。攝津國島上郡白髪（カミ）鄕。（白髪をまかみとよめるよしの考は。別にくはしくしるせり）と云ふは。阿久刀神社の北にあたれり。こゝにあくた川と云ふもあり。　河をわたりて廿町ばかり行けば。古曾部とて。能因法師が住みしあと所なり。そこに光德寺村と云ふ寺ありて、やがて光德寺村といふ。村長田中六右衛門は。いく代もかさねてこゝに住めるものなり。六右衛門が垣内に。いさゝかの岡か山有りて。岡のきはに一本の松おひたり。いつの世に。たがいひそめしともしらず。荒神松とよび來れり。其岡のもと五百坪ばかり野らとなりてあるに松の下二尺四方のみは。昔よりたえて草おひたることなしとぞ。今年正月元日のつとめて。都も鄙もおしなべたるいはひごとゝて。もちひのあつものてうじて。うからやから（親族）つらなりゐてくふに。六右衛門が弟。與兵衛と云ふが。兄にむかへていふは、年のはじめに言いみもしあへで。かゝること聞ゆるは。いかにぞや思うたまへれぞ。さてもだしをるべきならねば聞ゆるなり。おのれをとつ日きのふとふた夜つゞけて。いとまさしき夢見侍り。其夢は。わが家のうしろの岡くづれて荒神松たふれ。家もおしたふされぬと見き。二夜までおなじ夢見しは。必其さとしあることならんといふに。六右衛門は。心ふとき男なりけるが。年頃思ひわたりけるは。此岡のもと五百坪もあるべきを。いたづらにのらやぶ（野藪）となしおかんこと。やく（益）なきことなり。いかで此岡くづしたひらげ。草はらかりはらひて。畑にもうち。苑にもなして。こゝは。りうごう（林檎）のつちにあへる所なれば。りうごうのはやしともなさばや。さらば年ごとにいくそばくのあたひを得ましと思ふ心。たくみかねて有りしかば。弟がかくいふをよき

車羊馬鳥雜
僧下
魚虫鼠黿黽鬼風酉雜
凡此書者。爲愚癡者任意抄也。不可爲證矣。立篇者
源依玉篇於次第。取相似者置隣也。於字數少者集爲
雜部。依類者决也。篇中聚字者私所爲也。印字雖在
人部。。依難求入卩部。失字雖在手部。依難知爲大部
等也。自餘字准可知之。注中多略用片
工字音 乙字訓 丨字也 亻字從 才字於 等也
朱音者正音也。墨聲者和音也。片假名有朱點者。皆
有證據。亦有師說。無點者雜々書中。隨見得註付之
不知所。追々可决之
卷尾云
仁治二年辛丑九月六日。於賀茂菴室交點畢。凡
此書者。以作者自筆。草本書寫之間。文字前後
或重々定有紕繆。尋淸書之證本。追必可交合之
釋子　慈　念生年卅六歲
建長參年八月八日亥刻。於洛陽城鷹司之邊。一
筆書寫之畢。願以此結緣。世々開慧眼。生々得
總持。必證大菩提矣。執筆沙彌顯慶春秋廿三歲

大野廣城云。此類聚義名ハ。おのれ早く元本を
布き寫にしたる本を得て所藏す。後に或人の所
藏せるを借り得て挍するに此本五卷ありて。中
のさま小異あり。委細に挍合して初に附錄一卷
あり。都合十一卷なり。此頃の古寫本全部した
るは世の中に久くなし。尊むべし

名義抄本文臨摹

麥ムギ 䵃禾 麥䴸正 大―フトムキ 小―コムキ一云マムキ ―奴クロムキ
一云ムキノクロミ 蕎一云ハムキ 驕ソ 穬―カラスムキ 廣 䵂―ナテシコ

前の和名抄の處に云ふ如く。朱點をほどこして。
聲をさして記されたり。此書全體のまゝにて世
に出でしこといと〳〵めでたき事にこそ

時代追考

○石川年足朝臣の墓誌

石川年足朝臣の墓誌の金牌ほり出でしは。三月十五
日のことなりけり。おのれ難波に有りしほどなりし
に。難波にて。たれしれるもの　なかりき。廿七日
京にかへりのぼりても。又誰しれるものなかりき。
一月を經て。四月廿七日。高雄山にのぼりし日。瀧
詣がとひ來りしに。たのれわらぬ程なりければ。ふ

○祇園執行日記

祇園のやしろまへ町南側に。執行とてむね〳〵しき家あり。世々につぎ來りて。先祖よりの日記あり。執行日記といひつたへたれど。表題には社家日記とあり。世にひめものにして人に見することなかりしを。京都好事の人たち。とかくいひよりて。月に壹兩度づゝ日をきはめ執行の宅にいたりて。此日記を見つゝ人々抄錄することあり。れのれも速水春曉齋にそゝのかされて行きて見ぬ。こまやかにかきて。百枚ほどつゞきたる六冊あり。皆ほぐのうちにかきたり。貞和應安の卷をはしにいとをかしき事もれはし。頓阿法師この執行がとなりに住みしよしなど見えたりき

○類聚名義抄

東寺の觀智院に類聚名義抄の古鈔本あるよし。はやくより聞きおきたれば。しるすぢをもとめて行き見ぬ。ひめもすくりかへし見て。れろ〳〵うつしとりぬ。菅原是善の撰と聞きおけれど。さにはあらじ。延喜以後の物にてかならず法師の手に出來しものなるべし。佛法僧の三字にて卷のついでなせるにてもしるし。卷首尾卷をいさゝかこゝにしるす

類聚名義抄佛上篇目

人亻彳冫夂 匚匕 走麦一丨十身

佛中

耳女舌口 吅品㗊 目自鼻見曰 日白是 田肉月

佛下本

舟丹骨角貝頁彡髟長 手木林 大才

佛下末

牛牛片爿豸豕 乙几九丸火光元 牧穴 八大火黒

類聚名義抄法上

水氵 言足立音 豆 豈豐 卜 匕止 面齒

法中

石玉王色邑 阝⻏邑 阜 阝呂 士土 心忄 巾帛 糸衣 衤

法下

木扌禾耒香黍米丶宀冖勹穴雨 雲西 門門 囗尸虍 虎處 广

广鹿疒歹歺夕子了斗 亂卓寸

類聚名義抄僧上

艸艹竹力刀 双ノ 羽毛食金

僧中

亼瓜冈皿瓦缶弓㫃方矢斤矛予 戈欠又攴 支文夂殳 殺 皮韋 一

、本には朱點いと多し。釋日本紀にもあり。其外古書共に例ありて。古は言語をつゝしみたること知るべし

中西本臨摹

調度部第十四　征戰具七十三　幡（旛附）云々

（音翻 波太）云々（音流波 太阿之）

れのれ廣城。和名抄古寫本數本傳寫して所藏す。因に其目錄の二三をこゝに擧ぐ。古本和名抄（本文の頭毎に●印施し。又頭毎に一二三の印を施したり）尾張國大須眞福寺所藏古寫本。天文本（天文十五年丙午古寫本。下總國香取郡鏑木村。平山伊右衛門滿晴と云醬油屋所持せり）中西本。南雲家所藏古本。此外契冲。眞淵○（本居及諸大人校正本を集めて校本和名抄を著述して家藏す）

○荒木田麗女著述書目

伊勢山田御師慶德三郎太夫妻麗（レイ）女といへるは。荒木田武遇がむすめなり。物語ぶみをこのみよみて。其すぢのふみどもればくみづからもつくり出でたり

書名	注	巻数
月のゆくへ	三鏡の文體になぞらへて。高倉帝。安德帝二代の事を記す。そのこゝろざし。いや世つぎの今世にうせたるを心見おぎなはんさなるべし	三巻
池の藻くづ	增鏡のつぎを慶長までかきつけたり	七巻
ふじのいはや	遊仙窟をよくうつしかけり	二巻
桂中將		三巻
野中清水		二巻
奈良志波		五巻
しの竹		八巻
安達原		三巻
五葉		五巻
常陸帶		三巻
桐の葉		六巻
常葉		七巻
奈良の葉		十六巻

此ほかにも猶有りしとぞ。これは山田人杉浦光基がしたしき友のもとにもちつたへしかぎりなり。月のゆくへ。池のもくづ。ふじのいはやの三部は。れのれもうつしとりぬ。此れうないと思ひあがれる本性にて。人のいさめにしたがふことをなさず。本居氏宇治氏などによろづとひ聞くことをなさゞりしかば。をしむべし。かける物。てにをはとゝのはぬ事ればかりけり。其友とするは多くはからまなびのはかせたちのみにて。龍公美野公臺江北海などゝしたしくまじはられしとなり

之靈永垂。
鏡照。謹跋一語後證
貞享元年甲子夏四月上旬
島原城主從四位下主殿頭藤原忠房

○和名抄古抄本

伊勢山田御師。中西清太夫家藏。和名抄十册奥書云
自公意僧正御房傳領
三井沙門任契

大野廣城曰。伊勢山田外宮神人中西氏所藏。和名類聚抄は。二十卷の古寫本なり。第八の卷の奥に「自公意僧正御房傳領三井沙門任契」（伴信友云。文安三年田樂能記曰。三井寺住心院の實意僧正草し。執印公意執筆となり。此公意後は住心院をつきて僧正となりたるなるべし。此僧同人歟）とあり。是を印本に比校するに。異同すくなからず。其中重複して全くは十一卷あるを。二十卷の目次を備へて全部の如くせり。又音樂の部を音樂の具として調度の下の部へ收めたり。又形體部。術藝部。職官部及國郡部の畿内の國の部より。鄕名の長門までなくて。紀伊の國の鄕名より對馬に至るまでわり。件の如く重複多く本文甚異なる處あり。又國郡の部は。まさしく欠けたる事は明なるをも云はずして。目次を備へて二十卷餘部の如くにせり。是は往昔欠本共を取集めて。私にしか。二十卷に作り備へ。門部をも私に作り備へたるものなり。さて總て二十卷二百五十門となしたれども。三四の門は重複せり。（此門部の眞序にもあはず）卷次門部の立てざまは。印本の總目錄において加筆して別てり。さて此中西本鈴屋翁の校せられし本と大方同じさまに見ゆれど。又甚異なる處あり。卷次門部も又異なる處あり。されど其舊は同本なるべくれもはるゝさまなり。中西本物名の漢字。又和名の傍に朱點を施して聲をさしたる卷あり。（今朱色を換へて委曲に寫せり）此を重複の卷の中の朱點に對校するに差ふことなし。さて案ずるに。倭名抄原本如此朱點を施して聲をさして記されたるを。世の中の本は多く點を省きて寫し傳へたるを。たま〳〵此本に遺れる事いと〳〵めでたし。類聚名義抄。字鏡集。伊呂波字類抄などにも指聲の點あり。東宮切韻唐玉篇の字訓にも點ありしこと。字鏡集跋に見え。名義抄にも其點を重くせしこと篇目の卷に見えたり。又今の印本の日本紀にも點の遺れるあり。永和の古

右三十六人家集。飛鳥井一位雅章卿眞蹟之本。息左衛門督雅豐卿借請之。而全部染愚筆於燈下。連々今獨校于茲。外題兵部卿幸仁親王眞翰也。尤依爲祕本。不可出閫外者乎

元祿五壬申歲林鐘中澣　右大臣

〇豐崎文庫尙書

伊勢山田豐崎文庫に。古文尙書十三卷あり。貞享元年。嶋原侯奉納なり。尤めでたきものなり。本書奥云

仁平元年六月廿五日申刻。以少納言入道摺本之釋文見合了。總州之御時。以古本幷唐本釋文所被付音義也。然而依有不審事。重所校合古本勘物。雖有委細事付。今委之摺本合點畢。不載摺本勘物付輪

應保二年四月廿六日見合或古本了。仲書江家之繼本也。披合之處。其可取之事有數。仍一部所挍合也

建保六年七月九日授仲光了在御判

建長第八曆晩春十一日書點了。至此書者以摺本書寫之。以古本挍點之。凡虞夏商周書者。壁中舊本隸古之遺字也。雖然改古字爲今字。唐本又如此。當家尤可用之其上　高倉上皇御讀之本又如此歟。當家尤可用之哉。但古字之體。一向不可失之。仍本用今字。傍附古字者也。一部十三卷五十八个篇。雖爲一字半字。不借地人之手。偏至墨點朱點。皆用自身之功。子々孫々。深韞匱內號。不出閫外也。　淸　厚

正和第三曆孟夏初五日。以家之祕說。授申生德才子。以十一代之學業。終十三卷之詁訓。當時希有者也。　明經得業生淸原長隆

古文尙書合部十三卷。花園帝正和年中。明經得業生淸原長隆。以家之秘說。所加訓點也。手書曰。以十一代之學業。終十三卷之詁訓。當時希有者也。且朱書所謂少納言入道者。藤原信西也。所謂總州者。助敎直講定康乎。淸原世々傳授祕本。明々昭々。余偶得之珍藏有年。然今以爲希代之物。奉納勢州。

大神宮文庫。而貽萬世洪寶。表力寸微忱也。唯冀神

七八カラハタチニアマテ。廿四五ノ上ラウ。ボウ〳〵マヒニウスゲジヤウ。ハサキトッテカネグロ。タチニタチテマシマス。我等ガヤウナルアッナシ。ワタモイラヌススアウ。セノヒボニキナイテ。コンノ十德ウヘニツットキツウテ。スギナリノカサヲバフカ〳〵トキツウテ。フケドフカネド尺八。コシニツイサシ。上﨟サヱノ御ツバヲヨシ〳〵トトホタ。ソノ時ニ御上﨟タモトヲジットトドメテ御トマリアレヤ殿トテ。ヱクボハシホニアマッタ。料足ノ一文。カタワレモモタネド。ラトコノキリナレバ。マヅ御名ヲトウタ。コレナル上﨟ノナラバナニト申候。ハッハナト申候。ハルノハジメニヲモシロヤ。ハッハナ。コレナル御上﨟ノ。ナヲバナニト申候。アタラシ殿ト申候。アタラシ殿ト聞クヨリ。イマイデト思ッテ。ソトヨテミタレバ御名ハアタラシ御カホ。フルウ御リアル。サモアレ。イカホドノ御出ヅ。レイシキサブラウ。レイシキノ丁トハ。一スヂノ御事カ。思ヒモヨラヌ丁ナリ。ワレサモサブラハズバ。ホウラクノ御連歌。〳〵トハ。五十文ノ御事カ。オモヒモヨラヌ事カヤ。ワレサモ候ハズバ伊勢ヘノ御マイリ。〳〵トハ。ミワタリノ御事カヤ。オモヒモヨラヌ事ナリ。ソレサモ候ハズバ大名ノ御カド。〳〵トハ。五文ノ事カヤ。オモヒモヨラヌ事ナリ。ソレサモ候ハズバ。御寺サマノ御カド。〳〵トハ。三文ノ事カヤ。時々ノアキナヒニ。アレカルヲエラシメ。〳〵

○古抄本三十六人集

西本願寺は。所藏の三十六人集古抄本あり。奥書云

此三十六人家集者。借本願寺光常家珍之本。不違一字。今書寫挍合訖。件集昔日雖爲官本。有子細下賜本願寺。云云。誠世間無雙之正本也。新院御在位之時。被召上此本。被遂書寫之功之處。三十六人集之內。三冊不足之間。抑人丸集者。照高院道晃法親王 業平集者。日野前大納言弘資卿 小野集。烏丸前大納言資慶卿 今書續之給。仍申下。件官本補其缺。終全部之功者也。深秘函底不可出家外。穴賢云云

寛文第十曆仲春

〇萬葉五卷抄

三品氏（豊之進。西洞院丸太町下る所に住す）云。貫之五卷抄。今南都西大寺にあり。外題には萬葉抄とあり。建仁年中鎌倉より寫しとれるよしのれく書あり。合卷一冊にてやまととぢなり。萬葉十八十九廿の歌に點つけたるのみなりとぞ。

按ずるに貫之五卷抄の文。顯昭袖中抄におほく引き用ひたり。同物にや

〇蓮如上人子守歌

京都丸太町通堀川西へ入る。順興寺と云ふ淨土眞宗の末寺あり。此寺に蓮如上人のつくり給へりとて。みづからの筆して。書きのこし給ひし子守歌と云ふものあり。文調いと古雅にして。いにしへの京地のさま思ひやらるゝなり。其文

ヤショウメ〳〵。京ノ町ニヤショウメ。ウッツルモノヲミショウメ。坊門町ニウル物。クサヰカモチハンロクテ。一クチナレドテウホウ。在京人ノメノドク。九條ノ町マデ。アモトイウテトホルハ。スヤ殿ノ一カヤ。ミセヘダイテヲキウリ。イタダイテヨミウリ。山城ノ國カラモテデテウル物。キウリホソネシロヴリナスビヒシヤクカモウリ。アゴタウリニホタウリ。カラウリニヒメウリ。サコソアヂノアルラメ。ナウラウ。ニテウラウ大コンウラウ。カハホ子カブラウラウ。フキウラウ。ヲアヘメセトイフコヱ。シホナクヅキコエタ。ドッコロウランヤマノイモニサトイモ。春ノ野ニアルナル。カガミイヅルサワラビ。ユキノヒ丁ニヲセタル。ツク〴〵シウラウヨ。一モジスギナクヽダチ。アサツキモウラウヨ。六角町ニウル物。〳〵。コヒフナ。タヒトスヾキトウグヒカレヒ。ナマヅトイセゴヒト。ナヨシト。ニシヤサヾエ。ボラノコ。アハビカツホ。スルメト。正月ニイハフハ。カキヤタハラアイキヤウ。ヒシヤメハモチウリ。サハラノコハキリウリ。タコノテモヤツ。イカノテモヤツ。ホシダコモウラウヨ。坊門町ニウルモノ。キンテウ山鳥ヤマシギ田シギト。ウヅラトクヾヒト。ヒシクヒ。ガントカモトタカベト。アヂハスヾメテウナイ。シロコトリモウラウヨ。地獄ガ辻カラ。カセガツヂヲミワタシ。ムロ町ヲトホレバ。ウラウウルマイハ。上﨟サマノ御一カ。十

第二。貴賤之飯食法式。農民者以春雜穀四合米三合爲一日之食。爲農業則增米一合雜穀二合。百工亦然。其後行基改百工之食減米一合。爲其農業同前也。可食下鳥下魚也。器澁地墨塗赤紋。三器無漆之折敷等可用之也。無所領之四民。二十五菜之外全不可食。亦可食中魚中鳥。亦秋以來六合爲一日之食。勤其業之日以來二合中食也。冬以四合爲一日之食。勤業日則可食中食也。到秋冬中春可飲清酒也。自中春中之五日不飲清酒。無所領四民者皆然矣。亦農民不到四十歲不乘馬。若有病者赦之。但商工者赦之不赦歟。亦曰有所領之民可除雜穀。若用之者可謂恐天恩也。三十七年菜之外不用之。不可食大鳥魚。老後可飲清酒。若用濁者是亦慈愍端也。民百人之司者同官人也。三紋四器。一尺二寸之折敷。內赤塗外黑漆塗可謂之。食時辰申之二刻也。以來一升爲十日之食也。國司者以六斗準一日之食。六器黄紋　臺可用之。臺高六國司之官位不同也。右所謂下魚下鳥者。以來二升買魚鳥一也。以一斗二升買魚鳥一。謂中魚鳥也。以二斗三升買魚鳥一。謂大魚鳥也

第三。定衣服之法式

先可用麻布。色者薄青厚青。或五所紋可用之。是則農民之上服也。衣長膝下五寸。袖長臂下三寸也。絹全不可用之。世工又同前也。但衣長膝下七八寸。商同前。年老後赦紬類。亦曰僧者木食草衣也。絹類全不可用。依佛戒也。士者面絹裏布也。五色從心用之。上衣紬布薄絹。行基赦之。綾其外異國織物等不可用之。民百人司者可用絹裏。若賜貴人衣服者可著之。太刀無用金作。鞍鐙等。蒔紋金覆輪直垂紫威鎧者。國司官人大將之外。全不可用之也

第四。領地之事。其家之所領永代賜之。依家々多少不同也。官位職之所領者。以應其器人而被任其官。其位之時。賜其職分之領地也。其人死後不傳子孫。餘略之。上古法式大概如此

右一卷藥園院有之處寫之了

永仁四丙申年五月廿五日

從五位下左衛門尉孝久

し。二の卷四の卷八の卷かけたり

○常明寺兼好書

伊勢山田に。常明寺といふ寺あり。本堂の天井に兼好法師の落書といふあり

出生死海入涅槃
惠念之意趣大樂
大財常能堅固

吉田奥彈山下野僧
一七日箇日參籠

字の大きさ五寸四方もあるべし。吉田野僧とあるより。兼好ならんといひつたへしにや。いづれ四五百年前のものとみゆ

○行基式目

若狹小濱人。石田千穎がもとより。わくりおこせたる。行基式目といふもの一卷。なかにはいかにぞやおぼゆる所あり。まづ六十餘州といふこと。行基の頃にあるべきことならず。又文中に詔行基といふ事みゆれば。行基の作ならぬ事はしるし。三十六町を一里と定むるも。ふるくよりのことにはあらず。されどおくに永仁四年とみえたるは。其頃已前の物にはあるべし。ヲコト點をつけたるも。ふるくおぼゆ。從五位下左衛門尉孝久と云ふ人。いかなるにか。たしかにしりがたし。猶考へ得ることもありなんや。

其文

行基式目

抑本朝六十餘州之男女。凡五百萬人也。對異朝謂二百億也。凡本朝毎年所出之米穀二百意(億石ィ)也。以是養彼生命。或家富而飽食。終日好嬌奢。或家貧而堪飢寒之患矣。不如立法式而補窮民矣。先以田畠所出之五穀二十分一爲貢。天子取以領。賜百官莊官下司公大等。代々如此。于茲　人王四十五代之帝到　聖武天皇御宇。詔行基而令定田畠之廣狹。以六尺四方爲一歩。以三百六十歩爲一段。凡上田出生之米穀。以十二合之升三石六斗也。中下之土地者依國郡不同。以繁多故不書之亦曰。國中有郡有鄕有莊。凡以三百六十歩爲段。則廣六間長六十間。世以十段爲一町。町者四方六十間也。亦以六町四方爲一里。道路亦以長六町爲異國之一里。本朝亦准田畠之數。以六々三十六町。爲本朝道路之一里也

互用。詞和訓義相從矣。先余所註爲仙覺所誤初句四字。和訓用由布豊本。和義則夕月。也之字。仙覺用和義。雖然第二句。仙覺訓義猶爲乃則能御所仰混而失理。況余新案謫字得正義乎。因先用音更今

右契冲阿闍梨眞蹟　山川正宣所藏

○縣居翁贈辨子文

縣居翁に。古言の心詞まなべる辨子といふれもとは。田安殿につかへし女房なりけり。辨の字を和名抄に。ともひとよめるによりて。ともひ子ともよばれたりき。翁のもとにかよひて。古今集の講説きゝて。うちぎきものせられしが。今板にゑりて世に傳はれる古今集打聽なりけり。其打聽書きをへられしより。翁のほめ聞えられて。おく書にもとやれもはれけん。一ひらの紙に書きて贈られたるが。いかなるにか。津の國池田人山川正宣がもとにつたへもたりけり。紙のたけ壹尺貳寸。横壹尺五寸五分ありき。正宣摸しておくりれこせぬ。今板にゑれるには。かゝるものゝありしをばしらざりければ。たゞ翁のもとより。ともひ子のもとへれくられし消息をゑりそへたるのみなり。此おくがき必ゑりそへまほしきことなりかし。其れくがきのうつし

ともひのれもと。いかで古今歌集のあらん心を。つばらに得てしがもと。その君へまをせるに。よきことぞ。やがてもうでよとれほせらるゝまゝに。霜月のはじめつがた。里にまかりぬ。しかあれば。朝氣の霜をふみ。ゆふべのあらしををかしつゝ。ひと日もおちず。あか縣居をとはるめり。其君をもほめまゐり。此子もめづらかに。ことにいそしくあるかなとればゐて。よろづの事もれきて。ひるはしみら(終日)にふりぬることをいひ。立ちかへりては。よるはすがら(終夜)もかゞなへしるしなどせしものは。いとはや後のしはすのもち(望)ばかりになんをはりにし。さてよみける。

しらゆきに。あしもぬらして。かよひにし。あとはたえせじ。ふるの中道。

○眞字平家物語

難波人井辻向監がもたる。眞字平家物語といふものあり。全部十二卷。別に灌頂卷一卷そへたり。奧書云。文安四年卯月五日とあり。實にそのほどの書とみゆ。伊勢物語眞字本などの體にはあらずして。東鑑の體裁に似たり。卷ごとに小序あり。一章ごとにまた小序あり。いとめづらしきものなり。をしむべ

遊京漫錄卷之下

清水濱臣

旅路のうちぎゝ（自文政三年二月至九月記見明之雜話了）

○大和宇智川佛像

大和國宇智郡宇智川は。いとあさき小川にて。もすそを。いさゝかかゝげてわたるべきほどなり。五條の里より。わづかに拾町ばかりなり。此の水上二町ばかり。兩岸そばだてる岩に。像佛一軀をゑりつけたり。二尺三四寸もあるべし。かたへにゑりつけたるは

大般涅槃經

諸行无常。是生滅法。是生滅滅已。寂滅爲樂。

如是偈句。皆是過去來。現世諸佛所說開空法道。

如來證涅槃永斷生死。若有至心聽□□□常得无量樂。若有書寫讀誦。爲他能說一經。其身於刧後七刧不墮惡道

寶龜九年十月四日工少　知識

○温泉寺法華經

有馬の温泉寺に。古寫の經卷二種あり。一は法華經八軸。般若心經。並阿彌陀經一軸。觀普賢經一軸。都合十軸也。心經裏書云。志者爲入道心。西往生極樂也。願主君父母妻子。並一見一禮之輩。同生一佛淨土矣　長寬元年六月廿三日壬午。つたへいふ平相國奉納なりと

又一つは是も十軸にて。悲心房尊惠上人。地樂より將來すといひつたへたり。悲心房は。平家物語に見えたる人なり。さはりの如き薄がねの箱に。二重に入れたり。むかしこの箱のまゝにて。むしやけにやけたりとて。今金襴の袋に入れて。一軸ごとに口をくゝりてあり。軸のすゐさうかなものなどは。こがれたるまゝにて。別に一つゝみになしてあり。箱いとめでたきものと見ゆ

○萬葉集莫囂圓隣解

萬葉最秘密和謌灌頂新訣

莫囂二字音和義曲也　圓今案本決當圖。隣二字音和義釣也。四字相合則曲。釣則初月名也。何以知然乎。文選第八。鮑明遠翫月城西門廨中五言詩云。始出西南樓纖々。如玉釣未映東北。娟々似蛾眉。蔽球門玉鉤隔瑣窓。云々。新月艷曲似鈎。取喩暗合。之義和　大相二字以和訓。爲和音於保比○也以爲覆。々有兩義。取體則兩蓋之容也。取用則唯言語蔽也。如云。杖々使々等體用

以上廿八人は源詮につきて物學ぶ人々なり

遊京漫錄卷之上　終

ゆきかひ路なる別れなりせば　正脩
わかれをゝしと
たび衣たつらん程をしらねども
別をゝしとまづしたひぬる　學玄
わかれぢの
別路の行へはさぞなむさしのゝ
そらに涼しく月を見るらし　淵龍
わかれてのちは
かへらんと今聞くだにも戀しきに
別れてのちはいかがあるらむ　唯敬
空にこそなれ
君が行れなじ旅路とあこがれて
こゝろもうはの空とこそなれ　俊章
ほどのはるけさ
又いつと逢ひみん程のはるけさを
思へばかなしあづまぢのそら　ふち子
夢にこそ見め
とゞめてもとまらぬ月のかけをしみ
思ふよな〳〵夢にこそ見め　たを子
たちての〻ちは
花の香を留めもあへず夏ごろも
たちての後はくやしかるべし　鶴子
たびねをやせん
妹を思ひ伊豆のみやまの郭公
きゝつゝ君はたびねをせむ　千枝子
かよふこゝろの
あかずして立ち別るとも千里まで
かよふ心のなどかたくれん　なほ子
人をゝしむとも
東路にわかるゝ人をゝしむとて
あふ坂山のせきとゞめまし　美子
たほくのやま
繪にだにもうつしかねたる足引の
たほくの山を越えて行くらん　やま子
いつとしりてか
名に高きふじの煙のたゝん日を
いつとしりてかいかに留めん　みつ尾
ゆきてはみねど
東路に行きてはみねど君いなば
われこそふじのねをもなくらめ　同

逢ふ事は年月へんとれもふより
こゝろにしみて別れかなしも　観主

君がわかれを
言の葉をかはす日數も夏ごろも
ひとへにをしき君がわかれを　全正

とめんとめじ
こゝろみよとめんとめじは東路に
君がこゑ行く道のせきもり　成薫

わかぬこゝろを
よしやきみ東に遠くかへるとも
わかぬこゝろを隔てざらなん　宗壽

月日かぞへて
故里に月日かぞへて待ちぬとも
しばしかたらへ山ほとゝぎす　泰則

へだつとも
東路の雲の五百重にへだつとも
心はこゝにかよひたらなむ　長韶

道に出でたつ
ほとゝぎす啼きてとゞめよ故郷の
道に出でたちかへる君をば　延年

とほくゆく
横雲のわかれて遠く行く人の
なごりをゝしと鳴く郭公　通侚

思ひやる
別路に身をこそわけね思ひやる
心ばかりはれくれざりけり　元數

とゞめてとほく
今はとてかへらん君が別をば
とゞめて遠くなるぞこひしき　信行

別るれば
わかるればあふことかたき物からに
とゞめんよしをひた思ふやは　正遠

何かわかれの
よしやゆけ何かわかれの惜しからん
又もあふみと思ひかへせば　敬

をしみつゝ
ほとゝぎす聲のかぎりを惜しみつゝ
かたらひとめよ君が別を　惟明

別なりせが
かくばかり袖はならさじかり初の

なみならず語らひなれし君にけふ
あかずわかるゝそでの露けさ　段
づちさけて照日さかりを心せよ
すゞしき風はよしふきぬとも　同
言の葉の道のまよひを思ふにも
したはまほしき君があとかな　直孝
武藏野のゆかりもとめてむつびにし
こゝろなわせそひらさきの色　好謙
木曾路をかへり給ふと聞きて
君がへんきその山路も言のはの
はなの都の手ぶりわふがん　好謙
日をさふる木陰をおほみ旅衣
きそおは夏もすゞしかるらむ　想菴
むさし野のこき紫を見るごとに
おもへ都のなつやまのいろ　とみ子
あひみてし程はみじかくたもはねて
わかるゝけふぞ人はこひしき　益親
老らくの身ぞさだめなき東路の
あふさか山の名はたのめども　水月
逢坂までれくり來て

しら雲の八重山遠くわかるとも
かけてまたばや雁の玉つさ　茂廣
いさらゐのあかぬはむすぶ清水かき　里村玄碩
送淸水大人東歸　僧間中
荏土曾遊似葉分。頻年老去此離群。芳宜織錦皆空沒。
珍重斯文獨屬君。
淸水君の江門にかへらせ給ふを。粟田のほとりまでれくりきこえて
年をへて又もこえませ逢坂の
山松がえのいろかへずして　正輔
心してゆかせわがせこ木曾路なる
うすひのあらし和田の朝ぎり　同
混沌菴送別歌
きみと我
年月をあまたへだてゝ君とわれ
又あひ見ることも命なりけり　詮
こゝろもともに
あすよりは心もともに影となり
身はこゝながらそひて行かまし　益親
心にしみて

年月はながれゆくとも鴨川の
たゆることなくれとづれよ君　同

送別歌

旅衣きそのみさかもつゝみなく
手向よくしてとくこえね君　京都 誠之

留まらぬ君とはしれどしかすがに
はなちがたきは袂なりけり　眞堅

旅衣夏の日かずをかさねゆく
たもとひかへよ木曾の山かぜ　俊恕

わかれなば君がみやびの言の葉を
古ことまなぶしをりとをせん　同

音にのみ聞きてしのばんわかでしも
かもの川なみたちかへりなば　助凭

かくばかりをしと思へど言の葉は
こゝろおよばぬ君がわかれ路　信賢

かつゆきてかつかへり來ん君なれば
いつと契らんことの葉もなし　同

うちひさす都の友をわすれずば
又も來ませよ花のさくころ　剛寛

賀茂内陣の葵にそへて

神山の皇御神のみあらかの
をすにかけたる二葉草ぞこは　顯金

ほとゝぎすなどいそぐらん橘は
みはしのもとにいまだにほへり　正風

東路を行きかふ鳥し後もあらば
わはことゝはん雁ならずとも　比禮雄

なみならず誰もしのぶをしのばずの
池のみぎはにとくかへるらん　長廣

こまなべて君がかへれどむさし鐙
かけてまた來ん春をこそまて　茂廣

あふぎにそへて

わかるとてれくるあふぎの風をこそ
君にたぐへしこゝろとをしれ　同

御教子のつらに思ひれきてたまはらんことをねぎまつりて

奥山の岩がぎ清水よゝかけて
たえぬ流をくまんとぞ思ふ　同

くすりにそへて

旅衣わけん夏野のくさつゝみ
なやまひせそと贈るくすりぞ　碩菴

ひわたりし書のをぢ〳〵。とひきゝまゐらせ。あるは花にともなひて。みやびのむしろにともなはれ。ありしよりけにしたしくまじらひ參らせて。いとたのもしく思ひ聞え侍るを。かねて心ざし給へる都はさらなり。ふりにし奈良の都のあとをもとひ。よし野山の花をわけ。和歌の浦にさをさし。難波堀江に船をうかべなどし給ふ折ごとに。世に名だかうおはすれば。雲の上人をはじめ。しるしらぬみやび雄たちこぞりてこゝにまねぎ。かしこにいざなひ參らすれば。何くれといとなくれはするからに。心たらひてかたらふをりもなかりけり。さる水無月なかばかへりなんとて

流れても淵瀨かはるな立ちかへり
　またもわたらむ賀茂の川なみ

とみづから盃に書きてれくり給へるに。いとゞあかず思ひたまへれど。家人たちとゝもに物まなぶ人どもゝ。待酒たゝへていはひ待ちおはすらん物をと。えとゞめもやらで。又も渡らんとなぐさめおき給へることの葉をたのみて。馬のはなむけによみてまゐらする歌

わかれなばかもの川浪よりあひて
　又かたらはんときをまたまし

ふじの根の雪だにきゆるみな月に
　かへらん君が旅をしぞれもふ

花さかばみやこを思へ月見つゝ
　我もしのばんしのばずのいけ

清水大人の。みやこの旅居をわかれたち給ふとき。人々に「ながれても淵瀨かはるな立ちかへり又もわたらむかもの川浪」とのたまふ御かへし

賀茂川のきよき瀨のとを忘れずば
　又もあふひのたのまれもせん　敏夏

おなじく

賀茂河を又わたらんと聞くものゝ
　れぼつかなみにぬるゝ袖かな　碩庵

たがへずも又わたりませ賀茂川の
　月は淵瀨のかげあさくとも　菅臣

おなじく

忘るなよ忘れてまたん言の葉に
　かけてかへりし賀茂の川浪　益親

讃岐人。中村春野は。はやくより文かよはして。こゝによろづの事とひきくぬしなり。難波の旅居に。ゆくりなくあいたるに。かくいへる

神のごときこゑし君を思ひきや
　雲ゐへだてんあふぎみんとは

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　　　濱臣

伊勢にありけるほど。水月がもとより。消息のはしに

あひみてはあかぬ心を鳥がなく
　あづまの空にかへるきみかな

かへし

今よりは雲のうはがきとだえなく
　雁のつばさにことはかよはせ

家路へと急ぐ物からともすれば　　　　　　　濱臣
　みやこの空ぞかへり見らるゝ

同

今よりは雁の行かひたゆまなく
　おとづれなんよ千代のはるあき

箱根までかへり來けるに。信臣柏女などむかへにとて。湯あみがてら來たりければ。塔の澤に日数かさねしほど。江戸より消息して　　　　　　光房

こよなき都の御長居は。さらにきこえさせんかたなくなん。からうじてあい見奉るべき日數のほどなきにも。猶ちかくてときこゝちせらるゝ御中やどりこそ

今さらにこふぞすべなき百重山
　へだゝりしほどはさてもありしを

かき撫でゝ二子の山は見ますとも
　箱根のれくに長居するきみ

蓮阿よりも

立ち出でし君をまつまに春すぎて
　かすみがせきに秋風ぞふく

送別歌　　　　　　　　　　　　　　　　大堀正輔

殿につかへて。大城のもとに參りけるごとに。まづ御もとをとぶらひて。いにしへ今のことらかたらひつゝうらなくむつばひつることを。今かぞふれば十とせまりさきつ方の事になんありける。つかへをしぞきつる後は。ふりはへてもえとぶらひ侍らで。雲井のをちに戀ひわたりしを。きさらぎ(二月)の末つかたのぼりれはしてより。かたみにとひかはして。朝夕になれむつび參らせしかば。年頃いぶかしく思

君にまでとは思ひかけきや　濱臣

都にて。ゆくりなく。清水大人にまみえ奉りて。ほどもあらず東にかへらんとし給ふに。わかれ聞ゆとて

あふ坂の名こそたのまめ旅ころも
ひがしに西にたちわかれては　乘承

かへし　程もなく別るゝけふか都べに
あふさきるさの旅ゐをばして　濱臣

清水大人。都にのぼり給ひけるに。よみて奉る

吾妻よりみやこをかけてほとゝぎす
聲もとゞろに鳴きとよみつゝ　平康

かへし　みやこべは聞く人おほき郭公
もらす初音ぞやさしかりける　濱臣

あし引の山ほとゝぎす見だに得す
聲だにきかで夏すぐらしも　川村兼輔

かへし　契りあらばほとゝきすぎす逢も見ん
よしや今年の夏ならずとも　濱臣

❀　❀　❀

❀　❀　❀

あふ坂の名はむなしからめや　濱臣

かへし　逢坂の關の眞清水心あらば
こゑゆく君が影をとゞめよ　信賢

はじめてとひ來たるをり

心ざしふかくすみたり眞清水の
ながれをくまぬ人はあらじな　直道

朝がほにつけて

白露におきおくれたるおこたりを
いさめがほなる朝がほのはな　貫則

かへし　朝貌の朝いゝさむる花をこそ
めざましぐさと我もみなさめ　濱臣

大津にて久米良輔が

思ひうしふじの高嶺も鳰のうみの
つきみるときは忘れはつべし

かへし　鳰の海の月に心をいるゝ夜は
おもひも出でずふる郷のそら　濱臣

伊勢人寛信が

御心を清きしみづにきみにわが
ながれて絶えずあふよしもがな

かへし　❀　❀　❀　❀　❀　濱臣

わが高さごのまつなわすれそ
かへし　高砂のまつらん君と思ひつゝ
なほもみやこの花にとまりぬ　濱臣
消息のはしに
武藏野ににほひみちぬる言の葉の
はなを都にたをるうれしさ　恒香
かへし　武藏野の野末の小萩色なきを
みやこに誰かはなと見るらん　濱臣
六月十七日の夜。清水の成就院に月をみて
心さへ身さへすゞしな月かげの
きよ水寺にたびねする夜は
かへし　名にも似ぬ我古寺の涼しさは
君がこゝろのすめるなりけり　成就院藏海
はじめてとぶらひ來て
ことさらにめづらしきかな郭公
人づてならぬけふのひとゆめ　荷田信美
かへし　いやしくぞ初音もらせる時鳥
人づてにのみきかせましものを
年ごとに。忍びかけける。神祭。うれしくけうに。
あふひなりけりと。濱臣ぬしのよまれたるに。

あづまよりひかれて來しは神も又
かけつるけふのあふひならまし　直兄
かへし　※　※　※
※　※　濱臣
うつき末つかた。濱臣ぬしの。はじめてとぶらは
れければ
ちはやぶるわが神山のほとゝぎす
あづまのつとに一こゑはなけ　直兄
かへし　東人のつとにはもらせ郭公
しめのうちなる初音なりとも　濱臣
はじめてとひ來たれるをり
みや人のやどの清水のきよき名は
ながれてよもの海にたよべり　達阿
かへし　※　※　※
※　※　濱臣
賀茂祭の日。雲錦亭にて。ゆくりなく。濱臣大人
にまみえ奉りて
思ひきやかものみあれの葵くさ
かけても君にあはんものとは　乘承
かへし　みあれにはけふぞ初めてあふひ草

奈良の薬師につたへたりし。唐簾の。いともふるきを得てよめる

もろこしのみぬ花鳥のあやすだれ
　あやしや千世の物をわが得し　濱臣

清水大人の。都にて得給ひぬとて。花鳥のかたいとをかしく物したる。古きすだれを見せ給ひければ

花鳥ののこるにほひのあやすだれ
　かけてしのびし昔をぞみる　茂雄

袖子にも。すだれの歌よみてよといへれど。えよみ出でざりければ

幾歳をふるきすだれとしめて
　言のはもだにかけぬなるらん　濱臣

かくいひければやがて。よみて出だしけり

花鳥のあかぬいろねを萬世に
　かけて忍ばんをすとこそみれ　袖子

泊洦舎の大人の得給へる。古代の簾をたゝへてよめる。長歌みじか歌

言の葉の。名にたふ宮ゐ。ふる言は。ふみにこそみれ。さきくさの。みつはよつはの。みあらか(宮殿)も。あらたにたえぬ。代々を經て。しのぶ昔を。めのまへに。見るてふことは。かた原の。かたかる(難)ものを。これぞこの。寧樂の都に。天の下。しろしめし(治)けん。すめらぎ(天皇)の。大御代のものと。うつし身の。うつゝの世にし。つたはれる。このあやすだれ。あやしく〳〵。たがつくりゑぞ。まほ(正)にしも。みえぬものから。花のいろ。鳥のつばさも。ほの〴〵と。みえわかれつゝ。あやどれる。いとのにほひも。中今の。物とやは見む。かみつ代を。まさ(確)めに見する。此のあやすだれ。

さゝなみのやどの寳と後の世を
　かけてつたへよこのあや簾　伴鹿

都にありけるほど。若狹小濱人石田千頴がもとより

ほとゝぎす都に名のる人づてを
　こゝに聞きてもうれしかりけり

かへし　ほとゝぎす都の空のはつ聲は
　きかるもうれし鳴くもやさしゝ　濱臣

はりま赤穂人長沼祐義より

よしの山よしや花にはそみぬとも

むら雨のふる枝の萩のぬれ色に
　ながれにあらふ錦かと見ゆ　濱臣

送別歌

別れては又いつかはと思ふにも
　いとゞ名殘のをしきけふ哉　伊勢松坂春庭

すゞめの森の名よそに行く君を
　下樋小川のなほしたふかな　安守

見てかへれ清きなぎさのよはの月
　墨田河原のあきはありとも　正興

あかずしてさやけき月に別るとも
　霞める春はめぐりあひみむ　同

よる浪はたち別るともいせの海に
　又のみるめを忘れざらなん　高匡

大淀のまつによりこしうれしさも
　なか〳〵つらくかへる浦浪　守良

はつ花のまちゐし君を秋かせの
　たちわかれぬるわが心はも　攝津池田山川正宣

伊豆國熊坂村。竹村茂雄がもとをとひて。ふつか三日ありて。わかれかへる時

故郷にまつらんこゝろ苦しさに
　別もゑひてとゞめざりけり　茂雄

袖子がもとをとひて。年頃の物がたりにいたく夜ふかしてかへりしつとめて。かくいひおこせり。よべはかりそめなる御たいめにて。のこる言の葉のみおほくなん。

あひみしはたゞ夢とのみ思ひねに
　あやしやこゝに殘る言の葉　袖子

見るまなくわかるゝ君はなか〳〵に
　もの思へとのしわざなるらむ　同

をしむともをしともいはじ君は又
　いづちに急ぐけさの別れぞ　同

行きてみぬ吉野の春をさながらに
　君が言葉のはなに見るかな　同

よし野にて花ゆゑにまよはゞうれしとよみ給へるを思ひて

かへりこし君ぞうれしき花ゆゑに
　まよはば仇の名をやたてなん　同

箱根の山中といふ所までおくり來て

伊豆の海のいつあひみんと思ふにぞ
　けふはこねぢの別れかなしも　稻麿

筆　　　　貞　　董　正五位下度會檜垣右兵衛
同　　　　元　　善　正六位上橘山田大路主殿
筆　　　　吉　　棟　正六位上度會小倉左京
笛　　　　未　　慶　正六位上度會吉澤主水
筆　　　　元　　秋　正六位上度會山田大路要人

伊勢松坂小津守良宅當坐　　八月五日

庭萩
咲きしより朝夕にはのれもなれて
　みれどもあかぬ露のたま萩　　正興

萩露
たわみても露おもしろき花の枝は
　風ともうけず宮ぎのゝはぎ　　守良

折萩
紫のながめのみかはをる袖の
　にほひもふかき秋はぎの花　　啓廊

朝萩
あかざりし夕暮よりも朝つゆの
　れきいでゝ見る庭の秋はぎ　　友能

夕萩
わけよ猶ゆふべの露のこはぎ原
　色暮れぬまの錦きそへて　　安守

野外萩
來てみれば今の名のみの武藏野に
　殘るにしきの秋はぎのはな　　元義

行路萩
秋萩の盛をわくるかよひぢは
　花ずりごろもきぬ人ぞなき　　元貞

萩映水
影ばかりうつろう花に猶あかで
　なみや萩こそ野路の玉がは　　春庭

萩移袖
袖にみる色のみならで咲く花に
　わかぬこゝろもうつる萩原　　高匡

故鄉萩
れのれなほにしきとみえて高圓や
　故鄉しらぬ野べのあきはぎ　　久足

月前萩
秋萩の花のにしきの露のうへに
　やどりてすめる夜半の月影　　秀經

雨中萩

陪臚
都盛
元秋
末慶

郢曲
東岸
貞度卿
久敬
都盛
末慶

附物
吉棟
元善
常安

鷄徳
朝喬
貞度卿
末慶

盤渉調
音取
常善
元秋
末慶
吉棟

青海波
元善
常安

越天樂
都盛
貞董
末慶

箏
貞度卿
久敬
元秋

羯鼓
元善

太鼓
久敬
常安
都盛
末慶

篳篥
貞度卿　従三位度會檜垣四神主

笙
朝喬　正四位上度會宮後五神主

同
常善　従四位下度會檜垣八神主

笛
常安　従四位上度會檜垣舍人

笙
久敬　従四位下多大和守

同
都盛　従五位下大中臣山田大路藏人

同　光基　杉村丹藏
同　清厚　河崎惣大夫
同　重魚　横橋一學
同　時春　杉松主馬
同　富壽　河井林大夫
同　吉算　中田大進
同　吉通　多氣環
同　文負　山崎榮治
同　文友　同　重藏
同　正高　中西六左衛門
同　長發　田嶋城之助
同　遷水　增山亦治郎
造外宮杢小工藤原記久　二見吉四郎
幾佐女　小川氏女
珍一　盲人
陸奥仙臺書生藤原光命　小山要人
志摩波切村　和氣鳴鶴　萬菴
同　仙遊寺　敬之
攝津大坂　千稻　岸田甚五郎

文政三庚辰年七月（發廿日至廿二日）於伊勢山田豐崎文庫講釋伊勢物語

講師　清水濱臣
聽衆　藤田内匠長盈
中川桂次郎淸憲
足代權大夫弘訓
宇治求馬久守
春木杢之助品光
外八十二名（姓名略く）

文政三年八月五日。於伊勢山田世義寺樂會

平調
音取
廿州　吉棟　元善　末慶
五常樂急　常善　貞董　常安
春楊柳　久敬　貞度卿　末慶

春の日もあかざりけりなよしといひし

よしのゝあとをよくかたるとて

われもまたあやに錦にかへて見き

うらなくかたるきみが言葉を

こゝにも。城戸千楯よろづうしろみて。心ゆく旅居になん。賀茂のみあれ過ごしてと思ひはべれば。又聞えうけたまはるべくこそ。あなかしこ

うづきついたちいつか　濱臣

本居君の

御もとにこたへまゐる

土佐人。大倉鷲夫が都にのぼりたるをり。吾も都にのぼると聞きて。待ち居たりしが。さらぬ要のこと有りて。難波にくだるとて。長歌よみて。城戸千楯にのこしおきける　鷲夫

鶏が鳴く〳〵。東の國と。やき太刀の。土佐の小國は。天雲の。千重にさか(放)りて。白雲の。八重たちしきて。はろ〴〵に。な(隔)りてはあれど。いそのかみ。ふるきみふみを。一すぢに。しぬぶ心は。いれひもの。おやじ(同)心ぞ。おやじその。書はしぬべど。おやじその。こゝろはもたれど。かくしわが。またす心は。おやじくもあらず。けふ〳〵と。およびおりつゝ。わ(吾)をまたす。君が心の。すべ(為便)のすべなさ。まゐのぼる君にみえずは。あし(葦)がちる。難波にくだる。吾しかなしも。

文政三年七月廿七日。伊勢山田。錦江亭歌會（兼題 當坐 歌文 別卷）

從三位　度會貞度卿　檜垣四神主
從四位下　度會常善　同　八神主
從四位上　度會煥光　春木隼人
從四位下　度會正兌　橋村彈正
從四位下　度會弘訓　足代權太夫
正五位下　度會光茂　上部雅樂
正五位下　度會末彥　福嶋豐後
從五位上　荒木田久守　宇治求馬
宮掌大内人秦　貞幹　上部左馬之助
宮掌大内人秦　弘基　追沼主水
宮掌大内人秦　旨武　津村正大夫
同　清水　石井源大夫
同　千町　井村傳大夫
同　信足　五富利主馬

ひしふるほうぐなど。さるよしありて。君の御もとに傳へもたまへるよし。又岡部氏の今のあるじは。三代になりてしか〳〵など。品川の少林院に。千蔭翁の下がきかきてある。東師にかゝせられたる。あがたゐの大人の御像。うるはしくてあるよし。又大名たち。今は大かた歌よみ給はぬはなく。中には古ぶりに深く心よせ給ふもれはかりなど。何がしの君にすゝぎに月かきたるゑに御賛に。さる御心ゑらびありてゑか〳〵など。まのあたりならでいうけ給はりがたきふし〳〵。うけたまはり侍りつる

　うまごりのあやに錦に立ちまじり
　　ゑくものもなき君がたまもの

となん。かへす〳〵うれしくうけたまはりぬ。猶。何くれと聞えまほしき數々も侍れど。いぶせき海士の苫屋。たづねより給へりしそのよろこび。ほど過ごし侍らんれ。なめしくやとてまづとりあへずかくなん。あなかしこ

三月十五日　　大平

清水君
　御もとに奉る

まことや。あがたゐの大人の。よの子にれくり給へる消息とて。めづらしき筆のあと。又同じ大人の。美酒の詞の石摺うつし壹枚。おくり給へる。人々にも見せて。めづらしく見侍りぬ。京の御旅居のほど。めづらしく心にくき御物がたりもあらば。うけたまはらまほしくこそ。あなかしこ

　これが返し。京よりいひやれる

かしこまりてうけたまはりぬ。先とよ。さいつ頃は。ひなの長路にやつれたる旅姿をも。うとみ給はで。へだてなくむつがたりうけたまはりきこゑさせしことだにあるを。御歌のかず〳〵書きてたまへること。うれしとは物かは。つゝみあまることゝちなんし侍りつる。別れ聞えて後。難波に十日あまりはべりて。明日は衣かふべき日といふに。やう〳〵都へはのぼりつき侍りぬ。さていさゝかこゝちそこなひて。（病氣）とかくつくろふ（治療）程。けふ〳〵と過ぐいて。御返りごとれこたりたるなめげさは。さるかたに見ゆるし給ひてよかし。まことや。御歌のかへしは

　もしは草吾もゑ刈らできの海の
　　なみ〳〵ならぬ君をみるめに

わが中に思ひくらべてわりなさは
　小鹿なく野のはぎが花づま　芳秀福井藤右衞門

神まつり
白妙のそでに露ちるもりのかげ
　すゞしきけふの神祭かな　眞行吉田勘兵衞

かざし
千早ぶるかものみあれにあふひ草
　かざすや神のこゝろなるらん　眞道前田總兵衞

文たがへ
ふる衣うらみしよりもよるの道
　ふみ違へてはくやしかりけり　貞一中村又八

たま
いだきもちてよゝと歎きし古言の
　のこるや玉のひかりなるらん　茂廣近藤吉左衞門

はじめてあへる
つらかりしうらみに袖はくちにけり
　あふうれしさを何につゝまむ　長廣大橋九右衞門

※　※　※　※

矢
いかり猪をたやすくいとるはや人の
　さつやはたけき神にぞ有りける　千楯城戸市右衞門

かゞみ

※　※　※　※　濱臣清水月齋

難波の旅居のほど。本居大平のもとより。おこせたる消息
よし野に物し給へりし。御かへ(歸)さとて。立ちより給へるは。中昔の人ならば。花のたよりはなさき(元マノヽ)御心ざしよなど。みやびにとりなして。よみ出でつべきふしなれど。まことさ(然)は侍らで
　めづらしき君をみるめはわかの浦の
　　なみのたよりもうれしかりけり。
いにしへのよし野の宮のみやびごと
　ながき日あがずかたるうれしさ
など思ひつゞけ侍りけれど。そのをりは。まづめづらしき御物語を。きゝもらさじと思ひ侍りて。かゝる涙の下草はとりいではべらざりきかし。縣居大人のわかきほどの。後世風の歌の集。又詩の集。又論語の註解。何くれの下がき。さまぐ＼かきすさび給

競馬見に行くかたにいそぐとも
　しばしはこゝにひきぞ留めむ　元腆卿
御返し
さもといはゞけふはこゝにて競馬
　急ぐにはあらずはや罷りなん　濱臣
芳野山の花盛にあへるよしなど聞えて。歌ども見
せたてまつりければ
みよし野の吉野の山を見しよりや
　おのが詞のはなにあきけむ　元腆卿
文政三年四月八日。於京都圓山端之寮歌會
うづき
榊とりしめ縄はへてかみやまに
　みあれまつらす夏は來にけり　季鷹賀茂縣主
※　※　※　※
※　※　※　正輔大堀茂右衛門
しめ
すゑつひにほにあらはれしわが戀は
　しりくめ縄のこゝちこそすれ　海廣大江縣齋
いはひて思ふ
いつまでか思ふおもひを下ひもの
　下にむすびてあらむとすらむ　直孝豊前人渡邊潮治
※　※　※　※　菅緒長谷川三折
※　※　※　※　村上松堂畫工
ふみ
むかしより代々につたへて百千まき
　千巻の書はかずもしられず　貞堯西村吉右衛門
くひな
くひなとはしるきものから人まてば
　こゝろにかゝるよひ〳〵の聲　助侁森三之助
ほとゝぎす
東人の耳にはいかにかぞなしと
　きかんみやこの山ほとゝぎす　敏夏服部五郎左衛門
※　※　※　※　光隆夏目元輔
ころも
ふるさとにたちゆく人の爲にかも
　錦のころもいもがぬひつる　元篤高畑啓吾
あひれもふ

いくへたゝめる緣なるらむ

千種侍從殿にいざなはれ奉りて。大ゐ川に船をうかべて。嵐山の花見ける時。よめる歌
きさらぎ(二月)はつか(廿)むゆか(六日)のことなりけり

大井川ゐせきの浪の立ちかへり
また來ん春の花をこそまて　有功千種殿

山ざくらともに見んとは大ゐ川
ゐせきの浪の思ひかけきや　正輔

わが見てし後もしばしは山の名の
嵐をはなにふかせずもがな　濱臣

正輔が「山櫻ともに見んと」はといへる返し

なみならぬ契なればや大井がは
流れてけふの春に逢ひけん　濱臣

千種殿の御もとにめされて。歌よみける時。富小路三位貞隨殿。梅溪左中將行通殿はしたり。御當坐

都郭公

都をばおなじ旅路の人もあるに
こよひは來なけ山ほとゝぎす　行通卿

垣夕顏

夕がほの花にはちりもなかりけり
賤がまがきは荒れしながらも　貞隨卿

浦夏月

夏がりのあしの葉末のつゆのまに
あけなんとするか浦の月かげ　有功卿

岡新樹

春と夏とゆきゝの岡のならがしは
葉廣になりぬたれいこへとか　濱臣

深夜螢

さよふけて露と照りたる八十草の
葉末をむれて飛ぶほたるかな　光隆夏目元輔

濱臣にはじめてたいめして

今日見てぞおもひははるゝ天雲の
[illegible]へだてゝよそに名を聞きし君　貞隨卿

己こそ思ひははるれよそにみし
くも井の庭を立ちならしては　濱臣

小倉中納言の御もとへ參りけるに。五月五日の事なりければ。やがて御いとまうして。賀茂のくらべ馬見にといそぐを。しばしと引きとゞめ給ひて

きさらぎ十日ばかり。都にのぼるとて。こゝのすくにやどりけるに。かねてより相しれる友だちのあるを。みたりよたり。いざなひて。白瀧の流にあそびけるに。かへるさはあつさの盛にもなりなんを。又も來て此の流にすゞまゝしとちぎりかはしにけり。さるを心のほかに都に長居して。八月のなかば。やう〳〵こゝまでかへり來ぬ。けふしも十五夜なりけり。をとつひ。きのふの雨風なごりなく晴れわたりて。暮れかゝるほどより。月くまなくさしのぼりければ。ちぎりおける友だちとゝもに。かの流によもすがら月見あそびてよめる

尋ねても見るべき月をうれしさは　今宵やどりをこゝにとりたる

夏ならば涼しとのみやみてやまん　心にまでは月もしまじを

春とひて花のかげみし白たきに　はやくも秋の月ぞながるゝ

秋の夜の月おもしろきたき水に　心をさへもいれて見るかな

行く水の流をとめてよもすがら　月をみしまのれくのやまかげ

疊翠軒記（三島の旅屋。福島貞藏が家號なり。）

窓より右にふじ。あしたかをのぞみ。軒より左にあしがら。箱根を見はるかせり。其の山々はや。五百重山かくみ。千重山とりよろふ。麓は驛路にて。行きかふ人たえずにぎはひ。旅屋軒をつらねたり。あるがなかに福島といふ家のあるじ。いさゝか言の葉の道に思ひをよせて。心たましひしたゝかにまめまめしきぬしなりければ。都路をゆきかふみやびをたち。たえまなく此の家にやどりぬ。いで　都よりあづまへかよふ旅にして。山路けはしくはたれもしろきは。玉くしげ箱根のみねつゞきなりけり。そのこなたは三島のすくとてみやしろのもりかう〳〵しく。春は霞の衣をきそへ秋は霧のとばりをかけて。花のあや。紅葉の錦をいろどりかさね。夏はみどりの梢うすくこく。冬は四方の雪に白がさねたゝみさげたるさま。すべていはんかたなくをかしかれ。此の家のよび名をみどりをたゝむ軒端といふ。まことゆゑよしあるかな。

遠近（をちこち）につゞくたか山みじかやま

秋を聞きしる初めなりける
おきそむる露を尋ねてよな〳〵に
聲のかずそふ野邊の秋むし
福島豊後がもとにて。秋色浮水といふことを
みぞれせしおと川柳一葉ちり
二葉みだれておき風ぞふく
水影にうつるは花か秋につれ
入江の穗蓼はなさきぬらむ
ある人の六十賀に
十といひて昔の秋にたちかへり
千世もさかえよ老人のとも
春木隼人がもとにて。大淀のうらに松あり。木かげに女どもたてり
うちみてもつれなき人をおは淀の
松のねたくも頼みけるかな
世義寺といふに。人々あつまりて。ものゝねあはするをきくに。青海波の。おきておもしろくおぼえしかば
青海のなみ〳〵ならぬ物の音に
たれも心のすみわたりぬる

大和守多久口朝臣。伊勢海をうたふ聲。いとよし
いせの海のきよき調をきくけふは
われも詞の玉やひろはん
松坂の旅屋。種德堂のあるじに。歌ひとつとこはれてかきてあたふ
まことある心の種をつねにうゑて
金花咲く身とやなりぬる
佐屋川を舟にてのぼるとて
さや川のみを（水脈）さかのぼる桑名舟
あしくば波の上ぞ安けき
駿河府中にやどりて。松永正平が母の五十賀に
百重浪千とせのかずはよすれども
老はこぬみの浦のあま人
おなじ國の陶山口。渡邊正が身まかりけるに。其の子眞文があとゝふわざすとて。月前懷舊といふ事を題にて。歌こへるに
ふじの根のふもとてらしゝ月影の
なぞ中ぞらに雲隱れけん
八月十五夜。三島のすくにやどりて。白瀧の水心亭に。月を見てよめる歌幷序

くは。たちもとほりぬ。玉くしげ。二見の浦は。みれどあかぬかも。心ゆく。かぎりなりけり。海山の。ふたみの浦の。あけぼのゝ空

山田の錦江亭につどひて。歌よみけるとき。殘暑といふことを題にてつくれる辭

土さへさくるこゝちしたるほどは。ことわりのあつさに思ひなして。さまでもおぼえざりしを。みそぎ川に流しやりつるやうに。思ひ捨てたる夏のなごり。又もたちかへりて。きのふけふとなりては。なかなかにたへがたくおぼゆるよ。あやしくさるべきことゞもこそあらね。さるは庭のさまを見るにも。しなえよらるゝばかりの日影ともなく。袖ふく風も身にしみそめぬるに。いかなればかくおぼゆるにはあらん。思ふに心のたゆみにこそは有りけれ。心のたゆみばかりくちをしき物はあらじ。よろづまなびの道も。しかこそはあれ。うひまなびのほどは。いかでと思ふ心のすゝみより。よひあかつきにつとめはげみてふづくゑにむかひても。春の日をみじかう。秋の夜を長からぬやうにのみおぼゆるを。いさゝか物の心しり得て後は。いつとなくおこたりゆくならひより。書をひらきては見るに物うく。筆をとりてはかくに心つかれて。はて〳〵はふづくゑのうへにうつぶしかゝるめり。いとくちをしきことならずや。殘るあつさのたへがたきは。かくていつまでかはあらむ。心たゆみもさて有るべし。まなびの道のおこたりは。年ごとにいとゞしくなりまさりなんと。思ふからにわれと心に。いましめまほしくこそ。

いすゞの宮にまふでけるかへるさ。古市町といふ所に。あそびどものゑみしらがふを。とかくいひはふるゝ若人たちゆきかふ

咲きつゞく神路の山のはな陰は
ゆふかけてこそ誰もよりくれ

こゝの對嶽樓といふに。月を見て

朝くまにゆふぐも晴れて神路山
ながみねとほく月になりゆく

古市町はもと。長峯といふ所なりとぞ。

二見にやどりて。人々と共に。題をさぐりて歌よみけるに。初秋虫を

風をのみ人はいへども虫の音ぞ

れ。れなじ心によろこぼひたゝへてよめる長歌
あなめでた。こもの竹簀は。たが世にか。あみてつくりて。萬とせ。千とせの世々を。ふる寺の。たからのふみら。まきつゝみ。ひめ(秘)れか(置)しけん。かぎり有りて。をさめしく藏は。くちぬれど。これの竹簀は。此のぬしの。ふることこのむ。眞心に。あなくらし得て。あたひなき。そこつたからと。かしづきて。ひめおかしけり。今よりの。五百世の後も。かくしつゝくちずそこねず。つたはらん。ことのともしさ。ことあげして。あれもめでたふ。これの竹簀を。

都にかへり來て。七月七日。飛鳥井殿に參りて。梶鞠の式見奉りて

みやびにみゆるけふの梶鞠
あがりたる世にはそれとも聞えねど

七月十日。都をたちて。東のかたへかへりくだらんとするに。月ごろ馴れし人々に。わかれをしむとて。盃にかきける歌

ながれても淵瀨かはるな立ちかへり
又もわたらん賀茂のかは涙

逢坂にて。おくりきし人々にわかるとて
越えわびて思へばとほし逢坂を
ことにはやすくかけて契れど

伊勢の太神の宮にまうでゝ。七月十四日のことなり
心さへすゞしくなりぬ八百萬
千よろづ神のみやめぐりして

二見の浦に。人々ともなひゆきて。海上眺望の心をよめる長歌みじかうた
さくゝしろ。いすゞの宮に。きのふかも。ぬさとりむけて。今日ははや。家路にむかひ。かへらまく。わがする時に。人みなの。かたりいへらく。玉くしげ。二見の浦は。常世より。しきなみよせて。いにしへゆ。清きなぎさと。かたりつぎ。いひつぎ來しを。いでわかせ。見てかへらせと。ねもごろに。うたらひいへれ。吾もまた。おとに聞きしを。いざさらば。道のつとにと。思ふどち。てたづさはりて。行きいたり。ありそにたちて。青海原。ふりさけ見れば。涙のおとの。きゝのさやけく。たつ石の。見のおもしろく。かへるべき。空もわすれて。しまら

青葉にかをる風ぞすゞしき
讃岐人。源春野に。難波の旅居にてあひて。よろづものがたらふほどに。日本紀會讀しをへたりとて。竟宴の歌どもあつめんとすとて。端出之繩をよませけるに
岩屋戸にしりくめ繩をわたさずは
　　　　　　長き長世もとこ夜ゆかまし
春野が子。駒之介といへるをうしなひてなげくに
若駒をしらぬあら野にまどはして
　　　　　　猶もほだしに繫がれぬとか
山家のかたかける畫に
ことたらぬすみかとしらでとひ來ては
　　　　　　うらやましとぞ人のいふなる
なりひさごのかたに
世の中はとにもかくにもなりひさご
　　　　　　たゞつながれぬ身こそやすけれ
山家に。梅がえに鶯なく所
梅さけりうぐひすなけりしづが家も
　　　　　　春はいろかにとみてみえけり
有馬のみゆあみにまかりて
一たびは吾もあみゝんむかしより
　　　　　　しるしあり馬のみゆときゝしを
鼓瀧にて
世々をへて音にひゞける瀧の名の
　　　　　　づゞみは浪のうつにぞありける
箕面の瀧にて
これやこのあまの川との水くだり
　　　　　　雲よりれつるたぎ津しら波
岩に。なのりそれひたるかたかけるに
船はつる磯のいくりにれふるめを
　　　　　　神の駒とはたれ名づけゝん
池田人。山川正宣がもたる竹帙を見て。それが筥のうらに書き付けたる辭。幷長歌
此の帙は。奈良の東大寺なる油藏といふに有りしを。近き世に油藏はそこなはれはてしかば。藏のうちなるふみども。ほかにをさめかへらるゝをり。これかれちりぼひ有りて。此の竹帙もある都人のもとにつたはりぬ。かの藏の跡は今礎のみ殘りにき。さるをゆゑよしありて。山川ぬしのあがない得て。いとむかしみめでらるゝを。ふるものあつかひこのむれの

くひなおとなふやり水のもと

ほとゝぎす聲せぬよはもねられぬは
　橘かをりほたるとびかふ
れなじ時河を

またも來て影をうつさん石河や
　せみの小川よれもがはりすな

百よつきよどの川舟行きかへり
　流れてたゆずおとづれはせよ

羽倉信美のもとにて。洛湯花を

見るひとの言の葉からや東路の
　花にはまさるみやこなるらん

をりにあひて都の花になるゝ身の
　などて言葉のにほひなからむ

祇園會見奉りて

神をけふまつるためしは世の人を
　八坂の里のやすけかれとて

六月十六日。湖の月見んとて。大津のみぎはなる。遠帆樓にやどりけるに。あやにくなる雲のたゝずまひに。月の影さしいづべくもあらず。興たがひて　かくするほど。友だちふたり三人とひ來て。さかづきめぐらすに心ゆきぬるに。いづくよりにかあらん。みめよきをとめども。三人四人いで來て。三の緒かきならしまひうたふに。こゝろうかれて

物の音に思ひははれぬ雲とぢて
　ふつきなきこよひなりしを

あかつきがたになりて。しばしがほど。雲をさまりて。月いとをかし

うき雲も夏の夜ふけてみづ海の
　浪をのこさずてらす月かな

淡海のうみ八十の湊のとまり舟
　こゝろひとつに月やめづらむ

すゞしさに心をのせて夏の夜は
　月にあみひく浦のあまびと

人々とゝもに。難波江に船うけて。とぶひのわざを見て

中空にとぶ火のなごり流れちりて
　たもと涼しき舟あそびかな

櫻の宮にて

名にのこる櫻のみやを夏とへば

ふかきは色のあやめのみかは

羽倉信美がもとにて。端午庚申を

かりそめの枕なれどもあやめ草

ねぬはの爲に何かゆふべき

野宿夢覺

いくそたびそよふく風にめさましぬ

竹葉かりしきむすぶ夜床に

かりそめに草ひきむすぶうたゝねの

見はてぬ夢を吹くあらしかな

鎌田硯庵がもとにて。郭公を

みやこびときゝあくらんを時鳥

かへる山路もわすれてぞなく

かへるべきほとゝき過ぎぬ都べに

鳴きし初音はきのふと思ふを

葡萄の賛

いざなみの神の御代よりゑびかづら

かけてかれせぬこのみなりけり

青葉櫻の畫に

さくら花ちりての後の若葉さへ

こと木にまさる色香なりけり

青葉楓の畫に

夏かけて若かへるてのかげみれば

もみづる秋のいろもわれもはず

郭公二聲といふことを

一聲は夢に過ぎしをほとゝぎす

うつゝにきけど又やなくらん

夜ならべて待ちしかひには時鳥

聲をかさねて聞きそめしかな

不盡聞郭公といふことを。賀茂にて

祭見てかへるゆふべの小車に

聲のせそへてゆくほとゝぎす

牡丹のかたかける畫に

そめて見る心は誰もふかみ草

いろ香にとめる花のすがたや

ある人の八十賀に

けふのみのことの葉ならず九十

百とせまちてまたもいはゝむ

片山大隅目がもとにつどひて。歌よみける時。夏

夜（六月五日）

ふく風もなつのよふけてすゞしきれ

いたづらに言の葉のみは繁れども
いつなりいでんこのみともなし
かくしつゝ言葉の園に思ふことと
ならでこのみやくちんとすらん
卯月ばかり。高雄山にのぼりて。若かへでの陰を
かしくればおしかば
もみぢせん秋をもまたで高雄山
若葉にそまるわがこゝろかな
西本願寺につかふる。某のもとにて。佛前述懐と
いふ事を題にて
なき人のあとゝふわざもわが爲の
後のしるべときくぞうれしき
聞名具根といふことを
口にとなへ心に思ふ御名よりや
目さへ耳さへさやけかるらん
名たゝる宇治川の螢も。やう／＼數すくなくなり
もてゆきて。去年。今年は。あらしの麓川にむれ
とぶよしきくをりから。いざとそゝのかす人ある
に。吾もともなはれ行きて
なに事かうぢの川瀬をすみかへて
數もおほゐにほたるとぶらん
その夜は。川づらの宿にやどりて。人々とともに
題をさぐりて。水邊納涼といふことを
石ふみてわたらばいかに大ゐ河
おと聞くのみも夏はおぼえず
螢とぶきしの小ぐさの夕霧を
たもとにかけて夏はあそばん
山家人稀
柴うりてかへる賤男のなかりせば
都のつてを誰にとはまし
ちぎりれきてまつとあらねど山里は
思ひしよりもひとのとひ來ぬ
女醫博士。賀川ぬしの白鷺亭に。人々つどひて。
歌よみける時
身の毛ふく風にあつさもしら鷺の
やどは夏とやたれもとひくる
おりたちてあゆこさばしる夏川の
底にこゝろをいるゝさぎかな
瀧詮がもとにて。池菖蒲を
池水のいひしらぬまでかをるなり

浦風に鹽屋のけふり吹きくれて
　いろなきあきの夕ぎりのそら
秋ふかきあらやまなかの夕暮に
　ちるつゆすゞし嶺のしたみち
人目なき野澤のあきのゆふ暮は
　ものがなしぎの羽音のみして
鳴原にて。海老屋吉臣。橋屋靜枝等があるじまう
けして。歌合じける時。關郭公を
ほとゝぎす誰とがめねど關山に
　名のりて過ぐる聲のきこゆる
當坐に題をさぐりて。馬上戀を
妹を見てこまほしけれど時のまに
　雲井をかけるよしのなきかな
並河左衛門權大尉が七十賀に。都の名所をわかち
て歌よませける時。大澤池を
きみによりいけりし人はれほ澤の
　底にもちよやすまんとすらん
れなじ人のこへるに。山かたづきたる入江に家お
り。橋かけて人ゆくところ
世をよそにおもひ入江の丸木橋
　かどある人もしられけるかな
又竹を
千歳までかげをならべて此の君を
　わか友としもたのむべらなり
仁和寺の御内人。矢守大和竹か家のかべに。常に
かゝげおきて見るべき歌をとこへるに。雙か岡の
麓なりければ
言の葉もいかにしげらし月はなに
　ならびのをかのまどのあけ暮
ある人のこへる夕顔の畫に
やまがつがひとへ檜垣を夕がほの
　花にいぶせきすみかともなし
人のたびたつはなむけに。火打袋やるとて。かき
つけゝる
思ひ出でばうちもみよかしくさ枕
　たび行く道のこゝろなぐさに
喜撰法師のかたかきて。歌こへるに
うぢ川の流れて四方にあふぐかな
　みやこのたつみたゞひとことを
寄菓述懐といふことを

此の犬石は。大和國添上郡なる。眉見寺のうしろのをかにたてり。こゝは。むかし元明のみかどをかくし奉りし所なりとぞ。はじめは四方四隅にたてるものにて。隼人がともものみかどもる心にてすゑしものなりけんを。時うつり星かはり。岸くえ土くづれて。地の底にうづもれしもありて今は四つ殘れり。それもなかばはうもれたり。其のさま。たてるあり。ついゐたるあり。此の一つのみあざやかにまたくすがたをあらはせり。しかるを。後には七疋狐とかいひならはして。つひに稻荷のほこらをいとなみ。とりゐをさへたてゝ。あらぬ事どもいひつたふめり。ゐのれことしやよひのはじめつ方こゝにあそべるに。旅屋のあるじのこふにまかせて。此の犬石のゆゑよしゑるしつけてあたへぬ。かくものしれくは大江門の言の葉人清水のはま臣

三月六日。よし野山に花見けるによめる歌どものなかに

尋ねても花の盛にあひ來ずバ
　吉野よく見しといはるべしやは

み吉野をいかなる山と思ひしに
　花もてうづむところなりけり

世の中の山路のかぎりあつむとも
　かずたよバめやみよし野の花

さくら花ちらぬ七日はみよしのゝ
　山にこもりてあらんとぞ思ふ

よしの山きのふはふもとけふは峯
　いくか晴れせぬ花のゑらくも

しをりして道をもかへじ花ゆゑに
　まよはゞうれしみよし野の奥

三吉野のよしのゝ山のさくらがり
　ことしバかりぞ花にあきたる

都へかへり來てうづきついたちのあした

みよし野の花にふれこしたび衣
　今年はわきてかへまくぞうき

都にありけるほど。人々にこはれてよめる歌どものうち。上河のうもれ木を

うづもれて年經ざりせば流木の
　ながれて今にあらはれめやは

三夕のかたをかける書に。あらたに歌よみてかきつけてよとこはれて

菰池とかいふよりいでぬといへぞ。すべて〳〵たのづからなる岩間より。こゝにかしこにわきいづるが。大悲者の御堂のかたへ殊に見所ふかし。こゝに水にのぞきてかたのごときあづまやをいとなめるあり。廣さ方丈に過ぎずしてさらにわづらはしき調度もまうけず。あるじはもろこしざえにさとりかしこき翁なるが。はやくより此の驛路にすみて。ふかく此の流をめでつゝ。近き頃あづまやをいとなみたて。みづから水心亭となづけて。春秋の心やり所とせられにけり。げに心の水すましぬべき流のさまなりけり。たのれも十年あまりの昔。此の清水を見そめて。あはれをかしの流やと。心にしみておぼえしを。今年ふたゝび此の流をとめ來て。はじめて此のあづまやにあそぶ。いかでもたしのみはあらん。すなはちうたへらく

世のちりをよそに流してゆく水に
心をすますおばしまのもと

此の流をめでゝ。かくうたふはたぞ。大江門なる上野のをかのふもと。しのばすの池のみぎは。さゝなみのやのあるじ。ましい水の濱臣是なり

由比。興津のあたり。磯山のさくらみなさきたり。此のあたりは。海を南に見てあたゝかき所なれば。はやきなるべし。されぞ。吉野の盛におくれやせんと。心あはただしくて。

末とほき道のゆくての花ざかり
こゝろを空にいそがさすかな

都路をくだる旅人ことゝはん
さきしやいかにみよし野の花

荒井の海をわたらんとするに。風いたくふきたちて浪あらし。されぞ。ためらふべきならねばわたりぬ。思ひしよりはあやふげもなかりき

浪風のあらゐの海をうれしくも
心やすくぞわたりはてぬる

とよ川の橋をわたるとて

かぞふれは家路を立ちてとよ川や
いまいくよへて都なるらん

奈良の都を見めぐりて。元明帝のみさゝきなる犬石をうつしすりて。一ひらを旅屋のあるじ。威徳井屋某におくりあたへしに。ゆゑよししるしつけてよとこへるにそへたる詞

遊京漫錄卷之上

清　水　濱　臣

きさらぎ七日のあした。かど出す。こたびは藤原爲相卿の宿次百首にならひて。うまやごとに所の名をかくして。歌よまばやとていでたつ。すなはち品川をかくし題にて

梅の花咲きしなかばにかど出しつ
都のさくら盛見むとて

川崎のすく(宿)よりは。何くれとまぎるゝ事の多くて。つひにえよまずなりにけり。されど三島の(宿)すくにて。今一うた

むかしみしまゝに光をそへまして
千世にふりせぬ宮柱かも

小田原のつかへ人。櫻井勇雄。松井矩雅などがもとへ。今日こゝを過ぐるよしいひやりおきて。箱根へと急ぐに。風祭のあたりにて二人ともにおひ來れり。いかでたゞには過ぎ給ふといふに。こたびは吉野の花見にとおもへば。よろづあわたゞしきなりとて

三吉野の花におくれじと思はずは
かくこよろぎのいそがましやは

湯本にて。人々と題をさぐりて歌よむ。春河を

冬さへにこほらぬ水の早河を
かすみとぢても見する春哉

三島のすく。白瀧といふ所の清水いとをかしきに。沼上城山といふはかせの心やり所あり。水心亭と名づく。城山これが記をかきてよとこふに。やかてかきておくれる辭

あはれ水ばかりをかしく心ゆくものはあらじかし。いかばかり岡山のたゝずまひ。おもむきある所なりとも。いさゝかの流そはざらましかば。ことたらぬこゝちすべし。さはいへ。にごりゐのきたなげなるは心もうつらず。あら浪のおそろしからんもまたなづかしからじ。たゞふかさはつるはぎにして渡るべく。とこなめはしりて底のみくさゝやかに。ひれふるいをの數よむばかりならん流をぞ。をかしく心ゆくとはいふべき。こゝに箱根山のふもとみしまの驛路いくらもさらぬ北に。白瀧といふ流あり。水上は

清水濱臣

序

父ぬし世におはしまし丶ほど。海山にあくがる丶くせおはして。都へも七たびのぼらせ給ひ。筥根のいでゆには十五たびまでおはし。六浦なる金澤の入江をめで丶はかしこに假そめのいほりものして。年のうちに二たび三たびあそびたまひき。大方の國々めぐり見たまはぬ所すくなかりき。おのれはをとこにて。父ぬしよはひいそぢまり六におはしまし丶時うまれにけり。さればみさかりの御程はしらず。七つになりし時。父ぬしにぐして始めて筥根の出湯に出で立ちぬ。其のほどのこと。今も猶おろ〳〵ころ丶にとゞまりぬ。父ぬし身まかり給ひて後。十七といふに母とじにともなひて。雨降山。江島。鎌倉。金澤のあたり經めぐりき。十九にて叔母刀自と丶もに入間の郡田中と云ふ所に。むかしよりしるすぢありて七日八日經たりき。これらをはじめにて年ごとのやうにこ丶かしこものしつれど。老人家におはするほどは心おかれて。遠き國へは出でたちがたくて。思ひながら都をよそにのみすぐしつ。老人たちうせ給ひて後は。またをさなきものどものうしろみなさにみはなちかねて。今年〳〵と過ぎぬ。さるにおのれよはひ四十を過ぎて四とせ五歳。そことおとろへたる事こそあらね。身にいたづくところなきにしもあらねば。かくて又五とせ十とせかさねゆかば。老のさかそひなましと思ひて。此の春はあながちに思ひたちぬるになんありける。もとより年ごとに十日はつかの旅ゆき。二たび三たびと思ひた丶ぬとしもなし。其のをりごとにまれ〳〵うまのはなむけとて。うたよみおこす人どもあれど。あながちに人をつどへてわかれをしむ事なかりき。こたびはおのれ思ふところありて。むつきのはつか一日をその日とさだめて。行くわれもわかれを丶しみ。とゞまる友も別ををしむつどひす。其の日のありさま。人々の歌ども猶ことものにくはしくしるすべし。

おのが歌は

言の葉のにほはぬ身にもおふけなく
　　吉野の花をわけんとぞ思ふ

こ丶ろある人はとゞむなこ丶ろざす
　　ところはみやこころはきさらぎ

ひける。又ある人の。かたハらにおもひものもちて。それを妻の去りて。事にふれてつれなき由などわびけるを。聖人の敎にも妬あればさるとてさりけり。誠に婦は物にあらそハず。妬まざらんこそその道にも叶へれ。さしての事もなからんに。闇にかたましきが。妾などありたるに。道なく妬まんハにくむべし。さなきに我存分の僻事をはたらきて。婦人に聖人の道をのぞまんも。時宜によりてハれとなげなし。是等は酢酒むしつちを米と見。露にやどり。溝にすむかげを。月とおもふ類にして。わが心のわたくしにひかれ。我こゝろを公にせざる過なり。わが私。心にあらば。たとひ聖人のことばをきくとも。我わたくしをなすの媒なるべし

施しをなしまた施しを受くる心得

人に施してハわすれがたきものなり。人のほどこしをうけたるは。わすれやすきものなり。

梅園叢書終

まじりなバ麻もかへりていかならん
　こゝろのまゝにしげるよもぎは

とよみ給へり。人もおなじく人ながら。その習ふ處の道により。いつとなくその心までおなじからずなりゆくものなり。今佛者は儒を小なりとし。儒は佛を誕なりとおもひ。佛氏は宗派をたてゝ。心をとく事同じからず。儒者も門戸をたてゝ。道をとく事同じからず。おの〳〵その道にいるもの。其道において發明す。ひとりこの事のみならず。盗人となり。遊俠となり。あるひはかたましく。あるひはへつらひ。あるひは人をあざむきいつはり。その品いたりてかぞへがたしといへども。その本をとへば。おなじく天をいたゞき地をふみ。父と母とありて生れざる人はなし。已に天をいたゞき地をふみ。父と母とありて生れたるよりしてみれば。父母兄弟則天倫といふものにて。この外に道なしとゑるべし。親と子とあるがゆゑに。君と臣との禮あり。兄と弟とあるがゆゑに。朋友の交あり。天をいたゞき。地をふむゆゑに。夫婦の道あり。たとひ我いとなみは。士となり。農となり。商人。職人とかはるとも。此外には出づべからず。是より工夫するときは。道おのづからあきらかならん。酒にもあらず。酢にもあらず。米の米なる處をしるべし。米はよく人の命をのべ。人をやしなひ。害なきものなり。酒となり。酢となりては。一時の味をきはむれども。本來の米には及びがたし。人も人の道たらんハ。君君たり。臣臣たり。父父たり。子子たり。夫夫たり。婦婦たる間にあり。是本來の人の性なり。よく〳〵考ふべし。又その我このむ處によりて。物をみる事も。米の酢酒と變ずるが如し。是を好む處に阿ねるといふ。たとへていハんに。月ハおなじく大空にすむものなれども。船をうかべてハ水上の月とし。林下にやすらひては。木間の月といひ。池に臨めバ。その影池にあり。露を弄べバその光つゆにとゞまるが如し。ある人。五倫の道を人にときて。兄は弟をいとほしみ。弟ハ兄をうやまへとをしへけるに。弟きゝておれきゝ給へ。兄たらん人は弟をバいとをしむものにて候とて。我勝手よき事のみきゝ覺ける。又子路ハ。百里の外に米をおひ。父母を養ひし事をかたりけれバ。子路ハことの外健なる男にてこそ有りけめと云

刀をよこたへ。鬢のころもに世を背けるがごときも。十に七八。衣食にはしる人ならずや。故に金もつものは。利根ものと時めかれ。貧しきものはうるさしとあざけらる。誠に色に酒に。博奕放埓に家をやぶるもあれば。邪慾不道に富めるものあり。貧福貴賤にては。人の賢愚はさだむべからず。又衣服うるはしく着かざりては。人にほこる心あり楚楚ならんは人に耻づる心あり。人と交はるにも。膳に美味を羅ね。酒に歡をかさねて。是を深切といふ。是によりておもへば。吾輩如きもの。容易こしやすき關にあらず。もし衣服の美惡に心なく。又は吾したしき友ならんには。饗應の心つかひなく。麥をかしき。菜を煮て。心のおく底もなくかたりあひなんは。誠の友なるべし。今はしらず。怨憤やゝもすれば。飲食の間におこるが故に。こゝに心を勞す。心を勞すれば。しば〳〵の會合も稀なり。稀なればしたしからず。あるひははじめよろしくもてなせども。終つがざれば。かへりて辱もとむるなり。左いへばとて。客をあしくあしらへといふにあらず。是はしたしからん友の事なり。

米に譬へて五倫の道を喩す

米はおなじく米なれども。水を入れて炊くときには。飯となり。粥となり。炊きて是を釀すときは。酢となり。酒となり。空しく倉廩の下にすておけば。蟲となり。土となる。釀して酢酒となり。捨てゝ蟲土となるものをみて。米にあらずといはゞ。人信とせんや。その同じき所の米。一度酒屋の手に入りて。酒となる時は。その性熱し。血脉を通じ。憂をわすれ。興を催さしむ。又その糟を釀みて。燒酒となすとき。その熱やくよりも烈しく。火を點ずれば。油よりも猛なり。性大熱となり。よく人を傷る。又釀すときは。美酒となり。その味。蜜よりもあまし。酢となれば。性温にして。よく收歛す。醴となるときは。下戸の唇を潤し。ときに脾胃の氣をたすく。その本を尋ぬれば米なり。ひとり米のみならず。一切のものしかなり。麻は直にのぶもの故に。蓬その中に生ふるときは。自然とよくのぶものなり。蓬のみだれがはしき中にはへたらんには。生れつき直なるあさも。はたいかならん。されば此心を消遙院の歌に

醫に望聞問切の四つありといふ説

今人病をうけ。醫師を招がば。明なる處にふし。委しく病の始末をとき。脈を察せしむべし。病人多くはくらき所にふし。病の樣子もかたらず。唯脈ばかりによりて療治をもとむ。醫者も名醫とおもはれんとて。碇々にとはず。古の神醫も望聞問切の四を以てす。望とはそのいろを望み。樣子をさつし。聞とは聲氣にきゝ。問とは病の次第をくはしくとひ。さて脈を切て藥をあたへしなり。今の醫。神醫に比せば。その及ばざる事千萬億。その及ばざる技を以て脈一いろにて病をわかたんは。決してこの理なし。病家も醫に困させんとならばよし。もし病をいやさんとならば。醫に望聞問切をつくさしむべし。これ吾言にあらず。雲林の龔延賢いへり。

醫は仁の術といふ論

醫は仁の術なり。しかれども。醫者をさして仁の術を行ふものといふべからず。醫道はちかくは身を護り。遠くは人をすくふ。誠に仁の術なるべし。されども。多くは書籍にあきらかなりといへども。身をまもるにはうとく。色にふけり酒に長じ。貧家の病を疎にし。富人の治に心をつくす。いはんや。人。扁鵲が手なければ。誰か過なからん。過つときは。人を破り。甚しければ人をころす。百人を治して。百人をいかすも　。百人はいくべき理あるものをこそ活かせ。死すべきものをいかすにあらず。扁鵲が技を以てすら。吾よくいくるものをいかし。死せる人をいかすにあらずといへり。その壹人はいくべきものをころすなり。しからばその功と罪と。いづれかたもかるべき。されども。是は醫道の罪にあらず。醫を學ぶものゝ過なり。故に醫は仁の術といふべし。醫者は仁の術を施す者といふべからず。もし人ありて。吾萬人治して。萬人を活かすといふと。我はまことゝせじ。死すべき人ならば。十人治して。十人死すとも。醫者の罪にあらず。

美服珍膳世の弊を矯むる説

人激する事あれば。吾衣食の爲にせず。温飽の爲ならずといへり。是まことに男子の志ながら。これやすき事にあらず。船に枕して馴れぬ旅寐の波にゆらるゝ商賈。暑きより寒きにいたり。春より秋を凌ぎ。田に耕し。畠に耘る徒はいふにたらず。馬に跨り。

すべしと。左右のもの相如をころさんとしけるを。相如目を張して叱りければ。恐れてあとへしざりけと。秦王是非なく瓦をうつ。相如趙の御史をめし。その年月日。秦王に瓦を撃たしむと書かせたり。秦の羣臣。趙の城十五を秦に獻ぜよといひければ。相如秦の都咸陽を以て趙に獻ぜよと。始終酒宴をはるまで。一分の辱をうけずして。國にかへりけり。この功により。その位廉頗が上に出でけり。廉頗憤り。我軍の功を以て。彼が口さきの功名の下にたゝんこそ安からね。相如にあはゞわれもふさまに耻をあたふべしとていかりけるを。相如きゝて。廉頗出づる日は。病と稱し出でず。ある日途にて廉頗が來るをみて。車をかへして避け匿れけり。相如が臣等無念におもひ。吾等親にわかれ。妻子をすて。君につかふるは。君の人となりをしたひてなり。然るに廉頗にかくまで雜言せられ。おぢ恐るゝ事かくのごとし。常式のものとてもかゝる耻辱は蒙らず。吾等もとより身不肖に候へば。いとまを賜はりかへるべしと云ひける。相如とゞめて。汝等。廉頗と秦王はいかにぞと云ひける。それは秦王勝れりと云ふ。そのとき相如。秦王の威あるさへ。我是を辱しめたり。われ怯しといふとも。一人の廉頗恐るゝにはあらねども。秦我趙を攻めざるものは。我と廉頗と二人あるを以てなり。二人あらそはゞ。一人は傷くべし。然らば。國の爲にあらず。國の急難をすて。私の恨を快うせんは。忠臣にあらずと云ひける。廉頗是を聞き。大に身をくい。相如が家にゆき。涙を流し。罪を謝し。是より刎頸の交をなし。趙の國おだやかなりし。朱雀院の御宇。あやしき星出でけり。天文博士是は大將の家の禍なるべしと勘へける。時に小野宮實頼右大將にして。枇杷仲平左大將なり。小野宮右大將の家には。是を禳ふとて。祈禱のしな〳〵つくされけり。枇杷左大將の家には。何事もなし。ある人。其子細を問ひければ。左大將。星もし禍を大將の家に降さば。我と實頼となり。吾已に年老い。身不肖なり。實頼年壯に才あり。我もし禍を免るゝ事あらば實頼に利あらじ。我皇家の爲にこの人ををしむ。故に禳はずとかたられけり。藺相如は國のために命ををしみ。是は國の爲に身ををしまず。その君に忠ある所は一なり。

憎ても憎むべき者は。なき事を造り云ひて。人に悪名をとらするもの。毒飼して人をころすもの。我は賢人のふりしてひそかに人を陷に入れ。又人をば毒飼し。己は長く世に生はたかり。榮曜し旨き事に逢はんとは。さり迚は黒き心ばへなり。これよりみれば。或は討ちはたすがごとき。その心に害なし。然れども天はたかきに居て卑をみる。その事顯れ。その禍を蒙らざるはなし。その罪牛裂すべし。

分別なき者にれおよとの説

太閤秀吉。御咄のもの伴内といふもの有り。ある夜話の時。世の中に何物が至てれそろしきぞと問ひ給ひけるに。皆上樣ほどれそろしきはなしと云ふ。伴内きゝて。いや〳〵上樣は正直にましまして。身に過なければ氣遣なし。世の中に無分別者ほどれそろしきものは候はず。無分別者は物の聞わけなく。用捨をしらず。我儘をはたらき。理非の辨なければ。何か菓か氣にあたり。いかなる事をかいり破り。思はざる難をやなしなんと云ひければ。太閤悦び感じ給ひしとなり。誠に世の中に理非のわかちしらぬものの程れそろしきはあらじ。物は理によりて服する樣にありてこそその分もあれ。百姓の水論しけるをきゝしに。ひとりの男何やらんいひて。此事が目にはかゝらざるか。目は何の爲のものなるやといひければ。我目は面の文なりと。すこしも負くる色なし。かくいはんには。肝心の理いはんとも。瓢箪にて鯰れさゆる類なるべし。人食犬の樣なるものなれば。僻事いはんとも除けて通すべし。

忠臣國の爲に命を惜みまた身をもしまずといふ話

趙の國の臣に。廉頗。藺相如といふ二人の臣あり。廉頗は手づよき大將にて。しば〳〵戰ひ數かつ。そのゝち秦の國より。いろ〳〵として趙をとらんとしけれども。此二人ありては。なり難し。因りて趙王に約して。澠池といふ所にて。秦王會せられけり。酒酣にして。秦王。趙王にこひて琴を奏ける。趙王琴をひかれけるとき。秦の御史前みて。その年月その日。趙王にことをひかしむと書きとゞめける。相如缻をとりて。秦王にすゝめうてと云ひける。秦王いかつてうたず。相如進みて缻をとり跪き。君もし缻を擊たずんば。五歩の內頸の血を以て大王をけが

もそむき給ふにあらずやととゞめ給ひけるゆゑ。増田がはかりごともむなしくなりけり。よく／＼姦人の心はにたるものなり。かくのごとく手を入れあしを入れするほどに。いかなる人をも迷はし。一旦さかふものなれども。夕立の漲り來るごとく。岸も堤もくづしもてゆく樣なれども。只一時のことにして。費無極もころされ。増田。石田もほろびたり。又正しき人は物にへつらはず。此方よりもとめては。立ちどころに富貴を得といへどもせず。計をまうけて。我身の快する事をせず。賄にふけらず。あしきをばいさめたつほどに。あしき人の樣に俄に炎のもえ出づる樣の事はなし。物に憐ふかく。利にふけらず貧しきものなり。又よき人は。いつ迄いきても人に愛せられ。あかぬゆゑに。長いきしても猶をしまるゝなり。あしき人は。四十そこらにして死しても。人にうとみあき果てられ。長生せしごとくおもはるゝなり。廿日日のてりたるは一日ともおもはず。三日雨の降りたるは十日もふりたる心地するが如し。百年の歡樂は短きに似て。一日の憂は長きに似たり。一斗の水。一握の泥をいるれば。その水こと／＼く泥の如し。百人のうち五人七人の溢れものあれば。そのさとはこと／＼く溢れものゝ樣におもはるゝなり。よきもあしきも命はかぎり有るものなれば。よき人とて。ながいきすべきにもあらず。あしき人とて早く死すべきにもあらず。されども。一度さかえ一度衰ふる内。善をつむ家はさかえ。惡をつむ家はおとろふ事多し。何の里何の國なりとも。鑑みてしるべし。ある人の曰。此理かくのごとし。又あしき事はきゝやすく。よき事はきゝがたきはいかに。予が曰。酒は口にあまくして病をかもし。色は心に快くして人をつからす。朝寢する人は。など左は朝寢するとておこしたるは忠なれど。ねたきときは入らざる事とおもふものなり。よし／＼ねよといふは諂なり。されどねたき時はうれしきものなり。かゝるかりそめの事にだに。よき事は耳にさかふ。まして大事にのぞみてをや。よく／＼工夫なくんば入らざる事とおもふべし。旁觀八目とて。是を隣の息の事になしてみよ。いかに愚なる人とも。早くおきよと云ひしが忠と思ふべし。

陰必ず禍を蒙るの説

時に是をとりて獻じられよといひ。さて其日になりければ。御宛かたの如くとりしつらひて待ちける。無極いそぎ令尹にゆき色を變じ。さて〳〵某君を誤らんとせし。御宛が門には武具森然として立てならべたり。是二心の色と見ゑたり。先達て呉の軍にも。呉の賄をうけて。一軍にも及ばずかへれり。いよいよ疑はし。疑ひ給はば。人を使はして見給へと云ひける。人を使はしてみせしむれば。太刀。鉾。弓箭。無極がことばに違なくつらねたり。令尹大に怒り燒き討ちにして御宛をほろぼしける。慶長の頃。大閤秀吉薨じ給ひ。人こゝろもまだ靜ならざりし時。五大老ありといへども。東照宮と加賀利家卿の右に出づるものなし。石田三成。增田長盛とはかりて。この兩人心をあはせ給はゞ。我輩志を得る事あるべからずとて。石田。增田中よからぬ眞似して。增田は神君におもねり。石田は利家にへつらひ。隙をうかがひける。一日利家。東照宮を招請あらんとて。東照宮も渡御あるべきにきはまりしに。增田來りて。利家はかり事あり。ゆき給ふべからずとて。しひてとゞめ申しけるゆゑ。病に託しゆき給はず。增田父

利家の宅にいたり。前つかたすこしあしくさゝへ候もの有りて事はたさず。この度招請あらば。然るへきよし申すにぞ。利家まへかたの事。吾も心に恥づる事あり。また〳〵欺をうけば。人にあふべき顏なしと申しけるを。增田さきの事。内府（東照宮なり）もふかく後悔し給ふ。この度まねぎ給はゞかならずきたり給ふべしとなり。よりて又招請の日定まり。その日になりしかば增田また東照宮にいたり。利家姦謀あり。かならず往き給ふべからずと。詞をつくしてとゞめけれども。東照宮このごろも約にたがひ。心甚こゝろよからず。再約に違ふべからずとて。已にいでんとし給ひけるを。增田僞りて書狀をしたゝめしを。ふところより出だし捧け奉る。東照宮あやしみ給ひ。俄に故障有りとて。此日も延引遊ばしける。利家この事をふかく憤り給ひ。細川忠興をよび給ひ。われ年老い。人の爲に侮られ候事かくの如し。一生の耻とこそれもひ候へ。路を足下の領分丹後にかり。加賀にかへるべしとの給ひしを。忠興きゝ給ひ。この恨は尤に候へども。今かくのごとくにして歸らば。世の人は怯しといふ。威權もすたれ。秀吉の顧命に

美なるは早く人の目にもつくものゆゑに。賴義もうつくしきを亡瑞の鎧とて。ふかくいましめ給へり。

善人惡人盛衰夭壽の解

ある人問ひて曰。治まれる世はすくなく。亂れたる世は多く。惡人は多く榮ゑ。善人はおとろへ。惡人は富み。善人は貧しく。惡人は壽く。善人は夭きがごときは如何。予こたへて曰。是說あり。善は陽の正しきなり。惡は陰の邪氣なり。陰陽は互に消長するものなり。夏さり冬きたり。夜翌け日晏るゝが如し。然れどもあしき事は耳にいりて心にさかはず。目に見て心に悅ばしむ。人の君たるもの。すこしく防ぎ守る心おこたれば。佞人きそひ進むものなり。佞人すゝめば。親子。夫婦の中をへだて。兄弟。君臣の怨をなす。是みだれの階なり。佞人は計を廻らしへつらひをなし。いかにもして君の心に適はんとたくむものなれば。現在惡人とはみゑぬものなり。操狂言にするごとく。惡人なりとて面あかく眼ふとく。かりそめにも方外なる事を聲ありたけにさけびていふ物ならば。誰かこれに迷ふべき。惡人は智ふかく。詞あまくして。たゝてその氣さきみゑぬものなり。酒をのみ色をこのむがごとき。人間の至りてたのしく面白きもの。是に過ぎたるものなし。たとへばかくのごとし。終に身の讎となるは。後にぞおもひ合はするものなり。いかなる發明の人もこゝに迷はざるはなし。むかし楚の平王の臣。郤宛といふ人あり。正しき人にて。國人もあつくなづきけり。時に吳の國より。掩餘燭庸などいふを大將として。楚をせめけるに。吳の國內亂ありて君ころされけるゆゑ。掩餘燭庸も皆よの國に出奔しける。此とき郤宛。楚の大將として拒ぎ戰ひしが。此亂をきゝて。人の亂に乘ずるは不祥なりとて。直に師を引入れけり。平王の出頭に費無極といふものあり。郤宛をにくみ。時の令尹子常にゆきていひけるは。郤宛何とぞ令尹を招き。酒をすゝめ度由。念頃に申し候と云ふ。又郤宛かたに行きて令尹この宅へきたり。酒をのまんとなりといひければ。郤宛悅び。賤しき我宅へ令尹來らるべき事。身の面目此うへなし。さりながら何ぞ饗應のしなもなしといひけるを。費無極きゝて。令尹は武具を甚このめり。もし來らるゝ日は。武具を門につらぬべし。令尹きたらばみるべし。

つくしたりとも。是臣となり子となるもの丶分なり。吾こそ世にもかくれなき忠孝をなしたりとて。それを鼻にかけ。親にほこり。君にれでらんは。謙の道にたがひ。忠臣孝子といふべからず。孔子謙の心を釋きて。勞而不伐。有功而不德。厚之至也との給へり。手柄ありても。身に勞しても。我こそと人にれでる心なからんこそ德のあつきなれ。わが分をしらざるより。賤しくして高ぶり。貧くして富めるを學び。一段づ丶も吾をるべきところよりさきへ〳〵とす丶む程に。藍縷きつるときは木綿布子も羨ましかりしが。布子にもあへば小袖きたくなり。夫より綾羅錦繡もかざりたくなる。步行する時は馬も羨みしが。馬にのれば駕籠。々々より乘物。輿と只管に高大になれる事。是を僭上といふ。約體なくともいふべき歟。布子きるべきものは布子。步行すべきものはいつもかちと。分限の外をしたふべからず。高席につきたるは勿體ありてよきもの丶樣なれども。親よりも一段上に座したらんは。片腹いたくこそ有るべけれ。みな謙の道をしらずして奢り恣なるよりおこれり。八佾は天子の樂なるを。季氏もちひたりとて。孔子ふかく歎きたまひしも。その分をしらざる故なり。家に貯ふべき道具も我分限より過ぎたらんには。却りて耻づべき事なり。唐の文宗のときの相國王涯が娘。竇訓といひし人の妻となりけるが。かへりて父にいひけるは。玉の釵のきはめて細工手をつくせるあり。價七十萬錢なりといひける。王涯き丶て。七十萬錢は我一月の俸金なれば。汝にをしむにはあらねども。釵ひとつにして七十萬といへば。これ妖物なり。かならず禍と相隨はんといへり。數月の後女又かへりて。員外郎馮球といふもの丶妻もとめたりとかたりけり。王涯き丶て。わづかに郎吏の妻として。首の飾七十萬ならば。久しくあるべからずといひしが。はたして程なくその身も亡びけり。賴家のとき。山門一揆をおこしける。佐々木左衛門太郎重綱も討手にむかひけるが。父高綱法師これをおくり。重綱が武具の美しきを見て。涙を流しける。高綱の兄入道經高。入道盛綱そのよしをとひければ。武具の美なるは身に害あり。かれ兵をしらず。此度生きてかへらじといひしが。はたして討死しける。討死はもとより武士の本意とはいひながら。武具の

くみ。へりくだり恭しきをば愛す。甲斐の信玄。板垣彌次郎が扇に

誰もみよみつればやがてかく月の
　いざよひの空やひとの世の中

とこの歌をかきて賜ひしは。謙德をつゝしめとなるべし。人の至りて貴きは天子なり。されども。九五の位にます。易の乾の卦䷀下よりかぞへて五にいたる。是九五なり是猶上に一爻をのこし。天の道をおそれみつゝしみ給ふなり。故に易の上爻は。亢龍有ㇾ悔とて。龍の天にのぼるが如し。盡くのぼりつめたる時は。下らねば適はぬ故に。始めて悔しく成りたるなり。是天子のみの事をいふにあらず。かりにたとへていふなり。一升入る器あり。一斗いる器あり。一石いる器あり。一升いる器に九合いれ。一斗いる器に九升いれてたく時は。氣遣なし。一升いる器は一升。一斗いる器に一斗いるゝ時は。すこし障りても打ちこぼして。剩器さへ損ざすやうになりゆくものなり。ましてや一升いるものに。二升もいれんとはかるをや。易の象に。亢龍有ㇾ悔。盈不ㇾ可ㇾ久也といへり。足利鹿苑院義滿は。太上天皇とまでなりしも。譽むる人はなし。秦の李斯といひし人は。上蔡と云ふ所の人にして。博學にして多才なり。秦の始皇につかへ。位宰相となれり。されども。その心あくまでおそろしきものにて。書籍あれば人いろ〳〵の事をしりて。上のしわざをもいふ物なりとて。天下の書をあつめて燒きすて。儒者をあつめ坑にいれうめ殺し。始皇崩じて。その太子扶蘇と。大將蒙恬などを殺して。扶蘇の弟。胡亥を位につけ。二世皇帝と號し。民富めば謀反をするなどして。成敗きびしく。年貢つよく取り立て。督責の術とて民をなやましける。右いふごとくみちてはかくる習なれば。叉趙高といふものゝ讒にあひ。咸陽の市にてきられけるとき。その子にむかひ。古鄕の上蔡にして犬をつれ兎がりせし。貧しきむかしをくやみなげきしかど。夫さへかよはぬ身となり。一門從類こと〴〵くころされけり。李斯。惡をもちて君につかへ。民を憐み。世をすくはゞ。この後悔はあるまじ。是らも易の亢龍のいましめをしらざるなり。人々その己が分といふ事をしれば悔なし。子は子の分あり。臣は臣の分あり。たとひ天下に並なき忠をつくし。孝を

や。是吝嗇なる人のすべき事にあらず。東坡李公擇に與ふる書に。口腹之欲。何窮之有。毎加節儉。惜福延壽之道といへり。誠にいろは性をきる斧。味は腸をとらかす藥なり。富貴の家をみるに。情慾味もとむるに隨ひて有るゆゑに。一時心をこゝろよくし。口を爽にするを悦びて。身の勞るゝをしらず。中壽をたもつ人はすくなし。山野の人は求むべき貯もなく。日々東にはしり。西にはしり。慾と味ももとめがたく。故に多くは壽し。是東坡が惜福延壽といふ所なり。今海内久しく太平の化にほこり。奢侈の風日々にきそふ。謹みて古をおもふに。武田信玄の制詞に。妻子の衣類。壹萬石所持之士者。京染等の小袖。五千石より下は薄板。五百石より下は紬。百石の内外は布子たるべき事。又いはく。親族の間。一とせの内。[illegible]振廻の義二度。二汁三菜之外。可停止事。又三好筑前守義長志を得てのち。妻の衣帶を京にもとむとて。一に曰。表は無紋の綾。うらは國紬。二に曰。表は國紬の長濱染。裏は示太山絹。三に曰。與紬の小袖。兩面無紋の黑。附けたり紅梅の帶五條と云々。二百年になんなんとして。その風すでにかくのごとし。近來酒店遊里次第にひろく。農をいとなむものは少く。そのうへ膏烟草ごときは無用のもの世にひろまる。是國家の貧しきもとゐなるべし。慶長十四年東照宮かつて烟草を禁じ給ふも。深く益なき事を察し給ひてなるべし。

謙を守れとの説

易の謙の卦は。艮の卦を下にし。坤の卦を上にす。䷎坤は地なり。艮は山なり。山の地のうへに高く出でたる。時として虧け崩るゝことあり。山地の、下にかくれて。その高きを示さず。坤は順にして。艮は止まるなり。物に順ひとゞまるべき所にして。進むことをもとめずして止まるゆゑに。人のきらひ妬みもなし。是謙の德なり。謙はへりくだるといふ字にて。物に高ぶらず。吾をつゝしみ。奢らざるなり。故に易の彖傳に。天道虧盈而益謙。地道變盈而流謙。鬼神害盈而福謙。人道惡盈而好謙。仰きて天を見れば。日高く昇れば昃き。月正に滿つれば虧く。ふして地を觀れば。潮も滿つればひき。水も流れて卑につく。鬼神造化のおとも。草木繁りては枯れ。人盛にしてはれとろふ。人情も奢恣なるものをばに

き木を柱とし。柱となすべき木を棟となさば。用には立敝つまじ。漢の高祖を名君といひしも。能々その人々の能を見たて。張良を師とし。蕭何を相とし。韓信を將とせし故なり。もし韓信を師とし。張良を先鋒となし。蕭何を行人なんどなさんには。たとひかちをとるとも。その驗おそかるべし。近頃。片桐石見守は。茶人のきこえありけるが。烟草の火入。唐金のわたり物にて。いかにもおもしろき器なり。人みなよき香爐なりと云ひけれども。石州そのまゝにして閣かれける。ある人その子細をとふ。石州の曰。是火入とすれば上品なり。香爐とすれば。下品なりと也。誠にこの心をもちて。人をつかはゞ。人々己一盃の器量をつくし。國家の益ともなるべきか。

客嗇儉約の辨

客嗇はしわきなり。儉約は始末なり。おなじ事の如く心得たらんは僻事なり。その跡似たりといへども。その用所大に同じからず。夫財寳は限あるものにして。望は窮なき物なり。限ある財を以て。窮なき望を遂げんとならば。日々に萬金を費し。天下をあげて。その用をなすとも。つくる事有るべからず。入るをはかりて出だし。財を節にし用をつゝしむは。天の道なり。しわきは。財をおしむ。始末は。財を節にす。節はふしといふ字にして。竹に節ある如く。よき程々にて止まる事あり。しわきは多く財を貯へんとなり。始末は用ふる所あるが爲なり。孔子。夏の禹王を謂く。菲飲食而致孝於鬼神。惡衣服而致美乎黻冕。卑宮室而盡力乎溝洫と。平日吾口體を養ふもの菲きは。鬼神に享祀する者は豊に潔くせんとなり。常の衣服を文らざるは。祭の衣冠を鮮にせん爲なり。吾をる家を卑ふするは。井手溝塘ごときをいとなまんとなり。是はかしこき君の敎。下々迄もその分々相守るべき事なり。青砥左衛門夜に入りて出仕しけるに。いつも燧袋に入れてもちたる錢を。十文誤りて滑川へおとしけるを。其邊の人家へ人走らし。錢五拾文出だして炬十把かひ。是をともして終に十文の錢をもとめたり。さて云ひけるは。十文の錢は。只今覓めずば長く水底にしづみて失ふべし。五拾文の錢は商人の手にありてうせず。彼にあると吾に在ると。何の差別かあるべき。かれ是六十文の錢をうしなはず。豈天下の利ならずやと云ひしとか

くる所をよしとす。されども。あるじの心あしくば。家退轉の基なるべし。婦は婦德正しく。從順至孝ならば。方あしくとも繁昌すべし。鳥のなき。犬の咎め。鼬。梟やうの物のなき。菌の生。燈のきゆるにも。忌み嫌ふ僻のふかくて。こゝろを惱すごとき笑ふべし。孟嘗君がいへるごとく。吾命を鳥犬などにうけなばさもあらん。もし命を天にうくるとならば。彼等いかんぞ人に禍をなすべき。口あるものは鳴き。羽あるものはとぶ。人の物いひかたるが如し。禽獸はもとより天地の偏氣にして。無智のものなり。夫に萬物の靈として。天地と並び立ちて。三才ともなるほどの人。かの無智の禽獸に敎へられなば。人はた禽獸の下に立つべきか。たとへば數代相傳の君。譜代の家來につかへたるがごとし。皆理といふものをしらざるよりおこれり。いたむべし。

人の所長を擇ぶべき事

間際筆記にのす。伴氏生質寡欲なり。尾山氏吝嗇なり。相交はる事睦し。ある人。伴氏にとひて曰。其元と尾山氏このむ處同じからぞ。然るに甚むつましきは何ぞや。伴氏の曰。尾山は才藝我にまされり。唯財に嗇し。このゆゑに我この人と交はる事十餘年に及べども。渠に我ためとして一錢を費さしめず。是を以て相善しといへり。人誠に長き所あり。短きところ有り。その長き所に交はり。短き所に交はらずば。德を得る事多かるべし。むかし歐陽永叔。易の繫辭を以て孔子の書とせず。文中子とるべからずとす。韓魏公これと相したしかりしが。此事をしりて。終に話こゝに及ばざりしとかや。永叔もふかく韓魏公の德に服して。百歐陽修を累ぬとも。何ぞあへて韓公を望まんといへり。朋友の道。義において忠に告げ正すべき事あり。勢いふべからざる事あり。能々工夫あるべし。ひとり朋をとるのみならず。君の臣をつかふも然なり。人の才同じからず。國の政をしるべき才あり。敵をきり。旗を奪ひ。城をのり。山を碎く才あり。國の財を量り。用をとゝのふ才あり。他國へ使し。君命を辱しめざる才あり。よく君をいさめ。人を規す才あり。その品さま〴〵なり。たとひ是等の才ありても。その場〳〵に使はざれば。吾存分の働なりがたし。大工の木をつかふがごとし。いかによき材木を集めたりとも。梁となるべ

ろす事有り。弟に丑の年の者あれば。嫡家に祟ありなど。口にいふのみならず。書に筆し。人を誤る事あげて歎くべからず。諺に。盲千人。目明千人といへども。盲千人。目明一人にも及びがたければ。一人の手。一河の流。支へがたく。人の心に城をなし郭をなし。その惑ときがたし。異朝にもかゝる事ありしにか。齊の威王の少子に靖郭君田嬰と云ひし人の妾懐妊して。五月五日に子を生みけり。その頃の諺に。五月五日に生れたる子は。男子なれば父を害し。女子なれば母を害すといへり。是に因りて田嬰快からずおもひ。努々是を生育べからずといひけるを。其母かくして是を養ひ。田文と謂ひけり。長じてその兄弟へ頼み。父田嬰に逢ひけり。田嬰快ばずその母に謂ひけるは。吾この子を養ふ事なかれといひしに。何ゆゑにかくはこしらへけるぞと云ひければ。田文畏まりて。何ゆゑかくは五月の子を忌み給ふかと問ひけるに。五月の子者。長與戸齊將不利其父母と答ふ。田文きゝて。人生れて命を天に受くるか。又命を戸にうくるか。もし命を戸に受くとならば。隨分その戸を高ふすべし。誰かその戸とひとしかるべきと云ひける。田嬰も理に屈し。その後は餘子とおなじくつかへけるが。田嬰子共四十餘人ありし中にも。此田文こそ孟嘗君とて。齊の國も此人有りしゆゑに。隣國よりもおもくおもはれける。今男をころす女。女をころす男などいへるも。往々しるしをたてゝみるべし。盡く左あるに非ず。又その外の年の人も。早く夫に後れ。妻に離るゝもいくばくぞや。是はその人々の幸不幸なり。全く年のしわざにあらず。明の太祖。天下を得給ひてのち。朕と年月日時を同くして生れたらんものは。いかゞ有るべしと思召し。あまねく尋ね給ひしに。一人をもとめ來れり。見たる所やせつかれたる野夫なり。汝。何を業とするぞと問ひ給ひければ。蜜十三籠をやしなひて。世をわたる由こたへけるに。此の何事をかなすべきとて。放しかへし給ひしとなり。或は畜をもとめ木をきり。首途。家移。方を立て日時を改め。禁忌甚多し。東家之西。西家之東とて。東のかたの家の西は。西の家の東なり。南にをるとおもふ人も。又その南にをる人のためには北なり。屋敷は水難なかるべく。山潮など來らず。月日の影正しくう

も陰陽師の門に逢たゐずとて。あまりつよく物をいめば。尊とる日とてもなくなり侍る。よき日なりとて。悪事をなしなばあしかるべし。悪日なりとも善事なしなばよかるべし。目のあたり試むべき事には。天火地火の日なりとも。五穀を植ゑて。よく培ひ耘りたらんには。よき日を擇みて植ゑ。培はず耘らざるよりは遙によかるべし。若又麥の春の霜にいたみ。稻の秋の風にあれんは。吉日にうゑたるも。悪日に植ゑたるも。おなじく損はるべし。もし又洪水火難等に逢はんには。吉日に建てたる家も。悪日に建てたる家も。おなじく波にゆられ。又一片の燼となるべし。武王以甲子興。紂以甲子亡といふ事あり。周の武王殷をせめ。甲子の日にあたりて。殷の紂王を亡し給へり。同甲子なれども。武王の爲には吉日にして。紂王のためには悪日なり。湊にかゝる船の。東にゆくは。西風を順風といひ。東風を悪風といふ。又西にゆく船の爲には。東風順にして。西風不便なり。もとより風に順逆はなく。吾ゆくに順逆あり。日に吉凶なし。我に吉凶あり。とかく悪しき事をする日は。すべて悪日なり。よき事をする日は。すべて吉日なり。吉凶豈外にもとむべけんや。適。日を擇まずして成就せざる事あれば。手をうちて日時をゑらまざる故なりといひれもふ。左あらば。吉日選みてんには。千が千成就すべきや。世の中の吉凶禍福は。人間の常にして。たとへば糾へる縄の如く。上になるもの下になり。下なるもの上になり。變化定なきものなり。たとへば一握の糠をとりて。水にながさんに。先だちて流るゝあり。後れて流るゝ有り。風にふかれて何かたともなく吹きゆくもあり。又先だちたるが石に礙られておくれ。後れたるが先だつも有り。おなじく掌に入り。一同に掌をはなれても。そのゆく處。各。同じからず。又一本の木なりとも。一段は神を彫り。佛を造り。首をかたぶけ。手を合せて。人に貴ばれ。一段は踏板。足駄の類となりて。人に踏まれ。木屑は薪となりて。灰汁桶の苦にあふ。おなじく生をうけながら。その用ひらるゝ處は天壌なり。よりておもへば。年月日時をくり合せ。易の六十四卦に配し。一代の吉凶をとくは。覺束なき事なり。且甚しき害ともいふべきは。その生年によりて。女。男をころす事有り。男。女をこ

みな學なり。書をよむとも。身をかへりみ察する事なくんば。一向草紙。淨瑠璃本をよみて。心を慰むべし。鏡をみるはかたちをつくるためなり。書をよむは。身を修むるためなり。笠置の解脱上人。如法の律儀興隆の志ふかく。六人器量有り氣なるものを見たて。持齋律學せしが。其内一人。のちには持齋もやぶれ。已が房に兒どもあまたれき愛しけるが。さほ川といふ川にて。魚をとらせ。自下知して。弟子の僧に火をたかせけるに。鍋の湯あつくなるまゝ魚跳り出でけるを。兒是をとり。手水桶の水にすゝぎ鍋に入れけり。房主悦び。よし〳〵よくしたり。兒どもは夫底にれぬがよしと謂ひける。同宿の僧。是は犯戒にては何ぞとゝひけれハ。聲聞戒には。波逸提。菩薩戒には波羅夷なりと答へける。しらずば無知ともいふべきを。慾に戒相明に説きけるこそをかしけれ。されどもひとり此僧のみにあらず。此轍をふまざる事はかたき事なり。書を讀まん人。この僧のために笑はるゝ事なかるべし。或は過をかざり。人にほこる具と心得。手にもたらぬものなど取りつめ。或は身の過など。人の異見にあへば。いろ〳〵勝手によき事とり集め。辨にまかせて云ひまくる。たとへば食は身を養ふべきものなるを。儃して人をも食傷させ。吾も食傷したるが如し。

五行家の説害多しといふ論

物として其弊あらざるはなけれども。陰陽家の説。尤。人に害ある事多し。その事は。もと陰陽五行を推して。旺相死囚勞の理を出でずといへども。遂には枝により葉により。大に理に戻る事あり。四季に大將軍遊行の方ありて。春は東。夏は南。秋は西。冬は北を塞がりとして。諸事動作にいむ。正月丑。二月辰。三月未。四月戌。五月子。六月卯。七月午。八月酉。九月亥。十月寅。十一月巳。十二月申の如き月塞として。六十甲子。寅より午に至り。金神遊行の方とし。日を以ていへば。子の日に子の方。丑の日に丑の方をいむ。又方に金神七殺の方あり。九坎。五貧八貧。十死。歸亡。往亡。凶會。大禍。赤口。赤舌。狼藉。滅門。沒日。滅日。黒日などいひて。多く事を廢する事あり。成程一通俗にしたがひ。冠昏の如き大事には。吉日をえらむもよかるべけれども。物事に忌み嫌ふ心ふかく。時を失ふ事。愚なるに似たり。諺に

ける人々一同に笑ひける。泰時うちきゝて。いみじくも。負けゝるものかな。某代官として。久しく成敗しつれども。かゝる事うけ給はらず。あはれまけぬるときこゆる人も。適はぬ迄も陳ずる習ひなるに。前の一通さもときこゆる所。領家の御代官申さるゝ所肝心ときこゆるに付き。何事なくまけ給へる事。返〳〵もいみじく聞え侍り。正直の人にて御座けりとて。打ち涙ぐみ感じ申されければ。始めわらひつる人々はにがり切りてぞみえける。是によりて訴論殊更の僻事もなかりけるにこそとて。まけ様を感じ。六年の未進の物。三年迄ゆるしけり。たとひ訴論まけになり。いかなる事にあはんとも。いつはりはいふべからずと。わが心を欺かぬ誠ゆゑ。人をもかくは感せしなり。

碁將棊に遊ぶ人の箴

碁。象棊。握槊その品はかはれども。人の心を奪ふ事は同じ。或は一二の遊侶を迎へ。或は旅路の憂をわすれ。鬱をひらき。生を慰めんにはよし。又何もつとむるいとなみもなく。手を拱き人ごとなどいはんよりは。物と相忘れんはよかるべし。平生の勢力を是につくしてんは。その器小きに似たり。誠に局にのぞむときは。盛衰勝敗ありて。甚おもしろきものゆゑ。夜のあけ日のくるゝもしらざる物なり。よりて是を木野狐ともいへり。晋の陶侃といひし人。枰を江にしづめしも。事に害ある事を察してなり。近頃黒田如水軒。石田三成と怨をむすばれしも。その事碁より起れり。畠山か讒にあひしも。平賀武藏守と。六郎重保と碁を爭ふよりおこれり。さいへばとて。此事しらざれといふにもあらず。身謙り。人と爭ひいかる心をやめて遊ばゝ。時として養生の道ともなるべし。

書をよむは身を脩むるためといふ説

書をよむにも。日用の事に交はるにも。一つ〳〵かへりみて我身のためにせば。あしき事は側となり。よき事は鑑となり。日々にその德すゝみて時として書にはおこたるとも。學には益すゝむべし。學はまなぶと訓じて。鳥のとびならひ。猫の玉をとるも。みな夫〳〵の方をまなぶなり。人は人の道を學ぶが學なり。四書。六經も。人となる道。人を治むる道をこそとき給へれ。是によりておもへば。日々の事

りける。人志るまじきとて欺くハ妄なり。四知といひて人志らずとれもひても。天しる地しる神しる。吾しる。いかでかれはひかくすべき。たとへば一升の米。日々二三十粒をとらんとも。措んとも志れざるべし。然れども久してれく時ハまし。とる時ハへる。草木も朝みしいろも。暮にみし色も。きのふみしもけふみしも。さしてかはらぬ樣なれども。誠といふものすこしの間斷なき故に。いつ太るともなけれども。次第にふとるものなり。人のみぬ間とて。間斷あらば。草木もれもふまゝにハのびもせまじ。深き谷の蘭も。遙なる山の紅葉も。人なしとてもよく薰り。うつくしく照ればこそ。人至りたるときも香きよく色麗ハしけれ。人の至るを待ちて香をはなち。色を出ださんとせば。筈にあふ事あるべからず。常々心にかけて。帚灑したらん座席と。俄に蜘の圍とり。柱ふきたらんハ。いかでか見まがふべき。人平生をたしなまずして。その期に臨み。僞に文らんは誠の俄掃除なるべし。如見其肺肝とて。人欺くべからず。我心を欺くなり

　僞も人にいひてハやみなまし
　心にとはゞいかゞこたへん

この歌の如く。人をば欺くべけれども。心に心を顧みて。いかに今の如く誠ならざる事をばせしといひしぞ。人をば欺くに。などて自の心を自は欺けると咎めたらんには。自耻づかしくなんゝひとり居ても額より汗出づべし。畠山重忠。鎌倉殿の不審を蒙りし時。僞なき旨を起請を以て申し上ぐべしと有りければ。我一生いつハりをいひし事なし。いつハりなきと申す上は。此事に限りて起請をばかくまじとて。終に書かざりしこそ。勝れていみじくきこえ侍る。人は我意の有るものゆゑに。一旦我いひ出だしゝ詞は。たとひ惡しと案じ當りても。是非にいひ募りて。我を立つる物なり。是腐ちたる實のごとし。實といふ物を探題うしなひたるなり。常式の者この意あらば。人に憎み疎せられ。人の主人となり。奉行頭人なんど。この意あれは。人をやぶり。人をそこなふ。北條泰時政をしられける時。下總國のある地頭。領家の代官と相論あり。對決に及ぶとき。領家尤なる道理申し立てけるとき。地頭手をはたとうち。泰時のかたにむかひ。あらまけやといひけれは。並み居

澤を蒙らざる物あらんや。仰きても恐れ有り。その有りがたき所を渇仰すべし。倘その所々の徳澤ある。神しかく愼み守るべし。我親方の如く心得たらんハ。いかばかりか勿體なき事なるべし。孔子曰。敬二鬼神一而遠レ之となり。遠さくとは。なれあなざるべからずといふことなり。

佛舍利の辨

佛子の舍利ある事を稱揚して。儒者にほこる。古來種々の辨あり。おもふに是は氣血のこれるもの。燒くによりてなるものなり。儒者は火葬をいむ。その有無ハしるべからず。このものありとも何にかせん。

誠といふ説

一勺の水を海に入れて。海の水增したりといはんは愚なり。まさずといふは妄なり。水をくハふる所ハ我にして。增すと增さゞるとは。我にあらざる物はしひて其辨をもとめずして可なり。我に在る處のまことをつくす。是君子の道なり。誠とは。うそをいハざる事とのみ心得たらんは愚なる事なり。ある人。司馬温公に誠にいる方を問ひければ。妄語せざるより入るとぞ。成程妄に語らず。うそをいはぬより。

誠の道にハ入るなれども。虛言をいハぬを誠といはぬなり。いつハりをいはぬに對する信ハ小し。僞なきに對する誠ハ大なり。罌粟の子。煙草の實ハ。至りて小きものなり。地におとせば目にもかゝらぬ樣なれども。内に一つの誠といふ物ありて。奪ふべからず。隱すべからず。昧すべからず。覆ふべからず。その時いたるに及びてハ。芽を出だし葉を生じ。花を開き實を結ぶ。その子水に腐し。火にやきて芽を出ださずといふハ。その子の尤ならんや。これによりて物の子を實といふは。實は則誠なり。一つも誠ならざるもの有りて。腐れたるものハ生ぜず。痛みたるハ苗瘁く。人の誠も倘かくの如し。昔衞の靈公といひし君。夜夫人南子と共に坐し給ひけるに。遙に車の轟く聲しけるが。闕下にして聲なく。闕下を過ぎて。又鳴りけり。靈公誰なるべきやと。南子にとひ給ひければ。是は蘧伯玉なるべし。禮に下二公門一式二路馬一といふ事あり。忠臣と孝子とは。不下爲二昭々一信上レ節。不下爲二冥々一惰上レ行といへり。蘧伯玉ハ衞の賢人なり。夜なればとて禮を廢せじといひける。靈公人を使ハして見せしめけるに。果して伯玉にて有

て。生死貧富は命に委すべし。左いへばとて。我生業をもすてよといふには非ず。すこしも非分のもとめをせず。生業をいとなみ。此上を命にまかすべし。まへにいへる如く。父母。兄長の災をいたみ。天に祈るがごとき尤なり。人はもとより天地の間に妊れ。天はちゝ地ははゝなれば。或は年の旱にあひ。不熟にあはんには。雨をいのり。年をいのる。すべて吾實にあり。或は大赦を行ひ。窮民をすくひ。奢を省き。人の心。大に悦び和する樣にして。年をいのり。雨をいのらんに。などか感應なからん。人の心和すれば。天地も感應するものなり。香花をそなへ。僧巫に祈らしめんは。抑。末なるべし。今の人。神に詣で佛にまうで。何事をつぶやくかとれもへば。或曰。家運長久。或曰。子孫繁昌。或曰二世安樂。又曰七難即滅。すべて我勝手のよき事のみ取りあつめて。神の正直。佛の寂滅なるものをばとり失ひ。災難にかゝれば。世の中には神も佛もなき事かと騒ぎあへり。死生有命。富貴在天といふ事をしらば。かゝる非分のもとめあらじ。今日のことにも。吾敬ふべき人には。衣服を改め。物ごとに念を入れ。施

忽なる事もいれぬ樣につゝしむものなり。いかに神もののたまいぬとて。心やすくれもひ慢り。人にさへ云ひがたき事を。この者れ我妬くれもひ候へば。ころしてたび候へ。此女には會せてたび候へ。富貴になして給へなど。是。非分の望にあらずや。上に立たん人に。かれをばころしてたべ。是をば我に下しれかれよ。米下されよ。金下されと。理不盡に望せんに。誰か尤ともふべき。たとひその事かなふとも。神のしるしにや。又もとより左あるべき筈にやありけんしるべからず。一つ二つかゝる事有りともすべて有るべきとにもあらず。近世はやる富といふものゝ如し。千百人の內に仕合なるもの有りて。一人金を取りたりとて。吾もさこそと。生業も打ちすてかゝらんに。取る事も有るべし。大方はとらぬものなり。中に小賢しきものは。その得失を考へ。始めよりかれぬほどに。損もなく。得もなし。ある人の曰。然らば神も佛も無用のもの。予が曰。左にあらず。天照太神は。我國の太祖として。天皇孫長く此國を治め給ひ。御座北極の星とともに動かず。人は更なり。雲にかける鳥。水に潜む魚まで。その德

又道人にかくと告げければ。さぞあらん。直にその碁子を持ち行き。數はいくつと問ふべし。幽靈けつして數を云らじ。その時。此碁子を投げ付けなば。幽靈全く來るまじといひけり。男又たちかへり。數はいくつと問ひければ。答へず。ときに碁子を取りて投げ付けゝるに。掻きけすやうにうせけるが。再來らずとあり。吾心の妄想より起るものなれば。我しる事をばかれもしる。碁子の數は我しらざる故彼しらず。彼しらざる時にはけつして出でず。吾こゝろ決定する故。目明にして眼花なく。耳さはやかにして蟬も嵐もなきが如し。故に眞言陀羅尼。是によりて魔魅決して近つかじと決定する故。是ををかすものなし。漢のとき。汲の令。應郴といふ者。主簿杜宣といふ人に見えけるに。ともに酒を酌みけるが。高き處に弩をかけ置きけるが。杜宣か盃に映ひ。宛然蛇のごとくみえける。快からずは思ひけれども。しひて是をのみけるに。其日より胸腹裂くるが如く。療養手をつくせどもしるしなし。其後應郴行きて事の子細をきゝ。きつとかの弩をみつけて。強て杜宣をれこし。ものゝ所にれき酒を酌ませけるに。かの弩の影うつりて。蛇の如し。よりて是は弩の影なりとさとしければ。杜宣大に悦び。是より疑とけ。病いえけり。是は此あたりの事なりし。ある禰宜。小村祭の返りに夕立にあひ。大鼓もちながら。ぬれぬれて過ぎけるを。是をばしらで。又一人同じく。雷の鳴るがれそろしさに耳など抑へて走りけるが。俄に電ものして。霹靂しければ。あはや我かしらのうへに落ちかゝりけるかと覺えて。かたへの溝に落ち込みけるに。禰宜も同じく上に落ちかさなりて。互に肝を潰し。只一息に逭げけるが。其後我こそ正しく鳴神といふ物みたりといふに。いかなる物ぞとゝへば。鄰の村の禰宜何かしに少もかはらずと云ひければ。人々噴き出だしけるに。左なの給ひそ。慥に大鼓までもちて居られたりと云ひけるとぞ。世上の妖怪思ふに此類多かるべし。夫一世の間を觀ずれば。慶あり。哀なり。貴くしては公侯となり。零落しては非人乞食ともなり。生るゝ事あり。死する事あり。此世の中の姿なり。花ちれば子を結び。葉落つれば芽を生ずるか如し。この所をよくしりて。非分のもとめをやめ。君臣。父子。夫婦。兄弟の道をつくし

又もとの所にやりてんやと云ひければ。もとの所にもち行きけり。玄からば持ちて市にゆきてんやと云ひければ。女ども再拜して。是寛厚の長者なり。犯すべからずとて。皆逃ちりけるが。そのゝちは何事もなかりきとなり。又漢の張遼といふもの。田を買ひけるに。田の中　大なる木あり。耕作　邪魔となりければ。人をきりに遣はしけるに。切口より血出でけり。人々驚き返りてかくと申しければ。老いたる樹は汁出づるなりとて。自下知してきらせけるに。中に大なる穴ありて。長四五尺ばかりなる白髮打ち垂れたる人の如き物出でゝ。張遼が方に歩みよる。張遼むかへて打ちころしければ。つゞきて箇樣なる物四迄いでけるを盡く打ちころしてける。よの者は怖れて地にふして居たり。子細に是をみるに。人に非ず。獸にあらず。怪しげなるものなり。遂に其木をば切り取りけり。その年天子より司空に辟され。侍御史袁州刺史となりけり。天地のかぎりなき。其變怪も又かぎりなしといへども。是正人君子ををかすにたらず。變怪にあらざれども。變怪とみれば。自變怪なり。化物におひたりといふ。多くは夜なり。

勿論かゝるものは陰物にて。夜氣に乘じて出づといへども。夜は朧にして。物の文目もはからぬものなれば。松の木の繁れる。石の立ちたる。尾花の戰まで。あやしくみゆるものなり。これをうろたへものの見誤りて。唱へたるが多し。かゝる事をかたるものは。必慥に見たるごとくかたるものなり。又平生虚をいひなれたるものは。跡かたもなき事をも。理窟よく拵へてかたるものなり。成程世上にかゝるものなしといふにもあらねど。さまで澤山ある事にもあらず。こはおそろしと思ふ時は。其虚に乘じて。いろ〳〵のもの變怪をなすことあり。むかしある者の妻の死しける。出でやせまじとおもひあたるが。むかしの有りさまの如く。よる〳〵來りける。男大に難義して。祈禱手をつくしけれども。玄るしなく。ある道人にゆきて問ひけるに。道人碁をうち居けるが。碁子を一握かれが手に入れ。かの幽靈にむかひ。是何ぞと問ふべし。これを玄らずば必きたるまじ。若し玄らば黑か白かをとへといひければ。いそぎかへり。是は何ぞと問ひければ。碁子といふ。黑か白かと問ひければ。その色をこたへけり。男おそれて。

もし吾行ひ理にもとるに於ては。その神其佛と限るにもあらず。天神地祇。或は人誰か是をいからざらん。神や佛のしわざにもあらざるを。神佛に僻事いひかけてん。佛神照覽あらば。いかでか是をにくまざらん。神は人を護り。佛は世をすくふとこそきゝ侍れ。木一本きり候。花一枝をり候。あるひは參り年のあしかりけりなどゝて。無下なる目に人をあはせんは。人だに長しき人はかゝる偏執はなき事ぞかし。是等も病苦災難は。時としてあるものといふ事をしらぬゆゑなり。もし又かゝる非分の祟をなす佛神あらば。その祠ともいへ堂ともいへ。毀らすべし其權なからん人は。左樣の所に行ざるべし。唐の狄仁傑といひし人は。淫祠千七百處を毀ちけるとかや。

豊前小倉の城內に一の小き祠有りけり。何の神といふ事をしらず。城主此地穢多し。城外淸淨なる地を擇みうつすべきとありけるに。俄に眼痛み出だし甚しかりけり。人々是は神の祟なるべし。祠を移す事しかるべからずと云ひければ。城主いかりて。穢はしき地を淸淨の所に移さんと云ふに。吾なんの過かある。夫に祟をなす神ならば。邪神なり。恐るゝにたらずとて。急き其祠をこぼち。城外に持ち出だし焚き拂ひけるに。眼もたひ〱いえけるとなん。又一種妖怪あり。ひとり狐狸のわざのみならず。犬。猫。蛇。猿やうのもの。木。石。深山。大川いろいろの精怪あるものなり。されど。正しき人をば犯し得ざるものなり。むかし魏元忠公。未家にいられし時。ひとりの婢ありけるが。庭にひとつの猿來りて火焚きけるに。大に驚き。かくと申しければ。我僕なきをしりて手傳するに社と云ひて見やらず。又公家來のものを呼びけるに。犬人の聲してこたへけるを。孝順なる狗とてほめられけり。又獨坐して居られしに。鼠など大分集り。前に手を拱して居たりけるを。汝が輩。食にうゑたりやとて食をあたへたり。又ある夜 鵂の家の軒に來りてなきけるを。家の者どもうたんとてひしめきけるを。かれは晝目のみえぬゆゑに夜飛ぶものなり。南のかた越にゆくとも。北のかた胡に行くとも。彼が心にまかすべしとて。打ち捨ておかれけり。又ある夜。女ども多く集り。公のまへに立ちけり。公是をみて。我床を堂の下にれかんやといひければ。あつまりて舁きおろしけり。

目を病む人ゝみるには。五色の輪相かさなり。虹の如く煙の如し。一物もなき大虚も。花ちり蟲の翔るが如し。何の音なき所にても。耳をやむ人の爲には。のはげしく吹きしきり。蟬のかまびすしく鳴くが如し。實に此事あるにあらざるも。一心顛倒すれば。種々無量の變怪。眼に遮り。耳にそふ。我かつて史をよみし時。秦の二世皇帝。關羽。張飛など夢み。詩集をけみせし時。孫光憲などゝ詩などつくりし夢を見けり。是によりて思へば。僧徒の或は極樂にゆき。閻羅王にあひ。地獄の有りさまなど夢に感ずる事さも有るべし。夢はもと心の影像にして。あやしむにたらず。ある人のかたりし。おもひもよらぬ事を夢にもみるなれど。傘さして鼠の穴にはいる夢はみずといひしを。かたへの人の。此話きゝたらん人は。みる事有るべしといひしは。尤におぼえ侍る。夢は心の靈より發すれば。偶さきの事にあふ夢も有るべけれど。夢ごとに左あるものにもあらず。或は五臟の病により。あやしき夢もあるものなり。ある人のいひし。我はよき夢みたりとて。嬉しともおもはず。あしき夢みたり迚。あしくも思はず。あしき夢をば。よき夢のさしつぎとなし。よき夢をばあしき夢のさしつぎとなすといひし。一時の戲言ながら。おもしろく聞え侍る。右云ふごとく。神に祈り佛にちかふも。我靈所自然に感ずる事あり。又病いえなんとし。或は災。已にさらんとする時にあたりて。その驗の如く。思はるゝ事あり。又狐狸の業として。色々のあやしき事などしいだして。世にはやる事あり。一旦その言しるしある事もあれども。久しうしてはその驗なきものなり。又機をまうけ。或は幣を動かし。あるひは佛に光明さゝせするごとき事をこしらへ。人をたぶらかすものあり。是も大勢ゆく中には。病なほるもあり。死病にあらざればのちはよきものあり。是等のものいかでか人の禍福をなす事あらん。中にもわきてかなしきは。病難災苦にあひ。物の辨もしらぬ神子山伏やうの者ども。こと〴〵しく誣などとりて。其神の祟。其佛の祟と驚かせば。大に恐れわなゝき。家財重寶もをしまず。取り出だし賴むにぞ。過分の得して。驗なければ。主人の信心なきを云ひ。供物のたらぬなどのゝじる。やゝこゝろよき時は。大にほこりおごるこそやすからね。

驗を得べし。佛舎利なりとも信ぜざらん人には。しるし有るべからず。もの我心より靈なるはなし。心のむかふ所。自その信あり。鳴り物もたゝくときにはなり。たゝかざればならず。我一生餘念なく信向せんに。などかその感應なからん。磁石い鐵をすふも。磁石鐵をすふの誠あるゆゑに。鐵感ずる事ありてよる。唯の石を以てすはせんとせば。いかでその驗有るべき。幻術者の幻をなすも。平日の力すべて爰にあれば。人の目を奪ふ樣　事もあるものなり。一向そのしるしなしといはんも偏なり。むかし唐汝南鮦陽といふ所に。田にてひとつの麏を得たり。主いまだ取らざる內。商人ども車に物をつみて通りけるが。是をみてとり。車にのせ去りけり。不意の物なればとて。鮑魚一喉をその所に殘し置きたり。頃(しばら)くありて。その主徃きてみるに。最前の麏はなくして。鮑魚のみ有りけり。因りて大に怪しみをなし。偏くかたりつたへけるに。次第に發向して。病をいのり。禮をもとむるもの引きもきらず。終に宮をたて。鮑君神とあがめ。巫など數十人集り。もてはやしける程に。數百里きゝつたへ〳〵。その事大かたならず。其後程へてかの商人來り。此由をきゝ。是は我おきし魚なりとて。堂に上り取りてすてけるが。そのゝち何のしるしもなく成り行きにけり。物之所聚斯有神。人共奬成之耳といへり。一喉の鮑魚。さまで禍福をいかでかなし得ん。されども。人の信仰するに至りては。この心迷ふがゆゑに。病ましぬれば。運盡きたりといひ。或は神のうけなきと明らめ。驗あれば。神の德とおもふ。物每我心にかく有らんとおもへば。左ある樣に覺ゆるものなり。鷄はいつもその鳴く聲にかはりはなけれど。コッケコウロとなくかと思へば。コッケコウロといふが如し。東天光　啼くかとおもへば。東天光といふが如し。とつてかへろときけば。とつてかへろといふが如し。和州菩提山の忠寬正信房といひしは。よく眠る人にて。人。眠の正信と云ひけるが。ある夜鷄のなきけるを。寢耳に。御所より忠寬とめすときゝなして。あわたゝしく御前へ參りけり。是は何事ぞと有りければ。召され候つると申しける。さる事なしと仰せければ。猶鷄の聲する方をさして。あれ忠寬と御召の候ひつるぞと申しける。燈はひとつ光りながら。

と有りければ。この御堂造立の間。非分に人を惱し給へる分を。御得分の物にて。償ひ返し給はゞ。目出度侍りなんと申されければ。そのゝち悉く尋ねきて。人夫迄もいとまの分をぞ給ひける。今日堂塔供養壯嚴とて。餘義なく人をすゝめ。あるひハ金銀の利足に人を潰し。夫役にくるしめ。玉をまき。金をちりばめ。我ハがほなるハ。かの阿闍梨のいひし地獄にこそ落つべけれ。心だにその道に適ひなば。堂塔の奇麗にハよらざるべし。近ごろ

縱横の五尺にたらぬ草の庵
結ぶもつらし雨なかりせば

と讀みし人もあり。瞿曇の教はいざしらざる事ながら。人情を以てはるかに。恐くはその道とする所。大厦廣門の謂にはあらじ。堂塔寺院。輿馬僕從。衣服家具は。たとへば匣の如し。我道とするものは。たとへば玉のごとし。匣いかばかりいみじくよそほひたりとも。玉なくば何にかせん。匣そこ〳〵にしつらひたりとも。玉だにあらば。人誰か是をいとひすつべき

おとし物したる主と拾ひたる主と曲直裁判の話

宋朝夫婦餅をうりて。生業とする者。あるとき。道の傍に銀の軟挺六。嚢に入れておとしけるを見付つけゝるに。もとより正直なるものどもにて。何とぞ返さばやと。普く觸れけるに。その主といふ者來りければ。是をわたしけるに。三をば御邊に奉らんといひけるが。をしくやなりけん。此銀七ありしに。六あるこそ不審に候へと。怪みけるを。ひとつとり候心に候へば。何しにかくは返し申すべきといへども。兎角して論果てず。所の太守へ訴へける。太守見付けたる者をば。正直とみながら。別の所に妻をめし。事の子細を問はるゝに。夫の詞に違はず。よりて奉行。見付けたるもの夫を引き籠めずして。元の主に返さんとするは正直なり。今主といふもの七あるを落したるなれば。この軟挺にはあらざりけり。是をば。夫婦の者にたぶべし。彼ぬしは七あらんを求めて取るべしとぞ判れける

物の怪の辨

靈驗は我信の有る所にあり。強ち何の神。何の佛とさすべきにもあらず。鰯の頭も信向せん人は。その

のみいひて。手柄の様に心得たるもの有りといへども。是は道理にたゝぬ事をいふものにて。正しき人とハ其わかち分明なり。人にいさめ正さるれば。かれかやうにいへども。渠もこの過ありとて。還りてさきの人の悪を捜しもとめて。露改むることをしらざるものなり。とかく我心に僻なる事を多くいふ人ハ。よき人と心得。うまき事のみいはん人ハ。よく〳〵察すべし。此事貴賤によらずと雖。尤。人の上たらん人のおもふべきことなり。左程に心得ても。人の氣に入らざる事ハいはぬものなり。又その異見を聞きて。夫通例の事。その方差圖に預るべきかなど。横さまの利口に。正しき人は口を噤み。痒き所を掻くやうなる人のみ集り　我身の過ハいふ人なければ。しることなくなりゆくものなり。左いふ人定めて親切ならんかとおもふに。一旦勢ある時に手をつき。足をかゝへしにハ似ぬものなり。是を炎涼の世態とて。火あり煖なる中こそ。打ち會ひて手を炙るものなれ。炎つき火きえては。そのほとりをみやる人もなきものなり。又勢ある時より。左のみ媚び諂ひもせざりし人ハ。零落したりとて。むかしにかはる心はなし。君子之交淡如水小人之交甘如醴といへり。一旦膝を交へ。手を携へ。兄弟の如くいひ睦びしも。恨纎芥ハ間におこり。腕を握り齒た切る事あり。醴ハ甚あましといへども。久しくは香うつり。味變ず。水ハ始より味もなく。香もなしといへども。幾年をかさねてもかはる事なし。故に君子の親み交るを和といふ。小人ハ親み交るを同といふ。和とは鹽梅の如し。たとへば一杯の羹といへども。あるひハ鹽をさし。或ハ水をいれ。いろ〳〵とそのよき様に正して忤ハざるゆゑに。きハめて旨き味となる。同とハその心の合ひたるにまかせ。善悪の差別もなく。成程尤と同ずる計りにて。正す事なければ。水に水をいるゝが如し。幾久しくかゝりても。よき味にハなるべからず。是同なり

堂塔建立の説

宇治殿平等院を建立し。阿彌陀堂供養有りけるに。山僧何がしの阿闍梨を御導師に請じ給へるに。施主分に。此御堂造立の故に。地獄に落ちさせ給ハんこそ淺猿く侍れととかれければ。聽聞の人々興をさましける。供養過ぎて。いかゞして此罪懺悔し侍らん

不可ㇾ不ㇾ以ㇾ子といふ事あり。親たとひ敎へずとも。子たらんもの。つとめてその道。其藝をしるべし。吾もとめば得ずといふ事はなかるべし。或は博奕に耽り。又色をこのむが如き。親のをしへなしといへども。至らざる所なし。この心を移して。道をもとめば。何事か求めがたからん

上たる者は下の邪正をよく察せよといふ說大小のわかちはあれども。人の上に立たん人は。其心得有るべき事なり。兎角人の上たらん人には。其下に立つものはいかにもして。其人の氣に入らんとのみ思ふものなり。故に顧を動かせば。左にはしり。眸を動かせば。右にはしり。勝負をあらそへば得をさせ。理窟をいへば道理を附け。其者の心にも僻事とれもひてぬ。十に九つはいはざるものなり。色を好めば。色を勸め。味を好めば味をすゝめ。故なき是式の進物に酒肉は更なり。幣帛財寶唯その人の氣色のよからん事を希ふ。肩をそびやかしてへつらひわらひ。御殿の塵を拂ふ。是等はよく〳〵心に明ゝ所なければ。賣僧衒の堺。分ㇾ難くして。正直律義の人と見なすものなり。得るに臨みて義を思ふとて。我ために宜しき事あらん時は。是は義か不義かと。其わかちを考ふべし。强。金銀ていの事のみには非ず。義に當りては舜。堯の天下をうくれども。へつらへりといふべからず。義にあらずんば。一錢の錢。半片の紙なりとも。いかでか心に快らん。むかし宋の子罕[襄十七年]といひし人に。玉を獻ずるもの有りけり。子罕うけずして。我は貪らざるを以て寶とす。女は玉を以て寶とす。爾が寶をうけんとすれば。吾寶を失ふなりとて。終に還しけるとなり。左こそなからめ。音物のなきにより心につるぎをとぎ。或は正しく諫言にてもいふ人をば。此節かれより辱をうけたりとて。其ひまを伺ひ取りたとす。誠に慾なきより淸きはなく。慾あるより汚はしきはなし。又正しき人は。わらへども。然とたもはざれば。容悅とらず。事の沙汰につきても。非をまげて理とせず。與ふれども義をはかりて漫にをとりて笑ひはせず。人の氣色のあしければとて。その爲に身を屈せず。或は時として異見をいふ。事情に親切なる事のみいふ。故に是らは結句無禮者。苦者。或は佞者などゝ怪しめらるゝものなり。勿論一流。人の心に障る事

し。拙者多ければ。節を失ふ事多し。質。醜きものは。いどむもの少し。拙者すくなければ。節を失ふ事すくなし。老子の詞。果して吾をあざむかず。

物に譬へて子たる者の教を説く

庭に栽うる草木も伸びたるを抑へ。倒れたるをたすけ。繁れるを洗し。長さをたちてこそ自然となれもしろき姿も出で來るものなれ。又直にのばさんとなれば、小枝をかきゆがめるをためなどすれば。直ちにのぶるものなり。うちすてゝ闇きたらんには。さのみれもふほどにはなり難かるべし。人の子を生育んも。有りのまゝにして教なからんはをしき事なり。五穀も生えたるまゝにて。くさぎる事もなく。培ふ事もなくば。かならずよくはみのるべからず。兎角手を入れてだによく登ることは稀なるものなり。生れつきよしとてをしへざるは。よき刀とてねたばつかぬが如し。よき刀のうへにねたば付きたらんには。なほ〳〵よくきれぬべし。生質うつくしからん人も。裸になして出だしたらんには文なくぞあるべき。うつくしき人にうつくしく衣紋引きつくろひたらんこそ。本意なるべけれ。よきといふにかぎりなく。理に窮なければなり。聖人の智も學ぶ事をすてず。ましてや其以下の人をや。犬は無智のものながら。よく教へたるはさとく。をしへざるは。用に立たず。又は愛に溺れて。わきの人の指南さへ。親の心に僻事とおぼえ。唯さむからんひもじからんとのみいひ思ひ。その我儘氣隨も。やがて直らん。長ならば家業にももとづくべしとおもふ内。月日人をまたねば。早指南の頃もすぎぬ。心ありてよき事いふをば。渠をにくむと心得。白地にそしりにくむ。是劍のうへに蜜をぬりて。小兒にあたふる如し。一旦あまく快よしといふとも。遂には舌をやぶるべし

世の中の麻は跡なくなりにけり
心のまゝのよもぎのみして

といふ如く。麻なくしては。よもぎもれもうまゝにゆがみねぢれて蔓るべし。たやたらん人の分には。それ〳〵の師をもとめよく〳〵教ふべし。其上にあしからんこそ。子の罪なるべけれ。いとをしき子を杖にをしへよとは。道にかなひたる諺なり。しかればとて。子の心に。吾は親の教へざればとて。親の過の如くに心得んは。子の道にあらず。雖父不父子

理窟と道理との辨

理窟と道理とへだてあり。理窟はよきものにあらず。たとへば。親羊をぬすみたるは。おやの惡きなり。親にてもあれ。惡は惡なれば。直に訴ふべしといへるは理窟なり。親羊を盜みしは惡ながら。親惡事あれば迚。子是をいふべき樣なしとて。かくしたるは道理なり。人死してはふたゝびかへらず。歸るべきみちあらば。なげきても歎くべし。かへらぬみちなれば歎きて益なしといへるは理窟なり。人死して再かへらず。歸るべき道あらば歎かずともあるべけれど。かへらぬ路こそ悲しけれなど歎くは道理なり

分限相應こそ長久の術といふ說

老子曰。美好不祥之器と。是によりて思ふに我家衣服。道具にいたるまで。我分限相應ならんこそ長久の術なるべけれ。詮ずる所。大厦千間夜臥八尺。良田萬頃日食二升とて。たとひ大なる家に金銀をちりばめたらんも。坐する時は膝をいれ。臥す時は足をのばすばかりにすぎず。たとひ萬町の田あり。膳に山海の珍味をつくすとも。腹をふくらかす迄の事なり。きものは寒をふせぎ。道具は用に適はばたりぬべし。刀はよくきれ。印籠は藥をだによくもたば。切羽鎺は銅にて。根付は小き瓢簞なりとも事たりぬべし。夫よき物を貯ふれば。我は人にほこる氣あり。人はうらやみ愧づる心あり。刀をよく飾りてさしける男。ある人の刀のあしかりけるを笑ひけるに。拵へのあしければとてきれぬ物かとて。打ち果しける事ありし由。間際筆記などにもみえたり。鹽冶判官は妻の美に身を失はれ。伊豆守仲綱は馬の良に命をおとせり。宋の孫甫といふ人に。ある人硯をあたへけり。その直三十千となり。孫甫この硯何故にかくは價の高きぞととへば。此硯常に濕あり。墨をすらんとする時。息を以て呵すれば。水流るとぞこたへける。孫甫是を聞き。硯たとひ一日に一擔の水をつくすとも。纔にあたひ三錢にすぎず。此物何にかせんとて。終にうけざりきとなり。又宋の呂蒙正に。鏡を獻ずるものあり。曰。此鏡よく二百里を照すと。蒙正わらひて。我面小し。何ぞ二百里を照す鏡をもちひんとて。二度その鏡の事をいはずとなん。古人奇物を尊まざることかくの如し。人の姿は天に得るものながら。今男女美質あるものは。いどむもの多

むべしとなり。かの臣心づき。家にかへり。我わたりの樹の目に障ればこそ。かくはまねぎ給ひつらめとて。已にきらんとせしが。いや〳〵君の心をよく察する者とおもはれては。行末むづかしとて。しらぬふりして打ち捨てたりけり。其後。君何やらん計の有りしとき。心さとき臣等疑をうけゝるが。此臣ばかり。右の事思ひ出で給ひ。何のうたがひもなかりしとかや。善となく惡となく。一旦の早分別に後悔する事。多きものなり。あるひは友達の中よく交りて。義の兄弟といひしも。一朝の怒に敵のおもひもなすものなり。古語に逢人只說三分話。未可全拋一片心と。多くは左樣御尤の世の中なれば。始の程はしたしきものなり。その時心の奥底もなくいひつくして。後日に悔む事あるものなり。さりながら。是は一通の論にして。唯世のありさまをとくものなり。もし義にあつく。信を守る人ありて。おなじく心をあはせんは。其上の事やはあるべき。又、幼約束とて。まだいとけなき後組子共などを。時の中よきにまかせ。言ひ名付けして悦ぶことあり。此事誠に變なくんばよかるべし。されど。人間十年憂も悦も打ちかはるならひなれば。あるは富めるが貧しくなり。あるは身上の難にあひ。あるは病あるは不和。終に人のわらひとなるもまゝある事なり。又はかりそめに通ひなれて。曉の鳥をうらみ。來ぬ夜の鐘に待ちわびなどして。偕老同穴と誓ひけるが。一入染の薄紅葉。いつしかに心うつろひて。夜かれの床をうらみかこつ心のやるかたなく。口舌嫉妬の端となり。恩愛。忽引きかへて。神にのろひ佛にいのり。或は理不盡の心中。或はひとり縊れ。一門親族の面をけがす。是等はもとすでに正しからざればいたむにたらず。或は若き女などの。新に夫におくれ。生きて世にあるべくも覺えず。いづくの淵瀨にも身を投げんなどおもへども。さすがに死にもやらで。髮などきりたるが。月日の立つにしたがひて。いつとなく心もかはり。髮のばすもあり。嬉しさのあまり、憤の餘におもひたることは、後には違ふものなり。賴朝石橋山の合戰にうちまけ給ひけるに。佐々木粉骨をつくしけるを感じ。吾天下を得ば。日本半國を以て。賞すべしと有りしかども。後には此沙汰なかりけり

見れば。箒のかたちの如し。よりて是を箒木といふ。されど。近づきてみれば。箒に似たる所もなく。打ち繋れりとかや。誠に遠くより見聞くど。親しくみきくは。多くは。此箒木の類なるべし。凡人の物を批判するも。吾このむ所をこそほむる者なれ。俠士に歌よむ人の評判させ。日蓮宗に眞宗の評判させんに。いかでか公論あるべき。同じ道を二人して行かむに。一人は健にして。この道ちかしといひ。一人はつかれて遠しといはん。是みちに違ひあるにあらず。心にちがひあればなり。たとへば。義經のことを論じて。義經をよしと思ふ人のいはんには。此人誠に幼より常人にてはおはしまさゞりけり。共に天を戴かざる讎を報ぜんと。夜々院を出で丶劒をうち。遙に秀衡が人となりをみて。是より飛鳥も落つるばかりの勢の平家を。二三年のうちにせめほろぼし。亡父の耻辱をすゝぎ。法皇の宸襟をやすめ奉り。再たびたえたる源氏をおこし。兄頼朝を天下の武將と仰がしめたりと云ふ。又義經に不滿人は。なるほど。此人戰爭一通りは自由を得たる人ながら。平氏を亡し。恣に時忠の女をいれ。梶原景時と詮なき口論。大將たらん人のしわざに似ず。腰越より。追ひかへされしも。いはれなきにあらず。然るを都に迯げのぼりて。頼朝に追討の院宣を申しうけ。芳野山にては。ひとりの靜にわかれかね。兒女子の淚をしぼられしなど。一人の義經。よしと思ふ人の論と。あしとおもふ人の論は。まことに雪と墨なるべし。其あしき所をすて。よき所をとる。是人を用ふる道なり。その惡きをばあしとし。よきをばよきとする。是公の論なり。また其分々の相應につきていふことあり。鼠を甚大なりといふとも。牛の小さには及ばじ。蛇を甚短しといふとも。蚯蚓よりも長かるべし。今日人をよしといひて譽むるも。惡しといひて毀るも。その塲〳〵を考ふべし

早分別に後悔多しといふ說

かりそめにおもふと。篤と考へると相違あるべし。むかしある君。樓をかまへ。是に登りて眺められしに。遠近の風景限なくおもしろかりけり。只一方にその臣何某が家の森深くしげりて。眼をさへぎりけり。よりてかの臣をめして。かれはかねてさときものなれば推量すべしとて。此樓より四方の風景を望

として好むことあり。是しるにも厚薄のちがひあればなり。圍碁は小藝なり。然してその勝つべき理をたづぬれば。たゞ先をするにあり。先をすればかつと云ふことは。しりやすき事なり。さりとて。先はしにくきものなり。善事のよきはしりやすくして。善事をするはかたき事なり

よしとほむるもあしと毀るも必察すべしといふ説

毀譽は人の大節なり。然りといへども。世擧りて譽るもかならず察すべし。人こぞりて毀るも必さつすべし。況。一人はほめ。一人はそしるをや。たとへば。訟事あらんに。兩方理なりと思へばこそ。互にいひつのりてやまざるものなれ。是を奉行のさばかんに。兎角ひとりはかち一人はまくべし。かぢたる人は奉行をほめ。負けたる人はそしることなり。又あしき人なりとも。それにともなふ人は。是をよしと思へばこそ交はるなれ。我よしと思ふをばほめ。我あしと思ふをばそしる習ひなれば。その毀譽によりて。その人の善惡も分ちがたし。おなじ一盃の酒ながら。上戸は醉ひておもしろきものなりといひ。下戸はゑひて苦しきものなりといふ。まして人傳などにきかんことは。覺束なきことなり。昔人ありて。其子をある寺へつかはし置きけるに。暫くありて。にげかへり。住持のことを誹りけるは。我に月代それといひければ。例の如く剃りけるを。そりやうのわきてあしきと。さんぐ\にしかられ。あるとき我厠にゆきけるを見て。何とて厠へは行きし不屆なり。向後厠へゆくべからずといひ。其後朝飯たくとて味噌をすりけるに。これも味噌をするがきこえぬとて。理不盡の次第。殆。困窮にれよぶとてかたりけるを。親きゝて。さりとては。出家にも似合ざる事なりとて。いそぎ山に登り。右の事ども語りけるに。住持きゝていやく\さやうのことにてはなし。常々髪よくそる故。このごろそらせけるに。いたく眠りて。これ見たまへ。このごとく切りこみ候ふとて。是をみせ。そのうへ厠も常の厠へはいかで。奥なる隱所へ行くをとがめ。味噌も常のみそをさしれき。客へ遣ふべきをつかふ。是等の指南をこそかへすぐ\もいたしつれと申しけるにぞ。親もことわりに伏しける。信濃の國その原といへる所に木あり。遠くより

學に志し藝に志す者の訓

今の人。或は學に志し。あるひは藝にこゝろざすもの。一旦憤を起し。晝夜をわかたずつとめはげむといへども。已に一月を經。半月をすぎ。怠る心はやく生じ。吾つとめの至らざるとはいはで。生質の過に委す。馬ははやしとて。朝暫くはしりてやまんに。いかでか牛の終日ありかんに及ぶべき。谷間の石の磨け。井幹のまるくなるも。豈一朝一夕の力ならんや。今日やまず。明日やまず。今年止まず。明年やまず。然して後そのしるしあり。人一生の力をその道に用ふるさへ。倘その奥儀にいたるはやすからず。況。我一月半月。乃至一年半年のつとめを以て。他人一生の功に比せんとす。思はざるの甚しきなり。むかし李白書を匡山によむ。漸く倦みて。他行せし時。道にして老人の石にあてゝ斧をするにあふ。是をとへば。針となすべきとてすりきといひけるに感じて。勤めて書をよみ。終にその名をなせり。小野道風は。本朝名譽の能書なり。わかゝりしとき手をまなべども。進まざることをいとひ。後園に躊躇しけるに。蟇い泉水のほとりの枝垂(しだれ)たる柳に。とびあがらんとしけれどもとゞかざりけるが。次第〳〵に高く飛びて。後には終に柳の枝にうつりけり。道風是より藝のつとむるにある事をしり。學びてやまず。其名今に高くなりぬ

知ることは易く行ふことは難しといふ説

知る事はやすく。おこなふことはかたし。然れども委しくしらざれば行ふべからず。たとへば。農業のごとき。時をたがへず蒔き。草かり糞(つち)かへば。よくみのるとは誰もしれど。唯その事をしりてせざれば。益なし。又そのしるにも。時を考へ。培のかひやう。鋤きやう。鍬のつかひやう。夫夫に付けてその子細ある事。つとめざれば知りがたし。善をすればよく。悪をすればあしきとはしれたることながら。よきにも子細ある事なり。つとめてまなばざれば。其理わかちがたし。今しるといふものは。多くはしらざるなり。西施の美しきことは知らざるものなし。然れども。西施のために心を傷ましむる者はなし。東隣の娘そのかほよきこと西施に及ばざれども。心この為にうごく。甘露は天下の至りて甘きものなり。しかれども。飲みたきと思ふ慾なし。牀頭の醴は時

殺生せずと心得たらんは惡かるべし。なるほどその道を修する出家道人は。蚤虱ごときものも。みだりに殺さゞる事は。其律あればなり。豆をうゑ。粟を蒔かんに。その蓬莠をかりすて。その上にもあしき苗をばとり捨て。生育るにぞ。登るものなる。今日政事などに。預るべき人は。其利害の大小を考ふべし。江海の鱗を漁り。山林の羽毛をとるも。これに命をつなぐものあり。就中野猪の稼をそこなひ。熊狼の人をくらひ。小にしては。雉。兎。鼠等の災をなす。ころさゞれは。その費あげて數ふべからず。盗人の國中を横行し。或は恣にして。上の法度を背き。或は人を殺害するごとき。皆その尤なるものなり。是いはゆる蓬をかり。莠をさるたぐひなり。瘭疽といへる腫物の甚しきを。指をきりて。療治する事あり。齒などのゆるぎいたむに。此齒をぬきてさる事あり。此指此齒をしきに違ひはなけれども。總身の苦痛にはかへがたし。此者どもゝ可愛からぬにあらねども。多くの人の歎にはかへがたし。然れどもかねて國人に仁義の道ををしへず。飢寒に及ぶ樣になして。其民罪をおかし。盗をせんは。教と政のいたらざる故なり。をしへずしてひとのよからん事を願ふは。手習させずして。物をかゝんことを求むるが如し。民を貧しからしめて。盗人を禁ずるは。田をほして稻のあしきをにくむがごとし。國に罪人多きは。執政の愧なり。一縣一邑を主どる身も。此心得大切なるべし。むかし。秦穆公祕藏の馬を亡はれけり。時に岐下といふ處の民三百餘人。是をころして食ひけり。官人ども是を見つけて。法度に行はんといひけるを。畜生のゆゑに人を殺すべからず。馬の肉を食ひて。酒を飮まざれば。人にあたるものなりとて。酒などたびて赦されけり。後隣國と戰れこり。穆公すでに危かりし時。かの三百人のものども。命をすてゝ拒ぎ戰ひ。終にかち軍となりけり。されば。天地の間。春夏は物を生じ長じ。秋冬は物をからす。そのからすといふものも。草木五穀みなみのりて。來年生ずべきものゝ基をなせば。からす內に生ずる理あり。今物をころし。人を殺さんも。助くるが爲にしてころさばさもありなん。此理をしらずして。みだりに物の命をたゝば。大惡無道の人なるべし

我より劣れるものは見やすかるべし。われよりまされるものは見がたし。蟷螂の臂をはりて車に向ふは。自からのちからをはからざればなり。高雄の文覺。西行がふるまひをきゝて。かたはらいたく思ひ。その法師來らばしたゝかに打つべしなど。つね〳〵罵りけるに。或とき西行高雄に至りけるに。文覺これをむかへてける。文覺が弟子など定めて。例の荒氣。よも唯事にてはあらじと思ひけるに。さはなくて。むかしよりしれる人に逢ひたる如く。こと〴〵しく色代して。遠く送りて別れける。弟子等不審におもひ。其事を文覺にとへば。いやとよ西行は我にうたるべきに者あらず。動すれば我をこそ打つべき氣色あれと云ひしとかや。されば。人此所に暗くして。みづからまされる人の上にたゝんとす。或は其及ばざる事を知るといへども。及はずとすることを忌み憚りて。その人の過をたづねてそしり。我能をかぞへてかざりほこり。倘甚しきは怨みそねみ。はては害心を起すなり。人各聖人にあらざれば。其非を見付けていはんには。誰かあやまちなかるべき。譬へば刀は紙をきり。楊枝を削り。梨柿の皮を剝くが如き。一切日用の事にもちひんには。小刀には遙に劣りぬべし。さらばとて。敵にのぞみ。戰をいどむにあたりて。小刀何の用に立つべき。小刀のよき所あり。刀のよき所あり。刀のなす所。小刀用にたゝず。小刀のなす所。刀用にたゝずといへども。其一體を論ずるに。小刀は刀と同じく論ずべき物にあらず。ひとり是のみならず。不學にして學者ぶり。人に問ふ事をはぢ。不才にして能をてらふ。貧しくして富めるをまなび。賤くして貴(たか)ぶる。孔子常なき人を。なけれども有りとし。虚しけれども盈てりとすとのたまへり。是等の類なるべし。

贔負といふ言葉はいふまじきといふ說

贔負といふ事は。假にも云ふまじき事なり。理非を正さば理のある所なり。何ぞ是を贔負といはん。今勢ひにつく人。手を入れ足をいれ。誰人のひいき。誰人の引懸にあづかると。嗚呼がましく時めき悅ぶは。何の心ぞや。あさましき事どもなり。芝居の役者野郎なとのいはんには。相應の言なるべし。

物の命をたつもまた助くる理ありといふ論

物を殺すはよきことにあらずといへども。一我意に

とき。是心をぬすむ盜人なり。盜人の至りて大なるものは。心をぬすむ盜人なり。その次は國をぬすむ盜人なり。穿踰の盜人の如きは。盜人の至りて小さきものなり。國を盜むものは侯となり。鉤をぬすむものは誅せらるゝといへり。まことなるかな。穿踰はかろき事ながら。察せずんばあるべからず。壁をうがち墻をこゆる事はわらねども。一紙半錢の事により。交易の間。子の親の物に於ける。弟の兄に於ける。奴僕の主人に於ける。盜人の列なるべし。したしければとてぬすむべきやうはなし。諺にも針とるもの車をとると云へり。色に耽けり。博奕を好める人を見るに。十に九。此失なきはなし。吾輩の如き。天地の間に悠々として。少壯の努力べきをしらず。老の至りなんとすることをはからず。飽まで食ひ。暖かに。衣て自ら守るの節なく。人ををしふる術なく。幾か間中の好光陰をぬすむぞや。

村松喜兵衛の辭世

近頃。淺野内匠頭長矩の家臣。村松喜兵衛入道隆圓。大石良雄等の義士と。吉良義秀をうち。つひに終を全うしける辭世に

命にもかへぬひとつをうしなはゞ
にげかくれてもこゝをのがれん

人の至りて大切なるものは命なり。命にもかへぬひとつとは。義にあらずして何ぞや。村松是を求めて是を得たり。むべなるかな。四十七士の員につらなり。名一天を動かしけること。

技藝勝れたる人愼みかたの事

技藝は人の嗜むべきことなり。藝勝れたらんは。つゝしみもまたいよ〳〵重かるべし。さなきは人の妬にあふものなり。倩これを鑑みるに。我に甚まされる者をば。その失をもとめてそしる。我に少しく勝れるものをば妬む。我と相敵する者をば。吾よりれとれりとす。我より劣れるものをばあなどりあざける。是藝に遊ぶ人の病なり。

劣れる者は見わけやすく勝れたる者は見わけがたしといふ說

西施愛江。嫫母棄鏡といへり。西施は昔の美人なり。江に臨み。自の影のうつるを愛す。嫫母は惡女なり。我影をにくみて。終に鏡をすつ。我身と人とを見るに。われより勝れるもの。我よりれとれる者あり。

はよく〳〵慮るべし。曾參は孔門の內にてもわきて孝行なる人なりしが。その母機をれられけるに。一人來りて。曾參こそ人をころしけれと云ふ。母はをれる事やまず。すこしも騷ける色なく。吾子は人をころすやうなる者にてはなしとて。手やめもせず。かゝる所に又一人來りて。曾參人をころすといふ。されども。母前のごとくいひて驚かず。時にまた一人きたりて。かく云ひければ。さてもかゝる事あるにやと。杼をすてゝ逃げけり。後にきけば。曾子と同じ名の人にてありけりとぞ。曾子の賢。親子のしたしき中さへ。度かさなれば。うたがひのこゝろ起るなり。まして常ていの人の中をや

盜人の名目種々ありといふ說

盜人はすまじきものなり。盜のすまじきといふ事を知らば。是より義に進むべし。傍の人の曰。盜はすこしく志ある人はせず。頑愚の人にとくべし。豈中人以上の失あらんやと。予が曰、然らず。盜人も數あり。壁を穿ち。垣をこゑて。人の財を盜む。これ穿踰の盜人といふ。或は人の家にれし入り。あるひは往還に待ちぶせし。人をきり。衣裳をはぎとる。是を野伏强盜といふ。足下のいふ所は。是等の盜人なり。足下一をしりて。其餘をしらず。上君に事ふる忠なく。下治を治むる術なく。中自の職分に怠り。坐に大祿をはむ。是位をぬすむ盜人なり。謀をめぐらし。僞を行ひ。君を弑し。國を奪ふ。是國をぬすむ盜人なり。詩書を腰にし。口法語を絕たず。退きて其隙をうかゞへば。父子相爭ひ。兄弟相鬩ぐ。これ儒をぬすむ盜人なり。頭をまるめ。三衣をまとひ。我慢偏執のこゝろつよく。財利にふける。是法をぬすむ盜人なり。人のよき言をぬすみ。自らの利口とし。我行のあしきをいひまはして愧づる事を知らず。是言をぬすむ盜人なり。ひそかにあらゆる惡心をおこし。顯に善を示して外面堂堂たる君子あり。是善をぬすむ盜人なり。心に無量の僻事をふくみ。色をかいつくろひ。肩をそびやかし諂ひわらふ。是色をぬすむ盜人なり。人の志のある所をはかり。其人の機をかんがへ。その喜ぶべき事をなし。忌む所をさけ。父子のしたしき情をさかせ。兄弟の恨を起し。夫婦恩愛の中をやぶり。朋友の交を失はしめ。その惡至らざる所なく。猶自ら人の腹心と思はるゝがご

み述懐し。頑是なきわかき同志。理非わかたぬ隣の媼や婢など。その品ハ何ともしらで。すハや此人も繼子にくみすとて。彼子と囁きかたり。長しき異見は露なくて。いろ〳〵とそゞろをかハれ。互にへだて多く重り。果ハ怨敵の思ひをなす。むかし或人の家に屛損じたりければ。其子のいひけるは。かく屛の損じ候。盗人こそ入るべけれといひける。暫くして隣の人來りて。その子のいひしごとく。屛の損じ候。ぬす人こそ入るべけれといひしが。果してその夜盗人にあひけり。その親。吾子をば智ありて。よく察したりとれもひ。隣の人をばこの人かくこそいひし。もしや盗人の手引などしつらんかと疑ひけりとなん。さればそのいふ詞も同じ言にして。聞く人も同じ人ながら。子と他人とのへだてあれば。そのいふやう雲泥萬里のたがひとなる。れなじ秋の夜も。少年遊樂の燈の前にはあけやすきをうらみ。孤婦愁思　閨の中には明けやらぬをかこつ。秋の夜に違ひはあらざれども。志各ことなればなり。今まことの親生きて再びいふとも。そのことば假令同じ事もおるべけれども。已に繼子の心に隔てあれば。れなじことばも怨のはしとなる。閔子騫幼かりし時。母にれくれ。父ふたゝびめとりて。三人の子をぞまふける。この母常に閔子をにくみ。冬のきものには蘆の穗などつみて絮となしきせける。されど。閔子すこしもうらみず。母を敬ひ弟を愛しみけり。其後父この事をしりて。大に怒り。母を追ひ出ださんとしけるを。閔子とゞめていふやうは。母ましまさば。某ひとりこそ寒からめ。母もし歸り給はゞ。三人ともに寒からんと。さま〳〵にしてなだめけり。母も此事に感じて。遂に慈母となりけりとぞ。誠に親のみあしと思ふべからず。又繼母となる人も。始のほどは嗜みて。最愛しけるが。とかくする內。子などまうけ。長るにしたがひて。いつしか兄弟の分を忘れ。我子を世に立てんと思ふより。枕の上の寢物語にも。長子のよきことをばすくなくいひ。我子のよき事のみかぞへたてゝいふより。男の親も何れをいづれのへだてはなけれど。その詞十度もゝたびにかさなれば。さては我子は愚なりけり。この子こそ賢りけれとれもひつき。是は次第にしたしくなり。彼は次第にうとくなり行くとあり。不幸にして。此變に逢はん人

勝つことをこのむは。人情の常。まされるをにくむは。人慾のつねなり。この故に材藝ある人は。なほ愼むべし。木林を出づれば。風かならず折るといへり。近頃。材智は身讐といふこゝろを。中院通躬卿の御歌とて。うけたまはり侍りし

人に見よおのがえならぬ花の香に
をりつくさるゝ梅のしたえだ

人のあしきを捨てよきを取れといふ訓

愚ならん人のいふ事も。よく／＼察し。よきことあらばもちふべし。ましてや賢人の言をや。今人過ありて。其非を人に正さるれば。昔の誰某もかゝるあやまちはありし。況。吾等ごときの人をや。などゝて悛むる事をばしらず。是小人の過は。必。文(かざ)るといへるなるべし。人のよき所をすてゝ。其惡き所のみを取りて手本となさば。何の際限あるべき。たとへば料理をするが如く。魚鳥の羽鱗骨腸なんど。あしきものをばとりすて。そのよき所をとり。そのうへにも鹽梅して。酢を加へ。酒をさして。旨からん事をこそもとむれ。旨き肉をばすて。羽鱗骨腸を用ひ。箸は擇をもちひ。飯はもみを炊きたらんには。いかでか是をよしといはんや。米は五穀の首。鶴鯉は魚鳥の最上なれども。今のごとく拵へたらんには。藿の汁。蓼の和物にも劣るべし。ものゝ直(すぐ)からん事を欲せば。準縄規矩を用ふべし。是をばさしおきて。杓子を取りて定規とせんには。千萬年を歴とも直くはなるまじきことなり。今の人あしきをとりて身の過を覆ふは。是ぞ誠の杓子定規なるべし。

繼母と前家子との話

世に繼母繼子の中とて。十に七八はよからぬものなり。是諺あり。實の親はたとひ杖をとりて。指南などするとても。恩愛たがひに深きがゆゑに。暫く有りては互に如在なくなりゆき。他人も見咎めもせぬものなり。繼しきは世の習ひとて。子ははや。定めて繼母なればば。心中に打ちとけはし給ふまじといふもの。已に胸中に横たはりてうせず。これ不和をなすの基なり。よりて假初にいふ事もむかへて聞く故に。むねに逆ふなり。ましてや其子に教訓などせんに。左なきだに金言耳に逆ふならひなれば。わが過は思はずして。是もましき故なり。誠の親ながらへてあらば。かゝる憂目にはあはじなど。世をうら

ごとくならんと宣ひしを。馬子に告ぐるものあり。馬子おそれて。東漢直駒といふものをして。天皇を弑せしむ。是より直駒馬子が寵を得て。其第宅に出入して。内外の隔てなく。大臣の女河上姫にかよひけり。是はもと崇峻天皇の嬪御なりし人なり。馬子この事を聞きつけ。大に怒り。直駒が髪を庭前の木の枝にかけて。弓を取りて是に向ひ。汝わが言を用ひて。天皇を弑す。汝愚にして我いかりを慮らず。我を諫めずして。天皇を弑すと。一つの罪を數ふるごとに。箭一筋をはなつ。直駒いかりて。敢て伏せず。吾其時は。大臣ある事を知りて。天皇の尊き事をしらざるのみ。餘事我辞謝せじと。さん〳〵に罵りけり。馬子腹をすゑかね。劒をぬき腹を潰し。そののち首をきりけるとかや。其身正からず忠ならずして。人のよからん事をもとむとも。人いかでか其罪に伏せん。たとへば火をたかずして。湯の熱えんことをもとむるが如く。酒をすゝめて。醉ふなといふが如し。

物毎に一得一失の理ありといふ説

金は天下の至寶なり。これを貯ふものは家富めり。

されど是によりて。身を失ふ者あり。人參黄耆は藥の隨一なり。されどこれを服して。命をおとすもあり。劒術兵法は身を衛るものなり。されど是によりて。身を殺すものあり。醫術は人を救ふものなり。されど是によりて。人をころすことあり。飲食は生を養ふものなり。されど是によりて。我體をやぶる事あり。國の大臣は國を治むべき者なり。されどこれによりて。國を亂るものあり。此のさかい能々工夫すべし。

交際の道こゝろえあるべき事

權貴の家と。女おほき家とには。屢出入すべからず。あるじ留守の家ながゐすべからず。主人欠伸せばはやく立つべし。人來りて問ふ事ありとも。志他にあらば詳に説くべからず。吾好事なりとも。人のこのまざることをば語るべからず。朋友にも親切の意見再三にして。可ずんば止むべし。我なすべしと思ひたちたる事は。明日ありと思ふべからず。貧しき人は疎みやすく。富貴の人は親みたきものと知るべし。金銀にのぞみては。爭心起るものとしるべし

和歌を引きて材藝ある人の箴を説く

相似といへり。小指は母指よりほそく。母ゆびは中指より短しといへども。其病をうくるに臨みては。小ゆびの痛も。母指のいたみも皆異ならず。富貴の人の榮辱にあふも。貧賤の人の榮辱にあふも。富貴の人の憂苦も。貧賤の人の憂苦も。十の指の長き短き違ひはあれど。そのいたみことならざるがごとく。人に貴賤貧富の差等はあれど。憂苦哀榮の違あるべからず。

恕の道の説

世話に。身をつめりて。人の痛さを知れとは。賤しき俚語ながらよく道にかなへり。身の痛き事をしらば。人もいたかるべしとしりて。人に施さぬなり。よろづにつき人の善惡は見えて。身の善惡は見えぬものなり。さるを人の善を見ては。是にしたがひ。惡を見ては。身にこりなば。いづれかをしへの道にあらざらん。或は我子のわれに不孝なるを見ては。われこの道を以てわが父につかへず。我弟のほしきまゝなるを見ては。我此道を以てわが兄につかへざれ。我身に骨の折れる事は。人の身にもほねをれ。我身に悲しき事は。人の身にもかなし。一切みなしかなり。是を恕といふ。大學には規矩の道といへり。宋の王旦といひし人。寇準と云ひし人と。同じくつかへて。王旦は中書にあり。寇準は樞密院にありしが。中書より出だしけるものに。印を倒につきて遣はしけり。寇準速に人を遣はして行譴しけり。そのゝち樞密院より出だしけるもの。亦あやまりて。印を倒につきけり。時に中書の者ども。右のごとくにせんといひけるを。王旦聞きて。さきの樞密院よりの仕方よしといふや。あしとおもふやといへば。あしければこそといひけるを。人の惡きと知りて。その惡きを學ぶ事やあるとて。其事は止みにけりとぞ。陶淵明小者をおきて。子に遣はすとて。是もまた人の子なり。愛して使ふべしとなり。是等はみな道をみること明なるが故に。事に泥まず。或人。ひとの物を無體に所望しけるに。貴殿のほしきほど。われも惜きなりといひしとかや。わがほしきものは。人もをしきなり。此理をわきまへざるは。理にくらければなり。崇峻天皇の御宇。山猪を獻ずるものあり。時の大臣蘇我馬子奢恣なりしかば。天皇之をにくみ給ひ。いつか我きらふ所の人をきる事。この山猪の

りしを。

雨森彦太郎軍功を譲る事

加賀利長。松山の城を陥しいれたまひけるに。利長の小性大音藤藏とし十六なりしが。先登して首をとる。雨森彦太郎これにつゞきて城にのり。おなじく首をとり。はやく馳せかへりけるに。利長祐筆に命じて。一番首と記さしめたまふ。彦太郎辭謝して。否一番首は。大音藤藏にて候。某はその次にて候とぞ申しける。一番首をとりたるよりも遙にまさりてけなげなり。武士は誠にかくこそありたけれ。

武田信玄の知言

武田信玄の曰。人は唯我したきといふ事をせずして。いやと思ふ事をするならば。分分體體全く身をもつべしとなり。

後世を願ふに心得違ひ多き事

今の人。後世願ふも施しをするも。十が八九名と慾となり。人と毫釐の利をあらそひとりて。堂塔の建立し。奴僕にからき目見せて。かたへに施し。口舌爭論の片手に念佛申すは。却行して道を急ぐが如し。いまの後世ねがひ施しする人を見るに。阿鼻焦熱の物語りに肝をけし。九品蓮臺の上に生れて。百味の飲食に全盛の盡したき慾よりなるべし。さなきは彼人こそかゝる善根をなしつれと。人の稱讃にあはん事をもとめてなり。然れどもその身五戒を外にし。十惡を事とし。傍に佛に諂はんは。醫師の藥をすてゝ能書をよみ。疾の痊えんことをもとむるが如し。先五戒を守り。慈悲ふかく。物にあらそふ事なくして。心しづかに後世ねがはんは。まことの道心者なるべし。

上たる人の心得下たる者の痛となる説

一村の長ハ一村の人の命是にかゝる。一縣の長ハ。一縣の人の命これに係る。一國の主ハ。一國の人の命是に係る。天下の主ハ。四海の人の命これにかゝる。人の命こゝにかゝるといふ事をしらバ。其任の重き事をしるべし。夫一箇の民ハ惡をなし。罪科に行ハるといへど。自らなしてみづから其咎をうくるのみ。假にも人の長ともなるべきものハ。我慮り一度誤れバ。なべての人その難をうく。暫くも薄氷をふむ心を忘るべからず。又貧しき人。富める人の隔ある可からず。曹子建が詩に。十指有長短痛惜皆

智を以て。この過をかくさんとするは愚なり。蒜の臭と。酒の氣とは。猶かくすべし。天はかならず欺くべからず。心を勞し。身を苦しめて祈らんよりは。かへりて我身を修むべし。この上にて災あらん是命也とおもふべし。禍福は命あり。人力の及ぶ所にあらず。此理をさとらざる人は。網を結ばずして魚を羨み。わなをすてゝ兎をもとむるなり。決して此理なし。偶いのりて得ることありといへども。是偶然なり。祈るが爲にして得たるにあらず。たとへば小兒に待人を問ふが如し。待人返るべしと謂ひて歸りたりとも。是小兒の占。委しき故といふべからず。たゞ偶然なり。もし祈願の志有りて求むることあらば。齋戒清淨にして。衣服を改め。心をひそめ。妄意を動かさず。天に告ぐべし。今の俗然らず。或はこの災のがるべく。此病さくるべくば。堂塔を建立すべし。鐘を鑄るべし。鳥居を立つべしなど噪ぎあへり。畢竟是等は。佛神と商ひするなるべし。是は猶病に臨み。難にあふとき。一身主とする所なき人は。かくもあるべき事なり。或は訴論色慾により。奸佞嫉妬により。人を害せん事を計るともがら。神木に釘をうち。佛像を倒になしていのる。此事ゆめゆめ人にあたるべからず。自その災にあふべし。むかし漢武帝鬼神の説に迷ひ。殊更越の巫を信向ありしに。董仲舒と云ふ臣しば〲諫め奉りしに。武帝彼巫をめし。仲舒を詛せしめ給ひける。仲舒正しく南面して。經論を誦詠しけるが。何事もなく。巫即時に死しけり。神は非禮をうけずといふも。こゝをいへる事なるべし。

織田信長恩賞を賜ふ話

たとへば家に失火事あらんに。平生家の者にいましめて。火を大事にし。過ちなかりし人は賞せられず。火事にのぞみて。鬚をやき眉を焦せし人は。大に賞せらるゝがごとし。されば常に火を愼しみけるこそ。火事出來て働きし人よりは。手柄なるべきを。かへりて何の沙汰もなし。織田信長。今川義元と沓掛山にて戰のとき。梁田出羽守計をすゝめて。終に勝軍となり。毛利新介。大に働き。義元の首を取りてけり。信長馬より下りざる内。沓掛村三千貫を出羽守に與へ。馬より下りて新介を賞せられけり。まことに信長に非ざりせば。出羽守の功名新介に次くべか

るよりおこれり。祭る時にいたりて。吾心ありしむかしの事など。つど〳〵に思ひ出でられ。なき面影かくこそありしか。かくぞせしとおもひつゞけて誠をつくし。祭る時その誠の心れほふべからず。鬼神感格洋々乎として上にあるが如く。左右に在るが如し。この境よく〳〵思ふべし

禍福は命なりといふ論

世俗。巫祝の道を信じ。災を得。難に臨み。病にかゝる時。願を結びて佛神に祈る。是固に所謂なきにあらず。周公旦兄武王病にかゝりたまひ。成王（武王の御子也）尚幼かりしかば。爪をきりて天にいのり給ひしとぞ。親兄或は君上の病をうる時。子となり。弟になり。臣となるもの。寢食する事能はず。いかんともすべからず。愛を以て天にいのり。鬼神にいのる。固にこの心かくの如くならざる事を得ず。我身に於てはしからず。太甲曰。天作孽猶可違。自作孽不可活といへり。不意にして孽にあふは。吾招く所にあらざれば。終には免るべし。又君をうらみ。父母兄長にさかひ。人を譏し。人を殺し。あらゆる積惡。誠に己より出でたる者は。己に歸る習なり。或は酒にやぶれ。色につかれ。吾天年を損す。みな自もとむる所なり。顧みて身を悔ゆべし。神にへつらひ天を欺きて。此孽のがるべけんや。孔子病み給ひしとき。子路（孔子の弟子）祈らんと乞ひしかば。丘がいのること久しと宣へり。其いのるとは平生の動作道にそむかず。今この病にあふものは是命也。しかるを何ぞ鬼神にいのるべきぞ。子路固に孔子に告げずして祈る事あらば。弟子惻々の心なるべし。邵康節の詩に。禍如許免人須諂。福若待求天可量といへり。是よくいひつくせり。自禍の階をなし。是を悔い顧みる事をしらず。鬼神に祈りて免るべくは。鬼神にも賣僧すべし。鬼神も善を善とし。惡を惡とする事能はずんば。幽冥の中恐るゝにたらず。まことに諂ひて免るべし。吾行いまだ福を得べき基なく。天に求めて得べくは。天も又邪正虚實を分つ事能はず。天もはかるべし。人すら賢き人は賄。賣僧の爲に贔負偏頗の沙汰に及ばず。増してや鬼神は冥々として。昭々たり。天は高きに居てひくきをみる。蒜を食ふものは必臭く。酒を飲むものは面酡し。其箸をとり盃を酌むを見ずといへども。其事自明なり。己が私の

論といふべし。上戸と下戸とは氣稟なり。醉ふと醉はざるとは節にするにあり。壯にして少艾をしたふ。人情の常なり。ひとり人のみならず。水にすむ鳥。山になく鹿も。皆その偶をもとむ。しかはあれど。人は義方のをしへあり。媒をまたずしてめとり。墻をこえて處女をひく。人としもいはんや。是學者入德工夫の第一也。花の顏。春を妬み。柳の眉。月を欺き。目に挑み。心にひかば。鐵心忽融し。銳氣忽碎けん。故に氣千里をのみ。勢萬人をとりひしぐも。こゝに至りて過たざるはすくなし。朱子も世上無如人慾險。幾人到此誤平生とて自警め給へり。白樂天が詩に狐假女妖害猶淺。一朝一夕迷人眼。女爲狐媚害卽深。朝朝夕夕迷人心といへり。學者心をとゞめざるべけんや。安東省庵いへることあり。無求是至貴。知足是至富。安心是至樂。予其地にいたらずといへども。ふかく其言葉にふくす。身萬乘の君となり。富四海をたもてども。長生を欲し。福田をもとめて身を勞し。終にその貴きことをしらず。近比太閤秀吉公は。匹夫より起り。已に日本を掌握し。其心猶あきたらず。朝鮮をせめ明にいらんとす。天もし是に年をかし。且勝事を得せしめば。その心明にしてとゞまらじ。一生何の日かあくことあらん。利にひかれ。慾に動かさるれば。富。陶朱。猗頓を欺き。貴きこと位人のを極めても。憂愁の地を離れず。故に富貴の外に富貴あり。樂の內に不樂あり。

生前死後の理

死生の說明ならず。やゝもすれば異端の說にまよふ。予易を讀みて原始反終といふにいたりて。豁然として悟る事あり。死して後は生れざる前の如し。生れざる前吾しらず。死して後吾いづくんぞしらん。むべなるかな。聖人其しるべき所をもとめて。其知るべからざる所をいはざる事を。かたへの人の曰。しからば人死して靈なし。祭祀も無用の事なるべし。曰。然らず。人死して靈なしといふにあらず。又有りといふにあらず。生れざる前しるべからず。死して後。吾何ぞ知らん。故に孔子も。未生をしらず。何ぞ死を知らんと宣へり。火きえて尙煖なるものは。其氣存することあればなり。況。人情已に死したりといひて。道行く人にわかれたる如く。跡とふ事もなく。打ち捨ておかるべきや。是人情止む事を得ざ

梅園叢書

三浦安貞著

詩を説きて道に志す人に喩す

詩曰。厭浥行露。豈不夙夜謂行多露。まことに道に志さん人は。此詩を味ふべし。是は女子淫人をたつの言なりといへども。詩はその意ひろし。厭浥とうるほへる行のほとりの露繁ければ。夙におき夜におきて。君に隨ひたくは思へども。露にぬれん事の傷ましければとて。おもひとゞまりたるなり。人各聖人にあらざれば。情にひかれ慾に動かされざるはなし。或は色により。財により。酒食により。あるひは憤怒により。好樂により。親愛による。されど是はかくはあるまじき事なりと。身の汚を露にぬるゝ如く。よく〳〵道のあるべき所をもとめて。慾をとゝめんは。誠に君子の人なるべし。

酒食欲の誡

酒食欲の三。是人の大害といふべし。酒は少し呑むときは。憂をはらい。欝をひらき。氣血を循環す。されど飲酒の人節をしらず。あくまでのみ狂走喧嘩などして。宛も狂人にことならず。小にしては病を釀し。大にしては禮をうしなふ。むかし邵康節酒をこのむ。酒を名つけて太和湯といふ。只のみて微醺して止む。故にその詩に

性喜飲酒　飲喜微酡
飲未微酡　口先吟哦
吟哦不足　遂及浩歌
浩歌不足　無可奈何

いふ心は。生質酒を好む。のむにやゝ酒氣面にめぐる事をおぼえ。詩など朗詠してやむとなり。よく酒をのむの道を得たり。近き比松平伊豆守信綱は。一時の賢君なりしが。ある時咄の序。臣等酒の德をのべ君にすゝむ。信綱の宣ひけるは。汝等みな子あり。その子の悉く酒を飲まん事を願ふか。飲まざらん事を願ふかと有りければ。臣等暫く默して居たりしが。子は酒を飲まざらんこそ親のこゝろのやすく候へとこたへける。人の至りて愛するは子なり。酒もし美物ならば。豈子の呑むとをいとはんや。是千古の公

梅園叢書目錄終

梅園叢書目錄

以上

百家說林正編下卷

目錄

百家說林

正編

下